（白石製本所　製本）

昭和八年五月一日印刷
昭和八年五月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

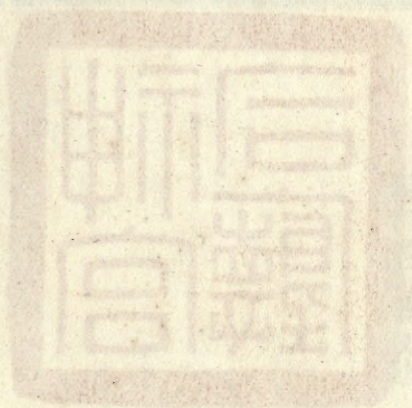
發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社内
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
　　　　　　　　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

明治四十一年六月二十二日印刷
明治四十一年六月二十五日發行

神宮司廳

編修顧問　正四位　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　正六位文學博士　井上頼圀

編修總裁　従二位男爵　細川潤次郎

編修長　正七位文學博士　佐藤誠實

編修副長　正七位文學博士　松本愛重

編修　正七位　廣池千九郎

編修兼校合員　加藤才次郎

編修　山本信哉

編修　村尾節三

編修　正七位　佐伯有義

編修　三浦千畝

校合員　坂倉廣胖

校合員　坂本廣太郎

校合員　間嶋磐雄

初獻重通〈亮〉出下戸取盃、居折敷、經殿上人座前、就殿下座下奉之、關白取盃給、置折敷、取瓶子傳盞之後、返授瓶子退歸、次飯汁、二獻頭中將、瓶子藏人盛定、着雉羹、三獻左大弁、□□□□經諸大夫座、自東面□之、右府受傳關白、此間依關白命、中宮大夫唱歌、借用源中納言笏、宍貴、頭中將助音可廻後、朗詠〈令月〉一兩遍後唱筵田、又朗詠、〈德是北辰、殿粧金屋、〉治部卿東岸西岸句、□□依大夫命下官四獻盃經諸大夫座中、於東南遣戸際取盃、〈殿上人瓶子〉就殿上座上、向坤居、一揖入酒、向眼博陸、博陸命云、不唱可然、一曲不可受□□□□不堪氣色、不承引給、唱更衣曲、大夫頭中將同音唱一兩反、〈後日、大夫云、音枯可唱之歌不叶時音、而依汝一曲盡音曲也、〉博陸許給、仍飲之、又入酒轉博陸了揖退歸、倩案、爲撰應被催一曲、予可取酌也、次居菓子、五獻大夫、先是中將成通退出、藏人盛定著座、是爲雜藝也、依大夫命殿□□唱萬歲樂、打拍子、笏扇也、自下﨟立舞、出座舞也、及大臣之間、大夫制被停曲、

〔中右記〕寛治二年正月二日、於院〈○白河〉齋宮御方〈○白河皇女善子内親王〉有臨時客、先有拜禮、〈右大臣、内大臣以下、公卿一列、殿上人一列、殿下雖令参給、不令立給也、〉有御遊、民部卿被執拍子、

〔小右記〕長和五年正月二日丁未、未剋許參右府、（小南〇藤原道長、中略、）其後被參皇太后宮、（〇藤原彰子）先以大夫俊賢卿被啓案內、內大臣（〇藤原公季）已下進庭中拜禮、左大臣被候簾中、公卿著饗座、先左相府出居、兩三獻後、御簾前敷圓座、召卿相、左大臣已下參著、居突重、兩三巡後、內府、次三十一字歌、左相府有進歌、大納言齊信卿執盃殊出、令讀和歌、中納言行成執筆書和歌、卿相七人讀、自餘不讀、倉卒有管絃、卿相皆有被物、其後依左相府命渡御簾前、參青宮、於殿上有一盃、次參內、先參中宮、有饗饌、一兩巡後參殿上候、各々退出、（亥剋）一今日參入公卿、左大臣、內大臣、大納言道綱、齊信、賴通、公任、中納言俊賢、行成、懷平、敎通、賴宗、經房、實成、參議兼隆、道方、通任、公信、三位中將能信、右兵衞督憲定、參議賴定、朝經、

〔左經記〕萬壽三年正月二日庚辰、參內、中宮（〇藤原威子）臨時客、仍以御在所東廂、爲上達部殿上人座、（南上對座）

〔中右記〕大治六年正月三日辛丑、人々參中宮御方、有臨時客、御所女房持出、（二色）南廊三間敷指筵高麗端疊、居饗饌、（机各一脚、東西對座、）西庇長押下敷紫端、爲殿上人座、（机六前一行、）關白殿（藤原忠通、西一座）中宮大夫、治部卿、民部卿、源中納言、皇后宮權大夫、左京大夫、左大夫、左大辨、頭中將、頭辨以下、及藏人爲基、各著座、右大臣追參加、端座上、權亮重通朝臣獻盃、（居折敷、重通取納、）巡流至左大辨、傳殿上人座、二獻、（頭中將宗能）藏人爲基取瓶子、右府受盃、次居飯、次居海雲汁、左大辨氣色、立箸、三獻左大辨、（侍從憲俊瓶子）次居汁物、箸下、依殿御氣色、下官（〇藤原宗忠）朗詠、佳辰令月句、德是北辰、兩三度、治部卿又朗詠、東岸西岸之句、人々乘興被肩脫、下官拍子、安名尊、席田、庭生、又朗詠、四獻皇后宮權大夫師時卿、（雅俊瓶子）師時卿勸盃之間、歌更衣、居菓子、五獻下官、依爲本宮大夫也、依殿下仰奉右府、（少納言忠賴取瓶子）此間掌燈、乘興人々及醉舞、始自殿上人舞萬歲樂、至大納言座止之、居薯蕷粥、其後人々退出、（此間、右大臣隨身給腰指、本宮屬等取之、）

〔長秋記〕天承元年正月三日、參院、（〇鳥羽）依兼日催參中宮、（藤原聖子）院催依臨時客也、參中宮御方、南北渡殿座、是饗座也、關白（〇藤原忠通）大夫顯雅、左大弁雅兼、在西面座、北上對座□□□治部卿、民部卿、參加、次右府（藤原宗忠、西面）忠宗卿參會、（東面）下官（〇源師時）巡當東面、仍遲著、殿上人著同廊西庇座、頭宗能、顯賴、中將成通、重通、

むらさきの袖をつらねてきたるかな春たつ事は是ぞうれしき

春臨時客をよめる　小辨

むれてくる大宮人は春をへてかはらずながらめづらしきかな

入道前太政大臣大饗し侍ける屏風に、臨時客のかたかきたる所をよめる、　藤原輔尹朝臣

むらさきもあけもみどりもうれしきは春のはじめにきたる也けり

〔二條太皇太后宮大貳集〕臨時客

諸人のまつひきつれてくる宿に春の心はやまにざりける

〔大鏡五太政大臣爲光〕この關白〇藤原頼通殿のひとゝせの臨時客に、あまりゑひて、御座にゐながら、たちもあへ給はで、ものつき給へるにこそ、高名のひろたかがかきたる、樂府の御屏風にかゝりて、そこなはれたれ、〇又見二寶物集一

〔續古事談五諸道〕京極大殿〇藤原師實臨時客ノ日、尊者堀川左大臣〇源俊房ノ隨身敦久、六條右大臣〇源顯房前驅盛正ヲ召テ、御衣ヲヌギテタマヒケルヲミテ、通俊民部卿殿ヲオハレザラマシカバ、今日御衣ハタマハラザラマシト云ケレバ、人々ワラヒケリ、

〇

〔中右記〕寛治三年正月三日、於二院御方一〇白河有二臨時客一、先有二拜禮一、攝政殿〇藤原師實以下公卿一列、殿上人一列、盃酌數廻之後御遊、拍子、政長朝臣、

〔榮花物語三十六根合〕皇后宮〇寛子歌合せさせ給、左春、右秋也、〇中略

左勝　臨時客　内の式部命婦

はるたてばまづもろ人もひきつれて萬代ふべきやどにこそくれ

雜載

〔中右記〕天仁元年正月二日、天陰雪下、朝間積庭際、不出仕、殿下無臨時客、終日雪下、三日天晴、（○凶會中略）
三箇日間無殿下（○藤原忠實）臨時客幷所々拜禮、
永久二年正月二日己卯、今日無臨時客、是從去々年冬、故大殿（○藤原師實、當時攝政藤原忠通父）北政所不例被坐、此十餘日頗危急者、
保延二年正月二日庚午、殿下（○藤原忠通）御三條亭之間、依無便宜無臨時客、予不出仕、皇后宮從去年御東三條也、

〔台記〕久安四年正月二日辛酉、入夜雨降、依可有臨時客欲參殿、（○藤原忠通）申刻御隨身來云、臨時客俄停止、

〔愚昧記〕嘉應二年正月二日癸丑、未刻許參左府亭、（○藤原經宗、中略、）可有臨時客之由、只今兼光告示候也、仍欲罷向、候昇堂上之路ハ南階歟、經中門內歟、被命云、上臈南階歟、但中門內如常事歟、昇自南階者、多子息取沓歟、前駈取之無便宜歟、可令昇自中門給歟、又云、今日無大臣尊者云々、定被引馬歟、若取綱可拜哉、命云、不可然歟、可然之前駈人指笏進中門邊可請取也、又尋申之、庭中拜畢後、來臨之人先可觸事由歟、命云、可然者、然間右中弁長方來臨、依招引來著座末、予退去、參□予令朝宗問曰、無臨時客歟、

〔世俗淺深秘抄下〕一關白若攝政臨時客時、高年中將著白重事有其例、永久四年關白臨時客日、右中將師時著之、大納言著之又有例、不依官只可依年高下歟、

〔年中行事歌合〕四番　左持　臨時客正月二日　忠賴朝臣
はつ春の宿のあそびのおりえてぞ梅がえうたふ聲も聞ゆる

〔後拾遺和歌集一春〕鷹司どのの七十賀の月次の屏風に、臨時客のかたかきたるところをよめる、　赤染衛門

以下祿、大納言公任延書狀云、臨時客所、公卿座高麗端疊、殿上人座紫端例也、但下﨟家皆用高麗端疊、上敷茵等、殿上人敷紫端疊之例也、遠枇杷大納言延光家、近小一條大納言家等例也、大中納言時相間如此、彼皆識者、尋知前跡歟、被問予所見也、以此旨相答耳、　五年正月二日丁未、未剋許參右府、小南相府云、有內府可來之御消息、暫待而日已欲暮、依彼命諸卿殿上人拜禮、主人答拜、了主人先昇、次公卿次第著座、一巡後內府被參、著白橡物下襲、萬人側目、卿相兩三顯實無便由、四五巡後出居南庇、有引出物馬一匹、

延引

〔法成寺攝政記〕寬弘三年正月二日乙巳雨下、可被上達部來由云々、雨下人々御出入間無便、若猶可然、明日可被座由可然、人々相云後、兩三上達部來、　三日丙午、時々雨、右府、內府、前帥、自餘上達部皆來、只式部大輔一人不來、敢不可及酩酊、三人引出物馬各一匹、參內、又參中宮御方、數巡有和歌事、

〔中右記〕嘉保三年〇永長元年正月三日甲午、天晴、巳時許參兩院、次參民部卿御許、出給之後參關白殿、〇二條殿敎通有臨時客、未一點尊者左府來給、入從東中門列立南庭、公卿員如朔日、但民部卿參加、二拜了互以揖讓、東小寢殿東對代也南庇、從西階家主尊客共昇、家主御沓四位少將忠敎、尊者兵衞佐師時取之、主人著給外座、尊者奧座、自餘公卿從中門廊昇給、一獻家主、行房朝臣進盃、二獻、右大弁基綱朝臣、三獻、宰相中將仲實、爰中宮大夫取拍子歌、安名尊、席田、青柳、朗詠、四獻、宰相中將宗通、五獻、左衞門督公實、人々肩脫、牽出物馬一疋、申時剋事了、人々引令參高陽院給、大殿又有臨時客、左府以下從北御門入給、列立南庭、如初二拜後、頗有揖讓、從東對南階大殿先令昇給、頭弁師賴朝臣取御沓、左府關白殿共令昇給、左府御沓兵衞佐師時、殿下御沓左少將忠敎、自餘公卿從東中門廊昇、大殿殿下外座、左府內座、一獻家主、行房朝臣進之、二獻、左大弁季仲、三獻、左兵衞督基忠、中宮大夫拍子、安名尊、席田、引出物御馬二疋、一疋左府御牽出物、一疋殿下、右少將宗輔取之、御牽出物、秉燭以前事了、人々退出、〇中略　裏書云　中宮大夫初被取拍子也、頗推態歟、予依殿下仰時々付歌、

停止

〔左經記〕長元二年正月二日壬辰、關白殿〇藤原賴通無臨時客、右府以下又無儲云々、

〔殿曆〕長治二年正月二日辛未、有臨時客〇藤原忠實也、雖山僧亂發、今曉向祇園將出神輿、尤世間大事也、仍今日臨時客止了、

きどきこゑ打そへ給へる、さきくさのすゑつかた、いとなつかしうめでたくきこゆ、なにごともさしいらへさせ給御ひかりにはやされて、色をも音をもますけぢめ、ことになんわかれける、

〔河海抄十初音〕けふは、りんじかくの事にまぎらはしてぞ、おもがくし給、　臨時客とは、攝政關白の亭に、年の始、上達部を招て遊をいふ也、さだまれる公務ならねば、臨時客と號ル歟、自餘をば大饗と云、中宮東宮幷左右大臣也、執政臣朱器の饗を設を臨時客と云、自餘の樣器饗を大饗と云也、是も源氏執政の故也、朱器饗をまうけられたる故に、臨時客と云也、　大饗事、正月二日二宮大饗中東　關白臨時客、四日左大臣饗、五日右大臣饗、謂ニ母屋饗、大臣初任謂ニ庇饗、

〔岷江入楚二十三初音〕少河海説アヤマレリ、大饗ハ毎年正月ニ三公各コレヲ給フ、其時ハ請客ノ使ナドアリテ、客人ヲ殊更招請シテ、藤氏ノ一大臣ハ氏長者タルニヨッテ、朱器臺盤ヲ氏院ヨリワタシテ是ヲ用イル也、自餘大臣ハ赤木クロ木ノツクヱ樣ノ器ヲ用也、尊者アリ、鷹飼ナドワタル儀アリ、臨時客ト云ハ、正月二日三日ノ間、關白大臣ノ亭へ客人ノフト來レルヲ云、サテ臨時客トハナヅクル也、其時ハ臺盤ナドハ用ヒズ、ヲシキ高ツキヲスユルナリ、催馬樂朗詠カタヌギナドアリ、樂器ヲメサズ、笏拍子ニテウタフ物也、源氏君太政大臣タルニヨテ、臨時客ノ事、攝政ノ臣ノ如シ、　私年中行事秘抄云、正月二日關白家臨時客事云々、　花鳥ト、根元抄ト相違、花鳥ノ時シルシ改ラルヽ歟、○中略　玉云、客、キヤクトヨムベシ、一勘、臨時客ハ攝關家ニテノ名目也、但六條院ハ大臣ナガラ執政ノ職ヲモ兼タル程ナレバ、ナズラヘテイヘル也、一勘、○中略　少臨時客ニハ樂器ヲ用ズ、郢曲ノ人笏拍子にてうたふ也、然共此臨時客ニハ大饗の例になずらへて、笛の筥などをめし出したるにや、物のゑらべといへるおぼつかなし、但物のしらべトハ、音曲につきて時の調子をも云べし、樂器の有無にはかゝはるべからず、

〔小右記〕長和三年正月二日己丑、依ニ物忌ニ不レ參ニ左府、○藤原道長　之由、示ニ送左宰相中將許、給ニ於隨身幷番長

座、先例或大臣來之時、臨期敷改唐錦上鋪茵等、然而多不然之上、長承二年、故殿〈〇藤原忠通〉初度無此儀、或說、於寢殿行之時、不改座之由、見爲隆記、此條〻頗不審也、然而任常例、今日不改之、又如寛治五年記者、敷色々緣圓座、如大饗、〈紫、青、高麗也、〉而年々記、皆高麗圓座也、仍用常例、又大臣座上鋪有敷青端之例、同依非常例不用之、余座艮面、勸盃人居座上、又第三獻、尊者取盃也、余著打下重、不著半臂、宿老之儀也、今日打出二色口紅打口紅梅表著、蒲萄染唐衣、

〔猪隈關白記〕承元二年正月二日壬申、是日有臨時客事、於寢殿南廂有此事、殿上人座西廂、任例奉仕御裝束、仍不記之、大納言以下座前居折敷高坏饗十二前、〈各三本也、折敷面押白絹、初度先例如此、常例給折敷也、不居飯、著座之後可居也、〉余〈〇藤原家實、時爲關白、〉前物并尊者前物不居之、著座之後可居也、殿上人座前居机饗六前、〈兼居飯、〉藏人所居饗如恒、但今日障子上不居饗、臨時客日先例也、但或又居之、女房有打出、藏人所前、車宿前引幔如例年、中門內方不引幔、但東南角方有屛、頗見苦、仍引幔、申終許、右大將公繼卿以下來集、人々遲來之間、時刻推移、則尊者右大臣〈忠經〉來、左大臣〈〇藤原隆忠〉稱所勞不被來、內大臣〈〇藤原道經〉疱瘡之後未出仕、先是余著東帶、右大臣於西門前昇下車立之、

大臣例

〔源氏物語〈二十三初音〉〕けふは、りんじきやくのことにまぎらはしてぞ、おもがくし給、上達部みこたちなど、例の殘りなくまいり給へり、御あそびありて、引出物ろくなどになし、そこらつどひ給へるが、我もをとらじともてなし給へる中にも、すこしなずらひなるだに見え給はぬものかな、とりはなちてはいうそくおほく物し給比なれど、御まへ〈〇源氏〉にてはけをされ給ふもわろしかし、何のかずならぬゑもべどもなどだに、この院にまいるには、心づかひことなりけり、ましてわかやかなる上達部などは、思ふ心など物し給ひて、すゞろに心げさうし給つゝ、つねのとしよりもことなり、花の香さそふ夕風のどかに打吹たるに、おまへの梅やう〳〵ひもときて、あれは誰どきなるに、物のしらべどもおもしろく、このとのうち出たるひやうし、いと花やかなり、おとゞも、と

事等、返答□□□即歸家東帶、（蒔繪劔、無文帶、）參內東宮等、其後年□□□攝政殿、先是三位中將兼雅在侍臣座、予參□□□方、聊勸盃酌、暫出居侍臣座、此間公卿多以參集□□酉剋許尊者照臨以前云々、仍公卿下立藏人□□屏外、左大臣下車、過公卿列前間相揖、第一人有答揖、公卿皆悉可答揖歟、可尋知、大臣進中門東砌之間參進、甚以巍々也、万人以目、大臣以下公卿侍臣立定後、主客揖讓、尊者二三步進又揖讓、次主人進階下歸向揖之、了昇東邊著座、尊者昇自西邊、經簀子入西一間、經座末著奧、次大宮中納言以下昇中門廊南妻、經同東端并透廊入自南面西第一間著座、參議昇中門外、各座定之後、居尊者并主人前物、先尊者、（陪膳、大膳權大夫邈明朝臣、）次主人、（陪膳、大學頭有光朝臣、役供諸大夫、）次一獻、（主人、）次二獻、（頭權亮、瓶子藏人、）次三獻、（左宰相中將、忠親瓶子、）四獻、（予、瓶子右衞、左大臣不取、）擬五獻、（大理、）

〔玉海〕文治三年正月二日甲辰、今日依日次不宜、無臨時客事、　三日乙巳、是日家（○藤原兼實）臨時客也、早旦有手水事、陪膳以政朝臣、（內府手水同、陪膳同前也、）未剋余著束帶、（櫻織物下襲、面白、裏蘇芳也、浮文表袴、紅打衵、紫檀地水精樋金作劔、件樋底以緣青透瀉形、上以金魚形付之、紺地平緖、繡鶯柳樹等、）先是辨備饗饌、（政所勤之、先例爲受領令家司居、諸國勤之、近代共以不合期、仍給料材於政所、令辨備也、行事職事兼時加撿知、以侍男共令取居之、也、飯兼居之、）此間公卿漸以來集、或著殿上人座、或在尋常上達部座簾中、（件座二行、敷疊垂簾也、）奉行家司宗頼朝臣、告人々來集之由於右大將家、（以私使告之、大臣爲客之時、以隨身告之例也、）再三雖遣使猶以遲々、及申終右大將來臨、

建久六年正月二日戊子、此日臨時客也、尊者左大臣、（藤原實房）著蒲萄染打下襲、申剋拜禮畢著座、（少將良輔取余（藤原兼實）沓、）先居尊者饌、（陪膳兼親朝臣、）次居余饌、（陪膳以政朝臣、）次一獻、（以政持參盃、）次二獻、（頭中將兼宗、）次居飯、（殿上人、飯兼居之、）次居海雲汁、（副餘于寄饑、）次下箸、次三獻、（實明卿、）居雉羮、（副雉足、生鮑、濱松等、）催馬樂、（安名尊、席田、眉刀自女、定能卿取笏拍子、公繼卿、親能朝臣助音、）次四獻、（忠經卿、）上下揚、（左大臣放細、不揚如何、）居菓子、朗詠又律歌、（青柳、更衣、）次五獻、又朗詠、（新豐酒色、）居薯蕷粥、引出物馬一疋、（鹿毛、）拔箸自下﨟起座、尊者退下自中門廊方也、　今日、定能卿依家禮、昇自中門內方、而通親卿昇自南階、中納言用此路、何年例哉尤珍事也、可謂奇恠々々、　今日、少將著紅梅織物下襲、萌木表袴、螺鈿劔、紫緂平緒等也、公卿座高麗疊上敷高麗端龍鬢、其上敷東京錦茵、爲大臣座、其次敷高麗端圓座六枚、爲大納言參議

定後、余揖内府、又同、其間余渡階東方、又揖内府進、相雙昇階、(余東方、内府西方、)昇簀子、余先著親王座、次内府著座、次々諸卿皆著了、次一獻、余立座、一世乃源氏の座著座取盃、寢殿の南の廂北、自西第一之間より入天、尊者の座ト納言座トの間に居天、頗向丑寅角、與座の勸盃入後、尊者授盃、彼内府著端座、取盃授納言間立座、經本道幷簀子間、出雲前司重仲取圓座、敷角間、余著彼圓座、

〔台記〕康治二年正月二日庚寅、攝政家(○藤原忠通)臨時客也、令申云、所勞相扶間、若男自繞故皇太后拜禮、難參會、申剋許、伴新納言相公羽林參內、太后拜禮、(舞踏)了參內御方、(被破御物忌、)向攝政亭、豫寢殿南東廂裝東、立東中門、付左大弁顯業卿申事由、依無答拜之儀也、(常儀以家司職事令申與、臨時客無答拜、非常事、又有先例、可相准事等、仍令大辨申之、又氏院別當顯有便宜、以顯業中傳事、皆人有惑、)歸來示氣色、卽僕(○忠通弟賴長)已下(兩將軍不參)列立南庭、了再拜、後立定間、主人出自西方、經南簀子著座給、此間予跪地、主人著後立揖、離列北進昇南階東頭、(無揖、昇一級、脫沓、先右足、)自簀子東行、入東一間、經座末著奧座、(先居西東、依仰居西、)余昇階後、少將公親取沓、(有養子約、)權大納言(宗輔)又昇南階著奧座、皇太后大夫(中納言)已下昇東對代階、經透渡殿相分著座、以後之儀如常、每度大納言經余後給盃、二獻了及昏黑、舞樂被仰、權大納言稱咳病固辭、又被仰皇太后大夫、又稱咳病頻被責、尙辭、余申云、當有此能、仍被責仰、申不堪由、尙被責大夫、因愁歌之、同人朗詠、纒頭、主人被命云、弦中將(經宗)候座、名字忘却、于今不召、著公卿座人々申云、先是退下、(年來之例、藏人頭更不召著、而此人無雙英雄、因可召著歟、)主人已下無著半臂之人、(余年來著之、今日初不著、)之、三位中將一人著之、年少尤可然、

〔愚昧記〕仁安二年正月二日辛丑、參比隣、(攝政(藤原基房)御座也、)今日臨時客、仍令裝束之間也、寢殿南西殿幷同簀子透渡殿西對中門廊等敷滿廣席、寢殿南廂自東五ケ間幷西廂二ケ間卷廂簾、垂母屋御簾、廻簾立四尺屛風東第二間(卷簾、同面也)以西、南面東上敷高麗端疊、其上敷同端上鋪幷圓座東京錦茵一枚、(茵大臣料也)又同南方北面相對敷菅圓座、各居饌、(土高器二本也、尊者料不居、)東一間南邊敷菅圓座一枚、爲主人座、西廂二ケ間南上對座敷紫端疊、立黑柿机、爲大臣座、寢殿南廂東三ケ間女房出袖、(柳衣五領、)予以基光有尋申

〔中右記〕寛治八年（○嘉保元年）正月二日甲戌、殿下（○藤原師實）有臨時客事、（東對南廂公卿座、東庇殿上人座、）尊者左右内府（○源俊房、顯房、）參來、列立南庭（東對前）、兩貫首以下雲客一列、二拜了後、頗有揖讓、三丞相昇自南階給、自餘公卿自中門廊昇、公卿員數如昨日、但民部卿參加、初獻家主令取給、（行房朝臣被獻御盃、）二獻頭弁、（瓶子藏人左衛門尉永實）三獻皇太后宮權大夫公定、（瓶子左少將有賢）居汁物飯等、地下四位依不足、權左中弁基綱朝臣勤仕殿下陪膳役、次民部卿取拍子歌催馬樂、此殿伊勢海庭生歌朗詠依爲新所被歌、此殿尤有興事也、四獻右大辨通俊、（瓶子少納言家俊）居汁物、人々甚淵醉事也、乘興五獻左兵衛督、（瓶子民部大輔基兼）欲居菓子薯蕷粥之間、人々起座、有牽出物御馬三疋、（左右内大臣料、）左右内府自階下立、取馬綱有拜受、殿下左府隨身府生下毛野敦久、右府前驅參河權守源盛雅二人、召南階前有纏頭事、欲脱御衣間、頗以遲々、内大臣、中納言、中將左右扶令纏出給、萬人付目、感歎多端、感興之至、勝於例年、脱御袙單衣等了後給之、中納言中將傳取賜之、（敦久御單衣、盛雅紅打袙、）是雖不勝感興、又前規云々、（○下略）

〔古今著聞集〕（三公事）寛治八年正月二日、殿（○藤原師實）の臨時客有けるに、左大臣、左大將（○源俊房）右大臣（○源顯房）内大臣（○藤原師通）參たり、事はてゝ、各御馬ひかれければ、三公地に下て拜し給ひけり、殿下左府隨身府生下毛野敦久、右府前驅參河權守盛雅を南階の前に召て、御衣をぬぎてたまはせけり、内大臣、中納言、中將、左右よりすゝみより給て、くれなゐのうちあこめ御ひとへおくり出されけり、中納言中將つたへとりて、御單物をば敦久に給ひ、打衣をば盛雅に給ける、先規あれども、時にのぞみて面目ゆゝしくぞ侍けり、

〔殿暦〕康和三年正月十三日甲戌、今日臨時饗、尊者内大臣（○源雅實）也、（裏書）巳剋許著裝束、著親王座、諸卿來、此間藏佐實來、（甘栗使也）寢殿の西又庇に、南面敷勅使座、余（○藤原忠實）座對座、（北面）職事等取甘栗置前、其後勅使藏人著座、余插笏、取勅使祿授勅使、勅使下從階拜則退、同余著親王座、上達辨少納言著座、召四位少將有家、（請客使、）仰詞如例、頃之下從南階而沓取雅職立階西掖、諸卿内府以下列立、次拜、拜了諸卿立

式日
儀式

〔江次第抄正月二〕大臣家大饗　又臨時客者、大饗以前先行之、蓋不及請客而不時客來之由也、故號臨時客、不用机臺盤、用折敷高坏也、上古三公皆有臨時客、中比攝關外不行之、○中略臨時客、又於庇行之、有朗詠祖裼等事、

〔拾芥抄中末年中行事〕正月二日　臨時客　攝政臨時客

〔公事根源正月〕臨時客　　同日○二日
是は攝政關白家に、春の始大臣以下の上達部を招引してあそび侍事也、定れる公務にもあらねば、臨時客と申にや、大方大臣の母屋の大饗は、年をへて行侍りしぞかし、鷹飼など渡りて其興有事にて侍き、是は藤氏の長者、朱器饗をまうけ侍るなり、大臣家には様器の饗をそなふるなり、臨時客にも尊者など有て、よのつねの大饗の儀式におなじ、はてつかたには御遊ありて、催馬樂をうたふ、近頃は攝關家もかやうの事絶たるぞ、念なく侍る、

〔殘夜抄〕臨時客、これはみゝとをくて、いまだたちぎゝし侍らず、これはちとかはりめありて、朗詠などあるべきにや、

攝關例

〔左經記〕寛仁二年正月二日丙申、參攝政殿、○藤原頼通有臨時客、先主客於南殿拜禮、次被著座了、大納言四所有引出物、馬各一匹次攝政殿群卿令參大殿給、有臨時客事、拜禮之間、攝政殿幷他家子君達不立給列、主客著□□後自脹追令著座給、事了有引出物、攝政殿幷右大臣馬各一匹○又見日本紀略

〔榮花物語三十九布引の瀧〕としかはりぬれば承保四年○承曆元年といふ、○中略二日は殿○藤原師實に臨時客などいとめでたし、女房紅梅のにほひに、もえぎのうちたるきたり制あればかずいつゝなり、されどわたいとあつくてすくなし共見えず、あまたあることそあつきもあまりなれ、うちいでたるはうすきは物げなきに、いときよげにみゆ、上達部殿上人まゐり給て御あそびあり、右大臣物ずむじなどせさせ給、

レバ、取食ト云者ヲバ追テ不入シテ、大饗ノ下ヲバ其殿ノ侍共ナン食ケル、ソレニ其殿ニ年來ニ成テ所得タル五位侍有ケリ、其大饗ノ下侍共ノ食ケル中ニ、此五位其座ニテ薯蕷粥ヲ飲テ舌打ヲシテ、哀レ何カデ薯蕷粥ニ飽カントト云ケレバ、利仁此ヲ聞テ、大夫殿未ダ薯蕷粥ニ飽セ不給カト云ヘバ、五位未ダ不飽侍ト答フ、利仁イデ飲飽セ奉ラバヤト云ヘバ、五位何ニ喜ウ侍ントト云テ止ヌ、○下略

〔台記〕仁平二年正月廿六日壬戌、今日於東三條再行大饗、○中略此間權大納言宗能以下來會、在弁少納言座、余問戸部生年七十六曰、初會大饗儀是何年哉、答曰、永保元年、故大宮右大臣、於花山院被行大饗愚翁始見之、時年五歳、自彼年至今年七十二年、聞者歎其壽考、

臨時客 院宮臨時客併入

臨時客ハ、毎年正月二日ニ、攝政、關白、及ビ大臣ノ家ニ於テ、親王公卿以下ヲ饗應スルモノニシテ、其名稱ノ由テ起ル所ハ、蓋シ請客ニ及バズシテ來集スル客ヲ、臨時ニ饗スルヲ云フナリ、其儀式略ボ大饗ニ同ジト雖モ、机臺盤ヲ用ヰズシテ、折敷高坏ヲ用ヰル、其庇ニ於テ之ヲ行フコトハ、新任大饗ト同ジ、新任大饗ノ事ハ、政治部ニ在リ、

院、女院、皇太后宮、皇后宮、中宮、東宮、齋院等ニ在リテモ亦此饗アリ、而シテ其中宮幷ニ東宮ノ饗ハ、二宮大饗篇ニ併載シタレバ、參看スベシ、

〔年中行事歌合〕四番 左持 臨時客○正月二日中略

臨時の客とは、攝政關白の家に、春の初、大臣以下の上達部を招て、あそび侍る事の有也、さだまれる公務にてもあらねば、臨時の客と申也、

とゞのみぞ、御ぞうの中に六十餘までおはし丶、四分一のいへにて大饗し給へる人なり、とみのこうぢの大臣と申す、

〔枕草子八〕ゑせもの丶所うるおりの事〇中略　大饗のところのあゆみ

〔枕草子春曙抄八〕大饗のところのあゆみ　二宮大饗、大臣大饗等也、あゆみとは、或説に云、大臣などの御慶賀に學生ども列參して、嘉辰令月歡無極といふ詩を朗詠して、腰指の絹を給ふ事云々、公事根源云、二宮とは春宮中宮を申也、王卿以下本宮に參じて拜禮の事あり、次に玄輝門の東西の廊にして饗につく、先中宮の饗につく、次に春宮の饗につく、三獻の儀有云々、猶江次第ニ委シ、大臣大饗は前に委注、あゆみとは步の字也、江次第に勸學院の步といふ事もあり、常にはことなる事なき學生などの、此折に所をうるを云にや、

〔後拾遺和歌集一春〕おなじ屛風〇入道前太政大臣大饗し侍ける屛風に、大饗のかたかきたる所をよみはべりける、

入道前太政大臣〇藤原道長

君ませとやりつる使きにけらし野邊のきゞすはとりやしつらん

〔夫木和歌抄三十六賀〕攝政家御屛風大臣大饗會所樂舞有二所拜禮一　祭主輔親

萬代の舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人もくれ

〔兼盛集〕大臣家大饗する所

ひきつれて大宮人のきませれば春うれしくもおもほゆる哉

〔古事談二臣節〕景家〇中略最期ニ何事カ思置事有哉ト、問人アリケレバ、無二別之遺恨一、但大殿大饗之時、山鵰ノ舊焦被レ召之時、山鵰ノナクラミヤマ鶏ノヒシホイリヲ、マキラセタリシ事ナン遺恨云々、

〔今昔物語二十六〕利仁將軍若時從二京敦賀一將二行五位一語第十七

今昔、利仁ノ將軍ト云人有ケリ、〇中略而ル間、其主ノ殿ニ正月ニ大饗被レ行ケルニ、當初ハ大饗畢テ

還昇次參議祿、始自上次納言祿、同次中納言公能卿主人子進塗籠南面屛風下取祿、奉主人、主人取之授余、
中納言季成卿進同所、祿直授右府、先是篠竹止、音召人還入、次自西方牽人馬四疋、二疋余、二疋右府、各乘燭者二人各前行、余馬乘燭盛行、清則
已上五位藏人範實、五位藏人左衞門尉助永、業隆、五位藏人右衞門尉仲重、右府馬乘燭、親房、爲經、以上民部大夫雅基仲民部大夫左兵衞尉□遠、則盛、民部大夫右兵衞尉賴盛、兩三廻後、自東中門牽出、余
前駈憲親、經憲受之、次主人降立南階下、東頭此間余隨身下臈同之秉燭來砌下、余降自階西邊、先左足出下第一級者否、
三位中將之隨身發前聲、向主人小揖、出自東門、右府出儀亦同、尊者出時、主人降立、尊敬殊甚也、尊者雖上臈不必然、而右府出後、主人還昇、未知其由、在座之間、右府
同余曰、尊者出時下官并主公可降立乎、答曰、主人降立、既有先例、未聞上臈尊者出時下臈尊者降立例、右府從命不降、大饗之禮、一大納言謂當日第一來、復遣掌客
使、而先日余示內府曰、若及申時、不待掌客使、不知諸卿集、不可參向也、仍不待宗能卿來、遣掌客使、兩
尊者入幔門後、宗能卿入來、依非正禮記之穩座之間、右兵衞佐藤長成忽悶絕、叫喚四五聲、聞者驚奇、疑是魔
所爲歟、未曾有事也、向大饗所納言參議、有文帶、螺鈿劍、淺沓、大納言、宗能公敎中納言、家成、公能、季成、忠雅、忠基參議、敎長、經宗、公通、雅通、余
以下自大饗所參內、不改劍帶
仁平二年正月廿六日壬戌、今日於東三條再行大饗、朱器初度藤原賴長○戊日也、而勘先例、故京極殿朱器初
度大饗、承保三年正月十九日戊日行之、今用彼例、

停止

〔日本紀略 三村上〕天曆元年正月十二日戊戌、關白家忠平○藤原大饗、依病惱俄停止、但史生使部等饗祿令
官厨家賜彼等、
〔日本紀略 四村上〕天德三年正月十二日戊午、今日右大臣家師輔○藤原大饗、依穢停止、十三日己未、右大
臣家大饗料給三局使部等、天慶十年正月十二日記云、太政大臣家大饗、忽有障停止、後日○後日下、一本有饗
料二字、給三局史生、而今度給使部、不給史生、

雜載

〔大鏡 二左大臣時平〕左大臣時平のおとゞは、もとつねのおとゞの御太郎也、○中略大納言源昇卿御女
のはらの顯忠おとゞのみぞ、右大臣までなり給へる、その位にて六年おはせしかど、すこしおぼ
す所やありけん、出でありき給ふにも、家のうちにても、大臣の作法をふるまひ給はず、○中略此お

仰曰、召史生、官掌稱唯退還、史生以下參入列立、再拜了著座、次居飯、次御鷹飼右近府生下毛野厚方、持著雉之杖、（○杖一本作枝）率犬飼入自東幔門、（此間鷹飼鳴鈴）斜渡庭中、立立作幄巽方、（犬飼跪後）縫殿頭爲兼起幄座、取雉插幄巽方、此間立作所人立胡床三脚於幄巽方、（一脚鷹飼座、一脚勸盃人座、一脚居肴物）鷹飼著胡床、（北面）立作所人（左衛門尉助永）賜肴物一折敷、（置鷹飼前胡床上）次爲衆取盃著鷹飼西邊胡床、（東面、立作人右衛門少尉仲重執瓶相從）勸酒、鷹飼右手執盃飲、畢給盃於犬飼、犬飼飲了投後、鷹飼出自西中門、（未至西幔門、立作人右兵衛少尉仲頼取疋絹插餌袋、）次雅樂頭泰親、率伶人自東門參入、（伶人發樂在後）右近將監多近方、（五位）擊一鼓宛轉、泰親立定、近方退入、伶人立樂、然後奏舞、（左万歲樂、賀殿、右延喜樂、地久、）此間、左兵衛尉源行賢包丁、諸卿歎其容易、唯見既忘妙舞、居汁物、伶人退出之後、右大弁示氣色、（樂間居汁早畢、然而樂畢示之、）予以下先立口次立箸、然後食之、次四獻、（自此用土器、）外參議經宗朝臣、內參議公通朝臣、（須擬盃於主人、而忘失不擬、大失也、）復著汁、（加箸立）依右大弁氣色下箸如先、次供燈、諸卿曰、未見大饗如今日早終禮、次五獻、外中納言季成卿、內中納言忠基卿、予讓主人、主人固辭、予遂執盃轉主人、主人進受盃、（予出座南、主人作居進寄受之、）復座飲了、轉宗能卿、（一大納言）卿進主人座可受盃復座、次居裹燒、（不轉盃）次主人召仰錄事、（向座下仰之失也、須作乾面仰之、）弁少納言座、右少將公親朝臣、左少將公光、外記史座、散位宗賢、季時、（已上藏人五位）史生座、散位安俊、孝重、（已上史大夫祿事遲出之間、殆移時刻、）次給史生祿、（大藏權少輔致遠就案唱史生名、次第給之、）次羞立作所物、（余陪膳右少將公保朝臣、役、藏人勸解由次官顯遠、左兵衛佐實定、右府陪膳前少納言能忠朝臣、役、遠江守惟方、右兵衛佐長成、大納言陪膳、惟方、內長成、外保地下五位、中納言以下同餛飩等、）次六獻、（先是祿事大夫起座退去）主人起座、於一世源氏座取盃、入自庇東一間、經弁少納言座前諸卿後勸右府、（弁少納言避座平伏于長押端、初獻亦同、）左衛門督家成卿勸余、（瓶子長成、五獻以往、奥座盃至弁座、至此獻者留參議座、不及弁座、是依弁等勸座間也、）主人退還、使居大弁座前、實重朝臣（地下四位）奉盃、主人取之勸大弁、了經本道復座、次設穩座於南階以東簀子、余以下移著、（尊者經著座時道著之）地下召人候砌下座、次著肴物於公卿座、（折敷高坏）中納言忠雅卿勸盃、（顯遠執瓶）大夫等獻絃管、次催歌遊、歌宗能卿、琵琶公教卿、（無箏、依無其人也）和琴資長朝臣、笛忠基卿、笙隆季朝臣、篳篥季行朝臣、雙調、安名尊、席田、鳥破、賀殿急、平調、青柳、鷹子、万歲樂、三臺急、此間先賜史外記祿、（始自上）次弁少納言祿、（同）少納言成隆朝臣以下降立、一揖退出、（弁少納言）

（左蘇芳唐紙、右白唐紙、）番長狩袴、（左二藍、右蘇木、）近衞紅梅狩袴、（無將曹、）監掌客使前駈、忠基、敦長、兼長、連車、季成卿、公通朝臣、自途中連車、自町南行、至三條西行、至西洞院、（於此辻洗車輪、）暫時停駕、右府（○源雅定）自南方來、余車南行、至東門外、當門稅駕、西向立之、（榻在諸板下、）垂車簾、右府同之、（余車在北、右府車在南、依家便、）新大納言（公敎）已下、史已上、列立東中門外、後、兩尊者降車、（右府先降、侍從宰相雅通褰簾、余自卷簾、三位中將取沓、此間隨身發前音、入門後止之、）入門、（相作殿上人、并三位中將、下臈隨身留門外、上臈隨身四人入門、自幔南來會、中門不發前、右府同之、）當新大納言北向揖之、（大納言以下答揖）至幔門、取衣裳、（隨身副之）先之、主公當南階東端去笏一許丈、南向而立、（座下也、公卿座西上、）余入幔門、（隨身不入）練行、當主人北向而立、（有揖、主客間二許丈、）史已上列立、（三列、並西上北面、）了賓主俱再拜、（余伏先左足、起先右足、）後主公三讓、余再辭、其第三度不辭、離列（無揖）乾進當階西端并主人庚方、艮向而立、（無揖）主公三讓、右相公、右相公來立余巽方、主公復三讓、余再辭進立南階西欄下、（艮面）主公俱進、立東欄下、（乾面）又復三讓、余再辭、昇自階西端、（無揖、先右足、脫沓一兩級、）入階西間、（親王座上間、當尊者座、昇長押、先右足、）著座、主公又復三讓、右相公、（余昇階之間也）相公進立階下、（余立所）主公又復三讓相俱昇階、（客西主東）主直著親王座、（上頭）客經余道、自余後著座、散位盛隆來自西方、取主人沓還入、權大納言（宗能）以下昇自階東端著座、（一大納言在南座）召使取尊者以下參議以上沓、史以上座定、主人起座、於一世源氏座取盃、入自南面東一間、自廂西行勸余、三位中將（藤給）道退還、自簀子西行之間、散位範實取菅圓座、出自西方敷廂東六間、主人著之、（乾面）即立机、此間撿非違使（宗景、公俊、兼成、實眞、）著床子、立作所人、入自西方著床子、次二獻、外左馬頭隆季朝臣、內右中將師長朝臣、次著餛飩、（余陪膳有盛朝臣、右府有成朝臣、主人實重朝臣、）右大弁朝隆朝臣、（非參議）端笏示、居了氣色、余以下下箸、次三獻外左中將成雅朝臣、內左少將家明朝臣、（進自弁座上、是一說也、）此間撿非違使退出、次右少弁資長、拔箸把笏、揖起座經机南、自廂西進、至廂東第三間膝行、（當西柱）三度揖、向余申曰、召史生、余指許、（先之拔箸取笏、）弁稱唯揖、膝退二度、右廻復座、召師經宿禰、（一臈）師經稱唯、經東對西簀子透渡殿等、跪居弁後長押下、揖、後弁頗顧仰曰、召史生、（頗顧、史西向仰之禮也、今乍顧仰之可謂失、）師經稱唯、揖右廻、自本道復座、召官掌、（二臈）官掌入自東中門、立透渡殿南砌、師經

(南面)頭弁以下五人少納言三人列、其後、大外記師遠以下上官十三人、(外記五人、史八人、)尊客左大臣(〇源俊房、雅實伯父、)漸至大納言(〇源師忠、俊房弟、)前相揖被過、(大宮權大夫季仲、右兵衞督師頼、扈從加列、殿上人四位少將三人、宗輔、師時、師重、侍從實明、又相從之、)主人被立南階西頭、公卿一列、(左大臣順進出被立、)弁少納言一列、上官一列、(今年敍位外記二人有清、仲俊、立大夫史祐俊宿禰上、)二拜了、尊者進寄南階、揖讓之間、主人居階西頭深被揖、是家禮之貴、異他之尊者儀、見者感涙、爲尊者爲家主、其一家之面目歟、尊者進寄南階欲昇之間、一度又被相揖、然而家主深被揖、仍尊者獨先昇、(從階東邊先右足被昇、著端座、原書一人并座敍缺、)次家主昇著親王座、(中宮大進實房取沓、但從階西邊被昇、)次公卿一々昇、(從階西頭被昇、)人々被入西一間、(但大宮權大夫獨被入二間、〇中略)此亭本西對許也、而去年作五間四面寢殿、有大饗也、(寢殿西四間爲公卿座、西座間爲辨座、西二間打出、紅梅衣、)一西對東面庇三間上官座、寢殿與西對北廊殿上人座、　予(〇藤原宗忠)取拍子歌此殿依爲新所也、是口傳也、　古語云、我家不儲大饗、人不爲他家尊者云々、而今年左大臣不被儲大饗、今日爲尊者如何、　後聞、大饗後朝、內大臣召舞人狛光末纏頭云々、是祖父土御門右府(〇源師房)殿親六條右府(〇源顯房)并吾大饗三ヶ度舞人也、爲思彼舊蹟有此恩賜者、此事尤有興歟、

保延三年正月廿一日、內大臣殿(〇藤原頼長)大饗、東三條、尊者左大臣(〇源有仁)上達部大納言五人、(忠教、師頼、實行、雅定、實能、)中納言七人、(經忠、宗輔、伊通、顯頼、實光、成通、公教、)參議五人、(實衡、重通、季成、忠基、實親、左大辨)及五獻　立作所(師遠、爲康、行賢、采女允、)鷹飼武正、　御遊拍子新大納言、大殿(〇藤原忠實)出御穩座、　穩座勸盃、左衞門督宗輔卿、

〔台記〕久安七年(〇仁平元年)正月廿六日戊戌、今日內大臣(〇德大寺實能)大饗也、午時藏人左衞門佐忠親內覽吉書、著冠直衣、出對南廂見之、同時外記持來轉輪院國忌見參、執政之始、可有其忌、仍不見返賜了、末一點東帶了、(有下襲、紅打衣、浮文表袴、水精螺鈿、水精柄劔、紫淡黃鳳平緒、有文玉帶、名師子形、去十七日自院賜物、此劔治暦三年正月尊者日、京極殿所用也、見御暦、)出對南廂、此間掌客使左少將實長朝臣來立中門、左中將成雅朝臣謁之、來傳命曰、上達部詣給者、報只今由、卽降自對南階、(三位中將取沓著之、忠基、教長朝臣降立中門外、)出東門外乘車、前駈十人、(皇后宮大進頼方、散位盛憲、同憲親、皇后宮權大進爲親、散位仲行、同經憲、大舍人助源雅高、皇后宮權少進藤憲頼、源高忠、藤憲忠、五位六人、六位四人、治暦三年例也、宮司奉仕、治暦二年例也、並見御暦、)隨身府生以下、垂袴、壺胡籙、褐衣、府生襖袴、

大臣例

瓶子、此間少納言辨敬屈、又大納言中宮權大夫立座在渡殿、依父子之義也、經南廂西一間幷親王座前、勸右府、左京大夫三位長房於渡殿取盃、地下五位實國摽盃授之、殿上五位右兵衛佐通頁取瓶子、入自同間、經辨座前、勸內府、主人不歸、自本道直著階東間之間、章經取菅圓座一枚、自東方出敷之、寄西敷之南座定給後、前大和守成資朝臣章經等舁木机一脚、進自西經御後立右方、件机白絹西(西一本作面)居二種物様器、饌少以乾菓爲實、巡行了之後、四位二人前上野守政經朝臣、前紀伊守範基朝臣、東西相分、勸外記史、〇中略次二獻、〇中略次三獻、〇中略又立床子爲勸盃座、賴輔取盃、左馬允季俊取瓶子、須知家事取之歟一盃了、賜犬飼、犬飼飲一盃棄盃了之後、季俊取匹絹、插公久腰、公久率犬飼自東幔門退出、次雅樂寮允以下、依頭重服不參也率樂人等、入自西中門、發參音聲、〇中略次七獻、勸盃、端中宮大夫、奥藤大納言、次主人取盃、如初獻儀、成經朝臣奉盃、中務大輔敦基取瓶子、經西簀子勸右大辨、次家令散位長資令下家司等、舁史生祿案立南庭、當西對巽立之披見參文、一々召唱賜之、次撤一世源氏座、敷菅圓座於南簀子、南階間及以西間等敷之爲穩座、頃之主閣尊者以下披著七、此間少納言辨在座、居渡殿邊、先羞肴物、高坏各二本、從長押上立座後、先例用高坏三本、今度二本、未知其可否、次敷伶人座於南階前、紫端疊二枚、近衞官人敷之、伶人著座、郞居衞重、次絲竹、於堪能之人幷伶人等、于時白雪紛々、如調郢中之曲、衆人々感、自然而次宮內卿取盃勸之、右近少將俊實取瓶子又伶人座勸盃酒、五位取盃此間給外記史祿、紅衾各一領次少納言辨祿、右大辨經信朝臣、唯四位參議紅染褂一重、自餘同色衾各二條、次辨以下以祿纒頭下立、列立階西腋、少納言辨一列、外記史列其後、皆東上北面、但大辨不下、乍立揖退出、次參議祿、鳥子重各一重、自上臈給之、次中納言、白大褂各一重、同自上臈給之、次大納言祿、同中納言次中宮大夫進居母屋西第五間簾下、先取出右府御祿、白大褂一重、副蒲萄染織物五重細長一領、但具大褂上云々、自座上被奉主人、主人被奉右府、次又藤大納言取內府御祿、同右府御祿被奉之、次牽出物、兩府細馬各二疋、先是尊者隨身、立明官人等給腰指、次兩府陪從等取履、炷松、出南庭、主人入簾中、尊者自東腋階退出、自餘諸卿以次退出、事終上下人退出之、

〔日本紀略醍醐一〕延喜四年正月五日、右大臣家〇源光饗、

〔中右記〕康和四年正月廿日丙子、內大臣〇源雅實有大饗事、土御門亭新造寢殿初、有此大饗也、午剋許參彼亭、先參右大臣殿、中除目間事等、未申剋公卿集會、〇中略頃而尊者來給之由、請客使告申、則公卿民部卿以下十人列立西中門外、東上

〔記錄部類臣下大饗〕不知記、治曆二年正月廿二日丁丑、今日左大臣（〇藤原教通）二條亭有大饗、（用朱器）以寢殿西面儲其事、裝束儀見差圖、未剋諸卿漸來集、暫在東對代廊南放出、（件放出敷長筵、敷高麗疊等、）此間、蘇甘栗勅使藏人左衛門權少尉藤原惟輔來、立西中門邊、先是儲座於西對南廣廂、（高麗端疊一枚、上敷東京錦茵、當唐廂從東第二柱西邊、南北行敷之、其東去七八人許、以菅圓座爲主人座、）前土佐守實國、申勅使參來由、即主人著座之後、實國幷散位定成等、取蘇甘栗、居勅使座南邊、（小寄東並居之、蘇東甘栗西、）其後昇自中門北腋戶、候廊東簀子、主人目之、次倚對南簀子重目之、慭昇居座西邊、被申賜由之後、權左中辨伊房朝臣取祿、（大褂一領、白袴一腰、）自東方出來、主人傳取授之、搢笏跪行賜之、經廊東簀子、下中門東砌、於幔中再拜、於中門外著履退出、（須出幔門拜也、依雨雪不出歟、）小舍人二人、各給匹絹、次給蘇甘栗於立作所、（散位季綱、定成等取之、渡寢殿南簀子給之、）次主人於親王座召掌客使、遣尊者御許、（右府、左馬頭敎家朝臣、內府、散位通家朝臣、）頃之歸來、申返事、即被來座、諸卿東中門外南北行列立、少納言辨其北少西退、又南北行列立、（皆東面、南上、）外記史副北幔列立、（西上南面、）尊者下車、遞揖入門、先右府當大納言揖、諸卿共各揖、次內府又如此、次第步出南庭、先是主人自南階下立、（前甲斐守章經出自□方、奉御沓、副御衣裾引歸入、）右府以下、一々列立、（東上北面、）少納言辨列其後、外記史又列其後、主客共答拜了、主人步出度西、當階西開柱立、少步向巽、可先昇給由被示右府、（〇藤原師實）右府辭讓、重被示、仍少步離列立、次又被示內府、同辭讓、重被示、又離列立、猶可昇給由頻被示、兩人共固辭讓、主人遂昇、（傍西階欄昇之、）著御子座、次右府揖內府（〇源師房）昇階、自簀子西步昇自南庇西第一間、經親王座前著端座、（先例、上臈尊者昇自階間直著、而今度不然、若有別家禮歟、）次內府入自同間、經辨座前著奧座、（此間章經取主人御沓歸入、）次藤大納言入自同道著奧座、（須客時上臈著端座、而著奧座、是依可受主人盃、爲子息之故避主人御方歟、）次中宮大夫著端座、次餘卿等守次第著座、次少納言辨昇自渡殿、脫沓著座、次外記史昇自西對唐庇東階著座、次召使等出東幔門取諸卿沓、次上臈大納言皇太后宮大夫入自北門、於殿上人座招主殿頭康基朝臣、被申遲參由、主人觸此由於尊者、早可被著座之由、大夫聞之、直經西簀子入自南廂西一間、加奧座上、（雖被稱遲參由、實及老艾、有憚列庭中之故、自北面被參歟、）次主閣立御子座、自簀子西步當辨座末方居取盃、（地下四位前阿波守憲房朝臣、折敷上居盃奉之、殿上五位右近少將家範取

またもみぢある山ざとにおとこきたり
やまざとのもみぢみにとやおもふらんちりはてゝこそとふべかりけれ、いとおほかれどかかず、大饗の日、寛仁二年正月廿三日なり、ありさまいふもおろかにめでたし、尊者には閑院右大臣〇公季ぞおはしましける、うへ〇頼通室の御ありさまなど、いとあらまほしくめでたきとのなり、

〔小右記〕寛仁二年正月廿一日乙卯、大外記文義朝臣云、今日政始、攝政〇藤原頼通新調大饗料四尺倭繪屏風十二帖、被持參也、畫工織部佐親助、色帋形有詩幷和歌、今日各獻之、詩者大納言齊信、公任、式部大輔廣業、內藤權頭爲政、大內記義忠、爲時法師、作和歌者齋主輔親、前大和守輔尹、左馬頭保昌、妻式部讀之、大納言公任卿遲參、不出詩、太相府〇頼通父道長頻以被催、頗有興委之氣、愁立退、以右中弁定頼令書出、卿相數多會合、侍從中納言行成可書、拾遺云、不可書出、明後日大饗云々、兩納言詩不可評定、自餘可撰被相定間、下﨟上達部各々分散、□主和歌明日可定云々、非儒者上﨟公卿依下官命作屏風詩如何、不異凡人、就中公任卿故宮候周忌內有此興如何、

〔玉海〕嘉應三年正月十六日辛卯、自攝政〇藤原基房御許、大饗日必可來、可彈琵琶之由被示送、脚氣逐日增、敢不能行步、仍其旨具申了立還、被示遺恨之由、　十九日甲午、此日攝政太政大臣〇基房朱器大饗也、三公皆有障、一人不行向、以左將軍〇藤原師長爲上首云々、下官日來有其請、又存可參向之旨、而扶脚病出仕之間、自去十四日殊增、更不能起居、仍今日不向、自他之遺恨、無物于取喩、今日事、右大辨俊經奉行、然而當日事光長行之云々、少將顯信朝臣取圓座、民部少輔宗雅取沓、左少辨兼光召史生、應飼諸武、左將軍勸四獻之盃、其盃親範卿傳受也、納言爲上首之時、公卿傳盃事、先例可尋之、又馬一匹被引大將、此事豫被問人々、申旨不分明、而隆秀卿覺申永保例、(堀河左大臣初任大饗、無大臣之害、大納言拔出大將二人被引馬云々)因茲有此儀云々、

〔日本紀略醍醐〕延喜四年正月四日、左大臣家〇藤原時平饗、

〔榮花物語十三木綿四手〕この廿よ日〇寬仁二年正月のほどは、攝政殿〇藤原賴通の大饗あるべければ、その御屛風どもせさせ給へるに、さるべき人々にみなうたくばり給はするに、おほとの〇藤原道長われもよまんとおほせられて、よのいそぎに御いとまもおはしまさねど、ともすればはしぢかにうちながめて、うめかせ給ほど、さま〳〵にめでたく、人の御身御さいはひ、御こゝろざまもつねのことながら、かばかりいそがしき御こゝろに、かゝることをさへおもひすて〇こと以下十字、一本作二かたをさへ思しわすれ、させ給はぬ御こゝろのほども、きこえさせんかたなくおはします、すべてうた八十首ぞいできたりつれど、いりたるがぎりをだにつくしかゝず、大和守輔尹のあそん、うづゑを、ときは山おひつらなれるたまつばききみがさかゆくつゑにとぞきる

大饗したる所、殿の御前、

きみがゝりとやりつるつかひきにけらしのべのきゞすはとりやしつらん

春日の使たつところ、いづみ、

かすがのにとしもへぬべしかみのますみかさの山にきたりとおもへば

やまざとにみづあるいへに、まらうどきたる、祭主輔親、

このやどにわれをとめなんいけみづのふかきこゝろにすみわたるべく

五月節、すけたゞ、

くらぶべきこまもあやめのくさもみなみづのみまきにひけるなりけり

九月九日、とのゝおまへ、〇道長

かくのみもきくをぞ人はしのびけるまがきにこめてちよをおもへば

四條大納言〇公任べちに二首たてまつり給へり、さくらのはなみる女車あるところ、

はるのはなあきのもみぢもいろ〳〵にさくらのみこそひとゝきもみれ

官掌召使等饗、上野、武藏、使部、因幡、信乃、諸大夫座、相摸尊者前駈雜色、上總車副、下總牛飼、遠江撿非違使、河內

天承元十二、中右記云、自院被尋仰諸國所課給、國々皆從院被催、

〔左經記〕寛仁二年正月廿一日乙卯、按察大納言、四條大納言、於大殿○藤原道長攝政殿○道長子頼通大饗料御屏風詩并歌等撰定、令侍從中納言○藤原行成書給、詩作者按察、四條、兩亞相、〔齊信、公任、〕式部大輔廣業、內藏權頭爲政、大內記義忠、歌作者大殿、四條大納言、賴親、輔尹、式部、女等也、

○按ズルニ、寛仁二年正月、攝政家大饗ハ、又下ニ引ケル榮花物語ニ見エタリ、

〔土記〕承保三年正月十三日、早旦參右大殿、○源師房令傳申殿○藤原師實、時爲關白左大臣、御消息云、大饗日○中略又大臣前机、前々所令調設兩人之御料也、而內大臣○藤原信長重服之間、兼存不可被座之由、仍除其料、可設一人御料歟、將又不論障之有無、只如例可令設歟如何者、御返答云、於蘇甘栗使祿者、任宇治殿御時之例、可給女裝束歟、又至于大臣前机事者、可令尋前例給也、　十九日、今日殿大饗也、右大殿、今日尊者也、今度尊者御机、居一前於上達部座中央、是內府被遭喪之間、不設彼御料也、

〔日本紀略六圓融〕天祿元年正月十日壬子、太政大臣○攝政藤原實賴大饗、右大臣○在衡以下參向、

天延元年正月十五日、內大臣家○關白藤原兼通大饗、

〔日本紀略九一條〕永延元年正月十九日壬午、攝政家○藤原兼家大饗、大臣以下行向、

〔榮花物語三樣々の悅〕今年をば正曆元年といふ、正月五日、內○一條の御元服せさせ給、さし續き、世の中急ぎたちたるに、攝政殿○藤原兼家二條院にて大饗せさせ給、作り立させ給へる有さま、えもいはずおもしろうめでたければ、はえ○はえ、一本作ほい、あり、嬉しげに思し興させ給、一條の右のおとゞ○藤原爲光尊者には參り給へり、目もはるかにおもしろき院の有さまにぞ、えもいはぬ、ひんがしの對には、內のおほい殿○藤原道隆すませ給へば、やがて姫君達など物御覽ずれば、こと殿原も御覽ずべう申させ給へど、聞し召いれず、宮々いとうつくしきこ男どもにておはします、

引出物祿

おとしてけり、はいせんする人、みこのおまへのをとりて、まどひてそむじやのおまへにすうるを、いかゞおぼしけむ、おまへにともしたる御とのあぶらを、やをらかいけたせ給ける、○下略

〔西宮記正月上〕臣家大饗○中略給蘇甘栗事○中略

同○天慶七年正月十日、同記○吏部王記云々、左大臣○仲平右大臣○實頼皆不會、仍大納言師輔卿行令召史生、仰錄事勸盃右大弁云々、

九記云、承平四年正月四日、非參議大弁祿、同參議親王祿、同納言又有引出物、尊者加物櫻色綾細長、引出物馬一匹、鷹一聯、犬一牙等、猶設衾也、

天曆七年正月五日、非參議大弁祿、依有疑尋問舊大弁之後家、而昨饗給袴也、須從之、然而侍從客尋申此事於尊者、答云、昨例不慥、所設者是衾也、而依右金吾之固執、忽以不來之參議等祿所改用也、是非己本意者、猶以衾被之、

〔今昔物語二十四〕小野宮大饗九條大臣得打衣語第三

今昔、小野宮ノ大臣ノ大饗行ヒ給ヒケルニ、九條大臣ハ、尊者ニテナム參給ヘリケル、其御送物ニ得給タリケル、女ノ裝束ニ被副タリケル、紅ノ打タル細長ヲ、心无カリケル前駈ノ取テ出ケルニ、取ハヅ○ハヅ二字、以宇治拾遺補シテ、遣水ニ落シ入タリケレバ、卽チ迷テ取上テ打振ヒケレバ、水ハ走テ乾キニケリ、而ルニ其濕タリケル方ノ袖ノ露、水ニ濕タリトモ不見シテ、不濕方ノ袖ニ見競ケルニ、唯同樣ニナム打目有ケル、此ヲ見ル人、打物ヲゾ譽メ感ジケル、昔ハ打タル物モ、此樣ニゾ有ケル、今ノ世ニハ、極テ難有キ事也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

用途

〔大饗御裝束間事〕一諸司諸國課役付人々

治安小右記云、火爐中取二脚床子等、修理職造進、又門腋白土、同職塗之、○中略

康和二七十七、爲隆記云、棚、大臺、床子等、木工寮造進、殿上人饗左兵衛督弁備之、自餘諸國勤之、史生

（盃於外記史座、）二獻、（非參議三位、若殿上四位執之、）撿非違使著庭中、三獻、（殿上四位執之、）居飯、居汁物、（汁膾）鳥足、箸下、（撿非違使退去）

四獻、（以下公卿取之、雖別足、）莖立　生鮑　五獻　獼猴桃　枝柿　仰錄事、先弁座料、殿上四位五位各一人、

敷圓座、次政官料、諸大夫二人、無史生座、錄事、　勸盃非參議大弁、敷穩座圓座、公卿以下移、（以後事、如常大饗、）

或曰、非攝關之家設饗時、大納言以下猶設茵云々、（此說可尋之、）

署日着膳次第　三獻（汁膾燒物小鳥、或水飯等交居、）　四獻（宇留賀煎）　五獻（蛸以下、或六獻後、鮭煎物鷄頭草、）　穩座（勸削氷云々）

〔二中歷八供膳〕大饗　尊者　唐菓（餲餬粘臍）（桂心饆饠）　木菓（梨棗柑獼猴桃）　干物（蒸鮑干鳥）（燒鮹楚割）　生物（雉鱒）（鯉鯛）

貝物（蚫螺白貝甲蠃ツヒ）　窪坏物八坏（腸裴細螺）（海月蠏蜷）（保夜石花）（蝛蠣肝搔）　四種　箸七

納言以下　唐菓（餲餬饆饠）（桂心）　木菓（梨棗柑）　干物（蒸鮑楚割）（干鳥）　生物（雉鯛）（鯉）　貝物（蚫螺甲蠃）　已

上各三坏　窪坏物六坏（腸裴蝛蠣）（海月細螺）（保夜蟹蜷）　四種（鹽酢醬）

辨少納言　唐菓（餲餬桂心）　木菓（梨棗）　干物（蒸鮑楚割）（干鳥）　生物（雉鯛）（鯉）　貝物（蚫螺甲蠃）　已上各三坏　窪

坏物六坏（如前）　四種（鹽酢）

外記史　唐菓（餲餬桂心）　木菓（梨柑）　干物（干鳥押鮎）　生物（雉鯉）　以上各二坏　貝物一坏（蚫）　四種（鹽酢）

史生　中能物六坏（餅大柑）（伏菟小柑）（餉串柿）　干物（押鮎干鯛鮭）　生物（雉鹽鮎）（鯉）　貝物（蚫）　窪坏二坏（腸裴海月）

四種（鹽酢）　飯二斗　汁　餛飩　汁物（汁等）（鱒膾雉羹）　追物（莖立裹燒）　立作物二折敷（一枚、蘇、甘栗、零餘子燒、一枚鯉膾、指）

（雞、辛齋、）

穩座　木菓（梨棗）　干物（干鳥蒸鮑）　生物（雉蒸鯛）　窪物（海月保夜）　酢鹽箸（已上居一枚）　薯芋粥（加零餘子燒）

〔大鏡二太政大臣基經〕太政大臣基經のおとゞは、長良中納言の三郎におはす、（○中略）小松の御門（○光孝）をまたしく見奉らせ給て、ことにふれてきやうさくにおはしますを、あはれ君かなと見たてまつらせ給けるに、よしふさのおとゞの大饗にや、むかしはみこたち、かならずつかせ給事にてわたらせ給へるに、雉足はかならずもる物にてありけるを、いかゞしけん、そんじやの御前にとり

供居

可遣請客使歟者、人々被申此旨云々、依召請客使右近權少將宗能朝臣、經寢殿西孫廂居御座後簀子敷、主人(○忠實)顧仰云、上達部アマタモミエ給ヘル由可申、尊者承微稱還出、(後日以此旨申左府、仰云、件御詞先例不定也、或者上達部皆具來ト云々、)或上達部アマタナム可來給ト云、或上達部アマタ來ト云々、安麻多來爲上說、但依客尊云、但大略事也、分明不可聞事也、其次被仰、九條殿御記、太政大臣請客使可遣五位、樣々所見也、雖然近大殿師通太政大臣饗、爲予尊者以道良(四位)被爲請客使、其時無沙汰歟、不審事也者、宗能朝臣承仰雖退出、暫經渡細殿邊、尙待甘栗使也、是父中納言敕命也、中始藏人兵衛尉爲忠參仕、(會色袍、紅梓下襲、萌木袴、黑半臂、細劔、)小舍人二人、著衣冠相具、(則季、常行、)

〔台記〕仁平二年正月廿六日壬戌、今日於東三條再行大饗、(○中略)及巳二剋、禪閤(○藤原忠實)出御寢殿南廂東第二間、(簾中)此間余(○忠實三子賴長、即今日大饗主人也、)坐親王座上頭、(北面)右兵衛督、(忠雅)新宰相中將、(師長)來著弁少納言座、(南上)二位中將(兼長)在被物所、仰親隆朝臣令掌客使、即散位師國朝臣(前少納言從四位上)出自西方、自南簀子東進、居南階西間、(北面)余仰曰、右大殿門(仁)詣天、上達部皆毛乃志給(比多)由令申(與)、師國朝臣微音稱唯、左廻退歸、於西門外騎馬、(馬鞍余給云々、儀鞍有泥障、具舍人居飼、置移歟、置儀鞍歟、舊記無所見、而尋近例皆儀鞍云々、今從之、)驅向右大臣六條烏丸第、(使至彼家、立中門、人經命、須一大納言來後達云々、而□相依病不可來之由、先日有其命、仍不待戸部來臨達之、)須臾民部卿(宗輔大納言)來、經外記史座南簀子、居弁少納言座南端、于時掌客使未來、遣使催促、巳三剋許、掌客使左近中將成雅朝臣(正四位下)來、即召之、成雅朝臣進候初所、(師國朝臣所居所也、)余仰曰、內大殿門(仁)詣天、上達部皆毛乃志給(比多)由令申(與)、成雅朝臣微音稱唯、左廻退、(師國經上官座南簀子、成雅降自透渡殿西階、舊記不詳其路、兩人所爲未知何是、定有所存歟、抑成雅朝臣上﨟也、須向右府、而右大臣兼右大將、成雅朝臣上﨟也、須向右府、爲左中將、尋者同官、有其憚、仍向右府也、先例、上﨟掌客使向下﨟大臣、先既有例、)勘於西門外騎馬、(馬鞍同納)馳向內大臣三條西洞院第、(使至彼家、立中門、使範實(今日饗所)傳命、報曰、只今(有其障)不具之氣也、公能參召、成雅朝臣昇堂、爲令休息也、)此間權大納言(宗能)以下來會、

〔北山抄〕(三拾遺雜抄)大饗事

大饗裏書　新任饗(主人暫著親王座)雖非太政大臣、猶用樣器、一獻、(主人執之經座後)敷主人圓座、立主人机、(地下四位下、勤)

請客使

取置西棚上層中央、(南北相並、先是經(經一本作饌)在下層中央、)地下五位(被數之人)撤中使主人座、

〔拾芥抄　中末宮城〕諸院　甘栗御園

〔類譯名義集　五增數譬喩〕五味(聖行品云、譬如從牛出乳、從乳出酪、從酪出生酥、從生酥出熟酥、從熟酥出醍醐上、)

〔安齋隨筆　前編八〕一蘇　大臣ノ大饗ノ時、蘇甘栗使ヲ立ラルヽ事、江家次第、大饗雜事等ニ見エタリ、蘇ハ借音ヲ書タル也、實ハ酥字ニテ、酥酪也、延喜式卷二十三民部式下曰、諸國貢蘇番次、(中略)凡諸國貢蘇、各依番次、當年十一月以前進了、輪轉隨次、終而復始、其取得乳者、肥牛日大八合、痩牛減半、作蘇之法、乳大一斗煎、得蘇大一升、但飼秣者、頭別日四把、　貞丈云、牛乳ヲ煉タルヲ酥酪ト云、更ニ酥酪ヲ精煉シタルヲ醍醐ト云、粘テ如脂、白色如雪、其味甘美也、今世俗ニ蠻語ヲ傳ヘテ、ボウトロト云是也、

一甘栗　蘇甘栗使甘栗事ヲ、村井敬義ヲ以テ御厨子所ノ預リ高橋若狹守紀宗直ニ尋ケレバ、丹波國ノ栗ヲ云ト答タリキ、

〔安齋隨筆　後編十一〕鳥居障子　蘇甘栗　請問(中略)大臣大饗の時、蘇甘栗ハ何物歟、(中略)蘇　紫蘇子を云、壺ニ入ル、　甘栗　平栗とて、打ひらめたる搗栗也、籠入、　右京師聞書の內ニ御座候間、入御覽候、　七月七日　嘉樹

〔九曆〕天曆三年正月十一日、午終請客使侍從延光朝臣來、卽參向、延光時々前驅、拜禮如常、

〔九曆〕天德元年正月五日、左大臣家(○藤原實賴)大饗、忠時朝臣爲請客使來、卽參詣、

〔長秋記〕天永四年正月十六日、太政大臣家(○藤原忠實)大饗、(○中略)未剋右大將民部卿被參之、人々被著辨座、爲南上主人親王御座、人々云、蘇甘栗使參仕、候近邊之由有其聞、雖然不知在所、依頻所被尋也者、殿下(○忠實)召藤中納言被仰云、待蘇甘栗使來之間、時剋漸押遷、爲之如何、只可遣請客使歟、中納言答申云、前々有尊者不來前有此事、而間々尊者後有來例、仍主人或遇或不遇者、待遲來、不可失威儀者、

入折櫃一合、（合二合也）置土高坏、（折櫃高坏、并召内藏）小舍人一人、（二人歟）仕人二人相從之、藏人束帶、（著麴塵袍）向彼家、入立便所、（中門召之）家司大夫二人出對、傳取蘇等還入、主人召勅使、（敷座召之）勸酒給祿、（給祿之時、作把笏有官寄肩候之）結了、即下庭再拜罷出、（更不還上、即步出之）歸參奏復命、（祿落置便所）但小舍人祿疋絹、家司出來給之、小舍人插頸而已、

蘇甘栗勅使　蘇甘栗等、道間令持仕人、至于其時（天）、令持小舍人、須授近習家司、若事次隨召（天）進入、欲著座時、依恐大臣之威、暫留長押之邊、猶磬一度（寸キ天、）二度（ト云）度著座、須臾（安天）リ給祿之後、再拜退出、

〔土記〕承保三年正月十三日、早旦參右大殿、（○源師房）令傳申殿御消息云、大饗日、蘇甘栗使祿、可賜女裝束歟、又可給細長袴等歟、宇治殿（○藤原賴通）御初大饗給女裝束云々、

〔台記〕仁平二年正月廿六日壬戌、今日於東三條再行大饗、（○中略）巳三剋許、（○中略）此間甘栗使未來、遣使催促、師國朝臣歸來、居初所、傳右府（○源雅定）報曰、月來有所勞、不能參向、巳四剋許、藏人（二藤）皇后權少進藤憲賴（麴塵袍、紅梅浮文下襲、萌木浮文表袴、丸鞆帶）來立西中門、家司尾張守親隆朝臣（地下從殿上人）進余座後簀子、申甘栗使參由、余仰可令敷座之由、此間民部卿以下、右弁少納言座之卿等、退入息所被物所等、地下五位三人、敷勅使主人座方弘廂、（○中略）經簀子著圓座、（北面）地下五位二人、下自西中門内方西向妻戸、取蘇甘栗、（小舍人授之、蘇四壺、大二小二、納一折櫃居土高坏、仲行取之、甘栗十六籠、中八小八、納折櫃居土高坏、賴憲取之、）昇自同戸、進自上官廊南簀子、置中使座前西頭、（先蘇、次甘栗、東西廂並置之、大夫等□□簀子置之、）次仰親隆朝臣召中使、親隆朝臣經上官廊南簀子、下自中門内妻戸、（持參甘栗之人下戸也）召之、中使昇自同妻戸、經上官廊南簀子、跪候中使座西簀子、余示可昇之由、中使慭昇殿、候疊上西端、（南面居）余奏曰、畏（天）給（リ）奴、即二位中將兼長卿取祿、（白褂一重、濃袴一腰、）出自被物所南戸、經中使座東、跪座前授之、（先例多執政大臣令人授之、但康和三年雖執政自取其祿、案之、若依爲注大臣明年之大饗歟、仍今度令人授之、）拔笏左廻歸入被物所、中使纏頭、（搢出纏）端笏降自西面階、於砌外巽向再拜、經泉北、出自中門、著沓、先是於西中門外侍所司良峯康忠（無官、衣冠）給御藏十餘人祿、（二人各六丈絹一疋、仕人無祿、）中使降階之間、余起座、（爲不受拜也）經南簀子、復親王座、諸卿復弁少納言座、地下五位二人（初持參之人）取蘇甘栗、經寢殿南簀子、給立作所、彼所役送衞府未參、仍下家司進立砌下、自欄上傳

尋常犬飼裝束、ハゞキ貫如例、付打飼袋、左手引白犬、(表染毛口廣)右手持狩杖、件御鷹飼帽子、緂緋總、飼袋緤鈴、犬飼帽子等、累代率下毛野久行家、而自前年大饗時、召殿下被納之物等云々、敦利出中門砌、居鷹、總大緒三懸(天)垂總緒融出自指間、而下官(○源師時)制止自拳下令出之、自指間出、是犬飼說也、次右手取鳥懸肩來幔門下、(他所出幔門下)居鷹、而此殿中門內、自上達部座頭見、而下毛野公久空手入中門、人人稱似千秋萬歲之由云々、其後於中門北居之、左大臣殿所被仰也、到幔門際少步出、見御所之方而引入而立、令飛鷹引居頻出、(件見御所方事、近來渡者敢不知、往古者如此云々、定尊舊跡、尤有興事也、)經橋木下、斜向辰巳方步出、更折向丑寅方列立、候幄西南立、故實者云、自東渡西時直渡、自西渡東時如此、令御鷹向御所也、犬飼引犬去八九尺許相從、鷹飼立留而跪居、下總權守影助出自立作所取鳥、御鷹飼二三步許進、乍懸肩倚肩(天)授之影助、影助取之歸入、鷹飼三步許退出、前々歸南立云々、但以退爲上說歟、自立作所取胡床三脚立幄西間、去幄一丈許立一脚、御鷹飼居、前々件床北向立、而鷹飼居時自引向戌亥方、而以居爲習禮、而先向戌亥方尤違失也、其前居一脚、居肴物、一脚西向立(天)獻盃物、取盃出居、瓶子取相從、指鷹飼、鷹飼受如飮而下、手後ヘ指遣、犬飼夾杖於左腋而受之、飮而自右肩上投棄、此間、犬飼居、雖自然犬居事、退時給腰指、有興事也、鷹飼立左廻歸出、或右廻云々、雖然依左府仰左廻、人々以左廻爲吉歟、犬飼渡相從四五步許、而令飛鷹入東幔門、又令飛鷹、鷹飼渡間事、人々有感氣、(件敦利日來以下官左大臣殿令申事由、依少々被仰古實、)

〔續古事談 五 諸道〕大饗ノ鷹飼ハ、中門ヲトヲリテ幔門ノ本ニテタカハスウルナリ、ソレニ東三條ハ中門ヨリ幔門ノモトマデハルカニトヲシ、下毛野公久トイフタカヾヒ、西ノ中門ヨリタカモスヘデアユミ入タリケルヲ、上達部ノ座ヨリアラハニミエケルニ、錦ノボウシキタルモノ、手ヲムナシクシテアユミキケレバ、人々千秋萬歲ノイルハ何事ゾトワラヒケリ、ソノヽチ中門ノトニテ、タカヲスヘテイル也、

〔侍中群要 八〕蘇甘栗使事　大臣家大饗、內藏人奉仰、召仰出納、令調蘇甘栗等、(在所)蘇四壺、栗十六籠、谷

嘉應三正、同記、〇經房卿記 云、今日攝政太政大臣殿〇藤原基房 朱器大饗也、仍午剋參閑院亭、次一獻 外座資泰朝臣、持參盃主人座、令取之給、左少將有房朝臣取瓶子、奥座從三位重家卿、瓶子民部少輔家雅取之、次於地下五位取之、主人令起座之間弁少納言降長押下平伏、外記史在外記者、同昇長押平伏、 主人下座令取盃給之時無此儀歟、寛治天永例不見之、然而隨上﨟之所爲畢、 後日相尋右丞俊經之處、答云、寛治經信記、致家禮公卿起座云々、以之案之、公卿起座之時、弁少納言爭不立退哉、今度家禮人々不起失歟、余云、主人乍座令取盃給之時、弁少納言起座平伏之由有所見者、不及左右、以寛治記多見難存知歟、又答云、寛治僻事之由有勿論、不然者猶可起座、是又依事理也、但此事傾人多云々、

〔大饗雜事〕殿上人役 一獻瓶子、五位 二獻勸盃、四位 三獻瓶子、五位 四獻瓶子、五位 錄事二人、四位五位 五獻瓶子、五位 祿取料、四位五位

地下四位役 一獻盃持參料、主人陪膳料、勸盃非參木大辨之時瓶子料、非參議大辨以下祿取料、諸大夫、十餘人歟 次五位、式部民部四五人許歟 諸司官人、衛府諸司歟二十人許歟

〔長秋記〕天永四年〇永久元年 正月十六日、太政大臣家〇藤原忠實 大饗、〇中略 次三獻、〇中略 次居飯、次御鷹飼渡、左近府生下毛野敦利、件敦利、去比被補御鷹飼、押取府生下毛野行忠鷹飼而被補云々、 入自北面小御門、角振東門也 融車宿幔到中門北砌飛口深結流文狩衣、紫裏白兩面袴、紅衣、同色單衣、熊行騰、壺胚巾、淺沓、烏帽子ウヤヲカケリ、其上著錦帽子、又ウヤヲカク、結緒、カタカギナリ 烏頸劒、件劒顯季卿劒也、而上皇賜裝束、次借召預給云々、銀作鷹頸切蝶鋼劒、無目貫、左手入革囊、付餌袋、件餌袋具、斑家尻鞘、入劔、蝶鋼柴一枝、指雉一羽、鈴付尾無鈴、 一筋鷹飼男居鷹相從、卷染水干、青革袴行騰、付餌袋、立帽子入韝、居鷹、付件雉雉也、付鳥柴如例、又無鈴付尾、 總大緒結緋大緒懸頸、右手持雉掛肩、欸冬衣、件鷹、殿御随身下毛野敦信鷹也、而殿下召給也、式部大輔成輔令裝束云々、前々指緋大緒、至此處欲居鷹飼之時、指替懸頸云々、而自本指替參、已違例也、後日以件旨示敦利、答云、雖存其旨、稠人間、慮外ハ荒事モ申候ヒテ、於閑居所指替、犬飼一人、烏帽子上著帽子、

ひ人し給べかりけるに、中のみかどの內のおとゞ〈○宗能〉少將とておはするは、上らうなりけれど、一のまひは、中院〈○雅定〉ぞおほせられむずらんとおぼしけるに、ちそく院の大殿〈○忠實〉の關白におはするに、みかどもはゞかりて、むねよしの一のまひし給へりければ、久我のおとゞ〈○雅實〉きゝつけ給て、この少將をばよびとゞめて、はらだちてこもり給ければ、みかどもいださせ給て、心ゆるさむとて、かゝいを給はせたりければ、𛀙かあらば、いでありかざらんもびんなしとて、よろこび申などせられけるに、關白殿たいめんし給て、ことのついでなれば申ぞ、大饗にはおとゞ尊者に申さむずるなり、そのよしきこえ𛀙るべきなりなどありて、たのみておはしけるほどに、その日になりて、みせにつかはしたりければ、御ものいみにて、かどさしておはしければ、俊明の大納言をぞ尊者にはよび給ける、四條の宮〈○寛子〉はむげにくだりたるよかなとて、なかせ給けるとかや、りんじのまつりの一のまひ、少將の𛀙給はぬ、やすからぬ心にて、かくたがへ給なりけり、

〔台記〕久安七年正月二十一日癸巳、今日太政大臣〈○藤原實行〉大饗也、內大臣〈○藤原實能〉來問尊者儀法、次參禪閤〈○藤原忠實〉御前、被尋申之、申時□□使左少將實長朝臣〈太政大臣孫〉來、修理權大夫雅國朝臣〈東帶〉來、出居依前傳被命、報有所勞不能參向之由、傳聞、右〈○藤原雅定〉內〈○藤原實能〉兩府爲尊者、太相勸盃、非參議大辨中辨少納言、避座平伏于長押端云々、今案、是大臣儀也、至于太政大臣者、可平伏于長押下歟、豈無差別乎、

〔平治物語〕下經宗惟方被處遠流事同被召返事

其後新大納言經宗モ、阿波國ヨリ被召返テ右大臣ニナル、人、アハノ大臣トゾ申ケル、又大宮左大臣伊通公、世ニ住バ、興アル事ヲ聞物哉、昔コソ黍ノ大臣有ケンナレ、今粟ノ大臣出來タリ、何カ又稗ノ大臣出來ズランヲント笑ハレケリ、大饗行ハルベカリケルニ、尊者ニ此左大臣請ジ奉リケレバ、使者聞ヲモ不憚、粟ノ大臣上テ、旅籠振舞セラルヽナ、伊通ハ得參ラジトゾ被申ケル、

〔吉部秘訓抄〕一一大臣大饗時弁少納言以下作法事

〔宇治拾遺物語七〕西宮殿（○源高明）の大饗に、小野宮殿（○藤原實頼）を尊者におはせよとありければ、年老こしいたくて、庭の拜えすまじければ、えまうづまじきを、雨ふらば庭の拜もあるまじければまいりなん、ふらずばえなんまゐるまじきと、御返事のありければ、雨ふるべきよし、いみじくいのり給けり、そのしるしにや有けん、その日になりてわざとはなくて、空くもりわたりて、雨そゝぎければ、小野殿はわきよりのぼりておはしけり、中嶋に大に木だかき松一本たてりけり、その松を見とみる人、藤のかゝりたらましかばとのみ見つゝいひければ、この大饗の日はむ月の事なれども、藤のはないみじくおかしくつくりて、松の梢よりひまなうかけられたるが、時ならぬものは、すさまじきに、これは空のくもりて、雨のそぼふるに、いみじくめでたうおかしうみゆ、池のおもてに影のうつりて風の吹ば、水のうへもひとつになびきたる、まことに藤波といふことは、これをいふにやあらんとぞみえける、富小路のおとゞ（○藤原顯忠）の大饗に、御家のあやしくて、ところどころのしつらひも、わりなくかまへてありければ、人々もみぐるしき大饗かなと思ひたりけるに、日くれて事やう／＼はてがたになるに、引出物のときになりて、東の廊のまへに曳たる幕のうちに引出物の馬を引立てありけるが、幕のうちながらいなゝきたりける聲、そらをひゞかしけるを、人々いみじき馬のこゑかなときゝけるほどに、まく柱を蹴折て、くちとりをひきさげていでくるを見れば、黒くり毛なる馬のたけ八きあまりばかりなる、ひらにみゆるまで、身ふとくこえたるが、いこみかみなれば、額のもち月のやうにてしろく見えければ、見てほめのゝしりけるこゑ、かしがましきまでなんきこえける、むまのふるまひおもだち、尾ざし、あしつきなどのこゝはと見ゆるところなく、つき／＼しかりければ、家のしつらひのみぐるしかりつるも、きえてめでたうなんありける、さて世のすゑまでもかたりつたふるなりけり、（○又見二古事談一）

〔續世繼七の繪〕ほりかはのみかどの御とき、この少將とて、入道右のおとゞ（○雅定）いはしみづのま

位中弁佐忠上、

康保二年、史清明、官掌未進之間、仰召史生、仍罰大弁以下、又撿非違使隨身懸胡簶者入來、依無先例同罰、〇中略

九條〇藤原師輔　天慶八年、尊者机四脚、主人座西面、座竺東方立机、南北爲妻、仰録事後、一世源氏机令立南簀子敷、即令著源氏勸盃座、疊自始敷也、承平二年、依无孫廂、設一世源氏座於南縁東第三(三、一本作二)間云々、

天暦七年、左大臣家〇實賴饗、頃之遣史生録事、下官起座勸盃、至于尊者、事訖可勸、然而依家禮也、

初任饗設庇、著座後立机、尊者横座、主人先著南座勸盃、後著納言座上、弁少納言座南上、垣下親王座對公卿、史生饗於便所給之、給祿時召庭前、天暦七年、史生饗設政所、使部饗設庭云々、不羞餛飩、無立作幄、弁史座録事如常、六位外記史給疋絹、自餘如例、其太政大臣饗猶用様器、故實、新任饗、隨時節寒暖、設湯漬水飯等、不必仰録事云々、而承平六年、著飯仰録事、其後如之、

〔年中行事秘抄正月〕大饗日主人不出客亭例見九條殿御記幷外記記

李部王記云、承平六年正月四日、詣左大臣家〇藤原忠平饗所、主公稱病不出、語曰、近日雖更服、不能東帶、仍令外記勘先例、舊記口損、先例頗不委曲、元慶七年記云、主人大臣稱病不出客亭、右大臣早到行事、今日准彼例、　同記云、天慶二年正月四日、詣太政大臣〇藤原忠平饗所、主公稱病不出客亭、同四日主人大相國不出之、元日遣巡察等於三位已上家、糺彈他司人集會其間事、今按、撿非違使向大饗所之始歟、

〔大鏡二太政大臣基經〕太政大臣基經のおとゞは、長良中納言の三郎におはす、〇中略御いへは堀川院と閑院とにすませ給ひしを、ほり川院をばさるべき事のおり、はれ〳〵しきれうにせさせ給ひ、〇中略堀川院は地形のいといみじきなり、大饗のをり、殿ばらの御車のたちやうなどよ、尊者の御車は川よりひんがしにたて、うしはみはしのひらきばしらにひきつなぎ、ことかんだちめのくるまをば川より西にたてたるが、めでたきをば、尊者の御車のべちにことに見ゆる事は、こと所はえ侍らぬものをやと見給ふるに、〇下略

云々、三獻右大將實賴、左衛門督師輔行觴、(三獻間、諸卿例不勸、疑因無親王可勸者、執見息歟、)云々、了尊者召錄事仰云、大夫達爾御酒給へ、唯退、行弁少納言座、又仰云、佐官等仁御酒給へ、唯、行外記史座云々、了尊者左大臣仲平云、主公有命云、有所勞不謁客、今日饗事須執行之、今右大弁(非參議)在弁座、主人不出無勸盃者、僕於主公非如他客、欲勸右大弁如何、余答云、先例主人有此事、不見尊者行之、然而因委託行之、必爲後代之例、可爲美談者云々、即起勸坏於右大弁清平朝臣也、余執尊者祿也、

同(〇天慶)六年正月十日、同記(〇李部王記)云、詣大相府(〇藤原忠平)饗所、皆用蔬菜、無魚鳥、盛用樣器云々、第一獻余并右大將實賴勸坏、予勸北座、先行經案內、大納言師輔卿云、有不度大弁座上之說、歷座前宜歟、即從東廊進云々、三獻了、右少弁在躬申大將、令召史生、又大將召仰錄事等云々、

〔北山抄(三拾遺雜抄)〕大饗事

(私記)承平二年、主(〇左大臣藤原忠平)客(〇右大臣藤原定方)相讓共進階所、殿下先昇、予依仰立列、著座畢、起座行事、

同六年、有所勞(〇忠平)給、無御出、元慶八年例也、不可有拜禮之由、雖有御消息、依非兩儀猶有其禮、錄事事尊者方(〇定方)行之、

同八年、(〇天慶元年)左大臣(〇藤原仲平)稱障不參、右大臣(〇藤原恒佐)經座末著座、

天慶四年、(〇藤原忠平家饗)右大將(〇藤原實賴)左衛門督(〇藤原師輔)勸盃、依無親王等也、

同六年、無御出、(〇忠平)大臣(〇仲平)不參、予(〇實賴、時大納言也、)爲第一、親王及予勸盃、(〇中略)

天德三年、參議維時卿(〇大江)三獻後來直著座、右少弁文時不預謝座、不申事由直著、仍行罰、第二獻右大將(〇藤原師尹)左衛門督(〇師尹弟師氏)勸之、依舍兄也、

同年(〇同年一本作四年)右大臣家(〇藤原師輔)饗、雪消庭濕、主人消息、進自簀子下、從南階可直昇者、諸卿自南庭西度、丞相立橋隱下、置半蔀下二枚、其上延疊二枚、

應和二年、少納言兼家敍四位、就左中弁文範上、仍欲行罰、而依諸卿定不行之、又四位少弁善理在五

同八年正月四日、吏部王記云、詣太政大臣家(○藤原忠平)大饗所云々、拜了、主公先昇、右大臣(○藤原實賴)歴南欄從座北就、及召史生右大臣許之、太政大臣位高班旁、須准納言爲尊者例、主公許曰、從去年有此例、所未詳也、

天慶八年正月五日、同記云、詣右相公(○藤原實賴)饗所、寢殿西放出設客座、尊者座以赤木机四前、參議已上以黑柿机三前、(對座)弁少納言濱椿二前、西對東廂設外記史座、机用榻足云々、了羞侲餽、未下箸、權右少弁復申、主公令召史生云々、了御鷹飼渡到立作所、其犬飼留中門、刑部卿源清遠朝臣就一世座、以支佐木机羞饌、主公勸坏云々、不擧樂、因大相公(○藤原忠平)有病也、給史生祿、弁少納言纏頭、授公卿祿從上始之、又客首大納言帥輔卿祿、令諸大夫等執、似非例、式部卿親王、與大臣唱歸德胡德曲云々、

天暦二年正月五日、右大臣家(○藤原師輔)饗、用机樣器、(公卿赤木、弁少納言垣下用黑柿、)

承平四年正月四日、九記、大閤(○藤原忠平)仰云、得大臣客者、拜禮間、立南階東邊、若得納言日者立西邊、又可召史生之由申客大臣、

同八年正月四日、同記云、殿(○藤原忠平)大饗云々、先例、東有放出之客亭者、主人立南階東腋、是以大臣爲尊者之日儀也、而今日主人立給西腋、是依爲太政大臣歟云々、又右大臣(○藤原恒佐)座在北、仍經簀子南東就座、若隨便宜歟、今日右大臣爲尊者云々、

天暦五年正月十五日、小一條記云、今日右府(○藤原師輔)大饗也、召致仕宰相預座、三獻後、更謝座著座、

同日吏部記云々、屛風用題書者、召史生、雅樂入後、致仕參議伴保平卿來謝座、就治部卿衆明卿座上、蓋主公所請也、治部卿稱座次有疑、移就南座、案式、致仕者就本位有職上、治部卿疑旨無據、主公云、致仕大納言冬緒卿、應昭宣公饗召、至日、策杖至中門、端笏進謝座云々、主人勸盃南北納言座云々、以便勸盃一世源氏盛明朝臣、今日就南欄座故也、伶人奏曲了給祿云々、

天慶四年正月四日、吏部記云、詣大相府(○藤原忠平)饗所、尊者左大臣(○藤原仲平)乘輦至、主公有障不出客亭

少納言、（緌、劔）已上淺履　鷹飼（錦帽子、紫擣狩衣、白布袴、藁履巾、淺履、行縢、餌袋、紅衵、烏頭太刀、左手居鷹、右手執付鳥枝）犬飼（帽子、緌）
（布狩衣、緋革袴貫、手引犬、右手取白木杖）左舞人（官人束帶、帶劔、插笏、插竹插頭、番長以下布袴、紅襖、右不開紐）主人（不著火色）尊者以下不著
白重柳下襲、五六巡後、致家禮之尊者、勸盃於主人之例間有之、

〔年中行事秘抄（正月）〕改大臣爲大師大傅大保事（○中略）新任大臣明年行之、既爲近代例、

習禮

〔中右記〕康和四年正月十五日、今日内大臣家（○源雅實）大饗習禮云々、
嘉承二年正月十七日、早旦參東三條（○藤原忠實）終日祗候、大饗次第、役人事等、與右大弁相定、入夜退歸、
十八日、天陰、終日雨下、大饗習禮、今日可有之由議定先了、而依甚雨不定之由、從殿下被仰、仍遲怠、依雨不止、習禮止了、仍不參也、

〔台記〕仁平二年正月廿四日庚申、今日少納言弁已下來、習明後日大饗禮、未剋許中納言公能、忠基、二位中將兼長、參議教長、資信（左大弁也、上□直衣）來、予（冠直衣、青鈍奴袴）出居寢殿、諸卿同□簾閣御南廂東二間簾中、余在南廂東三間（簾外）卿等在母屋、于時御簾懸□□屛風未立、座未敷、筵悉敷之、及申剋、少納言朝隆朝臣、右少辨資長（他少納言不來□□）□□列立庭中、（不拜）訖少納言弁昇自透渡殿西階、居寢殿西廂筵上、外記史昇西北廊西面小階、居同廊筵上、右少弁資長、召史生、其儀如大饗日、但無尊者、史生列立庭中再拜、□橋居中島、舞人樂人（已上衣冠）乘船（牛飾）奏樂、（春庭樂）參進（次所舍人持舟）如大饗儀、近方懸一鼓、左奏万歳樂、舞人三人、（一人今日不參）右奏地久、舞人二人、（二人今日不參）次奏長慶子、退出、（今日家□不參）次少納言弁外記史降立、一々揖退入、諸卿退出、其後召雜役諸大夫（衣冠）敎諭作法、弁出入間習禮事、雖見舊記、未詳其儀、且廻愚案、且與諸卿議定所行也、

主客

〔西宮記（正月上）〕臣家大饗（○中略）給蘇甘栗事（○中略）
九記云、天慶四年正月五日、左大臣殿（○藤原仲平）大饗、以右大將（○藤原實賴）爲尊者、垣下親王遲參、仍主人大臣三獻之中、二度執盃云々、（○中略）

陪膳殿上五位云々、或等、或用殿上五位、或大中納言以下、手長役送用地下五位、役人人經簀子東行、自立作所方經簀子敷入自庇一間差之、其肴物折敷二枚也、別人一枚、蘇、甘栗、零餘子燒、或加腹赤、一枚、鯉指鹽、辛齏（カラアヘモノ）、主人勸盃於非參議大辨、或七巡後云々、殿上五位執瓶子、經西簀子敷著座、大辨以下離座取笏、拔箸、不拔匕、平伏、攝關太政大臣時、乍居長押下平伏、若有尊者二人者、主人先勸盃於奧座尊者歸、次著大辨座上、豫儲坏於此處勸之、外座納言取之、有一世源氏者亦勸坏、次敷穩座、菅圓座敷階間以西簀子、撤一世源氏座、鋪西妻戸下、私云東上南面、尊者以下著穩座、辨少納言在渡殿、無肴物、敷召人座、階西砌下敷紫端疊、諸衛官人敷之、召人著座、給衛府、諸衛官人役之、有勸盃事、居穩座酒肴、居長押下、各折敷三枚、有高坏、諸大夫役如前、次一兩巡、納言執之、殿上侍臣取瓶子、羞零餘子燒芋粥等、獻御遊具、笛類入笛筥蓋、琵琶和琴箏類等、諸大夫持參、有祿竹輿、殿上人有堪事者、被召著堂上、堂下混擊、次給史生祿、或穩座以前、錄事著後給之、家司令積祿於中取二脚、或三脚、當殿一間南去三丈立之、下家司一人唱名、隨給一拜退、史生布四端、官掌召使三端云々、次給外記史祿、赤衾一條、地下五位役之、次給辨少納言祿、家司四位以下役之、非參議大辨、紅大褂一領、殿上五位或取之、辨少納言、紅衾二條、次辨少納言以下下立、非參議大辨不下立、各經頭、立砌下、辨少納言一列、外記史一列、當西第二間以西去堂八尺許立、召人座南三尺當召人座末立云々、一揖、退經列前、外記史退出、辨少納言歸登、前例、列立時、一大納言曰、阿奈木與良（アナキヨリ）云々、次參議祿、三位以上卯襲、紅褂上重白褂也、四位紅大褂一襲、殿上人役、次納言祿、白大褂一襲、次尊者祿、女裝束一具、加褸若織物、若紅濃打細長、主人親授公卿進、塗籠南戸開屏風東端、自簾中出之、傳奉主人、主人取之奉尊者、此間、召人退出、有祿、白大褂一領、或以前事畢給之、次引出物、馬各二疋、五位二人執炬火前行、衛府官人一人、五位一人引之、以上毎馬如此、或衛府依仰騎之、卽給尊者前駈、尊者、若好鷹者被奉之、尊者前駈相跪受之、受時問犬名云々、私云、不可飼鷹由、有新制、不可爲引出物云々、次親王祿、可在尊者引出物前、大袿女裝束云々、次親王引出物、馬一疋、若鷹一聯云々、已上二事、近代無此事、尊者退下自南階、致禮節之、尊者自拔階可下歟、可尋、主人或下階送之、有揖讓等云々、禮節深時事歟、希有、凡辨少納言座上、非參議往反、公卿不然云々、有非參議大辨時、雖非參議、其座上不往反、但錄事著座時往反、錄事起座、亦不往反、遲參公卿以下、先令家司申事由之後、直昇著座、致仕人到來時、三獻後、雅樂參後歟、於庭前謝座、昇著之、故宇治殿、康平五年内大臣饗日、及穩座時、出自東簾中著座、行事未終歸入給云々、裝束　公卿、隱文帶、螺鈿劒、非參議三位、無文玉、蒔繪劒、辨以下、巡方帶

（座有大臣可執之、有非參議大辨者不渡其座上、仍入自庇一間、經辨座前可進歟、）主人勸外座尊者、四條記、親昵公卿執坏云々、猶三獻已前子弟公卿可取、餘人不可執歟、尊者放盞後、主人座南廂、（出自廂西一間、經簀子數著、攝關大政大臣並納言尊者、直著廂座、）親王著座、（居肴物、近代無此事、）立主人机、（地下四位一人、五位一人昇之、入自座上方居之、〈或下方〉乾巽妻立之、無贊薦、）居一世源氏肴物、地下四位二人勸盃、史外記座、（各兩行巡行）酒坏巡行、（內座到辨上﨟座、辨起座來受、搢笏受坏、及座流巡外座、坏直留最末人許、）立作所人等（四人許）著幄座、（入自西中門著床子、或入自東方、）次二獻、（主人不飮、若有子弟公卿者可取之、）殿上四位二人執內外座坏、（不執繼酌、故源右府記云々、）此巡以後、史座勸坏地下五位云々、居餛飩、（朱器大盤上懸汁、自餘有別汁坏、尊者主人手長、地下四位居、了候座、大辨執笏向上揖、或大納言、中納言、參議、辨、少納言等居手長、隨位階用地下五位、）撿非違使著床子、（在庭中、入自西中門立床子、看督長四人、二人別昇床子、置弓於上昇之、近代如此、）箸下、（往年二獻居餛飩、三獻召史生後下箸、）次三獻、（殿上四位勸之、主人不飮、〈私云、此門座、下人解聖〉）召史生、（最末辨、隨上﨟氣色、拔餛飩箸、把笏揖起座、經机南東行、跪母屋西第一間之去柱三尺、許遣膝行三度、揖向尊者申云、史生召奉、尊者爲下﨟者、取笏先見遣主人方、主人亦讓、但太政大臣、攝政關白大饗、若納言爲尊者、申主人、主人判之云々、尊者拔箸取笏向辨揖、許、辨稱唯揖、膝行退二度、左還〈主人右傳〉復座、召一史名、〈一史一人〉五位可加朝臣、若宿禰、史高聲稱唯、來跪辨後長押下、辨稱唯顧更東向、仰云、史生召、史稱唯、復本座、召官掌、〈官掌二人〉官掌入自西中門立對砌下、史仰云、史生召、稱唯退還、）史生以下參入、（入自同中門、列立庭中、〈北面西上〉二重列立再拜、著座、經列前並末、自後列後進之、〈史生一列、官掌召使一列、〉）撿非違使退出、（不見三獻以後事云々、）鷹飼渡、（入自西幔門、渡庭中、犬飼相具、〈中往門年下留〉西到立作所、立幔乾角、立作所人逢出取雉、插鯉坤角上、鷹飼著押角胡床、〈西北面〉犬飼在後、勸盃之後鷹飼飮酒、給坏於犬飼、犬飼飮酒、了投坏於後、次鷹飼出自東中門了、）次雅樂寮參入、（先參音聲）寮頭率伶人、入自幔門立庭中、樂人立整、暫打一鼓、次舞、左右各二曲、（左萬歲樂、賀殿、右地久、延喜樂、）舞人位服插頭竹、（不開紐、但地久破時可開紐云々、）舞了退出給祿、（有退音聲、）次居汁物、（汁鱠魚、臨別坏、雉燒物有之、）次箸下、（先立匕於外、次立箸於內、）次四獻、（此以後參議以上取之、殿上五位取瓶子、亦用別土坏、）奥座人經辨座前到坤角、次汁物、（雉羹）次蘂立、（有指鹽、）次五獻、（同上）鼈燒、（加爪）定祿事、（或六巡後、敷圓座二枚於辨少納言座前、錄事參候、簀子敷之、同）令召殿上四位一人、五位一人、地下五位二人、參入、候南簀子敷階間以西、主人先仰殿上二人云、某官朝臣某朝臣大夫達爾御酒給、（四條記、辨少納言等云々、）稱唯起、次仰地下五位二人云、某朝臣々々、佐官等爾御酒給、（同記、外記史等云々、）亦稱唯起各向（外記史座上）其所、次召經政官五位二人、參入立階西頭仰云、史生爾御酒給、錄事著座、暫退出、次六巡、（或納言親昵者取之、近代或止五獻、無六獻事、唯羞立作物、）羞立作物、（主人並尊者陪膳、〈云々或往〉四位殿上役送、辨、大納言陪）

攝關大臣正月大饗

〔年中行事繪卷〕大饗圖

時於細殿有待賓、近代一向停止、一大納言來、主人著親王座遣掌客使、以四位為之、或殿上人、不差尊者同官人、由見保忠卿延長六年記、有尊者二人、召二人使候賓子敷、仰云、參某乃大殿天上達部末字天給不多留由令申云々、奉仰云、騎馬馳參於中門、令申、卽奉仕尊者前駈、掌客使申尊者來座由、未到本家二町許馳進復命云々、公卿以下列立中門外、雖從五位下外記、立正五位上大夫史上、公卿一列、辨少納言一列、外記史一列、並南面東上重行、尊者過前間磬折、政官平伏、過後立、尊者入門、當第一大納言揖、諸卿以下共揖、入自中門、進出庭中、到幔下待主人下立可進歟、先是主人降自南階、當座下方立、掌客使來後、太政大臣攝政關白當上方立、雖左右大臣、若納言為尊者又如此、大臣以下列立階前、參議以上一列、辨少納言一列、人數一三人以節外記史一列、並北面東上、上官不平伏、而列立、主客共再拜、主人與尊者相讓、三讓云々、欲離列時、欲進砌時、欲登階時等也、尊者離列一許丈留相讓、若有尊者二人者、主人亦讓第二尊者、第一尊者欲離列、亦讓次尊者、以下亦同、主人尊者相並昇自南階東西端著座、若當座上方立、主人者登自階東頭、經簀子西渡可著親王座也、太政大臣攝政關白者、尊者離列相揖時卽先昇耳、若納言為尊者左右大臣准之、主人暫著親王座上頭、尊者直著座、若太政大臣攝政關白大饗並致家禮、尊者入自廂西一間、自主人前進著座云々、下臈尊者經座末自奧方著、中關白經上臈尊者後著座云々、此間、主人家司五位一人出取主人履、自東方出取之、座定、納言以下一々昇從同階著座、上臈昇階後、次人離列、納言為尊者時、第二納言入廂一間時離列云々、第一納言經階中央並簀子敷、入自南廂西一間並母屋一間著南座、或自主人前著座、可隨所便、有尊者一人時、或著北座、著北人入自庇西一間、經辨少納言座前、著南人入自廂西二間、是小野宮說也、但自餘人々者、共自廂第一間並母屋西第一間東進著座云々、次辨少納言從掖階昇著座、若無掖階者、自對東面階昇、經對簀子入自渡殿西一間東、進出自東一間北行著、北上東面、非參議大辨著無面圓座、絕席、次四位辨、次少納言、四位者著中辨上、次五位辨、机又有隙三寸許、但中辨者雖下臈、著五位少辨上、北上東面、次外記史著昇自南面階、著對東庇座北上東面對座、外記著西、史多者下臈渡西、酒部幄人各著座、諸司經一分官人七八人許歟、著床子、召使等來取公卿沓、辨少納言侍等各取沓、敷主人座、菅圓座敷親王座東間、主人勸盃間可敷、主人起座、參議以下平伏、辨少納言外記史動座平伏、攝政關白下居長押下平伏、到簀子敷居一世源氏座執盃、殿上人五位取瓶子相從、親王不來者、非參議三位執奧座坏瓶子、殿上人若又無者、一世源氏執之、若無者殿上四位執之、不執繼酌、奧

（五獻後云々）五六巡後仰錄事、（令召四位一人五位三人、主人先仰四位一人五位一人云、弁少納言賜御酒、次仰五位二人云、外記史賜御酒、頃之又召外位者等二人、於階下仰云、史生等賜御酒、若主人有所勞、不出客亭者、告仰之、或記云、仰弁少納言錄事之詞、弁座錄事云々非也、）若有非參議大弁一世源氏者、主人各勸盃、（勸源氏時、弁少納言避座、勸大弁時、又不正座、其大弁座加无得圓座、机頓有職、吏部記云、主人又勸盃奥座云々、此事不見近例、）雅樂寮發音聲、（延長〈長一本作喜〉六年、右大臣家饗、依尊者忌日无樂、裝服又如此）歟、王卿出穩座、即羞肴物、或有絲竹興、先給史生祿、（家司唱名、中取二脚積之、或三脚、）隨給一拜退出、次外記史、次弁少納言、（非參議大弁祿、同參議、）弁以下史以上、下立砌前一揖而退、次參議、次納言、（自母屋北面第一間出之、）次尊者、祿、（主人取之、有緣王卿傳授、加綾若織物褂、或加女裝、自塗籠南戶出之、）次親王祿、（大褂若女裝）次尊者率出物、（馬二疋、若尊者好鷹者馬一疋、鷹一聯加之、）頃之親王率出物、（馬一疋、若鷹一聯、）尊者下自南階退出、　雨濕時、列立庭中、不謝座、次第著座、御齋會間、或不用魚鳥、無立作幄、（或有之、爲違例、）

〔江家次第 正月二〕大臣家大饗（依西門儀、東門者准可知之、正月四日左大臣饗、五日右大臣饗、是式日也、而近代任大臣明年正月行之、不行大饗、大臣不向饗所、宗年不行、忠〇中略人日）藤氏一大臣用朱器臺盤、以其日可行由、以職事達天聽、是非式日時、依可遣蘇甘栗使、並饗祿樂部等事歟、　延久二年内大臣（信長）〇不被奏、有事咎、（此事舊例奏由不見）早旦、差五位奉諸親王家、（近代無此事）其詞云、今日有大饗、若令過給如何云々、　藏人到中門、以家司令奉蘇甘栗等、先家司四位一人達案內、次五位二人相具向執之云々、　盛用折櫃二合、一合（蘇大二小二）一合（甘栗大八、中八、）各居土高坏、入外居一荷、小舍二人衣冠相具、仕丁二人著荒染持之、藏人著青色袍、於對庇可進歟、　主人於便所逢中使、（執政之人或以子姪令相逢）疊一枚其上加茵、無酒肴、令奏悚息賜由、主人座用圓座云々、諸大夫二人執行折櫃置座傍、　給祿、（白細長一重、茜袴一具、親昵殿上人傳取奉主人、主人目中使、中使進參插笏、主人自被降座、欲拜間主人退入、爲不受拜也、）藏人給祿、下庭再拜退、　有官纓頭插出纓把笏拜、無官取祿拜畢懸頭出云々、　若於寢殿給者、下自板階再拜、徒跣登自對南階、若於對給者、下自南階再拜、徒跣可出自中門云々、　諸大夫二人取蘇甘栗、給立作所、小舍人、（定絹）仕人、（布段）二小舍人祿、（侍所司取之）　仕人祿（下家司所、大粮立作所有辨理）　公卿等參集於辨少納言座小飲（謂之待宵、南上著之）　天曆三年依無便宜、左右大臣相定停止件事云々、　中關白（道隆）御

羞座立、裝燒、蘇、甘栗、立作物等、主人執盃進大弁座、七八巡後、經貫子進、大弁已下勸座、座定復座、有一世源氏若、主人又獻盃、應飼可渡給酒饌、出穩座、居菅圓座、居肴物折敷各三枚、史生祿、以信濃調布積中取立南庭、六位下家司一人立披文召給、各三段、官掌召使二段、史外記祿、紅衾一條、弁少納言祿、紅衾二條、已上列砌下、弁少納言一列、外記史一列、外記史生退出云々、參議祿、紅大袿、三位卿千疋、中納言大納言祿、白大袿一襲、次尊者祿、女裝束加馬、鷹、天曆二年左大臣家大饗、中務輔取尊者祿、九條殿大饗、孫童親王取祿、通例公卿中親本家人取也、親王祿、女裝束、若白大袿、馬、若鷹、尊者退下、下自南階、雨儀自傍下、

〔北山抄〕三拾遺雜抄大饗事此日、撿非違使率看督長、就庭前床子例也、不行大饗、大臣不向饗所、

早旦、差使五位奉遣諸親王家、其詞云、今日有行大饗、若令過給如何、但隨程非无用意、中使來給蘇甘栗、便所設座召之、先以家人令奉隨時參入、主人相逢、令奏慷息賜由、取祿被之、降座欲拜之間、主人退入、即令立作所、其勅使座疊上加茵、祿白細長袴各一重也、給諸卿、集會後、或記云、拜禮以前、新王來者、參議已上着弁少納言座、小飯云々、此事依无便宜、天曆三年、左右大臣(實賴師輔)相定停止云々、奉遣掌客使、一大納言來、即奉遣、以四位爲使、主人在親王座、使候賓子敷、仰云、參其所、上達部末字天給留多留由令申與、奉命馳參、馬寮、不差尊者同官人由、見八條大將延長六年記、○頭書云、延長六年正月四日、(此日尊者右大將定方公)左大臣家饗會云、先例多用中將馬頭等、今日雖有右中將伊衡、彼客同官无便云々、相定用山城守忠房、尊者到來之時、掌客使先來申事由、即公卿以下列立中門外、訖、尊者入門、當第一人揖而入、自中門、進出庭中、此間主人降自南階、當座下方而立、太政大臣當上方立、雖左右大臣若納言爲尊者、又如之、大臣以下列立階前、參議以上一列、弁少納言一列、外記史一列、再拜訖、主人尊者相並昇自南階東西端着座、主人先就親王座上方、但太政大臣攝政關白者、尊者離列相揖時、即先昇耳、若攝籙爲尊者、左右大臣准之、太政大臣大饗、右大臣經座末着也、座定、納言以下昇從同階、上﨟昇階後、次人離列、着座、第一人着南座、有尊者二人時、或着北座、舊例就南之人、入自妻戸、經弁少納言座上進着、着北之人、入自弁少納言座下着之、尊者之外、不用南面也、而近例、入自庇間南面方進、今按、近代依公卿數多、母屋有四間、仍親王座下有間、然則就南人、不及庇間可入自親王座末間歟、次弁少納言從披昇着座、次外記史着畢、召使等來取公卿沓、先是家人五位、取主人沓、近例公卿未昇前取之、爲令不混雜歟、次主人下座執盃、但太政大臣不下、弁親王勸盃、主人勸盃尊者、親王勸內座、次々下﨟勸內座、有非參議大弁之時、不度其座上云々、然而隨便多用此道、无親王一世源氏等、有非參議三位四位、若或親昵公卿勸之、四獻以後、公卿遞起勸盃、內座盃到弁座、外座盃三獻以前直停、四獻以後、尊者擬主人公卿來親王座獻酬、畢主人坐南廂、即奉菅圓座、親王又着座、各羞其肴、先羞親王、次主人机、或立傍、或立後、次一世源氏、二獻後羞餛飩、天慶以往、多三獻後羞之、召史生後下箸、三獻後召史生、最末弁起座、進南廂第二間、申尊者也、主人爲上﨟者、尊者先目主人、主人又讓尊者、向弁揖許、尊者爲上﨟者、不讓主人、直許、若納言爲尊者、申主人、太政大臣大饗例、尊者獨判、而可准納言爲尊者例之由、見吏部記、未詳、次羞飯汁物、四獻後、羞裝燒、莖立、御鷹飼來立作所獻鳥、往年大飼留中門下、而近例相隨來幔下、立作所羞腹赤生鳥蘇甘栗、

氏一大臣　藤氏一大臣者、謂氏長者也、用朱器臺盤、此朱器等者、閑院左大臣冬嗣公御物、在勸學院、關白初任之時渡之、正月大饗用此器也、自餘大臣者、大饗用赤木黑柿机樣器等、○中略毎年大饗於母屋行之、有廳飼渡等事、

式日

〔年中行事秘抄　正月〕改大臣爲大師大傅大保事

上古四日、左大臣饗、五日右大臣也、而貞信公○藤原忠平依避殺生、御齋會間設饗、被設精進饗、其後無式日、

〔故實拾要　九〕大臣大饗　是大臣ノ大饗ト云ハ、凡大臣ノ被任時ハ、節會ヲ被行テ、大臣ニ被任コト也、是ヲ任大臣ノ節會ト云ナリ、件ノ新任ノ大臣ノ館ヘ、翌年ノ正月ニ、其節會ノ時ノ上首ヲ尊者トシテ、月卿雲客ヲ招請有テ設饗應、是ヲ大臣ノ大饗ト云ナリ、左大臣ハ正月四日、右大臣ハ同五日、是式日也、節會ノ時ノ上首トハ、內外辨ヲ被勤大臣ノコトナルベシ、是ヲ上客トシテ饗應アル事也、

儀式

〔西宮記　正月　上〕臣家大饗（藤氏一大臣大饗、用朱器臺盤、致仕人向大饗所者、三獻後出砌下再拜著座、）

上下會集遣掌客使、（近代四位乘馬、）尊者主客列立、（弁少納言在後、外記史在其後、共拜、不拜日、）著座、遞辭讓雙昇、尊者正入著本座、主人便著廂、（以讚岐圓座爲座、）諸卿著座、（除大臣之外、一人著北面座、南面人經弁座前著、獻盃時、同非參議自大弁座上不往還、）弁少納言已下著、（此間召使取諸卿沓、）親王著座、（廂一世源氏者著後緣云々、）獻盃、（主人若親王公卿相分獻之、上臈獻尊者、下臈獻奧一人、內座末人轉盃大弁座、大弁起座、相迎受盃、還本座、盃留末座、）四位二人獻盃、（三獻間、客人不動座、四獻以後、諸卿起座獻盃、外座人盃進親王座、）居餛飩、（二獻後）召史生、下臈弁進跪廂二間、（去身屋第二柱、）三度膝行揖、申云、史生召セ、（尊者不大臣者、可申主人、尊者先見主人氣色、）尊者揖、弁稱唯、逡巡還本座、召史名、（一度）史跪弁後、仰云、史生召セ、史稱唯、歸本座、召官掌、（二度）官掌立砌下、史仰云、史生召セ、官掌敬屈稱唯退出、召史生已下、列庭再拜著座、次居飯汁、（立箸）近代頗違此儀、主人召錄事、（四位一人、五位二人、弁座五位二人史座、）大夫二人進簀子、（主人仰云、弁座乃錄事、二人稱唯、又仰云、外記史座乃御酒給ヘ、各稱唯、各正戶第、以官圖座爲座、）又召大夫二人、（階邊仰云、史生乃御酒給ヘ、稱唯向史生座、而近代七巡後仰、先居垸立數燒鄕、）三獻後雅樂發音聲、

古事類苑

歲時部八

攝關大臣正月大饗

攝關大臣正月ノ初ニ方リ、盛ニ宴ヲ私第ニ張リ、請客使ヲ發シ、親王公卿ヲ招ク、之ヲ大饗ト云フ、常ニ母屋ニテ行フヲ以テ、一ニ之ヲ母屋ノ大饗トモ云ヘリ、此日朝廷ヨリ使ヲ其第ニ遣シテ、牛酪ト栗子トヲ賜フ、是ヲ蘇甘栗ノ使ト稱ス、又其第ニテハ、鷹飼、犬飼ヲシテ庭上ニ出デシム、其故ラニ雉ヲ捕ヘシメテ、以テ坐客ヲ饗スルノ意ヲ表スルナリ、而シテ大饗ノ具ニハ、藤原氏ノ長者ハ、祖先多關ヨリ傳フル所ノ朱器臺盤ヲ用ヰ、自餘ノ大臣ハ、赤木黑柿机様器等ヲ用キル、新任大饗ヲ行ハザル大臣ノ如キハ、此饗ニ臨ムコトヲ得ザルヲ以テ例トスト云フ、

名稱

〔名目抄私儀〕大饗(タイキヤウ)

〔後漢書光武一下〕建武十三年四月、大司馬吳漢自蜀還京師、於是大饗將士、班勞策勳、

〔年中行事歌合〕四番　左　臨時客〇中略

大方、大臣の母やの大饗は、年を經て行侍りしぞかし、鷹かひなどわたりて、其興ある事にて侍き、是は藤氏の長者、朱器饗を設侍る也、大臣の家には、様器の饗を備事也、何も此比は絕侍にこそ、返返念なく侍れ、

〔江次第抄正月二〕大臣家大饗〇中略　不行大饗大臣　謂、任大臣大饗不行、則不向正月大饗所也、　藤

之、雜袍宣旨、四位後重下由不聞、准是令申也、重命地下者、著禁色事、尙不穩便歟、中宮大夫云、於雜袍、敍負佐近衞次將雖地下著之、可准之歟、予申云、相尋可令申一定也、○中略

康平口年正月七日、故入道殿敍四位、著無文下重袴等之由被注載、仍注送中宮大夫許、返事日來所儲綾裝束也、改有煩、今日下還昇禁色宣旨可奏慶云々、　追注云、源左府不被聽禁色人也、康平已參議納言歟、此記旁不得心、

〔明月記〕貞永二年正月二日丁未、今日先參女院、可參臨時客云々、夜前節會退出之後、聞無人由、又直衣參院、名謁已及酉時、以下人令伺內府、猶不被出、權大夫別當實持、實光、顯氏、實淸朝臣事立門前云云、臨時客夜陰事歟、可奇、終日有和暖之氣、日入次後纖月如弓高懸、宿寶寂宅、依近々便宜、與侍口時程退出、宮女房御匣殿、冷泉殿之外無人云々、打出紫匂柳表襲蒲萄染唐衣、身裝束同衣山吹表襲靑色唐衣、御服紅梅匂十赤色御唐衣、地文梅折枝、散花、靑白、梅白文、寢殿南面階間同東間二間之外、五間西面三間有打出、猶有恐口事等、不經程歸參、亥時許又名謁了、金吾直衣一身、名謁來臨、人々大略參入之後、被待土御門大納言、春日徒暮、彼卿參入、蒔繪螺鈿劍、有文螺鈿帶、雨息相隨、皆螺鈿劍公卿列西上南面、如大饗時歟右大將獨被立中門南方、北面定有存旨歟、不知其故、內府向土御門大納言揖、大納言答揖、中宮大夫以下不揖、不知其由殿下御沓中將殿取給、大納言顯定、大將基平、大夫通氏、新大納言定具云々、　中納言已下昇中門切妻、公卿座狹、納言皆悉著了、參議之中別當三獻盃大辨可申上近候、行事三位資雅所候、依無其座、此間逐電退出、

御物忌、停止、今日便饗、王卿及侍從等、即給祿、侍從等疑云、若著魚袋歟、而王卿不著、隨諸大夫等不著、故權大納言行成今案云、天皇拜覲皇后之日著魚袋、是依大饗日侍從可著也、而彼年二日依御物忌不行大饗、五日行幸次行、猶或偏稱天皇覲皇后之日可著之云々、○中略

以下裏書天曆五年正月二日、小一條記云、諸卿參院、次參東宮饗所、依御物忌無后宮饗、三日東宮之臣致拜禮、須以二日、而依雨濕、昨日停止、○中略

九記云、天曆五年正月三日、東宮侍臣大夫以下於南庭奉拜、四位五位一列、六位一列、北面東上、撤晝御座、立設播部寮倚子、垂母屋御簾、卷廂簾、昨日依雨、今日行之、昨日大饗也

停止廢絕

〔日本紀略花山〕寬和元年正月五日庚戌、東宮大饗、

〔日本紀略三條〕長和二年正月五日丁酉、中宮○妍子大饗、

〔本朝世紀〕康和五年正月三日癸未、中宮大饗、幷右府臨時客也、

〔日本紀略村上〕天曆三年正月二日丙午、無中宮大饗、

〔日本紀略村上〕應和三年正月二日乙卯、東宮大饗、中宮無大饗、依去年十二月降誕皇女也、

〔日本紀略三條〕長和三年正月二日己丑、東宮大饗、中宮依不御內裏無饗事、

〔日本紀略後一條〕萬壽四年正月二日甲辰、東宮大饗、中宮依不御內裏無大饗、

〔建武年中行事〕二日○正月二宮大饗なり、玄暉門の東西の廊にて此事あり、近頃はたえにたれば、その儀をゑるさず、大內など出きて、中宮、東宮同じ御所定めて行はれなんかし、

○

二宮臨時客

〔中右記〕大治六年正月三日辛丑、人々參中宮御方、有臨時客、御所女房持出一色、南廊三間敷指筵高麗端疊居饗饌机各一脚、東西對座、西庇長押下敷紫端爲殿口座、机六前一行關白殿西一座中宮大夫、治部卿、民部卿、源中納言、皇后宮權大夫、左大史、左大弁、頭中將、頭弁以下、及藏人爲基各著座、右大臣追參加、端座上權

和煙入酒中、又たれぞの御こゑにて、御かはらけのまげゝれば、一盞寒燈雲外夜、數盃温酎雪中春など、御こゑどもをかしうての給にほひにかゝけふは萬歳千秋をぞいふべきなどの給ふもあり、さま〳〵をかしくみだれ給ふ、

〔中右記〕康和三年正月三日乙未、有中宮大饗、公卿參藤壺、先有拜禮、右大臣内大臣以下公卿一列、西上北面殿上人兩貫首以下二拜了、向玄輝門著靴、被著饗座、玄輝門西披一間、懸簾爲内侍候所、其次至敷安門東、立大盤幷兀子床子、爲公卿座、次四位殿上人廊南壁引軟障、口燈北庭鋪五位殿上座幔南北行、其東立酒部所幔、北庭皆引廻幔、右大臣殿端座、内大臣奥座、以下人々左右相分座、一獻、權大納言家忠、權大夫能實懸下襲尻於欄指笏、於敷安門前持盃、殿上人五位二人瓶子、内端座相分、酌唱平擬人、突左膝飲了、起又酌酒巡流、至最末人、如節會内竪儀也、二獻、新大納言、左衛門督、居餛飩、殿上五位上人陪膳、地下五位益送、三獻、源中納言、左兵衛督、居飯汁物等、及深更被止、次盃酌、亮實朝臣付内侍候所簾前、取祿進、公卿一々起取之、一拜退出、今日止樂、依故陽明門院御忌月也、是中宮母儀也、

天永二年八月六日、入夜向按察大納言直廬、及深更言談之次、語云、院仰云、正月二宮大饗時、公饗先參本宮方、二拜也、而主上若渡御宮御方者、可舞踏者、仍貫首人内々先主上渡御哉否由必相尋者、是萬人不知、第一人所傳者、此事尤有興、乃所記置也、

〔兵範記〕保元三年正月二日癸亥、中宮拜禮、○中略次東宮拜禮、○中略次中宮饗、○中略次東宮饗、○中略亥刻事了、上下退出云々、○中略今日右大臣殿、有文御帶、螺鈿劒、魚袋、殿上人同前云々、但四位少將信能、丸鞆帶、蒔繪劒、不付魚袋、下官、丸鞆帶、蒔繪劒、不付魚袋、依不參饗所也、

○按ズルニ、年中行事繪卷ニ收ムル所ノ中宮大饗ノ圖ハ、禮式部饗禮篇饗饌條ニ在リ、

〔類聚國史七十一歲時〕天長七年正月戊寅、○三日群臣拜賀、皇后宮賜被衣、又賀皇太子、宴賞如常、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十一年正月四日己丑、皇太子、○崇象參覲、今日東宮大饗也、

〔西宮記正月上〕二日二宮大饗

九記云、天暦三年正月五日、行幸二條宮、二三日宮御物忌也、仍今日行幸、又宮大饗恒例二日也、而依

つ、三いろきたるは十五づゝ、あるは六づゝ、七づゝ、多くきたるは十八廿にてぞ有ける、このいろいろをきかはしつゝなみゐたるなりけり、あるはからあやをきたるもあり、あるはおりもん、かたもん、うきもんなど、いろ〳〵にしたがひつゝぞきためる、うはぎはいつへなどにしたり、あるは柳などのひとへは、みなうちたるもあめり、から衣どもの色みなまたこのおなじ色どもをとりかはしつゝきたり、裳はみなおほうみなり、〇中略殿ばらあさましう、めもあやにて、かたみに御めをみかはしあきれたまへり、〇中略おまへには、びんがしのらうのまへのかたに、やゞにしにいで、がく人ども、候、おまへのひたきやのもとの梅の、人しげきけはひの風にちりくるかほりもめでたし、れいのさほうの樂人四人づゝ、いきて、萬歲樂、太平樂などまふほど、いみじうおもしろし、がくのおとなどもをりからにや、すぐれてめでたう聞えたり、樂人ども、おまへのかたのみすぎはをうちまぼり、樂あぐる心ちも興ありて、物のねいとおもしろし、小野宮のおとゞ、關白殿にさしよりきこえ給て、おもしろき事ども、めでたき事ども、いまも年へぬる人はおのづから見る物也、いざけふの女房のなりのやうなる事こそまだ見はべらね、たゞかゝる事は、あさましうけしからずぞありけるなど申給へば、關白殿うちほゝゑませ給ふほども、みすの內には何事ならんと、すゞろはしう思ふべし、一日の關白どのゝ大饗をぞ、とのゝありさまよりはじめ、えもいはずめでたしと思ひしに、かれはやみの夜なりけり、けふはあきらかなるかゞみにさしむかひたる心ちしてこそは、わがはづかしければ、さやうにこそはおぼえ侍れ、〇中略まづけふは、よろづのことのあまりいたうつくろはるゝに、いとわびしやなどの給も、いとさま〳〵をかし、〇中略日のくるゝ程に、所々のはしら松どもに、またてごとにともしたるひかりどもなどの、ひるると見ゆるに、〇中略殿ばらいまは御あそびになりて、いみじうをかしきに、夜にいりたり、ものゝねども心ことなり、御かはらけに、花か雪かのちりいりたるに、中宮大夫うち誦し給、梅花帶レ雪飛二琴上一、柳色

はんとていそがせ給、女房なにわざをせんといひおもひたれど、このたびのことには、ものぐろほしく、さまあしき事なくて、たゞうるはしうとの給はするに、○中略關白どの○藤原頼通の大饗は廿日なるべし、このみやのは廿三日とさだめさせ給て、われも〳〵をとらじまけじと、急ぎのゝしりたり、○中略かくてびは殿のみやには、廿二日のよさり、廿三日のあかつきなどにぞ、さとの人々まゐりこむ、廿二日に、寢殿の東のたいなどの御裝束、關白殿の大饗にことにかはるべきにもあらねど、御ひき出物の程かはる、又上達部のはじめは、東の對につかせ給て、のちは御まへの南おもてのすのこにこそはおはすべければ、さやうの事こそかはるべき、其日になりぬれば、日ごろいつしかとまちおもひたりつる、わかき人々はまた人のきぬのいろにほひにやをとらん、まさらんのいどみむねさわがしかるべし、○中略扨まゐりこみぬれば、寢殿のみはしのまに、御几帳うるはしくたてさせ給て、そのにしのまよりわた殿より、又にしの對東南おもてまで、ひとまにふたりづゝゐたり、みはしの東のかたより東ざまにをれて、水のうへのわたどのまでゐたり、かずはしらずおしはかるべし、關白殿參らせ給さま、御隨身おどろ〳〵しうめでたしと見る程に、小野宮のおとゞ○藤原實資のまゐり給ふをみれば、○中略まづ東のたいのもやに、西むきにつきたまへり、殿上人は南のひさしにつきたり、もやはみなみをかみにし、ひさしはにしをかみにしたり、事どもとゝのほりぬる程に、みなれいのさほうにて、○中略拜禮はてゝ、左大臣にてこの關白殿おはしませば、それをさきとして、いとうるはしうのどかにあゆみて、寢殿の東おもてのみはしよりのぼり給て、南の階の東西を一の座にて關白殿、つぎに小野宮の右のおとゞつき給ひぬ、つぎに中宮大夫などさしつゞきなみゐさせ給ぬ、○中略おはしましゐて、このみすぎはをたれも御らんじわたせば、このにようばうのなりどもは、やなぎ、さくら、やまぶき、かうばい、もえぎのいついろをとりかはしつゝ、ひとりに三いろづゝをきせさせ給へるなりけり、ひとりはひといろをいつ

可被行之行之、可行之不行、必可有謗難、欲聞所言者、明日可令申也、此事思慮太多、大略就康保四年例可申歟、　廿六日甲寅、昨大殿被命東宮大饗有無事、今朝以宰相申云、明日式部卿親王薨奏、二日大饗太近、亦有御服、須令申不可報行之由、而康保三年十二月廿二日、有式明親王薨奏、(十七日薨)猶有東宮大饗、彼時被尋先例、承和(○五年)依芳子內親王薨、無大饗、承和太子(○恒貞)不宜、延喜五年有中宮東宮大饗、舊年十二月敦固親王薨、延長東宮幼少不可著御服、然而如康保定者不因承和例、以彼因准延長例、深忌避承和例歟、康保太子已成身給、異延長例、只以傍親薨時被行大饗之例、偏所被行歟、依承和例不可被行之由、大難申之事也、左右可在御定、件御日記文、大殿即所被示也、仍令申其旨而已、入夜宰相來云、參大殿、以皇太后宮權大夫(經房)令傳申、卽被出逢、申子細、命云、此事未思得何爲哉、式部卿親王甚無止、彼式明親王尤劣者、今案道理、不可論勝劣、只可依等親歟、皆是二等也、總可在太閤御意者也、　廿七日乙卯、大外記文義朝臣來語、(○中略)東宮大饗事未有一定、大略不可被行歟、延喜十五年十一月、恭子內親王薨、而十六年有東宮大饗、(保明太子也)被行之例亦不宜、承和不被行之例又不吉者、又云、今夜可御錫紵、無可除給之日、廿九日重日、明日坎日、吉年申云、重日有例、(康保三年)坎日猶可忌避御、但今日著御日內除御宜歟者、此間被定須之由承之者、　三十日戊午、宰相來云、(○中略)東宮大饗可被行云々、經賴固陳此由、

〔小右記〕治安四年正月二日辛卯、著東宮大饗、(○中略)戊三點事訖、宰相乘車後、今夜給祿間、執◦喫◦猥藉、□上達部時日稱物忌不可出行、仍給隨身祿、(將監二疋、將曹一疋、府生疋絹、番長信乃四段、近衞等各二段、)

〔宇治拾遺物語　一〕今はむかし、利仁の將軍のわかゝりけるとき、そのときの一の人の御もとに、格勤して候けるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは大饗はてゝ、と◦り◦ば◦みといふものをはらひていれずして、大饗のおろし米とて、給仕したる格勤のものどもの食けるなり、

〔榮花物語　二十四若枝〕はかなくて萬壽二年正月になりぬ、(○中略)枇杷殿(○姸子)には、ことし大饗せさせ給

色、上曰、可就吉、問明日裝束、彈正親王奏云、諸卿云、可著素服、上曰、二宮饗雖從簡易、非無拜禮、是用朝賀儀、又兩宮饗非私、可謂公事、又東宮式云、此日宮人著公服云々、已著公服、著魚袋靴等、何用素服、又古昔三日就吉服、近年有著凶服、是訛也、須著吉服、唯三日後可著凶服也、二日、參左大臣殿云々、了參冷泉院、設宴如常、賜祿直退出不拜、次參中宮饗所、中務少輔後唱名當宰相座、事畢參東宮饗所云々、帥親王行酒親王座、公卿云、先例親王行酒公卿座、此度乖例云々、〇下略

〔小右記〕寛弘二年正月二日辛亥、著中宮大饗、一獻、左府〇藤原道長大夫次々不記、有音樂、左大臣以下預祿、但音樂間、左府脫衣給、舞人等正方及隨身高子口丸等兩人被之、余給正方、左府乘興挾醉所爲、彼是相應、余依彼催脫衣、二宮大饗被物事所不明也、可尋記、事了著青宮大饗、一巡後、左府退出來、差偎飩之前給祿、依及深更歟、其後諸卿退出、

〔法成寺攝政記〕寛弘五年正月二日甲子、參中宮〇彰子大饗、〇中略南外辨所儲饗如常、立樂間、右兵衛尉多吉茂生年七十五、立舞了、賜衣、是當時第一者內依高年、

〔小右記〕寛仁二年十二月十七日乙巳、申剋許參大殿、〇藤原道長、中略、大殿云、式部卿敦康親王未時薨、年廿、
廿二日庚戌、四條大納言〇藤原公任御消息狀云、夜前參大殿、明春事大略承之、朝拜停止如案、無大宮〇彰子大饗、東宮〇後朱雀大饗停止、只可有中宮〇妍子大饗、二月可有尚侍〇威子著裳、東宮御元服、依御服可延引、春日行幸三月臨時祭後無日、攝政無臨時客事、大殿又不定、明年以後常不可對面於人、目不見事日日增、有何與儲其饗云々、攝政大饗事未承之計也、不被行歟、　廿四日壬子、大殿攝政被參內、諸卿祗候、於中宮御方被命雜事、次大殿命云、二日儲爲之如何、按察大納言〇藤原齊信云、猶可有其儲者、命云、目更不見太無便、但二宮大饗被行之時者、諸卿相集、大臣家群參之例也、落合殊不見事也、爲世所思也、人必有所云歟、又攝政無儲、李部宮誠雖合聟、宛如聟公、年來同家朝夕相親、可儲饗饌之由不可強勸、然者依彼是勸可儲於家也者、　廿五日癸丑、晚頭宰相來、傳大殿命云、東宮大饗有無未一定、若不

著靴、東第一間懸簾爲內侍住所、著中宮饗、自庭中進、南儀自壇上進、東上對座、四位著徽安門以西床子、（雖自幾北、自西方入著、前例入自長、）五位著庭中幄、（近代不著、多懸尻役送、）一獻（大夫二人取之、相對兩巡行、）二獻（大臣二人、[illegible]代取之、）勸盃儀、（於北門前石壇上執坏具杓、進至上座、納酒唱平、盛饌坏氣色、突左膝於地、飲了起而又酌酒唱平授之、至四位王卿、）給餛飩、三獻（在座公卿二人執坏、）給飯汁、雅樂寮進庭中舞、各二曲、（左萬歲樂、北庭樂、右地久、延喜樂、）四獻以後、公卿取之、（近代不過三獻、）莖立、包燒、蘇、甘栗等給之、七八巡後、宮司令立祿綿、積中取立酒部平張東頭、五位侍從一人召名、（中務輔、或闕有、）侍從等次第進、給祿（一拜、）分散、（自下給之、）宮司等給祿於王卿、王卿次第自座上進跪盧蕣上、搢笏取祿、南面一拜退出、於東一拜退出、於東一間簾（內侍所候、）前給之、大納言以上白大掛二領、中納言同掛一領、參議紅大掛一領、非參議四位柳色合小掛一領、五位綱屯一連、（式參議以上女藏人給之、五位以上令宮司給之、）次著東宮饗、無內侍座、帶刀舍人等、相分陣左右前庭、平裝束、王卿直渡著座、四位著安喜門以東座、（近代門西、）給祿、（亮以下陣頭等、自西幕內取給之、）天曆八年、康保二年、傳取二獻盃、延久四年、傳又取之、（當時關白左大臣、）

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年正月二日丙戌、親王已下次侍從已上、奉參皇太后宮東宮、賜宴、雅樂寮奏樂、賜衣被、凡每年正月二日、親王公卿及次侍從以上、奉參二宮、賜宴例也、而年來不書、史之闕也、今此記之、他皆倣此、

〔三代實錄 二十八 清和〕貞觀十八年正月二日庚辰、親王已下次侍從已上、奉參皇太后東宮、賜宴、雅樂寮奏樂、賜衣被、

〔日本紀略 三 村上〕天曆元年正月二日戊子、今夜仁壽殿有太后（〇穩子）大饗、　二年正月二日壬子、於朱雀院儲太后大饗、

〔西宮記 正月 上〕二日二宮大饗　裏書　天德五年正月二日、東宮於院巽方御厩町、行大饗事、　延長四年正月二日、吏部王記云、中宮東宮大饗云々、中宮手長盃送皆用大夫、東宮式盃送用六位云々、〇中略　延長八年正月一日、吏部記云、彈正親王云、明日、二宮大饗可就吉否、（依親王服內歟、）會了參清涼殿候氣

司引六位以下北面列座、昇殿者留著座、不昇殿者退出、饗宴訖賜祿、(妃白掛衣一襲、夫人內親王、各白掛衣一領、三位以上六幅被一條、)女孺之中給折櫃食百合、祿調綿二百屯、(四位四幅被一條、五位衣一領、三位已上衾、四幅被一條、四位以下衾衣一領、事見儀式、)

〔延喜式 四十三春宮〕同日(○正月二日)受群官賀儀
內外列定、東宮降座而立、(中略)○群官再拜、東宮即座、群官退出、亮亦退、掌儀賛者以次退出、既而親王已下侍從已上、更入就位、俱再拜、訖率觶郎(以五位為之)持空盞前授為首者、群官俱再拜、訖聞升自西階、各就座、(但五位就四殿東廂座、)坐定、雅樂寮入自南門就座、主膳率坊官行群官饌、行觴一周、雅樂寮作樂、行觴五周、坊官積祿物於殿庭、主藏陣盛衣被櫃於祿物北、行觴九周樂止、雅樂寮退出、亮於庭中唱四位五位名、(自下唱之、)賜祿物、四位小褂衣一領、五位綿十屯、訖女藏人各持小褂衣一襲、賜親王已下大納言已上、又持同衣一領、賜中納言三位參議、又持褂衣一領、賜非參議三位幷四位參議、訖群官以下並再拜而退出、所司閉門、

〔西宮記 正月上〕二日二宮大饗　王卿以下參本宮拜禮、(近代二拜、)於玄暉門邊著靴、著中宮饗、(西廊、北東上、五位雖在庭中、)大夫、亮、獻盃、(兩行唱平、)二獻餛飩、三獻飯汁、次樂舞、(各二曲、)臺立、包燒、蘇、甘栗、七八巡、宮司給祿、(就內侍所給、)五位侍從一人、召名給侍從祿、次宮司給王卿祿、次著東宮饗、(西上、殿上人役送、)

〔北山抄 一正月〕二日二宮大饗事　王卿以下、先進御所拜賀、(式有拜賀儀、而近代所行如之、經服人著吉服由、見吏部王記、上日著服無便拜禮云々、而猶可著吉服裝束之由、見延長二年私記、貞信公仰者、近例從之、)次向玄暉門邊、著靴就座、(中宮饗西廊內座、以東為上、四位以上著五位侍從著饗下座也、)三獻宮司勸盃後、王卿遞勸之、其儀於北門前石階壇上取盃、二人相對酌酒唱平、擬把人揖之、突左膝飲畢起又酌酒唱平、次々唱平行之、如旬儀也、三獻後有音樂、數巡之後、五位侍從一人唱名、王卿進自座上跪廬辭上、取祿一拜退出、(宮司給之、)次著東宮饗所、以西為上、帶刀等陣左右、自餘同前、(天曆八年、康保三年、傳取二獻盃、)

〔江家次第 二正月〕二宮大饗(飛香舍儀、准南廂、)　公卿以下參本宮、餝劍魚帶隨文等、(近代著蠻繪螺鈿、)令亮啓可拜禮由、進庭中列立、(淺履、)公卿一列、四五位一列、六位一列、諸衞將佐縫腋、近代六位不立再拜、畢退出、於玄暉門邊、

〔宣胤卿記〕文明十三年正月二日丁丑、無淵酔事、如近年、

〔親長卿記〕明應六年正月二日、無淵酔云々、 七年正月一日、今日無節會、依無用脚、〇中略 淵酔同無之、

二宮大饗 二宮臨時客 併入

名稱

二宮大饗ハ、毎年正月二日、群臣ノ後宮皇后、中宮、皇太后等、東宮ニ拜賀シテ、饗宴祿物ヲ賜フヲ云フ、元日朝賀ノ後ニ節會ヲ行ハルヽト、其義全ク一ナリ、而シテ後世ハ專ラ皇后又ハ中宮ヲ東宮ニ並ベテ、二宮ト稱スレドモ、古ハ皇后ノミニ限ラズ、皇太后、太皇太后等ヲモ東宮ニ並ベテ、二宮ト稱シタリ、抑〻此事ノ史ニ見エタルハ、淳和天皇ノ天長五年ニ、群臣ノ後宮ニ朝賀シ、同八年ニ、皇后及ビ東宮ニ拜賀シテ、衣被祿物ヲ賜ヒシヲ始トス、然レドモ此等ハ既ニ朝賀篇ニ載セタレバ、此條ニ略セルモノ多シ、

又臨時客ト云フアリ、期セズシテ客ノ至ルヲ云フ、大饗ニ比スレバ、其儀大ニ簡ナリ、後世ハ毎年此略儀ノミ行ハレテ、大饗ハ全ク臨時客ト變ズルニ至レリ、故ニ二宮ノ臨時客ハ、併セテ此條ニ收載セリ、

〔公事根源〕正月二宮大饗 二日

二宮とは東宮中宮を申也、王卿以下本宮に參して拜禮の事あり、次玄輝門の東西の廊にして饗につく、先中宮の饗につく、次に東宮の饗につく、三獻の儀あり、天長七年正月に、群臣皇后を拜し奉る、ふすまを給、又皇太子を賀すとあり、絶てひさしき事にこそ、

儀式

〔延喜式中宮十三〕同日〇正月二日受女官朝賀、

其日、〇中略 先是内侍令所司鋪座、立臺盤、女御以上先著座、次尚侍以下四位以上、次内外命婦、北面 次聞

停止

形之事也、三日以後事ト御同宿御方ニハ參テ聊郢曲事ならで候也、於參他所事未知給事也云云、後日詣禪閤之次尋申、命云、參里亭之事未聞之事也、院仰無何之事歟、同所之時ハ然歟、其モ本所不致用意、

〔中右記〕嘉保三年正月三日甲午、參中宮御方、兩貫主以下雲客廿餘輩著殿上、有淵醉、及三獻、催馬樂、散樂、朗詠、一臈右衛門尉宗佐勸盃之間、甚有饗應、及深更退出、

〔玉蘂〕承久二年正月三日甲午、中宮亮範宗朝臣來談云、昨日中宮淵醉、於晝御座前弘庇、(向清涼殿東弘庇也)兩頭已下殿上人十餘人云々、

〔中右記〕永久六年正月三日丙戌、後聞、秉燭之後殿上淵醉、(○中略)次參新女御御方、朗詠、散樂、又以入興、是女御入內之春、依可始歟盃遊歟、

〔山槐記〕久壽三年(○保元元年)正月三日甲辰、今年元三無殿上淵醉事、依去年近衛院御事也云々、(去年七月廿三日崩御)

保元二年正月三日己巳、依諒闇無淵醉事、依去年鳥羽院崩御也、

〔記錄部類(殿上淵醉)〕心記、養和元年正月、無殿上淵醉、(依東國兵革、并南都火災也、雖拜禮無之、不發物音、節會如形被行之、)養和二年(○壽永元年)正月三日、依諒闇無殿上淵醉之興、壽永三年(○元曆元年)正月三日、無殿上淵醉興、是依義仲事也、

經光卿記、文曆元年(天福二也)正月、依諒闇無淵醉、(去年九月十八日、藻璧門院御事、)嘉禎元年(文曆二也)正月、依諒闇無殿上淵醉、(去年八月六日、後堀河院崩御、)

〔宣胤卿記〕文明十二年正月二日癸未、無淵醉、子細注元日、

○按ズルニ、本書元日ノ條ニ、諸公事悉以十餘年停止、何月有再興乎、無大亂靜謐之驗、末世至極、無力次第也トアリ、

院宮淵酔

爲二反也、然而未熟之間、先一反唱之云々、可爲二反之由見次第、〈及天明、秀一反云々、〉
下﨟貫首勸盃事、今夜至停頭也、前藏人猶取酌事、此事如何、古次第此儀不見、但讓上首之義令略之歟、如叙位以勸盃之儀可准知、第一大臣之外取酌人無之歟、巳次之大臣只盃許歟、其儀不知可尋、若然者大臣尙如此、貫首強不可及其儀歟、如何、舊記委細見之可分別、
貫首厚疊事、或記云、近年如此燕酔日可爲薄端、古兩說歟如何、
抑燕酔事及三十箇年無之云々、仍各不決是非事多、後生尙如何、大略以今年之儀可用捨乎、

〔長秋記〕天永二年正月三日、參內、有殿上盃酌、三巡朗業、次參皇后宮御方、被儲酒肴、一兩巡後退出、元三間后宮御方、殿上人率參、不知然事、何況無其儲、今度如此、尤不審、

〔宮槐記〕貞應二年正月三日、〇中略後日頭中將來談云、淵酔〈殿上〉二日不行之、三日行之、殿上事畢參女御御方居公卿座、其後參皇后宮御方高陽院、〈院御同宿也〉此事兼日有沙汰、后宮御座里亭之時猶可參乎、五節ニハ然也、年始淵酔如何、而陰明門院中宮時幷東一條院中宮時有此事云々、其時モ有不審、一度被止畢、〈陰明門院〉後度猶參、仍今度有此事、令院奏之處、仰云、可有にてこそあれと云々、以此由申殿下、御定之上不及左右とて、卒參畢、列居殿上、只儲掌燈之許也、宮殿上とは、假令公卿座末紫端帖二行敷タル所ヲ、宮ニハ稱殿上也、女御御方モ如此歟、詳不覺、頭中將爲推參之儀可候弘廂歟、此事不審之由令相尋、予雲客之交甚淺、又遠隔畢、仍不覺悟、但五節モ於里亭淵酔之儀ハ臨時之處分歟、年始淵酔如此、列參之口未辨知、定有例歟、人々も令不審云々、彼父按察卿經衡未覺之事云々、亂舞一反、郢曲少々後退出、如形云々、
退見祖父右相御記、永久待賢門院中宮時、殿上淵酔之後、貫主以下相引參中宮御方云々、藏人指紙燭前行、列居宮殿上、郢曲亂舞數反云々、後日又正□房資〈時入道〉對面談申此事之處、參里亭之事不承及、於內裏も不必然時之事也、又推參とハ不申、只是ハ淵酔也、然者宮殿ニハ可列居、只如

一饗膳事、今夜不及六位、此事如何、已著横敷之間可備歟、如此巨細之段、不見次第之間、是非難定、如此事不載次第者、是往古定可爲定例、當世希有、諸事未練之間、迷是非者也、

一藏人著小板敷事、古義定歟、勸盃之所役、從下臈起座、不復本座、著小板敷歟、古次第云、六位藏人候横敷、次一獻、（此間藏人等移小板敷、已上文）者、又云、藏人返給銚子於主殿司、退下著本座、已上文、案之、依所役從下臈起座著小板敷之段勿論也、然者一獻度下臈一人、二獻又一人、如此可起座歟、但又一度可起座之條可然歟、未決治定、今夜從下臈一度起座也、爲可著小板敷之儀者、從上首可起歟、此事後日不審之段、頭中將云、先下臈起座事、是則爲可獻勸盃也、仍然也云々、此儀可然、但尚相殘兩人一度令起座者、諸仲以緒等、從上首人々起座、如何、

一巡流事、次第云、最末人留置盃於座下方、（藏人在横敷者可持盃、已上文、）如次第者、六位忝非可起座歟、假令今夜三人也、各從下臈勸盃後也、仍忝以起座勿論也、若藏人至四位者、上首一人可在横敷歟、然者可傳盃也、

一著座事、古次第云、相分著之、（謂江此須加介）已上文、奥端相分著也、定例歟、今夜兩朝臣位階、季國朝臣上也、仍各著奥了、此事或人云、於殿上對貫首所存無其謂云々、可否如何、

一伺氣色事、殿上人於下戸外跪伺貫主氣色之由見次第、雖然當時以下侍爲番所、不及撤疊也、仍於横敷伺之歟、

一貫遠朝臣今度如習朗詠、不經日數、聊雖似道聊爾、古來於燕醉者如此歟、當其時、雲客人爲大切之故歟、於發言者、令酬酌了、

今様事、前大納言殿老衰失念給、仍無違人、貫遠朝臣雖令傳受、不及稽古、仍不知也云々、此事内々伺申入之處、適再興之時、無其儀事不可然、加涯分之了簡、可唱歌之由被仰下、仍大方以大納言殿了簡、今度者有其儀、郢曲之道微々、不堪嘆息者也、博士等見古譜、雖令了簡、定可相違、可愧可恐、可

之歟、次頭中將飮之、次第巡流如初、次朗詠二首、其儀基規朝臣自歡無極句唱出之、令月句、五位職事出之例也、然而當世歟、仍從歡無極唱之、其音聲壹越調許也、自萬歲各付之、如常第二反、加嘉辰句、資能朝臣唱之、第三反、又基規朝臣自歡無極句唱之、資遠朝臣依酔酌也、次資能朝臣東岸西岸唱之、付所如例、第三句基規朝臣、第四句同唱之、再反第三句、資能朝臣音聲雖濟之間、重此句云々、再反句、資能朝臣第三句、基規朝臣第四句、資能朝臣朗詠了、貫首披著、雲客應之、次三獻源諸仲勸之、先諸仲受酒獻貫首之時、頭中將解諸仲之紐、此時置盃肩脫、次藏人又解貫首之紐、貫首自肩脫、侍從見之各肩脫、藏人於小板敷肩脫也、次勸盃巡流如前、次今樣、先空拍子兩三度打出也、春始梅花、資能朝臣唱之、ヨロコビヒラケテ基規朝臣唱之、オマヘノ池ナル資能朝臣唱之、終句籠之、只今ヨリ籠也、基規朝臣出萬歲樂、一同以扇叩臺盤拍之、此時藏人參臺上舞、後下﨟舞也、了退、殿上人悉於本座舞了、郢曲人止拍子勸坐、向傍頭方出萬歲樂一反令舞之拍子、更又二反令舞也、已上三反也、古來反數不定云々、次貫首令舞也、其儀同前、傍反三反タリバ五反可然也、如何、次自下﨟起座、此間主上入御、殿上人於本座差紐、或不差不同也、可否如何、頭中將重親朝臣不差紐起座、上戶、貫首人於殿上令藏人差紐云々、但非常儀也、退去、○中略

今夜條々、兩貫主飯居折敷了、兩頭之外不弃擬酒、此兩條猶可尋是非哉、

一肩脫事、次第云袒裼、袒裼肩許可脫歟、又至袖可脫歟否事、面々所爲不定、先達人當時無之、或老蒙不勸其役之間、當時可指南仁無之也、仍迷是非者也、可有如何哉、今夜各脫右袖、表衣許也、季國朝臣一人脫肩、不及袖也、或記云、各不著半臂、古來兩端云、近年多分不著之由所見有之、以此儀條々、至袖可脫歟、於肩許脫之時者、半臂之沙汰無益、如何、

一舞之後持扇事、顯繼不持之、如何、此事於次第者、持不持義共以不載之也、尹豐又不持歟、其外悉持之、於舞時者可持段可然歟、但於名家有子細哉可尋、若無所見只爲今案者、不足信用者也、

一從臺盤下傳盃事、居扇可指遺之由、前大納言殿御敎訓也、尤可然歟、不居扇著表衣等可相振也、各被同其儀了、

頭擧云□仍頭中將二度、頭擧四個度舞云々、不可也、

〔宣胤卿記〕明應二年十二月廿三日、依召參內、勾當局用脚事、節折、追儺、四方拜、淵醉、叙位被行者、不可事足事、可仰清房之由被仰下、○中略

同二正、淵醉、　主殿、百疋、　大膳職、百疋、　女孺、五十疋、　掌燈、三十疋、　以上二百八十疋○中略

明應三、○中略　淵醉、　主殿司、百疋、　女孺、五十疋、　大膳職、百疋、　掌燈、三十疋、　以上二百八十疋

〔親長卿記〕明應三年正月二日、殿上淵醉、定如例歟、去月廿九日、及深更被下女房奉書、仰云、勾當奉去正月十六日節會、髮上女房張袴見苦之間、俄被下御服了、其後依御無沙汰、于今無御沙汰、明後日淵醉出御、生御袴可爲何樣哉、可計申云々、予申云、就御張袴闕如、可被用御生袴之事、夜陰內々出御之間、更不可苦候、於于今者、俄御新調不可叶、淵醉出御事者、非指定事、雖無出御不可苦候所、於兩樣可在時宜之由申入了、

〔後觀音寺左相府記〕大永二年正月二日、エンスイ在之、近年退轉之處再與、尤以珍重々々、

〔二水記〕大永二年正月二日、今夜殿上淵醉也、爲見物著直垂參番衆所、外樣戊終剋藏人頭中將重親朝臣入上戶著奧坐、次右頭中將季國朝臣著端座、此時出御、委細見圖次女房候此間、殿上人等群集番衆所、舊下侍云々、當世以此所爲番衆所、出御了、基規朝臣於橫敷未跪伺氣色、貫主揖許了、進著奧座、次資能朝臣第一人外不伺氣色進著奧、奧端相分可著也、今夜之義子細注左、次資遠朝臣、端賴繼、端尹豐、奧兼秀端等、次第著座、次源諸仲、橘以緒、藤原氏直等著橫敷、次氏直起座入神仙門著小板敷、次以緒諸仲同著也、次一獻、其儀藤原氏直於小板敷取盃、主殿司取銚子相從入東之一間、至臺盤上邊跪、貫首氣色了、受酒飮之、弃凝濁更受酒獻貫首、貫首取盃不取盤歟、兼其沙汰源氏如此候、常燈光幽遂不見、之間、藏人取繼酌、主殿司退歟次貫首氣色于傍頭飮之、弃凝濁更受酒傳盃、從臺盤下傳也頭中將取之氣色于基規朝臣飮之、弃凝濁受酒、居盃於盤傳之、此間藏人退、主殿司銚子歟、基規朝臣取之飮了、次第巡流、最末人座下留盃、次立箸於饗、兼居之、貫首立箸之後、殿上人等應之、次二獻、橘以緒勸盃如前、先房頭始之、頭中將食

可有阿音之由示之、
〔親宰御記〕元亨三年正月四日、元三殿上淵醉也、今度儀如風聞者、比興之次第也、大略二日三日間也、而及四日之條如何、又郢曲之仁只一人云々、
〔後愚昧記別記〕永和三年正月二日、殿上淵醉被行云々、御忌月被行之例有勅問云々、其人數可尋之、天永、永久、文治等例云々、前内府申詞、相尋之處無別義、只鳥羽、後鳥羽兩代被行之條、爲佳例之上者、可被行歟之由申了云々、自餘人々申詞可註尋之、
〔薩戒記〕應永廿八年正月二日、今夜殿上淵醉可早參之由、兼日頭辨相觸之、仍著半臂、是流例也、
永享十一年正月二日壬午、早旦參室町殿、〇中略此次申淵醉兩貫首著座次第相論事、依初定也、令申給曰、一方以先規申、一方申無蹤跡事、更不可比量歟、所詮依下臈頭奉管領、有此論、只任位次可被仰、殿上管領事、於持季朝臣者、退出便參内府、付勾當内侍申此旨、則召持季朝臣了、
〔親長卿記〕延德四年正月一日、入夜大藏卿經茂賀來、對面祝詞之後示云、明日淵醉頭辨後名參仕事、猶葉室一品不可然之由堅示之、此事舊冬廿五日大府卿示云、頭辨淵醉參仕事、一品申旨已管領頭事多分被付官方之處、今以幽玄之例、就上首被仰頭中將、實望朝臣然上者參仕事依無面目不可然由申、可爲如何哉之由尋予、予答云、管領事雖爲位次下臈、就官方被仰之段先規勿論、又就位階上臈被仰羽林方之事、是又先規也、已被仰上首之上、之何競望之時頻不申所存、於于今限此淵醉位次、上首爲管領頭之處、有所存不參無謂、實不可爲耻辱之由、於愚意者存之由、命勧修寺前大納言、中御門大納言在此席、同示之、各申云、予旨勿論不能左右云々、就猶參仕不可然之由、頻一品中所存上、毎事有指被諷諫事間難默止歟、依可□被命之由申之、其上者不能是非之由示了、定世之嘲弄之基歟、不可說了、　二日、殿上淵醉、一〇亂中〇〇〇〇〇〇〇〇停止、今年被再興也、頭中將尋淵醉事、遣部類記了、
明應二年正月二日、有淵醉、如去年云々、或仁云、頭辨早速立舞、仍頭中將重經朝臣二度舞、三度欲舞之時、

一﨟資光、二﨟清能共攣應、清能雖二﨟、依舊﨟可敍爵之故歟、人々入興及散樂、

〔山槐記〕永曆二年正月三日丙子、可有殿上淵醉也、仍著殿上、○中略藏人賴保頗有攣應、賴保令肩脫、非藏人通定扶持也、予以下相從肩脫、著半臂先例也、但藏人少納言侍從有房等不著、或人云、衛府人幷當時著之云々、又皆悉可著云々、○中略頭辨被命云、故治部卿殿上淵醉强不被著者、仍退出、此事如何、大納言殿被仰云、臨時客主人尊者及如一人子息之外不著半臂也、

〔記錄部類殿上淵醉〕心記、治承二年正月二日、殿上淵醉之間、頭權大夫光能一人袒左、未知其故、五節之時、廻五節所之間、御所當左之時、或袒左非無其例、其外左袒事、不見不聞事也、若有故歟、但去年五節之時、四五人許左袒也、然而此人右袒畢、思失歟、

〔明月記〕建仁二年正月三日、參內、於途中遇頭辨車、今夜殿上淵醉、不能歸參之由被示、況於無益老者乎、即退出、○中略後聞、殿上淵醉之間、中將殺成亂舞落冠、冠入臺盤下、良久操求云々、

〔吉續記〕文永五年正月三日、有殿上淵醉、頭中將奉行也、予著下襲黑半臂、有出御、於上戶被御覽、兩貫首先著座、奧頭中將、端頭辨、次應召郢曲之仁、公秋朝臣、長顯、信基等朝臣著座、次五位職事光朝、予著之、極﨟淳範不候小板敷、著橫敷、自餘藏人候小板敷、三獻之後袒裼、朗詠、萬歲樂等如常、

〔記錄部類殿上淵醉〕荒涼記、弘安四年正月三日、今夜殿上淵醉云々、其儀宗冬朝臣注送由、主上出御、兵部卿具敎、民部卿伊賴等、祗候御座近邊、頭中將基顯朝臣、公類朝臣、宗冬、敎賴朝臣、仲兼、雅藤、實敎、業顯、已上著殿上、初獻、淸顯二獻、懷能次朗詠令月句、仲兼詠之、但其聲不聞、公類朝臣以下助音三反、次東岸西岸句、公類朝臣詠之、各助音同三反、次三獻、一﨟仲行有小攣應、雅藤放紐、貫首以下各肩脫、雅藤左、自餘右云々、又貫首公類朝臣、實敎、業顯等著半臂、其外不著之、宗冬同不著、次今樣、春初梅花、宗冬歌之、人々助音二反、次萬歲樂亂舞、貫首三反、其外殿上人等被召御前兩三反云々、予剋事畢、各發阿音退散、

〔業顯卿記〕正應二年正月三日癸未、今夜殿上淵醉也、○中略阿音有無先例不同、今度無之、信有朝臣不

（年中行事繪卷）淵醉圖

シ、

名稱

〔倭訓栞前編四十四〕ゑんすい　五節或は正月にいへり、淵酔と書り、

〔おもひのまゝの日記〕けふ〇正月二日は又殿上の淵酔とてひしめく、えいきよくの人々、數をつくして廿人ばかりさぶらふ、かみのとにて御覽あり、すそかづきの女房卅人ばかり、御あたりにさぶらふ、きぬの色々、花びらをちらしたる心地して、いとめもあやなり、五節のをりにもおとらず、御かた〳〵のすいさん、酔すごしたる殿上人など、度々袖うちふるけしき、心ざまにておもしろし、

禁中淵酔

〔蓬萊抄〕正月二日殿上淵酔或用三日
兩貫首已下、於殿上有盃酌事、絲管屬文之隨其催獻朗詠雜藝等、無定法、或以及袒裼、天下無爲之時有此事、

〔建武年中行事〕三日〇正月、中略、殿上の淵酔あり、藏人頭已下ことにたへたる男共だいばんにつく、六位藏人獻盃す、朗詠二首、今樣一首、三獻のたび、ぎよくらうの藏人獻盃すれば、頭、殊更これをゑひ、賞翫してひもをはづす、此時みなかたぬぐ、今樣の後亂舞に及ぶ、皆座ながらまふ、六位こいたじきにてはやす、藏人頭三反なり、御いしの前に進みてまふこともあり、主上はしとみより御覽ず、女房など數多障子の邊にさぶらふ、事はてゝ中宮にすいさんす、そのぎ同じ、但公卿の座にて先けんばい、ふだの衆これを進るなり、

〔中右記〕寛治八年正月二日乙亥、今夜及深更兩貫首以下著殿上、有淵酔事、朗詠今樣之後、已及散樂、三獻、一臈左衞門尉永實饗應無極、施種々遊間及夜半、感歎之至、誠勝前々、

〔永昌記〕長治二年正月三日壬申、參大內、可有殿上淵酔、而頭辨遲參、入夜事始、三獻朗詠了後、各以分散、

〔中右記〕永久六年正月三日丙戌、後聞、秉燭之後、殿上淵酔、頭中將、頭辨以下、殿上人廿餘人參集、三獻、

〔歌林四季物語 一春〕さて夕つかたより、內のつかさのをりにあふかぎり、おのがさま〴〵のつかさづかさ、とりわきて外記は、ぎしきくわんのひぢもちをかしく、衞士のたく火の古代めきて、くまぐまとあかく見えわたる、ところ〴〵の机丁のかたへの、きぬかづきのをんなゝど、わがかたざまのこと〴〵くち〴〵いひわたり、うたまひの司人、なにくれのふきもの、ならしもの、雲井をひゞかす、かゝるをりには、あまつをとめも袖をひるがへすべく見え、わたつうみのをとめ子も、もにあらはれぬべし、小夜もやう〳〵更て、うしの比ほひ、うへにも南殿にならせ給ふは、松明のほかなるみかげに、はとりの女じゆのよそほひ、執柄の御きよにつかうまつるも有がたく、あさましきまですさうにみえたてまつるに、すないもの申のうたまひすゝむるもをかしからぬかは、くす、たちがくはら赤の奏などみな神々しきためしなるべし、

〔四季物語〕正月　夫より小朝拜のことゝいそがれ、また今宵の節にあふべき三のほしの位、かんだちめ、きんだち、なべての殿上のをのこ達、またき侍從の何くれ、其さだめがたき、それかれつかうまつりて、日くれにたれば、春としもなく、さむう覺るは衞士のつかさの火たくあたりにのみ、人おほくゆすりよりて、內辨も此あたりゆかしくもやと、たれもうちほゝゑむべし、その神々しさいはんかたなし、九重のかくうづたかくつゞかせ給ひ、百代千代とさかゆく春にあはせ給ふも、かゝる御よそひのたゞならぬにこそ、

附 淵醉

正月二日又ハ三日ニ、藏人頭以下ノ殿上人、殿上ニ於テ盃酌ノ興アリ、之ヲ淵醉ト云フ、歌咏、亂舞ノ事アリ、天皇出御シテ御覽アルヲ例トス、院宮ノ淵醉亦同ジ、此事、後土御門天皇應仁ノ亂後久シク絕エ、同天皇ノ延德三年、及ビ後柏原天皇ノ大永二年等ニ再興アリシカドモ、其後遂ニ行ハレズ、其他十一月新嘗祭ノ時亦此事アリ、神祇部新嘗祭ノ篇ニ就キテ看ルベ

朱臺盤、内膳司濱島氏自南階供晴御膳、御厨子所高橋氏自東階供腋御膳、大膳職自西階供饒飩索餅等於内辨外辨、内堅勤陪膳、一獻御飲擧給臣下、面有國栖奏、歌笛之儀、二獻御酒勅使、有内辨起座、大夫達留御酒給之儀、三獻有立樂、古大宰府獻腹赤贄、吉野國栖獻年魚、其人吹笛而奏之、今雖無其事、然存其儀、七日十六日亦有此式、三節會日偶逢卯日、則有卯杖之儀、今夜群臣參内賜天盃、古有天酌、各賜中啓一本、是末廣小開者也、自親王家至大臣家、兩面共金箔、而其上多畫中華二十四孝等之圖、自茲以下、片面金、片面銀、於地下兩面共白、其畫圖倭屋野々村氏依舊例而畫之、今狩野家亦調進、凡攝關家自元日至十五日、其間每節有高盛饗膳、諸家亦有津久波井之膳、是則高盛之略也、或有蒸雜壁獻鮨物等之儀、

〔おもひのまゝの日記〕ことしはけふの節會より、年の中の公事ども、古き跡を尋ね、めづらしき事をおこさせ給ふ、末の世のためにもとて、かたのごとくかきつけ侍なり、○中略やう〳〵節會の御裝束催す程、兩殿○前關白、關白、臺盤所に侍らふ、其ほか左右の大臣、左右の大將など、さりぬべきにつきて、臺盤所にめしいれらるゝも有べし、内侍威儀の人々、臺盤所につきたり、典侍たち朝餉の間に侍らふ、きぬの色あひ、物の心ばへ、えならぬさまいづれともわきがたし、たゞ春の花、秋の紅葉をこきませたる心地ぞするや、内侍威儀などは數さだまれるほどに、わざと見所ありて、おかしきをえらばせ給て、廿人ばかりつけさせ給ふ、さりぬべき若き人々まいりたれば、扇さしをかせて、もてなやめるおもゝちなど、けふを晴とつきじろふも、ことはりならむかし、若き上達部たちは、はかなき思草の種となるもあるべし、たゞ天つをと女の天降れるかとぞ覺え侍、よろづあまねき御愛しみにひかれて、せいしよくをもてあそばしめ給はねども、をのれとかゝるたぐひはまいり集るなるべし、節會の儀式また常の事なれど、立樂などふるきにまかせて、御せんの種々まことのからものどもをつくさる、酒の正など參りて、行酒のぎしきなどいとめでたし、よろづ昔をおこさせたもふゆへに、内辨まへの物てまさぐりに取りて食ふも有べし、三獻の後、諸卿ゑひすゝみて唱歌し歌うたひて、かは笛ふくもあり、天暦の古風いと面白し、太政大臣れちにはくははらで、脇より昇りておくの座に侍らふ、これもふるき例なるべし、かやうの事ども數々多けれどみなもらしつ、

聲未息、望諱月而憂色更深、上春鹿鳴、總不欲聽、聖哀之至、凡情何堪、抑正旦良宴、得萬國之歡心、卽是孝也、七日勝遊、調三陽之佳氣、豈非禮乎、俯望此二節會、依舊無停、專存禮儀、不擧音樂、然則不舞不歌、天仙之洞雖靜、以醉以飽、雲龍之庭猶隆、至如踏歌之類、偏是耳目之娛、無便於改月、何妨於虛年、但合射之儀、國家之大務、昔東漢之君、三月行禮、將令萬物達其餘萠也、後代相承、或用此候、被曲臺春深、射宮景暖、芳草隨步之地、落花拂衣之朝、顧玆嘉辰、縱其壯觀、臣等謹奉詔、付外施行、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

天暦九年十二月廿五日

〔年中行事秘抄 正月〕節會刻限 又見寛和元年十二月廿三日記

諸節會被定刻限哉、天暦元二年間、有此宣旨云々、有所見者、可被注給之、

左衛門督資仲

大夫外記殿

右大臣宣、臨時宴會、預定其日、凡厥臣下理須早參、而或人遲參、苟貪位祿物、事之體豈合如此、自今以後點見參者、午時爲限、以後參者、莫預祿例、

弘仁五年二月廿八日

少外記船連湊守奉

天暦元年十二月廿六日、內竪來云、宣旨云、右大臣宣、自今以後、諸節被參內諸親王、可參刻限以前由、宜差內竪令普知家司、若違失者、召觸家司者、卽問刻限、內竪云、巳四點以前也、李部王記文

受領依辭退停任者、四ヶ年間不給位祿。不預節會事、

延喜三年十一月廿日、外記日記右大臣宣、奉勅、諸國受領之官、依辭退被停任者、四ヶ年間不給位祿、并勿預節會、自今以後、立爲恒例者、

〔日次紀事 一正月〕元日宴會 入夜、內辨外辨出仕、及諸役人參勤、有陣儀輙園司者座、開門、大夫進召群臣、再拜賜御酒等之儀上、凡三節會每有出御、則紫宸殿立平文御倚子、其前立

押笏紙參內、是故實也者、以此旨令申關白、御返事云、數年雖爲一上、於家押笏紙事、更所不覺事也者、予今日於陣令押笏紙、隨關白命也、

〔百練抄十一土御門〕正治元年正月一日、今日可有日蝕之由、曆道載御曆歟、算道行衡、長衡等、申不可正現之由、兩道申狀異僞難決、隨蝕之現否可行節會之由、被仰下之所、終日雨降、入夜天晴有節會、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元四年正月一日辛卯、可有日蝕之由、陰陽等奏之、算博士雅衡不可有蝕之由申之、終日遂不正見、雅衡所申符合、尤珍重也、仍被行勸賞、日沒以後、被行節會等如恒、

〔園太曆〕延文四年十二月廿五日、萬里小路中納言仲房入來、元日節會可出仕、內辨事可傳覺旨示候、物召聲、練樣、大概授了、〇中略戌刻仲房卿重來、有勅問事云々、仍又謁之、大樹〇足利義詮率東軍發向南方、ト、此上節會已下以警固儀可被行歟云々者、予申云、兵革時節會已下警固雖勿論、壽永貞和等者、凶徒襲來、依防戰被遣官軍、因玆警固勿論也、今度者無襲來之聞、爲追討敵陣發向、若可有差別歟、所詮被問例可被左右哉之旨申了、　五年正月一日己丑、小外記康隆注進、〇中略今夜卯刻、節會以前被行警固、依兵革也上卿權大納言藤原實俊卿、職事藏人右兵衛佐國房、諸衛左近中將隆右朝臣、公廣朝臣、今日假[illegible]右右兵衛府職事參行、權少外記師興、上卿參著奧座、職事進奧座、仰警固事、仰詞云、依兵革三箇日可警固、令付國司、次上卿著御端座、令敷軾、次上卿召外記、問諸衛參否、次上卿召官人召諸衛、依內豎遲參也次兩中將、隆右朝臣、公廣朝臣、右兵衛佐國房參列小庭、東上南面上卿仰警固事、其詞不聞次諸衛退、次上卿召大夫史量實、三關警固被仰可成官符之由、次上卿撤軾令起座給、次被行節會、〇中略　警固中節會例、度々雖存例、元日節會以前被仰警固事無先規歟、未勘得之、

〔本朝文粹四論奏〕太政官謹奏
　請正月元日七日節會依舊不停、十六日踏歌依詔停止、十七日射禮改月被行事、　昔三品
夫孝稱要道、明王之化爰施、義貴隨時、聖人之敎攸著、伏惟皇帝陛下、天經在憶、人德歸厚、追凱風而悲

國廳饗宴

奉之、檜扇を以て天顔を隱し奉る、關白御裾を弓にかけ供奉有、頭辨草鞋を直され、頭中將晝の御座御劍を以て扈從せらる、其外供奉の公卿威儀を正し行列有、尤階上の御步行なれば、暫時の內の拜見也、入御之儀御同前也、又出御なき御事も有之也、

〔令義解 六儀制〕凡元日、國司皆率僚屬略○註郡司等、向廳朝拜、訖長官受賀、略○註設宴者聽、其食以當處官物及正倉充、謂官物者郡稻也、正倉者正稅也、所須多少、從別式、

〔東大寺正倉院文書 四十三〕薩麻國天平八年正稅帳

元日拜朝庭、刀禰國司以下少毅以上總陸拾捌人、食稻壹拾參束陸把、人別二把、酒陸斗捌升、人別一升、

〔萬葉集 二十〕三年○天平寶字春正月一日、於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首、

新年之始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘其騰、

右一首、守大伴宿禰家持作之、

雜載

〔西宮記 正月上〕節會裏書

延喜六年正月一日、兵部卿親王依足煩不列立、有宣旨自殿參上、依左大臣不奏賀、　延喜七年正月一日、天皇不御南殿、中略○仍侍從以上著宜陽殿座事、　延喜八年正月一日節會、於本殿有管絃、　延喜十二年正月一日、殿上人著幄座事、　延喜十六年正月一日、御南殿坐帳中、只下御簾在內、齊衡、貞觀等例也、近仗不警蹕、兼有定云々、諸衞開門、常例此後有諸奏、勘先例、仁壽四年正月、不御南殿、中務奏御曆等、又貞觀十三年、不出御、御曆奏付內侍所、齊衡三年正月七日、御南殿、不卷御簾、御弓付內侍奏、不御猶奏、甚違事意、亦在簾中不可有勅答、中略○　承平七正七日、內辨就簾下奏見參、內侍早歸、頭傳取奏云々、　天慶七年例、同日雨濕時不謝座、昇殿內辨仰云、莫謝、近代無此儀、　天曆七正一、不出御、種々奏付簾下付內侍、

〔永左記〕永保三年正月一日丁丑、節會如例、早旦引見故殿○源師房御記之處、蒙一上仰之人、節會日於家

日設之云々、正月朔日、下襲猶可著打下襲也者、殿下御隨身、薄紅梅色袴也、予隨身、袴色同之云々、殿下、平緒紫淡云々、予平緒又同云々、

〔山槐記〕治承三年正月一日庚申、後聞、節會之時、（中略）右少將隆房朝臣東宮啓將也、然而垂纓帶野劒、引陣云々、嚴親亞相（隆季）曰、此事舊蹤不勘得、難決事也、（中略）愚案、如此凡今日出仕啓將佐闕腋如恒、卷纓相具平胡籙、左少將時實、左兵衞佐盛實、右兵衞佐基範（先日父卿問予）等如此云々、右少將隆房朝臣垂纓、予雖色車副牛童衣服守新制之法、諸人只如例年、近年不及斷之、有法不行、不如無法、已此謂歟、

〔明月記〕承元二年正月二日、大納言殿御命云、御堂之流、元三螺鈿有文定事也、以之爲本說、又帶蒔繪劒、非無例、二條殿大臣御時、兩三年令帶蒔繪給、但於其前後者、皆令帶螺鈿給、於故入道殿者、只每年螺鈿也、予申云、於殿上人者帶蒔繪、藏人頭以後帶螺鈿穩便由、人多申之、家通卿年來帶螺鈿、依伊通公之訓、更帶蒔繪云々、但又有用螺鈿之人、於定家者勿論之身也、更不可有存旨、但心定期公卿藏人頭帶劒之人暫帶蒔繪歟、已及白髮、無其前途、況若雖有後榮、更不可帶劒、仍用螺鈿、於後忠卿者、殿上人之時總用螺鈿了、仍所帶也、此事又可被尋目、仍蒔繪劒ニ聊摺貝劒用之也、

〔親長卿記〕文明十四年正月十四日、今日元日節會御習禮也、（中略）今日裝束、內辨、中院一位（通秀、冬袍、裾表袴、大帷如常、不着下襲、平緒、餝太刀、靴、）　予（冬袍、裾表袴、下襲大帷、引倍木、平緒紺地、太刀蒔繪太刀、靴、）　新中納言（公兼、夏袍、指貫、淺履、）　參議代源大納言（雅行、夏束帶、蒔繪劒、）　兵部卿（宗綱、冬袍、指貫、靴、）　已上各持笏　此外大略衣冠也

〔光臺一覽〕一元日之節會、從酉之剋至寅剋、關白、左右之大臣、內大臣、當官之大中納言、參議、少納言、左右近衞府兩貫主、辨、七座上卿、職事、內辨、外辨、六位之藏人、幷大外記、官務之兩局を始、地下被官之輩等群集有、昇殿人は其役之席に伺候し、兩局以下の地下は軾に參列す、主殿寮の史生は衞士の役として松明を焚明す、陣之儀尤以嚴重たり、天皇出御有砌は、先達而女孺階上之掛燈しを改め廻り、職事の辨一人先驅して警蹕を呼ぶ、脂燭の殿上人左右に六人、主上の兩傍に典侍內侍二人供

〔友俊記〕年中御作法の大概物がたり○中略 一夜に入て元日の節會おこなはる、○中略出御の時は、清涼殿晝の御座にて束帶をめさせたまふ、大かた清涼殿の上段の間にてめさる丶、高倉山科兩家のうち參候也、御まへの衣紋は、彼門人近習の公卿なり、御笏は藏人頭まゐらする、御草鞋は南座もつ所にて、內豎とりて、藏人頭につたふ、藏人頭御さうかいをす丶む、此時は、晝の御ましの御格子上下を入る丶、南第三の間の御さうしをあけて御簾をたる、

〔江家次第〕正月一元日宴會

公卿、有文玉帶、飾劒、金魚袋、平緒、靴、非參議、純方帶、螺鈿劒、銀魚袋、 衞府將佐闕腋、螺鈿劒、平緒、銀魚袋、近衞帶ㇾ緌、不ㇾ執ㇾ笏、昇殿上、 衞門權佐、或著螺鈿野劒、或著長劒、凡諸衞佐、天皇御南殿、後著ㇾ劒昇殿、六位撿非違使昇ㇾ殿者、平裝束、布帶、麻鞋、平胡籙、緌、近衞、衞門、五位將監、尉等、卷纓、闕腋袍、劒入尻鞘、負平胡籙、○中略 元日宴會、御忌月并不ㇾ出御儀○中略 開門、左右將曹率近衞八人、開承明并左右腋門、不ㇾ可ㇾ著黄袍、可ㇾ著絲鞋、由見羽林抄、

〔西宮記正月上〕節會裏書○中略 延喜十八年正月、太子參上、帶刀著位袍、先例可ㇾ著黄袍、

〔蓬萊抄〕正月朔日、所司供御藥、○中略 今日裝束、束帶如ㇾ常、依ㇾ爲節會日、用巡方魚袋、二三日者、用丸鞆帶、

〔年中行事秘抄正月〕節會裝束事 公卿飾劒、有文玉、金魚袋、 殿上人巡方、銀魚袋付第三石、但依服闇平、 衞府將佐卷纓冠、缺腋袍、螺鈿劒、巡方、魚袋、六位衞府平裝束、麻鞋、平胡籙、

〔西宮記正月上〕節會、○中略 天皇出御南殿、(中略)女藏人等供奉、著摺衣領巾裳等、

〔友俊記〕年中御作法の大概物がたり○中略 一夜に入て元日の節會おこなはる、○中略 播部寮內々筵道布筵をしき、柱ごとにかけてだいをまうく、女孀ひとつかはらけに燈をかくすべらかしひと丶へていなり、剋限出御、あり、命婦、○中略 內侍、○中略 典侍、○中略 いづれも五ッ衣、はかま、裳、單、十二ひとへといふていなり、世にいふ大すべらかしびん出せるていなり、下の小袖は、白き事は定りたる事なり、

〔後二條關白記〕寬治五年正月一日辛酉、人々參內、○中略 予藤原師通○ 飾劒并有文帶魚袋等、靴沓前一兩

服裝

一日迄可伺定由治定、

〔二水記〕大永三年正月一日、今夜宴事難被仰武家、用途難事行由被申、仍爲禁裏被行了、

〔康雄卿記〕天文十九年正月五日、從周防國、〇大內義隆元日節會、叙位、白馬、踏歌、此等ニ二百貫京著、每年也、未京著間未下也、

〔忠利宿禰記〕寬永十二年正月元日癸丑、元日節會御下行之事、　壹石、內侍所御最花、　三石、獻料、長橋殿、　壹石、髮上得選、　五斗、闈司、　五斗、女孀、　壹石、主殿司、　壹石、大外記師生朝臣、　壹石、官務忠利、　壹石、造酒正、　壹石、少外記、　壹石、少史、　壹石、少內記、　壹石、出納、　壹石、內豎、　五斗、裝束司史生、　三斗三升三合、外記史生、　三斗三升三合、外記史生、　三斗三升三合、左官掌、　三斗三升三合、左官掌、　三斗三升三合、右官掌、　三斗三升三合、右官掌、　壹石、陣官人㑨田、　壹石、陣官人戸嶋、　壹石、外記召使、　壹石、官務召使、　五斗、大藏省、　三斗三升三合、木工寮、　貳斗、掃部寮、　壹石、小舍人兩人、　五斗、御厩、　五斗、御厩、　五斗、主殿新大夫、　五斗、主殿、　三斗三升三合、南座、　三斗三升三合、南座、　三斗三升三合、大舍人、　壹斗六升六合、衞士、　三斗三升三合、外記史部、　三斗三升三合、官務使部、　五斗、使人、　壹斗六升六合、修理職、　六斗六升六合、四府餅請取役、　三斗三升三合、餅立官人、　三斗三升三合、御掃除料、　貳斗、造酒司、　五斗、松明、　六斗六升六合、饗膳、大膳職　四斗、幔、　四斗、南殿并陣掌燈、　八斗、幔、　貳斗、圖栖座、　貳斗三升三合、版二ツ、　五斗、陣疊、　三斗、結燈臺、　貳斗、內辨外辨祿物、　三斗、圖書寮、　三斗三升三合、小板敷疊、　合參拾七石六斗五升貳合

〔後水尾院當時年中行事〕上正月朔日、〇中略節會事具するのよしを申せば、亦清涼殿にならしまして、御そく帶ありて出御、これよりさき內侍二人、命婦二人、便宜の所にて髮上す、二のうねめこれをやくす、四のうねめ合力す、

召使代了、

〔親長卿記〕文明十年正月一日、今夜被行平座、○中略爰平座用脚、自武家下行之間、六位外記史御訪三百疋也、仍自官方望申候上、近年自外記局兼帶史外記、康澄參陣之間、六位史不參陣、不便之至也、可被召加之由申之、仰傳奏勸修寺大納言、所詮三百疋御訪相分可被行兩人、貫馬口所存者可付一方云々、舊冬召仰兩人康澄、盛俊、之處、於盛俊者雖爲半分可參勤云々、於康澄者半分之儀難計云々、仍當日猶申所存、及臨期不參、盛俊史之外記不參之間、及闕如之間、急帶外記之事、先例之由申之奏聞、仰云、有先例者、及闕如之上者、可下知之由有仰、　十六年正月一日、及晚平座、辨御訪事到來、仍各平座參仕之輩御訪下行歟之由、尋貫馬傳奏日野一位貴顯之處、六位外記并陣官人等未下行云々、仍今夜不可參由申遣訖、然間爲申合、凌雪、○中略詣柳原許、參內云々、卽參長橋口、勾當與日野二位種々申時分也、仰ニハ平座參仕之者、一向ニナドヤ不下行、越度之由有仰、相殘卽可下行由、自御倉申候間下行云々、旁傳奏進退不可說之故歟、自日野侍從政資朝臣課役貳千疋可致其沙汰、以其足可付進之由、自御倉答云々、予申云、然者先被尋日野治定可令沙汰歟、其儀爲必定、可致他足了簡之由予申了、仍尋遣日野云々、○中略平座總用之事、武家來下事、及再往問答傳奏、雖然無其詮處、堅令催促有其沙汰歟、又不然者爲傳奏引違有返答者、予以他足可致沙汰之由命了、尤可然云々、仍談長橋局、來五日有所用之物、先可借給云々、其子細仰日野一位、來五日中難事行、十五日之內必可致其沙汰云々、申其子細不可叶、來十日之頃可進云々、卽又仰一位、可致了簡云々、仍四百疋自長橋借給之、百疋者下行殘云々、仍盛俊三百疋、陣官人三百疋下行。了、

〔實隆公記〕長享三年○延德元年九月廿七日壬午、都護卿書狀云、節會○元日節會再興事省略條々、中御門大納言予等、相談可治定由、女房奉書到來云々、　廿八日癸未、午後向都護卿亭、中御門大納言、帥、甘露寺中納言、藏人右少辨宣秀等在座、節會事諸司注進御訪事、調進物事等、中御門亞相書之、各談合、來

用途

掌燈、(同上)軾(井)薦、(掃部寮)黃緣半帖、(同上)筵道、(同上)御粧物所小筵、(同上)御殿、(自御藏沙汰之)殿上掌燈脂燭、(同上)國栖座、(南座)版、召使小板敷疊、(出納)陣疊、(大藏省)褥物、(大藏省)結燈臺、(木工寮)宣命使、(圖書寮)打板、(修理職)布毯、(內藏寮)御草鞋、(戶屋主)右節會調進物也

〔公家年事(中正月)〕元日節會　晴御膳、內膳司、腋御膳、御厨子所預、擺膳、大膳職、松明、庭燎、幔、火櫃、生炭、南殿(井)陣掌燈、以上主殿寮、　軾(井)薦、黃緣半帖、筵道、御粧物所小筵、以上掃部寮、　御殿(井)殿上掌燈脂燭、以上御藏、　國栖座南座、版召使、殿上疊出納、小板敷疊、陣疊、褥物、以上大藏省、　結燈臺木工寮、宣命紙圖書寮、打板修理職、布毯內藏寮、御草鞋戶屋主、見參祿法外任奏御酒勅使、交名、宣命、

〔後二條關白記〕寬治五年正月一日辛酉、南殿御裝束次第、(今日)西中間內地邊立幄云々、壁代懸之云々、御幄東北邊大宋御屏風一帖立之、件御屏風者內辨進奏之處也、燈臺立中央間、當左右柱被立、猶先例可相尋云々、殿下作法、如攝政儀云々、御幄中丑寅角方令敷菅圓座被御座云々、三條殿寢殿無御幄云々、廂敷上敷、上有茵云々、鏡臺被立、鏡宮內納之云々、不懸臺云々、寢殿西壺方二間有障子云々、不出御几帳云々、

〔康富記〕享德三年正月一日癸丑、節會也、○中略　召使不參陣、官人勤代、當時召使宗岡、行寬、久繼也、而無俸祿、不被下年中御訪者、年始出仕難治也、始終無俸祿者可辭職之由、自去々年冬申入了、去年正月者、爲年始先可致出仕、一途可被計下之由、雖被慰仰、无其驗之間、自去年秋時分捧訴狀堅歎申、所詮无御計之一途者、不可奉公之由申切、今日不參也、此御訪事、自公家被申武家、武家已被仰付伊勢備中守、可有其左右時分也、可御事欠之上者、今夜先可被用代之由、頭辨右少辨等被示合局務、先例上召使不參之時、或陣官人、或掃部寮官人等勤代之由、職事等有談合、被召仰陣官人之處、官人不可勤代之由申子細之間、重被仰下云々、就事欠代事被仰下之處、不應上命尤緩怠也、然者可被止陣官人職也、關白被召具之御隨身有之、以被御隨身可被改補陣官人、早可退出之由被仰下之間、陣官人勤

標、承明門東西壇上、東西第二間、立王四位五位、臣四位標、第三間立臣五位標、並西以東爲上、東以西爲上、　承明門東西內掖各鋪薦蔣、上各置草墩、(闈司座北面)移鑰鈴印御辛櫃、置宜陽殿西廂板敷、　長樂門南面東掖第一間東柱下、設外辨親王公卿座、東西行立兀子、獨床子、簀子敷床子、(南面西上)其南壇下庭中立白木床子二脚、(少納言辨座)其東立二脚、(外記官史生座)並七尺爲間、(西面北上)各立前床子一脚、(近例不見)　雨儀、從公卿座差東去、立少納言辨床子、其東差去各立外記史、外記、官史生、官掌、召使床子、並西面南上、　承明建禮兩門前、差南去東西行張班幔各二條、長樂永安兩門前、差北進各張同幔一條、　宜陽殿東庭御輿宿小舍爲皇太子休幕、次掃除舍內、身屋南方張承塵、(以帛爲之)四方曳班幔、(東南西面、以廂柱爲限、)北立幔柱、　近例、依太子不參上、無件裝束、　建禮門內東西掖差東西去、各立七丈幄二宇、敷座、(東圖橋、西倚四、)

〔故實拾要 三〕元日節會　凡節會ノ時ハ、太子御束帶ニテ紫宸殿ヘ出御アリテ、御帳臺ニ著セ玉ヒテ、節會ノ規式執行ハルヽ事也、又御帳臺トハ、白絹ヲ以如敦帳仕立タル物也、其一幅毎ニ唐鳥唐花等ノ縫アリ、紫宸殿ノ南ノ方ヘ向タル方ヲ一方打合ニシテ御帳ヲ垂ル也、自是天子御帳ニ入玉フ也、又御帳臺ト云ハ、出家ナドノ用キル倚子ノ如クナル物ナリ、是ヲ御帳ノ內ニ安置ス、是ニ天子皇居シ玉フ也、又此御帳ノ前ニ駒犬二疋置之也、凡其嚴儀如神前、又御帳ノ東北ノ方ニ圓座ヲ敷、小屛風ヲ以構之、是關白伺候ノ座也、又紫宸殿ノ階ノ前ノ南庭、五六間四方ノ四隅ニ、龍頭ノ瓶子、鳥頭ノ瓶子ヲ置、節會ノ規式、於此內執行ハルヽ事也、此外地下ノ諸司等ハ、外ノ於御庭事ヲ行フ也、又同ジ御庭ノ階ノ前ニ、中將少將御旗ヲ持テ、數輩二行ニ藥木ニ著テ候ズ、是天子ヲ奉守護也、又龍頭ノ瓶子、鳥頭瓶子ハ、瓶子ノ口ヲ龍頭鳥頭ニ拵タル物也、又節會ノ執行ハ、堂上家家ノ傳受アリテ、凡俗ノ不知事也、凡ハ俗家ニ於テノ節ノ饗應ヲ設クル事ニ同ウシテ、是ニ行ヒアル事也、故ハ節會ノ時、隨役ノ大臣公卿ノ諸臣ニ饗膳ヲ設クル也、所詮此式悉ク難記事也、〇中略　同調進物方　・晴御膳、(內膳司)腋御膳、(御厨子所預)饗膳、(大膳職)松明、(主殿寮)庭燎、(主殿寮)幔、(同上)火櫃生炭、(同上)南殿(井)陣座

（其南北以土器居座、亦切并鹽箸匙等、）　殿東面南階南砌上立兀子、（不鋪蘆蓆、內辨從殿下爲行事座、）　南榮簀子敷下御階東西、各鋪座二行、東辨、少納言、外記史、內記、官史生座、（件座以東爲上）　西殿上侍臣、藏人所雜色以下座、　殿東軒廊安殿上酒臺、西第一間第一柱南砌上、鋪毯代一枚、其上立案、（垂幔額）　其上鋪紺布、立胡瓶二口、（西向、近例只有一口、金銅鳳瓶、）（也、其東立幟、）　第二柱東立火爐、其頭立臺盤、其南壇下置酒器、第三間北頭砌上置藥器、其北壇下立火爐、　左近其東立案、其東居水器、　宜陽殿西廂北行第四間砌上中央、鋪蘆蓆、立兀子、（內辨大臣座、近例與柱平頭立之、）　左近陣座南庭中央東西行、曳班幔二條、（一條始從紫宸殿東面北階南端、東行竟庭中、一條其東端幔柱南去三許尺、北西進立幔柱、東行竟宜陽殿西廂南端、）　同殿西廂板敷南西二面張班幔、　春興殿南廊西面結菅貫、張同幔、（大膳職辨備所）　又從右近陣東南角溝東方、北行隰射場殿西南角柱、更東折從同殿東南角柱、亦北折至軒廊東第二間西柱、張同幔、（右近陣東南角以北立幔）（柱、射場殿西南角以東至于北廊第二間西柱、鋪菅貫、）　又從月華門內南掖蔀上、南行張同幔一條、　又從安福殿南行、（大膳職辨備所）（在此內、）　更東折從朔屋東北角南折、至于永安門西掖張同幔、　承明門內東西掖、東西行、各立五丈幄一字、（木工寮運調度、大藏省立幄、當承明門東砌、西進二許丈立東幄西柱、當西砌、東進二許丈立西幄東柱、）設侍從諸大夫座床子幷黑漆臺盤、各立二行、辨備饗饌、　當幄北東西行、鋪蘆蓆一枚、其上立案、（有臺、覆紺布、懸同帽額、）　其上各立胡瓶二口、（北向、當東幄東第二間、西幄當西第二間、）　東幄東北、西幄西北、陳列酒漿器、（並比置酒器、次置藥器、）　若雨儀、東從春興殿北第二間中央、南行立床子臺盤各二行、西廂南第三間西向立胡瓶二口、安福殿東廂亦准此、　近例以胡瓶立砌北也、若立砌者、無公卿雨儀路歟、　當日早朝、中務錄入從日華門、尋常版位北去一許丈、置宣命版位、（雨儀置宣陽殿西廂北行第二間中央砌石上、）　式部丞錄率史生省掌等、入從永安門立標、尋常版位南去五尺許、東折二丈二尺立親王標、南大臣標、次大納言標、（其東去丈三尺、三位參議標、南去立散三位標、南去參議標、並七尺爲間、）次臣四位參議標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標、（各以八尺爲間）　馳道西立王四位五位標、臣四位五位標亦如之、（其丈尺准東）　雨儀、宜陽殿西廂、宣命版位、東去二尺立親王標、東去三尺五寸大臣標、東去三尺五寸大納言標、東去一尺五寸、更南去三尺、中納言標、其南去四尺、更東去二尺、三位參議標、其南去五尺散三位標、南去三尺、東折一尺、四位參議

去五許尺、西行二間立通障子二枚、其西一間立太宋御屏風一帖、（南面）従其御屏風西端南折至身屋西第一間東柱下、南行立御屏風三帖、（東面）御帳後鋪緑端小帖二枚、通障子北鋪同端長帖一枚、其西立壺床子二脚、（壺床子、其體片面圖如鼓、長三尺、廣一尺五寸、高一尺許、有三足、）御帳内御座南、立朱御臺盤一脚、御帳南差西去、立小臺、（北邊御帳立也）上敷兩面端半帖、其上立朱漆御臺盤一脚、（近例件御臺盤上有面帊、四角置鎮形鎮子云々、）其南置緑草墩、（陪膳采女座）南廂西第二間差南去東西行、鋪簀四枚、（近例依無草鋪説也、亦只有二枚、）其上雙立朱御臺盤二脚、南臺盤居胡瓶一口、（胡瓶酒瓶也、見史書、）北臺盤置酒海御盞杓等、（盞金銅、近例件兩臺盤上有面帊、四角置鎮形鎮子、近代北件臺盤居胡瓶、南臺盤置酒樽等、）南臺盤西南角立八足机、其上居唐瓶子三口、（盛三獻御酒、近例不見、仍件御酒等、自御膳宿供進之、）北臺盤西頭、置水盤并黒漆炭取火爐等、（近例不見）凡件南廂御酒具等、懸御簾時或立之、或不立之、或曰、雖懸御簾、御南殿者、御膳時可立之云々、仍尋前例、雖不御南殿、猶有立時云々、慥可尋前例、北障子北東西行雙鋪小筵二枚、其廻立太宋御屏風二帖、（東向、開戸）其内立赤漆小倚子、（爲御装物所）殿母屋東第三間、西柱北面中央北去（北去開、至倚子北足、）五尺五寸設皇太子座、東西行鋪紫綾毯代、立平文小倚子、（西面）其上鋪唐褥茵、其前立朱臺盤、康保元年十一月二十日御記曰、舊例皇太子不參上之時、唯立其倚子、不立臺盤、又皇太子未元服時、不設其座、雖元服後、有故障時、又不立、東第一二三并三間北障子後、設侯膳所、（第一間西向立厨子、第二三間采女侯所、）近例太子不參上、仍無此装束、

當御帳東第二間中央、東西兩行設親王公卿座、鋪紺布擬綸毯代、（皇太子不侍之時、第二間西柱西進二許尺鋪之、）立兀子、獨床子、簀子敷床子等、（北親王、參議座、南大臣、大中納言、三位參議、散三位參議座、皆西上對座、）近例以件紺布擬綸毯代、敷臺盤下、不敷兀子下就也、亦件公卿座指東南斜行立之、仍簀子敷床子（南）迫中間南柱各有敷物等、（親王大臣料紫面、件料赤、立第一臺盤南北、大中納言料黄色（以上兀子）三位參議、散三位者、獨床子、四位參議者簀子敷床子、並黄端茵、近例不見、獨床子就也、）又近例、親王、大臣料、（面兩）大中納言（紫）就也、（大臣員數雖多、兩面兀子不立於第二臺盤前、又無親王時、不可立坐兩面敷、）其前立朱漆臺盤五脚、辨備饗饌、（近例立四脚、四尺四脚、八尺一臺盤、第一臺盤大臣并親王料、第二三四納言料、八尺參議料、其饌物者、以七寸朱漆盤、盛菓子、每盤四尺一臺盤六坏、八尺臺盤十二坏、其菓加久縄一坏、餲餬、粘臍各一坏、大柑子一坏、甘栗一坏、干柿一坏、椿餅一坏、或供、當時所在、）

前一日、內匠寮官人率雜工等、構立御斗帳於豐樂殿高御座上、立軟障臺九基於高御座東西、（五基高御座東四四間、一基當西一戶立、三基立殿西二間、）清暑堂東西、張調布為蓋代、其下設御座、

〔延喜式三十大藏〕元正、（中略）豐樂殿張庇蓋、懸繡額、（繡著料綵同大極殿）東西廊門南左右幷諸門懸屏幔、

〔延喜式三十八掃部〕元日、（中略）朝賀畢賜侍從已上饗、官人率掃部昇豐樂殿、供御座、南廂西第二間敷疊四枚、（為御酒壺下敷）北廂中央西間敷細貫席二枚、立御屏風二帖小倚子、為御裝物所、高御座東三間懸軟障、西二間立通障子、西一間、幷西身屋妻二間懸軟障、（並內匠寮立臺）御座西第二間南面設皇后御座、東第二間西面皇太子御座、第三四間東南行參議已上座、相對以乾角為上、通障子內立草墪褰床子、幷敷帖為內侍已下座、殿東階下少納言辨外記史內記等座、西階下侍臣座、逢春門內南北鋪蘆蓆、置草墪為闈司座、顯陽承歡兩堂侍從座、以北為上、樂人座於庭中、（臨奏樂時設之）又清暑堂東局鋪滿葉薦席、立御屏風十帖、中央鋪毯代、雙立塵蒔大床子二脚、（東西妻）其上鋪錦茵二枚、南壁外鋪葉薦幷帖、西局鋪滿葉薦幷長帖、為女官候所、（餘節亦同）

〔江家次第一正月〕元日宴會

當日平明、令主殿寮掃除南庭、南殿北廂立御障子、（件障子、尋常可立、而近例除、南殿有事日之外、故置於南殿西御膳宿、件御膳宿內匠寮官人、隨身參入開之、並藏人催之、）御帳懸帷、（掃部女孺供奉之、上東南坤西五面帳、垂乾北艮三方帷、藏人催之、）仰左右衛門府、從長樂、永安兩門令敷砂、（左衛門長樂門、右衛門永安門、並裝束司仰左右近衛陣、令開之、）撤去東西火炬屋、（東置日華門北腋、西置業宜殿西腋、主殿寮役之、）次上南殿格子、（掃部女孺供奉）洒掃殿上、（主殿仕女奉仕）置殿東廂布障子二枚於北廂、（掃部寮官人率史生以下奉仕、近代無件障子、仍無移置之儀、）身屋九間內四面壁代帷褰之、（若天皇不出御之時、從身屋東第四間西柱南北行、橫懸簾、西六間身屋南同亦懸之、御簾內當御帳東、立亙太宋御屏風、件簾木工寮奉仕、錦額、）北障子東戶北立御屏風一帖、（東西行南向、若皇太子不待之時、閉戶不立御屏風、）次裝飾御帳帷、（掃部、女孺供奉見上、）次撤尋常御倚子、鋪唐錦毯代、立平文御倚子、鋪唐錦褥、（近例、依無唐錦毯代、敷二色綾、不可然歟、亦鋪綾繝端織物褥、訛也、）左右各立置物御机、（各垂纈、平文歟、見天德四年十一月二十日御記、）御帳東北去五許尺屬北障子、立太宋御屏風一帖、（西向）御帳西北角柱下北障子南

日被示、隨式載其由、又天永式有其狀、而一日以消息重尋申之處、不可加元日祿之由示給、仍式清書停其狀、而今日給兩方祿如何、令申云、後宴日加元日祿之由、前日令申了、而一日重被尋仰之旨存也、口事申合口其由也、尤僻事也、但於式不委事者也、不加元日祿之由不注、非强難歟、但件式備外記局注入、於件注可被返納歟、重命云、無此命之口先件、式可被直字等有少少、仍可後清書也、然者其次可入件注者、加賜元日祿云々此五字也、

節會之殿

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年正月戊寅朔、廢朝、雨也、宴五位已上於朝堂、

〔續日本紀 十聖武〕天平元年正月壬辰朔、宴群臣及內外命婦於中宮、

〔續日本紀 十一聖武〕天平六年正月癸亥朔、天皇御中宮宴侍臣、饗五位已上於朝堂、

〔續日本紀 十八孝謙〕天平勝寶二年正月庚寅朔、是日、車駕還大郡宮、宴五位已上、賜祿有差、自餘五位已上者、於藥園宮給饗焉、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶五年正月癸卯朔、廢朝、天皇御中務南院、宴五位已上、賜祿各有差、　六年正月丁酉朔、宴五位已上於內裏、賜祿有差、

〔類聚國史 七十一歲時〕弘仁十一年正月甲戌朔、皇帝御大極殿受朝、文武王公及蕃客朝賀如儀、宴侍臣於豐樂殿、賜御被、

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年正月壬子朔、天皇御大極殿受朝賀畢、宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、

〔文德實錄 五〕仁壽三年正月壬辰朔、帝御大極殿以受歲賀、還御南殿、賜宴侍臣、皆如常儀、

〔日本紀略 一醍醐〕昌泰二年正月一日乙未、天皇御南殿、宴群臣、

〔中右記〕嘉保二年正月一日、略○中次節會、天皇御南殿云々、

〔百練抄 四後朱雀〕長久四年正月元日、節會已下於官廳被行之、以正廳擬紫宸、

〔儀式 六〕元日御豐樂院儀

調度及裝飾

略○中訖更宣云、今日波正月朔日乃豐樂聞食須日爾在、又時毛寒爾依氐、御被賜止久宣、若雨雪者、時寒之上可加雪毛布流之詞、皇太子先稱唯、次親王以下俱稱唯、訖皇太子先拜舞、次親王以下復然、他皆效之訖著座、中務大少輔相分執札入同門、大輔北扉、少輔南扉、各立櫃東西頭、內侍先取御被賜皇太子、皇太子先再拜、今唯稱親、下亦同之、下自東階、中務唱名賜親王以下、一一再拜、經顯陽堂南、出自延明門、賜群臣祿訖、所司獻餘物於內侍、卽於殿上、女史唱名賜內命婦等、賜見參人、

〔延喜式縫殿十四〕元日略○中節會、賜親王已下被一百條、別丈五尺一綿八百屯、別屯八預前縫備、當日持候、中務唱名、寮卽頒給、其有殘者、依例行之、

〔西宮記正月上〕節會、略○中王卿復座給祿、內侍率太子祿、紅衾一條、內藏寮獻之、出自軒廊御輔具、居太子座北頭、太子下座跪、揖笏小拜、把笏出東階給、宮司中務輔唱見參、王卿各向祿所、縫殿頭授之、各取祿小拜、右廻出日華門也、(中略)今日祿遣渡內侍所、職有追加宣旨、給編元日祿也、殿上人料度藏人所、

〔江家次第正月一〕元日節會、略○中縫殿寮立祿韓櫃、入自承明門、列立左右仗南、○中略中務輔召唱、執簡立祿櫃下、近代不見、群臣下殿、列立日華門、侍唱、跪進寶前上、揖笏取祿、縫殿頭以下授之、一拜退出自日華門、縫殿頭取納言以上祿、助取參議祿、允取非參議祿云々、

〔公事根源正月〕元日節會、略○中光仁天皇寶龜四年の春よりは、五位以上にふすまを給ひけり、今もさやうの心にて、事はてゝ祿を行事有、

〔貞信公記〕延長九年正月一日、停止節會、略○中其祿法准十六日、是嘉祥三年十一月十九日例也、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年正月一日乙酉、止宴會、依諒闇也、左大臣奏侍從巳上祿法等下給、

〔逢幸故實抄〕元日節會、內辨誤給目錄之時、稱是何物哉之由例、　長寬元正一、右府召大宮宰相給目錄、後聞、相公曰、是何物哉、大納言殿令目給、相公下殿了、今日宰相不著祿所、仍不給、而大二條殿爲內辨召經信卿給之、其時經信申、是何物哉云々、

〔長秋記〕大治四年正月三日壬午、今日御元服後宴云々、略○中內大臣云、元日祿、後宴祿相加賜之由、前

上にゐて、嶺けはしく谷ふかゝりける所なれば、路さかしく侍故に、常に來朝する事不叶となん申ける、其後は、常に參て年魚やうの物を獻けるとかや、今の國栖の奏とて、歌を謠ひ、笛をふきならすは、吉野より年始に參たるといふ心なり、

〔日本書紀應神十〕十九年十月朔、幸吉野宮、時國樔人來朝之、因以醴酒獻于天皇而歌之曰、伽辭能輔珥、豫區周塢茹區利、豫區周珥、伽綿蘆淤朋瀰枳、宇摩羅珥、枳虛之茂知塢勢、磨呂俄智、歌之既訖、則打口以仰咲、今國樔獻土毛之日、歌訖、卽擊口仰咲者、蓋上古之遺則也、夫國樔者、其爲人甚淳朴也、每取山菓食、亦煮蝦蟆爲上味、名曰毛瀰、其土自京東南之、隔山而居于吉野河上、峯嶮谷深、道路狹巘、故雖不遠於京、本希朝來、然自此之後、屢參趣以獻土毛、其土毛者、栗菌及年魚之類焉、

〔源平盛衰記二十五〕館奏吉野國栖事

吉野國栖トハ、舞人也、國栖ハ人ノ姓也、淨見原ノ天皇大伴皇子ニ襲レテ、吉野ノ奥ニ籠リ、岩屋ノ中ニ忍御座ケルニ、國栖ノ翁、栗ノ御料ニウグヒト云魚ヲ具シテ、供御ニ備ヘ奉ル、朕帝位ニ上ラバ、翁ト供御トヲ召ント、被思召ケルニヨリテ、大伴ノ皇子ヲ誅シ、位ニ卽テ召レシヨリ以來、元日ノ御祝ニハ、國栖ノ翁參テ、桐竹ニ鳳凰ノ裝束ヲ給テ舞フトカヤ、豐ノアカリノ五節ニモ、此翁參テ、栗ノ御料ニウグヒノ魚ヲ持參シテ、御祝ニ進ラスル、殿上ヨリ國栖ト召ルヽノ時ハ、聲ニテ御答ヲ申サズ、笛ヲ吹テ參ルナリ、此翁ノ參ラヌニハ、五節始ル事ナシ、斯ル目出キ樣ドモ、兵革火炎ニ率ラズ、

〔小右記〕寛弘八年正月一日、四方拜如例、〇中略次々事存例、無國栖奏、依不參上也、近年如之、是大和守賴親時被調、已不參上云々、

〔內裏式上〕會

皇帝受群臣賀訖、遷御豐樂殿、饗宴侍臣、〇中略及宴將終、內藏、縫殿兩寮、分入延明門、置納被櫃庭中、〇中

國栖奏歌笛

〔公事根源正月〕元日節會、○中略また腹赤の贄とて、魚を筑紫より奉るなり、昔は獻て節會などに供じけるにや、腹赤の食樣とて、くひさしたるをみな取渡して食たり、景行天皇の御宇、筑紫の國宇土の郡長濱にて、海人是を釣て奉る、其後聖武天皇の御時、天平十五年正月十四日、太宰府より是を奉けるよりして、年毎の節會に供ずべき由定置たるなり、腹赤とはますと申魚の事なり、

〔新撰六帖一〕ついたちの日　家良

四の海なみしづかなる御代なればはらかのにえもけふぞなふなり

○按ズルニ、腹赤ノ事ハ、動物部ノ魚篇ニ詳ナリ、

〔文德實錄六〕齊衡元年正月丁亥朔、○中略太宰府貢腹赤魚、承前元日貢之、延至今日、緩之故書、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月戊午朔、中務省獻七曜曆、宮內省藏氷樣、太宰府腹赤魚等、付內侍奏、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月庚戌朔、藏氷厚薄不奏、以去冬不冱寒、凌室空虛也、

〔小右記〕天元五年正月一日甲午、七曜曆奏、氷樣、腹赤等奏、依仰付內侍所、其由仰內辨左府、

永觀三年正月一日丙午、御南殿、其儀如常、○中略仰云、御曆奏可付內侍所、氷樣□□早可令奏者、二日丁未、腹赤今日到著、

〔中右記〕天永三年十二月十日癸巳、今日御元服定也、○中略藏人辨傳左府云、正月元日諸司奏、依御元服雖無節會、先例被付內侍所也、而從御所可被仰歟、將又大臣可奏歟、左府被申云、猶上卿可奏事由者、此後人々被退出、

〔百練抄十三後堀河〕貞永元年正月一日、節會不奏氷樣、去年不寒之間、氷室等無其實云々、

〔公事根源正月〕元日節會、○中略一獻には、國栖歌笛を奏す、是は吉野の國栖人の事なり、應神天皇十九年十月に、吉野の宮に行幸有し時、國栖人參て、一夜酒を奉りて、歌をうたひける、此くず人、山のこのみを取くらひ、又かへるを煮て名をば毛瀰となづけて、美味有とて食けるとかや、吉野の川

のついでに奏聞するなり、厚さ薄さいか程の寸法に侍るなど、こまかに奏して、其ためしとて、近頃は石かはらのわれを奉るなり、延喜式にも、氷池、風神の祭など侍り、氷のおほくゐるは、聖代の驗、氷のゐぬは、凶年にて侍れば、氷の御所とて、大法秘法を行はれしにや、今日もよく氷て目出よしのためしを奉るなり、昔仁德天皇の御宇、六十二年五月に、額田大中彥皇子、鬪鷄と云所に狩しに出行て、山にのぼり、野中をみやり給しかば菴を作りたる樣なる所あり、人をつかはしてみせ給に、窟也と申、其時かの山のあたりに侍る人をめして、とはせ給ふに、氷室なりと申、皇子のいはく、其氷をばいか樣にしてをさめたるにか、答て云、土を一丈あまり堀て、草を其上に葺て、茅萱など厚取敷て、氷を置たるに、氷ていかやうなる大旱にもとけず、是を取て熱月にもちゐるとなん、其時皇子、此氷を仁德の聖の御門に奉せ給ければ、なのめならずに叡感有し由、やまと文などにものせたり、是氷を奉る始なり、其後季冬ごとに是ををさめて、國々所々に氷室を置れ侍しなり、

〔日本書紀十一仁德〕六十二年、是歲額田大中彥皇子獵于鬪鷄、時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬、仍遣使者令視、還來之曰、窟也、因喚鬪鷄稻置大山主、問之曰、有其野中者何窟矣、啓之曰、氷室也、皇子曰、其藏如何、亦奚用焉、曰、堀土丈餘、以草蓋其上、敦敷茅荻、取氷以置其上、既經夏月而不泮、其用之、卽當熱月漬水酒以用也、皇子則將來其氷獻于御所、天皇歡之、自是以後、每當季冬必藏氷、至春分始散氷也、

〔江家次第一正月〕元日宴會〇中略　氷　山城國德岡、大和國都介、河內國更占、近江國龍華、丹波國神吉、

〔新撰六帖一〕ひむろ　家良

立初るむ月のけふのひのためしたえずそのふる御代もかしこし

〔年中行事歌合〕三番　左　氷樣元日　入道大納言忠嗣

けふぞみる年は昨日にくるす野のひ池の水のふかき心を

諸司奏

〔孝亮宿禰記〕慶長十八年正月一日庚申、今日元日節會無之、依假殿皇居也、

〔百一錄〕延寶二甲寅歲正月元日、節會不行、依御假殿也、

〔宣胤卿記〕長享三年正月一日庚申、今夜節會、依諒闇可爲平座也、奉行頭中將實隆朝臣、雖相催依無用脚停止、於節會者、亂來廿餘年停止、至文明十六年被行平座之處、十七年以來依無用脚停止、末代之至爲之如何、其外朝廷百事諸社祭(春日祭日吉祭有之)悉以停止、亂來之儀也、再興有何年乎、雖年々記此事、非餘恨、又染筆、

〔親長卿記〕長享三年正月二日、去年無平座、(中略)亂後無節會、有平座、雖然近年又平座退轉、當年諒闇之間、幸可爲平座之處、依無用脚無之云々、

〔公事根源(正月)〕元日節會(中略)諸司奏とは、七曜の御暦、氷樣、腹赤の奏などの事也、七曜御暦をば、中務省より奉る、日月火水木金土、此七曜を注たるよのつねのこよみ也、

〔延喜式(十三大舍人)〕凡元日賜次侍從已上宴、豐樂儀鸞兩門開訖、闈司二人出自青綺門、分坐逢春門南北、舍人四人詣門外、第一者叫門曰、御暦進(止)(牟)中務省官姓名等門候(止)申、闈司進傳宣云、姓名等(乎)令申(與)、舍人稱唯、所司奏進御暦、訖撤案、又舍人進叫門曰、氷樣進(止)(牟)宮內省官姓名等門候(止)申、闈司奏之、舍人稱唯如前、所司奏進亦同、訖膳部水部等取氷樣腹赤御贄退出、又舍人四人與少納言候同門外、大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、(餘節准此)少納言替入、

〔延喜式(三十一宮內)〕凡藏氷之處、收氷多少、及氷厚薄、每處具錄、元日群臣未喚之前、省輔已上將本司入奏、幷進氷樣、其詞曰、宮內省申(久)、主水司(能)今年收(太留)氷合若干處、氷若干室、厚若干寸已下、若干寸已上、益(乎)自去年若干室、減(留)自去年若干室、供奉(禮留)事申給、又太宰府進(禮留)腹赤(乃)御贄一隻、長若干尺、進(良久乎)申給(登)申、

〔公事根源(正月)〕元日節會(中略)氷樣は、宮內省より奉る、去年氷をおさめたる所々の樣を、今日節會

腹赤、氷樣等、付内侍所、吉野國栖所進菓子付内膳司、

〔權記〕正曆三年正月一日丙申、攝政以下引參上殿上、依諒陰無節會、

〔日本紀略一十條〕長保二年正月一日己卯、停止節會、依去年太皇大后宮崩也、但左右大臣以下參入、有見參、　三年正月一日癸酉、停節會、依去年十二月皇后崩也、但有平座見參、　四年正月一日丁酉、無節會、依諒闇也、

〔日本紀略三十二條〕長和元年正月一日己巳、無節會、依諒闇也、有平座見參、

〔日本紀略後十四一條〕長元元年正月一日丁酉、節會、依去冬入道前太政大臣〈道長〇藤原〉薨後穢中、停止之、但有平座見參事、

〔殿曆〕嘉承三年正月七日、依諒闇今日無節會、

〔宣胤卿記〕文明十二年正月一日壬午、御藥亂中至今十餘年停止、節會諸社祭〈春日祭者無退轉〉諸公事悉以十餘年停止、何日有再興乎、無大亂靜謐之驗、末世至極無力次第也、委細不能記者也、

〔親長卿記〕明應五年正月一日庚辰、節會之儀可尋、此後聞、依無節會用脚、所司等不參、仍俄無節會云云、希代事歟、　七年正月一日、今日無節會、依無用脚云々、〈武家無進納之儀云々〉無事之時無節會之條、先規稀歟、

〔實隆公記〕文龜三年正月一日己巳、抑今日節會遂以不被行之、依無足也、不便々々、

〔宣胤卿記〕文龜四年正月一日甲子、節會不及沙汰事如年々、

〔元長卿記〕文龜四年正月一日、節會依無用途不被行之、

〔宣胤卿記〕永正三年正月一日辛巳、申剋許著衣冠參内番也、〈〇中略〉節會年々無之、依無用脚也、御即位已後六箇年無之、朝儀零落、不及事新記、　十六年正月朔日丙申、今日節會不及沙汰、

〔元長卿記〕大永五年正月一日、今日不出仕、節會無之、

停止

杜下、乍立授陪膳采女、（顔向丑寅、）采女取之進置御臺盤南妻、則拔笏頗退テ東ニ進寄テ當御前南庇、○中略跪奏云、○下略

〔長秋記〕大治四年正月三日壬午、今日御元服後宴云々、○中略一獻國栖、（件國栖事、去年習禮日、攝政幷頭辨執之、三獻後可奏者、是附北山抄也、可被存歟、同抄文云、元日宴一獻國栖云々、今所被行雖三日、尚元日宴也、仍一獻後行之、天永如此、）

〔百練抄（七二條）〕應保二年正月一日、日蝕、曆道、筭道相論、彙召諸道勘文、被問公卿、大略不可改正朔之由被申之、然而依正顯、二日行節會、

〔玉海〕建久九年正月一日己亥、今日依日蝕節會停止、　二日庚子、節會如例、內辨右大臣、昨日天晴蝕現、一昨日今日降雨、近代定例也、

〔深心院關白記〕文永二年正月一日辛未、日蝕正現、○中略節會等無之、　二日壬申、節會今日被行之、委者在別記、

〔後愚昧記〕應安二年正月一日、今日節會、二日朝被始行之、末代之體可謂不可說、雖日吉神輿在洛、（奉安祇園社、）節會出御如例、（延慶例歟、）

〔親長卿記〕延德二年正月一日、今日節會諸司下行、爲御衰日、○註略明日可下行之由可仰、若今日不給者、不可從役之由有申輩、節會可爲停止云々、仍各召諸司仰含、各領狀、　二日、午剋許節會事終退出、諸司公人等無一人之障碍、無爲之儀、就公私珍重々々、

〔貞信公記〕延長九年正月一日、拜天地四方、大納言以下來拜、又帥親王入坐、停止節會、又無小朝拜、親王公卿陣頭聊有飲食、非侍從、大夫皆預見參、

〔西宮記（正月上）〕節會裏書　延喜七年正月一日、依識子內親王薨無節會、公卿著宜陽殿、承和五○（一本五作六、）年芳子例、

〔日本紀略（五冷泉）〕安和元年正月一日乙酉、止宴會、依諒闇也、左大臣奏侍從已上祿法等下給、幷七曜曆、

延引

平家ノ人々、少々參テ被執行ケレ共、ソモ物ノ音モ不吹鳴、舞樂モ奏セズ、吉野ノ國栖モ不參、館ノ奏モナカリケリ、タマ〳〵被行ケル事モ、皆々如形ニゾ在ケル、

〔百錬抄九安德〕養和元年正月一日、無小朝拜、所々拜禮、節會無出御、止舞樂國栖奏、依南都火事也、

〔吉槐記〕乾元二年正月一日、節會出仕爲夜陰、○中略國栖留事、依御疱瘡幷神木事被止之畢、內辨下殿被催國栖、(被止曲、只歌許也、)

〔園太曆〕延文二年正月一日、後聞、今日節會懸御簾、無出御、依神木遷座也、無立樂國栖笛、只歌許云々、

〔後深心院關白記〕應安二年正月一日丁酉、節會內辨按察大納言仲房卿、外辨公卿五六輩云、○中略傳聞、國栖止笛奏歌、立樂停止、是依山門神輿在洛也云々、延慶例云々、

〔後愚昧記〕應安五年正月一日、節會內辨平中納言、○中略無出御歟、萬機旬以前之故也、○中略又國栖歌笛音樂等停之、

〔西宮記正月上〕節會裏書　延喜十一年正月一日、日蝕、二日節會、

〔柱史抄上〕元日節會　治曆四年正月二日成季朝臣記曰、昨日依日蝕不被行節會、今日所被行也但宣命狀載正月一日之由云々、

〔長秋記〕天永四年(○永久元年)正月一日、主上御元服也、　三日、御元服後宴也、巳刻參左大臣殿、例節會服也、○中略午刻左大臣殿參內、下官候御供、○中略未下刻主上出御、作法如例、

〔永昌記〕天永四年正月三日、今日節會幷御元服之後宴(今日依御元服、被兼行、)也、

〔中右記〕大治四年正月一日庚辰、今日天皇御元服、(御年十一)　三日壬午、小朝拜了、右大臣以下著仗座、○中略天皇出御、攝政令候御帳中給、○中略次下官先揖進出列前、徐步列南階東頭下揖、倚東檻漸昇、(進右足、)從簀子敷西行、(故民部卿俊明卿、天永上壽之時、進御前間、頗被敬屈也、其前人々無此事、申合殿下之所、被示給云、不可然也、(中略)今度下官付此仰不敬屈也、)入自西二間、立北酒臺東頭揖、采女入酒、出御酒盞、(銀御器有花盤、)予以兩手取御盞、自庇東ニ進寄テ出御帳間母屋西

停音樂

御儀　一御裝束事（御帳同四面、幷同南面以四垂御簾、）　一不供御膳事（不立御臺盤）　一近仗引陣事（直著胡床）　一御酒勅使不奏直仰之事　一宣命見參於陣見了、進立弓場奏聞事、

二年正月一日乙亥、節會、依爲御即位以前、無出御、御帳間南面、同西面垂御簾、

永正十四年正月一日丁丑、今夜節會再興云々、〇中略御即位依未被行、無出御、被垂御簾云々、御在位已十七年、御即位無總用、不被行、末代至極、爲之如何、

〔年中行事秘抄 正月〕節會事〇中略　御忌月例　國栖奏、源右府説、唯奏歌不奏笛、源戸部説、忌月御制作樂、注云、歌又同之、奏笛之説不得其意（天仁止音樂幷國栖笛）　參例（長元四七）

〔三代實錄 二十三清和〕貞觀十五年正月丁卯朔、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、停雅樂寮音樂幷吉野國栖風俗歌、以去年九月太政大臣〇源融薨也、宴竟賜被、

〔中右記〕大治五年正月一日甲辰、（欠日〇中略）無出御、懸御簾、（遷御此第之後、雖非御物忌、依欠日歟、〇中略）三獻內大臣被催樂、予申云、今年依永長二年例、可被止樂由、兼日所承也、如何、內大臣答被示云、止樂由未被仰下、仍所相催也、所被申尤理也、如外任奏被奏、以頭辨可止樂由、可仰內辨也、頭辨忘歟、內大臣起座被尋之處、初可止樂之由仰下云々、太解怠歟、

〔玉海〕壽永三年正月一日辛卯、晚頭攝政參入、其後公卿著陣、節會如例、〇中略抑依爲御忌月、不奏音樂幷國栖笛聲、此事先帝御時被宣下了、當今又可同、而重可有宣下哉否、大將成不審問遣大外記師尙許之處、事理重不可被仰之上、延久元年例又不然云々、今日又不被仰云々、然而諸司存而不奏也、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶三年正月一日丁卯、宴會無音樂、依東國兵亂也、

〔源平盛衰記 二十五〕館奏吉野國栖事

治承五年正月一日、改ル年立返タレ共、內裏ニハ東國ノ兵革、南都ノ火炎ニ依テ朝拜ナシ、節會バカリ被行ケレ共、主上出御モナシ、關白已下藤氏ノ公卿一人モ參ラズ、氏寺〇興福寺燒火ニ依テ也、只

入可停止行事者、法皇大怒、以爲關白所申行也、

仁平四年正月一日甲寅、節會御裝束用雨儀、上不出御、仍懸御簾、非御物忌、依御目事歟、

〔玉海〕文治三年正月一日癸卯、此日節會等皆用晴儀、式如例、〇中略　余向南殿、密々見節會儀、南殿懸御簾、依御忌月也、是定例也、事未訖之間余退出、

〔百練抄　十後鳥羽〕文治四年正月一日丁酉、節會、依御忌月無出御幷音樂、

〔百練抄　十二順德〕建曆元年正月一日、節會無出御、是爲御衰日之上、未被行萬機旬之故也、

〔百練抄　十四四條〕嘉禎二年正月一日己未、依春日御事、藤氏公卿不出仕、節會無出御、被垂御簾、

〔伏見院御記〕弘安十一年正月一日丁亥、今夜御裝束如出御之時、　三日己丑、關白參臺盤所申云、一昨日節會御裝束有違例之事、裝束師辨爲俊朝臣、昨今乍出仕、節會日不出仕、自由之至尤猥藉、召尋所存之處無陳方、兼又申秀氏、同不出仕、相尋之處、及深更之間、老耄之至、不叶出仕也、無出御之時、奉行職事仰其由、仍存知御裝束之樣、而今度奉行職事不仰無出御之由云々、此條猶不可然、其故者、萬機旬以前無出御之事定事也、今更不及仰其由、爲俊秀氏等不可遁者也、可有沙汰云々、可申院云々、

〔園太曆〕康永四年正月廿日、康永四年正月一日、今日節會、依東大寺八幡宮神輿在洛、幷神木動座事、三節會已下事、源大納言示送事、無出御、

延文二年正月一日、節會如例、委可尋記、後聞、今日節會懸御簾、無出御、依神木還座也、

〔後愚昧記〕應安五年正月一日、節會、〇中略　依神木在洛、氏公卿不出仕、又被懸御簾、定無出御歟、先々神木在洛之時、雖被懸御簾、三節之中一度有出御于簾內、而是者無出御歟、萬機旬以前之故也、

永和二年正月一日、節會等如例、節會無出御、依御忌月也、

〔宣胤卿記〕文龜元年十二月廿二日丙寅、元日節會、〇中略　無出御儀、幷服者參否事、尋申一條殿、〇冬良　御返事在左、〇中略　實是節會也、所存分無相違歟、不可有出御事ハ、依御卽位以前也、〇中略　節會無出

外記中原康純參云々、〇中略、抑平座事、諒闇年無節會平座也、御沙汰之次第如何、亂中儀不被經御沙汰歟、一向停止事者、不及是非事哉、

〔江家次第 正月一〕元日宴會（御忌月幷不出御儀〇中略）先奏外任奏、次奏諸司奏可付內侍所事、 應和四年正七 同三年正七 康保二年正七
一度申 應和二年正七 先奏諸司奏、次奏外任奏、 天德四年正一七 康保四年正一七 無御出時、諸司奏付內侍所、依不可有勅答也、（見延喜十六年御記、雨降日晚諸司不具等障御出時可申云々、）

〔法成寺攝政記〕長和二年正月一日癸巳、日晚節會初、無御出、是依御忌月也、以公信朝臣令奏諸司奏可付內侍所由、承仰仰外記、

〔左經記〕寬仁二年十二月三十日戊午、參攝政殿、〇中略、召大外記文義朝臣被仰云、明日節會大底可無御座幷樂等事、是依式部卿親王（〇敦康）薨也云々、

〔後二條關白記〕寬治七年正月一日己卯、雖御物忌、改御裝束、立御倚子、（殿上御倚子也、〇中略、）天皇無御出、宴會如常、

〔永昌記〕大治元年正月一日丁卯、依御物忌無小朝拜、節會無御出、

〔中右記〕大治五年正月一日甲辰、（欠日〇中略）從申時參內、（皇居三條京極第、去年十二月八日假屋還御也、〇中略）內辨宜後謝座、造酒正宗房、授空盞於大納言、又二拜了著堂上座、無出御、懸簾、（還御此第之後、雖非御物忌、依欠日歟、）

長承三年正月一日辛亥、後聞、節會入夜始、〇中略、依御物忌無御出、次第如例、

〔台記〕久安七年正月一日癸酉、小朝拜了奉仕節會御裝束、〇中略、及亥時至陣腋押笏紙、外記著陣、御裝束漸了、奏下外任奏待出御、良久無之、及子時、頭辨朝隆朝臣來曰、上既就寢、不可出御、仍施簾殿上者、今案、御忌月之外、非御物忌者必出御、尤有忌諱、內辨儀如常、〇中略、諸卿昇殿之後退出、〇中略、傳聞、及曉更、天子使藏人勸解由次官顯遠申法皇曰、今日宴會、依左大臣（〇藤原賴長）不參不出、明日若左大臣不參

靜謐之上者、節會等雖爲理運、皇居狹少無其禮、仍先任近例被行平座也、奉行藏人左少辨元長、上卿日野中納言(廣光)也、

〔晴富宿禰記〕文明十二年正月一日壬午、元日節會亂後無之、舊冬雖還幸土御門殿、南殿以下未及御修理、節會御裝束等全分不及沙汰、被行平座、

〔宣胤卿記〕文明十二年正月一日壬午、三陽之初節、四海之泰平、朝廷再興、家門繁昌、可在此春、珍重珍重、幸甚々々、○中略於當年者節會等、尤可有再興之處、當時作法、言語道斷式也、平座倘以不可被行歟之由、兼日有其沙汰、然兩三日以前可被行分治定歟、仍公卿數輩御問答、各固辭、別而昨日都護卿○親長來、被傳別勅之旨之間、楚忽申領狀了、當時之爲體、難述筆舌、思年始之祝詞、暫閣筆者也、○中略奉行藏人左少辨元長可始行之由、內々伺申、仍予下高遣戶、入宣仁門、昇參議座末(先揖、懸左膝、脫左沓、)著仗座、○中略次左少辨來仰云、不出給、依例行、宣陽殿御裝束事、此次召留仰之、次起座、○中略跪著沓、左廻揖、經壇上著宣陽殿、(第二間臺盤上兼居饗、兩度揖如常、)軾不及仰敷之、次辨元長著土庇座、(第一間西面端、)少納言不參也、次予目辨、辨起座持參盃、內豎(持酌、)相從、次勸盃如常、依無次座人、不及次酌、予飮了盃置座傍、辨於軾拔笏乍居揖退、次二獻、其儀如前、次箸下、三獻略之、次拔箸取笏、召官人二音、仰云、外記召、外記淸原賢親參軾、予仰云、見參、外記歸入持參見參、予拔取披見之、二通籠懸紙、如元卷之返給外記、外記如先插杖參進、予起座、○註略出宣仁門就弓場、○註略元長下小板敷出無名門來予前、予指笏顧外方、外記持參文杖、予取之、(外記取直進之、)取直傳元長、次拔笏氣色元長、元長退入昇小板敷、經上戶、自臺盤所妻戶付女房奏聞之、畢被返下、元長經本路來予前、○註略余指笏取之、令持外記、拔笏、次元長仰詞聞食退入、次經本路歸著宜陽殿、外記相從、座定之後指出見參、予披取之置前、以官人召辨、(其詞、左少辨此方へ、)元長來軾、下目六、次以官人召外記、下見參、(可召少納言、今夜不參故也、)次揖起座著沓揖退出、○中略平座事、諒闇年平座也、御沙汰之次第如何、

十三年正月一日丙子、平座(節會亂中亂後無之、)公卿侍從中納言、(實隆)辨左少丞元長(奉行也、)等也、少納言不參、六位

歲時部七

元日節會下　淵醉附

平座見參

〔左經記〕長元元年正月一日丁酉、傳聞、主上不御南殿、朝賀幷節會、其旨見去年十二月廿八日宣旨、但依貞觀長保例、有平座見參、其儀如二孟儀、裝束使公卿座於宜陽殿西廂、（○中略）上官座在春興殿北砌云々、未剋藤中納言、（朝經）大藏卿、（通任）左大辨、（定賴）新宰相（公成）右中辨、（經輔）少納言惟忠、資高、長經、右少辨（家經）等著座、諸司膳羞、（大膳進酒等）三獻畢、上卿召外記、外記賴言應召、（○中略）上卿宣、見參可進者、外記唯稱退出、取見參覽上卿、上卿被問云、左大臣不注申關白字如何者、賴言申云、是年來之例也、上卿進弓場奏聞了、歸座召少納言惟忠給之、惟忠給外記、令傳給縫殿寮畢云々、先是上卿被奏腹赤、氷樣、御曆奏等之後、皆付內侍所了云々、

〔親長卿記〕文明七年正月一日辛亥、入夜有平座、（元日節會不行、仍被行平座、兼勅聞云々、）奉行藏人辨、（政顯）上卿廣橋大納言、（綱光）少納言、（長直朝臣）辨政顯也、（○中略）

予案之、元日節會、依亂中每度不被行、仍被行平座、節會被行平座事、豐明之外無例歟、爲初度之間、元日節會可爲平座、召仰諸司、可爲如此歟之由存之、後日勸修寺大納言（敎秀）○於禁裏番衆所參會之時尋此事、且予存之趣語之、彼亞相云、誠可爲其分、仍兼日御敎書等、元日節會可爲平座、可被致沙汰之狀如件、如此仰官外記了、其故者爲初度之間、任例兩字略之訖、於仰詞忘却云々、

十年正月一日、今夜被行平座、去年依回祿陣座等不周備、公卿等時服不合期、仍不被行、當年已天下

之乘右大臣、萬里小路大納言、勸修寺中納言、烏丸中納言、甘露寺中納言、日野宰相、右著陣座、小倉大納言、綾小路中納言、中園宰相、菊亭三位中將等也、右不爲著陣奉行頭辨萬里小路、

〔章弘宿禰記〕正德三年正月一日己卯、元日節會、刻限申刻、著束帶參陣、入夜戌刻許攝政御參、不經床子座、暫攝政內辨先御著陣有之、（御座之事、茵大紋疊設之、通障子同設之、兼御茵疊等之事、古物見苦數候間、本宗ヨリ借請可設歟之由相窺之處、松陰被仰云、見苦數トモ、大藏省所持之古物可用由仰之、仍之古物用之、）內辨直令著端座給、先左大辨宰相壹人著之、內辨使參議召官人令敷軾、次頭右大辨倚長朝臣藏人方吉書持參、御覽畢使參議召辨下吉書給、辨覽畢起座、下史如例、今度官吉書不被覽之、直ニ節會被始、上卿以官人召大外記、問諸司參否、諸司外任奏奏之、次大外記持參外任奏、入筥、次內辨以職事奏聞、奏畢返給、內辨結之、次內辨以官人召外記返賜外任奏、（作筥）

〔輔世卿記〕安政四年正月元日甲寅、元日節會也、奉行光愛朝臣、早參胤保朝臣、長順、經之、豐房、藤原助胤、大江俊堅、大江俊昌、源常典、兩局大外記師身朝臣、左大史、（予）大外記師親、出納職寅朝臣、職修朝臣以下諸司如觸狀、刻限參集、但大膳職史生菅原叢成臨期依所勞不參、代大炊寮史生丹治義郁參仕、陣官人橘久芳所勞不參、替源元起參仕、各注折紙屆奉行、如例、使部安田參河椽、今井治部等參仕也、殿下小朝拜訖御退出、節會御不參也、雖然依奉行命不撤兩殿御座也、酉刻前、殿庭御裝束如例具間、申屆奉行了、晴設也、諸司樂所迄同時具間、同申屆了、酉半刻過、裝束使辨經之御裝束點撿、（予）從之、入夜聞令辨侍取立明了、戌刻過、被始陣節會、直臨期無出御旨、奉行被觸之、仰諸司了、

頭、〈去胡床南五尺、與東端平頭、北上東面、異位重行、〉里內庭狹之時、或立仗後云々、或立右、次宣命使就版、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣拜舞、次宣命使復座、內辨以下復座、拔著七下殿、或內辨宣命使外不歸昇、徘徊軒廊、直就祿所、次諸卿給祿退出、其儀、次第出軒廊、經宣陽殿代前、自蘆蘀東方到坤方立、〈艮向〉縫殿寮授祿之時、跪蘆蘀上、乍持笏取祿、〈左袖上橫置之〉乍居一拜、畢起左廻退、立於中門外、脫靴著淺履、天皇還御

〔信長公記十一〕天正六年正月朔日、〈中略〉去程に御節會廢而久敷無之、當時都之者、此式曾不存、然者信長公之御代に成て、上を敬奉り、月卿、雲客、公卿、殿上人、役者達へ御知行被參、諸卿達內裏に集て、二枝之根引之松を以て、正月朔日辰時に神歌を謠ひ、色々儀式有て、天下祭事有、洛中邊土之貴賤男女、かゝる目出度御代に生合、久絕たりし祭事執行し給ひ、難有御事也、

〔御湯殿の上の日記〕天正十五年正月一日、せちゑあり、內辨近衞殿、左大臣殿、御れん、御きよ、御さうかい、四はうばいにおなじ、ゑそく五でうためよし朝臣、五つじ元仲朝臣、きよくら人、せいくら人、ゑんくら人也、ゑんじ、ほうけん、めゝ、すけ殿、ながはし御もちあり、御下二人御とも也、御はいせんないし所のうねめ、二のうねめ、するのあちや也、

〔忠利宿禰記〕寬永十二年正月元日癸丑、元日節會晴、內辨二條殿左大臣康道公、外辨三條大納言實秀卿、西園寺大納言實晴卿、高倉中納言永慶卿、中山中納言元親卿、堀川宰相康胤卿、〈宣命使〉中山宰相中將通純卿、〈祿所〉平松右衞門督晴庸卿、少納言大內記逐長朝臣、辨萬里小路右少辨綱房、次將〈左〉隆朝朝臣、隆術朝臣、基敎朝臣、實村朝臣、次將〈右〉信孝朝臣、基秀朝臣、重秀朝臣、有能朝臣、大外記師生朝臣、官務中務大丞小槻忠利、各二人床子座令參役、少內記中原生職、少史三善亮英、外記中原生利、史生、官掌、召使、主殿諸司等如例年、不及書、但官方以使部催、元日奉行鷲尾頭中將、

〔百一錄〕延寶第四曆元日亥刻節會仗議始、內辨近衞右大臣、陣後早出、續內辨小倉大納言、陣座著座

箸、更右手取汁器、如元置之、次供三節御酒、（不賜臣下、仰采女調三節、）次供一獻（又仰采女、）次賜臣下、其儀拔箸取笏云、一獻乍座之由可仰參議、不聞得者咳聲示之、次國栖奏、下殿、拔箸取笏、下殿立軒廊（南面）令陣官人召外記仰之、外記申奏之由、卽歸昇、發歌笛之後歸昇、次二獻（仰采女、）次賜臣下、（仰參議、）參議欲下殿之時、乍座之由可仰之、次御酒勅使、內辨拔箸取笏、起座前磬折、（艮向、）奏云、大夫達ニ御酒給ハン、（只氣色許也云々）勅許之後、微唯如元居、兀子召參議、（先問在座參議於次人召之、三位官姓朝臣、四位ヘ名朝臣、有兼官者召兼官、）參議進、內辨之後坤方、內辨仰云、大夫達ニ御酒給ヘ、參議唯下殿取夾名召仰、次供三獻（尋采女ニ、）次賜臣下（仰參議、）次雅樂寮奏樂、內辨下殿催之、（仰外記、）吹調子後復座、或著陣見宣命、次內辨著陣見宣命見參、自軒廊經宜陽殿前出中入、立立蔀東端著陣座、不脫靴懸片尻、（左足在上、右足在坤、南面、）次以官人催宣命、內記插宣命於杖、就軾覽之、內辨置笏於奧方、拔取宣命、以右手宣命ノ上ニアツ、以左手ヲ宣命取持テ下方ニアツ、內記杖ヲ引取、內辨取宣命披見之、（內記退之後取笏、）宣命置前、（此間宣命可置笏上歟、）若內記不候者、令外記進之、次取笏令官人召外記、仰可見參持參之由、外記取杖來軾、內辨置笏拔見參二通置前、先開公卿見參禮紙、推遣書於右方見之、如元置左卷禮紙、次見非參議見參、（無禮紙、）見畢如元卷之、公卿見參禮紙ヲ以少開、卷加非參議見參、取具宣命給外記、令插一杖、（宣命橫、）起座到軒廊、外記持杖相從、內辨立軒廊、（南面、與柱平頭、）外記捧杖、內辨指笏、刷袖取杖文下降一尺七寸、以左手取杖上方、以右手取杖下方、其手當右腰、文崎當左胖程、左手指左杖上方、右手指左杖下方、昇西階經西簀子入西面格子、東行就御屏風下、向南行東南方ヘ兩三步傍行、蹲身於御屏風、以右手取直杖、（樣）不突杖付內侍、合袖兩三步乾方ヘ逆退、拔笏左廻、退立妻戶前、（巽向、）御覽畢返賜、內辨斜進寄御屏風南頭、指笏忽步寄、取杖幷書（右手、）逆退、以右手取杖、以左手取書、以杖加書上、左廻經本路降軒廊、給杖幷見參於外記、取副宣命於笏復座、若早有入御者、自陣座直出宜仁門進弓場、付職事奏之、次召參議賜宣命、入夜之時、必問在座宰相於次人召之、（如御酒勅使、）參議參進、內辨取宣命上方二寸許、逆手ニ自袖下微々給之、參議復座、次內辨以下下殿、拔箸列立右仗南

來入彼間人有之、可然一間軒廊入間闕出同、先賢所爲也、故殿仰又如此、即出同間南面立、刷衣裳進出、此時笏左手持之、當殿押角程練始、先右足於此處扱貼拔笏徐步、巽練步、南練行、近胡床後、徐斜向巽可練、到右仗南頭留立、此時正向東、練留後一兩步進東、去胡床南頭七尺許東進一二尺、練畳練留後、兩步進東面如折腰也、次退右足艮向、此時與胡床平頭、深揖、不垂面折腰也、如退左足艮向立テ再拜、先突左膝自右進舉、刷衣裳更一揖左廻、先右足、歸時ハ即自右進足練、東步進大輪練歸、西尺計練行、表欄當胡床程、至練始所練止、練止處詳見爲善、經本路入軒廊、故實入軒廊南面二、立顧來路云々、休息、刷衣裳昇西階、副南欄先右足、入殿西向妻戶斜東行、入我座間著納言第一兀子、自兀子下、方立廻前方著座、一揖北面、居之、欲著兀子時、先押試著、故實也、兀子佚有破損疑也、引寄裾、左手、次開門、正笏仰之開門仕、陣官人申子細、次闈司著、正笏宜之、闈司ハ覗窺スルナ、或ハ寄スナ、陣官人申子細、次召舍人、二音、其聞三息、高長近笏於口、次少納言參入就版、陣官人申子細、此間外辨公卿雁列中門外、次內辨宣大夫達召セ、少納言立定版之後、正笏仰之、少納言稱唯出召、次公卿參列庭中標、東上北面、異位重行、立畢後、外辨上首以咳聲示之、次內辨宣云、敷尹、自座下方先顧西後正笏仰之、群臣再拜、謝座是也、次造酒正授空盞於外辨上首、群臣再拜、謝酒是也、次酒正取空盞、次外辨公卿著堂上兀子座、掌燈不明者、御後職事仰之、其詞云、掌燈直サレ候ヘ、次陪膳采女撤御臺盤杷、采女持參御盤盛之、於西階給內膳官人、次陪膳采女著草墪、次內膳供御膳、諸臣諸仗立、自南階供之、遲々者、內膳別當下殿催之、不候者內辨催之、其儀起座揖、左廻出當間南廂西行、出西面妻戶降西階、副北欄先右足、立軒廊、與柱平頭南頭、以官人召外記催之、內膳官人進階前之間、歸昇立座前、供御膳之間、公卿起座故也、次供廄御膳、自西階供之、群臣諸仗不立、遲々者、仰御後職事、詞云、御後ニ職事ヤ候フ、贈ノ御膳早、次賜臣下餛飩、內辨下殿催之、內豎不見者以陣官人召之、以豎不召也、居餛飩之間歸昇、次御箸下、居畢大辨參議申上之、無大辨者、最末參議得之、內辨作座候天氣、御箸鳴之後、臣下置笏、倚懸盤足、下箸、以箸橫懸器端、次供鮑羹、不賜臣下、內辨仰采女、其詞云羹、次供御飯、催采女、其詞御飯、次供進物所御厨子所御菓汁物、又仰采女、詞云、進物所御厨子所ハ、次第ニ、次賜臣下飯汁物、內辨下殿催之、如餛飩、仰內豎、先飯一巡、汁一巡、汁物近年不居之、下殿催之、仰內豎、如餛飩之儀、次御箸下、參議申上、內辨取笏候天氣、如元、御箸鳴之後、內辨已下置笏、先取匕立外、次取箸立內、次以右手取上汁器、取渡左手、拔箸抄飯入汁器、如食了立

揖懸左膝著座、披左膝一揖居定、（西面）顧座下引据置後方、（引二尺許）或居引上据、（此間右手持笏、左手引据、）其後向座下方、（南面）　次召官人、令敷軾、向座下（南面）正笏召官人、（二音）官人稱唯參進、仰云、軾、官人持參、敷之欲退、次令直沓、（其詞云沓）　次召官人令召外記、（其詞云、外記、或加大字、）　次外記參進著軾、（五位直著軾、六位從目著、）內辨問云、諸司ハ候哉、申候由、又問云、諸司ノ奏候哉、申候由、仰云、候ハセヨ、仰云、外任奏ヤ候フ、外記申候由、內辨仰云、持テ參レ、外記稱唯退、　次外記持參外任奏、（入筥、有禮紙、）內辨置笏於奧方、（右膝下）引寄筥少屈副、補開禮紙押折、（以紙端爲表、）置筥底、乍筥內覽之、（高不取上也、）見畢如元卷之、加禮紙置之取笏、外記退、　次招職事、（奉行職事有、但）奏外任奏、先召官人、（二音）參進、仰云、藏人左少辨此方へ、官人退、職事來著軾、內辨右手持笏、以左手取筥、右下角引廻、（下方爲上）便取筥上左角、押出端方、以文下方向北氣色、職事云奏フ、職事取筥、此次內辨申云、諸司奏ハ內侍所ニヤ、職事退、　次職事返下外任奏、內辨置笏、（如元）引寄筥、披禮紙押折置筥底、以端爲表、取口於左脇披文テ押合テ於前更開之、又押合テ目於職事、職事仰云、列口內辨微唯、（此間以右手引文端左樋上）職事起揖、起揚之時、卷文加禮紙、（乍筥內以左手文後卷付、二卷許卷、後取上テ以左右手卷之、）如元入筥置之取笏、職事又云、諸司奏可付內侍所者、若職事忘却者、內辨可尋驚、次內辨召官人、召外記、返下外任奏、（其儀如職事時、）外記結申、仰云列ニ、外記稱唯退之、次又仰云、諸司奏ハ內侍所ニ、（以下不令聞）淸家外記不結申、然者外任奏ハ列ニ、諸司奏ハ內侍所ニト可仰也、　次內辨居向奧方、（無行事之時）天皇出御南殿、　次近衞引陣、公卿出外辨、（內辨可催外辨、可示之由歟、）　次內辨起座、（不撤軾、例也、可見宣命見參時料也、）出宜仁門代、於立蔀外（東立蔀西頭）著靴、（前駈奉仕之、）令押笏紙、令官人召六位外記、外記持參續飯、押之、或令前駈押之、笏紙ヲ笏ニ取當テ、笏上一寸許置之、以大指押中央給之、　次內辨入宜仁門代、經陣小庭、出立蔀東端、進中門下、令官人見出御有無、　天皇出御倚子、（近仗警、近仗不闕、令陣官人伺見出御有無、）　次內辨著宜陽殿兀子、（土庇立之、南第一間北頭立之、）兀子足、兩足當柱中央、謖立時令陣官人直之、入中門右折至兀子前立、（東向）一揖著之、引寄据、（左手一度）或陣官人相從直据、內侍臨西檻、內辨謝座昇、內侍居西檻之後、起宜陽殿兀子稱唯、（立ザマニ稱唯也、開與笏首、當家用此說耳、）立了更一揖、左廻北行入軒廊、（不用作、合闕、近）

〔御湯殿の上の日記〕明應四年正月一日、やがてせちゑにゑゆつ御なる、ぶぎやうもり光、内辨さいおん寺大納言、そのほか中山中納言、をぐらの中納言、源宰相、けんじの内侍、右衞門内侍、新内侍、いきいよすゝまるゝ、内辨に御たいめん、そのほかもあり、かやうのことまづかくべきに、うつゝなし、

〔宣胤卿記〕文龜二年正月一日乙亥、申刻右大辨宰相出京、爲參節會也、節會世亂以後至長享三年、二十二年退轉、延德二年再興、近年又退轉、當年依代始所御再興也、

〔二水記〕永正十四年正月一日丁丑、當年節會再興、當御代(後柏原)第二度也、十ヶ年餘退轉、舊冬從武家萬疋被調了、

〔宣胤卿記〕永正十四年正月一日丁丑、今夜節會再興云々、當御代、去文龜二年、此一節會再興、以後退轉、(中年無之、)十四可有再興之由、依之申武家、舊冬萬疋被進、○中略 節會公卿、右大臣、(實香公爲一上、依闕白左大臣輿奪也、)久我大納言、(通言卿)帥中納言、(公條公)新中納言、(康親卿)三條中納言、(公賴卿右大臣息)四辻宰相中將、(公音卿)右宰相中將、(實胤卿)少納言宣賢朝臣、辨秀房、次將左雅綱朝臣、右宣親朝臣、職事兩貫主秀房、奉行六位源諸仲、藤原氏直等參云々、

〔二水記〕享祿三年正月一日壬辰、抑今日宴事、代始餘以延引、不可然之由有議定、爲公家被相行畢、從舊冬廿七日被仰出之處、無一事之違亂被遂行、珍重候也、裝束以下各相具、亂中稀有之事歟、尤可樂可樂、○中略 近代起座事、今夜參列之時起了、宣命之時不起、此儀不可然也、無出御時不起之由有説云々、然者前後可守一隅也、起不起無其謂也、○中略

元日節會次第 諸卿著仗座、(於同官者不請座、)職事來仰內辨、其儀入宣仁門代昇參議座、未就上首座下仰之、上卿居向西、(便推遣褥於後方、)正笏奉仰微唯、(不聞程也、)職事退、上卿如元居直、(東面)次移著端座、職事仰內辨退下、出宣仁門代之後揖起座、經已次人後、於參議座末跪、(南向)著沓、(先左足)左廻引下裾之後揖、(北向)右廻東行、左折經柱內、(先引直裾)北行、到我間座長押下、(西面)

種携之、節會事大概次第之儀作法等面受了、可致習禮之趣申入之、　十月三日丁亥、午後參內、都護卿同祗候、節會再興之間事、今日伺定之、　十一月廿六日己酉、早朝參內、關白〇藤原冬基作進元日節會次第、於御前寫之、又元日宴舞樂、可被再興之由勅定、禪閤可然之由被申之、

延德二年正月一日甲寅、節會申領狀之間、亥剋許著裝束、〇中略參內、〇中略自高遣戶堂上、□□無爲無事、珍重之由內々申入之、退出、于時午剋也、抑今日宴任文永例、舞曲可有再興之由、有其沙汰之處、八幡修正再興之間、舞人故障、俄被閣了、

〔元長卿記〕延德二年正月一日、今日被行節會、亂。後。始。而。被。再。興、奉行藏人左少辨宣秀也、〇中略則被始行節會、少々著陣、中山中納言依睡眠落笏、其音頗高、人々一笑、予雖可著陣、□於宣仁門外見物、內辨召官人敷軾、召外記儀如常、招藏人左少辨、被奏外任奏、則返給、以下如例、位次公卿出外辨、中御門大納言、侍從大納言、中山中納言、予、園宰相、和長等著之、六位外記盛俊召仕等同著之、中御門大納言召召使二音、下式筥、次召外記問諸司歟、儲不入聞、外記退候後、和長起座、各同之、時分聊早速歟、但內辨謝座、爲見物也、於月花門邊見物、雁列如形、少納言來、次第參進、氣色下﨟、先之近仗引陣、謝座謝酒、畢次第堂上、中御門大納言、侍從大納言、右大辨宰相、新宰相中將、以上端、以下奧、晴御膳、令別當催之、別當侍從大納言一獻內辨催之、以下令右大辨宰相催之、兩度之後免之、作座催了、天既明畢、到午剋事畢退出、

〔親長卿記〕延德四年正月一日、元日節會、　二日參內、於御三間有御對面、〇中略種々及御雜談、夜前節會小朝拜事等也、〇中略節會之時、續目諸事及遲々云々、內辨催立樂直退出、中御門大納言不存知歟、暫不起座、及遲々云々、公卿堂上座邊、掌燈暗然、御前高燈臺之外无掌燈、无下知之人、依內々被召御後之職事、內々被仰、欲及指油之處、已天明畢、〇中略中納言元長卿語云、中御門亞相立宣命拜、久我大納言有不審氣、不起座見廻方々、暫移剋之起座、其體有不可事云々、新宰相經鄉進退一向沙汰外、事事不可說、催雜事歸昇之時、於西面妻戶口、欲入內之時、ウツブシニ顚倒拋笏、希代事云々、

未練不可說云々、依勅定雖差副宗房、猶不事行云々、又問敍位申文間不審、粗答畢、頃之退去了、

〔伏見院御記〕正應三年正月一日乙巳、此後節會、奏外任奏之後出南殿、○中略次開門、○中略次造酒正授空盞、群臣再拜、次造酒正受盃退還、次王卿參上著座、次内膳正以下供御膳、此間群臣諸仗共起、次就西階供殘物、次給臣下餛飩、次御箸下、臣下應之、次供鮑羹、次供御飯、次供進物所御菜、次供御厨子所御菜、次給臣下飯汁菜、次御箸下、臣下應之、次三節御酒、次一獻給臣下、次國栖奏、此間内辨退出、皇后宮權大夫藤原朝臣□□行之、次二獻、次給臣下、次内辨召參議藤原朝臣爲兼、仰御酒勅使、次三獻給臣下、次立樂、此間入内、不見後事、

〔園太曆〕貞和三年正月一日、節會公卿、内大臣、左衞門督、平中納言、新宰相、（宣命使）大宮宰相、（御酒勅使）園宰相、少納言長綱朝臣、辨、長顯朝臣、次將、左、公世朝臣、信行朝臣、雅朝朝臣、具信、右、實音朝臣、家秀朝臣、顯方、○中略抑今朝内府有尋示事等、狀并返狀續左、○中略

三陽之初節、萬端之御慶、幸甚々々、珍重々々、早々可參賀候也、○中略内辨著靴所、雨儀無便候歟、出宣仁門代、擁笠於中門西邊著之、又如本路歸入、傳陣簷下（内柱）自立蔀東可進候乎、自陣直出立蔀東、於中門邊著靴、則著宜陽殿兀子之條、有便宜之樣候べども、徑小庭之後著靴之條、准據不可然候歟、近年如何候覽、　宣命拜列立所、當時餘狹少之間、無當所候樣ニ候、指圖大概注進候、委可被注候乎、間數も不覺候之間、大樣不能左右候、誠恐謹言、　正月一日　公淸

一期大平之佳期、萬春無疆之孟律、民庶愷樂、君臣悅豫、祝著端多、言詞難覃歟、幸甚々々、○中略節會内辨著靴所、只自小庭直東行、自立蔀東口中門（南邊）可令著給候歟、里内之時、大略如此候哉、宣命拜列立所、指圖之說無相違候歟之旨存候、心事期後信候、恐々謹言、

〔實隆公記〕長享三年（○延德元年）九月廿七日壬午、都護卿（○親長）書狀云、節會再興事、省略條々、中御門大納言、（○宣胤）予等、相談可治定由、女房奉書到來、○中略卽時向都護亭、粗此趣相談、則參禪閤、（○藤原兼良）一荷兩

節會無指故、及夜被始行、人以爲奇云々、

〔玉蘂〕承久二年正月一日壬辰、參內、○中略三位中將實基前駈、各取松明前行、尤奇怪也、執柄[　]外無此禮、可謂尾籠歟、內府共官人不帶弓箭、見人々所爲忽以帶之、尤不便云々、○中略後日民部卿示送、今日內辨作法、予早出之後、內府下軒廊、松明光顯然押笏紙、然間三條中納言實親在奧座起座經東庇簀子南庇等、移端座、行腋御膳事、若內辨押笏紙之間、當座上﨟行事秘說歟、又外辨上依連座有便移著歟、內府歸昇之後見付早出、滿座不得心、此事驚奇不少已、今夜之中內辨三人歟、未曾有例也、入道左府○藤原實房世稱大恩敎主御房、是則公事爲諸人師之故也而其息大相國○藤原公房於事現尾籠、人以屬目、孫實親頗勝于父公歟之由、人以存之歟、今有此違失、已顯金色膚、交俗塵歟、可嘲可嘲、陪膳釆女備中老耄、就寢驚天〻無奈取供之、內辨嚮頭云々、於西階職事宗嗣雖塞只同備中、不便不便、一獻御酒勅使、二獻國栖奏云々、先例希歟、未見及、尤不審、可尋、宣命拜之間雨降、仍先於軒廊、內辨以頭權亮奏事由、改雨儀、於宜陽殿西庇有此拜云々、宣命使公氏卿遲□□末前就版云々、此作法又不尋常歟、只自壇上直可就版也、又御酒勅使信成卿云々、又外辨右大臣起座之間、諸卿不親、家嗣公氏經通著之、宣弘左相府之定已作載□□度立未忽被止、此儀可尋可疑、就巾家嗣經通等卿非彼餘流乎、又院北面以康淸範等節會監護使、見予謝座已下事云々、　三日甲午、男共等談曰、昨日師季申云、節會內辨內大臣御酒勅使外記等存國栖奏之由、欲催之處、爲御酒勅使之由、新宰相中將被申之間、隨仰進交名、萬人不知先例、有奇氣而退出之間、於敷政門之邊內大臣被招之、仍參候、舊例如此、近代一切不見此儀所興行也、而人々有疑氣、尤後悔云々、有先例者何被悔乎、　五日丙申、早旦頭權亮信能朝臣來、○中略次談云、元日節會內辨內大臣、一獻御酒勅使、二獻國栖奏、人以成疑、彼時自身召立信成卿之後、頗有周章之氣、暫而仰御酒勅使、後日有先例之由被稱之、保延宇治左府所爲云々、此條聞驚不少、彼例別段事也、一獻國栖奏、內辨下殿、還昇不復座、奏御酒勅使也、被思涉歟、可謂不便、又云、五位藏人宗嗣行御膳事如泥、

傳師口之由顯然也、

〔台記〕久安四年正月一日庚申、召大外記師安、問諸司參否及諸司奏、供奉所司等如常、(依爲一上、无可奉仕內辨之仰、)以後事存例、恒例奏、立樂左右各二曲、余問金吾云、及深更之時、奏左右各一曲、是例也、但經奏聞可止歟、對云、未聞經奏聞、仍余仰外記止左右一曲、後日勘北山、七日女樂奏事由、可止云々、止立樂可奏否可尋之、○中略勘年々吏部記、九記、(部類、)正月三節、元日、十六日、略樂所見、七日、女樂依夜深略之由、見年々吏部記、然而不記經奏聞之由、延喜十三年、十七年、十九年七日御記、依入夜減舞數、不記奏由、

〔玉海〕承安三年正月一日甲午、余昇中門外直參御前、觸所勞之由於關白退出、但密々隱居、內辨謝座儀粗伺見之、○中略次開門、(內辨仰之、)次尋聞司著否、舍人(土字短、爾字長、里字太長、)次少納言參入、內辨宣マフチ(已上一句)君達(一句)召世(一句)召突揚被仰之、余之所習不然者也、又マフチ字ウト可召也、但有説々事也、次公卿列立、(外辨上左大將、)內辨宣云、シキキン、(是詞、上詞短、下詞長也、)不見此後事、逐電退出了、

治承三年正月二日乙卯、長方經房兩人共云、昨日節會內辨左大臣、下殿催國栖之後、卽不復座退出、其後左大將被行內辨事云々、經房又語云、昨日內辨未著宜陽殿兀子以前、被尋內侍出否、仍不待著兀子、內侍臨檻、其後內辨著兀子云々、次第顛違僻歟、

文治五年正月一日壬辰、節會內辨右大臣、外辨上首右大將兼雅云々、著外辨之後、數刻待下式筥、內辨就宜陽殿兀子之後被下之云々、未聞事也、又云、召參議之詞、左大辨ハ用訓詞、實教朝臣ヲバ聲二、右近中將藤原朝臣ト被召云々、實教四位也、可召名尤大失也、又不用訓詞、旁以不審、又云、親宗勤御酒勅使之間、進階間東頭、萬人解頤云々、又云、外辨列當間云々、上首之失也、當左仗胡床而立、是故實也、不知口傳人、觸事如此、

正治二年正月一日戊子、節會內辨左大臣、外辨上首右大臣、謝酒間有失禮、乍居被口酒正云々、凡以失禮爲家之秘事歟、又以之可爲奉公歟、末世之法、毎事無念無勇何爲云々、　二日己丑、宗頼云、昨日

節會例

〔續日本紀八元正〕養老四年正月甲寅朔、太宰府獻白鳩、宴親王及近臣於殿上、極歡而罷、賜物有差、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年正月庚寅朔、宴五位已上於前殿、授從四位上藤原朝臣濱成從三位、賜五位已下祿有差、是日、始列諸王裝馬無蓋者於諸臣有蓋之下、

〔類聚國史七十一歲時〕天長九年正月乙未朔、御大極殿受朝賀、畢御紫宸殿、中務省進七曜曆、宮內省獻氷樣、例也、吉野國栖奏歌笛、但依新誕皇子薨、不奏音樂、賜親王已下五位以上被、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年正月壬子朔、天皇不受歲賀、雨也、御前殿、賜宴侍臣、賜御被、所司各奉職奏七曜曆、藏氷厚薄、腹赤魚、舉音樂、並如舊儀、于時天皇御東宮、是日廢朝賀、故宴於前殿、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年正月一日甲辰、參內、○中略御南殿、節會如常、但侍從列可有庭中、而不立標下中□□立坐前是也、又宣命一段可有舞蹈、只兩段再拜、是違例也、

〔中右記〕嘉保二年正月一日、節會、天皇御南殿云々、一獻國栖、二獻御酒勅使、(左宰相中將保實)三獻樂、先雅樂寮遲參頻相尋了、參入申云、樂器不候、先々申請――――也、而雖尋――――更無節、(御所樂器、從去年在堀川院御藏了、)數刻被尋求、此間及深更、頭辨密々借了總朝臣器、(件朝臣在宅)數刻樂大鼓一面許將參、如形舞了、罷出音聲、(長慶子)宣命使、(右宰相中將仲實)拜了後、還御本殿、(及深更)

〔法性寺關白記〕保安四年正月一日、余招頭辨仰內辨事、○中略頭辨奏外任奏、余披見之處、年號之奥早可參候列之宣旨、大失錯也、外任奏受領交名、被可令候列給旨之後可□也、而兼井之條不思議也、大外記師遠不參候云々、不案內之外記等所為歟、內辨不被咎之經奏聞之條、若可謂不覺歟、余見了返給、有誤之由書改之後被奏、諸司奏可付內侍所之由伺被奏、○中略被催開門、次可稱催闈司、而被催女官可持參指油之由、若闈司事被忘却歟、暫之女官供指油後被催闈司事、其後暫不被召舍人、適召之、其聲甚以奇異也、少納言宗成著版、內辨宣云、大夫達召(勢)、其音又希有也、少納言稱唯退出、次外辨上達部參入名立標下、了公卿一兩有咳聲、告列立了由之意也、次內辨仰云敷尹、斯音又以奇怪、未被

節會初見

て御靴に改められ、帳中に出御なる、內侍二人劒璽を持ち、御前御後に供奉す、關白又は藏人頭御裾を取る、職事御笏式の箱を持ち供奉す、殿上人七人ばかり脂燭をさし、御さきに行く也、是よりさき左大臣內辨の事を勤むる例なり、若障りあり不參なれば、次の人に內辨の事を仰す、內辨外任奏をめし、職事を以て朝餉にて奏せしむ、夫より南殿に出御なる、定る例也、次に外辨の公卿をめさしむ、公卿昇殿し御前の床子に著く、內膳司御厨子所御膳を供す、公卿にも給ふ、是は大膳職の設くる所也、次三節の御酒を供す、三獻終りて立樂あり、內辨宣命を奏して下殿す、宣命使みことのりを宣ぶ、群臣再拜の後祿を給ふ、事をはりて入御なりぬ、近代元日は多く出御なし、白馬踏歌などは、一獻終り、或は三獻の後入御なる、定れる樣なし、桓武の朝は紫宸殿にて宴會を行はる、弘仁式に、節會は豐樂殿の定めなれども、多く紫宸殿にて行はれし、應仁亂後中絶し、二十年あまりをへて、延德二年に元日節會ばかり再興ありしも、用途ともしくて年々行はれ難く、延德より九十年許をへて、天正の末つ方より年々行はるゝ事になれり、

〔日本書紀三十持統〕四年正月庚辰、〇三日宴公卿於內裏、

〔公事根源正月〕元日節會〇中略抑此節會は、〇中略持統天皇四年正月に、公卿を內裏にめして、とよのあかりするとあり、〇中略神武天皇の御宇にも、群臣をつどへて酒を給し事は、日本紀に見えたり、是などをも事の發りとは申べき歟、

〇按ズルニ、神武天皇ノ酒ヲ群臣ニ賜ヒシ事ハ、日本書紀ニ、乙卯年八月乙未、弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉、天皇以其酒宍班賜軍卒、乃爲御謠曰、〇中略是謂來目歌、今樂府奏此歌者、猶有手量大小、及音聲巨細、此古之遺式也トアルニ據レリ、然レドモ是ヲ以テ元日節會ノ初見トハ云フベカラズ、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年正月戊寅朔、廢朝、雨也、宴五位已上於朝堂、

議之中有中將兼帶之人者、次將不稱入御警蹕歟、元日不遣祿所參議儀也、

〔友俊記〕年中御作法の大概物がたり〇中略　一夜に入て元日の節會おこなはる、〇中略大中納言の御子參議、四位參議、顯職の卿相獨床子、南面一列、辨、少納言獨床子、東面一列、外記史獨床子、東面後列、史生官掌召使等長床子、後列なり、是よりさきに、堂上殿上の公卿の間にて獻をたまふ、かはらけにさくめんをもりて取給ふ、銚子提あり、內辨は淸涼殿の議定所にて獻あり、殿下は奏聞の內覽にまゐり給ふ、〇中略刻限出御あり、命婦劍璽をとる、かた手にすゑて、片手には檜扇にて顏をおほふ、次に內侍かた手に寶劍の柄の方をとりてかたにかけ、かた手に檜扇をかざす、典侍璽の筥をかた手にすゑて、檜扇をおほふ、〇中略次に脂燭の殿上人、四位五位御さきに立てもつ、横行なり、次に藏人頭、晝の御ましの御劍を兩手にさゝげもつ、御柄を御前のかたにまゐらす、是も横行なり、殿下は御裾をとらせらるゝ、殿の官人庭上、東庭階下立明して脂燭をさゝぐ、扶持の殿上人は女中につきてきぬのすそをたすく、主上南殿の御帳臺の御倚子に著御、晴の御膳、脇の御膳、一の釆女〇中略陪膳にまゐる、內侍は西階にのぞみて內辨を召す、內辨兀子をたち、ねり出て南階にのぼりたまふ、開門闈司舍人まちきんだちなどの召きこえ、外辨の公卿あくをたちて口口口の標につき、諸卿再拜、外記空盃をすゝめ、諸卿再拜、口口西階より昇殿こんとんにすわり、一こん、二こん、三こん、立樂、內辨下殿、外記をして宣命の事を仰す、內記宣命をすゝむ、外記見參祿法等をすゝむ、入御あれば、弓場より職事をもて奏聞、內侍奏聞のうち返し下る、內辨宣命を參議の人にたまふ、諸卿下殿、宣命使版につき、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、上首離別祿所にむかひ、祿をたまはりて各退散、

〔嘉永年中行事〕元日節會　今宵は群臣をめし、豊の明り聞しめす式なれば、秉燭の程、淸涼殿の朝餉にて黃櫨の御袍をめされ、額の間より出御、兼て設けたる筵道の上を步み給ひ、南殿の御後に

方懷中笏、取文杖、進寄渡職事、　取時取內辨之手下、內辨不取直渡時、其儀請取而後取直、取直之作法、副左手於杖而揩杖上、副右手於杖而揩杖持下也、　次內辨出懷中之笏仰云、奏職事承仰、左廻昇殿上奏聞、作法路如常、候臺盤所妻戶前、內侍鳴妻戶、于時進寄持杖於左手、推開妻戶、內侍被上簾、杖入程職事指入杖、自右方指入、內侍取杖奏了返給、返給之時不插文、副杖被指出、職事請取持左手、以右手閉妻戶跡退、遣杖之跡於右方、以左手插文、橫十文字　或奏時不指入杖進文計、留杖於吾許置右方云々、返給而如元出弓場向內辨、內辨如初懷中笏進寄、職事取直進、內辨請取之後仰云、御覽シツ、內辨承仰而渡杖於內記歸入、或奏了、自內侍請取之時不插杖、取副杖進內辨、內辨渡內記、內記插之也、○註略　次內辨召參議賜宣命、　參議參上、其儀同御酒勅使　至內辨坤去五許尺、或揖不揖立、內辨右手乍持笏、左手取宣命、自左袖下微々若遣之宣命使、於立所插笏、或實不插、如揖持之、頗屈行先左足進寄、展左手給之、頗引當胸、以左右手持之　逆退先右足　立本所、拔笏取副宣命揖、不插笏、內辨若出文之時、屈行進寄之後、如插笏、賜文則遂行於始所揖、左廻經本路復座、　次內辨以下次第起座、大臣下殿、宣命使不平伏、依宣命在身也、降殿西階、出軒廊西二間、列立右仗南頭、北上東面、異位重行　立定各一揖、此間近仗起　　次宣命使起座下殿、降西階出軒廊西二間、如副柱故實歟、近代如此、南行、當公卿列南程月華門北扉、乍南向深揖、不必當月花門北扉、公卿列過南者、到列東揖、西折、依爲曲折揖也、此後徐行之儀、近代無此儀、　東折立直聊持上笏、開左足、自右足向東曲練步、入夜之時不練　尋常版與宣命版間々行到版許、沓鼻當版程　一兩步退立北面　深揖、插笏宣命加笏、縱乍持右手、笏於左へ倒于插也、　左顧腰以上顧、腰以下不顧、　披宣命、押合取廻サマニ高揚當冠程　披、即引下、以文首當目程讀之、計行之　押合顧左、不動腰已下向西也、謂之宣制一段、群臣再拜、跪先右膝、他先左足、次如先開之讀之、今度不差上目程、文首程用之、押合顧左、如初、謂之一段、　群臣拜舞　拜舞了卷宣命、拜舞了、初之一拜之內卷之、卷樣取右膝卷之、當胸如初持之、拔笏取副宣命揖、口傳云、諸卿舞踏之後、與拜同時可揖云々、仍諸卿舞踏二拜之儀兼可存、　右廻經本路、於初所乍西向揖、當軒廊西第二柱月花門扉、經有曲折揖、近代無之、北折入自軒廊東二間、昇西階復座、懷中宣命、或口傳云、宣制了右廻向東之時、不令人見懷中云々、或軒廊懷中、近代多如斯、近代宣命使初參之時、復座撒七退出、　內辨已下復座　大臣參上之時、立座前磬折、宣命役畢故也、　近代不及堂上、直向祿所、群臣給祿一拜、縫殿寮授之、跪而乍居向艮拜、不縫褓、　出承明門代、改沓退出、著靴不上高遣戶、故實歟、　天皇還御　如出御、入御期不定、　外辨之參

(イラウ々々、言了退、奏國栖、)昇殿復座、立著　次二獻(賜臣下、問采女、)　次奏御酒勅使　內辨拔著取笏立座前、艮向磬折、申云、大夫達ニ御酒給ハン、申了居、○略註　召參議　入夜者先問在座參議於傍座人了、正笏召之、參議起座磬折微唯揖、右廻出南庇經端公卿後、立內辨坤、北座人者右廻出母屋北第二間、幷西庇南面妻戶、入南庇西妻戶、經公卿座後、至內辨坤去五尺許立、(揖或不揖)內辨顧仰云、大夫達(爾)御酒給へ、參議微唯揖(或不)右廻出南庇西面妻戶降西階(副北、先右)立軒廊一間(與柱平、頭南面)召外記仰御酒勅使交名(或仰云交名)可進之由、外記進交名(東西大夫各二人、一寸八分計切紙書之、插短木左右分二也、)參議取之懷中(或撤木交名事、取副笏堂上、於西妻戶邊撤木懷中、或又不撤木取副笏進拜了、起座之時、右妻戶邊撤木、懷中歸本座、)歸昇進立南簀子西第二間西邊、(東西有揖或不)召侍從(正笏顧見也、先顧見日華門方、是召左侍從也、次顧見月華門方、是右侍從口、傳、先淺顧了正面、次深顧、尙有說々、)右廻復座、　次三獻(賜臣下、問采女、)　立樂((雙調)胡飲酒破、酒胡子著衣冠、近代如此、強非定儀歟、)　遲々之時、內辨下殿催之、○略註　次內辨拔著、取笏下殿、經軒廊(西一間)著陣、(端南面、不揖、不脫靴、左足踏地、右足引上之、引寄踞、)召官人令敷軾、便仰內記宣命可持參之由、(其詞、內記ニ宣命持テ參レトイヘ、イヘノ二字消也、)內記持宣命(插杖、黃紙、)就軾、若寄杖、內辨置笏奧、以左右手拔取宣命見之、了如元卷之置前、取笏目內記令進、○略註　次內辨召官人仰外記可召之由、或仰外記見參可持參之由、(用此儀)　外記二通(侍從見參、非侍從見參、)插杖持參、內辨置笏(奧、此間宣命置笏上之由有說也、)以左右手拔取文置前、披禮紙披見之、二通卷籠一懸紙返賜、外記取之插鳥口、○文杖之圖略　次內辨又取宣命給之、外記取之、插同杖(片鳥口見參、片鳥口宣命、縱插之、)退立小庭、　次內辨起座(不揖)經本路立軒廊兀子前(南面)外記相從、(持杖)內辨插笏取杖(末左)昇西階(副南欄、先右足)自簀子北行、入西庇南面妻戶(先左足)北行入母屋北一間、副賢聖障子東行、自西第二間西柱下斜巽行、到御屏風西南妻、向面於東、藏目於屏風、縱取直杖、以右手付內侍、(杖本、不突板、)合袖小退、(先右、次左、)拔笏(不揖)左廻退西第二間右廻立、(顧向巽)內侍奏覽了返給書杖、(宣命副之、)取內辨少忩參進屏風下、(其儀如初)指笏以右手取合書幷杖小退立、右手持杖、(在下)左手取書、(在上)以書取加杖上、(有異說)右廻經本路下階(右手持杖、爲杖一說也、)立本所、右手持宣命、以左手取加見參與杖、外記拔笏取副宣命於笏、昇殿者座、或入御之時、內辨就弓場代以職事奏聞、(內記以文杖候左)其儀內辨就弓場奉行職事出向、內辨顧右

餛子、黏臍、饆饠、團喜、内辨問云、次第物マイリヌヤ、　次臣下餛飩、内辨問采女、餛飩ハマイリヌルカ、或不問之、遲々之時、内辨下殿、○註略　退立軒廊東一間、仰内豎、内豎一人參進之間、内辨復座、　次參議申上、或辨備之、不候者他人最末申之、乍居正笏、搢腰以上、居向内辨方小揖、　内辨候天氣、乍正笏顏向良候天氣、　次御箸下、以御厩令鳴之給　臣下應之、插笏於右尻下、或倚立笏於臺盤足、取箸、立七、横置器饌不例也　次供鮑羹、依撤索餅不賜臣下、内辨問采女、アツモノハマイリヌルカ、　次供御飯、内辨問、御物進リタルカ、　次供進物所御菓二盤、内辨問、進物所御厨子所供ヌルカ、マイリヌルカ、進リヌルカ、タルカ、　次臣下飯汁、依撤餛飩參議申内辨、内辨申上同前、　次御箸下、臣下應之、置笏、立箸内方、立七外、　或又　說々不同　次供三節、不賜臣下、

首書ニ　一番威儀御膳　南階　馬頭盤七節　干鯛丸物一坏　御箸　四種　御酒盞　二番威儀御膳
東階　鰹魚削物　串鮑　鯛　干鯛　小鮹魚三　御高盛□十　坏十　羮　熨斗豆腐　鮑
三番　南階　餛飩二坏　二　菊形二坏　此次臣下餛飩　四番　南階　鮑御羮二坏　一
五番御飯御箸土器、御耳土器、　南階　鯉御汁　鯛御汁　四　鯨平盛　海鼠腸桶一　鯛御高盛二坏
鮹高盛二　小鮹魚　窪土器二坏　丸鮑魚同　六番進物所　御飯　御箸甘土器　御汁鳥
御汁鯉　五色鰹鯛　炙物鮭鯖、鰯、　七番御厨子前　東階　白餅三坏　一　此次臣下飯汁　八
番　南階　三節御酒三坏　九番　南階　小鮹魚三坏　三　索餅　熬海鼠　高盛二坏　平
鯛　平盛二坏　此次臣下一獻　十番　南階　二　鮨四坏　二獻　菊形四坏　此次臣下二
獻　十一番　南階　鮨一坏　三獻　餅一物　高盛一坏　平盛二坏　菊形二坏　此次臣下
三獻

次供一獻、内辨三節一獻ハ進マイリヌヤ　酒正勸奧恐奧端座、奧内豎勸之自座下方取盃、以左手取盞取渡右手飲之、北座准知之、　次國栖奏之、内辨自降殿催之禮也、而宿儀大臣或仰參議催之、請内辨命作法同御酒勅使、下殿催作法同内辨之作法歟、○註略　内辨拔箸不拔七、取笏起座揖、右廻下殿、立軒廊一間、以陣官召外記、仰其詞國栖催セ、外記稱唯、外記軒廊一間計出向南、其詞云、國栖マ

ごとく宣せいす、群臣拜舞す、宣命使拜のほどにふみをまきてしりぞく、揖を群臣の後の拜にあはするなり、(あながちあはせずともいふ人もあり、)いさゝかまへにすゝむ樣にて右へめぐりて、さきのごとくしりぞく、曲折のいうさきのごとし、堂上の座につく、群卿かへりのぼる、宸儀御はしをぬきて入御、大將けいひちす、大將なくば內辨是をせうす、近衛の陣けいひちせうす、近衛陣のけいひちは左上首一人するなり、皆するはひが事なり、內辨已下はしをぬきてまかりいづ、宸儀入御の御みち以下、御供の女房等出御のごとし、せちゑのほど火きへたらば、內辨さしあぶらをもよほす、其詞云、御後に職事や候、さしあぶらといふ女じゆ(はかまきぬきたり、)あぶらをとりかふ、おくの座の人のみち、北の小間をば、親王ならびに左右の大臣內侍などの路なり、その外は中間をふるなり、本殿に還御ののち、女房はいせんにて夕の御膳を供す、

〔後水尾院當時年中行事(上正月)〕小朝拜、(○中略)事をはりて還御、しばらくありて節會事具するのよしを申せば、亦清涼殿にならしまして、御そく帶ありて出御、これよりさき、(○中略)內侍二人髮上て後、劍璽を案しながら、清涼殿の北の上段にしばらく案ず、(二階厨子なり、いつごろよりのことか、)大宋の屛風を引めぐらして、內侍二人屛風の外に候ず、出御の時是をとりて、議定所の東より出て、母屋の南の第二の間をへて、ひさしの南第一の間を出て御さきにゆく、職事共扶持す、南殿に出御の時は、非色の者は御後にいらざるがゆゑ也、命婦二人は、清涼殿の東のすのこの北の妻戶より出て、御後にゆく、節會の事、又次第にゆづりて筆をさしおく也、近年立がくの頃還御、其後坊家そうなど奏すれば、內侍ひとへぎぬにて大ばん所へ出て、妻戶の簾下より廻り入て奏す、

〔近代年中行事細記〕元日節會次第

諸仗居　次陪膳釆女撤御臺盤帊(○中略)　次內膳進立南階、供晴御膳、遲々之時、內辨下殿催之、(○註略)群臣諸仗立、(○註略)　每供內辨問之、(其調或四種八進ヌヤ、或御膳物八進ヌヤ、)供了群臣居、　次供腋御膳、(自東階供之、)群臣不起、先

次に三ごん一二獻に同じ、獻をはりて立樂あり、日月花〇花下、一本有二東字一門より左右の樂人春庭樂を奏して馳道に進む、左右おの〳〵二曲、(爲歳樂、地久、賀殿、長保樂などなり、臨時の勅によりて、この頃おの〳〵三曲もあり、大方ちかごろは此事なし、當代ふるきにかへりておこされたるなり、)舞をはりて、内辨くだりて陣につく、宣命見參をめすなり、内辨文杖を持て東階をのぼりて、東のひさしの南の戸より入て、おくの小間を西へをれて、御帳の東の屏風のもとに立、内侍右にいでゝ、屏風のつまより右の手してこれをとる、(左の手してはあふぎをとる)御帳のはづれにゐて、ゐざりよりて御座のとほりにいたりて、御帳の方へいさゝか向ひて、杖を左のつくゑにかけてさしよす、主上是をとらせ給ひて、右のつくゑにおかせたまふ、(左の御手にて杖をとらへて、右の御手にてこれをぬく、はた袖ごしにこれをとる、手をいだすべからず、)内侍杖をとりてゐざりてしぞく、杖を御帳の東の御帳臺の下にそへておく、(すべて白きつゑは御帳の後にをく、返すべからざる故なり、くろきつゑはひがしにそへておく、やがて返し下すべきがゆへなり、)内侍しぞきてのち、宣命見參おのおの是を御覽じ給て、左の机にをかせ給ふ、文のさきをいさゝか机よりさし出すなり、内侍是を見て、すゝみよりてこれを取、(きぬのひとへごしにとるなり)杖にとりそへて、かた手に持て内辨に返し給ふ、内辨内侍をまつほどは、いさゝかゝゑぞきて笏のしりを障子にあてゝ立なり、(賢聖の障子なれば、第五倫のほどにあたるなり、)返し給りて、左にめぐりて、元の道をへて軒廊にくだりて、つゑを返したびて文を持てかへりのぼる、參議をめして宣命を給ふ、參議内辨のうしろにすゝみてけいせちしてたつ、笏をさすがごとくして、(うるはしくはさゝず)文を給てさくにとりそへて本座にかへる、宣命もちたる宰相は、大臣にも禮をいたさず、なべては大臣のおきゐには宰相けいせちするなり、内辨已下下殿、左近の陣の南の邊にたつ、大納言以下皆始の列のごとく異位重行す、宣命使下殿して、こんらうよりすゝみて、諸卿のうしろをへて、日花門の北のとびらにあたりて、ぢうして(これを曲折といふ)西にをれて、(夜に入らずば、西に向てのちをるべし、)宣命のへんの南にすゝみたつ、冠のかげの版にあたるほどゝいへり、揖して笏をさして宣命をひらく、先開きて、いさゝかあげて後おし合て、右の方へ出す、群臣再拜又さきの

ば、やがてわきの御ぜんを供す、もし程を經ば內辨もよほす、その詞に云、御後に職事や候、わきの御膳とう、(或はのこりの御ぜんとも云)五位藏人、西の階のへんすのこにて是をもよほしおこなふ、おほよそ御膳のくさ〳〵、其名はあれども其形いづれともわきがたし、內膳などたしかにいまだたづねとはず、てんせい、ひつら、かつこ、けいしんなどやうの物なり、こんとむ、さくべいは、目ぢかきものなれば、さだめて人もおぼつかなからじ、內辨臣下のこんとんをもよほす、大辨の宰相につたへて、ちいさわらはを二聲めして仰するなり、內豎こんとんをすへをはりて、大辨宰相御はしを申、內辨に氣しよくす、內辨天氣に候、御はしくだる、(うるはしくはめさずして、扇して御はしのだいのかれをならすなり、)臣下みなこれに應ず(音をとるなり)次にあつものを供す、(幽のあつものなり、たゞあつものと云、)進物所、御づし所たかもりひらもりまで、例のごとく供じをはりて、其由をうねべ內辨に申す、內辨はんしるをもよほさしむ、こんとんのごとくすへをはりて、大辨御はしを申す、(但我まへのはしるをばまたず)內辨の奏さきのごとし、御はしくだる、さきのごとし、但本儀にまかせて、かねのかいはしをたつ、(いまの代のことなり)臣下おなじくはしをたつ、次に三節のみき供じて後、一二こんを供ず、是も本儀にまかせて今はうるはしくめすなり、臣下の一獻、(大臣さきのごとく催す、大方大辨なき時には、末の宰相ものをもよほすなり、)さけのかみさかづきをもつ、內豎へいじをもつ、その人のまへにてさけのかみうけて、平をとなへておの〳〵す・むるなり、おくの座は內豎のかみさかづきを取る、酒のかみにおなじ、內辨座をたちて、軒廊にて國栖をもよほす、吉野のくずうた笛を奏す、(かたのごとくなり)次に二獻、一こんのごとくをはりて、內辨の座を立て、磬屈して奏していはく、まちきんだちにみき給はん、天許をはりて、參議一人をめしてこれを仰す、奉る人座をたちて稱唯して、すゑより內辨のうしろにけいくつしてたつ、內辨仰云、まうちきんだちにみきたまへ、參議うけたまはりて軒廊にくだりて、交名をとりてかへりのぼる、南のすのこ第二の間の西のはしの邊にて是を仰す、一揖してあさくふかくふた、びかへりみるていなり、座にかへりつく、

けりとゞまるときは、右の足をこまかに左の足をのべて蹴めぐるなり、すべて太刀のさき、下重のしりと、かうむりのさきはたらかず、又とゞこほらずして、むらなくすゝむをよしとす、故實どもあるなり、櫻の木をすぐるほどにねりとゞまる、ねる時、ねらざる時、けぢめさだかならぬものなり、堂上にのぼりてはしの兀子につく、座のうへの方にかへりみて、開門つかまつれと仰す、左右近の將曹、門にむかひて門をひらく、戸びらをたゝくなり、開門つかまつりぬるよし、陣官、軒廊のはしの邊にてこれを申す、內辨又仰せていはく、闈司座にまかりよれ、陣官又是をつたへて闈司を門下にすゝむ、歸りまいりて、ゐし座につきたる由申、內辨、舍人をめす、二聲、笏をちかくあていきをちらさず大舍人いらへて少納言に告しめす、少納言門より入りて、はしりて版につく、わしること五位は五尺、四位は三尺ばかり、內辨宣、まちきんだちめせ、少納言稱唯してかへり出、諸卿を次第にめすなり外辨の公卿、門の左のとびらより入て、南庭に列立す次第にへうにつく、第一の人ねるなり、異位重行、大臣のうしろに大納言、そのうしろに三位中納言、其うしろに四位宰相、二位中納言は大納言の末におめる、三位宰相は中納言のすゑにおめるなり、列さだまりてのち、內辨仰て云、しきゐん、群臣謝座、二拜をいふ次に造酒正軒廊よりすすみて、外辨第一の人のまへにはしりよりて、ひざまづきて空盞を持てこれをさづく、第一の人相跪て笏を置てこれをとる、造酒のかみ歸り入て、櫻の木のもとに至る程に、立て謝酒、二拜をいふ群臣一同なり、謝酒をはりて、造酒正すゝみよりて盃をかへし給りてかへり入、外辨の人々次第にすゝみて堂上にのぼる、南のらんにそひて左の足を先にす、くだる時は北のらんにそひて右足をさきにす、はしの中をうやまふこゝろか、但いづれも南を用る人もあり、大臣、大納言はしにつく、親王中納言おくにつくべし、但又大中納言人數おほき時、びんぎにしたがふべし、內辨御膳を催す、下殿してこれを仰す、內膳のかみ巳下南階のもとにすゝむ、けいひちの聲を聞て群臣たつ、是より前采女すゝみて草墪につく、役送のうねべ御づし所の中のばん、二つもちてすゝむ、陪膳のうねべかみをあげたり、役送はあげず、御だいばんのおほひを南めんなりとりて、二ッながらをの〳〵御ばんにすへて是をまかる、くだ物もとより御臺盤にあり、馬頭ばん、はしかひおなじくあり、臣下のだいばんにも、くだ物箸匕兼てすへたり、晴の御膳四種以下八ばん供じぬれ

〔につくべきよしを奏す、もししばし程をへば、うちにとどめおきて、出御の期にのぞみてかへし下さるべし、〕七曜の御暦、はらかの奏など、内侍所につくべきよし奏す、〔御暦、腹赤の奏など、古は庭にすみて奏しけるとかや、〕主上出御、臺盤所にて典侍劒を内侍につたへたぶ、〔ゐてこれをつたふ、内侍是をとつてやがてたつなり、〕左の内侍、とりゐ、障子をいでゝ、すゝむ、額の間にいたる、右の内侍しるしのはこを給ふ事劒のごとく、御後にさぶらふ、孫庇に、えんだう、布毯をしく、長橋ならびに紫宸殿の御後、西の北向の妻戸のもとまでこれをしく、〔きざはしのうへにはしかず、〕くら人ならびに近衛のすけども、しそくにさぶらふ、上首のすけ二人、劒璽の内侍を扶持す、〔しそくをとる、或はとらず、〕關白ひさしの二の間のまへにさぶらひて、笏をさして御裾をとる、藏人頭御插鞋を奉る、關白の裾をば、藏人後にて是をなほす、うるはしくはこれをとらず、命婦四人、藏人四人、御供にさぶらふ、是を威儀の女房といふ、鬼の間の鳥居、障子よりいでゝ、大床子の間より廂に出で御供に候、主上御後にいらせ給ひて、御粧物所の御いしにて御靴を奉る、左右の近衛陣をひく、威儀の女房は、御後の中の戸より東、おくの端に向ひ座につけり、掌侍、劒璽を御帳の内、東のつくゑの上におく、左の内侍、つたへとりて、璽を劒のうちさまに是をおく、藏人〔六位〕式の筥を右の机におく、主上御帳内の御倚子につかせたまふ、近衛の陣けいひちす、關白御裾をおりおく、〔そばにたゝみおく、常のごとし、或は御倚子のうへをこして、御うしろにこれをたゝみおく、〕内辨陣の座をたちて、陣のうしろにて靴をはく、是よりさきに諸卿外辨につく、内辨、宣陽殿の兀子につく、掌侍〔左〕東の廂の南の妻戸より簀子にすゝみいでゝ、めしの由を仰す、内辨座を起て稱唯す、内侍かへり入、藏人の頭これを扶持す内侍は二人ともに、御帳の西づしやうじの内〔通障子なとほり障子といふ人あり、ひが事なり、大なるついたて障子にみすかけたるなり、〕床子二脚あり、つきてさぶらふなり、〔うるはしくはゐず、まへにゐるなり、〕内辨こんらうよりいでゝ、〔一位は一の間、二位は二の間、〕みぎりにすゝみてねりはじむ、初め左近陣の南のほとりにすゝみてたつ、内辨すゝむ程、近衛ぢんにたつ、内辨に家禮の人はしりぞく、西むきにて一揖、いぬゐむきにて謝座、〔二拜なり、〕又一いうして歸り入、〔或は西向にて二拜一揖、或は皆揖も拜も乾向、或は揖を略する事もあるなり、初を略し後を略す、區々なり、〕

給臣下餛飩（大膳大夫率内竪役之）　次御箸下（鳴箸給）　臣下隨下箸（可插笏、近代倚臺盤）　次供鮑御羹（銀器、撤餛飩）　次供御飯（便撤餛飩）　次供進物所御菜（窪器二、盤物六、汁物二、并十度、）　次供御厨子所御菜一盤（一盤八坏、一盤四坏、汁物二、燒物六、乾物八、）　給臣下飯汁物　御箸鳴、臣下應之、　供三節御酒（盛青瓷坏、甘糟也、不給臣下、）　一獻（采女供御酒、第二采女、持盞出自御前間西邊、立柱南東面、御飲畢、進自同間、受御盞、出自西間、）　給臣下（酒正率内竪獻之、唱平兩行、）　國栖奏歌曲（於承明門外奏之）　二獻　給臣下　仰御酒勅使　其儀内辨起座、磬折申云、大夫達爾御酒給牟、御許揖畢復座、召參議一人（其官誂召之、内辨尋候座、人召之、）被召者立稱唯、進立内辨後七尺、内辨仰云、大夫達爾御酒給部、稱唯揖、左廻下東階、召外記問勅使名、（外記書之、進之）還昇進南簀子第二間、（自南第二柱西去二尺許）西面立召畢、（不待參進）微音仰云、大夫達爾御酒給部、畢右廻復座、（大夫等交名、可副笏召之）由、見參議要役、近例入懷、　三獻　給臣下　立樂（入自長樂、永安門、先吹調子、雙調、次參音聲、多治部、雅樂立庭中、各奏二曲、立承明門前舞畢退出、有退出音聲、萬歲樂、地久、潤天樂、賀殿、延喜樂、或泔州、賀殿、承平五年春庭樂、潤天樂、賀殿、王仁庭云々、書也、）　縫殿寮立祿韓櫃（入自承明門、列立左右仗南）　内辨著陣（脱靴云々、西記、不脱懸尻、依西宮記用之、）　外記進見參（見畢返給）　内記奉宣命（見畢返給）　内辨到階下（外記内記相從）　外記取内記所持宣命、插加見參杖、進内辨、（宣命横插之）　内辨取之經王卿東北、到御帳東北屏風妻、付内侍奏、把笏右廻立東北障子戸西柱下、（坤向）奏覽畢返給、（置東机、給内侍、取之、取副文杖返給、）内辨進、搢笏取之、（不插文杖、内侍乍立授之、）左廻退下於東階下、先給杖于外記、次返給見參、畢、（外記給之于縫殿寮、）　内辨取副宣命於笏、參上、召參議一人給之、參議給之、右廻著座、召參議、如召御酒勅使、　内辨以下下殿、列左仗南頭、（西面北上、異位重行、）　侍從各立幄前（近代無此事）　近仗起　宣命使就版　出自軒廊二間、斜南行當日華門北扉乍南向揖、西折經公卿列南、就宣命版、　宣制一段（謂押合文）（右顯上也、宣命讀之）　群臣再拜　又一段　群臣拜舞　宣命使復座（如進儀）　内辨以下復座（右廻）　中務輔召唱（執簡下）（立祿韓櫃、近代不見）　群臣下殿（中略）　天皇還御

〔建武年中行事〕元日（正月）の節會、其儀小朝拜はてぬれば、内辨の大臣、陣の座につきて事を行ふ、（もし第一の人にあらずして、位次の大臣ならば、内辨に候べきよしを、職事をもて被仰なり、○中略）陣のはしの座をはかりて、藏人をまねきて、外任の奏をそうす、（はこのふたにいれたり）藏人、内侍につけて奏聞す、これを御覽じて返したまふ、（又諸司奏之、諸司奏は内侍所）

少納言起床子暫立、　內辨於閑所令押笏紙、　或立陣座後、召外記令押、任納言之後具笏紙參入、若不具之人、仰外記令書押之、雖一上依可有小朝拜、自里第不押之、　天皇著御帳中倚子（先於北廂著靴、給入自帳北面、經倚子東著御、）　內侍置劍璽於東机（南柄、東刃、）　藏人頭置式筥於西机（上帖以文頭置西）　近仗稱警蹕（出御之時警、入御之時蹕歟、本文也、上古警聲高也、）　內辨著宣陽殿兀子（先於陣座後著靴之後、聞近仗警聲、自壇上南行著之、）　內侍臨東檻（出自東御屏風妻、自母屋北障子邊東行、副東格子、南行到東檻上暫居退入、）　內辨起座、微音稱唯、經宣陽殿壇上、北行出自軒廊東第二間、斜行到左近陣南頭（當將座、南去七尺、西出六寸、）　謝座再拜（頗乾向先一拜、次再拜、次一拜、右廻經軒廊井東階等、入自廂南一間、母屋東第一間西進、計座程著之、雨儀於兀子前謝座、帶劍人南倚行一兩步、爲不令劍礙也、）

開門（左右將曹、各率近衞八人、開承明門井左右腋門、左右兵衞各八人、開建禮門、）　雨儀、左右近衞經東西殿廂、　闈司分居（二人出自射場、斜行、到承明門左右、拔著草墪、）　雨儀、經安福殿廂、　內辨召舍人（二音）　大舍人四人同音稱唯（於承明門外幔外稱之、）　少納言代就版（候外辨者參入、自承明門左扉立版、）　外辨公卿起座（經屏幔南廂行於左兵衞陣南頭、外辨辨起座暫立磬折、）　內辨宣、大夫達召、　少納言稱唯、左廻出召之（於幔外忽歸入立壇下、北面稱唯、去壇七八尺許、更出幔外磬折立、到大納言下﨟入門退去、）　王卿以下列入立標（入自承明門左扉、異位重行、北面西上、近例參議立後列、不可然、可立於納言末、但可退立、故隱後廂、此日正二位中納言與從二位中納言頗有間立、）　諸仗立　內辨宣、侍座（異位重行、體有說、親王後大臣、大臣後大納言、大納言後中納言、中納言後參議也、但二位中納言大納言ツメル、二位參議中納言ツメル也、）　群臣再拜（謂之謝座、堂上著座チ謝スル拜也、）　酒正授空盞於貫首人（相跪取之、置笏取之、不取盞、作居一拜立、[illegible]）　群臣再拜、再拜畢、酒正來、亦跪返之（酒正歸間起、如上、謂之謝酒、飲酒謝スル拜也、）　次第右廻入自軒廊東二間、參上著座（大臣北面著、北人經東廂、入自中間北邊著、南人入自南廂經母屋東第一間著、親王井非參議著北、近例中納言以下相分著北、依公卿員數參歟、四位參議著北、三位參議著南、但大辨雖四位著南、）　侍從以下著幄座（諸王西、諸臣東、公卿三人許昇殿後、）　近例、侍從不見、故源右府（師房）命曰、輔親、爲政、公則等、元日稱可拜龍顏必參、其後不見（近代無參仕輩也、）　諸仗居　中務點撿（入自長樂、永安門、近代無之、）

酒部立（內竪入自日華門立軒廊、酒部左右各八人入自長樂永安門、立左右胡瓶下、近代無此儀也、）　采女撤御膳臺盤帊（自御膳宿出、陪膳采女留著草墪、以御盤受帊、自西階給內膳官人、）　內膳入自月華門供御膳（遲供時、內膳別當公卿起座催之、正以下令史等、又手前行、膳部相從、正令史留立版、令史稱警蹕、膳部等八人相並登南階、第一級、采女等迎取供之、可出入自御帳西間歟、供御膳間、采女磬折立、但陪膳居御帳上、供畢却著草墪、）　供八盤（每物有蓋擎子、酢、酒、鹽、醬、餛飩、索餅、餲餬、桂心、進物所於西階受御盤、）　諸臣諸仗共立（八盤供畢居）　進物所於西階受御盤　供次次膳（自西階供之）　䭔子　黏臍　饆饠　團喜　次

付内侍、退把笏右廻（九條年中行事云、左廻、而彼一家皆用右廻也、）立障子戸西柱下、（坤面）奏覧畢返給、進揷笏取之（不揷文杖）左廻退下、先給文杖於外記、次給見参、畢大臣取副宣命於笏、参上、召参議給之、参議右廻著座、太子先避座、次親王以下下殿、列立左仗南頭、（西面、異位重行、仗頭南去五尺許、）侍從各立幔前、宣命使就版、（尋常版北一許丈置之、近仗立、）宣制兩段、群臣再拜舞踏、（太子先之、）宣命使復座、群臣著座、中務輔執札立祿韓櫃下、内侍取御祿賜皇太子、即退下、次輔唱名、親王以下稱唯、下殿到日華門前、侍唱、次跪蘆蔣上、揷笏取祿、（雖殿頭以下授之、）小拜左廻、從日華門退出、（諸大夫出自長樂門、臨昏時、侍女官供御殿油、所司供庭燎也、）事訖天皇還御、近仗稱蹕、

〔江家次第一正月〕元日宴會

當日、（略）○中裝束畢、左右近衞閉長樂永安門、（略）○中裝束司供奉仕上下裝束、外記催諸司、藏人催内侍、女藏人、闈司等、御插鞋、釵錦鞋、筵道等階下擺、（左近殿上官料、右近殿上人料、）中務立標、并置宣命版、今案、裝束司記文、式部立標云々、西宮抄亦如此、其宣命版位、置尋常版北一丈、（常不撤之、故前尋常版、）藏人所渡殿上見参於外記、（往年頭於南階西頭渡之）若非一上者、可被仰内辨、（説曰、内辨奏候、或只仰内辨、）内辨召外記、問諸司具不、又召外任奏付藏人奏之、（入宮）仰令候列、諸司奏、可付内侍所由、件次被奏、（日晩若雨降、若諸司不具時也、）中務省御暦奏　宮内省氷様奏（氷有様奏也、以石爲寸法、）腹赤奏（若違期不奏、七日奏之、）若當卯日卯杖奏等也　奉仰仰外記、往年、王卿就外辨後被仰下者、外記傳仰外辨、外記、外記申外辨上卿云々、天皇渡御南殿、（經長橋入自南殿乾戸、有筵道、内侍二人持璽劔、命婦、女藏人各四人相從、藏人頭候御裾、[illegible]藏人持式筥御鞋等、）御厨子所候殿乾角壇上、凡節會日、供御精進供魚味、近衞引陣、（將曹一人前行、中將執紫幟殳、少將執緋幟殳、著靴、各立床子前、將監以下著其後、）遅参次將者、令府官人先立殳之後、左自軒廊、右自弓場殿方出著、王卿著外辨、（出自敷政、宣陽等門、入鳥曹司東戸、著靴出南戸、經辨少納言床子北進也、若床子遐北立時、令召使引之、登自石階、兩階出自西戸、）辨少納言著壇下床子、（共爲五位者少納言著北、辨爲四位者著北、）若非第二上者、召召使令下式筥、（或説、大臣者、右大臣不参時、内大臣雖著外辨、不可下式筥、使其程近歟、）令召使召外記、問諸司具不、外記乍立磬折申之、至大臣者跪申之、大舍人候哉　侍從列候哉　國栖候哉　外記毎度申云、候（不）、上宣、令候、若有後参参議以上者、辨

(令申、)後復座傳宣、中務省率陰陽寮奏御暦、(輪奏)無勅答、闈司共進舁案登自南階、立南簀子西第三間、却下立階下西、内侍取函到御帳西奏覽、天皇取御暦置西置物御机、闈司舁案立本所、内竪四人入自日華門、舁案退出、次大舍人叩門、闈司奏、勅答後、宮内輔率僚官奏氷様、腹赤御贄、(若腹赤不來者、唯奏氷様、腹赤七日奏之、)膳部水部等入自月華門、取御贄退出、(日晩時件等奏、出御以前、令奏事由、就内侍所云云、)次大臣召舍人二聲、大舍人稱唯、少納言參入、此間親王以下起外辨座、(舊例庭前二所儲假橋、近代不設之、皆用石橋、)經屏繖南、列立左兵衛陣南頭、(西面雁行、或記云、南面、貫首人與陣西端、平頭云云、近年未見南面之例、)大臣宣喚侍從、(未不千君達召使、小節皆用此詞、)少納言稱唯退出召之、親王以下微音稱唯、入自承明門東扉、各就標下、(異位重行、版位南去五尺、東去二丈立親王標、南大臣標、次大納言標、次中納言標、三位參議并散三位、王四位參議標、少退在此列、次四位參議標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標、騎道西立王四位五位標、臣四位五位標又如此、各以七尺爲間、内辨參上後、上官稱舊例即著階下座、九條大臣就列日皆之云云、)諸仗共起、侍從相分列立東西、立定、大臣宣侍座、(之支井)共稱唯再拜、訖造酒正把空盞來授貫首人、共跪置笏於左取盞、(造酒正取盞退出、)小拜、起而相共再拜、畢造酒正來受盞、退還之間、把笏小拜起、(跪先左足、起先右足、)即次第入自軒廊東二間、(或一間云云、)參上著座、(親王南面、大臣北面、其著北人、經東廊入自中間北邊、著南人入自南廊者、)侍從以上著座、畢釆女撤御臺盤覆、陪膳著座、次供御膳、(若遲供者、内膳別當公卿起座催之云云、)群臣并近仗起、次東宮釆女供膳、次所司率内竪賜王卿餛飩、畢天皇探御箸、(内辨端笏候氣色、)群臣揖笏下箸、次供御飯、次賜群臣飯汁物、畢重下御箸、(舊例、不必臣下汁物、)待群臣食畢供三節御酒、(甘糟也、用青瓷盞、七日十六日同可供之、仍謂三節、)次賜太子、次供御酒、(入夜時每供畢陪膳采女示大臣、)次賜臣下、一獻畢國栖奏、三獻後大臣起座、磬折奏云、大夫達(爾)賜御酒(牟)、御許畢稱唯復座、召參議、(三位參議召兼官、兼官長官者、其官乃姓朝臣、兼權官若次官者、其官其職云云、無兼官者可召乎、或云、可召政大夫、有兼國者某守云云、未許、唯之時、餘知有無召之、或上召下退人招胡床也、)仰之、稱唯左廻退下、問勅使交名、(外記小書進之、)還昇進南簀子第二間、(庇第二柱、西去二尺許、西面而立、)召仰、畢右廻復座、(或云、獻後仰之、)雅樂寮奏樂、畢縫殿寮立祿韓櫃、大臣著陣、(脱靴、異旬日官奏儀、)外記奉見參、見畢返給、内記奉宣命、見又返給、(太子參上時、外記奉青載見參之由、見大嘗會式、七十以上者、雖身不參可預見參之由見式、但參議以上、并有宣旨者不入、不預謝座、參上事又如之、)大臣起座到東階下、外記宣命横插見參杖跪而進之、(一説、内記進宣命、外記進見參、大臣即給外記令插一杖、初説者依儀式、即貞信公之教也、見口傳并承平三年正月七日私記、後説依内裏式、見九條年中行事及内記所藏記也、)執之參上、到御帳東北御屏風妻

日立東廂南廊下、內辨著陣、著靴懸尻、或脫靴居坐、見見參宣命、各返給、內辨起到階下、內辨奏見參宣命、內辨至東階下、外記取見參狀進候取、內記持宣命、外記插一杖、進內辨、內辨取經王卿座東北、以杖付內侍、左廻立障子戶下、覽了、給文不插、內辨取副狀文等、左右廻下、以見參杖給外記、取宣命、著座、召參議、給宣命、召詞如御酒勅使儀、參議右廻著座、外記以見參給縫殿寮、御本殿之時、更經階下就御所奏之、就廡下非也、宣命太子立南廂座南西面、王卿立左仗南西面北上、異位重行、侍從立幄前、宣命使就版、出自軒廊東二間斜南行、當日華門北屏拱、西折就版揖、插笏右顧、披文、宣制一段、雨日立宣陽殿西砌上、太子再拜、臣下再拜、又宣制、太子拜舞、臣下又拜舞、宣命使登、太子復座、王卿復座給祿、○中略天皇還御(中略)節會日中間入御、王卿立、可經程者、內侍出、王卿出、又出御、王卿立、每出入警蹕、同日有後參王卿者、自御後付藏人奏聞、勅許了、昇著座、御箸下後不奏、或以內豎申內辨、內辨付藏人奏、小節日不出御、前補次侍從、外記進勘文奏聞、下給之後、大臣自書、或令參議書之奏聞、返給下中務省、止諸司奏時、內辨依仰仰外記、外記傳仰、在外辨外記申外辨上卿、仍令付內侍所、大舍人不候者、以召使爲代、依御物忌御本殿時懸御簾、種々奏、就本殿付藏人奏、不供御膳、不奏御酒勅使、唯仰下暫入御間、自御後奏事由、召仰御酒勅使云々、

〔北山抄一正月〕同日○一宴會事

時刻御南殿、左右近衛陣南階東西、王卿出就外辨、上卿召外記、問所司具否、若大舍人不足四人者、以召使爲代、近例雖大臣就之、外記乍立申雜事、是舊例云云、頗非禮歟、可尋矣、大臣不參者、召召使令取下式筥、大臣後參、辨起座時、納言以下動座、如常、但式云云、著座出門後居云云、而過前後即居、雖是違式、近例如之訛歟、長保六年正月一日、內大臣在座、右大臣後參、准式部式大辨儀、公卿等不起、其後右大臣不著此座、寬弘三年依左相定、每度動座、依彼式、大臣之所、不勞其文也、親王參時可同之、而官中故實、一品親王參時同大臣儀、自餘不然云云、此事可尋、親王之禮過於大臣、依品無差別、何二品以下可失其禮乎、少納言辨依官著座、至于四位辨著上、依其色異也、參議以上參時此座皆起、但舊例、大臣一品親王參時動座、雖納言日上參時又起、自餘不起、云云、見吏部王記、中古以來無一品親王之時、第一親王禮、又同大臣云云、此事○檢無所據歟、中務省率侍從列立承明門東西前庭、陰陽寮候御曆案、宮內省候氷樣腹赤御贄、近代小節、彈正不參云云、然而開門之時、忠已下立闈門、可行糺彈之由、見臺式也、天皇著御座、近仗稱警蹕、內辨大臣大臣不參者、以次人奉仰、後著南座、問所司具否、催行雜事、王卿出外辨之後、於閑所以官人隨身等、令押笏紙、著靴就兀子、內侍臨東檻、大臣起座微音稱唯、出自軒廊東第二間、近代云云、清愼公出自第一間、九條大臣用第二間、而彼御記不見用一間之事、廉義公被記出入自二間之由、豈乖先公之教、用他家之說乎、斜行到左仗南頭、當中少將座南去六七尺許西面再拜、左廻參上著座、計著之次皇太子參上、謝座謝酒、著座、其儀見清涼抄、大夫前行、留候軒廊東一間北砌下、宮司等候左近本陣、帶刀候階下陣、幼稚之時、更不設座、康保元年依重喪、又不設之也、所司開門、闈司分居、大舍人叩門、闈司就版奏、勅答、

頭藏人召外記於西階下、給殿上侍從見參、大節如非侍從、近衛陣階下雨日立平張、入自日華門、將曹在前、將等執伏槍立胡床、御厨子所候乾角壇下、設脇御飯、雖御精進供魚、天皇出御著靴、近仗稱警蹕、內侍置御劔璽筥等於東机上、內辨著兀子在宜陽殿四間○中略王卿著外辨入烏曹司東戶、著靴、出南戶、登自南假階、有二階、西親王大臣昇、東納言巳下登、下時共用西階、近代無假階、上下用東階、親王大臣著時、諸卿起居、後共居、大臣比著時、每大臣立、諸卿又立、見式部記文、兩儀出自西板戶中、列立廊內、侍從列廊壇上、

侍出、內辨立稱唯出、謝座昇出自軒廊東二間、南行、西折、當件座坤再拜、右廻登自東階、入自母屋東一間著、兩儀於座前拜、帶劔人者頤倚南、太子參上謝座出自直廬、經宣仁門宮司相從、登自東階、到南廂四間、乾面再拜、采女出自東北障子戶、奉盡如常、謝酒了著座、太子御元服後立座、不登之時立座、不立臺盤、廉保太子御元服間不立座、開門左右將曹率近衛八人、開承明門及左右腋門、左右兵衛開建禮門、兩日經東西殿廂向、闈司著座二人出射場、斜到承明門、分著左右草墪、兩日經西兩殿廂南廊著、中務省御曆奏或付內侍所、上卿奉勅仰外記、大舍人四人立承明門南壇下叫門云々、北面、兩日立壇上、闈司就版位、奏云々、詞在式、勅令申輿遣、傳宣中務輔、陰陽寮立案於庭中、兩日立門內、輔留奏云々、詞在式、無勅答、輔退出、闈司二人昇机立簀子敷、登自南階西頭、立西三間簀子敷、退下立階西頭、內侍出自御帳西、取御曆函、入自御座東、置案上、式文云、闈司昇自西階、昇机立庭中、就座、次內豎四人入日華門、昇机自同門退出、兩日內豎四人入自日華門、昇机經東殿西廂砌、立東軒廊、闈司來自同路昇東階、立東三間下、去、內侍出取奏覽、闈司來昇机立廊、內豎撤之、昇案出授陰陽寮、宮內省奏或付內侍所、如前奏、大舍人叫門、闈司就版奏、勅令申輿、輔巳下史生以上、主水司昇氷樣四荷、腹赤等立庭中、輔留奏云々、無勅答、兩日立承明門內、膳部水部入自月華門撤之、內辨召舍人二聲

少納言立版兩儀立承明門中壇上、內辨云、大夫達召世、大節召刀禰、凡以侍從稱大夫、少納言稱唯出召少納言參入之間、王卿列立雁行、大臣起、巳下起、即居、親王起又立、少納言自幔外歸出、立壇下北面召、去壇七八尺、王卿巳下列入立標中務省立標、異位重行、兩日立宜陽殿、侍從立南廊、諸仗立座定居、內辨仰云、敷居群臣再拜、酒正授空盞貫首人、貫首人相跪取之、執盃不取盤、作居小拜、立再拜、造酒正取盞、相跪授之、王卿著堂上昇自東階、南座人入自母屋東一間、北座人入自東廂、同母屋中間北、達侍從著幄、諸王著幄、諸王著西、諸臣著東、中務錄點檢、執簡入自長樂永安兩門、酒部內豎入自日華門、立軒廊下、供膳采女撤臺盤乾、內膳正以下供之、采女令史前行稱警蹕、留立版、膳部等相從、登立南階第一階、采女等迎出取傳供之、進物所就西階受中盤臺等、自右近陣退出、諸陣群臣立、兩日不立、供自西階、酒部八人立幄前、供皇太子膳采女候殿艮廂、立御厨子、設御膳、自北障子戶供之、給臣下大膳大夫內豎等居饌飩、聞天皇御箸音、臣下箸之、供三節御酒盛土坏、供主上及太子、又盛瓷坏、一獻供例御酒太子、給臣下唱平、酒正內豎給之、一獻間國栖奏、二獻御酒勅使內辨起、磬折奏、大夫達爾御酒給ト、三獻仰之、而近代或一二獻仰云々、天許了居座、召參議某司乃某朝臣、參議立稱唯、在奥座人經東廂、在南座人出自母屋東一間立、內辨後去七尺、內辨仰大夫達爾御酒給ヘ、參議稱唯、左廻、下東階、取夾名、外記進之、昇立簀子敷東二間、少倚東、云々、召四人名、各稱唯、立南階左右、仰云、大夫達爾御酒給ヘ、大夫等稱唯、參議右廻著座、大夫向、雖大夫等不早來者、且可仰之、三獻立樂延喜八年正月一日外記日記曰、設樂座、奏催馬樂者、御酒勅使前有樂、治部雅樂立庭中、各奏二曲、兩儀立承明門內、寬平三年、依太政大臣病止樂、縫殿寮立祿櫃入自承明門、兩

皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、皇太子先再拜、次親王以下再拜、他皆效此訖更宣云、今日波正月朔日乃豐樂聞食須日爾在、又時毛寒爾依氏、御被賜久止宣、○中略凡宴會之儀、餘節皆效此、按舊記、天慶以往、縱雖廢朝、元日節會、延暦以來受朝賀日賜宴、若經三日風雨不止者、雖不受朝猶有宴饗、若此日當上卯、未召群臣之前、令獻御杖、他節效此此日大膳職於殿上賜命婦等祿、訖廻御本宮、○又見儀式

〔延喜式 四十三 東宮〕朝賀儀

其日依時刻、傅以下諸侍從、內舍人各著朝服、參詣共候、東宮駕輦以下出、○中略朝拜訖還宮、如來儀、是日設御次於豐樂院、依時刻東宮更服朝服、亮已上若諸侍從、入候宮西細殿南、主殿署設輦於南階下、舍人六人相分隨輦前後、進一人執翳、主藏佑已上一人執履、若微雨、主殿令史以上一人執大笠、帶刀舍人行立前後、亮已上若諸侍從、奉引東宮出自西門、左右侍衛如常、至宮門外、東宮降輦就次、左右兵衛各留門外、候時昇東階、就殿上座、學士、並藏人、亮、進、及主藏佑已上各一人、帶刀舍人六人、並候近衛陣頭、主膳入就內膳、內膳供御膳、主膳隨即奉膳、

〔延喜式 中務 十二〕凡賀正畢、乘輿御豐樂殿、賜宴侍臣、省預點撿次侍從以上、十六日准此掃部寮預設輔已下座於便處、省掌執版位進、當丞座前置之、去三許丈五位以上就版受點、丞判命之、其參議以上八省卿、彈正尹、左右大辨、及三位已上、左右衛門、左右兵衛督、左右近衛少將已上並遙點、其左右衛門、左右兵衛佐令府生已上申陪陣之由、餘儀准此所司開豐樂儀鸞兩門、其後官人率陰陽寮入自逢春門進、七耀御暦、輔以上一人留奏進、其詞曰、中務省奏、陰陽寮供奉禮留其年七耀御暦進良乎久申賜止奏、無勅答、若親王任卿者、以進禮良久乎恐美恐美毛申賜替進良久乎、他皆效此、宴訖、大少輔執札相分唱名、賜御被一條、事見儀式

〔西宮記 正月 上〕節會

裝束司、少將、辨、史登堂上、行事藏人催內侍、女藏人、上髮闈司撤御帳、御插鞋、釵、錦鞋、筵道等事、外記催供奉諸司官催饗祿裝束事、左近設上官階下饗、右近設殿上人階下饗、　左右近衛吉上居南階左右、記、當日事、他節會准之、天皇出御南殿、藏人奉御靴式筥、內侍二人持神璽寶劍立前後、出御置机上、女藏人等供奉、(中略)內辨令藏人奏外任奏、入筥、被仰云、令候、列與、

室、供奉（禮留）事、又太宰府（乃）進（禮留）腹赤（乃）御贄、長若干尺進（樂久）申賜（等）申（無對答）、訖退出、即膳部、水部等入自承秋門取氷樣、腹赤御贄退出、大臣喚舍人、（再唱）舍人稱唯、（候逢春門外）少納言替入自逢春門、就位立、大臣宣喚侍從、（諸歌、九月九日等亦同、餘節宣喚大夫等）少納言稱唯、出自儀鸞門喚之、（他皆效此）親王先稱唯、（他節效此）參議、非參議、三位以下五位以上稱唯、親王以下、參議、非參議三位以上一列入自同門東扉、五位以上東西分頭入自東西扉、（參議以上後自親王五許丈、四位後自參議七許丈、五位與四位連屬、五位最後者、比到明義堂北頭、六位以下參入、但參議以上列行之間三許丈、）比入門衞仗共興、（他皆效此）而親王以下五位以上、東西分頭立庭中、去版南一許丈、異位重行、（挾馳道立、東者以西為上、立西者以東為上、）立定、大臣宣侍座、共稱唯、謝座訖、造酒正把空盞、（便用升殿者酒盞、）來授第一人、（共跪受授、）訖更還、却二三丈許北面立、群臣謝酒、（謝座亦同）訖受還、（他皆效此）以次升就座、五位以上見參議以上兩三人升殿、（不必待參議之升畢）共東西分頭著座訖、（凡親王以下五位以上參入儀、他皆效此、）諸仗共坐、少時所司（各著當色）賫供御饌、（一度十人、左右各五人、用四階、）近仗共興、（供饌訖共坐、他皆效此、）皇太子及上下群臣起座、（他皆效此）供饌訖、大膳職賫賜五位以上饌、（各入自堂後、給之、但升殿者膳部酒部等入自東廊、）先是酒部八人各趨立酒罇下、（此皆選內豎著當色者而充之、又宮內、大膳、大炊、造酒等主典以上、同侍上殿、他皆效此、）賜群臣饌訖、行酒者把盞賜升殿者、相續賜不升殿者、（賜自座後、）觴行一周、吉野國栖於儀鸞門外奏歌笛、獻御贄、（若有蕃客不奏、他皆效此、）訖大歌別當一人、奉勅下殿東階、出自儀鸞門喚歌者、歌者共稱唯、即別當率歌者相分入、（或時有勅止之、立歌亦同、）未入之間、鐘鼓臺依次建之於庭中、（內豎、大舍人相執而入自儀鸞門、又歌者相續入建之、擧却亦同、）擂部、分入自同門安座於鐘臺南、歌者立庭撞鐘三下、撾鼓三下、然後就座、奏歌訖退出、（或時喚別當侍殿上、不必待歌畢、）擂部入自同門却座、（下亦同）少時復入、安立歌座訖、治部、雅樂率工人等參入奏歌、（若有蕃客不奏之）訖退出、及宴將終、內藏、縫殿兩寮、分入延明門、置納被櫃於庭中、內記授宣命文於大臣若中納言以上、（他皆效此）外記進見參侍從夾名、（他皆效此）大臣進宣命文及見參侍從夾名、內侍傳取奉覽訖、簡堪宣命之參議以上一人、授宣命文、即受復本座、即皇太子起座、次親王以下下殿東階、自左近陣南去三丈、更西折一丈、西面北上、不升殿者見侍殿上者兩三人下殿、則相應俱下、（復升亦同、他皆效此、）各立堂前、（東西面進自堂前、各二丈、他皆倣此、）即宣命大夫降自同階、就版位、宣制云、天皇（我）詔旨（良萬止）宣大命（乎）衆諸聞食（與止）宣、

節會式

二、叙位宣命之後早出、文保三、三獻立樂了早出、○中略 應永二、國栖奏了早出、

〔内裏式上〕會式

皇帝受群臣賀、訖遷御豐樂殿、饗宴侍臣、其儀、南面鋪御座、御座西第二間設皇后御座、（南面）東第二間設皇太子座、（西面）次第三四間差南去設親王以下參議以上座、（西面北上）顯陽、承歡、兩堂（若有蕃客、總設顯陽堂、）設不升殿者座、（東西面北上）皇帝、皇后、御酒器、并皇太子酒器、安置之處、具所司式、東廊第二三間、安升殿者酒器、顯陽堂西柱北第五間、安不升殿者酒器、承歡堂與此相對、先是所司預辨供皇帝、皇后御饌、皇太子饌、（謂菓子雜餅等、但御飯并燔炙和羹等、御坐後供之、弘仁五年以往、御坐後供之、始自六年預供置之、）及升殿、不升殿者饌、（並謂肴菓子等、但飯羹等與供御共給、）中務置尊常版位於殿前、北去一許丈、置宣命位、供設已訖、皇帝出清暑堂、御豐樂殿、皇后出御亦如常儀、近仗服上儀、陣殿下、少將以上仗槍、左右兵衞佐以上亦同、諸衞亦服上儀、（皆不樹器仗、）御座定、内侍臨東檻喚大臣、（若無大臣者、參議以上得、）大臣稱唯、到左近陣西頭謝座、訖登自東階、（凡升殿人、皆用此階、）著座、次皇太子登自同階、到座東而西面謝座、（凡每拜隨座宜、）謝酒著座、所司開豐樂、儀鸞兩門、未開先掃部鋪闈司座於逢春門左右、（每有奏事必用此儀、若無奏事不須、他皆效此、）兩門開訖、闈司二人出自青綺門分坐逢春門南北、大舍人詣門外叫門曰、御暦進牟止、中務省官姓名等（謂輔以上）候門止申、（闈司辭以叫門故替之、他皆效此、）闈司就位奏、（他皆效此）勅曰、令申、闈司復座、傳宣云、姓名等乎令申與、大舍人稱唯、（他皆效此）中務省率陰陽寮、舉置暦之机、入自逢春門、（他皆效此）立庭中退出、輔以上一人留奏進、其詞曰、中務省奏久、陰陽寮乃供奉禮留、其年七曜御暦進禮樂久乎恐美毛申賜止奏、（無勅答、若親王任輔者、以進禮樂久乎恐美毛詞替進樂久乎、他皆效此、）奏事者出、闈司共進舉机升殿東階、安南榮、即降立階下西、内侍開函奏覽、訖返置机上、（暦留御所、）闈司升却机、安本所、還就戸内位、内竪入自逢春門、持机出授陰陽寮、次大舍人叫門、闈司就版位奏云、氷様進牟止、宮内省官姓名叫門故爾申、勅曰、令申與、闈司傳宣、省丞以下史生以上相分、與主水司官人以下共執氷様、又與太宰使同執腹赤御贄、省輔相扶入自同門、共安庭中退出、輔一人留就位、奏曰、宮内省申久、主水司乃今年收氷合若干室、厚若干寸以下若干寸以上、益自去年若干室、減自去年若干

由先例云々、此事可勘知事也、不知是非者、內辨被早出、廣橋大納言賜彼笏續之云々、〔件笏後日以宣光返進云々〕今日散狀乞請奉行宗豐、以白紙書之、彼家說也云々、三日、今夜藏人佐宗豐談、權辨盛光云、所遣于少納言之節會御敎書書樣、如公卿書之、家說也云々、　三十二年十二月七日壬申、入夜藏人中務丞重仲來臨、左頭中將來臨、御敎書案等被示合、大略如此、　元日節會、可令申沙汰給、仍執達如件、　十二月　　謹上　藏人辨殿

永享五年正月一日丙辰、節會、〔〇中略〕後聞、右府〔〇藤原房嗣〕早出、〔諸卿堂上之後、即退出〕其後事可行之由、被示新大納言、〔〇藤原持通、去年十二月二十七日任、〕大納言稱所勞退出、仍被與奪藤中納言、〔勸修寺中納言退參也〕中納言固辭、仍又被示中御門中納言、〔〇宗繼〕中納言申云、上﨟猶可奉歟、猶申子細者可存知者、如此之例、勸修寺中納言〔〇經成〕參入、續內辨云々、抑源宰相〔〇重有〕不可被宛所役之由固辭、仍御酒勅使宣命使、共以具定卿奉之、雜事催右府雖被宛、重有卿、稱進退不覺悟固辭、而勸修寺中納言續內辨、自身每度下殿催之、是依納言也云云、或雖中納言猶仰參議有例歟、可尋可否、

〔二水記〕享祿三年正月一日壬辰、抑今日宴事、〔〇中略〕內辨、文龜初度、逍遙院被奉行、今又相次參勤、定眉目之至歟、併忠功之所令然也、可感也、〔〇中略〕元日節會次第〔〇中略〕續內辨事　降立軒廊、召外記令押笏紙、　一攝關內辨事　昭宣公〔〇藤原基經〕　貞信公〔〇藤原忠平〕承平三正七、同四正一、同五正一、攝政左大臣、　知足院殿〔〇藤原忠實〕天仁元、大嘗會辰日、攝政右大臣、　後光明峯寺〔〇一條家經〕建治元、文永十二正七、攝政左大臣、　芬陀利華院〔〇一條內經〕文保三正十六、關白內大臣、　後芬陀利華院〔〇一條經通〕曆應二正七、關白左大臣、　後報恩院〔〇九條經敎〕延文四正十六、關白左大臣、　是心院〔〇二條師良〕應安三正七、關白右大臣、　後福光園院〔〇二條良基〕永德四正七、攝政太政大臣、　故殿下〔〇一條經嗣〕應永二正十六、關白左大臣、　福照院〔〇二條滿基〕同十七正一、關白內大臣、　後三緣院〔〇九條滿家〕同廿六正一、關白左大臣、　早出事　拔笏起座、參御所方、或直退出、　天仁元、以奉行職事賜笏於民部卿、內辨可繼之由仰之、　文永十

賓經朝臣不可召者、仍則返給彼狀於外記畢、書消息相副怠狀等、（三通、巻一禮紙結中、入消息禮紙中、）使遣頭權亮許、須招寄付之、然而途遠之上、今日敍位奉行職事也、仍随宜以書狀奏之也、其狀云、　獻上　去一日節會、辨官等無故不著外辨座事、　右可被奏聞之狀如件　正月六日　左大臣　頭權亮殿　怠狀三通

修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家宣解申進　去一日節會、無故不著外辨怠狀、　右大外記中原朝臣師季傳宣、左大臣宣、奉勅、去一日節會、無故不著外辨、宜令進怠狀者、依無所遁申、進怠狀、謹解、　承久二年正月五日　修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家定　從四位下行右中辨兼春宮亮藤原朝臣資賴解申進怠狀事　去一日節會、不著外辨怠狀、　右左大臣宣、奉勅、去一日節會、不著外辨、宜進怠狀者、依無所遁申、進怠狀、謹解、　承久二年正月五日、從四位下行右中辨兼春宮亮藤原朝臣資賴、　右少辨正五位下藤原朝臣成長解申進怠狀事　去一日節會不著外辨怠狀　右左大臣宣、奉勅、去一日節會、無故不著外辨、宜令辨申子細者、依無所遁申、進怠狀、謹解、　承久二年正月五日　右少辨正五位下藤原朝臣　八日己亥、申剋許頭權亮信能朝臣來、於公卿座謁口口宣怠狀等仰可返給之由、○中略予書消息副怠狀遣大外記師季許畢、（須召寄下之也、而今日請寺修正奉行辨可出仕、遣之間可憐愍歟、仍遣之也、）　其書様　宣旨　左中辨藤原朝臣家宣、右中辨藤原朝臣資賴、右少辨藤原朝臣成長、去一日節會、無故不著外辨怠狀事、　仰、誡將來可返給、　右可被下知之狀、依左大臣殿仰、執達如件、

正月八日　前甲斐守兼敎奉　大外記殿

〔後愚昧記〕永德三年正月元日乙巳、元日節會、内辨左大臣殿、（○足利義滿）

〔公卿補任　後小松〕永德三年（癸亥）

左大臣從一位源義滿（元日踏歌等内辨）

〔薩戒記〕應永卅六年正月一日、節會奉行藏人左兵衞權佐宗豐也、内辨關白、（左大臣）云々、抑次將不致禮、延文四年關白内辨之時、亦次將不致禮、以陣官被追退云々、凡於關白者不謂家禮非家禮、可有其禮之

謬雖太无術之由被鬱陶云々、此事余（○藤原兼實）案之、插笏紙非難事歟、又二獻已後三獻可被行之由讓次人（實房）著仗座見見參奏聞之後復座不被行三獻云々、實房卿云、无內辨行三獻事、何年例哉者、此事太不當、縱內辨雖存失儀、依其讓被行三獻、何事之有哉、何况路事之時、三獻以前奏見參常例也云云、余案之、三獻以前奏見參等例、凡不覺悟、頗以早速歟、　廿三日丙戌、兼光語事等、　一去元日節會、左大臣退出、三條亞相受取內辨笏之間、皇后大夫候坐、仍被行內辨云々、此事太不審、乍置上﨟不可被讓下﨟、兼光聞誤歟、不審々々、又云、三獻以前被見見參等、立樂已欲默止、仍賴業等申行令行立樂了、於三獻者、无內辨行三獻之例不見之由、實房卿執之、仍內辨歸著之後被問實房、實房答此旨、定房不請、頗有論云々、　三月十六日戊申、關白被語事等、　一元日節會、內辨左大臣一獻之後退出之間、三條大納言實房爲家禮降向、大臣被讓內辨實房、間、閑次第事歸昇堂上之間、定房本自爲上﨟存知行之云々、此事太不審、乍置上﨟讓下﨟之條、未曾有事也者、　一同日節會、定房讓三獻實房卿、二獻以後爲奏見參等著陣、其間勸三獻、而坐中沙汰出來、无內辨行三獻之例不見云々、仍追歸了、內辨歸著尋之處、答此由、定房頻鬱云々、其時實守卿云、大二條關白內辨之時、讓三獻於土御門右府云々、覺悟彼例定房行之優事也云々、此事雖不覺悟、縱內辨行僻事、已次人只可隨彼例也、末代公事不便云云者、

〔玉蘂〕承久二年正月五日丙申、早旦頭權亮信能朝臣來、（○中略）元日外辨、無辨官一人、仍中少辨皆悉可令進怠狀、（○中略）則召遣大外記師季、不經幾程參入、予出逢召前、仰云、左中辨家宣朝臣、右中辨資賴朝臣、權右中辨資經朝臣、左少辨賴資、右少辨成長、去元日節會、無指障不候外辨座、子細可令辨申者、外記稱唯、　六日丁酉、怠狀之中、資經朝臣未進、仍遣使者畢云々、頃之到來、以基邦覽之、（入筥、引禮紙一卷、儀禮紙、中不結）之、申云、先例先可辨申子細之由仰候、其後陳申所存旨、御覽畢返給之時、被仰可進怠狀之由也、而事急速也、直可進怠狀之由、頭權亮內々被觸之、仍如此云々、此間頭權亮信能朝臣送書狀云、怠狀之中、

四位五位職事六位藏人勤之　左右次將　左右近衛中少將勤之

出御　劒　內侍　璽　內侍　命婦　御下勤之　御簾　關白頭中將頭辨勤之　御裾　御靴

四位五位職事勤之　脂燭　四位五位中少將從六位藏人勤之

〔經信卿記〕承曆五年（○永保元年）正月一日己丑、參內、參著殿上、殿下（○關白藤原師實）參御御前、次出御殿上、（○中略）次參陣、頭辨出陣、仰內辨事於右大臣、殿下次日密々被仰云、昨日內辨可仰歟否、予申云、一上者不可仰也、人々雖申、故宮內卿申云、小野宮右府被坐一上之時必被仰、而近來不仰、未知可否者也、殿下宣云、予爲左大臣著陣、雖須勤內辨也、而依近代例不勤件役、仍可被勤一上事等由、讓聞右大臣也、如不堪奏是同、以之思之可仰歟者、此事尤撰也、

〔愚昧記〕仁安二年正月一日庚子、午始正朝服參攝政（○藤原基房）亭、（○中略）事了各退出、予參女御殿、其後歸畢、不參節會之條可云奇怪、後聞、良久右大臣不參、大納言、中納言四五輩候陣座云々、而大夫、上﨟同不被參之由、遂電云々、攝政以經房內辨可勤仕歟由、內々被示云々、中御門中納言、雖見苦候、及闕如者、可勤仕之由被申、

〔玉海〕仁安三年正月一日甲子、節會內辨、別當隆季中納言內辨頗希代事也、（○中略）又召參議詞、一度ハ召兼國、一度ハ召參議姓朝臣云々、（四位參議可召名也、而召官云々、但可尋問也、）

承安三年正月二日乙未、未剋許頭辨長方朝臣來、余相逢問去夜節會之間事、長方答云、供膳了一獻以前入御、即內辨左大臣（○藤原經宗）退出、三條大納言實房、乞取笏行其後事云々、　五日戊戌、入夜中御門中納言被來、（○中略）此次語云、去元日宴會、內辨左相府早出、讓或卿相、而三獻幷立樂等總以無音、太爲奇、希代事也云々、事若實者、未曾有事也、　二月七日庚午、申剋許源中納言雅賴來、（○中略）此次被相語云、去元日節會、內辨左大臣一獻已前早出、第二人皇后宮權大夫定房、下殿插笏紙行雜事、而不可插笏紙之由、有傍難之人、太無其謂、康治之比、宇治左府（○藤原賴長）早出之時、中院入道（○源雅定）插笏紙行之、

〔天明年中行事〕正月元日 略○中 節會　是は元日の夜紫宸殿江出御御宴會なり、散狀、參役之名前也の定によりて、左大臣、右大臣、内大臣、大納言、中納言、參議、三位中將、非參議等、二位三位の内、納言、參議をかけず、其餘の官をかけたるを非參議といふ、二位三位計の人も非參議といへど、官をかけざれば參役はせざる也、其外少納言、藏人、辨、束帶にて是を勤む、大臣の内仰にて内辨を勤らる、大臣早く退出の時、續内辨とて、大納言勤らるゝ也、其餘の大中納言以下を外辨といふ、次將は中將少將の人勤らるゝ、女官は髮上得選、一ノ釆女、二ノ釆女、三ノ釆女、闈司、闈司は御門の鍵預りなり、大聖寺宮より一人、甘露寺家より一人、以上二人出ル、女孺、主殿司也、其外地下役人、大外記、官務出納貳人、造酒正、少外記、少史、内竪二人、史生四人、左右の官掌四人、召使二人、中務省、大藏省、木工寮、掃部寮二人、御藏小舍人二人、主殿寮二人、南座貳人、大舍人、衞士、使部二人、御厨子所預り、内膳司、造酒司、大膳職、内藏寮官人、戸屋主、修理職、仕人三人、樂人、掌燈、灯火の事、女孺の役なり、小朝拜ある年は、小朝拜畢て節會あり、御次第略之、

〔故實拾要 三〕節會參陣之人々　内辨　左右大臣、左右大將、大納言等被行之、　外辨　大納言、中納言、參議、三位中將等被行之、　辨　中納言　次將　左右近衞中少將也　地下諸司　女官 髮上、得選、一采女、二采女、三采女、闈司、女孺、主殿司、　大外記　造酒正 大外記兼之　官務　少外記　少史　少内記　出納 兩人　内竪 兩人、内竪丹後守、　外記官史生 三人　左右官掌 四人　外記官召使　陣官人 兩人　中務省　大藏省　木工寮　掃部寮 兩人　御藏小舍人 兩人○兩人、一本作四人、　主殿寮 兩人　南座 兩人　大舍人 一人　衞士　外記官使部 兩人　御厨子所預　采女正　内膳司　造酒司　大膳職　内藏寮官人　戸屋主　修理職　仕人 三人　樂人 國栖ノ立樂勤之　右節會參陣人々也

〔官庭行職志〕正月元日 略○中 節會參陣人々　内辨　左右大臣、内大臣、左右大將、或大納言第一人勤之、　召内侍　内侍之内勤之　外辨公卿　大中納言、三木、三位中將、非職參議等勤之、　參仕辨　四位五位職事勤之　少納言　當官少納言勤之　奉行職事　四位五位職事勤之　早參職事

元日節會出御、可下令ㇾ候二脂燭一給上者、依二天氣一執達如ㇾ件、

十二月廿八日　　左中辨某

謹上　稱號少將殿

大内記可ㇾ付二一通一也、有二落字一之間書入、後日ニ可二書改一、
元日節會宣命事、任ㇾ例可下令二存知一給上者、依二天氣一執達如ㇾ件、

月日　　――某

謹上　大内記殿

亞相
元日節會御參事、可ㇾ奉ㇾ存候、外記散狀遲々間、且言上如ㇾ件、誠恐謹言、

十二月――　　右中辨――奉

進上　大納言殿

追言上　別而御點候、必可下令二存知一給上之由御沙汰候也、重誠恐謹言、○中略

元日節會任ㇾ例可下令ㇾ申二沙汰一給上、仍執達如ㇾ件、

十二月――　　右――

藏人式部丞殿

兩局
元日節會任ㇾ例可ㇾ被ㇾ催二沙汰一之狀如ㇾ件（宣胤記催之字無ㇾ之）

十二月――　　右――判

四位大外記殿　新四位史殿　私言、於二新叙一者如ㇾ此可ㇾ書歟、且亦往古有ㇾ數之時、依二相紛一如ㇾ此歟、當時但一人宛也、強而位階可ㇾ書事不二甘心一也、大外記殿、左大史殿ト可ㇾ書事歟、

早參事
元日節會可ㇾ令二早參一給、仍上啓如ㇾ件、

十二月――　　右――

謹上　頭辨殿　藏人辨殿　藏人佐殿

備天覽、受御點相定、〇中略 奉行職事、於里亭呼兩局、令見散狀、近頃遣散狀於兩局歟、可依時宜、當日臨期右之散狀備叡覽、以便宜近臣獻之、散狀定後、內々相觸之體續左、厚紙三枚、有裏紙、〇中略

元日節會事廣光卿教書案云　催簡目　諸卿事、少納言事、辨事、次將事、　以上被載御點可相催也、凡執政臣丞相中爲御點者、職事罷向里亭可相催之、若又有故障者、以消息可申也、　又御點遲々時、先申內辨御點早相觸之、固實云々、

宣命事、仰大內記、下知極臈事、下知兩局事、職事早參事、立樂事、官方催也、不及職事下知者也、　諸司事、藏人方出納兩局相觸之間、直不及催之者也云々、　今案、私云、剱璽內侍、威儀命婦之事、內々勾當內侍迄申入置也、但依爲女中之儀不知其人事也、絹著用之處、剱璽內侍者、於臺盤所著用、依是南方副簾于內々屛風引廻置也、威儀命婦ハ從御內儀著用之出申也、

一通案

元日節會御參事可承存候、外記散狀遲々之間、且言上如件、且言上如件、俊國誠恐謹言、右薩戒記見、

十二月廿八日　　左中辨某奉

進上　權大納言殿

懸紙云　追言上　御點候、必可令存知給候也、

元日節會可令參陣給者、依天氣執啓如件、

十二月廿八日　　左中辨某

謹上　稱號少納言殿〇中略

元日節會可令早參給、仍執達如件、

十二月廿八日　　左中辨某

謹上　頭中將殿〇中略

〔西宮記正月上〕節會、○中略内辨著兀子、(中略)大臣不參之時、納言依宣旨行内辨事、上卿中間有障退出之時、讓次人行之、

〔公事根源正月〕元日節會　其儀、小朝拜はてぬれば、内辨大臣、陣の座に著て事を行ふ、一上に非ずして、位次の大臣ならば、内辨に候べき由を、職事をもて仰らるゝ也、大方よろづの公事を、一の上たる人はまへをわたすまじきにや、

〔友俊記〕年中御作法の大概物がたり
一夜に入て、元日の節會おこなはる、内辨は一の人、或は左右の大臣内大臣、かはるがはる三節會參役なり、始終内辨の事あり、なかばより輿奪あれば續内辨といふ、陣後なれば、陣後の續内辨などゝいふ、外辨は右大臣臨期の不參なれば内大臣也、又は大納言也、多くは第一の公卿外辨の上首也、○中略五位の外記史は、非侍從の見參に入る、但し外記よりすゝむる見參に、次侍從非侍從の見參二通なり、地下にては、五位外記史のみ非侍從の見參に入るゝ也、散狀といふは、職事より大臣、納言、辨、少納言、左右の次將まで、横折の紙に書て、外記官に出さるゝをいふ、此散狀を見て、大外記此兩見參をふたゝむる事也、見參は強紙なり、ながきは續でふたゝむ、かけ紙なり、

〔日次紀事十二月〕廿六日　明年三節會役人定、今明日間多於關白家、明年正月三節會之内辨、外辨於役人定之、而被命散狀於職事、職事則以一通傳命於諸家役人、

〔近代年中行事細記〕元日節會催方條々
兼日内々依御氣色、窺定散狀、或先候關白之里亭、依命定之、其後備叡覽、當時依幼主無出御、寛文四年之節會散狀、舊冬十二月十四日、有官位之御沙汰、法皇新院御幸、左大臣房輔公、前攝政康道公、武家傳奏勸修寺前大納言經廣、飛鳥井雅章祗候御沙汰畢、前攝政被申可被定三節會之散狀之由、法皇仰云、左府前攝政經廣雅章等、於便所可定之、各蒙仰、於休所被定散狀、元日節會奉行廣橋頭左中辨貞光朝臣、○中略古老傳云、散狀之事以高檀紙大鷹也被染宸筆被仰出者也、近代略之、職事各書付之、

殊ニ後世兵亂相繼ギ、朝儀荒廢スルニ及ビテハ、用途ノ不足ニヨリテ毎ニ行ハレズ、應仁亂後ノ如キハ二十餘年間中絶シ、長享、延德ノ頃ニ及ビテ再興アリシカドモ、其後復タ每年之ヲ行フコト能ハズ、織田氏興リテ皇室ヲ尊ビ、次デ豐臣氏、德川氏等一統ノ業ヲ成スニ及ビ、天正ノ末年ヨリ漸ク昔日ノ儀ニ復スルコトヲ得タリ、

節會ノ日、群臣ノ裝束ハ、文官ハ其位次、官職ニ應ジテ、有文帶又ハ巡方帶ニ魚袋ヲ著ケ、飾劍又ハ螺鈿劍ヲ用ヰ、武官ハ卷纓ニ闕腋ノ袍ヲ著クルヲ例トス、

名稱

〔日本書紀 二十五 孝德〕白雉元年二月甲申、朝庭隊杖、如元會儀、(ムツキノツイタチノヨソホヒノ)

〔增山の井〕元日節會(セチヱ) 腹赤、國栖奏、くず笛、諸司奏、七曜御曆、氷樣、

〔公事根源 正月〕元日節會 〇中略 抑此節會は、天子紫宸殿に渡御なりて、群臣百官に酒を給て宴會有儀也、〇中略 宴會と書くは、とよのあかりとよめり、大かたのせちゑの名にて侍にや、豐明節會には限べからず、

〔名目抄 恒例諸公事〕元日宴(グワンニチノエム) 今世諸人、以僧爲師、愛僧(ケン)云元日、故爲誤之註之、

〔顯昭陳狀〕元日宴　　左　顯昭

むつきたつけふのまとゐや百敷の豐の明の始なるらん

〔倭訓栞 前編 十八 登〕とよのあかり　日本紀に宴會、宴竟、又樂府、古事記、內裏式に豐樂をよめり、豐明の義也、夜を日についで酒宴するをもて名くる也、

制度

〔令義解 十 雜〕凡正月一日、七日、十六日、〇中略 皆爲節日、其普賜、臨時聽勅、

〔江次第抄 一〕元日宴會　凡節會有大儀、中儀、小儀、〇中略 元日踏歌謂之小儀、大夫以上預焉、其中儀、小儀、皆著常袍、

定內辨以下職員

〔延喜式 十一 太政官〕凡元日朝賀畢、賜宴次侍從以上、大臣侍殿上行事、事見儀式、

古事類苑

歳時部六

元日節會上

元日節會ハ、正月元日天皇殿上ニ出御シテ、群臣ニ宴ヲ賜フ儀ニシテ、卽チ小儀ナリ、元正天皇ノ靈龜二年ヨリ行ハル、蓋シ是ヨリ先キ、文武天皇ノ大寶令ニ一年ノ節日ヲ定メ、元日ヲ以テ其首ニ居キシカバ、元正天皇ハ此制ニ據リテ行ヒ給ヒシナルベシ、其殿ハ元正天皇ヨリ孝謙天皇マデハ、或ハ朝堂ニ於テシ、或ハ中宮ニ於テシ、或ハ藥園宮、中務ノ南院等ヲ用キシコトモアリテ、一定セザリシガ、嵯峨天皇ニ至リテ豐樂殿ヲ用キ、淳和天皇ハ紫宸殿ヲ用キラレシヨリ、其後多クハ此兩殿ニ於テスルコトヽナレリ、節會ヲ行フ時ハ、先ヅ內辨以下ノ職員ヲ定メ、內辨ハ上位ノ大臣之ニ任ジ、他ハ散狀ニテ之ヲ命ズ、節會式ニハ、先ヅ諸司奏トテ、中務省ヨリハ七曜曆ヲ奏シ、宮內省ヨリハ氷樣及ビ腹赤贄ヲ奏スル儀アリ、(後ニハ外任奏モ加フ)次デ群臣殿上ノ饗座ニ著キ、酒饌ヲ賜フ、此間吉野ノ國栖ハ歌笛ヲ奏シ、大歌別當ハ歌人ヲ率テ立歌ヲ奏シ、治部省ハ雅樂寮ノ工人ヲシテ立樂ヲ奏セシム、宴將ニ終ラントスルニ臨ミ、宣命ノ大夫版位ニ就キテ宣命ヲ讀メバ、群臣殿ヲ下リテ稱唯拜舞シ、順次祿ヲ賜ヒテ退出ス、若シ物忌、忌月等ニ當リ、或ハ卽位以前ナレバ、天皇出御セズ、又忌月、災異、兵亂等ノ時ハ、音樂ヲ停止ス、其他日蝕ノ時、又ハ當日ニ天皇元服アル時ハ、二日若シクハ三日ニ延引シ、諒闇或ハ兵亂等ノ時ハ、平座見參トテ略儀ヲ用キルカ、或ハ全ク節會ヲ停止スルヲ例トス、

にとりていみじかりければ、ふるまひおほせられけり、

〔おもひのまゝの日記〕やう〳〵夜あけ行ほどに、小朝拜御藥の奉行の人々まゐり集りて、とくとくと催す、〇中略やがて上達部ひきつれて殿上にまゐりぬれば、小朝拜催さる、前關白大殿にて、嘉保よりこのかた、かしこき代々のあとを尋ねて小朝拜にたつ、牛車にのりて隨身十人いとめづらかなるさまなり、大殿殿上の奧の座につきぬれば、關白ははしにさぶらふ、太政大臣右大臣左右大將、數を盡して卅人ばかり、殿上所せきまでつきならびたり、無名門より入ほど、思ひ〳〵に追つれたる隨身のさきの聲々、いとおどろ〳〵しきほどなり、次第に座をたちて、ゆば殿につらなりたつ、事のよしを申、出御のしきなど皆例のことなり、前關白、關白兩人ゐる、これもめづらしき事なるべし、大殿笏をつきて、宿老の拜とかや用らるゝ、元弘にも故殿かやうに振舞れけるとかや、

下起殿上列立弓場、小時出御、左大辨賴藤出迎、執柄被奏事由了、

申次上首頭與管領頭相論事　應永十三正一殿記曰、家俊申云、小朝拜申次事、就管領頭辨可存知由申之、又頭中將爲位次上首可勤仕之旨申之、兩貫首共以參議、近年例無所見、可爲何樣哉云々、予答云、上首猶可勤歟、但可依先規、兩人各可辨申歟之由仰之、於先例者、今間不覺悟、宜隨御計云々、仍以家俊內々伺時宜處、不得御才學、只可然之樣可計申沙汰候、予令仰云、於先規者、只今不分明歟、然者就事理管領頭勤仕無子細歟、如此事令計與奪候上者、申次事、又可相准歟之由仰了、此事止引勸之處、文永三年圓明寺殿御記云、頭中將雅言朝臣、頭辨經任朝臣相並之時、頭中將爲上首勤申次之由有所見、而當座不覺悟、可謂無念、但非座次事、兩頭强不可相爭事也、且傳聞、明德年中家房卿爲管領頭之時、下﨟以知輔朝臣勤申次云々、近例已如此、所詮無定儀歟、於貫首羽林可勤之歟、雖然爲止當座諍論、此左右仰頭辨了事儀未盡歟、爲之如何、

〔愚管抄四〕知足院殿藤原忠實申されけるやうは、君の御ゆかりに不慮の籠居し候にしかども、攝籙は子息にひきうつして候へば、よろこびて候、いま一度出仕をして、元日の拜禮にまゐり候はん、さてこの關白が上に候はんと申て、天承二年正月三日なん、たゞ一度出仕せられたり、其日は二男宇治左府賴長の君は中將にて、下がさねのすそとりてなどぞ、物語に人は申す、此日攝政太政大臣忠通、次に右大臣にて花園左府有仁、三條御子也、次內大臣宗忠、家人也、其次々の公卿さながら禮ふかく家禮ありしに、花園大臣一人こそゑみて揖してたゝれたり、いみじかりきとこそ申けれ、すべて知足院殿は御執ふかき人にや、此拜禮に參てとしよりやまひあるよしにて、いまだ公卿列立とゝのはらぬさきに、脚病ひさしくたちて無術候とて、かつ〲拜候はんとて、いそぎ物せられけり、おきあつかはれければ、攝政太政大臣よりてたすけ被申ければ、諸卿の拜いせんにいでられけるに、內大臣以下家禮の人多くありけるをも、ひとに見えんとにや人いひけり、時

雜載

〔兵範記〕保元三年正月一日壬戌、右大臣殿幷中納言中將令參內給、大臣殿五位六位前駈八人、中納言中將前駈四人、本府一員、府生番長乘移馬、本隨身褐衣垂袴、紅梅壺胡籙如常、○中略依小朝拜也、

〔玉海〕治承二年正月一日丙申、先參內、裝束色目如例、魚袋飾劍、紺地平緒、○中略主上出御、○中略余依灸治不可候小朝拜節會等之由奏之、即出自右衞門陣、

〔明月記〕正治二年正月三日、仰云、御堂御流殿上人之間帶蒔繪劍、公卿以後帶螺鈿劍之由聞之、而各帶螺鈿云々如何、申云、或帶之、或又帶蒔繪、不同候歟者、成定中將而帶螺鈿也、賴宗右府之所爲大略不帶、家宗宰相先年帶之、成定師經等又帶之、而猶有所思今年帶之、

〔小朝拜部類記〕藏人頭中將歸出之時不帶劍例

承久二正一、光明峯寺玉蘂云、信能朝臣歸出之時、不帶劍不懸裾、歸入後帶之、是花山院說云々、愚案歸出帶劍、猶有謂歟、

〔吉口傳〕正安三年正月二日記云、小朝拜今日云々、職事丸友帶也、可著靴之條不審之由人々令申、先例可尋、定有先規歟、誠帶丸友、著靴之條有其理歟、

〔雲州消息中〕言上

右年花始擬之後、起居萬福歟、○中略雖爲夕拜郎、可列朝拜也、魚袋候哉、不宜謹言、

正月一日　左近衞中將

謹上東宮亮殿

〔小朝拜部類記〕御殿供御裝束○中略

先奏事由後供御裝束例　安貞三正一記云、關白以下列立弓場、頭中將實世朝臣出逢、關白氣色、頭歸入參朝餉奏云、關白申候小朝拜之由之後、向晝御座仰藏人仲業供御裝束了、

先供御裝束後奏事由例　永仁二正一記云、御藥了、裝小朝拜御裝束、無程御裝束了、執柄內府左幕

處、申候之由、更又申細工之許未持參之由、卽召遣之間經數剋、密々申關白處、小朝拜之時、可召御草鞋、節會之時參會者可足云々、仍著草鞋出御、關白、內府以下立小朝拜、

文治四年正月一日丁酉、小朝拜等、晝可行之由、舊年仰貫政朝臣、已告廻諸卿、○中略 公卿漸參集、而御服所未獻御裝束云々、勿論不足言也、召內藏頭經家朝臣尋之、皆悉奉調出了、申置可急進之由罷出了、重遣人、只今可責出之由仰之、此間右大臣已下公卿多參人云々、其後數剋不持參、仍內々尋女房云、若有舊御裝束哉、答云無之、僅一具所在、甚見苦之上、御下襲鼠食畢云々、勿論也、元正雖非可著御舊衣、遂不持參云如何、仍爲用意問之、而所答如此、不能左右、 及酉剋御服到來、通親卿奉仕御裝束、

建久五年正月一日癸亥、參內、御藥供了、著御御裝束、黃櫨如例、忠季朝臣、信清朝臣等奉仕之、于時光綱云、御靴不新調、行事藏人失錯也、欲用古御靴之間、寸法不叶、爲之如何、余一切事專撤散可著御靴、□□召御靴、有御感、神妙云々、此間余著殿上、右大將以下五六人在座、余告御裝束已了之由、各於弓場邊著靴氈、○中略 次出御、○中略 其後皆立了、余以下拜舞、○中略 卽以入御、

〔玉蘂〕嘉禎三年正月一日、幼主條○四 御寢氣度々奉驚、及亥剋著御御裝束、有御總角、黃櫨染闕腋御袍、 內藏頭家清朝臣奉仕之、次有小朝拜事、予出殿上、告御裝束之由、

〔伏見院御記〕正應三年正月一日乙巳、此間余改裝束著束帶、依可有小朝拜也、

〔薩戒記〕正長二年正月一日戊申、小朝拜出御、幼主例或不然、依院御例今日有出御云々、御束帶御草鞋如例、左兵衞權佐永豐朝臣著衣冠奉仕御總角、主上春宮アゲビンヅラ、人臣如當殿上サゲビンヅラ云々、但先日院仰、主上サゲビンヅラ、人臣アゲビンヅラ云々、藤宰相入道永藤在御前、承此事、有不審之氣、此事花園院中絕院御時、故入道宰相永行稱奉仕也、其記文明鏡也云々、凡德大寺、大炊御門等家相傳此事、近代皆以斷絕了、而永藤稱一流不失故實、以寢殿南面通用御殿南殿云々、

〔年中行事秘抄正月〕小朝拜○中略 貞信公記云、延喜十九年正月朔日、節會如例、殿上侍臣小朝拜、○中略 又云、大臣以下殿上六位已上、於東庭拜舞、巡方魚袋著靴、螺鈿劒、但六位衞府丸鞆帶、糸鞋、野劒、水豹尻鞘、各取笏、

ユ、

〔後深心院關白記〕應安五年正月一日庚戌、小朝拜幷院拜禮無之、神木在洛之故也、

〔百練抄九安德〕治承五年〇養和元年正月一日、無小朝拜、依南都火事也、

〔小朝拜部類記〕依兵革被止例　平治二　治承五　延文五

〔平治物語三〕金王丸從尾張馳上事

淺猿カリシ年モ暮、平治二年〇永曆元年ニ成ニケリ、正月一日アラタマノ年立返タレ共、內裏ニハ元日元三ノ議式事不宜、天慶ノ例トテ朝拜モ被止、院モ仁和寺ニ渡ラセ給ヘバ、拜禮モナカリケリ、

〔百練抄九安德〕養和元年正月一日、無小朝拜所々拜禮、

〔源平盛衰記三十四〕京屋嶋朝拜無之事

元曆元年正月一日、院ハ去年ノ十二月十日、五條內裏ヨリ、六條西ノ洞院ノ業忠ガ家ニ御座有ケレドモ、〇中略禮儀行ハレ難シテ、拜禮モ被止ケリ、又朝拜モナシ、〇中略平家ハ讃岐國屋嶋ノ礒ニ春ヲ迎テ、年ノ始成ケレ共、元日元三ノ儀式事宜カラズ、主上御座ケレ共、四方拜モナシ、小朝拜モナシ、

〔宣胤卿記〕文明十二年正月一日壬午、小朝拜元三御樂、亂中至于今十餘年停止、

〔小右記〕寬和元年正月一日、是日無小朝拜、延喜比有此事、殊賜仰事於諸卿、其由具存、而無仰事、默而停之、未知其故、是或卿相之所奏云々、不知先例歟、

〔薩戒記〕應永三十年正月元日癸未、或人曰、無小朝拜、是爲節會早速云々、無故停止事、先例不詳、

〔玉海〕治承二年正月一日丙申、余中將相共參御所、主上出御召具良通、入御晝御所方、頃之相具又出御、余依灸治不可候小朝拜節會等之由奏之、即出自右衛門陣、〇中略後聞、小朝拜御靴遲持參間、著御插靴出御、

三日戊戌、未剋頭中將定能朝臣來語曰、〇中略小朝拜時定能參上、先尋御靴事於藏人之

〔玉海〕正和二年正月一日戊子、今日依凶會、無小朝拜云々、

〔園太曆〕貞和五年正月一日癸巳、四方拜小朝拜依日次不宜、今年無其沙汰、外記注進如此、○中略延久元年正月一日、被止四方拜小朝拜、依日次不宜也、　寬治元年正月一日、被止四方拜小朝拜、依凶會日也、　仁安四年正月一日、被止小朝拜、依日次不宜也、　嘉應二年正月一日、被止小朝拜、依凶會日也、○中略　承久四年正月一日、被止四方拜小朝拜、依代始日時不宜也、

〔左經記〕長元八年正月一日丙戌、左大辨共參內之間、漸灑雨、未剋許關白以下參內、有議停小朝拜、○中略依濕也、

〔中右記〕長承三年正月一日辛亥、後聞、依雨無所々拜禮、又無小朝拜、

保延三年正月一日癸巳、小朝拜無之、依小雨下也、

〔玉海〕建久九年正月一日己亥、今日依日蝕節會小朝拜停止、　二日庚子、終日降雨、入夜殊甚雨、○中略七條院拜禮、依雨停止云々、小朝拜又無之歟、

〔親長卿記〕明應三年正月一日、無小朝拜、依雨也、　五年正月一日庚辰、小朝拜、諸卿不參之上、又降雨之間、旁無之、

〔小朝拜部類記〕依神木在洛幷遷座事、被停止例、每度例也、就中近代例別ニ載之、　正應五年正月一日　永仁三

正和二　曆應四　應安五　寬正五

〔園太曆〕康永四年○貞和元年正月一日、依春日神木幷神輿事、東大寺八幡宮關白以下拜禮、小朝拜無之、

貞和四年正月一日、春日神木於移殿越年給、仍長者以下執政一族不被出仕、大臣皆被蟄居也、依天慶之例、小朝拜被止之云々、

延文四年正月一日乙未、後聞、今日無小朝拜、是東大寺八幡神輿在洛之間、近年如此、

○按ズルニ、此書延文二年、三年正月ノ條ニモ、神輿在洛ノ事ニ由リテ、小朝拜ヲ停メシコト見

〔百練抄 十四 四條〕文曆元年正月一日庚子、依諒闇無節會小朝拜、

〔園太曆〕文和二年正月一日、今日小朝拜及關白拜禮無之、○中略 陽祿門院五旬之忌未過之故也、窮冬執政被示合之間、予計申此趣、若被容舊言歟、

〔小朝拜部類記〕不吉年被止之例 毎度例、仍不載、但爲散初心之蒙、近代例少々注之、

貞治四　去年七月光嚴院御事　應安八　去年正月後光嚴院御事　明德五　去年四月後圓融院御事　永享六　去年十月後小松院御事

〔年中行事秘抄 正月〕小朝拜事、○中略 又朔日當御物忌或止之、又不止之云々、堅固之時止之、

〔西宮記 正月上〕小朝拜 ○中略 天德五年正月一日、御記云、止小朝拜事、依當物忌兼延喜之始、勅停此禮也、

〔中右記〕寛治六年正月一日甲申、今朝大内依當御物忌、無小朝拜幷南殿御出、

天永三年正月一日己未、殿下令參内給、今日内御物忌□□□殿上給、被仰人々云、御物忌時小朝拜如何、或止之、或又雖御物忌無出御、立御倚子有小朝拜、不定也、但去々年依堅固御物忌無小朝拜也、任彼例被止小朝拜、

〔愚昧記〕嘉應二年正月一日壬子、予直參大内、先是太政大臣、内大臣、大宮大納言候殿上、○中略 攝政著殿上、小朝拜有無有其沙汰、是踐祚之後未有此事、而今日日次不宜、可憚否事也、爲信範沙汰、去年有其沙汰、而件事歡樂之間、不被知有否歟、但寛治元年依延久元年例被止之云々、仍無此事、

〔玉海〕嘉應二年正月一日壬子、參内、經華德門南殿御後等參殿上、於御後逢予大相國、問小朝拜事、答云、依日次不宜停止了者、

壽永三年正月一日辛卯、無小朝拜、爲代始、而依日次不宜也、凶會

〔明月記〕建久十年十二月廿五日、酉時許又參南殿、頭辨參入、爲御使有申事云、今年依日次不宜無小朝拜、明年又凶會日也、初度可被擇吉日歟否事云々、大略可被憚歟之由令申給云々、

三日小朝拜

〔後愚昧記〕貞治三年正月二日、傳聞、依關白(良基)拜賀遲々、小朝拜以下、今日巳剋被始行之、〇中略小朝拜畢退之間、中納言以下者、自下萠退出、近來儀也、仍至于俊冬卿退去之間、彼卿欲退處、於兼定卿并彼卿者不可退之由、關白示稱之、仍不退、先關白、次兼定卿、次實尙卿、如此退去云々、

〔長秋記〕天永四年正月三日、御元服後宴也、〇中略此間頭辨來、人々示可參殿上方之由、可有小朝拜也、左大臣殿(〇源俊房)召下官(〇源師時)被仰云、小朝拜可立歟如何、下官申云、二條殿居拜年不立給于小朝拜者、准彼例不立給何事候、加之今日可習起拜居拜、度々罷成者無珍氣候者、仍以頭辨依所勞不可立小朝拜之由、令申攝政給、内大臣以下經露臺被參進、非雨儀、尙可經階下歟、弓場殿方出御後、攝政以下出自仙華門北行進立、殿上人〇中略拜舞退出、此間左大臣殿於露臺窺見給、大相府還入之時、進出御前方給、殿仰云、小朝拜時北ザマニ進テ廻出也、重廻時是無禮事也、民部卿不立列、對面次相談云、依可奏祝詞、爲不屈所不立也、仍暫不出陣方、交稠人人後不立小朝拜、無禮故也、此後公卿還出陣方、

〔中右記〕大治四年正月三日壬午、予此間參内、〇中略小朝拜欲始之間也、不立其拜、只暫候仗座、小朝拜了、

停小朝拜

〔明月記〕建仁二年正月一日丁未、今日小朝拜出御有無、聊不定云々、又無小朝拜事、上古雖有其例、近古多不快云々、〇中略小朝拜無出御例　康和五年(堀河御物忌)　長治元(堀河御物忌)　天養(近衛)　無小朝拜例　天德五年(村上)　長和五(三條)　延久三(後三條)　寛治六(堀河)　天永元(鳥羽)　同三年、　長承三(崇德)　久安三(近衛)　久壽、　此例頭辨所被示也

〔小右記〕長和五年正月一日丙午、依不可有小朝拜(依玉體不豫歟)日晏參内、

〔權記〕正曆三年正月一日丙申、於攝政(〇藤原道隆)直廬右丞相以下會合、聊成讌飲、事了攝政以下引參上殿上、依諒陰無節會小朝拜、

〔百練抄(十後鳥羽)〕建久四年正月一日己巳、依諒闇無小朝拜、

第三二條內大臣殿、(ムチシギ)大中納言以下六十三人云々、

〔以事宿禰記〕文化七年正月元日小建、酉半刻許被始小朝拜、主上淸涼殿出御云々、關白三公公卿殿上人六位等一列、參議以下爲先、下﨟先退、主殿寮二人取立明、召使五人參仕(三人語合)云々、政官列立無之、戌刻許畢、

〔輔世卿記〕安政四年正月元日甲寅、酉刻前被始小朝拜、先是殿下令參內給、職事一統先驅推參如例、殿下經床子前並階下令參內々方也、其余大臣公卿以下殿上人等、殿下御參前後追々參集也、時申刻前也、酉半刻許、出御東廂、著御御倚子、後愛長朝臣降小板敷出無名門、向殿下一揖、經本路降小板敷出無名門告召由、於殿下一揖、次殿下棟步、以下公卿殿上人等次第入明義月華兩門、列立東庭、其列大臣大中納言一列、參議散三位一列、殿上人一列、六位一列、(各北上西面也)六位下﨟立定後咳聲令知之、次殿下以下一同拜舞如常、訖參議以下爲先、下﨟退出、次殿下棟步、以下爲先、上﨟退出、出月華門、次入御也、時酉半刻許也、

朝賀小朝拜竝行

〔西宮記〕(正月上)小朝拜　延喜初無此儀云々、天曆七年依中宮御藥止此儀、有朝拜之時、還宮後有此儀、或無之、

〔北山抄〕(三拾遺雜抄)朝拜事、(○中略)天皇御高座、(○中略)訖左侍從在上者進御前稱禮畢、(○中略)還御後房、(○中略)改御服還宮、其後有小朝拜、(或止之)卽御南殿宴會如常、

二日小朝拜

〔明月記〕建久九年正月一日己亥、日蝕天晴、　二日、小朝拜、頭中將申之、(雨儀廊下)

〔深心院關白記〕文永二年正月一日辛未、終日天陰、(中略朝拜節會二日可被行之、今日可有日蝕而正現者、小)(○中略)日蝕不正現、可謂法驗、然而節會小朝拜幷院拜禮等無之、　二日壬申、小朝拜節會、今日被行之、委旨在別記、

〔小朝拜部類記〕依關白不參爲二日例　正和六正二、今夜有小朝拜、申次顯親朝臣、(昨日關白不參之間無之○中略)

關白遲參翌朝巳刻被行例　貞治三正一、依關白拜賀遲々、翌朝巳刻有小朝拜云々、

一同不敷毯代事、是ハ當時無候哉、此毯代東山左府述作名目鈔ニ、セン代ト被點候、及數箇所候歟、センノ音不審候、其上セン代ト云公物不承及候、玉篇ニ毯、(他敦切)又靴セン同被用此候、靴氈韻府分明候、

一同申次事、著靴歸出、仰聞食之由直加列候、當家作法候、當時日野家ニモ如此候、不審之由、御祖父御演說候ッ、普通儀歸入著靴、自殿上口加列候歟、今度被仰聞食之由、後、於無名門外(前列)被著靴御加列候、見苦候ケルト申人候ッ、如何、(藏人頭靴令出納著之候、本式候、愚老其分候ッ、)

十五年正月一日辛丑、小朝拜、辨伊長朝臣申次云々、去年歸出之時不著靴失、當家說不可然之由、舊多令入魂之故歟、當年者著靴歸出、仰被聞食之由、直加列云々、又去年於御簾外供御靴、不可然之由、同令演說之處、當年與奪資定云々、是又不宜、御靴者貫首役也、參御簾內供之、歸出之時、候御簾有便事也、昇御倚子立事、六位藏人申異儀、又如去年出納持參地上云々、六位藏人二人昇之立事、先規所見分明也、無是非申所存事、太以不可然、公卿五人、(節會人數)殿上人、伊長、重親、通胤、資定、範久等朝臣、六位藏人等參列云々、關白(兼輔公未拜賀、又重服關白ハ、無除服出仕例云々、)不參、菊亭大納言爲上首、不練步云々、大納言上首時、多分不練也、兩納言相殘菊亭先退、次兩納言自上首退云々、大納言上首時、或悉自下﨟退云々、先規可尋知、

〔二水記〕享祿三年正月一日壬辰、〇中略、此後小朝拜、公卿次第列立、〇中略、此後主上出御、〇中略、各列立了、同舞蹈如恒、從下﨟退入、各一揖如常、此後入御、　清涼殿御裝束如例　東西庇御簾五間各撤也、(但上長押打也、)每柱供掌燈、庇內南方北方各立高灯臺供掌燈、中間(階間傍西)立御倚子、(先敷毯代、)其上敷御褥、階下左右主殿大夫舉松明、兩人東帶也、

〔御湯殿の上の日記〕永祿二年正月一日、小朝はいあり、くわんぱくも御まゐりあり、せちゑもあり、

〔孝亮宿禰記〕元和十年正月一日丙辰、小朝拜有之、第一近衞關白殿、(ハナタカ)第二一條右大臣殿、(チトシ子リ)

此外條々押紙ヲシ候テ、可返進候所、楚忽ニ御筆之傷ムザムザト注付候、實慮憚入候、雖盡短筆
候、併期面談候、恐々謹言、
十一月七日　乘光
萬里小路殿
八日、秀房朝臣狀到來、
昨日芳札時、分香祗候仕候間、只今拜見申候、先々此一冊早々被加御筆給候、一段祝著雖申盡存
候、御押紙ヨリハ、如此被加御筆事畏入候、
一御倚子立候事ハ、六位藏人候、自殿上東庭マデ出納持參候、此儀モ可爲六位藏人由、其沙汰候キ、
一申次作法相違儀ハ、先日以參上得尊意候間、相違分ハ不書載候、○中略秀房頓首誠恐謹言、
十一月八日　秀房上
中御門殿
十二月十八日、頭辨來云、○中略此次去正月小朝拜、於御簾外獻御靴事、不可然之由、令入魂了、猶條々
在左、
一小朝拜之時、渡殿上御倚子事、六位藏人二人舁之立御殿候、古來定儀候、去正月、出納自地上持參
之由、其沙汰候事、實候哉、
一同時獻御靴事、於御簾內奉之、普通儀候、今度先被候御簾、更御持參御靴候、其間簾外御佇立候、然
者何一役無與奪頭中將候哉之由、後日勅語候ケルト、或人語候、如何、於御簾內奉之事、舊式所見
分明候、愚老藏人頭之時、其分候ッ、
一御倚子不敷御褥事、何不申出哉之由、後日同勅定候ケルニテ候、是ハ六位藏人未練無故實候、當
時事ハ奉行被仰含、可有撿知候哉、

有事也、候御簾之後、退持參御靴之間令立待御、然者何御靴不與奪頭中將哉由被仰云々、誠以不可然事也、又御倚子下不敷毯代、不申出之條如何之由被仰云々、又小朝拜申次歸出之時著靴、仰聞食之由直加列當家說也、今度著淺沓歸出、仰聞食之由、於無名門外列前著靴、直加列云々、所存如何、雅綱重親等朝臣立小朝拜、宣賢朝臣不立、各有所存之故云々、十一月六日右中辨秀房朝臣狀到來、

先日預尊報候、畏存候、〇中略小朝拜事、今度令注付候、御隙時分是又被加御筆給候者、可畏入候、イヅレモ少々如此心注仕候、清書後重又被加御一見分之御奧書申請度心中候、クレグレ誠心注迄物候間、憚存候ヘドモ、以後爲覺悟候間懸御目候、必以參拜可申入候、秀房頓首、誠恐謹言、

霜月六日　秀房上

中御門殿

昨日委細承候、本望候、小朝拜御記令一見候、如此御沙汰、爲後勘尤可然候、〇中略

一立御倚子事、六位藏人二人昇之候定義候、今度出納立候ケルト始而承候、驚入候、出納ヨモ堂上ハ仕候ハジ、自地上持參候歟、階ヨリ上ハ六位昇候哉、

一御倚子ノ下ニハ敷毯代候、此御記誨ト候、相違候、御誨ハ御倚子ノ疊ノ上ニ可敷候、此二色今度不敷候事不可然候、六位申出敷候當時六位未練事候、奉行可撿知之條勿論、亦ヘン相違候、衣ヘン候、玉篇ニ、褥、而欲切、

一獻御靴事、於母屋ノ簾中著御、普通之規式候、今度簾外之條以外事候、殊候御簾之後、退更持參、其間御佇立云々、事義尤不可然候、頭中將公兄朝臣一役可存知事、何不與奪候哉、

一同申次事、歸出候時著靴歸出、仰聞食之由直加列候、當家說候、然今度仰聞食之由後不歸入、無名門ヲ於門外著靴、直加列候ケルト、見及候人々相語候ッ、以外次第、且見苦由申候所、此御記分相違候、シカト御覽及候分承度候、

〔御湯殿の上の日記〕明應四年正月一日、こてうはいなりて、ちんのぎ、うかゞいにまゐる、

〔親長卿記〕明應四年正月一日、後聞、小朝拜事、以外無人不可然、猶可催出之由、被仰節會奉行守光、仍雖申遣所々、已及夜景之間不叶、仰元長卿之所、領狀參仕云々、

〔宣胤卿記〕文龜二年正月一日乙亥、有小朝拜、出御清涼殿如例云々、御卽位以前此出御勿論云々、代始成被撰吉日云々、

〔二水記〕永正十四年正月一日丁丑、各著陣已後著殿上、〇中略各著定後、右府〇藤原實香起座出無名門、卽立門前給、以中央爲頭次各起座列立門前、東上北面不論月卿雲客各一列也、先於傍著靴、各見定後立列也、列立事、廻西築垣無餘地之時、北折可立云々、今度一列、尙可尋、各立定後、頭辨出無名門立、次右府小揖、是小朝拜之事申請之由也次頭辨答揖而直西折加列、此事太以不可說之由有傍難、其者先參御所申入畢由、後更出可揖、是被聞召分也、而今不及堂上、直加立列畢、假立之間、先有出御清涼殿、先是立殿上之御倚子於階間之中央、役人可尋主上〇後柏原出御簾中、頭辨參進褰母屋御簾、次欲奉御靴之處、內豎有訴訟事、移剋之條、主上暫立御、不可然事也云々、或仁者著御靴事、或於簾中著御有例、今夜御スアシニテ簾外立御、不可說也、急可仰定之處、無沙汰越度、內豎狼藉不足言、頃而頭辨伊〇藤原長持參御靴、主上著御靴之後南行一兩步、則著御倚子、頭辨懸御裾於後方退下、今日一人所役事、又有傍難者、職事不參之時、強不催之例歟、今夜傍屬右中左少等辨兩三人候也、一人之所役返々不可說歟云々、後聞頭辨所存、猶可爲一人云々、數日以後向顏之次、此事相尋父卿之處、不可限一人之由答之、父子之說參差如何、只爲蹉忘歟、但尙有例事歟、可尋之、戌剋各離列參進、先右府於長橋下練始、チギムシ練云々北行聊艮行、小輪練向西、以階間中央可立定所次久我大納言、通言帥中納言、公條新中納言、康親三條中納言、公輔四辻宰相中將、公言右宰相實胤等、次第列立、各一揖次頭中辨伊長朝臣立第二人之後頭中將公兄雅綱、重親朝臣等右中辨秀房、左少辨賴繼等一列、公卿殿上人等稱每度召使進直之次源諸仲、立傍頭之後藤原氏直等一列、各立定拜舞如常、今日於六位兩人者著淺沓拜舞了從下臈退入、各一揖退但久我帥兩人以前、右府者練步退入也、次入御、頭辨褰御簾、脫御靴退下、

〔宣胤卿記〕永正十四年正月一日丁丑、節會以前小朝拜如例云々、伊長朝臣於簾外奉御靴云々、未曾

以外退南歟之由存候、弓場ニハ難擬候哉、里內之時者無名門代前候歟、先々皆如此候キ、而近年間見及候分南引退候、不宜候キ、今年ハ猶超過候歟、不得其意云々、思案符合了、

〔薩戒記〕應永二十八年正月一日、小朝拜之事、節會奉行相兼之、近代流例也、奉行藏人辨宣光也、御殿東面御格子、至鬼間皆上之、庇御簾卷之、一向可撤之也開南妻戶、垂母屋御簾、□□□立御倚子於三間、先敷毯代、其上立之也、如常又敷御茵、每事存例、御倚子之南去三四尺、副御簾立高灯臺、供掌燈、又副北障子中央供同掌燈、主殿官人二人立階左右砌、擧松明、階間左右幷南角柱等供掌燈、公卿列立弓場、本儀先公卿列弓場、奏其旨、後可出御也、近年不然云々、次第列立、次殿上人予以下列立如拜禮、但六位藏人左近將監源重仲一人列五位之末、太奇怪也、舞蹈畢入御之後、仰藏人令改御裝束、

〔元長卿記〕延德二年正月一日、小朝拜可始行之由有沙汰之間、下殿假立、無名門前著靴不揖、參仕人々、關白、右大臣、中御門大納言、宣胤侍從大納言、實隆冷泉中納言、政爲中山中納言、宣親予、山科宰相、言國宰相、基富右大辨宰相、政資新宰相中將、通世頭中將、實望忠顯朝臣、雅俊朝臣、政宗、和長、藤原資直、清原宣賢、藤原懷邦等也、頭中將出逢殿下一揖、則退入參御所方、歸出揖殿下一揖後蹲居、非家禮人蹲居候條尤不審、定而有所存歟、經列前加立假立、殿下令進東庭給、以下次第相從到東庭一揖、六位最末立定之後、一同舞蹈、事畢自下﨟次第退、一揖同立定時

○按ズルニ、應仁ノ亂以後、朝儀久シク廢セシガ、本年ニ至リテ、元日ノ節會ト共ニ小朝拜ヲモ再興セシナリ、

〔親長卿記〕延德四年正月二日、參內、○中略種々及御雜談、夜前節會小朝拜事等也、小朝拜之時舞蹈了、四位退出之時、不待公卿退下、右府○藤原尚通已欲退揖之處、下﨟公卿退下之間、立直不退、進退見苦云云、新宰相經郷、萬里小路見合諸方舞蹈不可說云々、予申上云、久我大納言、新宰相等進退無心元存候キ、無爲□□□□申之、天顏令咲御、

各加列拜舞了、雨頭還入無名門、參御所、入御藏人改御裝束、内府新大納言（兼）此間退出、

〔園太暦〕貞和三年正月一日、抑今朝内府有尋示事等、狀幷返狀續左、（○中略）

三陽之初節、萬端之御慶、幸甚幸甚、珍重珍重、早々可參賀候也、

女院拜禮、不得雨霽者可延引候歟、只可被止候乎、小朝拜者猶可被行候歟、列立所可爲中門下邊（北上東面）候乎、但無便宜之樣存候、且又自殿上參進之路無可通之樣歟、近來如何候ケン、被止例モ候ヘバ如然候ハン、穩便之儀候歟、如何、（○中略）誠恐頓首、

正月一日　公淸

一期太平之佳期、萬春無疆之孟律、民庶愷樂、君臣悅豫、祝著端多、言詞難覃歟、幸甚幸甚、抑今日拜禮、陰雨無心之處、已屬晴、神妙歟、延引停止事可在時宜候、執柄定被申定候歟、小朝拜是又隨時宜候乎、雨儀ハイタク不覺候、元日不候者被停候條、常說候歟之旨存候、雨儀猶可被構行候ハヾ、列立所宜陽殿土廂ヨリ末ザマ、中門マデモ可列候歟、自殿上進路誠難治候歟、爲微雨者自無名門屛下副簷、宜陽殿後軒下（北上西面、但上﨟少々可向坤乾歟、）可列候歟、（○中略）心事期後信候、恐々謹言、

正月　公賢

〔後愚昧記〕應安二年正月一日、小朝拜、關白其外公卿同節會、殿上人兩貫首、（公時朝臣、嗣房朝臣、）五位職事二人（宣方、仲光、）六位二人（藏人、言長、）云々、今出川中納言注送云、小朝拜儀、關白以下著殿上、左兵衞督、中院宰相中將等不著之、自下臈各起座、於無名門西腋著靴、同所群立、（東上南面、）此時參議加列、更自關白次第進陣座立蔀前、當月華門南扉列立、（東上北面、）頭中將出自無名門、進出于南、（一丈許、）當關白前立、奏事由後、自關白次第進中門內、（當中門南腋立、）舞蹈、先度自其注賜次第ニヘ、著靴於無名門前、東上北面列立、奏事由後、直入中門之由被載之、（此事予引勘古來記所遣也、）而今度之儀相違、不宜所存也、曆應之比、故大納言（實尹卿事也、）記錄之旨同注給次第云々、此事近年之儀猶不宜候間、相尋內府之處、今度公卿列當中門南扉立之由承及候、愚意

前庭、(横南去一丈餘、當階東柱立也、)其後左大臣經關白後立西、(當時便宜、若爲西上者僅兩三人可立列也、大無便宜、仍左大臣無左右立西歟、)次頭中將已下殿上人七八人許列立、次六位一人其後立、以上(公卿一列、殿上人一列、六位一列、)拜舞了、關白已下右廻退下、

文治四年正月一日丁酉、小朝拜等晝可行之由、舊年仰實教朝臣、已告廻諸卿、(○中略)相引內府(○藤原良通)已下參內、自左衛門陣昇小板敷、(于時殿上無人、)出上戶、經鬼間直參御所、召實教朝臣問人々參否、申云、一人未參云々、右府(○藤原實定)已下早可遣人之由仰之、相次公卿漸參集、(○中略)余就殿上、(御倚子下方、如例、)先是右大臣內大臣以下公卿濟々在座、余示人々云、御裝束了、自下臈可被起座者、皆悉起了、余降自小板敷、(著淺沓、)出無名門代著靴、右府靴遲持來間、暫不被列立、著靴之後被來余立所、示可被加列之由、卽立內府上了、(被來余前事、未得其心、)次余立加右府上、(中門內邊也、公卿列西上北面也、)次頭中將實教朝臣氣色、余參上了、改御裝束、(上南庇簾立殿上倚子、擧搴燈也、藏人等役之、)出御自母屋西間、(實教褰御簾奉出之、)自御倚子西方著御之後、實教經御座之後、(出自西一間、可經簀子歟、但定間先逢歟、可尋之、)歸出、(直降中門廊南妻也、元自御參也、)仰聞食之由、余揖之、次余氣色右大臣、進立前庭、(余於中門內平橋西頭、欲練前、)右大臣已下列其西、(依庭經短、以東爲上、此內裏例也、)次頭中將已下列、(右大臣進立余西上、驚奇無極、練步進立於御前之間、右大臣留立件所云々、可謂未曾有、)其後六位又立殿上人後、次已上拜舞了、余揖右廻練退、(無程練止了、向後於御所敷刻練步、依無便宜早練止也、)於中門昇自小板敷、於上戶邊見之、諸卿漸歸出中門之間、余參御前、先是主上入御畢也、

〔明月記〕建永二年正月一日丁丑、內府(○藤原忠經)先是被座殿上、藏人等奉仕小朝拜御裝束、母屋御簾垂之、同西廂打簾代懸御簾、中央間敷毯代、(東西行、置鎭子、)中央立御倚子、(申事由之後可昇、近代依略儀先立之、)藏人等昇上庇御簾、頭辨申事由之後、可上之由示之、全垂相待、博陸(○藤原家實)御參之間、時刻推移、戌終許參、良久出殿上給、公卿自下立各出無名門、殿下於小板敷直著靴、立中門南扉程給、內府以下列立中門外、(北面西上、)頭中將出上戶、於小板敷著靴、(帶劔不取笏、)進參蒙目、經本路申事由、(於鬼間付內侍、)藏人上庇御簾、次出御、(兩頭候之、出御西門御簾、東端、可供御靴路也云々、)頭中將已進出、徒跣出無名門、仰出御由、歸來著沓、此間兩頭於小板敷欲著靴、召尋出納藏人等、至愚皆在南殿方歟、及良久之間、頭辨主殿司取寄靴著之、頭中將於小庭東上戶喚隨身著之、

立御倚子、今日先立如何、大略六位藏人等失歟、但九條殿年中行事、兼供裝束之由有其文者、然而近代不見、頭中將持笏仰聞食由、（主上著御靴、著御倚子了、）關白以下入從仙花門代（皆著靴、此間及秉燭、）一列、殿上人一列、（藏人貴元立其後、）舞踏了歸出、

〔玉海〕承安二年正月一日庚午、參內、經花德門、於公卿所邊暫勞脚氣、（此間左大臣左大將等參上、各被著殿上云々、）則著殿上、（經御殿、）於小板敷下揖、進著如恒、小時攝政（○藤原基房）出自御前方、經上戶被著殿上奧座、被問左府（○藤原經宗）云、可起自上歟、可退從下歟、左大臣申云、惱不覺悟、退自上可宜歟、攝政起座、出自第二門、於小板敷自被呼隨身、則隨身兼清持參履、攝政著之出無名門了、次左大臣以下次第起座、於弓場殿邊各著靴、攝政立西第三間、（柱內、）左大臣立門第四間、攝政云、北上西面可被列歟、則隨其詞、左大臣以下列立攝政以南、（左大臣立適合間、）次頭中將實宗朝臣（帶劍笏、）出自無名門、氣色于攝政、歸入了、御殿御裝束了歸出、（此度不取笏、猶以帶劍、）仰聞食之由、攝政相揖、（左大臣以下不揖、）次攝政以下經明義仙花等門、（各隨身上﨟一兩、入明義門、劍下襲尻、不入仙花門內也、）列立清涼殿東庭、（攝政當御座間額南間也、）殿上人實宗朝臣以下列立公卿後、（大略職事等許也、）六位列立了、舞踏如恒、（○中略）後聞、今日小朝拜之間、主上（○高倉）出御、御倚子、（右承足、）御座左右供掌燈、又主殿官人立明、（在東庭北邊、）三年正月一日甲午、參內、先參御前、相次關白（○藤原基房）被參、主上御裝束之間經數刻、此間言談與關白、此次問申等、

一小朝拜列如何、東上歟、西上歟、　命云、依永長元年皇居閑院也、則東對爲御殿、彼間日記不分明、但粗註、依其所狹不列畢云々、疑是西上歟、爲東上者雖何人蓋禮哉者、

一殿上座、上﨟著之時、下﨟不可用上戶歟、如何、　命云、頗無骨歟、下戶可宜、（○中略）

此間御裝束欲畢、仍余著殿上、依關白命不入上戶、經中門廊東緣、入自腋座著端座、左大臣已下人々十人許、自本在此座、次關白著座云、御裝束已了者、則關白起座、經殿上西第一間、出自腋戶、更入自中門廊南妻戶、於中門內板敷上被著靴、左大臣余等出第二間、於同廊東緣著靴、須下庭著之也、而中門外庭上殊以猥藉、仍隨宜也、關白已下列立中門外、（西上北面如例、）頭中將實宗朝臣申次之、次關白已下列立

〔小右記〕天元五年正月一日甲午、外宿人參入、左右大臣以下於陣座令奏小朝拜事、勅答、去年皇居非例、(去年御太政官、)仍停止、頗似私禮、延喜間已被停此禮、依彼所停、還御本宮之後、永停此禮如何、公卿等尙請不停此禮、仍有天許、公卿須奏慶由、而無奏、其詞不存舊事歟、(〇中略)大相國(〇藤原賴忠)以下侍臣等入自仙花門、列立東庭、(先是撤晝御座、敷毯代、立御倚子、垂母屋御簾、卷廂御簾、著御座、)拜舞退出、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年正月一日甲辰參內、被仰小朝拜以無宜思如何、奏云、是年首例事、不行無便歟、猶可被行、出殿上與上達部相議、令奏云、小朝拜依例可奉仕者、依例可奉仕由有仰、如常、

〔爲房卿記〕延久五年正月一日辛巳、午剋諸卿以下參集、次垂晝御座庇御簾、(五箇間)次御出、(直御裝束也、)次關白前太政大臣右大臣幷大納言(能家、忠家、)中納言(祐家、資綱、經季、能季、泰憲、資仲、)參議(基長、經信、伊房、實季、)以上一列庭中、次殿上四位以下別當判官代等一列、(藏人頭師忠、公房等也、位階雖多、上﨟立最前、如何々々、六位列判官代宗基爲□資濟立此列之末、一小朝拜例在五位六位後、又如何、)拜舞了之後、從上﨟次第退、次上御簾、事了之後、左大臣中宮大夫、(顯房)治部卿、(隆俊)宰相中將(宗俊、隆綱、)等參殿上退出、

〔水左記〕承曆三年正月一日辛未、人々引率參內、下官(〇源俊房)此間參陽明門院、次參內、次有小朝拜、殿下(〇藤原師實)於弓場殿著靴給、此間民部參會、人々著靴、以頭辨實政朝臣被奏其由、聞食了者、殿上御裝束了、人々列立拜舞、(〇中略)東宮遲參、不被立小朝拜、

〔永昌記〕長治二年正月一日庚午、諸卿候殿上、右府參御之後、下立弓場殿、頭辨重資朝臣奏事由、仰藏人式部丞行盛令奉仕御裝束、其儀下母屋御簾、上庇御簾、撤晝御座、第三間敷二色綾毯代、其上立侍御倚子、御裝束了、主上(〇堀河)於簾中御著靴、(頭辨幷予候、)了著御倚子、頭辨告之、諸卿著靴出仙華門代、自長橋南頭東行參列東庭、(〇註略)拜舞如例、諸卿各著仗座、(小朝拜以前、新大納言、左衞門督、源中納言、右大辨、不動座、昨日追儺、無故申障、或有分配、或有兼日仰、仍不可候拜禮之由被宣下了、恐懼各退出、)主上入御、

〔中右記〕永久六年正月一日甲申、殿下(〇藤原忠實)引人々令參給、皇居新造土御門烏丸第也、依程近皆以步行、入從左衞門陣幷和德門代、參弓場殿、有小朝拜、令頭中將宗輔朝臣奏事由、兼立御倚子、(近代奏事由後)

小朝拜例

門をへて東庭に列立す、參議以上一列、殿上人一列なり、おの〳〵舞蹈し終りて退出す、○中略應仁の亂後絶たりしを、延德二年に再興せられたり、

〔西宮記正月上〕小朝拜○中略　延喜五年正月一日、是日有定、止小朝拜、仰曰、覽昔史書、王者無私、此事是私禮云々、

○按ズルニ、此年止メシハ諸臣ノ小朝拜ニシテ、皇太子親王等ノ小朝拜ハ舊ノ如シ、

〔西宮記正月上〕小朝拜○中略　延喜十年正月一日、太子參上、命婦時子授太子祿、天德四年正月有此例、太子不參之時、下母屋御簾等、撤晝御座、其間敷毯代、立侍御倚子、主上御靴、藏人式云、雨日王卿北上西面、侍臣西上北面云々、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十七年正月一日辛亥、小朝拜、皇太子○保明參上、有宴會、

〔西宮記正月上〕小朝拜○中略　延喜十九年正月一日、大臣依申有小朝拜、午三剋坐帳中、皇太子參上於東又廂、拜舞了退出、四剋親王以下於東庭拜云々、

〔江次第抄一正月〕小朝拜　朝拜者於大極殿被行之、百官悉預焉、至小朝拜者、仙籍之外不列之、是以延喜五年勅、左大臣時平曰、朕聞君子無私、止之、而同十九年、臣下固請復舊、貞信公記曰、先年有仰停止、今日固請復舊、其故者當代親王有拜賀、臣子之道義同、何無此禮哉云々、

〔年中行事歌合〕二番　左　小朝拜元日　内大臣

天皇はわたくしなしとゝめしを臣等言葉にまたぞまたがふ

〔西宮記正月上〕小朝拜○中略　天慶四年正月一日、吏部王記云、有小朝拜事、依雨王卿列立仁壽殿西廂、北上、侍臣立長橋中、東上北面、六位立其後、拜舞了、○中略

康保三年正月一日、今日雨雪、供御藥、未剋出侍所、令飮酒、王卿侍臣皆入内、申剋左大將源朝臣高明于時大納言令申下候小朝拜之由、因就倚子、登時上野太守親王以下殿上侍臣入自仙華門、立東庭拜舞云々、

〔近代年中行事細記〕小朝拜之事

諸卿以下列立弓場代、（東上北面）第一人令藏人頭奏候之由、其儀、申次（藏人頭）出向、第一人（於沓脱出納持沓來令帶之、）下裾空手、職事不取笏、衞府不帶劍、歸出時職事取笏、衞府帶劍、第一人氣色申次、申次請氣色歸、左廻

次御裝束、垂母屋御簾、暫撤御座敷二色綾毯代、立殿上御倚子、（幼主之時御倚子前置承足、長一尺六寸許、高廣五寸許、木押赤兩面錦者也、云々、）

次出御（位御袍御靴、幼主絲鞋御靴、貫首奉之、雖五位奉之也、）

次藏人歸出、告出御之由、（此時衞府帶劍、職事持笏、）其儀、御裝束出御了、經上戸進弓場代、向第一人告聞食由、（近代氣色許也、淺揖、）第一人答揖、（深揖）申次經本路退、 次諸卿以下次第進列立東庭、有列揖、（但殿上人無列揖、）兼日撤長橋、爲公卿參進之路、北上西面、諸卿一列、第一人當御座立、若人數多時、漸々北進重行、四位五位一列、六位一列同之、 次拜舞（先二拜、置笏、置笏事、令忘却者、當平緖垂可流落之歟、立左右左、居左右左、取笏二拜、居時先右足、起時先左足、總而起居事、自上座居、自下座起、〇中略）

次拜舞了、自下臈經本路退出、（諸卿有離列之拜）

〔公家年事（上正月）〕元日　小朝拜　近代每年不被行之、凡有慶事翌年正月一日被行、有小朝拜時、攝家諸禮無之、當時小朝拜之儀、關白、左右大臣、內大臣、大中納言、參議、頭中將、頭辨、五位六位藏人等參內、出御清涼殿、諸卿列立東庭、（北上西面）拜舞畢而退出、若及晚者、主殿寮立明、庭燎等役、

〔官庭行職志〕小朝拜　刻限不定、清涼殿東間御倚子ヲ搆、

出御　御簾、御裾、頭中將頭辨勤之、　御靴、五位職事勤之、奉行、職事勤之、　清涼殿東庭西面ニ立テ拜之衆　關白始、左右大臣、內大臣、左右大將、大中納言、參議、三位中將、四位五位殿上人、六位藏人、六位外記史迄令拜舞、依時不參之衆有之、　布毯、內藏寮官人勤之、庭燎、主殿寮調進、立明、主殿寮勤之、御前掌燈、主殿寮調進、御靴、內豎上之、召使、堂上之裾ヲ直、

〔嘉永年中行事〕正月朔日、〇中略　小朝拜、　殿上に候ふ大臣以下、弓場にて職事を以て、候ふ由を奏す、清涼殿東庇に出御なりて、御倚子に著給ふ、次に出御のよし大臣につぐ、次に大臣以下明義仙花

〔江家次第一正月〕小朝拜事

所司供御藥畢　殿上王卿於射場殿邊着靴上首雖有親王、大臣令奏之、令頭藏人奏候由、　次御装束職事不取笏、衛府不帯劍、歸出之時、職事取笏、衛府帯劍、垂母屋御簾、撤晝御座、敷二色綾毯代、四角置鎭子、立殿上御倚子、幼主時、御倚子前設承足、或説、御倚子立於廂階間云々、皇太子參上時立御帳中、　次宸儀出御位袍御靴、幼主縫腋、　次藏人歸出告御出由、王卿經明儀仙華門、列立庭中北上西面、參議以上一列、第一人當御座立、若人多時漸々北進、　雨儀、立仁壽殿西階下、西面北上、里内之儀、雨降或止之、或有之、延久九年正月二日、正治雨儀用中門廊、五位以上幷孫王一列、第一人當公卿第三人後立、雖藏人頭依位階立、非職殿上人、不列小朝拜、月輪禪閤當職之時、建久之比有此事、院拜禮、小朝拜、雖藏人頭、任位次列立、定例也、於關白拜禮者、殿上人列之、内貫首亂位次立之、四位者皆立、五位不過兩三輩、以上著靴、執笏、帯劍、六位之人亦帯之、六位一列、無官人不立、武官縫腋帯劍、尻鞘、布帯、取笏、不過一兩、文官著靴取笏、　雨儀立南廊壁下、　次拜舞　次各經列前退出、若及暗者供御灯、立於御座左右間、主殿寮入自瀧口戸、率炬火、　或未奏候由以前御装束、故源右府師房公御記右一説也、尤可用之、但代代當家所存、先奏事由、次御殿御装束也、

〔建武年中行事〕ひるつかた御くすりはてゝ、上達部やうやうまゐりあつまるほど御装束めさる、つれの帯なり東院のはいらいはてゝ、左大臣以下殿上にさぶらふ、大臣の命につきて、するより次第に殿上の座をたち、小庭をへて神仙無名門を經てゆみばにつらなりたつ、上首藏人の頭をまねきて、小朝拜に候由奏するとき、御殿のもやの御簾をたれて、殿上の御いしを廂の御座の間にたつ、かもんれう毯代なしく六位の藏人二人是をかく、藏人の頭母屋のうちにて御靴をたてまつる、すなはち御簾をかゝげさせて出させたまひ、御倚子につかせたまふ、藏人頭出御のよしを大臣に仰す、群臣仙花門より入りて、長橋かれてをとる是の砌のもとよりねりすゝみて、御座の間のとほりにたつ、つぎつぎの人皆つらなりたつ、上一二人の外れらず四位五位うしろにたつ、六位又其うしろにあり、皆たち定りて拜舞す、つねのごとし、末よりしりぞく、三四人をのこして上首まへよりねりてしりぞくなり、群卿退てのち入御、くらうどの頭御簾御靴給はることさきのごとし、

からざる故に、私あるに似たりとて、留させ給しにや、然に臣下共、元正の日、君を拝し奉る事を、しきりに申請しかば、同十九年に又もとのごとく行はれ侍し也、其故は延喜五年に、臣下の拝をばとゞめさせ給しかども、當代のみこ達は、猶拝禮の儀式あり、それ臣子の道はあひかはるべからず、いかでか臣下の拝のみをば、とゞめらるべきとて、かたく申請し由、貞信公の御記にのせられたり、關白大臣以下すべらぎを奉拝儀にて、清涼殿の東庭に、四位五位六位に至まで袖をつらねて舞踏する成べし、上よりして仰らるゝ事にてもなければ、下として人々祗候の由を、先づ無名門の前、弓場殿に立つらなりて、上首の人藏人の頭をもつて奏聞す、其後は御門は出御なりて、小朝拝の儀式は侍也、朝拝を略するによりて小朝拝とはいふにや、されば拝賀有年は行はれざる事なんかし、

〔公事根元抄階梯天正月〕按、小朝拝者、昇殿人列之、雖公卿不聽昇殿人不列之、〇中略 按、此名目、朝拝者、百官共拝、仍號朝拝、小朝拝者、昇殿公卿侍臣許拝之、仍稱小朝拝也、有朝賀年、不被行小朝拝云々、此事不審、朝賀畢還御於御殿有小朝拝也、先例多如此、

〔唐六典禮部四〕凡元日大陳設於大極殿、〇中略 侍中奏禮畢、然後中書令又與供奉官獻壽、時殿上皆呼萬歲、 按、舊儀闕供奉官獻壽禮、但位次立體畢、竟無拝賀、開元二十五年臣林甫謹草其儀、奏而行之、

〔西宮記正月上〕小朝拝〇中略 殿上王卿已下六位已上、著靴立射場、貫首人以藏人令奏申事由、主上御出、著靴、撤御帳内御座、立御倚子、太子不參時立東廂、太子參上孫廂拝、著靴、召後、王卿已下入自仙華門、列庭中、王卿一列、四位五位一列、六位一列、立定拝舞、右近退出、雨日王卿立仁壽殿西砌中、侍臣立南廊中、太子依召參上、給酒祿、拝舞退下座在御座南、

〔侍中群要十〕慶賀奏〇中略 小朝拝之時、第一人於射場被奏事由、勅許之後出自仙花門、其詞、其人、小朝拝可候之由令奏上歟、雖有親王、猶大臣可奏云々、

禮ナリ、是ニ由リテ延喜五年勅シテ、王者ニ私ナシトテ之ヲ廢止セリ、然ルニ歲首拜賀ノ禮ナキハ、臣下ノ情義忍ビザル所ナリトテ、群臣固ク請ヒ申シヽカバ、同十五年ニ再ビ舊ニ復スルコトヽナレリ、爾後朝拜ハ漸ク廢タレ、一條天皇以後ニ至リテハ、專ラ小朝拜ノミ行ハルヽコトヽナレリ、降テ後土御門天皇ノ時ニ至リ、應仁ノ亂後二十餘年間、總テノ朝儀ト共ニ中絶セシガ、同天皇ノ延德二年ニ、元日節會等ト共ニ再興セラレタリ、

小朝拜式

小朝拜ノ儀ハ、朝拜ニ比スレバ極テ簡略ニシテ、天皇淸涼殿ノ御倚子ニ出御アリ、王卿以下東庭ニ列シテ拜舞シ、皇太子ハ或ハ參上シ、或ハ然ラザルコトモアリ、雨儀ノ時ハ、仁壽殿ノ階下又ハ南廊等ニテ行フヲ例トス、此儀モ朝拜ノ如ク元日ニ行フコトナレドモ、日蝕ニ由リ、或ハ關白ノ不參等ニ由リテ、二日ニ行ヒシコトモアリ、又天皇其年ノ元日ニ元服アル時ハ、其後宴ト共ニ三日ニ行ヒシコトモアリ、其他不豫、諒闇、物忌、雨濕等ノ時、及ビ日次宜シカラザルカ、又ハ兵亂ナドアル時ハ、停止セラルヽ事、總テ朝賀ニ同ジ、但事故ナクシテ停止セシ事モ一二ノ例ナキニアラズ、花山天皇ノ寬和元年、稱光天皇ノ應永三十年ノ如キ是ナリ、

名稱

〔名目抄〕恒例諸公事 小(コ)朝(ザウ)拜(バイ) 後生小字、小(セウト)可讀 コトナ爲テ注也、

〔公事根源正月〕小朝拜、或イコデウバイ ○中略 朝拜を略するによりては、小朝拜とは申にや、

〔年中行事歌合〕小朝拜、○中略 大かた小朝拜と云事は、關白大臣以下の、すべらぎをおがみ奉る儀にて侍也、○中略 朝拜とは朝賀を申也、是は略儀にてあれば、小朝拜と申にや、

〔公事根源正月〕小朝拜　此事は、たゞ臣下として元日にてあれば、天子を拜し奉るべき由申請て、おこなへる公事にて侍れば、さして朝廷の爲にも侍らず、神事佛事にも非ず、されば是は私の禮也、君子に私なしと云文有、不ㇾ宜事とて、延喜の御宇に勅有て、延喜五年より、左大臣時平公に仰て、留させ給ひし也、抑朝拜は、百官悉拜するといへども、小朝拜は、たゞ殿上ばかり也、百官とひとし

云、參謁大相府幷攝政大相府云、御元服謁拜宴會三個日內被行、一條院御時五日御元服、仍七日節會次有壽言歟、當時三日可有御元服五日有壽言宜歟、又彼日厭不可必忌歟、一日右將軍按察等定申此事、重欲聞彼所陳等者、是無指御消息、只御語次事也、彼日卿相參議招兩人被命如何、上有丞相、下多卿相下官腰病發動由有次申了、命云、能治元正被參尤佳者、被示治腰之術、○中略抑彼後宴事、大相府命偏可然、但謂彼宴者、朝拜了還宮後有節會、其次有壽言也、尋常朝拜之時、還宮後有宴會、存式之恒規也、是只朝拜宴會也、非御元服之後宴歟、但御元服宴會、只無謝座禮、仍下授空盞、抑五日厭頗不宜、七日宴會、次有壽言、可無殊難、又依一條院時之例、誠雖三日以後、依有七日宴會次壽言之例也、彼日雖天殺五墓等日、尋常節會也、以彼爲本、其次有壽言、可無深忌歟、又七日代々上賀表、是已同賀悅之事也、仍所定申也、但圓融院御時例歟、欲被行朝拜、當日降雨俄止、依有宴會之儀、雖無朝拜所被行歟、如何、又不宜日可被行之由定申之謗、必可有被難、仍揭兩日優劣、先請處分、承七日可行之仰、諸卿所思計也、如此歟、縱橫只可在彼御定者也、若有事聞欲申此趣、

〔徒然草上〕鳥羽の作り道は、鳥羽殿たてられて後の號にはあらず、昔よりの名なり、元良親王、元日の奏賀の聲、甚殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや、

小朝拜

小朝拜ハ、朝拜畢リテ後更ニ、皇太子以下大臣公卿ノ天皇ヲ拜スル儀ナリ、故ニ其始ハ毎年朝拜ト共ニ並ビ行ハレシガ、後ニハ朝拜アル年ハ小朝拜ヲ行ハズシテ、朝拜ト小朝拜トハ、年ヲ隔テヽ迭ニ之ヲ行フニ至レリ、然ルニ朝拜ハ大極殿ニテ行ハルヽ大禮ニシテ、百官悉ク預リ、小朝拜ハ清凉殿ニテ行ヒ、殿上ノ公卿侍臣ノミ拜スル儀ナレバ、朝拜ニ對スレバ私

拂各四枚、笠四枚、挂甲二領、刀十六口、桙八口、弓十六張、胡籙十六具、(色別有帶幷纓)並待省符到、充大舍人寮、前節二日、胡牀二張付播部寮、柳筥八合付大藏省、又八合寮允屬各一人率藏部八人、懸頸抱胸列左威儀、(藏部著當色、楊筥納錦囊)

〔延喜式　四十五左右近衞〕凡十二月廿七日進請元日威儀料挂甲奏、幷御輿長歷名、

〔延喜式　四十九左右兵庫〕凡出充諸衞及中務省元日儀仗、並待官符充行、

雜載

〔小右記〕寬仁元年十二月十日甲戌、入夜宰相(○藤原資平)來云、今日參大相府、(○藤原道長)按察四條大納言(○藤原齊信)入口有御元服事等、朝拜有無後宴事云々、下官及按察四條大納言、源大納言、侍從中納言等參內可議定者、大略十三日云々、無指召不可參入、　十一日乙亥、大相府以章信朝臣被問正曆御元服事、其中宴會有無事也、令申依輕服不參之由、彼時令候氣色於攝政、(○藤原道隆)依承不可參之命也、但無朝拜、又不開宴會、七日節會賀表由所承也、又令申此由訖、　十三日丁丑、參內左大臣、大納言齊信、中納言行成、敎通、能信、參議兼隆、道方、朝經參入、藏人頭定賴傳攝政命於左府云、(大相府此日被參入)御元服年可有朝拜乎、(○中略)可定申者、諸卿申云、元慶承平等皆有朝拜、天祿當日雨、仍停止、只於南殿有宴會、正曆共無朝拜、宴會遠不可尋、元慶等例、近可依天祿等例歟、何况御別宮乎、(○中略)又命云、若無朝拜、何被行宴會歟、如何、諸卿申云、天祿依雨朝拜止、然而有宴會、正曆朝拜幷宴會共不被行、抑三日御元服、五日七日無忌之日被行宴會有何事、又正曆例、七日被行、當時依彼例被行、最吉乎、又命云、五日厭日、七日十死一生幷五墓日也、此兩日間可定申者、厭日不宜日也、天殺日只忌遠行、五墓日用著座之日也、請件兩日優劣、七日式日節會、先例上賀奏、件日獻壽言、可無忌諱歟、又有一條院御時之例、今新被定宴會日、可被擇吉日歟、五日厭不宜日也、命云、七日可被行宴會者、大臣定元日擬侍從、(左大辨道方執筆)依定申御元服事、不被定荷前使事、候氣色不被定也、余稱腰病早出、(定擬侍從之中間也、途中秉燭、)供奉行幸之諸司衞見參遲進由、頭辨定賴傳仰之大外記文義云、今二司未進者、仰可令催進由了、　十七日辛巳、深更宰相來

調度

左右、命婦四人亦候御後、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年正月戊子朔、天皇御大極殿受朝賀、（○中略）但奉翳美人、更著袍袴、

〔延喜式十五內藏〕元正預前裝飾大極殿、鳳形九雙、順鏡廿五面、玉幡八流、玉冐甲十六條、鄣子十二枚、（緋紅花綾表、白綾裏、）帳二條、（淺紫綾表、緋綾裏、）上敷兩面二條、下敷布帳一條、（已上高御座料）錦幔一條、耕綱八條、漆土居桁柱二具、土敷布帳三十七條、鎮子鐵一百廿廷、（廷別納袋）與內匠主殿掃部等寮共依例裝束、從小安殿至高御座之間、敷兩面為御道、其日駈使以左右衞士各十人充之、（○中略）

大極殿高御座帊一條、（黃表帛裏、長一丈五尺、六幅、）若有破損、隨即申省、

〔延喜式十七內匠〕凡每年元正、前一日官人率木工長上雜工等、裝飾大極殿高御座、（蓋作八角、角別上立小鳳像、下懸以玉幡、每面懸鏡三面、當頂著大鏡一面、蓋上立大鳳像、總鳳像九隻、鏡廿五面、幔臺一十二基、立高御座東西各四間、）又鑿立南庭白銅大火爐二口、（備蓋、鐵火殺、）入中階以南相去十丈、東西之間相去六丈、又建烏像寶幢等之處差向工一人、其蕃客朝拜之時亦同、元日高御座飾物收內藏寮、當時出用、幔臺及火爐收寮、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡元日及即位、構建寶幢等者、預錄色目、移送兵部、前十五日復請夫單廿人、（各日飯五升、鹽二勺、）鍬十五口、（事訖返上）待官符到、寮與木工寮共建幢柱管於太極殿前庭龍尾道上、前一日率內匠寮工一人鼓吹戶四十人、構建寶幢、從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢、左日像幢、次朱雀旗、次青龍旗、（此旗當殿東頭楹、玄武旗當西頭楹、）右月像幢、次白虎旗、次玄武旗、（相去各二丈許、與蒼龍白虎兩樓南端楹平頭、）訖並返納、

〔延喜式十三大舍人〕凡元正者、六位以下官人四人、史生二人、將舍人一百三十六人、左右分頭各執威儀物、入自東西廊門、陳列大極殿前庭近衞陣以北左陣、所執屏繖一具、圓翳十具、圓羽十柄、橫羽八柄、弓八張、箭八具、（各有胡籙）大刀八口、桙四竿、杖二枚、如意二枚、蠅拂二枚、笠二枚、挂甲一領、（弓以下並納袋、圓翳以下分為兩行、其屏繖立兩行首、挂甲袋立兩行尾、官人立屏繖側、）右陣亦如之、其威儀物、前二日受內藏寮、事畢返納、

〔延喜式十五內藏〕元正預前裝飾大極殿、（○中略）同節威儀屏繖二具、圓翳圓羽各廿柄、橫羽十六柄、杖、如意、蠅

〔續日本紀 文武二〕大寶二年正月己巳朔、天皇御大極殿受朝、親王及大納言已上始著禮服、諸王臣已下著朝服、

〔續日本紀 稱徳二十九〕神護景雲三年正月辛未、(二日)御大極殿受朝、○中略 是日勳六等已上、身有七位而帶職事者、始著當階之色、列於六位之上、六位諸王著纁者次之、

〔類聚國史 歳時七十一〕弘仁十四年十二月甲申、詔曰、古之王者、受命膺籙、文質相變、損益不同、與風致治、垂範訓、通之古今、其揆一也、頃者陰陽錯謬、旱疫更侵、年穀不登、黎甿殘耗、朕運鍾寶曆、嗣奉洪基、永思善政、已忘寢食、昔卑宮創構、只爲三等之階、露臺將營、猶愛十家之產、與言遠想、載懷景行、夫濟世之道、不可守株、隨時之宜、豈合膠柱、今欲要救流俗、勤恤民隱、公卿宜各陳所思、以匡不逮、靡有隱諱、其時世澆醨、邦國頓瘁、禮服難辨、多闕朝賀、凶年之間欲停著用、亦宜議定奏之、　壬辰、公卿覆奏曰、乾坤覆載、合其德者聖人、日月運行、齊其明者元后、伏惟皇帝陛下、體元立極、執契提衡、開三面而中外荷其至仁、撫五紘而卑高賴其渥澤、猶慮雍熙之未洽、更求不諱之直言、臣等才略庸疎、忝居非據、無副天旨、震愧兼深、愚意攸及、尋須上聞、其禮服者依詔停止、但皇太子及參議非參議三位以上、幷預職掌人等、依舊著焉、

〔權記〕正曆四年正月一日庚寅、今日有朝拜、巳時自待賢門參入、○中略 裝束(無文冠、綾袍、折色々下襲白表袴、烏犀巡方、平塵蒔繪細劒、青綵平緒、)依故東院御服也、入東廊便所裝束、(左衛門督顯光御宿所、)著武禮冠褊襠深緋襖等、右衛門權佐信順用尋常冠卷纓、此事無所見、又或著半臂下重、或不著、至于下官者、半臂不可著之事更無所見、至于親衛將著胄、刑用例冠等、著平胡籙、

〔內裏式 上〕元正受群臣朝賀式、○中略 威儀命婦四人、(中略)同色相對、以南爲上、服禮服相分、以次就座、○中略 命婦四人、(中略)服色同威儀、服禮服分在御前、

〔西宮記 正月上〕朝拜、○中略 天皇著高座、○中略 命婦四人著禮服分在御前、內侍二人著禮服、持神璽等列、

上、自餘並准二位、四位、漆地縚形櫛形押鬘玉座皆金裝、自餘銀裝、以赤玉五顆綠玉六顆交居冠頂、以白玉十顆立前押鬘上、以青玉十顆立後押鬘上、不立櫛形上、正五位、漆地銀裝、以黒玉十顆立前押鬘上、以青玉十顆立後押鬘上、自餘准四位、其徽者鳳、三位已上、正位正立仰頭、從位正立低頭、正四位上階、左出右向、下階、右出左向、從四位上階、左出左顧、下階、右出右顧、五位准四位、諸臣一位、以紺玉八顆立櫛形上、自餘並准王一位、(玉色交居、王臣各異、)二位、以綠玉五顆、白玉三顆、赤黒玉三顆交居冠頂、以赤玉八顆立櫛形上、自餘准一位、三位、以黄玉八顆立櫛形上、自餘准二位、四位、以赤玉六顆、綠玉五顆交居冠頂、自餘准王四位、五位、以綠玉五顆、白玉三顆、赤黒玉三顆交居冠頂、自餘准王五位、其徽者麟、正從出向皆准諸王、

〔延喜式(隼人)二十八〕凡元日(中略)等儀官人二人史生二人、率大衣二人、番上隼人廿人、今來隼人廿人、白丁隼人一百三十二人、分陣應天門外之左右、(中略)其官人著當色橫刀、大衣及番上隼人著當色橫刀、白赤木綿耳形鬘、自餘隼人皆著大横布衫、(襟袖著兩面襴、)布袴、(著兩面襴、)緋帛肩巾、横刀、白赤木綿耳形鬘、(番上隼人已上横刀私備)執楯槍、並坐胡床、

〔延喜式(主殿)三十六〕正月元日、燒香史生左右各二人、其禮服者冠、袷袍、(表緋、裏白、)下襲袷衣、(表緋、裏白、)白袴帶、鼻切履、執威儀物殿部左方十一人、一人執梅杖、二人紫繖、三人紫蓋、二人菅繖、三人菅蓋、右准此、其裝束各黄帛袷袍一領、(並一儀之後、團破請替、)

〔延喜式(掃部)三十八〕元日供奉威儀掃部二人、分列左右、其裝束、人別黄帛三丈、帛三丈、白袴一腰、布帶一條、隨損請換、

〔延喜式(東宮)四十三〕朝賀儀、(中略)其日依時刻、傅以下諸侍從內舍人各著朝服、參詣共候、東宮駕輦以下出、帶刀舍人服上儀服、被甲脚纏末額列立前後、左右兵衛尉志各率兵衛陣列門外、立前後、至東廊外、降輦就次、著禮冠、(若未冠者、則雙童髻、)禮服帶劒、又調者著禮服、(下略)

〔儀式六〕元正朝賀儀、(中略)中務省撃鼓、令装束、大。少。輔。並著浅紫襖、金銀装腰帶、横刀、靴、策、著襪、丞。并内舎人、皀緌、緋襖、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、鉦鼓師、礼冠、皀緌、緋大袖袍、緑襖、大帶、白練袴、布襪、礼舄、擔丁、皀縵頭巾、皀緌、緋末額、緋大纈袍、白布帶、袴、布脛纒、纒脚結、菲、(中略)寅二刻、左右近衛府共始撃動鼓三度、(中略)装束、近。衛。大。將。(即橘任也)著武礼冠、浅紫襖、錦裲襠、將軍帶、(以金銀飾)金装横刀、靴、策、著襪、中。將。武礼冠、深緋襖、錦裲襠、將軍帶、金装横刀、靴、策、著襪、少。將。武礼冠、浅緋襖、錦裲襠、將軍帶、金装横刀、靴、策、著襪、(供奉御輿少將、皀緌、挂甲、帶弓箭、)將。監。將。曹。並皀緌、深緑襖、錦裲襠、白布帶、横刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府。生。近。衛。並皀緌、深緑襖、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、(近衛加緋末額)兵。衛。督。著武礼冠、深緋襖、錦裲襠、將軍帶、金装横刀、靴、策、著襪、佐。武礼冠、緋襖、錦裲襠、將軍帶、金装横刀、靴、策、著襪、尉。志。並皀緌、深緑襖、(志著襖)錦裲襠、白布帶、横刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府。生。兵。衛。並皀緌、紺襖、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、(兵衛加末額)衛。門。府。生。以上並同兵衛府、門。部。同兵衛、衛。士。皀緌、末額、桃染布衫、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、卯一剋、兵庫昭訓門内、大臣幄西南去一丈立鉦、南去一丈立鼓、(略註)長。一人、(用寮頭、著朝服、下皆准此)撃。人。各一人、著平巾冠、(漆羅閑頂)緋大袖袍、緑襖、大帶、(長五尺、廣四寸、以布爲心、以帛爲表裏、其二端各著紺帶、長各五尺)大口帛袴、白布襪、烏舄、執夫四人、著皀縵頭巾、皀緌、末額、緋大纈袍、白布帶、(長八尺、廣四寸、四重爲疊)白布袴、紺布脛巾、白布脛纒、菲、(下皆准此)

〔延喜式十九式部〕元正朝賀(即位准此)

元日丑一剋、掃部寮設輔以下省掌以上座於便所、輔以下就座、省掌置版位、五位以上服礼服、(四位已下非職掌、不著礼服)就版受點、(具見儀式)其礼冠者、親。王。四。品。已。上。並染地金装、以水精三顆、琥珀三顆、青玉五顆、交居冠頂、以白玉八顆立櫛形上、以紺玉廿顆立前後押鬘上、其徽者立額上、一。品。青龍、尾上頭下、右出左顧、二。品。朱雀、右出左顧、三。品。白虎、尾上末卷、頭下右向、四。品。玄武、爲蛇所纒、並右出左顧、(立玉者、有壁井座、居玉者、有座無壁)諸。王。一。位。漆地金装、以赤玉五顆、緑玉六顆、交居冠頂、以黒玉八顆立櫛形上、以緑玉廿顆立前後押鬘上、二。位。以白玉一顆、緑玉五顆、交居冠頂、以赤玉八顆立櫛形上、自餘並准一位、三。位。以黄玉八顆立櫛形

久受賜（利）坐（部登）宣（若大臣已上不在者、無坐部詞）、訖群官再拜、亮還、比至階下、掌儀唱再拜、贊者承傳、群官再拜、東宮卽座、群官退出、亮亦退、掌儀贊者以次退出、

〔類聚國史〈七十一歳時〉〕天長五年正月己未、〈○二日〉皇太子已下奉賀後宮、賜物有差、　八年正月辛丑、〈○二日〉群臣拜賀皇后宮、賜衣被、次拜東宮、賜祿有差、　九年正月丙申、〈○二日〉群臣拜賀皇后宮東宮、禮也、

〔三代實錄〈三十七陽成〉〕元慶四年正月二日丙辰、親王公卿及侍從參太皇太后中宮、賜衣被綿焉、

〔三代實錄〈四十光孝〉〕仁和元年正月二日戊午、群臣奉參太皇太后皇太后宮、賀新年也、

○按ズルニ、是ヨリ以後、后宮拜禮ノ事ハ、年始祝篇、院宮拜禮ノ條ニ併出シタレバ參看スベシ、

國廳朝賀

〔令義解〈六儀制〉〕凡元日、國司皆率僚屬〈謂僚者、同官也、屬者、統屬也、〉郡司等、向廳朝拜、訖長官受賀、〈謂受致敬之禮也、若无長官者、次官受賀、其六位長官者、止受郡司賀、上條云、若應致敬者、准下馬禮故也、〉

〔延喜式〈二十七主稅〉〕某國司解申收納某年正稅帳事

元日朝拜、國司已下郡司已上若干人、

　食料若干束〈此人別若干把、諸色准此各爲一項、○中略〉

以前某年正稅穀穎幷雜用等、勘錄附官位姓名申上如件、謹解、

服裝

〔內裏式〈上〉〕元正受群臣朝賀式、〈○中略〉皇帝服冕服就高座、〈○中略〉皇后服禮服後就御座、

〔延喜式〈十五內藏〉〕元日御禮服玉冠牙笏等、當日平旦、寮官人於大極後殿下持候之、隨內侍宣進之、

〔西宮記〈正月上〉〕朝拜、〈○中略〉天皇著高座、〈中略〉著冕冠禮服、大袖、小袖、褶、烏皮舃、御笏等、玉佩有二旒、綬垂中間、〈中略〉禮服可在內侍所、而給內藏寮、亦有儀、〈○中略〉天皇入御、撤禮服給內藏、

〔北山抄〈三拾遺雜抄〉〕朝拜事、〈○中略〉天皇御高座、〈御裝束先畢、群臣初入會昌門之比、御冕服出御、玉佩在左右、綬垂中間、持牙御笏、〉

〔續日本紀〈十一聖武〉〕天平四年正月乙巳朔、御大極殿受朝、天皇始服冕服、

〔續日本紀〈六元明〉〕靈龜元年正月甲申朔、天皇御大極殿受朝、皇太子始加禮服拜朝、

其日遲明、主殿署設東宮座於前殿東廊、西向、典儀（坊進）出自東細殿南、設宮臣版位於殿庭、坊官在東、管監署在西、（舍人分列東西）俱異位重行、北西相對爲首、設典儀位於群官東北、贊者（坊屬）在南、差退俱西向北上、又設宮臣次於門外、坊官東管監署西、重行相向、以北爲上、左右兵衛各屯門外、列仗如常、宮臣依時刻集南門外、各服其服就位、亮啓請中儼、近仗就陣、東宮朝服以出、近仗時動、東宮卽座西向、亮啓外辨、左右兵衛尉各一人率兵衛二人開門、典儀贊者共入就位、宮臣上下以次入就位、立定、典儀曰、再拜、贊者承傳、宮臣在位者皆再拜、宮臣爲首者前昇自西階、當西第三間北折進東宮座前、東面跪賀、其詞曰、新年（能）新日（爾）萬福（乎）持參來（氐）、拜供奉（良登）久申、賀訖俛伏、興復位、宮臣俱再拜、東宮卽令喚亮、亮稱唯、昇自西階、當東宮座前、東面跪承令、降詣宮臣西北、東面宣令、其詞曰、御命有（利登）宣、訖宮臣稱唯俱再拜、訖宣令曰、新年（能）新日（爾）萬福（乎）平久受賜（禮登）宣、訖宮臣稱唯再拜、舞踏再拜、亮復位、典儀曰、再拜、贊者承傳、宮臣在位者皆再拜、訖以次退出、兵衛闔門、東宮降座以入、近仗罷陣、典儀徹版位、

同日受群官賀儀

前一日、大藏木工設幄幔於南門外、當日遲明、左右兵衛各屯門外、主殿署洒掃前殿、設東宮座於東廊、西向、親王南向東上、參議以上北面東上、四位於南榮北向東上、不昇殿者座於西細殿東廂北上、樂官座於南庭差西、（親王已下座、群官賀畢設之、）宮臣朝賀訖、式部入自西門立標、坊屬安位、依時刻文武群官會集門外、次亮量時刻啓請中儼、近仗就陣、式部列群官於門外位、亮啓外辨、東宮服朝服卽座、左右兵衛尉各率兵衛二人開門、式部入置群官版位於殿庭、又掌儀（式部錄）位於群官東南、贊者二人（式部錄）位在南差退、俱西向北上、亮乃入昇自西階、差東北面立、訖群官五位已上入就庭位、六位已下就門外位、內外列定、東宮降座而立、（若大臣不在者不降立、）掌儀唱再拜、贊者承傳、群官皆再拜、群官爲首者一人、昇自西階、當西第三間。北折進東宮前、東面跪賀（爪、）其詞曰、新年（能）新日（爾）萬福（乎）持參來（氐）、拜供奉（良登）久申、訖降復位、群官俱再拜、東宮卽令喚亮、亮稱唯、前東面跪承令、降詣群官西北、東面宣令曰、新年（能）新日（爾）萬福（乎）平久永

引六位以下、以次入立於庭、爲首者當御前跪賀、內侍進承令退、隨便而立稱令旨、再拜訖退出、先是內侍令所司鋪座、立臺盤、女御以上先著座、次尙侍以下四位以上、次內外命婦、(北面)次闈司引六位以下、北面列座、昇殿者留著座、不昇殿者退出、饗宴訖賜祿、(妃白掛衣一襲、夫人內親王各白掛衣一領、三位以上六幅袷一條、四位四幅袷一條、五位衣一領、三位已上妾四幅袷一條、四位以下妾衣一領、)女孺之中給折櫃食百合祿綿二百屯、(事見儀式)

〔儀式 六〕正月二日拜賀皇太子儀

當日后宮禮畢、掃部寮設式部輔已下座於暨物曹司東道、設彈正弼已下座於大膳職便處、式部錄率史生、入自西門、立標、自寢殿南階中南去一丈、東折七尺立太政大臣標、南去立左大臣標、南去立大納言標、南去立中納言標、(三位參議及王四位參議在此列、)南去立四位參議標、南去立王四位五位標、南去立臣四位標、南去立五位標二、(相去各六尺)自同階中西折七尺、當太政大臣標立親王標、南去立右大臣標、南去立散一位二位標、南去立散三位標、(四位參議者可散無色關一標)南去一丈二尺立王四位五位標、南去立臣四位標、南去立五位標二、(相去同左)自各第一五位標、東折三丈立掌儀標、東去三尺南折三尺立贊者(用省錄)標二、(相去四尺、並立西面、)訖式部輔已下省掌已上、率五位已上六位已下、列立南門左右、(左西上北面、右東上北面、)彈正忠已下列立同門左右、(左西面北上、右東面北上、)于時開門、省丞、錄、史生分頭東西、搢笏執版參入、各置標下退出、次省掌二人執六位已下版、置於外門屛幔東西端、訖掌儀帥贊者參入就位、于時皇太子著御座、坊亮升西階、向東北立、親王以下五位已上次參入就位、(省掌二人立門外左右、互稱容止、)次省丞、錄、史生、省掌相分左右、引六位已下就門外位立定、皇太子起立御座後、掌儀云再拜、贊者承傳、群官內外俱再拜、賀壽者出自列、升自西階、東面跪稱壽、(稱詞如元日內裏儀、但不注年月、)訖復本位、群官俱拜、皇太子召亮、稱唯、東面跪奉令旨、降自西階至于南階西、東面宣令旨云々、訖群官拜舞、皇太子著御座、亮復位、掌儀云再拜、贊者承傳、群官再拜、訖以次退出、亮亦退出、訖掌儀帥贊者退出、省丞、錄、史生如初參入執版退出、

〔延喜式 四十三 東宮〕二日受宮臣朝賀儀

以下共輿、引進列立於朔平門外、史生執簿召計五位以上、（先是參議以上在玄暉門外廊下）訖即引入、（錄立朔平門內稱容止）列玄暉門外、南面西上、次六位已下入列五位之後、（省掌且稱容止）立定群官共再拜、職大夫出自內裏傳宣令旨、群官共稱唯再拜退出、

〔延喜式十三中宮〕正月二日○受皇太子朝賀

其日早朝、職官設皇太子版位於常事殿□西面□南差退設司賓位、又南退設司賛位、□□□□司賓引太子入、立定司賛唱再拜、太子再拜、司賓引太子到東階、太子昇自東階而朝（○東以下四字原缺、今以一本補、）賀訖俛伏興、引降復位、內侍進承令、降詣太子前、東面稱令旨、太子再拜、宣命訖又再拜、司賛唱再拜、太子又再拜、司賓引太子出、（事見儀式）

同日早朝受群官朝賀

同日早朝、所司鋪設於玄暉門外西廊、（親王以下諸王五位於廊上、諸臣五位於廊下南面、）式部置典儀位於同門東、差東北退設賛者位、並西面南上、設職大夫位於門西南面、依時剋式部引五位以上六位以下列於同門外南面、典儀曰、再拜、賛者承傳、群官俱再拜、職大夫出就位、爲首者進、南面跪稱賀詞、訖復位、群官俱再拜、職大夫入申內侍、內侍奉令旨傳宣、大夫奉令旨退出、就位南面傳宣、群官稱唯再拜、訖退出、但中務輔引次侍從以上著座、于時內侍一人率女藏人三人、納祿物於櫃二合令持、職舍人四人置廊下、上東、（自親王座東去一許丈）綿六百屯（受大藏省）置廊下、（掃部寮設座具）亮進賜各一人、史生二人侍賜祿所、（所司設座）事訖賜祿、親王以下大納言已上各白褂衣二領、中納言三位參議白褂衣一領、非參議三位幷四位參議褂衣一領、四位小褂衣一領、五位綿一連、亮唱四位五位名賜之、（參議已上令女藏人賜之、五位已上令宮司賜之、）若亮有闕、臨時權位、（事見儀式）同日早朝、中務省召職司給次侍從已上見參、即別錄四位已上名簿進內侍、（爲令辨備祿物）

同日受女官朝賀

其日內侍仰闈司、置版位於殿上及殿庭、（版位十枚、方五寸、厚一寸、）内親王以下女官命婦以上、以次入立殿上、闈司

由無宮殿廢朝賀

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十七年正月己未朔、廢朝、乍遷新京、伐山開地、以造宮室、垣牆未成、繞以帷帳、令兵部卿從四位上大伴宿禰牛養、衞門督從四位下佐伯宿禰常人樹大楯槍、(石上榎井二氏、倉卒不及追集、故令二人爲之、)

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年正月丁亥朔、廢朝、以新宮未就也、

〔類聚國史 七十一 歳時〕延暦十三年正月乙亥朔、廢朝、以宮殿始壞也、十四年正月庚午朔、廢朝、以大極殿未成也、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜七年正月一日戊寅、天皇不受朝賀、以八省修理未成也、

朝拜中宮東宮

〔儀式 六〕正月二日朝拜皇后儀

當日早朝、掃部寮設式部省輔已下座於縫殿寮東道、(史生已上東面北上、省掌北面東上、)設彈正弼已下座於同寮側近便處、式部輔以下進就座、五位以上就版受點、錄一人率史生省掌置版位、自玄暉門壇東端北去一丈五尺東、置典儀位、(西面、)北去四尺東折三尺、置贊者位、(用錄、)自同門東扉北去一丈、置験大夫位、北去六尺立親王標、次太政大臣標、次大臣標、次大納言標、次中納言標、(散位三位及王四位參議在此列、)次四位參議標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標、次六位標二、次七位標二、次八位標二、次初位標二、次無位標二、(相去各六尺、)已剋省丞已下列立於寮南道、(南面西上、)于時史生執簿唱、列五位以上、隨唱稱唯、列立同道南邊、(先是參議已上在玄暉門西廊、)省掌趨進云、大夫等參進、二聲、五位已上以次參入、(錄立朔平門內、稱容止、)列立玄暉門外、(南面西上、)次丞錄率六位以下刀禰入列、立五位之後、(省掌且稱容止、)次彈正忠以下在式部次、立定時、典儀云、再拜、贊者承傳、親王以下再拜、訖職大夫出就版位、賀壽者進自列、南向稱壽、(詞見元日儀式、)復列、職大夫參入、令內侍啓、即參入奉令旨、退出傳宣、大夫退出就位、宣令旨、親王及群臣稱唯拜、訖大夫參入、典儀曰、再拜、贊者承傳、王公百官再拜、訖以次退出、

〔延喜式 十九 式部〕正月二日○皇后受賀

當日早旦、掃部寮敷座於便處、輔以下就座、省掌置版位、五位以上就版受點、省掌召計六位以下、訖輔

日蝕廢朝賀

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十八年正月一日乙亥、日蝕、仍止朝賀宴會、

雨雪風寒廢朝賀

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年正月戊寅朔、廢朝、雨也、

〔續日本紀 八元正〕養老三年正月庚寅朔、廢朝、大風也、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年正月甲戌朔、廢朝、雨也、

〔類聚國史 七十一歲時〕延曆廿一年正月戊午朔、廢朝、雪也、

大同三年正月癸未朔、廢朝、以風寒異常也、

弘仁十年正月庚辰朔、廢朝、緣風寒忿殺也、

〔續日本後紀 二十仁明〕嘉祥三年正月庚辰朔、終日雨降、先是去月廿九日亦大雨焉、因停朝賀、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年正月壬子朔、天皇不受歲賀、雨也、

〔日本紀略 一醍醐〕昌泰二年正月一日乙未、停朝賀、緣風雪、

〔西宮記 正月上〕朝拜　延喜八年正月一日、朝拜、裝束如例、因雨雪差藏人、到大臣令問先例、大臣令奏天長九年晦夜雨雪、元日猶受朝賀、寬平七年晦雪停朝賀、先例如何、依寬平例停朝賀、御記

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十五年正月一日壬辰、依雨濕停朝賀、

凶荒疾疫廢朝賀

〔續日本後紀 十九仁明〕嘉祥二年正月丙辰朔、廢朝賀、緣去年天下有洪水害、秋稼不登也、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十年正月一日壬辰、停朝賀事、依去八年旱、九年疫災也、　十一年正月二日丁亥、停朝賀、依去年旱損也、

〔扶桑略紀 二十三醍醐裏書〕延喜十四年正月一日戊戌、朝賀停止、依嘉祥二年去十一年等年穀不登例也、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十四年正月一日戊戌、停朝賀、依去年不登也、　十六年正月一日丙辰、止朝賀、依去年皰瘡之災也、御紫宸殿、垂御簾、近仗不警蹕、

〔日本紀略 三村上〕天曆二年十二月廿八日壬寅、今年諸國申異損、其數甚多、宜停止來年朝賀者、

○按ズルニ、去年七月、太皇太后藤原宮子娘崩ジ給ヘリ、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年正月庚戌朔、廢朝、以諒闇故也、

○按ズルニ、去年五月、聖武天皇崩ジ給ヘリ、

〔續日本紀 三十七桓武〕延暦元年十二月壬申、詔曰、禮制有限、周忌云畢、元會之旦、事須賀正、但朕乍除諒闇、哀感尚深、霜露既變、更增陟岾之悲、風景惟新、彌切循陔之戀、來年元正、宜停賀禮焉、　二年正月戊寅朔、廢朝也、

〔續日本紀 四十桓武〕延暦九年十一月戊寅、勅曰、中宮〇母后高野新笠周忌當來月二十八日、禮制乍畢、新歳須及、而忌景俄臨、彌切罔極之痛、元正肇啓、何受惟新之歡、興言永悲、不能自忍、賀正之禮、宜從停止焉、　十年正月壬戌朔、廢朝也、

○按ズルニ、是ヨリ先キ天應元年十二月、光仁天皇崩御アリ、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年正月壬申朔、廢朝賀、諒闇也、

○按ズルニ、去年五月、淳和天皇崩御アリ、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年正月庚寅朔、廢朝賀、諒闇也、

○按ズルニ、去年七月、嵯峨天皇崩御アリ、

〔三代實錄 二十一清和〕貞觀十四年正月壬申朔、天皇不受朝賀、以太皇大后〇仁明后藤原順子、去年九月崩、時議定爲心喪五月、服制三月日、崩、心喪未畢也、

〔三代實錄 三十九陽成〕元慶五年正月庚戌朔、天皇不受朝賀、諒闇也、

○按ズルニ、去年十二月、清和天皇崩御アリ、

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年正月己未朔、天皇不受朝賀、停賜宴侍臣之儀、以去年閏十二月廿八日〇此月小左大臣〇源信薨也、

雨也、庚子、天皇御大極殿、王臣百寮及渤海使等朝賀、
（續日本紀十五聖武）天平十五年正月辛丑朔、遣右大臣橘宿禰諸兄在前還恭仁宮、壬寅、車駕自紫香樂至、癸卯、天皇御大極殿、百官朝賀、
（續日本紀三十六光仁）寶龜十一年正月丁卯朔、廢朝、雨也、己巳、天皇御大極殿受朝、唐使判官高鶴林、新羅使薩飡金蘭蓀等、各依儀拜賀、

五日朝賀

（日本紀略二朱雀）承平七年正月二日乙卯、日蝕廢務、（或記曰、元日日蝕、二日行宴會、）四日丁巳、天皇御紫宸殿、加元服、五日戊午、天皇幸大極殿受朝賀、還宮賜祿有差、
○按ズルニ、山崎知雄云、按長曆去年十二月大、是年正月大、乙卯朔、二月小乙酉朔、與此不合、蓋忌元日蝕彼此相易也ト、
（扶桑略記二十五朱雀）承平七年正月四日丁未、天皇元服、五日、幸大極殿受朝賀、

不豫廢朝賀

（續日本紀十七聖武）天平十九年正月丁丑朔、廢朝、天皇御南苑宴侍臣、勅曰、朕寢膳違和、延經歲月、顧己推物、術可矜慈、宜大赦天下救濟憂苦、
（續日本紀三十五光仁）寶龜九年正月戊申朔、廢朝、以皇太子枕席不安也、
（日本後紀十二桓武）延曆二十四年正月辛未朔、廢朝、聖體不豫也、
（日本後紀十三桓武）大同元年正月丙寅朔、廢朝、聖躬不豫也、
（類聚國史七十一歲時）天長二年正月乙巳朔、廢朝賀、以候御藥也、四年正月癸亥朔、停朝賀、爲候御藥也、

諒闇及大臣喪廢朝賀

（續日本紀三文武）大寶三年正月癸亥朔、廢朝、親王已下百官人等、拜太上天皇（○持統）殯宮也、
（續日本紀九元正）養老六年正月癸卯朔、天皇不受朝、詔曰、朕以不天、奄丁凶酷、嬰蓼莪之巨痛、懷顧復之深慈、悲慕纏心、不忍賀正、宜朝廷禮儀皆悉停之、
（續日本紀十九孝謙）天平勝寶七年正月辛酉朔、廢朝、以諒闇故也、

〔日本後紀 桓武 十二〕延暦廿三年正月丁丑朔、御大極殿受朝賀、武藏國言、有木連理、近江國獻白雀、

〔類聚國史 歲時 七十一〕天長七年正月丁丑、御大極殿受賀、左衞門督清原眞人長谷奏治部卿從四位上源朝臣等所奏阿波國景雲、幷越前國木連理等瑞奏畢還宮、

〔三代實錄 光孝 四十七〕仁和元年正月丁巳朔、天皇御大極殿受朝賀、○中略 先是山城、伊勢、尾張、遠江、上總、美濃、信濃等國上言、木連理、甲斐國稷嘉禾、是日奏於庭焉、

二日朝賀

〔内裏式 上〕元正受群臣朝賀式、○中略 擬舊例、縁風雨廢朝者、次日行禮、三日以後未曾見行、

〔日本書紀 天智 二十七〕十年正月己亥朔庚子、大錦上蘇我赤兄臣、與大錦下巨勢人臣、進於殿前、奏賀正事、

〔日本書紀 天武 二十九〕四年正月丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮外藥寮、及舍衞女、墮羅女、百濟王善光、新羅仕丁等、捧藥及珍異等物進、　丁未、皇子以下百寮諸人拜朝、

〔續日本紀 元正 八〕養老三年正月庚寅朔、大風也、　辛卯、天皇御大極殿受朝、從四位上藤原朝臣武智麻呂、從四位下多治比眞人縣守二人、賛引皇太子也、

〔續日本紀 元正 九〕神龜元年正月壬戌朔、廢朝、雨也、　癸亥、天皇御大極殿受朝、

〔續日本紀 聖武 十〕天平二年正月丙戌朔、廢朝、雨也、　丁亥、天皇御大極殿受朝、

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲三年正月庚午朔、廢朝、雨也、　辛未、御大極殿受朝、文武百官及陸奧蝦夷、各依儀拜賀、

〔類聚國史 歲時 七十一〕延暦廿二年正月癸丑朔、廢朝、雨也、　甲寅、受朝賀、
弘仁七年正月丁卯朔、廢朝、雨也、　戊辰、皇帝御大極殿受朝賀、
天長七年正月丙子朔、停朝賀、雨也、　丁丑、御大極殿受賀、　十年正月己丑朔、停朝賀、雨也、　庚寅、皇帝御大極殿受朝賀、午時乘輿還宮、

三日朝賀

〔續日本紀 聖武 十〕神龜四年正月甲戌朔、廢朝、雨也、　丙子、天皇御大極殿受朝、　五年正月戊戌朔、廢朝、

〔令義解六儀制〕凡祥瑞應見、若麟鳳龜龍之類、依圖書合大瑞者、隨即表奏、（謂祥瑞所出之官司、勘驗圖書、合大瑞者、不待元日、即時表奏、）其表唯顯瑞物色目、及出處所、不得苟陳虛飾、徒事浮詞、上瑞以下並申所司、（謂申治部、凡上瑞以下、皆先申官、官付治部、而此謂申所司者、據其應掌驗之所也、）元日以聞、其鳥獸之類、有生獲者、仍遂其本性、放之山野、（謂凡麟甲羽毛、產自山水之氣、飲啄飛栖、不服人之馴養、故放令遂生、若有馴人哈哺、保其喘息、雖在籠縶、而不可馴死者、皆待馴至、然後放之也、）餘皆送治部、若有不可獲（謂雲氣之類、不可親附者、）及木連理之類不須送者、所在官司、案驗非虛、具畫圖上、其須賞者、臨時聽勅、

〔唐六典四禮部〕凡元日大陳設於大極殿、（中略）黃門侍郎奏祥瑞、（中略）凡祥瑞應見、皆辨其物名、（按新唐志作名物）若大瑞（注略）上瑞（注略）中瑞（注略）下瑞（注略）皆有等差、若大瑞隨即表奏、文武百僚詣闕奉賀、其他並年終員外郎具表以聞、有司告廟、百僚詣闕奉賀、其鳥獸之類有生獲者、各隨其性而放之原野、其有不可獲者、若木連理之類、所在案驗非虛、具圖畫上、

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月乙亥朔、天皇御大極殿受朝、　戊寅、（四日）天皇御大安殿受祥瑞、如告朔儀、

○按ズルニ、當時奏瑞ノ事ハ、未ダ元日ト定メザリシナリ、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月甲申朔、天皇御大極殿受朝、（中略）是日東方慶雲見、遠江國獻白狐、丹波國獻白鴿、

〔續日本紀八元正〕養老四年正月甲寅朔、太宰府獻白鳩、　五年正月戊申朔、武藏上野二國並獻赤烏、甲斐國獻白狐、尾張國言、小鳥生大鳥、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年正月丙子、天皇御大極殿受朝、是日左京職獻白雀、河內國獻嘉禾異畝同穗、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年正月戊子朔、天皇御大極殿受朝賀、（中略）飛驒國獻白狐白雉、

〔類聚國史七十一歲時〕延曆十五年正月甲午朔、皇帝御大極殿受朝賀、石見國獻白雀、長門國獻白雉、

〔日本後紀五桓武〕延曆十六年正月戊子朔、皇帝御大極殿受朝賀、大宰府獻白雀、

〔日本後紀 桓武 八〕延暦十八年正月丙午朔、皇帝御大極殿受朝、文武官九品以上蕃客等各陪位、減四拜爲再拜、不拍手、以有渤海國使也、諸衞人等並擧賀聲、

〔類聚國史 七十一 歳時〕天長元年十二月辛巳、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣冬嗣等言、伏稽舊章、遐觀往冊、元正首祚、品物咸亨、萬國旁展、佇朝覲於夏庭、百蠻會同、仰膏澤於漢闕、今陛下煢然在疚、哀慼猶深、其新嘗宴會既從停廢、恐至元正復停大禮、春秋之義、卒哭之後、得行吉禮、伏望元日朝賀享賜等事、一隨舊典、詔曰、朕雖遏諸權制、始親萬機、而過密之悲、何曾弭忘、況霜露所感、觸目增傷、讌會之儀、情未忍觀、今卿等所請、理叵專抑、宜以明年元日受朝、朝畢後服色復素、終于諒月、其享群臣及樂懸並停、但准舊例、賜節祿也、

〔續日本後紀 四 仁明〕承和二年正月丁未朔、天皇御大極殿受群臣朝賀、皇太子不朝、以童小也、

〔續日本後紀 十八 仁明〕承和十五年正月壬戌朔、天皇御大極殿受朝賀、皇太子不朝、緣病也、

〔西宮記 正月 上〕朝拜　延喜十三年正月一日、貞信公記云、有朝拜儀、小臣內辨、(于時大納言、其職)宴會如例、但今日刀禰參入、是違例、同年御記云、辰二剋御八省、式部卿親王、參議定方朝臣供奉御前、(御出時定方朝臣召舍人)云々、畢、奏賀者參議仲平朝臣、奏瑞左馬頭玄上朝臣共進互奏之、

〔九暦〕天暦元年正月一日、辰時向八省長樂門東廊宿所、依朝拜事也、文武官裝束悉緩怠、仍仰外記史令催、依爲外辨上也、巳三剋、帝(○村上)幸八省、午三剋、外辨上達部著座、四剋、內大臣著座云々、卽召兵部令撾裝了鼓及召鼓、未一剋引列、今日下官(○藤原師輔)奉仕奏賀、殊無失、申時事了、卽幸本宮、

〔權記〕正暦四年正月一日庚寅、今日有朝拜、巳時自待賢門參入、卯時□□行幸八省院云々、仍便自此門參也、(中略)府陣如式、夾龍尾階左右可陣也、而不知前例之官人、偏陣階東、不陣西、依有立改幡等之煩、只今立戈、召渡官人等相分令著陣、但右府(○源重信)不知前例、偏陣階西立、(女院〈一條母后東三條院詮子〉御車於白虎樓下、恠事也、)內辨右相府、(六條)威儀(彈正尹爲尊親王、宰相中將道綱、)奏賀(中宮大夫道長)了還宮、

〔日本書紀持統三十〕三年正月甲寅朔、天皇朝萬國于前殿、

〔續日本紀文武一〕二年正月壬戌朔、天皇御大極殿受朝、文武百寮及新羅朝貢使拜賀、其儀如常、

〔續日本紀文武二〕大寶元年正月乙亥朔、天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢、左日像、青龍、朱雀幡、右月像、玄武、白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀於是備矣、

〔續日本紀文武三〕慶雲元年正月丁亥朔、天皇御大極殿受朝、五位已上坐始設榻焉、　三年正月丙子朔、天皇御大極殿受朝、新羅使金儒吉等在列、朝廷儀衞有異於常、

〔續日本紀元明五〕和銅三年正月壬子朔、天皇御大極殿受朝、隼人蝦夷等亦在列、左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於皇城門外朱雀路東西、分頭陳列騎兵、引隼人蝦夷等而進、

〔續日本紀元明六〕靈龜元年正月甲申朔、天皇御大極殿受朝、皇太子〇中略拜朝、陸奧出羽蝦夷、幷南島奄美、夜久、度感、信覺、球美等來朝、各貢方物、其儀朱雀門左右、陳列鼓吹騎兵、元會之日用鉦鼓、自是始矣、

〔續日本紀聖武十四〕天平十三年正月癸未朔、天皇始御恭仁宮受朝、宮垣未就、繞以帷帳、　十四年正月丁未朔、百官朝賀、爲大極殿未成、權造四阿殿、於此受朝焉、石上榎井兩氏始樹大楯槍、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年正月戊辰朔、御大極殿受朝、文武百官及高麗蕃客等、各依儀拜賀、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年正月丙午朔、御大極殿受朝、舊儀少納言侍立殿上、是日設坐席、餘儀如常、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜十年正月壬寅朔、天皇御大極殿受朝、渤海國遣獻可大夫司賓少令張仙壽等朝賀、其儀如常、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆四年正月丁酉朔、天皇御大極殿受朝、其儀如常、石上榎井二氏各豎桙楯焉、始停兵衞叫閤之儀、

朝賀例

くらにつかせ給て行せ給ふ也、禮服を著してさながら御卽位のごとし、今萬代の聲とよめるは、旗をふりて萬歲をとなふる也、大方むかしは、節會などにも萬歲をとなへけるにや、されど延喜以來此事なければ、よろづよの聲にて、朝賀の心はまぎれ侍るまじきにやとぞ覺え侍る、一條院正曆より後は、此事絕てなし、

〔公事根源 正月〕朝賀　一日

神武天皇元年正月一日、橿原の宮をたてはじめて、位につかせ給ける時、宇摩志麻治命天瑞を奏せらるゝ由、日本紀に見えたり、是などをや始とも申べき、又孝德天皇の御宇、大化二年正月一日、御門をがみの事侍よし、同じ書にのせたり、是ぞ誠の朝拜とは申べからん、然に六十六代一條院正曆より後はあり共不ㇾ承、又記錄にも所見なきにや、古は大極殿も有しかば也、今は小朝拜許にぞ成にける、

○按ズルニ、宇摩志麻治命ノ天瑞ヲ奏スル事、日本紀ニ見エズ、蓋シ舊事本紀ノ神武紀ニ、辛酉爲二元年一、正月庚辰朔、都二橿原宮一、肇卽二皇位一、○中略 宇摩志麻治命奉ㇾ獻二天瑞寶一、○中略 于時皇子大夫率二群官臣連伴造國造等一、元正朝賀禮拜也、凡厥卽位、賀正、建都、踐祚等事、並發二此時一矣トアルヲ謂ヘルナラン、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣二改新之詔一、

白雉元年正月辛丑朔、車駕幸二味經宮一、觀二賀正禮一、味經此云二阿膩賦一 是日車駕還宮、

〔日本書紀 二十七天智〕十年正月庚子、大錦上蘇我赤兄臣、與二大錦下巨勢人臣一、進二於殿前一、奏二賀正事一、

〔天智天皇外記〕三年己巳六月、勅、制二朝賀儀一、日本決釋 四年庚午正月乙亥朔、百官朝賀、朝賀之儀始二于此一、日本決釋

〔日本書紀 二十九天武〕五年正月庚子朔、群臣百寮拜朝、

於御座左邊、御前命婦同候高座北、女藏人等皆候御後、殿下褰帳、鉦二九女嬬奉翳、出自第二間、更經少納言後、進御前南廂、立三行、長翳在內、中翳在中、短翳在外、天皇端笏南面、命婦昇東西階、褰御帳、褰御前一間、女官從內相助、以針縿因之、復本座、女嬬相分退入、寢儀初見、執仗者稱警、群官磬折、諸仗共坐、主殿圖書就爐、燒香、訖典儀曰、再拜、贊者承傳、百官再拜、次奏賀、先是可有皇太子賀、而近代无其事、仍不載之、揖而出自本位、搢笏不過二兩乳、進退行步、與舞同矣、諸仗興、西行、揖而北折、進自馳道、不至宣命位一許丈、揖而東折進行、當龍尾道東階而揖、更北折、經左兵衞陣中、至同階下揖、而奏瑞倶昇、昇先右足、降先左足、並不歷階、奏賀在前、但无瑞者、奏瑞不進、內裏式意、進而不奏也、貞觀式、不設其人、不置其位云々、而近例在本列不進、非彼二式、北進而於青龍旗東北、揖而西折、經同旗及朱雀旗等北而進行、不及日像旗一許丈、揖而北折、就行立位揖之、奏賀在西少間揖而從同位西斜行、不至奏賀位、南去三尺、東去八尺、大小傍行、各三步、就同位而揖之、乃奏曰云々、訖揖而傍行、亦揖、左廻斜行、復行立位而揖、群官再拜、奏者不拜奏瑞進就位、奏事訖復行立位、勅曰參來、奏賀稱唯、揖而進行如前、就奏賀位揖之、勅曰云々、訖奏賀稱唯、御座邊、綸旨難聞、仍就位後、暗案詔文、計程稱唯云々、揖而左廻、復行立位、遂巡左廻、奏瑞共退、南進揖而東折、同經朱雀旗北、於青龍旗東北、揖而南折、降階左廻、北向揖之、更左廻如前、就宣命位、仲平大臣斜行就位、是貞保親王說者、而可知來儀之由、見延長七年御記、而揖、奏瑞者復本列宣制云々、訖南顧、百官再拜、又宣制云々、訖百官再拜舞踏、奏賀揖而左廻南行、揖而東折、自列後復本位、此間武官振旗稱萬歲、侍宣命者、復本列而居、典儀曰、再拜、贊者承傳、百官再拜、訖左侍從在上者、進御前稱禮畢、殿下褰鉦三下、奏翳垂帳、諸仗起座稱蹕、還御後房、殿下揖退鼓、侍從少納言等退下、次內辨、次群臣罷矣、不待諸門鼓聲、或內辨及百官退後、殿上侍從可退云々、案式、上下共自上可罷歟、而笏紙次第如之、改御服還宮、其後有小朝拜、或止之即御南殿、宴會如常、

〔年中行事歌合〕二番　右　朝賀元日　前大納言

雲の上にきこえあげよとよばふらし年の始の萬代の聲○中略

右、朝賀の心にて侍にや、是も元正の賀を奏する也、又こその目出賀瑞どもの有をしるして、今日同是を奏す、されば奏賀奏瑞とて、二人庭にすゝみ祝申也、其規式は、みかど大極殿のたかみ

典儀立、贊者二人相從、入自光範門、内辨著輕幄、入自昭訓門、打外辨鼓、（上卿仰兵庫）開脈門、佐伯伴入開南門、佐伯伴立壇下、令門部開、侍從少納言分立撾召鼓、群臣列入、天皇著高座、（○中略）鉦三下、（兵庫申行）執翳分進、（出自左右一間、或二間、入自中央間、）褰帳、（以大針糸等褰、女嬬等相從、褰形如八字、）命婦復座、（昇自左右階、天皇正笏、）近仗警蹕、（此間可有太子賀事）圖書主殿燒香、典儀稱再拜、頻步動稱、贊者承傳、群臣再拜、奏賀奏瑞進自位、無瑞不奏、不進位、或書云、無瑞又無奏賀、謙退時歟、無瑞猶設其人、奏賀（親王、納言參議間、）進就版奏云々、申了復位、群臣再拜、奏瑞就版、勅云、參來、奏賀稱唯就位、勅云、（備立音云々了）奏賀稱唯、退復行立位、奏賀下、宣命（以詞仰）群臣唯々再拜、更宣制、群臣再拜舞踏、武官立振萬歲旗、（宣命者復本列止）典儀稱再拜、（如初）群臣再拜、東侍從親王進御前、跪稱禮畢、復本位、擊鉦三下、（如初）執翳進、（如初）垂褰、（或記云、近仗稱警蹕云々、或不稱、）天皇入御（徹禮服給内藏）還宮、鈴奏等如常、裏書、故禪門仰云、奏賀者三古太千と讀所、三乃字加天讀之、三乃詞者、加之古末リヲオクナリ、

〔北山抄三拾遺雜抄〕朝拜事（前三日間、若有雨濕停止、○中略）

當日辰剋、乘輿幸小安殿、（御厨子所供小膳、所司供殿坤角、供御藥、）外辨大臣以下、入自含耀門、（謂朝集堂東小門）就朝集堂座、（西面北上、）（大臣北階、納言中階、參議南階、就時經上官座北、昇自東面階、降時用西面階、辨少納言以下座在東庭西面、非參議三位以上可著西堂、親王在西廊邊待列云々、）彈正入自應天門東西掖門、列立東西朝集堂南頭、式部丞以下起廊座、列立砌前、召計諸大夫、諸儀辨備訖、典儀就位後、内辨大臣入自昭訓門、著幄下座、于時外辨上卿喚召使、（二音、内辨以近衛等、令遣案内、）召使進立堂西、（當中階北面立）宣、召兵部省、稱唯退出、丞入而立、大臣宣、令擊裝畢（奴留）鼓、（興、）稱唯退出、令擊外辨鼓、（諸門聽之）乃開會昌門東西掖門、伴佐伯兩氏（率門部）入自兩門、著會昌門内座、執翳女嬬、褰帳王命婦、（或以典侍爲代）威儀命婦等（以五位爲四位代、著其色服供奉、）著座、（以南爲上）侍從少納言左右分立、（以北爲上）次開門、次撾召鼓、（兵庫頭、申内辨大臣、令撾、）諸大夫列立東西、訖參議以上降堂就列、自會昌門東扉參入、式部錄率六位以下、相分同入、次親王入自顯親門、（謂西北小門）就位、天皇御高座、（○註略）命婦四人相分在御前、至高座下立、内侍二人（以上皆著禮服）取御劍璽筥、候御前左右、御座定、置劍璽

〔延喜式式部十八〕凡元正行列次第、參議以上在左、(太政大臣執列之時、右大臣在西、)親王諸王及餘官三位已上在右、自外五位以上隨便左右、其四位參議雖是下階、列同色上、孫王諸王同色、先列孫王、六位已下次以位階、不依官秩、外位不得列內位上、

〔延喜式圖書十三〕凡元日、大極殿前庭左右設火爐榻一脚、官人四人各著禮服、分自東西廊門、當爐榻相對立、開御帷訖、主殿先進發火爐、寮官人左右各一人、進就榻下、共燒香一舉、舉即共復本列、所須香小六斤十二兩、盛官預前請受、(香爐榻及禮服、並在寮家、)

〔延喜式隼人二十八〕凡元日、卽位、及蕃客入朝等儀、官人二人、史生二人、率大衣二人、番上隼人廿人、今來隼人廿人、白丁隼人一百三十二人、分陣應天門外之左右、(蕃客入朝、天皇不臨軒者不陣、)群官初入自胡床起、今來隼人發吠聲三節、(蕃客入朝不在吠限、)

〔西宮記正月上〕朝拜　三日間無雨濕日、辨官二人相分行事、　執物具在內藏寮、四所人先一日受之列殿左右、承平七年五日、有朝拜、御元服後、

辰剋、天皇御南殿、　掃部司舁出太刀契等、置殿南簀子西四間、　內侍二人候　劒在御前、璽在御後、置輦中之後候御共、　天皇立御帳正南、　內侍候左右、　公卿列立　西面北上、可著禮服者不列立、大將立左右、　鈴奏　闈司出自左腋門、就版位、勅令申(輿、)　闈司退、少納言鈴奏云々、勅取レ、唯召主鈴如常、　進鳳御輦、　將等相副、皆著甲胡籙等、掃部頭敷筵、主殿頭撤輿杷、　次將(中將)開輦、　內侍置御劒於輦中、　天皇御之　大將警蹕、以璽匣置輦中、東豎子取御插鞋、　左右近將監令持太刀等候御前、開門、　近衛開內、兵衛開外、出承明門之間、左大將召大舍人令兵衛開門、大舍人令張御綱、兵衛陣警蹕、　御大極殿後房、　內侍取御劒、如置儀也、　天皇下　或不警蹕、天慶度不警蹕、舊例稱云々、御大床子、　此間可供御藥、兵部巡撿諸陣、　近衛陣南階、　供奉陣居也、威儀陣在左右樓下、　執翳居東西戶內、　二八立床子、　褰帳　卽位用女王、朝拜代、　威儀命婦　四人　著座　用壺床子、

詞、前就位奏曰、治部卿位姓名等申久、其官位姓名等我所申其物、顯野王我符瑞圖曰云々、孫氏我瑞應圖曰云々止云利、此瑞乎瑞書爾勘爾、其物波上瑞爾合利、其物波中瑞爾合利止申世事乎、恐美恐美毛奏給久止奏、退復位、勅曰、參來奏賀者稱唯就位、勅曰、供奉親王等、王等、臣等、百官人等、天下百姓衆諸、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎平久長久受賜禮止宣、奉勅稱唯、退復行立之位、俱逡巡還退出、奏賀者便留宣命之位、奏瑞者復本列、訖乃奏○乃字、儀式作奏賀者三字、宣制曰、明神止御大八洲日本根子天皇我詔旨良萬度宣不大命乎衆聞食止與宣、王公百官稱唯再拜、訖更宣云、供奉親王等、王等、臣等、百官人等、天下百姓衆諸、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎平久長久受賜禮止勅不天皇我詔旨乎、衆諸聞食止與宣、王公百官共稱唯再拜、舞踏再拜、武官俱立、振旆稱萬歲、其聲謂之恐謂々○不拜舞、待宣命者退復本列而止、典儀曰、再拜、贊者承傳、群臣再拜、訖侍從進當御前、跪曰、禮畢、還復位、殿下擊鉦三下、奉翳垂帳、訖復本處、皇帝還入後房、皇后還入如出儀、殿下撾退鼓、諸門皆應、上下群臣罷、自上而罷、撾退鼓群臣且罷、不待諸門鼓應、又殿上者侍從先罷、次少納言、次執翳、威儀、褰帳等罷、兩氏閉門、諸衛擊鉦解陣、○註略、卽還御豐樂殿、○又見儀式

〔延喜式四十三春宮〕朝賀儀

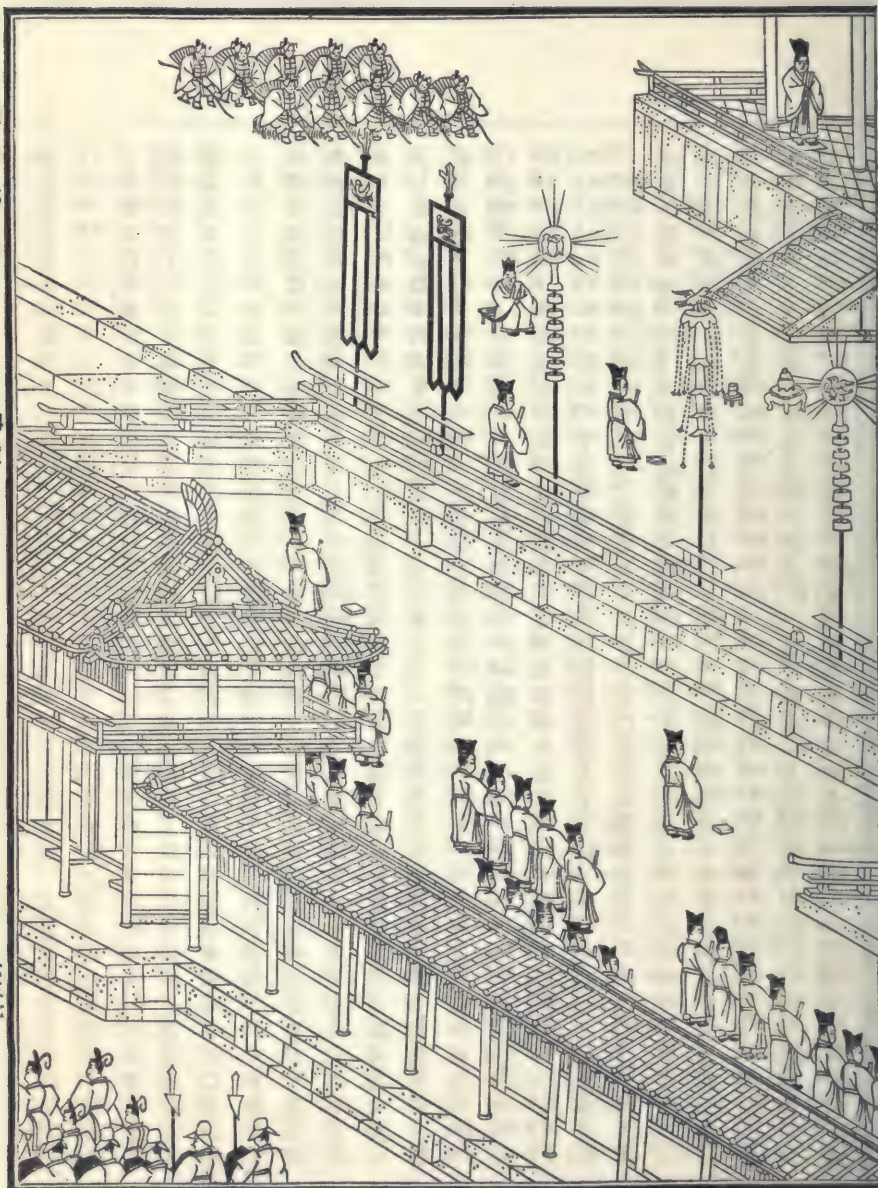
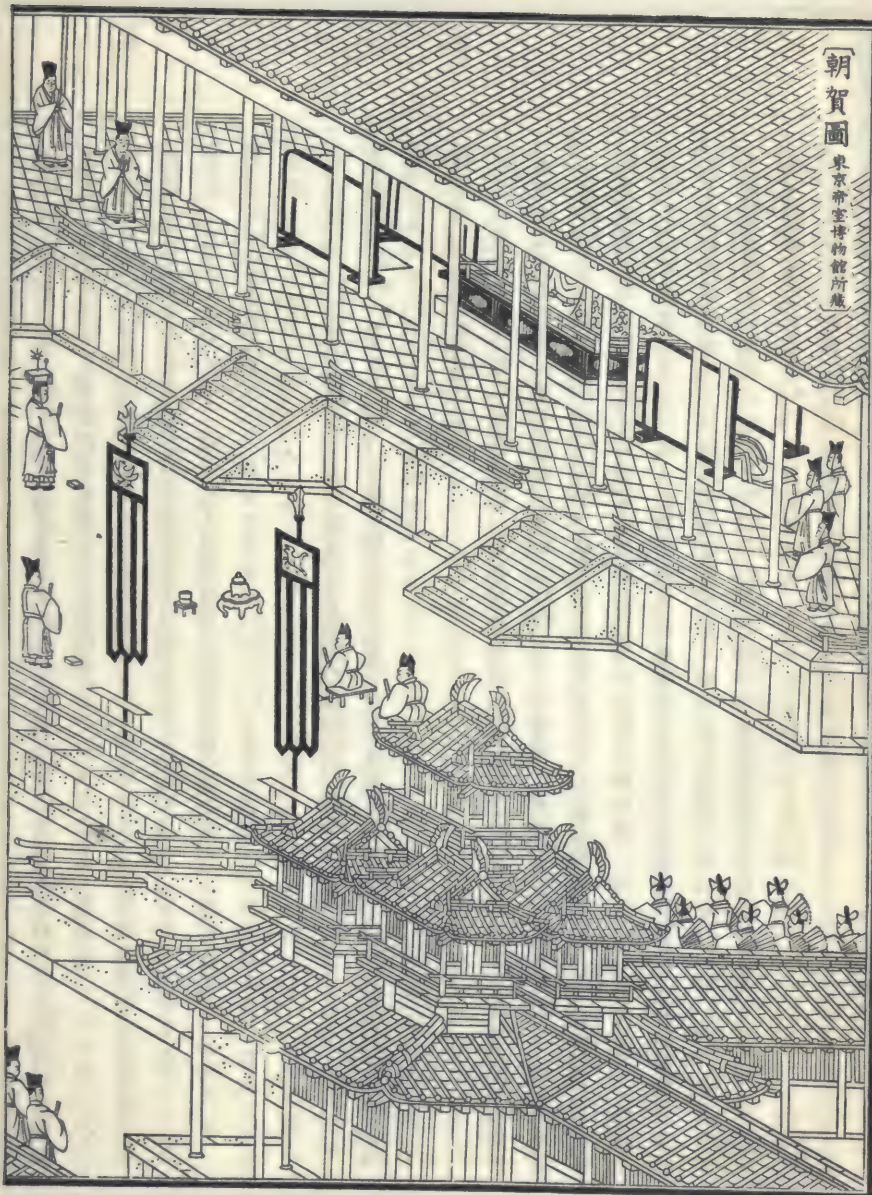
前一日、坊官率厲官設東宮次於太極殿東廊昭訓門北外、掖所司各供其職、大藏設東宮幄於大極殿東南、掃部寮施黃端帖於幄下、傳大夫及侍從四人座於幄東、西向北上、傳座去幄八尺、大夫座去傳三尺、侍從差退、左右分設、主藏設胡床於幄下帖上、西向、坊官設亮及帶刀舍人胡床於幄北、南向西上、其日依時剋、傳以下諸侍從內舍人各著朝服、參詣共候、東宮駕輦以下出、帶刀舍人○中略列立前後、左右兵衛尉志各率兵衞陣列門外、立前後、至東廊外、降輦就次、○中略又謁者著禮服、以坊大夫爲之、若無者他四位得之、與侍從進引東宮出、次舍人三人、執紫蓋以隨之、亮帶仗率帶刀舍人等在前行、諸衛亦如常儀、自東廊昭訓門入就幄座、執蓋者立於幄後、傳以下以次就座、亮率帶刀舍人等就幄北胡床、坊官率史生并舍人十人、簡容止合禮者擬雜役、侍廊內東北庭、群官入就位、訖傳進引東宮出幄、事見儀式、朝拜訖還宮如來儀、

分共立、次少納言二人、分入自昭訓光範兩門、對立壇上、兩氏降旗、北面立、門下、門部開門、諸門與會昌門俱開、訖各復本位、閤內大臣令撾召鼓、諸門鼓皆應、皇太子始就幄下座、群臣以次參入就版位、諸仗及兩氏興、（內舍人亦同、凡自此後、兩氏與諸仗共起居、）群臣立定、親王乃入自顯親門（若有蕃客者、治部玄蕃相次引客入自會昌門、）就位、于時春宮謁者（以坊大夫為之、若無者使四位得之、）引皇太子出幄、進至青龍旗下、西折而進至銅烏日像兩幢之間、謁者北折而進就位、皇太子猶進至銅烏幢之下、北折而進就位、（凡每曲折必揖、諸臣亦同、）皇帝服冕服就高座、命婦四人（以內親王以下五位以上為之、服色同成儀、）服禮服分在御前、至高座下立、御坐定引還、（更供奉皇后御前、）皇后服禮服後就御座、于時殿下擊鉦三下、二九女孺執翳、左右分進奉翳、（見御高座卽奉翳、不必待皇后著御座、）御前命婦二人、褰御帳復本座、女孺還本座、宸儀初見、執仗者俱稱警、群臣磬折、諸仗共坐、主殿圖書各二人、以次出東西就爐燒香、（主殿先出供火、圖書次出焚香、）典儀曰再拜、皇太子再拜、（不使贊者承傳、為貴皇太子、）訖謁者北上當東宮位、猶北進二許丈、更西折當中階、引皇太子進不至階下三丈許、東折就謁者位、皇太子升自中階、當御座前北面跪於南榮、賀曰、新年乃新月乃新日爾、萬福乎持參來氏拜供奉止眞久申、俛伏而興降階四級、謁者進引皇太子復位、皇太子再拜、于時勅喚侍從名、（喚名之儀同尋常、）稱唯、進自南榮當御座前跪、（與皇太子跪處同、）詔曰、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎平久永久受賜止禮宣、侍從奉勅稱唯、俛伏而興、降自東階就詔使位、西面宣制曰、天皇我詔旨萬眞止宣布大命乎聞賜止宣、（〇侍從奉勅以下七十四字、以儀式補、）皇太子稱唯再拜、訖更宣、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎平久永久受賜止禮宣、皇太子稱唯再拜、舞踏再拜、侍從還上殿、典儀曰再拜、皇太子再拜、謁者進引皇太子復幄、比及青龍旗下、典儀曰再拜、贊者承傳、王公百官再拜、訖奏賀奏瑞者（預定其人、奏賀者在南面行、若在四位者度馳道、若帶劍者權脫、）共進自位、諸仗共興、奏瑞者西行北折、進自馳道、不至宣命位一丈、東折經左兵衞陣南、更北折升階、西折就行立之位、有頃奏賀者進就版位、北面立奏曰、明神止御大八洲日本根子天皇我朝廷爾供奉流親王等、王等、臣等、百官人等、天下百姓衆諸、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎持參來、天皇我朝廷乎拜供奉事乎、恐美恐美毛申賜止申、退復位、群臣客徒等再拜、奏瑞者（若無瑞者無奏

賀版位、自奏賀位東去二丈置皇太子謁者版位、自此南去二丈更東折一丈、雙置奏賀奏瑞行立位、(奏賀在西、奏瑞在東、相去一丈五尺、)又去中階南三丈、更東折二丈、置皇太子謁者位、自此南去三丈置詔使位、去中階南十二丈西折與奏賀位相對、置典儀位、差西南退置贊者位、又去中階南十丈對設火爐、(相去六丈)式部自龍尾道南頭去十七丈置宣命位、自宣命位南去四丈、東折二丈五尺置太政大臣位、西折二丈五尺置親王位、左大臣位於太政大臣位南、右大臣位於親王位南、大納言位於左大臣位南、非參議一位二位位於右大臣位南、中納言位於大納言位南、三位參議位少退在東、諸王三位位於非參議一位位南、諸臣三位諸王四位位少退在西、四位參議位於中納言位南、諸王五位位於諸王三位位南、諸臣四位位分在東西、五位以下亦同之、每位相去一丈三尺、(五位以上多數版後重行)若有蕃客、置治部玄蕃客使版位於左右五位版位間、(治部玄蕃位東、客位西、並北面南行、)其日未辨色、諸衛服大儀、各勒所部、立大儀仗於殿庭左右及諸門、門部四人居於章德興禮兩門東西也、(各用胡床、)典儀一人、贊者二人、入自光範門各就位、左右中將執仗供奉御前、即陣東西階下、(自階南去三丈、更東退一丈、右仗亦同、)東兵衛挾龍尾道而陣、(最北隊旗去壁二丈、建纛之儀與近仗同、)督陣在東、佐陣在西、(右兵衛相對、若有蕃客陣會昌門東掖、西亦同之、)中務率內舍人陣近衛南、(纛與青龍旗相連、相去六丈、與近仗纛平頭、隊旗自纛少西進、若有蕃客、北去二丈、又近仗大將陣龍尾道下、凡中務丞諸衛各鉦南鼓西、他皆此同、)內藏大舍人寮等、各執威儀物、東西相分列於殿庭、(大舍人在近仗北一丈、與近仗纛平頭、北有內藏寮、次掃部寮、次主殿寮、并自大舍人東退一丈平頭、西亦同、但大藏寮與內藏寮相對、)主殿圖書兩寮各服禮服、列爐東西、(去爐各三丈、)卯三刻以前諸儀辨備訖、(主殿東西各二人、圖書東西各二人、第一人當爐立、以北爲上、相去各五尺、)四刻、大臣入自昭訓門、就幄座、閤外大臣(若無大臣者、參議以上行事、)令撾外辨鼓、諸門鼓皆應、(殿下鼓不應、)乃開章德興禮兩門、(自餘小門先已開、)訖大伴佐伯兩氏(左大伴、右佐伯、不帶劔者權帶、)率門部各三人、入自南門、坐胡床於會昌門上、門部坐於門下、(東西相對、去壇一丈、當門東北檀、西亦同、)辰一刻、皇帝乘輿入大極殿後房、少時皇后御輿亦入後房、(南近衛次將各一人、率將監將曹府生各一人、近衛各三十人、更還後宮、供奉御輿、又左右兵衛尉以上各二人、率志府生各一人、兵衛各三十人、供奉亦同、)警蹕侍衛如常、十八女孺執翳三行、就戶前座、(以南爲上、)褰帳命婦二人、(內親王以下三位以上爲之、若無者王氏四位五位亦得、)威儀命婦四人、(三位以下五位以上爲之、各一人、同色相對、以南爲上、)各服禮服相分、以次就座、侍從四人、(親王以下四位以上爲之、若不帶劔者權帶、以北爲上、服色同上、)相

朝賀

朝賀圖 東京帝室博物館所藏

習禮

返給、召外記被下藏人、辨傳左府云、正月元日諸司奏、依御元服雖無節會、先例被付內侍所也、而從御所可被仰歟、將又大臣可奏歟、左府被申云、猶上卿可奏事由者、此後人々被退出、

〔類聚國史七十一歲時〕弘仁九年正月己亥、勅、比年賀正之臣不諳禮容、俛仰之間、或致違失、威儀有闕、積慣無改、宜令所司每至季冬月豫加教習、俾容止可觀、進退可度、但參議幷三位已上不在此限、

〔儀式六〕元正朝賀儀○中略　前四日、式部丞錄率史生省掌等、進八省院立標、幷習禮、

〔延喜式十八式部〕凡賀正之日、○中略　卽季冬下旬、大月廿八日、小月廿七日、總集諸司、預令習禮、其參議及三位以上不在集例、

〔北山抄二十二月〕十三日、預點元日侍從奏賀等事、若无奏賀人、上卿奉仰定其人、可令習之由、仰外記云々、

〔北山抄三拾遺雜抄〕朝拜事、○中略　王卿有職掌者、前兩三日、進八省院習禮、式部式、參議以上不在集例者、而近例猶有其事、但與諸司不同日、

朝賀式

〔內裏式上〕元正受群臣朝賀式

前二日、所司宣攝內外各供其職、前一日、整設御座於大極殿、敷高座以錦、高座壇下南幷東西鋪兩面、不至東西壁各二間、又不至南廂一間、猶例用布單、今卽停、鋪六幅布單於軒廊、又鋪二幅兩面於其上、自後房屬高座、是備御路、人不敢踐、但兩面邊布單、聽御前命婦等踐、張斑幔於高座後左右也、設皇后御座於高座東幔之後、鋪褰帳命婦座於高座東西二丈、當南頭又鋪威儀命婦座於褰帳命婦座後一丈五尺、更北折五尺、以南爲上、侍從立於南廂第二間、以北爲上、鋪執翳者座於東西戶前、少納言氈於南榮當第一第二楹間、每座相對、又當殿中階南去十五丈四尺樹銅烏幢、東樹日像幢、次朱雀旗、次靑龍旗、此旗當殿東頭楹、玄武旗當西頭楹、銅烏幢西樹月像幢、次白虎旗、次玄武旗、相去各三丈許、與蒼龍白虎兩樓南端楹平頭、又自昭訓門南廊第一間壇下西去四丈設皇太子幄、幄東設謁者座、用四位、自謁者座南去一許丈設閤內大臣幄、幄南懸鉦鼓、與近仗相連、北鉦南鼓、幄東砌下鋪外記史等座、俱西面左右、○右字儀式無、近衞陣邊鋪內記座、中務置皇太子版位於中階南十丈、又南去二丈置奏

麻呂之孫、右大臣贈從一位是公之第二子也、〇中略雄友性溫和、不妄喜怒、姿儀可觀、音韻淸朗、至於賀正宜命、推之爲師、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年正月丁巳朔、天皇御大極殿受朝賀、太政大臣〇藤原基經行內辨、太政大臣儀不可行內辨、是日別有勅行之、是權時之事也、

〔江次第抄一正月〕元日宴會　第一大臣於承明門內辨備諸事、故曰內辨、第二大臣以下、於承明門外辨備諸事、故曰外辨、雖有親王、猶大臣之人行事也、

〔西宮記正月上〕朝拜　延長七年正月一日御記云、四位以上命婦無可供威儀者、仍撿前例、寬平八年正五位下藤善直爲四位代、又蕃客時諸衞督佐代、皆以五位六位官人權宛之、各服本職位服、以此事仰左大臣〇藤原忠平、令定、申云、男官皆用代官、於女官何無其事、況有寬平例、被循行可無何事、仍以五位爲四位代、各着其色服令供奉、又奏賀仲平進、奏瑞者玄上不進、內裏式云、奏賀奏瑞者共進云々、其注云、無瑞者無奏詞、案、此式雖無瑞猶與奏賀共進可就位、仍撿前例、弘仁口年仁壽三年、奏賀瑞共進、依無瑞不奏、貞觀六年日記云、承前之例、雖無奏瑞事猶置其人、而別有新式、不置其人亦無其位、其外年年不見奏瑞人々奏否由者、但寬平八年朝拜時、四位侍從忽闕、以奏瑞人補侍從、卽知奏瑞不進者、延喜二年奏賀者獨進、然則仁壽以前依式行之、貞觀六年以後、無瑞不設其人、而今設其人置其位、而又不進、皆無所據、須後日一定云々

〔中右記〕天永三年十二月十日癸巳、今日御元服定也、〇中略藏人辨申左府云、寬治寬仁之例、被下御元服日時之日、被定元日擬侍從、但於荷前使者不被定、而件二箇度ハ式日十三日以後也、今日ハ十三日以前也、猶可被定歟、如何、雖非可定申、且又可問人々者、而兩三人不同被申、被問予、申云、御元服以後、昔必有朝拜也、近代雖絕、依可有朝拜儀、必被加定歟、然者式日以前今日被定擬侍從何事之有哉、被奏件旨、仰云、可被定申、仍召例文外記被定、在端座人々暫起座、左大辨書之、左府入宮付藏人被奏、

瑞各一人、(簡四位以上堪事者爲之、)典儀一人、(通用四位五位、)並奏聞定之、

〔江家次第 十一 十二月〕十三日、定元日擬侍從、幷荷前使事、

大臣參議著陣、大臣直著外座、以次上卿先著內座、以藏人令奏可定申其事之由、奉仰之後渡外座、一位大臣著三間東邊、次大臣著二間西邊、大納言著同間東邊、中納言著一間西邊、但行事日不論大中納言著二間、大納言著西邊、中納言當崇明門中央著之、召官人令置膝突、又令召外記、五位外記著膝突、六位外記跪小庭、上卿仰可進擬侍從幷荷前使等例文硯之由、外記稱唯出進之、一人取筥入年々定文二卷、今度可奉仕使上卿注文、幷中務省進陰陽寮日時等、置上卿前、一人取硯、加入大間二卷置參議前、大臣見案令參議書之、　書樣○註略　元日大極殿擬侍從　左　正三位藤原朝臣某(有親王者可定、不然者用參議、)　正四位下源朝臣某　右　從三位藤原朝臣某　從四位上藤原朝臣某　少納言正五位下藤原朝臣某　同從五位上源朝臣某　奏賀　正二位藤原朝臣某　奏瑞　從四位上藤原朝臣某、(已上用經少納言人、)　典儀　從五位下藤原朝臣某、(用少納言、)　天仁二年十二月十三日○中略　又說　大臣幷參議著陣、大臣仰外記令奉例文硯等、(筥入侍從幷荷前使年々定文五位以上歷名、)　置上卿前硯筥、(入侍從幷荷前等大間、)　上卿令參議書之、　侍從定書樣　元日大極殿擬侍從　左　從三位藤原朝臣基忠(可定親王、而今年無親王、仍所定也、)　正四位下源朝臣道良　右　從三位藤原朝臣保實　從四位上源朝臣道時　少納言　正五位下藤原朝臣通輔　從五位上藤原朝臣公衡　奏賀　正二位源朝臣雅實(定大納言)　奏瑞　從四位上藤原朝臣實宗(定歷少納言者、或不必然、)　典儀　從五位上藤原朝臣知家　應德三年十二月二十日

〔延喜式 十三 大舍人〕凡朝拜日、點定舍人十人、爲權內舍人、其名簿十二月五日申省、

〔延喜式 十八 式部〕凡賀正者、預擇諸國朝集使及散位容儀所可取者、四十人已上五十人已下、以擬威儀權官、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年四月丙戌、宮內卿正三位藤原朝臣雄友薨、雄友者參議兵部卿從三位乙

名稱

〔日本書紀（二十五孝徳）〕大化二年正月甲子朔、賀正禮（ミカドヲガミノコト）畢、（○下略）

〔公事根源（正月）〕朝賀、（○中略）是を朝拜とも申也、辰の時に、天皇大極殿に行幸なりて行はせ給也、群臣皆禮服を著して、さながら御卽位の儀式に同じ、

〔通典（七十禮）〕元正冬至受朝賀、（○中略）漢高帝十月定秦、遂爲歲首、七年長樂宮成、制諸侯群臣朝賀儀、

制度

〔延喜式（十二內記）〕凡元日朝賀依有滯故延用二三日者、其宣命之辭、猶稱朔日、

〔延喜式（四十一彈正）〕凡元正之日、糺彈五位以上諸王諸臣威儀、幷著用物色違制、及朝拜刀禰等非違、（諸節准此）凡朝拜之時、式部省引刀禰列朱雀門外、乾忠以下左右分列糺彈非違、

〔延喜式（十八式部）〕凡賀正之日、內外諸司五位已上解任之輩、未得解由、（但宴會不在此限、五位郡司亦同、）諸司雜色人諸國四度使雜掌及入京郡司、皆聽朝拜、

〔小野宮年中行事（正月）〕元日受群臣朝賀事

弘仁式部式云、賀正之日、內外之諸司五位已上解任之輩、未得解由、及郡司五位皆聽朝拜、但宴會不在聽限、

〔延喜式（十八式部）〕凡元正之日、若有不朝者、五位以上莫預三節、（七十以上者、不在此限、）六位以下奪春夏祿、（六位以下若有申故者、不在此例、）但宮內、主殿、典藥、內膳、造酒、采女、主水等省寮司莫責不參、侍醫東宮學士亦同、

〔類聚國史（七十一歲時）〕弘仁七年五月己卯、式部省言、據延曆廿一年正月七日勅、賀正不參、五位已上莫預三節、夫事君之道、高卑惟同、懲慢之罪、理須畫一、而今唯責五位已上、不責六位已下、因茲至于日旰無人引進、伏請自今以後奪春夏之祿、肅不會之怠、則朝儀有序、憲章不墜者、許之、　十三年二月戊寅、制、五位已上高年者、不預朝會、但賜節祿而已、

定內辨以下職員

〔儀式（六）〕元正朝賀儀

大臣預點（十二月十三日點定、卽日奏聞、）殿上侍從四人、（三位二人、或以親王代之、四位二人、幷左右各一人、）少納言左右各一人、（若有闕者權任、）奏賀、奏

ヲ奏シ給ヒ、天皇之ガ爲ニ詔アリ、次ニ奏賀者進テ賀ヲ奏シ、奏瑞者祥瑞ヲ奏ス、天皇亦詔アリ、王公百官拜舞シ、武官旗ヲ振テ萬歳ヲ稱ス、是ニ於テ朝賀ノ式全ク畢リ、更ニ豐樂殿ニ還リテ節會ヲ行フ、此日彈正忠以下ハ、朱雀門外ニ列シテ非違ヲ糺彈シ、又不參ノ輩ニハ、其位階ニ應ジテ懲罰ヲ加フルノ制アリ、抑、朝賀ノ儀ハ、神武天皇元年正月朔日、橿原宮ニ即位シ給ヒシ時、宇摩志麻治命天瑞ヲ奏セシコトアレドモ、其後久シク史籍ニ見エズ、降テ孝德天皇大化二年正月朔日ニ、賀正ノ禮アリシコトアリ、文武天皇大寶元年ニハ、其儀大ニ整頓セリ、然ルニ中世以後朝綱漸ク弛廢シ、小朝拜ナド起ルニ及ビテハ、朝賀ノ大禮ハ每年行ハレザル事トナリ、一條天皇ノ正曆以後ハ、全ク廢絕セリ、故ニ江家次第ニハ既ニ此儀ヲ載セズ、朝賀ハ元日ニ行フベキ例ナレドモ、當日風雨又ハ其他ノ事故アル時ハ、二日若シクハ三日ニ之ヲ行ヒ、或ハ五日ニ延引セシコトモアリ、但シ宣命ノ辭ニハ、其當日ヲ用ヰズシテ猶ホ朔日ト稱スルナリ、又天皇及ビ皇太子等ノ不豫ニ由リ、或ハ諒闇ニ由リ、或ハ大極殿ノ未ダ成ラザルニ由リテ、朝賀ヲ廢スルコトアリ、日蝕ノ時、雨雪風寒ノ時、年穀登ラザル歳ナド亦然リ、

皇后及ビ皇太子ノ朝賀ハ、共ニ正月二日ニ之ヲ行ヒ、親王以下群臣先ヅ后宮ニ拜賀シ、次ニ東宮ニ至リ啓賀ノ禮ヲ行ヒ、更ニ二宮ノ大饗アルヲ例トス、太皇太后、皇太后モ亦朝賀ノ儀アリ、又國司ノ廳ニテハ、元日ニ國司親ラ其屬僚郡司等ヲ率キ、廳ニ向テ朝拜シ、長官其屬僚ノ賀ヲ受クルヲ例トス、

朝賀ノ日、天皇ハ冕服ヲ服シ、玉佩ヲ帶ビ、皇后モ亦禮服ヲ著ケ給フ、皇太子以下百官群臣ハ、各其位階官職ニ應ジテ禮冠禮服ヲ著ク、若シ制ニ違フモノアレバ糺彈セラル、其他掌侍以下ノ女官、威儀、褰帳等ノ命婦モ亦各禮服ヲ著ケ殿上ニ陪ス、

〔おもひのまゝの日記〕四方拜はれいの事なれど、まだ夜ぶかきに御裝束よそひたれば、殿上のうへ人廿人ばかり、よべより參りこもれり、奉行の藏人を初めとして、しそくの光りひるにをとらず、御裝束のぎは、供花より初めて、ふるきまゝにきら〳〵しくよそひたり、まだ寅の刻に事はてぬれば、人々まかでぬ、

〔歌林四季物語〕一人の御身と申せども、あさまつりごとのはじめは、いみじく心づからの本意まもらせ給ひて、元正の寅の三つにあたるころほひ、ひんがしの御庭にみゆきなりまして、天地山陵をおがみいのらせおはしまし、御屬星の御拜などなさせ給ふなるべし、これひたすら御身の御ためばかりにあらず、一とせのあまつかみくにつかみ、はふむしまでのいのりごとにて、もはら一とせのかぎりあやぶむべきわざはいをいのらせ給ふ、中臣の御はらひ、ろっこむのはらひなどあるべきにや、この事すうじんのあめがしたしろしめす、みとせにあたらせ給ふときになんはじまれり、天地四方をおがませたまふによりて、四方拜とはものするにこそ、

朝賀

朝賀ハ、ミカドヲガミト稱シ、毎年正月元日、天皇大極殿ニ御シテ百官ノ賀ヲ受ケ給フ大禮ナリ、前年十二月中ニ、大臣豫メ擬°侍從以下ノ職員ヲ定メテ奏上スル事アリ、又此等ノ職員ヲシテ禮容ヲ整ヘシメンガタメ習禮ノ事アリ、大極殿ニハ高御座及ビ皇后ノ御座ヲ設ケ、庭上ニハ銅烏幢ヲ始メ、日像、月像、朱雀、青龍、白虎、玄武等ノ旗ヲ樹ツルナド、其裝飾大抵即位ノ儀ニ同ジ、當日未明ニ、諸衞大儀仗ヲ殿庭及ビ諸門ニ立テ、皇太子以下群臣、次ヲ以テ參入シ、版位ニ就ク、天皇皇后共ニ御座ニ出御アリ、皇太子先ヅ進テ高御座ノ前ニ至リ、跪キテ賀

用途

〔二水記〕永正十七年正月一日辛卯、早旦著直垂、拜諸神星等、

〔延喜式十二中務〕書司

元日拜天地四方料、御褥一條料、絹一疋、調綿四屯、御案覆三條二條各長六尺、一條長七尺、料、絹五丈七尺、周帶六條各長六尺料、緋帛六尺、香二兩、細布三端、柳筥四合、色紙十二張、白紙十二張、高盤二基、窪坏十口、油一升、

〔親長卿記〕文明十七年正月一日、寅一刻元長朝臣著束帶參內、依四方拜奉行也、御劍頭中將基富朝臣、早參、俊名藏人辨、家幸藏人右少辨、源富仲等也、每事無爲云々、天曙之程退出、四方拜奉行御訪百疋也、昨日到來、貢馬傳奏一位日野也、自武家御替物用脚貳千疋進之、仍四方拜許被行之、平座停止云々、適近年如形被行之處、如此儀無勿體事也、　十八年正月一日、傳聞、有四方拜云々、〇中略　無平座用脚、武家不進之故也、千疋武田大膳大夫進上、被付四方拜歟、

〔宣胤卿記〕明應三年四方拜下行事

掃部寮二百三十疋　木工寮百疋　掌燈三十疋　出納三十疋　戸屋衆三十疋　以上四百二十疋

文龜四年正月一日甲子、四方拜、〇中略　職事頭左中辨守光朝臣、不具　尙顯藏人左少辨　在國、高光、藏人侍從未拜賀　六位藤懷幸、皆在名、卜部兼將等不參、用脚貢馬方一向不及沙汰、以公物下行云々、

雜載

〔日次紀事一正月〕四方拜寅一刻、主上出御清涼殿東庭、有四方御拜、或關白職爲御代有被勤之、若然則長橋局預以奉書傳命、

〔宗建卿記〕享保十五年十二月廿九日、參御前、內々仰云、四方拜無出御之時、御代拜如何之由、御不審有之、此事申關白之所、仰云、四方拜無出御之時、不及御代拜、其故者、天地四方幷山陵等御拜也、依之伯職不勤之歟之由也、以此旨翌三十日參御前言上之了、

〔親長卿記〕明應五年正月一日庚辰、早旦行水、奉念天地四方諸佛等、法體已後不及四方拜、殊觸穢中之間不及神社、　六年正月一日甲辰、早旦行水、奉稱念天地四方幷諸神佛等、法體之後不及四方拜、

〔後水尾院當時年中行事上正月〕朔日、四方拜、○中略御ゆどの終りて後、上臈亦はかまをきて御髮をかき、御かうぶりを奉る、すいえいかうひねりの御かけ、下の大口ばかりをめす、御そくたいあるべき爲なり、○中略淸涼殿の北の方にて御そく帶あり、裝束司二人參りてめさす、近習の人可然が御前にさぶらふ、

〔嘉永年中行事〕正月朔日、四方拜、○中略次に黃櫨の御袍をめさします、高倉山科相替りて御衣文つかうまつる、

〔親長卿記〕文明十二年正月一日、寅剋許參內、衣冠召具元長、四方拜奉行之故也、○中略著御屛風之內後、元長取御草鞋退入、持參御笏、先々牙御笏也、雖然先年紛失了、今度被申關白幷室町殿之處、象牙無御座云々、仍堀河院木御笏被用之由禪閤○藤原兼良被申、殊木御笏在御物之內、仍被用之、

〔宗建卿記〕享保十八年正月一日、四方拜、御手水自今年被用貫簀、今日主上御檜扇蘇芳長飾初被用之、近世以紅糸卷御扇、恐幼主例歟、於御直衣之時者、尋常御檜扇也、年來御不審、仍自今年被用、件御扇、牙御笏被入蒔繪宮、蓋敷錦袋、件御笏去年自關白被獻者也、抑牙御笏事、著御禮服之外、近世不被用之、文明十二年雖可被用之、依紛失無其儀、且其頃關白幷室町等被申無象牙之由、仍被用木御笏、以來至今年不被用牙之處、今年御再興珍重々々、且被入御疊紙、是又近世無之、

〔法性寺關白記〕保安四年正月一日、拂曉遣聽以後也著束帶、持笏、帶劒如例、於東對南庭拜天地四方、○中略勾當源盛定著衣冠行事、隨身二人著褐衣祗候、

〔玉海〕元曆二年正月一日乙酉、早旦四方拜須寅刻有此事、而自然及卯刻、如例、但依辭大臣不帶劒也、建久八年正月一日乙亥、寅剋拜天地四方、用宿袍不著束帶、

〔玉蘂〕安貞二年正月一日乙亥、卯剋四方拜如恒、衣冠右府○藤原敎實同之、但束帶蒔繪劒、隨身一人著褐伺候、

服裝

建久十年正月一日、寅剋著衣冠、拜天地四方、卽時修祓、陰陽師國道、遙拜大神宮春日社等、是例之勤也、今日雖爲日蝕、多分不可正現之上、天陰雨下、簾中引壁代、不下格子、且是元正閉戶有事忌之故也、

文治三年正月一日癸卯、未明拜天地四方、依飛雪儲座於中門、行事、疊四角、共東西燭、余著束帶、如例、御笏著其座、北面、唱宿星名七遍、本命當年、再拜、其誦文讀一返、又再拜、次拜天、乾、次拜地、坤、次拜四方、各再拜、東西南北、次大將軍、東王于今年在東也、次王相、艮、次天一、此間天一天上之間也、仍拜乾、次太白、東、定事也、已上皆再拜也、次考妣陵、共巽向也、次大神宮、巽、次石清水、坤、次賀茂、北、次春日、南、次大原野、西顔向坤、次日吉、艮、次吉田、東、次梅宮、坤、次祇園、巽、次北野、乾、次總社、南、已上陵已下兩段再拜也、次歸昇、次內府四方拜事、於同所有此事、依便宜也、

〔玉葉〕嘉禎三年正月一日、寅剋四方拜如恒、依節分以前、用舊年方、

〔宣胤卿記〕文明十三年正月一日丙子、寅一點浴湯、次著衣冠、狩衣、於庭上座、蓆敷、其上敷疊一帖、向北稱屬星名號七遍、南面、金星、二拜、次稱呪文、其詞云、賊寇之中、過度我身、毒魔之中、過度我身、毒氣之中、過度我身、毀厄之中、過度我身、五鬼六害之中、過度我身、五兵口舌之中、過度我身、厭魅呪咀之中、過度我身、百病除癒、所欲隨心、急々如律令、向同方再拜、次拜天、乾、地、坤、四方、先東、次南、次西、次北、大將軍、當年西、王相、東、天一、當年坤、太白、東、等、各二拜、次拜宅中神、向家中、竈神、向其方、等、各二拜、此兩箇拜事無本、次第、余私志之儀也、次拜伊勢、東顔巽也、兩宮各別拜之、次拜八幡、南顔坤、賀茂、下社艮、上社北、各別拜之、松尾、坤、等、各兩段再拜、次拜春日、南顔巽、若宮別拜之、大原野、坤、吉田、東、等、次拜齋場所、日吉、艮、祇園、巽、北野、乾、下御靈、巽、多武峯、巽、總社、南、等、以上兩段再拜、次拜先祖廟、東、二拜、以上注次第、以常燈見之、次起座改衣冠、每日所作讀經念誦等如例、三社氏別所作、

〔西宮記〕正月上四方拜、中略、藏人奉御笏、候式、天皇服黃櫨、次第如式、如每日、其後三獻祝著儀如例年、

〔建武年中行事〕追儺はて、中略、四方拜の御裝束いそがすめり、中略、寅の時に御掛の人めして、御裝束たてまつる、黃櫨染の御袍常のごとし、

一日、十一日、二十一日、(在東、)次氏神、(南殿再拜)竈神、可加先聖先師(再拜)墳墓、(南殿再拜)

〔日本歲時記一正月〕元日、○中略禮服を著て、威儀容貌をかいつくろひ、齋戒し、香をたき、天地神祇を禮拜し、(天子にあらずして天地を拜する事、僭に似たりといへども、人みな天地の性をうけて生れ侍れば、本をたつとぶ意なる故、義におゐて害なかるべし、いはんやもろこしにも、庶人といへども、元日に天地を拜するこれあるよし、歲桑撮要に見えたり、)

〔法性寺關白記〕保安四年正月一日、於東對南庭拜天地四方、其儀遣水北頭南階前敷廣筵二枚、(東西爲妻、)其上敷高麗端疊一枚、(東西妻、)筵四角供燈、(用敷燈臺、)勾當源盛定著衣冠行事、隨身二人、著褐衣祗候、先向北方稱屬星名七遍、(本命星巨文星、藤原忠通生年丑、當年星貞文子、未入春節、仍用去年屬星也、)再拜稱呪如例、一畢又再拜、次拜天、次拜地、次拜四方、次拜大將軍、(于時在北、向天方、)次拜王相、(節分以前也、仍向北拜之、)次拜天一、(東、)次拜太白、(東、)次伊勢、八幡、賀茂、春日、大原野、日吉、吉田、祇園、北野、總社等拜了、歸寢所、于時春天初明、抑去夕陽殿之後、不可對面女房歟、依懷妊也、而兪不致此沙汰、依忽思出、鷄鳴之程、出出居、則著裝束拜之也、

〔台記〕康治三年(○天養元年)正月一日癸丑、鷄鳴四方拜如常、女犯魚食之後雖不沐有此事否、依不審尋新院女房等、答云、不必沐御、只浴後不女犯魚食給者、因余夜前不沐只浴、事終參院、

久安三年正月一日乙丑、鷄鳴四方拜、依病乍居拜、禪閤仰曰、老人布袴乍居拜、今日准彼乍居拜、但束帶、亦年來至于漢宣帝者舞踏、今年再拜、案周禮大祝職九拜、拜君無舞踏之故也、(九拜無舞踏、)

〔玉海〕嘉應三年正月一日丙子、今日日蝕有現否之論、遂不正現、乖曆家之術、叶算道之說、(宿曜道同之、)寅剋拜天地四方如恒、(昨日攝政被命之、有日蝕之論、現否雖知、此事如何云々、仍檢先例之處、長久三年雖致此論、尙有四方拜事、仍准彼例不止此事、)

○按ズルニ、日蝕ノ日、臣庶ノ四方拜ヲ行フコトハ、天部日篇日蝕條ニ引ク所ノ台記ニモ在リ、參看スベシ、

〔玉海〕治承元年正月一日、寅剋拜天地四方如常、(行事勾當源光季、吉服、去夜信季書進次第如例、)諒闇年無四方拜之由見寬德記等、(二東土記、)及雖然依天曆(九記)延久(御曆)嘉承(殿曆)保元(故殿)永曆(故攝政殿)等例、著吉服有此事、

言（宗氏東帶）參進候御簾（自母屋之簾木皆上之也）次頭義資朝臣於長押下獻御沓、則予先行（御方左）屛風（自餘人用之）入御御屛風內、次頭辨獻御笏、先是官儲之、藏人左近將監橘以盛傳之（內藏人兼井院帶也）令取御笏御之後、返給宮於藏人、次大納言閉御屛風、次御拜畢、亞相被開御屛風、次頭辨取御硯宮蓋（如上）參進、賜御笏返授藏人、次又頭辨取御沓（藏人傳之）獻之退下、（每度□居）次入御、予立渡御左方前行、（於階下先不昇也）大納言被候御簾（大納言出御井入御之時、兩度自簾中被落筒、無用心之見苦）次予奉返入御劍於簾中（被出之間也）退下、頭辨取御沓退下（自資子著御沓）大炊御門大納言以下則退出云々、參經之所、兵部卿永俊卿、右兵衞權佐永宣（已上父子奉仕御裝束也）等祗候、有一獻事畢云々、退出、于時夜未明、出御之間御隨身奉仕松明也、

〔薩戒記〕正長二年正月、院四方拜有無可尋也、近例間被略之也、

〔宗建卿記〕享保二十一年正月一日、今晚院中四方拜、應永廿五年之例也、女儒著衣事可書入、世話問答書之事可書入也、今是謂帶韋、

〔江家次第二十〕關白四方拜

追儺後、御湯殿、　鷄鳴出御（御裝束如式、位袍、庶人卯時、）　端笏北向、稱屬星名字七遍、　寅年人（祿存星字祿會子）　未年人（武曲星字賓大惠子等類也）　次再拜呪曰　賊寇之中、過度我身、毒魔之中、過度我身、毒氣之中、過度我身、毀厄之中、過度我身、五鬼六害之中、過度我身、五兵口舌之中、過度我身、厭魅呪咀之中、過度我身、萬病除愈、所欲隨心、急急如律令、　次北向再拜天（庶人乾向）　次西北向再拜地（庶人坤向）　次東向再拜　次南向再拜　次西向再拜　次北向再拜　庶人或說可加大將軍天一太白（以上各再拜）　氏神（兩段再拜）竈神（再拜）先聖先師（各再拜）

〔九條殿遺誡〕先起稱屬星名號七遍（微音、其七星、貪狼者子年、巨門者丑亥年、祿存者寅戌年、文曲者卯酉年、廉貞者辰申年、武曲者巳未年、破軍者午年、）

〔江家次第一正月〕四方拜事

庶人儀（卯時前庭敷座云々）　北向拜屬星、向乾拜天、向坤拜地、　次四方（自子終酉）次大將軍天一太白、以上再拜、（太白

院宮四方拜

出間所少蝕也、通憲云、全不蝕、當世之才士只此三人耳、因記所申備後鑑、又民或云有蝕、或云无蝕、昭十七年左傳正義曰、日食、王或有至社親伐鼓之時云々、以之案之、我朝日食不當其光、无所怖畏、然則日食、四方拜无其憚乎、兩才士不勘此文、不及見乎、自今已後、雖日食可有四方拜者也、

〔園太曆〕貞和五年正月一日癸巳、四方拜小朝拜、依日次不宜、今年無其沙汰、外記注進例如此、
治曆五年正月一日、被止四方拜、依代始九欠日也、　延久元年正月一日、被止四方拜幷小朝拜、依日次不宜也、　寬治元年正月一日、被止四方拜小朝拜、依凶會日也、○中略　承久四年正月一日、被止四方拜小朝拜、依代始日時不宜也、

〔續世卿記〕天保十一年十一月十九日乙巳、仙洞○光格崩御、　十二年正月一日丁亥、四方拜節會等、主上從舊猶御倚廬間不被行之、年始嘉儀參賀勿論止之、

〔實久卿記〕弘化四年正月一日辛巳、今曉內裏四方拜被設御座、無出御、諒闇中依日無出御旨被仰下、仍一儀無之、

○按ズルニ、諒闇必シモ出御ナキニアラズ、四方拜式ノ條ヲ參看スベシ、

〔兵範記〕仁平三年正月一日辛卯、天皇○近衞太上天皇○鳥羽○中略、四方拜如例云々、

〔弘安九年記〕正月一日戊辰、傳聞、本院四方拜、御裾大炊御門中納言御劔具顯朝臣御沓邦仲朝臣脂燭邦仲朝臣予著衣冠、辰剋參富小路殿、所々舖設以下其夜未改終之所々仰女孺、御所持等一々令奉仕之、

〔花園院御記〕元亨二年正月一日己巳、辰一點拜天地四方、如例年、屬星拜以後、四方拜以前、拜神宮如例、是文永六年以後深草院御所爲也、脫屣以後如此、

〔園太曆〕貞和二年正月一日辛巳、今曉上皇四方拜、大夫御簾依催申領狀、今朝及巳剋有其告、參仕云云、白晝出現大膽治事也、

〔薩戒記〕應永二十五年正月一日壬子、寅剋許著束帶不帶御劔參院、爲宮四方拜御劔也、昨日吉田宰相家俊以消息示送、四方拜可候御劔之由也、同終剋出御、御束帶階間先予懸御參進、賜御劔、出御間西間也、女房自簾中賜之、退候西方、大炊御門大納

天皇不出御

也　承保二（中宮亮穆、去年十二月廿六日、）

【御湯殿の上の日記】弘治三年正月一日、四方ばいあり、奉行權辨、御ふく藤大なごん、御まへしやうぞく永相朝臣、御れん御裾あつみつ、御さうかいつねみつ、しそく永相朝臣、六位ども不參也、

文祿四年正月一日、四はうばいあり、ぶ行右少辨つねとを、御れん御きよ左右大辨、すけたね、ぎよけんさねえだのあそん、もとつぐのあそん、ゆきながのあそん、しげさだのあそん、ためちか、のりみち、さねあき、もと久、しんくら人なり、御ふくとうさい將、はく三位、ひの御ざのぎよけん、御しやく、しきのはこ、きよくら人にながはしわたさる、（中略）四はうばいにしこうのおとこたちするにて御いはいあり、

【江家次第】（正月一）四方拜事

諒闇、設座不拜、（延久五年諒闇無御拜、依右大臣被申也、寛德同之、四條記曰、天暦年有御拜云々、此事有疑、九條大臣著吉服拜之、見被私記、）代初、忌欠日不被行、（治暦五年、應德四年凶會日設座、依幼主無御拜、○中略）御物忌時無御拜、但御裝束如例、（天慶七年○中略）幼主設座不拜（承平元年）東宮無四方拜、前朝之仰也、代始當欠日、右大臣被申云、可忌否條可依諒闇時候（不、）仰曰、諒闇時無拜、仍可忌、（治暦五年○中略）日蝕年例可尋、（延喜十二年日蝕、四方拜如恒、寅時日蝕例可尋、）設座臨時不出御例（天慶二年、同三年、應德二年、同三年、）

【日本紀略】（醍醐一）延喜三年正月一日癸卯、不拜、

【中右記】寛治三年正月一日壬申、今朝無四方拜、依幼主御時例也、　四年正月一日丁卯、四方拜間有御出、幼主無此儀、仍御元服後、初有此事也、

【台記】康治二年正月一日己丑、今日日食、（中略）稱四方拜事、撿先例、治暦四年雖日食有此事、見御暦、猶依有疑、去年仰大内記藤令明、文章得業生成佐、友業（无官六位）令勘申漢家之事、令明、友業申可有之由、成佐申可止之由、案之以得理因止之、但公家不被一定、隨當日蝕否可有廢務云々、稱四方拜如何由問右將軍、報云依日食可止故未見蝕否之前、不可有四方拜歟、因停止之、（中略）後日友業、成佐等云、見二

殿之由申、女中、催諸司了、少々參集之間、(主殿寮未參、木工寮掃部寮等已參云々、)申其子細、以藏人召女孺、(候內侍所云々、)渡御屏風、(藏人源富仲自御所中出之、金綠付御屏風一雙、大宋御屏風一枚、墨繪御屏風一枚、以上四枚也、)掃部寮於庭上敷之、御座(半帖也)三枚敷之、(敷樣見指圖抄)階間并左右上御格子之處、仰云、可爲階間許歟、依仰改了、暫申歲末之御禮、被召御前、條々有勅語之旨、年始公事一向無沙汰之間、堅被仰武家之間、四方拜并平座等可被行之由被申云々、珍重之由申入了、次御湯之後令著御裝束給、(源大納言參候)次出御、中將(宣親朝臣)候御簾、(宣親朝臣初夜之時分來宿、御裾取之樣、御簾卷之樣、巨細教訓了、)元長、獻御草鞋、言國朝臣候御劍、(相緣了)著御御屏風之內後、元長取御草鞋退入、持參御笏、(○中略)次有御拜、次入御如始、次退出、曉天之時分也、

〔二水記〕永正十五年正月一日辛丑、寅刻有四方拜出御、(○中略)雨儀也、軒廊下(東第二間南方)構御屏風、時剋出御簾中、先之御劍次將、脂燭殿上人等候簀子、(中院中將)通胤朝臣取晝御座之御劍、(六位藏人置之)於簀子蹲折、次左少辨資定參進褰御簾、供御草鞋、(今日職事一人也、依藏人置之、)執御裾、此時雅綱朝臣(位次通胤朝臣之上首也、於御簾無所存、不覺悟歟、如何、)橘以緒、藤原氏直等取脂燭前行、從階間出御、(舊儀三間上格子、近年階間一間云々、)經長橋紫宸殿西庇等渡御、(西階破損大概少也、依御草鞋ヲ脫テ階ヲ有降御、堅固之儀也、奉行當座故實也、)從御屏風東方入御、夜已欲明之間、不拜還御、令退出了、雨儀近年稀有之事也、抑御裾役之事、已爲關白之所役、五位職事不打任事也云々、資定今日公事之奉行初度也、於其身者當于時爲祝著者歟、

〔二水記〕永正十六年正月一日丙申、傳聞、有四方拜出御、其儀如例、御簾御裾等頭辨內光朝臣役也、御草鞋傍頭秀房朝臣役也、御劍重親朝臣役也、脂燭殿上人範久、源諸仲、藤原氏直等云々、還御已及晨明云々、抑穢中出御之事、舊冬被尋兩局之處、大外記師象、親朝臣准據之例一兩條分勘申之云々、太不分明云々、時元宿禰申旨無風聞如何、今度此事人々有議定、觸穢中有其例云々、又江次第中之例多端、兩局不見及之條不足言之由、或人語予了、誠不可說之事歟、

〔江家次第正月〕四方拜事(○中略)　內裏穢時猶被行例　應和三(中宮產穢、去年十二月廿七日、)延久二(件年代初最前之四方拜)

中、過度我身、五兵之中、過度我身、厭魅呪咀之中、過度我身、萬病除愈、所欲從心、急々如律令、

內裏式以下如此、所存又□□別、

一拜天地給事（各再拜）　向北拜天、（未詳）向西北拜地、（所存如此、或向西拜地、先規不同也、）

一拜四方給事（各再拜）　先東、次南、次西、次北、（說々不同歟、所存如此、）一

一拜山陵給事　兩段再拜（兩段之間有御揖）　若爲初度者可被略歟、聊存先規、但先例不同候上者可有時宜、（中略）○

一雨儀可爲弓場歟、可殊稱其所、

一御湯殿事、不憚歲下食先規也、

一出御儀（中略）（掃部寮設鋪道）　藏人頭候御裾、近衞次將候御劍、（置御座御劍）　侍臣等取脂燭、藏人二人持御笏并式筥等、開御屛風入御之間、藏人頭獻御笏、藏人置式筥於御座前、

一御拜次第　先著御屬星御座、正笏向北稱屬星名字給、（七星）次再拜、次稱呪文給、次又再拜、次著拜天地座給、向北再拜天、次向西再拜地、次各拜四方、（東西西北）次著御拜陵座、兩段再拜、（初年式殊略之也、可有時宜、）次入御、（職事給御笏）

此外御裝束以下事、行事藏人任例可申沙汰、別無所存、且又年々不同歟、

〔實隆公記〕文明七年正月朔日辛亥、傳聞、今朝有四方拜、奉行職事政顯也云々、亂後今年始而有公事、再興之面影、珍重々々、幸甚々々、一天之昇平、宜在今春者歟、

〔親長卿記〕文明七年正月一日辛亥、被行四方拜、（亂後諸公事停止、迄今年及此沙汰、珍重々々、）

〔晴富宿禰記〕文明十二年正月一日壬午、四方拜有之、此一事再興、此外諸事停止也、

〔親長卿記〕文明十二年正月一日壬午、寅剋許參內、（衣冠）召具元長、四方拜奉行之故也、主上（後土御門）○御寢、奉行令參了、剋限之由者可申云々、諸司未參、其間事不可被申、先剋限御湯事不遲々之樣可被仰釜

人（祿存星字會子）　卯酉年人（文曲星字微惠子）　辰申年人（廉貞星字衛不隣子）　巳未年人（武曲星字賓大惠子）　午年人（破軍星字持大景子）

次再拜　次稱呪（○中略）　次著御拜天地御座、向北再拜天、向西再拜地、次各再拜四方、（東西南北）　次著御拜陵御座（兩段再拜）　次入御、先返賜御笏、兩儀設御座於射場殿、經殿上々戶幷無名門出御、（○中略）

應司注進公家四方拜次第（元日寅刻）　御裝束儀（鷄鳴、掃部寮率仕之、）　清涼殿額間上格子、（依爲曉更、出御間一間上之、）　當階間庭上、立廻御屏風四帖、其內敷葉薦、其上敷長筵、供御座於三所、（北面）　南半帖一枚、（山陵拜料）　其北東方敷褥、（天地四方拜料）　其西敷半帖、（屬星拜料）　其北寄東立机置香、其西又立机置造花、其西又立机置香爐、書司女官供之、主殿女官供燭、自出御間至于御屏風下供筵道、　追儺之後、主殿寮供御湯、御帷內藏寮獻之、親王當歲下食猶供之、　時剋（寅）　出御、（○中略）　自額間（或南第三間）　下東階、令入御屏風、藏人頭候御褥、（頭不參者五位藏人）　近衞次將（縫腋）　取書御座御劒前行、令入御屏風給之間、獻御笏入御御屏風裏、（其後閉之）　先於拜屬星御座北面、稱屬星名、（七遍）　再拜呪曰、（○中略）　次北面再拜天、西北向拜地、　次拜四方、　次拜二陵、（於陵者隨時）　兩段再拜、（○中略）

內侍所行幸、幷四方拜說々不同事、可令注進之由謹承了、四方拜條々所見一通令書進候、非當職之間、出御次第者加斟酌、仍內々如此令注進候、若別勅候者重可作進候也、且可被得其意給候哉、（○中略）恐恐謹言、

極月二十六日　判

二條注進四方拜條

一御裝束事　行事藏人任例可申沙汰也、說々雖有不同事、延久御抄可爲正說、又雲圖抄所存無相違、但今年若爲最初者、可被略山陵御拜歟、聊有所見、雖無御拜猶儲其座、先規不同也、

一拜屬星給事再拜（本命星、當年星、各七返令稱名字給爲正說、）

一呪文事　賊寇之中、過度我身、毒魔之中、過度我身、毒氣之中、過度我身、毀厄之中、過度我身、五鬼之

(件燈書司女官供之)、拜天地四方御座在東、拜二陵御座當屬星御座在南、御裝束了、寅一刻奏事由、即御出、藏人奏御笏候、(作法在別)裝束訖後、未出御前鋪緣道、先是召仰掃部官人幷書司女官、從藏人所請作花料色紙卄枚、名香燈心油、折敷三枚、高坏一本、高机三脚等、先皇(○冷泉)御時件具等不傳來、仍假無其具、用土器折敷等、　先御西御座(屬星、有拜)北向稱曰、武曲星字賓太、即再拜呪曰、呪如例、(○圓融天皇生年未)　次御東(天地四方、無拜)北向拜天、西北向拜地、次四方、(自東始)　以上各再拜、合十二度、　次御南御座、(二陵、無拜)先向西方拜皇考、次向辰巳拜皇妣、

〔小右記〕治安四年正月一日庚寅、天晴雲收、星位分明、四方拜如恒、

〔明月記〕建暦三年正月朔日癸卯、曉更少將(○藤原為家、定家子)自內退出候四方拜御劒云々、其儀南庭供御裝束、立御屛風八帖、以西為口、棟基為家供御裝束、頭中將候御裾、為家取御劒前行、座御屛風口南方、(北面座)棟基獻御草鞋、頭獻御笏、藏人永光脂燭、御笏筥、式筥等一身勤仕、自餘六位不候云々、

〔吉續記〕文永五年正月一日、自去夜祗候、禁裏四方拜如法、寅刻、頭中將御裾、頭辨(忠方)御草鞋、御劒役實盛朝臣、光朝、予、六位等候脂燭、御拜座如常、撤山陵御拜座、拜龍顏退出、御湯帷奉行六位不下知、職事同不申沙汰之間、內々有御沙汰、若古物歟、如此事尤兼可尋沙汰、

〔園太曆〕觀應二年十二月廿六日、一條注進四方拜儀、　追儺之後、藏人召仰諸司御裝束、掃部寮清涼殿東庭當南第二間、去石階七尺許鋪葉薦、其上鋪長筵、(南北行)　其上立廻大宋御屛風八帖、(四宮藏人式四帖)其中設御座三所、　一所拜屬星御座(西北角、鋪淺黃緣半帖一枚、)　一所拜天地御座(東北角、鋪同半帖一枚、(東西設)其上敷拜、御座前立高机三脚、東机置香、中机置作花、置折敷居土高坏、左右机置燃燈、各置打敷土高坏、西机置香爐、)　一所拜陵御座(南邊、敷同半帖一枚)　自御屛風西到階下鋪筵道、上晝御座南第三間格子、為出御之道、(藏人置御笏幷式筥於拜屬星御座上、近代者御笏者於御屛風外、入御之間奉、)主殿寮供御湯、　寅刻出御、(○註略)近衞次將取晝御座御劒前行、藏人頭獻御插鞋、即候御裾、他職事等取脂燭祗候、入御之後閉御屛風、　先著御拜屬星御座、向北稱屬星名字、(七返)　子年人(貪狼星字司命神子)　丑亥年人(巨門星字貞文子)　寅戌年

四方拜例

持て候す、殿上人脂燭をもて前行す、東庭に下御なりて、兼て設けたる御屏風の内に入らしめ給ひ、御笏をめす、職事奉る、先屬星、次に天地四方の神祇、次に山陵など、何れも其方に向ひて御拜あり、此三所御座ごとに机を立て、香を燒き、華を立て、燈を供す、終りて入御なる前の如し、〇中略應仁大亂の後しばしは絕たりしが、文明七年再興せられたり、

〔年中行事秘抄正月〕元日四方拜事、寛平二年正月朔四方拜云々、向乾方拜后土及五星、見御記雪雨時於射場有此事、又須鷄鳴畢拜、已上見村上御記、

〔江次第抄一正月〕四方拜　四方拜緣起未明、但日本紀曰、皇極天皇元年八月朔、天皇幸南淵河上、跪拜四方、仰天而祈、〇中略又宇多御記云、仁和四年十月十九日、我國是神國也、因每朝敬拜四方大中小天神地祇、敬拜之事始自今度、一日無怠云々、拜四方之證如此、元旦四方拜事、始見于寛平二年御記、疑是濫觴乎、

〔公事根源正月〕四方拜〇中略此事いつ始まるともみえず、仁和五年〇寛平元年正月寅の剋に、天地四方屬星山陵を拜し給由、宇多の御門の御記にのせられたれども、濫觴とは見えず、また皇極天皇雨を祈給とて、南淵の河上に御幸有て、四方を拜し給ければ、雨五日まで降けるよし、日本紀にのせられたれば、是などをやはじめとも申べからん、

〇按ズルニ、上ノ三書皆宇多天皇ノ御記ヲ引ク、而シテ年中行事秘抄及ビ江次第抄ニハ、寛平二年ノ事トシ、公事根源ニハ、仁和五年卽チ寛平元年ノ事トス、何レヲ以テカ正トスベキ、姑ク共ニ錄シテ後考ヲ俟ツ、又皇極天皇ノ祈雨ノタメニ、四方拜シ給ヒシコトハ、元日ノ四方拜トハ其義自ラ異レバ取ラズ、

〔親信卿記〕天延元年正月一日、鷄鳴、四方拜事、其儀依立御屏風八帖、其內迫北立高机三脚花等、高机并鋪器等相求、仍究之、亦以東第一、燈香盛土器、居折鋪、第二居口明并作花、鋪高坏、第三如第一、以南供御半疊三枚、拜屬星御座在西、有得、

内ニ御座構、四方ニ案ヲ置燭ヲ立、上ニ火舍花置、掃部寮主殿寮庭燎立明沙汰之、内掌燈女孀勤之、

出御　御簾　關白或頭中將頭辨モ勤之　御裾　御劍　左右中將勤之　御笏　職事勤之

御草鞋　内豎奉之　脂燭　中將、少將、侍從、六位藏人勤之、奉行職事　假橋　修理職勤之　太宋屛風　出納勤之　御座莚道　掃部寮調進之　案　木工頭同　火舍　圖書頭同　布毯　内藏寮官人勤之　庭燎　主殿寮調進　立明　同勤之　脂燭　御藏調進　内掌燈　女孀勤之

御草鞋　内豎獻之

〔嘉永年中行事〕正月朔日四方拜　寅の刻の定なれば、とくより御ひるなる、常の御座にて先御手水をめす、釜殿御湯を運ぶ、女官取傳へて御湯殿を構ふ、御陪膳の典侍事具するの由を申せば、御湯殿に渡らせおはします、同人御湯帷を奉る、御湯終りて常御殿上段中央の御座に渡らせおはします、典侍袴をきて御鬢をかき御冠を奉る、垂纓紙捻を御かけあり、又御襪を奉る、下の大口ばかりをめす、御束帶あるべき料なり、典侍御前にて御笏紙を押す、次に御裝束を廣蓋に載ながら、下段の中央の南の方にて御服の人に授く、清涼殿迄は常の御袴を大口の上にめす、次に清涼殿へ出御なる、内侍燭をとりて御さきに行く、次に勾當内侍晝御座の御劍を持て參る、内侍御笏と式とを箱の蓋に載せ持て御供す、朝餉の御座に著御なりぬ、次に〇中略御裝束の後同所にて御淸手水供す、御陪膳御前に參り、御脇足を御前に置く、次御楾角だらいを供す、ぬきすを角だらいに引廣げ置く、是よりさき御手水の中に入楾の蓋を打返して、其中に深草土器ひとつを伏す、かはらけをとらせ給ひて、御口を三度すゝがせ給ひて後、土器をたらひの中へ拋させ給ふ、御陪膳楾を御手水の中より取出し、打返したる蓋をし、改めて御手水をかけ參らす、手拭には小鷹檀紙を用ふ、御手水女中障りあれば、内々の男方奉仕す、寅の刻許に額の間より御草鞋をめして出御なる、關白御裾に參る、不參なれば藏人頭つとむるなり中少將の人晝御座の御劍を持て參る、職事御笏と式の箱を

びやうぶ六ッをり、松竹鶴のゑかけるを二そう、さくよの板(尺餘)を御びやうぶにうちつけてひきかこみ、その中に大宋の御びやうぶ二そう(今にては雉の狩のゑやうにみゆる也、近頃にては、唐人打毬のかたちをかけるやうに、ある記に見えたり、)引廻らし、なふさは御かうしをあげ、かもりりやうむしろをしきまうけ、くらりやうの官人ふたんをしき、すりしきふたんの両わきを板もてうちおさへ、清涼殿よりかりばしの上におよぶ、もくりやうあんとうだい(案燈臺)をもふけ、づしよりやうくわしや(火舍)みつの案ごとにおく、御香爐ひとつ案におく、によじゆ御殿のせうとうさしあぶら、とのもりやうたてあかし、うちわらはそうかいをたてまつる、両武士(關東よりつけらるゝ)ていしやうのびんぎある所にかうずるなり、寅の一天にしゆつ御職事両人御さきにすゝみ、御びやうぶの両方を少しひらく、極臈しそくをとり、五位殿上人両人四位両人、ふたんの外御座右につき、頭の中將御劔、御前のかた西をかしらとしてもち、みななんぼくりやうれつ横行、(前行脂燭はゝかるゆゑなり)主上出御、關白あるひは頭の辨御裾、公卿殿上人衣冠供奉なり、其うちに御外戚たる老體の公卿殿上人衣一しほに御そばにそひてまゐらる、(これは享保五年の頃見侍し事をこゝにしるす、時によるべし、)天皇御びやうぶのうちに入らせ給ひて、職事御びやうぶの両はしを折ふさぐ、西の御脇供奉同公の公卿殿上人皆々かりばしを下り、いさごのうへに平伏し、御劔もてる中將、御びやうぶの両脇の職事両人のみ、かりばしに殘り平伏し、或は蹲居す、御劔此時は東頭にもつ、主上御拜のあひだ半時ばかりあり、(○中略)御はいをはりて御びやうぶの両脇をひらき、脂燭の殿上人極臈はじめのごとく下臈をさきとし、御劔東頭にして布莚の外をゆく、天皇入御ましく／＼、庭上の諸司御かまへをてつす、藏人御草鞋を階より內豎にさづく、內豎戸屋主にとりをさめしむ、かりばし、ふたん、えんどう、案とうだい、御びやうぶ等とりをさむ、立あかししめし、御にはのもろもろつかさたいさむ、(武家これよりさきに退出す)

〔官庭行職志〕正月元日寅剋、四方拜、清涼殿東階假橋ヲ懸、筵道布莚ヲ敷、庭上ニ出納大宋屛風ヲ立、

至御屏風西頭敷筵道、○中略

四方拜次第　主殿寮供御湯、近代主殿寮不供之、内々御沙汰也、但毎日之御湯從溫明殿供之、今日亦同前　鷄鳴、掃部寮奉仕御裝束、於清涼殿東庭、先敷葉薦、其上敷長筵、其上立御屏風、御屏風員數不定、設御座三所、委見繪圖　寅一刻出御、○註略　關白被候御裾、攝不參者、貫主勤仕之、　近衛次將取御劍、晝御座前行、主上御左横行　侍臣取脂燭前行、主上御右、下藹爲先、　六位藏人持御笏、極﨟申出御劍、御笏式筥等、勾當内侍於殿定所被傳之、於極﨟、極﨟令式筥下出納、御笏傳進次藏人、令召次藏人傳之　主上御服之間置御劍於晝御座、極﨟守護之云々、御屏風之中幣入御之時、授御笏於五位職事、則獻之、（中略）職事獻御笏之時、令御屏取收、還御之時亦如此、貫首候御屏風邊覆入御之體、此間御劍次將持御劍、候御屏風外邊、脂燭侍臣等廻打橋之北方居、

次御所作了還御、如出御、

〔故實拾要　三〕四方拜　是天子正月元日寅刻、清涼殿ノ東庭ニ出御在テ、屬星ヲ唱ヘ玉ヒテ、天地四方ノ山陵ヲ拜シ、年災ヲ除キ、寶祚ヲ祈リ玉フ御事也、此時清涼殿ノ東庭ニ修理職假橋ヲ設ク、掃部寮筵道ヲ敷ク、其上ニ內藏寮ノ官人布毯ヲ敷、御屏風ヲ立テ、內ニ掃部寮構御座、木工寮圖書寮安置火舍、造華燎（トウ）、庭燎、立明、主殿寮沙汰之、　同出御　御簾　御裾　關白役之、或頭中將役之、又御簾御裾關白役之トハ、天子出御ノ時、關白御簾ヲ被搖事也、又御裾ハ御裝束ノ裾也、是ヲ關白或ハ頭中將奉持之事也、　御劍　左右近衛中將役之　御笏　御草鞋　職事役之、內豎奉之、又御笏、御草鞋職事役之トハ、職事ハ辨官ノ事也、御笏ヲ持テ、御草鞋ヲ召サセ奉ル事ヲ役スル也、內豎奉之トハ、內豎ハ庭上ノ官人也、御草鞋預ル者ナルガ故ニ奉之ト云、　脂燭　四位五位ノ殿上人役之、御藏調進之、又脂燭ハ四位五位ノ殿上人、天子出御ノ時、御先ヘ脂燭ヲ以テ二行ニ列シ、横ニ歩スル義也、御藏調進トハ、御藏ノ官人ヨリ件ノ脂燭ヲ調ヘ上ルノ義也、

〔友俊記〕四方御はいの事　元朝子の刻にもよほされ、清涼殿の東庭いさごのうへ階前の中央に、朧晦の夕かたより、すりしきかりばし（假階）を階よりいさごのうへにかけおろし、すいぬい（出納）さたし、御

ひて御湯の冷暖をこゝろみ、事具するよしを申せば、御ゆどのへわたらせおはします、同人御湯かたびらを奉る、かう藥は今にあれど參る迄の事はなし、○中略刻限かちん參りてのち淸涼殿になる、內侍燭を持て御先に行、次に勾當のないし、晝の御座の御劒をとりて參る、御後には女中御ともす、何もはかまばかり著也、(けふより十日までは、常にはかまなはなたす、)○中略御裝束のち同所にて御きよ手水參る、先陪膳の人御前にすゝむ、手長御手水をもて參る、楾を御手洗の中に入楾のふたをうちかへして、其中に深草土器一ッ俯にかはらけをとらせ、たらひの中へ拋玉ふ、是より先にはいせんの人、楾を御手洗の中よりとり出し、うちかへしたるふたをしあらためて、御手水をかけ參らす、御手拭には大たかだんしを用ふ、(件の次第、御手水の時每度如此、)次に出御、御もや北第二間をへて、がくの間より出おはしまして、東階にかまへたる打板より、東の庭にくだらせおはしまして、天地四方を拜せさせ給ひ、四方拜のしだいは、今も古世のためしにかはらず、ゑるす事の多ければ、委記するに及ばず、四方拜をはり常の御所に還御なり、

〔近代年中行事細記〕四方拜催方條々(諸公事早參事、奉行外樣職事一例也、)

當日奉行職事候關白里亭、申可被候御裾之由、(關白爲不參、藏人頭勤仕之、)　次御劒次將、脂燭侍臣早參等以一通催之、(內々以白紙告之、折紙也、)三折、　當日御劒脂燭等之侍臣、記折紙備天覽、以御點催之、(右之輩現所勞者、重奏、其餘同右、)　于時脂燭侍臣等之員數應天氣、○中略　自承應至萬治寬文、新院御在位之頃、奉行職事散狀等直備天覽、不窺御劒之次將關白之餘事同前、○中略　脂燭之人數多少事、三人五人七人可從時宜、六位藏人脂燭勤仕之事、強非定儀歟、但近代六位江相觸也、或於禁中臨期催之云々、○中略　地下諸役　出納(淸涼殿御裝束井殿上等裝束)　掃部寮(鋪道布單井庭上御座御屏風等設之)　木工寮(掌燈脂燭御明御屏風花鑪庭燎上島燒之、御明花鑪、御屏風之內設之、)　女嬬(淸涼殿掌燈ヶ擬女嬬者、出納催之、前主殿女嬬、)　南座(燈階、近代前懸燭、甚非也、)　內竪(御草鞋)　修理職(打橋當日調之、○中略)

構庭上御屏風之事

往古需被用於大宋御屏風、依小近代用他屏風、奉行職事內々下知于極﨟、令渡御屏風、自中階下

天、次西北向拜地、次四方（自東始之）次南御座、（段）兩段再拜、次隨天氣藏人頭參進、開御屛風、給御笏、更給藏人、次入御、撤御裝束、

凡爲職事之頭已下皆悉祗候云々、事了之後各退出、六位下臈二人不出、

〔建武年中行事〕春をむかふるほどは、內わたりなべてことしげゝれば、いづくを初めなるべしともわきがたきやうなれど、ところ〳〵の御裝束ども、とのもりかもりの女孀共、さわがしくいそぎとゝのへたるに、追儺はてゝ、砌のともしびどもかすかに見えわたるほど、四方拜の御裝束いそがすめり、事行ふ藏人小舍人やうのものこえ〳〵に、ことにつきたるも、折から所得たりがほなり、大宋の御屛風庭に立めぐらして、御座を北面によそふ、主殿司御湯をくうず、（是よりさきに御ゆする有べし）御ゆどのはてぬれば、寅の時に御構の人めして御裝束たてまつる、○中略清涼殿の三間の格子をあげて出おはします道とす、（雨降ときは、御座を弓場殿にまうけたるによりて、額の間より出させ給ふ、額の間とは南より五間二間のそばなり、）筵道布毯をしきて屛風のもとに至る、うへのをのこどもしそくさす、近衞の中將御劒にさぶらふ、屛風のもとにて藏人頭御笏をまゐらす、先北辰を拜する座にて二拜、（屬星の名なとなふ）次に天地四方を拜する座に著き給ふ、御座のうへに褥をしく、北向にて天を拜し、乾にむかひて地をはいす、子のかたより卯午とり四方各皆二拜なり、御座のまへに白木のつくゑに香花燈を置り、北辰を拜する座に式筥を置、（くら人是を置）若二陵あらば、うしろに又一帖是をしく、おの〳〵兩だん再拜なり、御座は皆兩面のみじかきたゝみなり、御拜はてゝ入らせ給ふ、藏人頭御さうかい御笏を給はる、

〔後水尾院當時年中行事〕（上正月）朔日、四方拜とらの一刻なれば、とうより御ひるなる、常にならしますの方にて先御手水まゐる、はいせんの上臈はかまばかりきて、御手洗をもてまゐる、はいせんとりて御前におく、次御うがひ楾等の物をもて參る、御手水をはりて後御湯を供す、是より先にかなへと御ゆをはこぶ、刀自取傳へて御ゆどのをかまふ、御手水のはいせんの人、御ゆどのにむか

下　毀厄之中、過度我身、（內裏儀式作危厄）　五鬼六害之中、過度我身、（內裏儀式作五厄）　五兵口舌之中、過度我身、（內裏儀式在五厄句上）　厭魅呪咀之中、過度我身、（內裏儀式無此句）　萬病除癒、所欲隨心、急急如律令、　次於拜天地座、北向有拜天、（庶人向乾）　其陽起於子、陰起於未、至於戌、五行大義云、土受氣於亥云々、以陽氣所起爲天、以陰氣所起爲地、尤可然歟、又皇天上帝在北、仍天子北向拜之、庶人不拜天神、又可異一人儀、仍向乾坤拜之耳、次西北向再拜地、（庶人向坤）　次東向再拜、（九條年中行事起子終酉、子是十二神之始、雖非無所據、內裏儀式已依、次拜四方者、其四方是起東也、）南向再拜、西向再拜、北向再拜、　次於南座向山陵、（每陵兩段再拜）　事畢開御屛風、還御、所司撤御座等、

〔江次第抄一正月〕四方拜　入內裏儀式　口傳云、內裏式四方拜篇、插夾竿置宮蓋、不可并宮由也、內裏式上中下、嵯峨天皇弘仁十二年、右大臣藤原冬嗣等奉勅撰、淳和天皇天長十年、更命右大臣淸原夏野等詳加增損、然此書不載四方拜、恐是至延喜式增入者歟、今案、內侍司式有四方拜篇、則延喜年中撰也、今謂之乎、

〔五行大義四論七政〕黃帝斗圖云、一名貪狼、子生人所屬、二名巨門、丑亥生人所屬、三名祿存、寅戌生人所屬、四名文曲、卯酉生人所屬、五名廉貞、辰申生人所屬、六名武曲、巳未生人所屬、七名破軍、午生人所屬、

〔雲圖抄正月〕正月正朔寅剋四方拜事（○圖略）

一所拜屬星之座前燒香、置花燃燈、

一所拜天地之座、置花燒香、　以上二座鋪半帖、拜天地之座別敷褥、件褥紫絹也、或屬星座敷褥、

一所拜陵之座　件座、或與星座平頭敷之、

次第（口傳曰、內裏式四方拜、屬插夾笏、秘說云々、或又前日夕獻、或於御所書呪文押御笏云々、可隨時議云々、不及遲明之時、或候指燭、）

追儺畢、奉仕御裝束、（行事藏人不脫裝束例也）剋限奏事由、先供御浴、出御、（御束帶入御之間、開御屛風四口、藏人頭候御下襲裾、候御草鞋、藏人二人候御笏并式御筥、近衞司候御劍、）次獻御笏、（頭傳獻之）先御西御座、（屬星、無褥）北向稱屬星名、次再拜、次呪、次東御座、（天地四方、無褥）先北向拜

再拜天、次西向拜地、次拜四方、次拜二陵、兩段再拜、

裏書 或記云、設御座三所、一所拜屬星之座、座前燒燃香、置花燈、一所拜天地之座、座前置花燈香、(已上二所、鋪短疊、拜天地座別鋪茵褥、)一所拜陵座、(鋪疊、)

延長九年正月一日、掃部奉仕、四方拜御裝束立御屛風八帖、鋪御座三枚於其內云々、于時不拜四方給、仍不著此座、○中略

天德五年正月一日、四方拜設二座、仰云、一座拜陵設二所失也云々、香爐奩具納溫明殿、

康保二年正月一日、依式可設三座、而四所失也云々、香爐奩具納溫明殿、

〔江家次第 正月一〕四方拜事(正月一日寅一刻)

追儺後、主殿寮供御湯、(今案、雖當歲下食日蝕猶供、前物御湯也、近例御帳內藏寮以新獻之、)鷄鳴、掃部寮奉仕御裝束、於淸涼殿東庭先敷葉薦、其上敷長筵、(南北妻、)其上立御屛風八帖、(太宋、或四帖云々、不可然、往年月令御屛風也、近代無之、)設御座三所、(其副北屛風立机、南設件御座、)前一日、書司執所請紙脂燭香等、(藏人所也、)一所拜屬星座、(在西、)座前机燒香、置華燃灯、(件灯机上更又置折敷高坏、其上居之、)近例拜天地座前机亦燃燈、(件机爐坏等在圖書、)一所拜天地之座、(在東、)座前机置華燒香、(其香花各盛中垸、)以上座鋪短帖、拜天地座別鋪褥、或書云、書司立平文高机二脚、又御机一脚在御座右、藏人監臨之後置御笏、內裏式在南、近例在中、一所拜陵座、(鋪疊、香爐奩具納溫明殿、西宮抄物云、香爐奩云々、此亦不限陵座、)天祿四年記云、北御屛風前立高脚三脚、供御明作花等、近例東机置香爐、自中階下至御屛風西頭、敷筵道、上南第三間、爲御出路、(或上額間、或上晝御座間、)寅一刻出御、(黃櫨御袍、)藏人頭候御裾、近衞次將取御劒前行、(入屛風給之後、候屛風外、)藏人持御笏、(五位、)持式筥、(蓋、入內裏儀式、六位以上捧舊記、先蹤似可然、近例藏人候、如此、侍臣等取脂燭、六位候仙華門邊戶下、備非常、)入御之間獻御笏、閉御屛風、次皇上於拜屬星座、端笏北向、稱御屬星名字、(七遍、是北斗七星也、)子年貪狼星(字司命神子)丑亥年巨門星(字貞文子)寅戌年祿存星(字祿會子)卯酉年文曲星(字微惠子)辰申年廉貞星(字衞不隣子)巳未年武曲星(字賓大惠子)午年破軍星(字持大景子)次再拜呪曰、○註略賊寇之中、過度我身、毒魔之中、過度我身、毒氣之中、過度我身、(內裏儀式、在危厄句、)

四方拜式

四方拜といふ事は、元正寅の時に、すべらぎ屬星を唱へ、天地、四方、山陵を拜し給て、年災をも拂ひ、寶祚をも祈申さるゝ儀にて侍にや、○中略むかしは殿上の侍臣なども四方拜をばまけるにや、近頃は內裏、仙洞、攝關大臣家などの外は、さることもなき也、○中略屬星を拜して災難をのぞく趣は、天地瑞祥志といふ書にみえたり、

〔江次第抄正月一〕四方拜　拜屬星之由、載于天地瑞祥志曰、凡人有危難病苦之日、取人所屬星五穀等、各食二七枚、以井花水、日未出之時、向東再拜、一切難苦皆消滅、及口舌縣官皆解消也、

〔年中行事歌合〕一番　左持　四方拜　女房
すべらぎの星をとなふる雲の上に光のどけき春は來にけり○中略
四方拜と云事は、○中略頌文などおほく侍れども、それまでは不及注、今星を唱ると詠は、當年の星本命星を先七返づゝとなへ給事にやとぞおぼゆる、

〔內裏儀式〕正月拜天地四方屬星及二陵式第一
鷄鳴、掃司設御座三所、一所此拜屬星之座、座前燒香置花燃燈、一所此拜天地之座、座前置花燒香、以上二座鋪短疊、拜天地座別鋪疊、一所此拜陵之座、鋪疊、天皇端笏北向、稱所屬之星名字、當年屬星名祿存字祿會、此北斗第三之星也、再拜祝曰、賊寇之中、過度我身、毒魔之中、過度我身、危厄之中、過度我身、○危以下八字、據一本補、毒氣之中、過度我身、五兵口舌之中、過度我身、五危六害之中、過度我身、百病除愈、所欲從心、急々如律令、次北向再拜天、次西北向再拜地、以次拜四方、次端笏遙向二陵、兩段再拜、訖掃司徹御座、書司徹香花、

〔延喜式掃部三十八〕元日平旦、設奉拜天地四方御座、前庭鋪長筵、立御屛風、三所敷半帖、

〔西宮記正月上〕四方拜、藏人行事、下雨時於射庭殿有御拜、追儺後、主殿寮供御湯、鷄鳴、掃部寮敷御座於清涼殿東庭、立御屛風四帖、設御座三所、北面一所拜屬星、一所拜天地、一所拜陵、每座有香花燈、主殿寮供燈、女官供作花香、盛香花杯、爐机等在圖書寮、紛失後用土器類也、　藏人奉御笏候式、○中略次第如式、　北向稱屬星名再拜、次呪、　次北向

古事類苑

歲時部五

四方拜

四方拜トハ、正月元日寅ノ剋ニ、天皇其年ノ屬星〈屬星ハ北斗七星ノ中ニテ、本命ニ屬スル星ヲ云フ、〉及ビ天地山陵等ヲ拜シテ、年災ヲ禳ヒ寶祚ヲ祈リ給フ儀ナリ、清涼殿ノ東庭ニ屛風ヲ立テ繞ラシ、其内ニ御拜ノ座三所ヲ設ケ、机上ニ燃燈ヲ供シ、剋限ニ至リ天皇黃櫨袍ヲ著ケテ出御アリ、先ヅ屬星ノ名ヲ唱ヘテ之ヲ拜シ、次ニ天地幷ニ東西南北ノ四方ヲ拜シ、最後ニ山陵ヲ拜シテ還御シ給フヲ例トス、此事モト我國固有ノ朝儀ニアラズシテ、宇多天皇ノ寬平二年〈或ハ元年トモ云フ〉ニ始リ、遂ニ歷朝歲首ノ恒例トナル、足利氏ノ中葉以降、皇室大ニ衰フルニ及ビテハ、諸國ノ兵亂、或ハ用途ノ不足等ニ由リテ、他ノ朝儀ト共ニ久シク中絕セシガ、文明七年ニ至リテ之ヲ再興シ、爾後漸ク之ヲ行フコト、ナレリ、凡テ此式ハ天皇ノ代始ニ當リ、日次不吉ナルカ、或ハ天皇幼少ナル時ハ、只御拜ノ座ヲ設クルノミニテ出御ナキヲ例トス、其他諒闇、日蝕等ノ時ハ、或ハ拜アリ、或ハ然ラザルコトモアリテ、時宜ニ由リ一定セズ、

院宮、及ビ臣庶モ亦四方拜ヲ行フ、其作法大抵上ニ同ジ、但シ臣庶ハ、天地、四方、屬星、墳墓ノ外ニ、氏神、竈神、先聖、先師等ヲモ拜スルヲ常トス、

名稱

〔增補下學集上一時節〕四方拜〈シハウハイ〉〈正月一日也、江帥記云、鷄鳴於二清涼殿東庭一有二此事一、〉

〔公事根源正月〕四方拜　一日

〔清白士集十三元號略二〕永。鎮。　日本未知何主、明正德七年、日本入貢、南京禮部司務陳瑞問其年號、乃是永鎮八年、其改元當弘治十八年、

○按ズルニ、明ノ弘治十八年ハ、我ガ永正二年ニ當レリ、

〔清白士集十三元號略二〕永保　永久　永萬　永。然。　日本四號、未知何主當宋何代、

○按ズルニ、永保ハ白河天皇ノ時ノ年號、永久ハ鳥羽天皇ノ時ノ年號、永萬ハ二條天皇ノ時ノ年號、唯永然ノ號ノミ、我國嘗テ聞カザル所ナリ、

去ル文政十三寅年十二月十六日、天保與改元有之候御觸有之候已後、右年號國中取用罷在候處、其頃年號之儀ニ付、種々風說も有之候得共、天保與申文字世界ニ應じ候哉、今辰年迄十五年相續キ、右年數之內凶年も有之候得共、天保十亥年々諸國豐熟ニ相成、殊更世上通用之金銀も保字金銀通用之儀被仰出、又は天保通寶當百錢も新規御吹立被仰付候程ニ而、天保與申年號者世界ニ應じ候哉之由、尤京都者御代被爲替候由取沙汰有之候故、當夏中より年號改元可有之旨、市中專ラ申觸シ候得共、何之御沙汰も無之、既ニ來ル巳年新暦も天保十六年與御免有之、新暦開板ニ而賣出し候、然ル處當辰十二月ニ相成、彌年號改元有之趣市中へ流申觸し候、右虛ニ乘じ、何者之存付ニ候哉、同月四日五日之頃、日本橋邊、傳馬町邊、其外辻々ニ而名住所不知もの兩三人宛申合、夜分無挑灯ニ而、改まつた年號が四文與申立賣致候處、市中之者何と相成候哉與買候處、改。政。之由爲見候ニ付、全如何之贋物僞筆ニ付、貰ひ張置候、文字さへもよみ兼候小紙ニ有之者、改政にも可有之哉、迚も御觸無之內者正字ニ候共可用儀ニ無之處、太切之年號取拵もの賣步行候と申者、不屆なる者之由風說有之候、乍然餘リ之事故歟、其節御捕ニ相成候樣子も不承候、此上如何可有之哉與、其頃之風評書留候處、十二月十三日弘化與改元有之旨御觸ニ而、年號彌治定致候、右御觸書出候夜も、早く承候もの之思ひ付ニ而、弘化與認申小紙、端々ニ而未ダ行屆不申場所賣候由、是以不埒成由申候を承候、

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月二十四日、奧羽ニ於テ改元ノ說、年號延。壽。と改元ありしとの風聞盛なりと雖も、未だ確證を得ず、

〔清白士集十三 元號略二〕治。象。　日本（未知何主、癸辛雜識前、楊和王壞菴中藏日本備度曆、有此號、）

○按ズルニ、治象ノ次ニ治承ヲ擧ゲ、日本高倉院天皇ト註シタレドモ、我國ニ治象ノ年號アルヲ聞カザレバ、治象ハ治承ノ誤ニシテ同號ナルベシ、

〔紀伊國名所圖會三編二伊都郡〕地藏寺 四福寺に隣る、寺内に古き石燈籠の柱基を納む、(中略)其銘眞中に光明眞言講中建立と書し、左右に大。道。元年七月吉日と書す、長は一尺八寸ばかり、廻は一尺七寸ばかりあり、

傳へいふ、大道は大同と同音の字を用ひたるにて、此石は弘法大師漢土より歸朝のとき建し所なり云々、今按るに、隣寺の石燈籠の正平の銘と較ぶるに、字體石質稍新しければ、決して千有餘年の物にあらず、此頃友人の筆記を閲するに、異年號を載たる中に、越後國蒲原郡佐所村の吏民某の先祖石井彥七に賜ひし文書に、大道二年八月二日源吉次草名とある由を載す、此碑即其前年なれば、大同にあらざる事益明なり、彼二年の文書は元弘建武の後の物といへり、是によりて按るに、南朝御和睦の後嘉吉年間、南朝の遺民義有王を擁して兵を本國に移し比、私に建る所にして、彼天靖などいふ年號の類ならんか、猶後なるか、明證なしといへども、南朝に奉仕せし人の子孫等、前朝の微運を憤りて、當時の年號を用ふる事を快とせずして、私に建たる號なるべし、今偶北越南紀に此年號を記せる物の存する事奇といふべし、

〔古今金工便覽下〕信家 増田明珍、出雲守紀宗介十七代、左近將監、永正、享祿、大永、弘治、天文、上州白井住、又甲州府中住、大隅守覺意入道武田晴信侯ノ諏訪法性ノ兜ヲ作ル、コノ安家ト云、後ニ晴信ノ一字ヲ賜リテ信家ト銘ス、○中略

寶。壽。二年甲午正月日　明珍信家花押

○按ズルニ、甲午ハ天文三年ニ當レリ、

〔逸年號考〕寶壽二年 鮫金寶塔銘

寶塔銘に、奉納大乘妙典六十六部、雲州之住周慶、寶。壽。二年今月今日、この寶塔、天明二年壬寅三月十一日、信濃國佐久郡上畑村にて堀出す所なるが、同時に、天文廿年今月今日、信州住人順慶と銘ある經筒を堀出せり、其内に、陶にて三寸ばかりの甲冑を着たる人形、石帶一曲玉の類あり、とあるを以て考ふるに、この天文廿年を、出雲國にて寶壽二年と云る事ありしにもやあらん、

〔續雨夜友五〕年號改元以前紛敷年號市中賣歩行候聞書

麻郡新宮の神符の銘二ッを載す、其一に、會津新宮大勸進僧淨尊證一、地頭代左兵衛少尉荻原知成、〇成、本書作ㇾ盛、小寺宮預所代右兵衛少尉平國村、彌勒元辛卯二月二十二日とあり、其二に、大勸進僧淨尊、横三郎、壬生廣末、會津新宮、彌勒元辛卯二月廿二日とありて、辛卯は享祿四年也、永正中彌勒の號ありしを、こゝに至りて更にその號を用ひしものと見ゆれど、この度は廣く行はれざりしにや、他書に於て見る所なし、

〔僞年號考〕蛯川氏所藏年代記に、天文九庚子の頭書に、庚子命祿元年に成、又壬寅歸二天文十一年一とあり、これによれば天文九年始めて命祿の號ありて、十年を命祿二年として、十一年には其號を止めしと見へたり、本土寺過去帳に、妙了命祿二正月廿一日とあり、以上の三號皆關東僞間の用ひし所にて、もと佛家より出たり、故に其號多くは佛寺の記錄器財に存せり、鹿島の神符に彌勒の號ありしと云へるも、この神宮中古より兩部となりて、神宮寺以下社僧多くあれば也、塔寺村八幡長帳も社僧の記せしものなれば、福德の號を載たり、蛯川年代記も、もと前に引證するもの皆僧家のもの也、

〔海錄十五〕ある人、和州にて新撰字鏡の古寫本を見たりしに、〇中略その末に、法隆寺一切經と楷書にてかきし印記ありといへり、またおなじ人の古寫經の零本を得たりしに、その奥に、

論第一卷同學抄破我數論　俱生分別時論

永。福。丁酉七月三日於二法隆寺東院花園院一書寫

執事　沙門　快堂

傳　快辨

この僞年號、いづれの頃にや未詳、その紙質字體等を見るに、鎌倉末足利比のものとも見ゆるよしなり、

〔逸年號考〕彌勒二年丁卯〈下總國野田里土中所ニ掘出ニ尼妙心墓碑銘、近江國石山寺順禮版、甲斐妙法寺記、〉順禮版に、甲州巨摩郡布施庄小池圖書助、西國卅三所順禮聖山旨、彌勒二年丁卯六月吉日〈此札は銅の板に彫付たるものにして、石山密藏院僧正尊揚して所〃に顯なり、此外に明應天文年中の札若干枚ありとぞ、〉とあり、穗積保云、前條に記せる彌勒元年辛卯と、此二年丁卯と支干相違したれば、同時にてはあるべからず、文安四年の丁卯か、永祿十年の丁卯なるべし、圖書助と云名民間にはあるべからず、もしくは吉野の朝廷に仕奉し人の流浪なしたるか、又は足利の季世は天下大に亂れて、官家の人々諸國に緣を求め流客となり玉ひし事多くありければ、若くは京家の人の甲斐國に住したるならんか、永祿十年の丁卯ならば、武田家の侍の中に小池主計助〈山縣衆〉小池玄蕃など云人あり、〈甲陽軍鑑にみえたり〉此氏族の中にて隱遁したる人にもあらんか、或人云、關東邊の古刹過去帳に、彌勒の年號ありと云ふ、寺號詳ならず、追て尋糺すべし、參河萬歲の詞に、彌勒十年酉の年と云事を歌ふと聞り、これらも何ぞ據あるべし、後考を俟と云り、

〔僞年號考〕常陸國六段田村六地藏寺惠範が諸草心車鈔卷二の篇、是に於田野不動院玉幡之供養と題せる願文の末に、彌。勒。二年二月六日とあり、永正三年十一月の願文、同五年三月の諷誦文、同四年八月の願文等を載たり、因て永正中にこの號ありしをえれり、さて永正の何年にこの號ありしと考るに、本土寺過去帳に、日富彌勒元丙寅十一月とあり、丙寅は永正三年也、さらば是年始めてこの號ありて、四年丁卯まで彌勒の號ありしと見へたり、一說に、丁卯元年に作るものあり、本土寺過去帳に、妙春彌勒元丁卯十一月とあり、自相齟齬せり、恐らくは是にあらず、こゝの元丁卯は二丁卯の誤と見えたり、鹿島の社家禰宜が家にも、彌勒の號を用ひたる神符ありし由なれど、近年燒失せしと言へり、又今の世に萬歲丸が、美祿十年辰の歲と言へる事をうたへるは、陰陽者流の說に出たる物にて、こゝの彌勒と音同じけれども、其義は同じからず、會津舊事雜考に、耶

昧、不ㇾ似ㇾ近世之人所ㇾ爲、疑是當時當ㇾ有ㇾ職之人乎、然治ㇾ邦國ㇾ官、所ㇾ謂上古有ㇾ下司庄官、無ㇾ地頭者、文治始賴朝自ㇾ補ㇾ日本國中總地頭ㇾ後、庄園置ㇾ地頭ㇾ云、未ㇾ知ㇾ承安之頃、地頭之稱有無ㇾ

同神器曰

大勸進僧淨尊　橫三郎　壬生廣末

會津新宮

彌勒元年辛卯二月廿二日

右橫三郎云者未ㇾ詳、然不ㇾ似ㇾ近世稱名ㇾ且盛衰記、此邊武士有ㇾ橫新大夫者ㇾ若彼宗族乎、二件事跡、雖ㇾ未ㇾ詳、書法不ㇾ似ㇾ近世者、故記備ㇾ好事士參校ㇾ云、

〔逸年號考〕彌勒元年陸奧國耶麻郡新宮神器銘

越後の穗積保が云、彌勒元年辛卯を以て承安元年の辛卯なるべしと云は、承安二年民間訛言して、泰平の年號を唱へたるも同じ事にて、此時平相國入道權を專らにして朝廷を蔑にし、人民背きて彌勒の出世を願ひ、或泰平の時を思ひ、民間に流言して、平氏の亡べき先兆と云て、然るべけれども、承安の頃には地頭の號なければ、此年の辛卯にては決てあるべからず、鎌倉時代の辛卯の年にして、寬喜三年の辛卯か、正曆四年の辛卯か、正平六年の辛卯ならんか定がたし、もし正平の辛卯なれば、當時天下大に亂れて、南北兩年號並行はれたる故に、かゝる異年號も出來たるならん歟と云り、されど地頭の稱は、河內國小松寺緣起保延五年奉賀帳寄附名簿に、交野郡領家代蓮覺房、高宮鄕地頭代宗時、田原鄕地頭代僧道印、寺村鄕地頭代蓮信、同鄕下司代信教、田原鄕公文代教智、廐山鄕下司代西信、甲賀鄕目代定信云々とあるは、文治より四十六年前にして、承安二年より三十三年以前に係れり、〇下略

〔妙法寺記上〕永正四丁卯　彌勒二年丁卯

運を變せんが爲に、僭家漫に福德、彌勒、命祿等の號を設けしを、頑民年號の重事なるを志らざる故に、猥に流傳せしもの也、武家の記錄に是號を用ひし事なきは、士大夫以上に及ばざりし事亦以て見るべし、是號豆相等に限る、この故に今に至て、これを關東の僞年號と稱すと云、

〔逸年號考〕福德元年庚戌 常陸赤濱妙法寺過去帳

甲斐妙法寺記、延德元年の下に、元年に係けたるは誤にて、下の福德二とあると、互に文字の錯亂したる也、この元を二とし、下の二を元に作るべし、京に王崩御とて 王崩御は足利將軍義政の薨を誤りしとみゆ、 福德二庚戌年と年號を改る也、二の元なること、下文に明かなり、○中略

福德二年辛亥 鎌倉光明寺額裏書、新編鎌倉志、鶴岡八幡宮座不冷所著到軸、赤濱妙法寺過去帳、

鎌倉光明寺額裏書に、後土御門院宸筆福德二年亥九月吉日、また鎌倉鶴岡八幡座不冷所著到軸書に、福德二年正月一日とあり、○中略 さてこの庚戌は延德二年庚戌、辛亥は延德三年辛亥にあたれる事、妙法寺過去帳、延德二三年の旁書に、福德元福德二とあるにて明らかなり、

〔會津雜事考 二〕承安元年辛卯

耶麻郡新宮神器銘曰

大勸進僧　淨尊證一

會津　地頭代　左兵衞少尉藤原知盛

小守宮預所代右兵衞少尉平　國村

新宮　彌。勒。元辛卯二月二十一日

伏案、人王三十七代孝德帝之時、始自有曆號以降、終無有彌勒者、且自有曆號後大歲在辛卯者、四十代自天武帝朱鳥五年辛卯、迄慶安四年辛卯、凡十餘回、其中當曆元年者、六十代朱雀院承平與茲歲、徒兩回耳、然彌勒者可茲歲乎如何者、於去年庚寅、九月櫻梅桃李皆華也、量下愚之輩、相謂可言彌勒出世之先兆也、幸今歲帝者改一元、故爲俗戲可言彌勒元年、然以神器不謹、後鑑如此記乎、細於書法

に、辛亥を福德元とするものあり、蜷川氏所藏年代記に、延德二庚戌の次、明應壬子の前に、福德辛亥とかゝげたり、又本土寺過去帳にも、妙生尼福德元辛亥二月朔日、匝嵯道高禪門福德元辛亥九月十七日、同鏡林德福德元辛亥八月十八日、禪師阿日應福德元辛亥十一月廿四日とあり、この二書辛亥を元年としたれ共、この年代記は年を追て記せしものにて、改元の年迄は前の年號に從ひ、翌年の所に改元の號をかゝげし例あれば、こゝも其類にてありけんも知られず、又過去帳も月相齟齬して、前に載たる所は庚戌元年とし、こゝに引たる所は辛亥元年に作りたれば、二說の內何れか誤なる事は論なしさらば諸書にかなへる庚戌元年を以て是とすべし、又一說に、壬子を元年とするものあり、本土寺過去帳に、差姓入道福德四乙卯年七月十二日とあり、乙卯は明應四年也、この乙卯より逆算するに、元年壬子にあたれり、然れどもこの過去帳齟齬多く、且他書に於て元年壬子に作るものなければ、其誤たる事明なり、又思ふに、明應四年に至りて、たま〳〵福德の號を用ゆべき事有けんに、其年迄連續して用ひざる號なれば、明應の四年をとりて福德四乙卯と記せるものにてもあるべし、妙法寺過去帳に福德二あり、又關東の俗諺に、僥倖を得たるを福德の三年めと云ひ、本土寺過去帳に、妙泉福德三十二月四日、妙正福德四年正月六日とありて、五年以後の號をうけたるもの見へず、これを以て考れば、福德の號四年行はれたる事明也、さらば延德二年庚戌に始まり、明應二癸丑に止まりしと見へたり、

〔僞年號考〕應永中上杉禪秀の亂ありてより、關東穩ならず、既にして京鎌倉の二將相合はざるに及で、幕府の令する所鎌倉これを奉せず、年號は天下の大義、然れども或はこれを拒て用る事無に至る、其甚しきに及で、俗間に僞年號と稱する者出るに至る、所謂延德中に福。德。の號なり、凡て〇て下（原二五字）ゑ年を經たり、永正中に彌。勒。の號あり、凡て二年を經たり、享祿中に更に彌勒の號あり、天文中に命。祿。の號あり、凡て三年を經たり、蓋當時兵革相つぎ、蒼生安住する事能はず、災を以て歲

シタル年號ナルベシ、上島下島氏ハ、當時金藏主ヲ擁シタル徒衆ナラン、

〔妙法寺記上〕延德元庚戌　京ニ王崩御トテ福德二庚戌年ト年號ヲ改ル也、殊ノ外ニ大飢饉而、其年ノ內ニ米ハ七十、大豆六十、粟ハ更ニ無シ、牛馬渴死ル事大半ニ越タリ、人民飢死コト無限、

〔昆陽漫錄〕福德

相州鎌倉鶴岡八幡の座不冷所(鎌倉志云、座不冷所ハ回廊ノ東方にあり、天下安全の御祈願所にて、十二坊輪番に一晝夜づゝ佛經な讀誦するゆゑ、座不冷行法と名づく、或云く、十二坊一時づゝ勤むるなり、)の著到の軸に、福德二年正月一日と彫りてあり、其文左のごとし、同所光明寺にも、祈禱の額の裏に、福德の年號ありて、後土御門院の勅筆と云ふ、

聖觀音供

不動供

福德二年正月一日

我國福德の年號なけれども、後土御門院の勅筆と云ふは、福德の年號しばらく用ひられ、改元ありたれども、應仁兵亂の時ゆゑ、史官失して書せざるにや、

〔僞年號考〕按に、常陸國赤濱村妙法寺過去帳に、延德二年庚戌の傍に書して云く、福德元、又同三年辛亥の傍に福德二と注せり、陸奧國河沼郡塔寺村八幡宮長帳に、文明十九年丁未の次、延德四年壬子の前に、福德二年辛亥とかゝげて、其下の注に、貞和二年丙戌年より福德二年辛亥年に至て一百四十七年也とあり、依て延德三年辛亥より逆算するに、貞和二年丙戌に至て、實に百四十六年也、然れば長帳の算數一年をあやまるといへども、二年辛亥とするもの妙法寺過去帳に合する時は別に論なし、下總國平賀村本土寺過去帳に、妙本入道福德二辛亥八月十七日とあり、新編鎌倉志に、光明寺に祈禱の二字を題せる額あり、其裏に福德二年辛亥九月吉日とある由を記せり、これ等の跡書を合せ考れば、延德二年庚戌に始めて福德の號を設けし事ありしは明也、一說

年を壬申に係て記せる書多し、(○下略)

〔帝王編年記〕(十天武)白鳳十四年(備後國獻白雉、仍爲瑞改元、)

〔古今著聞集〕(二釋教)當麻の寺は、(○中略)天武天皇の御宇白鳳十四年に、高麗國の惠觀僧正を導師として供養をとげらる、

〔百練抄〕(八高倉)承安二年閏十二月、近日諸國稱有改元之由、公家被誡仰、(其號泰平、元年云々)

〔寶簡集〕(十八)僧鍐阿謹

寄進　手印(○阿鍐)

金剛峯寺鎭守天野宮八講理趣三昧幷神事等用途米事(○中略)

和勝元年六月廿五日　手印(○阿鍐)　僧鍐阿

○按ズルニ、高野春秋ニハ和勝元年ヲ以テ建久元年ト爲セリ、

〔法隆寺文書〕(九)佛□之時□□□□□如件

迎雲元年正月廿四日、伽羅陀山寺別當法眼和尚位地藏請文、

建久元年庚戌十二月廿一日、爲無上菩提書了、

抑地藏菩薩者、以彌陀之勅宣已爲證文、末代衆生者、地藏之請文可爲劵契歟、仍爲後日沙汰、所令書寫也、厭穢土欣淨刹之輩、各書取一本、琰魔廳對決之時、可備證文也、但率爾之案、文體雖備、志之所之、纔述旨趣、令人披見、人必可唱彌陀地藏空號也、

正治元年七月六日書寫了

〔逸號年表補考〕天靖元年　上島氏下島氏古系圖牒、北朝嘉吉三年癸亥ナリ、(信按、嘉吉ハ南北和議四十餘年ノ後ナリ、若タハ南朝奉仕ノ餘衆ノ私號カ、)大日本史、嘉吉三年九月、前大納言藤原有光等、稱兵入禁中、取神璽寶劍、擁王子萬壽寺僧金藏主、(私云、後龜山天皇ノ王子ナリ、)據延暦寺、金藏主有光敗死、(○中略)天靖ハ決メテ嘉吉三年、金藏主ヲ擁

は、朱雀と云し年號を白鳳とぞかへられにし、

〔一代要記天武〕癸酉歲太宰府獻三足赤雀、仍改元朱雀、卽白鳳元年也、

〔東寺王代記〕天武天皇壬申、元年建朱雀號、二年。〇癸酉帝卽位、改朱雀號白鳳、

〔吾妻鏡七〕文治三年十二月七日甲戌、天武天皇御宇二一〇二恐誤年八月、帝遷坐野上宮給之時、自鎭西獻三足赤色之雀、仍改元爲朱雀元年、明年三月自備後國獻白雉、又改朱雀二年爲白雉元年、同十五年自大和國進赤雉之間、改年號爲朱鳥元年、

〔年中行事秘抄下〕伊勢齋宮事

天武天皇白鳳元年四月十四日、以大來目皇女、獻伊勢神宮、依合戰願也、

○按ズルニ、日本書紀ニハ、此事ヲ天武天皇二年癸酉ニ係ケタリ、

〔和漢合符天武〕二癸酉十三或以是年爲白鳳元年、備後國獻白雉、因此改元、

○按ズルニ、二トアルハ卽位二年、十三トアルハ白鳳十三年ナラン、

〔長等の山鳳附錄二〕一代要記に、箕面寺緣起を引て、癸酉歲大宰府獻三足赤雀、仍改元朱雀、卽白鳳元年也といへるは、癸酉を朱雀の元年とし、其年また白鳳と改られたる趣なり、大宰府獻三足雀ことは、上に擧たる如く、壬申年の事なるを、癸酉の年として、其年內に再白鳳と改られたる由にて、上に考定たる年立に合せては、朱雀の改元は、一年後れ、白鳳の改號は、一年前だちたり、紹運錄に、天武天皇を白鳳二年に卽位と記し、元正天皇を白鳳十年辛巳降誕と記し、文武天皇を白鳳十二年癸未降誕と記したる白鳳を、書紀、また辛巳年等によりて推考るに、これも要記と同じ年立干支に合へり、案ふに、こは下に論ふ如く、壬申年大友天皇の御世に坐ませるほどは、白鳳の年號を用ひ給ひ、其年の內に、天武天皇の御世となりて、朱雀と改給ひ、二年癸酉に、又白鳳を用ひ給へるを、然は混へたるにて、その年立に據りて記せる傳なるべし、此餘に、白鳳元

シハ、壬申歳ナリシガ如シ、記シテ疑ヲ存ス、

〔一代要記 天武〕白鳳元年壬申三月、備後國進白雉、仍改爲白鳳、

○按ズルニ、一代要記以下、壬申ノ歳ヲ以テ白鳳元年ト爲ス說ナリ、

〔皇代記 天武〕白鳳十三年、元年壬申、備後國獻白雉、仍爲瑞改元、

〔二十二社註式〕日吉社 ○中略 山家最要略記、日吉七社降臨垂跡時代事、扶桑明月集云、○中略 第四十代天武天皇卽位白鳳元年壬申 近江國滋賀郡垂跡、

〔源平盛衰記 十四〕三井寺僉議附淨見原天皇事

宮 ○天武 名乘テ憑マントオボシテ、丸ハ淨見原ノ宮也、深ク汝ヲ憑ト宣ヘバ、長者畏テ智ニ取奉テ、隱シ置奉ル ○中略 其後長者、東夷ヲ催テ、白鳳元年壬午、始テ不破關ヲ置テ、美濃國ニテ軍構シ給ヘリ、○中略 宮都ニ上給ヒ、卽位給ニケリ、天武天皇トハ是也、○下略

○按ズルニ、壬午ハ、上文引ク一代要記、皇代記、二十二社註式等ニ據ルニ、壬申ノ誤ナラン、日本紀ニ據ルニ、天武帝ノ壬申ハ、卽位元年ニシテ、壬午ハ、十一年ニ當レリ、

〔二十二社註式〕香椎宮 ○中略 第四十代天武天皇白鳳二年癸酉二月八日、高良託宣、譽田天皇御宇、爲晨昏武略之健將、

〔袋草子 一〕大嘗會歌次第　大嘗會、天武天皇御宇白鳳二年癸酉十一月始之、但歌不見、

〔二十二社註式〕丹生社 ○中略 人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥御垂跡

〔扶桑略記 五 天武〕二年癸酉三月、備後國進白雉、仍改爲白鳳元年、白鳳合至十四年、

○按ズルニ、扶桑略記以下癸酉ノ歳ヲ以テ白鳳元年ト爲ス說ナリ、

〔水鏡 中 天武〕其年の八月に、御門は野上の宮に移り給たりしに、つくしより足三ありし雀の赤を奉りしかば、年號を朱雀元年と申侍りし、其明年 ○二年癸酉 の三月に、備後國より白雉を奉りたりしに

サレドモ舍人親王ハ天武ノ皇子ナレバ、此二號ノ稱ヲイミ給テ、小注ニモ注シ給ハザリシナルベシ、此白鳳ノ號、水鏡ノ說ニヨラバ、舍人親王誕生マシマセシハ則白鳳五年ニ當レバ、記シモラシ給フベキコトニモ非ズ、何レニ考テモ、此二號ハ取ルマジキモノニゾ、

〔扶桑略記五 天武〕元年壬申八月、天皇幸野上宮、立年號爲朱雀元年、太宰府獻三足赤雀、仍爲年號、

〔帝王編年記十 天武〕朱雀一年信濃國獻赤烏、仍爲瑞改元、

〔皇年代略記 天武〕朱雀元年壬申、信乃國獻朱烏、爲瑞改元、

〔愚管抄一 皇帝年代記〕天武　十五年元年壬申 中略　朱雀一年元年壬申　白鳳十三年元年壬申、支干同、前年內改元歟、

〔源平盛衰記二十八〕顯眞一萬部法華經事

同年五月〇壽永元廿七日ニ、改元ノ定アリ、改養和二年爲壽永元年、法皇ノ御氣色ニ依テ被行ケリ、是ハ或人夢想ノ告アリケル故トゾ聞エケル、延喜ニ公忠ノ夢想ニ依テ忽ニ改元アリキ、例ナキニ非、今上去々年即位、其年大嘗會有ベキ處ニ、福原ニ臨幸ノ間、新都其禮難被備アリケレバ、延引シケリ、去年ハ又諒闇也ケレバ被行ズ、今年被遂行ベキニ、大嘗會以前兩度ノ改元其例審ナラズト、沙汰有ケルニ、天智天皇十年ニ崩ジ給シニ、天武天皇固辭シテ即位シ給ハズ、大伴皇子ノ亂アリテ、次年ノ天武元年七月ニ、彼皇子ヲ被誅キ、同八月ニ、太宰府ヨリ三足ノ赤雀ヲ獻ズ、仍テ年號トス、朱雀是也ト、左大臣經宗被申ケリ、大外記頼業ハ白雉ヲ改テ白鳳トシテ、十一月ニ大嘗會ヲ被行キト申ケレバ、忽ニ改元アリケルトカヤ、

〔長等の山風附錄二〕頼業眞人の、白雉を改て云々といへるは、上に擧たる如く、二年癸酉三月に、白雉を獻れる瑞によりて、すなはち白雉と改元ありけるを、其年更、白鳳と改られたる由の傳のありけるなるべし、〇下略

〇按ズルニ、上文引ク所ノ愚管抄、及ビ次下引ク源平盛衰記ニ據ル時ハ、一年ニ再ビ改元アリ

ヒテ欺キシト云フ話モアリ、白雉ヲ獲シニヨリテ白鳳ト改元セシヨシハ、諸書ニ多ク見エテ、白鳳ノ年號ノ白雉ニ由レリト云フハ、古キ傳ナルベシ、又按ズルニ、白雉ハ日本書紀ニテハ、五年ニテ終リタレド、藤原家傳ニテハ、白鳳十二年、十三年、十四年ナドモアリ、サレドソノ事實ドモヲ日本書紀ニ合ハセ、白鳳ヲ白雉トシテ數フル時ハ、十二年ハ十一年ノ誤、十三年ハ十二年ノ誤、十四年ハ十三年ノ誤ナリ、

〔神皇正統記 文武〕天智の御時白鳳

〔湯土問答 二〕答、大化、白雉、朱鳥ハ日本紀ニ出、大寶ハ續日本紀ニ出候へバ、マガフベクモ非ズ、白鳳朱雀ノ二ノ年號ハ、水鏡、神皇正統記ニ見エ候ヘドモ、甚イブカシク候、又古語拾遺難波豐前朝ニ、白鳳四年ト記セシハ、白雉ノ字誤ナルベシ、此ノ御時ニ此號其餘更所見ナキコトニ候、大同五年九月十九日改元之時詔ニモ、朱鳥〈○朱鳥、日本後紀、日本紀略並作飛鳥〉以前未有年號之目、難波御宇始顯大化之稱トハ、日本紀略ニモ見エテ、朱鳥ノ前ニ續キタル朱雀白鳳ノ號不見候ヘバ、此二號ヲ稱スルコト誤ナルコト分明ニ候、故ニ此二ノ號、水鏡、正統記トモニ齟齬セシコト多シ、白鳳ノ號天智ノ御時ノ年號トモ注シ、又天武ノ初朱雀トシ、其明年白鳳ト改元、白鳳十五年朱鳥ト改元セシ由記セリ、如此ナラバ日本紀ノ年序ヨリ一年延ビテ、尤支干モ不相叶候、是其二ツ也、水鏡ニ天武元年八月ニ、野上宮ヘ筑紫ヨリ赤キ雀ヲ奉リシ故ニ、年號ヲ朱雀ト改ラレシ由記セリ、此元年御軍ハテ、大友ノ御首ヲ野上ノ宮ヘ奉リタルコト七月廿七日ナリ、未ダ御世何レトモ不定、又定シヨリ□ト見レバ、八月ニテハ日數ノ間アルマジキ也、是其三ツ也、是等ニテ又兩□書ノ誤猶分明ナリ、然ルニ世ニ此二ノ號ヲ稱スルコトヲ考ルニ、此朱雀白鳳ノ號ハ、大友皇子大津ノ宮ニ帝ノ如クニテマシマセシ中ニ稱セラレシ年號ナルヲ、世ニ云傳ヘシニヤ可有、

〔享祿本類聚三代格〕二太政官謹奏

　請抽出元興寺攝大乘論門徒一依常例住持興福寺事

右得皇后宮職解偁、始興之本、從白鳳年迄于淡海天朝、內大臣割取家財、爲講說資、伏願永世萬代勿令斷絕、○中略今具事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

　　天平九年三月十日

〔古語拾遺〕至難波長柄豐前朝○孝德白鳳四年、以小華下諱齋部首作賀斯、拜神官頭、

〔長等の山風附錄〕二此事孝德紀に見えず、廣成宿禰の家傳にぞありけむ、本朝月令、年中行事秘抄、公事根元等にも、此文をひかれたり、然るに古語拾遺一本に、白鳳を白雉と作るがあるは、後人の書紀に據りて、私に改めたるものなり、其一本を除ては數本悉白鳳とあるが上に、月令等の古書に、引載たるにも、白鳳とあり、又西宮記○中略十月宰相行列の條に、菅簦(オホガサ)云々、白鳳制云、三品已上聽菅簦云々と記されたり、この白鳳も孝德の御世なるべし、

〔逸年號考删餘〕古語拾遺ニ、至于難波長柄豐前朝○孝德白鳳四年トミエタルヲ、齊延本ト、天文本ニハ白雉トアリ、加賀本類聚三代格、天平九年三月十日ノ文ニ、興福寺ノ事ヲ始興之本、從白鳳年迄于淡海天朝云々トアルハ、孝德帝ノ年號ヲ云ルナルベシ、

〔藤原家傳〕鎌足白鳳五年秋八月、詔曰、尙道任賢、先王彝則、褒功報德、聖人格言、其大錦冠內臣中臣連、功侔建內宿禰、位未允民之望、超拜紫冠、增封八千戶、俄而天萬豐日天皇○孝德已厭萬機、登遐白雲、

○按ズルニ、之ニ據レバ、白鳳ハ卽チ白雉ナリ、ソハ孝德天皇ノ崩御ハ、日本書紀ニ據ルニ、白雉五年甲寅ノ十月ニテ、此書ニ鎌足公ガ紫冠ニ超拜セラレシトイフ八月ニ甚ダ近ケレバナリ、サレバ俄而トハ云フナリ、是ニテ白鳳ハ白雉ノ一名ナリト定ムベシ、白雉ヲ白鳳ト云ヘルハ、雉ノ文采ノ鳳凰ニ似タルヨリ云フナリ、漢土ニテモ鸑鷟鳳翔ナドモ云ヒ、雉ヲ鳳凰ナリト云

抑長光寺ト云ハ、武作寺ノ事也、○中略法興元世二十一年壬子二月十八日、太子○聖德ト妃○高橋ト相共ニ、彼寺ニ御幸シテ、○下略

〔長等の山風附錄二〕源平盛衰記なる、近江國長光寺の緣起を語れる文に、○中略此は、そのかみ彼寺の緣起文によりて記せりと聞ゆるに、其法興元世廿一年壬子といへるは、今己が考たる說に合ひがたし、其はまづ、法興元世といへる世字の論は、しばらく除て、廿一年壬子とある干支年次によりて、推し撿るに、聖德太子のおはしましける、御世の壬子は、崇峻天皇の五年にて、かの遠見の湯の碑文の、法興二年に當れば、廿一年と云へるに合はず、かの佛光後の銘を、法興元世の一年とせむにも、其廿一年は、舒明天皇の十三年辛丑に當りて、干支も合はざるが上に、聖德太子薨給ひて、廿年の後なれば、是も合はず、すべて件の緣起の趣、古書どもに見えたる事實にも、さらに合はず、有べくもあらぬ事どもにて、いと妄浪なるを思へば、既く其寺の僧徒が造言にて、彼善光寺如來に賜ひたる、聖德太子の文の類にて、かの佛光後の銘を、法興元世と讀なれたる說によりて、干支年次をだに考ずして、謾りに造言せるものなりけり、かくて其年號○注異は、次の推古天皇の御世かけて、厩戸皇子の攝政のほどまで用ひ給へるを、いはゆる法興元卅一年に、皇子薨給ひて、後おのづから廢みぬるなるべし、但し此年號も、後の例のごとき重事として、天下に遵用ひさせ給へるにはあらで、一時の嘉號の如くなりけるが上に、もはら馬子などが申し行ひたる事なるべければ、是も史には除かれたるなるべし、然はあれど、是ぞ年號と稱ふものゝ、創には有るべき、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月丁亥朔、治部省奏言、勘二撿京及諸國僧尼名籍一、或入道元由、披陳不レ明、或名存二綱帳一、還落二官籍一、或形貌誌黶、既不二相當一、總一千一百二十二人、准二量格式一、合レ給二公驗一、不レ知二處分一、伏聽二天裁一、詔報曰、白鳳以來、朱雀以前、年代玄遠、尋問難レ明、亦所司記注、多有二粗略一、一定見名、仍給二公驗一、

元世一年ト讀シハ誤也、世ハ卅ニテ、世ニハ非ズ、同背後銘ノ中ニ、世間又卽世トモアリテ、世ノ字ト別也、崇峻帝ノ辛亥ヲ法興元年トシ、此辛巳ヲ卅一年トスルコト論ナシ、道後湯碑ニ推古帝ノ丙辰ヲ、法興六年ト記シタルヲモ合考ベシ、蓋シ元世一年ノ元字ハ、衍文トモ云ベシ、

○按ズルニ、法興元ハ、又ハ法興トモ云ヒシナルベシ、釋日本紀ニ引ケル伊豫ノ道後ノ碑ニ、法興六年十月歳在丙辰トアルガ如シ、法興元トハ、法興寺ノ創立ヲモテ元年トシタルモノナラン、日本書紀ニ、崇峻天皇元年、壞飛鳥衣縫造祖樹葉家、始作法興寺トアルハ、建テ始メタルヲイヘルニテ、建テ訖リテ後ニ寺ノ名ヲ法興ト名ケ、卽チ其年ヲ元年トセシモノナルベシ、法興寺ハ卽チ元興寺ナリ、三字ヲ年號トスルハ、王莽ノ始建國、梁武帝ノ中大通、中大同ノ例ノ如ク、又元ノ字ヲ年號ニ著クルハ、漢ノ武帝ノ建元、後元、光武帝ノ中元ナドノ例ナリ、

〔壒嚢抄十二〕三如來トハ何

如來未ダ伊那郡善光ガ家ニ御座時ニ、推古天皇御宇、淨土ノ業、自餘ノ教法ニ勝ル丶故ニ、聖德太子、欽明、用明、幷ニ守屋與力ノ逆罪ヲ濟ハン爲ニ、八人ノ大臣ト共ニ時衆ト成テ、清涼殿ニシテ常行三昧ノ念佛、七日七夜稱名アリテ、功德ノ有无ヲ此善光寺ノ如來ニ尋申サレケル、○中略第二度ニハ、調子丸ヲ御使トシテ御消息アリ、其詞云、　大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子　是故方便從西方　誕生片州興正法○中略　法興元世一年辛巳十二月十五日、厩戸勝鬘上ト遊シケル、世間ニ流布シテ、廟中廿句ノ文ト云是也、○中略第三度ノ御使ニハ、甲斐ノ黑木調子丸二人也、黑駒ニ乘リ、調子ハ究駄ニ乘ル、其時ノ御消息ニハ、　州域化緣度脫了　平等一子衆生界○中略　口稱誓願報持功　豈是固持不護念　法興元卅二歲壬午八月十三日、厩戸勝鬘上ト遊バシテ、御表書ニハ、進上本師如來御寶前ト侍リテ、班鳩厩戸上ト云々、

〔源平盛衰記三十九〕重衡關東下向附長光寺事

あかずまに彼此と書見る因に、其畢年號の見あたりたるどもを書集め置て、さて考ふるに、列滿以下の號ども、多くは中古以來僧徒の、人の國へゆきゝ、おほくありし頃より、皇國の古へに、紀號なきを厭ぬ事に思ひて、造出たるならん、其文字づかひもいと拙く、佛家の語を用ひたるにて知るべし、神社寺院の縁起佛像などに彫付たるも、大かた同じ心ばえなり、然るを韓人の海東諸國記にかけるは、もとより正しき紀號と心得て記せるにや、

〔茅窻漫錄上〕和漢異年號

證。明。唐書云、江州油火明神の社記に、證明四年と云書付あり、此曆號何代なることを知らず、此年號右社の鰐口にもあり、按ずるに、兼延が名法要集に、大織冠曰、吾唯一神道者、以天地爲書籍、以日月爲證明、此語を兼俱が神代抄に、皇太子の語といへば、法興聖德などとおなじく、推古舒明兩帝の御時なるべし、油火明神は、江州甲賀郡にあり、

〔逸號年表補考〕證明四年　近江國油日村明神緣起、コハ上ニ擧タル勝照ノ誤リカ、

〔釋日本紀述義十四〕伊豫國風土記曰、〇中略立湯〇道後岡側碑文記云、法。興。六年十月歲在丙辰、我法王大王、與惠總法師及葛城臣、逍遙夷與村、正觀神井、歎世妙驗、欲叙意、聊作碑文一首、〇下略

〔上宮聖德法王帝說〕法。興。元世一年、歲次辛巳、十二月鬼前大后崩、〇中略

右法隆寺金堂坐釋迦佛光後銘文如件、今私云、是正面中臺佛云云、

釋曰、法興元世一年、此能不知也、但案帝記云、少治田天皇之世、東宮厩戶豐聰耳命、大臣宗我馬子宿禰、共平章而建立三寶、始興大寺、故曰法興元世也、此即銘云、法興元世一年也、後見人若可疑年號、此不然也、然則言一年字、其意難見、然所見者聖王母穴太部王薨逝辛巳年者、即少治田天皇御世、故即指其年、故云一年、其無異趣、

〔古京遺文〕釋迦佛造像記

辛巳、推古天皇二十九年、〇中略鬼前太后、斥穴太部間人女王、是厩戶皇子之妣、

〔倘古年表推古〕忠友〇穗井田曰、法隆寺釋迦光後銘ニ法興元卅一年歲次辛巳トアルヲ、貞幹小錄ニ

ず、改元考にも出されず、此二ッの號とるべき名にあらずと思ふに、聖武天皇神龜五年十月に、治部省より奏言せし詔報のなかに、白鳳以來、朱雀以前、年代其遠、尋問難明、亦所司記注、多有粗略といふ事、續日本紀にみへたれば、日本紀にみへずとて、此年號朝廷に一向廢せられし號にもあらざるか、今是を審にせんに外に所見なし、按るに、朱雀白鳳の年號は、天武天皇難をさけて吉野にこもらせ給ひ、それより二年の後、癸酉のとし淨御原の宮に卽位し給ひし間に、大津の宮にて大友皇子の立給ひし年號なる故に、舍人親王の日本紀に除て書せ給はざりしや、上に引し聖武天皇の治部省へ詔報ありし詞も、大津宮の大友皇子の御時の事なれば、何事も明に知がたきとあることにて、大津宮の二ッの年號を出されざる事なるべし、亦天平感寶といふは、天平廿年四月に改元有し號なれども、間もなく同年七月に天平勝寶と改元ありし故に、國史にはみえたれども、年代記等にはみえず、世の人のしらぬ年號なり、

〔逸號年表〕續日本紀、神龜元年朔日詔曰、白鳳以來、朱雀以前、年代玄遠、尋問難明、而朱雀白鳳二號、日本紀皆不載、其他水鏡諸書所載紀號、國史亦無所見、倶未詳其故也、○下略

〔逸號年表補考〕善紀、大屯、

萬葉緯一卷ニ、史籍不記往古年號、今所記以本瀬三之自筆摸之、傳聞、南都古寺間有記此年號書矣、トアリテ、異年號ヲ集メタルモノアリ、大凡年契ニイヘル如シ、繼體天皇十六年ヲ善紀元年トシテ、文武天皇四年ヲ大屯九年トスル迄、凡百七十九年ノ間ヲ記セリ、此年號所出ノ書ヲイハズ、證トシガタケレバ寫シトヾメズ、

〔逸年號考〕藤原貞幹が逸號年表を得て之を見るに、二十四部の書を引きて、正史にもれたる紀號ある由を云り、故かゝる異しき年號もありけるにやと、猶疑はしかりけるを、伴信友が同書の補考に、五十一部の書を引證してあなるに驚かされて、やゝさきの疑ひもはれにたれど、猶

相同じきをもおもふべし、

〔鹽尻十五〕一繼體天皇、日本年號を善記と云、是始と云々（書に繼體帝卽位十六年な、善紀元年とす、）以下略之、二十餘之年號あり、正史に見へず、夫我國年號の始は、孝德帝元年を大化と號し給ひ、其六年を白雉と改む、白鳳は天武卽位の元年壬申より乙酉迄十四年、丙戌は朱雀の元年也、持統は年號を立給はず、文武の卽位五年辛丑、大寶と號せられし後、綿々として改元有りといふ、有難き事共也、

〔春湊浪話上〕往古年號

年號は、孝德帝御時、大化白雉の號を置れたる、日本紀に見えし始なり、ゑかるに伊豫國の湯碑文を上宮太子の建給ふに、法興六年十月歲次丙辰とゑるさせ給ふ、此碑は今廢れたれど、其文は伊豫風土記を引て釋日本紀にみえたれば、法興の年號有し事明也、考るに丙辰の年は、推古天皇の四年なり、此法興の號、源平盛衰記にもみえたり、又欽明天皇の御時、金光の年號、推古天皇の御時、端政の年號等も、平家物語にみえたり、猶後世の書なれども、東山殿の同朋相阿彌が著す君臺觀にも、聖德六年戊巳とゑるす、又江州あぶら火の明神の社記にも、證明四年と書たりといふにや、海東諸國記に、敏達天皇元年壬辰に金光を用ひ、崇峻天皇二年己酉に端政を用ひ、舒明天皇元年己丑に聖德を用られしといふとみえたり、法興と證明といふ號は其書にみえず、是等の年號ふるく記し置き、異國にても書たれば、往古大化白雉より先に年號有し成べし、聖德太子と申奉る事、御諱名なりとも、御謚號なりとも記せしものあれども、其世の年の名をとりて稱し奉るにやあるべき、其後白鳳と朱雀といふ年號、ふるき文に多く見え、水鏡には、天武天皇の大友皇子を亡し給ふ年の年號朱雀元年にて、明年白鳳と改元有しなり、神皇正統記には、天智の御時白鳳、天武御代に朱雀朱鳥などいふ號有しと見え、又古語拾遺には、難波豐前の朝白鳳四年といふ事も有、是は孝德天皇の朝の御事なり、此二ッの年號、諸記にしるす所如此に齟齬ある上に、正史に見へ

し天武帝の元年を還て白鳳元年としるし給ひ、朱鳥と改元ありしは、帝の末年の御事としるし給へる者なるべし、しかれば朝廷の白鳳元年は、九州年號の白雉元年にあたり、朝廷の朱鳥元年は、九州年號の朱雀元年にあたるなり、もししからば、九州年號の白雉朱雀は、朝廷の白鳳朱鳥を擬して唱へたる者といふべし、續日本紀に、白鳳以來、朱雀以前とある朱雀は、朱鳥の誤にや、日本紀略、嵯峨天皇大同五年九月丙辰詔曰、朱鳥以前未有年號之目、難波之御宇始顯大化之稱とも見えたり、かくて孝德の御世の白雉は白鳳なるべき證は、古語拾遺に、難波長柄豐前朝、白鳳四年と見え、大職冠公傳に、天萬豐日天皇、已厭萬機、登遐白雲、皇祖母尊俯從物願、再應寶曆、悉以庶務委皇太子、又白鳳十四年皇太子攝政などあるにて推べし、豐前朝とは孝德帝の御事なり、天萬豐日はすなはち帝の御諱なり、皇祖母尊とは齊明帝の御事、皇太子は天智帝なり、元亨釋書などにも白鳳十二年、白鳳十四年など・しるせり、また神皇正統紀に、文武天皇即位五年辛丑より始めて年號あり、大寶といふ、是より先に孝德の御代に、大化、白雉、天智の御時、白鳳、天武の御代に朱雀、朱鳥など云號ありしかど、大寶より後にぞたえぬ事にはなりぬる、依て大寶を年號の初とするなりと見えたり、これに天智の御時白鳳としるせるも、一の證とすべし、さて如是院年代記には、孝德天皇元年に、大化と年號たて給ひし事見えず、六年の下の細書に、白雉元年二月、長門國獻白雉、改元白雉と見え、天武天皇の下の細書に、即位之年壬申改元、朱雀二年の下の細書に改元白鳳、十三年の下に朱雀元と朱書し、十五年の下に大化元と朱書し、細書に和州獻赤雉、因茲改朱鳥と見え、持統天皇六年の下に、大長元と朱書し、文武天皇大寶元年よりぞ年號を大書して、細書に三月二十一日改元、年號始於此、此歲對馬島貢金、由是三月二十一日甲午改元大寶とあり、これらによりておもふに、朝廷にてまさしく年號を建給ひたるは、この大寶ぞ始にて、是より以前の年號は、九州年號とたがひにまがひたるなるべし、白鳳と白雉と、朱鳥と朱雀と義相近く、大化と大和と音

僧要　舒明七年乙未、僧要元年とす、一說曰、僧安五年終、

命長　舒明十二年庚子、命長元年とす、一說曰、明長五年終、一作₂命長₁、又曰₂長命₁、又曰、按自₂三年₁至₂五年₁係₂皇極帝之時₁、右大化以前年號、

常色　孝德天皇三年丁未、常色元年とす、これを一說には、繼體帝之時の年號とす、前に見えたり、

白雉　孝德六年庚戌、白雉元年とす、齊明天皇元、かれが白雉六年、その人衆を率て內屬す、　齊明紀曰、元年、是歲蝦夷隼人率₂衆內屬、詣₁闕朝獻、

朱雀　天武天皇元年壬申、朱雀元年とす、一說には白雉朱雀の二年號をしるさずして、ことに中元果安の二年號をしるしていはく、天智帝之時、中元四年終、又曰、按戊辰爲₂元年₁、天武帝之時果安、又曰、按不₂審₁年數、

大和　持統天皇九年乙未、大和元年とす、此年號麗氣記には見えず、海東諸國記にはのせたり、孔方不知品に大和通寶あり、これこの大和年中に鑄たるにてもあるべし、一說曰、持統帝之時大和、又曰不₂審₁年數、

大長　文武天皇二年戊戌、大長元年とす、一說曰、文武帝之時大長、又曰、按戊戌爲₂元年₁、右大化以後年號、九州年號こゝに終る、今本文に引所は、九州年號と題したる古寫本によるものなり、

今按するに、文武天皇の大寶以前の年號は、九州年號とまがへるものあらんもしるべからず、よくよく考ふべきことなり、今試に論せば、朝廷にて年號を立たまへる事は、孝德天皇の大化元年を始とし、その六年白鳳と改元、これより天武天皇の元年まで白鳳を用ひ給ひ、天武天皇の元年朱鳥と改元、これより文武天皇五年まで朱鳥を用ひ給ひ、文武天皇五年大寶と改元ありしなりけんを、大寶以前の年號は、さはやかならざりしが故に、書紀を撰び給ひし御時にも、既に此事さだかならずして、孝德の御世の白鳳をば、九州年號の白雉にまがへ給ひ、白鳳を朱鳥と改元あり

るに、伊豫風土記に、湯郡云々、天皇等於湯幸行降坐五度也云々、以上宮聖德皇子一爲一度、及侍高麗惠慈、葛城王等也、于時立湯岡側碑文、其立碑文處、謂伊社邇波之岡、記曰、法興六年十月歲在丙辰云々と見えたり、丙辰は推古天皇の四年にして、すなはち法興寺の成し年なり、この年を法興六年とすれば、その元年は崇峻天皇の四年辛亥なり、しかるに今記する處とあはず、疑ふべし、

願轉　推古七年辛酉、願轉元年とす、海東諸國記願轉に作る、一說曰、願轉四年終、

光元　推古十三年乙丑、光元元年とす、如是院年代記光充に作る、一說曰、光元六年終、一作弘元、又曰光充、

定居　推古十九年辛未、定居元年とす、今按するに、寶永五年板靈符緣起集說といふものに、我朝推古女帝〔人王三十四代〕ノ御宇ニ、百濟國定居元〔辛未〕年、聖明王第三ノ御子琳聖太子、我朝ニ渡リ玉ヒテ、此法ヲモツハラ弘メ玉フ、其後儒佛神トモニ執行シケルト〔舊記ニ見タリ〕とあり、此舊記といへるは、何れの書なる事さだかならざれども、さる事しるせるふみありと聞えたるに、既に九州年號を百濟年號と誤りたり、

倭京　推古二十六年戊寅、倭京元年とす、此年號海東諸國記には見えたり、麗氣記には見えず如是院年代記には和京縄につくれり、一說曰、和京五年終、一作和景縄、又曰、按和京元年、爲定居元年、定居七年終、和京五年終、則仁王元年、則爲定居六年、蓋是三年號、又互相行也耳、

仁王　推古三十一年癸未、仁王元年とす、一說には、仁王の次に節中といふ年號あり、いはく仁王六年終、節中五年終、

聖聴　舒明天皇元年己丑、聖聴元年とす、如是院年代記に聖德に作る、一說曰、舒明帝之時、聖聴三年終、

師安　欽明二十五年甲申、師安元年とす、

知僧　欽明二十六年乙酉、知僧元年とす、海東諸國記に和僧に作る、

金光　欽明三十一年庚寅、金光元年とす、一説曰、金光六年終、或云四年、實敏達帝二年、豐後人眞名野長者道場を内山に起立し、號して蓮城精舍といふ、はじめ長者金三萬兩を天臺山に寄て福根とす、南嶽慧思大師、緬に長者が德ある事を知り、すなはち弟子蓮城を遣はし、赤檀千手眼瑠璃藥師佛像を齎し來らしむ、長者深くこれを信じ、蓮城精舍を起し、また深田の地に就て、祇陀、療病、施藥、安養、快樂の五院を創め、名けて滿月寺といふ、皆城をもて開基とす、事は豐鐘善鳴錄に見えて、豐後國志にもこれを引たり、内山は好古小錄硯石品に、内山石、豐後上材難獲といへる處なり、

賢棲　敏達天皇五年丙申、賢棲元年とす、海東諸國記棲を接に作る、如是院年代記に稱に作る、一説曰、敏達帝之時、賢輔五年終、輔一作棲、又作榑、

鏡常　敏達十年辛丑、鏡常元年とす、海東諸國記常を當に作る、一説曰、鏡常四年終、鏡一作鐃、今按するに鏡常是なり、

勝照　敏達十四年乙巳、勝照元年とす、一説曰、照勝四年終、一曰作勝照、又曰、用明帝之時、和重二年終、

端政　崇峻天皇二年甲寅、端政元年とす、如是院年代記端改に作る、一説曰、崇峻帝之時、端政五年終、

吉貴　推古天皇二年甲寅、吉貴元年とす、海東諸國記從貴に作る、一説告貴に作る、いはく推古帝之時、告貴十年終、又曰、按一説、推古元年爲喜樂、二年爲端正、三年爲始哭、一作始大、自四年至十年、爲法興、是四年號通計十年、而終與告貴年數正相符、則十年之間、蓋與告貴互相行也耳、いま按す

とし、

善記　襲の元年、繼體天皇十六年壬寅、梁普通三年にあたる、海東諸國記善化に作る、如是院年代記に、或曰、繼體天皇自十六年始年號在之云々分者朱ニテ書之、年數相違之處在之不審とあり、一說曰、繼體帝之時、善記四年終、

正和　繼體天皇二十年丙午、正和元年とす、孔方不知品に、正和通寶ありけだし襲人の鑄るものなり、桂林漫錄にのせたる、下野國河內郡なる正和元年建立の鐵塔婆は、花園天皇の正和元年壬子のものなり、混ずべからず、一說曰、正和五年終、

殷到　繼體天皇二十五年辛亥、殷到元年とす、海東諸國記發例に作り、如是院年代記教到に作る、同書に、教到元始作暦とあるも、また襲人のしわざなるべし、一說に、正和と殷到との間に、定和常色の二年號あり、いはく定和七年終、常色八年終、教知五年終、一說作教到、又曰殷到、按自四年至五年、係安閑帝之時、

僧聽　宣化天皇元年丙辰、僧聽元年と改む、一說曰、宣化帝之時、僧聽四年終、欽明天皇元年、かれが僧聽五年、襲の人衆を率て歸附す、欽明紀曰、元年三月蝦夷隼人並率衆歸附、

明要　欽明天皇二年辛酉、明要元年とす、海東諸國記同要に作る、一說曰、欽明帝之時、師安一年終、大長三年終、法清四年終、清一作靖、兄弟和一年終、一作兄弟、明要三年終、或云、十二年、藏知一年終、知一作和、知僧一年終、或云七年、

貴樂　欽明十三年壬申、貴樂元年とす、一說曰、貴樂十八年終、或云二年、

法清　欽明十五年甲戌、法清元年とす、海東諸國記結清に作る、

兄弟　欽明十九年戊寅、兄弟元年とす、

藏和　欽明二十年己卯、藏和元年とす、如是院年代記に藏知に作る、

二月庚午朔戊寅、（戊寅九日）は穴戸國司草壁連醜經獻白雉、改元白雉の號見え、（今日本紀に、改元白雉とあるも、後世文人の稱すとある所、定式となしがたし、其譯は、續日本紀に、白鳳以來朱雀以前といひ、古語拾遺に、難波長柄豐前朝白鳳四年とあれば、白鳳と書たるにや、水鏡、正統記、寶基本紀、元亨釋書の類證據となし難し、又如是院年代に、天武帝十五年丙戌を大化元とし、和州獻赤雉、因改朱鳥とあれども、日本紀に此事なし、）天武帝十五年朱鳥の號あれども、年號改元の規則とせず、本朝改元考云、本朝文武天皇創建大寶之號、謂此雖有孝德天皇之大化白雉、天武天皇之朱鳥、而紀一時之瑞、未爲定式、故源親房正統記、以大寶爲年號之始、（本朝改元考は山崎闇齋の著なり）源爲憲が口遊（天祿元年冬十二月記）年代門に、今案、自大寶元年迄今年、總二百七十年、昔大寶以往有年號、曰大化、白雉、白鳳、朱鳥、凡至白雉合九載、其後齊明天智二帝雖治天下、專無號、轉更至天武治天、歲號朱鳥、其後持統一帝無年號、亦文武御天歲號大寶、從此以來永以不絕也とあり、此卽ち吾國金貨の始發する日にて、文武帝五年三月廿一日、大寶紀元の號、本朝紀年の權輿、萬世不易の定法としるべし、漢土にも武帝建元を紀年の始とすれど、文帝の後元と、景帝の中元後元は、史官追書の名として、改元定式の年數に入ざる事、改元考に見えたり、（○中略）和漢の異年號、諸書に見えたるもの、大率かくのごとし、紀年の始末しれざるは、いづれも臆斷しがたし、此外に彼土には、年號同名數多あり、陳繼儒が偃曝談餘に、漢の建元より明の正德に至るまで、凡一百餘名を載たり、其中大半は僭號多し、此邦は皇統一姓にて、ありがたき事なり、（繼體帝の正和と、花園帝の正和と同名なれど、大化以前の年號は正史に載ざれば、證據となし難し、）いづれにも、年號は國家第一の重事たるべき事と思はる、

〔襲國僞僭考〕繼體天皇十六年、武王年を建て善記といふ、是九州年號のはじめなり、

年號　けだし善記より大長にいたりて、およそ一百七十七年、其間年號連綿たり、麗氣記私抄、また海東諸國記などにもこれを載せ、今伊豫國の溫泉銘にも用ひ、如是院年代記にも朱書して出せり、しかれども諸書載るところ異同多し、今あはせしるして參考に備ふること左のご

白雉 日本紀、孝徳帝六年二月庚午朔戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉、此年爲白雉元年、如是院年代記亦係六年庚戌、改元白雉、水鏡二本、年代、皇代、暦略、諸國記皆以孝徳帝八年壬子爲改元、如是院年代記八年無改元、舊唐書以孝徳大化乙巳年爲改元、

白鳳 水鏡二本、年代、皇代、暦略、諸國記、如是院皆以齊明帝七年辛酉爲白鳳元年、大織冠公傳以孝徳帝五年己酉爲改元、如是院以六年庚戌爲改元、引二月長門國獻白雉、愚管抄、頁醍年中行事並皆以天武帝即位壬申爲白鳳、　白鳳雉 水鏡二本、天武帝二年癸酉二月廿七日即位、改元白鳳雉、如是院癸酉二改元白鳳、二月皇后立、　朱雀 水鏡二本、天武帝即位元年八月改元朱雀、如是院以天武帝十三年甲申爲朱雀元、那須國造碑、海東諸國記並皆相同、而朱雀爲朱鳥、　朱鳥 日本紀、天武帝朱鳥元年秋七月己亥朔戊午、改元曰朱鳥元年、如是院、天武帝十五年、大化元、和州獻赤雉、因茲改朱鳥、日本靈異記天武帝十五年丙戌、改元朱鳥、七年後不見、海東諸國記改元同上、歷世九年改元、

以上年號係大化以後、如是院年代記天武帝十五年爲大化元、○中略

因て考るに、此邦大化前後の頃までは、年號紀元の事は甚疎略にして、制法もた丶ず、年數の長短も正しく記載せざりしと見ゆ、故に諸書に載たるも、彼此異同ありて、いづれを證據となし難し、續日本紀に、神龜元年十月朔日、詔曰、白鳳以來、朱雀以前、年代玄遠、尋問難明とは是なり、文字の美惡是非は勿論、その頃は佛道興隆の初なれば、名目多くは佛家より出たると見ゆ、孝德帝の御世、蘇我入鹿天誅に伏し、暴虐夷滅せらる丶、後、敎化大に行はれ、人々に制をなすの始を示さむとて、大化の號を紀元し給ふ、日本紀略に、弘仁詔、朱鳥以前未有年號之目、難波御宇始顯大化之稱とは是なり、海東諸國記に、繼體帝十六年壬寅、始建年號爲善化、五年丙午改元とあり、此帝の七年に、五經博士を置たまへば、文字の義理も定て吟味ありつらむ、然るに善化を以て紀元の始とし、又孝德帝の御世大化を以て紀元の始とし給ひ、二ッの化字五年にして同じく改元なりしも、燧和仲が言しごとく、大率離合之讖、深微難逃とは是ならん、○中略又孝德帝の御世より、天下の政事多く改り、專に漢土の法則に倣ひ給ふ故に、古代の年號は皆刋り去て、大化と紀元し給ふと見ゆ、されどもこれより定式となり、末代に連綿せざるなり、又朱雀白鳳などの號、一時の瑞を紀したるは、諸書載る所、始末おなじからず、日本紀に載ざるゆゑ、年號の數に入ざるなり、日本紀に、大化五年

代年號曆略、如是院、平家物語、源平盛衰記、諸國記、皆同、

賢稱　敏達帝五年丙申紀元、五年終、年代記、皇代記、曆略、如是院、水鏡二本皆同、古代年號作賢棲、海東諸國記作賢棲、一本作賢輔、又一本作賢博、

鏡常　敏達帝十年辛丑改元、四年終、水鏡二本、古代年號、年代皇代記、如是院、皆相同、海東諸國記作鏡常、一本作鏡照、

勝照　敏達帝十四年乙巳改元、四年終、年代記、諸國記、如是院皆相同、古代年號二年終、古本水鏡勝照作勝烈、

和僧　用明帝二年丁未紀元、二年終、見古代年號、

端政　崇峻帝二年己酉紀元、五年終、皇代記、春秋曆略、水鏡二本、古代年號、諸國記、皆同、年代記、平家物語、源平盛衰記、皆作端正、如是院年代記作端改、古代年號端正爲推古帝二年改元、

喜樂　推古帝即位元年癸丑紀元、一年終、見古代年號、

告貴　推古帝二年甲寅改元、七年終、年代、皇代記、春秋曆略、皆同、諸國記告貴作從貴、一本作告言、如是院記二年改元、作告貴、

始哭　推古帝三年乙卯改元、一年終、見古代年號、

法興　推古帝四年丙辰改元、五年終、見古代年號、釋日本紀引伊豫風土記云、法興元年十月歲在丙辰、見道後湯碑、一本作六年、非、六年辛酉改元顯轉、蓋元字以六字體似誤、一說此年法興寺落成、故改元法興、

願轉　推古帝九年辛酉改元、四年終、古代年號、年代、皇代、曆略、如是院、皆同、諸國記作煩轉、

光元　推古帝十三年乙丑改元、六年終、古代年號、諸國記皆同、皇代記光元作弘元、曆略、如是院並作光充、按此年四月造丈六佛像、故爲號、

定居　推古帝十九年辛未改元、七年終、年代、皇代、曆略、諸國記、如是院皆同、水鏡二本六年後不見、神明鏡二年後不見、聖德太子拾遺記定居作定光、

見聖　推古帝二十一年癸酉改元、五年終、見古代年號、

倭京　推古帝二十六年戊寅改元、五年終、古代年號、諸國記皆同、水鏡二本作和京、六年終、一本作委京、如是院作和景繩、

景繩　推古帝二十六年戊寅改元、五年終、年代、皇代、曆略皆同、神明鏡二年後不見、皇代記一本作和黃纓、按此年年中改元、諸書所載不同、

法興元世　推古帝二十九年辛巳改元、共終未詳、見法隆寺釋迦佛光後銘、和漢三才圖會信州善光寺條云、法興元世一年辛巳十二月五日、源平盛衰記云、法興元世二十一年壬子、按此年皇太子薨、是與法興同、浮屠之所稱也、

仁王　推古帝三十一年癸未改元、六年終、年代、皇代、曆略、諸國記皆同、水鏡二本三十二年改元、五年終、

節中　推古帝三十一年癸未改元、一年終、見古代年號、按此年改元仁王、又改元節中、是與上倭景繩同、未知孰是、

聖德　舒明帝即位元年己丑紀元、六年終、年代、皇代、曆略、諸國記皆同、古代年號作聖聽、三年改元、

僧要　舒明帝四年壬辰改元、五年終、見古代年號、諸國記、如是院並七年乙未改元、五年終、

僧安　舒明帝七年乙未改元、五年終、年代、皇代、曆略、諸國記皆同、按僧要以字體似、一是必有誤、未知孰是、

命長　舒明帝十二年庚子改元、水鏡二本、三年後不見、諸國記七年後改元、古代年號九年丁酉改元、五年後不見、一本作明長、一作長命、

今長　改元同上、七年終、年代、皇代、曆略所載皆同、按命今字體相似、一是傳寫誤、

以上年號、係大化以前、如是院年代記、孝德帝朝無大化之號、

常色　孝德帝三年丁未改元、五年終、年代、皇代、曆略、諸國記所載皆同、

中元　天智帝即位元年壬戌紀元、四年後不見、古代年號所載、

果安　天武帝十五年丙戌改元、四年終、見古代年號、

大和　持統帝四年庚寅紀元、七年後不見、見古代年號、

大長　持統帝六年壬辰改元、九年終、年代、皇代、曆略、如是院皆同、海東諸國記、廷曆中解文所載、並係文武帝丁酉年、而四年終、

白雉、白鳳、朱雀、朱鳥之號、始末未詳、

持統帝之時　大和（按、不審年數、）
文武帝之時　大長（按、戊戌爲元年、）　右大化以後年號、然多不審年數、後之君子請補正之、

〔茅窻漫錄上〕和漢異年號

和邦の年號、大化前後に異年號ある事、藤貞幹が逸號年表に多く載せ、高昶が和漢年契凡例にも並べ擧げたれど、國の正史に見えざれば、紀年の始末、文字の異同ありて、皆後世より臆斷するもの、いづれも確說とはいひがたし、故に如是院年代記、繼體帝十六年善記注に、或曰繼體天皇自十六年、始めて年號在之云々、分者朱にて書之、年數相違之處在之不審とあり、漢土の異年號も、建元以前にある人の、大率相同じ、紀年の始末臆斷し難し、諸書に載する所、その異同を擧ぐる事左のごとし、

和邦異年號

列滿（孝靈帝之時、紀元始終未詳、）　重至（應神帝之時、紀元始終未詳、一說、神功皇后攝政四十年庚申、魏齊王正始元年、贈倭王印璽、王年號據此、）　嘉紀（武烈帝即位元年己卯、紀元、四年終、同五年改元、是字下一字消滅未詳、歷年四年、後無紀、）　善化（繼體帝十六年壬寅、紀元五年終、以上三號見古代年號、海東諸國記云、繼體帝十六年壬寅始建年號、爲善化、五年丙午改元、春秋曆略、年代記、皇代記、並皆四年終、如是院年代記、善化作善記、四年終、）　正和（繼體帝二十年丙午改元、五年終、年代記、皇代記、春秋曆略、海東諸國記皆同、皇代記作正治、古代年號二十一年丁未改元、四年終、如是院年代記、正和元太子立年六十一、）　敎到（繼體帝二十五年辛亥改元、五年終、古代年號、春秋曆略、年代記、皇代記、古本水鏡、活字水鏡皆同、纘敎訓抄云、安閑帝敎到六年丙辰、海東諸國記作發到、）　寶元（安閑帝二年乙卯、紀元五年後無紀、見四林寺佛光後銘、知是院年代記無寶元號、）　僧聽（宣化帝即位丙辰年、紀元四年後無紀、春秋曆略、年代記、皇代記、海東諸國記、如是院年代記皆同、古代年號、水鏡二本、至五年、）　明要（欽明帝二年辛酉、紀元十二年終、春秋曆略、年代記、皇代記皆同、皇代記作明安、古代年號九年改元、得字下一字磨滅未詳、海東諸國記作同要、）　貴樂（欽明帝十三年壬申改元、二年終、年代記、皇代記、春秋曆略、如是院皆同、古代年號三年終、）　法靖（欽明帝十五年甲戌改元、年代記、皇代記皆同、春秋曆略、如是院年代記作注淸、海東諸國記作結淸、古代年號十六年乙亥改元、）　兄弟（欽明帝十九年戊寅改元、一年終、古代年號、皇代記、春秋曆略、諸國記、如是院皆同、一本作兄弟和、）　藏和（欽明帝二十年己卯改元、五年終、年代記、皇代記、春秋曆略、諸國記皆同、古代年號二十一年改元、如是院作藏和、）　師安（欽明帝二十五年甲申改元、一年終、年代記、皇代記、峯相記、春秋曆略、諸國記、如是院皆同、古代年號一年後、）　知僧（欽明帝二十六年乙酉改元、五年終、年代、皇代記、曆略、如是院皆同、古代年號二十七年改元、諸國記作和僧、）　金光（欽明帝三十一年庚寅改元、六年終、年代、皇代記、古

（立、在位十年卒、）

正和、日本繼體天皇、（梁天監時）　聖德、日本舒明天皇田村、

〔和漢年契凡例〕一我邦年號、孝德帝之時大化爲始、見于正史、後世無異議、故此書亦沿之、而不敢違矣、然予又嘗檢舊記、大化之前猶有年號、蓋昉於孝靈帝之時、其後或斷、或不斷、以接大化也、竊疑、是當時苟且所爲、而未徧布告天下邪、史編何無徵也、且其年號、往々奇僻難可據信、而百世之下、又不可臆斷其無也、因今且並擧、以告好古之士如左、

（孝靈帝之時）列滴

（應神帝之時）聖至

（繼體帝之時）善記（四年終）　正和（五年終）　定和（七年終）　常色（八年終）　敎知（五年終、一作敎到、又曰殷到、○按自四年至五年、係安閑帝之時、）

（宣化帝之時）僧聽（四年終）

（欽明帝之時）師安（一年終）　大長（三年終）　法清（四年終、一作靖、）　兄弟和（一年終、一作兄弟、）　明要（三年終、或云十一年、）　藏知（一年終、知一作和、）　知僧（一年終、或云七年、）　貴樂（十八年終、或云二年、）　金光（六年終、或云四年、）

（敏達帝之時）賢輔（五年終、輔一作模、又作傅、）　鏡常（四年終、一作鏡、）　照勝（四年終、一作勝照、）

（用明帝之時）和重（二年終）

（崇峻帝之時）端政（五年終）

（推古帝之時）告貴（十年終、按一說推古元年爲喜樂、二年爲端正、三年爲始哭、自四年至十年、爲法興、是四年號、通計十年而終、與告貴年數正相符、則十年之間、蓋與告貴互相行也耳、始哭一作始大、）　顯轉（四年終）　光元（六年終、一作弘元、又曰光充、）　和京（五年終、一作和景繩、按和京元年、又爲定居元年、定居七年終、和京五年終、則仁王元年、卽爲定居六年、蓋是三年號、亦互相行也耳、）　仁王（六年終）　節中（五年終）

（舒明帝之時）聖聽（三年終、一作聖德、）　僧安（五年終、一作僧要、）　明長（五年終、一作命長、又曰長命、按自三年至五年、係皇極帝之時、）

右大化以前年號

（天智帝之時）中元（四年終、按戊辰爲元年、）

（天武帝之時）果安（按、不審年數、）

孝德天皇、○中略元年乙巳、用會長、三年丁未改元常色、○中略六年壬子改元白雉、在位十年、壽二十九、
齊明天皇、皇極重祚、元年乙卯、用白雉、○中略七年辛酉改元白鳳、○中略在位七年、壽六十八、
天智天皇、○中略元年壬戌、用白鳳、○中略在位十年、
天武天皇、○中略元年壬申、用白鳳、○中略十三年甲申改元朱雀、三年丙戌改元朱鳥、○中略在位十五年、
持統天皇、○中略元年丁亥、用朱鳥、○中略九年乙未改元大和、○中略在位十年、
文武天皇、○中略元年丁酉、明年戊戌改元大長、○中略四年辛丑改元大寶、○下略
〔清白士集十二元號略一〕同要、日本欽明天皇、一名天國排開廣庭天皇、國王以王爲姓、梁大同八年立、在位三十二年、改元八、朱彝尊跋海東諸國紀云、日本東鑑、卽吾妻鏡、往時亡友鍾廣漢、撰歷代建元考、獲東鑑、喜劇、著之于錄、然東鑑止紀其國八十七年事、晚得朝鮮人申叔舟海東諸國紀、此邦君長授受改元、由周至于明初、珠連繩貫、因取以補廣漢遺書、玉繩得勝二書、數十年不可得、竹垞翁所補、又無從訪求、祗據宋史日本僧奝然年代紀、及廣漢書爲識、知日本元號之闕漏尙多矣、同要或云同安、○中略
從貴、日本女主推古天皇、隋開皇間立、在位三十六年、改元六、○中略
師安、日本欽明天皇、○中略倭京、日本女主推古天皇、○中略朱鳥、日本天武天皇大海人、唐成享三年立、在位十五年、改元二、仁至、日本女主推古天皇、○中略端政、五年、日本崇峻天皇、隋開皇間立、○中略賢接、日本敏達天皇、陳太建間立、在位十四年、改元三、敏達一作達海、○中略和僧、日本欽明天皇、○中略藏和、日本欽明天皇、光元、日本女主推古天皇、常邑、日本孝德天皇、唐永徽元年立、在位十年、改元二、○中略兄弟、日本欽明天皇、○中略僧聽、日本宣化天皇、梁大同四年立、在位四年、僧要、日本舒明天皇田村、唐貞觀初立、在位十三年、改元三、○中略金光、日本欽明天皇、
〔清白士集十三元號略二〕善化、日本繼體天皇、梁天監十年立、在位二十五年、改元三、○中略頒轉、日本女主推古天皇、○中略
貴樂、日本欽明天皇、○中略鏡當、日本敏達天皇、命長、日本舒明天皇田村、○中略勝照、日本敏達天皇、定居、日本女主推古天皇、○中略發口、○發口恐敎到誤日本繼體天皇、結清、○結恐法誤日本欽明天皇、○中略白鳳、日本女主齊明天皇、一名天豐財重日足姬天皇、卽皇極天皇復位、前在位三年、唐貞觀十六年立、後在位七年、唐永徽六年立、
〔清白士集十四元號略三〕朱雀、日本天武天皇大海人、○中略太和、日本女主持總天皇、東鑑作持統、唐武后垂拱三年

壬申第四十代天武（中略）即位之年壬申、改元朱雀、癸酉二（〇中略）改元白鳳、甲申十三年（十二）朱雀元（〇中略）丙戌十五大化元（和州獻赤雉、因改朱鳥）（〇中略）

丁亥第四十一代持統（〇中略）壬辰六大長元（〇下略）

〔海東諸國記〕天皇代序（〇中略）

繼體天皇、（〇中略）元年丁亥、十六年壬寅、始建年號、爲善化、五年丙午改元正和、六年辛亥改元發倒、二月沒、在位二十五年、壽八十二、安閑天皇、（〇中略）自繼體沒後、二年無主、至是即位、元年甲寅、（用發倒）在位二年、壽七十、

宣化天皇、（〇中略）元年丙辰改元僧聽、在位四年、壽七十三、

欽明天皇、（〇中略）元年庚申、明年辛酉改元同要、（〇中略）十二年壬申改元貴樂、佛教始來、三年甲戌改元結清、（〇中略）五年戊寅改元兄弟、二年己卯改元藏和、六年甲申改元師安、二年乙酉改元和僧、六年庚寅改元金光、在位三十二年、壽五十、

敏達天皇、（〇中略）元年壬辰、（用金光）五年丙申改元賢接、（〇中略）六年辛丑改元鏡當、（〇中略）五年乙巳改元勝照、在位十四年、壽五十、

用明天皇、（〇中略）元年丙午、（用勝照〇中略）在位二年、壽五十、

崇峻天皇、（〇中略）元年戊申、明年己酉改元端政、在位五年、壽七十二、

推古天皇、（〇中略）元年癸丑、明年甲寅改元從貴、（〇中略）八年辛酉改元煩轉、（〇中略）五年乙丑改元光元、七年辛未改元定居、（〇中略）八年戊寅改元倭京、（〇中略）六年癸未改元仁王、（〇中略）在位三十六年、壽七十三、

舒明天皇、（〇中略）元年己丑改元聖德、（〇中略）七年乙未改元僧要、（〇中略）六年庚子改元命長、在位十三年、壽四十五、

皇極天皇、（〇中略）元年壬寅、（用命長）在位三年、

年（元丙辰）明要十一年（元辛酉、文書始出來、結繩刻木止畢、）貴樂二年（元壬申）法清四年（元甲戌、唐渡僧善知傳法文、）兄弟六年（戊寅）藏和五年（己卯、此年老人死、）師安一年（甲申）和僧五年（乙酉、此年法師始成、）金光六年（庚寅）賢稱五年（丙申）鏡當四年（辛丑、新羅人來、從筑紫至播磨燒之、）勝照四年（乙巳）端政五年（己酉、自唐法華經始渡、）告貴七年（甲寅）願轉四年（辛酉）光元六年（乙丑）定居七年（辛未、五經文法十具、從唐渡、）倭京五年（戊寅、二年難波天王寺聖德造、）仁王十二年（癸未、自唐仁王經渡、仁王會始、）僧要五年（乙未、自唐一切經三千餘卷渡、）命長七年（庚子）常色五年（丁未）白雉九年（壬子、國々最勝會始行之、）白鳳廿三年（辛酉、對馬銀採、觀世音寺東院造、）朱雀二年（甲申、兵亂海賊始起、又安居始行、）朱鳥九年（丙戌、仟陌町段始、又歌始、）大化六年（乙未、覽秘要集云、皇極天皇四年爲大化元年、）

已上百八十四年、年號、卅一代不記年號、唯有人傳言、自大寶始立年號而已、

〔如是院年代記〕（丁亥）第二十七代繼體（〇略中）（壬寅）十六善記元（或曰、繼體天皇自十六年始テ年號在之云、分者朱ニテ書之、年數相違之處在之、不審、〇中略）（丙午）二十正和元（太子立、年六十一、〇中略）（辛亥）廿五教到元（始作曆、二月帝崩、〇中略）

（丙辰）第二十九代宣化、僧聽元、（〇中略）（丁巳）二（戊午）三（己未）四（二月十日天皇崩）

（庚申）第三十代欽明（〇中略）（辛酉）二明要元（〇中略）（壬申）十三貴樂元（〇中略）（甲戌）十五法清元（〇中略）（戊寅）十九兄弟元（己卯）二十藏知元（〇中略）（甲申）廿五師安元（乙酉）廿六知僧元（〇中略）（庚寅）卅一金光元（〇中略）

（壬辰）第三十一代敏達（〇中略）（丙申）五賢稱元（〇中略）（辛丑）十鏡常元（〇中略）（乙巳）十四勝照元（〇中略）

（戊申）第三十三代崇峻（〇中略）（己酉）二端政元（〇中略）

（癸丑）第三十四代推古（〇中略）（甲寅）二吉貴元（〇中略）（辛酉）九願轉元（〇中略）（乙丑）十三光充（〇中略）（辛未）十九定居元（〇中略）（戊寅）廿六和景繩元（〇中略）

（己丑）第三十五代舒明聖德元（〇中略）（乙未）七僧要元（〇中略）（庚子）十二命長元（〇中略）

（乙巳）第三十七代孝德（〇中略）（丁未）三常色元（〇中略）（庚戌）六白雉元（白雉元年二月長門國獻白雉、改元白雉、〇中略）

（乙卯）第三十八代齊明（〇中略）（辛酉）七白鳳元（〇中略）

逸年號

年爲元年と通鑑にみえたり、十七年をふたゝび元年となし、ゝは、傾きし日の再午時にかへりしにかたどれる也、さて景帝は三元、武帝は十一元、三元は即位元年中元年後元年といふ、中後とは後よりいふ稱にて、その時は三ッともに同じ元年二年なれば、事に臨みてまぎらはしかりけむ、武帝にいたりては、しば〳〵の改元なるに、名字なくては紛はしき故、建元、元光、元朔、元狩などやうに、年の名號を設けし也、いづれも吉祥をまねき凶災を避るわざにて、和漢これをうけつぐ事なり、明世祖より、かの國は一帝一元なり、から書よむ輩、これをいみじき事にほめのゝしる、されどこれはいとしもなし、一帝一元がめでたくば、某皇帝初年二年にて事たれり、年號は何の料ぞや、漢文の惑をさとりて、漢武の蹤をふむ、をこ事なり、何のほむる事かはあらん、

〔秋齋間語四〕年號の下の字元の字なれば、元年と書事まぎらはし、それゆへにや元史二百八に、世祖之至元一年と書たるはおもしろし、

〔梅園日記四〕至元一

鹽尻に、下に元の字ある年號の歳をば、一年と書べきにや、元史二百八に、世祖の至元一年とあり、（秋齋閑語にも亦此説あり）按ずるに、元史是より前百三十一（亦黒迷失傳）にも、至元一年、入備宿衛、九年世祖命使海外入羅孛國と見えたり、されども卷五世祖至元元年紀には、八月丁巳、改中統五年爲至元元年とあり、必一年と書べきならば、爰にこそ記すべきを、さらぬにて鹽尻の説はうけがたきを知るべし、（世祖紀の外にも、至元元年の文、諸志諸表諸列傳中に多く出たり、）又八十七（百官志二）に、至大一年始置諸物庫とあれば、一年と書も、至元に拘りたるにはあらざるをしるべし、

○

〔二中歷二年代〕年始五百六十九年、内卅九年無號、不記支干、其間結繩刻木以成政、

繼體五年（元丁酉）　善記四年（元壬寅、同三年發護成始文、善記以前、武烈即位、）　正和五年（元丙午）　敎到五年（元辛亥、舞遊始、）　僧聽五

清和 貞觀 唐太宗年號、廿三、
醍醐 延喜 漢桓帝年號、九、
朱雀 承平 唐德宗年號、廿一イ 後魏南安王余年號、
村上 天德 維號
圓融 天祿 契丹年號
貞元 唐德宗年號、廿、
圓融 天元 唐德宗 五イ
村上 天曆 渤海唐王
六條 仁安 渤海唐肅宗イ
四條 天福 五代 晉高祖年號、八、
後深草 正元 魏高貴鄉公、二、
後二條 乾元 唐肅宗、二、
後醍醐 建武 後漢光武、晉惠帝、晉元帝、齊明帝、
後圓融 永和 後漢順帝、晉穆公、
後小松 至德 陳後主、唐肅宗二、
當今 文明 慕容忠 梁簡文、唐武后

〔台記〕天養元年六月廿三日癸卯、今日有列見及直物事、○中略 召師安重服 令進勘文、披見之、書曰、永治二年、余問云、可書康治元年、書永治二年如何、師安應聲對云、春秋之義可書康治元年、而依本朝之例書永治二年、余歎美曰、此事見定公元年、臨傾イ老忽發此言、儒哉々々、左大辨顯業承曰、爲明經博士宜矣、

〔羅山文集〕二十七 說 ○元年說
元年者何、君之始年也、曷爲不謂之一年、而謂之元年、元者善之長也、所謂仁也、仁也者人心也、人君之心善、則政令正、政令正則朝廷清、朝廷清則百官善、百官善則上下明、上下明則國家善、國家善則天下莫不一於善、故君子大體仁、昔者人君、以此心頒正朔于天下、天下奉而行之、是以謂之元年正月、而不謂之一年一月、唐虞曰歲曰載、夏亦曰歲、商曰祀、周曰年、一也、

〔年年隨筆〕五 元年は初年といふ事なり、一帝一元なる事いふもさら也、されど元は善之長なりとて、初年を元年といふか、もとより吉祥の名をもとめたるなれば、一帝幾千元なりとも、祥瑞怪異に元を改て、延壽消殃のはかり事あらんは、あるべき世のことわり也、それを惑なりといはゞ、元年も初年とぞいふべき、こは年の名號にて、後世よりあがれる代をいふに、分別しやすく、記臆しやすく、便ありていとめでたし、此事から國にて、漢文帝よりはじまれり、かの帝卽位十六年四月に、方士新垣平、使人持玉杯、詣闕獻之、刻曰、人主延壽、又言候日再中、居頃之、日却復、於是始更以十七

雜載

夏新上西門院崩御ありし、且去年及び此秋も諸州大風、洪水、庶民溺死千を以て數ふか、ゝる事につけても、正の字のためし思ひ出侍りしに、神無月十四日幕下薨せさせ給ひし、嗚呼賢哲の君にて渡らせましましければ、天下のおしみ奉る事いふばかりなし、因て云、宋の眞宗の豐亨を、楊大年が爲に不可といひ用ひざりしとかや、其外純熙隆平之號義を論じ、天聖明道の字を賀せし、歸田錄等に見へたり、我國正保の時、京童の口吟に、正保は正しき人口木哉といへりし、延寶改號の時、內々は明和と號せらるべきなど議せられ、勘文を草して啓せしに、法皇(後水尾院)聞しめして、九年あらば如何と仰事ありて、停しとかや、(めいわくとしと聞ゆる叡慮とかや)倭漢古へより、年號の文字評議有る事にや、

(賢)按、年號之事、近年紀傳明法の博士難陳有といへども、明和九之、後水尾帝の遺勅にもとりて、九年に當りて江戶大火、八月大風、南鐐銀通用して、天下の金氣失て、白氣の陰氣强行はれたる世とはなりたる也、是に依て安永と改たれども、江戶大火、洪水、疫癘流行、諸國山やけ出し、又天明と改れども、此盡る節は如何成行事哉覽と、京童の口吟にあり、打續淺間山燒出し、大水飢饉打續、六年は將軍御他界、執事家に難あり、此上は五穀豐饒を祈のみ、

〔本朝改元考〕本朝自大寶至今延寶、年號凡二百有六、同號者未之有也、其改元月日、博求具書之、日之與支干有異者、自大寶至天平寶字以儀鳳曆、自天平神護至貞觀以大衍曆、元慶以來以宣明曆、考而正之、以貽我後人、〇下略

〔元秘抄三〕和漢同年號例

(天武)朱雀　渤海
(文武)大寶　僞位梁簡帝年號、二、
(文武)景雲　唐睿宗年號、二、
(聖武)神龜　後魏孝明帝、二、
(聖武)天平　僞東魏年號
(平城)大同　僞位梁武帝年號、十一、
(仁明)承和　僞北小涼年號
(文德)仁壽　隋文帝年號、四、
(文德)天安　(雜號)後魏獻文帝年號

きこれらの類も又かぞふるにいとまあらず、凡和漢古今の事を併考ふるに、天下の治亂、人壽の長短、年號の字にかゝはらざること如此、

〔蠧尻四〕一謝肇淛曰、自古以正爲號多不利也、如梁正平天正元至正之類、爲其文一而止也と云々、按ずるに、是拘れる說か、夫正は君也、長也、定也、平也、是也、又邪の反にしてたゞしきを云、何の止りと云事かある、一而止、拆字の附會也、正の古文が正なる、是をも一而止といふべきやと云ひしに、或人曰、吾子が言も又一偏の義か、つら〳〵思ふに、我國文武帝の大寶已來、年號正の字を命せしは、一條院正曆を始とす、彼帝花山の淫風を繼ぎ、懦弱上古にもためしなかりし故、執柄家恣に天下を左右せし、是よりぞ王家の威衰へ、權下に移りし、其後は土御門院正治、其元年に賴朝薨じ、同御字に賴家橫死し、帝も又讓位の後西狩し給へり、後深草院正嘉二年暴風洪水、流疫打續き、伏見院正應元年大地震、其三年淺原八郎南殿を犯して自害せし、花園院正和四年鎌倉大火の災、後醍醐帝正中元年地妖數々ありて、帝外國へ遷らせましませし、光嚴院正慶、空しく廢帝の號となれり、後村上院正平、立かへる皇運もましまさず、南山に終らせ給ふ、稱光院正長は、凶に依り一年にして停ぬ、後花園院康正寬正の如き、天變(雨日及三日現じし事每度)疫癘巷に滿て、中々あさましき世也、後柏原院永正元年天下飢饉、前代未聞の凶事なりき、その他三笠山の神木、故なくして數株枯れ、彗星顯れて、太神宮池魚災ありし、山崩れ、海溢れ、(永正七年八月廿日洪濤、遠州今切入海となる、)或は武臣(細川政元)害せられ、將軍家東に奔り給ひし、正親町院天正に、京師寇火災しげく、其十三年信長弑せられ給ふ、又大風、洪水、地震、疫病、よからぬ事多かりし、此等の凶事、それならぬ年號の時も每々に有りしかども、謝氏が言によつて史を見れば、さる事多し、近頃後光明院正保、さしも凶變なかりしかど、明主援兵を請ひ、世間さわがしく、且在位の內崩御の御事、近き世聞へ給はず、○中略今の正德改元の後、壽經院(○壽經院、一本作女院)崩御、京極の宮打續薨せさせまします、大樹の御幼君(虎吉君)も過し冬御早世ありし、ことし

正長、康正、寛正、文正、永正等の號、五度に及びしかど、その程に滅び給ひしにはあらず、すべて本朝の年號始りしより此かた、其代々の事を細かに論じて、其事彼事不祥なりなど申さば、何れの字にか不祥の事のなからざらむ、其故は、改元といふ事、和漢ともに、多くは天變、地妖、水旱、疾疫等によらざるはあらず、されば古より年號に用ひしほどの字一字として、不祥の事に逢ふ事なかりしといふものはあらず、若必不祥の事、年號の字の致す所ならん事を患へば、古の代の時の如く年號といふもの丶なからんにはまくまじきにや、されど和漢ともに、年號といふものなかりし古の時にも、天下の治亂、人壽の長短、世として是なきにもあらず、某意多禮亞、喝蘭他亞等之人に逢ひて、當時蠻國の事ども具に聞しに、年號を用る國々わづかに二三に過ず、其餘は皆年號といふ事はなくして、天地開闢より、幾千幾百幾十年など申す也、されど二十餘年の先より、西洋歐羅巴の國々、多くは其君死して、それが世繼の事によりて亂し國すくなからず、こぞの冬、是年のはるも、多く戰ひ死せしなど申す也、是らは又いかなる事のたゝりぬるによりてかくはあるにや、さらば年號なしとも、天運のおとろへ、人事の失ふ所あれば、亂れ亡びざる事を得難しとは見へたり、又異朝代々に同じ年號を用ひし事、彼は興り是は亡びしも又少なからず、たとへば永樂の號は、初め五代の時に張遇賢といひし蠻賊、中天大國王など稱して、其元を永樂とせしが、ほどなく亡びぬ、其後宋の代に及て、方臘と云ひしが、帝を稱して永樂の號を用ひしに、わづかに八月にして亡びぬ、其後又大明の太宗卽位の後、永樂の號を用ひられしに、廿六年の寶祚を目出度し給ひき、是等の類悉くにかぞふるにいとまあらず、また本朝の號、異朝と同じきいくらもあり、たとへば建武の號は、後漢の光武、漢室を中興し給ひて、三十一年迄おわしましき、後醍醐院是を用給ひしかども、二年にも及ばずして天下亂ぬ、天曆は村上天皇の號にして、本朝の目出度代のためしには申傳へし所なれども、元の文宗の時、此號を用ひられしに、わづかに五年にして崩せられ

といひ、壯といひ、强といひ、艾といひ、耆といひ、老といひ、耄といふ、其稱同じからねど、唯その年の積れるにて、異なる人にはあらず、又生れて三月にして其名つき、二十にして冠して字つき、五十にして伯仲叔季を稱するごとき、その稱する所同じからねど、其命ずる所は異なるにあらず、かの年月日時といふものも、其稱同じからねど、時を積て日となり、日を積て月となり、月を積て歳となる事、譬へば幼弱、壯强、艾耆、老耄などいふ事の同じからねど、異なる人にはあらざるが如し、さらば年の號あるは、猶月の名あるが如くにして、又これ人の三月の名、二十の字、五十の字ある事の如し、もし歳の號に正の字を用ひん事の不祥ならんには、月の名に正の字用ひんもまた不祥ならまし、然るに古聖人の世よりして、今の世にいたる迄、毎年の一月を正月と名づけて、孔子春秋の法にも、四始と申て、正月をもて歳の始とは申す也、正の字誠に不祥ならんには、古の代より此方毎年に不祥の月を以て始とするなれば、夫より此方一年として不祥ならぬ歳といふは有まじき事也、是等は餘りに近き事にして、いはゆる睫を見ざるの論と申べしや、若年號には正の字不祥にして、月の名には正の字祥たるべき理あらんには、尋ねきかまほしき事なり、君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而爲天下則とも、又不知命、無以爲君子也とも承れば、かゝる不通の論など、君子の人の可申所とも覺えず、また我朝之年號に、正の字を用ひられし事、凡十六度、不祥の事のみありとも見えず、もし武家の代となりし後、正慶に鎌倉滅び、天正に足利殿滅び給ひしなども申す事もあるべきにや、平高時入道滅びしは、實に正慶二年五月なり、されど其祖相摸守時政より此かた、九世の間、正治、正嘉、正應、正安、正和、正中等の號、すでに七度を經たり、其家彼時に滅びずして此時に滅びしは、年號の字によれりとはみえず、これそのみつからとれる禍にぞあるべき、足利殿の滅び給ひしは、實に元龜四年七月三日、義昭出奔の御事によれり、これらの事によりて、此月廿八日に改元ありて天正とは號したりき、等持院殿よりこのかた、十三世の間、

を、律髓蒲室など、併せて甚だ賞翫せしをりなれば、かの詩格の蒙齋が序に、年號支干一字づゝ用ひしことと見ゆるをもて、一時雷同して效顰せしにや、唐土にも蒙齋が序よりふるくは所見なし、

〔碧湖雜記〕一卷、古今說海、說略部雜記家三十二卷中に收むに、五臣注文選謂、陶淵明詩、自晉義熙以後、皆題甲子、後世因仍其說、○中略按に、近來の文人年號を記せず、甲子のみを書を雅事とす、原淵明が所爲に習へるものなれど、御代の名を忌嫌て、天子に臣とならざるに似たり、學者心すべきわざぞ、

〔折たく柴の記下〕此程又信篤、獨都雜抄、秘笈、千百年眼等三部の書をひきて、年號に正の字を用ふるは不祥の事なり、早く改元の事あるべき由を云るして、老中の人々にまゐらす、詮房朝臣我思ふ所を問れしかば、當時我言用ひらるべきものにあらず、されど問ひ給はんに、答ふまじきにもあらねば、云るしまゐらせし事どもあり、其大要は、近世大明の人、年號之事を論じて、正。の字を用ひし代々不祥の事あり、凡そ文に臨みて忌べき字なりなど申す事、信篤が引きし所の外の書にも見え侍れど、皆是君子の論にはあらず、天下の治亂、人壽の長短のごとき、或は天運にかゝり、或は人事によれり、いかんぞ年號の字によりて祥と不祥と有べき、魏の齊王芳、高貴鄕公髦の武陵王、金の煬王哀帝、元の順帝のごときは、皆その不德によりたまひしなり、たとひ其年號は正の字用ひられずとも、是等の人主其國を失ひ、其身を滅し給ふ事なかるべしや、大明の世に至ては、正統正德の代々の事、皆其德のいたり給はぬと、其政のよからざるとによれり、年號の字の罪にはあらず、孟子無罪歲とのたまひし所、よく〳〵心得給ふべきもの也、天下の治亂、人壽の長短等、年號の字によらざることどもを論じ辨むには、其說殊に長くして、誠に無用之辨言の費なるべし、唯誰にも聞しめして、心得わかち給ふに、たやすき證一ッを擧て申べき也、凡そ人の幼といひ、弱

寶塔銘に、奉納三十幡神、武州國圓藏坊也、尾州住人吉左衞門作、寬七年六月吉日(信濃國岩村田所二掘出一塔銘中)有二銅像一、とみえたる、寶壽と寬との年號、他に考ふる所なし、穗積氏云、此年號考ふる所なし、寬七年と七の字双鈎に彫たり、銅に彫たるに脫字あるべくも思はれず、又寬の字の上に置たる年號にて、七年までつゞきたるは、寬平、寬弘、寬正、寬永、寬文なり、下に寬字を置たる年號にて、七年までつゞきたるはなし、此物、寬平、寬弘、寬治の古物にはあらず、近く寬永寬文の物にもあらず、若くは寬正七年丙戌の時の物にてもあらんか、考べき所なしと云り、左もありなん、古へ年號の字を略書する例あり、

〔眠雲札記 二〕年。號。單。稱。

近載以二翰墨一從二事藝林一者、或衒レ奇競レ新、熒二惑人眼一、動自稱二名手一、可レ歎也、予嘗觀二某書牘一、末題單係二年號一、若二弘化稱レ化、嘉永稱レ永之類一、如レ是殆若下嫌二國朝正朔一者上然、且不レ檢二出典一、謾襲二蹈前人一、施施自得、夫四海率土、靡レ不レ被二皇澤一、而單係二年號一、其忘レ我之罪、不レ容二於死一矣、按、連珠詩格于濟德夫序、紀二年號歲在一曰二德酉一、蓋謂二元大德歲在二丁酉一也、〇中略于氏事蹟雖二傳記無一レ所レ載、而推二思德酉字一、其嫌二胡元正朔一者、不レ待レ辨而明白、今世衒レ奇之人、妄傚レ顰、不二亦過一乎、

〔一話一言 十五〕德酉

五山の僧徒年を紀するに、年號の一字をきりて十二支を書く事多し、横川が京華集に、應仁元年丁亥を仁。亥。と紀し、萬里の帳中香の序に、延德三年辛亥を延。亥。と紀せるが如し、これ聯珠詩格の序(香易默齋)に、大德元年丁酉を紀して德酉とあるにならへるなるべし、

〔海錄 十五〕年號と支干を一字づゝかけること、五山僧などに多かり、信長記(卷十四九ヶ)作物記(相國寺惟高撰)に、永祿元戊午を永午とかけり、また松花堂所藏品圖の中、明岩正因墨蹟にも、文明八丙申を文申とも記せり、これら一時かゝることはやれるなるべし、そのよる所をおもふに、この頃聯珠詩格

筆墨各一返上　七月廿一日

○按ズルニ、天平感ハ、天平感寶ヲ略書セルナリ、

〔東大寺正倉院文書八〕海龍王經□（裏書）　史生廿六人　雜使卅五人　食飯廿九人
以前、食口幷返上飯等、注顯如件、以解、　勝寶二年四月一日、加茂書手、

○按ズルニ、勝寶ハ、天平勝寶ヲ略書セルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書二十〕秦家主解　申請暇日事
合參箇日　以廿一日參　過一日　右、以今月十六日夜、私蘆（廬）物所盜、爲問求請暇、仍注事狀、謹以申、
天平寶四年九月十七日、史生下道福麻呂、

○按ズルニ、天平寶ハ、天平寶字ヲ略書セルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書四十六〕大浦誠恐誠惶謹啓　應進上物事　右、前蒙恩澤、延期已訖、然爲進件物、遣因播使、今以消息、且到來、〇中略然忽有障、故不得自參、伏且煉灼、頓首頓首、謹狀、　寶字二年九月四日、大津大浦狀、　謹上　東大寺貴人殿人

○按ズルニ、寶字ハ、天平寶字ヲ略書セルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書十九〕謹解　申不參送事　比者、身沈疹病、不得動轉、唯恐勤不療治、露命難保、仍今注病狀、申送、謹解、　天寶字二年十月十日付榮道

○按ズルニ、天寶字ハ、天平寶字ヲ略書セルナリ、

〔東大寺正倉院文書七〕牒　東大寺司所　合可奉寫經卅卷　十一面經卅卷　孔雀王呪經一部
右、從來月六日以前可寫畢、故牒、　字七年六月卅日　法師道鏡

○按ズルニ、字ハ、天平寶字ノ略書ナリ、

〔逸年號考〕寬七年鍍金寶塔銘

護景雲の四字あり、いづれも漢土の例に傚ひたるにや、文字の美惡義理などは、勿論吟味講究して、古人の論辨したるを考索し、紀元あるべき事と覺ゆ、漢土にて改元の誤を論じたるは、明の熊和仲が千百年眼卷十二に、國家以改元爲重、然歷世無窮、美名有限、遂有前後相複之嫌、中略又當詳稽國運、如宋改治平、而說者謂火德不宜用水、則我朝土德不宜用水、犯之者有耗損元氣之嫌、又當審國姓、如周高祖姓字文改元宣政、當時以爲文亡日是也、又當避忌國號、如唐禧宗改元廣明、而當時以爲唐去其口、而著黃家日月、後果爲黃巢所簒是也、大率離合之讖、深微難逃、最宜熟察、桓玄改元大亨、議者以爲一人二月了、果二月乘輿反正于江陵、梁豫章王棟武陵王紀、皆改元天正、說者謂二年一年止といへり、其他齊後主緯は龍化と改元し、隋煬帝は大業と改元し、末齊顯祖は天保と改元し、宋徽宗は宣和と改元し、欽宗は靖康と改元し、各皆其徵を載せたり、又正の字はたゞしき字義なれど、一止を合せて正とすれば、正始、正隆、正平、正曆、正法の類、皆古徵にあらずといへり、正の字も用ひどころによるべし、此邦改元ある每に難陳といふ事あるは、專らに此等の事を是非せむが爲なるべし、

〔東大寺正倉院文書四十二裏書〕藥師經料紙充
道守豐足　十四張〇中略　右、依造寺次官佐伯宿禰天感元年五月卅日宣所奉寫、

〇按ズルニ、天感ハ天平感寶ヲ略書セルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書四十二〕花嚴經斷紙合八千九百九十張麻紙三千一百撰張
治田石麿充一千六百張〇既輸紙中略　已上五人充遣九百九十張麻紙百八十張　感寶元年潤五月七日、秦東人、

〇按ズルニ、感寶ハ天平感寶ヲ略書セルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書七裏書〕天平感元年六月十五日充、墨半廷、筆一、　二年七月五日、筆一、墨半廷、已

り、唯假名書のうへにのみの事と思ふべきにや、廿一代和歌集の序にも、藤原俊成卿の書れし千載集の序に始めて出たり、その前には見えず、

〔千載和歌集序〕わが君世を知ろしめしてたもち始め給ふと名けし年〇保元よりも、しきのふるき跡をば、むらさきの庭、玉のうてな、千年久しかるべきみぎりとみがき置き給ひ、〇下略

〔元號字抄〕一暦字以歷字之引文、被用年號之、暦與歷同之故也 永暦 後漢書曰、馳淳化於黎元、永歷代而太平、續漢書律曆志曰、黃帝造歷、歷與曆同作、依之毎度歷字之時、引加此文也、

〔安齋隨筆前編三〕一年號亨字。亨享の字紛れて書誤ることあり、元亨は周易に云、其德剛健、而文明應于天、是以元亨文章博士資朝考之と云文より出たれば亨の字也、享には非ず、永享は後漢書に云、能立魏々之功、傳于子孫、永享無窮祚と云文より出たれば、享の字也、享德は、尙書に云、世々享德、萬邦作式と云文より出たれば、是れも享の字也、亨にはあらず、皆考證の文に據て正せば書誤なし、考證は貝原好古が國朝年號譜に見たり、

〔德川禁令考八年號改元〕萬延改元、文字之儀に付達萬延元年四月十二日 御勘定奉行江

覺

此度改元被仰出候萬延之文字、重き事之外、萬万之文字、いづれの方認候而も不苦旨、向々江相達候間、向後御切米御扶持方、幷御貸附金請取手形等江も、万延と相認候向も可有之候間、差支無之樣可被取計候事、

〔茅窓漫錄下〕革命紀元〇中略 文字を用ふるも、一字より四字まで、古例法則あり、方日升曰、案紀元云、以一字紀元者、始於漢文帝後元年、景帝中元年、以二字紀元者、始漢武帝建元元年、以三字紀元者、始於梁武帝中大通元年、以四字紀元者、始於漢哀帝大初元將元年、今詳立號紀元、當始於文景、非武帝也、見韻會舉要小補 此邦異年號に、兄弟和、倭黃縄、白鳳雉の三字あり、又天平感寶、天平寶字、天平神護、神

へず、年。號。ノ。よ。み。や。う。訓解を記したる書有之候哉、

本朝年號の事、先年滋野井殿へ窺申處、凡て呉音に唱る事に候へ共、呉音にて連聲のあしく、聞ニうるさき唱は、漢音にも唱る也、文明慶長と唱べきを、俗にはブンメイ、ケイ長と云ふはあしゝ、乍然難陳の度々音義の惡きは一難を得る事に候へども、先はジユク、ヒヤウ、ナン等ノ音ノあるハ、勘例に省く事之由、又大化は大化と濁音ニ可唱事ニ候へ共、往昔より大化トスミ來り候類も在之候由、此外いろ／＼の口話御座候キ、年號ノ儀ハ、別に考運會トカ申書御座候由、文章家にて秘書ノ由、滋野井家にも御藏本無之由承申候、

〔秋齋間語　二〕慶。の。字。年號に用ればケウとよむべき由、されば天慶もてんけうとて、慶長をけうちやうとよむ人あり、榮花物語月宴卷に、てんけい九年と書たり、板本の書たがへるにやと、類本をあつめ校合するに皆おなじ、

〔松屋筆記　六十七〕勘文、幷年號の訓法、及唐音對馬讀、

同條○革暦勘文革命仗議記に、○中略建仁難□□□諱、年號用對馬音、御諱用唐音、非深難歟、愚按、仁字已同、和漢之音、差別無其詮歟、然而復言、不兩箇之間、付輕可計用云々、按に、對馬讀は尼法明、百濟より傳來せる訓法にて、呉音也、法明は、山階寺維摩會興行の尼也、年號の訓法は、漢呉音付輕可計用よし此文にて知べし、

〔類聚名物考　政事九〕年號字訓を用ひし例　年號の字は、すべて漢の制に習ひて立られしものなれば、音。讀。に。し。て。訓。を。用。ゐ。ず。、去かるに天武天皇の御宇、日本紀に、朱鳥を此云阿訶美苫利と有を始とせり、さて此後は又かゝる例なくして、又音讀にせし事也、然るに中古の比より、假名書歌の序などいふものに、又紀號を訓讀にせし事あり、是は天下にわかつてかくとなへよとの仰方有にはあらず、唯その假名書のさまによりて、やわらかに訓讀にせしものなり、さればとて後世にみだりに訓讀にはすまじきもの、されども假名書には、又さ書たりとて僻事ともいふまじきな

ひしに、某申す、我朝の今天子の號令天下に行われ候事は、ひとり年號の一事のみにて、異朝までも、末代迄も傳へ聞ゆべき所に、近き比ほひの年號、大きに古に及ばざる樣に覺へ候、是は取用ひらるゝ字の、餘り其數すくなく候によりて、僅六十餘字歟しかるべき號の得がたきが致す所と存候へば、いかにも用ひらるべき御事の候もの哉と申候ひしに、されば今も新字勸進の事勿論也といへども、新字におゐては不祥の例あるよしを難じ申すに付て、陳ずるに其詞なきが故なりと答仰られき、

〔松屋筆記百十二〕改元年號の文字

戶田茂睡が職原口訣大事に、改元年號の事、年號の文字定りて六十餘あり、然れば上を下に下を上におきかへ、一字に六十餘の文字をかへ〳〵して、六六三萬六千にても、又三十六萬とも、三十六億萬歲にても、數定ればつくる期あり、盡ると云はよからぬ事也、それによりて改元の時、勘文をはじめて上る人、文字一字を定りたる年號の文字の中へ入る也、天和年號あらたまる時、唐橋殿愼の字を入られし也、唐橋殿又貞享の年號を勘らるとも、一人一字の作法なれば、はや文字をば入られざる也、貞享の年號余人勘らるれば、又文字入也、然れば一字の文字にても、上におき下におきすれば、定り六十字に合せても、百廿の年號あり、是にて濱の眞砂はよみつくすとも、年號の文字の盡る事なき子細あり云々、

〔中右記〕天仁元年八月三日庚辰、今夕可有改元也、頭爲房朝臣下年號勘文於左大臣、可定申之由所仰下也、○中略藤宰相顯申云、天仁、承安可被用、○中略予申云、此年號共不心行也、正治ハ返音詞也、頗有忌諱音也、天仁ハ音又通天人也、年號或漢音、或倭音、共所被讀也、天人頗不得心、共不心行之中、被用正治如何、人々多被同予詞、

〔安齋隨筆後編十二〕一本朝ノ年號、俗ノ唱ル所ハ吳漢兩音を交て、一定格無之、名目抄などにも見

大 下上 三　寶 下上 一三　慶 下上 五一　雲 下上 一　和 下上 十一 一　銅 下上 一　靈 下上 一　龜 下上 二
養 下上 一二　老 下上 一　神 下上 一　天 下上 十 五　平 下上 五一　應 下上 十七　延 下上 三八　曆 下上 十二 一
同 下上 一　弘 下上 二三　仁 下上 八四　長 下上 六十　永 下上 四六　嘉 下上 一七　祥 下上 一　壽 下上 三一
齊 下上 一　衡 下上 一　安 下上 十三　貞 下上 一五　觀 下上 二一　元 下上 十八 一　寬 下上 一八　昌 下上 一
泰 下上 一　喜 下上 三　德 下上 十一　康 下上 十　保 下上 四五　祿 下上 三　永 下上 五十 二　祚 下上 一
正 下上 三十　治 下上 十三 四　萬 下上 一一　久 下上 五二　文 下上 一八　建 下上 八　福 下上 一　禎 下上 一
乾 下上 一　中 下上 一　武 下上 一一　至 下上 一　明 下上 一一　享 下上 一一　吉 下上 一　化 下上

〔元號同字類聚抄 附記〕本朝歷代元號之字 載廣運會
孝德天皇
大化、白雉、朱雀、白鳳、朱鳥、以上不稱來、文武御字自大寶及嘉吉、六十字也、加化字爲六十一字、

大　寶　慶　雲　和　銅　靈　龜　養　老　神　天　平　勝　字　景　護　同　弘　仁
長　承　嘉　祥　壽　齊　衡　安　貞　觀　元　寬　昌　泰　延　喜　曆　德　應　康
保　祿　永　祚　正　治　萬　久　文　建　福　禎　乾　享　中　武　至　明　吉　亨

〔光臺一覽 四〕扨菅家年號を被選出法は、六十四文字、本字は近代增字二十四字、上下に顚倒して字を雙也、書經魯論之熟字に符合させ被書出事也、

(頭書)　六十四字

吉、白、神、乾、康、保、永、寬、和、延、應、承、觀、護、雉、鳳、雲、至、萬、德、元、仁、弘、祿、喜、文、明、勝、朱、字、鳥、正、禎、嘉、大、享、亨、壽、養、祿、同、銅、靈、齊、慶、建、長、治、寶、天、曆、安、貞、福、衡、老、泰、化、祥、武、平、久、祚、景、

増字廿四字

豐、中、興、光、運、興、國、咸、孝、清、通、聖、熙、隆、顯、紹、淳、曜、靖、開、昭、專、祐、宣、

〔年號辨〕去る年之冬、某君○新井美在洛の日、前攝政殿下○近衞家熙と本朝年號の事を論じ申ける事の候

易緯 敦光
尙書孔安國傳 敦光
漢書 朝綱
東觀漢記 長光
宋書志 永範
魏志 長光
後魏孝文帝登高文 有元
孟子 朝綱
抱朴子 定親
孔子 同
揚子法言 敦光
維城典訓 家經
春秋元命苞 資業
呂氏春秋 正家
論衡 匡房
典言符命 明衡
漢武內傳 成光
長短經 光範
御注孝經 爲長

尙書堯典 國成
周禮 永範
後漢書 擧周
晉書 定親
齊書 義忠
隋書 永範
魏文典論 實光
荀子 資業
淮南子 實政
孟子解義 永範
顏氏 永範
符瑞圖 同
孔子家語 同
白虎通 實綱
博物志 成季
河圖挺佐輔 敦光
河圖 長光
龍魚河圖 俊經
修文殿御覽 經範

毛詩章 敦季
史記 擧周
漢書禮樂志 在良
宋書 在良
北齊書 永範
吳志 永範
新唐書 敦周
老子 同
管子 永範
莊子 實義
大公六韜 爲政
張衡靈憲 同
崔寔政論 定親
典言 行家
文選 匡房
春秋繁露 有光
帝王秘錄 永範
貞觀政要 光範
宋韻 經範

〔有職書〕一元號上下字 文明改元之後撰

後漢書云々々　　權中納言大江朝臣匡房

嘉保三年十二月　日改元、永長書樣如此、此後康治五年、于時大宰權帥長治三年、嘉承三年、天仁三年等勘文皆此定也、又保延七年、康治三年等實光卿勘文、幷仁安四年資長卿勘文等皆以如此、此以後之人人更無相違、前官之後前權中納言藤原朝臣某納言後進年號紀納言例也、彼時書樣別於非參議歟之由、諸本注付寬治八年匡房卿勘文與、雖然彼納言勘文無所見歟、抑菅家者納言以後勘文書樣依無先規、頗不審也、尤可加斟酌歟、但聊廻愚案、准他家例不可書勘申二字幷右狀、與可書年號月日位官姓尸名歟、於年號位等者、菅家皆書習之故也、但至納言者、尙廻思慮可相計歟、

〔拾芥記上〕一改元事

八月三〇長享年十四日町來、有改元之沙汰、雜談云、寶仁之引文、以珍寶爲仁義トアリ、其ヲ以珍寶作仁義トカク、故實也、爲ノ字ヲ書時ハ爲。仁。〇土御門ツヾク也、故作字トナス、又引文云、君子體于仁トト云ハ、本文ハ于字不入、雖然體。仁。〇近衛御名字之間、于字ヲ入テ書事故實也、改元可爲廿一日云々、然者先被召內勘文、長直卿以爲長卿參議之時例、年號字四勘進之、雖然無可然字之間、後又依仰、年號字二被進云々、廿一日丁未改元延德、菅宰相撰進之、

〔元秘抄三〕年號引文

論語在頁始出　孝經永範　禮記資業
毛詩輔正　尙書輔正　周易同
左傳同　論語疏資長　孝經援神契光範
儀禮成季　尙書傳資綱　尙書正義明衡
禮記正義定親　周易注疏永範　詩緯敦宗

所令獻之勘文、只暫可返遣候、遣因幡權守之許令書之處、書加年號月日候云々、无先例云々、可書改候也、失錯候也、大治六年正月廿七日、從四位上行文章博士兼讃岐介大江朝臣有元、此例少候也、菅家、定義、在良、如此所書進候也、不可爲指南候歟、不書月日之時、不書位候也、令云改卽可進覽、多謹言、

文章博士有元、

大治六年六月廿八日、夜半江亭被來、安寧者天皇之號也、早可被止也、直止安寧之勘文、被取元勘文畢、

納言以後書樣

勘申年號事

嘉保

史記曰〻〻

承安

論衡曰〻〻

右依宣旨勘申如件

權中納言大江朝臣匡房

寬治八年十二月　日改元、嘉保　匡房卿納言之後、初度勘文如此、書樣與日來無相違歟、但或一本不載端勘申幷右狀、雖同常體、諸本如此、仍乍不審注載之、

年號事

政和

毛詩云〻〻

永長

荀子〻〻

政和

禮記曰〻〻

平泰

老子曰〻〻

右依宣旨勘申如件

式部大輔兼播磨守藤原朝臣資業

勘申年號事

承天

周易曰〻〻

應德

典言符命曰〻〻

右依宣旨勘申如件

大學頭兼文章博士東宮學士藤原朝臣明衡

菅家之外、他家々勘文書樣、皆悉此定、更無相違、勘申年號事、一行書之、不書年號月日幷位等官、（有兼官者書之）姓尸名許載之、至參議之時無相違、納言後書改之、但萬壽五年七月廿五日改元、（長元）善滋爲政（于時文章博士河內守）勘文名字下書勘申之兩字、此外如此之事不見及、長元十年四月廿一日改元、（長曆）藤義忠（于時大學頭大和守）不書勘申之字、初行書年號兩字、不載事字、又不載右狀、大治六年正月廿六日改元、（天承）文章博士江有元勘文載年號月日位等、乞返勘文止年號等進上云々、江亭被送大外記許書狀

永祚二年三月十三日　　正四位下行式部權大輔菅原朝臣輔正

天德五年二月十六日改元、（應和）應和四年七月十日改元、（康保）此兩度文章博士文時勘申之由、雖有所見、勘文之體不注載之間不分明、仍此相公勘文注載之、長德四年二月二十日改元、（長保）參議三品之時、御勘文書樣、更無相違、此後菅家之輩勘文書樣如此、但長元十年四月十九日改元、（長曆）菅原忠貞（于時從四位上兵部權大輔文章博士）勘文、右狀不載依宣旨之三字、右勘申如件、如此載之、如何、又承德三年八月廿七日改元、（康和）菅原在良（于時從四位下文章博士）勘文、勘申年號事、別行不書之、一行書之（如他家書樣）如此、但此以後度々年號勘文如然不書、別行書年號事三字、（如菅家書樣）承德三年書樣不可然歟、若又古勘文本等傳書之誤歟、將又天喜六年七月日改元、（康平）菅原定義勘文、或本勘申年號事、一行書之、雖然他本等不然、如普通二行書之、但本書誤之條無疑歟、在高卿二品之後勘文、書樣無相違、至參議二品之時、於書樣者不可有相違、納言之後書樣無先例、尤可有斟酌歟、

他家書樣（菅家作之抄也、仍非菅原之他家之由載之了、自餘准之、）

勘申年號事

天受

孟子曰ゝゝ

治安

漢書文帝紀曰ゝゝ

右依宣旨勘申如件

右大辨大江朝臣朝綱

勘申年號事

成德

他人之條、是始歟、可勘見事也、

〔宗建卿記〕享保廿一年二月廿二日、於省中改元定、勘者仗議、公卿等被定云々、今度勘者被加清二位、以主上上皇思召之由、於清家年號勘進希代之例云々、 廿八日、武傳參洞、兩人言上年號勘者被加清二位之事、 四月廿八日、改元定、

〔元秘抄 二〕年號勘文書様 菅家書様 本ニハ當家書様ト有之、雖然予如此書寫之、前後ニ皆當家ト書ハ菅家事也、

勘申

年號事

天保

毛詩云、天保下報上、君能下下以成其政、臣能歸美以報其上、天保定爾亦孔之固、注云、保安也、天之定汝亦固也、

皆安

尚書云、官職有序、衆政惟和、萬國皆安、所爲至治也、

平康

周書云、畯民用章、國家平康、注云、賢臣顯用、國家平康、

能成

周易云、日月得天而能久照、四時變化而能久成、聖人久其道而天下化成、又云、能成天下之務、能通天下之志、注云、各得其所恒、故皆能久長也、

和平

周書云、聖人感人心而天下和平、

右依宣旨勘申如件、

年號勘者

統、愼始之義、可謂兩得之矣、謝肇淛稱其卓越千古、非虛論也、獨者所謂粗略於始先、而精詳於終後、不其然乎、雖非先王之制、而亦能本於先王之意、則雖百世遵行可也、

明治元年を距ること七十八年、既に此論を立られしは卓見と謂ふべし、よりて此に附記す、

〔菅家文草四詩〕讀改元詔書絕句

明王欲變舊風煙、詔出龍樓到海壖、爲向樵夫漁父祝、寬平兩字幾千年、

〔光臺一覽四〕抑又菅家と申は、道眞公的々の御苗裔として、今に文筆を家業とせらるゝ事也、高辻、五條、東坊城、唐橋、淸岡、桑原、　四軒は本家等同にて、淸岡桑原は庶流也、〇中略又年號之事も、此家より選出事に候、

〔譚海四〕年號の文字は文章の博士より撰進する也、菅家江家かわる〳〵撰びて奉る也、其年の年號行るゝ間は、年號料とて、公儀よりその家へ別祿を百名ツヽ賜る事なり、

〇按ズルニ、此ニ菅家江家互ニ年號ヲ勘進スル如ク云ヘレド、必シモ然ラズ、後世ハ獨リ菅原ノ一流ノミ勘進シテ、他家ハ殆ド之ニ與ラズ、又年號料ノコトモ他ニ所見ナシ、甚ダ疑フベシ、

〔江吏部集中〕長保寬弘之間、天下幸甚、老儒不堪傾感、聊述所懷、

長保初年開后房、寬弘頻歲誕親王、二之年號臣所獻、仰望江家父子昌、（謹按舊事、延喜年號、紀中納言所獻、其子淑光、類歷顯要、列卿相、天曆年號、江中納言所獻、其子齊光、類歷顯要、列卿相、長保寬弘之政、擬延喜天曆、江家因斯所憑居多、）

〔親長卿記〕文明十九年四月廿五日、勘者事、翰林一人之間、今一人可被召加別勘文、唐橋前中納言、日野前中納言、（量光）菅宰相、（在永）高辻三位長直等、可被載御點歟之由申了、　廿日、今日改元定也、〇中略抑今度勘者事、日野前中納言（量光）御點也、雖然在國、（因幡國）近日依國中亂逆、通路等不叶之間、可罷上候事不叶之由、以便宜申上之由、父一品（實綱贈）申之、近代年號勘文日。野。一。流。不。進。勘文、今度不參、無念之至歟、各以此所存、雖爲何樣之儀、可召上之處、處于口外之條、且口惜、且未練之至也、菅。原。五。人。不。交。

られたる者なりき、これら必參考の一とはなりし者なるべし、其建元論は、早く寬政三年辛亥（一正齋年十八）になれる者にて、其文左の如し、

建元惡乎始、始於漢武、然則非古聖人之制歟、曰其法固始乎漢武、而其義則未嘗不本於先王之意也、古者天子有四海、諸侯有一國、王公卽位、各紀元年、愼其始也、每歲天子頒朔、諸侯奉而行之、謂之王正月、大一統也、雖然各國紀元、彼此不一、則是曷若夫年號之建、通于天下而一統爲最大也哉、秦廢封建、海內混一、而漢猶有諸侯王、當時紀年、上書天子大一統之年、而下書諸侯王自有國之年、譬如魯孝王刻石曰五鳳二年魯三十四年是已、何必王正月云乎哉、故年號之行、通於天下、雖僭位假號者、無復容其僞矣、此非漢武之智、能過聖人、而先王之制不及後世也、凡天下之事、必粗於始而精於終、略於先而詳於後、其勢然也、宋儒胡氏以爲、元原於一、而後世紛々、別建年號、失其義矣、而朱氏譏其說高而不曉事情、迺曰、如今中興以來、七箇元年、若無年號、則契劵能無欺弊者乎、可謂當矣、然則年號既建矣、元亦可屢改乎、曰不然、元之爲言首也、人君卽位、既已紀元、豈可復改乎、而其復改者戰國之末造也、餘習所存延及漢氏、文景中元後元、再三改元、至武帝建年號、則其改亦屢矣、雖不能無失愼始之意、而亦能得一統之義、夫復何咎、後世妄庸之主、踵而行之、一世數元、可謂濫也已、雖然唐宋之君、傳世二十、歷年三百而止、則一帝數號、猶尙可紀也、夫皇朝自孝德帝肇建大化之號、至今六十有餘世、一千有餘歲、其間或以祥瑞名年、因災異改號者、殆過二百、皇統之隆傳之無窮、而與天地終始、則自今以往、一帝數號、其可勝紀邪、革之象曰、先王以治曆明時、而讖緯家因有革命革令之文、自延喜中博士淸行首唱此說、辛酉甲子必爲改元、蓋治曆明時、有變革隨時之義、故取其象云爾、革命乃湯武順天應人之事、非所施於萬古一姓之邦、而讖緯誕妄、又何足言哉、且夫祥瑞不足恃也、災異固可畏也、能知其不足恃、則何必名年、能知其可畏、則修德以勝之而已、亦何必改元、明氏之建國也、累世相承、於卽位之踰年改元、終身不易、其於一

輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼年百歲以上給穀四斛、九十以上三斛、八十以上二斛、七十以上一斛、庶幾被德風于四極、致太平于萬邦、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

慶應元年四月七日

二品行中務卿臣

正五位下守中務大輔臣卜部朝臣敍久宣

正五位上行中務少輔臣藤原朝臣資生 本行

〔太政官日誌八十一〕九月八日御布告寫

今般御即位御大禮被爲濟、先例之通被爲改年號候、就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ、屢改號有之候得共、自今御一代一號ニ被定候、依之改慶應四年可爲明治元年旨、被仰出候事、

九月

改元詔

詔、體太乙而登位、膺景命以改元、洵聖代之典型、而萬世之標準也、朕雖否德、幸頼祖宗之靈、祇承鴻緒、躬親萬機之政、乃改元欲與海內億兆更始一新、其改慶應四年爲明治元年、自今以後、革易舊制、一世一元、以爲永式、主者施行、

明治元年九月八日

〔如蘭社話二十六〕御即位新式 并建元論　宮崎幸麿呂

御一世一元の制を定められしは、廟堂の大議に決せし者なるべけれど、また學者の意見をも採用せられしは疑なき事なり、余さきに加藤櫻老翁が、當時其すぢの人に出したる意見書を見し事あり、そは水戸藤田一正翁の建元論を引きて、いたく一世數號の不可なるよしを辨へ

同五年辛酉二月十六日庚辰、左大臣以下參入、有改元之事、詔文云、黍居握符之名、未知馭俗之道、況比年災異荐臻、此歲辛酉革命之符已呈、懍々乎如乘奔而無轡、方今紬撿崑篇、遐尋鳥策、上古帝王、南面稱孤者、畏警誡而建元、或警咎徵而改號、是則修德却禍、與物更始之義也、改其天德五年、爲應和元年、○下略

〔本朝文粹二詔〕改元詔　慶保胤

詔、唐堯之馭民也、敬雖授時而未號、漢武之撫俗也、初以建元而爲名、自爾以來、或遇休祥以開元、或依災變以革曆、朕以庸虛、猥守神器、愼日是幾多日、計年唯十五年、天之未忘、屢呈妖怪而相誡、德之是薄、雖致兢惕而不消、去年黍稷之遇炎旱矣、民戶殆無天、宮室之爲灰燼焉、皇居唯有地、欲修、又作百姓之費、將廢素非一人之居、惻隱于懷、寤寐難忍、方今上玄之譴便如是、中丹之謝欲奈何、宜改正朔以易率土之聽、施德政以解圄扉之寃、其改天元六年爲永觀元年、大赦天下、今日昧爽已前、大辟已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、咸皆赦除之、又一度竊盜、計贓三端已下、同始赦免、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、又老人及僧尼百歲以上、給穀四斛、九十以上三斛、八十以上二斛、七十已上一斛、庶幾攘餘殃於未萌、期弊俗於有截、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

永觀元年四月十五日

〔言成卿記〕慶應元年四月七日改元定(中略)改元治二年爲慶應元年十三日、去九日加名詔書寫、宗岡玄蕃少允所望人々連名、雜掌當廻達之由、自廣幡被傳、寫取梅溪江被傳達了、

詔、感禎祥而建元聖人常制、依咎徵以改號王者恒規、朕庸昧承運膺萬國之貢珍、瑞應未呈、値外夷之寬邊、加以去年秋七月、防長凶徒卒犯禁闕、銃炮餘火忽灰輦下、海內殆將扇動、庶民不得安居、朕之不德、民其何辜、方今願思天下形勢、如素卵之累殼、似玄燕之巢幕、戰々兢々不知所裁、宜從先蹤以施新元、蓋與物更始之義也、其改元治二年爲慶應元年、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無

詔、朕聞、善政之報、靈貺不違、洪化之符、神輸必至、朕以寡薄、忝奉丕基、德未動天、惠非感物、而去正月、卽位之日、但馬國獲白雉一、二月十日、尾張國言、木連理、閏二月二十一日、備後國貢白鹿一、或體誤曉月、羽毛映於丹墀、或幹凌寒霜、枝柯被於青郊、皆應符改色、感祥變容、豈人事乎、蓋天意也、當是上玄錫祉、下民蒙恩、今若仰而不宣、謂朕晦昧、思與海內同此休徵、亦夫因瑞建元、非無故實、嗣位紀號、既有前聞、況今柘燧改烟、葭灰正氣、風物和暖、卉木繁滋、宜逮佳辰以開寶運、其改貞觀十九年爲元慶元年、自今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發露、未發露、已結正、未結正、繫囚見徒、悉皆原放、但犯八虐、故殺謀殺、强竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦例、又內外文武官、主典已上賜爵一級、正六位上者、廻授一子、五位已上子孫、年廿已上者、叙當蔭之階、僧尼滿位已上、加位一階、大法師位已上者、廻授弟子、夫以九州雲擾、百郡星連、天降禎祥、地有處所、宜復尾張、但馬、備後等三國百姓當年徭役十日、就中瑞所正出、特須優矜、令葦田郡、勿輸今年之調、春部及養父郡、並免當年之庸、接得神物者、多治比部橘、但馬公得繼等、叙正六位上、賜物准例、看著珍木者、僧道能、到岸等、授位二階、並賜物准例、庶使鴻休罔極、流遠近而普霑、鳳曆無疆、配乾坤而彌久、主者施行、元慶元年三月六日、

〔改元部類〕外記日記云、承平八年五月廿二日戊辰、○中略 詔、朕夙膺慈睠、虔奉叡圖、萬姓爲心、苟責之憂自切、四海在念、負重之懼彌深、履薄馭朽、九載于玆、而保章司曆、去春奏以厄運之期、坤德失宜、今夏旣其地動之異、靜思彼咎、實疾于懷、方今訪遺風於西漢、畏驚誡而開元、撿舊跡於先朝、忌革命而改號、是則修德勝災、與物更始之意也、可改承平八年爲天慶元年、大赦天下、今日昧爽以前大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、及犯八虐者、皆悉赦除、又一度竊盜計贓三端已下者、同放免、但强竊二盜、故殺、謀殺、私鑄錢者、不在此限、又承平三年以往、調庸未進在民身者同亦免除、若與善之非忘、何轉禍之可疑、宜布遐邇、俾知朕意焉、主者施行、

〔革命勘文上〕元應三年、大外記中原朝臣師緒勘例、應和元年例、

上卿奉勅、仰内記令作詔書、即令賷内記、就御所奏聞、（今案、先以草案可奏歟、）御畫日畢、著本座、召中務輔若丞、於陣膝突給之、畢省寫一通、進外記、外記連書、大臣以下署所印署訖、大納言覆奏、（外記進文、大納言奏於東階下、付内侍等之儀如常、）御可訖返給、大納言至階下、取奏狀給外記、還著本座、外記於陣前小庭候、上卿氣色、稱唯持退畢、或外記持退於膝突、上卿取以開見御可之有無畢、返給外記、外記持退畢、但内記不參之時、以博士辨令作詔書畢、上卿奏云、内記不參、以辨某令奉仕詔書者、勅許之後、仰辨令作、辨以草案不入莒、取副笏奉上卿、上卿召外記、莒入之奏聞、詔勅下所司之後、有誤之時、更召返如下儀奏聞改直又下給之云々、

〔北山抄 六〕詔書事（改元、改錢、并赦令等類也、臨時大事爲詔、尋常小事爲勅、）

上卿奉勅、仰内記令草之、即令賷内記、就御所令奏、返給、令清書之、（用黃紙、）又參上令奏聞、御畫日、（月日上字内記已書之、一日、二日是也、見令條記、）畢還著本座、召中務輔給之、（作入内記所莒給之、見貞信公延喜十四年二月十五日御記、輔若不參、給丞、丞已上不參者、召錄令外記傳給之、爲有例也、）省寫一通進外記、參議已上署畢、大納言覆奏、（外記進之、大納言披見返給、外記退立、上卿起座至軒廊西一間、取之付內侍、舊例、先入莒覽之、次插文杖持候、近代作插文杖覽之、若大納言不參者、中納言奏之、或大臣奏云々、中納言又不參時例也、內侍不候之時、進御所付藏人奏聞、）御可畢、（覆奏詔奥、可一字、自年號頗寄奥書之、）返給、大納言至階下、取奏給外記、（於本所給之、外記立第二間南頭、上卿取笏退歸、）還著本座、外記持候膝著、上卿取之見御可之有無、（舊例、外記退出後、更入莒覽之、而近代如此、下畢後若有誤、可改正者、召返奏聞、如下時儀、改畢奏聞下給、又如初云々、若有所誤見者、可奏也、若有落字、令奏事由、召詔書作者令書加、見元慶五年正月五日私記、）

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦元年八月己巳、詔曰、殷周以前、未有年號、至于漢武始稱建元、自茲厥後、歷代因循、是以繼體之君、受禪之主、莫不登祚開元錫瑞改號、朕以寡德、纂承洪基、託于王公之上、君臨寰宇、既經歳月、未施新號、今者宗社降靈、幽顯介福、年穀豐稔、徵祥仍臻、思與萬國、嘉此休祚、宜改天應二年曰延暦元年、其天下有位、及伊勢大神宮禰宜、大物忌、内人、諸社禰宜祝、并内外文武官把笏者、賜爵一級、但正六位上者、廻授一子、其外正六位者不在此限、

〔都氏文集 四 詔書〕改年號詔

號となりしも多かり、年號さへ時に用ひられずして、又期ありて被行けるあり、人の世の擧止めらるとも其期有る事にこそ、

吉書奏

〔中右記〕永長元年十二月十七日癸酉、今日大乘會始也、(但無舞也)申時許左大臣被參仗坐、(○中略)秉燭之程、左大辨被參入、以藏人辨時範被下年號勘文、(○中略)是依天延例可行者、彼時有天變地震也、(○中略)今夜可奏吉書、予(○藤原宗忠)先參御直廬内覽吉書、(美作國年料米解文、指笏用文杖、○下略)

〔改元部類記〕中右記、康和元年八月廿八日戊戌、今日可有改元也、(○中略)仰云用康和字、(○中略)左少辨時範先覽吉書於左大臣、(美濃國年料米)主上御出晝御座、左少辨奏件年料米解文、歸出陣下左大臣、(返給下史云々○下略)

〔中右記〕永久六年(○元永元年)四月三日乙卯、申時許外記來云、今日俄可有改元定、必可參仕由、頭辨所仰下也者、(○中略)頭辨來仰云、(○註略)改元可用元永也、(○中略)欲有吉書而御物忌間、上臈職事一人不籠如何、殿下所被仰之故也、(○中略)仍被相尋之處、輕御物忌也、仍被破了、右中辨雅兼朝臣、申年料米解文於内大臣、(加賀國)見了返給、

保安元年四月十日庚辰、頭辨以改元勘文(件勘文、今朝先被奏云々)下内府云々、(○中略)頭辨來仰云、依御愼可有改元、以元永三年爲保安元年、(○中略)則持參詔書草、(書紙屋紙)召内記令進筥、(少内記廣兼召儲也)入草付頭辨内覽返給、(○中略)内大臣任宣命趣可免囚人等之由示給別當、別當起坐仰檢非違使等、仍不召佐、書黄紙入筥進、(又不可内覽由被仰)又進弓場付頭辨被奏、御畫日了返給、復本座召外記、被尋中務輔、外記申云、輔近代不被成召儲丞國高也、可召由被仰、中務丞參膝突下給詔書、(作入筥給)次頭辨申官吉書、是加賀國年料米解文也、内府被仰可奏由、頭辨内覽奏聞、(殿下御殿上、主上出御晝御座)出仗坐下申、内府則返下給、頭出床子下史敷、又頭中將宗輔、又下吉書、(臨時公用)召左中辨爲隆朝臣下給、人々退出、于時及夜半、(○下略)

改元詔書

〔西宮記〕(臨時二)詔書事　改元、改錢幷赦令等之類也、但臨時大事爲詔、尋常小事爲勅也、

仁養漢書、行氏、　觀仁尚書、公貞、莊子、氏種、　萬長修文殿御覽、公貞、長輔、
萬應周上、在嗣、　萬事周易、行氏、　安延禮記、信房、
安寛春秋正義、淳範、　安長五行大義、在兼、　保祐孝經述義、長成、
保德鹽鐵論、兼倫、　昭長宋書、光兼二、兼倫、　寧永尚書、光兼、
寧長尚書、五行大義、在輔、在嗣、　慶長毛詩注疏、高長、在輔二、俊光、毛詩、在嗣、在兼、　慶安周易注疏、在輔、二、
慶仁後漢書傳、家高、　咸保桓子新論、高長、漢書、種範、　德保尚書、在公、
（永德出ア）德永尚書、在公、在輔、　德弘帝範、在嗣、　曆久後漢書、長守、
曆觀後漢書、茂範、　曆萬後漢書、在公、在輔、　曆長後漢書、在輔、
遐長貞觀政要、資宣、　和元唐書、長成、尚書、在兼、　養仁隋書、兼仲二、
齊萬尚書、敎經、　齊治禮記正義、俊光、　（元弘出ア）弘元後漢書、在嗣二、家高、在淳、
弘建晉書、淳範二、　乾嘉藝文類聚、在兼、　明長禮記、敦綱、
久應會要、俊光、　久化隋書傳、俊光、　祥和修文殿御覽、在登、
雍和史記、在淳、　寶安後漢書、在成、　寶仁文選、兼綱、
至正禮記、資光、　至安貞觀政要、綱光、

〔鹽尻二十五〕一近世の年號、古へ勘文に出て被レ行ざりし號多し、今其一二を抄す、

天和　貞治改元の時、文章博士在成考の內にあり、又延元の改元の時、式部大輔長員の考、貞和改元に、文章博士宗範の考、觀應改元に、式部大輔長員の考の內等に出し、

慶長　元弘改元の時、文章博士在淳の考、正慶の改元に文章博士在成の考等に出たり、

慶安　正慶改元の時、正三位在登考の內に出たり、

右の外に、猶近年の年號を昔も書出されしが、難ありて止みぬるを、再び勘文を奉りて、天下の

天觀 尙書正義、經範、明範、家高、文選、在兼二、
天嘉 博物志、在輔、
文仁 春秋緯、經範、淮南子、周、山海經、在匡二、在成、
文嘉 文選五注、在章、
文齊 尙書、敦經、
應元 元應出了 周易、淳高三、茂範、
應寬 周易正義、茂範、
嘉惠 管子、信盛、漢書、在登、
嘉慶 毛詩、敦經二、家倫、在盛、在登、禮記疏、
大嘉 藝文類聚、貞觀政要、在公二、
長祿 韓非子、長成二、
長應 應長出了 史記、在嗣、在輔、
長正 正長出了 周易注疏、在輔、
延嘉 援神契、長成、晉書、經光三、瑞應圖、高長、
建明 晉書、信房、後漢書、光兼、文選、長成三、
建平 漢書、在公、在輔、
建安 漢書、在輔、
建貞 通典、藤範、
仁豐 貞觀政要、在章、
仁正 貞觀政要、在輔、

天符 文選、在嗣、
天休 晉書、在登、
文安 晉書、經光、兼仲、兼綱、長綱、尙書、信房、行光、
文弘 晉書、在嗣、在兼三、家高、唐書、在登、
文觀 周易義廣會、俊光三、
應久 尙書注疏、在嗣、
應萬 文選、家高、
嘉萬 宋書、在章、
大安 漢書、公良、
大長 周易注疏、在兼、
長祥 修文殿御覽、資宣二、俊光二、
長事 晉書、淳範、
長康 金樓子、在輔、
延文 漢書、資宣、大宋實錄、淳範二、
建萬 貞觀政要、長成、周易、家高、
建文 唐書、明範、淳範二、在登、
建聖 後漢書、在輔、
治建 元德出來 周禮、經光、在公、
仁永 永仁出了 藝文類聚、在章、在匡、
仁興 漢書、在兼二、俊光、

天貞 老子經、實名二、
天建 尙書、藤範、
文元 隋書、在章二、在淳、
文久 梁書、長輔、
文明 周易、家倫、
應承 後漢書、長輔、
應仁
嘉觀 史記、俊光、
大保 尙書、公良、
長仁 仁長出了 貞觀政要、公良、
長永 永長出了 藝文類聚、在嗣、
長養 五行大義、資名二、
延元 南方 梁書、公良、長成、高長、
建承 魏志、經範、金樓子、高嗣、
建祿 唐書、良賴、
建嘉 晉書、淳範、
建福 毛詩正義、藤範、
仁應 應仁出了上下 北齊書、經光三、兼仲、在登、
仁長 晏子春秋、在嗣二、
仁化 隋書傳、列子俊光、

應仁 維城典、永範一、在登、
久承 承久出擧上下 東觀記、爲光五、
久長 吳史、光範一、高嗣一、在成一、

乾德 後一
乾綱 維時
能成 周易、輔正一、

能安 尚書、輔正、
休和 左傳、輔正一、
玄通 通直一

義同 長衡靈憲云、家經一、
恒久 周易、輔正一、行盛一、
貞久 周易、敦光三、成光一、

貞嘉 文選
寬祐 禮記、正家二、長成、
寬惠 後漢書、兼光、

泰和 楊子法言、擧周、
萬安 吳志、後漢書、茂明、
萬祥 文選

老壽 後漢書、茂明、
淳仁 文選、俊憲一、
淳德 史記、有元、

盛德 周易、擧周、
喜康 尚書、俊經一、
喜元 貞觀政要、光範、

繼天 擧周
福應 老子疏、光範、
禎祥 後漢書、兼光、

文昭 御注孝經、資實、
文承 文選、爲長、

本云 以上長成抄ス、猶漏脫號多之、

後嵯峨院以後、載勘文不被用年號、

貞吉 周易、爲長、
貞正 唐曆、兼資、尚書、致範、易正義、藤範、
祿永 後漢書、淳高、尚書、光兼、

長祿出擧
祿長 尚書、光兼、敦、本不詳
康永出擧
永康 尚書、光兼、家倫、
永寧 史記傳、俊光、

康承 長短經、光兼二、
康曆 唐書、公賢、在登、
康萬 毛詩、兼光、

康豐 毛詩、經業二、
正建 晉書、經範、
正保 尚書、信房二、

正萬 尚書、光兼、
正弘 周易注疏、淳範二、
正永 後漢書、在正、在淳、

元延 晉書、經範二、茂範二、明範、淳範二、
元寧 東觀漢記、淳高、
元萬 周易、信房、

元觀 白虎通、茂範、
寬正 史記、淳高、在常二、在嗣、
寬安 毛詩、淳高、信房、高長、同正義、在輔、藤範、

本云、應字爲度歟、此事不審、

寬久 會要、在嗣、
寬應 後周書、在淳、
天聽 晉書、淳高二、

建天 史記
齊恭 文選、實范一、
顯德 尚書、忠貞、
(寬治出事) 德延 尚書、長光一、
德久 文選、敦周一、
德齊 文選、範光、
慶成 文選、行盛、有元一、
永世 漢書、長光、
永寶 後漢書、宗業、
大喜 後漢書、顯業、白虎通、俊經、
大平 毛詩、成季、
長觀 光範一
延政 擧周
(康平出事) 延祥 義忠一
平康 史記、尚書、禮記、輔定、永範、
政和 禮記、典言、資業一、實綱一、有綱一、敦周一、資長一、匡房一、
政治 尚書、孟子、敦光一、行盛一、行光一、
養元 漢書、成光、
仁成 淮南子、宗業、
壽長 晉書、長光、敦周、

建萬 貞觀政要、爲長、長成、周易、家高、
顯嘉 符瑞圖、光範、
(元弘出事) 元弘 孝親
德安 □□茂明二、敦周一、
德元 尚書、爲長、
德和 左傳、在輔、
永受 儀禮、成季一、俊盛一、
永命 尚書、範兼、
大應 史記、擧周一、俊經四、
大承 尚書、齊書、永範、敦周一、
長育 毛詩、爲政一、
長壽 後漢書、敦光、
延祚 後漢書、擧周一、匡房一、顯業、長光一、
平泰 老子、資業一、
平和 尚書、行盛、
養壽 史記、文選、後漢書、實政一、成季一、敦光二、長光一、
仁寶 孝經、光範一、
保事 後魏孝登高文、有元一、
壽考 毛詩、時登、

齊德 文選、弼光一、
顯應 後漢書、光輔、
元初 晉書、親經、
德祚 漢書、茂明二、
(延慶出了) 德仁 禮記、兼光、
慶延 後漢書、敦光、
永貞 周易、匡房、有元一、
(壽永出事) 永壽 晉書、敦光、
大慶 毛詩、成季、
大弘 □□擧周
長養 漢武內傳、成光一、五行大義、資名二、
延世 尚書、北齊書、輔正一、永範一、
延壽 後漢書、文選、齊周三、正家一、義明一、俊經一、
平章 尚書、國成一、
政善 擧周一
政平 符瑞圖、後漢書、家經一、
養治 史記、實光一、長光一、敦周一、資長、
仁保 孟子、永範一、
保貞 帝王略錄、永範一、
(曆應出事上下) 應曆 宋書志、永範一、俊憲一、敦周一、

推古驗今、強無其難歟、可被採用哉、猶可在上宜、

○按ズルニ、改元難陳ノ事ハ實ニ繁冗ヲ極ム、故ニ多ク省略ニ從フ、其詳細ヲ知ラント欲セバ、宜シク改元部類記ヲ看ルベシ、

〔元秘抄〕一未被用年號今按、此已後於被用者、加合點畢、

天受孟子、朝綱一、行盛一、
天成周易、左傳、尚書、實範一、有綱一、敦基一、
天惠文選、永範一、匡房一、
天隆後漢、敦光一、
天同周易、永範一、
和寧成季一
承寧漢書、左傳、永範一、
承慶晉書、實光二、
咸德周易、舉周三、
康寧史記、漢書、成季一、
治德[illegible]淮南子、實政三、
治和淮南子、敦宗二、敦光一、光範一、
成和莊子、實茂一、
嘉康尚書
弘德周易、成季二、
建德文選、有元一、

天保毛詩、輔正一、敦基一、行盛一、茂明一、
天祚後漢書、實政一、匡房一、
天明孝經、敦光二、永範二、長光二、
天文老子、俊經一、
天寧文選、永範一、
和萬尚書、茂明、敦周、實高、
承祿魏志、長光、
安寧史記、有元一、
咸寧尚書、周易、輔正一、
康安漢書、長成、在輔、唐記、在闕、毛詩正義、在輔、毛詩、家闕、
治平春秋元命苞、實業一、
治萬尚書、在高、
嘉德左傳、史記、實政三、成季一、
正德尚書、成季一、
弘保晉書、顯業一、永範二、俊經四、敦周、
建正史記、親經二、

天祐周易、毛詩、春秋繁露、爲政一、正家一、有元一、
天和後漢書、成季一、禮記、行氏一、
天壽尚書、敦光一、長光一、
天統論語疏、資長一、
和平周易、輔正一、
承天周易、後漢書、禮記、明衡一、成季一、顯業一、
承寶齊書、義忠一、永範一、
安治漢書、匡房二、
康德尚書、定茂一、
康正維城典、宗業、貞顯、在淳、行光、
治昌大禮、有綱一、
成德孔子家語、荀子、資業二、正家一、國成一、
嘉福毛詩、漢書、敦宗一、光範一、永範一、
正長貞觀政要、親經、經業、在淳、毛詩、在嗣、行光、
弘治北齊書、永範二、
建□史記、資實、

記（在秀朝臣）の撰進中に、明治の號を加へたり、當時西園寺大納言（公晃卿）高辻式部大輔（總長卿）の陳辨もありしかど、坊城中納言（俊將卿）清閑寺右大辨（秀定卿）の論難に依て、終に元文とぞ改元せられたりき、今明治の昭代となりて、いと珍敷き事に思はるゝまゝ、此に其の全文を掲げて、文義は取り樣、治亂は爲し樣にあるの一例となさむとす、嗚呼百五十年前に排斥せられし明治の號も、今日斯く時を得たるを視れば、獨人のみ幸不幸あるにあらず、文字も亦遇不遇あるか、

明治　　唐橋大内記

周易曰、聖人南面而聽天下、嚮明而治、

難　　清閑寺右大辨

明治號、代始被用治字凡七八度、各年序不久、可有如何候哉、

（按に、御代始に治字を用られしは、崇德天皇の天治は二年、近衞天皇の康治は二年、二條天皇の平治は一年、後堀河天皇の寬治は七年、土御門天皇の正治は三年、後深草天皇の寶治は二年、後宇多天皇の建治は三年なり、）

陳　　西園寺大納言

明治號、被難之趣有其謂、然此二字其義用甚大矣、夫明明德于天下者、聖王之所以治天下也、故禮曰、明照四海、而不遺微少、又云、參於天下、並於鬼神、以治政也、尤宜爲號、可被採用候乎、猶可在群議、

二難　　坊城中納言

明治之號、所陳之其義固盡、非才不能難也、然析字言之、則明字爲日月、治字從台水、台星名也、水既逼日月星辰、則有洪水滔天之象、平時尙恐其不叶、況於龍飛之始乎、

二陳　　式部權大輔

明治號、析字被難之趣、離合之識、尤有其謂、然明字爲日月、按、周易大人者與天地合其德、與日月合其時、此文可爲嘉徵、如治字從台水之難者、天治號可謂水逼天文星辰也、亦在龍飛之始、而無洪水之事、

陳　實光卿

享和之陳答、頗雖及督々、離合識強無憚歟、享享相通、享者嘉之會也、大享以養聖賢、五官致貢曰享、協和萬邦、禮之用和爲貴、律和聲皆所見經典、況於本邦美號字乎、通尋芳蹤、天和、享保、明和也、亦順天運應人和之文意、可稱優美、仍所擧申、宜在上裁乎、

重陳　前秀卿

以離合識重被難之條、難默止、權中納言源朝臣、權中納言藤原朝臣、參議左近衞中將藤原朝臣等被陳申旨趣、誠當其理歟、就中享保、明和之盛時在邇、左氏傳曰、享以訓恭儉、宴示慈惠、且享者獻也、和者順也、聖德徧于八荒、遠夷來享、民俗益協和、不復吉乎、其可謂美號、被擧用不可他議歟、

判　忠良公

享和之號、殊優美候、且人々多被擧申、旁可被採用候、嘉永亦佳號也、以享和嘉永之兩號、令奏聞候（波本、）

享和嘉永殊（留）宜候、兩號之間可應叡旨、奏聞、

〔如蘭社話十〕明治年號難陳　大城戸宗重

改元の事は、漢文帝の神仙を信せられしに權輿し、武帝の奇を好ませられしに成りし者ながら、また世の進化の一證なるべし、されど漢武帝、唐高宗の如き、一世に十二三の改元あり、我朝にても、二條天皇の御在位七年間に五回の改元あらせられ、四條天皇は十年間に六回の改元あらせられしなどは、いと煩しき限りなり、明太祖は英斷にも始めて一世一號と定められ、今の俄羅氏も此制に倣はれたり、そは外國の事にて鬼まれ角まれ、我が昭代の初、斷然舊式に據らせ給はず、御一世一元と仰出されしは、賢き御世の一大美事ならずや、畢竟國家の治亂盛衰は、年號の如何に在ずして、施政の得失如何にあるのみ、此頃享保二十一年御改元定の難陳を見しに、唐橋大内

定天下、此條又如何候、旁不庶幾候、　陳、西園寺大納言、萬保之號、被難之旨有其謂、但萬字在上之例雖少、保字在上之例及十一箇度、且萬字爲舞名之事、既以樂名被用、永和以後度々也、然上者此號無巨難歟、

〔親聽草七集七〕年號字難陳〇中略

難　公廸卿

享和號、享字古與亨烹通、故韓信傳有獵狗亨之之文矣、而後醍醐天皇辛酉、始用元亨之號、是歲大旱、厥後金革不止、永享雖代始、且經紀長祆災數現、享祿貞享等、交不祥、且夫穀梁傳曰、諸侯不享覲、和字、爾雅曰、徒吹謂之和、又孫子兵法有交和之文、享和交和聲相近、至若長和、年中祝融爲祟二度、養和最不吉也、因還思之、凡不可以庶幾之號乎、然非可敢黜陟、宜在群議、

陳　俊資卿

享字、古與亨烹相通、誠然、享和字有周禮內饔割享煎和之文、因享熟和齊之義亦宜候改亨、元號用享字佳例、古來有之、近享保、延享、明證候、和字我邦之通稱、不可不崇敬、被難之條逐一雖不及論候歟、長和養和雖被申不吉之由、元和明和共盛時、又延寶辛酉年改天和、旁以可謂珍重之號、且按引文今度改元旨趣適當、最可被擧用候乎、

重陳　胤定卿

享和之號、中宮權大夫藤原朝臣被難申旨趣、雖有其謂、近者享保年序久、又明和海內無事、太上皇殊近世稀奈留被賀寶算畢、加以如權中納言源朝臣陳答引文珍重候、且按漢書禮樂志曰、薦之郊廟、則鬼神享之、朝廷則群臣和、可謂泰平之美號、被擧用可然候歟、

重難　賴熙卿

享和號、權中納言源朝臣、同藤原朝臣等陳答、誠盡其理、雖然舊難之號歟、且享和字、和漢有離合識、仍被憚之可然候改亨哉、

納言藤原朝臣被陳申趣有其故、今度此號雖不擧申、然佳號也、被採用何事候哉、　内大臣、天明號尤
可也、先被移他號候へ、
嘉德　難、右大將、嘉德號ノ事、後漢嘉德殿火不快候、且德字舊難多候、雖被今用歟、　陳、廣橋中納言、
被難之旨其故アル歟、雖然大寶既爲漢家不快之殿名、況處名殿名相通、于年號無憚之由先達記之、
且德字雖有舊難、德字在下之號、及數度之上者、嘉德之號可無巨難歟、何取漢家之先蹤、捨本朝之佳
例哉、宜在群議、　重陳、宰相中將、陳言之趣雖可然、嘉字在上十度、德字在下十三度、共年序不久、且此
號治曆度始而勘進、後凡二十餘度出現候歟、江中納言匡房卿有難申旨、雖有大寶延曆等例、强而不
庶幾候、　重陳、橋本中納言、重被難之趣非無據、雖然於年序之多少者、强不可依先例之旨、明和度既
陳申候歟、且此號字義就中神妙ノ間、勘者不棄之、度々出現不謂此號之規摸歟、江帥之難事舊候、元
實每陳申ノ上者、此微瑕何足減白壁之價乎、猶宜在群議、
文長　難、廣橋中納言、文長之號、度々雖勘進、先輩既有難申旨、各有其謂歟、况年號者用疊字爲本意
之由、見自他之記文、旁此號不庶幾候、　陳、左衞門督、文長ノ號被難申旨非無其謂、但非疊字被用例
萬不少、且此號音響モ優美候、可被擧用候歟、　重陳、西園寺大納言、陳答、雖然文長者文永訓相同、文
永者年曆雖及十箇年餘、非嘉例、且此號舊難最多、旁不庶幾候、可有如何哉、
建正　難、左大辨宰相、建正號雖分引文相違、建永度俊卿初勘出字也、然貞治度曩祖忠光種々難申
之間、更不結申愚存、其上正之字在下ノ例、大略不宜候、他號ノ中可被用哉、　陳、左衞門督、被難趣無
餘義候歟、但正字在下、永正、天正、年序既久、被用此號有何事哉、猶宜在群議、　重陳、宰相中將、建正之
難一旦雖可然、左衞門督陳答ノ趣有其謂歟、引文施法于官府、而建其正云々、尤可被擧用候哉、　內
大臣、建正號聊有存旨、可被閣候、
萬保　難、橋本中納言、萬保號、萬字被用上之例、萬壽萬治之外無之候、且萬者舞之名、象武王以萬人

納言宰相中將曰、弘仁、寬弘、共有事可爲難者、新大納言無難陳之旨、予執申此趣、殿下被仰曰、弘字難、隨弓、次字治也、然者何事之有哉如何、但依衆議可用仁安、可仰詔書可仰者、○下略

〔改元部類記〕角金安元三年八月四日天晴、今日有改元事、依乘燭著束帶參陣、左府(經宗)以下著陣、左大辨(弘保)新宰相中將(實宗)堀川宰相(賴定)等、取條(實宗弘保、仁治、賴定養和、能文、)實守卿(仁實)予(藤原家通)(弘保、治和、)實綱(弘保)雅賴卿同左大辨、左兵衞督同右大辨、別當忠親(養和)藤大納言實國(弘保)三條大納言實房(養和、治承、)中宮大夫相議被養弘保、(就多人定申)仁實(實定卿執申故相具云々)博陸□□不參內給、依左少辨參松殿申之、歸參申云、弘。保。者、隨弓作、其字不快、仁。實。者、上仁字、近例不快、下實字者、漢家連々不快、本朝又不被用、及二百歲、若有故廢也、仁治、治承、共雖非無難、此兩字中可被申者、人々議定曰、仁。治。者、上仁字、近仁平仁安、共不快、治又平治不快、至于治。承。者、上治字三水、下承字又隨水篇、連々有水損之聞、而隨水邊也云々、召左少辨、又被奏此由、宣定、隆季、實國、實守卿退出、兼光歸出示申云、兩字雖尤可然、仁治上仁、雖強不可憚萬。治。字、平治亂、其例不快、於治承者、水篇多由尤可然、然而永。承。之字、隨水篇今度依火災被改、多隨水篇、何事有哉、可然之由相議、上卿被奏、兼光歸來仰云、改安元三年爲治承元年、大極殿火災之上、天變頻闕方々由可被詔書、依康平例作詔書者、□□□□依大極殿火災改天喜爲康平、

〔拾芥記上〕一改元事

八月(○延德元年)廿三日、予當番、於親王御方、侍從大納言被申年號難陳、延德者反無形云々、又天保ノ字難ハ、一大人唯十ト難ト云々、又慶ノ字鹿心反ト難ト云々、如此字難多端云々、

〔改元格〕明和九年十一月十六日改元定次第○中略申詞○中略

天明　難、左衞門督、天明之號、天字在上、其例多トイヘドモ、明字在下、文明之外無之候歟、且有古難、如何候ハン、　陳、日野中納言、左衞門督藤原朝臣被難、天明號明字在下例、文明之外無之、シカレドモ文明年序久歟、天字在上號天長、天曆、爲聖代之嘉號、可被擧用哉、　重陳、左大辨宰相、天明號權中

自晝有評定云々、

淳。仁。字、有可宜之由被申人々云々、而前中納言朝隆卿已訓讀通醍醐天皇御諱之旨被難申、平治字可宜之由被執申、依諸卿被同之云々、但或人云、天皇御諱、隔七代之後、雖正字無憚、況年號字、不讀訓、更不可及其憚云々、又於平治字者、當時會釋云、本文旁有難云々、

〔改元部類記〕顯時卿記、永曆元年正月十日己丑、早且召使告來云、今日可有改元定、○中略定畢之後、召藏人辨、人々定申之旨可奏聞、各令申聞成賴還出仰云、永曆久承之間、相議一同可定申、左府伊通○藤原被氣色予、左衞門督且告其由、予申云、久。承。久者久壽、承者嘉承、尤可被憚歟、大理申云、此難皆所存也、但非代初何事候乎、今三相公閉口、左衞門督、久承之雖非無其謂歟之趣也、藤源納言無音、新大納言久承之難、可謂吹毛、有本文之難者非其限、至于承字者、嘉承之後、有天承、有長承、更不可有其憚歟、内府久承已其難出來、加之雖似戲言、世俗之詞可混窮少也、人心定早歟至于承。實。者、大寶以後、瑞物之外不被用實字歟、大。喜。又如何、予又重申云、大同之大字可被憚歟、嵯峨弘仁元年事又至于承一字者、强不可有其難、仍且可擇申承。安。也、且依兵革改元、承安之條、人心和平之故也、至于久承者、云久云承、共依有其憚難申也、別當申云、大喜法花經之文也、左府被仰云、經文被難年號之條如何、左衞門督被申云、實字者王位也、必不可依瑞物歟、隨又勘申如齊書文者、子孫承實、然者繼帝爲所擇也、新大納言被申云、大喜在平治之度、雖擇申、爲錫杖文之由、其難所出來也、左府然者可被用永。曆。歟由、被示合内府、坐籍遠隔、其返答詳不聞、左府被答云、可被用永曆歟、○中略其後成賴還出、著膝突仰云、改平治二年可爲永曆元年、

〔改元部類記〕長方卿記、永萬二年八月廿七日、次予進奥座下年號勘文、上卿被示曰、仁。安。有難乎、新納言曰、天安代末年號也、又被稱治安、然而非代末申人々被示之、依又被申依之申弘。治。也、上卿曰、如仁字自昔難來、至安字以天安不可爲難又有難否被尋、新大納言無殊被申事、予參上申此趣、殿下被難曰、安字止訓也、仁止如何、弘。治。又有難哉、可尋者、予又出仗座仰曰、弘治有難哉者、上卿被申云、弘字隨弓、又弘仁有兵革事、新藤

〔台記〕康治元年四月廿八日辛卯、今日有改元云々、康。治。案之、康治反飢、若治勞音反忌、又穀梁傳昭廿一年云、大饑、傳云、一穀不升謂之嗛、二穀不升謂之饑、三穀不升謂之饉、四穀不升謂之康、（康虛）五穀不升謂之大侵、今案康治二字、皆從水、然則以水災可有飢饉之象也、後日以此事問新大納言公能、答云、參入卿相更不申此事、在官宜使能、今卿士、皆以不學經史、國家滅亡豈不宜哉、

久壽元年十月廿七日丙午、光賴朝臣來下年號勘文、仰曰、可定申者、　廿八日丁未、今日改元、巳剋許、頭光賴朝臣來曰、法皇密詔曰、有所思食、今度不可用治字者、疑大治四年、白河院崩故歟、（中略）余及兩長著陣、于時秉燭、仰官人召勘文、即進之、（本前闕所持也）余已下依次見之、此間成通參入加著、右大辨（朝隆）讀勘文了、自下定申、（余德進、德祚、宗輔應曆、天保、宗能承寶、平治、成通公敎天壽、兼長、師長、朝隆平治、經宗天壽、天保、公通承寶、天保、資信延祚、）了招頭辨奏之、歸來曰、重可擇定者、余難曰、天。壽。者、隋字文化及之年號也、（右大辨又申之）承者止也、寶者寶位也、止寶位有其忌、應。曆。者、勘文云、聖皇應曆數云々、似在位年限滿、□□朝臣曰、何言年限滿乎、言聖主應曆數者應曆數將王天下也、余難曰、是彌有忌、似可有新帝、又天。保。者一大人唯十、是漢朝舊難也、（右大辨亦申之）平。治。者、勘文云、禹平治天下云々、是治洪水也、不如無洪水、師長披曰、延嘉者、禹治洪水所得之玄珪之銘也、（見尙書井初學記、詳引尙書、）□□□□□以□准此了無其忌、（所申其理可然）宗能難曰、德。字不可被用之由、白河院被定仰了、祚。字新帝即位踐祚、非無其忌、（今按、祚字難不審）師長難曰、延。祚。者、爲庾亮所殺人字也、朝隆難曰、承。寶。者、□銘也、（見勘文）齊早亡、不久、可有忌歟、余曰、雖不吉人事、所引文吉者何有其忌乎、殷紂時詩無其忌歟、朝隆復曰、承保者我朝舊年號也、保寶者爲同字之由、見左傳正義、同年號兩度被用如何、令光賴朝臣奏此等趣、（各難中同、光賴朝臣依余會居□聞之、）即光賴朝臣持來舊年號勘文五通、（中略）諸卿見之了、皆曰、久壽無殊難、但經宗曰、嘉祿可宜、余曰、久。壽。者反音概、有怖歟、諸卿曰、舊年號不必避反音之忌、即令光賴奏此由、（中略）光賴奏聞後、參鳥羽□鳴鐘後光賴歸參、（中略）余著陣、光賴來曰、改仁平四年爲久壽元年、（下略）

〔改元部類記〕爲親卿記、保元四年四月廿日甲辰、今日有改元定、入夜予參內、內府以下卿相數輩參著、

雖無舊字有何事矣、若字畫後、以何可爲年號哉、吏部云、尤可然、此後共參內、其間申云、天壽、天祐、隋唐末年號云々、就中於天壽大治度有博陸御難不被用、仍不可撰定、泰和和字度々有世大事、頗可有事憚歟、安寧、寧字音通佞字、雖聲別定世人通詞歟、是等中、天承、天受、可無指難歟、相共入敷政門著陣內、○（中略）頭辨顯賴下勘文三通、大臣開一文結申、顯賴仰云、令撰申與大臣微稱後卷文辨退、一々見勘文了、授次人、次第見下、至左大辨一見了依大臣命讀擧、其後次第定申、大辨申云、某々等勘申年號中、天承、天受間、可被用歟、予申云、天承、永受、右衞門督同左大辨、別當天承、安寧、堀川中納言天承、引合兩文而雖勘申、其外無指難可被用歟、天壽、隋末宇文和之所立年號也、天祐、唐末亡時年號也、用漢朝年號、是雖常事、於有憚者、不可被用也、件兩號已相當亡國時、尤有憚歟、天受、永受、受字下作又字也、年號以一號可渡長年料也、而又作頗似、可有後事也、（別當云、受字下作或文字、）慶成、成字有戈作、前々被忌、如此皆有其憚、民部卿天承、治部卿天承、慶成、中宮大夫天承吉、於泰和和字長可停止由、故院所被仰也、勘先例多當不吉事、不可用歟、內大臣天承、大臣召顯賴被奏人々申旨、先申關白、次參院、良久不歸、予依所勞暫起座、及子剋頭辨歸自院、此間下官復坐、頭辨仰云、天承一同撰申、但件文、上下已事異、雖兼兩口勿謂一事時、其理可然、於天承上下二字雖相連、奉天承親是上下已異也者、可然之由、不令存給、重可量申、又定申年號等中、可申一定、天受、又作尤被難、其故慶字有反作、仍天慶以後不被用、正字有一止、難者付字如此有難歟、但暫不可及其難、諸卿申云、天承上下文雖別、共是吉事也、有何難哉、雖加定他年號等、倘天承可宜歟、顯賴退奏事由、歸出又仰云、改大治六年爲天承元年、（依天變改元、）赦令詔書事等、依急退出不見、抑改元定故實定申兩三、依重仰撰申一、最前不申是非、次尋時所申善惡也、而最前難申又定申唯一、是乖故實歟、又成字、戈作難如何、土御門殿難成字也、戈與面相兼可有憚也、而於成字無面作、有何難哉、但大兄御事也、可閉口、戈作難事、後日尋申中納言、答云、唐書八、依已戈歲字通用載字也者、雖不面作相具、倘可有憚歟云々、是強難也、

書者、左大臣召大内記敦光、被仰下、則詔書草進之、付頭被内覽、殿下御前歟、御予早可清書之由被仰下、召大内記、被仰可清書之由、則清書持參□□左大臣、又付爲房奏聞、作在仗座被奏也、御畫了返給、召中務丞下給、作入筥給之

〔中右記〕保安元年四月十日庚辰、頭辨以改元勘文下内府、内府取一通令結申給、仰云、定申々、次給予披見之所、勘文二通式部大輔彙文章博士在良朝臣、撰申長仁、天治、保安、文章博士敦光朝臣、撰申天治、慶延、長壽、今度二人勘申、籠懸紙一通、不結申、及三通時結申也、在良朝臣、儒宗彙文章博士也、仍今度二通也、予見了、傳次人、次第見下、此間掌燈、左大辨讀上勘文、發語云、長仁、保安可宜、其後人々多互申上、多ハ天治也、予可被用保安、慶延之由申上、内府申給云、天治慶延者頭辨申人々議趣、返上勘文、被申院、頃而歸來云、人々申旨不同也、又多申上於重可定申者、左大辨、右兵衞督、侍從中納言、予可被用保安也、別當治部卿、内大臣、天治者又被申此旨也、他年號被沙汰、予申云、長壽。ハ、唐則天后時年號、纔一兩年也、唐年號、先々雖被用、年紀久、或明年時年號也、於長壽者不久、又女帝年號也、仍不可被用歟、天治。ハ、又音同天智天皇號也、長仁。ハ、近代散樂法師名也、天下上下、衆人頗嘲哢歟、左大辨、散樂法師名、更不可被沙汰、誠是與言也、何如此事可及沙汰哉、内大臣示給云、於年號者、世間云、人妖言、尤可被避事也、於年號者、萬人甘心可宜歟、仍散樂法師名被避、何事之有哉、頭辨來仰云、依御愼可有改元、以元永三年、爲保安元年、依天喜例、可作詔書者、内府召藏人辨實光、可作詔書被仰下也、

〔長秋記〕大治六年正月廿九日改元定也、今日兩院自法金剛院還御、然而實能長實兩卿外、皆可參改元定之由、所被仰下也、未剋束帶參院、頭辨談云、改元勘文事、右大臣奉行也、○中略勘文今日可下申也、大内記宗光依病不參、仍無可候詔之人、前例文章博士儒者辨取候、而近日中辨中無儒者、文章博士例□□也、仍又被尋例處、有大辨候例、仍召右大辨實光也、次諸内府束帶被出□取出勘文案評定、敦光朝臣詣、令開勘文等、人々付和名、○中略吏部云、事成兩字非舊號、字多用舊字也、予○源師時云、於無難之字、

云、永保應德之間、可依勸定者、仰云、永長蓋令撰申哉、人々申云、永長字、對馬音似笛名、仍不申之歟、仰云、可用永保者、內府召大內記敦基、仰可作改元詔書之由、又有赦令賑給事、是皆准治安元年例也云云、事了人々退出、事雖多不能委記、

〔中右記〕長治元年二月十日、今夜依可有改元定云々、左府兼日奉仰、下知儒者等被撰申、奏聞後有僉議也、次第見下文、申上承安長治、此二間可隨勸定申上了、付頭辨被奏、件旨勸文同進上之、重仰云、件二年號中、重可申上者、左衛門督以下承安可宜、左內府被申云、長治可宜、又仰云、可用長治、是依天變也、但依正曆可令作詔書云々、　今度年號勸文之中ニ、天祐或儒者撰申之條、甚奇怪也、天祐ハ、唐末景宗時年號也、先例唐年號雖被用、末之世、亡帝之時年號未被用、而撰申之條、可謂無用心、為後代所記置也、

〔中右記〕天仁元年八月三日庚辰、今夕可有改元也、頭為房朝臣下年號勸文於左大臣、可定申之由、所仰下也、（件勸文三通、儒家太宰帥匡房、文章博士在良、敦光撰申也、備懸紙一紙、若申被下、江帥書檀紙、依為公卿歟、）此間公卿、多被參著、三四人著端座、一々見哉、左大辨讀上勸文、（江帥勸文有年號六、先例不過三也、頗多如何、）一々可申上由、左府被示發語、藤宰相（顯）申云、天仁承安可被用、左大辨（重）天永元德、右宰相中將（顯）同左大辨、治部卿（天永元德）下官（宗忠）○藤原申云、帥卿所撰申、元德承安可宜歟、皇后宮權大夫（顯）源中納言（國）別當（能）右衛門督（雅）藤大納言（經）右大將（家）民部卿□內大臣以下皆被同、下官定申、爰左大臣被定申云、帥卿年號之內、正治天仁之間可被用也、議了付頭為房朝臣、以詞被奏、（年號之定、以詞被申例也、）勸文同被返奏了、經數剋歸來、（參院云々、）仰云、左大臣被定申、二年號之內、重猶可撰申、人々多可被用正治之由被定申、予申云、此年號、共不心得也、正治反音詞也、頗有忌諱音也、天仁音、又通天人也、年號或漢音、或倭音、共所被讀也、天人頗不得心、共不心得之中、被用正治如何、人々多被同予詞、左大臣命云、天人多樂之境也、不可為忌歟、予申云、天上與人間、猶以不心得由執申、左府強不可為難之由、重被奏聞、此間更漏漸闌、雨脚殊甚、頭為房歸來、仰云、可用天仁之由、可令作詔

る事にて、御當家國初にも、桂の里の桂姬、美濃の大柿をはじめ、いさゝかの言葉に吉凶をはからるゝ例不可勝計、

〔茅窻漫錄上〕和漢異年號

此邦改元ある時に、難陳といふ事あり、年號文字の義理出據などを吟味し、善惡是非を難じ陳ぶといふ、其時易經の語を引くには、書名をいはず、或文に曰と書くは故實にて、變易變化を忌み嫌ふなりと、然るに近歲にも化字を用ひて紀元ありしは、いかなる事にや、

○按ズルニ、易經ヲ引クニ、書名ヲ或文曰ト書スルコト、他ニ證據ナシ、各家ノ勘文ニハ皆周易ト書シ、書名ヲ忌マザルガ如シ、

〔改元部類〕權記、寬弘九年十二月廿五日戊子、今日以後四箇日物忌也、然而依外記度々誡參內、左大臣參入被定年號事、大臣及中宮大夫、右大將、尹左兵衞督、修理源相公被參、頭中將下文章博士宜義通直等勘申年號一枚、太初、政和等也、定申云、件字共非優、但勘申之中、長和頗宜歟、抑勘本文非便、年號字、然而自太初政和頗宜也、僉議同之、被奏宜下、大臣召大內記爲濟、被仰詔書可作由、此間余〈○藤原行成〉退出、太初。。漢武帝年號、此年十一月朔旦冬至也、今年有朔旦、彼年戊子、今年又戊子、依彼例所勘申也、前秦西秦共有此號、南凉又有之、件年號前秦九年、卽爲姚與所滅、西秦廿一年、年歷雖久、僞主代無殊事、非可庶幾、南凉三年歷甚少、又武帝之時、非亂代、其例可因准、然而彼年柏梁臺災、庶幾彼年之例、亦甚無爲、紀云、太初元年、〈臣瓚曰、初用夏正、以正月爲歲首、故改年爲太初、〉十一月甲子朔旦冬至、乙酉柏梁臺災、夏五月正曆、以正月爲歲首云々、二年春正月戊申、丞相石慶薨、十二月御史大夫□□□寬卒、又後漢質帝、太初元年六月、爲梁冀所殺、政。。和、禮記文云々、有毛詩關雎篇序云々、然而政字、秦始皇名、可嫌之、唐宋本朝以政字爲年號之事、唯有後周宜政一年、不可用歟、

〔永左記〕承曆五年二月十日、被下年號勘文三通、〈一通左大辨實政卿勘申嘉德、一通有綱朝臣元德、一通行家朝臣文章博士永保、永長、應德、〉人々令申

ハ凶災ニヨリ、其趣品々也、即位ノ年ニハ改元アルコト例也、或ハ先年ノ年號ヲ用ヒテ、年ヲ歴テ改元ノ例モアリ、中古ヨリ菅家江家ノ紀傳道ノ輩、年號ノ字ヲ勘進ス、其引用ル書三十部バカリヲ限リテ、古書ニ非レバ用ヒズ、數多勘進スル中ヲ、陣ノ坐ニテ難陳ノ問答アリテ議定セルトナン承ル、

〔本朝改元考〕宋眞宗時、楊大年擬豐亨字、上曰、爲子不了不用、淳熙本作純字、時人有言、此字必改、言未既而改、蓋純字有屯字在旁、慶元時先擬隆平、某云向來改隆興、時有人議破、以爲隆字近降字、今既說破則不可用、語類載此、而無判斷之言、余謂此皆閑議論也、亨字天德之名、純字文王之德之純、謂之非美字而可乎、隆是降之反、豈以字似而廢之哉、仁宗即位改元天聖、時太后臨朝稱制、議者謂、撰號者取天字於文爲二人、以爲二人聖者悅太后爾改元明道、又以爲明字日月並也、與二人旨同、見歸田錄、其撰者果爲容悅乎、不然則議者之誣也、徽宗即位、改元建中靖國、或謂建中與德宗同、不佳、謝上蔡云、恐亦不免一播、後下獄、見語類、楊方震曰、史稱上蔡坐口語、繫詔獄、廢爲民、其即建中年號之說乎、宋之年號同於衰世及垂亡之小邦者、往々有之、如前之乾德後之建中是也、然乾德不驗、而建中則驗、是又在乎德之厚薄、而不係乎讖之有無、上蔡之論、特因徽宗而知之也、楊氏此論得之矣、(玉海所載離合之讖、重複之嫌、皆以楊論可推斷之、)本朝撰號、大略見圖太曆、不甘似人名、不避異國年號也、但其文字出處、不足爲據、或有之、如建安似喩離音之嫌、何可避之也、

〔鹽尻四〕凡年號の定の日は、京師地下の學者禁庭へ參りて、とかく唱へなどして議し奉りしとかや、天和改元の日、庭上にして天火の音に呼し故、貞享已來は地下の者を禁止せさせ給ふ、

〔翁草百六十一〕滑稽は道に非ずして、而も道なる物と云り、和國にては和音の通ずる處をもて吉凶をのづから顯はるゝ也、改元の時諸卿の難陳は、字義に寄計也、冀くば誹諧に長せしものを難陳に召加へられなば、此難は有べからず、誹諧則滑稽也、既に軍陳には和音の響をもはら用らる

剋限奉行職事來著陣子上坐、家司出逢職事申事由、次主人令出客亭給、以家司召職事、次職事參進仰、仰詞退出、此間外記參入、家司申其由於主人、主人仰可召之由、次外記參進、次主人仰年號勘者事、外記稱唯退出、次主人令入簾中給、

明和九年十月廿四日宣旨

令文章博士菅原登長朝臣、同菅原輝忠朝臣、式部大輔菅原朝臣、右大辨菅原朝臣、大學頭菅原朝臣爲弘等、撰申年號字、

藏人頭左　辨藤原光祖朝臣

式部大輔菅原在家朝臣、內大臣宣、奉勅、宜令件人撰進年號字者、

明和九年十月廿四日　大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師資奉

右大辨菅原世長朝臣、內大臣宣、奉勅、宜令件人撰進年號字者、

明和九年十月廿四日　大外記兼　師資奉

文章博士登長朝臣、菅原輝忠朝臣、內大臣宣、奉勅、宜令件等人撰進年號字者、

明和九年十月廿四日　大外記

大學頭菅原爲弘朝臣、內大臣宣、奉勅、宜令件人撰進年號字者、

明和九年十月廿四日　大外記

上卿內大臣輝良公

傳奏油小路大納言隆前卿

奉行烏丸頭左大辨光祖朝臣

家司梅小路兵部權少輔定福朝臣

〔改元物語〕ツラ〱本朝ノ古ヲタヅヌルニ、大化大寶ヨリ以來、改元ノ例久シ、或ハ嘉瑞ニヨリ、或

謹上　式部權大輔殿

請文云

來六日、可有改元、可撰進年號之由、謹所請如件、

十二月二日　　式部權大輔爲長請文

三日、召使持來宣旨、予一人也、仍取留宣旨畢、

〔拾芥記上〕文明十九年七月四日、來十八日、就可有改元、內々今日被召勘文、勘者、在治卿、在永卿、長直卿、在數、和長等也、依妖災火災可有改元云々、

年號事

寬祐　禮記曰――

萬和　文選曰――

康樂　崔寔政論曰――

従三位菅原長直

狀云

年號勘文、先可被召之由、依仰進之候、恐々謹言、

正月四日　　長直

頭左大辨殿

従三位菅原朝臣長直

左大臣宣、奉勅宜令件卿撰進年號字者、

文明十九年七月十六日

〔改元格〕明和九年十月廿四日勘者宣下次第

年號勘者宣下

二月

延享元子年二月

一年號延享與改元被仰出候間、此旨町中不殘可相觸候、以上、

二月

〔寶曆集成絲綸錄六〕寶曆元未年十一月三日

一病氣又者幼少ニ而、出仕無之萬石以上之面々江、年號改元之儀、先例之通、老中宅江使者可被差越候、在國在所之面々者、承次第飛札可差越事、○中略

右之趣可相達候

十一月

寶曆元未年十一月

年號寶曆與改元被仰出候間、此旨町中不殘可相觸候、以上、

十一月

〔本朝世紀〕康治元年四月一日甲子、今日有可撰進年號宣旨、（顯豐卿可勘申之由、闕被仰下、但不載宣旨、）

左大臣宣、奉勅、仰文章博士藤原永範朝臣、宜令撰進年號字者、

永治二年三月廿八日　大炊頭兼大外記助敎中原朝臣師安

二日乙丑、少外記安倹向權中納言實光卿亭、申可被撰進年號字之由、

〔編御記〕建保

建曆三年十二月二日、頭辨宗行朝臣消息云、

來六日可有改元、可令撰進年號字給者、依天氣上啓如件、

十二月二日　右大辨宗行奉

改元定メノ月日ハ、正月廿五日ナリ、當日ヨリ公家ニテハ新號ヲ用ヒラル、武家並庶民ニ至ルマデ、悉クハ於江戸御出サルヽノ日限以來新年號ヲ用ユルコト也、遠國ハ又江戸ヨリ承ル事ユヘ、時日又オソキ由也、已ニ京都ノ武家町家共ニ江戸ヨリ遲シ、

〔殿居囊〕武家年中行事拾遺 年號改元出仕之節、ふくさ麻、御法事濟一同ふくさ麻、

〔官中秘策〕二十二 改元之事

一前晩、明幾日何時御用之儀有之候間、登城可仕旨、御老中御連名御切紙來、御請使者遣之、當日刻限より巳前登城、常服中啓 年號改元之旨令仰渡之、

〔視聽草〕六集二 文政十三年十月日、京都ゟ申來、來ル十二月十日年號改元、即日恩赦被行之由被仰出、○中略

十二月十六日

御座之間御上段、公方樣、内府樣御著座、御服紗小袖、御麻上下、年號之書付二包、御硯蓋ニ載之、加賀守越前守脇差不帶持出之、

御上段江上り、公方樣内府樣江差上之退去、御前被遊御覽、此節年寄共、備前守、越前守一同出座、御目見御意有之、御祝儀申上之退去、過田沼玄蕃頭御目見申上之、畢而若年寄中永井肥前守、森川内膳正御目見、御祝儀申上之、

奉書紙
三ッ折

年號
天保

〔寶曆集成絲綸錄〕五 延享元子年二月廿九日

一病氣又は幼少ニ而、今日出仕無之萬石以上之面々江年號改元之儀、先例之通、老中宅江使者可被差越之候、在國在所之面々は、承次第飛札可差越候事、○中略

右之趣可被相達候

改元之大略

凡改元ニ五樣アリ、所謂辛酉ノ歲、甲子ノ年、御即位ノ翌年、祥瑞、災異等ナリ、（辛酉ハ神武天皇ノ御即位ノ年ナリ、俗ニ是ヲ革命ト云フ、甲子ハ干支ノ首ニシテ、共ニ其エトニアタルヲ、俗ニ革令ト云、）御即位ノ年ニハ改元ナク、翌年ニ改元アル事ハ、是ヲ踰年改元ト名ヅク、其年ヲ踰テ改元アル事ハ、即位アル年ハ先帝ノ御世ノ中ナルユヘ、先帝ノ年序ヲ滿シメ奉ラルヽノ義ニテ、翌年改元アルコトナリ、（和漢共ニ其儀同ジ）今度ノ改元ハ、去年（申年ナリ）正月晦日ノ大火（京都）ニ因テ改元ナレバ、是災異ノ議ナリ、然シテ改元ノ式ハ、古來ヨリノ制度ヲ守ラルヽ事ナリ、（近代元和ノ年號ニ改ラルヽ時ハ、亂世ノ始テ治リシ年ナル故、唐ノ年號字ヲ借リ用ヒテ、其式大凡ナリシコトノ由、其後寛永改元ヨリ舊式ノ知ク也ト云ヘリ、）其式ノ事ハ江家ノ次等ニ委ク、近クハ其度々々ノ次第書ニ委クアレ共、式ノ次第ハ事永ク、殊更田舍ニテ手安ク見得ガタキニ仍リテ、今苟初ニ其趣キヲ注シテ、大概ノ次第ヲ知ラシムルナリ、

先改元アルベキトノ儀定リテ後、菅家ノ乘五家ヘ宣下アリテ、年號文字ヲ作進奏上セラル、大抵一家ヨリ五號ヅヽノ作進ナリ、五家ハ今、高辻、五條、東坊城、唐橋、桑原ナリ、是菅家ハ代々儒家タルガ故也、（外ニ淸岡新家アリ）年號ノ文字ハ、古來ヨリ五十九字ニ定リテ、其餘ノ文字ハ新字トテ容易ニハ用ヒラレザル事也、（今度ノ寛政ノ政ノ字、是即新字ナリ、）然シテ今年ヨリ六十字ト成ル也、

右勘進ノ後、公卿僉議アリテ、數多ノ號ノ中用ヒラルベキト定リタルヲ、七八號十號計モ撰ミスグリテ夫ヲ又難陳トテ、陣ノ座ニテ衆議ノ批判アル事、別册ニ寫シタルノ文、即チ今度ノ難陳ナリ、

右難陳ノ對問ノ上ニテ、改元ノ上卿（乃今度右大臣也、近衞家也、）二號或ハ三號、衆議ノ宜キヲ以テ奏聞アレバ、其上ニテ一號ヲ可トシテ、宣下ノ詔書ヲ以テ定制セラルヽ由ナリ、

此餘ノ作法事數多ナル由、一々筆紙ニ及ビガタシ、唯其大抵ヲ述ルナリ、（口傳アリ）

今度ノ上卿ハ、近衞右大臣殿、其餘難陳ノ文ニ見ユルガ如シ、（公卿夫々今略之）

上卿著仗座、諸卿次第著陣、次上卿令官人敷膝突、次以官人召外記、問諸卿參否、次令官人召寄文書、次諸卿見下文書、次上卿令參議讀申、次上卿仰可定申之由於最末參議、次逆上定申、次上卿仰參議令書定文、書訖讀申、次參議加定文於本解進上卿、次上卿披見定文、次上卿令官人仰可持參宮之由於外記、次以官人招職事、奏聞畢返給、次以官人召辨下文書、次以官人召外記令撤空宮、次參議令撤硯、

改元定次第

先職事下年號勘文、上卿結申、職事仰仰詞、次諸卿見下勘文、次上卿仰參議令讀之、次上卿仰可定申之由於最末參議、次諸卿定申、此間取傳勘文返進上卿、次上卿以官人招職事奏聞、此便返上勘文、次職事歸來、仰一同可定申之由、次上卿令諸卿議定、(此間召職事、)議定畢奏聞、次職事歸來、仰改其年可爲其元年、幷詔書恩赦等事、次上卿以官人召大內記、仰詔書之趣、次內記持參詔書草、入宮上卿披見、次上卿以官人招職事奏聞、畢返給、仰可令淸書之由、次上卿以官人召內記、仰可淸書之由、次內記持參淸書、入宮、上卿披見、次上卿就弓場代、職事奏聞、畢返給、次上卿復仗座、內記置宮退入、次上卿以官人召外記、問中務輔參否、仰可召之由、次中務輔參膝突、賜詔書、次上卿以官人召內記、令撤空宮、次上卿以官人召外記、問叙負佐參否、仰可召之由、次叙負佐參膝突、上卿仰赦事、次辨覽吉書、上卿披見奏聞畢返給、上卿結申、辨仰仰詞、次內記持參請書、入宮、上卿披見、次上卿就弓場代、職事奏聞、畢返給、次上卿復仗座、內記置宮退入、次上卿以官人召外記、問中務輔參否、仰可召之由、次中務輔參膝突、賜詔書、次上卿以官人召內記、令撤空宮、次上卿以官人召外記、問叙負佐參否、仰可召之由、次叙負佐參膝突、上卿仰赦事、次辨覽吉書、上卿披見、奏聞畢返給、上卿結申、辨仰仰詞、次上卿下吉書、辨結申、次職事下吉書、上卿結申、職事仰仰詞、次上卿以官人召辨下之、辨結申、次諸卿退出、

〔視聽草七集七〕寬政改元之難陳yard略

其改〻〻何年、爲〻〻元年、宜政、（字文巳日）廣運、（軍走）隆化、（降死）大象、（大人象）大業、（大苦末）元亨、（二月七日）天正、（天止）一元始、（不吉）天漢、（漢字宜水）治暦又因件例、

〔禁秘御抄　下〕一改元

代始改元、即位次年定事也、其外依大事有改元、職事、官外記等承之、兩文章博士式部大輔、又可然儒卿、少〻擇申、諸卿於陣定申、職事奏事由、重可定申被仰、或有論言、定以前職事奏勘文、有御覽返給、年號字內可然年號無之時、被勘文被下常事也、寬治度被申院、近代每度如斯、嘉保自上被定歟、年號定之後、主上於朝餉令書給、其儀無別事、高檀紙書年號字、（一枚也）其後萬人可書也、承曆元年也、（不書月日、唯年）（懐ﾊﾞｶﾘ也、元年字書也、）次主上著御引直衣、（蘇芳）出御晝御座、有吉書、官方、（辨）藏人方、（頭）自南間奏之、主上取之置御前、復座後披覽之、置御座前、放（文下向御方、異大臣）給之如例吉書、一切奏書時、出御淸涼殿、而近代略儀皆於朝餉有之、於改元吉書者、可有必出御也、延久元年、依入夜於朝餉奏之、希代例也、承保元年、出御中殿、又大內記作詔書、先草、次淸書、改元後必有赦也、

〔柱史抄　下〕改元事

公卿議奏了、改其年可爲其元年之由被定、上卿召內記、仰依其年例可作詔書之由、草淸書、（有御覽）內覽奏下之後、召中務輔給之、

代始無恩赦、但承和天祿二代有此事、自餘有常赦、隨休徵變異、被仰其年例、或有賑恤、或免調庸、

淸涼記云、踐祚明年、有改元事、年內改元非禮、誤也、（已下虫損）

〔元秘別錄　一〕新儀式云、踐祚明年有改元事、（年內改元非禮、誤也、）預先大臣奉仰、召文章博士二人、令勘申年號字、奏聞、勅定下給、又大臣令內記作詔書、先奏其草、次獻淸書、御畫日畢、下所司、納言覆奏之事、皆同他詔書、（或詔末曰赦免）又或據嘉瑞、或以變動、一代之間再有改元、其儀亦准之、此詔相加赦免、或賑之、

〔改元格〕明和九年十一月十六日條。。。事定次第

定、或依諸儒所進不快、自御所被給、延長、天暦、康保等例也、次被仰可令作詔書由、仰詞中、被仰依其例由、代初無赦、自餘多有赦之例、代々不同、大臣召內記仰其由、若無內記者、令儒者之輩作之、先奏其由、辨副勘進之、上卿入外記筥奏、次奏草、入外記筥、殿上辨作時、令外記內覽、次奏清書、黄紙奏下後、可被見御畫日有無、次令外記召中務輔若丞給之、作入筥給之歟、若丞不候者、令外記傳給錄、希有例也、次被下吉書、先官方、次藏人方、

詔書覆奏以前、京官用新年號、諸國者官符後用之、其施行官符、給京官二通者、不謄詔書給諸國八枚者、謄詔書、

勘申年號事

〻〻

其書曰〻〻

〻〻

其書曰〻〻

右依宣旨勘申如件

官衆官姓朝臣名

菅家者註年月日位等

餘人者如江家儀

若有赦之時

非常赦者、大臣召撿非違使佐以下一人、仰詔書施行以前可免見徒由、佐召撿非違使等、相分向左右獄、佐或帶胡籙、乘馬立於獄門、召出囚等、仰之看督長作法、佐仰云、依其事若要其殊以免給、各罷還本貫、重犯不奉仕、爲公御財御調物備進之、看督長曰、乎々止、囚等稱唯、佐仰曰、早欤取之、常赦者、別當奉之、令道志勘申可會赦之輩後免之、

詔云

によるなり、此外應永三十五年正月十一日、勝定院義持薨じ給ひ、此年二月九日に改元正長と號す、是稱光院御代始によれり、是より先應永十五年正月六日、鹿苑院義滿薨じ給ひ、同三十二年二月十七日、長德院義量薨じ給ひしかど、改元ありしにもあらず、又嘉吉三年七月廿一日、慶雲院義勝薨じ給ひ、四年二月五日改元文安と號す、是兵革によれり、是より先嘉吉元年六月廿四日、普光院義敎弑せられ給ひしかど、改元有しにはあらず、是ら其疑ふべき所なれど、武家の御事によらざる事既にかくのごとし、然るを今前代の御事によりて、正德の號を改めらるべき由を以て仰られんに、もし上の人々是等の例によりて議し申さるゝ事ありなんに、いかにや侍ふべき、たとひ又それらの事に及ばずして、仰らるゝ所によられて、改元の事おはしますとも、天下後代有識の君子議し申事あらんには、當時補佐の人々の瑕瑾におはしますまじきにもあらず、是等の間よく〳〵御議定に過べからずと申たりければ、詮房朝臣いかにやはかられたりけん、此事もまた行はれずぞなりける、

〔西宮記臨時一〕改年號

京內詔書出後、不待覆奏用之、御卽位後明年改年號、仁和天皇崩三年改元、

大臣奉勅、仰文章博士、令勘申年號、奏聞、勘定之後、仰內記、令作詔書、奏草及清書、賜御畫日、下中務、中務度案於太政官、太政官連署、大納言覆奏畢、下施行官符、康保年號、以舊勘申年號被改之、

延長年號、博士所進字不快、有勅以文選白雉詩文被改、（閏月改之、延喜元年八月廿九日改元之由告神明、）

〔江家次第十八〕改元事

大臣參陣奉仰、（或於里第奉之、實資例、）仰式部大輔文章博士等、令勘申年號字、（召陣可仰之、近例或令外記傳仰、）可被改元日、大臣參陣定申、（先仰外記、令催諸卿、）著外座、令置膝突、外記進勘文、先作居陣座、令藏人奏勘文等、次蒙可定申之仰、諸卿共定申、次令大辨讀之、定兩三奏之、（付藏人令奏、）重被仰此中可用何年號哉由、勘文留御所、又令奏一

貴翰致拜見候、今般年號改元ニ付、菅家任例選出之候別紙書付之內、寛和之號可然叡慮之旨、左右相丞中江齋勘問有之候處、勘答同意之趣、于具達上聞候處、正德之號可然思召候、右之通遂奏聞、宜有御沙汰候、恐惶謹言、

阿部豐後守正喬　井上河內守　大久保加賀守　秋元但馬守　土屋相模守政直判

高野大納言殿　庭田前大納言殿

如斯御奉書御返事ニテ御沙汰替りて正德之年號被仰付候、文昭院様御代也、

〔僞年號考〕凡年號は、朝廷の命する者にして、武將の預る處にあらず、然れ共當時國柄武家に在を以て、朝廷これを武家に議して、後天下に行はる、故に實は朝家の定むる所といへども、天下に行ふものは、武家の令に出るを以て、鎌倉これを奉せざるに至る也、正長二年改めて永享とす、鎌倉これを用ひず、正長の號を行ふ事三年にして、後に永享に從ふ、神明鏡に出たり

〔折たく柴の記下〕我朝の今に至りて、天子の號令、四海の內に行はるゝ所は、獨年號の一事のみにこそおはしますなれ、異朝の書にも、其事を論せし事も見えたり、古より此かた、我朝改元の例は、代始め、又は革命、革令、三合、天變、地妖、水旱、疾疫、兵革、饑饉等の事によれり、武家の代となりしより後も、武家の御事によりて此事ありし例はいまだ聞ず、其中一二の疑ふべきことあるをもて、或は又其事ありなど申べきにや、その事又辨せざる事を得べからず、建久十年正月十三日、前右大將頼朝薨じ給ひ、此年四月十一日改元ありて正治と號す、是は土御門院御代始によれる也、建保二年正月廿七日、右大臣實朝弑せられ給ひ、此年四月十三日改元ありて承久と號す、是三合幷天變地妖によれるなり、貞治六年十二月七日、寶篋院義詮薨じ給ひ、明年二月廿七日改元應安と號し、長享三年三月廿六日常德院義尚薨じ給ひ、此年八月廿日改元延德と號す、是は兵革天變の事

來如斯、春秋胡氏傳曰、卽位之一年、必稱元年者、明人君之用云々、亦曰、成位乎其中、則與天地參、故體元者、人君之職也云々、易曰、德之首曰元云々、御年號、卽位、改元には無赦、臨時之改元には赦必有之也、臨時之改元は、御所方關東凶事而巳續くか、五穀不熟、萬民疫疾か、上下厄難に依て、天子の不德と一人の御身に引受させ給ひ、御位を改らるゝ御心にて、年號を被改故、改元と申也、元は畢竟天子の御身之上也、然れば下々として、改元あらば不宜など、假初にも申べき事にあらず、可謹可恐なり、扨菅家年號被撰出法は、六十四文字、本字は近代增字二十四字、上下に顚倒して字を雙也、書經魯論之熟字に符合させ被書出事也、改元に付て、上卿、職事、奉行之役三人、撰者方之陳答人五六人、難問人五六人被仰付、尤菅家出入之儒門之被官、其外町宅之庸儒も入込候て骨折事也、假令ば、

寬和　享和　正德

難問人の云く、享之字上に有事何ヶ度、和之字下に有事何ヶ度、和漢兩朝嘉例凶例申立て難ず、夫を唯佳例のみの多さを申立て陳答する也、左右大臣、大中納言判じて、衆議判の後、奏聞を經られ候、凡三ッ斗書被成候、其砌は改元難陳之次第とて、撰者、出處、難問、陳答、批判迄、一冊に書立、堂上堂下にて賞見仕事也、又大意事極り、關東へも被伺候、禁中にて是と究りても、關東より彼と申來り候へば、替候事も候、中御門院御卽位改元被仰付候剋、御書通御座候、

一翰致啓達候、今般年號改元ニ付、菅家任例選出之候別紙書付之內、寬和之號可然御內慮ニ候、依之左右丞中江も勅問有之候處、同意之趣勅答之御事候、右之趣宜有言上候、恐々謹言、

月日失念　重條庭田前大納言殿　保春

殿

土屋相模守殿　秋元但馬守殿　大久保加賀守殿　井上河內守殿　阿部豐後守

如斯被仰遣候處、從關東御返書到來せり、

兆出玄龜、漢祖之用張良、神馮黃石、方今天時開革命之運、玄象垂推始之符、聖主動其神機、賢臣決其廣勝、論此冥會、理如自然、若更存謙退、必成稽疑、爵此改元之制、抑彼創統之謨、則恐違天意、辺致咎徵、伏望因循三五之運、咸會四六之變、遠蹤大祖神武之遺蹤、近襲中宗天智之基業、當創此更始、期彼中興、建元號於鳳曆、施作解於雷聲、清行 機祥難辨、靈憲易迷、獻其丹款、雖望飲於白虎之樽、驗其玉英、恐負責於黃龍之瑞、清行臣誠恐誠惶頓首謹言、

昌泰四年二月廿二日　從五位上行文章博士兼伊勢權介三善宿禰清行上

革令改元

〔鵞峯文集 論四十七〕甲子會紀

村上天皇康保元年甲子 至四年丁卯、○○○○○○○今按、辛酉改元始於延喜、甲子改元始於康保、○中略

正親町帝永祿七年甲子 不改元、至二十二年己巳、

〔元秘抄 三〕依事改元例 ○中略 依甲子

萬壽　應德　天養　元久　文永

〔行類抄〕革令改元例

康保　萬壽　應德　天養　元久　文永　至德　文安

○按ズルニ、革令改元ノ例ハ、此他尚ホ文永ノ次ニ正中アリ、至德ト同年ニ南朝ニハ元中アリ、文安ノ後ニ永正、寬永、貞享、延享、文化、元治等アリキ、

改元式

〔鹽尻 三十三〕年號改元の式、戰國擾亂の時、故實の家名記多く亡て、實按、是元龜應仁の亂後、古法陵夷し、元和の頃までは異朝の年號を取用ひて、勘文の御沙汰もなかりしにや、寬永以來舊にかへりしも、大平のすがた也、元和改元の時まで、地下の學者し庭上に參りしが故ありて今はさる事なしとかや、

○按ズルニ、應仁以後、異朝ノ年號ヲ用キシコト、唯元和アルノミナリ、此說誤レリ、

〔光臺一覽 四〕抑年號と申は、天子卽位は則元年として、往古は無年號處、中古年號始まりしより以

足姬太上天皇崩、然猶文武天皇不改元、至于七年甲子、初改元爲神龜元年、其後六十年、天應元年辛酉夏四月、白壁天皇不豫也、桓武天皇天應元年四月三日受禪、同日即位、十二月廿日太上天皇崩、其後承和八年辛酉無異事、但自承和七年庚申淳和太上天皇崩、九年壬戌嵯峨太上天皇崩、又廢皇太子、以文德天皇爲皇太子、其後六十年、至于今年辛酉也、但唐曆以後、無唐家之史書、仍不得勘合近代之事變、（清行）去年以來、陳明年當革命之年、至于今年、徵驗已發、初有知、天道有信、聖運有期而已、

一去年秋彗星見事

謹案、漢晉天文志、皆云彗體無光、傳日光爲光、故夕見則東指、晨見則西指、皆隨日光而指之、此除舊布新之象也、

一去年秋以來老人星見事

謹案、顧野王符瑞圖云、老人星也、直孤星北地有一大星、（晉灼曰□□也）是爲老人星、見則治平主壽、常以秋分候之南郊、（見春秋元命苞）春秋運斗樞曰、機星得和平合、萬民壽、則老人星臨國、（宋均曰、斗樞臨於人者也）文耀鈎曰、老人星見則主安、不見則兵起、熊氏瑞應圖曰、王者承天得理則臨國、晉武帝時老人星見、太史令孟雄以言、元帝大興三年、老人星見、四年又見、今如此文者、老人星、聖主長壽、萬民安和之瑞也、而今先有除舊之象、後有福壽之瑞、首尾相待、事驗易知、

一高野天皇改天平寶字九年、爲天平神護元年之例、

謹案國史、高野天皇天平寶字九年、誅逆臣藤原仲麿、即改元、爲天平神護、然則非唯天道之符運、又有先代之恒典也、當今之事、豈不仍舊貫乎、

臣伏以、聖人與二儀合其德、與五行同其序、故天道不疾而速、聖人雖靜而不後之、天道不遠而反、聖人雖勸不先之、況君之得臣、臣之遇君者、皆此天授、曾非人事、義會風雲、契同魚水、故周文之遇呂尙、

變、三七相乘、廿一元爲一蔀、合千三百廿年、　春秋緯云、天道不遠、三五而反、宋均註云、三五、王者改代之際會也、能於此源、自新如初、則道无窮也、　詩緯云、十周參聚、氣生神明、戊午革運、辛酉革命、甲子革令、注云、天道卅六歲而周也、十周名曰王命大節、一冬一夏、凡三百六十歲一畢、無有餘節、三推終則復始、更定綱紀、必有聖人、改世統理者如此、十周名曰大剛、則乃三期會聚、乃生神明、神明乃聖人改世者也、周文王戊午年、決虞芮訟、辛酉年、靑龍銜圖出河、甲子歲、赤雀銜丹書、而聖武伐紂、戊午日軍渡孟津、辛酉日作泰誓、甲子日入商郊、

謹案、易緯、以辛酉爲蔀首、詩緯以戊午爲蔀首、依主上以戊午年爲昌泰元年、其年又有朔旦冬至、故論者或以爲應、以戊午爲受命之年、然而本朝自神武天皇以來、皆以辛酉爲一蔀大變之首、此事在□□未出之前、天道□□自然符契、然則雖有兩說、猶可從易緯也、又詩緯以十周三百六十年爲大變、易緯以四六爲大變、二說雖殊、年數亦同、

今依緯說、勘合和漢舊記、神倭磐余彥天皇、從筑紫日向宮、親帥船師東征、誅滅諸賊、初營帝宅於畝火山東南地橿原宮、辛酉春正月即位、是爲元年、當於周釐王三年、齊桓公始覇主會諸侯於鄄、事見史記表、四年甲子春二月、詔曰、諸虜已平、海內無事、可以郊祀、即立靈時於鳥見山中、其處號曰上小野榛原、下小野榛原云、是年周惠王即位元年、齊桓公帥諸侯伐蔡、蔡潰、遂伐楚、至召陵、責包茅、此即桓公兵車第一之會也、

謹案、日本紀、神武天皇、此本朝人皇之首也、然則此辛酉、可爲一蔀革命之首、又本朝立時下詔之初、又在同天皇四年甲子之年、宜爲革令之證、〇中略

今年辛酉昌泰四年也

謹按、自天智天皇即位辛酉之年、至于去年庚申、合二百卌年、此所謂四六相乘之數已畢、今年辛酉、當於大變革命之年也、又天智天皇以來、二百卌年之內、小變六甲、凡三度也、自天智天皇即位辛酉、至于日本根子高瑞淨足姬天皇〇元正養老五年辛酉、合六十年、其年五月、日本根子高瑞淨

中非無誅斬、何者帝王革命、此周易革卦之變也、案、革卦離下兌上也、離爲火兌爲金、金雖有從革之性、非得火則不變、故金火合體、上下相害、戕蕩之理已窮、君臣之位初定、國之不祥、無甚於此、伏望聖鑒豫廻神慮、勅上臈群臣、戒嚴警衛、仁恩塞其邪計、矜莊抑其異口、屬青眼於近侍、推赤心於群雄、則封豕之徒、自然革面、食椹之美、終成好音、撥亂之時、垂其衣裳、即戎之運、鳴其環珮、豈不美哉、臣聞機祥難辨、靈口易迷、獻其丹疑、雖望飲於白虎之樽、驗其玉英、恐負責於黃龍之瑞、淸行誠恐誠惶頓首謹言、

昌泰三年十一月廿一日　　從五位上行文章博士兼伊勢權介三善宿禰淸行

〔本朝文粹七〕奉菅右相府〇道眞書　　善相公

淸行頓首謹言、交淺語深者妄也、居今語來者誕也、妄誕之責、誠所甘心、伏冀尊閣特降寬容、某昔遊學之次、偸習術數、天道革命之運、君臣尅賊之期、緯候之家、創論於前、開元之經、詳說於下、推其年紀、猶如指掌、斯乃尊閣之所照、愚儒何言、但離朱之明、不能視睫上之塵、仲尼之智、不能知篋中之物、聊以管穴、伏添囊篇、伏見明年辛酉、運當變革、二月建卯、將動干戈、遭凶衝禍、雖未知誰、是引弩射市、亦當中薄命、天數幽微、縱難推察、人間云爲、誠足知亮、伏惟尊閣挺自翰林、超昇槐位、朝之寵榮、道之光華、吉備公外無復與美、伏冀知其止足、察其榮分、擅風情於煙霞、藏山智於丘壑、後生仰視、不亦美乎、努力努力、勿忽鄙言、某頓首謹言、

昌泰三年十月十一日　　文章博士三善朝臣淸行

〔革命勘文〕文章博士三善宿禰淸行謹言

請改元應天道之狀

合證據四條

一今年當大變革命年事

易緯云、辛酉爲革命、甲子爲革令、鄭玄曰、天道不遠、三五而反、六甲爲一元、四六二六交相乘、七元有三

うへに、鄭註などもうきたる事のやうにて、何のえるしかはあらむとおもひあなづらるゝ事なるに、かうまさしくいひあてたるは、まことにいみじき博士なりけり、

〔大江俊矩記〕寛政十三年〇享和元年正月十四日辛卯、自葉室頭辨被送廻文兩通、〇中略來月五日、革命改元定、出御、可被早參候也、　正月七日、花押、〇中略辛酉革命、甲子革令之節者、條事定爲別日、早參兩日也、仍參陣、上卿以下所役諸司幷調進物、及早參四五位職事、皆兩度下行被宛行、拜受有之也、

〔元秘抄三〕依事改元例〇中略依辛酉

延喜今年老人星見　應和　治安　永保　建仁　弘長　元亨

〔行類抄〕革命改元例

延喜　天慶　應和　治安　永保　建仁　弘長　元亨　永德　嘉吉

〇按ズルニ、天慶ハ革命改元ニ非ズ、而シテ革命ニヨリテ改元セシ例ハ、此他尙ホ永保ノ後ニ永治アリ、永德ト同年ニ南朝ニハ弘和アリ、嘉吉ノ後ニ文龜、天和、寛保、享和、文久等アリキ、

〔革暦勘文一〕論革命議書　淸行　昌泰二年

預論革命議

臣淸行言、天道玄遠、聖人所以罕言、暦數幽微、緯候以之爲誕、由是學之者若迂遠、傳之者似澀虛、端賜歎其難聞、君山疑其妄作、然而神經怪牒、雖進藏於蟫蠹之奥、易象爻變、猶照爛於韋竹之編、故敢以桀燭仰添烏暉、臣某死罪々々、臣竊依易說而案之、明年二月、當帝王革命之期、君臣相剋賊之運、凡厥四六二六之數、七元三變之候、推之漢國、則上自黃帝、下至李唐、曾无毫釐之失、考之本朝、則而上自神武天皇、而下至于天智天皇、亦無分銖之違、然則明年事變、豈不用意乎、伏惟陛下、誠雖守文之聖主、既當創草之期數、故卽位之始、遇朔旦冬至之慶、改元之後、頻呈壽星見極之祥、長星垂掃舊之祥、衆瑞表照新之應、天數改運、人情樂推、既昭彰於視聽之間、何遑假說於占候之術、但變革之際、必用干戈、蕩定之

王者然後改元立號、(見二左傳疏一)漢人紀元の法に倣はゞ、緯書佛氏等、異端冥妄の說取るに足らざるなり、

〔年年隨筆〕辛酉は革命とて、いみじうあしかる年とぞ、何事のあらむとすらむ、ゆゝしき事也、それも運によりてあたらぬこともありとぞ、諸道の勘文をめさるといふ、ことし(○享和元年)はあたれりやあたらずや、きかまほし、寺々にも仰事ありて、御祈どもありときくはいみじう尊し、其みす法の名、金門鳥敏、々々々々とは、カノトノトリノトシといふ事なりとぞ、まことにやあらん、はかなたち戯にちかくて、御法の尊くめでたかるべきには打あはぬこゝちす、例なれば改元あるべし、寛政といふ年號、政の字はじめて用られつるに、十三までつゞきて、造内裏以下よき事のかぎりなりつれば、めでたき例にぞなるべき、

辛酉の改元は、延喜の度をはじめとす、淸行の宰相の勘奏によられたる也、さるは易緯に、辛酉爲革命、甲子爲革令とありて、鄭玄が說に、天道不遠、三五而變、六甲爲一元、四六二六交相乘、七玄有三變、三七相乘、廿一元爲一蔀、合千三百廿年とあるによりて、神武天皇元年を一蔀の首として、齊明天皇六年庚申まで千三百廿年、天智天皇卽位の年(齊明天皇八年)の辛酉を第二の蔀首として、昌泰三年まで二百四十年、四六相乘の數みちて、延喜元年は大變革命の運なりとぞ、もし此說によらば、今年(○享和元年)は第四の四六よりは六十年おくれ、第三の蔀首よりは百八十年さきだちて、大變の運にはあたらぬにやあらむ、諸道の勘答はいかゞあらん、いぶかしきことなり、さてかの善家の革命勘文に、明年辛酉、當帝王革命之期、君臣剋賊之運云々、又北野の右大臣とておはしましゝに書たてまつりて、明年辛酉、運當變革、二月建卯口動干戈、遭凶衝禍、雖不知誰是、引弩射市、當中薄命云、云、伏冀知其止足、察其榮分、擅風情於烟霞、藏山智於丘壑、後世仰視不亦可乎、努々力々、勿忽鄙言と、ありやがてその辛酉の正月に、北野の御事をあしざまに申せるものありて、左遷し玉へるは、まことに掌をさすがごとく、あさましきまでなむ、神武天皇元年を辛酉とさだめたるがうきたる

子、後水尾元和七年辛酉不改元、莫知其故、以此觀之、博士家革命革令之說、蓋起於村上時也、或曰、神武開國、以辛酉即天皇之位、故後世亦必以辛酉改元、甲子干支之首、故亦必改元、未知然否、

〔茅窻漫錄下〕革命紀元

此邦辛酉甲子の歳運に當るときは、必紀元すといふ事、兼良公の三革說にも見えたれど、何れの御世よりいひ出だし、ことにか、日本紀に、神武帝辛酉年春正月、天皇即帝位、故に辛酉の年必紀元すといふは、其理當れり、甲子に必改元すといふは、いかなる義にか、詩緯推度災に、戊午革運、辛酉革命、甲子革政といふに據るにや、されども年號定まりて遙か以後にいひ出だし、事ならむ、大化以前の異年號も、始終定かならざれど、欽明帝の明要と、推古帝の願轉、齊明帝の白鳳とのみ、辛酉に紀元ありしと見ゆ、甲子の紀元は未見えず、年號定紀の大寶も、辛丑の年に紀元ありて、辛酉は改元なし、聖武帝の辛酉甲子とは改元ありて、桓武帝の甲子と、仁明帝の辛酉は改元なし、醍醐帝の辛酉は、改元ありて甲子はなし、村上帝の辛酉應和、甲子康保より、後柏原帝の文龜永正まで、五百四十三年のあいだ、辛酉甲子ともに皆改元ありて、正親町帝の辛酉甲子はともに改元なし、後水尾帝の甲子は改元ありて辛酉はなし、靈元帝の天和貞享より、當今にいたるまで改元あり、然らば辛酉甲子は、必改元すといふ定法とも見えず、帝王編年紀云、延喜二十三年、昌泰四年七月十五日改元、依辛酉革命老人星也、孔雀經御修法記云、土御門天皇建仁元年二月廿一日壬寅、修孔雀經法于閑院、禳辛酉厄、〈建仁元年は辛酉〉此等の記を考ふるに、神武帝御即位の辛酉を必定法則とし、紀元すとも見えず、老人星辛酉厄などいふは、緯書佛氏等のいふ說にて、人君體元以居正、元年を稱する大法にあらず、勿論辛酉甲子の改元は、漢人定法なき事なり、緯書の類はとらず、王俊川曰、緯書多以三字爲名、〈中略〉皆異端邪術之流、假託聖經、以售邪誣之說、其書今雖不存、而類書引用尙多、終惑後學、〈見鄭瑯代醉〉邪王者の大義法則を取るの書にあらず、改元立號は國家第一の大義にて、劉炫曰、唯

問三合爲治、此勘文所不道、而三合不限于辛酉也、

〔晃陽漫錄〕改元

改元記に、三善清行論革命議狀、清行請改元議狀、革命勘文等をのせ、辛酉の歲に改元あることを說きて、西土にても辛酉に改元ありしことを載す、其文左の如し、昌泰四年三月重奏云、革命之歲宜改年號、其奏在別、朝廷信納、乃改元爲延喜、無幾唐人盧知遠來云、辛酉之年正月十六日、大唐有劉唐均之亂、宮中候屍數千人、數日乃定、改年爲天祐、即知天地災祥之會、出自卦象之中、猶四時代謝、日月出入、皆有定期也、敎書按ずるに、天祐は五代石晉の年號にして、辛酉の歲にあらず、其上延喜は唐の昭宗の大復にあたれば、改元記年號を書き誤るとみえたり、

〔紫芝園漫筆〕八余生延寶八年庚申、明年辛酉、改元天和、其四年甲子、改元貞享、貞享之後五改元、曰元祿、寶永、正德、享保、元文也、元文之六年辛酉、又改元寬保、其四年甲子又改元延享、聞之、曰日本博士家、謂辛酉年爲革命、甲子年爲革令、皆必改元、自前世如是、東涯秉燭談曰、嘗於搢紳家得見一條藤公兼良三革說、其中三善清行易說、而載漢鄭玄唐王肇等說甚詳、大意本周易革卦義曰、詩緯唯慶災、曰戊午革運、辛酉革命、甲子革政、又易緯曰、辛酉爲革命、甲子爲革令、蓋革卦有湯武革命之言、而讖緯家因造此妄說曰、純按、孝德天皇即位元年乙巳號大化、此日本年號之始也、六年庚戌改元白雉、齊明天智並無年號、天武即位元年壬申號白鳳、十五年丙戌改元朱鳥、持統無年號、文武即位初亦無年號、五年辛丑改元大寶、其四年甲辰改元慶雲、自是之後不復有無年號、凡自神武至皇極未有年號、亦無改元、孝德之後、齊明天智持統又無年號、亦無改元、文武以後每世數改元、然辛酉甲子未必改元、元正養老五年辛酉不改元、八年甲子聖武即位改元神龜、光仁寶龜十二年辛酉、改元天應、桓武延曆三年不改元、仁明承和八年辛酉、十一年甲子、皆不改元、醍醐昌泰四年辛酉、改元延喜、其四年村上天德五年辛酉、改元應和、其四年甲子、改元康保、自是以下每過辛酉甲子輒改元、唯正親町永祿四年辛酉、七年甲

革命改元

應和　貞元　永觀　康平　治承　正嘉

兵革改元例

永久　永暦　壽永

疾疫改元例

延長　長德　長元　寛德　康和　永久　長承　保延　壽永　嘉祿　正元　弘安　應長　嘉暦　元德

疱瘡改元例

承暦　嘉保　大治　應保　長寛　安元　建永　承元　安貞　康元　康永

飢饉改元例

壽永　正元

怪異改元例

天德　永久　長承　寛喜

御愼改元例

天元陽五　保安暦運　久壽同　永萬　承安太一　建久厄運

〔圍太暦〕延文四年八月廿六日、自內裏被下御書、依炎旱可有改元哉否、○中略追勘依旱魃改元例、

醍醐延長元年延喜廿三年閏四、廿一日、旱魃疾疫、　圓融永觀元年天元六年二月十六日、旱魃內裏火事、　後一條長元元年萬壽五年七月廿五日、疾疫炎旱、

後朱雀寛德元年長久五十一廿四、炎旱疾疫、　後冷泉治暦元年康平八八十二、旱魃三合御愼、　白川承暦元年承保四十一十七、疱瘡旱魃、

崇德天承元年大治六正廿九、炎旱洪水天變、

〔本朝改元考〕嘉○山崎闇齋、按、革命勘文、蓋首有法二焉、一神武天皇元年、此至當之法也、一黃帝十九年、此無稽之言也、且勘文有本朝奚取法異邦之議、尤爲格論矣、或謂用易卦金革之義、猶之可也、或謂用素

由天委付之故、朕摠臨而御寓、今我親神祖之所知、穴戶國中有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、

○按ズルニ、祥瑞ニ由リテ改元セシ例ハ、此他ニ朱鳥、大寶、慶雲、和銅、靈龜、養老、神龜、天平、天平感寶、天平寶字、神護景雲、天應、嘉祥、齊衡、天安等アリ、

災異改元

〔行類抄〕老人星改元例

延喜〇中略

天變改元例

康保　天延　天元　永祚彗星　正曆　長德　寬弘　長久　天喜　治曆三合　永長　承德　長治　嘉承彗星　天永同上　永久　元久　保延　久安彗星　久壽　永曆　永萬　承安　治承三合　壽永　文治　建久　建保　承久三合　元仁　貞永　文曆　嘉禎　曆仁　延應　仁治　建長　永仁　嘉元　德治　正和　嘉曆

地震改元例

天慶　康保　天延　貞元　永祚　寬弘　長久　永長　承德　康和　文治　建保　貞永　嘉禎　仁治　正元　永仁　文保

炎旱改元例

天德　永觀　長保　長元　寬德　治曆　嘉元

風災改元例

正曆　仁平　貞永　正中

水災改元例

延長　天德　長保　保延　仁平　貞永　正中

火災改元例

牒、其理可然云々、仍忽然而停止了、

〔柱史抄 下〕改元事　代始無恩赦、但承和、天祿、二代有此事、

〔元秘別錄 一〕安和三年圓融院三月廿五日丙申改元、爲天祿代始、詔赦賑給、代始例希有也、

〔改元部類記〕經賴記長和六年四月廿一日己丑、大外記文義參入、被仰云、改元之時、多有免物、而御即位之後初改元之度有免物哉、先例可勘申者、文義申云、多最初改元無免物、但天祿度有免物、又々可勘申者、　廿二日庚寅、參內、文義令最初改元無免物之由、元慶度有免物、是依□國之奏瑞物歟、又天祿度有免物、此外見代々例、更無免物云々、

〔行類抄〕代始改元例以後注寛平

寛平四月廿四日宇多　昌泰八月十六日醍醐　承平四月十六日朱雀　天暦四月廿七日村上
安和八月十三日冷泉　天祿三月廿五日圓融　寛和四月十四日花山　永延四月五日一條
長和十二月廿五日三條　寛仁四月廿三日後一條　長暦四月廿一日後朱雀　永承四月十四日後冷泉
延久四月三十日後三條　承保八月廿三日白川　寛治四月一日堀川　天仁八月三日鳥羽
天治四月三日崇德　康治四月十八日近衛　保元四月廿七日後白河　平治四月廿日二條
仁安八月廿七日六條　嘉應八月八日高倉　養和七月十四日安德　元暦四月十六日後鳥羽
正治四月八日土御門　建暦四月十三日順德　貞應四月十三日後堀川　天福四月十三日四條
寛元二月廿六日後嵯峨　寳治三月十八日後深草　文應四月十三日龜山　建治四月廿五日後宇多
正應八月廿八日伏見　正安四月十一日後伏見　乾元十一月廿一日後二條　延慶十月九日花園
元應四月廿八日後醍醐　正慶四月廿八日光嚴　暦應八月廿八日光明　觀應正月廿七日崇光
文和九月廿四日後光嚴　永和二月廿一日後圓融　至德二月廿七日後小松　正長四月廿七日稱光但代末
永享九月五日後花園

〔日本書紀 二十五孝德〕白雉元年二月戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉、〇中略　甲申詔曰、四方諸國郡等、

沙汰、然而俄に停止、踐祚之年改元、大同之外無其例、踐祚は即位の事ナリ、世別とスルハ誤ナリ、近　貞丈嘗て聞けり、即位の年に年號改元あれば、其年半は先帝の年號にて、半は今上ノ年號也、是地に二人の王あるがごとくなれば忌む也、其明年より今上ノ元年とする也、明年まで舊年號を用ゆる事ありとも、年改まる故拘らずして其年改元ありと云、

〔類聚名物考政事九〕改元例勘文　改元に、即位の年と、その明年との先例有、左に記すが如し、

改元例、天子踐祚、以禪讓年、屬先代、踰年即位、古禮也、而我朝當年即位、翌年改元、巳爲流例、但禪讓年即位、又非無先例、和銅八年九月元明禪位、即日元正即位、改元爲靈龜、養老八年二月元正禪位、即日聖武即位、改元爲神龜、天平勝寶元年四月聖武禪位、同年七月孝謙即位、改元爲天平勝寶、神護景雲四年八月稱德崩、同年十月光仁即位、十一月改元爲寶龜、德治三年八月後三條崩、同年親王即位、十月改元爲延慶、又踰年不改元例、天平寶字二年淡路廢帝即位、不改元、仁和三年宇多帝即位、不改元、隔年改爲寬平、延久四年白河帝即位、又不改元、隔年改爲承保等也、即位以前改元例、壽永二年八月後鳥羽受禪、同三年四月改元爲元曆、七月即位、是非常例也、右神皇正統紀異本裏書也

〔百練抄八高倉〕治承四年十二月一日、今日可有改元之由、有其沙汰、然而俄停止、踐祚年改元、大同之外無其例、

〔玉海〕治承四年十二月四日壬午申刻、大外記賴業來、酉刻大夫史隆職來、各召簾前、仰雜事、賴業追下之後召隆職共云、去月晦日於院殿上、被議關東亂逆事之間、左大臣被定申可改元之由、因之忽其沙汰出來、今月一日申刻、今夕可有改元定之由宣下、而官外記相共改元可有猶豫之由奏聞、外記申云、踐祚明年被改元恒例也、當年改元之例、平城之初、大同是也、被爲不吉、何況天慶將門亂之時無改元、被巳爲吉例、又二日可被遣追討使云々、改年號之翌日、被行凶事、其理可然歟云々者、下官申云、改元者、兼日仰儒士、召勘文、有議定、而當日申刻宣下、未聞如斯卒爾之儀、加之二日可被成追討使官符、凡改元之後政始以前、雖被行如此之事、就中於旁不叶物議者歟云々、仍爲行隆奉行、被仰合禪門、禪門申云、素可有改元之由、全不計申、唯左大臣被申此旨之由承許也、左右難定申、但如承者、官外記申

古事類苑

歳時部四

年號下　逸年號併入

改元

〔運歩色葉集賀〕改元(ゲン)

〔名目抄臨時〕改元(カイグエン)

〔和爾雅三〕改元(カイゲン)改年號

代始改元

〔安齋隨筆前編三〕一新帝元年　元年の立やうによりて、治世の年數違ふ事あり、橘嘉樹が說に云、其帝の元年は、卽位の年を除き、翌年を元年とするは、一年にして二帝あることを嫌によりて、其年を以て先帝治世の終の數に加へ、翌年より新帝の治世を筭る也、其帝により卽位の禮なきもあり、又は二年三年、或は十年餘も後れて卽位の禮あるもあり、其は踐祚の年の翌年を元年と立つるなり、又近世明和上皇〇後櫻町の如き、踐祚の翌年に卽位ありて、又其翌年に改元あり、是も亦踐祚の翌年を以て帝の元年とする也、此事は通鑑に見へたるよし、改元考に記されたり、踰年改元と云、定制なし、又云、先帝の舊年號を用ひらるゝ事間々あり、又上皇の如きは、卽位の次の年に改元ある故に、改元治世の元年に一年後れたり、去れども一年舊號を用ひらるゝの定とす、九十八代崇光帝も如此、百七代後土御門帝も如此、或は卽位の翌日改元あるもあり、一ヶ月二ヶ月後に改元あるもあり、同く此類は踐祚の年を除きて新帝の元年とするなり、

〔安齋隨筆前編十三〕一踐祚之年無改元、同書〇百練抄治承四年十二月一日、今日可有改元之由、有其

明君之治、

〔元秘別錄　六〕文明十九年七月廿日改元長享〇中略　前菅中納言在治〇中略　明治　周易曰、聖人南面而聽天下、嚮明而治、

〔元秘別錄　七〕慶安度〇中略　勘申年號事〇中略　明治　孔子家語曰、長聰明、治五氣、設五量、撫萬民、度四方、

〇按ズルニ、明治ノ年號、尙書註ヲ引キテ勘進セシコト、承應四年改元ノ時ノ、菅原長維ノ勘文ニモ見エ、又文久改元ノ勘文ニハ周易ヲ引キタリ、

川慶喜)内々申願云々、上卿内大臣(忠房公)參仕公卿新大納言(忠順)鷹司大納言殿(輔政)六條中納言(有容)新源中納言(通富)野宮中納言(定功)予(○山科言成)左大辨宰相(長順)源宰相中將(通善)大納言一人缺、三條大納言實愛御理、替不置云々、(十人例、今度九人云々、)予卯半刻許、尋常夏束帶(丸鞆帶)參仕、屆于傳奏(日野大納言頭權弁勝長)作法已下注別記者略之、(○中略)未半刻前、新年號慶應之旨、上卿被仰座中了、(中略)作法已下注備忘、改元治二年爲慶應元、

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年乙丑四月十八日改元
此度年號改元の儀、京都より被仰進候處、慶應と御治定被仰出候段、出仕の面々へ於席々雅樂頭老中列座、伯耆守演達之、

〔元秘別錄五〕文正元年(○中略)勘申年號事(○中略)慶應　文選曰、慶雲應輝、皇階授木、右――寛正七年二月廿一日　正四位下行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣長清

〔公卿補任今上〕慶應四年　卽位、九月八日改元、爲明治元、
九月八日、改元定、上卿醍醐大納言、(忠順)辨長邦朝臣、御用掛柳原前大納言、(光愛)

〔言成卿記〕慶應四年戊辰九月八日、今日改元定云々、御代始御卽位後云々、就御一新、令相違從前御例云々、菅淸兩流年號勘進如例云々、陣儀、公卿難陳擧奏等不行、輔相以下三等衆評論直奏御治定歟、(○中略)
廻文到來　御卽位御大禮被爲濟、先例之通リ被爲改年號候、就而者、是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ、屢改號有之候得共、自今御一代一號ニ被定候、依之改慶應四年、可爲明治元年旨被仰出候事、
九月　行政官
以別紙千種中將被申渡候、仍申入候也、

〔實麗卿記〕慶應四年戊辰九月八日壬午、今日改元定云々、無仗議陣斗云々、依重服中不及參賀、

〔元秘別錄六〕應永卅五年四月廿七日改元(正長○中略)長興朝臣(○菅原)明治　尙書注曰、其始爲民、

文久

〔公卿補任孝明〕萬延二年　二月十九日改元、爲文久元、
二月十二日、國解幷年號勘文等奏聞、○中略十七日、條事定、○中略十九日、辛酉革命定幷改元定、上卿內大臣、齊敬

〔昭德院實記十〕文久元年二月廿八日、此度年號改元、京都より被仰進候ニ付、文久と被仰出候段、月並出仕之面々江、於席々老中列座、紀伊守演達之、

〔嘉永明治年間錄十〕文久元年二月廿八日、萬延二年ヲ改メテ文久元年ト爲ス、
御三家方始出仕の面々へ、於席々年號改元老中演達、右に付病氣幼少にて出仕無之萬石以上は、老中宅へ使者可被差出候、

〔見聞雜錄二十一〕文久
後漢書曰、文武並用、成長久之計、○中略
萬延二酉年二月廿八九〇八恐誤日、年號文久ト改元被仰出、

元治

〔公卿補任孝明〕文久四年　二月二十日改元、爲元治元、二月十二日、國解幷年號勘文奏聞、○中略十八日、條事定、○中略二十日、革令幷改元定、上卿右大臣、公純

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年三月朔日、勅シテ年號ヲ元治ト改ムルノ旨台命、
水戸殿初め總出仕有之、此度京都より年號改元、元治と被仰出候段、席々において老中列座、周防守演之、

慶應

〔公卿補任孝明〕元治二年　四月七日改元、爲慶應元、四月五日、國解幷年號勘文等奏聞、○中略七日、條事定、改元定、上卿內大臣、忠房

〔言成卿記〕慶應元年三月十九日、改元年號內勘文、自野宮被傳、寫取傳達梅溪了、勘者長熙卿、在光卿、修長朝臣、注別記　四月七日、改元定、巳刻、昨秋七月京都兵亂、世間不穩、依之被改元號云々、一橋中納言〈德

十一月十日、年號勘者宣下、○中略十五日、國解并年號勘文奏聞、○中略廿七日、條事定、改元定、上卿內大臣、輔熙

〔溫恭院殿御實紀八〕安政元年十二月五日、今度京都より改元之儀被仰進候處、安政と御治定被仰出旨、出仕之面々江、於席々和泉守演達之、

〔嘉永明治年間錄三〕安政紀元甲寅十二月五日、嘉永七年ヲ改メテ安政元年ト爲ス、

十二月五日御達、於京都十一月廿七日年號改元宣下有之、安政改元、御德日、禁中卯酉、准后辰戌、大樹、寅申

詔書仰詞、今年四月內裏炎上、加以六月地震、且近年異國船屢來近海、依改以嘉永七年可爲安政元年、任寬政例令作詔書、被召勘文之內、御撰之分、文長、安政、安延、和平、寬裕、寬祿、保和、右七號之內、十一月廿七日、安政御治定宣下、勘文、群書治要曰、庶人安政、然後君子安位矣、東坊城從二位菅原聰長、以下略之、

〔公卿補任孝明〕安政七年　三月十八日改元、爲萬延元、三月二日、年號勘者宣下、○中略十七日、國解并年號勘文奏聞、○中略十八日、條事定、改元定、上卿左大臣、忠香

〔萬延改元記〕安政七庚申年改元萬延三月十八日壬午、改元定也、○中略年號改元爲萬延由、奉行被申渡、

〔昭德院實紀六〕萬延元年閏三月朔日、此度年號改元、京都より被仰進候ニ付、萬延與被仰出候段、月次出仕之面々江、中務大輔演達之、

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年閏三月朔日、安政七年ヲ改テ萬延元年ト爲ス、

此日年號改元に付總出仕有之、病氣又は幼少に付、今日出仕無之萬石以上面々は、年號改元の義、先例の通り老中宅へ使者可被差越候、在國在邑の面々は承り次第、飛札可被差越候、右之通可被相達候事、

弘化

天保元年、依實暦例、令作詔書ヨ、

〔公卿補任 仁孝〕天保十五年　十二月二日爲弘化元、十二月一日、年號勘文奏聞、略○中 二日、改元定、上卿左大臣、齊信

〔續視聽草 六集 二〕弘化改元詔

詔、略○中 頃年武藏國言、城中有災、今年又聞、遭祝融祟、此城也、國之要害、朝之重鎭、重鎭有災、是誰謬歟、靈譴不虛、咎在朕躬、爰尋釋先縱、率遵舊典、革紀年之號、敷在宥之澤、其改天保十五年、爲弘化元年、大赦天下、略○中 主者施行、　弘化元年十二月二日 略○中

弘化　尙書曰、武公弘化、寅亮天地、晉書曰、聖德格于皇天、威靈被於八表、弘化已熙、六合淸泰、

〔續雨夜友 五〕天保十五辰年十二月十三日、年號改元御觸寫、

覺

年號弘化與改元被仰出候間、此旨町中不殘可相觸候、

十二月十三日　町年寄役所

譯書曰、右御觸出候ニ付、町中一統江觸達し、同日ゟ弘化(コウクワ)元年と相唱候、尤武家方幷諸國江も夫々御觸相廻り候事、

嘉永

〔公卿補任 孝明〕弘化五年　二月廿八日改元、爲嘉永元、

二月廿二日、年號勘者宣下、略○中 廿七日、國解幷年號勘文奏聞、略○中 廿八日、條事定、改元定、上卿左大臣、尙忠

〔元秘別錄 六〕寛文十三年九月廿一日戊剋改元定、爲延寳元年、略○中　嘉永　宋書志第十樂二曰、思皇享多祜、嘉樂永無央、　文章博士　爲致

安政

〔公卿補任 孝明〕嘉永七年　十一月廿七日改元、爲安政元、

十日條事定、改元定、上卿左大臣、齊信

〔天保改元記〕年號勘文 三通

勘申年號事　天保　尙書曰、欽崇天道、永保天命、〇中略　右依宣旨勘申如件

文政十三年十二月七日　正三位行式部大輔菅原朝臣爲顯

〔天保改元記〕諸卿難陳詞〇中略

天保　難　家厚

天保難佳號、與天方艱難之天方音響相近、如何候 波本、

陳　永雅

被難之趣雖有其謂、字音相近者、於年號強不及其沙汰之旨、先輩 茂 中候歟、況音訓共優美之由、執中人々 茂 有之候、天保二字、遠則天曆、康保、近則天和、享保、皆爲聖代之嘉躅、且書曰、天迪格保、是周公旦述皇天眷顧成湯、至於保安之詞也、又曰、天壽平格、保又有殷、又公旦稱殷代國安而民治之語也、皇天之保右愈灼、國家之禎祥更臻、宜被登用哉、

重陳　實賢

天保號、陳答其理最當矣、天淸陽、萬物之主宰也、保養也、以天德保養萬物、則詩所謂符天保定爾之意、實美號之淸撰者乎、

判　齊信

天保取仲虺之誥之文、以立元號、被篇王者敬天安命之道至矣、蓋聖經之要言、明主願可被採用也、然則以嘉延天保之兩號、令奏聞候 波本、

〔天保改元記〕文政十三年ᄂ二月十日甲午、改元定也、〇中略　職事仰詞、〇中略　次奏議定之趣、次職事歸來、仰改其年爲其元年并詔書恩赦等事、　仰詞云、近來災異多、就中去秋地震、依茲改文政十三年可爲

〇中略改元爲享和(キヤウワ)之旨、奉行被申渡也、尤難陳奏聞畢、奉行參陣、仰爲其元年之儀、時先早速被示之、官務出納等示之了、是吉書可書加新年號故也、

〔年號勘文部類〕享和度(改寛政十三年二月五日)辛酉革命、〇中略勘申年號事、〇中略享和　文選曰、順乎天而享其運、應乎人而和其義、　右依宣旨勘申如件　寛政十三年正月廿六日　從二位菅原在熙

文化

〔公卿補任光格〕享和四年　二月十一日改元、爲文化元、廿六日、年號勘文奏聞、〇中略二月十一日、被行革令定幷改元定、上卿左大臣、治孝

〔文恭院殿御實紀三十六〕文化元年二月十九日、群臣みなまうのぼり、年號文化と改元あるよし、席にして、宿老土井大炊頭利厚これを傳ふ、

〔年年随筆五〕ことしは革令なれば、改元ありて文化といふ、いとめでたし、誰人の勘文にて、何書よりとられたるならん、とひ求めて注すべし、弘治の度にも此號いでゝ、化字新字なりといふ難ありき、新字は近例寛政の政の字いともめでたき例なれば、何の子細かあらむ、そもそも年號は大化を始とす、化字新字之條心えず、さるは大化は事のはじめにて、その儀連綿せず、年號の有无まちまちなり、大寶よりこなたは必あるべき物となりたれば、其以前は猶數の外としたる説にや、

〔年號勘文部類〕文化度(改享和四年二月十一日)甲子革令、〇中略勘申年號事、　文化　周易曰、觀于天文以察時變、觀乎人文以化成天下、後漢書曰、宣文敎以章其化、立武備以秉其威、　右依宣旨勘申如件　享和四年正月廿六日　參議從二位行式部大輔兼長門權守菅原朝臣爲德

文政

〔公卿補任仁孝〕文化十五年　四月廿二日改元、爲文政元、三月十九日、年號勘者宣下、〇中略四月二十日、國解幷年號勘文奏聞、〇中略廿二日、條事定改元定、上卿左大臣、前基

天保

〔公卿補任仁孝〕文政十三年　十二月十日改元、爲天保元、　十二月七日、國解幷年號勘文奏聞、〇中略

享和

以寛、寛以濟猛、猛以濟寛、政是以和、　右勘申如件　天明九年正月廿二日　正二位菅原朝臣胤長

〔翁草百四十九〕去年より改元の御沙汰有て、內侍所臨時の御神樂を修せられ、年號の勘文、文章博士菅家の人々より奏せられ、例の如く諸卿の難陳有り、左記、○中略

寛政　難　　忠尹○中山中納言

寛政號、政字、勘文載此字雖及數ヶ度、未被採用、如何候哉、

陳　　治孝○二條大納言

寛政號、政字、未被採用之由被難申、雖有其謂、歷代被用新字例、不可勝計候、强不可有憚候乎、且寛字在上、遠則寛平、近則寛延之嘉躅、最美號之間、被擧用可宜候哉、

上卿○花山院大納言愛德

寛政號陳答頗善候、亦北史曰、每思知百姓疾苦、以增修寛政、旁珍重候、○下略

〔翁草百四十九〕詔書之寫

詔○中略　朕率由前聖之嘉摸、后王之恒規、乃以薄德、謬守神器、一物失所、無忘罪己、茲懷災祥之懼、彌懋安全之思、上副天心、下應民望、故以勅旨早改曆號、宜用新元、而遵鼎義、其改天明九年、爲寛政元年、大赦天下、○中略　主者施行、

寛政元年正月廿五日

〔公卿補任光格〕寛政十三年　二月五日改元、爲享和元、廿六日、國解幷年號勘文等奏聞、○中略　二月二日、條事定、○中略　五日、辛酉革命定、幷改元定、上卿右大臣、忠良

〔文恭院殿御實紀三十〕享和元年二月十三日、群臣こと〴〵く出仕ありて、享和と年號改元のよし、席々にして安藤對馬守信成して傳ふ、

〔大江俊矩記〕寛政十三年○享和元年　二月五日壬子、革命仗議改元定也、○中略　議定畢、奏聞、賴壽朝臣歸來、

寬政

初陳　今出川大納言

天明之號被難申旨、非无其謂、但天平已後、天字每度出現之上者、吉凶可相交乎、吉凶相交例、可就吉之由、先賢所議申也、此號被奉用可宜候、

二陳

天明號、陳答之趣、尤可然、權中納言藤原朝臣被申有火恐之由、雖然日月者陽與陰也、陰陽合德天道成也、何有其恐乎、

三陳　菅中納言

天明號、兩卿被陳申上者、雖无其詞、此號於經書佳證不少、尤珍重之號也、可被奉用哉、

左大辨判斷

人々被申旨既分明、況說命亦曰、惟天聰明、惟聖時憲、旁以可謂嘉號、以天明文化二號可奏聞候、

〔一話一言 三十九〕天明改元詔

詔、資準的於劉漢建元之遺音長振、尋濫觴於本朝大化之餘風久傳、是以創業之君、登極必改正、修德之主、繼統又新元、朕苟以庸昧躬、唯賴良弼之力、載臨大寶位、將遵列聖之訓、宜改舊號以施新化、其改安永十年、爲天明元年、主者施行、

天明元年四月二日

〔公卿補任 光格〕天明九年 己酉 正月廿五日改元　廿二日〇正月 國解并年號勘文奏聞於上卿右大臣 經熙 里亭有之、奉行俊親朝臣、廿五日、條事定、改元定、上卿右大臣 經熙

〔文恭院殿御實紀 六〕寬政元年二月三日、群臣出仕あり、年號寬政と改元のよし、席々にして鳥居丹波守忠意これを傳ふ、

〔年號勘文部類〕寬政度 改天明九年正月廿五日、依去年內裏炎上京內延燒也〇中略 勸申年號事〇中略 寬政 切无彩 左傳曰、施之

天明

近有寬永之嘉蹤、且安定也、永長也、元號定而長之意、可稱美、猶可在上宜、　內大臣、安永號陳答尤宜候、殊人々多被擧申之上者、可被採用候、天明號本文宜候、最吉之號也、且所被陳申、總協其理、以安永天明兩號、人々奏聞候ハン、

〔年號勘文部類〕安永度改明和九年十一月十六日　勘申年號事中略○　安永切無形　文選曰、壽安永寧、　右依宣旨勘申如件　明和九年十一月十四日　從四位下行侍從菅原朝臣在熙

今度代始、依靈元院佳例不可有改元旨、關白被仰定了、其後自武家申行之間、俄改元、因難爲代始猶有赦儀、依享保元年例可作詔書之由被仰下云々、而在熙朝臣元非勸者之列、大學頭爲弘朝臣豪勸者宣旨之後、奏內勸文了、依故障理因被加在熙朝臣、猶用爲弘朝臣所勸之號而奏之云々、

〔公卿補任光格〕安永十年辛丑　四月二日改元爲天明元、三月廿一日、年號勘者宣下、中略○　廿六日、國解幷年號勘文等奏聞、中略○　四月二日、條事定改元定、上卿左大臣、輔平

〔大江俊冬記〕安永十年四月二日巳、改元也、辰剋早參、

〔浚明院殿御實紀四十四〕天明元年四月十三日、群臣出仕す、この月二日京都にて改元あり、天明と稱せらるゝよし、宿老これを傳ふ、

〔翁草百六十一〕一天明。改元の始に、或人眉を顰て、諺に天命に盡ると云事有、此年號の間に何ぞ盡る大事有らんと申しが、果して千ゝせ經る繁榮の平安城、まさに盡て新都となんぬ、

〔九箕雜記〕年號勘文

天明　尙書曰、顧諟天之明命、中略○　式部大輔菅原爲俊

申詞中略○

難　花山院中納言

天明號、天字代始被用之、有天長天暦之嘉蹤、尤雖爲美號、先々或申、有火之恐之由歟、

安永

〔海録十八〕明和　寶暦十四年六月一日(二〇一恐誤)改元　尚書云、百姓昭明、協和萬邦、(菅原在家考)

〔翁草百六十二〕往し明和改元の折からも、八年迄の間は異なる事も有まじ、明和九に至らば、世人迷惑する事あらんと申せしが、明和九辰年、世難數々有て安永に改られぬ、

〔公卿補任後桃園〕明和九年(壬辰)　爲安永元、十月廿四日、年號勘者宣下、(○中略)十一月十四日、國解幷年號勘文奏聞、(○中略)十六日、條事定改元定、上卿内大臣、(輔平)

〔續史愚抄後桃園〕明和九年十一月十六日丁未、被行改元定、(○中略)改明和爲安永、依關東大火大風云、勘者五人、安永號侍從在熙朝臣撰申、赦令吉書奏等如恒、

〔浚明院殿御實紀二十六〕安永元年十一月廿五日、この日改元ありて、明和九年をあらため安永元年と號す、群臣出仕して賀す、

〔改元格〕明和九年十一月十六日改元定次第(○中略)申詞

内大臣、年號ノ事、安永天明ノアイダ被用何ゴトノ有ンヤ、　右大臣、年號ノ字、建正安永内可被用哉、　西園寺大納言、年號ノ字事、式部大輔菅原朝臣勘申萬祿、右大辨菅原朝臣勘申天保、　殿大納言、年號ノ字、安永用ヒラルベキヤ、　日野中納言、年號可被用何字哉事、在熙朝臣勘申天明安永兩號之間、特無難候歟、　橋本中納言、年號之事嘉德可被用哉、　廣橋中納言、年號ノ事、式部大輔菅原朝臣勘申嘉德、侍從在熙朝臣勘申安永、殊無難候歟、　左衞門督、年號字事、文長安永ノアイダ可被計用哉、　宰相中將、年號ノ字事、建正安永ノアイダ可被計用哉、　左大辨宰相、式部大輔菅原朝臣、右大辨菅原朝臣、文章博士登良朝臣、輝忠朝臣、侍從在熙朝臣等勘申年號、可被用何字哉事、式部大輔菅原朝臣勘申嘉德、侍從在熙朝臣勘申安永、殊難不候歟、(○中略)

安永　難、西園寺大納言、安永之號、寬文改元有叡問之時、義祖實晴申字難之間、難擧用候、猶宜在群議歟、　陳、殿大納言、安永ノ號最宜候、近有改元和爲寬永之嘉蹤、可被擧用候、　重陳、右大將、安永號

〔公卿補任桃園〕寛延四年辛未 爲寶曆元 諒闇 十月七日、年號勘者宣下、○中略 廿五日、國解年號勘文等奏聞、○中略 廿七日、條事定幷改元定、上卿右大臣、宗基

〔續史愚抄桃園〕寛延四年十月廿七日庚申、被行改元定、○中略 改寛延爲寶曆、依變異也、勘者三人、寶曆字式部大輔爲範擇申、有赦令吉書奏如恒、

〔大江俊章記〕寛延四年十月廿七日、改元也、巳刻總參、○中略 戌刻改元之儀始ル、○中略 頭羽林參直廬、申所擧之字、攝政被仰可一同定申旨、頭羽林出陣、無顯嫌 雖陳之趣奏聞、○中略 承勘經本路出陣、此時無嫌 仰、改寛延四年可爲寶曆元年由、 廿八日、定文奏聞ニ付、頼亮巳半刻參仕、後聞、執筆基衡朝臣、持參定文清書、於上卿亭附家司、上卿見給、召頭中將被仰可奏聞由、頭中將參內、

〔惇信院殿御實紀十四〕寶曆元年十一月三日、改元ありて寶曆と稱せらるよしを仰出さる、よて群臣臨時の出仕あり、三家を始め方々へ傳へしめらるゝ事例の如し、

〔海錄十八〕寶曆 寛延四年十一月三日改元十月廿七日(朱書) 貞觀政要云、及恭承寶曆、寅奉帝圖、垂拱無爲、氛埃靖息、菅原爲範勘考○中略

右年月日は、江戸にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時を志るし付、その朱書を用ふべきもの也、

〔公卿補任後櫻町〕寶曆十四年甲申 六月二日改元、爲明和元、五月廿七日、國解幷年號勘文奏聞、○中略 六月二日、條事定幷改元定、上卿左大臣、實償

〔續史愚抄後櫻町〕寶曆十四年六月二日壬午、被行改元定、○中略 改寶曆爲明和、依代始也、勘者五人、明和字右大辨三位在家擇申、

〔浚明院殿御實紀九〕明和元年六月十三日、此月二日明和と改元宣下ありし事、京より申來りしにより、松平右京大夫輝高奉はりて、出仕の群臣に傳ふ、

寛延

〔續史愚抄 櫻町〕寛保四年二月廿一日己巳、有仗議、今年甲子、當革令否事、○中略次被行改元定、○中略改寛保爲延享、依革令也、勘者五人、延享字文章博士長香擇申、有赦令吉書奏等如恒、

〔有德院殿御實紀 五十九〕延享元年二月廿九日、ことし甲子によりて、例のごとく、この廿一日、京にて寛保四年を延享と改元せらるゝよし仰出さる、

〔年號勘文部類〕延享度 改寛保四年二月廿一日、依革令也、○中略 勘申年號事 延享 藝文類聚曰、聖主壽延、享祚元吉、 右依宣旨勘申如件 寛保四年二月十六日 從五位上守大藏大輔兼行文章博士菅原朝臣長香

〔公卿補任 櫻町〕延享五年戊辰 七月十二日改元、爲寛延元、五月廿七日、國解幷年號勘文奏聞、○中略七月十二日、條事定幷改元定、上卿右大臣、内前

〔續史愚抄 桃園〕延享五年七月十二日甲午、被行改元定、○中略改延享爲寛延、依代始也、勘者三人、寛延字式部大輔爲範擇申、有吉書奏如恒、

〔海錄 十八〕寛延 延享五年七月十八日改元十二日(朱書) 文選云、開寛裕之路、以延天下之英俊也、○中略
右年月日は、江戸にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時をしるし付、その朱書を用ふべきもの也、

〔寶曆集成絲綸錄 六〕寛延元辰年七月十八日
病氣又者幼少ニ而、今日出仕無之萬石以上之面々、年號改元之儀、先例之通、老中宅江使者可差越候、在國在所之面々者、承次第飛札可差越事、○中略 右書付、大目付江 雅樂頭渡之、
寛延元辰年七月
年號寛延與改元被仰出候間、此旨可申不殘可相觸候、以上、
七月

體天作制、須時立政、至于帝皇、遂重熙而累盛、　右依宣旨勘申如件　享保廿一年四月廿一日　從四位上行大内記兼侍從文章博士菅原朝臣在秀

〔海錄十八〕元文　享保廿一年五月七日（四月廿八日（朱書））改元　周易云、黃裳元吉、文在中也、〇中略

右年月日は、江戸にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時をしるし付、その朱書を用ふべきもの也、

寛保

〔公卿補任櫻町〕元文六年辛酉（二月廿七日改元爲寛保、依革命也、）　廿三日、辛酉革命、諸道勘文幷外記勘例等奏聞、〇中略　廿八日、年號勘者宣下、〇中略　二月廿三日、國解幷年號勘文奏聞、〇中略　廿四日、條事定、〇中略　廿七日、辛酉革命定幷改元定、上卿内大臣種基、

〔續史愚抄櫻町〕元文六年二月廿七日壬子、有仗議、（今年辛酉、當革命否事、）〇中略　次被行改元定、〇中略　改元文爲寛保、依革命也、勘者四人、寛保字文章博士長香撰申、有赦令吉書奏等如恒、

〔有德院殿御實紀五十三〕寛保元年三月三日、ことし辛酉なれば、先規のまゝ京にて前月廿七日改元あり、元文を寛保と改らるゝよし仰出さる、

〔年號勘文部類〕寛保度（改元文六年二月廿七日、依革命也、）〇中略　勘申年號事、〇中略　寛保、國語曰、寛所以保本也、注云、本位也、寛則得衆、　右依宣旨勘申如件　元文六年二月廿三日　從五位下守大藏大輔兼文章博士菅原朝臣長香

〔海錄十八〕寛保　元文六年三月三日（二月廿七日（朱書））改元　國語云、寛所以保本也、注曰、本位也、寛則得衆、（菅原爲範考）〇中略

右年月日は、江戸にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時をしるし付、その朱書を用ふべきもの也、

延享

〔公卿補任櫻町〕寛保四年甲子　二月廿一日改元、爲延享元、廿七日、年號勘者宣下、〇中略　二月十六日、國解幷年號勘文奏聞、〇中略　十八日、被行條事定、〇中略　廿一日、被行革令定幷改元定、上卿右大臣、（道香）

元文

解年號勘文等奏聞、○中略廿二日、條事定幷改元定、上卿右大臣、家久

〔續史愚抄中御門〕正德六年六月廿二日庚戌、被行改元定、○中略改正德爲享保、依變異也、是關東內事故云勘者五人、享保字式部權大輔長義撰申、敕令吉書奏等如恒、

〔有德院殿御實紀二〕享保元年七月朔日、近年大喪打つゞきしかば、京にて改元あり、正德六年をあらため享保元年と稱すよし、其事令し下さる、

〔月堂見聞集八〕年號改元勅詔

詔、○中略朕以薄德居大寶、常懷累卵之危、天賚良弼輔皇猷、既歷破瓜之齡、雖效太平於前聖、尙畏明威于上尺、故以叡旨、早改曆號、宜用新元而遵鼎義、其正德六年爲享保元年、○中略主者施行、

享保元年六月念二日

以上周書曰、享此天命、保有萬邦云々、

〔鹽尻一〕一正德改元諸家勘文、正德六年丙申六月二十二日未刻條事定、同月日申刻改元、○中略以正德六年、改爲享保元年、七月朔、關東改元令、

〔年號勘文部類〕享保度改正德六年六月廿二日、此度改元無其故、大樹新任之時也、○中略　勘申年號事○中略　享保　後周書曰、享茲大命、保有萬國、　右依宣旨勘申如件　正德六年六月廿二日　參議正三位行式部權大輔菅原朝臣長義

〔公卿補任櫻町〕享保二十一年丙辰　四月廿八日改爲元文元、依代始也、　四月一日、年號勘者宣下、○中略廿六日、國解年號勘文奏聞、○中略廿八日、改元定條事定、上卿右大臣、兼香

〔續史愚抄櫻町〕享保二十一年四月廿八日壬辰、被行改元定、○中略依代始、改享保爲元文、勘者三人、元文字文章博士在秀朝臣撰申、有吉書奏如恒、

〔年號勘文部類〕元文度改享保廿一年四月廿八日、代始、○中略　勘申年號事、○中略　元文、　文選曰、武創元基、文集大命、皆

享保

將（師季）已下八人參仕、次被行改元定、上卿已上同前、改寶永爲正德、依代始也、（先是有院奏）正德字文章博士。。。總長朝臣撰申。。。。勘者四人、吉書奏等如例、

〔文昭院殿御實紀十〕正德元年五月朔日、去月廿五日京にて改元あり、正德とあらためらるゝよし令せらる、不時の改元には、毎々大赦行はるゝといへども、御卽位の改元によて、其事なきむねをふれらる、

〔藩鑑十八〕正德　寶永八年五月朔改元（四月二十五日（朱書））　尙書云。。正德利用、厚生惟和、（菅原總長考）○中略

右年月日は、江戶にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時をしるし付、その朱書を用ふべきもの也、

〔年號辨〕近世大明の人、年號之事を論じて、正の字を用ひし代々不祥の事なる、凡其文に於いて、忌べき字やあると申輩あり、（蜀都雜抄、秘笈、千百年眼、五雜俎等之雜書見へたり、）君子の論にはあらず、○中略野宮故中納言定基卿の文たてまわりしに、正德の號擧し申せしに、議定の事、尤以身の面目たるよしをしるされき、此卿當世の博學强識の人にて、かの大明の人の說などしらざる人にあらず、その陳じ申されし處の理長じぬる上は、諸卿も難ずるに其詞塞りし事と見へたり、

十一月（壬辰）　筑後守新井君美

右一卷は正德二年冬、文昭廟薨御之後、正德之年號不吉之儀、林家より申出、卽大學頭信篤、御老中迄以書付、改元有之可然ト申立候處、越前守間部侯詮房、其由筑後守へ被申聞候、筑後守此一篇を記して明辨有之、御老中御聞屆、改元之事相止候、然れども此一篇は、林家へ對し候て、事端も起候品ニ候得共、林家ヲ之相手は筑後守にて候、事理明白、引證的當、尤至極之儀ニハ候得共、世間へ流布仕候事は、堅く無用可仕候、其歲十一月廿九日室新助、

〔公卿補任（中御門）〕正德六年（丙申）　六月廿二日改元爲享保元、六月三日、年號勘者宣下、○中略廿一日、國

寶永

正德

年九月卅日　從四位上行少納言兼侍從文章博士大内記菅原朝臣長量

〔續皇年代私記東山〕寶永六元年甲申三月十三日改元、關東地震、自將軍家被申、

〔續史愚抄東山〕元祿十七年三月十三日壬子、有條事定、攝津國司言雜事三箇條上卿右大臣輔實巳次公卿右大將伊季巳下九人參仕、次被行改元定、上卿巳下同前、改元祿爲寶永、依東國地震事也、勘者六人、寶永字侍從爲範撰申、赦令如恒、

〔後中内記〕元祿十七年三月十四日、改元也、珍重々々、

〔常憲院殿御實紀四十九〕寶永元年三月三十日、この十三日京にて改元ありて、元祿十七年をあらため、寶永元年と稱せらるゝ旨仰出さる、

〔鹽尻二十五〕改元略記

寶永元年甲申三月十二日辛亥、改元條儀、同十三日壬子未一點條事定、同日申一點改元定、天皇御紫宸殿、○中略改元祿十七年爲寶永元年、　同月三十日關東改元御披露、諸大名總登城、甲府、紀伊、尾張、水戸、家老登城、大廣間出御、改元被仰出、同日甲府中納言殿、紀伊中納言殿、尾張中將殿、水戸宰相殿登城、御賀被申上、

右改元は、依去年關東大地震御執奏ト云々、

〔海錄十八〕寶永　元祿十七年二月晦改元十三日(朱書)　唐書志云、寶祚惟永、暉光日新、菅原爲範考之○中略

右年月日は、江戸にて改元被仰出候日時を記し侍る也、朱書は京都にて改元ありし日時をしるし付、その朱書を用ふべきもの也、

〔公卿補任中御門〕寶永八年辛卯　四月廿五日改元爲正德元、依代始也、　四月八日、年號勘者宣下、○中略十八日、國解續文等奏聞、○中略廿五日、條事定幷改元定、上卿右大臣、綱平

〔續史愚抄中御門〕寶永八年四月廿五日甲寅、有條事定、筑後國司言雜事三條上卿右大臣綱平巳次公卿右大

章。博。士。在。庸。擇申、赦令吉書奏等如恒、

(百一錄)延寶九曆辛酉九月廿九日改元有之、改延寶九年爲天和元年、革命也、

(後中内記)延寶九年八月十五日、先日之日時勘文令獻上、辛酉勘者宣下七日、年號勘者宣下十三日被仰定、　九月廿二日、改元定事、可爲來廿九日可觸催由、先左府可申、并御次第可有獻上旨、可申由被仰出、

(年號勘文部類)天和度改延寶九年九月廿九日、依革命、

勘申年號事〇中略　天和　後。漢。書。曰、天人協和、萬國咸事、　右依宣旨勘申如件　延寶九年　正五位下行式部少輔兼侍從文章博士菅。原。朝。臣。在。庸。

貞享

(續史愚抄靈元)天和四年二月廿一日丁巳、被行仗議、今年甲子、當革令、否事也、〇中略次有改元定、〇中略改天和爲貞享、依革令也、勘者五人、貞享字前。菅。大。納。言。恒。長。擇申、赦令吉書奏等如恒、

(常憲院殿御實紀九)貞享元年二月廿八日、去廿一日京都にて年號改元あり、天和四年を改め、貞享元年とせらるゝむね仰出さる、

(年號勘文部類)貞享度改天和四年二月廿一日、依革令甲子也、〇中略　勘申年號事〇中略　貞享、　周。易。曰、永貞吉、王用享于帝吉、　右依宣旨勘申如件　天和四年二月廿一日　正二位菅。原。朝。臣。恒。長。

元祿

(續史愚抄東山)貞享五年九月三十日己亥、被行改元定、〇中略改貞享爲元祿、依代始也、勘者三人、元祿字文。章。博。士。長。量。朝。臣。擇申、吉書奏如恒、

(常憲院殿御實紀十八)元祿元年十月六日、この九月三十日京にて改元あり、貞享五年をあらため、元祿元年と稱せらるゝ旨、注進ありしをもて、けふ其旨仰出さる、

(年號勘文部類)元祿度改貞享五年九月廿日、代始、〇中略　勘申年號事、〇中略　元祿、　宋。史。志。曰、以仁守位、以孝奉先、祈福建下、侑神照德、惠綏黎元、懋建皇極、天祿無疆、靈體允廻、萬業其昌、　右依宣旨勘申如件　貞享五

天和

〔改元物語〕寬文三年、當今皇帝〈○靈元〉即位マシマス、御宇ノ初メナレバ、改元アリタクオボシメス沙汰アリシトナン、然ドモ事遂ザレバ、江戶ヨリ御許容ナカリケルニヤ、今年寬文十三年五月八日、內裏炎上、同八月改元ノ沙汰アッテ、九月三日、京兆尹永井伊賀守尙庸方ヨリ、年號ノ勘文八條到來ス、稻葉美濃守正則、久世大和守廣之、土屋但馬守數直ヨリ勘文ヲ考ヘ、明日登城スベキノ旨申シ來ルニ依テ、卽日勘例、愚按ニ京都ノ勘文ノ要ヲ取テ和解ヲ調ヘ、翌四日、先雅樂頭忠淸宅ニ往テ內見セシメ登城ス、四執政列座ノ前ニテ逐一コレヲ讀ム、愚按ノ趣各ノ意ニ叶ヒ、褒美ノ詞アリ、コヽニ於テ四老御前ニ進ミ言上アリテ、伊賀守尙庸方ヘ返書ヲ遣ス、予ガ愚意ハ八條ノ中ニテ、延寶、弘德、天龜ヲ上トス、寶永、嘉永ヲ中トス、享延、建祿、至元ヲ下トス、四老各予ガ口說ヲ聞テ、延寶ハ延曆延喜ノ吉例最宜シ、弘德天龜モ、文字ノ意モ唱モメデタシ、寶永ハ應永ノ例モ寬永ノ例モ然ルベシ、嘉永ハ嘉吉ノ例、不吉也、享延ハ唱宜シカラズ、建祿ハ建ノ字コボスト訓ムナレバ宜シカルベカラズ、至元ハ元ノ世祖日本ヲ侵セシ時ノ年號ナレバ、不吉也ト、評議マチ〳〵ナリ、是皆予ガ愚按ニ述シ趣也、雅樂頭忠淸、美濃守正則共ニ曰、至元ノ年號ヲ勘進ヒルハ、異朝ノ故事ニクヲシ、三家ノ越度ナリト、夫正保ヨリ每度ノ勘例、其ニ公私雜纂ニ其草按ヲ載タリ、寬文ノ號十三年マデ改メズシテ、本朝通鑑モ此間ニ成就シヌレバ、私ノ爲ニハ嘉號ト謂フベキ歟、此度ノ改元頗ル遺念ナキニ非ズ、蓋改元ハ天下ノ大擧ナリ、然ルニ正保ヨリ明曆マデハ、每度先考〈○信勝〉ノアヅカル所ナリ、萬治ヨリ此度マデ三度予ガ與リシ所ナリ、此僉議ノ時、執政ノ外、予父子ナラデハ一人モ與ル者ナシ、微少ノ身ト雖ドモ、是亦稽古ノ力ニ非ズヤ、事ノ次ニ子孫ニ示サン爲ニ、言長ケレドモ記シ侍ル者ナリ、延寶元年癸丑九月二十三日、弘文院學士兼禮部尙書林〈恕〉之道誌、

〔續史愚抄〈靈元〉〕延寶九年九月廿九日己卯、被行仗議、〈今年辛酉、當革命否事、〉上卿左大臣、〈基熙〉已次公卿權大納言〈熙房〉已下九人參仕、〈○中略〉次有改元定、上卿已下同前、改延寶爲天和、依革命也、勘者三人、天和號文。

ハ共ニ菅家ノ末也、紀傳道ノ家、此三家ノミ今ニ傳テ、其外ハ皆斷絕スルトナン、予忌除テ勸例ヲ調ヘ、私意ヲ以テ上中下ヲ定メバ、其中寛文ヲ第一トス、雅樂頭忠淸ノ旨ニ依テ登城シケレバ、保科肥後守正之、酒井讃岐守入道空印、雅樂頭忠淸、伊豆守信綱、豐後守忠秋、美濃守正則列座ニテ、勸例ヲ聞キ、各共ニ寛文シカルベシト思ハル、體也、然レド今度ノ改元ハ公家ヨリノ御沙汰ナレバ、唯一ツニ武家ヨリ定メラルベキニモ、御遠慮アルベキ儀也トノコトニテ、寛文ニ勸文ノ內二ツヲ加ヘテ、三ツノ內叡慮次第ト、佐渡守親成方ヘ申シ遣シ宜シカルベキト議定シ、上意ヲウカガヒ、其旨ニ決シ、肥後守正之ハ今太平ノ御代ナレバ、寛文最宜シカルベシト思ハレケル色ナリ、然レドモ衆議ノ上ニテ御前ニテ定ルコトナレバ、重テ云ニ及バズ、四月二十五日改元アッテ寛文ト號ス、執政諸老皆オモヘラク、公家武家共ニ同意ノ年號珍重ト申サル、風聞ニハ吉良若狹守義口內々ニテ、諸老ノ旨ヲ傳ヘ申シ遣シケルニ因テ、寛文ニ定ルトナン、後日若狹守義口予ニ語リケルハ、此度ノ年號ハ春齋意ニテ定マルト、京都ニテ沙汰アリト、凡正保ヨリ以來改元度々ニ及テ、五年三年ニ過ズ、寛永ノ例ニテ久シカルベシト、上下共ニ申シアヘリ、

〔皇年代私記〕（靈元）延寶八（元年癸丑九月十一日改元、依代始、又火災、）

〔續史愚抄〕（靈元）寛文十三年九月廿一日丁亥、被行改元定、（中略）○改寛文爲延寶、依火災事也、勘者五人、延寶字菅中納言（爲庸）擇申、無赦令、（依火災事、雖有改元、又爲代始閒、被論議云、）

〔百一錄〕寛文十三年九月廿一日、戌剋改元、先條事定事、了改元定、上卿左大臣九條兼晴公也、（中略）○改寛文十三年爲延寶元年、年號勘文勘者、五條中納言爲庸、東坊城中納言知長、高辻式部大輔豐長、五條大內記爲致、東坊城侍從長詮、已上五人、國解定文等官務ヨリ出、

〔元秘別錄〕（六）寛文十三年九月廿一日（戌剋）改元定、爲延寶元年、（去五月內裏諸家京町中大火事、世變由、又國々洪水、）勘申年號事、

延寶　隋書志曰、分四序、綴三光、延寶祚、渺無疆、　權中納言爲庸

寛文

萬治三（戊戌七月二十三日戊子）考證（唐書云、正本則萬事治、史記云、衆民乃定、萬國爲治、菅原豐長考之、）

〔改元物語〕其三年（○明曆）正月、江戸大火アリ、其時ノ巷說ニ、明曆ノ二字、日月マタ日ヲソヘタリ、光リ過タルニ由リ大火事アリナド、云フ、翌年ニ改元アツテ萬治ト號ス、此改元ノ時ハ、先考（○林信勝）ノ例ノ如ク、予（○信勝子恕）勘例ヲ調エ、公家ノ勘文ヲ讀テ、井伊掃部頭直孝、酒井雅樂頭忠世、酒井讚岐守忠勝、松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、稻葉美濃守正則列座、アマタノ年號ノ字ヲ議シテ、其中ニ貞觀政要ノ文ヲ引テ、本固萬事治ト云ヘルヲ予讀ケレバ、掃部頭直孝曰、コレホドノ吉事アル可ラズト申サル、美濃守正則マコトニ宜シカルベシト云ヘリ、讚岐守忠勝等モ最ト同ジ、御前へ出テ言上シ定ル、

〔皇年代私記（後西院）〕寛文二（元年辛丑四月廿五日改元）

〔續史愚抄（後西院）〕萬治四年四月廿五日甲辰、被行改元定、（○中略）改萬治爲寛文、依火事也、勘者三人、寛文字式部權大輔（爲庸）撰申、

〔武江年表（二）〕寛文元年辛丑（八月、閏四月廿五日改元、）四月年號改りし時、馬ならばいかほどはねんうしの年扱もはねたりくわんぶんぐわんねん（奇跡考に出づ、其角が父東順のすさびなるべし、）

〔元秘別錄（六）〕萬治四年四月廿五日改元、改萬治四年爲寛文元年、（去正月十五日、禁裏院中諸家依火災也、）年號事、（○中略）

寛文　荀子曰、節奏陵而文、生民寬而安、上文下安、功名之極也、　爲庸

〔改元物語〕其四年（○萬治）ニ當ル正月十五日、內裏炎上ス、改元アルベキ旨、京兆尹牧野佐渡守親成ヨリ江戸へ言上ス、執政老臣相談ニテ、萬治ノ改元ハ江戸ノ火事ニ由テナリ、然レバ今度內裏ノ炎上ニ因テ改元アルベキトノ勅定ナレバ、武家ヨリトカク仰ラルヽニ及バズトノ旨也、此ニ因テ三月下旬、東坊城、五條、高辻三家ノ勘文、佐渡守親成ヨリ到來ス、其時予（○林恕）忌中ナリケレバ、雅樂頭忠淸宅へ招レテ三家ノ勘文ヲ披見ス、年號ノ字十アマリコレアリ、皆コレヲ携へ歸宅ス、三家

文章博士知長朝臣撰申、

〔元秘別錄六〕承應度（慶安五九十八日改元）年號事　承應　晉書律曆志曰、夏商承運、周氏應期、　慶安五年九月十八日　文章博士菅原知長

〔改元物語〕其四年（〇慶安）ニ當リケル四月二十日大猷公薨ジタマフ、同八月十八日、今ノ大君征夷大將軍ニ任ジタマフ、此ニ由テ明年ノ秋改元アツテ、承應ト號ス、

明曆

〔續史愚抄後西院〕承應四年四月十三日丁卯、改元定也、〇中略改承應爲明曆、依代始也、勘者三人、明曆字式部權大輔（爲庸）撰申、吉書奏知恒、

〔武江年表二〕明曆元年四月十三日改元、梅翁句集に、年號改元の歲旦、　明曆や梅のあらたにひらくる日、といふ句あり、改元は四月なり、いぶかし、

〔元秘別錄六〕明曆元年（改元承應四年四月十三日）依代始、〇中略勘申年號事、〇中略　明曆　漢書律曆志曰、大法九章、而五紀明歷法、續漢書曰、黃帝造歷、歷與曆同作、　大學頭兼式部權大輔爲庸

〔改元物語〕其三年（〇承應）ニ當ル九月二十日、後光明天皇崩御アツテ、今ノ新院（〇後西院）承繼セタマヒシナリ、其明年改元アツテ明曆ト號ス、其三年正月、江戶大火アリ、其時ノ巷說ニ、明曆ノ二字日月マタ日ヲソヘタリ、光リ過タルニ由リ、大火事アリナド、云フ、

萬治

〔皇年代私記後西院〕萬治三（元年戊戌七月廿三日改元）

〔續史愚抄後西院〕明曆四年七月廿三日戊午、被行改元定、〇中略改明曆爲萬治、（〇湖東去今年大火故云）勘者四人、萬治號文章博士豐長朝臣撰申、

〔元秘別錄六〕明曆四年七月廿三日、勘文寫（實江戶依火災）改萬治元年勘申年號事、　萬治　史記曰、衆民乃定、萬國爲治、　正五位下行少納言兼侍從大內記文章博士菅原朝臣豐長

〔和事始附錄〕國朝年號譜

仰ニ曰、年號ハ天下共ニ用フルコトナレバ、武家ヨリ定ムベキコト勿論也、公家武家ノ政ハ正シキニ若ハナシ、正シクシテ保タバ大吉也ト議定シタマフ、其時酒井讚岐守忠勝、堀田加賀守正盛、松平伊豆守信綱、阿部對馬守重次、阿部豐後守忠秋伺候シ、先考○林信勝舊例ヲ考ヘ調進シ、公家ノ勘文ヲ御前ニテ讀進ス、我○信勝子恕モ其事ニ與リ侍リヌ、正保五年亦京童部ノ辯ナレバ、正保燒亡ト聲ノ響似タリ、保ノ字ヲ分レバ人口木トヨムベシ、又正保改元ト連書スレバ、正ニ保元ノ年トヨム、大亂ノ兆也ト放言ス、又少シ書籍ヲモ見ケル者ハ、正ノ字ハ一ニシテ止ムト讀、久シカルマジキ兆也トイヘリ、

慶安

〔皇年代私記 後光明〕慶安四元年戊子二月十五日改元

〔續史愚抄 後光明〕正保五年二月十五日庚戌、被行改元定、○中略改正保爲慶安、改元○子○細未詳勘者三人、慶安號前菅宰相爲適撰申、

〔武江年表 二〕慶安元年二月十五日改元　慶安と改元ありしを　改年の御慶安穩の天下哉　半井ト養

〔元秘別錄 六〕慶安度改正保五二十五日　年號事○中略　慶安　周易曰、乃終有慶、安貞之吉、應地無疆、　從二位菅原爲適

〔改元物語〕正保五年、亦京童部ノ辯ナレバ、正保燒亡ト聲ノ響似タリ、保ノ字ヲ分レバ人口木トヨムベシ、又正保元年ト連書スレバ、正ニ保元ノ年トヨム、大亂ノ兆也ト放言ス、○中略カヤウノ雜說マチ〳〵ナルニヨリ、京兆尹板倉周防守重宗內々ニテ言上シケルニヤ、慶安ト改メラル、是時モ先考○林信勝ヲ御前ヘ召テ御議定アリ、

承應

〔皇年代私記 後光明〕承應三元年壬辰九月十八日改元

〔續史愚抄 後光明〕慶安五年九月十八日丁亥、被行改元定、○中略改慶安爲承應、子○細○未詳勘者三人、承應字

〔元秘別錄 六〕寛永度元和十年二月卅日改元○中略　寛永　毛詩朱氏注曰、寛廣永長、　長維

〔改元物語〕元和年中、京師大火アルニ由テ、京童部ノ辭ナレバ、元和ノ定ハ、ゲムクワト讀ムベシナドノヽシルニヨリ、十年ニ當ル時改元アッテ寛永ト號シテ、寛永ノ年號メデタク二十年ヲ歷タリ、然ド街說ニハウサ見ルコト永シナド云シトナン、此年號ノウチ台德公薨ジタマヒ、又今ノ本院即位マシマセドモ改元ニ及バズ、

〔續史愚抄 後光明〕寛永廿一年十二月十六日庚午、被行改元定、○中略改寛永爲正保、依代始也、勘者四人、正保字文章博士知長擇申、吉書奏、

〔寛永改元記〕寛永廿一年十二月十六日庚午、此日改元事、改寛永廿一年爲正保元年、當帝始有此事、

〔元秘別錄 六〕寛永廿一年十二月十六日、代始、正保元、年號事、　正保　尚書正義曰、正保衡、佐我烈祖、格于皇天、　文章博士菅原知長

〔寛永改元記〕寛永廿一年十二月十六日庚午、此日改元事、○中略道房仰弘資令定申、各自下萬定申此間取上勘文、弘資、貞正、正保、綏光、寛安時庸、寛安、正保、共綱、明暦、正保、隆量、貞正公景、寛安、正保、公信、貞正、正觀、下官明暦、○中略

正保　公景云、正保號、正字廣韻君也ト釋セリ、在于上尤宜乎、又取保字、於文爲人唯十、是和漢之分字也、然ハ武王曰、予有亂臣十人之心ナラン歟、在于下尤宜乎、於號備君臣ト謂歟、大行不顧細謹ト候、可被宥用歟、共綱云、正保、正者君也、又保與寶同、然者君之寶者位也、尤宜歟、時庸云、此號誠宜候、易ニ乾道變化、各正性命、保合大和、乃利貞、首出庶物、萬國咸寧ト候、此等之文甚爲規摸、乾道變化者、四時循環而無窮者也、尤可被用候哉、弘資云、正保、伏見院正應、白川院承保、代始之爲佳摸、且正其身、以正其國、正其國以正天下者、武王之功、保其國保四海、亦爲明君之治、最可被用號ニ候歟、○中略道房成敗云、正保號四人擧之、各不難申歟、又明暦號代始被用、殊可相應歟、○中略以此兩號可奏之由示人々、各諾之、次道房奏正保明暦無難之由、實豐參院云々、次實豐歸來仰云、改寛永廿一年爲正保元年、令作詔書、○下略

〔改元物語〕寛永二十年ノ冬、後光明天皇御即位アリ、一年號三帝ニ渉ル例ナシトテ、明年十二月改元アリテ正保ト號ス、此時諸家ノ勘進スル所數多アリトイヘドモ、大猷公御前ニテ御裁斷アッテ、

〔元秘別錄 六〕勸申年號事略○中 天正切元彩 遲候也顏會、偵賀問也、又遲何也、左傳注、諜游偵、或作遉庚、 文。選。曰、君以下爲基、民以食爲天、正其末者端其本、善其後者愼其先、 老。子。經。曰、淸靜者爲天下正、

文祿

〔續史愚抄 後陽成〕天正二十年十二月八日甲午、被行改元定、略○中 改天正爲文祿、依代始也、勸者二人、文祿字式部大輔慶長 擇申、有吉書奏、

〔元秘別錄 六〕天正二十年十二月八日改元、文祿 代始、略○中 勸申年號事、略○中 文祿 杜。氏。通。典。祿秩卷、貞觀二年制注曰、凡京文武官、每歲給祿、 權中納言菅原盛長

慶長

〔續史愚抄 後陽成〕文祿五年十月廿七日庚寅、被行改元定、略○中 改文祿爲慶長、依天。變。地。妖。彗星霍地震等事歟也、勸者二人、慶長字文。章。博。士。爲。經。朝。臣。擇。申。、

〔元秘別錄 六〕文祿五年十月二十七日庚寅改元、慶長 略○中 勸申年號事、略○中 慶長 毛。詩。注。疏。曰、文王功德深厚、故福慶延長、略○中 右依宣旨勸申如件、 文祿五年十月廿七日 正四位下行少納言兼侍從文章博士菅原爲經

元和

〔續史愚抄 後水尾〕慶長二十年七月十三日丁亥、被行改元定、略○中 改慶長爲元和、依代始云、勸者二人、元和號式部大輔爲經擇申、吉書奏如恒、

〔元秘別錄 六〕元和度改慶長廿年七月十三日 元和 唐憲宗之元號

〔改元物語〕應仁以來亂世ニ由テ、其習禮モ未熟ナリケルニヤ、慶長ノ末、東照宮ノ命ニ曰、年號ノ字ハ漢唐ノ吉例ヲ勸ヘテ是ヲ用ヒ、重テ習禮整テ以後ハ、本朝ノ舊式ヲ用ヒラルベシトノコトヽ依テ、慶。長。改元アッテ元。和。ヲ用ヒラル、慶長ハ漢ノ章帝ノ年號、元和ハ唐ノ憲宗ノ年號也、今ノ太上皇○後水尾御在位ノ時也、

寬永

〔續史愚抄 後水尾〕元和十年二月卅日甲寅、被行仗議、今年甲子、當革令否事、略○中 次被行改元定、略○中 改元和爲寬永、依革令也、勸者二人、寬永號文。章。博。士。長。維。朝。臣。擇。申。、敕令吉書奏等如恒、

天文

〔續史愚抄　後奈良〕享祿五年七月廿九日乙亥、改元定也、（中略）改享祿爲天文、依連年兵革也、（征夷大將軍義晴、自近江幕府申請云、）勘者三人、天文字文章博士長雅朝臣擇申、

〔元秘別錄　五〕享祿五年七月二十九日、改元爲天文、（依兵革也、）（中略、天文元）勘申年號事（中略）天文　尚書注、孔安國曰、舜察天文齊七政、（舜典第一）　右依宣旨勘申如件　享祿五年七月廿九日　從四位下行式部少輔文章博士大内記菅原朝臣長雅

弘治

〔續史愚抄　後奈良〕天文廿四年十月廿三日乙酉、被行改元定、（中略）改天文爲弘治、依兵革也、勘者二人、弘治號菅中納言長雅擇申、

〔元秘別錄　六〕天文廿四年十月廿二（二恐三誤）日改元、（中略、弘治）勘申年號事（中略）弘治　北齊書曰、祇承寶命、志弘治體、　右依宣旨勘申如件　權中納言兼文章博士菅原長雅

永祿

〔續史愚抄　正親町〕弘治四年二月廿八日丁未、被行改元定、（中略）改弘治爲永祿、依代始也、勘者二人、永祿字菅中納言長雅擇申、吉書奏、

〔元秘別錄　六〕弘治四年二月二十八日改元（中略、永祿）勘申年號事、　永祿　群書治要曰、保世持家、永全福祿者也、（中略）右依宣旨勘申如件、　弘治四年―　從二位菅原朝臣長雅

元龜

〔續史愚抄　正親町〕永祿十三年四月廿三日庚申、被行改元定、（中略）改永祿爲元龜、（依兵革歟、子細闕、）勘者二人、元龜字式部大輔長雅擇申、

〔元秘別錄　六〕永祿十三年四月二十三日改元、（中略、元龜）勘申年號事、　元龜　毛詩曰、憬彼淮夷、來獻其琛、元龜象齒、大賂南金、　文選曰、元龜水處、潛龍蟠於沮澤、應鳴鼓而興雨、　右依宣旨勘申如件　永祿十三年四月廿三日　正二位行式部大輔菅原朝臣長雅

天正

〔續史愚抄　正親町〕元龜四年七月廿八日丙午、被行改元定、（中略）改元龜爲天正、（依兵革歟、子細未詳、）勘者二人、天正字式部大輔長雅擇申、

永正

〔皇年代略記後柏原〕永正十七九年甲子二月卅日改元

〔續史愚抄後柏原〕文龜四年二月卅日壬戌、有今年甲子當革令否仗議、○中略被行改元定、○中略改文龜爲永正、依革令也、勘者四人、永正字式部大輔長直撰申、赦令吉書奏等、

〔拾芥記上〕文龜四年二月卅日、今夜有甲子仗議、被付行、上卿左大臣以下、改元詔書予作進之、草宿紙如常、永正、長直卿被撰申之、

〔元秘別錄五〕文龜四年二月三十日改元、永正依甲子也、○中略勘申年號事、永正　周易緯曰、永正其道咸受、○中略右依宣旨、――　文龜四年二月三十日　從二位行式部大輔菅原朝臣長直

大永

〔續史愚抄後柏原〕永正十八年八月廿三日壬寅、被行改元定、○中略依兵革天變等事、改永正爲大永、勘者五人、大永字菅宰相爲學撰申、

〔拾芥記下〕永正十八年八月廿三日、今夜改元、○中略大永、上卿廿黄門被擧之、帥亞相被申云、大字永字二字、古來雖合沙汰、殊永字有二水難云々、予爲學○菅原申云、大字前々申畢、自大寶至應永、雖吉凶相交、大寶聖代、應永年數十年、年間可謂吉例歟、廿黄門右衞門督等同予所申、上卿以頭中將被奏、聞群議之由、次頭中將來、軾申上卿、可被用大永云々、○中略公仗議初參、被用勘進年號、披喜悅之眉者也、大永、形無形也、

〔元秘別錄五〕永正十八年八月二十三日改元、大永○中略年號事、大永　杜氏通典曰、庶務至微至密、其大則以永業、　參議菅原爲學

享祿

〔續史愚抄後奈良〕大永八年八月二十日己未、改元定也、○中略改大永爲享祿、依代始也、勘者六人、享祿字少納言長淳撰申、吉書奏等如恒、

〔元秘別錄五〕大永八年八月二十日改元、享祿元○中略年號事○中略享祿　周易大畜卦彖程氏傳注曰、居天位、享天祿也、國家養賢之者、得行其道也、　文章博士長淳

〔親長卿記〕延德四年七月十九日、今度內々、勸文被進武家、被申合、明字三內可被用、有巨難者、文承昭建之間、可被用之由被申云々、〇中略勸申年號事、〇中略明應　文選曰、德行修明、皆宜應受多福、保乂子孫、　右依宣旨勸申如件　延德四年七月十九日　從四位上行少納言兼大內記式部少輔文章博士菅原朝臣在數〇下略

〔拾芥記上〕延德四年七月十四日、十九日就可有改元、今日先々召內勸文、式部大輔所輸林(和長在數)勸者也、勸文厚紙、內狀杉原、　十九日、改元定也、仗議上卿左大臣德大寺以下、明應在數撰申、

〔元秘別錄五〕延德四年七月十九日改元、(明應)依疾疫天變、〇中略年號事、〇中略　明應　文選曰、德行修明、皆宜應受多福、保乂子孫、　周易曰、其德剛健而文明、應乎天、　從四位上少納言兼侍從大內記式部大輔文章博士菅原在數　明應、文選引文、應字、五臣六臣注本屬也、此事今度竟不決、仍和長延德度引用以易文加追之、不便也、於元亨者、兼日令所望之間、承諾了、至引文者、尤存外歟、先規不審、仗儀公卿、各棄選文、以周易文、尤被擧申畢、

〔皇年代略記後柏原〕文龜三(元年辛酉二月廿九日改元、依代始并革命也、大赦令、至德元例也、)

〔拾芥記上〕明應十年二月廿九日、今夜有辛酉仗議并改元定、〇中略改元詔書、予大內記之間作進之、〇中略依代始不發賑給赦令之義、文龜和長卿勸進之、

〔續史愚抄後柏原〕明應十年二月廿九日戊申、被行辛酉仗議、上卿已下同前、次有改元定、〇中略改明應爲文龜、依代始及辛酉革命也、勸者三人、文龜字菅三位(和長、文章博士、)擇申者、卽天下諸神可奉增一階旨宣下、(依辛酉也、)無赦令、(依代始也、)

〔元秘別錄五〕明應十年二月廿九日改元、(文龜)依辛酉也、〇中略勸申年號事、　文龜　爾雅曰、十朋之龜者、一曰神龜、二曰靈龜、三曰攝龜、四曰寶龜、五曰文龜、六曰山龜、七曰筮龜、八曰澤龜、九曰水龜、十曰火龜、〇中略　右依宣旨勸申如件、　明應十年二月二十九日　從三位行文章博士菅原朝臣和長

言衆侍從大內記式部大輔文章博士菅原朝臣在數　上卿命公卿等云、各被申ヨ、此時自上﨟次第申年號字、〇中略上卿命云、字難等且可被申歟之由被仰、人々暫不申是非之處、海住山大納言、長享事、長字在上六七箇度、不快之由、盡言語申之、無益之言多相交歟、長享擧奏之人々、各申陳答、態不能書載、

〔長興宿禰記〕文明十九年七月二日庚子、今日可有改元仗議之由有其沙汰、延引云々、廿日戊午、今日改元定也、去年九月東寺燒亡、十二月外宮炎上、其外一亂以來、兵革不休、旁被改元者也、〇下略

〔元秘別錄　五〕文明十九年七月二十日戊午改元、長享中略〇文章博士菅在數、〇中略長享　文選曰、喜得全功、長享其福、　今度之改元者、疾疫、兵革、火事、三ヶ條御惱云々、但實者去年十二月內宮炎上之謂也、

延德

〔皇年代略記　後土御門〕延德三元年己酉八月廿日（爲廿一日歟）改元

〔續史愚抄　後土御門〕長享三年八月廿一日丁未、有改元定、〇中略改長享爲延德、依天變（正月已來度々二星合）疾疫等也、勘者四人、延德字菅宰相長直擇申、

〔親長卿記〕長享三年八月廿一日、今日改元定也、〇中略寬永引文難等及沙汰、次明曆二日事有沙汰、此外安永順安等不及沙汰、如何、寬永明曆兩字奏聞、兩號不叶叡慮、猶他號可申、〇中略延德事、凡無相違之由申之歟、上卿可計申之由有仰云々、無他號也、上卿延德無子細之由申之、仍被用畢、凡此號無相違號也、延文時、等持寺殿〇足利尊氏有御事、仍被憚人々不同心云々、雖然依無他號擧奏歟、此斟酌不可說事也、

〔元秘別錄　五〕長享三年八月二十一日丁未改元、延德　式部大輔長直、　延德　孟子曰、開延道德、

明應

〔皇年代略記　後土御門〕明應九　元年壬子七月十九日改元、依疾疫也、

〔續史愚抄　後土御門〕延德四年七月十九日戊子、被行改元定、〇中略依疫疾、改延德爲明應、勘者三人、明應字文章博士在數朝臣擇申、

文正

〔皇年代略記〕後土御門〕文正一元年丙戌、二月廿八日改元、代始、

〔續史愚抄〕後土御門〕寛正七年二月廿八日庚子、被行改元定、○中略依代始、改寛正爲文正、勸者四人、文正字廣橋中納言綱光撰申、吉書奏等如恒、

〔元秘別錄〕五〕文正元年後土御門院(後土御門一本作當今)改寛正七年二月二十八日、庚子代始、年號事、○中略文正、荀子曰、積文學正身行、○中略權中納言藤原綱光

應仁

〔皇年代略記〕後土御門〕應仁二元年丁亥三月五日改元、依兵革、

〔續史愚抄〕後土御門〕文正二年三月五日辛未、被行改元定、○中略依兵革改文正爲應仁、勸者五人、應仁字菅中納言繼長撰申、

〔元秘別錄〕五〕應仁元年、改文正二年三月五日、○中略勸申年號事、○中略應仁　維城典訓曰、仁之感物、物之應仁、若影隨形、猶聲致響、　右――　文正二年三月五日　正二位行權中納言菅原朝臣繼長

文明

〔皇年代略記〕後土御門〕文明十八元年己巳四月廿八日改元

〔續史愚抄〕後土御門〕應仁三年四月廿八日壬午、被行改元定、○中略依兵革、改應仁爲文明、勸者五人、文明字大藏卿長清撰申、被載去二月星變事於詔書者、赦令(廷尉不遂仰辨)、吉書奏等如恒、

〔元秘別錄〕五〕文明元年應仁三年四月廿八日壬午改元　勸申年號事　文明　周易曰、文明以健、中正而應、君子正也、

右――　參議從三位行大藏卿菅原朝臣長淸

長享

〔皇年代略記〕後土御門〕長享二元年丁未七月廿日改元

〔續史愚抄〕後土御門〕文明十九年七月二十日戊午、被行改元定、○中略依外宮火事、改文明爲長享、勸者五人、長享字大內記在數撰申、

〔親長卿記〕文明十九年七月廿日、今日改元定也、○中略元長取勸文讀申　勸申年號事○中略　長享　文選曰、嘉得全功、長享其福、　右依宣旨勸申如件、　文明十九年七月十八日　正五位下行少納

康正

〔皇年代略記 後花園〕康正二（元年乙亥七月廿八（八恐五誤）日改元、依兵革也、）

〔續史愚抄 後花園〕享德四年七月廿五日戊戌、被行改元定、○中略依兵革連綿、改享德爲康正、勘者七人、康正字菅中納言（益長）文章博士在治朝臣等擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔康富記〕享德四年七月廿五日戊戌、今夜改元定也、去年以來依兵革連續可有改元歟之由、自武家內被執申之故云々、依兵革改元例、永曆以後及數箇度、

〔元秘別錄 五〕享德四年七月二十五日戊戌改元、（康正、依兵革也、○中略）勘申年號事、○中略　康正　史記曰、平康正直、右━━　享德四年七月二十五日　正四位下行少納言兼侍從大內記文章博士菅原（朝臣在治）

勘申年號事（內々被召之時、始康正文仁也、重人被召之時、寶曆萬慶也、當日勘文、康正寶曆也、）　康正　尙書曰、平康正直、注曰、世平安以正直治之、右━━　享德四年七月　從二位行權中納言菅原朝臣益長

長祿

〔皇年代略記 後花園〕長祿三（元年丁丑九月廿八日改元、依病患旱損也、）

〔續史愚抄 後花園〕康正三年九月廿八日己丑、被行改元定、○中略依病患炎旱、（或作彗星）改康正爲長祿、勘者五人、長祿字菅宰相（綱長）擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄 五〕康正三年九月廿八日改元、（長祿、依彗星改元也、又炎旱、○中略）勘申年號事、　長祿　韓非子曰、其建生也長、持祿也久、○中略　右依━━　康正三年九月二十八日　參議正三位行文章博士播磨權守菅原（朝臣綱長）

寬正

〔皇年代略記 後花園〕寬正五（元年庚辰十二月廿一日改元、依天下飢饉也、）

〔續史愚抄 後花園〕長祿四年十二月廿一日癸巳、被行改元定、○中略依天下飢饉、大旱、兵革等事、改長祿爲寬正、勘者六人、寬正字日野大納言（勝光）擇申、赦令（仰辨云）吉書奏等如恒、

〔元秘別錄 五〕長祿四年十二月二十一日改元、（寬正）○中略年號事、○中略　寬正　孔子家語曰、外寬而內正、　權大納言藤原勝光

寶德

元久例、可令作詔書、　九日己丑、參一條殿、前攝政殿下有御出座、甲子仗議、上卿無爲御出、目出度被思食、又改元珍重之由被仰下、其間事申上、次文安者、齊文惠大子之后、爵林王之母后謚號也、而於謚號者、既至德改元有其例、唐朝順宗之謚號、至德弘道文聖大安孝皇帝也、既甲子歲有此例、爲佳例歟、其由被語仰了、

〔元秘別錄　五〕嘉吉四年二月五日（己酉）改元、（文安）革令、（○中略）兼鄕卿、文安　晉書曰、尊文安漢社稷、　尙書曰、欽明文思而安々、　權中納言藤原　在直卿　文安　尙書曰、欽明文思而安安、（○中略）　正三位行式部大輔菅原朝臣

〔皇年代略記　後花園〕寶德三（元年己巳七月廿八日改元、依水害、地震、疾疫、飢饉也、）

〔續史愚抄　後花園〕文安六年七月廿八日丙午、被行改元定、（○中略）依洪水、地震、疾疫等事、改文安爲寶德、勘者六人、寶德字文章博士爲賢朝臣撰申、赦令吉書奏如恒、

〔元秘別錄　五〕文安六年七月廿八日改元、（寶德）（○中略）爲賢朝臣、　寶德　唐書曰、朕實三德、曰慈儉謙、

享德

〔皇年代略記　後花園〕享德三（元年壬申七月廿五日改元、依疱瘡三星合也、）

〔續史愚抄　後花園〕寶德四年七月二十五日丙辰、被行改元定、（○中略）依今年三合、及赤斑瘡流行、（白馬節會中行之、今日依故障不參、抑勘者宜下後、五六月改元例不吉、因經被行改元云、）改寶德爲享德、勘者七人、享德字文章博士爲賢朝臣撰申、

〔僞年號考〕寶德中成氏位に復すといへども、上杉憲忠を誅してより、又京師と合はず、關東大に亂る、二將兵を交ゆる事連年不絕、享德四年更めて康正とす、三年又改めて長祿とす、四年又更めて寬正とす、關東これを用ひず、享德を用ゆる事すべて十餘年を經たり、

常國府中稅所之書に、享德十四年を用ひし文書二通あり、共に成氏の有司より出す所の狀也、

〔元秘別錄　五〕寶德四年七月二十五日（丙辰）改元、（享德）依三合幷疱瘡也、（○中略）爲賢朝臣、（○中略）　享德　尙書曰、世々享德、萬邦作式、

○按ズルニ、此改元、代始ニ依ルトアレドモ、實ハ稱光天皇ノ御卽位後十六年ヲ經タリ、而カモ此年天皇崩御シ給フ、甚ダ異例トス、

永享

〔皇年代略記 後花園〕永享十二元年己酉九月五日改元、卽位已前、依代始也、

〔續史愚抄 後花園〕正長二年九月五日己酉、被行改元定、○中略改正長爲永享、依代始也、勘者七人、永享字少納言在豐朝臣撰申者、吉書如恒、

〔元秘別錄 五〕正長二年九月五日己酉改元、永享代始、○中略在豐朝臣、　永享　後漢書曰、能立魏々之功、傳于子孫、永享無窮之祚、

嘉吉

〔皇年代略記 後花園〕嘉吉三元年辛酉二月十七日改元、依革命也、

〔續史愚抄 後花園〕永享十三年二月十七日乙酉、被行仗議、辛酉革命當否事、○中略有改元定、○中略依辛酉改永享爲嘉吉、勘者五人、嘉吉字文章博士益長朝臣撰申、有赦令吉書奏如恒、

〔元秘別錄 五〕永享十三年二月十七日改元、嘉吉　革命○中略依辛酉也　同○文章博士菅原益長朝臣　嘉吉　周易曰、孚于嘉吉、位正中也、

〔結城戰場物語〕かくて持氏果給へに、東國には扨おきぬ、京にも義敎同としにはてたまへば、京童の口すさみに、いなかにも京にも御所のたえはて丶公方にことを嘉吉元年と申さぬ物はなかりけり、

文安

〔皇年代略記 後花園〕文安五元年甲子二月五日改元、依革命也、

〔續史愚抄 後花園〕嘉吉四年二月五日乙酉、被行仗議、今年甲子、當革令否事、○中略有改元定、○中略依甲子改嘉吉爲文安、勘者五人、文安字日野中納言兼鄕撰申、有赦令吉書奏等如恒、

〔康富記〕嘉吉四年二月五日乙酉、是日被行仗議、今年甲子、當革令否、幷改元定等也、○中略所詮文安一同之由、總評議、上卿被申上之、職事退、又被奏聞此旨、重歸來、進軾仰云、改嘉吉四年可爲文安元年、任

明德

〔皇年代略記　後小松〕明德四(元年庚午三月廿六日改元)

〔續史愚抄　後小松〕康應二年三月廿六日庚寅、被行改元定、○(中略)依天變兵革、改康應爲明德、勘者七人、明德字日野前大納言資康擇申、今夜年號不及議定云、吉書奏敕令如恒、

〔元秘別錄　五〕康應二年三月廿六日改元、(明德)○(中略)年號事、　明德　禮記曰、明明德在新、(新下脫有民字)　○(中略)權大納言藤原資康

應永

〔皇年代略記　後小松〕應永十九(元年甲戌七月五日改元)

〔續史愚抄　後小松〕明德五年七月五日癸卯、此日被行改元定、○(中略)改明德爲應永、(依承曆例、令作詔書者、件度依疱瘡旱魃也、改元子細未詳、)勘者七人、藤中納言資衡爲人數、應永字右大辨宰相重光擇申者、敕令吉書奏等如恒、

〔改元部類記〕成恩寺關白記曰、明德五年七月五日癸卯、入夜有改元定、○(中略)後聞、改明德五年爲應永元年、依承曆例、可令作詔書之由、職事仰上卿、○(中略)抑件新號、今度右大辨宰相勸進也、此號貞治度、故時光卿始出之、其後故資康卿兩度出之、今度遂被用畢、可謂珍重歟、但勘者不快之時分、人以爲存外、加之應字、應安後光嚴院御事在近、則今度改元沙汰、實儀者依舊院御事、其後出來歟、然者頻可謂無骨歟、應長又不吉、訓字相同、是又不庶幾歟、如何、

〔元秘別錄　五〕明德五年七月五日(癸卯)改元、(應永)○(中略)勘申年號事、○(中略)　應永　會要曰、久應稱之、永有天下、　右――　造興福寺長官參議右大辨兼遠江權守藤原朝臣重光

正長

〔皇年代略記　稱光〕正長一(元年戊申四月廿七日改元、代始分也、)

〔續史愚抄　稱光〕應永卅五年四月廿七日己酉、被行改元定、○(中略)改應永爲正長、依代始云、勘者七人、正長字式部大輔(在直)擇申、吉書如恒、

〔元秘別錄　五〕應永卅五年四月廿七日改元、(正長)○(中略)在直卿、○(中略)　正長　禮記正義曰、在位之君子、威儀不差式、可以正長、○(長下脫補是四方之國五字)

令勘申由、於上卿右大臣（兼嗣）里第宣下、　二月廿四日庚辰、被行革命定仗議、（中略）〇次有改元定、上卿已下同前、依辛酉革命、改康曆爲永德、勘者七人、永德字按察中納言（實康）撰申、

〔元秘別錄　四〕康曆三年二月廿四日改元（永德、依辛酉革命也、）

至德

〔皇年代略記　後小松〕至德三（元年甲子二月廿七日改元、依革令也、）

〔續史愚抄　後小松〕永德四年二月十二日庚辰、於左大臣義滿第、今年甲子當革令否、宜仰紀傳、明經、算、陰陽、曆道等博士令勘申由宣下、　廿七日乙未、有改元定、（中略）〇改永德爲至德、依革令及代始也、勘者七人、至德號左衞門督（資康）撰申、吉書、

〔元秘別錄　四〕永德四年二月二十七日改元、（至德）（中略）〇權中納言資康　至德　孝經曰、先生有至德要道、以訓天下、民用和睦、上下亡怨、（迎陽記云、此至德引文、孝經亡怨、亡字有憚、無改書之、此條不心得、聖人經字、輙書改之條、後愚存尤有恐、民用和睦ニテ引タランニ無子細歟云云、）

嘉慶

〔皇年代略記　後小松〕嘉慶二（元年丁卯八月廿三日改元）

〔續史愚抄　後小松〕至德四年八月廿三日庚午、被行改元定、（中略）〇依疾疫、改至德爲嘉慶、（當春病事流布、近衞前關白道嗣薨、旁及沙汰云、）勘者七人、嘉慶字前右大辨三位（秀長）撰申、吉書奏赦令等如恒、

〔元秘別錄　五〕至德四年八月廿三日改元、（嘉慶代始、）（中略）〇勘申年號事、（中略）　嘉慶　毛詩正義曰、將有嘉慶、禎祥先來見也、　至德四年八月十八日　從三位菅原朝臣秀長

康應

〔皇年代略記　後小松〕康應一（元年己巳二月九日改元）

〔續史愚抄　後小松〕嘉慶三年二月九日己酉、被行改元定、（中略）〇依病事、（去年前關白良基、攝政兼嗣、入道實繼、儀同三司仲房已下、僧俗多有事、今春又頓病流行云、）改嘉慶爲康應、勘者七人、康應字前右大辨三位（秀長）撰申、吉書奏及赦令如恒、

〔元秘別錄　五〕嘉慶三年二月九日改元、（康應）（中略）〇勘申年號事、（中略）　康應　文選曰、國都民康、神應休臻、屢獲嘉祥、（中略）〇　右依―――　嘉慶三年二月七日　正三位菅原朝臣秀長

永和

〔皇年代略記 後光嚴〕應安五(元年戊申二月廿七(廿七、一本作廿八)日改元、兵革天變等、)

〔續史愚抄 後光嚴〕貞治七年二月十八日己未、被行改元定、(中略)○改貞治爲應安、依病患及天變地妖等也、勘者六人、別當(忠光卿)爲人數、應安字治部卿時親朝臣擇申、

〔元秘別錄 四〕貞治七年二月十八日改元(應安○中略)勘申年號事
　應安　毛詩正義曰、今四方既已平服、正國之內、幸應安定、(中略)○
　右依――
貞治六年七月日　治部卿正四位下菅原朝臣時親

〔皇年代略記 後圓融〕永和四(元年乙卯二月廿七日改元、依代始也、)

〔花營三代記〕永和元年三月、去月廿七日改元、爲永和元年、(日野權中納言忠光撰進之、)

〔續史愚抄 後圓融〕應安八年二月廿七日丁巳、被行改元定、(中略)○改應安爲永和、依代始也、勘者五人、永和號藤中納言(忠光卿)擇申、吉書奏等如恒、

〔元秘別錄 四〕應安八年二月二十七日改元、(永和代始、○中略)年號事、
　永和　尙書曰、詩言志、歌永言、聲依永、律和聲、八音克諧、無相奪倫、神人以和、　藝文類聚曰、九功六義之興、依永和聲之製、志由興作、情以詞宜、
　權中納言藤原忠光

康曆

〔皇年代略記 後圓融〕康曆二(元年己未三月廿二日改元、依天變、疾疫、兵革也、)

〔續史愚抄 後圓融〕永和五年三月二十二日己丑、被行改元定、(中略)○依疾疫兵革等、改永和爲康曆、勘者七人、康曆字式部大夫(長嗣)擇申、吉書赦令等如恒、

〔元秘別錄 四〕永和五年三月二十二日改元、(康曆○中略)勘申年號事、(中略)○
　康曆　唐書曰、承成康之歷業、
　右依――
永和五年三月十一日　正二位行式部大輔菅原朝臣長嗣

永德

〔皇年代略記 後圓融〕永德二(元年辛酉二月廿四日改元、依革命也、)

〔歷代皇紀 後圓融〕康曆三年二月廿四日、辛酉仗議、有改元、改康曆三年爲永德元年、

〔續史愚抄 後圓融〕康曆三年正月廿二日戊申、今年辛酉當革命否、宜仰紀傳、明經、筭、陰陽、曆道等博士、

延文

〔皇代記 後光嚴〕延文元丙申年（文和五年三月廿八日、依兵革改元、）

〔續史愚抄 後光嚴〕文和五年三月廿八日己酉、有改元定、（中略）改文和爲延文、依兵革也、勘者四人、延文號藏人文章博士忠光撰申、

〔園太暦〕文和五年三月廿八日、年號事、可有仗議云々、（中略）抑藏人左少辨忠光送狀云、（中略）今度勘者四人、勘文内、（中略）博士忠光、（延文、元寶、）

〔元秘別錄 四〕文和五年三月廿八日改元、（延文、中略）○勘申年號事、

延文 漢書曰、延文學儒者數百人、（中略）

右依宣旨勘申如件 藏人防鴨河使左小辨兼文章博士越中介藤原朝臣忠光

康安

〔皇年代略記 後光嚴〕康安一（元年辛丑三月廿九日改元、依疾疫、疱瘡、天變、兵革等也、）

〔續史愚抄 後光嚴〕延文六年三月廿九日庚辰、被行改元定、（中略）改延文爲康安、依兵革、天變、（或作地妖、）疾疫等也、勘者六人、康安字大藏卿長達撰申、

〔元秘別錄 四〕延文六年三月二十九日改元、（康安、中略）○勘申年號事、

康安 唐紀曰、作治康凱安之舞、（中略）

右依――

延文六年三月日 從三位行勘解由長官菅原朝臣高嗣

勘申年號

康安 史記正義曰、天下衆事、咸得康安、以致天下太平、

右依――

延文六年三月廿六日 從三位行刑部卿菅原朝臣長綱

貞治

〔皇年代略記 後光嚴〕貞治六（元年壬寅九月廿三日改元、依兵革、流病、天變、地震也、）

〔續史愚抄 後光嚴〕康安二年九月二十三日乙丑、被行改元定、（中略）改康安爲貞治、依天變、（或作流疫、）地妖、兵革等也、勘者七人、貞治字左大辨宰相忠光撰申、

〔元秘別錄 四〕康安二年九月二十三日改元、（貞治、中略）○勘申年號事、

貞治 周易曰、利武人之貞、志治也、

右依―― 造東大寺長官參議左大辨藤原朝臣忠光

應安

〔皇代記 後光嚴〕應安元戊申年（貞治七年二月十八日改元）

略○中貞和 蘊。文。類。聚。曰、體乾靈之休德、稟貞和之純精、略○中右依宣旨勘申如件 康永四年十月日 從三位行勘解由長官菅原朝臣在成

觀應

〔皇年代略記 崇光〕觀應二年 元年庚寅二月廿七日改元、依代始也、

〔細々要記 三〕貞和六年、南方正平五年二月廿七日、京都改元、觀應元年ト云ト云々、觀應二年、南方正平六年十一月四日、南方御合體ニツキ、正平六年ヲ用ヒ、觀應ノ號ヲ止メラルト云々、

〔續史愚抄 崇光〕貞和六年二月廿七日壬子、被行改元定、略○中改貞和爲觀應、依代始也、勘者四人、觀應號文章博士行光朝臣擇申、詔書吉書等、

〔元秘別錄 四〕貞和六年二月二十七日改元、觀應代始、略○中勘申年號事、 觀應 莊。子。曰、玄古之君天下、無爲也、疏。曰、以虛通之理、觀應物之數、而無爲、略○中右依――― 文章博士兼越中介藤原朝臣行光

文和

〔皇代記 後光嚴〕文和元壬辰年 觀應三年九月廿七日、依代始改元、

〔皇年代略記 後光嚴〕文和四 元年壬辰九月廿七日改元、代始、

〔續史愚抄 後光嚴〕觀應三年九月廿七日丁酉、被行改元定、略○中改觀應爲文和、依代始也、勘者四人、文和字式部權大輔在淳從三位在成等擇申、略○中有吉書奏如恒、

〔細々要記 四〕正平七年九月廿七日、京都改元アリテ文和元年トス、去年冬ヨリ南方正平ヲ用ユルノ所、御和睦ヤブル、ノウヘ、新帝後光嚴○位ニツカセ給フニヨリ、改元アリト云々、

〔元秘別錄 四〕觀應三年九月廿七日改元、文和代始、略○中勘申年號事、略○中 文和 唐。紀。曰、叡哲温文、寛和仁惠、略○中 右依――― 觀應三年九月二十五日 從三位菅原朝臣在淳
勘申年號事略○中
文和 吳。志。曰、文和於內、武信于外、 右依――― 觀應三年九月日 從三位菅原朝臣在成

には例なし、

〔續神皇正統記光明〕戊寅改元暦應とす、又以前の延元號をばもちひられず、建武號よりぞ暦應にはうつり侍る、

〔續史愚抄光明〕建武五年八月廿八日己未、被行改元定、○中略依代始、改建武為暦應、勘者五人、暦應號勘解由長官公時擇之、有吉書奏如恒、

〔元秘別錄四〕建武五年八月廿八日己未改元、暦應代始、延元不用、尚為建武、○中略勘申年號事、○中略暦應、帝王代記云、堯時有草、夾階而生、王者以是占暦、應和而生、○中略右依――　建武五年八月廿三日、従三位勘解由長官菅原朝臣公時

康永

〔皇代記光明〕康永三年暦應四年四月廿七日、依病事、天變、地妖、改元、

〔續史愚抄光明〕暦應五年四月廿七日戊辰、今夜被行改元定、○中略改暦應為康永、依天變、地妖、疱瘡等事也、勘者三人、康永文字文章博士紀行親朝臣擇申、有赦令吉書奏、

〔公卿記所引龜鏡記〕廿七日○暦應五年四月今夕改元定也、○中略勘申年號事、　康永　漢書曰、海內康平、永保國家、　宋韻曰、寧至曰康、永長也、　暦應五年四月日　従四位上行文章博士紀朝臣行親

〔元秘別錄四〕暦應五年四月廿七日改元、康永、疱瘡、天變、地妖、○中略勘申年號事、　康永　漢書志曰、海內康平、永保國家、○中略右――　暦應五年四月廿五日　従四位上行文章博士紀朝臣行親

貞和

〔皇代記光明〕貞和四年戊子康永四年十月廿一日、依疾病流行改元、

〔皇年代略記光明〕貞和四元年乙酉十月廿二(二恐一誤)改元、依風水疾疫也、

〔續史愚抄光明〕康永四年十月廿一日辛未、被行改元定、○中略依天變、水害、疾疫等、改康永為貞和、勘者五人、貞和字勘解由長官在成擇申、有赦令吉書奏、

〔園太暦〕康永四年十月廿一日、今度勘文內、無可然號歟、貞和文安ナド不事外歟、○中略勘申年號事

〔南山巡狩錄十五〕弘和元年辛酉、北朝永德元年、二月（中略）南朝編年記略に、當月十四日行宮にて改元宣下あり、弘和にうつるといふ、しかれども引書たしかならず、

〔續史愚抄後圓融〕康曆三年（〇永德元年）二月十日丙寅、或記、此日南方改天授七年爲弘和元年云、

〔南朝公卿補任四〕天授七年辛酉（弘和元）北朝康曆三年（永德元）二月十日改元、爲弘和元年、依革命也、

元中

〔和漢合運指掌圖三〕後龜山　甲子、元中元、

〔南方紀傳下〕南朝元中元年甲子北朝至德元年、二月北朝改元、卯月廿八日南朝改元、

〔續史愚抄後小松〕永德四年（〇至德元年）四月廿八日乙未、或記、此日南方改弘和四年爲元中元年云、

〔南朝公卿補任四〕弘和四年甲子（元中元）北朝永德四年（至德元）四月二十八日改元、爲元中元年、依革命也、

正慶

〔皇年代略記光嚴〕正慶二（元年壬申四月廿八日（廿日歟）改元、代始、）

〔續史愚抄光嚴〕元弘二年四月廿八日丁卯、有改元定、（〇中略）改元弘爲正慶、依代始也、勘者五人、正慶號式部大輔長員採申、吉書奏如例、

〔神皇正統記後醍醐〕新帝（〇光嚴）は僞主の儀にて、正位にはもちゐられず、改元して正慶といひしをも、本のごとく元弘と號せらる、

〔元秘別錄四〕元弘二年四月二十八日丁卯改元、（正慶）代始、（〇中略）勘申年號事、　正慶　周易注曰、以中正有慶之時、有攸往者、何適而不利哉、（〇中略）右依宣――　元弘二年四月七日　正三位行式部大輔兼長門權守菅原朝臣長員

曆應

〔皇年代略記光明〕曆應四（元年戊寅八月廿八日改元、代始、）

〔皇代記光明〕曆應四年（建武五年戊寅八月廿八日、依兵革改元、）

〔神皇正統記後醍醐〕扨も舊都には、戊寅の年の冬改元して、曆應とぞいひける、芳野の宮には、本の延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の年號なり、もろこしにはかゝるためしおほけれど、此國

〔細々要記 三〕貞和二年、興國八年四月、南方改元有テ、正平元年トス云々、

〔南山巡狩錄 五〕正平元年丙戌、北朝貞和二年、今年興國より正平に改元あり、太平記より推考、南朝編年記略に、吉野文書及び南方紀傳を引て、七月廿四日正平に改元ありしといふ、されども流布の南方紀傳には所見なし、竹口榮齋いかなる本によれるにや、

〔南朝公卿補任 一〕興國七年丙戌　北朝貞和二年七月廿四日改元、爲正平元年、

建德

〔和漢合運指掌圖 坤〕後龜山　庚戌、建德元、

〔細々要記 六〕應安二年、南方正平二十四年十二月晦日、南方改元ノ沙汰アリト云々、應安三年南方改元、建德元年トスト云々、

〔續史愚抄 後光嚴〕應安三年七月廿四日辛亥、或記、此日南方改正平廿五年、爲建德元年云、

〔南山巡狩錄 十三〕建德元年庚戌、北朝應安三年、今年正平より建德に改元あり、和漢合運、細々要記に、正月改元なりといひ、又一說に、七月廿四日改元なりといふ、未其詳なるをしらず、

文中

〔和漢合運指掌圖 坤〕後龜山　壬子、文中元、

〔細々要記 七〕應安五年、南方建德三年三月廿二日、南方改元、文中元年ト號スト云々、

〔南朝公卿補任 三〕建德三年壬子 文中元　北朝應安五年　十月四日改元、爲文中元年、

天授

〔和漢合運指掌圖 坤〕後龜山　乙卯、天授元、

〔細々要記 七〕應安八年、南方文中三年二月上旬、南方改元ノ沙汰アリ、天授元年トスト云々、

〔續史愚抄 後圓融〕應安八年五月廿七日丙戌、南方改文中四年、爲天授元年云、

〔南朝公卿補任 三〕文中四年乙卯 天授元　北朝應安八年 永和元　五月廿七日改元、爲天授元年、

〔南朝編年紀略〕五月廿七日改元定、爲天授元年、依山崩地妖也、權大納言右近大將藤原長親卿撰進、大乘院年代記

弘和

〔和漢合運指掌圖 坤〕後村上　辛酉、弘和元、

興國

正平

號式部大輔長員擇申、有勅令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄四〕建武三年二月廿九日、延元○中略勘申年號事、○中略延元　梁書曰、沈休文等奏言、聖德所

被、上自蒼々、下延元々、○中略　右依――　建武三年二月廿三日　正三位行式部大輔菅原朝臣長

員

〔園城書裏書〕今年足利號曆應三年、元興國四月廿八日改興國

〔南方紀傳上〕南帝後村上院、○中略註南帝興國元年、北朝曆應三年、四月廿八日改元吉野新帝卽位、

〔南山巡狩錄四〕延元より興國に改元の事たしかならず、和漢合運、天野信景藏古文書、及び下野

國より堀出したる古鏡の文字等より考ふれば、延元四年にて興國に改元の如し、又元弘日記、

大頭入来日記、譽田八幡社藏假面裏書等の支干より案ずれば、延元五年より興國にうつりし

趣なり、兩說を以て正史にてらし見るに、元弘日記に載るごとく、延元五年四月廿八日といふ

もの實を得たりといふべし、よりて今是に治定して本文にかけり、普通の年代記は和漢合運

に倣へるものとみえて、延元四年の改元となせり、誤といふべし、

〔逸號年表補考〕二所大神宮領釋尊寺濫妨ノコトヲ、神人共南朝ニ訴タルトキノ古文書ニ、興國

三年壬午四月廿九日、マタ興國三年壬午五月二日トアリ、合運ニ考フルニ、辛巳ニ當リテ一年

違ヘリ、當時ノ書ナレバ信ズベシ、追考、大日本史元弘日記裏書ヲ證トシテ、延元五年庚辰四月

廿八日興國ト改元アリトス、上ニ證セル釋尊寺記ト符合、

〔和漢合運指掌圖坤〕後村上　庚辰、去年改元興國、

〔細々要記三〕曆應二年、南方延元四年十月五日、義良親王踐祚、○中略十一月上旬先帝ノ尊號ヲ獻リ、

後醍醐天皇ト申奉ルト云々、○中略南方改元アッテ興國元年トストト云々、

〔和漢合運指掌圖坤〕後村上　丙戌、正平元、

建武

延元

〔元秘別錄 四〕嘉曆四年八月二十九日改元、元德 式部大輔在登卿、○中略　元弘　藝文類聚曰、老人星體色光明、嘉占元吉、弘無量之祐、隆克昌之祚、普天同慶、率土合歡、

〔皇年代略記 後醍醐〕建武二 元年甲戌正月廿九日改元、撥亂歸正云々、

〔細々要記 一〕元弘四年正月廿九日、改元アリテ建武元年トス、漢朝ノ年號ヲ撰サル、

〔續史愚抄 後醍醐〕元弘四年正月廿九日戊午、被行改元定、○中略 依撥亂歸正、改元弘爲建武、符者六人、建武號前民部卿藤範撰申、今度元號不拘本文善惡、當時儀以協異朝例、兼日召儒卿及博士等勘文之上有議、而建武大武武功等三字被撰出、依天長例、博士在淳朝臣在成等進勘、付職事奉行云、有赦令、吉書奏如恒、

〔太平記 十二〕廣有怪鳥ヲ射事

元弘三年七月ニ改元アリテ建武ニ移サル、是ハ後漢光武、治王莽之亂、再續漢世佳例ナリトテ、漢朝ノ年號ヲ撰サレケルトカヤ、

〔元秘別錄 四〕元弘四年正月二十九日戊午改元、建武○中略 前民部卿藤範卿、　建武　咸定　延弘○中略

前左大辨二位在登卿　建武　元臺、　武功○中略

不依本文之善惡、可有元號之沙汰、異朝之例叶當時之義、可計申之由被仰儒卿在登、藤範、長員、行氏、等、在淳又翰林可撰申云々、仍而ニ注進之處、重々被經御沙汰、此三字、建武、武功、大武、以天長之例、兩翰林加連署可付職事之由、以按察大納言宣房被仰出、其後書整付奉行、藏人右衞門佐國、今日上卿右大臣也、

〔皇年代略記 後醍醐〕延元一 元年丙子二月廿九日改元、兵革、

〔細々要記 二〕建武三年二月廿九日改元、延元ト號ス、○中略 十二月廿二日、先帝花山院ヲ忍ビ出サセ給ヒ、吉野ヘ入御、○中略 京都ニハ延元ノ號止テ、建武ノ曆ヲ用ユ、　建武四年、先帝ハ吉野ニ御座、延元二年ヲ用ヰルト云々、

〔續史愚抄 後醍醐〕建武三年二月廿九日丙午、被行改元定、○中略 依兵革改建武爲延元、符者三人、延元

元德

〔續史愚抄 後醍醐〕正中三年四月廿六日甲子、此日被行改元定、○中略改正中爲嘉曆、依天變地震疾疫等也、勸者五人、嘉曆號式部大輔藤範擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄 四〕正中三年四月二十六日庚子改元爲嘉曆、○中略式部大輔藤原藤範、○中略嘉曆 唐書曰、四序嘉辰、歷代增徽、宋祖曰、曆數也、文續漢書律曆志之文略之、見上、

〔皇代記 後醍醐〕元德二年嘉曆四年八月廿九日、依病事咳病改元、

〔續史愚抄 後醍醐〕嘉曆四年八月二十九日癸丑、有改元定、○中略改嘉曆爲元德、依疾疫也、今年咳病流行、人民多死、勸者三人、元德號文章博士行氏朝臣擇之、或記、今日治定年號、昨人已知之云、

〔元秘別錄 四〕嘉曆四年八月二十九日改元、元德○中略○文章博士行氏朝臣、元德 周易、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

元德己巳八月二十九日癸丑 考證周易云、乾元亨利貞、正義云、元者善之長、謂之元德、始生萬物、文章博士行氏考之、

元弘

〔關城書裏書〕今年元弘元八月九日改元、同月大外記之注進關東之處、有詔書無改元記、仍關東不用新曆、用元德曆、

〔皇代記 後醍醐〕元弘一年元德三年八月十日改元

〔皇年代略記 後醍醐〕元弘一元年辛未八月八日改元、依疫疾也、

〔續史愚抄 後醍醐〕元德三年八月九日壬子、今夜被行改元定、○中略依疾疫流行、改元德爲元弘、勸者三人、今度依無可被用之字、被擇出前左大辨三位在登舊勸之中、元弘字者、無詔書、大外記某私注進關東云、後日於鎌倉有議、非詔書施行之間、於武家者猶可用舊號云、或作二十日及八日

〔元秘別錄 四〕元德三年八月九日改元、元弘 二人博士菅在淳 同在成 私注、繼塵記云、去嘉曆四年八月、式部大輔在登勸文所載兩字也、 勸者兩文章博士、在淳朝臣在成朝臣無可然號、仍舊勸文中、在登卿勸進內、被撰出元弘云々、

〔如是院年代記〕己未第九十五代後醍醐、元應元、(四月二十六日改元、(中略)戊午三月二十九日卽位、己未四月廿八日改元、)

〔續史愚抄　後醍醐〕文保三年四月廿八日癸丑、被行改元定、(中略)依代始改文保爲元應、勘者四人、日野前大納言(俊光)爲人數、(大納言勘者始于茲、)元應字式部大輔(在輔)撰申、詔書吉書奏等、三條中納言(公秀)奉行之、

〔元秘別錄　四〕文保三年四月二十八日(癸巳)改元、(元應代始、)(中略)前權大納言俊光、大納言勘者事初例云云　元應(唐書無此文云々、太平御覽百八十卷有此文云々、)唐書曰、陛下富教安人、務農敦本、光復社稷、康濟寒元之應也、(中略)式部大輔在輔(中略)元應　唐書

元亨

〔皇代記　後醍醐〕元亨三年(元應三年二月廿三日、依辛酉改元、)

〔皇年代略記　後醍醐〕元亨三(元年辛酉二月廿三日改元、依革命也、)

〔續史愚抄　後醍醐〕元應三年二月廿三日丁卯、今年辛酉當革命否被行仗議、(中略)次被行改元定、(中略)群議趣被奏法皇者、依辛酉改元應爲元亨、勘者二人、元亨字文章博士資朝朝臣撰申、赦令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄　四〕元應三年二月廿三日改元、(元亨辛酉)(中略)文章博士資朝朝臣、元亨　周易曰、其德剛健、而文明應乎天時、(字依故實撰之云云、而行是以元亨、)

正中

〔皇代記　後醍醐〕正中二年(元亨四年十二月九日、依甲子改元、)

〔皇年代略記　後醍醐〕正中二(元年甲子十二月九日改元、依風水之上、天下不靜也、)

〔續史愚抄　後醍醐〕元亨四年十二月九日辛酉、被行改元定、(中略)改元亨爲正中、非今年甲子故、依風水及天下不靜也、勘者五人、正中字文章博士有正撰申、(中略)有赦令及吉書奏、

〔元秘別錄　四〕元亨四年十二月九日改元、(正中依風水之上、天下不靜也、(中略))文章博士有正、　正中　周易曰、見龍在田、利見大人、何謂也、子曰、龍德而正中者也、又曰、需有孚、光亨、貞吉、位天位、以正中也、

嘉暦

〔皇代記　後醍醐〕嘉曆三年(正中三年四月廿六日、依疾疫流行并去年大地震改元、)

正和　文保　元應

難等、

〔元秘別錄三〕延慶四年四月廿八日改元、應長中略○勘申年號事、　應長　唐書志曰、應長曆之規、象中月之度、廣綜陰陽之數、傍通寒暑之和、　右依——　延慶四年四月十三日　正三位行勘解由長官菅原朝臣在衆

〔逸號年表補考〕應長十三年。　伊豆加茂郡入間村三島明神ノ棟札ニアリ、應長ハ一年ニシテ正和ト改元アリ、十三年ハ元亨三年ナリ、僻日裔土マデ行亘ラズシテ、ナホ舊年號ヲ用フルナラン、願主外岡圖書介トアリ、

〔一代要記花園〕正和元年壬子三月二十日改元、依天變也、

〔皇年代略記花園〕正和五元年壬子三月廿日改元、天變地震、

〔續史愚抄花園〕應長二年三月廿日丙辰、被行改元定、中略○改應長爲正和、依天變地震等事也、天變地震欠、勘者五人、前藤中納言俊光爲人數、正和號某擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄三〕延慶四年四月廿八日改元、應長中略○勘申年號事、中略○　正和　唐紀曰、皇帝受朝奏正和、　右依——　正應六年七月日　正四位下行文章博士菅原朝臣在輔

〔一代要記花園〕文保元年丁巳二月三日改元、正月三日地大震、東寺塔九輪動傾之、

〔皇代記花園〕文保二年正和六年二月三日、依大地震改元、

〔續史愚抄花園〕正和六年二月三日庚子、被行改元定、中略○依地震改正和爲文保、勘者四人、元五人、而一人卒去、

按四人勘文中無文保字、若舊號被執用歟、有赦令吉書奏等、

〔元秘別錄三〕嘉元四年十二月十四日改元、德治中略○勘申年號事、　文治　梁書曰、姬周基文、久保七百、　右依——　嘉元四年十一月日　從三位行式部大輔兼駿河權守菅原朝臣在輔

〔皇代記後醍醐〕元應二年文保三年四月廿八日、依代始改元、

〔皇年代略記 後二條〕德治二(元年丙午十二月十四日改元、依變異也、)

〔續史愚抄 後二條〕嘉元四年十二月十四日庚戌、被行改元定、(中略)○改嘉元爲德治、依天變也、(未詳)勘者五人、(前藤中納言俊光爲人數)德治字前菅宰相(在嗣)擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔元秘別錄 三〕嘉元四年十二月十四日改元、(德治中略)○勘申年號事、 德治 尙書大禹謨曰、注曰、俊德治能之士、並在官、左傳曰、能敬必有德、德以治民、 右依――　嘉元四年十二月七日　正二位菅原朝臣在嗣

延慶

〔一代要記 花園〕延慶元年戊申十月九日改元、依御卽位也、

〔如是院年代記〕(戊申)第九十四代萩原、延慶元、(十月九日改元、(中略)戊申卽位、改元、)

〔公卿補任 花園〕德治三年(戊申)十月九日改元、爲延慶元、(代始)

〔續史愚抄 花園〕德治三年十月九日甲子、被行改元定、(中略)○改德治爲延慶、依代始也、勘者四人、延慶號前藤中納言(俊光卿)擇申、詔書吉書奏等、按察大納言(實泰)奉行、

〔元秘別錄 三〕德治三年十月九日改元、(延慶)代始、(中略)○年號事、 延慶 後漢書曰、以功名延慶于後、(中略)○

(略)　前權中納言藤原俊光

應長

〔一代要記 花園〕應長元年四月二十八日庚午改元、依病事也、

〔皇年代略記 花園〕應長一(元年辛亥四月廿八日改元、依疾疫也、)

〔續史愚抄 花園〕延慶四年四月廿八日庚午、被行改元定、(中略)○改延慶爲應長、依天下疫病也、勘者五人、前藤中納言(俊光卿)爲人數、應長號勘解由長官(在兼)擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔改元記〕冬定卿記曰、延慶四年四月廿八日、依病事有改元、(中略)○改延慶四年爲應長元年、(中略)○此號唐書志文云々、件書無此文之由、衆人沙汰也、應字事、先例應和、村上聖代不能左右、應德應保不甘心歟、或人云、改延喜爲延長、醍醐聖代改元之時、不宜、舊號之上、新號之下、長似彼例之由被相談、今度又有俗

〔元秘別錄 三〕永仁七年四月二十五日乙亥改元、正安代始、○中略　正安 前參議在嗣卿 孔子家語

〔元秘別錄 三〕康元二年三月十四日庚子改元、正嘉○中略 勘解由少路前中納言藤經光、　正安　周書曰、居正安其身、

乾元

〔一代要記 後二條〕乾元元年壬寅十一月十一日辛亥改元、依御卽位也、

〔如是院年代記〕壬寅 第九十三代後二條、乾元元、十一月二十二日改元、(中略)辛丑卽位、壬寅改元、

〔皇年代略記 後二條〕正安尙一 三年辛丑爲當今元年、一說依讖緯、改元之法、以乾元元内代始、然者後二條院在位六年也、其理然也、乾元一 元年壬寅十一月廿一日改元、代始、

〔續史愚抄 後二條〕正安四年十一月廿一日辛亥、被行改元定、○中略 改正安爲乾元、依代始也、勘者五人、前藤中納言俊光卿爲人數、吉書奏如恒、

〔元秘別錄 三〕文永十二年四月廿五日丙寅改元、建治○中略 前宰相正二位長成、○中略　乾元　周易曰、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

後二條、乾元一、壬寅十一月二十一日庚戌　考證 周易云、大哉乾元、萬物資始、乃統天、

嘉元

〔一代要記 後二條〕嘉元元年癸卯八月五日改元、在顯勘之、○在顯恐在嗣誤

〔皇年代略記 後二條〕嘉元三 元年癸卯八月五日改元、依炎旱彗星也、

〔續史愚抄 後二條〕乾元二年八月五日庚寅、被行改元定、○中略 赦令吉書等如恒、依天變按公茂公記、彗星事歟、及炎旱、按去年今年歟、改乾元爲嘉元、前菅宰相在嗣擇申字也、勘者五人、

〔元秘別錄 三〕乾元二年八月五日改元、嘉元○中略 勘申年號事、　嘉元　藝文類聚曰、賀老人星表曰、嘉占元吉、弘無量之祐、降克昌之祚、普天同慶、率土合歡、　右依宣旨勘申如件、　乾元二年七月六日　正二位菅原朝臣在嗣

德治

〔一代要記 後二條〕德治元年丙午十二月十四日改元、依天變也、

〔元秘別錄 三〕建治四年三月廿九日改元、弘安、依疾疫被改也、○中略 在嗣朝臣、　正應 注毛詩

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

伏見、正應五、戊子四月二十八日壬午代始　考證 毛詩注曰、德正應利、勘者從三位大藏卿菅原在嗣、

○按ズルニ、正應ノ號ハ、貞應、元仁、嘉祿等ノ改元ノ時、既ニ菅原淳高ノ周易ヲ引キテ勘進セシ所ナリ、

永仁

〔一代要記 伏見〕永仁元年癸巳六月六日改元、四月十二日關東大地震、

〔皇年代略記 伏見〕永仁六 元年癸巳八月五日改元、依天變地震也、

〔續史愚抄 伏見〕正應六年八月五日戊子、被行改元定、○中略 改正應爲永仁、依天變、地震、炎旱等也、勘者六人、永仁號大藏卿 在嗣 擇申、赦令吉書奏等如恒、

〔改元記〕冬定卿記曰、改正應五年爲永仁元年、○中略 永仁、下官申云、永字之尺遠也、先々已遠人之難歟、隨又寬仁伊國異賊沙汰興盛、文永蒙古國賊徒牒使始來朝、爲國重事、就之案之、取合兩度字之條尤可憚歟、權大納言申云、必不限寬仁、前後之間猶有沙汰歟、不可依之、遠人之難何可限蒙古哉、君德覃遠之條、尤庶幾歟、滋野井申云、異賊事雖有前後之沙汰、寬仁已爲興盛、可謂勿論、永者長流也、流人之條有憚如何、○中略 大理申云、仁流秋津洲外、仁遠流之條何難候哉、

〔元秘別錄 三〕正應六年八月五日改元 永仁○中略 北野長者 大藏卿在嗣　永仁　晉書志曰、永載仁風、長撫無外、

正安

〔帝王編年記 二十七 後伏見〕正安三年 永仁七年四月廿五日改元、依代始也、

〔一代要記 後伏見〕正安元年己亥四月二十五日乙亥、改元、依即位也、

〔皇代記 後伏見〕正安三年 己亥、永仁七年四月廿五日改元

〔續史愚抄 後伏見〕永仁七年四月廿五日乙亥、有改元定、○中略 改永仁爲正安、依代始也、勘者五人、正安號前菅宰相在嗣擇申、詔書文章博士敦継朝臣草 大内記某在城外故云、 吉書奏如恒、

弘安

正應

〔元秘別錄 三〕文永十二年四月廿五日丙寅改元、建治代始、○中略文章博士在匡朝臣、從四上建治 周禮曰

○按ズルニ、正嘉改元藤原經光ノ勘文ニ、周禮ノ以治建國之學政ノ文ヲ引キテ、治建ノ號見エタリ、而シテ建治ノ號ハ、別ニ菅原在章ノ勘文ニアリテ、唐紀ヲ引ケリ、此ニ周禮曰トアルハ、唐紀曰ノ誤ナラン、

〔元秘別錄 三〕康元二年三月十四日改元、正嘉○中略文章博士菅在章朝臣、建治 唐紀曰、明王建邦治民、經世垂化、

〔一代要記 後宇多〕弘安元年戊寅二月二十九日改元、茂範勘之、

〔皇代記 後宇多〕弘安十年戊寅、建治四年二月廿九日改元、依疾疫也、

〔續史愚抄 後宇多〕建治四年二月廿九日壬午、改元定也、○中略改建治為弘安、自去年春病事流布故也、弘安號藤三位茂範撰申、勘者七人、前藤中納言資宣卿為人數、赦令如恒、

〔改元部類記〕冬定卿記、建治四年二月廿九日、今日改元定云々、自去年春夏之比、世間病惱、死人滿道路、仍及御沙汰、諸儒勘文○中略藤三位茂範元觀 白虎通 弘安 大宗實錄曰、弘安民之道、○中略諸儒勘文等如此、被定弘安畢、

〔元秘別錄 三〕建治四年三月廿九日改元、弘安 自去年春夏比世間病惱、死人滿道路、仍改元、○中略藤三位茂範 弘安 大宗實錄曰、弘安民之道、

〔帝王編年記 二十七 伏見〕正應五年 弘安十一年四月廿八日改元、代始也、

〔一代要記 伏見〕正應元年戊子四月二十八日改元

〔皇代記 伏見〕正應五年戊子、弘安十一年四月廿八日改元、依即位也、

〔續史愚抄 伏見〕弘安十一年四月廿八日壬午、有改元定、○中略改弘安為正應、依代始也、勘者五人、吉書奏如恒、

之、每當此年改元、自延喜康保始ル、革命ノ年無改元例、正親町院之永祿四、後水尾院元和七、此兩度也、革令無改元例、正親町院永祿七ナリ、

〔續史愚抄 龜山〕文應二年二月二十日壬子、今年辛酉當革命否、於陣議定、上卿左大臣、(公相)已次公卿右大臣、(公親)已下十人參仕、次有改元定、上卿前下同、(按察使顯朝早出)改文應爲弘長、依革命也、詔書赦吉書如恒、勘者五人、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

弘長三(辛酉二月二十日壬子)二　考證(貞觀政要云、關治定之規、以弘長也、)

文永

〔一代要記 龜山〕文永元年甲子二月二十八日改元、依甲子也、良○頼○勘○之、

〔皇代記 龜山〕文永十一年(弘長四年二月廿八日改元、依甲子也、)

〔皇年代略記 龜山〕文永十一(元年甲子二月廿八日改元、依革令也、)

〔續史愚抄 龜山〕弘長四年二月廿八日癸酉、有仗議、(今年甲子、當革令否事、)公卿左大臣(實經 攝政)前右大臣(基平 一上)上卿已下十三人參仕、次有年號勘者宣下、次被行改元定、已上上卿二條大納言、(良教)已次公卿左大將、(冬忠)已下十人參仕、改弘長爲文永、依革令也、勘者六人、文永號式○部○權○大○輔○在○章○撰○申○、(或作大輔眞顯、誤矣、)赦令吉書奏(官方權右中辨實宣奏之)等如恒、

〔元秘別錄 三〕弘長四年二月廿八日(癸酉)改元(文永、依甲子革令也、○中略)式部權大輔在章　文永

建治

〔皇代記 後宇多〕建治三年(乙亥、文永十二年四月廿五日改元、依即位也、)

〔如是院年代記〕(乙亥)第九十代後宇多、建治元、(四月二十六日改元、(中略)甲戌即位、乙亥改元、)

〔續史愚抄 後宇多〕文永十二年四月廿五日丙寅、被行改元定、○中略改文永爲建治、依代始也、勘者五人、(新中納言實宣卿爲人數、)建治字文章博士在匡朝臣撰申、詔書在匡朝臣草之、(大內記淳範依輕服也、)吉書奏如恒、奉行藏人頭內藏頭親朝朝臣、(或作二十四日、誤也、)

文應

〔一代要記 後深草〕正元元年己未三月二十六日改元、公良勘之、依天下飢饉疾疫也、
〔元秘別錄 三〕正嘉三年三月廿六日改元正元中略○　公良卿　正元　毛詩緯曰、一如正元、萬載相傳、注曰、言本正則末理、
〔一代要記 龜山〕文應元年庚申四月十三日改元、依代始也、
〔皇代記 龜山〕文應一年庚申、正元二年四月十三日庚戌改元、
〔吾妻鏡 四十九〕正元二年四月十八日乙卯、今日改元詔書到來、去十三日改正元二年爲文應元年、文章博士在章撰進云云、依御卽位也、　廿二日己未、於政所被行改元吉書、
〔續史愚抄 龜山〕正元二年四月十三日庚戌、改元定也、先有條事定、攝津國司申二條事八箇條上卿右大臣、實雄已次上達部二條大納言、良教已下九人參仕、次被行改元定、上卿已下同上、改正元爲文應、依代始也、詔書吉書等二條大納言良教奉行之、年號勘者三人、文應號文章博士在章擇之、奉行藏人頭宮內卿資平朝臣、
〔元秘別錄 三〕正元二年四月十三日改元、文應代始、○中略　文章博士菅在章朝臣、　文應　晉書曰、太晉之行據武興文之應、
〔一代要記 龜山〕弘長元年辛酉二月二十日改元、依辛酉也、
〔皇年代略記 龜山〕弘長三日元年辛酉二月廿改元、依革命、

弘長

〔吾妻鏡 五十〕文應二年二月廿六日戊午、改元詔書參著、去廿日改文應二年爲弘長元年、
〔東鑑要目集成 四〕弘長改元改文應二年爲弘長元年　此改元ハ、革命ノ改元ナリ、此年辛酉ノ年ハ必改元アリ、革命ノ改元ト云、辛酉ハ神武天皇ノ卽位元年ナリ、醍醐天皇延喜以來必改元アリ、又甲子ノ年モ改元アリ、是ヲ世ニ革令ノ改元ト云、革令ハ黃帝ノ元年ナリ、村上天皇康保以來必改元アリ、革令革命ハ異國ノコトニシテ、本朝ノ義ニ不叶、曆記云、辛酉爲革命、甲子爲革令、三善淸行勘

〔皇代記 後深草〕寶治二年丁未、寬元五年二月廿八日壬子改元、依即位也、

〔元秘別錄 三〕延應二年七月十六日改元、仁治、依天變地妖也、○中略 文章博士經範 寶治 春秋繁露

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

後深草、寶治二、丁未二月二十八日壬子代始 考證 春秋繁露曰、紅之清者爲精、人之清者爲賢、治身者以積精爲寶、治國者以積賢爲道、

建長

〔百練抄 十六後深草〕建長元年三月十八日庚寅、改元定也、改寶治爲建長、内大臣已下參陣、

〔一代要記 後深草〕建長元年己酉三月十八日改元、依天變火災也、經光卿勘之、

〔皇年代略記 後深草〕建長七 元年己酉三月十八日改元、依内裏火事天變云々、

〔元秘別錄 三〕寶治三年三月十八日庚寅改元 建長 ○中略 前權中納言經光 建長 後漢書曰、建長久之策、

康元

〔百練抄 十七後深草〕康元元年十月五日壬戌改元、改建長爲康元、權大納言良教卿以下參之、依赤斑瘡也、

〔一代要記 後深草〕康元元年丙辰十月五日改元、依主上時行也、麻子瘡 經範勘之、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年十月九日丙寅、改元詔書到來、去五日改建長八年爲康元元年、

正嘉

〔百練抄 十七後深草〕正嘉元年三月十四日庚子改元定、依官廳已下炎上之事也、左大臣以下參仕之、可爲正嘉之由被定、

〔一代要記 後深草〕正嘉元年丁巳三月十四日改元、二月十日夜半、太政官廳正戶四戶燒失、同二十八日申刻五條殿燒失、

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年三月十八日甲辰、改元詔書到著、去十四日改康元二年爲正嘉元年、

〔元秘別錄 三〕康元二年三月十四日庚子改元、正嘉○中略 文章博士菅在章朝臣 正嘉 藝文類聚曰、肇元正之嘉會、

正元

〔百練抄 十七後深草〕正元元年三月廿六日改元定也、爲正元、大納言良教卿已下參之、

〔一代要記 四條〕延應元年己亥二月七日改元、依天變地震也、

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年二月十六日丙辰、京都使者到着、去七日改元、改曆仁二年為延應元年、經範朝臣撰進之云云、

〔元秘別録 三〕曆仁二年二月七日改元、延應 依天變也、○中略 文章博士經範朝臣、　延應　文選、廊廟謹清、俊乂是延、擢應嘉擧、

仁治

〔百練抄 十四 四條〕仁治三年 延應二年七月十六日改元、依旱魃也、

〔一代要記 四條〕仁治元年庚子七月十六日改元、依彗星也、

〔皇代記 四條〕仁治三年 延應二年七月十六日改元、依彗星地震也、炎旱事、依不吉、不被載詔文云々、

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年七月廿七日己巳、今日京都使者參、去十六日改元、改延應為仁治元年、

〔元秘別録 三〕延應二年七月十六日改元、仁治 依天變地妖也、○中略 文章博士經範、　仁治　書義曰、人君以仁治天下、　式部大輔為長卿、○中略　仁治　新唐書曰、太宗以寛仁治天下、

寛元

〔百練抄 十五 後嵯峨〕寛元四年 仁治四年二月廿六日改元 元年二月廿六日癸酉、有改元事、依代始也、改仁治四年為寛元元年、

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年三月二日戊寅、今日京都使者到着、持參改元詔書、去月廿六日改仁治四年為寛元元年、

〔元秘別録 三〕仁治四年二月廿六日改元、寛元 代始、○中略 勘申年號事、　寛元　宋書曰、舜禹之際、五教在寛、元々以平、　右依宣旨勘申如件、仁治四年二月廿三日、正二位行大藏卿兼式部大輔菅原朝臣為長、

寶治

〔百練抄 十六 後深草〕寶治元年二月廿八日壬子、今日改元定也、左大臣以下參仕之、改寛元五年為寶治元年、文章博士經範朝臣撰申云々、

〔一代要記 四條〕嘉禎元年乙未九月十九日改元、依天變地震也、

〔吾妻鏡 三十〕文暦二年十月八日丁酉、改元詔書到來、去月十九日、改文暦二年爲嘉禎元年云云、十四日癸卯、於政所有改元吉書始之儀云云、

〔編御記〕嘉禎　九月（元年〇嘉禎）十九日、人々已著仗座之由聞之、仍自御前即令退下、參仗座、（中略）〇上卿仰云、各所被申申之字々、次第可被申得失、（中略）〇嘉禎、禎字我朝未被用、一上仰云、陳後主禎明、二年陳滅之年也、予（爲長〇菅原）申云、唐五代之中、大梁滅年、即禎明六年也、一上仰云、字釋如何、予申云、字釋皆吉也、無可憚之釋、通方卿云、禮記、國家將興、必有禎祥云々、（中略）〇上卿仰云、然者嘉禎如何之由被仰、予々申云、漢家不快字、我朝用之爲吉例之年々多候、以此准據可被用歟、各相議被申事由、可被用嘉禎之由、頭辨來仰、

〔元秘別錄 三〕文暦二年九月十九日（己卯）改元（嘉禎中略）〇　前中納言賴資（〇藤原）　嘉禎　北齊書曰、蕙千祀、彰明嘉禎、

暦仁

〔百練抄 十四〕暦仁一年（嘉禎四年十一月十八日改元）十一月廿三日甲午、有改元事、爲暦仁元年、依天變也、

〔一代要記 四條〕暦仁元年戊戌十一月二十三日改元、依年不宜也、經範勘之、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年十二月九日庚戌、今日京都使者參著、去月廿三日改元、改嘉禎四年爲暦仁元年、經範朝臣撰進之、依熒惑變及此儀云云、

〔元秘別錄 三〕嘉禎四年十一月廿三日（甲午）改元、（暦仁中略）〇　文章博士經範　暦仁　隋書

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

暦仁一（戊戌十一月二十三日甲午、依熒惑變、）　考證（隋書云、皇明馭暦、仁深海縣、文章博士經範考之、）

延應

〔百練抄 十四〕延應一年（二月七日改元）二月七日丁未有改元事、暦仁、世俗云、略人有憚、且上下多有夭亡之聞、仍被改延應了、但猶依變災改元之由、被仰詔書、

相論之間、頗及過言云々、狼籍也、可慎可慎、天福可宜之由被仰下歟、

〔五代帝王物語 四條〕天福といふ年號は、大藏卿爲長撰申たりけるを、陣の定の時諸卿一同ましたりけるに、賴資卿雖申程に、大納言定通卿と仗座にて口論に及けり、つゐに天福に定たれば、同二年打續き上皇の御事ありて、諒闇相續することゝ、これぞはじめにて有ける、淺ましかりける年號也、

〔元祕別錄 三〕貞永二年四月十五日己丑改元、天福代始、○中略式部大輔爲長、天福　尙書云、政善天福之、

文暦

〔百練抄 十四 四條〕文暦一年十一月五日改元　十一月五日庚子有改元事、天福字自始世人不受、諒闇相續、爲其徵之由口遊、但諒闇中其例希云々、

〔一代要記 四條〕文暦元年甲午十一月五日改元、依天變地震也、

〔編御記〕文暦　天福二年十一月五日有改元、○中略今度有仗議、撰進之人六人、前中納言、賴中納言、家予、○菅原爲長刑部卿、淳博士賢經等也、被用文暦云々、家光卿、淳高卿進之、抑大嘗會延引、其以前兩度改元例、養和壽永許歟、雖爲不快例、尙被遂行、天福之字、通服音之由有沙汰歟、隨又去年藻壁門院崩御、今年太上天皇崩御、依之被憚被改歟、

〔五代帝王物語 四條〕天福といふ年號は、大藏卿爲長撰申たりけるを、○中略同二年打續き上皇の御事ありて、諒闇相續することゝ、これぞはじめにて有ける、淺ましかりける年號也、さて十一月五日文暦とあらたまる、諒闇中に改元の事、遠くは延暦佳例なれども、近くは養和例不吉に覺侍りき、此外は其例も侍らぬにや、

〔元祕別錄 三〕天福二年十一月五日甲午改元、文暦依天變地震、○中略權中納言家光、　文暦　唐書曰、掌天文暦數、○中略從三位淳高、○中略文暦　文選曰、皇上以叡文承暦、

嘉禎

〔百練抄 十四 四條〕嘉禎三年文暦二年九月十九日改元

寬喜載勘文畢、五日、被用寬喜畢、通寬基僧都名之由、賴資卿申之云々、此僧非指一寺長者、非御持僧、基與喜可有差別、此難不足言也、

〔元秘別錄三〕安貞三年三月五日(癸酉)改元、(寬喜中略)○式部大輔爲長、寬喜　後魏書曰、仁興溫良、寬興喜樂、

貞永

〔百練抄十三後堀河〕貞永一年(寬喜四四二改元、依去年飢饉也、)

〔一代要記後堀河〕貞永元年壬辰四月二日改元、依去年飢饉也、

〔皇年代略記後堀河〕貞永一(元年壬辰四月二日改元、依天變、地妖、風雨不節、飢饉也、)

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年四月十四日、今日改元詔書到來、去二日改寬喜四年爲貞永元年、

〔編御記〕貞永　寬喜四年四月一日、付勘文於頭亮、年號載二、(貞永、和元、)勘文並加封之樣如先々也、二日有障定、○中略各々議奏之詞未委聞、被用貞永畢、予(菅原爲長)所撰進之年號字、被撰用事、已六箇度、所謂建暦、承久、貞應、元仁、寬喜、貞永等也、可謂過分、

〔元秘別錄三〕寬喜四年四月二日改元、(貞永)依飢饉天變、○中略式部大輔爲長、貞永　周易注疏曰、利在永貞、永貞、永長也、貞正也、言能貞正也、

天福

〔百練抄十四四條〕天福一年(四月十五日改元、依代始也、)

〔皇代記四條〕天福一年(貞永二年四月十五日改元、依即位也、)

〔如是院年代記〕(壬辰)第八十六代四條、貞永元、○中略(癸巳)天福元(四月十五日改元)

〔編御記〕天福　貞永二年四月十五日、有改元、依代始也、○中略今夕仗議之座、被用天福畢、予(菅原爲長)所撰進也、傳聞、土御門大納言(定)被擧天福、前中納言(賴)漢家年號難被申、源大納言答云、唐五代大晉高祖之年號、何事候乎、唐五代雖及季、取大晉始起之年、七八年相保、強不可處不快、被用異朝號之例、先規已多、賴資卿云、昔用異朝號者、不知之故也、源亞相云、不知歟、又知號稱不可有苦被用歟、未決是非、

安貞

寛喜

略○下

〔元秘別錄 三〕元仁二年四月廿日庚寅改元、嘉祿依疾疫、略○中勘申年號事、　嘉祿　博物志曰、承皇天嘉祿、　右依宣旨勘申如件　元仁二年四月日　從二位行兵部卿菅原朝臣

〔百練抄 十三 後堀河〕安貞二年改元、嘉祿三十二十依疱瘡也、

〔一代要記 後堀河〕安貞元年丁亥十二月十日改元、依天變大風也、

〔皇代記 後堀河〕安貞二年改元、嘉祿三年十二月十日依天下疱瘡也、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年十二月廿五日庚午、六波羅飛脚到來、持參改元詔書、去十日改嘉祿三年爲安貞元年云云、　廿六日辛未、於政所而被行改元吉書也、

〔編御記〕寛喜　安貞三年三月五日、改元寛喜、略○中今度改元者、被用安貞之時、予爲長○菅原申前殿下云、此字有不快、釋兩雄必爭、兩主必危之文、可恐可愼云々、第二年秋、果有天台法曹之諍論、同多闕白被改補、是偏此年號之徵也云々、恐兩主之文有此改元歟、其例可用何年之由被仰、人々比年有災變之由、我長久詔可被用之歟云々、被用此例畢、

〔元秘別錄 三〕嘉祿三年十二月十日乙卯改元、安貞依赤疱瘡、略○中博士資高朝臣○菅原　安貞　周易曰、安貞之吉、應地無疆、

〔百練抄 十三 後堀河〕寛喜三年安貞三三五改元、依去年大風也、

〔一代要記 後堀河〕寛喜元年己丑三月五日改元、依飢饉天變也、

〔皇年代略記 後堀河〕寛喜三元年己丑三月五日改元、依災異天變也、

〔吾妻鏡 二十七〕安貞三年三月廿五日、於政所有改元吉書始、信濃二郎左衞門尉爲武州御共持參御所、被覽御前云云、去五日改安貞三年爲寛喜元年、大藏卿爲長撰進之云云、

〔編御記〕寛喜　安貞三年三月五日、改元寛喜、　四日、付勘文於頭治部卿親長朝臣、封體如先々、貞永

元仁

菅原朝臣爲長

〔百練抄 十三 後堀河〕元仁元年 貞應三十一廿改元、依天變炎旱也、

〔一代要記 後堀河〕元仁元年甲申十一月二十日改元、依天變炎旱也、爲長勘之、

〔皇代記 後堀河〕元仁元年 貞應二年十二月廿日壬午改元、依旱魃也、

〔皇年代略記 後堀河〕元仁 元年甲申十一月廿日改元、依天變地震、

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年十二月四日、改元詔書到來、去月廿日改貞應三年爲元仁元年云云、式部大輔爲長卿撰進、詔書者、彼子息大內記長貞書之云云、

〔編御記〕元仁　貞應三年十一月廿日、改元仁元年、　十九日朝、付勘文於頭辨、以清息付之、勘文書樣封樣同先々、今度進元仁、延嘉、和元畢、見勘草、　廿日、有陣定、〇中略　堀川大納言 通具 難云、元字二人也、仁字二人也、四人如何、後朝土御門大納言送一行、示此難、予返答云、元字二人作、未見及、不聞及、但天仁則共二人作之條、本文顯然也、四人之作、可謂吉例歟之由返答畢、

〔元秘別錄 三〕貞應三年十一月廿日改元、元仁 依天變、〇中略　式部大輔爲長、　元仁　周易曰、元亨利貞、正義曰、元仁也、

嘉祿

〔百練抄 十三 後堀河〕嘉祿二年 元仁二四廿改元

〔一代要記 後堀河〕嘉祿元年乙酉四月二十日改元、依疱瘡也、在高勘之、

〔皇代記 後堀河〕嘉祿二年 元仁二年四月廿日庚戌改元、依大疫也、

〔皇年代略記 後堀河〕嘉祿二 元年乙酉四月二十日改元、依疾疫又天下不靜、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年五月二日壬戌、午剋京都使者到來、去月廿日改元仁二年爲嘉祿元年、

〔編御記〕嘉祿　元仁二年四月廿日改元嘉祿、〇中略　十九日付勘文於頭辨、宗房　文承、恒久、封樣同上　承久、貞應、元仁、相續三度被用、先規已稀、仍今度以不被用爲望、不可被用之字、殊所撰進也、嘉祿、有高卿所進、

〔一代要記順德〕建保元年癸酉十二月六日改元、依天變地妖也、

〔皇年代略記順德〕建保六元年癸酉十二月六日改元、天變地震御愼、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年十二月十五日辛亥、改元詔書到來、去六日改建暦三年爲建保元年、即廣元朝臣令遠江守親廣進御所云云、

〔元秘別錄二〕建暦三年十二月六日改元、建保 依天變地妖、 大輔宗業朝臣 建保 尙書曰、惟天丕建、保乂有殷、

承久

〔百練抄順德十二〕承久三年建保七年四月十二日改元、依天變旱魃三合等也、

〔一代要記順德〕承久元年己卯四月十二日改元、依三合變異也、爲長勘之、

〔編御記〕承久 建保七年四月十一日、申刻成草、以消息付奉行職事家光、高檀紙一枚書之、(中略)所載、承久、文久、元仁也、見勘草、(中略)十二日、有陣定、大内記長貞歸來語云、諸卿大略一同、被擧申承久文久、仍被用承久云々、

〔元秘別錄二〕建保七年四月十二日改元、承久 依三合後年并天變旱魃、(中略)大藏卿爲長 承久 詩緯曰、周起自后稷、歷世相承久、

貞應

〔一代要記後堀河〕貞應元年壬午四月十三日改元、依御即位也、爲長卿勘之、

〔皇代記後堀河〕貞應二年承久四年四月十三日辛卯改元、依即位也、

〔編御記〕貞應 承久四年四月十三日、改爲貞應、(中略)仗議之處、諸人一同擧申貞應、右府公繼一人不奉之、有子細歟、可用貞應之由被仰下畢、勘文續高檀紙二枚書之、加懸紙封之、封上加名二字、其樣如上、十二日付頭辨畢、貞應、元仁、延嘉、貞永、和元、

〔元秘別錄三〕承久四年四月十三日改元、貞應 代始、(中略)勘申年號事、 貞應 周易曰、中孚以利貞、乃應乎天也、 右依宣旨勘申如件、 承久四年四月十二日 正三位行大藏卿兼式部大輔豐前權守

承元

〔百練抄 十二 土御門〕承元四年（建永二年十月廿五日改元、依三合也、）

〔一代要記 土御門〕承元元年丁卯四月二十七日改元

〔皇代記 土御門〕承元四年（建永二年十月廿五日丁卯改元、依疱瘡故歟、）

〔皇年代略記 土御門〕承元四（元年丁卯十月廿五日改元、依疱瘡疾疫霖水也、）

〔吾妻鏡 十八〕建永二年十一月五日丙子、改元詔書到著、去月廿五日、改建永二年爲承元元年、問注所入道持參之、

〔編御記〕承元　建永二年九月廿五日改元、被用承元、藤中納言（○藤原資實）被進之、

〔元秘別錄 二〕建永二年十月廿五日改元（承元、依疱瘡井洪水事也、）○中略　權中納言資實○中略　承元　通典曰、古者祭以酉時、薦用仲月、近代相承、元日奏祥瑞、

建暦

〔百練抄 十二 順德〕建暦二年（承元五年三月九日改元、依御即位也、）

〔一代要記 順德〕建暦元年辛未三月九日改元、依御即位也、

〔皇代記 順德〕建暦二年（承元五年三月九日辛酉改元、依代始也、）

〔如是院年代記〕辛未第八十四代順德、建暦元、（二月九日改元、庚午即位、辛未改元、）（中略）

〔吾妻鏡 十八〕承元五年三月十九日辛未、京都使者到著、持參改元詔書、去九日改承元五年爲建暦元年云云、

〔元秘別錄 三〕承元五年三月九日改元、（建暦）代始、○中略　文章博士孝範○中略　建暦　宋書曰、建暦之本、必先立元、　權中納言資實　建暦　春秋命歴序曰、帝顓頊曰、建暦立紀以天元、尸子云、羲與和造歴、歴或爲暦、○中略　式部權大輔爲長朝臣　建暦　後漢書曰、建暦之本、必先立元、元正然後定日、日比定、

建保

〔百練抄 十二 順德〕建保六年（建暦三年十二月六日改元）

元久

建永

〔吾妻鏡　十七〕正治三年二月廿二日癸卯、今日改元詔書到來、去十三日改正治三年、爲建仁元年云云、大夫屬入道持參彼書於御所、卽可令施行之由所被仰也、

〔革暦勘文　一〕革命仗議記（後京極攝政記之）

正治三年二月十三日甲午、頭之通具朝臣來軾下年號勘文、予結申一通、通具仰可定申之由、（○中略）

建仁（予云、其音似高倉院御諱、宗頼、公繼、建仁、可有憚歟、親經云、立王之時、不用建字、有何難、華云々、○中略）已上宗業所進、

〔元秘別錄　二〕正治三年二月十三日改元、（建仁、依辛酉革命也、○中略）文章博士宗業（○中略）建仁　文選曰、竭智附賓者、必建仁策、注曰、爲人君當竭盡知力、託附賢臣、必立仁惠之策、賢臣歸之、

〔百練抄　十一土御門〕元久二年（建仁四年二月廿日、爲元久元年、）

元年甲子二月廿日、有革令幷改元定、改建仁四年、爲元久元年、

〔一代要記　土御門〕元久元年甲子二月二十日改元、依甲子也、

〔皇代記　土御門〕元久二年（建仁四年二月廿日、甲子改元、依革令也、）

〔吾妻鏡　十八〕建仁四年三月一日甲子、京都使者參、去月廿日改建仁四年、爲元久元年、

〔元秘別錄　二〕建仁四年二月廿日改元、（元久、依甲子革令也、○中略）參議親經（○中略）元久　毛詩正義曰、文王建元久矣、

〔百練抄　十一土御門〕建永元年（元久三年四月廿七日改元、依赤班瘡也、）

〔一代要記　土御門〕建永元年丙寅四月二十七日改元、依執柄事也、三月七日、攝政良經頓死、

〔皇代記　土御門〕建永元年（元久三年四月廿七日戊寅改元、依頓死也、）

〔吾妻鏡　十八〕元久三年四月廿七日戊寅、今日有改元、改元久三年爲建永元年、

〔元秘別錄　二〕元久三年四月廿七日改元（建永○中略）前中納言範光（○中略）建永　文選曰、流惠下民、建永世之業、

〔一代要記 後鳥羽〕文治元年乙巳八月十四日改元、依兵革也、兼光勘之、

〔皇代記 後鳥羽〕文治五年（元暦二年八月十四日甲子改元、依去月九日大地震也、）

〔吾妻鏡 四〕元暦二年八月十四日甲子改元、改元暦二年爲文治元年、左大辨兼光撰進之、

〔元秘別錄 二〕元暦二年八月十四日改元、（文治）依大地震、（中略）勘申年號事、　文治　禮記曰、湯以寬治民、文王以文治、　右依―――　造興福寺長官參議左大辨兼遠江權守藤原朝臣兼光

建久

〔百練抄 十 後鳥羽〕建久九年（文治六年四月十一日改元、依明年三合也、）

〔一代要記 後鳥羽〕建久元年庚戌四月十六日改元、依三合年也、文章博士光輔勘之、

〔皇代記 後鳥羽〕建久九年（文治六年四月十一日甲午改元、依明年三合御厄也、）

〔皇年代略記 後鳥羽〕建久九（元年庚戌四月十一日改元、依變異井明年三合御愼也、）

〔吾妻鏡 十〕文治六年四月廿五日戊申、去十一日有改元、改文治六年爲建久元年云云、

〔元秘別錄 二〕文治六年四月十一日（甲午）改元、（建久）依地震也、（中略）勘申年號事、（中略）　建久　晉書曰、建久安於萬歲、垂長世於元窮、吳志曰、安國和民、建久長之計、　右依―――　文章博士藤原朝臣光輔

正治

〔百練抄 十一 土御門〕正治二年（建久十年四月廿七日爲正治元年、依代始也、）

〔如是院年代記〕（己未）第八十三代土御門、正治元、（四月二十七日改元（中略）戊午即位、己未改元、）

〔元秘別錄 二〕建久十年四月廿七日改元、（正治）代始、（中略）文章博士在茂、（中略）　正治　莊子曰、天子、諸侯、大夫、庶人、此四者、自正治之美也、（嘉承三年改元、大江匡房勘文始載此文字、）

建仁

〔百練抄 十一 土御門〕建仁三年（正治三年二月十三日、爲建仁元年、依辛酉也、）

〔皇代記 土御門〕建仁三年（正治三年二月十三日辛酉改元、依革命也、）

〔猪隈關白記〕正治三年二月十三日甲午、此日陣定也、（今年辛酉、當革命否事也、）（中略）有改元事云々、改正治三年爲建仁元年、是文章博士宗業撰申云々、

元暦

〔東鑑要目集成　三〕年號改元本書相違

養和二年五月廿七日爲壽永元年、此年號モ東國ヘ不告來歟、東國ニテ不用、壽永二年記、東鑑ニ全一ケ年闕卷アリ、何レノ年號ヲ用ヒシヤ不詳、其翌年ノ正月寄進狀ニ、初テ壽永ノ年號ヲ鎌倉ニテ用ヒタリ、

〔元祕別錄　二〕養和二年五月廿七日改元、壽永　依兵革疱瘡三合、○中略　勘申年號事、○中略　壽永　毛詩曰、以介眉壽、永言保之、思皇多祜、　右依――　勘解由長官兼式部大輔備後守藤原朝臣俊經

〔百練抄　十後鳥羽〕元暦一年　壽永三年四月十六日改元、依代始也、

〔皇代記　後鳥羽〕元暦元年　甲辰壽永三年四月十六日改元、依即位也、

○按ズルニ、一代要記ニハ、改元依兵革トアリ、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年四月十六日甲申　○甲申恐甲戌誤　改元、改壽永三年爲元暦元年、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年五月三日庚寅、武衞被奉寄附兩村於二所大神宮、○中略　御寄進狀云、　寄進伊勢皇太神宮御厨壹處在武藏國飯倉、　右志者、奉爲朝家安穩、爲成就私願、殊抽忠丹寄進狀如件、

壽永三年五。月。三。日。　正四位下前右兵衞佐源朝臣

〔東鑑要目集成　三〕壽永三年四月十六日爲元暦元年、此改元ノ後モ五月三日ノ寄進狀ニ、壽永三年トアリ、其年ノ七月ヨリ、漸ク元暦ノ年號ヲ鎌倉ニテ用ヒタリ、惟ニ京鎌倉戰國故、通路不能急速事、故ニ不知改元也、

〔元祕別錄　二〕壽永三年四月十六日改元、元暦　代始、○中略　勘申年號事、　元暦　尙。書。考。靈。耀曰、天地開闢、元暦紀名月首甲子冬至、日月如懸璧、五星若編珠、○中略　右依――　文章博士兼讃岐介藤。原。朝。臣。光。範。

文治

〔百練抄　十後鳥羽〕文治五年　元暦二年八月十四日改元、依火。災。地。震。也、

訪皇猷、依昔徽、以建元、隨厄會以革故、是皆克己復禮、與物更始之義也、其改安元三年、爲治承元年、大赦天下、〇中略主者施行、

治承元八月四日　　作者大內記業實

年號勘文等、〇中略勘申年號事、

治承　河圖曰、治武明文德、治承天精、

右依宣旨勘申

文章博士兼美作權介藤原朝臣光範、

養和

〔百練抄 九 安德〕養和一年 治承五七十四改元、依代始也、

〔皇帝紀抄 七 安德〕養和一年 治承五年七月十四日改元、依御即位也、

〔如是院年代記〕辛丑第八十一代安德、養和元、七月十四日改元、(中略)庚子即位、年三歲、辛丑改元、

〔吾妻鏡 二〕治承五年七月十四日戊子、改元治承五年、爲養和元年、

〔吾妻鏡 二〕養和二年〇壽永元年八月五日癸卯、鶴岳供僧禪育捧訴狀云、〇中略召禪育於御前、直賜御下文、

下　可令早停止若宮供僧禪育在家役、并自作麥畠壹町地子事、〇中略

治承六年八月五日

〔東鑑要目集成 三〕年號改元本書相違

治承五年七月十四日爲養和元年、此養和年號東國へ不告來歟、東國ニテ不用、養和二年ヲモ東國ニテハ治承六年トス、

〔元秘別錄 二〕治承五年七月十四日戊子改元、養和代始、〇中略勘申年號事、〇中略

養和　後漢書曰、幸得保性命、存神養和、

右依——　文章博士藤原朝臣敦周、

壽永

〔百練抄 九 安德〕壽永三年 養和二五廿七改元、依飢饉、兵革、病事、三合也、

〔一代要記 安德〕壽永元年壬寅五月二十四日改元、依飢饉疫癘也、俊經勘之、

〔皇代記 安德〕壽永二年 養和二年五月廿七日丙申改元、依大歲也、

〔吾妻鏡 二〕養和二年五月廿七日、改元、改養和二年、爲壽永元年、

〔元秘別錄 二〕嘉應三年四月廿一日改元、承安 依天變御愼、○中略 權中納言藤原資長、○中略 承安 一尙書。曰、王命我來、承安汝文德之祖、正義、承文王之意、安定此民也、

安元

〔百練抄 八高倉〕安元二年承安五七廿八改元、依疱瘡并世上不閑也、

〔一代要記 高倉〕安元元年乙未七月二十八日改元、依疱瘡也、俊經勘之、

〔皇代記 高倉〕安元二年承安五年七月廿八日丁未改元、依疱瘡也、

〔山槐記〕安元元年七月廿八日丁未、今日有改元事、改承安五年爲安元元年、去四月依疱瘡起之時、可有改元之由被宣下、或付勘文於外記云々、而猶依月僤、于今延引、使僤族々可尋、四月七月吉例也、予内々案之、若前年號被改之、同月例不吉歟、可尋上卿左大臣、藏人左衛門權佐光雅奉行之、

〔玉海〕安元元年七月廿八日丁未、此日有改元事、改承安五年爲安元元年、○中略 年號勘文、○中略 安元 漢書云、除民害、安元々、 右依宣旨勘申如件 右大辨兼周防權守藤原朝臣俊經

九月三日辛巳、持來詔書覆奏、加署返給了、朝臣也、

詔、建元者聖代之芳猷也、芸緑垂露、革故者明時之彝典也、竹簡經霜、是以握契提衡之君、繼體守文之主、無不因祥瑞以開基、謝災異以改號、○中略 去春以來、天下不靜、疱瘡流行、老幼尼困、眇身之不德也、○中略 其改承安五年爲安元元年、○下略

治承

〔百練抄 八高倉〕治承四年安元三八四改元、依大極殿火災也、

〔一代要記 高倉〕治承元年丁酉八月四日改元、依大極殿火災也、□□勘之、

〔皇代記 高倉〕治承四年安元三年八月四日辛未改元、依大極殿火事也、

〔玉海〕治承元年八月四日辛未、此日改元也、五日壬申、大夫史隆職注進改元詔書、其狀如此、

詔、朕以昧菲、謬握乾符、馭俗道疎、遙隔三五之步、繫世慮淺、未致衆海之肅淸、爰欃攙之變荐示、梓愼之奏寔繁、況鐘去○此間恐有脫字 中呂律、火于大極殿、百辟朝享之舊基、灰燼空積、一人夕惕之疑念、丹府無聊、政季之訛也、上慚祖宗之靈、德華之薄也、下愧民庶之聽、每願其治、側陳于懷、方今式考帝載、旁

永萬

〔百練抄二七條〕永萬元年長寛三六五改元

〔一代要記二條〕永萬元年乙酉六月五日改元、依天變怪異病也、俊經勘之、

〔皇代記二條〕永萬一年長寛三年六月五日壬午改元、依天皇御藥井天變也、

〔皇年代略記二條〕永萬一元年乙酉六月五日改元、依天變、井御愼、公家御藥事也、

〔元秘別錄二〕長寛三年六月五日改元、永萬依御不豫也、○中略　勘申年號事　永萬　漢書曰、休徵自至、壽考无疆、雍容垂拱、永々萬年、　右依――　左少辨兼文章博士中宮大進藤原朝臣俊經

仁安

〔百練抄六七條〕仁安三年永萬二八廿七改元、依即位也、

〔一代要記六條〕仁安元年丙戌八月二十七日改元、依御即位也、成光勘之、

〔皇代記六條〕仁安三年永萬二年八月廿七日戊戌改元、依即位也、

〔元秘別錄二〕永萬二年八月廿七日戊戌改元、仁安代始、○中略　文章博士藤原成光朝臣、○中略　仁安　毛詩正義曰、行寛仁安靜之政、以定天下、得至於太平、

嘉應

〔百練抄八高倉〕嘉應二年仁安四四八改元、依代始也、

〔一代要記高倉〕嘉應元年己丑四月八日改元、依御即位也、資長勘之、

〔如是院年代記〕己丑第八十代高倉、嘉應元、四月八日改元(中略)戊子即位、己丑改元、

〔元秘別錄二〕仁安四年四月八日改元、嘉應代始、○中略　勘申年號事○中略　嘉應　漢書曰、天下殷富、數有嘉應、　右依――　權中納言藤原朝臣資長

承安

〔百練抄八高倉〕承安四年嘉應三四廿一改元、依災變厄會等也、

〔帝王編年記二十高倉二〕承安四嘉應三年四月廿一日改元、依天一御會期、御愼井天變、

〔一代要記高倉〕承安元年辛卯四月廿一日改元、依赤氣也、資長勘之、

〔皇代記高倉〕承安四年嘉應三年四月廿一日乙丑改元、依重厄也、

永曆

〔百練抄二十七條〕永曆元年（平治二正十改元、依大亂也、）

〔帝王編年記二十二條〕永曆一年（平治二年正月十日改元、依太上天皇厄運兵革也、）

〔一代要記二條〕永曆元年庚辰正月十日改元、依兵亂也、永範勘之、

〔皇年代略記二條〕永曆一（元年庚辰正月十日己丑改元、依天變兵亂也、）

〔元秘別錄二〕平治二年正月十日己丑改元（永曆中略）〇　勘申年號事　永曆　後漢書曰、馳淳化於黎元、永歷代而太平、宋韻曰、曆數也、又曆日續漢書律曆志曰、黃帝造歷、歷與曆同作、（中略）〇　右依——式部大輔兼石見守藤原朝臣永範

應保

〔百練抄二十七條〕應保二年（永曆二九四改元、依疱瘡也、）

〔一代要記二條〕應保元年辛巳九月四日改元、依飢饉疱瘡也、資長勘之、

〔皇代記二條〕應保二年（永曆二年九月四日癸酉改元、依主上御不豫也、）

〔山槐記〕應保元年九月四日癸酉、今夜有改元定云々、改永曆二年為應保元年、參議左大辨資長朝臣勘申云々、依天下皰瘡也、公家御皰瘡云々、

〔元秘別錄二〕永曆二年九月四日癸酉改元、（應保）依天下疱瘡也、（中略）〇　左大辨資長朝臣（中略）〇　應保

尙書曰、己女惟小子、乃服惟弘、王應保殷民、（已事女惟小子、乃當服行德政、惟弘大王道、上以應天、下安我所受殷之衆民也、）

長寬

〔百練抄二十七條〕長寬二年（應保三三廿九改元）

〔一代要記二條〕長寬元年癸未三月廿九日改元、依天變也、或本四月一日改元、範兼勘之、

〔皇年代略記二條〕長寬二（元年癸未三月廿九日改元、依疱瘡也、）

〔皇代記二條〕長寬二年（應保三年三月晦日庚申改元、依赤斑瘡也、）

〔元秘別錄二〕應保三年三月廿九日庚申改元、（長寬）依天下疾疫、（中略）〇　刑部卿範兼卿（中略）〇　長寬

維城典訓曰、長之（〇之、一本作也、下同之、）寬之、施其功博矣、

保元

○按ズルニ、康治三年三月二十四日改元天養ノ同人ノ勘文、亦久壽ノ文字アリ、

〔百練抄 七 後白河〕保元三年（久壽三四廿三〈三恐七誤〉改元、依二即位一也、）

〔如是院年代記〕（丙子）第七十七代後白河、保元元、（四月二十七日改元、〈中略〉乙亥即位、丙子改二元保元一、）

〔皇年代略記 後白河〕保元三（元年丙子四月廿○一○日○改元、代始、）

〔保元物語 一〕鳥羽院崩御事

カクテ今年ハ暮レニケリ、明クル四月二十七日、改元アリテ保元トゾ申シケル、

〔元秘別錄 二〕久壽三年四月廿七日（戊戌）改元、（保元）代始、（○中略）式部大輔永範勘二申之一、（○中略）保元　顏氏曰、以レ保レ元吉也、

平治

〔百練抄 七 二條〕平治元年（保元四四廿改元、依二即位一也、）

〔一代要記 二條〕平治元年己卯四月二十日改元、依二御即位一也、俊經勘レ之、

〔如是院年代記〕（己卯）第七十八代二條、平治元、（四月二十七日改元、〈中略〉戊寅即位、己卯改元、）

〔皇年代略記 二條〕平治一（元年己卯四月廿日甲辰改元、代始、）

〔平治物語 三〕長田義朝ヲ殺幷六波羅ニ馳セ參リ附義朝ガ首ヲ梟事

同十日、（○平治二年正月）改元有テ永曆ト云、此兵亂ニ依也、去年四月ニ保元ヲ改テ平治ニ定マリシ、平氏繁昌シテ天下ヲ可レ治年號カト申セシガ、果シテ源氏滅テ平家世ヲ取レリ、其時大宮左大臣伊通公ハ、此年號不レ被二甘心一、平治トハ山モナク河モナクシテ平地ヤ、高卑ナカランカト笑給シガ、終ニ皇居ハ武士ノ住家ト成、主上ハ凡人ノ亭ニ宿ラセ給ケルコソ不思議ナレ、人ノ口程怖シカリケル事ハナシ、

〔元秘別錄 二〕保元四年四月廿日（甲辰）改元、（平治）代始、（○中略）勘申年號事、（○中略）平治　史記曰、天下於レ是大平治、右依――　治部權少輔兼文章博士藤原朝臣俊經

久壽

〔一代要記 近衞〕仁平元年辛未正月二十六日改元、依去年風水也、永範勘之、

〔皇年代略記 近衞〕仁平三 元年辛未正月廿六日戊戌改元、依去年變異風水也、

〔台記〕久安七年正月廿六日戊戌、範家下年號勘文、令見諸卿、後公通讀之、依例文也了自下定申、次示諸卿、令難申、〇中略 大政大臣 〇藤原實行 難曰、仁平、編年通載云、平者孫〇孫恐誤字 也、即使範家申關白、奏法皇、良久還來、仰曰、改久安七年、爲仁平元年、依天喜元年例、仍令作詔書、〇中略

詔、朕謬膺陰陽之休運、忝受天地之寶命、璇璣不在、遙隔德耀於勛華之口社稷未和、難敵澆俗於季葉之風、乾象爲之相誡、變異因其屢呈、就中去年國逢暴風之難、人有洪水之困、朕之不逮、咎及黎民、夕惕之思、寒心無聊、抑無讖告、以改曆、舊史氏之遺文永傳、弘惠化以退邪、古先帝之芳躅不朽、宜易視聽於率土、以解寃結於圜扉、其改久安七年、爲仁平元年、〇中略 主者施行、

仁平元年正月廿六日

〔元秘別錄 二〕久安七年正月廿六日改元 仁平 勘申年號事 仁平 後漢書曰、政貴仁平、〇中略 右依—— 文章博士藤原永範

〔百練抄 七 近衞〕久壽二年 仁平四十廿八 改元、依厄運也、

〔一代要記 近衞〕久壽元年甲戌十月廿八日改元、依燒亡也、永範勘之、

〔皇年代略記 近衞〕久壽二 元年甲戌十月廿日丁未改元、依變異厄運也、

〔元秘抄 三〕被用舊勘文例

仁平四年改元、久壽 今度年號、公卿各加其難之間、依勅定、自關白殿去久安七年勘文下給之、仍被用久壽了、久安七年永範擇申之、今度永範、茂明、長光等勘文不被用之、

〔元秘別錄 二〕久安七年正月廿六日改元 仁平 〇中略 勘申年號事 〇中略 久壽 抱朴子曰、其業在於全身久壽、 右依—— 文章博士藤原永範

〔百練抄 近衞七〕天養一年 康治三二廿三改元、依甲子革令也、 二月十七日、甲子定、
〔一代要記 近衞〕天養元年甲子二月二十三日改元、依革令也、茂明勘之、
○按ズルニ、愚管抄、二十二日改元、如是院年代記、二十四日改元ニ作ル、
〔古今著聞集 四文學〕康治三年甲子にあたりけり、例にまかせて、革命〇命恐令の定め有べかりけるに、宇治左府、前内大臣にておはしけるが、周易を學ばずして、此定にまゐらん事、あしかるべしと覺して、よませ給ふべきよし、覺しさだめてけり、さかあるを、此事を學ぶ事、師有よし言ひつたへたり、又五十以後、まなぶべしともいへり、おとゞおぼしけるは、此事更に所見なし、論語には、小年にて學ぶべしとこそ見えたれ、さりながらも、俗語はゞかりあれとて、二年十二月七日、安陪泰親をめして、河原にて泰山府君をまつらせて、みづから祭庭にむかはせたまひけり、都狀にその心ざしをのべられけり、成佐ぞ草したりける、そのとしおとゞは廿四にぞならせ給ひける、文道をおもんじ、冥加を恐給て、かくせさせ給ひける、やさしき事也、
〔元秘別錄 二〕康治三年三月廿四日改元、天養、依甲子革令也、〇中略 勘申年號事、 天養 後漢書曰、此天之意也、人之慶也、仁之本也、儉之要也、焉有應天養人、爲仁爲儉、而不降福者乎、〇中略 右依―― 文章博士藤茂明

久安
〔百練抄 近衞七〕久安六年 天養二七廿二改元、依彗星變也、
〔一代要記 近衞〕久安元年乙丑七月二十二日改元、依彗星也、永範勘之、
〔台記〕天養二年七月廿二日丙寅、改元久安、語在別記、
〔元秘別錄 二〕天養二年七月廿三日改元 久安 〇中略 勘申年號事 久安 晉書曰、建久安於萬載、垂長世於無窮、〇中略 右依―― 永範

仁平
〔百練抄 近衞七〕仁平三年 久安七正廿六改元、依去年風水也、

命否、且仰明經算暦道等博士令勘申者、

同七年辛酉七月十日丙午、左大臣以下諸卿、參著仗座、被定權中納言藤原實光卿幷諸道勘申、今年辛酉、當革命否事、又有改元事、改保延七年爲永治元年、詔云、俗及澆醨、暦告辛酉云々、

〔元秘別錄 二〕保延七年七月十日改元永治、依辛酉革命也、○中略

年號事　永治　魏文典論曰、禮樂興於上、頌聲作於下、永治長德、與年豐、　權中納言藤原朝臣實光

康治

〔本朝世紀〕康治元年四月廿八日辛卯、改元也、權大納言藤實能卿、同宗輔卿、同伊通卿、權中納言藤公敎卿、同重通卿、同公能卿、參議右兵衞督藤公行卿等參仕、定可用康治號之由、群議畢内覽、予上卿實能卿召大内記藤令明、仰可作詔書之由、草幷淸書内覽、有御畫事、攝政書之給、次上卿召中務少丞菅原貞光下之、改永治二年爲康治元年、

〔百練抄 七近衞〕康治二年永治二四廿八改元、依即位也、

〔如是院年代記〕壬戌第七十六代近衞康治元、四月二十八日改元、(中略)辛酉即位、壬戌改元、

〔元秘別錄 二〕永治二年四月廿八日改元、康治代始、勘申年號事、○中略

康治　宋書曰、以康治道、○中略

右依――　文章博士　永範

天養

〔本朝世紀〕康治二年九月廿六日己卯、左大臣召權少外記淸原重憲仰曰、明年甲子、當革命否、宜仰明經紀傳算暦等道、可令勘申者、　十月一日、今日左大臣仰外記云、明年甲子當革命歟否、宜仰陰陽道令勘申者、

天養元年二月十四日、内大臣仰重憲云、明年甲子、相當革命否、仰肥後守信俊眞人、可令勘申、　十七日戊戌、次内大臣以下參入、有甲子定、○中略　次曉更、諸大臣移端座、召外記被下可選進年號字宣旨、權中納言實光、參議左大辨顯業、式部大輔敦光朝臣、文章博士永範朝臣、茂明朝臣、　廿三日甲辰、左大臣、内大臣以下參入、有改元事、改康治三年爲天養元年、文章博士茂明朝臣擇申、依甲子也、

保延

〔知信朝臣記〕長承元年八月十一日、今日改元、爲長承元年、式部大輔敦光朝臣撰申之、勘申年號事　長承　史記曰、長承聖治、群臣嘉德、右依――　式部大輔藤原朝臣敦光

〔元秘別錄二〕天承二年八月十一日戊戌改元、長承、依怪異疾疫也、○中略

〔百練抄六崇德〕保延六年長承四四廿七改元、依疾疫飢饉也、

〔一代要記崇德〕保延元年乙卯四月廿七日改元、依天下飢饉也、顯業勘之、

〔皇年代略記崇德〕保延六元年乙卯四月廿七日庚午改元、依飢饉、疾疫、洪水也、

〔中右記〕長承四年四月廿七日庚午、秉燭之間參內、依可有改元定也、○中略敦光朝臣勘申、貞文、天明、養壽、顯業朝臣撰申、安貞、延祚、保延、時登朝臣撰申、嘉應、安貞、承安、次第見下、宰相中將發語云、保延、安貞、人或承安多被申、予同宰相中將、以詞付藏人辨奏、返上勘文頭而來仰云、依天下不閑、天變、霖雨改元、可用保延、依康和例令作詔書、

〔長秋記〕保延元年四月廿七日庚午、早朝奉內府于消息、借申改元勘文等、乃被○此間恐有脫字正文三通、各書檀紙、文章博士菅時登書年月日位所、式部大輔敦光朝臣、右中辨顯業朝臣、唯書官名限、○中略

勘申年號事○中略

保延

文選曰、永安寧以祉福、與大漢而久存、實至尊之所御、保延壽而宜子孫、

右依宣旨勘申如件

右中辨兼文章博士越中權介藤原朝臣顯業

永治

〔百練抄六崇德〕永治一年保延七七十改元、依辛酉革命也、　七月十日、諸卿定申諸道勘申、今年辛酉當革命否事、今日即改元、

〔一代要記崇德〕永治元年七月十日改元、依辛酉并厄運也、實之勘之、

〔革命勘文上〕元應三年、大外記中原朝臣師緒、勘例、永治元年例、

保延六年庚申三月五日庚辰、被發遣宇佐使、武藏守藤原信輔被申八幡宮火事、并明年辛酉御愼事等、同年十二月廿九日己亥、左大臣以權右中辨藤原朝臣資信、傳宣左大史小槻政重云、明年辛酉當革

大治

〔一代要記崇德〕天治元年甲辰四月三日改元、依御即位也、敦光勘之、

〔皇代記崇德〕天治二年保安五年四月三日庚戌改元、依御即位也、

〔元秘別錄二〕保安五年四月三日庚戌改元、天治代始、○中略勘申年號事、
天治　易緯曰、帝者德配天地、天子者繼天治物、○中略右依宣旨勘申如件
式部大輔兼加賀介藤原朝臣敦光

〔百練抄六崇德〕大治五年天治三正廿二改元、依疱瘡也、

〔一代要記崇德〕大治元年丙午正月二十二日改元、依疱瘡也、敦光勘之、

〔永昌記〕大治元年正月廿二日戊子、頭辨送書狀云、今夕可有改元、○中略源相公云、疾疫二字外不聞、次詞天壽可宜歟、近日疱瘡競起、依此事可有改元之由被申意歟、然者不被申疱瘡之由如何、又唯可被定申年號字事歟、○中略治部卿被申云、如本申大治、可被用歟、爲隆又申云、擇申天壽大治了、天壽不宜者、大治本所定申也、諸卿又被聞了、頭辨又馳參院、仰云、以天治三年可爲大治元年、就承曆例、令草詔書者、

〔元秘別錄二〕天治三年正月廿二日戊子改元大治○中略式部大輔藤原敦光朝臣○中略
大治　河圖挺佐輔曰、黃帝修德立義、天下大治、

天承

〔百練抄六崇德〕天承一年大治六正廿九改元、依去年炎旱天變也、

〔一代要記崇德〕天承元年辛亥正月二十九日改元、依去年炎旱天變也、敦光勘文、

〔皇年代略記崇德〕天承一元年辛亥正月廿九日丁卯改元、依炎旱洪水天變也、

〔長秋記〕大治六年正月廿九日、改元定也、○中略敦光朝臣勘申、○中略天承、漢書曰、聖者之自爲、動靜同施、奉天承親、臨朝享臣、物有節文、以章人倫、○下略

長承

〔百練抄六崇德〕長承三年天承二八十一改元、依疾疫也、

〔一代要記崇德〕長承元年壬子八月十一日、改元、依疾疫火事也、敦光勘之、

〔皇年代略記崇德〕長承三元年壬子八月十一日戊戌改元、依怪異疫疾也、

申云、人々一同也、永久何事候、但又舊文中有可然之年號可被勘定、參上皇歸參仰云、長承、永久共何事在、且此中以一可指申也者、人々申云、永久吉候歟、頭辨歸參後、又歸來仰云、改天永四年爲永久元年者、

元永

〔百練抄 五鳥羽〕元永二年（永久六年四月三日改元、依天變幷御愼也、）

〔一代要記 鳥羽〕元永元年戊戌三月廿九日改元、依天變疾疫也、或四月三日改元、在良勘之、

〔皇年代略記 鳥羽〕元永二（元年戊戌四月三日乙卯改元、依天變幷御愼也、）

〔中右記〕永久六年四月三日己卯、申時許外記來云、今日俄可有改元定、必可參仕由、頭辨所被仰下也者、可參仕由申畢、〇中略次頭辨下申年號勘文、（三通、懸紙一結申、）內府披之、取一通令結申給、頭辨仰云、可定申者、見畢給予、披見之處、式部大輔在良朝臣、兩文章博士敦光朝臣、永實等勘申年號也、見了傳次々人、皆畢可讀上由被仰、左大辨仍讀上了、次可定申者、左大辨申云、天承、大治、右兵衞督元永、久安、帥中納言、元永、承安、治部卿、元永、長壽、予申云、元永、保安、內府令申給云、元永者、副勘文令申云、次頭辨被奏了、被申院間、暫以遲々、頭辨來仰云、（御後聞、依何之事、改元之由不仰云々、甚奇恠也、天變云々、）改元可用元永也、依天喜例可令作詔書、

保安

〔百練抄 五鳥羽〕保安四年（元永三年四月十日改元、依天變御愼也、）

〔一代要記 鳥羽〕保安元年庚子四月十日改元、依御厄運也、在良勘之、

〔中右記〕保安元年四月十日庚辰、頭辨來仰云、依御愼可有改元、以元永三年爲保安元年、依天喜例可作詔書者、內府召藏人辨實光、可作詔書被仰下也、〇中略今度改元頗不得心、近日天下豐年、偏依御愼改元、未有此例也、或人密語云、文章博士爲康、從御卽位年及今年算計所、及今年夏可有御愼、仍可改元申行云々、年號數漸多、此事強不可被行歟、今日庚辰、日次不宜之由、先年唯令申出也、仍被尋例之所、庚辰改元例有其數也、先年申旨不得心事歟、今夜早可被行由申也、

天治

〔百練抄 六崇德〕天治二年（保安五四三改元、依卽位也、）

依彗星變改元、以嘉承爲年號、依天喜例令草詔書者、

〔元秘別錄一〕長治三年四月九日庚午改元、嘉承依彗星變也、　文章博士在良朝臣〇中略、菅原、　嘉承　漢書曰、禮樂志曰、嘉承天和、伊樂厥福、

天仁

〔百練抄五鳥羽〕天仁二年嘉承三年八月三日改元、依即位也、

〔公卿補任鳥羽〕嘉承三年戊子月日改元、爲天仁、去年七月十九日受禪、

〔一代要記鳥羽〕天仁元年戊子八月三日改元、依御即位也、匡房勘之、

〔元秘別錄一〕嘉承三年八月三日庚辰改元、天仁代始、〇中略　大宰權帥匡房卿〇中略　天仁　文選曰、統天仁風遐揚、

天永

〔百練抄五鳥羽〕天永三年天仁三年七月十三日改元、依彗星也、

〔一代要記鳥羽〕天永元年庚寅七月十五日改元、依彗星也、匡房勘之、

〔公卿補任鳥羽〕天仁三年庚寅七月十三日改元、爲天永元、

〔元秘別錄一〕承德三年八月廿八日戊戌改元康和〇中略　文章博士在良朝臣〇中略　天永　尙書曰、欲第八召誥王以小民受天永命、諸注曰、我欲王用小民受天長命、言常有民也、

〇按ズルニ、天永ノ號、又嘉承改元、天仁改元ニモ、同人ノ勘文ニ見エタリ、

永久

〔百練抄五鳥羽〕永久五年天永四年七月十三日改元、依兵革幷病事也、

〔一代要記鳥羽〕永久元年癸巳七月十三日改元、依兵革疾疫也、在良勘之、

〔皇代記鳥羽〕永久五年天永四年七月十三日辛卯改元、依天變、兵革、疾疫也、

〔長秋記〕天永四年七月十三日、改元事、〇中略　內大臣、右大將、左兵衞督、別當、大藏卿等追參仕、頭辨下年號勘文等、左府開見、一々傳下、左大辨讀申、大藏卿定申云、年號等中、長承、永久、共能候、就中永久特宜樣覺候者、左大辨申云、永久天治間何事候、大宮權大夫已上皆同大藏卿、此後召頭辨被奏此趣、左府

之者、弘德ハ恒德公諡號相似、正字元字皆不快、先年敦基朝臣擇申承德永長度擇申之、宜之由定申、仍被用舊勘文云々、

康和

〔本朝世紀〕康和元年八月廿二日、仰兩文章博士、令撰申年號、廿八日戊戌、改元、爲康和元年、正家朝臣撰申之、

〔百練抄 五堀河〕康和五年 承德三年八月廿八日改元、依地震疾病也、

〔一代要記 堀河〕康和元年己卯八月二十八日改元、依地震疾疫也、正家勘進之、

〔元秘別錄 一〕承德三年八月廿八日戊戌改元康和 中略○ 式部大輔藤原正家 中略○ 康和 崔寔政論曰四海康和、天下周樂、

長治

〔百練抄 五堀河〕長治二年 康和六年二月十日改元、依天變也、

〔一代要記 堀河〕長治元年甲申二月十日改元、依天變大赦也、在良、俊信勘進之、

〔元秘別錄 一〕康和六年二月十日改元、長治 天變、 文章博士在良朝臣 中略○ 長治 漢書曰、建久安之勢、成長治之業、○藤原俊經勘文、亦載此文字、

嘉承

〔百練抄 五堀河〕嘉承二年 長治三年四月九日改元、依彗星也、

〔一代要記 堀河〕嘉承元年丙戌四月九日改元、依彗星也、在良勘進之、去正月戊時彗星見坤方、長十餘丈、

〔中右記〕嘉承元年四月九日、今夜可有改元也、中略○ 仰云、在良朝臣所撰申之年號以嘉承可用也、詔書依天喜例可令作者、今年天變呈、奇星見、依如是事被改也、

〔永昌記〕長治三年四月九日庚午、今日可有改元事、去春彗星出南西方、仍任永祚長治例所被行也、中略○ 太宰帥大江卿、文章博士在良朝臣、實義朝臣等勘文各一通、卷籠一紙宣下之、懸紙一枚、籠二通、結其中、仰可定申之由、内府以下一々見下、依上卿命右大丞一々讀申、終始勘文、無別讀樣、讀了各定申、中略○ 令予奏聞此由、自御所被下舊勘文、正家朝臣所擇申天祐、延壽、并在良朝臣所擇申嘉承等間、前可定申、右大辨云、天祐者、唐亡宋興、其時代變改之年號也、延壽何事之有乎、又嘉承字、漢書云、嘉承天和者、天和字音可憚哉者、重以奏聞、已勅定畢、日

永長

〔元秘別錄一〕寛治八年十二月十五日改元、嘉保 依疱瘡、 江中納言維時卿イ 或抄云、納言之後進年號、紀納言例也、 嘉保 史記曰、嘉保大平、

〔百練抄五堀河〕永長元年嘉保三年十二月十七日改元、依天變也、

〔一代要記堀河〕永長元年丙子十二月十七日改元、天變地震也、匡房勘進之、

〔中右記〕嘉保三年十二月十七日癸酉、以藏人辨時範被下年號勘文、兩文章博士、至江中納言勘文者、今朝付藏人宗仲被奏、從御所下給左大臣、永長被撰上也、是江中納言被勘申後漢書文云々、則勅許、內々被申大殿歟、是依天延例可行者、彼時有天變地震也、

〔元秘別錄〕嘉保三年十二月十七日癸酉改元、永長 依天變地震、中略 江中納言中略 永長 後漢書曰、東國永長、爲後代法、

承德

〔百練抄五堀河〕承德二年永長二年十一月十七日改元、依地震也、

〔一代要記堀河〕承德元年丁丑九月一日、彗星見西方、同十八日以後不見、十二月廿日改元、依天變地震也、敦基勘之、

○按ズルニ、本書及ビ山槐記、十二月二十一日改元、如是院年代記、十二月二十二日改元、共ニ誤ナリ、十一月二十一日ヲ正トスベシ、

〔皇代記堀河〕承德二年永長二年十一月廿一日改元、依天變、地震、洪水也、

〔元秘別錄一〕永長二年十一月廿一日改元、承德 依天變地震洪水大風等災、

〔元秘別錄一〕嘉保三年十二月十七日改元中略 文章博士敦基朝臣 承德 周易曰、幹父之蠱、用譽、承以德也、

〔元秘抄三〕被用舊勘文例

永長二年改元、承德 蒙宣旨之者、式部大輔正家朝臣、彈正大弼行家朝臣、文章博士成季朝臣也、敦基爲文章博士、而依男實信死去服、不蒙宣旨、仍行家朝臣殊蒙宣旨、但今度年號字等各有難、延壽ハ王延壽、潘水

具記、

〔元秘別錄　一〕承曆五年二月十日改元、(永保)依辛酉凶年也、(中略)○文章博士行家　永保　尙書曰、欽崇天道、永保天命、(敬天安命之道也)又曰、惟王子々孫々、永保民人、(又欽令其子孫、累世具君國安民也、)

〔扶桑略記　三十白河〕永保四年甲子二月七日、改爲應德元年、(應德元)

應德

〔百鍊抄　五白河〕應德三年(永保四年二月七日改元、依甲子也、)

〔皇年代略記　白河〕應德三(元年甲子二月七日改元、依革令也、)

〔一代要記　白河〕應德元年甲子二月七日改元、依甲子也、有綱勸進之、

〔元秘別錄　一〕永保四年二月七日改元、(應德)文章博士藤原有綱朝臣　應德　白虎通曰、天下泰平、符瑞所以來至者、以爲王者承天順理、調和陰陽、和萬物序、休氣充塞、故符瑞並臻、皆應德而至、

寛治

〔扶桑略記　三十堀河〕應德四年丁卯四月九日庚寅、改爲寛治元年、(寛治元)

〔百鍊抄　五堀河〕寛治七年(應德四年七月改元、依御卽位也、)

〔中右記〕應德四年四月七日戊子、改元寛治、

〔元秘別錄　一〕應德四年四月十一日改元、(寛治)代始、(中略)○左大辨匡房卿、　寛治　禮記曰、湯以寛治民、而除其虐、文王以文治、武王以武功、此皆有功烈於民者也、

嘉保

〔百鍊抄　五堀河〕嘉保二年(寛治八年十二月十五日改元、依疱瘡也、)

〔一代要記　堀河〕嘉保元年甲戌十二月六日改元、依疱瘡也、匡房勸進之、

〔中右記〕寛治八年十二月十五日壬午、今夕有改元、衆日藏人辨仲左大臣、可撰申權中納言大江朝臣并文章博士等年號字者、(中略)○先令藏人辨時範奏年號勘文、返給、可定申者、承德、承安、弘德、天成、嘉保、此中承德、嘉保之間、可隨勅定者、仍以時範被申院并大殿、可用嘉保者、是江中納言被撰申也、召大內記在良作詔、(依疱瘡改元、承曆之例也、)

〔百練抄 五白河〕承暦四年（承保四年十一月十七日改元、依旱魃并赤斑瘡也、）

〔一代要記 白河〕承暦元年丁巳十一月十七日改元、依疱瘡旱魃也、實綱勘進之、

〔水左記〕承保四年十一月十七日、今日有改元定、公卿被參内云々、博陸同參候云々、後聞改承保四年爲承暦元年云々、有詔書事、大内記敦基作之云々、

〔元秘別錄 一〕承保四年十一月十七日改元、（承暦）依天變、（中略）文章博士藤原正家朝臣（中略）承暦 維城典訓曰、聖人者以懿德永承暦、崇高則天、博厚儀地、（藤原實綱勘文、亦載此文字、）

〔公卿補任 白河〕承暦五年（辛酉）二月十日（丁卯）改元永保、依辛酉也、

〔皇年代略記 白河〕永保三（元年辛酉二月十日丁卯改元、依革命也、）

〔革命勘文 上〕元應三年、大外記中原朝臣師緒、勘例、永保元年例、

承暦四年（庚申）十二月、右大臣仰外記云、明年辛酉、當革命否、宜仰紀傳明經算陰陽道等令勘申者、右中辨大江匡房朝臣同勘申之、又大外記淸原定俊勘申、先例被行之事、

同五年二月十日丁卯、内大臣以下諸卿、參著仗座、被定諸道勘申今年辛酉、當革命哉否并改元事、詔文云、思春王而謝德、景龍之瑞曲呈、開夏暦而尋規、辛酉之符可愼、改承暦五年、爲永保元年、

〔水左記〕承暦五年二月九日、未剋許、博陸以書狀被示給云、明日可有辛酉并改元定、隨催午上可被參歟、右内兩府、若有障、定被奉行歟、文書等内々先可尋覽之由、可被告民部卿右大辨等者、答申承了由了、（中略）入夜左大辨來、年號勘文云、明日定在樣如何者、大略子細令答對了退出、　十日參内、今日可有定之故也、此間内大臣、右大將、民部卿、右衞門督、左宰相、源中將、左大辨等參入、著陣、仰云、今年辛酉當革命否之由、諸道勘申之趣、宜令定申、（被下勘文七通、）予申云、今年辛酉如諸道勘文者、多不當革命之運、但一兩勘文之中、立兩說、申相當之旨、用捨之間、眞僞難定、倩尋前蹤、雖非革命、每至辛酉之年、兼儆徵祥之變、且改號令、且施德政、然則尋近代治安之例、被定行何難有哉者、内大臣被同之、又人々申旨、不能

延久

〔扶桑略記　後三條二十九〕治暦五年四月十三日己酉、改治暦五年、爲延久元年、（延久元）

〔百練抄　後三條五〕延久五年（治暦五年四月十三日改元、依即位也、）

〔元秘別錄　一〕治暦五年四月十三日（己酉）改元、（延久代始、○中略）式部大輔兼伊豫守藤原實綱朝臣（○中略）

延久　尙書（○尙書下有註字）曰、我以道惟安寧、王之德欲延久也、

〔水左記〕治暦五年四月十三日己酉、此日改元定云々、（延久元年是也）

〔元秘別錄　一〕治暦五年四月十三日改元、（延久代始、○中略）都記、四月十三日未剋、參內、（○中略）內府被示云、仲定先々不申上、唯可被相議歟、仍人々被申一兩年號、余（○藤原顯隆）申云、嘉德可宜之由、新大納言匠作被申云、承保、成德可宜、余申云、成字有戈如何候乎、右府內府被申云、延久可宜者、上卿（內府被定也）使匠房被返擧文書、（實綱朝臣、式部大輔爲政朝臣、文章博士正家勘申、）嘉德、承保、延久之間可宜者、次仰云、此三中何〻乎、匠房却云、人々被議、余申延久者、本文吉候、但以注文令勘申定先例候、內大臣被示經家之文注、幷正義之文、何難之有乎、次內府使匠房被申延久可宜之由、幷爲注文之由、被仰云、被用注文先例如何者、被申云、先例忽難覺候、被用何事候乎、次仰云、可用延久、（勘文留御前）

承保

〔扶桑略記　白河三十〕延久六年八月廿三日戊子、改延久六年、爲承保元年、（承保元）（○又見東寺長者補任）

〔帝王編年記　白河十九〕承保三年（延久六年八月廿三日改元、依即位幷陽九三合厄也、）

〔如是院年代記〕（甲寅）第七十二代白河、承保元、（十二月八日改元、（中略）壬子即位、甲寅改元、）

〔元秘別錄　一〕延久六年八月廿三日（戊子）改元、（承保代始、○中略）文章博士藤原正家朝臣　承保　尙書曰、召公既相宅、周公往營成周、使來告卜、作洛誥、周公拜手稽首曰、王命予來、承保乃文祖受命民、

〔和事始（附錄）〕國朝年號譜

白河　承保三（甲寅八月二十三日戊子、代始改元、）考證（尙書云、承保文祖民、文章博士藤原正家考之、下同、）

承暦

〔扶桑略記　白河三十〕承保四年十一月十七日甲子、改承保四年、爲承暦元年、（承暦元）

篇云、承天之道、因人之情、上占三元、下用五行、三神相合、名曰三合、所謂三神者、大歲、害氣、太陰是也、今自上元己亥、至于本朝貞觀十八年丙申、積年四千九百一十八年也、以三元百八十除之、今中元之末、河元之內也、三合之運當在明年、經曰、毒氣流行、水旱接並、苗稼傷殘、寇盜大起、兵喪疾疫、競□並起、實是雖當五行之理運、而弭災之術、既在祈禱、夫禍福之應、譬猶影響、吉凶之變、慎與不慎也、當此時人君修德施行仁、自然銷災致福、去天平寶字三年、歲當三合之理運、是則三元大終、而五德復始之年矣、上元之三合、初在斯歲、由是有司上奏、詔頒下天下、令讀般若心經、既免其災、即是本朝之般密也と有、御禱ありしなるべし、樗囊抄相撲條に、三合甲子、正曆四、(三合)萬壽元、(甲子)寬治、(三合)停止、延喜廿、(依病)天延三(三合)とあり、御慎ふかくて相撲停止せられし事もありし也、近來このさたある事をきかず、

〔如是院年代記〕第七十代後冷泉、治曆元、(八月二日改元、宇佐宮炎上、)

〔元秘別錄一〕康平八年八月二日(己丑)改元、(治曆)依炎旱三合、○中略　式部大輔兼美作守藤原朝臣實綱。。。。。
○中略　治曆　尙書正義曰、湯武革命、順于天而應於人、君子以治曆明時、然則改正治曆自武王始矣、

經信卿記曰、八月三日內大臣被著奧第二座也、如例傍壁參入、內大臣向左方、(被避上臈被其儀也)取勘文、向開左方被結三枚、頭之有召參陣、被給勘文、開之、先取實綱朝臣勘文結申、被命云、延久、治曆宜由各令定申、又承保雖宜、依其數多、唯可申二年號者、持參御前奏聞此由、仰云二年號何勝乎、可定申被奏云、各申三、延久字共吉、又治曆同吉者、但內大臣氣色以治曆爲勝、然而別不申其由、奏聞之處、(勘文留御前)仰云、延久可宜歟、但又々可申者、即於陣仰之旨、內大臣被申云、延久、治曆共宜之由、唯今思給、依炎旱事被改元者、漢家依炎旱改元之時、被用天漢、是用之水也者、若就此義者、治曆可勝歟、奏聞此由、仰云、若有本文者、尤有其興、可用治曆、予內々奏云、治曆尤宜、但勘申本文之中、武王革命、治曆明時者、革命之事可有尋歟、仰云、不審事也、然而不可仰、可問之由、唯仰可用治曆之由、

朝臣、繼天、承統、大弘、一枚文章博士定親朝臣、承保、永承、年號合六ヶ内、定申康平、永承宜由、又被仰云、二間可申一定、不有一定間、左兵衞督云、康字康保外不候歟、大臣奏此由、遂用永承、

〔永昌記〕嘉承元年四月十八日己卯、改元以後、政始以前、被行雜事例、大外記師遠令勘申、永承元年四月廿日、(十四日改元)

天喜

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕(天喜元)永承八年癸巳正月十一日、改爲天喜元年、

〔百練抄 四後冷泉〕天喜五年(永承八正十一改元、依天變怪異也、○帝王編年記、東寺長者補任、同本書、皇年代略記十日改元、)

〔元秘別錄 一〕永承八年正月十三(○三恐一誤)日改元、(天喜)依變異也、○中略 右中辨平定親朝臣○中略 天喜

抱朴子曰、人主有道、則嘉祥並臻、此則天喜也、

康平

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕(康平元)天喜六年戊戌八月廿九日、改天喜六年爲康平元年、依火災也、

〔百練抄 四後冷泉〕康平七年(天喜六八廿九改元、依火災也、)

〔一代要記 後冷泉〕康平元年戊戌三月廿一、(○三月廿一、一本作八月廿九、)改元、依火災也、

〔皇代記 後冷泉〕康平七年(天喜六年八月廿九日丁卯改元、依大極殿火事也、)

〔如是院年代記〕第七十代後冷泉、康平元、(八月(天喜六年)廿九日改元、法成寺災上、大極殿火、)

〔元秘別錄 一〕天喜六年八月廿九日丁卯改元、(康平)依大極殿火事也、○中略 文章博士兼伊與權介藤原實範朝臣○中略 康平 後漢書曰、文帝寛惠柔克、遭代康平、注曰克能也、言以和柔能理俗也、尚書曰、高明柔克也、

治曆

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕(治曆元)康平八年八月二日、改康平八年爲治曆元年、

〔百練抄 四後冷泉〕治曆四年(康平八八二改元、依旱魃并三合厄也、)

〔年年隨筆 五〕革命革令の外に、三合といふ災歳あり、改元はせられねども、御祈どもありて御つつしみなりき、三合とは、三代實錄に、貞觀十七年十一月十五日、陰陽寮言、黃帝九宮經、蕭吉九宮

〔春記〕長暦四年十一月十日辛酉、今日改元定由云々、〇中略 今日諸卿定申、以其勘文被奏云々、三人義忠、擧周、孝親等也、所勘申之年號、延祥、義忠 天壽、孝親 長久擧周 等頗宜、其外皆以不用也、元功、孝親 繼天擧周等是也、而延祥注文不宜、管宮云々 天壽一二年猶可有其忌歟、至于長久者、雖非指本文、已無忌諱、仍以長久可用歟者、〇中略 卽奏此旨加勘文等、卽有天許、早可用長久也、

〔元秘別錄 一〕長暦四年十一月十日改元、長久 長暦以後連年有凶災、天下不穩、〇中略 式部權大輔大江擧周 長久 老子云、天長地久、

寬德

〔扶桑略記 二十八後朱雀〕長久五年十二月廿四日、改爲寬德元年、寬德元

〔百練抄 四後朱雀〕寬德二年 長久五年十一月廿四日改元、依疾疫旱魃也、

〔一代要記 後朱雀〕寬德元年甲申十一月廿四日改元、依疾疫炎旱也、定親勘申之、

〔元秘別錄 一〕春記云、長久五年十一月廿四日壬午、今日改元定也、〇中略 先有諸國定、次下年號勘文三通、資業朝臣、擧周朝臣、定親朝臣、文章博士 彼是群議、予申云、康和、寬德之間可被用歟、已上定親勘申〇中略 諸卿申云、天喜雖好猶不宜也、盛德者盛字可忌也、康和寬德間何事有哉云々、卽以此旨付泰憲被奏、勘文同返上云云、經數剋被仰下云、可用寬德者、

〔元秘別錄 一〕長久五年十一月廿四日壬午改元、寬德 依炎旱疾疫也、〇中略 文章博士平定親朝臣 寬德 後漢書云、上下歡欣、人懷寬德、

永承

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕寬德三年四月十四日甲子、改爲永承元年、永承元

〔百練抄 四後冷泉〕永承七年 寬德三四十四改元、依卽位也、

〔元秘別錄 一〕寬德三年四月十四日甲子改元、永承 代始、 文章博士定親朝臣〇中略 永承 尙書曰、永承天祚、

土記云、寬德三年四月十四日甲子、被下年號勘文三通、一枚資業卿、勘申康平、一枚式部權大輔擧周

長曆

長久

心所思也、又世間不閑之由云々、今日日次不宜、明日可來之間、今右府如此事等令定行者、　廿三日戊子、參結政所、次參女院、關白令(可有改元之由仰右府事)奏給云、天下不閑之由云々、被改元并御讀經等宜歟、若被仰可然之由者、諸右府可仰其由者、但年號字以通直爲政、擧周朝臣等可令勘申也、　七月廿三日丙辰、年號字、通直朝臣勘申、(玄通)爲政朝臣勘申、(天祐、長元、長育、)擧周朝臣勘申(延世、延祚、政善、)　廿五日戊午、傳聞、今日改元云々、入夜大外記送詔書按、其狀云、大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、盡皆赦除云々、又高年鰥寡孤獨、不能自存者、量賜物云々、

〔元秘別錄一〕萬壽五年七月廿五日(戊午)改元、(長元)依旱疫改元、坂東又有兵事、爲政朝臣勘申、太公六韜文、○中略文章博士(兼河內守)爲政朝臣○中略長元　太公六韜曰、天之爲天、元爲天長矣、地久矣、長久在其元、萬物在其間、各得自利、謂之泰平、故有七十六壬癸、其所繫天下而有、

〔和事始附錄〕國朝年號譜

長元九年(戊辰七月二十五日戊午、依旱疫兵亂改元、)　考證(六韜云、天之爲天、元爲天長矣、文章博士爲政勘進之、今六韜無此文、)

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長元(長曆元)十年丁丑四月廿一日、改爲長曆元年、

〔百練抄四後朱雀〕長曆三年(長元十四廿一改元、依即位也、)

〔元秘別錄一〕長元十年四月廿一日(甲子)改元、(長曆)代始、　大學頭(兼大和守)義忠朝臣　長曆(春秋文)○中略土記曰、四月廿一日、召使來云、右大臣宣奉、今日可有事定、不催申諸卿者、仰云、可參之由、參內、御前御物忌也、　大臣令範國內覽年號等寫、宿紙奏之者、向陣、年號勘文大臣給之、令下見諸卿、右大臣此中長曆善歟、如何、諸卿皆稱美、仍大臣奏此由、仰云、隨諸卿議定、宜用長曆者、

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長曆(長久元)四年十一月十日辛酉、改長曆四年爲長久元年、

〔百練抄四後朱雀〕長久四年(長曆四十一十改元、依災變也、)

〔一代要記後朱雀〕長久元年庚辰十一月十日改元、依內裏燒失也、擧周勘進之、

長元

萬壽元

〔扶桑略記 後一條 二十八〕治安四年甲子七月十三日、改爲萬壽元年、依甲子忌也、

〔百練抄 後一條 四〕萬壽四年(治安四七十三改元、依甲子也、)

○按ズルニ、如是院年代記、七月十六日改元、一代要記、同十四日改元、倶ニ誤ナラン、

〔革命勘文 下〕勘申甲子年被行例事

康保元年(子)六月十八日壬子、召天文博士講時原長列兵部少丞三善道統等、於藏人所被問革命當否事、是各依進勘文也、七月十日乙未、左大臣以下參入、有改元、依甲子也、

〔小右記〕萬壽元年六月八日甲子、今朝關白使大外記賴隆被示送云、嘉祥改元在六月、不宜、其外無例、來月朔多吉日、被問被行如何、報云、尤可然事也、來月改元多例、就中改昌泰爲延喜、例在七月、以此由加達畢、宰相來、又晩景來、別當來會、衞黑、左頭中將來仰云、改元事、來月朔可行者

〔元祕別錄 一〕治安四年七月十三日戊戌改元(萬壽)革令、爲政朝臣勘申、　今年革令事有沙汰、於詔書者、不可指革令當否之、唯甲子年依可愼有改元之由也、

經賴記、七月十三日戊戌、參御堂內等、有改元事、先有勅、上達部擇奏故宰相幷兩文章博士等勘進年號字、(爲政朝臣萬壽、義忠嘉保、)此等之間可依勅定、仰重可定申最吉云々、以萬壽爲吉者、仰依請、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

萬壽四(甲子七月十三日、依革令改元、)考證(詩經云、樂唯君子、邦家之光、樂唯君子、萬壽無疆、文章博士爲政勘進之、)

〔日本紀略 後一條 十四〕長元元年七月廿五日戊午、詔改元爲長元元年、依疫癘炎旱也、大赦天下、大辟以下罪皆赦除、但常赦所不免者不赦、又高年云々加賑給、

〔扶桑略記 後一條 二十八〕萬壽五年(長元々)戊辰七月廿五日、改爲長元元年、

〔左經記〕長元元年四月廿二日丁亥、參內、關白殿(○藤原賴通)於宮御方(○後一條后藤原威子)數剋被仰雜事之次、申云、去年頻有凶事之中、近來世間不閑之由云々、諸言年號不宜云々、猶被改元事如何、仰云、改元事、中

萬壽

〔一代要記後一條〕治安元年辛酉二月二日改元、依辛酉凶年也、

〔百練抄後一條四〕治安三年寛仁五二改元、依辛酉年也、

〔革命勘文上〕元應三年、大外記中原朝臣師緖勘例、治安元年例、

寛仁四年十一月十一日戊午、被立宇佐使恒例使也宣命、辭別云、今明年者波、公家重久可愼給支内仁、世諺仁、庚申辛酉乃年波、天下不靜須止、從古傳來禮利、因茲天愼御座須間仁、種々仁其徵在利、如此之事於攘退介牟事波、大菩薩乃廣御惠厚御助爾美乃可依奈利止云々、

同五年辛酉正月、仰紀傳明經陰陽曆道、令勘申今年辛酉革命當否之由、

二月二日丁未、左大臣以下諸卿參著仗座、被定申諸道勘申、今年辛酉、當革命哉否事、又被定改元年事、奏年號字之次、奏聞云、詔書先々載當革命之由、而今度諸道或申當之由、爲之如何、仰云、年號字可用治安、又諸道所申各異也、辛酉年、依可愼有改元之由、可載詔書也、〇下略

改元詔云、歲當辛酉、古來之風可愼云々、

〔元秘別錄一〕寛仁五年二月二日丁未改元、治安今年當革命否由、令諸道勘申者、仍辛酉年依可愼有改元之由、可載詔書云々、

經賴記、二月二日丁未、上達部定申云、爲。政。朝。臣。勘。申治安、予村上御時維時朝臣所擇進之乾綱、嘉保等之間、可隨勅定者、仰云、年號字可用治安、

〔元秘抄三〕進年號勘文人數多少例弘仁十五年以後自承和至延長、自天慶至天德、自安和至永延、其人不分明、永延三年爲永祚、其人不見、永祚二年輔正卿、外記勘文不見、長德四年又不見、自寛弘至治安、其人不見、但治。安。廣。業。撰。云。々。

〔日本紀略後一條十三〕萬壽元年七月十三日戊戌、詔、改元爲萬壽元年、依甲子革令之愼也、大赦天下、大辟以下罪咸赦除、犯八虐、常赦所不免者不赦、高年者賑給、

相府可令諸卿定申者、（左大臣、大納言道綱、中納言行成時光、參議正光、實成、通任、賴定、）勸申云、太初、政和、長和、諸卿申云、太初政和不宜、定詞不記子細、但此中長和頗宜、和字不快、然而左府命云、此定不可過今日、依無他年號可被用長和歟、左府云、寬仁吉年號、而無儒勸文、爲之如何、卿相云、假令雖吉年號文、以博士不勸申、不可定申云々、仍被奏長和、頗宜由、即被仰可用長和之由、以長和可爲年號之詔、可作之事、被仰大内記爲清朝臣、即進奏、

寬仁

〔日本紀略後一條十三〕寬仁元年四月廿三日辛卯、詔改元爲寬仁元年、

〔百練抄後一條四〕寬仁四年（長和六四廿三改元、依即位也、）

〔一代要記後一條〕寬仁元年丁巳四月廿三日改元、（廣業勘進之、）依御即位也、

〔改元部類記〕權記、長和六年四月廿三日辛酉、今日有改元定也、故文章博士宣義朝臣所進勘文不下、即見其勘文、載永貞、淳德、建德也、即位初年號、故者勘申申文可忌也、（中略）○式部大輔廣業朝臣擇申寬仁、（會稽記云、寬仁祐云々、）天受、地寧、但勘文不注年月、唯注署所、（中略）○相共議定、以寬仁可用之由申上了、（中略）○大臣被申云、諸卿所申可同寬仁也、但某申、件年號一條院御時、依有諱字所不被用也、今用之如何、（此事甚謬、非連續何可避乎、）辨參奏聞、還仰云、依一字不可避、可以寬仁爲年號、詔書令作、

〔元秘別錄一〕長和六年四月廿三日、改元、寬仁、代始、（中略）○經賴記、長和六年四月廿三日辛卯、有被定年號字、（上達部悉參上、）件字等、文章博士宣義、通直、式部大輔廣業朝臣等、先日所擇上也、是中以廣業所進之寬仁、通直所進寬德等可爲吉者、令頭右中辨令奏年號字等、勅云、以寬仁年號者、（又云、二十二日宣義本云々、）

治安

〔日本紀略後一條十三〕寬仁四年十月十三日庚寅、仰大法師仁統、勘申明年辛酉當革命否、

治安元年二月二日丁未、今日依辛酉歲改元治安、大辟以下罪無輕重、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又老人及僧尼、年百歲以下七十以上、給穀、

〔公卿補任後一條〕寬仁五年（辛酉）二月二日、改爲治安元、依當革命也、（○如是院年代記、四月二十二日改元、恐誤、）

○一條天皇諱字也、可避歟、

〔日本紀略 十二三條〕長和元年十二月廿五日戊子、詔改元爲長和元年、依天祚改也、

〔百錬抄 四三條〕長和五年(寛弘九十二廿五改元、依即位也、)

○按ズルニ、一代要記、此歳正月十三日改元、如是院年代記、七月廿日改元、並ニ誤ナリ、

〔改元部類〕詔、古之帝王、各開撫運者、何嘗不愼日寒心踰年記號、故(虫損)天行以理萬邦、稽月令以調四序、(○中略)方今驚玄冬欲暮之作、訪西漢建元之歟、其改寛弘九年爲長和元年、主者施行、

長和元年十二月廿五日、從五位下守中務少輔藤原朝臣惟光宣奉行、

大內記江爲淸作

〔元秘別錄 一〕寛弘九年十二月廿五日改元、(長和)代始、博士菅宣義、同江通直、

此勘草等無所見、但兩博士令進之由見小右記、大輔廣業、權大輔爲基、權中納言忠輔等不進、

〔改元部類〕權記、寛弘九年十二月廿五日戊子、頭中將下文章博士宣義通直等勘申年號一枚、太初、政和、長和等也、定申云、件字共非優、但勘申之中、長和頗宜歟、仰勘云、本文非便年號字、然而自太初政和等頗宜也、(○中略)

長和　禮記。。文云々、其文雖宜、非可用年號、然而今日必可被下詔書、不可過今年事以勘申不快返給、非事可成、仍此中愁以此字可用之由定申、

〔小右記〕寛弘九年十二月廿五日戊子、詣左相府、(○中略)左相府云、今日參內、可定申改元事、(○中略)相府云、年號兩博士(宣義通直)勘申也、　內々所見、故匡衡、大宮院御時所勘申之寛仁。。寛弘也、寛仁最吉、而仁。字有諱、仍不被用、彼勘文不能求出、件寛仁本文可勘申之由、度々仰兩儒、而申云、寛仁文書不得引出者、予云、漢。。書。。帝。。紀文云、寛仁愛人、意豁如也、相府態取遣帝紀、開見其文、公任同見、有所云々、相合氣、相府云、儒者不見及、太劣也者、臨黃昏、左府以下參內、(○中略)頭中將公信下給年號勘文、(兩儒連署)於左

○按ズルニ、皇年代略記十一日、如是院年代記二十三日、及ビ本書二十六日改元、皆誤ナリ、

〔元秘別錄〕一正曆六年二月廿二日(戊戌)改元、(長德)依疾疫天變、　小右記、二月廿三日、頭辨云、昨日被定改元事、長德、故江中納言維時勘申、村上御時勘文云々、朝綱、文時、俊生等勘文、同被下也、尙以當時之人可被勘申歟、藤相公示送云、長德似有俗忌、可謂長毒歟、又日本年號、德字唯天德也、彼年有疫癘、又有內裏燒亡者、

長保

〔日本紀略〕十一條長德三年二月十四日己酉、召匡衡、仰可擇進年號之由、

長保元年正月十三日丁卯、詔改長德五年爲長保元年、大赦天下、大辟以下咸赦除、常赦所不免者不赦、依天變炎旱災也、權少外記慶滋爲政作詔書、

〔扶桑略記〕二十七條長德五年(長保元)正月十三日、改爲長保元年、依去年赤班瘡疫也、

〔百練抄〕四條長保五年(長德五年正十三改元、依去年疫癘也、)

○按ズルニ、一代要記、七月十日改元トス、誤ナリ、

〔元秘別錄〕一長德五年正月十三日(丁卯)改元、(長保)依災異水旱也、(中略)　權記正月十三日丁卯、奏右大臣被參殿上、卽奏其由、仰云、改元詔可令作、可用匡衡朝臣所擇申長保字、

寛弘

〔日本紀略〕十一條寛弘元年七月廿日壬寅、改元寛弘、大赦天下、依災變也、

〔百練抄〕四條寛弘八年(長保六七十改元、依災變也、)

○按ズルニ、扶桑略記、帝王編年記、歷代皇紀、皇代記、皇年代略記、如是院年代記、年號便覽等、皆廿日ニ作ル、此書十日ニ作ルハ、恐ラクハ傳寫ノ誤ナラン、

〔皇年代略記〕一條寛弘八(元年甲辰七月廿日壬寅改元、依大變地震也、)

〔元秘別錄〕一長保六年七月廿日(壬寅)改元寛弘、依天變地妖也、匡衡勘申、

〔權記〕長保六年七月廿日壬寅、有陣定改元事也、寛弘云々、初以寛仁被定、而左大辨申云、仁字爲當時

天皇順天下而窅然、居物表而邈矣、未敢蔵ニ以事爲事、朕猥承聖緒、虔奉洪基、從履薄氷、既乘二載、宜率由舊章於往古、永創徽號於惟新、其改永觀三年爲寛和元年、主者施行、

永延

〔日本紀略一九條〕永延元年四月五日丁酉、改元爲永延元年、依天祚改也、

〔百練抄一四條〕永延二年（寛和三四九改元、依即位也、）

永祚

〔日本紀略一九條〕永祚元年八月八日丙辰、改元爲永祚元年、老人僧尼給穀、依攘彗星、天變、地震之災異也、大内記三善佐忠作詔、

〔百練抄一四條〕永祚元年（永延三八八改元、依彗星也、）

〔諸道勘文〕永延三年七月十三日、彗星見東方、經數夜、長五尺許、同年八月八日、改元永祚、依彗星也、

〔元秘抄三〕被用舊勘文例

永延三年改元、永祚先年中納言大江朝臣維時卿撰申云々、（件難陳後也、今度勘文三人不見、）

正暦

〔日本紀略一九條〕正暦元年十一月七日戊寅、詔、改永祚二年爲正暦元年、大赦天下、大辟已下赦除、常赦所不免者不赦、老人僧尼賜穀、依大風天變也、

〔百練抄一四條〕正暦五年（永祚二十一七改元、依去年大風也、）

〔本朝世紀〕正暦元年十一月七日戊寅、午後、大納言藤原朝光卿、權大納言同濟時卿、中納言源重光卿、參議藤原懷忠卿、著左仗座、被行改永祚二年十一月七日、爲正暦元年詔、幷臨時諸社奉幣之使事、是依大變頻所被行也、但有恩詔、

長德

〔日本紀略一十條〕長德元年二月廿二日戊戌、詔、改正暦六年爲長德元年、大赦天下、大辟以下赦除、又免調庸、依疾疫天變也、

〔扶桑略記二十七一條〕正暦六年乙未二月廿二日、改爲長德元年、是依疫死災也、

〔百練抄一四條〕長德四年（正暦六二二十六改元、依疫旱也、）

永觀

〔百練抄四圓融〕天元五年（貞元三四十五改元、依災變也、）

〔元秘別錄一〕貞元三年四月十五日、改元爲天元、依災變之上、太一陽五厄也、

〔改元部類〕不知記云、貞元三年十一月廿九日庚戌、左大臣來著仗座、被始行官奏事、其儀如恒、次左大臣大納言巳下著座、被行改元事、（改貞元三年爲天元元年、）

○按ズルニ、元亨釋書、和漢合符、四月十三日改元、扶桑略記一說、百練抄、愚管抄、帝王編年記、皇代記、歷代皇紀、元秘別錄、東寺長者輔任、四月十五日改元、一代要記、五月七日改元、如是院年代記、同十五日改元、皆誤ナリ、類聚符宣抄、長殿勾當職ヲ補スル宣旨ニ、貞元三年十一月廿八日ノ文アルニ據ルニ、其時未ダ改元セザルヲ知ルベシ、

〔日本紀略七圓融〕永觀元年四月十五日庚子、詔書、改元爲永觀元年、依去年炎旱幷皇居火災等也、大赦天下、大辟以下罪、咸赦除之、常赦所不免者不赦、又老人僧尼、給穀有差、

〔百練抄四圓融〕永觀二年（天元六四十五改元、依內裏燒亡也、）

〔園太曆〕依旱魃改元例、永觀元年、（天元六年四月十五日、旱魃、內裏火事、）

○按ズルニ、一代要記廿五日、皇年代略記二月十六日ニ作ル、

寬和

〔日本紀略八花山〕寬和元年四月廿七日辛丑、改永觀三年爲寬和元年、依天祚改也、大納言重信行之、

〔百練抄四花山〕寬和二年（永觀三四廿四改元、依卽位也、）

○按ズルニ、公卿補任、元亨釋書、和漢合符、此歲四月廿五日改元ト爲シ、歷代皇紀、同四日ト爲ス、共ニ誤ナリ、二十七日ヲ以テ正トスベシ、

〔小右記〕寬和元年四月廿七日辛丑、今日有改元、（寬和）皇太后宮大夫重信奏詔書草、御覽了返給、奏淸書、（以惟成令傳奏、）御畫日了返給、

〔改元部類〕外記記云、永觀三年四月廿七日辛丑、（中略）○詔、前燭後燭、帝跡迭照、或馳或驁、王道代興、太上

天延

〔日本紀略圓融六〕天祿四年十二月廿日庚子、今日改元天延、依天變地震也、有赦令、免調庸、老人賜穀、

〔扶桑略記圓融二十七〕天祿四年癸酉十二月廿日、改爲天延元年、是由天變也、

〔改元部類〕外記記云、天祿四年十二月廿日庚子、申剋内大臣著左仗座、行改元事、大内記伊輔參膝突座、奏可作詔書之由、卽以草入筥奉覽、上卿起陣座奉聞、淸書畢重令奏、上卿還著陣座、召中務少輔源朝臣俊、給淸書、俊朝臣給之退出、大臣起陣座參殿上、詔、君四海者、期波瀾之不揭、御萬邦者、愼煙塵之無警、車書同其軌文、機務通其故跡、然猶因祥瑞而替曆名、畏天變而改年號、因古之所行來、于今以敢被準的者也、朕謬受龍圖、恭嗣鴻緖、俗酌澆醨之流、化無冠冕之口常慮眇身之難任、縣(懸)慙黔首之失望、去春以來、天譴頻示、地震屢警、戒懼之懷且千、悚兢之心非一、將歷革故之象、以重體堯之規、克己惟新、與民更始之意也、其改天祿四年、爲天延元年、亦拂妖以德、施仁却邪、大赦天下、〇中略天延元年十二月廿日、

貞元

〔日本紀略圓融六〕貞元元年七月十三日戊寅、詔書、改天延四年爲貞元元年、依災幷地震也、有赦令、大内記紀伊輔作詔書、

〔扶桑略記圓融二十七〕天延四年七月十三日、改爲貞元元年、有災變也、

〔百鍊抄圓融四〕貞元二年(天延四年七月十三日改元、依去年七月一日日蝕皆虧也、)

〔皇年代略記圓融〕貞元二(元年丙子七月十三日改元、依天變地震、或依日蝕云々、又火事地震云々、)

〔改元部類〕不知記云、左大臣、中納言藤爲光卿參著右近陣座、(兼明)卽大臣召大内記紀朝臣伊輔、仰云、奉仕年號詔書者、伊輔奉作、召能遠給之、(改天延四年、爲貞元元年、)

天元

〔日本紀略圓融七〕戊寅天元元年十一月廿九日庚戌、詔、改元爲天元元年、依明年陽五之御愼也、大赦天下、老人賜穀有差、

〔扶桑略記圓融二十七〕貞元三年戊寅十一月廿九日、改爲天元元年、(一云、四月十五日改元、)

安和

〔元秘別錄　一〕應和四年七月十日癸未改元、爲康保、依甲子革令、
博士菅文時兼大學頭　同藤俊生兼式部少輔
兩人勘草不見、唯文章博士文時、俊生等擇申云々、大輔直幹、大納言在衡等不進、

〔日本紀略　五冷泉〕安和元年八月十五日丙寅、改元安和、大內記成忠作詔、

〔扶桑略記　二十六冷泉〕康保五年安和元戊辰八月十三日、改爲安和元年、

〔百鍊抄　四冷泉〕安和二年康保五八十三改元、依即位也、

天祿

〔日本紀略　六圓融〕天祿元年三月廿五日丙寅、左大臣以下參內、詔改元爲天祿元年、大赦天下、但犯八虐常赦所不免者不赦、又復天下今年半徭、老人僧尼給穀有差、○又見扶桑略記

〔百鍊抄　四圓融〕天祿三年安和三三廿五改元、依即位也、

〔改元部類〕外記日記云、安和三年三月廿五日丙寅、左大臣大納言已下著左仗座、此日被改元之事詔命已了、風曆新號但自昨日、外記奉左大臣仰、令誡候少內記大江昌言、而件昌言非成業者也、仍有事之口以右少辨藤朝臣雅材令草件詔書、以昌言令淸書、即奏覽之後、召中務少丞平祐擧、下給件詔書了、詔、魯史乖文、革故之風高扇、漢冊傳訓、建元之道長存、是用受龍圖繼鴻業之君、靜赤縣撫蒼生之主、莫不有時而開基口踰年而改號名矣、朕以弱齡忝膺大器、專賴元老之輔弼、虔奉宗廟之神靈、不懲不忘、所守先王之遺範、一言一事、所愼列聖之通規、方今鳳管律移、鶯花春暮、不易民聽於今日、恐墜皇猷於斯時、其改安和三年爲天祿元年、大赦天下、今日昧爽以前大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、又復天下今年半徭、老人及僧尼年百歲以上賜穀人四斛、九十以上三斛、八十已上二斛、七十以上一斛、庶使添恩波於四海之中、潤惠露於一天之中、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、天祿元年三月廿五日、

〔元秘別錄　一〕安和三年三月廿五日丙申、爲天祿詔赦賑給代始例希有也、

康保

臣所撰進也、

〔元秘抄三〕天德五年二月十六日庚辰改元應和、　博士菅文時兼右少辨　同藤俊生兼大內記　中納言維時　大輔直幹、權大輔敏通、大納言在衡等不進、彼三人勘草雖不見、唯中納言大江維時、文章博士等撰申云々、

〔日本紀略村上四〕康保元年七月十日癸未、改應和四年爲康保元年、依甲子愼也、有赦令、文章博士俊生撰申之字也、

〔扶桑略記村上二十六〕應和四年康保元七月十日壬午、改應和四年爲康保元年、依旱魃幷甲子歲改元也、

〇按ズルニ、壬午ハ癸未ニ作ルベシ、如是院年代記七月七日ト爲シ、一代要記、歷代皇紀、四月二十九日ト爲ス、俱ニ非ナリ、

〔皇年代略記村上〕康保四元年甲子、又旱魃也、七月十日改元、依革令也、自御所被仰下、但大江維時奉勘文內云々、

〔天曆御記〕應和四年七月十日癸未、令延光朝臣仰左大臣云、可令作改年號詔書、其事趣、朕以不德久君臨天下、而今歲天變地震、災變相頻、須施德改年號、以攘災殃、節可載、大赦天下、大辟以下罪、可從原免、但犯八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、常赦所不免者、非此限、又天下高年、及鰥寡孤獨、篤癃不能自存者、量賜物之由、又數術家申、依詩說今年當革命之運、而如王肇開元曆紀經之文、不可當革命、兩說不同、偏難稱革令、略可擧事旨、令給文章博士文時朝臣等、擇申年號字、又中納言大江朝臣、參議朝綱朝臣等、舊勘申年號字、又仰云、此度所擇申字、頗以不快、仍亦給舊勘文、須定其吉者、大臣令申云、令民部卿藤原朝臣重之申云、大江朝臣所上嘉保、康保、及俊生前年所上乾綱等之間、可隨仰、令仰可用康保字、申剋立弘徽殿、酉剋左大臣令延光朝臣奏、大內記成忠作上詔書、令仰事意未盡、仍令改案、入夜令奏詔書案、仰依案、暫大臣令奏詔書日、令下所司、　七日、左大臣令藏人奏文章博士文時俊生等勘申年號字文、令仰明後日可行之由、　八日、左大臣令濟時申、十日無殊忌、彼日參入、將行改元事、仰依請、

應和

進、在民身者同亦免除、若施恩之有效、何消禍之□□、遍告遐邇、俾知朕意、主者施行、天德元年十月廿七日、

〔日本紀略 四村上〕應和元年二月十六日庚辰、詔改天德五年爲應和元年、依皇居火災、幷辛酉革命之御愼也、大赦天下、

〔皇年代略記 村上〕應和三元年辛酉二月十六日改元、依於革命幷疾疫、内裏火事也、

〔革命勘文 上〕元應三年、大外記中原朝臣師緒、勘例云應和元年例、

天德四年庚申十二月十七日壬午、被行仁王會、咒願云、明年革命、時運相當、今年推期、天朔正半云々、○中略同廿六日庚寅、被行臨時仁王會、願文云、應和末至、疫癘猶繁、革命相當、彗星忽見云々、閏三月七日庚午、大納言源卿高明、以下參入、被立宇佐使宣命云、去年九月中爾不虚之外仁有失火之曆勘起、其後天變屢見衣、物怪頻示古登有留依天、又今年當革命之年登、陰陽道勘申勢利、此等乎聞食天、驚恐利御座云々、

〔元秘抄 四〕應和元年御記云、今年當革令、○令恐命宜改元、加之天德○火神之名也、尤可有其忌也、

〔扶桑略記 二十六村上〕天德應和元五年二月十六日、改天德五年爲應和元年、天德是火神號也、可有其忌、仍改元也、

〔公卿補任 村上〕天德五年辛酉二月十六日、改元爲應和元、依火災也、

〔元秘別錄 一〕御記、二月十六日、令延光朝臣仰左大臣、今日可行改元事、兼令行赦事否之由、大臣令申云、火災之後變異不止、須行赦事云々、令給文章博士等勘申年號、元中納言大江朝臣撰申年號字文、令定申件字之中無忌而有便稱謂之字、又令勘申可行赦免罪之程、大臣令奏文時進前年勘文案、外記勘文、恩詔例文、仰云、以應和可爲年號、又依延喜元年詔法行赦幷可賜物、

或抄、御抄日、陰陽寮勘申、天德是火神號也、可有忌云々、此度年號、右中辨兼大學頭文章博士菅。原。朝。

權大輔元方不進、博士文江重服、此兩人勘文草不見、但左大臣仰大內記大江朝綱、文章博士同維時
擇定年號字、文章博士三善文江、依重服不預吉事、

四月廿六日李部王記曰、詔書改元承平、先是左大臣仰大內記大江朝臣朝綱、文章博士同維時、擇
定號字、(文章博士三善文江朝臣依重服不預吉事云々、)是日左大臣命文章博士維時擇畢、先帝御時擇進、未畢功之內、御
書所御書維時、即擇舊作候彼所者之中、抄寫四人、覆勘二人奉仕、(維時說也、初先帝之御時、維時預其事、故大臣命、)

天慶

〔日本紀略朱雀二〕天慶元年五月廿二日戊辰、改元天慶元年、依厄運地震兵革之愼也、(○改元日、一代要記、帝王編年記、皇代記、皇年代略記、年號便覽、並同本書、)

〔扶桑略記朱雀二十五〕承平八年五月廿三(○三恐二誤)日、改爲天慶元年、(○歷代皇紀、同本書、公卿補任、)

〔元秘別錄一〕承平八年五月廿二日戊辰改元、天慶依御愼之上地震也、　五月廿二日貞御記、左大臣入
坐定恩赦事、卽參大內奉行改元詔書、朝綱維時共定申天慶、

天曆

〔日本紀略村上三〕天曆元年四月廿二日丁丑、詔改天慶十年爲天曆元年、依天祚改也、

〔扶桑略記村上二十五〕天慶十年丁未四月廿四日、改爲天曆元年、

〔元秘別錄一〕天慶十年四月廿二日丁丑改元、爲天曆元代始、　朝綱(天慶七任左中辨、天曆三轉左大辨、)

天德

〔日本紀略村上四〕天德元年十月廿七日庚辰、詔改天曆十一年爲天德元年、依水旱災也、有赦令、

〔九曆〕天德元年十月廿七日、改天曆爲天德事、

〔改元部類〕外記記云、天曆十一年十月廿七日庚辰、左大臣云々、著左仗座、今日有開元事、改天曆十一
年爲天德元年、詔溫故知新、羲皇演八卦而不朽、體元居正、魯聖憲五始而長傳、緬尋緗緗、亮采尙矣、朕
以不敏、忝守洪基、德未爲軍、雖慕黃軒之蹤、口既加鷲、難靜赤縣之風、爰理萬機、既經一紀、而比年水旱
不節、怪異荐臻、使我華夏之民、遭澆醨之代、方今求故實於漢日、授天鍵而開元、訪往事於當朝、依時變
而建號、是皆思易民聽、與物更始之義也、其改天曆十一年爲天德元年、(○中略)又天曆六年以往、調庸未

承平

頓死して、炎魔王宮にまいりて、門のまへにて𛀁ばしみる程に、長一丈餘なる人の、身には束帶うるはしくして、手に金の文夾に文をさしはさみて、さしあげてうたへ申を、耳をそばだて、承りしかば、延喜の御門の、しわざともやすからずと、さま〴〵に詞をつくして、うたへうれへしに、菅丞相とはさとりぬ、其時、緋や紫まとひたる冥官三十餘人、ならび居たりしが、第二座に居たる人、少しあざ笑ひて、延喜の帝こそ頗荒凉なれ、若改元もあらばいかゞと申されし也と、奏申て還り給にき、御門是をきこしめして、おそれ思食事かぎりなく、さて四月廿一日、菅丞相をば、如元右大臣として、一階を加へて正二位をも贈り給ける、やがて昌泰四年正月廿五日の宣旨をやきすてられにけり、五月廿五日、延喜の年號を改て、延長となされし事は、このゆへなり、○又見北野緣起、太平記等、

〔日本紀略朱雀二〕承平元年四月廿六日甲寅、改延長九年爲承平元年、

〔一代要記朱雀〕承平元年辛卯五月廿二日改元、依御卽位也、○愚管抄四月十六日改元、本書五月廿二日改元並誤、

〔改元部類〕外記日記云、延長九年四月廿六日甲寅、左大臣幷諸卿、就左仗座、召中務大丞源泉、給改延長九年四月廿六日、爲承平元年詔書、

〔改元部類〕不知記云、延長九年四月廿六日甲寅、物忌閉門、此日有詔、改年號云々、其詔云、古之帝王、北辰正位、南面嚮明者、何嘗不變徽章而叶天心、改正朔而易民聽、故披宿霧於連山、革故之風不墜、酌流例於魯史、體元之訓已傳、前事不忘、後代之師也、朕以弱齡、嗣登天位、道德未洽於九縣、寒暑猶乖於四時、懍乎若朽索馭六馬、夫周誦踵武不丕○不恐誤開姬發之晨、漢弗守文、已建始元之號、非開鳳曆、何纂鴻規、方今玉琯移灰、珠胎換月、踰年號令、今則其時、宜迪仍舊之蹤、以宣鼎新之化、可改延長九年爲承平元年、主者施行、

〔元秘別錄一〕延長九年四月廿六日甲寅改元、承平代始、　文章博士江維時、大內記同朝綱、式部大輔闕、

延長

天慤長寒、萬物凋、晚多催立早春朝、淺深何水氷猶結、高卑無山雪不消、根拔樹應花思斷、骨傷魚豈浪情搖、偏憑延喜開新曆、東北廻頭拜斗杓、

〔元秘別錄一〕昌泰四年七月十五日改元、延喜依辛酉老人星也、　或書云、禹錫玄珪文云延喜、

〔日本紀略醍醐一〕延長元年閏四月十一日乙酉、詔改延喜廿三年爲延長元年、依水潦疾疫也、有赦令、

〔扶桑略記醍醐二十四〕延長元延喜廿三年閏四月十一日、改延喜廿三年爲延長元年、天下疱疫、多以夭亡矣、

〔遠水見聞私記二〕閏月改元之例

醍醐天皇延喜廿三年閏四月十一日乙酉、爲延長元年、此一例也、

〔元秘別錄一〕延喜廿三年閏四月十一日乙酉改元、延長　西宮記云、延長年號博士所進字不快、有勅、以文選白雉詩文被改、詩云彰皇德兮侔周成、永延長兮膺天慶、

〔一代要記醍醐〕延長元年癸未閏四月十一日改元、依旱潦疾疫也、或云公忠辨夢想也、

〔古事談一王道后宮〕公忠辨頓滅、歷三ヶ日蘇生、告家中之人、我參內、家人不信、以爲狂言、然而依事甚懇切、被相扶參內、參自瀧口戶、申事之由、延喜賢主、驚躁令謁給、令奏言、初頓滅之剋、不覺悟、到冥官所、門前有一人、長一丈餘、衣紫袍、捧金書狀、訴云、延喜聖主所爲、尤不安者、堂上有紆朱紫三十餘輩、其中第二座者咲云、延喜主頗以荒凉也、若有改元歟云々、事了如夢蘇生云々、因之忽改元延長云云、

〔荏柄天神緣起〕小松天皇の御孫、延喜の御門にはいとこにて、右大辨公忠と申人おわしけり、延喜二十三年卯月の頃頓死して、兩三日どいふによみがへり給ひて、家の人々につげていひき、我を具して內裏へ參れと、きく人々物にくるふと申あひけり、されども其詞ねむごろにて、あながちに申ければ、子息信時、信孝、二人にたすけひかれて、內裏へまいりて、このよしを奏申給ければ、延喜の御門おどろきさわぎて、出向給ひしに、奏申給やうこそおそろしくは侍れ、公忠

昌泰

○按ズルニ、歷代皇紀廿四日ニ作リ、公卿補任廿六日ニ作リ、愚管抄、帝王編年紀、皇代記、皇年代略記、年號便覽、廿七日ニ作ル、

〔日本紀略 醍醐一〕昌泰元年四月十六日乙卯、詔改寬平十年、爲昌泰元年、依天祚改也、

〔扶桑略記 醍醐二十三〕寬平十年（昌泰元）戊午八月十六日、改爲昌泰元年、

〔元亨釋書 二十四 資治表〕昌泰皇帝　元年春正月、夏四月乙丑改元昌泰、〇中略　昌泰元年戊午、〇中略　四月改元、二十六也、

○按ズルニ、日本紀略、皇年代略記、愚管抄等、十六日ニ作ル、然レドモ菅家文草四月廿日、西宮記四月廿三日ノ文、未ダ改元ナキモノヽ如シ、

延喜

〔日本紀略 醍醐一〕昌泰三年十月廿一日乙亥、文章博士三善朝臣清行、上明年辛酉革命議、

〔革命勘文 上〕延喜元年辛酉　革命沙汰始此時、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜元年七月十五日、改昌泰四年爲延喜元年、　八月十九日戊戌、被告申改元之由於諸社、　九月二十六日甲戌、被告改元之由於山陵、

〔扶桑略記 醍醐二十三 裏書〕昌泰四年（延喜元）七月十五日、改爲延喜元年、依逆臣幷辛酉革命也、　八月廿九日戊申、依逆臣、辛酉革命、老人星之事、改元之由被申諸社、諸國疫癘群盜事、被截辭別、

〔革命勘文 上〕正治二年大外記良業勘例云、昌泰四年七月十五日甲子、有改元事、改昌泰四年爲延喜元年、詔書、去歲之秋、老人垂壽昌之耀、今年之曆、辛酉呈革命之符云々、

〔菅家後集〕讀開元之詔書　五言

開元黃紙詔、延喜及蒼生、一爲辛酉歲、一爲老人星、大辟已下罪、蕩滌天下淸、省傜優壯力、賜物恤頹齡、泛々恩德海、猶有鯨鯢橫、此魚何在此、人道汝新名、呑舟非我口、吐浪非我聲、哀哉放逐者、蹉跎喪精靈、

〔菅家後集〕元年立春　十二月十九日

徵、亦夫因瑞建元、非無故實、嗣位紀號、既有前聞、況今柘燧改煙、葭灰正氣、風物和暖、卉木繁滋、宜逑往辰以開寶運、其改貞觀十九年、爲元慶元年、○中略六月廿八日丁酉、遣使諸山陵、告以改年號也、

〔三代實錄 陽成 三十一〕元慶元年七月十九日戊午、遣從五位下守刑部大輔弘道王於伊勢太神宮、幷分使賀茂御祖、別雷、松尾、平野、大原野神社奉幣、告以改年號、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏松尾大神乃廣前爾申賜倍止申久、食國之法止之天、卽位之後爾波必改年號、而留備後國貢白鹿、但馬國獻白雉、尾張國言木連理利、如是嘉瑞波、是薄德乃令感致倍岐物爾毛非須、掛畏岐皇大神乃慈賜比示賜倍留物爾奈利止、爲奈毛、貴喜比受賜利天、御世乃名乎改天爲元慶元年留事乎、左京大夫從四位上忠範王乎差使天奉出須、須早申奉出之、而乎有事妨天、暫間延怠利、掛畏皇太神、此狀乎平聞食天、天皇朝廷寶位無動久、常磐堅磐爾守幸倍賜倍止申賜止申、

〔帝王編年記 陽成 十四〕元慶八年 貞觀十九年四月十六日改元、依卽位奇瑞物也、

〔皇年代略記 陽成〕元慶八 元年丁酉正月乙亥、但馬獻白雉、四月十六日改元、

〔一代要記 陽成〕元慶元年丁酉四月廿○他書作十六日、改元、依御卽位也、

〔皇代記 陽成〕元慶八年 貞觀十九年○四月十六日改元、依瑞物幷卽位也、

仁和

〔三代實錄 光孝 四十七〕仁和元年二月廿一日丁未、是日詔曰、自古撫鴻圖、臨璿籙者、咸憲三徵以敷政、肅五始而成規、想彼體元居正之爲、豈啻革故鼎新之務、朕謬以徵孱、欑玆重光、懍々乎如乘奔馬無轡也、日愼一日、忽復二年、龍星再躔、鳳律頻變、若歷年襲前號、恐謂我忘舊章、其改元慶九年爲仁和元年、○下略

〔帝王編年記 光孝 十四〕仁和四年 元慶九年一月廿一日改元、依卽位也、

〔一代要記 光孝〕仁和元年乙巳二月廿六日改元、依御卽位也、

寛平

〔日本紀略 宇多〕寛平元年四月廿七日戊子、詔改元爲寛平元年、天祚之後及三年、改元之例、始于此時、

〔一代要記 宇多〕寛平元年己酉四月廿七日改元、依御卽位也、

天安

〔帝王編年記 十三文德〕齊衡三年 仁壽四年十一月廿九日改元、依有美濃國醴泉、 元年甲戌十一月廿九日改元 改仁壽四年爲齊衡元年

〔一代要記 文德〕齊衡元年甲戌十一月二十九日改元、依去 去下恐脫年字 疱瘡也、

〔文德實錄 九〕天安元年二月己丑 〇二十一日 是日改元爲天安元年、緣美作常陸二國獻白鹿連理之瑞、 〇中略 詔曰、 〇中略 去歲冬中、景貺荐委、美作國貢白鹿一頭、色均霜雪、自絕毛群、性是馴良、足稱仁獸、不因仙來在彤庭、重彼遐齡、馴于靈囿、常陸國上言、生連理樹二也、一郡山裏兩處森然、分根合幹、異體同枝、或相連其閒一丈餘尺、或交柯之上、更挺好姿、斯皆書緹史而可傳、稽瑞圖而有處、朕之菲虛、非可能致、唯由宗社垂祐、股肱叶贊、今欲鍾此休徵、不享獨美、施之惠澤徧及萬方、 〇中略 且夫隨時紀號、邦國之恆規、因鍾建元、古今之通典、可改齊衡四年爲天安元年、

〔皇年代略記 文德〕天安二 元年丁丑二月廿一日改元、常陸美濃兩國獻連理白鹿爲瑞、

貞觀

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年四月十五日庚子、是日詔曰、朕聞自古體元居正者、雖運殊根英、事別沿革、而改正朔變徵章、以易民之視聽也、故能皇統不測、萬葉酌而不厭、帝系無涯、千載沿布而無昧、方今春忠已達、夏德爲余、衆鳥調翼而始飛、百花成實而新結、見候物之如此、知開元之所宜、其改天安三年、以爲貞觀元年、將使皇猷正一、被群臣以用全、寶曆延長、均兩儀以年遠、

〔皇代記 清和〕貞觀十八年 天安三年四月十五日改元、依即位也、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

清和　貞觀十八　己卯四月十五日庚子、或十六日辛丑、　考證 易繫辭云、天地之道、貞觀者也、

元慶

〔三代實錄 三十一陽成〕元慶元年四月十六日丁亥、詔曰、朕聞善政之報、靈貺不違、洪化之符、神休必至、朕以寡薄、辱奉丕基、德未動天、惠非感物、而去正月即位之日、但馬國獲白雉一、二月十四日、尾張國言、木連理、閏二月廿一日、備後國貢白鹿一、或體誤曉月、羽毛映於丹墀、或幹凌寒霜、枝柯被於青郭、皆應符改色、感祥變容、豈人事乎、蓋天意也、當是上玄錫祉、下民蒙恩、今若抑而不宣、謂朕孱昧、思與海內同此休

しろにたてまつりて、御はらひなど、なしそめ給へり、六月十日餘り六日なん、吉日なるよし、御うらの人々、かうがへ申せばとて、此日おこなはれ、年號をもあらためて、嘉祥とものせしかば、ながく此事嘉祥と、ねんがうによりてさだめられしと、當社縣主、賀茂の道幹が日記に侍る、○下略

仁壽

〔文德實錄 三〕仁壽元年四月庚午、○二十八日 改元仁壽、詔曰、○中略 去年卽位之初、頻得白龜及甘露之瑞、雖朕之不德、推而不居、而聽於公卿、告之宗廟、方今純陽布德、萬物成文、宜順靈應於往時、變年紀於今日、孫氏瑞應圖云、甘露降於草木、食之令人壽、其改嘉祥四年、爲仁壽元年、

〔皇代記 文德〕仁壽三年 嘉祥四年四月廿八日庚午改元、依卽位也、

〔皇年代略記 文德〕仁壽三 元年辛未四月廿八日改元、依代始也、又云、顯得白龜及甘露之瑞、

齊衡

〔文德實錄 六〕齊衡元年十一月辛亥、○三十日 詔曰、上稽帝載、下酌皇流、莫不鐘靈貺以開元、劇神符以改號者、近來石見國上醴泉、○○味寫潤醴、狀疑芳醇、雖朕之不德讓而弗怡、然天意若曰、使兆人賴之、亦是宗社降靈、俊乂在官之攸致、豈其爲身、而有顯辭也、有司宜擇吉日告宗社、又改仁壽四年爲齊衡元年、其瑞出地主美濃郡大領檜前淡海麻呂叙正六位上、賜物准例、復郡內當年徭、伊勢大神宮禰宜、大物忌、內人、諸社禰宜祝、及內外文武官把笏者、賜爵一級、但正六位上者、廻授一子、如無子者、宜量賜物、五位已上子孫年廿已上者、除當蔭之階賜天下老人百歲以上穀三斛、九十已上二斛、八十已上一斛、欲使曠代禎符、及萬邦以共慶、隨時德政、逐五帝而齊衡、　十二月甲寅、遣使者向嵯峨山陵、告以改元之由、策文曰、天皇恐美恐美毛掛畏支山陵爾申賜倍止奏久、維仁壽四年九月廿七日爾、石見國醴泉瑞獻禮利、國書爾據勘爾大瑞合利、如此支希世爾嘉瑞波是薄德乃可感致支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比示賜倍留物奈利止爲天奈毛、貴喜比受賜天御世乃名乎改、齊衡元年止爲留此狀乎申賜止、中納言正三位兼行左兵衛督源朝臣定、從四位下安藝守清原眞人瀧雄等乎差使天奉出須、但理須波先川申賜天後爾施行倍伎物奈利、然乎有殊障天一二日之間延怠留事乎奈毛、恐畏利御坐須止、恐美毛申賜久止申、

定年號事 勘文不載引文而撰申例、又不及仗議例、
天長
右依宣旨定如件
文章博士都宿禰腹赤　右近衞權少將南淵朝臣弘貞　彈正大弼菅原朝臣清公

〔和事始 附錄〕國朝年號譜
淳和　天長十 甲辰正月五日乙卯　考證 (中略) 老子經曰、天長地久、

承和

〔續日本後紀 仁明三〕承和元年正月甲寅 ○三日 是日改年號、下詔曰、三微迭代、必制之以嘉名、五運因循、終顯之以徽號、是知正始重本之典、千帝同符、履端建號之規、百王合契、朕忝膺明命、纘守鴻基、分至推遷、節候亟換、方今攝提發歲、天紀更始之辰、大蔟報春、品彙惟新之日、宜有革創以光舊章、宜改天長十一年爲承和元年、

〔一代要記 仁明〕承和元年甲寅六月十三日 正月三日イ 改元、依御即位也、
○按ズルニ、此書六月十三日ニ作ルハ、恐ク正月三日ノ誤ナラン、

〔皇代記 仁明〕承和十四年 天長十一年正月三日改元、依即位也、

嘉祥

〔續日本後紀 仁明十八〕嘉祥元年六月庚子 ○十三日 改承和十五年爲嘉祥元年、下詔曰、○中略 近有太宰府獻白龜。所管豐之後國大分郡擬少領膳伴公家吉、於寒川石上得之、○中略 宜播茲雷雨、與天下惟新、其改承和十五年爲嘉祥元年、○中略 是日、大臣就八省院奉幣帛於伊勢太神宮、及賀茂上下松尾社、並告依瑞改元兼祈防水旱也、

〔帝王編年紀 仁明十三〕嘉祥三年 承和十五年六月十三日改元、依豐後國獻白龜也、

〔本朝歲事記 夏〕六月十六日、此日かじやうといふ事あり、歌林四季物語にいはく、かじやうは嘉祥とかきて、仁明のすべらぎ、承和の比ほひに、御代のさか行ことお祈らせおわして、賀茂上の御屋

違孝子之心也、稽之舊典、可謂失也、

〔一代要記 平城〕大同元年丙戌五月十八日改元、依御即位也、

〔皇代記 平城〕大同四年延暦廿五年五月十八日改元、依即位也、

〔和事始 附錄〕國朝年號譜

平城　大同四丙戌五月十八日辛巳　考證禮記、禮運字、

〔禮記 禮運 四〕大道之行也、天下爲公、選賢與能、講信修睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壯有所用、幼有所長、矜寡孤獨癈疾者皆有所養、男有分、女有歸、貨惡其棄於地也、不必藏於己、力惡其不出於身也、不必爲己、是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作、故外戶而不閉、是謂大同、

弘仁

〔日本後紀 嵯峨 二十〕弘仁元年九月朔丙辰、〇十九日 詔曰、飛鳥以前、未有年號之目、難波御宇、〇孝德 始顯大化之稱、爾來因循、歷世至今是用、皇王開國承家、莫不登極稱元、隨時施號也、朕以眇虛、嗣守丕業、照臨四海、于茲二周、雖日月淹除、而未施新號、方今時屬豐稔、人頌有年、實賴宗廟之靈、社稷之祐、非朕之寡德所能可致也、念與天下、嘉斯休祥、宜改大同五年爲弘仁元年、布告遐邇、知朕意焉、

〔一代要記 嵯峨〕弘仁元年庚寅九月二十七日改元、依即位也、

〇按ズルニ、此書二十七日ニ作ルハ誤ナリ、日本後紀ノ九月丙辰ヲ以テ正トスベシ、丙辰ハ十九日ナリ、

〔皇代記 嵯峨〕弘仁十四年大同五年九月十九日改元、依即位也、

天長

〔日本紀略 淳和〕天長元年正月乙卯、〇五日 詔曰云々、可改弘仁十五年爲天長元年、

〔一代要記 淳和〕天長元年甲辰正月五日改元、依御即位也、〇帝王編年記、五月五日改元、恐誤、

〔元秘別錄 一〕嵯峨 弘仁十五年正月五日改元、天長代始、　三人 博士都腹赤、左少將南淵弘貞、彈正大弼菅清公三人連署撰申

宮乃鎭坐須、卽宇治五十鈴河上乃宇治山之峯頂(仁悉利遲)、卽禰宜内人等注具狀、申於宮司、卽宮司水通錄子細、言上神祇官、隨卽官奏、仍神祇官陰陽寮等勘申云、奉爲公家、又爲天下、甚最嘉之瑞相也者、卽依彼嘉瑞之雲、可被改元之由、被下宣旨、以同年八月廿日、改神護景雲元年、(丁未)件嘉雲之由、被祈申於二所大神宮、勅使中納言從三位藤原卿令奉二宮種々神寶等給(具不記)又禰宜等敍正五位下畢、

寶龜

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十月己丑朔、卽天皇位大極殿、改元寶龜、詔曰、(○中略)辭別詔、今年八月五日、肥後國葦北郡人日奉部廣主賣獻白龜、又同月十七日、同國益城郡人山稻主獻白龜、此則並合大瑞、故天地賜大瑞者受被賜、獻受被賜可貴物(爾)在、是以改神護景雲四年爲寶龜元年、(○中略)又今年天下田租免賜(久止)宣、天皇勅衆聞食宣、

〔一代要記光仁〕寶龜元年庚戌十一月十一日改元、依卽位也、

天應

〔如是院年代記〕(庚戌)第四十九代光仁、寶龜元、(十月一日改元、(中略)庚戌十月卽位、十一月一日改元、因肥後國獻白龜也、)

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年正月辛酉朔、詔曰、(○中略)比有司奏、伊勢齋宮所見美雲、正合大瑞、彼神宮者國家所鎭、自天應之、吉無不利、抑是朕之不德、非獨臻玆、方知凡百之寮、相諧攸感、今者元正告曆、吉日初開、宜對良辰共悅嘉貺、可大赦天下、改元曰天應、(○下略)

〔皇年代略記光仁〕天應一年(寶龜十二年正月朔日改元、伊勢神宮見美雲、仍爲瑞改、)

延曆

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年八月己巳詔曰、(○中略)朕以寡德纂承洪基、託于王公之上、君臨寰宇、既經歲月、未施新號、今者宗社降靈、幽顯介福、年穀豐稔、徵祥仍臻、思與萬國嘉此休祚、宜改天應二年曰延曆元年、

〔皇代記桓武〕延曆廿四年(天應二年八月十九日改元、依卽位也、)

大同

〔日本後紀十四平城〕大同元年五月辛巳、卽位於大極殿、(○中略)改元大同、非禮也、國君卽位、踰年而後改元者、緣臣子之心不忍一年而有二君也、今未踰年而改元、分先帝之殘年、成當身之嘉號、失愼終无改之義、

天平神護

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年正月己亥、改元天平神護、勅曰、朕以眇身、忝受寶作、無聞德化、屢見姧回、又疫癘荐臻、頃年不稔、傷物失所、如納深隍、其賊臣仲麻呂、外戚近臣、先朝所用、得堪委寄、更不猜疑、何期包藏禍逆之意、而鴆毒潜行於天下、犯怒神人之心、而怨氣感動於上玄、幸頼神靈護國、風雨助軍、不盈旬日、咸伏誅戮、今元惡已除、同歸遷善、洗滌舊穢、與物更新、宜改年號、以天平寶字九年、爲天平神護元年、其諸國神祝、宜各加位一階、其從去九月十一日至十八日、職事及諸司番上、六位已下供事者、宜亦加一階、唯正六位上依例賜物、其京中年七十已上者、賜階一級、布告遐邇、知朕意焉、

〔皇代記稱德〕天平神護二年寶字九年正月七日改元、依即位也、

〔一代要記稱德〕天平神護元年乙巳、天皇即位、後同十七日正月七日イ己亥改元、以天神地祇力、誅逆臣仲麻呂輩故也、

神護景雲

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年八月癸巳、○十六日改元神護景雲、詔曰、○中略今年乃六月十六日申時爾、東南之角爾當天、甚奇久異爾麗岐雲、七色相交天立登天在、此乎朕自毛見行之、又侍諸人等毛共見天、怪備喜備都都在間仁、伊勢國守從五位下阿部朝臣東人等我奏久、六月十七日爾、度會郡乃等由氣乃宮乃上仁當天、五色瑞雲起覆天在、依此天彼形乎書寫以進止奏利、復陰陽寮毛七月十五日爾、西北角爾美異雲立天在、同月二十三日仁東南角仁有雲、本朱末黃、稍具五色止奏利、如是久奇異雲乃顯在流所由乎令勘爾、式部省等我奏久、瑞書爾細勘爾、是即景雲爾在、實合大瑞止奏世利、○中略是豈敢朕德伊、天地乃御心乎令感動末都倍岐流事波無止毛奈念行須、然此方大御神宮上爾示顯給故、尙是方大神乃慈備示給幣流物奈利、中略○示顯賜幣流瑞乃末爾末爾、年號波改賜布、是以改天平神護三年、爲神護景雲元年止、詔布天皇我御命乎、諸聞食止宣、

〔一代要記稱德〕神護景雲元年丁未八月十七日改元、八月乙酉、參河國奏云、慶雲見、因改元、

〔大神宮諸雜事記一高野〕天平神護丁未三年七月七日、自午時迄于未二點仁、五色雲立天、天照坐皇太神

ド、古文書ニカヽル例多シ、此文書實錄ヨリヤ、後ノモノト見ユ、近江國蒲生郡繖山桑實寺、舊名號藥師寺所藏古文書ノ末ニ、天平成宝元年閏五月廿日、奉勅、正一位左大臣大宰帥橘宿禰諸兄、右大臣從二位藤原朝臣豐成、按、續紀天平勝寶元年トアゲテ、當年ノ下ニ、改天平廿一年四月甲午朔丁未、爲天平感寶元年トアリテ、亦ソノ秋七月甲午ノ下ニ、是日改感寶天平ヲ省キタルナリ元年爲勝寶天平ヲ省キタルナリ元年トアリ、紀ヲ選バル、トキ、コノ感寶ヲ、編年ノ紀號ヲ省レタルモノナリ、○下略

天平勝寶

〔續日本紀孝謙十七〕天平感寶元年秋七月甲午、皇太子受禪、卽位於大極殿、詔曰、○中略是日改感寶元年、爲勝寶元年、

〔續日本紀孝謙十九〕天平勝寶七年正月甲子、勅、爲有所思、宜改天平勝寶七年、爲天平勝寶七歲、

〔皇代記孝謙〕天平勝寶八年天平感寶元年七月二日改元、依卽位也、

〔神皇正統記孝謙〕聖武の皇子安積親王、世をはやくして後男子ましまさず、依て此皇女立給ひき、己丑天平勝寶元のとし卽位改元、平城宮にまします、

〔逸號年表補考〕勝寶ヲ勝竅トモカケル文書アリ、竅ハ寶ノ異ナルベシ、竹苞云、石山寺ノ古文書ニモ、寶ノ字ヲ竅ト書タルモノアリト云ヘリトゾ、相符ヘリ、追考、尊意僧正傳古寫本ニモ、寶ヲ、竅トカキタル所アマタアリ、

天平寶字

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年三月戊辰、天皇寢殿承塵之裏、天下大平四字自生焉、庚午、勅召親王及群臣、令見瑞字、八月己丑、駿河國益頭郡人金刺舍人麿、自獻蠶産成字、甲午、勅曰、○中略去三月二十日、皇天賜我以天下太平四字、○中略爰得駿河國益頭郡人金刺舍人麻呂自獻蠶兒成字、其文云、五月八日、開下帝釋標、知天皇命百年、因國內頂戴茲祥、踊躍歡喜、不知進退、悚息交懷、○中略宜改天平勝寶九歲八月十八日、以爲天平寶字元年、

天平

〔淸白士集十三元號略二〕白龜、日本聖武天皇(唐開元中立、在位二十餘年、傳位稱太上皇、改元二、宋史作寶龜、恐誤、今從東鑑、蓋其後光仁天皇改元寶龜也、)

〔續日本紀十聖武〕天平元年六月己卯(二十日)、左京職獻龜、長五寸三分、闊四寸五分、其背有文云、天王貴平知百年、八月癸亥(五日)、天皇御大極殿、詔曰、(中略)京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等伊負圖龜一頭獻止奏賜不留所聞行驚賜恠賜所見行歡賜嘉賜氏、(中略)是以天地之神乃顯奉留貴瑞以而、御世年號改賜換賜、是以改神龜六年、爲天平元年、而大赦天下、百官主典已上人等、冠位一階上賜事乎始、一二乃慶命惠賜行賜止詔天皇命乎衆聞食宣、

天平感寶

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年(勝、一本作感、恐是、)四月甲午朔、天皇幸東大寺、(中略)從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、(中略)陸奧國小田郡爾金出在止奏氐進禮利、(中略)御代年號爾字加賜久止宣、天皇大命衆聞食宣、丁未(十四日)改天平二十一年、爲天平感寶元年、七月甲午、皇太子(孝謙)受禪、卽位於大極殿、(中略)是日改感寶元年、爲勝寶元年、

〔扶桑略記抜萃聖武〕廿一年(天平感寶元)四月十八日、爲天平感寶元年、是自去正月黄金始出也、

〔水鏡中聖武〕天平廿一年正月に、陸奧よりこがね九百兩をたてまつりき、日本國に金(こがね)いでたる事これよりはじまれりき、これによりて四月十八日に、天平感寶元年とかへられにき、されども此年號は、やがて又かはりにしかば、年代記などにはいり侍らざるなり、

〔皇代記聖武〕感寶三箇月(天平廿一年四月十四日改、去三月陸奧獻黄金、仍爲瑞改、)

〔皇年代略記聖武〕天平感寶一(元年己丑四月十四日改元、去三月陸奧國獻黄金、)

〔如是院年代記〕第四十六代孝謙、天平勝寶元(四月二日改元、(中略)奥州貢金、故改感寶、後改勝寶、)

〔茅窻漫錄上〕和漢異年號

天平感寶(淸輔奥儀抄云、此號年中改元、不載于年代曆、此號在萬葉集、按ずるに、是は聖武帝天平二十一年、陸奥國始貢黄金時の事なり、)

〔逸號年表補考〕東寺所藏弘福寺撿收古文書ニ減寶元年トアリ、減トアル、氵篇ハ誤ナルベケレ

初、天表嘉瑞、天地貺施、不可不酬、其改和銅八年、爲靈龜元年、

〔帝王編年記 十元正〕靈龜二年 和銅八年九月三日改元、左京人獻靈龜、仍爲瑞、此日天皇即位、

〔如是院年代記〕第四十四代元正、靈龜元、左京人高田久比麻呂獻白龜、因改元曰靈龜、

〔一代要記 元正〕靈龜元年乙卯、左京人高田久比麻呂、進靈龜、仍和銅八年九月三日天皇即位日、改元爲名、

養老

〔續日本紀 七元正〕養老元年十一月癸丑、〇十七日天皇臨軒詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、〇中略寔維美泉、即合大瑞、朕雖庸虚、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年、爲養老元年、

〔如是院年代記〕第四十四代元正 丁巳養老元 十一月十一日改元、美濃國山中醴泉出、飲之者白髮變黑、能明人眼、

〇按ズルニ、改元ノ日ヲ一代要記ニモ亦十一月十一日ニ作リ、水鏡ニハ十一月七日ニ作ル、何レモ誤リニシテ、十一月十七日ヲ以テ正トス、

神龜

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年二月甲午、〇四日受禪、即位於大極殿、大赦天下、詔曰、〇中略大八島國所知倭根子天皇乃〇元正大命爾坐詔久、〇中略去年九月天地貺大瑞物顯來理、又四方食國乃年實豐爾牟倶佐加爾得在止見賜而、隨神母所念行爾、珍〇珍字、原作尓、依續日本紀考證或說改、斯久母皇朕賀御世當顯見留物爾者不在、今將嗣坐御世名乎記而應來顯來留物爾在眞志止、所念坐而、今神龜二字御世乃年名止定氏、改養老八年爲神龜元年而、天日嗣高御座食國天下之業乎、吾子美麻斯王爾〇聖武天皇授賜讓賜止詔天皇大命〇乎中略衆聞食宣、

〔帝王編年記 十一聖武〕神龜五年 養老八年二月四日改元、左京人於白髮池得白龜〇獻之、仍爲瑞、此日即位、元年甲子、

〔皇代記 聖武〕神龜五年 養老八年二月四日改元、左京人紀家稗、於大和國白髮池得白龜獻之、仍爲瑞改、

〔唐書 二百二十東夷〕日本古倭奴也、〇中略文武死、子阿用立、死、子聖武立、改元曰白龜、

〔逸號年表補考〕新井君美主ノ、某氏ヘ贈ラレタル手簡ニ云、鎖要紀年に、本邦年號之由被仰下候、奇代の幸と存候、信友云、上件ノ古碑ノ、永昌年號ノコトナサシ玉ヘル文ナリ、先其日本の年號御寫奉願候云々、朝鮮之書ニ、此方にて知れぬ年號の內、三四はこなたの神社佛寺ノ古緣起、幷系圖憶に出候もの有之候、彼永昌元年もあなたへか、はり不申、こなたの年號、たま〳〵相合候事と被存候云々、

〔古京遺文〕那須直韋提碑

蒙齋○藤井貞幹曰、永昌元年當作朱鳥四年、蓋係洗者改作、今審觀之、字樣不類、其說似可信、朱鳥四年五年、六年、七年、見萬葉集、朱鳥七年、見靈異記、不得據史斷言朱鳥之號僅一年也、飛鳥淨御原宮、天武天皇所營、帝崩持統天皇偶御是宮、至八年朱鳥九年始遷都藤原、故碑謂持統天皇之時、猶稱淨御原大宮也、

大寶

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、○二十一日對馬島貢金、建元爲大寶元年、○文武天皇五年

〔扶桑略記五文武〕五年三月廿一日甲午、對馬國始貢白銀、仍改爲大寶元年、白是以後年號相續不絶、

〔一代要記文武〕大寶元年辛丑三月○原脫三月二字廿一日甲午、對馬始貢白銀、郡司等授二階位、年號大寶、

慶雲

〔續日本紀三文武〕慶雲元年五月甲午、○十日、中略、西樓上慶雲見、詔大赦天下、改元爲慶雲元年、

○下略

〔帝王編年記十文武〕慶雲四年大寶四年五月十日改元、依朝堂西樓上有慶雲也、

〔一代要記文武〕慶雲元年甲辰五月十日改元、去五日大極殿西樓上見慶雲、仍爲年號、

和銅

〔續日本紀四元明〕和銅元年春正月乙巳、○十一日武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、○中略天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波止久詔命乎衆聞宣、故改慶雲五年而和銅元年爲而、御世年號止定賜、○下略

〔帝王編年記十元明〕和銅七年慶雲五年五(五恐正誤)月十一日改元、依武藏國秩父郡貢熟銅也、

靈龜

〔續日本紀七元正〕靈龜元年九月庚辰、○二日受禪、卽位于太極殿、詔曰、○中略粤得左京職所貢瑞龜、臨位之

書ニ朱雀ノ改元ヲバ、或ハ天武天皇ノ壬申トシ、或ハ癸酉トシ、或ハ甲申トシテ區々ナレド、其天武天皇ノ朝ノ改元ナルコト皆同ジ、熱田緣起ニ、天渟中原瀛眞人天皇朱雀元年丙戌トアルニ據レバ、朱雀ハ朱鳥ノ一名ニシテ、天武天皇ノ十五年丙戌ノ改元ナルベシ、ソハ改元ノ種子トナリシ朱鳥ハ、卽チ赤雀ナリシカバ、當時朱鳥トモ朱雀トモ通ハシテ云ヒシナラン、然ルニ上ニ擧ゲタル書ドモニハ、朱鳥ノ號ヲ赤雉ニ由レリトシ、朱雀ヲ赤雀、又ハ三足ノ赤雀ニ由レリトシテ分チタリ、サレド赤雉ヲ祥瑞トセシコト、國史及ビ延喜治部式ノ祥瑞ノ下ニモ見エズ、頗ル疑フベシ、サレバ朱雀卽チ朱鳥ニテ、再ビ改元アリシニハアラザルベシ、又按ズルニ、日本書紀ニ據レバ、朱鳥ハ一年ニテ終リタレド、萬葉集ニハ朱鳥四年庚寅六年壬辰七年癸巳八年甲子アリ、蓋シ庚寅ハ己丑ノ誤、壬辰ハ辛卯ノ誤、癸巳ハ壬辰ノ誤、甲子ハ癸巳ノ誤ニシテ、靈異記ニ朱鳥七年壬辰トアルヲ正シトスベシ、

〔古京遺文〕那須直韋提碑

永昌元年己丑四月、飛鳥浄御原大宮那須國造追大壹那須直韋提、評督被賜、歳次康子年正月二壬子日、辰節殄故、意斯麻呂等立碑、〇下略

〔年山紀聞 一〕那須の碑

右のいしぶみ荒野の中にむなしく埋れあるよしを、西山公聞しめして、佐々介三郎宗淳に命じたまひ石をたゝみ、碑亭を立て、再興せさせたまふ、その時宗淳が私考に、右那須國造碑、〇中略貞享四年之秋、予奉君命至那須、親寫碑文、元年上二字不甚分明、乃摸印見之、永昌二字也、然本邦無永昌號焉、飛鳥浄見原天武朝也、天武有朱鳥號、永昌字形稍似朱鳥、想是歳月之久、字體訛缺也、因推爲朱鳥、歸後考之、朱鳥元年歳在丙戌、而此曰己丑、則非朱鳥也明矣、今按、唐武后永昌元年、歳在己丑、而當持統三年、此時本邦年號闕、故假用異域年號乎、〇下略

〔一代要記 天武〕朱鳥(○島、原誤作雀、)元年丙戌、大和國獻赤雉、因改元、

〔愚管抄 一 皇帝年代記〕天武十五年(○元年壬申中略)　朱鳥八年(○元年丙戌○中略)

持統女　十年(○元年丁亥中略)　朱雀、のこり七年、

〔萬葉集 一 雜歌〕幸于紀伊國時、川島皇子御作歌、或云、山上臣憶良作、

白浪乃、濱松之枝乃、手向草、幾代左右二賀、年乃經去良武、(一云、年者經爾計武、)

日本紀曰、朱鳥四年庚寅秋九月、天皇幸紀伊國也、

〔萬葉集 二 挽歌〕柿本朝臣人麿獻泊瀨部皇女忍坂部皇子歌一首幷短歌、

飛鳥、明日香乃河之、上瀨爾生玉藻者、(○中略)

日本紀曰、朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑、淨太參皇子川島薨、

〔萬葉集 一 雜歌〕石上大臣從駕作歌

吾妹子乎、去來見乃山乎、高三香裳、日本能不所見、國遠見可聞、

右日本紀曰、朱鳥六年壬辰春三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆廣瀨王等爲留守官、(○中略)　辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢、　五月乙丑朔庚午、御阿胡行宮、

藤原宮之役民作歌

八隅知之、吾大王、高照、日之皇子、荒妙乃、藤原我宇倍爾、食國乎、賣之賜牟登、(○中略)

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸藤原宮地、　八年甲午春正月、幸藤原宮、　冬十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮、

〔日本靈異記 上〕忠臣少欲足諸天見感得現報示奇事縁第卅五

有記曰、朱鳥七年壬辰二月、詔諸司、當三月將幸行伊勢、宜知此狀而設備焉、

○按ズルニ、續日本紀ニ、白鳳以來朱雀以前トアレバ、朱雀ハ白鳳ヨリ後ナルコト著シ、蓋シ諸

れば、其三を三と見て、寫誤れるにか、いづれにも四年の誤なり、

○按ズルニ、逸號年表ニ、孝德ノ大化二年丙午ノ年ヲ以テ大化元年トシ、法隆寺緣起ノ文ヲ引テ、大化三年歲次戊申九月廿一日乙亥トアリ、乙亥ハ己亥ノ誤ナラム、

〔今昔物語十九〕髑髏報高麗僧道登恩語第卅一

今昔、高麗ヨリ此ノ朝ニ渡ケル僧有ケリ、名ヲバ道登ト云フ、元興寺ニ住ケル、功德ノ爲ニ、始メテ宇治ノ橋ヲ造リ渡サント思フ心有テ營ケル間ニ、(○中略)然テ宇治橋ヲバ、此道登ガ造リ始タル也、其レヲ亦天人ノ降テ造タルトモ云フ、其レニ依テ大化ト云フ年號ハ有ケルトゾ云フ、此レヲ思フニ、道登ガ造ケルヲ助テ、天人ノ降タリケルニヤ、委ク不知ズ、此クナム語リ傳ヘタルトヤ、

白雉

〔日本書紀二十五孝德〕白雉元年二月戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉曰、國造首之同族贄、正月九日於麻山獲焉、於是問諸百濟君、(○豐璋)曰、後漢明帝永平十一年白雉在所見焉云々、又問沙門等、沙門對曰、耳所未(○所未、原作未所、據下文及類聚國史改、)聞、目所未覩、宜赦天下、使悅民心、　甲申(○十五日)朝庭隊仗如元會儀、左右大臣百官人等爲四列於紫門外、以粟田臣飯虫等四人使執雉輿而在前去、(○中略)又詔曰、四方諸國郡等由天委付之故、朕摠臨而御寓、今我親神祖之所知、穴戸國中有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、仍禁放鷹於穴戸境、賜公卿大夫以下至于令史各有差、於是褒美國司草壁連醜經授大山、幷大給祿、(○祿原無、據類聚國史補、)各有差、復穴戸三年調役、

〔扶桑略記四孝德〕白雉元年庚戌二月、自長門國進白雉、仍改爲白雉元年、

〔唐書百二十東夷〕日本古倭奴也、(○中略)永徽初、其王孝德卽位、改元曰白雉、

朱鳥

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年七月戊午、(○二十日)改元曰朱鳥元年、(朱鳥此云阿訶美苦利)仍名宮曰飛鳥淨御原宮、

〔釋日本紀十五述義〕朱鳥元年(當紀曰、九年秋七月甲戌朔癸未、朱雀有南門、(有恐見誤)十年秋七月戊辰朔、朱雀見之、兼方案之、依此等之瑞、改元也、十五年改元也、)

〔扶桑略記五天武〕十五年丙戌、大倭國進赤雉、仍七月改爲朱鳥元年、(○又見皇年代略記、皇代記、一代要記、)

年號連載
大化

號之始矣、

〔胎餘雜錄 五〕國朝年號、權輿于文武帝大寶、先是雖有善記等之年號、事不實、故不用、

〔鹽尻 三十八〕一我國の年號大寶を始とす、其前へ年號ありといへども、一時の嘉號也、増て佛書にいへる我年號は、史にのせざる所也、唐土にても赤明上皇無極永壽等の年號をいへり、又揚雄は蜀王本紀に、望帝位を鼈靈に禪りて、後鼈靈を叢帝と稱し、年を方通と號せし由、事物紀原の一に見えたり、

〔日本書紀 二十五 孝德〕天豐財重日足姬天皇、○皇極 授璽綬禪位、○中略 輕皇子不得固辭、升壇即祚、○中略 改天豐財重日足姬天皇四年、爲大化元年、

〔釋日本紀 十四 述義〕大化元年、（按、方欲之誅於入鹿臣之暴逆、天下安寧、政化敷行、號元於大化而已、）

〔法隆寺緣起〕伽藍緣起幷流記資財事
奉爲池邊大宮御宇天皇幷在坐御世御世天皇、歳次丁卯、小治田大宮御宇天皇幷東宮上宮聖德法王、法隆學問寺幷四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺乎敬造仕奉、亦小治田天皇大化三年歳次戊申九月廿一日己亥、許世德陀高臣、宣命爲而食封三百烟ハ賜、略、又戊午年四月十五日、請上宮聖德法王、令講法華勝鬘等經、略、其議如僧、諸王公主及臣連公民信受無不嘉、○下略

〔長等の山風附錄 二〕天平十九年に勘錄せる法隆寺緣起に、小治田天皇大化三年歳次戊申九月廿一日己亥と記せるこれなり、うちまかせて小治田宮と申すは、推古天皇、皇極天皇の御世を申す稱ながら、此に然申せるは、孝德天皇受禪し給へる、大化元年六月より前の、皇極天皇の、小治田宮に坐まし、同年十二月難波長柄豐崎宮に遷都し給へるを、其御世の始の宮號をもて申せるなり、但し三年と在るは、四年の誤なり、其年と日の干支、また其記せる事實によりて考ふるに、悉四年の事に當れり、然れば三年は四年の寫誤なる事決なし、古書に四を三と作る例あ

〔日本後紀（二十嵯峨）〕弘仁元年九月丙辰、詔曰、飛鳥（極）皇以前未有年號之目、難波御宇（○孝徳）始顯大化之稱、爾來因循歷世、至今是用、（○下略）

〔扶桑略記（四孝徳）〕七月、初立年號、爲大化元年、

〔帝王編年記（九孝徳）〕大化五年（天皇元年七月年號、初爲大化、）

〔歷代皇紀（一孝徳）〕（乙巳）大化五年（初年號、七月、）

〔大鏡（一後一條）〕神武天皇より三十七代に當り給へる、孝徳天皇と申したる御門の御代にや、（○中略）かの時年號あらざれば、月日申しにくし、（○中略）四十二代に當り給ふ文武天皇の御時に、年號定りて大寶元年といふ、

〔口遊〕今案、自大寶元年迄今年、（○天祿元年）總二百七十年、昔大寶以往有年號、曰大化、白雉、白鳳、朱鳥、凡從大化至白雉合九載、其後齊明天智二帝雖治天下、專無年號、轉更至天武治天、歳號朱鳥、其後持統一帝無年號、亦文武御天、歳號大寶、從此以來、永以不絶也、

〔神皇正統記（文武）〕卽位五年辛丑より始めて年號あり、大寶といふ、是よりさきに孝徳の御代に、大化、白雉、天智御時白鳳、天武の御代に朱雀、朱鳥など云號ありしかども、大寶より後にぞたえぬ事にはなりぬる、依て大寶を年號の始とするなり、

〔簾中抄（下）〕年號（○中略）
大寶よりさきに、時々年號はあり、大化、白雉、白鳳、朱鳥などいふ、大寶よりつゞきてたえざりけり、

〔帝王編年記（十文武）〕大寶三年（天皇五年三月廿一日建元、依對馬國上黄金、後年號相續不絶、）

〔本朝改元考〕按年號者、唐虞三代未之有、而起於漢武帝之建元、先是雖有文帝之後元、景帝之中元後元、而徒改元未爲之號、史官追書之名耳、故武帝又以後元爲號也、本朝文武天皇、創建大寶之號、嗣此雖有孝徳天皇之大化、白雉、天武天皇之朱鳥、而紀一時之瑞、未爲定式、故源親房正統紀、以大寶爲年

遠遐ニ遍カラズシテ、邊土ノ民、私ニ異號ヲ用キシコトアリ、之ヲ僞年號ト謂フ、今併セテ邊年號ノ後ニ載ス、

名稱

〔運歩色葉集 而〕年號カウ

年號起原

〔壒嚢抄 上〕本朝年號

同(〇繼體)十六年壬寅、善記元年、(或記云、元年壬寅以前一千百七十八年、無年號云々、)今案、從神武元年辛酉至繼體十五年辛丑、千百七十一年歟、但甲寅年、神武即位之說在之、若據此說者、一千百七十八年歟、自此以後、至大寶難相續、普通記不載之、大略以大寶以後載之歟、

〔和事始 五 典制〕年號

日本紀に云、天豐財重日足姫天皇(皇極天皇なり)の四年を改て大化元年とす、(孝德天皇元年也)日本後紀大同五年九月の詔に云、朱鳥以前未有年號之目、難波御宇始顯大化之稱云々、寛初要集に云、皇極天皇四年を大化元年とす、是より以來年號あり、(三教指歸抄に引之)しかれば大化を以て年號の始とすべし、大化より年號始るといへども、其後或年號を立、或年號を不立、文武天皇五年に大寶の號を立、これより相續て年號たへず、故に正統紀には大寶を以て年號の始とせり、又大化より前繼體天皇の時より年號ありしとて、描き連字を用て年號として相續けり、しかれ共是佛氏の僞作なれば、信ずべからず、

〔清白士集 十五 元號補遺〕三十七代孝德、唐貞觀十九年立、至永徽五年、在位十年、改元二、大化、(五年補)白雉、(五年)案鍾書、無大化、有常邑、謂永徽元年立、又鍾書、二十七代繼體始建年號、改元三、善化、正和、發口、二十九代宣化、改元一、僧聽、三十代欽明改元八、同要、貴樂、結清、兄弟、藏和、師安、和僧、金光、三十一代敏達、改元三、賢接、鏡當、勝照、三十三代崇峻、改元一、端政、三十四代推古、改元六、從貴、煩轉、光元、定居、倭京、仁至、三十五代舒明、改元三、聖德、僧要、命長、廣記、年號始孝德、故皆不載、

古事類苑

歳時部三

年號上

我國年號ヲ建テシハ、孝德天皇ノ大化ヲ以テ起原トスレドモ、其後五十餘年ノ間、或ハ建テ或ハ建テザリシニ、其相繼ギテ絕エザルハ、文武天皇ノ大寶以後ナリトス、サレドモ當時改元スルコトハ、概シテ數ナラザリシニ、中世ニ至リテハ、一天皇ノ御宇ニ七八度ニ及ベルアリ、其年數ノ如キモ短キハ一年ニ及バズシテ改元シ、長キハ三十餘年ニ涉レルモアリ、而シテ一皇一元ノ制ハ、明治改元ノ詔ニ始マル、

改元ニハ、代始改元、祥瑞改元、災異改元、革命改元、革令改元等ノ別アリ、改元定ハ朝廷ノ重事ニシテ、其式ハ略、一定シタリ、卽チ改元ノ前數日ニ、年號勘者宣下アリテ、式部大輔、文章博士、及ビ其任ニ勝ヘタル公卿等ヲシテ勘文ヲ獻ラシム、勘文ハ經史ニ據リテ、好字ヲ擇ブモノナリ、既ニシテ諸卿ヲ召シ集メテ仗議セシメ、互ニ其優劣ヲ論爭ス、之ヲ難陳ト謂フ、難陳ノ語ハ、藏人ニ付シテ奏聞シ、聖旨ヲ待チテ之ヲ決ス、改元定ノ前ニ、必ズ條事定ノ式アリ、又改元定ノ後ニ、吉書ノ奏アリ、此等ノ事、本ト改元定ニハ關係セザルコトナレドモ、中世以後ハ、全ク恒例トシテ之ヲ行ヘリ、

年號ニシテ正史ニ見エズ、僅ニ金石文ニ存スルモノ、又古キ年代記、古社寺緣起等ニ記サレタルモノアリ、之ヲ逸年號ト謂フ、多クハ僧徒輩ノ僞作ニ係ルト云フ、又後世亂離ノ際、政令

劉焉傳注、傳以張修爲張衡、張陵之子、明宋景濂跋曲阿三官祠記、亦取典略之說、又宣和畫譜、有周昉三官像圖、道書、正月十五日上元、九炁天官主錄百司、上詣天闕、進呈世人罪福之籍、上元、十天靈官神仙兵馬、與上聖高眞妙行眞人、下降人間、考定罪福、中元、九地靈官、下元、水府靈官、上元、中元、下元、皆大慶之月也、長齋誦度人經、則福及上世、身得與神仙並、此吳俗所以多誦經持齋者爾、

〔改正月令博物筌正月〕十五日、上元、　今日をいふ、夜るを元宵元夜といふ、七月十五日を中元とし、十月十五日を下元とす、唐には今夕燈籠を多くともし、甚にぎはしき事也、本朝中元の夜のごとし、是を花燈夕と云、

〔日次紀事正月〕十五日、上元、　今日謂上元節、

〔光臺一覽一〕十五日、〇正月、今日上元日、御禮總詣也、

〔東都歲事記正月一〕十五日　上元御祝儀、〇中略　太かぐら來る、

〔康富記〕嘉吉四年〇文安元年正月十五日乙丑、上元佳節也、

〔東都歲事記七月三〕十五日　中元御祝儀　荷飯、刺鯖を時食とす、

〔守國公御傳記八〕中元ノ日ハ、生御靈ノ祝トテ、上邸ヨリ鮮魚ヲ進ゼラレ、又保國公、惠德公ヲ始メ、公子方來玉ヒテ、打網、垂釣等ナシ玉ヒ、其魚ヲ速ニ庖丁シテ勸メ玉フ、雙親アル者ハ皆釣ヲ許シ、供奉ニ來ル者モ、多クハ親アル者ヲ召具シ玉フ、

〔日次紀事十月〕十五日　今日謂下元節、

三元

の事ありと、されど少しづゝのかはりめあり、七月梶の葉に素麵をもるを、まくはうりをもると
いへり、

〔憲法類編 二十二〕五節ヲ廢シ祝日被定ノ事

第百五　六年○明治一月四日第一號御布告

今般改暦ニ付、人日、上巳、端午、七夕、重陽之五節ヲ廢シ、神武天皇即位日、天長節ノ兩日ヲ以テ、自
今祝日ト被定候事、

○按ズルニ、諸節會及ビ五節供等ノ事ハ、各篇ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

〔諸國圖會年中行事大成 一正月〕十五日、上元、　正月十五日を上元と云、七月十五日を中元と云、十月十五
日を下元と云、事林廣記下集、聖眞降陰章曰、三元、齋日、正月十五日上元九炁天官、主錄、百司、天闕に
上詣、世人の罪福を進呈する日、大に福を崇め、過を謝するに宜しと云々、

〔月令廣義 五正月〕十五日、上元、白帖注、歳有三元、正月十五爲上元、

〔淸嘉錄 一〕三官素 七子山

上元、中元、下元日、爲三官誕辰、俗以正七十月朔至望日、嗜素者、謂之三官素、或以月之一七十日持
齋、謂之花三官、遇三元日、士庶拈香、駢集于院觀之有神象者、郡西七子山有三官行宮、釋氏奉香火、
至日、輿舫絡繹、香潮尤盛、歸持燈籠上街、三官大帝四字、紅黑相間、懸于門首、云可解厄、或有以小杌
插香供燭、一歩一拜至山者、曰拜香、

案、宋史方伎傳、苗守信上言、三元日、上元天官、中元地官、下元水官、各主錄人善惡、蓋三元之名、已
見魏書、舊唐書、然不言三官主月、攷邱悅三國典略載張角爲太平道、張修爲五斗米道、使人爲姦
合祭酒、主以老子五千文使都習、號姦令請禱之法、書病人姓名、說服罪之意、作三通、其一上之天、
著山上、其一埋之地、其一沈之水、謂之三官手書、使病者家出米五斗以爲常、號五斗米師、詳後漢

七種粥〇中略　御記云、寛平二年二月卅日丙戌、仰善曰、正月十五日七種粥、三月三日桃花餠、五月五日五色粽、七月七日索麪、十月初亥餠等、俗間行來以爲歳事、自今以後、毎色辨調宜供奉之、于時善爲後院別當、故有此仰、

〔公事根源正月〕獻御粥　十五日

寛平の比より年毎にこれを奉る、其外三月三日などの御節供も、此時より同定めらる、

〔昔々物語〕一むかしは五節句に、若き衆大身小身共朝早支度して番頭支配方へ禮に行、夫より親方の親類、又は老人の親類へ不殘勤、浪人の若き衆も不殘禮勤し故、往還も賑あひて節句めきたり、近年は若き衆も節句日御頭禮用捨あれば、幸にして親方へも禮不勤、まして小謡請其外御奉公不勤者は禮抔勤る事はなき事と思ひ、朝より大白衣にて寢たり起たり、三味線上るりにて、酒呑友達の方へ行とも、上下不著、或はどうらくにかけ廻る、

〔見た京物語〕節句にかける暖簾は、平日かける暖簾とは違ひ、嗜みのを掛る、

〔蘆の花上〕陸奥國の五節風俗　すべてとにかくにつけ、遠き國には古への事も傳はり、かつ質朴にすなをなるいとめでたし、東國旅行談卷の三曰、出羽國庄内領の町家、在々まで古風の作法あり、往昔は日本國中皆かくのごとくにてありしとかや、五節句ともに、三方を用ゆることなり、正月は橙子、草薢(トコロ)、藻鹽草、根松、藪柑子、芝栗(ウラジロ)、喰積臺これなり、當所の海には海老なし、寒國ゆへ蜜柑もなし、三月には桃の花と草の餠を積合す、五月は粽を三方の内へのるほどにこしらへて、五ッづつ把て載る、七月七日は梶の葉をゑきて、素麪をのする、九月は菊の花に餠なり、家々かくの如し、家内には鶴龜松竹、また寶盡しなどの目出度もやうを染たる暖簾を、中の間に二間三間ばかりの間にかけて、手代麻上下を著し、其まへに座し、件の三方を禮者のまへに出し、禮をうくる、〇中略

余〇山崎美成歳　このことをもて、友人堀尙平にかたらく、尙平ぬしは奧州南部の産なり、かの國にもこ

節供と云べくは此月日なるべしと記し、同書に、或は元日を除きて七日を加へ、七夕を除き亥日を加へ、又は十一月十一日を加へて六度とするは當らざる由を論せり、されども近來、七日を五季の一とするもの多し、若菜の祝ひの事、いにしへは上の子の日を用ひて、七日と定らず、宇多天皇寛平八年閏正月六日、子日の宴ありし事、扶桑略記に見え、菅家文草に、此時扈從せられし事を記して、倚二松根一以摩レ腰、和二菜羹一而啜レ口とある、子日の證とすべし、たま〳〵七日に設けしは、延暦十一年なり、天暦四年二月廿九日にも若菜を奉りし事あり、唯禁中古來より七日の大儀は、白馬の節會にて、小陽の日陽獸を御覽ある由緣なり、立春に若水飮み、子の日に若菜を喫するがごとき、皆新年に齡を延る祝賀の一事なりしを、中古に至り、たま〳〵人日にあたれるより因循し、又荊楚歲時記に、正月七日爲二人日一、以二七種菜一爲レ羹といふ說によりて、遂に七日の事と定まりしならん、武家に於ては、白馬の節なければ、只中古の例によりて、七種の菜羹を祝ふまでにて、節日といふにはあらず、元和二年正月、この祝ひの舊儀を搢紳家に尋ね給ひし時、諸家より記し進らする所的當ならざるにより、只世俗の流例にしたがひて定め給へり、此時一條家にては、人日の說を主として、五節供のはじめなるよし記し出されたる、杜撰といふべし、これらの說に雷同せしか、寛文十一年の柳營年中行事、及び諸記錄に、多く五節供の一とするは誤なり、殿中七日儀式を考ふるに、上巳端午のごとき盛禮にあらず、令條に年始五節供とあるは、歲首の大儀は規模盛大にして、餘日に比準しがたきにより、ことさらに提記したるを、世人やゝもすれば、五の字に泥みて七日を加へ、或は八朔を其一とするもの。あり、故に今八朔の來由を述るす因みに聊筆記して、五佳節の一は正月三元なる事を辨ず、○中略

天保癸巳季冬上澣　　安藤熟之述

〔年中行事秘抄 正月〕十五日主水司獻二御粥一事 付女房

月三日は内膳式にはいらねども、これも同じやうにいはふ日となりぬといふこゝろにこそ、これを見れば、今の五節供の日を、昔よりいはふ日とせしことは忘られつ、四節は内膳式にありて、またく同じからんには、正月七日をはじめにして、五七九月同之とあるべきに、七月七日をはじめにかゝれ、江家次第八の巻にも、七月七日のくだりに、同日、御節供内膳司付采女、采女付女房、入自鬼間北障子供朝餉と、七月七日のことをしるして、ほかのせちをはぶきたり、忘かあればことにをもきにやとおもへば、延喜式なる三節、五節の中には、七月七日、三月三日は見えず、同式四十五の巻に、大儀、中儀、小儀をわかちていへるうちにも、正月七日中儀、五月五日、九月九日小儀とありて、これにももれたれば、さやうにてはあらじ、いかなることにかあらん、おもひえがたきは、老のならひにて、見しこともわすれ、考へもらして、忘られぬにぞあるべき、いとくちをし、

〔八朔考〕一五節供の稱、舊記に見えず、たゞし節供とは其日にあたりて膳を供するの義なり、庖厨の料は、詳に延喜式に見え、内膳司の管する所なり、此儀は禁中のみにあらず、公卿の家々にも慶賀あり、節句と書たるは、寛永後の年中行事類の書に、きく重の御節句とあり、恐らくは假借なるべし、又年中行事等の古記に載る所、節供の日數は、正月三元日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日なり、此日を祝する意は、草木子に、皆以奇陽立節、偶月則否、此亦扶陽抑陰之義也とある最的當なり、十一月に祝日なきは、其數始にかへる故なるべし、其中重三日の曲水、七月初七の乞巧は、皆嘉辰雅遊のため、桃花菊蘂は文人騷客の時物を愛するより出たる事なるを、却て桃の節供、菊重の祝ひと名づけしは本意を失へり、もと節供といふは、節會の供膳にあらず、故に踏歌豐明等の日、供膳の設なく、節會なき時も節供あるを考ふるに、五節は奇陽を貴ぶの意に出たる事、おのづから草木子の說に符合するものか、文安二年、沙門行譽が記せし壒囊抄に、五節供の事異說多し、慥なる日記には五節供と云詞不見、心は侍りとありて、前に出す年中行事節供の日を載せ、五

〔和漢三才圖會 四時候〕七夕　凡年中所以嘉祝、在正三五七九奇月、而用朔三五七九奇日、俗謂之五節供、七月七日亦其一也、俗奮二星之事、似忘其本也、十一月十一日亦雖、然九爲老陽、故九月而止、不用十一月十一日、

〔遠囊抄 一〕五節供ト云ハ何々、幷其由來如何、五節供事、異說多歟、諸節供記來由區、卒爾難注、然共以略可注、夫作節供者、養性要、除災計也、　正月一日節供、表安樂相、所以宿曜經云、一日名建日、又名吉祥日、宜作長久之事ト云々、　三月三日節供、爲除時氣病也、所謂寒氣漸潜、温氣始發、當於斯時萌氣病、而以桃花浮美酒服、病患不發、於此氣懸門戶、愼鬼魅不到於此、　五月五日節供、爲拂毒虫也、夏毒虫多上、他國毒虫多交人家、是故菖蒲艾草蓋屋上、卷茅蛇形名粽服之、表殺毒虫ト云々、　風俗記云、是日以五色糸繫臂攘惡鬼、令人不病温、一名長命縷、二名臂兵縷、大戴禮云、是日採蘭以水煮之爲沐浴、令人辟除刀兵攘却惡鬼、　證類本草云、俗人取楊葉佩之云避惡、　四民月令云、是日樓子等多勿食之、食訖取菖蒲根七莖長一寸漬酒中服之、　七月七日節供、爲除瘧鬼也、昔高辛氏小子是日死、然成一足鬼致人瘧病、生日常嗜麥餠、故此日以麥餠祭之、年中離瘧用麥索此謂也、十節記見ヘタリ、九月九日節供、爲延遐壽也、所以服菊云々、　世風記云、飲菊酒而以免災厄、又云、服菊華酒令人長壽ト云々、○下略

〔日本歲時記 五九月〕五節供の中人日を除て、上巳、端午、七夕、重陽は、中華にも賀する所の俗節なり、その月日みな奇にして、陽數にあたるをとれり、これ古人陽を尚ぶの意なりと、草木子に見えたり、此說正し、まことに古人の意を得たりと云ふべし、然るに後人その義をしらず、周王、屈原、織女、桓景等を以て職として此由とす、その妄謬はなはだし、

〔松の落葉 四〕五節供　今の世五節供とて、一とせのうちに五度いはふ日あり、西宮記に、七月七日內膳供御節供、付采女、采女付女房、五、七、九日(日恐月誤、下同、)同之、但三月不入內膳式、とあり、五、七、九日とは五、七も日といふべきをはぶきてかゝれたるにて、五月五日、正月七日、九月九日も、七月七日に同じといふこと、きこゆ、三

節供

は刀禰召せと內辨の仰する替め有、其故はまちきんだちとは、大夫達とかけり、五位のものを申也、五位已上のものをめせとおほする心なり、大節に、刀禰とは六位をいふ、六位の輩までをめせといふ心也、又しばらく大小の節をわかつ事は、かの偏頗の恩によてなり、

〔延喜式 十二中務〕凡大儀日、輔著淺紫襖、金銀裝腰帶、金銀裝橫刀、烏皮靴、策著纓笏、丞幷內舍人、皂緌、緋襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、

〔延喜式 四十五左右近衞〕大儀（謂元日、卽位、及受蕃國使表）

其日寅二刻、始擊動鼓三度、度別平聲九下、卽令裝束、大將著武禮冠、淺紫襖、錦裲襠、將軍帶（以金銀飾）、金裝橫刀、靴、策著纓笏、中將、武禮冠、深緋襖、錦裲襠、將軍帶、金裝橫刀、靴、策著纓笏、少將、武禮冠、淺緋襖、錦裲襠、將軍帶、金裝橫刀、靴、策著纓笏、（但供奉御輿少將、皂緌、挂甲、帶弓箭）、將監將曹、並皂緌、深緑襖、錦裲襠、白布帶、橫刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府生近衞、並皂緌、深緑襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、（近衞加朱末額）〇中略

中儀（謂元日宴會、正月七日、十七日、大射、十一月新嘗會、及饗賜蕃客）

少將已上、並著位襖、橫刀、靴、策著纓笏、將監已下府生已上、並皂緌、位襖、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、近衞、皂緌、緑襖、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、（大射幷饗賜蕃客之時、著脛巾末額）

小儀（謂告朔、正月上卯日、臨軒授位任官、十六日踏歌、十八日賭射、五月五日、七月廿五日、九月九日、出雲國造奏神壽詞、册命皇后、册命皇太子、百官賀表、遣唐使賜節刀、將軍賜節刀）

大將已下、亦准中儀、（但正月上卯、授位任官、十八日少將已上執弓箭、其大中將帶參議已上者不執弓箭）其近衞黃袍、

凡節會御紫宸殿、中將已下率近衞等入自日華門、將曹一人前行、（右月華門）居胡床、（少將已上胡床、各敷虎皮）

〔運步色葉集 勢〕節供

〔書言字考節用集 二時候〕節供（セツク）

〔枕草子 一〕正月（〇中略）十五日は、もちがゆのせくまゐる、

〔和漢名數 節序〕和俗〇五節供（ゴセツク）　人日（ジンジツ）（正月七日）　上巳（ジヤウシ）（三月三日）　端午（タンゴ）（五月五日）　星夕（セイセキ）（七月七日）　重陽（チヤウヤウ）（九月九日）

〔伊呂波字類抄 世人事〕節會

〔運歩色葉集 勢〕節會

〔令義解 雜令〕凡正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七月七日、十一月大嘗日、皆爲節日、其普賜臨時聽勅、

〔年中行事秘抄 正月〕諸節會之事

口傳、大儀ト云ハ 朝賀 著甲即位也 上儀ト云ハ 垂纓二天 始白馬節也 杖槍 中儀ト云ハ 卷纓平胡籙

小儀ト云ハ 卷纓壺胡籙

〔江次第抄 正月一〕元日宴會

宴會 凡節會有大儀、中儀、小儀、即位幷朝賀等謂之大儀、上下著禮服、白馬、端午、豐明、謂之中儀、刀禰以上預列焉、元日、踏歌謂之小儀、大夫以上預焉、其中儀小儀皆著常袍、

〔內裏式 上〕七日會式

乘輿幸豐樂院後堂、○中略 近仗服上儀、少將以上杖槍、左右兵衞佐巳上亦同、諸衞同服上儀、但不帶器仗等、

〔三代實錄 四十一陽成〕元慶六年正月二日乙巳、是日天皇加元服、○中略 是日引見因雪地濕、故兩儀成禮、近仗服上儀、　三日丙午、今日豢行元日之宴禮、○中略 諸仗服上儀、

〔內裏式 中〕十一月新嘗會式

車駕幸豐樂院、諸衞服中儀服、

〔西宮記 正月〕節會

天皇出御南殿、〈中略〉侍從、○中略 大節加非 小節日不出御、前補次侍從、

〔公事根源 正月〕踏歌節會　十六日

元日、踏歌をば小節と申、白馬豐明をば大節と云にや、小節にはまちきんだちめせと仰す、大節に

〔假名曆註解〕二百十日　立春ヨリ二百十日メナリ、秋風烈キ時ナリ、カクノ如ク注シテ、民ニ五穀ノ用心ヲイタサシムル也、

〔俳諧歲時記七月〕二百十日　立春の日より二百十日め也、この頃社の最中にて、金氣殺伐の氣變動する也、故に必風雨あり、この節中稻の花ざかりとす、農民その花を損はんことをおそる、又二。百。廿。日。は晚稻の花盛とす、

〔改正月令博物筌七月〕二百十日　立春より二百十日めをいふなり、今日の風を恐るゝは、二百十日は、早稻の花ざかり、二百廿日は中稻、二。百。卅。日。は晚稻の花盛り也、是より後は花ちり實になるゆへ、風吹ても稻にさはらず、稻の花は中に水の如き白きものあり、是米になる也、風ふけば、此水を吹ちらすにより、米出來ざるなり、雨ふれば、此水を花にてつゝむにより、風ふきてもさほどに害をなさず、雨なしの大風を恐るゝ也、東北より吹を、大坂にて上げといふ、此風吹つのれば、ひえてしけになり、西より大風にて、吹もどすにより、是をきらふ、東南の風をいなさ、或はいせこちと云、あたゝかなれども、是もふきつのれば、大しけになる、すべて東より吹風は、雨にならざれば、西より大かぜにて吹もどす、雨になれば、さほどの事なし、大形は雨になりておさまる也、西北より吹を、あなせといふて日和よし、西南を沖氣といふ、曇りてむし〱すれども、日和つゞくもの也、しかれどももしふり出せば、此日和は長きものにて、西より晴てくるかとおもへば、沖より雲をつきのぼして雨になる也、此風吹つゞけば、日和も曇りも、雨も、とかく長くつゞくもの也、中西の方より吹を、まぜといふ、日和つゞいてよし、東より吹こみ、西より吹風に、わいたといふ風あり、此風は地へふきつけて、其所より風次第にわきいづるごとく、大風になり、稻を損ずる事甚し、雲ありて北方は雨をつかさどる、歌にも秋北とよめり、秋は金なり、北は水也、金生水の理にて雨を生ずる也、しかれども夜晴て北風は日和よし、

一丙丁年は芒種之節より、二つめの申に入、黴雨之間七日、
一戊己年は芒種之節より、二つめの庚に入、黴雨之間十四日、
一庚辛年は芒種之節より、二つめの戌に入、黴雨之間廿一日、
右延享元子年從₂公儀₁被₂仰付₁、澁川六藏考差上る、入梅は暦にも入を記して、出るを記さず、此書付當澁川主水に承合候處、右之通心得候而悉宜候由也、

半夏生

〔簠簋內傳 三〕半夏生
五月中十一日目可₂註之₁、此日不₂行₁不淨₁、不₂犯₁姪欲₁、不₂食₁五辛酒肉₁日也、
〔日本歲時記 四五月〕世俗に半夏生の忌といふ事あり、簠簋內傳にいはく、五月の中より十一日にあたる日なり、此日不淨を行はず、不₂犯₁淫慾₁、不₂食₁五辛酒肉₁日なり　按ずるに、簠簋の抄に、摩耶夫人の中陰の眞中なるゆへに、善事をなし惡事をのぞくといへり、予〇貝原篤信おもふに、半夏生は七十二候の內、夏至の第三候なれば、是に附會して、妄説をいへるならし、
〔俳諧歲時記 五月〕半夏生　五月中より十一日なり、世俗この日を期として竹の子を食はず、是竹節虫を生ずるのゆゑ也、
〔改正月令博物筌 五月〕半夏生　五月中より十一日めなり、此ころ半夏生ずるを以いふ也、農家此日の前後を考へて物を蒔なり、
〔年中行事故實考 六五月〕半夏生　是は七十二候の一にて、夏至より十一日に當る日をいふ、暦に此日のみを載たるは、田家蒔種の節とする故これを錄せり、簠簋內傳に、この日不淨を行はず、不₂犯₁淫欲₁といふ、是は千金方夏至後丙丁、不₂可₂合₁陰陽₁といふ說に據るにや、
〔百一錄〕元祿八年五月廿日、半夏生、
〔書言字考節用集 二時候〕半夏生(ハンゲシヤウ) 月令章句、五月半夏生、蓋當₂夏之半₁、

寒暑風雨之時候、必有遲速、不可拘以日數、然則梅雨出入之期、雖出乎華夏之書、恐不可據信、孟子曰、盡信書不如無書、誠哉此言乎、只以芒種之後霉雨初降之日、爲入梅、以霉雨收斷之日、爲出梅、庶幾乎其不差矣、十月液雨亦恐然也、

〔民間年中故事要言 四〕梅雨 或人云ク、梅雨ハ和歌ニイフ五月雨、中世ニハ墜栗花、今ノ俗ニ通油ト云、

〔改正月令博物筌 五月〕梅雨出入の說（中略）按ずるに、五月梅まさに黃み落んとす、栢榴の花ひらき、栗の花おち、蕃の干ちまたに墜るの比長雨あり、是を梅雨といふ、雨甚だ多からずといへども、かならず石ずへしめり、物かびを生ず、雷鳴を以て出梅とす、京師烏丸中立賣下町のちまた、又大德寺門前の人家のうしろ井に梅雨の穴あり、其時に至れば水わきいづる、晴んとすれば水かはく、攝州丹生の山田の栗花落理左衛門宅に井あり、徑三尺深さ一尺、梅雨に入て水必わく、出梅の比水かはく也、

梅雨天氣 梅雨は多く西風南風にて、山の嶺に雲なく、風つよき時はふらず、風なき空に雲多く、天氣くらくなれば、ふり出す、是をくろはへといふ、此雨の内朝東風二三日つゞけて吹ば、空も白くなる、是を舶超風といふ、雨はるゝ也、雨やまんとして、はげしく雷鳴、これを順とす、然といへども、梅雨の内に雷おほく鳴ば、洪水な主る、夜鳴り、或は沖へなり入ものは、すべて宜からす、

〔世事百談 一〕梅雨 梅雨の節に入るを入梅といひ、あくるを出梅といふ、芒種五月中の前の壬を入梅とし、小暑六月節の後の癸を出梅とするよし、本草綱目に見えたり、去れども時として、陰晴定まらず、時節のわかちがたきことあり、其時には花卉の花咲きそむるを入梅とし、だん〳〵標のかたに花の咲き終るを梅雨のあくるとしるべし、暦は算法に拘泥することなきにあらねば、天時の花草にて、節氣を知ること正しとかや、ためし試むるにたがふことなしとある人いへり、

〔年中行事故實考 五六月〕入梅 五月の節に入て壬の日を入梅とし、六月に入て壬の日を出梅とす、是今貞享暦の用ゆる所なり、諸家の說紛々たりといへども不足採、

〔視聽草 六集九〕入梅說

一甲乙年は芒種之節より、二つめの壬に入、黴雨之間廿一日、

ノ時濕氣フカキハ、愚〇山路主任按ズルニ、夏至ノ日輪ハ、我居ル所至テ近キ故ニ、萬物極暑ニ早付ラレテ燥ナリ、冬至ノ日輪ハ、我居ル所ニ至テ遠キ故ニ、極寒ニ氷付ラレテ堅ナリ、然ルニ冬至ヨリ、日輪漸我居所ニ近ヅキ、五月ノ節頭ニハ日輪ヲヨソ我頭上ニ近ヨル故ニ、萬物既ニ燥ント欲シテ、先蒸暑クシメ〳〵スル、此時ヲ梅雨ト云フ、譬バ生木ヲ火ニ焙ルニ、マヅ濕氣牢レテ、後ニ燥ナリ、梅雨モ又カクノ如ク、日輪ノ火氣ニ照付ラレテ、地上ノ濕氣先牢ルトキナリ、乃梅雨ト名ヅケタルハ、梅ノ實黃バミ落ル比ナルニ因テ也、

〔日本歲時記四五月〕此月淫雨ふる、これを梅雨と名づく、又黴雨ともかけり、梅雨の中肥土に芙容、石榴、櫻、桃などの枝をゑらびてさすべしと、月令廣義に見えたり、此時黃土につゝじ、薔薇、水梔をさせば甚よく治、又貧家人功ともしき輩は、奴僕事を廢し、おこたりては、家事調がたし、梅雨久霖の中も、家僕をして薦をあみ、莚をつくらしむべし、薦は書籍器物食物等を晒し、新に栽たる草木栄蔬におほひ、墻屏を蓋ゆへ、其功用廣し、又梅雨水を大瓶に貯置、茶を煎すれば、はなはだ美なりと、茶譜に見えたり、但日をへては飮べからず、又梅雨水にて癬疥を洗へば、そのあとなし、醬を作るにこれを用れば熟しやすく、衣をあらふにこれを用れば灰汁のごとしと、東垣が食物本草に見えたり、　梅雨出入の說、紛々として一決し難し、埤雅にいはく、閩人立夏の後、庚にあふ日を入梅とし、芒種の後、壬に當る日を出梅とす、神樞にいはく、芒種の後、丙にあたる日を入梅とし、小暑の後、未にあたる日を出梅とす、又碎金錄にいはく、芒種の後、壬に當る日を入梅とし、夏至の後、庚にあたる日を出梅とす、又李時珍が說には、芒種の後、壬にあたる日を入梅とし、小暑の後、壬に當る日を出梅とす、三元歸正にいはく、芒種の後、丙の日に當るを入梅とすと云說、是にちかし、其時雨濕衣を斑するに驗ありと見えたり、凡梅雨出入の期は、和漢ともにさま〴〵の說侍るなり、されどもその說合がたし、損軒嘗著黴雨說いはく、陰陽之往來、固有定期、然而天地之流行、變化無窮、故

渡給歟、王相者十二日可ㇾ坐ㇾ坤、仍日數非ㇾ幾、至ㇾ于大將軍忌ㇾ者、可ㇾ口内令他所給可ㇾ宜者、

〔長秋記〕元永二年六月五日、被ㇾ納御胞衣、〇中略件胞衣、本條可ㇾ埋ㇾ地之由所見云々、雖ㇾ然近來多結ㇾ附天井等、就ㇾ中近日土用比也、仍埋ㇾ地儀可ㇾ有ㇾ憚、仍沙汰良暫結附云々、

〔閑窻瑣談〕一第一　金神家相の論〇中略

或ひは土用に土を不動といふ、夫土用は、四季に土公の在方ありて、其土を動せば殃ひ有、據なくば土公遊行の日を用ゆべしといふ、若水邊か河の堤の下に門を構し家ありて、洪水堤を崩さんとする時、土公を怖れ土を動かさず、門の破をも防がずに置るべきか、亦秋は土公の井戸に在ますゆゑに、井を掘、井戸がへすべからずといふ、左はいへども、他國は知らず、江武の町々には、初秋七月の日、年毎の例として、井戸を治ざる所もなし、此時土公憤を發し、祟をなせし事を聞ず、是如何ぞや、

八十八夜

〔假名暦註解〕八十八夜　立春ヨリ八十八日メナリ、霜ノフルコト此時分ヲ限ナリ、

〔改正月令博物筌〕三月八十八夜　立春の節より八十八日めをいふなり、俗説に名殘の霜といふ、凡春の氣終り夏の火氣に變化するの節なれば霜も此頃よりふらざるをいふなるべし、此ときは霜降れば、草木のわかばへを損ず、かねて其ふせぎをすべし、綿をまくは、此前後なり、八十八夜の前より、四月五日までまくなり、

〔百一錄〕元祿六年三月廿七日、八十八夜、

梅雨

〔假名暦註解〕入梅　芒種ノ後、壬ノ日ヲ入梅トス、六月節ノ後ノ壬ノ日ヲ出梅トス、カクノ如ク三十日ノ内ナリ、出梅ト云フハ、入梅アケル日ナリ、又入梅ヲ梅雨トモ云フ、　本草綱目ニ曰ク、梅雨ノトキ、衣ヲ沾バ腐黑ス、其トキハ梅ノ葉ヲ煎シテ洗ヘバ、モトノ如クニナルト云ヘリ、乃シ往古ヨリ右ノ如ク言傳ルノミニテ、梅雨ノトキニハ、濕フカキコト奈何ト云フ其説曾テ無シ、　梅雨

〔假名曆略註〕どよう　漢字土用　土用とは、土の氣始て事を主どるの日也、凡一歳の內、五行の氣互に循環して以て四時をわかち、もつて歳序をなす也、春は木氣事を主り、夏は火氣事を主り、冬は水氣事を主どる、每氣七十三日有奇を主どる也、唯土は中央に有て、四季に應じて、各十八日有奇を主どる也、其始之事を主どる日を土用の入とす、都て土用の中は、造作、修造、柱立、礎或土を動かし、井を掘、壁ぬり等、一切土を犯すに惡し、一說に、土用の間日あれども信用するに足らず、故に新曆にも註せざる也、

〔簠簋內傳三〕四季土用事
三月淸明、六月大暑、九月寒露、雪月大寒、各節入十三日目可註之、若厥內有沒日、則可爲十九土用、此日敢以不致犯土造作殺生惡行者也、

土用間日事
春巳午酉　夏卯辰申　秋未酉亥　冬寅卯巳
右此間日者、大聖文殊哀愍一切衆生、奉請入土公王子部類眷屬淸涼山日也、故衆生輙可犯土造作也、

〔春記〕長曆三年十月十日丁卯、萬事只隨此女房吻、放子孫、希有事也、爲出參州可毀東築垣也、近日土用間也、小兒可忌避哉否、又王相猶在西、十二日可移此方、予宅在東、仍可忌其方哉否由、以時成遣問之、予自去七日候中納言殿也、時成傳孝秀報云、如此之時更不云土用、又小兒等更不可忌、又王相事、在西只暫也、御忌留本所歟、仍更不可忌者、然而小兒有恙、毀彼垣之間、寬可移西屋邊之由示了、

〔經信卿記〕承曆四年六月廿九日庚申、巳剋參殿、〇中略被仰云、〇中略來月五日可渡基家朝臣宅、而處狹屋口云々、然則欲渡但馬守宅、日次如何、又不可有方忌乎、主上〇白河近今渡給、〇中略土用間可有其憚、仍先渡敦家朝臣六條亭充用了、但馬守宅修理後渡、其可乎、申云、五日者天一在南、來月十日可令被

之人、歸時各攜花盤果實食物社糕而散、春社、重午、重九亦是如此、

〔簠簋內傳二〕社日　二月八月中前後近戊日也、前後同日歟、退可前社神事凶、

〔曆林問答集下〕釋社第二十七

或問、社者何也、　答曰、尙書曆云、社者歲之春秋可祀之社事、土地之主也、稷五穀之長也、二月八月之中氣也、二月爲春社、八月爲秋社、百穀實而稼穡成、報德而祀之、故春社者、近於春分戊日、秋社近於秋分戊日也、各命民祭於土地、將攘惡氣、其戊土也、故取其日祭也、

〔假名曆註解〕社日　春ノ社日ニハ種ヲ蒔、秋ノ社日ニハ五穀ヲ刈、又日神ヲ祭ニ吉日ナリ、

〔日本歲時記三二月〕もろこしには社日とて、春秋に二度土の神を祭る事あり、土はよく萬物を養ひ五穀を生ず、故に祭る、春は農事のよからん事をいのり、秋は其の恩德を報ずる意となん、その日は、立春の後、第五の戊の日を春社とし、立秋の後、第五の戊の日を秋社とす、(十干の中、戊己は土なり、故に春秋ともに戊の日を用ることぞ、)禮記にも、仲春擇元日命民社とあり、(元日は吉日の意なり)風俗通にいはく、共工の子を脩といふ、遠遊をこのみ、舟車の至るところ、足跡の達するところ、窮覽ずといふ事なし、故に祀て社神とす、左傳にいはく、共工氏子あり、勾龍氏といふ、平水土、故に祀て以て社とす、禮記郊特牲に、厲山氏の天下をたもつ時、その子を農といふ、よく百穀をうゆ、夏の衰ふるに及て周の棄繼之、故に祀て以て稷とす、共工氏の九州に覇たる時、その子を后土といふ、よく九州を平ぐ、故に祀て以て社とすといへり、(蔡邕がいはく、稷、百穀を播植ゆ、稷は百穀の長なり、故に稷を以てその神に名づく、)それ社は土神なり、稷は穀神なり、土穀の神を祭る事は、人民を生養する故なり、もろこしにて、社日には村民たがひに來往して、酒食に醉飽すると見えたり、張演が社日の詩にも、家々扶得醉人歸と作れり、又此日の酒、よく聾を治む、故に治聾酒と名づくと、海錄碎事に見えたり、また燕は、春社の時にいたり、秋社の時かへると、月令廣義にあり、

〔榮花物語〕〈二十五 峯の月〉かんの殿〈○後一條后藤原威子〉の、は、七月にあたり給て、御はらいとふくらかにくるしげにみえさせ給、〈○中略〉かくてこゝろのどかに、しばしおはしまさせまほしう、大宮〈○上東門院藤原彰子〉もとの、御まへ〈○藤原道長〉も、おぼしめしたれど、あ。き。の。節。分。に、いととくいりぬべければとて、七月〈○萬壽二年〉三日うちにかへらせ給、

〔中右記〕保安元年七月四日壬寅、今夜秋節分也、

〔源氏物語〕〈五十 東屋〉おのづからおぼすやうあらん、うしろめたうな思ひ給そ、なが月はあすこそせ。ち。ぶ。ときゝしかといひなぐさむ、

〔中右記〕保安元年十月八日、今日冬節期也、

○按ズルニ、立春前日ノ節分ノ事ハ別ニ其篇アリ、

彼岸

〔叢林集〕〈九〉彼岸會事　二月ハ、春分ヨリ三日下ノ日ヨリ七日、八月ハ、秋分ヨリ三日下ノ日ヨリ七日、コレヲ彼岸ト云、

○按ズルニ、彼岸ノ事ハ彼岸篇ニ詳ナリ、

社日

〔書言字考節用集〕〈二 時候〉社日（シヤジツ）〈立春後五戊爲春社、立秋後五戊爲秋社、此日祭后土、爲民祈穀、見淮南子註、事林廣記、〉

〔月令廣義〕〈一 歲令〉祀社〈立春後五戊日爲春社、立秋後五戊日爲秋社、凡春秋二社、有司祭社稷、民社從各郷居人自立祭祀隨俗、山東有司每歲清明、仲冬各郷備進牢宋、里長每里齎稷飯一器詣城壇、有司官驗視祭社稷、祭畢以飯盡施養濟院、其名曰設殺、蓋祀社之遺意、〉

〔荊楚歲時記〕社日四鄰並結綜、會社牲醪、爲屋於樹下、先祭神、然後饗其胙、　按、鄭氏云、百家共一社、今百家所社綜、即共立之社也、

〔東京夢華錄〕〈八〉秋社　八月秋社、各以社糕社酒相賫送、貴戚宮院以猪羊肉腰子嬭房肚肺鴨餅瓜薑之屬、切作棊子片樣、滋味調和、鋪於飯上、謂之社飯、請客供養、人家婦女皆歸外家、晩歸、即外公姨舅皆以新葫蘆兒棗兒爲遺、俗云、宜良外甥、市學先生預歛諸生錢作社會、以致雇倩祗應、白席歌唱、

九月　鴻鴈來賓　爵(○爵、曆林問答集、下學集作ㇾ雀、)入ㇾ大水ㇾ爲ㇾ蛤　菊(○菊、禮記月令作ㇾ鞠、)有ㇾ黃華ㇾ　豺乃祭ㇾ獸　草木黃落

蟄蟲咸俯

十月　水始氷　地始凍　雉入ㇾ大水ㇾ爲ㇾ蜃　虹藏不ㇾ見　天氣上騰地氣下降(○下學集作ㇾ天氣升地氣降ㇾ)　閉塞

而成ㇾ冬

十一月　鶡旦不ㇾ鳴　虎(○虎、曆林問答集作ㇾ武、)始交　茘挺出　蚯蚓結　麋角解　水泉動

十二月　鴈北鄕　鵲始巢　雉(○雉下、曆林問答集、下學集、並有ㇾ始字ㇾ、下文雞字下亦同、)雊　雞乳　征鳥厲疾　水澤腹堅

○按ズルニ、七十二候ノ解釋ハ、上文二十四氣條ニ引ク曆林問答集ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔書言字考節用集 二 時候〕節分(セツブン)

〔隣女晤言 一〕節分　曆に立春の前日をせつぶんとありて、他の季には云るさねば、冬の事とのみ世にはおもへど、四季ともに果の日はせちぶんといふべし、伊勢集に、

せちぶんのつとめて、四月朔日みやにて、

いづこまで春はいぬらん暮はてゝ別しことはよるになりにき

かへし　兵衞佐命婦

くれはてゝ春のわかれのちかければいくらのほどもゆかじとぞ思ふ

源氏やどり木の卷にも、春より夏にうつる所をせちぶといへる事あり、かう立夏の前をせちぶんといへれば、他の季もなぞらへて知べし、

〔源氏物語 四十九 寄生〕夏にならば、三條の宮ふたがるかたなりぬべしとさだめて、四月ついたちごろせちぶんとかいふ事、まだしきさきにわたし奉りぬ、

〔中右記〕保安元年四月朔日辛未、今夜夏節分也、

此宣下、上卿事、三公各未ㇾ拜賀、亞相中或未ㇾ拜賀、或未ㇾ著陣之間、下中御門中納言宣胤云々　十一月壬午、今日雖ㇾ爲十月晦日、依改曆爲朔日也、

〔月堂見聞集 十〕享保三戊戌霜月、朔旦冬至ニ付、紫宸殿之前ニ竹垣ヲ結ビ、諸人之拜見此方不ㇾ通、月華門ノ傍ニ、幄ノ屋立ツ、門内ニ疊ヲ敷キ、高机ニ供物アリ、勤役之公卿四人黑袍ヲ著シ、一人ヅヽ一拜アリテ、机ノ兩面ニ並座ス、又一拜アリ、其時殿上人赤袍ヲ著シ、四五人來ル、其ノ跡ヨリ白丁ニ烏帽子著タル人、長柄ノ銚子ヲ持來ル、殿上人酒ヲ受テ呑、自酌ヲ取テ公卿ニ勸ム、公卿土器ヲ受テ呑ム、其時賀表ヲ竹ニ挾テ持來リ公卿ニ渡ス、一人立テ賀表ヲ持テ、紫宸殿ノ階ヲ登ル、是ニテ終ル、賀表ノ文幷公卿ノ御名尋テ記スベシ、

〔翁草 百九〕朔旦冬至　百二十代今上皇帝〇御諱兼仁光格　實は帥宮典仁親王の御子也、〇中略　天性聰明の君にて、御學問を好ませられ、朝儀の廢れたるを與し、舊きに返さしめ給ふ、叡慮淺からず、天明六丙午年朔旦冬至に當れり、故に絕へて久しき旬節會を行はれ、南殿に出御成て、臣下賀表を奉る、

七十二候

〔拾芥抄 上本 七十二候〕正月　東風解ㇾ凍　蟄蟲始振　魚上ㇾ氷　獺祭ㇾ魚　鴻鴈來　草木萌動
二月　桃始華　倉庚鳴　鷹化爲ㇾ鳩　玄鳥至　雷乃發ㇾ聲　始電
三月　桐始華　田鼠化爲ㇾ鴽　虹始見　萍始生　鳴鳩拂ㇾ羽〇禮記月令、曆林問答集、並羽上有二其字一、　戴勝降二于桑一
四月　螻蟈鳴　蚯蚓出　王瓜生　苦菜秀　靡草死　小暑至〇小暑至三字、本書據二禮記月令一在二五月下一、今據二曆林問答集一改、下學集作二麥秋至一、
五月　螳螂生　鵙始鳴　反舌無ㇾ聲　鹿角解　蜩始鳴　半夏生木菫榮
六月　溫風始至　蟋蟀居ㇾ壁　鷹乃學習　腐草爲ㇾ螢　土潤溽暑　大雨時行
七月　涼風至　白露降　寒蟬鳴　鷹乃祭ㇾ鳥　天地始肅　登ㇾ穀〇登穀、下學集作二禾乃登一、
八月　鴻鴈來　玄鳥歸　群鳥養ㇾ羞　雷始收ㇾ聲　蟄蟲坏ㇾ戶　水始涸

卿被下知藏人右少辨俊名、辨被下知官務雅久宿禰、成宣旨於五畿七道曆博士等云々案文可尋記、保元延慶共、當流申沙汰宣旨符之案無所見之間、嘉吉元年度、傍家不成宣旨之由、有其沙汰、今度以何符案令下知哉不審、當流文書悉今度亂中於宇治平等院寶藏紛失、若令分散歟不審、兵亂初土御門大宮第、同文庫等、軍兵放火燒失、其以前文庫文書、代々記錄數百合、渡于宇治寶藏森坊平等院僧也出預狀文、亂中盜失之由稱之、悉紛失、自去年中武家、以奉行彼坊僧等所行御糺明、未無落居、一流奉公時節到來、可謂斷絕歟、但不成怠轉憂記錄等求集、局中奉公子孫可勵計略者哉、今日宣下案兩局勸例、并一條禪閤關白○兼良御申詞等、寫取給之、

師富朝臣
朔旦冬至改曆事、引勘候處、亂後當局文書難得之間、所見不詳候、但嘉吉元年閏九月十二日、內大臣召大外記師世朝臣於里亭、今年朔旦冬至、雖非章運可被行嘉例哉否事、紀傳明經博士、可勘申之由被宣下之、去八月口宣、職事藏人右少辨資重參里亭被申之、左大辨三位爲清卿、清大外記業忠眞人、兩人可進別勘文由被宣下之、同十六日、朔旦冬至可被行賀禮哉否事有仗議、公卿內大臣以下諸卿參入之、諸道勘文四通在之、同廿九日、今月爲大之處、改曆之間、今月大爲小、十二月小爲大者也、於改曆宣旨者、官方申沙汰之間、當局不存知候、可令得御意候、恐惶謹言、

十一月廿一日　師富上

三條殿○中略

宣旨案
文明十一年十月廿四日　宣旨

今年十一月朔癸未、置冬至而非章蔀期、無中間會、由是任保元延慶例、以今月卅日壬午爲十月朔、退冬至於二日、以十一月廿九日辛亥可爲晦日、宜下知五畿七道百官、且仰曆博士等、令改進御曆者、

藏人頭右近衞權中將藤原實興奉

皆雖非代始被行平座者例也、爲准據之條、何事有哉者、已上後所談如此、猶可尋也、

（朔旦冬至事　應永廿九十一朔）今日相當朔旦冬至之由、曆道勘申、凡臨時、朔旦冬至未致用之、先例皆以被曆改者也、今度算道之輩、不及申所存、仍無爭論之上、一上頻可被行旬儀之由被計申改、然猶旬儀者被止之、可爲平座之由、有院仰、但可奏賀表云々、

一表事　廣橋大納言兼宣草之、當時第一儒者也、舊例或不依座次、名譽人被仰下云々、然而明德以來三ヶ度、彼卿草進云々、可謂傍若無人歟、

一同清書事　藏人左少辨俊國書之

一料紙事　白色紙（無薄三枚樣、加懸紙一枚、）之打之、

一公卿署事　左大臣（○藤原持基）於里亭被加之、万里小路中納言、藤宰相等於陣後加之、自餘公卿不參、仍不加署、三公於里亭加署也、上卿起座經壇上著宜陽殿、次予退、右足揖起座（作居座逆、行下足、）著沓揖經宜陽殿東壇上、於端座末程揖、沓昇懸膝、經臺盤南著奥座（左突膝、）揖直足緣寄裾、（著奥事、先賢所爲也、花山院左大臣殿、幷中山内大臣殿等御進退如此、委見長寬二年十月御記、者也、成人可著端之由議之、朔旦冬至平座例、）

朔旦冬至不出御例等、見壽永二年九月十五日深山御記、件御記曰、昌泰元年十一月朔日朔旦冬至也、天皇不出御、權大納言菅原卿奏賀表、今日平野祭春日祭也、九坎日也、今日不出御事、子細不分明、欠日之故歟、然而非初度、不可憚歟、若當平野春日祭之故歟、今日御記不分明、依平野祭不出御之由、見延喜四年四月旬日御記也、推而知之、　已上如此記者、洞院大納言申狀、昌泰已來相當代始不出御候也、申之不相叶歟如何、

〔長興宿禰記〕文明十一年十月廿四日丙子、今日有改曆宣下、來月一日冬至也、當時其禮雖被行之間、任保元、延慶、嘉吉等例、被改曆、以今月卅日、爲十一月朔、退冬至於二日、可改曆之由、職事三條頭中將實興朝臣宣下、上卿中御門中納言宣胤卿也、三公各未拜賀、大納言當時各故障之間、彼卿爲上卿、上

遣里第、則注申此例也、　首書曰、次第奥繼之記云、寛治二内府雖被帶大將任近例左府先被昇、仍出居右近少將顯實先是昇殿云々、次左大臣以下昇殿、爲房卿申定殿下云々、建仁御記云、右大臣爲左大將、仍出居次將頭中將公信朝臣公卿昇殿之後昇殿云々、　次大外記予、大夫史匡遠、大外記師利、權大外記康綱、權少外記師廉、頼清、右大史盛宣、左少史俊春、右少史□□等著階下座、次出居侍從右中辨光守朝臣入日花門、經宣陽殿前、入軒廊東間、昇東階著東庇床子、則經本路退出、出居次將宗兼朝臣召内豎、二音頭某入日花門立櫻木下、承仰退出、此間予相伴頼清早退出、此次詣源亞相禪門亭、傳勅答之趣歸畢、

〔薩戒記部類〕朔旦冬至間事向廣橋大納言許、中御門中納言宣輔來會、談曰、昨日參左府亭、二條左府被談曰、當年相當臨時朔旦冬至可被行旬議否、以下條々以藏人權辨經直被尋仰之、臨時朔旦冬至者、開闢以來以上三ヶ度歟、然而於以前兩度者被改暦了、但件度各不吉之間、以件例雖計申、又以折中議可被行平座歟由被仰下、是又雖有准據、章運朔旦例猶以不悟、仍今度以新儀可被行旬儀之條、何事之有哉、改暦幷平座共不甘心、若於旬儀爲大儀之由、被思召之樣、縱雖行平座、於賀表奏覽者、不可略之、然者諸司參仕不可減旬儀、於公卿侍臣者祝公事、皆以爲私力之計略歟、此由申御返事、若猶可被行旬儀之條、不相叶口口者、廣被經御沙汰、可略賀表之由、可被宣下歟、是猶可謂不快、如何者、猶前内相府殿者猶可被行旬之由被申之、此事以前兩度共有公卿僉議、今度又可然歟由、廣橋大納言雖申、院不能返事、又可有勅問歟由、同申入云々、兩條共相違時宜歟云々、尤朝家重事也、又曰、若今度被改暦者可爲四大八月大、九月大、十月大也、閏十月爲小、若爲大者四月也、可有憚之由、暦博士賀茂在方申之、猶今度者無算道申狀、仍不及冬至當不之相論、文永七年雖當之、前年有不被用之、於德治元年者不可論改暦由、前年被仰之、而花園院御卽位之後、又及勅問改暦了、仍於今度者可被行旬儀之由所被申也、於代始者依万機旬以前無出御、仍被行平座、於今者不可有其儀歟、而院仰云、於朔旦冬至者雖如此、二孟旬、幷豐明、重陽宴會等、

由有勅定云々、仍以史生助豐申御署之處、爲御乘車出門給、御披見之後、已參內之上者、於御所可被加云々、則參御內、於陣後加署給、御遲參雖不可然、固令守先規給之條、壯年人之所爲可貴々々、先是大炊御門中納言冬信卿參陣、下車之間、史生行向車前申署被加之、兩人加著陣座給、以頭大夫經季朝臣、被申御曆奏候之由、口勅答、此間外記史部二人、（可著衣冠、近年衰微之間、只著淨衣冠、不可爲例、）舁賀表案立床子前、（辨座與外記座中程也、案者南北妻立之、賀表函者東西橫置案上、）于時少納言在淳朝臣、權右中辨實夏朝臣、右中辨光守朝臣、大外記予、大夫史匡遠、大外記師利等候床子、史生助豐、行有、（召使爲代）舁表案立宣仁門前、（敷政門內、案南北行、函西東也、）權大外記康綱、權少外記師廉舁之、（先居案下、播笏更立舁之、）入宣仁門經參議座後昇宜陽殿壇上、南行入軒廊東一間、更西行立軒廊西一間中樣程、（外記舁案妻、相並于左右、各前聊向テ舁之、不舁前後、舊記次第等舁前後云云、而不逆行云々、然者左右聊相違之條叶儀歟、依事之便以左爲前、下臈前、上臈後也、）各於案下蹲居、拔笏更立、經本路退、於件案南北立之、賀表函案上橫（聊）置之、西頭（聊）置之、（賀表頭以西爲上、東下聊爲之、）右大臣起座立陣前庭給、（北上西面）內大臣立右大臣南、（西面）大納言一列、（大臣後）中納言一列、參議一列、（于時雪飛舞、代々佳例也、）內侍出臨東檻、右府揖離列、入軒廊就案、跪插笏取表函、（不取花足、）昇東階（三級許歟、不見及也、）授內侍、內侍持參函、天覽之後、以藏人令置御殿厨子云々、但其儀不見及、右府已下、次第經本路歸著陣、左衞門督先被立陣、右府先被立、爲無骨之間、父子之故也、中宮權大夫來著陣之間、入宣仁門被加立之、頭大夫經季朝臣來仰、賜任符未著任、及未賜任符國司、未得解由大夫令候座（與）、上卿召予被仰之、予唯退、主上御南殿、（自是先出御、被御覽陣儀、）公卿起座、於陣後被著靴入宣仁門、經宜陽殿壇上入軒廊、昇東階著兀子、先是出居次將頭中將宗彙朝臣入宣仁門、經軒廊昇東階、著東庇床子、寬治、右大臣爲上卿、內大臣大將□參陣、出居次將先昇殿、次上卿昇殿、建仁、貫首大臣、（某）次大臣大將、（後京極殿歟）出居次將、依敬大將、先大臣大將昇殿、次上卿昇殿、次出居侍從昇殿、先例兩樣之由、以職事被奏聞、可守寬治例之由有勅定、此事上卿被問予、常座不覺悟、先例兩樣條勿論、但多少不覺之、近年世上動亂、重事預問、心中物忩之間、如此事不及勘例覺悟爲耻、但非私之意、爲天下也、冥鑑之令許給歟、上卿以康綱、（一臈外記）爲勘先例被

〔百練抄九安德〕壽永二年十一月一日、朔旦旬也、然而不被行敍位、今年被止豐明節會之故也、朔旦、自長寬二年今年當二十年、算勘雖不叶、以一章之年數置之例也、　十二月十九日、被行朔旦敍位、依無豐明節會、今年可被付行御卽位敍位之由被定之處、御卽位又延引、仍所被行也、

〔朔旦冬至部類記〕大外記賴元記云、建武二年十一月一日戊申、朔旦冬至也、仍被行旬儀、日出之程裝束（玉帶不透）參陣、奉行職事、藏人頭大膳大夫經季朝臣一人之外無人、廻常御所方、以得善不少進入、昨日源大納言入道狀、付勾當內侍、准后御方（東宮御母儀）爲御所、則被召御前、條々有申入、暫祇候退出、詣右府申合賀表御署事、則歸參內裏、賀表權右中辨實夏朝臣清書、昨日作者式部大輔長員卿進左府、卽可被下清書人處、御奏聞云々、無先例如何、而叡覽之處、少々有被直改事、內々以頭大夫狀遣長員卿許、其後自內裏被返左府、仍去夜亥剋被下於清書人許云々、（予召進二藹外記於殿下、爲被下清書人也、）清書畢、寅剋以狀被遣予許、仍昨日不及取諸卿署、今朝參內之間、令隨身可申殿下御署之由示遣三藹許、然間殿下令參內給、仍取返之付頭大夫、進入於臺盤所、被加御署（六位藏人長綱持經季朝臣平文硯從之）、被返下、其後以史生代助豐申右府以下署、然間參內公卿等、於陣後壁外或宜仁門前被加署、午剋右大臣（公賢公）參入給、入左衞門陣入敷政門給、予、大夫史匡遠、大外記師利、一藹外記康綱（權大外記）候床子、各平伏、相續左衞門督（實世卿）參陣、各先被參御所方、春宮大夫（師平卿）右兵衞督（公重卿）中宮權大夫（實平卿）大貳（經顯卿）葉室宰相（長光卿）等、於宜仁門前被加署、史生代助豐持表入莒蓋、召使行有持硯（御硯局）、上卿右大臣參陣給、春宮大夫藤原師平卿、侍從中納言公明卿、德大寺中納言公清卿、左衞門督實世卿、右兵衞督公重卿、大貳經顯卿、葉室宰相長光卿等加著之、（于時中宮權大夫徘徊宜仁門邊、未著陣之故也、）召大外記清原賴元、被問諸司具否、申候之由、又被問御厨奏、申候由、又被問出居侍從、又被問此外公卿參否、內大臣申未被參之由、中宮大夫（具親卿）被問參不進參之可得心之由被命云々、申未定之由、蒙目唯退、上卿以官人被仰可昇立賀表案之由、而內府未參給、仍未加御署之由申之、可相待云々、頭大夫被仰曰、內府遲參之上者、以史生送進賀表、忩可申署之

但於先例者無所見矣、後日、朝隆朝臣來云、光房依殿下〈○藤原忠通〉仰、菅案等可用寛治例之由仰下、如何者、答云、可從殿下仰者、　廿五日丙寅、左大辨卿著束帶、持來賀表草、〈續檀紙二枚書之、無禮紙、件草可續紙別記、〉次修理大夫敦任令取表云、須對面、依假寒不相逢、〈其實依寓經不逢也〉敦任持來表之間、親隆著衣冠來云、依左大辨告所參也、余不知此由、令敦任取表、足爲悔矣、其表有四商表受朔之文、以親隆仰難旨、件事具別記、光房遂札云、攝政御消息、賀表清書右少辨光頼可奉仕之者、權右中辨朝隆朝臣能書之譽冠絕于當世、光頼未有其譽、以其父顯頼卿之例令書之、未知是非耳、先日所仰之諸卿已下諸司參否、注一紙師安持來云、重仰儲可催、又巳剋以前可參之由可仰者、　廿七日戊辰、依昨日招頭辨資信朝臣來、依物忌不逢、以敦任給表云、可覽攝政者、移時持來云、早可令清書者、抑覽表草事、非覽帝、只覽執柄也、成人主更不覽、只覽關白、然者以大外記可覽歟、然而長元四年、實資大臣以頭辨奉覽關白之由、見彼記、今追其例也、　廿八日己巳、召大外記師安給表草云、使右少辨光頼清書者、長元四年、大外記文義申事由於關白、表中關白名字〈除典達署之外也〉以清書人令書之由、見日記、〈實資記也〉今度又可申殿之由仰之、師安即參殿申御名字事、仰云、以清書之人可令書者、即遣表草幷料紙〈先日左大臣給外記〉於光頼宅令書云々、先日余申攝政殿云、今度辨官爲清書人、直召余亭賜之、有其便歟、仰云、任先例以外記傳給、可无難者、仍從此命、　十一月一日壬申、朔旦冬至也、群臣進賀表、上御南殿燕群臣、事畢拜舞罷、

〔玉海〕壽永二年十月廿三日甲寅、召陰陽師賀茂在宣〈圖書頭〉及晩來、召簾前問之、〈○中略〉余〈○藤原兼實〉此次尋問事等、　朔旦事、申云、凡十九年爲一章、然者自初朔旦年廿年ト云ニ相當也云々、久安朔旦以後、保元又朔旦冬至出來畢、〈當二十四年云々〉古來雖一章猶有無朔旦之例、無縮年限中間有朔旦之例、仍有議〈信西沙汰〉被止了、不待一章之條、雖有不審、算勘一切不誤、是天之與嘉瑞也、而遁而不被用之、時人所傾奇也云云、今度大略相當、雖有聊之相違大都叶算勘云々、　十一月一日辛卯、此日朔旦冬至也、依爲即位以前、不出御南殿、只奏賀表、付御暦於內侍所、仗座設饗、偏依昌泰例所被行也、

〔本朝續文粹四表〕朔旦冬至賀表　敦光朝臣

臣忠通等言、珠璧連耀、測景暑於周臺、笙鏞奏聲、迎時律於漢室、哲后撫運、暗協禎符者也、臣某誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、伏惟皇帝陛下、踐翼承基、欽象均德、奉順天地之道、富有春秋之齡、閏餘正時、八九之節候不忒、寒暑成歲、十千之稼穡斯豐、況今月壬辰、朔旦冬至、得天之紀、周而復始、撿之方策、則列辟稀逢、尋之彝章、亦羣僚稱賀、猶哉、同幼年於軒年、大椿之陰更盛、比聖日於堯日、若華之光初昇、臣等値此有慶之昌期、獻以無疆之上壽、高望絳闕之雲、共雙鳳而來儀、新擊黃鍾之石、與百獸而率舞、凡在庶品、孰不傾心、非無欣躍之至、謹拜表以聞、臣某誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

大治元年十一月日

〔台記〕天養二年（○久安元年）閏十月九日庚戌、參內、依大粮申文也、○中略申文了起仗座之後、於陣腋、頭辨仰云、使左大辨藤原朝臣（顯業）作朔旦冬至賀表、答承由、頭辨云、賀表事先被仰左府、○源有仁依病被辭申、仍所被仰也、　十一日壬子、始自今日造朔旦旬次第、（執筆俊通）　十四日乙卯、造朔旦旬次第了、　十六日丁巳、今日依日次宜、（惡日不可仰之由、有殿仰、）□□□□爲仰朔旦賀表事、遣召左大辨（先日召之）之處、依疾不來、因之以大外記師安令傳仰、差遣六位外記仰之云々、永承五年朔旦賀表事、宇治殿（于時關白左大臣○藤原賴通）以大外記貞觀令傳仰云々、（寬治二年匡房記）依彼例所爲也、此次朔旦旬次第給師安、　十七日戊午、出居次將、侍從等、可仰上卿、而于今不仰、仍示驚光房、今日來仰云、次將頭左中將經宗朝臣、侍從右京權大夫顯親朝臣、即以此旨仰師安、又酒番侍從可催之由仰之、昨日師安云、賀表料紙（白色紙）一上賜外記、是嘉承大治之例也、其以來不知用何所紙、今度左府依惱不宜下、表事猶左府可賜歟、將尊閤可給歟、　十八日己未、依先日召、權右中辨朝隆朝臣（裝束使）來、仰可令作賀表案莒花足令設錦臥組丸緒之由、（案莒花足造、曹司作之、錦臥組丸緒、厨家設之、）色目寸法等、書一紙給之、其寸法等依延久例、（其主後三條院、其臣京極大殿、爲吉例之故也、後三條雖其祚不長、賢名流于後世、故曰吉例、于時大殿上宣下表事、）長元四年、實資大臣召史仰案等事之由、見經賴記、然而案他事、無上卿召仰史例、仍召辨仰之、

月也、去十一月朔日蝕不現由也、彼時雖不當朔旦冬至、十一月蝕尤爲君有其愼之故歟、　十一月廿九日庚辰、曉頭參內、今日御卽位幷朔旦敍位也、○中略 爰有僉儀、仰云、朔旦與御卽位、從昔未相合、而諸道博士等、朔旦之時、或浴其恩、或又不然、但寬弘九年、朔旦與大嘗會敍位相合之時、只曆道許被賞、可用彼例歟、可定申、人々多可有賞、且亦可隨勅定被定申、下官○藤原宗忠 申云、朔旦佳會、已代初也、加之相當御卽位、不圖吉祥也、諸道尤可有賞也、賞之疑及廣、如此謂也、一人有慶、兆民被之義也、人々多被同申、但殿下○藤原忠實 仰云、此中諸道人々、或依年限入外記勘文、自然可蒙賞、只今兩三人許、勘文之外、所申請也、以頭爲房、被申院歟、僉議之間、執筆左大辨、依次第申上也、

〔本朝續文粹 四表〕朔旦冬至賀表　江帥

臣忠實等言、知機其神、先見先古之符命、膺籙爲后、必受希代之休徵、彼蒼之貺、不其悅乎、臣某等誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、伏惟皇帝陛下、名高二昊、德被三才、王澤如春、桃李施不言之化矣、帝道似歲、寒暑迎克○克一本作能 調之氣焉、馬放華山、周年之草烟老、鳳巢阿閣、堯日之竹露暄、臣謹案曆日、十一月壬子朔旦冬至、誠是經列聖而難値、鐘治世而偶來者也、景緯、○緯一本作緒 著上、推步履端、黃軒同瑞、論長生於少典之子、炎漢垂祥、顯上壽於太宗之孫、測玄至於霜露之所均、一陰一陽、在璇璣於宿耀之不忒、如珠如璧、昧旦肅儀、圓丘之曉雲雖隔、翌日受禮、上邦之昔風猶開、況亦日官感曆數之自殊、天臺奏陰曦之有慶、扶桑之添耀也、何損於明、葵藿之傾心也、無斷其影、李家五色、求同類於斯、栗社數周、猖異時於時、○時一本作彼 山雲膚合、扶木何損於明、維雨聲寒、若華無斷其影、龍圖鳳曆之初、吉兆非一、垂衣負扆之後、福應相重、臣等幸逢有截之昌期、近覩莫大之盛事、春秋惟富、如望日之升月之恒、朝野耉欒、不知手之舞足之踏、山玄水蒼、率雲官而來賀、星施電載、排霜仗而歡呼、不堪欣感、謹奉表以聞、臣某等誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

嘉承二年十一月二日

可謂其瑞而已、　二日丁亥、當冬至中、○中字前後、恐有誤脫、仍無慶賀、

〔日本紀略 三條 十二〕長和元年十一月一日甲午、朔旦冬至、公卿上表奉賀、天皇不出御南殿、　廿五日戊午詔免除徒罪以下、依朔旦冬至也、

〔日本紀略 後一條 十四〕長元四年十一月一日甲戌、朔旦冬至、天皇出御南殿、公卿獻賀表、式部權大輔大江擧周作之、中納言兼隆遣喪、仍除之、

〔扶桑略記 後冷泉 二十九〕永承五年十一月、朔旦賀、先是大法師增命奏曰、今年閏可在十一月、因之令算道并曆博士賀茂道平、僧證昭各獻勘文、算道同增命奏、曆博士確執、延曆以後、一章不誤、承平六、曆家之失也、我朝異國曆相違、古今例多、然而公家不必用異國說之由勘申、仍有件賀也、

〔中右記〕寬治二年十一月一日、朔旦冬至今日有旬、御出以前先有公卿賀表左大辨之儀、

〔百練抄 堀河 五〕嘉承二年五月三日、今年朔旦冬至、相當日蝕可勘申準據例之由、被仰諸道、

〔中右記〕嘉承二年十月卅日、晚頭可有仗議、參內、人々來被參、仍先參前齋院御方、次參殿上、秉燭之程人々參入、仍著仗座、○中略　左府被下諸道勘文、是來十一月朔旦冬至、相當日蝕并諒闇、○堀河此年七月崩準據例何樣可被行哉事也、左大辨讀勘文、外記官大宰帥大江匡房勘文、紀傳明經二通、助教清原定俊、明法、算、陰陽、曆道、天文二通、博士宗明、明師遠、各勘文、人々被定申旨各不同也、或勘定、或被行何事之有哉、但予定申云、件事如諸道勘文者、往古以來朔旦之時、全無當日蝕、或引准據例、或立今案議所申不分明、今年初當日蝕、是太陽虧者、諸司曆務者、付之思之不可有拜賀表歟、諒闇之中依有祥瑞、嘉祥三年、文德天皇初有賀表之故也、就中縱雖不當朔旦、日蝕不正現時、諸卿進賀表例、先規間存、抑明經道勘文可被尋問歟、左兵衞督同此議、委趣見定文并勘文、左大辨同書定文、且先以詞付藏人辨顯隆被奏聞、攝政殿仰云、依為大事、早書定文、後日心閑可被奏、人々退出、但左大臣左大辨留仗座、依有他公事也、後聞有當年不堪申文見左大臣之　十一月三日、諒闇賀表例、昔嘉祥三年、文德天皇初有祥瑞時、白龜廿六日公卿進賀表也、日蝕不現之時、奏賀表之例、貞元二年十二

賜飮侍臣、錄文武官及校書殿內豎等見直者奏之、十六日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣、賜文武官祿、○下略

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年十一月丙辰朔旦冬至、右大臣已下參議已上抗表賀曰、○中略於宜陽殿西廂、賜親王已下次侍從已上飮、非侍從四位五位及未得解由五位已上國宰被喚預席、宴竟賜祿各有差、廿五日庚辰、詔曰、○中略天皇御紫宸殿、宴于百官、大歌五節舞並如常、賜祿各有差、

〔菅家文草 十表〕爲公卿賀朔旦冬至表

臣基經等言、臣聞、潛鱗游泳、樂春水於和風、稚羽來賓、拂曉雲於秋月、彼微情之二物、猶感奉天、況在位之群臣、誰忘欽化、臣某等誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、夫三乘知程、四勝得道、斯乃寒溫之平也、雙離合璧、五緯連珠、斯乃聖哲之事也、臣等謹案曆曰、十一月丙辰、朔旦冬至、稽之舊章、理誠宜賀、伏惟皇帝陛下、欽若無掩、昇惟馨於昊天、敬授不偸、襲其鼎於黎庶、蓋古先帝之所希有、舊史氏之所罕言、陛下得之明德至矣猗歟、日則南至、陛下向陽之美可觀、星惟北共、臣等詣闕之誠何切、聖壽無疆、明時有瑞、不勝抃舞、拜表以聞、臣某等誠歡誠喜、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

元慶三年十一月一日 ○又見本朝文粹四

〔扶桑略記 二十三 裏書〕寬平十年十一月一日丙申、朔旦冬至也、

〔日本紀略 一 醍醐〕昌泰元年十一月一日丙申、朔旦冬至、諸卿上賀表、但天皇不御南殿、廿一日丙辰、詔免徒罪以下、依朔旦冬至也、

〔扶桑略記 二十三 醍醐 裏書〕延喜十七年二月廿日己亥、兵衞志多治有行與曆博士等論可元朔旦之由、十一月一日丙子、朔旦冬至也、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜十七年十一月一日丙子、天皇御南殿、受朔旦冬至之表、

〔日本紀略 二 朱雀〕承平六年十一月一日丙戌、去延喜十七年十一月朔旦冬至之後、今年當一章十九年、

殿、宴百官、○中略 宴訖賜祿有差、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年閏十月廿三日己巳、勅從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、正五位下守權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、正五位下守右中辨藤原朝臣多緒、從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、從五位下守主計頭兼行木工權助算博士有宗宿禰益門等曰、今年一章十九年、准據先例、當有朔旦冬至、而曆博士眞野麻呂等所上曆、以冬至在十一月二日、若於經史有可進退之理乎、宜議而奏之、是善等奏議曰、謹案、眞野麻呂所執、以爲依日分小餘不足、不得合朔、論之曆術、理若當然、但案曆經注云、月行遲疾、曆則有六大六小、以日行盈縮增損之云々、當察加時早晚、隨其所近而進退之、使不過六大六小、其正月朔、若有交加、時正見者消息前後一兩月、以定大小、令虧在晦者以此言之、既有進退之理、而今當年曆八月大、九月小、十月大、閏十月小、然則以一小月爲大、自得朔旦冬至、夫朔旦冬至者、曆數之所始、帝王之休祥、既云避凶而在晦、何不逐吉以退朔、昔唐太宗貞觀十四年有閏十月、即得朔旦冬至、太史令傅仁均以癸亥爲朔旦冬至、而宣義郎李淳風案古曆分日、以爲甲子宜在朔旦、詔下公卿及諸有識、於是國子祭酒孔穎達等十有四人、尙書八座、請從淳風議、有詔可之、雖然至於後年、不見晷耀之愆、爰知一日進退未足爲妨、又尙書音釋云、頻大消之、案其意義、每至章蔀之歲、必欲令得朔旦冬至、故頻置大月、至於三四、夫三大三小者、曆術之常法、況今唯置二〇二原作七、據類聚國史改、大、既得合朔乎、又勅從五位下行曆博士兼備後介大春日朝臣眞野麻呂、外從五位下行陰陽助兼權陰陽博士笠朝臣名高等曰、今諸有識等僉議云、今年可置朔旦冬至、若依此說、遂吉置朔者、於後年曆、得節氣不錯謬歟、眞野麻呂等奏言、謹檢術法、無依吉進退之文、仍今年不置朔旦冬至、但依群臣議置之、可無弦、望、晦、朔之差、於是詔從是善等之議焉、 廿五日辛未、宜詔百官及五畿七道諸國云、今年當有朔旦冬至、而曆家偏依日分不足、置於二日、今稽之故實、既有改定之理、宜改閏小月爲大、即以十一月二日丁丑、爲朔旦冬至、 十一月丁丑、朔旦冬至、○中略 公卿上表賀朔旦冬至、○中略 是日、帝御前殿、

もためし有事なり、年中行事にもあらず、あながちゑるすべきにはあらねども、日をさだめたる事なれば、筆のついでに十一月一日の事に、いさゝかゑるしくはへ侍るなり、

〔光臺一覽 二〕十一月朔日、若冬至今日に廻り當れば、朔旦冬至とて、天子の御賀と有て、今夜節會を御行御事なり、陣の儀式、三節會に大略同じ、若又十月晦日冬至なれば、朔日へ延し、十二月二日冬至なれば、朔日へ縮めなどして、節會を御行御事なり、但暦の動にはあらず、節會を屈伸せる義祝なりと心得べし、左様に朔旦冬至なされ度思召佳儀なれば、よく〳〵天子の御身の上に極りたる御賀とか奉推候、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦三年十一月戊戌朔、勅曰、十一月朔旦冬至者、是歷代之希遇、而王者之休祥也、朕之不德、得値於今、思行慶賞、共祝嘉辰、公卿已下宜加賞賜、京畿當年田租並免之、

〔類聚國史 七十四 歲時〕延暦二十二年十一月戊寅朔、百官詣闕上表曰、臣聞、惟德動天、則靈祇表瑞、乃神司契、則懸象呈祥、伏惟天皇陛下、則哲承基、窮神闡化、功被有截、德輝無方、伏撿今年曆、十一月戊寅、朔旦冬至、〇中略 又今年十一月、朔旦冬至、皇太子某、及百官表賀、曰、軒轅之年、寶鼎呈祉、陶唐之世、金精表圖、朕以、褚之前修、誠合嘉瑞、天之所祐、古今寧殊、可久可長之功、不召而方至、太平太同之化、不言而自成、朕以靈徵之攸臻、必資厚德、休命之所感、乃通至仁、顧惟庸虛、但增慙歎、思施凱澤、以答天慚、自延暦廿二年十一月十五日昧爽以前、徒罪以下、口無輕重、悉皆赦除、但犯八虐、故殺人、謀殺人、强竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、敢以赦前事相告言者、以其罪罪之、其王公以下、宜加賞賜、但能盡忠力、先有勳効者、特加爵賞、用申褒寵、内外文武官主典已上、敍爵一級、正六位上者宜量賜物、天下高年、百歲以上穀二斛、九十以上一斛、八十以上五斗、庶恤隱之旨、感於上玄、珍貺之應、被於中壤、布告遐邇、知朕意焉、

〔類聚國史 七十四 歲時〕弘仁十三年十一月丁巳、朔旦冬至、百官奉賀、〇下略

〔續日本後紀 十 仁明〕承和八年十一月丁酉朔、是日、朔旦冬至也、公卿上表慶賀、　丙辰、是日、天皇御紫宸

次將仰云、御飯給、采女立御臺盤、二脚立御前（南北妻、北懸御幌、一脚東西妻、立於置物机南、南居小床子、）一脚立東二間廂（酒器還西柱南長押、立南北妻、）內豎立臣下臺盤、（四尺四脚、八尺一脚、立王卿前、四尺二脚立出居前、）次內豎持索餅下器西庭、（是源右府被行次第也、近例不必然、（但左府位此行之）但舊說如此、又治曆四年萬機旬、被右府被行如例、給臣下四種之後度、）內豎各持朱盤、渡馳道、每盤居朱垸四口、就進物所請之、歸給臣下箸匕、（或先居臺盤、舁之、）酒番侍從著座、（入自日華門、著宜陽春興兩殿西廂床子、或說供御酒後參上、）供御四種、（四度每度有蓋摯子、下同、）給臣下四種、供御索餅、（下器歸經版位、置供之、）御箸下、臣下隨下箸、（指笏、此日遲參王卿未下御箸以前者直著座、御箸下給不能參上退出、）供鮑羹、（以此御盤撤索餅、）供御飯、給臣下、供進物所御膳、（韲坏二、平盛高盛汁物蓋令下盤、必不可待給臣下飯畢、）供御厨子所御膳、（高盛八、燒物二、汁二、）給臣下菜汁物、（二汁）御箸下、臣下應之、一獻、（采女供御酒、酒番二人給臣下、一人持土器、一人持瓶子、）下物下器度、（內豎四人、各捧朱盤一枚、經版南就西階、采女迎取開入下物之器、每空器入之、一枚炊交、一枚堅鹽、一枚箸茄、一枚干鯛、內豎舁自東階給王卿出居、）供御菓子干物、（下物分取之間供之、菓子四、干物四、）給臣下、二獻、開門（左衛將曹等出門外、）闈司就版、勅答、（令申興、闈司退、）中務輔率陰陽寮五人、立案辛櫃等、二人舁案、（御曆）四人舁辛櫃、（曆頒）去版位南二丈立案、（東西妻）四件案黑漆也、高三尺、長三尺、廣一尺六寸、其上有筥、（廣四寸、長一尺二寸、高三寸、無足、）案南去一丈、立赤辛櫃一脚、（東西妻）陰陽師等退、輔留立、更北進就版位、（經案西、）奏、（陰陽寮乃申世留其年乃御曆進止、申給者久止申、）無勅答、輔退出、（出自本路、）闈司二人（入自左腋門、）舁案、（經版位東、）登自南階西頭、立御座西第三間南簀子敷、（東西妻）郎下自南階、立階西頭、掌侍入自御帳後、出自同西御屛風下簀子敷、就案取函、經本道歸、到於御帳東邊、開函候、主上令取曆、置西置物机、（在式北、）內侍掩筥蓋持空筥、經始道置案上歸畢、次闈司登自南階舁案、經始道立本所退、次少納言率內豎六人、入自日華門、令舁案辛櫃等退、（二人舁案、四人舁櫃、）御曆者還御之後、置於置物御厨子、次番奏、三獻見參還御、

〔公事根源十一月〕朔旦冬至　一日

是は、十一月一日の冬至にあたるをいふなり、廿年に一度まはる事にて、めでたき祥瑞なるによて、そのとしは、主上南殿に出御なりて、旬を行はる、公卿賀表を奉る事など有、神龜二年十一月に、天皇大安殿に出御にて、冬至の賀辭をうけ給ふよし、國史にのせたり、我朝のみにあらず、異國に

中擧其人仰之、或用能書人、寄例、或記云、太政官所進之表也、辨、少納言中書之、有便宜云々、

第一大臣以外記令仰上臈儒士令作賀表、或大臣自仰之、或公卿儒者作之、天暦九年、参議朝綱、延喜十七年、参議清行、寛弘九年、中納言忠輔、寛治二年、参議匡房作之、永承五年、関白被問大外記貞親、貞親無公卿作例由申之、仍資業雖不作、因成作出也、次令外記傳仰能書者、永承五、延久元、内匠頭兼行書等之、寛治元年、少納言知家書之、永承記、召兼行於侍從所邊令書之云々、最末参議署名下、言二字、昌泰元有之、永承延久無之、寛弘無之、而彼時記註違失由、用白色紙、[illegible]覧上卿之後、即給判署、大臣判外記令持史生取之、若不能取署者、當日申候陣之公卿、即於陣後壁外加署、外記史生二人、一人進硯、一人持筥給之、厨家進函幷華足高机一脚、兼日辨仰之令作、或記曰、外記仰所司不可然、其表筥以厚朴作之、廣三寸五分、長一尺二寸、高二寸六分、加牙爲定也、有華足、廣六寸五分、長一尺四寸、高一寸五分、其案以檜木作之、取色如濃椿、高二尺八寸、長二尺八寸、廣一尺八寸、據足作之、有牙爲四尺、著丸緒、有繩、四角二重打鐶金、其案面延久以東京錦張之、[illegible]華足上有數物、用同錦、筥立折立、用同錦、永承五年、以纈地小文錦用之、長元四年亦同、正暦四年案面用纈、天延二年用東京錦、案面用[illegible]、外記使部二人著衣冠、舁案、立敷政門東庭、當炬火屋柱、外記史生二人舁同案、跪立敷政門闈內、外記二人舁同案、入自宣仁門、經宣陽殿壇上軒廊等、立於同廊西第一間、南北爲妻、大臣令奏事由、召仰外記、或外記未立案之前、未得解由者、可令候座事、若日及晩者、御暦可令付内侍所、天延、正暦、延久有奏、長元、永承付内侍所、長元依雨儀、番奏或亦付内侍所、長元四年例也、依雨儀、主上渡御南殿、女房十人供奉、男藏人候御靴式筥等、内侍出居東階上、大臣以下列立陣前小庭、雨儀列立軒廊東三二一間、長元以往著靴、永承以後淺履、此度有議著淺履、違者、陣座時、靴無便宜云々、一位大臣者出自東第三間、二位大臣出自東第二間西邊、大納言出自第二間東邊、中納言出自第一間西邊、参議出自第一間東邊、或説大臣出自第三間、大中納言出自第二間、参議出自第一間云々、大臣一列、納言一列、参議一列、西面北上、大臣揖離列自軒廊東第三間入、就案東跪、揖取筥、不加華足、暦案北頭就東階、登階三等、[illegible]作立授筥於内侍、内侍取之歸入、大臣還立階下、拔笏、[illegible]右廻復列、式云、登階五六等、跪授之、正暦四年記、大臣經案北進西、更折左廻北面立取笏、長元亦同、復座、大臣揖右廻經納言前歸、以次公卿亦同歸入於陣腋之時、亦各用前間、正暦四年記、左大將齊時獨左廻經参議前、長元四年記、左大將獨左廻云々、可尋之、○中略

次外記二人撤案、大臣令藏人奏事由、召仰外記、未得解由者、可預今日座事、若雨降者御暦可令付内侍所、天延、正暦、延久有御暦奏、長元、永承付内侍所、長元依雨儀、番奏、長元四年、依雨付内侍所、天皇出御、著靴入自御帳北、經倚子東著御、置璽[illegible]於東机、南柄東刃、置式於西机、内侍出出居、昇出自本陣、若有大臣大將者、公卿昇後陣、侍從入自日華門、王卿參上著南廂兀子、著靴、侍從昇、次供御臺盤、入自月華門、内豎正以下八人昇之、各四人、以采女傳取供之、於西一間撤之、出居、次將召内豎、御臺盤過西第二間之比也、内豎四五人同音喚、其中一人參入、立於櫻樹頭、内豎退

二百五十貫、正三位二百貫、自外各有差、　四年十一月丙寅（七日）二十、冬至、天皇御南苑宴群臣、賜親王已下絁、及高年者綿有差、又曲赦京及畿内二監、天平四年十一月二十七日昧爽已前、徒罪已下、其八虐、刧賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、其京及倭國百姓年七十以上、鰥寡惸獨不能自存者、給綿有差、

〔東都歲事記（四十一月）〕寒の入、良賤寒見舞（こと音曲をなすもの、寒聲寒彈をなす、今日餅を食す、寒餅と云、○中略）寒中丑の日、丑紅と號て、女子紅を求む、諸人鰻鱺（ウナギ）を食す、

〔日本歲時記（七十二月）〕小寒大寒三十日の間、今世俗に寒の中と稱す、此間に食物藥物等を製すれば、水の性よき故、久しくたくはへて損せず、

〔新儀式（五臨時）〕朔旦冬至事（承和八年、貞觀二年、元慶三年、昌泰元年、延喜十七年、天暦九年、）
當日、早旦諸卿獻賀表、大臣已下參入、第一大臣執表函進到紫宸殿東階、授內侍、內侍執之奏獻、時剋天皇御南殿、內侍臨檻喚人、大臣參上、侍從（兼大將者也）次皇太子、次王卿出居參上著座、次侍從大夫等參自日華門著宣陽、春興兩殿座、所司豫立床子於兩殿西廂、（延喜十七、天暦九年等例也、）采女供御膳、東宮采女供皇太子膳、內豎給殿上侍臣膳、大舍人幷膳部等給侍臣等膳、度下器如常、（不及殿下之者）中務省奏御暦、六衞府番奏如常、三獻之間、非侍從幷外國司未赴任、未得解由、大夫等參入、著兩殿座、（大臣揖仰令召之）大臣執見參文付內侍令奏覽畢、少納言唱見參、親王已下應召列立庭中、（西上北面、四位五位重行、）拜舞畢退出、天皇還御、此日仰京官諸司令進官人已下直丁已上見參、但諸陣、藏人所、內豎、校書殿、進物所、遣殿上侍臣令注見參、後日爲給祿也、

〔江家次第（十十一月）〕朔旦旬（冬至宴會、聖武神龜二年十一月己丑、天皇御大安殿受冬至賀辭、又神龜五年、天平三四年等有宴會、恩赦、以上四箇年、非一章之朔旦、朔旦冬至宴會、桓武延暦三年十一月戊戌朔、行慶賞、免田租云々、是本朝朔旦冬至始見國史也、自黃帝二十二年甲子、至延暦三年、合三千四百二十一年、除得二蔀五百餘算、一得六蔀之章首、乃爲本朝朔旦冬至甲子元、而後每當十九年必得嘉節者也、表作者、多式部大輔兼文章博士作之、或又就儒上首被仰之、或不論上下擇其仁被仰之、中納言例寛弘九年爲始、大納言例寛德二年爲初、清書先例中少辨之、）

故率天下靜不復行役、扶助微氣成萬物也、伊川易傳曰、陽始生甚微、安靜而後長、故復之象曰、先王以至日閉關、朱子曰、一陽初復、陽氣甚微、不可勞動、　今日餻を製し家人奴僕等にもあたへ、陽復を賀すべし、又先祖考妣の靈前にも獻じ、茶酒をそなへ、新果をす・むべし、　冬至の日鑽燧改火ば、瘟疫を去と、續漢書禮儀志に見えたり、燧を鑽とは木をもみて火をとる事也、杜子美が冬至の詩に、

天時人事日相催、冬至陽生春又來、刺繡五紋添弱線、吹葭六管動飛灰、岸容待臘將舒柳、天氣衝寒欲放梅、雲物不殊鄉國異、敎兒且覆掌中杯、〇下略

〔秇苑日涉七〕民間歲節下　冬至之日、醫家作赤豆飦、爲神農會、　明會典曰、嘉靖十五年、建聖濟殿于文華殿後、以祀先醫、遣太醫院正官行禮、二十一年、又建景惠殿于太醫院、上祀三皇、配以勾芒祝融風后力牧、而附歷代醫師於兩廡、凡二十八人、〇中略　歲遣禮部堂上官一員行禮、太醫院堂上官二員分獻、二殿之祭、並以春冬仲月上甲日、　歲時雜記曰、至日以赤小豆煮粥、合門食之可免疫、　風土記曰、天正日南黃鐘踐長、是日始芽動、爲饘粥以養幼、俗尙以赤豆爲糜、所以象色也、

〔東都歲事記四十一月〕冬至（中略）今夜太神樂來る、今日諸人餅を製し、家人奴婢にも與へて、陽復を賀す、又來年の略暦を封じて守とす、今日錢湯風呂屋にて、柚湯を焚く、

〔年中行事故實考十二十一月〕冬至　中華には佳節の第一とす、履長の義を取、これより日のながきことを祝す、我朝にも古代は賀辭ありし、今は絕たり、この日より日の長くなることを、漢には一線の長を添といひ、和にはひのふしだけ長くなるといふ、諸說紛々として一決の義なし、後來の博說をまつのみ、

〔續日本紀九聖武〕神龜二年十一月己丑、〇十日天皇御大安殿、受冬至賀辭、親王及侍臣等奉持奇翫珍贄進之、卽引文武百寮五位已上、及諸司長官大學博士等宴飮、終日極樂、乃罷賜祿各有差、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年十一月乙巳、〇十三日冬至、御南苑、宴親王已下、五位已上、賜絁有差、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十一月庚戌、〇五日冬至、天皇御南樹苑、宴五位已上、賜錢、親王三百貫、大納言

答、白虎通に、周の世には、十一月を正月とす、これを暦家に天正月といふ、殷の世には、十二月を正月とす、人正月といへり、十一月は陽はじめて生る月なれば、冬至の日より、日かげのながくなると申也、陰陽道の暦數をかんがへて、十一月に奉るなり、朔旦冬至と申は、十一月一日の冬至に、廿年に一度づゝまはるを申なり、いとめでたき祥瑞なれば、異國にも我朝にも、御門賀辭をうけ給なり、誠に目出度事にて侍る也、

〔東京夢華錄十〕冬至 十一月冬至、京師最重此節、雖至貧者、一年之間、積累假借、至此日更易新衣、備辦飮食、享祀先祖、官放關撲、慶賀往來、一如年節、

〔淸嘉錄十一〕冬至大如年 郡人最重冬至節、先日親朋各以食物相餽遺、提筐擔盒、充斥道路、俗呼冬至盤、節前一夕、俗呼冬至夜、是夜人家更速燕飮、謂之節酒、女嫁而歸寧在室者、至是必歸婿家、家無大小、必市食物以享先、間有懸挂祖先遺容者、諸凡儀文加于常節、故有冬至大如年之諺、蔡雲吳歈云、有幾人家挂喜神、匆匆拜節趁淸晨、冬肥年瘦生分別、尙襲姬家建子春、 案周遵道豹隱紀談、吳門風俗多重至節、謂曰肥冬瘦年、又云、互送節物、顧侍郞度有詩云、至節家家講物儀、迎來送去費心機、脚錢盡處渾閑事、原物多時郤再歸、 又江震志皆云、邑人最重冬至節、前夕名節夜、又崑新合志云、冬至節、親朋各相餽遺、

〔日本歲時記十一月〕冬至は十一月の中なり、三至とて一には陰極の至、二には陽氣始て至、三には日行南に至る、此故に至日ともいふ、冬至の前一日に至りて、陰氣長ずる事きはまり、日のみじかき至りなり、又夜長き事もきはまれり、日の南に至るもきはまれり、今日一陽來復して後陽氣日日に長じ、日もやうやく長くなる、陽氣の始て生ずる時なれば、勞動すべからず、安靜にして微陽を養ふべし、閉戸默座して、公事にあらずんば出行すべからず、又奴僕をも勞動せしむる事なかれ、 易曰、雷在地中復、先王以至日閉關、商旅不行、后不省方、白虎通曰、此日陽氣微弱、王者承天理物、

地膚、若蓮、蘘荷、蕃椒、木綿、韮、蓮、莧、百合、蓼、紫蘇、萵苣、甘露子、牽牛子、雞冠花、鴈来紅、萱草根、葵等なり、

〔拾遺和歌集十二戀〕けさうし侍ける女の、五月夏至の日なりければ、うたがひなくおもひたゆみて、物いひ侍けるに、またしきさまになりければ、いみじくうらみわびて、後にさらにあはじといひ侍りければ、　よしのぶ

あすしらぬ我身なりともうらみおかんこの世にてのみやまじとおもへば

〔小野宮年中行事七月〕寛平二年七月十三日、正衣端笏、而向西郊再拜稽首、聞天子迎氣候而出郊殿、仍向其方恭拜也、今日立秋、七月節、故有此拜、朕雖不當其位、而躬居万機、誠致恭敬也、

〔今古和歌集四秋〕秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

秋立日うへのをのこども、かものかはらに、かはせうえうしけるともに、まかりてよめる、　つらゆき

かは風のすゞしくもあるかうちよする浪とともにや秋はたつらん

〔日本歳時記五七月〕立秋、晝五十六刻十分、夜四十三刻五十分、處暑、晝五十四刻十分、夜四十五刻五十分、月令廣義

〔日本歳時記五八月〕秋分の日、考妣先祖の神を祭るべし、夏至に一陰生じてより後、陰氣日々に長じ、日もやうやくみじかし、秋分に至りて、日夜ひとしく、寒温も亦ひとし、

〔千載和歌集六冬〕百首の歌めしける時、初冬の心をよませ給ふける、　花園左大臣家小大進

我背子が上裳のすその水かみにけさこそ冬は立はじめけれ

〔世諺問答十一月〕問て云、此月とうじと申事の侍るは、何のゆへに侍ぞや、

〔古今和歌集一春〕ふるとしに、春たちける日よめる、

年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはん　　在原元方

〔公事根源正月〕供若水　立春日

〔知信朝臣記〕天承元年十二月廿三日、立春正月節也、主水女官獻立春水、居折敷高坏、女官率采女、晝御座間簀子敷小筵一枚、爲下敷供之、賜給祿、云々、絹一匹

〔故實拾要五〕立春御獻　是三獻ハ自男居供之、御強供御ノ御膳、御菓物ノ御膳ハ、大隅大炊頭供之、如元日、

〔禁中年中行事〕立春　強供御御膳　元日同　小預調進　ツルベ餅　小預調進

〔二水記〕文龜四年〇永正元年正月十二日乙亥、今日爲立春、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年正月八日、りしゆんの御さか月三ごん參る、こわぐ御も參る、御はがためも參る、御さか月よりさき也、女御の御かた、女中をとこたち、御とをりあり、

〔日本歲時記三二月〕春分は、日夜の長さひとしき時なり、寒暖も亦ひとし、しかれども夜あけて日の出るまで二分半を曉とし、日入て暮まで二分半を昏とす、昏曉合て半時は夜に屬すといへども、その明らかなること晝におなじければ、日夜ひとしき時といへども、猶夜より日は長し、冬至に一陽來復して、漸陽氣生じ、日もながくなりて、春分にいたり日夜ひとしくなる、〇中略春分は陽氣のやうやく發くる時にして、寒温のさかひなり、故に春分の節に入し後、はやく諸菜蔬の種を下すべし、萬のたねをうゆるに、春分を期とする事を惡しくいひならはして、彼岸に物だねをまくといふ、愚民はせむるにたらず、士君子たる人のいへるはいとくちをし、春分は陰陽日夜のひとしき時にして、一年の大節なる事をしらざるにや、又凡花草の苗をわかち種べし、およそ此時たねをまき、根をわかちうゆべきものは、甜瓜、菜瓜、茄、壺盧、冬瓜、絲瓜、胡瓜、芋、牛蒡、稷、煙草

定可多誤乎、後見之人可改之、

〔日本歲時記 一 正月〕立春は正月の節なり、大寒の後十五日、斗柄艮に指を立春といふ、立は始建也、元日は正月の日の始也、立春は正月の氣の始なり、一年の天運是よりはじまる時なれば、つゝしんで心を改め、その始を正くすべし、もろこしには、此日春盤をすゝめ、薺粥を食し、春餠をくらひ、桃湯に浴する事など侍るよし、月令廣義に見えたり、

〔東京夢華錄 六〕立春　立春前一日、開封府進春牛入禁中鞭春、開封祥符兩縣置春牛於府前至日絕早府僚打春如方州儀府前左右百姓賣小春牛往々花裝欄座、列百戲人物、春幡雪柳各相獻遺、春日宰執親王百官皆賜金銀幡勝入賀訖戴歸私第

〔淸嘉錄 一〕打春　立春日太守集府堂鞭牛碎之、謂之打春農民競以麻麥米豆拋打春牛里胥以春毬相餽貽、預兆豐稔百姓買芒神春牛亭子置堂中云宜田事蔡雲吳歈云、春恰輪當六九頭、新花巧樣贈春毬芒神脚色牢々記、共詣黃堂看打牛

案隋書禮儀志、始有綵仗擊牛之文即後世之打春也、漢晉以前無打春之事孟元老東京夢華錄、立春日絕早、府僚打春府前、百姓賣小春牛吳自牧夢粱錄、立春日侵晨、郡守率僚佐以綵仗鞭春街市以花裝欄座乘小春牛及春幡春勝、各相獻遺於貴家宅舍示豐年之兆晁冲之詩、自慚白髮嘲吾老不上譙樓看打春是事雖始於隋而儀文實備於宋迄今沿之、

〔萬葉集 十雜歌〕春雜歌

久方之、天芳山、此夕、霞霏霺、春立下、

〔萬葉集 二十〕二十三日〇天平寶字元年十二月於治部少輔大原今城眞人之宅宴歌一首

都奇餘米婆、伊麻太冬奈里、之可須我爾、霞多奈婢久、波流多知奴等可、

右一首、右中辨大伴宿禰家持作、

凝結而爲雪、十月猶小、故云小雪、三禮義宗云、亥閡也、言陰氣劾殺万物、故亥主十月中、以配於水也、次天氣上騰、地氣下降、易云、天體在上、陽氣歸虛元、故云天氣上騰、陰氣下連於下、故云地氣下降、各取其義不相妨也、次閉塞而成冬也、（○也恐此誤）時使有司助閉藏之氣、門戶可閉閉之、牕牖可塞塞之、大雪十一月節、以配于壬、鶡旦不鳴、此鳥求旦鳴、蓋是山雞也、大雪者小雪之相對也、鄭玄云、壬任也、閉藏万物、懷任於下、故壬主十一月節、以配於水、次武始交、（○武、禮記、拾芥抄並作虎、）交猶合也、次荔挺（馬藺也）出、此時候應陽氣而出、艸也、依皇氏之說焉、冬至十一月中、配于子、蚯蚓結、蔡云、結猶屈、蚯蚓屈首下嚮、陽氣動則宛而上首、故結而屈也、易通卦驗云、冬至陽氣動於黃泉之下、子雖大陰之位、陽氣在內而動其下、故居水之位、假令水外陰內陽象、懷陽也、故子主冬至、以配于水、次麋角解、此時候麋角解者、雖說多皆無明據、但能氏云、鹿是山獸之陽也、故夏至得陰氣而解角也、麋是澤獸陰也、故冬至得陽氣而解角也、麋爲陰獸、情淫而遊澤也、冬至陰方退、故解角、從陰退之象也、亦鹿爲陽獸、情淫而遊山也、陽方退、故解角、從陽退之象也、夏小正云、十一月麋角隕墜是也、次水泉動、此時候無文、今按、陽氣漸動於水下也、小寒十二月節、配于亥、雁北嚮、雁之北嚮、有早有晚、早則北嚮、晚則二月北嚮也、小寒者極寒之時、月初爲小、月半爲大寒、鄭玄云、癸揆也、陰任於陽而萌芽於物也、故癸主十二月、（○月下脫節字、）以配於水、次鵲始巢、詩緯推度災云、復之日鵲始巢是也、（復之日者、當復卦日也、）次雉始雊、雊鳴也、詩云、雉之朝雊、尙求其雌、大寒十二月中、配于丑、雞始乳、此時候無文、大寒者相對小寒、月半寒爲大、三禮義宗云、丑紐也、結也、繫也、言居于十二支終始之際、以紐結爲名、故主十二月中、以配于土也、次征鳥厲疾、鷙鳥征鳥者、鷹隼之屬也、時殺氣盛極、故鷹隼之屬、取鳥捷疾嚴猛也、蔡云、大陰殺氣將盡、故猛疾而與時競、次水澤腹堅、此時寒氷盛而水澤腹堅也、謂水濕潤澤、厚氷堅固也、腹者形體腹長、故爲厚矣、

右七十二候者、五日一候、十五日三候一氣也、一月三十日、六候二氣、凡一歳十二月、二十四氣七十二候也、皆知草木萌芽鳥獸變化耳、以月令正義之說載之、十干十二支、以爾雅、淮南子等之說註之、

秀實新成也、將收不可懈也、次禾乃登、此句不見本經、農乃登穀、蓋謂之乎、月令曰、天子嘗新薦寢廟、註云、黍稷之屬、於是始熟也、白露八月節、配于庚、鴻雁來、說文云、大曰鴻、小曰鴈也、雁有人情、暑則北翔、涼則南飛、履霜懼氷、識微知機、故隨陰陽不居中國、鄭玄云、庚更也、万物代改、故庚主八月節、在西方以配於金也、次玄鳥歸、玄鳥者燕也、釋鳥文曰、玄鳥歸爲仲秋、至爲仲春、此鳥不遠去、必在四夷不居中國、在幽僻之處不常見也、次群鳥養羞、羞進也、雖有鳥名蟲也、是螢火也、又云、丹鳥也、其謂之鳥者、其所養之物不盡食之故、雖蟲謂鳥也、秋分八月中、配于酉、雷始收聲、雷是陽氣、主於動、今地中潛伏焉、今按之、雷生於震、震木也、中秋金王之時也、木畏金、故雷潛入地中伏乎、三禮義宗云、酉老也、万物老極成熟、故酉主地分、以配于金、次蟄虫坏戶、此時候蟄蚉戶者、小虫以土漸增蚉穴之四畔使通明、而溫煖之間出入也、陰氣至之時稍坏之、十月寒甚乃閉也、次水始涸、涸竭也、八月末、角宿朝見東方時、殺氣盛而雨氣盡之後、天根朝見東方時、水涼盡竭也、天根者氐也、是寒露之前、五日之候也、農既收則治道、水上爲梁、是利民轉運故也、寒露九月節、配于辛、鴻雁來賓、仲秋節云鴻雁來、今季秋節云來賓、止中國未去、猶如賓客、故云賓、仲秋之候初來過去、故不云賓也、鄭玄云、辛新也、万物皆秀實新成、故辛主九月節、以配於金、次雀入大水爲蛤、大水海也、國語云、雀入于海爲蛤、故知大水海也、次菊有黃華、此時候无文、霜降九月中、配于戌、豺乃祭獸、此時候祭獸者、戮殺禽獸也、初得者皆殺而祭之、後得者殺不祭也、三禮義宗云、戌滅也、殺也、此時物衰滅、故戌主九月中、以配於土、次草木黃落、此亦无文、今按、伐木必可用殺氣乎、次蟄虫咸俯、此時垂頭以土墐塗也、前月但藏而坏戶、至此月垂頭攜下、以隨陽氣故也、塗塞其戶穴、辟地上陰殺之氣也、立冬十月節、配于乾、水始氷、此時候無文、按之、陽氣漸沈、陰氣已來乎、鄭玄云、乾純陽之象、生物之首也、陽氣之本也、故先子之位、以堅剛也、故乾主立冬、在西北之維、以配于金、次地始凍、此時候無文、次野雉入大水爲蜃、大水者淮水也、大蛤曰蜃、晉語云、雉入于淮爲蜃也、小雪十月中、配于亥、虹藏不見、此亦無文、今按、虹者陰陽交會之時見、故陰陽等則虹出也、今純陰之時、虹藏不見乎、小雪者霜露

殘賊、蓋賊害之鳥也、京房易傳曰、伯勞聚邑中、歲大水、若軍中鳴、師分而且水卒至、若見軍前後鳴、賊來
圍、入舍有仇、恐外謀內、口舌若悲鳴來有死者也、次反舌無聲、此鳥春初鳴、至五月稍止、其聲數轉、故名
反舌、易緯通卦驗曰、能反覆其口、隨百鳥之音、故爲反舌鳥、又百舌也、周書云、芒種五日之後、反舌無聲、
若有聲佞人在側、孔子明鏡曰、國臣謀臣有反舌鳥入宮、夏至五月中、配于午、鹿角墮、易通卦驗曰、鹿者
獸中之陽也、此時候應陰解角也、大陽始屈、陰氣始升、陰陽相向之候也、若不解則失君臣之禮、臣不承
君之象也、故貴臣作奸也、此時陰氣動於黃泉之下、又午盛陽之位、而居南方、故主夏至以配于火、次蟬
始鳴、此亦無文、今按、仲夏者麥秋盡成、而陰陽相向之節、應之而蟬始鳴乎、次半夏生、此時候無文、蓋半
夏是藥草也、小暑六月節、配于丁、温風始至、此亦無文、今按、南方名暑、門生景風、盛熱之時也、故温風至
矣、又小暑者極熱之物也、鄭玄云、丁亭也、物生長時應而止也、故丁主小暑以配于火、次蟋蟀居壁、爾雅
釋虫曰、蟋蟀蛬也、此物生在土中、至季夏羽翼稍成、未能遠飛、但居其壁、至七月則能遠飛在野、次鷹乃
學習、此時陰氣既起、應感乃有殺心、學習搏鷙之事、張逸曰、秋鳩化爲鷹、春鷹化鳩、又自有眞鷹可習矣、
大暑六月中、配于未、腐草化爲螢、此時腐草得暑濕之氣爲螢、李巡云、螢夜飛、腹下如火光、故曰、卽炤也、
又大暑月半極熱之中爲大、又未者味也、物向成皆有氣味、故未主六月中以配于土、次土潤溽暑、潤溽
者塗濕也、此時陽氣將在土、故暑乎、次大雨時行、六月建未、未値井宿主水、故大雨時行節也、周禮曰、此
時立其官使除田草也、五月夏至之時、芟草殺暴之、至六月燒之、大雨行之時、田中蓄潰之痹地爲肥也、
立秋七月節、配于坤、凉風至、此時候無文、今按之、凉風者秋風也、陰氣凄凉、收成万物、鄭玄云、坤純陰之
象、能養万物、莫過於地、陰動于午、至未始著、故坤主立秋在西南之維、以配于土、次白露降者、陰氣漸重、
露濃色白之謂、次寒蟬鳴、寒蟬一名寒蜩、又謂蜺也、郭景純云、寒螿也、似蟬而小青赤也、處暑七月中、配
于申、鷹乃祭鳥、此時候鷹祭鳥者、欲食之時、先殺鳥而不食、與人之祭食相似也、先神卽不食、既祭之後、
不必盡食、若人君行刑戮而已矣、次天地始肅、肅嚴急之言也、今按、天氣漸上、地氣漸下、肅然而物改更、

乃發聲、雷是陽氣之將上、與陰相衝也、動於地上、天之下發陽則蟄虫應而振出、孔子曰、迅雷甚雨、風烈則變、雖夜必興、衣服冠而坐、所以畏天威也、次始電、電是陽光也、陽微則光不見、此月陽氣漸盛以聲於陰、其光乃見、故云始電、清明三月節、配于乙、桐始華、桐陽木、故以清明氣始花也、又清明者謂生物、天氣清淨明潔、万物盛大而可觀、故云清明、又乙軋也、万物奮軋而出也、故乙主三月節、以配于木也、次田鼠化爲鴽、郭璞曰、鴽是鶉也、化者蓋鼠化爲鴽、鴽化爲鼠乎、失節不化則國不正也、莊子曰、田鼠化爲鶉也、次虹始見、虹者爾雅釋天文、郭氏曰、雄曰虹、雌曰蜺、又雄明盛、雌闇微也、是陰陽交會之氣、純陰純陽則虹不見、若雲薄漏日、日照雨滴則虹生矣、穀雨三月中、配于辰、萍始生、爾雅曰、水中之浮萍也、江東謂之薸、又大者名蘋也、穀雨者、是時日在昴宿、昴西方之宿、金也、金生水之故、甘雨降生万物、故云穀雨、三禮義宗云、辰物盡震動而長、故主三月中、以配于土、次鳴鳩拂其羽、者、鳴鳩飛且翼相擊、是時農急也、魏書云、謂穀鳴、俗耕種之爲候也、穀雨五月、鳴鳩拂羽、若不拂國不治兵也、次戴勝降桑、此蠶將生之候也、戴勝織紝之鳥、恒在桑、頭上戴毛、故以爲名、立夏四月節、配于巽、螻蟈鳴、螻蟈蛙也、蝦蟇也、鄭玄謂蛔、又衍義曰、螻蛄也、此虫當立夏後至夜則鳴、月令謂螻蟈鳴者是矣、其聲如蚯蚓、是時陽氣已盛在上、陰氣微弱在下、宜顯、故巽主立夏、在東南維、以配于木、次蚯蚓出、此時候无文、今按、冬至之候、一陽來復之時、蚯蚓動、宛而上首、漸得陽氣令出乎、次王瓜生、王瓜者艸挈也、又王萯也、此時宜種瓜也、小滿四月中、配于巳、苦菜秀、此時候物咸秀生也、又小得盈滿、故云小滿、三禮義宗曰、巳起也、物至此時皆畢起、故巳主四月（月下脫中字）以配于火也、次靡艸死、此時候无文、故引內說以明之、葶藶之屬也、以其枝葉靡細、故云靡草也、次小暑至、此時候无文、今案、仲夏之節漸近、而炎上氣雖至、陰氣猶殘、熱氣最微也、故云小暑至、數、芒種五月節、配于丙、螗蜋生、舍人云、螗蜋今之蟷蜋也、又謂之貪尾、又謂之馬穀、又名其子云螗蜋也、鄭玄云、丙者柄也、物之生長、各執其柄、万物強大而柄然著見也、故丙主五月節、以配於火、又芒種者有芒之穀、可稼種者也、次鵙始鳴、鵙一名伯勞、又名鴃也、應陰而殺物、鳴則將寒候也、以五月應陰氣之動、陰爲

二十四氣

〔古事記 上〕淤美豆奴神、此神娶布怒豆怒神之女、名布帝耳上神、生子天之冬衣神、

〔日本書紀 神武三〕太歲甲寅、其年冬十月、

〔日本書紀通證 神武八〕冬、寒也、

〔古事記 中應神〕吉野之國主等、瞻大雀命之所佩御刀歌曰、本牟多能、比能美古、意富佐邪岐、意富佐邪岐、波加勢流多知、母登都流藝、須惠布由、布由紀能須、加良賀志多紀能、佐夜佐夜、

〔古事記傳 三十三〕布由紀能須は、冬木如なり、

〔拾芥抄 上本 二十四氣〕立春 正月節 雨水 同中 驚蟄 二月節 春分 同中 清明 三月節 穀雨 同中 立夏 四月節 小滿(滿原作滿、今據曆林問答集改、) 同中 芒種 五月節 夏至 同中 小暑 六月節 大暑 同中 立秋 七月節 處暑 同中 白露 八月節 秋分 同中 寒露 九月節 霜降 同中 立冬 十月節 小雪 同中 大雪 十一月節 冬至 同中 小寒 十二月節 大寒 同中

〔曆林問答集 上〕釋二十四氣七十二候第十七
立春正月節、配于艮、東風解氷、東風者候風也、陽氣也、已來而解氷也、又立春陽氣已發雖在上、陰氣猶厚在下、而陽氣尙微、故艮主立春、在東北之維、以配於土也、次蟄虫始搖、此時候伏蟄虫得陽氣振動、將出土中、故云振也、次魚上氷者、魚盛寒之時、伏於水下、逐其溫暖、至正月陽氣游水上、近於氷、故云爾、雨水正月中、配于寅、獺祭魚、此時候魚肥美也、獺將食之先祭之、易通卦驗云、雨水之氣、獺不祭魚國有盜賊也、又雨水者、雪散爲雨水也、又寅木、故主正月中也、次鴻雁來、此時候鴻雁從南向北至中國、故云來也、次草木萌動、此時陽氣蒸達、可耕之候、農書云、耕者此時急可發也、驚蟄二月節、配于甲、桃始華、前候萌動、陽氣上達而始花也、又驚蟄者、伏蟄之虫大驚而走出也、甲者万物咸解孚甲自出、故主二月節、以配於木也、次倉庚鳴、倉庚者黃鸝也、謝氏云、布穀也、此鳥鳴時、布種其穀、次鷹化爲鳩、此時候鷹化爲鳩、至秋鳩化爲鷹、然後設罻羅、春分二月中、配于卯、玄鳥至、玄鳥燕也、陽而至也、集人室爲嫁娶之象、此鳥至之時、祀媒神而祈子孫也、又春分是爲陰陽之交會、而此節之大者、故卯主正東、以配於二月中、次雷

ひゆる故、衣をかさぬるも、冬にもはらかさぬれば、かくいへるなり、西土にて、此事によく似かよへるは、冬の徳寒と（春秋繁露）いひ、又其時を冬といひ、其氣を寒といふと（管子）みえたり、是ひゆといふ訓義と一致せり、白石曰、ヒユをフユといふがごとき、是もまたもと轉語にして、またフユといふことばにて、ヒユといふ語をこめたりと（東雅）いふも、普通の説なり、和語に冬をふゆと訓せしは、ひゆをいふ意なりと（積節序記）いふも同意なり、こゝをもてひゆるを冬といふ訓義は、古今みな一理なり、和訓栞もふゆは冬をいふ、冷の轉せるなりといへり、又冬之爲言中也、中者藏也と（禮記）みえたるは、難波津に咲や此花冬ごもりと（古今和歌集序）に引し歌の、詞意と同きにや、また冬木成（フユコナリ）、春去來者（ハルサレバ）と（萬葉集）いふは、冬終也、物終成也と（釋名）いふ意と同じ、冬木成は終成也、冬極れるなり、故に春さり來ればとつゞけいふなり、又冬爲玄英と（爾雅）いふは、冬の別號なり、これ五行配當の色にとるなり、玄は黑也、郭璞が注に、氣黑而淸英といへり、拾芥抄にも、玄英の文字いでたり、爾雅を引しなり、夫よりして玄冬と（元帝纂要）いひ、玄陰、陰律、陰英、陰天、陰冥と（壒囊抄）いひ、玄冥、玄律と（事物別名）みえたり、是みな冬の空は、うすぐろく陰れるが故に、かゝる別名の出來る事にはなりにしなり、又方角にとりても、冬者北也、北は五色の色樣にとりては黑色なり、故に玄陰冥の三字をもて、冬の異名の中に、此文字を熟字とする事にはなりしなり、されども物名一樣ならず、爾雅には安寧といふ名目も見えたり、元帝纂要には、冬を玄冬といひ、風を寒風、勁風といひ、景を冬景、寒景といひ、時を寒辰といひ、節を嚴節などと、わけて見えたれども、今の世には冬景、寒景、寒辰、嚴節などといふは、たゞ冬の異名のやうに、いひならはせるなり、壒囊抄などにも、あまた異名みえたり、一々擧るにいとまあらざれば、こゝに略せり、又初冬、仲冬、季冬の三月にあてゝ、其主月の名となすもあり、或は三冬、九冬などゝ、其主月をさゝざるもあり、或は冬三月をすべくゝりし名目もあり、いはゆる冬三月此謂閉藏と（素問）みえたるは、冬の一時をいふ事、文面明白なり、

ずといふことなし、天氣以急、地氣以明と尚書大傳いふ、前文に辨ずるに同じきなり、又秋爲白藏と爾雅いふを、郭璞注曰、氣白而收藏とみえ、又素秋、素商、素節と元帝纂要いふも、秋の別號なり、素字は白字とおなじく、ましろしと訓ずれば、もとづくところは、白藏といふによりしなるべし、此名目もあきらかなる義にして、明白などと熟字するも、この意にて、これら又一說なり、

〔日本書紀一神代〕素戔嗚尊之爲行也甚無狀、〇中略秋則放天班駒使伏田中、

〔萬葉集一〕額田姬王作歌
金野乃、美草苅葺、屋杼禮里之、兎道乃宮子能、借五百礒所念、

〔倭名類聚抄一歲時〕冬三月　冬　十月孟冬　十一月仲冬　十二月季冬

〔類聚名義抄五〕冬都農切フユ

〔伊呂波字類抄不天象〕冬フユ

〔八雲御抄三上時節〕冬　みふゆ萬葉十七　みふゆづき、はるはきたれど、梅のはなとよめり、みふゆはふゆをつきてはるといへるなり、こるつゆ、冬の名也

〔和爾雅二歲時〕冬フユ釋名云、冬終也、物終成也、　貞冬　信冬　上冬　玄英郭璞云、氣黑而淸英、　靜順同集　玄冬　盛冬　隆冬
三冬　九冬　嚴冬　大冬　陵冬　頑冬　寒冬　元冬　窮冬　安寧

〔釋名一釋天〕冬終也、物終成也、

〔倭訓栞前編二十六不〕ふゆ　冬をいふ、冷の轉せる也、

〔古今要覽稿時令〕冬　冬はふゆなり、冬の訓義冷也、ひゆを轉じてふゆと云なり、是等は時氣によりて起りし訓なり、夏冬は時氣によりて、名義をあらはし、春秋は時物によりて、時名をなせし事明かなり、さてふるくより、冬といふ語のみえしは、天の冬衣の神と古事記見えたれば、いとふるき語なり、此神の御名を以て考ふれば、冬衣といふ文字は、時節のうつり行、秋さり冬來りて、次第に

意趣はかりがたしといへども、つゝしんで按に、神祖百穀豐饒の國を生たまひ、その名に豐といふ文字を上にかぶらせ、豐秋津洲、又豐葦原千五百秋瑞穗之地などいふ類、みな豐字はゆたかなる意なり、又瑞穗之地といふも、穀物豐饒の意にとりての國名とおもはれぬ、秋は其時節の穀、春夏冬の三時より、多くあきたる義なるべし、故に西土にても、潘陳氏が曰、秋者百穀成熟之期、此於時雖夏、於麥則秋、故云麥秋といへるなどを、合せ考れば、秋とは穀物によりて、訓義をとくかた、しるかるべきなり、ことに秋字禾に從へるをもて、かたがた穀物成熟の義にかゝるべし、また管子に、歳有四秋といふ事みえたり、所謂春之秋、夏之秋、秋之秋、冬之秋、是四時に配當し、萬物の成收を以て、秋といふなり、其語曰、農夫賦耜鐵、此謂春之秋、大夏且至、絲纊之所作、此謂夏之秋云々、五穀之所會、此謂秋之秋云々、紡績緝縷之所作、此謂冬之秋と管子見えたり、これみな穀物成熟の義よりおこりて、庶物成收の上までも、秋と云義にはなりしなり、されば五穀之所會、此謂秋之秋とみえたる文辭にて、秋の秋たる義、穀熟より秋といふ義、起れる事いと明かなり、又竹秋蘭秋といふ文字、廣韻にみえたり、是等もみな前文の意と、秋字の義おなじきなるべし、故に百谷各熟爲秋、故麥以孟夏爲秋と蔡邕月令章句見えたり、又秋を開明の義にとるも一考なり、白石曰、古語にアキといひしごときは、速秋津姫、また速開都咩としるされし例によらば、これも開の義にやとりぬらん、義未詳と東雅いひ、和語に秋をあきと訓せしは、あきらかなりといへる意なりと日本歳時記いふに、續節序記の說も同意なり、西土にてもこれらの義も、同じき事どもあり、雲既淨而天高と陳世南賦いふ、雲淨天高は、これ開明の義なり、又涼爲收而水潔と同上いふも、上句と同意にして、天時共に時氣すみて、清明なる意なり、こゝをもて按に、天地の時氣あきらかなる義にて、あけといふも、一說とやすべき、あけはあかき也、赤色をあけ色といふ、草木すべて紅葉する、是色にあらはるゝなり、夜明といふ明も、よあきの義、あけ、あき同きなり、明字、日に從ひ、月に從ふの文字にて、日月の照す所、あきらかなら

秋

名をなしたるなり、夏は炎暑にあひては、あゝあつと衆人をしなべていひ侍るも、いとたえがたければ、言に發していふなり、故になつといふは、あつといふ義明かなり、

〔日本書紀（仁徳十一）〕二十二年正月、天皇語皇后曰、納八田皇女將爲妃、時皇后不聽矣、爰天皇歌以乞於皇后曰、（中略）○皇后答歌曰、那菟務始能、譬務始能虛呂望、赴多弊著氏、箇區瀰夜儀利破、阿珥豫區望阿羅儒、

〔古事記（下允恭）〕其衣通王獻歌、其歌曰、那都久佐能、阿比泥能波麻能、加岐賀比爾、阿斯布麻須那、阿賀斯氐杼富禮、

〔倭名類聚抄（歳時一）〕秋三月　秋　七月初秋　八月仲秋　九月季秋

〔類聚名義抄（季七）〕秋（七由反）

〔伊呂波字類抄（天象安）〕秋

〔八雲御抄（時節三上）〕秋　はつ　ゆく　さけきの（後抄）

〔和爾雅（歳時二）〕秋（釋名云、秋緧也、緧迫品物使時成也、）　金秋　高秋　淸秋　三秋　九秋　素秋　商節　旻秋　涼秋　爽節　凜秋　西皓（郊祀志）　白藏（白郊而收藏、環云、氣）　西候（杜詩）　商顥　金商　素律　素商　勁秋　收成　火旻

〔釋名（釋天一）〕秋緧也、緧迫品物使時成也、

〔倭訓栞（前編二安）〕あき　秋をいふ、飽の義なり、百穀巳に成て、萬民飽足の時なれば、しかいふめり、

〔古今要覽稿（時令）〕秋　秋は飽なり、秋をあきと訓ずるは、穀食あきみてる義にとれり、和語の訓例みなしかり、此國もとより、萬國にすぐれて、豐饒の國なれば、秋は百穀成熟し、國人の食物飽滿る意を以て、時名となせしなり、抑伊弉諾尊伊弉册尊二神國をうみたまふ時、大日本豐秋津洲をうみたまふと（古事記、日本書紀、）しるされ、千五百秋瑞穗之地と（日本書紀一書）みえたり、是みな皇御國の名なり、此御國をかく名付しも、神代よりの事なれば、神意を以て名をなせしなるべし、さすれば其國名の

〔古今和歌集一春〕雪の降けるをよめる　　きのつらゆき
霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける

〔曾禰好忠集〕中の春二月のはじめ略○歌

〔古今和歌集二春〕亭子院歌合に、はるのはてのうた略○歌

〔後撰和歌集三春〕だいしらず　　よみ人しらず
おしめども春のかぎりのけふの又夕暮にさへなりにけるかな

夏

〔倭名類聚抄一歳時〕夏三月　夏　四月首夏　五月仲夏　六月季夏

〔類聚名義抄九又〕夏音下

〔伊呂波字類抄天象奈〕夏ナツ

〔八雲御抄三上時節〕夏　かはそひく夏の名　かげろふ後頼抄

〔和爾雅二歳時〕夏カ、ナツ釋名云、夏假也、寛假萬物使生長也、　九夏　朱夏　炎夏　九暑　朱明爾雅郭璞云、氣赤而光明、　升明　長嬴エイ　農ノウ節　纁クン夏　槐タイカ夏　瓜タハシ時　盛セイカ夏　炎エンセツ節　朱シュエン炎　朱シュリツ律以上、凡夏之異名、

〔釋名一釋天〕夏假也、寛假萬物使生長也、

〔倭訓栞前編十九奈〕なつ　夏をいふ、熱の義也とも、成の義也ともいへり、一説に、成立の義、稲によりての名也、

〔古今要覽稿時令〕夏　夏は熱也、なつといふはあつといふ語の轉せしなり、春ののち炎熱の時をいふなるべしと東雅いへり、皇國にてふるく夏といふ事義のみえしは、夏高津日神と古事記みえたり、此夏字則あつき義にとれるなるべし、高津日は高き日也、津は助字なり、邢昺が爾雅の疏に、夏氣高明、故以遠大言之といふも、夏高津日といふにあへり、されば夏の日ながくして、空にいつまでも日影とまりて、かたぶきがたければ、空に日高きといふ義にとりて、神の御名にかうぶらせ奉りしなり、夏冬の二時は、氣によりて

といふ語こもれり、これらの事は、注するにも及ぶべからざれど、ナツといひ、フユといふ、アツといひ、ヒユといふ義也といふ事、意得ぬ事也といふ人もこそあれと思へば、事煩しけれど、こゝに注しぬるなり、

〔古今要覽稿時令〕春　春は張なり、事々物々皆はりいづる義なり、故に春則重播種子と日本書紀いふ、その苗の出る時節なれば、種子をまきしなり、是春といふ名目のみえし始なり、○中略梓弓春と萬葉集いひ、又春張乍と同上いひ、木のめもはるの雪ふればと古今集いひ、又このめはる雨、衣はるさめなど、歌によみつゞくるも、みな張發する義にとれり、天地人の三才を以ていへば、天にありては、春は日光發陽して日を追てのどかなる、是陽氣ましくはゝるも、はりみてる意なり、春立初る日より、天もかすみ渡りて、舊冬のみじかき日も、次第にのびはり、地にありては、草木根株をのづから地中より、地上に萌芽はり出るなり、人の上にていへば、人意も草木の芽はりいづるが如くに、立春の朝より、氣をのづからのびらかにして、人氣をのづから發陽し、心いさましくおもはるゝ、皆はるといふ訓意にかなふなり、春夏秋冬の訓義、或は時節にとり、或は寒暑の氣にとり、或は方角にとり、或は五行にあて、或は五色の色に配當するあり、或は十幹にあて、或は天名あり、いはゆる春爲蒼天と爾雅いふ是なり、

〔日本書紀神代一〕天照太神、以天狹田長田爲御田、時素戔嗚尊、春則重播種子、○註略且毀其畔、○註略秋則放天班駒使伏田中、

〔日本書紀十六武烈〕十一年○仁賢八月、○中略戮鮪臣於乃樂山、是時影媛○中略作歌曰、○中略播屢比能箇須我鳴須擬、逗摩御暮屢、鳴佐哀鳴須擬、○下略

〔萬葉集九雜歌〕鷺坂作歌一首
山代、久世乃鷺坂、自神代、春者張乍、秋者散來、

〔倭名類聚抄 一 歳時〕春 三月

〔類聚名義抄 日 二〕春 ハル 倫均切

〔伊呂波字類抄 波 天象〕春 バル

〔八雲御抄 三上 時節〕春 はつ　たつ　ゆく

〔和爾雅 二 歳時〕春(シユン/ハル) 釋名曰、春蠢也、動而生也、　青陽(セイヤウ) 郭璞云、氣青而温陽、　芳春(ハウシユン)　清春(セイシユン)　青春(セイシユン)　陽春　九春　三春　三正　歳始(サイシ) 公羊傳　敷和(フクハ) 素問　九正(キウセイ)　規春(キ)　先春(セン)　光春(クハウ)　良時(リヤウ)　嘉時(カジ)　芳時(ハウ)　華節(クハ)　芳節　良節　嘉節　韶節(セウ)　淑節(シユク) 以上、春之異名、

〔神代巻口訣 三〕春(ハルガ)之言(コト)、木(コノ)牙(メ)發(ハル)也、

〔釋名 一 釋天〕春蠢也、動而生也、

〔倭訓栞 前編 二十四 波〕はる　春は發(ハル)の義、萬葉集に、春は張作と見え、後の歌に、このめはるさめなどよめり、

〔東雅 一 天文〕春とは、草木の芽はる時なればハルといふ、古語にはハラクといひしは、もえ出るをいひし也、秋とは、草木の色かはりぬる時なればアキといふ也、古語にアキといひしは、黄なる色をいひし也といふ說あれど、草木のもえ出るを芽もはるなどいひしは、春といふことば、黄ばむ色をアキなどいひしも、秋といふことばによりていへる也、たとへば物を販(ヒサ)ぐをアキモノといふことのごとし、ハルとのみいひ、アキとのみいはんに、いかにしてかは、草木のもえ出て黄葉する義也とは、わきまへしるべき、開の字讀てハラフともホルともいひけり、原をハラといふも開なり、しかるに今も筑紫の人は、原をいひてハルといふ也、これら方言にはあれど、ハルといふは開の義なる事の徵とはなしつべし、ホルといひ、ハルといふがごときも、また轉語也、アツといひ、ナツといふがごときも、もとこれ轉語にして、またナといふ也、ことばを長く呼時は、そのづからア

みえ、并三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲と〔堯典〕いひ、一歲之中有四時、一時之中有三長天之節也と〔春秋繁露〕いひ、禮記には天有四時春秋冬夏と〔孔子閒居〕いへるなど、もつとも證とすべし、〇中略 抑四時は春夏秋冬なり、四時の始を春といひ、二を夏といひ、三を秋といひ、四を冬といふ、春は天地開闢之端なり、春は生じ、夏は長じ、秋は收り、冬は藏す、此天地之大經也、春道生萬物榮、夏道長萬物成、秋道欲萬物盈、冬道藏萬物靜、夫春之爲言蠢也、萬物蠢然而生也、夏假也、寛假萬物使生長也、秋繒也、繒迫萬物使時成也、冬終也、物終成也、まことに四時の德大なる哉、至れる哉、夫生物者春なり、吐華者は夏なり、布葉者は秋なり、收成者は冬なり、春夏秋冬之序、皆以斗柄所指定之、斗柄、指東曰春、指南曰夏、指西曰秋、指北曰冬、〔鶡冠子〕 春夏秋冬各三月而爲一時、一時各三月あり、三月各孟仲季あり、春夏秋冬合せて一年をなせり、一年の月數十二月あり、十二月の日數三百六十餘日あり、三月の日數九十餘日あり、是九十餘日は三月にして、三月は則一季一時にして、春三月あり、夏三月あり、秋三月あり、冬三月あり、偖春三月の始を初春と〔和名類聚鈔〕いふ、正月なり、次を仲春といふ、二月なり、次を暮春といふ、三月なり、〔同上〕夏の首めを首夏といふ、四月なり、次を仲夏といふ、五月なり、次を季夏といふ、六月なり、〔同上〕秋の初を初秋といふ、七月なり、次を仲秋といふ、八月なり、次を季秋といふ、九月なり、〔同上〕冬の孟めを孟冬といふ、十月なり、次を仲冬といふ、十一月なり、次を季冬といふ、十二月なり、〔同上〕皆孟仲季をもて次第し、各三月にして一季なる、則一時終るなり、十二月にして四季盡ぬ、則四時終るなり、此四時一周して成歲といへり、

〔令義解〕〔十獄〕凡流移人太政官量配、〔謂量其輕重、配其遠近、故云量配也、〕符至季別一遣、〔謂、太政官錄配流狀、下符刑部及國司也、若符在季末至〕者、聽與後季人同遣、〔謂季末者、四季之末月、假有符三月至者、與夏季人同遣之類也、〕

〔唐律疏議〕〔三十斷獄〕疏議曰、徒流應送配所、〇中略 其流人準令、季別一遣、若符在季末三十日內至者、聽與後季人同遣、

どいへりき、

〔古今要覽稿 時令〕四時　夫よつのときは四時なり、四時之爲言四季なり、四季は四運なり、四運は春夏秋冬なり、春夏秋冬、是をよつのときといふ、このよつのときの名目の、かけまくもかしこき皇ら御國にて、物にみえ初しは、神代にはじまれり、いかにとなれば、古事記、日本書紀等に、春夏秋冬の文字、既に出たれば、これらをや證とはすべき、こゝに有二神、弟名春山之霞壯夫と古事記いひ、又夏高津日神、秋毘賣神、冬衣神同上の御名見えたれば、いとふるき事なり、されば春夏秋冬の名をもて、既に其頃神々の御名に冠らしめ給ふなり、こゝをもてみれば、はるかにその以前より、春夏秋冬時をたがへずして、四時の和行なはれ、春立夏過秋至冬往し事しられたり、また素盞嗚尊春則重播種子と日本書紀いひ、又日神尊以天垣田爲御田、時素盞嗚尊春則塡渠毀畔と同上いひ、また秋則於天班駒使伏田中と同上見えたるぞ、春といひ、秋といふ事の始にて、たしかなる證とすべし、この以前既に伊弉諾尊、伊弉冊尊の、豐秋津洲を生み給ふことゝみえたれども、秋津洲の秋は、春秋の秋とたしかにはいひがたし、春則みぞをうめ、秋則あまのふちこまを、御田の中にふすとみえたるぞ、共に農作の事にかゝれば、四時の春秋なる事義明らけし、また春過而夏來良之と萬葉集いひ、秋立者、黃葉頭刺理と同上いひ、冬木成、春去來者と同上いふも、共に四時の移りかはれるさまを詠せしなり、また伊波比回禮、四時自物と同上いふは、之ゝといふけだものゝ、名に、四時の文字を假用ひ、また春夏秋冬の祭を、四時祭と延喜式いひ、また四時を春夏秋冬と和名類聚抄いひ、また春爲青陽、夏爲朱明、秋爲白藏、冬爲玄英と拾芥抄いふも、則四時の事なり、又四時を四季といひしこともあり、四季異名何と壒囊鈔いふ、その下に各に四時の異名を舉たり、またよつのとき四季なりと藻鹽草いひ、春は四時の始にして小陽なり、一年の始なれば、賀する事四時の中に勝れたりと輟節序記いへり、又西土にては四時といふ事の、ふるく物にみえしは、周易をや始とすべき、曰日月不過、而四時不忒と周易

も、又語の轉せしにて、其寒冷の時なるをいひし也、

〔眞暦考〕一とせの來經行あひだを、四つにきざみて、春夏秋冬とぞいひける、これはた神代より然あり來ぬる事なれば、今その故は、いかなりとも知べきならねど、こゝろみにいはゞ、温なる、暑き、涼き、寒き、四つのかはりのあればなるべし、

抑一年は、四月より九月まで六月夏、十月より三月まで冬と、二つに分たらむも、又つねのごと四つにても、又二月づゝ六つに分ても、又四十五六日づゝ八つに分ても、みな同じことにて、難なかるべき中に、四に分れたるは、かならず然るべきおのづからのさまなり、暑き寒き中間に、暑からず寒からずて、温なる時と、涼しき時とのあれば、二つにてはたらず、六八にてはくだくだしくて、過たればなり、さて温なる、暑き、すゞしき、寒きによりて、分れたらむにつきて、おのおのその中央をもてなかばとせば、二、三、四月を春、五、六、七月を夏、八、九、十月を秋、十一、十二、正月を冬ともさだむべし、三月は温なるなかばなれば、春のなかばとし、六月は暑きなかばなれば、夏のなかばとするが如し、されどさはあらで、皆その始をはじめと定めたる物なり、正月はあたたかなる始、七月はすゞしき始なる故に、春と秋とのはじめなるがごとし、餘もみな同じ、これらも神の御心もてさだめませる物なり、

此春夏秋冬てふ名ども、いと／＼古く聞えて、古事記、書紀の歌どもにも、をり／＼見えたり、春日といふこと、書紀武烈御卷の影媛の歌に見え、夏虫といふこと、仁徳御卷の磐媛命の御歌に見え、夏草といふこと、古事記の遠飛鳥宮段の、衣通王の御歌に見え、秋の田といふこと、萬葉集二の卷の磐媛命の御歌に見え、冬木といふこと、古事記明宮段の吉野の國栖人が歌に見えたり、此ほか歌ならぬは、猶ふるきもあり、

かくてこのよつの時を、又はじめ、なかば、末と、三つづゝにきざみて、春の始、秋のなかば、冬の末な

と見えし、これ秋といふ名の始て見えし所歟、されどこれは後世に名づけられし所也ともいへり、私記の說總て太古の事の徵とすべきにもあらず、又二神共に速秋津彥速秋津姬の神を生給ひ、陽神に速秋日子神を生給ひしともみえたれば、延喜式の祝詞には、速秋津姬の名を、速開都比咩ともしるされしかば、是も漢字を借用ひられし時、其語たま〳〵相同じければ、秋の字を用ひられしかど、其實は春秋といふ義にはあらざりしもしるべからず、正しく春秋の秋の事と見えしは、舊事紀等の記に、日神、天熊大人命葦原中國の稻種をとらしめ給ひ、天狹田長田は植給ひしに、其秋垂穗八握莫(シナヒ)然しと舊事紀にしるされしぞ、まがふべくもあらぬ秋の事也ける、是後素盞烏神の御孫羽山戶神の子に、若年神、夏高津日神、(また夏之女神と云ふ)秋比女神、冬年神等ありきと舊事紀にみえしぞ、夏冬の名の見えし始也、されど古事記には、冬年神を久々年神としるして、久々の二字を讀に音をもてすべしと注したれば、舊事紀にみえし冬の字は誤寫せし所也とみえたり、又舊事紀に、思兼神の兒表春命下春命みえたり、これも春秋の義也しにや、たゞ其字借用ひられしにや、不詳、此等の名義既に闕ぬれば、今はたいかにとも辨ふべからず、もし古語の例によりて其義を推求なんには、古語にハラクといひしは開也、春を名づけてハルといひしは、年開ぬる義にて、たとへば漢に開歲などいふがごときか、夏とは熱(アツ)也、アツをナツといひしは轉語にて、其炎熱の時をいふなるべし、古語にアキといひし事のごとき、速秋津姬また速開都咩としるされし例によらば、これも開の義にや取ぬらん、義不詳、又舊事紀に、飽咋之宇斯能神といふとみえたり、さらば百穀既に成て、飽滿(アキミツ)るの義にもやあるらん、溟渤讀てオウウミといふを、オホキウミともいひ、滄海原讀てアヲウナバラといふを、オホウナバラともいふによらば、アキとはオキの轉語にて、大(オホ)の義にもやあるべき、さらば百穀既に成をもて、其時を大也とする也、日神、葦原中國を豐葦原之千秋長五百秋之瑞穗國とのたまひしも此義なるべし、冬とは冷(ヒユ)也、ヒユをいひてフユといひし

古事類苑

歳時部二

歳時總載下

時節

〔伊呂波字類抄 世天象〕節セツ 〔同 志疊字〕時節

〔二中歴 五歳時〕節氣 廿四氣節氣 七十二候初次末 六十四卦始中終

〔經信卿母集〕琵琶琴上手といふ中にも、よのつねの人にはあらざりし、ときの調子のしらべをなしては、やよひの日かずのうちに、夏のせちのきたるをわきまへ、う月のうちに、はるのせちのあまれるをしり、なつよりあきにうつり、秋よりふゆにかはり、冬より春のたつこと、そのゐんにまぎれず、よるひるの時のうつるをも、たれこめても、かいひきては、さだかにおもひえたり、〇下略

四時

〔伊呂波字類抄 志天象〕四時 春日蒼天 夏日昊天 秋日旻天 冬日上天 〔同 志疊字〕四季 四節

〔釋名 一釋天〕四時四方各一時、時期也、物之生死、各應節期而止也、

〔和漢名數 節序〕四時 春木 夏火 秋金 冬水

〔書言字考節用集 二時候〕四時シイジ 四序、四節並同、説文春夏曰發、秋冬曰斂、四季シキ 季末也、土用所言、本朝俗謂四時爲四季者謬矣、

〔古今和歌集 序〕いますべらぎのあめのしたしろしめす事、よつのときこゝのかへりになんなりぬる、

〔東雅 一天文〕春ハル 夏ナツ 秋アキ 冬フユ 並に義不詳、四時の名は、古の時に見えし事は、舊事紀、古事記、日本紀等に、陰陽の二神大倭豐秋津洲を生給ふ、亦名は天御虛空豐秋津根別といふ

〔類聚名義抄七〕通夕ヨ〇モ〇ス〇カ〇ラ〇　竟夜ヨ〇ス〇カ〇ラ〇　通夜　達夜

〔書言字考節用集二時候〕終夜ヨモスガラ終宵、竟夜並同、　通夕同、通宵、通霄並同、　盡宵又云盡夕　徹宵同　連宵同白文集　終夜シウヤ

〔日本書紀十二履中〕八十七年〇仁徳正月、仲皇子不ㇾ知二太子〇履中一不ㇾ在、而焚二太子宮一、通夜ヨモスガラ火不ㇾ滅、

〔日本書紀十四雄略〕元年三月、童女君者本是采女、天皇與二一夜一而娠、遂生二女子一、天皇疑不ㇾ養、〇中略大連〇物部目曰、〇中略臣聞易二産腹一者、以ㇾ褌觸ㇾ體、卽便懷娠、況與二終宵ヨモスガラ一而妄生ㇾ疑也、

〔日本書紀十九欽明〕十四年十月己酉、百濟王子餘昌、〇註略悉發二國中兵一、向二高麗國一、〇中略餘昌乃大驚、打ㇾ鼓相應、通夜ヨモスガラ固守、

〔古今和歌集十一戀〕題しらず　よみ人しらず

戀しねとするわざならしむばたまのよるはすがらに夢に見えつゝ

〔後撰和歌集九戀〕あつよしのみこまうできたりけれど、あはずしてかへして、又のあしたにつかはしける、　桂のみこ

からころもきてかへりにしさよすがら哀とおもふをうらむらんはた

〔左京大夫顯輔卿集〕歸鴈

契りけんほどやすぎぬといそぐらんよるもすがらにかへる鴈がね

〔日本書紀七景行〕二十七年十二月、更深人闌、川上梟帥且被酒、

〔萬葉集十冬相聞〕寄霜
甚毛、夜深勿行、道邊之、湯小竹之於爾、霜降夜烏、

〔運歩色葉集與〕夜半定

〔書言字考節用集二時候〕夜半(中夜也)中宵(白文集)

〔日本書紀十一仁徳〕四十一年(○中略)二月、譽田天皇崩、(○應神、中略、)大山守皇子毎恨先帝廢之非立、而重有是怨、則謀之曰、我殺太子(○菟道稚郎子)遂登帝位、(○中略)太子設兵待之、大山守皇子不知其備兵、獨領數百兵士、夜半發而行之、會明詣菟道、

〔日本書紀二十二推古〕二十九年二月癸巳、半夜厩戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月甲申、是日發途入東國、(○中略)及夜半到隱郡、焚隱驛家、

〔榮花物語二十五峯の月〕殿の御まへ(○藤原道長、中略、)みゆる御くだ物たびごとに、よる夜なかわかず奉らせ給、

〔萬葉集四相聞〕大神女郎贈大伴宿禰家持歌一首
狹夜中爾、友喚千鳥、物念跡、和備居時二、鳴乍本名、

〔饅頭屋本節用集時節之〕初夜

〔書言字考節用集二時候〕初夜(戌刻、初更之時也、)

〔雲圖抄萬書〕御佛名次第
亥一剋打鐘、仰御導師等、(初夜御導師、自亥二剋至子二剋、後夜御導師、自子三剋至丑四剋、)

〔源氏物語四夕顔〕寺々のそやもみなをこなひはてゝ、いとしめやかなり、

〔書言字考節用集二時候〕後夜(寅刻)

〔玉葉和歌集十八雜〕後夜のをこなひし侍らむとて、手あらひにまかりたるに、(○中略)高辨上人、(○歌略)

零明して、明旦、今夜の雨の音は云々、

〔日本書紀十三允恭〕八年二月、幸于藤原宮、密察衣通姫之消息、是夕衣通郎姫戀天皇而獨居、其不知天皇之臨、而歌曰、和餓勢故餓、勾倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、

〔日本書紀十三允恭〕二十三年三月、太子〇木梨輕恒念合大娘皇女、〇中略遂竊通、乃悒懷少息、因以歌之曰、〇中略去籠去曾、椰主區津娜布例、

〔釋日本紀二十六和歌〕去籠去曾(中略)私說曰、去籠如謂與倍、

〔厚顏抄中日本紀和歌略注〕私記ニ與倍古曾トハ、夜部コソナリ、日本紀ニ昨日昨夜ヲ、共ニキスト點ゼリ、萬葉第二云、君曾伎賊乃夜、夢所見鶴、此キソノ夜ハ、キスト同ジクシテ、昨夜ナレバ夜部也、キトコト通ズレバ、私記ノ說然ルベシ、

〔日本書紀五崇神〕七年八月己酉、三人共同夢而奏言、昨夜夢之有一貴人、

〔萬葉集抄四〕きそのよとは、きのふの夜といふなり、見日本紀、きのふのよとは、あけつる夜を云也、それをこよひと云は、うるしくは非說なり、けふのよをこよひとは云也、

〔日本書紀六垂仁〕八十八年七月戊午、卽日遣使者詔天日槍之曾孫清彥而令獻、於是清彥被勅乃自捧神寶而獻之、〇中略皆藏於神府、然後開寶府而視之、小刀自失、則使問清彥曰、爾所獻刀子忽失矣、若至汝所乎、清彥答曰、昨夕刀子自然至於臣家、乃明旦失焉、天皇則惶之、且更勿覓、

〔土左日記〕九日、〇承平五年正月中略、ふなこかおとりはふなうたうたひて、なにともおもへらず、そのうたふうたは、〇中略よんべのうなゐもがな、ぜにこはん、そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこず、おのれだにこず、

〔運步色葉集與〕〇〇夜更　夜深同

〔書言字考節用集二時候〕夜更深更又云　闌夕文選　三更萬葉　更深遊仙　深夜又云亘夜　深更

〔倭訓栞前編三十六〕よひ　日本紀に見ゆ、宵をよめり、萬葉集に初夜もよめり、夜間の義成べし、畢竟は夜なり、されど、よひ、よなか、あかつきなどいふは、初更を指ていふ詞也、宵も夜也とも、定昏也とも注せり、六帖に、

あかねさすひるはこちたしあぢさゐの花のよひらに相見てし哉、あぢさゐの花は四ひらある物なれば、宵らによせたり、よひらは夜をよらとよめるに同じ、

〔萬葉集一雜歌〕長皇子御歌

暮相而、朝面無美、隱爾加、氣長妹之、廬利爲里計武、

〔萬葉集十秋雜歌〕詠花

奧山爾、住云男鹿之、初夜不去、妻問芽子之、散久惜裳、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、○中略そのかよひぢに、夜ごとに人をすへてまもらせければ、○中略

人しれぬわがかよひぢのせきもりはよひ〳〵ごとにうちもねななむ

〔類聚名義抄夕〕是夜コヨヒ

〔伊呂波字類抄古天象〕此夕コヨヒ　此夜　今霄同巳上

〔古事記上〕於是火遠理命、思其初事而大一歎、故豐玉毘賣命聞其歎、以白其父言、三年雖住、恒無歎、今夜爲大一歎、若有何由故、其父大神問其聟夫曰、今旦聞我女之語云、三年雖坐、恒無歎、今夜爲大歎、若有由哉、

〔古事記傳十七〕今夜は昨夜を云るなり、此は次の父神の言に、今旦云々とあれば、御歎を聞賜ひし、明朝の詞なればなり、其夜明て後も、なほ今夜と云こと、津國風土記、夢野鹿事を記せる處に、明旦牡鹿語其嫡云、今夜夢、吾背爾雪零於祁利止見支、伊勢物語に、今夜夢になむ見え給ひつると云りければ、源氏物語野分卷、野分せし明旦の詞に、今夜の風とあり、和泉式部物語に、いたく

〔改正月令博物筌 四月〕短夜〈中略〉古來長日を春とし、短夜を夏とし、長夜を秋とし、短日を冬とす、

〔古今和歌集 三夏〕寛平御時きさいのみやの歌合のうた　きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば郭公鳴一こゑにあくるしのゝめ〈○中略〉

月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる、　ふかやぶ

夏のよはまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん

〔書言字考節用集 二時候〕長夜〈文選註、基中不明、是日二長夜一、〉　遙昔〈文選、夜是也、〉　脩夜〈同上〉

〔改正月令博物筌 八月〕長夜〈夜の至りて長きは冬なるに、永き夜を秋の季とするは、夏の夜の餘りにみじかきに、此月はたゞちに長く覺ゆる故なるべし、八月より九月に渡るべし、〉

〔萬葉集 十一古今相聞往來歌類〕寄物陳思

念友、念毛金津、足檜之、山鳥尾之、永此夜乎、

或本歌曰、足日木乃、山鳥之尾乃、四垂尾乃、長永夜乎、一鳴將宿、

〔古今和歌集 四秋〕人のもとにまかれりける夜、きりぎりすのなきけるをきゝてよめる、　藤原たゞふさ

蛬いたくななきそ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる

〔伊呂波字類抄 與天象〕宵〈ヨル○○一本作ヨイ〉

〔書言字考節用集 二時候〕宵〈ヨヒ〉　初更〈同〉

〔萬葉集抄 六〕よひとは、心よくいをぬるを云也、

〔日本釋名 上時節〕宵　夜居なり、夜いまだねずして居る時を云、

〔東雅 一天文〕夜ヨ〈○中略〉　宵ヨヒといふは、ヨとは夜也、ヒとは間也、古語にヒといひしには間之の義あり、

我やどの梅の初花ひるは雪夜るは月かとみえまがふ哉

〔枕草子 一〕夏はよる、月のころはさらなり、やみもなをほたるとびちがひたる、雨などのふるさへおかし、

〔徒然草 下〕夜に入て、物のはへなしといふ人、いと口おし、萬の物のきらかざり色ふしもよるのみこそめでたけれ、ひるはことそぎ、およすげたる姿にてもありなん、よるはきらゝかに、はなやかなるさうぞくいとよし、人のけしきも、よるのほかげぞよきはよく、物いひたるこゑも、くらくて聞たる、用意ある心にくし、匂ひも物のねも、たゞよるぞひときはめでたき、さしてことなることなき夜うち更て、まいれる人の、きよげなるさましたるいとよし、わかきどち、心とゞめて見る人は、時をもわかぬ物なれば、ことにうちとけぬべきおりふしぞ、けはれなくひきつくろはまほしき、よき男の日くれてゆするし、女も夜更るほどにすべりつゝ、鏡とりてかほなどつくろひて出るこそおかしけれ、

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まいりたるがよし、

〔萬葉集 四相聞〕二年○神龜乙丑春三月、幸三香原離宮之時得娘子作歌一首并短歌、

笠朝臣金村

今夜之、早開者、爲便乎無三、秋百夜乎、願鶴鴨、

〔萬葉集抄 六〕この歌古點には、こよひのはやくあくれと點ず、古語には、このよらのといへり、男雞をよぶ故成べし、

〔類聚名義抄 十一〕夜半ヨナカ　○○ヨナ〳〵

〔源氏物語 四夕顔〕ひとめをおぼして、へだてをき給よな〳〵などは、いとしのびがたく、くるしきさまでおもほえたまへば、○下略

は語助なり、

〔倭訓栞(前編三十六)〕よ　夜は世のうつりかはるが如し、同語なるべし、日本紀に更をよめり、夜に初更、二更といふより出たり、

よる　夜を、よども、よるともいへり、體用の詞也、日を、ひるとも轉ずるが如く、およるは御夜也、おひなるは御晝なる也、

〔八雲御抄(三上時節)〕夜　むばたま　さよ　ひとよ(次第にかくのごとし)　もゝよ　ちよ　ぬばたまは本説云、萬葉にむばたまといへり、又ぬばたまともいへり、萬には兩説なり、　五百(いほ夜なり)　ゆきもよ　あめもよ　あま夜　月夜　しも夜　よは　みじかよ　ながながしきよ　さよ中(小夜中也)　萬十に、したよのこひとよめり、(夜中也)　よごろ　よかず(源氏詞也)　よひゝかり(やうやうくる心也)　よくたち(同事也、源なり、)

〔伊呂波字類抄(伊疊字)〕一霄(セウ)　一夜　一夕　〔同(天象不)〕信(フタヨ)(二夜也、)

〔和爾雅(二歳時)〕暮夜(ボヤ)　夜分(後漢書注云、分猶レ半、)　初夜(シヨヤ)(初更之時)　五夜(ゴヤ)(分二一夜一爲二五夜一、又五更也、)　五鼓(ゴコ)(五更)　一昔(セキ)(一夕也)　子夜(子時)　午夜(ゴヤ)(午中也、半夜也、)　闌夕(ラン)　終夜(シウヤ)(ヨモスガラ)　盡宵(ジンセウ)(同)　徹宵(テツ)(同)　盡夕(同)　極夜(ゴクヤ)　通昔(ツウ)(ヨモスガラ)　通宵(ヨモスガラ)　遙昔(ヨウ)(ナガキヨ)(永夜也)　修夜(同上)

〔萬葉集(十二古今相聞往來歌類)〕寄レ物陳レ思

念管、座者苦毛、夜干玉之、夜爾至者、吾社湯龜、

〔萬葉集抄(三)〕ぬば玉とも、うばたまともいへるは、よるをいふなり、うばたまとは、くろきたまと云心也、よるはくろきいろなれば、うばたまと云べし、

〔竹取物語〕中納言(○中略)　みそかにつかさにいまして、をのこどもの中にまじりて、夜をひるになしてとらしめ給ふ、

〔後撰和歌集(一春)〕だいしらず　よみ人しらず

〔伊呂波字類抄 天象 興〕夜 ヨル

〔段注說文解字 七上 夕〕夜、舍也、天下休舍、以ㇾ疊韵ㇾ爲ㇾ訓、休舍猶休息也、舍止也、夜與夕渾言不ㇾ別、析言則殊、小雅莫ㇾ肎ㇾ夙夜、莫ㇾ肎ㇾ朝夕、朝夕猶夙夜也、春秋經夏四月辛卯夜、卽辛卯夕也、从夕亦省聲、羊謝切、古音在ㇾ五部ㇾ

〔下學集 時節 上〕宵 ヨル 夜也

〔書言字考節用集 二 時候〕寢夜 ヨル 萬葉 夜 ヨ 同 小夜 サヨ 萬葉、作ㇾ狹夜ㇾ

〔倭訓栞 前編 十 佐〕さよ。〇萬葉集に小夜と書れど、さとまと通ふ、眞夜の義成べし、さよなか、さよ衣の類是なり、或はさは發語ともいへり、

〔日本釋名 上 時節〕夜　よるはいる也、日入なり、いとよと通ず、又晝出たる人、夜は一所へよる也、よるはあつまる意、前說よし、

〔醒睡笑 四〕日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやとおもひ、我が折角思案して、いとしあてたはとかたる、なにと工夫したぞ、たとへば、朝になれば、とくからおきて山にゆく者もあり、海にうかぶもあり、市にたつもあり、奉公に出仕するあり、日のくれれば、いづれもみな我宿々に、かへりよるほどに、さてぞよるとはいふなるべし、

〔圓珠庵雜記〕よと、よはと、よひと皆同じ、萬葉に初夜をよひとよめるは、まだよひにてふけぬさきなり、

頭書 眞淵云、後の人は、この初夜のことをのみよひとはいへど、すべての夜をよひとよめること、萬葉に多し、古今集にもあり、

〔東雅 一 天文〕夜 ヨ 〇中略　夜ヨといひ、ヨルといふ、ヨとは、今日と明日との中間なればなり、古語に凡事の節限ある中間をさして、ヨといひけり、夜をヨといひ、前世をサキノヨといひ、後世をノチノヨなどいふが如きも、たとへば竹節の間をいひて、ヨといふが如し、ヨルといふが如き、ルといふ

夜

山ざと(さと一本作寺)の春の夕暮きてみればいりあひのかねに花ぞ散ける

〔類聚名義抄 二日〕曛(ヒクレ) 許軍反

〔書言字考節用集 二時候〕晩(ヒクレ)　晏 同　迫晩 同　薄暮 同　曛黒 同

〔倭訓栞 中編二十一比〕ひぐれ　日暮を云、諺に日暮て道いそぐといふは、白居易が傳に、日暮道遠、吾生蹉跎とみえたり、

〔日本書紀 二十八天武〕元年六月甲申、是日發途入東國、○中略到大野、以日落也、

〔書言字考節用集 二時候〕晻晩(ホノクレ) 日没之時　曛黒 同

〔日本書紀 二十九天武〕十三年十一月庚午、日没時、星隕東方、

〔法然上人行狀畫圖 十〕禮讃の時刻は、日没(申時)初夜(戌時)半夜(子時)後夜(寅時)晨朝(辰時)日中(午時)なるべし、

〔書言字考節用集 二時候〕薄暮(ハクボ) 太平御覽、日將落日薄暮、　晡時(ホジ) 韻會、日加申時也、　晡夕(ホセキ) 義同上

〔和爾雅 二時歳〕旁暮(バウボ) 日將晩也　薄暮(ハクボ) 迫暮同　時覔(ジキヤウ) 日暮之時、盡一日也、　景夕(ケイ)　頹暮(タイ)　黄昏(クハウコン) 日落天地之色玄黄而昏々然也、又云昏黄、

定昏(テイコン) 已冥也　向晩(バン)　熏夕(クン)　王莽時(ワウマウガトキ) 羅山子曰、倭俗稱黄昏曰王莽時、言晝前漢也、夜後漢也、以日氣已没、夜氣未萌故也、然則名王莽時當哉、

〔書言字考節用集 二時候〕王莽時(ワウマウガトキ) 俚俗、斥黄昏云爾、　昏鐘鳴(コジミ) 俚俗、稱黄昏時爲昏鐘鳴、

〔饅頭屋本節用集 古時節〕昏鐘鳴

〔倭訓栞 中編入古〕こじみ　昏鐘鳴の音なりといへり、入相をいふ、

〔倭訓栞 中編二十七由〕ゆふやみ　夕闇の義、俗にいふ、よひやみなり、

〔萬葉集 四相聞〕豐前國娘子大宅女歌一首

夕闇者(ユフヤミハ)、路多豆多頭四(ミチタヅタヅシ)、待月而(ツキマチテ)、行吾背子(イマセワガセコ)、其間爾母將見(ソノマニモミム)、

〔類聚名義抄 七夕〕夜 音射 ヨハ

韋、由布佐禮婆、加是布加牟登曾、許能波佐夜牙流、

〔古事記傳二十〕由布佐禮婆は、夕去者にて、夕になればと云むが如し、萬葉に多き詞なり、明去ば、朝去ば、春去ば、秋去ば、又春去ぬればなどもいひ、夕さらば、春さらば、秋さらばなどもいひ、又夕去來れば、春去來ればとも、春去にけりとも、又春去往とも、さま〲に云る、みな去は其時になる意に云り、○註略今の俗言に、夜を夕さりとも、夜さりとも云は、此より出たる言なるべし、

〔萬葉集十冬雜歌〕詠雪

暮去者、衣袖寒之、高松之、山木毎、雪曾零有、

〔空穗物語國讓中〕大將げかうはて、かへり給て、せちにきこえ給へば、そのひのゆふさりつかたなしつぼもとぶらひきこえ給はんとてわたり給ぬ、

〔伊勢物語下〕昔男有けり、その男伊勢の國に、かりの使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人のおや、○中略あしたには、かりにいたしたてゝやり、ゆふさればかへりつゝそこにこさせけり、

〔古今和歌集八離別〕かんなりのつぼにめしたりける日、○中略夕さりまで侍て、まかりいで侍けるおりに、さかづきをとりて、

つらゆき○歌略

〔類聚名義抄日二〕日沒イリアヒ

〔書言字考節用集二時候〕日沒イリアヒ　落照同　又云夕照　晩鐘同

〔倭訓栞前編三伊〕いりあひ　日沒をいふ、日の入間だなり、よて晩鐘をもしかいへり、或は返照をよめり、

〔伊勢物語上〕昔わかき男、○中略けふのいりあひばかりに絶入て、又の日のいぬのときばかりになん、からうじていき出たりける、

〔新古今和歌集二春〕山里にまかりてよみ侍ける

能因法師

〔書言字考節用集時候二〕晩闇(ユフマグレ)萬葉　曛黑同

〔倭訓栞中編二十七〕ゆふまぐれ　夕間暮なり、夕暮に同じ、

〔源氏物語二十一少女〕御めのといと心ぐるしうみて、宮にとかくきこえたばかりて、夕間暮の人のまよひに、對面せさせ給へり、

〔書言字考節用集時候二〕黃昏(タソガレドキ)戌刻也　誰彼時同俗字

〔日本釋名時節上〕昏黑(タソカレ)　誰彼(タソカレ)也、日くれてたれかれとうたがひて、分明ならざる也、晩○晩恐喚誤を萬葉に彼誰(カハタレ)時とよめるが如し、

〔空穗物語藏開中〕すのこちかくよりて、宰相、

夕暮のたそがれどきはなかりけりかくたちよれどとふ人もなし、とてのぼりてゐ給ぬ、

〔拾遺和歌集十六雜春〕題しらず　大中臣輔親

あし曳の山郭公里なれてたそがれ時になのりすらしも

〔源氏物語二十三初音〕花の香さそふ夕風、のどかに打吹たるに、おまへの梅やう〳〵ひもときて、あれは誰どきなるに、物のしらべども、おもしろく、○下略

〔書言字考節用集時候二〕晡時(ユフカタ)又云晡夕　晩剋同

〔源氏物語三十四若菜〕夕かた、かのたいに侍る人の、しげいさに對面せんとて、いでたつついでに、○下略

〔源氏物語二十五螢〕ほたるをうすきかたに、此夕つかたいとおほくつゝみをきて、○下略

〔新撰字鏡日〕晡　甫干反、平、申時、由不佐利、

〔倭訓栞中編二十七〕ゆふさり　新撰字鏡に晡をよめり、夕かたを云、夕にしありと云義、しあ反さ也、よてゆふさりつかたともいへり、

〔古事記中神武〕御祖伊須氣余理比賣患苦而、以歌令知其御子等、○中略歌曰、宇泥備夜麻(ウネビヤマ)、比流波久毛登(ヒルハクモト)

〔萬葉集十一古今相聞往來歌類〕正述心緒

狛錦、紐解開、夕谷、[谷原作戸、據一本改、]不知有命、戀有、

〔古今和歌集十九雜體〕題しらず　讀人しらず

すみぞめの、ゆふべになれば、ひとりゐて、あはれ〳〵と、なげきあまり、せんすべなみに、〇下略

〔書言字考節用集二時候〕昏[活法、日暮也、]　暮[同]　晚[同]

〔萬葉集抄三〕日のくる、をくるとも、くれともいふは、くろくなる詞也、

〔東雅一天文〕暮クレ〇中略　暮、クレといふは、クレは昏なり、天昏く晦きをいふ也、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十一月戊辰、昏時七星俱流東北則隕之、

〔萬葉集十春雜歌〕詠月

朝霞、春日之晚者、從木間、移歷月乎、何時將待、

〔伊呂波字類抄由天象〕晚頭ユフクレ〇〇〇〇　薄暮

〔書言字考節用集二時候〕黃昏　迫晚[同、又作薄晚]　薄暮[同、文選]　夕曛[同、同上]　曛黃[同、遊仙窟]

〔倭訓栞中編二十七由〕ゆふぐれ　夕暮は殊に秋を賞するは、物さびしきをもてなり、よて歌にも三夕の稱を得たり、

〔古今和歌集八離別〕人の花山にまうできて、夕さりつかたかへりなんとしける時によめる、　僧正遍昭

夕暮のまがきは山とみえななむよるはこえじとやどりとるべく

〔枕草子一〕秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山ぎはいとちかくなりたるに、鳥のねどころへゆくとて、みつよつふたつなど、とびゆくさへあはれなり、まいて鴈などのつらねたるが、いとちいさくみゆるいとおかし、日いりはて〻、風のをと、虫のねなど、いとあはれなり、

ふ語はいふ也、さながらは、そのまゝに同じ、又ひねもすがらの略也、夜もすがらに對したる詞也、仁明天皇寶算の賀歌に、茜刺須終日須加良爾と見えたり、ひねは日也、ねは助語、又ねも反の也、夜をよはといふがごとし、すがらは物の末になりて、盡んとするをいふ詞也、ひめもすといふも同じ、めも反も也、

〔萬葉集九雜歌〕詠霍公鳥一首并短歌
鶯之生卵乃中爾、霍公鳥獨所生而、○中略橘之花乎居令散、終日雖喧聞吉、○下略

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、○中略長歌詞曰、○中略茜刺須、終日須加良爾、烏玉乃、狹夜通左右、時日經天、思時爾、○下略

〔類聚名義抄二日〕昏音惛ユフヘ ○○○ ヒクル 昏 暮音墓ユフヘ 〔同七〕夕音席ヨヒ ユフヘ

〔伊呂波字類抄由天象〕晡ユフヘ且後晡日 夕字從月出也 昏亦作昬 稱 暝又云、冥、暝也、 晏夕也巳上同

〔段注說文解字七上〕夕莫也、莫者日且冥也、日且冥而月且生矣、故字从月半見、旦者日全見地上、莫者日在茻中、夕者月半見、皆會意象形也、从月半見、詳易切、古音在五部、

〔書言字考節用集二時候〕暮ユフベ字彙、日晩也、 百同代醉、日出一上爲旦、日入一下爲百、百古昏字也、一地也、 晩同說文暮也 晏同 旰同 夕同說文、莫也、除云、月字之半也、月初生則暮見西方、故半月爲夕、

〔物類稱呼五言語〕夕ゆふべを東國の詞によんべと云、今案に、遊仙屈ニ宿ヨベ、ヨンベと訓ず、

〔東雅一天文〕暮クレ○中略夕、ユフベといふは、ユフは夜といふ詞の轉也、へは語助也、

〔八雲御抄三上時節〕夕 ゆふやみ ゆふけ すみぞめ ゆふな 夕け ゆふまぐれ くものはて夕日也 とよはた雲雨 たそがれ物をとふていふによむべし 夕され 夕ぐれ うらひこゆふべの名也 萬八にねての夕べのともよめり むばたまのゆふべとよめり すみぞめと云、これくらきこゝろ也、

〔醒睡笑四〕日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやとおもひ、我が折角思案して、いとしあてたはとかたる、なにと工夫したぞ、〇中略日ひんがしにかがやけば、そめやはそめてかけ、ぬる者はぬりてほし、きたなき物をもあらひてほすに、いづれものこらずひるほどに、さてなむひるとはいふ物よと、

〔東雅一天文〕晝ヒル〇中略晝、ヒルといふ、ヒは日也、ルは語助なり、日の中する義なるべし、

〔倭訓栞前編二十五〕ひる　神代紀に日をよめり、晝も同じ、日をはたらかしたる詞也、又日中をさしていへり、伊勢物語にも見えたり、武備志に午をよめる是也、

〔和爾雅二時候〕晝分チウブン　晌午シヤウゴ　亭午テイゴ(日在レ午日二亭午一、亭至也、中也、)　白晝ハクチウ(史記)　通日(自レ早至レ晩也)　竟日(盡日也)　終日シウジツ　彌ビ日(晝日也)　移イ日　日旰カン(日影昃也)　日昃シヨク(午后也)　終暮キ　卓午タクゴ(午時也)　薄午ハクゴ(薄迫也)

〔書言字考節用集二時候〕白晝ハクチウ(晝顯日也、註、)　日中ニツチウ(午時)

〔日本書紀二神代〕一書曰、〇中略高皇產靈尊勅二八十諸神一曰、葦原中國者、磐根、木株、草葉、猶能言語、夜者若二熛火一而喧響之、晝ヒル者如二五月蠅一而沸騰之云々、

〔枕草子一〕冬は雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのいとしろく、又さらでもいとさむき、火などいそぎおこして、すみもてわたるもいとつぎ〲し、ひるになりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火おけの火も、しろきはいがちになりぬるはわろし、

〔古今和歌集十三戀〕題しらず　きよはらのふかやぶ
みつしほのながれひるまをあひがたみみるめのうらによるをこそまて

〔類聚名義抄二日〕晝日(ヒル。ヒネモスニ。ヒメモスニ。)　終日(同、ヒメムスニ)

〔書言字考節用集二時候〕終日シウジツ(竟日、盡日、通日、彌日、移日、終晝、並同、)　終日ヒネモス又云晝日

〔倭訓栞前編二十五〕ひねもす　終日、又晝日をよめり、日目もさながらてふを略す、今も日の目て

也　明發(上同)　厥明(也、其日之曉)　質明(也、平明)　凌朝(也、清晨)　詰朝(左傳注、平旦也、)　侵早　夙晨　詰旦(平旦也、又翌日、)
崇朝(自朝至食時)　清朝　平旦　際明(徹曉曰際明)　大昕(說文、昕旦明也、)　朝朗(明旦、朝旦並同、)

〔日本書紀天武二十九〕七年四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之、癸巳食卜、仍取平旦時警蹕、

〔内裏式上〕十六日踏歌式
早旦、天皇御豐樂殿、賜宴次侍從以上、

〔内裏式中〕五月五日觀馬射式
其日未明、中務省置尋常位於庭中、(中略)平明、皇帝出宮、就御座、(中略)
十一月新嘗會式
其日遲明、皇帝廻自神嘉殿、祭御殿訖、

〔儀式七〕釋奠講論儀
其日(〇二月上丁)質明、所司立高座於堂上、

〔類聚名義抄月二〕今朝(ケサ)　明朝(アス)

〔東雅天文一〕今朝をケサといひ、今日をケフといふは、今夜をコヨヒといひ、今年をコトシといふに同じ、ケといひ、コといふは轉語にて、共にコノといふ詞なり、ケサといふはコノアサなり、

〔類聚名義抄一〕晝(音宙和チウ)(ヒル)

〔段注說文解字三下〕晝日之出入、與夜爲介、从晝省从日、(按、今篆體晝亦少二一橫一、陟救切、四部、)

〔伊呂波字類抄比天象〕晝(ヒル、日中也、)日晝、

〔書言字考節用集二時候〕晝(ヒル)(活法、日中也、)　日午(同)　亭午(ヒルナカ)(マヒル)　卓午(同)　日中(同)

〔日本釋名上時節〕晝　ひのぼる也、中天に日のぼる也、中略也、日は母語也、ひるは子語なり、一說、此時物のうるほひひるゆへにひると云、

〔古事記傳 十八〕旦は都登米氐と訓べし、凡て夜有し事を云て、其明旦のことを、都登米氐とは云なり、

〔伊勢物語 下〕昔おほやけおぼして、〇中略在原なりける男の、まだいとわかゝりけるを、此女あひしりたりけり、〇中略つ。と。め。て。とのもづかさの見るに、くつは取て、おくになげ入てのぼりぬ、

〔伊勢物語新釋 四〕つとめては、朝とくの意にはあれども、おほくはよべの事よりかけていふやうの所にいふ詞也、こゝもよべは女の里にゆきてねて朝とく也、

〔源氏物語 夕顔 四〕つ。と。め。て。すこしねすぐし給て、日さし出る程にいでたまふ、

〔倭訓栞 中編 一〕あ。く。る。こ。ろ。ほ。ひ。　黎明遲明などをよめり

〔書言字考節用集 二 時候〕。朏。明（南子、將明曰朏明、）　遲旦 同

〔源氏物語 横笛 四十五〕明がたちかくなりぬらんと思ふ程に、ありし袁のゝめおもひ出られて、〇下略

〔源氏物語 夕顔 四〕いざよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女はおもひやすらひ、とかくのたまふ程、にはかに雲がくれて、あけ行空いとおかし、

〔萬葉集 四相聞〕更大伴宿禰家持贈坂上大孃歌
夜之穗杼呂、吾出而來者、吾妹子之、念有四九四、面影二三湯、
。。。。。

〔萬葉集抄 六〕よのほどろとは、よのひかると云也、夜のあくるを云也、袁のゝめのほがら〳〵とあけゆけばなど云も、ひかりあくる心也、

〔下學集 上時節〕雞鳴（丑八時）　平旦（寅七時）　。日出（卯六時）

〔增補下學集 上一時節〕遲明（早朝）

〔和爾雅 二歳時〕曉旦之類
昧爽（欲明而未明之時）　昧旦　質爽（未曉曰質爽）　曉晨 詩　向曉　五曉（五更將曉也、李詩、夜々達二五曉一、）　爽旦　黎明（天未明黎明之間）　黎旦（天將曉也）　爽曙　曙（東方明也）　平明　旦明（平旦也）　平曉　雞晨　昉昕（初曉）

〔萬葉集抄五〕世間乎、何物爾將譬、旦開榜去師船之、跡無加如、

この歌の中の五文字、古點にはあさぼらけと點せり、此詞ふるくはあさひらけといひけりとみえたり、〇中略あさひらきといへる、なにのき丶にく丶、あはざる心あれば也、あさぼらけと點したるとおぼつかなし、

〔日本釋名上時節〕旦開　朝びらけなり、仙覺が說也、あした雲のひらけ、夜のあくる也、

〔倭訓栞前編二〕あさぼらけ　朝ぼの明の約りたる辭なるべしといへり、常に朝朗とかけり、古今集より見えたり、

〔類聚名物考時令二〕あさぼらけ　朝朗　あさぼらけとは、〇中略朝朗といふ字の如し、朝ぼの明の略語かともいへり、

〔古今和歌集六冬〕やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるをみてよめる、

坂上これのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

〔新撰字鏡日〕晈暭晻　同、土屯反、平、日初出時也、明也、豆〇止〇女〇天、又阿志太、

〔類聚名義抄日二〕旦　音但　アカツキ　アシタ　ツトメテ　アケヌ

〔段注說文解字七上日〕旦　明也、明當作朝、下文云、朝者旦也、二字互訓、大雅板毛傳曰、旦明也、此旦明引伸之義、非其本義、衞風信誓旦旦、傳曰、信誓旦旦然、謂明明然也、从日見一上、一地也、易曰、明出地上晉、得案切、十四部、

〔下學集上時節〕夙早也

〔書言字考節用集二時候〕晨早也　朝　夙同　始旦同

〔日本釋名上時節〕夙　つとめて也、はやき意、あしたはやきを云、

〔古事記中神武〕高倉下答曰、〇中略故如夢教而、旦見己倉者、信有横刀、故以是横刀而獻耳、

しの、めのほがら〳〵と明ゆけばおのが衣々なるぞかなしき

〔書言字考節用集二時候〕天明（ホノ〳〵平旦之義）　昕々（同）　曾明（同萬葉）　髣々（同若々、幽並同、）

〔倭訓栞前編二十八〕ほの〳〵　ほのかに明る貌なり、人麻呂のほの〳〵の詠は、晉謝靈運が詩に、中流袂就判、欲去情不忍、顧望脰未悁、汀曲舟已隱といへる意なるべし、

〔伊勢物語上〕うちなきてあばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞを思ひ出てよめる、〇中略夜のほの〳〵と明るに、なく〳〵歸りにけり、

〔古今和歌集九羇旅〕題しらず　よみ人しらず

ほの〳〵と明石の浦のあさ霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

この歌は、ある人のいはく、かきのもとの人丸が也、

〇按ズルニ、此歌今昔物語卷二十四ニハ小野篁ノ歌トセリ、

〔饅頭屋本節用集安時節〕有明（アリアケ）

〔書言字考節用集二時候〕稱明（アリアケ）、又作二有曉一

〔倭訓栞前編二〕ありあけ　有明の義、十六夜以下は夜は已に明るに、月は猶入らで有る故にいふなり、或は晨明をよめり、

〔古今和歌集十三戀〕題しらず　みぶのたゞみね

有明のつれなくみえし別より曉ばかりうき物はなし

〔千載和歌集十七雜〕秋比山寺にて讀侍ける　藤原良清

おもふこと有明かたの鹿の音は猶山ふかく家ゐせよとや

〔運歩色葉集阿〕平旦（アサボラケ）

〔書言字考節用集二乾坤〕朝開（アサボラケ萬葉）　朝朗（同）　明卒（同）

〔伊京集〕（時節）篠目シノヽメ。凌晨イナノメ。

〔書言字考節用集二時候〕凌晨シノヽメ（白文集、八雲抄、）　五更（同、萬葉、）　篠目（同、俗字、）　東雲（同上）

〔冠辭考二〕いなのめのあけゆきにけり又しのゝめのほがら〳〵と明行ば

萬葉卷十に、（七夕の歌）相見久、厭雖不足、稲目、明去來理、舟出爲牟孃、こを曉のことゝは誰もいへど、その
よしをいはねば、おもふに、いなのめとはあしたの目てふ語也けり、何ぞなれば、古事記に、（神武條）降ニ
此刀一狀者、穿ニ高倉下之倉頂一、自レ其墮入、故阿佐米余玖汝取持、獻ニ天神御子一、故如ニ夢敎一而、旦見ニ己倉一者、信
有ニ横刀一といへり、この阿佐米余玖は旦目吉也、（後世の人も、あしたに吉ものを見れば、朝目よしと悅ぶ是也、）日本紀にも、高倉曰ニ唯
唯一而寤之明旦云々と同じ事あり、この寤之明旦と、右の阿佐米と同じことにて、かつ阿佐と阿志
多と又同じ語也、（志多反は佐なれば也、）さて其阿志多の阿志を反せば伊となる、多と奈は韻通へり、然れば
伊奈のめの明ゆくとは、あしたの目の明ゆくてふこと也、故に此語を夜の明ることに冠らせた
り、〇中略古今和歌集に、しのゝめのほがら〳〵と明ゆけばてふも、朗らかに明行とつゞけて、右の
伊奈の目の明ゆくと同じ語也、いかにぞなれば、しのゝめは、しなのめともいはる、（奈と乃は常に通ふ、）その
しなを反せば佐となりて、しなのめは佐の目となる、さてその佐の目は、阿佐の目のあを略きた
るなれば、右に伊奈のめは阿志多の目てふ事といへるに全く同じき也、（上にいふ如く志多反も佐也、志奈反も佐也、多とも
奈とは同じ韻也、）田舍人の夜の目佐の目もあはせずといふは、夜の目朝の目をも合せぬてふなるを思
へ、又おもふに、いなのめの明とは、寢目明とも意得べし、宿を寢たる目の覺るを、目の開といふは
俗なるやうして古語也、

〔倭訓栞前編十一〕しのゝめ　東雲をよめるは、曉の雲の細やかに明わたるを、篠の芽にたとへい
ふなるべしといへり、神代紀に細開ニ磐戶一窺之と見えたる、是しのゝめの明行空の言本也とぞ、

〔古今和歌集十三戀〕題しらず　よみ人しらず

〔書言字考節用集二時候〕昧爽 欲明之時也、出文選、　黎明同　行黒同　晻々同 説文、晻不明也、

〔倭訓栞中編二十三保〕ほのくらし　明ぼのゝうすぐらき時をいふ、日本紀に凌晨、昧旦などを訓せり、

〔日本書紀十九欽明〕十四年十月己酉、百濟王子餘昌略○註悉發國中兵、向高麗國、略○中餘昌略○中凌晨起見、曠野之中、覆如青山、旌旗充滿、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年八月庚子、是日、設鐘匱於朝、詔曰、略○中其收牒者、昧旦執牒、奏於内裏、

〔源氏物語六末摘花〕まだほのぐらけれど、ゆきの光に、いとゞきよらにわかうみえ給ふを、老人どもゑみさかえてみ奉る、

〔書言字考節用集二時候〕昧爽 代醉(中略)昧暗也、爽明也、明暗相雜也、　昧旦同 毛詩註、天欲明、昧未辨之際也、　遲明同 漢書

〔倭訓栞前編二安〕あけぐれ　文選に昧爽をよめり、あけやみともいふ、夜の明んとして一しきり暗くなる時なり、

〔萬葉集四相聞〕丹比眞人笠麻呂下筑紫國時作歌一首并短歌
吾妹兒爾、戀乍居者、明晩乃、旦霧隱、鳴多頭乃、哭耳之所哭、略○下

〔源氏物語四十七總角〕あけぐれのほど、あやにくにきりわたりて、空のけはひひやゝかなるに、月はきりにへだてられて、木のしたもくらくなまめきたり、山里の哀なる有樣思出給、

〔書言字考節用集二時候〕旦未　朝速同

〔倭訓栞前編二十九末〕まだき　未しき也、略○中朝まだき起てといふも、おくべき時分のまだいたらぬ也、

〔拾遺和歌集一春〕題しらず　兵部卿元良親王
あさまだきおきてぞみつる梅花夜のまの風のうしろめたさに

〔書言字考節用集二時候〕彼誰時本朝俗、斥黎明云爾、猶斥黃昏曰誰彼時、蓋對人面不分明之謂、

〔萬葉集抄二十〕かはたれどきとは、かれはたれどきと云也、ゆふべをたそかれどきと云がごとくに、曉をかはたれどきといへる也、

〔萬葉集二十〕二月〇天平勝寶七歲十四日下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戶進歌數十八首、〇中略
阿加等岐乃、加波多例等枳爾、之麻加枳乎、己枳爾之布禰乃、他都枳之良受母、

〔類聚名義抄二月〕未明アケボノ

〔倭頭屋本節用集時節安〕曙

〔增補下學集上時節一〕未明　平明同　早旦　凌晨

〔書言字考節用集二時候〕晨明淮南子、日拂於扶桑曰晨明、　明發同、文選註、初曉時也、　凌晨同、平明、昒昕、早旦、未明、並同　曙同、文選註、旦明也、又云曉也、
會明同、舊事紀

〔倭訓栞前編二安〕あけぼの　曙をよめり、詩經に明發をよみ、日本紀に會明、昧爽、古事記に開明など書り、明んとして物のほのかに見ゆる時也、よてほの〴〵とあかしの浦などともつゞけり、歌の題に春曙といふ時は、花などもまだ咲出ぬむ月の末より、二月の初めのほど成べしといへり、

〔日本書紀五崇神〕四十八年正月戊子、會明兄豐城命以夢辭奏于天皇、〇下略

〔日本書紀十一仁德〕三十八年、俗曰、昔有一人、往菟餓、宿于野中、時二鹿臥傍、將及鷄鳴、牡鹿謂牡鹿曰、〇中略時宿人心裏異之、未及昧爽、有獵人、以射牡鹿而殺、

〔日本書紀十四雄略〕八年、高麗諸將未與膳臣等相戰皆怖、〇中略會明、高麗謂膳臣等爲遁也、悉發軍來追、乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之、

〔枕草子一〕春はあけぼの、やう〳〵しろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる、

ときともいへり、たまくしげ曉名也　萬、あかつきこめて、夜中心也、とぎのはねがきなどよめるは、たゞあか月ある事なり、ねざめといふおなじ事也、いなのめともいへり、〈稲目とかけり、在二六帖一、〉いなひめ、いなのめ、同事也　萬十に、いなひめのあけ行と云り、これ曉なり、あかつきを、あけがたとはよむべからざるよし、定家說也、

〔日本釋名上時節〕曉、夜のあけ方、あか時也、つととゞ相通ず、

〔東雅一天文〕晝ヒル 晞〇中 曉、アカツキといふは、古語にはアカドキといひけり、アカとは開也、トキとは時也、天開け明なる時をいふ也、

〔倭訓栞前編二〕あかつき　曉をいふ、日本紀に雞明を訓じ、萬葉集には旭時と書り、あかときともよめり、明時の義也、新撰字鏡に昕をおほあかときとよめり、

〔日本書紀二十二推古〕十九年五月五日、藥二獵於菟田野一、取二鷄鳴時一、集二于藤原池上一、以二會明一乃往之、

〔萬葉集二相聞〕大津皇子竊下二於伊勢神宮一上來時、大伯皇女御作歌、
吾勢枯乎、倭邊遣登、佐與深而、鷄鳴露爾、吾立所霑之、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌類〕寄レ物陳レ思
旭時等、鷄鳴成、縱惠也思、獨宿夜者、開者雖時、

〔萬葉集十二古今相聞往來歌類〕寄レ物陳レ思
夕月夜、五更闇之、不明、見之人故、戀渡鴨、

〔萬葉集十五〕海邊望レ月作歌
伊母乎於毛比、伊能禰良延奴爾、安可等吉能、安左宜理其問理、可里我禰曾奈久、

〔源氏物語五若紫〕曉がたに成にければ、法花三昧をこなふだうの懺法のこゑ、山おろしにつきて聞えくる、

〔書言字考節用集〕二時候 旦々(アサナ〳〵)又云朝々

〔萬葉集〕十一古今相聞往來歌類 寄ㇾ物陳ㇾ思
大海之、荒礒之渚鳥、朝名旦名、見卷欲乎、不所見公可聞、

〔萬葉集〕二十 三月〇天平勝寶七歲 三日撿挍防人勅使幷兵部使人等同集飮宴作歌、
阿佐奈佐奈、安我流比婆理爾、奈里氐之可、美也古爾由伎氐、波夜加弊里許牟、
右一首、勅使紫微大弼安倍沙美麿朝臣、

〔萬葉集抄〕六 和語の習、重點を云には、後にはかみの字を略する也、たとへばきら〳〵といはんとてはきら、といひ、はら〳〵といはんとてははら、といひ、とを〳〵といはむとては、とをなんど云たぐひ也、又今の人のあさな〳〵と云事を、あさなさなといへる也、

〔書言字考節用集〕二時候 旦開(アサアケ)萬葉、又奥儀抄、 朝明同萬葉

〔萬葉集〕八秋雜歌 安貴王歌一首
秋立而、幾日毛不有者、此宿流、朝開之風者、手本寒母、

〔源氏物語〕二十八野分 中將の朝けのすがたはきよげなり、〇下略

〔新撰字鏡〕日 朏芳味布佩二反、去、向ㇾ曙色、阿〇加〇止〇支、 旭許玉反、旦日欲ㇾ除也、日乃氐留、又阿加止支、 晷各音、阿加止支、

〔類聚名義抄〕日二 曉呼鳥反 アカツキ アケヌ アシタ

〔段注說文解字〕七上日 曉、明也、此亦謂ㇾ旦也、俗云、天曉是也、引伸爲二凡明之偁一、〇中略 从ㇾ日堯聲、

〔類聚名義抄〕日二 曙音署 アカツキ アケヌ アキラカ アサボラケ アキヒル

〔下學集〕時節上 曉曙二字義同

〔書言字考節用集〕二時候 厥明(アクルアサ)代時、厥明、質明、當則已曉也、 質明同、見ㇾ上 曉同、廣韵、曙也 五更萬葉 旭時同、萬葉

〔八雲御抄〕三上時節 曉 しのゝめ淩晨とかけり 山かつら曉天雲也 ありあけ あけくれ 曉をば、萬にあか

一說足立也、夜いねたる者、足たちておくる也、前說を用ゆべし、

〔東雅一天文〕朝アサ〇中略アシタともいふは、萬葉集抄に、古語にシタといふは、間といふ詞なりといふなり、さらばアケシホドなどいふが如し、

〔倭訓栞前編二〕あした　朝旦などをよめり、おた反さ也、あさと同じ、

〔萬葉集挽歌二〕吉備津采女死時、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌、

露己曾婆、朝爾置而、夕者、消等言、霧己曾婆、夕立而、明者、失等言、〇下略

〔源氏物語葵九〕おとこ君はとくおき給て、女君はさらにおき給はぬあしたあり、

〔八雲御抄時節三上〕朝。たまひこ或はたまひのとも　あさな　あさけ朝開、朝飯をも、　朝あけ　萬には、つととよめり　あさまだき　朝びらき是朝也　あけたつ是も朝也、

〔日本釋名時節上〕朝　ひるのいまだあさき也

〔東雅一天文〕朝アサ〇中略　朝、アサといふは、アサは開也、日本紀釋に、開の字讀て、アサといふなり、天開き明かなるをいふ也、

〔倭訓栞前編二〕あさ　朝をいふ、あは明く也、さは少也、狹也、豐後の方言に、あすらといへり、すら反さ也、

〔延喜式祝詞八〕新年祭

水分坐皇神等能前爾白久、〇中略皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾、長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故、〇下略

〔萬葉集相聞秋八〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌一首

每朝、吾見屋戶乃、瞿麥之、花爾毛君波、有許世奴香裳、

〔假頭屋本節用集時節安〕旦々

されず、

〔源氏物語四夕顔〕わが心ながら、かゝるすぢに、おほけなくあるまじきこゝろのむくひに、かくきしかた、行さきのためしとなりぬべきことはあるなめり、

〔和漢名數續編歳時〕一日四時 旦 晝 暮 夜 素問、岐伯曰、以一日分爲四時、朝則爲春、日中爲夏、日入爲秋、夜半爲冬、

〔伊呂波字類抄知疊字〕晝夜〔同天疊字〕朝夕

〔和爾雅二歳時〕晝夜 朝夕 旦暮 早晩 晨夕 旦夕 晨昏 昏明 蚤晏 曉夜 夙夜 昕夕
日夜 旦々 日々也 日夕 龍暮 龍、古文朝字、

〔書言字考節用集二時候〕日夜 晝夜 昏明義同 旦暮 又云朝暮 旦夕 又云朝夕 朝暮 旦暮、昏明、晨昏、蚤晏、晨夕、夙夜、昕夜、日夜、日夕並同、
朝夕 同上 晨昏 旭曛同 暾晡同 朝暮同 寅酉同 後太平記

〔源氏物語一桐壺〕此比あけくれ御らんずる、ちやうごんかの御ゑ、○下略

〔新撰字鏡日〕昕 許斤反、平、晨也、於保安加止支、又阿志太、

〔類聚名義抄二月〕朝 陟驕反 アシタ ツトメテ

〔段注説文解字七上 倝〕𠦝 旦也 旦者朝也、以形聲會意分別、蓋鳳巣朝其雨傳云、崇終也、從旦至食時、爲終朝、此謂至食時乃終其朝、其實朝之義、主謂日出地時也、○中略 从倝舟聲、陟遙切、二部、

〔下學集上時節〕晨朝 二字義同

〔倭頭屋本節用集時節之〕晨朝

〔書言字考節用集二時候〕晨 文選注、朝謂日未出時、晨謂日出時、 朝同 旦同 夙同

〔萬葉集抄三〕あくとも、あしたともいふは、しろくなる詞也、

〔日本釋名上時節〕晨 あは、あさき也、したは下也、日のいまだあさくして、天の下にひきくある時也、

〔大鏡序〕さ。い。つ。こ。ろ。雲林院のぼだいかうにまうで、侍りしかば、〇下略

〔倭訓栞中編十四知〕ち。か。ご。ろ。　近をよめり、或は近者とみゆ、又屬をよむは師古近なりと注せり、

〔類聚名義抄日二〕日者ヒゴロコノゴロ　〔同頁三〕頃丘潁反コノゴロ　頃來コノゴロ　頃者同　〔同今九〕今屬コノゴロ　今來同

〔伊呂波字類抄古天象〕近日コノゴロ　近來　頃　適者已上同、コノゴロ、

〔日本靈異記中〕憶持心經女現至閻羅王闕示奇表縁第十九

比頃コノゴロ

〔和爾雅歲時二〕近頃　頃者コノゴロ　屬者シヨクコノゴロ　適者コノゴロ　近者　適者タ　比者ヒ　茲者　比チカゴロ同　近　屬シヨクコノゴロ　適間サイカン　古昔コセキ
在昔ザイセキ　遂古スイコ後漢書注、遂古猶往古也、　往古ワウコ　往昔　上世　上古

〔倭訓栞前編九古〕このごろ　比乃頃、屬間、字或は間者、頃者などをよめり、靈異記に此頃ともみゆ、

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上郎女歌
比者千歲八往裳、過與吾哉然念、欲見鴨、

〔伊呂波字類抄見疊字〕未。來。〔同志疊字〕將來

〔書言字考節用集二時候〕自今以後　向後同白文　以後又作已後　餘年萬葉　將來同　向後同　未然日本舊事紀
已後上同　向前同文粹　未來常來、將來並同、　自今以後漢王莽傳、又自今以來出史記、

〔倭訓栞前編三十五由〕ゆくするゑ　行末の義也、萬葉集に餘年をよみ、續日本後紀の長歌に、將來をよめり、前程をも譯すべし、

〔日本書紀七景行〕二十七年十二月、川梟帥〇中略卽啓曰、自今以後號皇子應稱日本武皇子、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于四十〇中略長歌詞曰、〇中略
今我帝波、往古毛未不御坐志、將來毛何申年、〇下略

〔源氏物語一桐壺〕あるかなきかに、きえいりつゝ、ものし給を、御らんずるに、きしかた、行末おぼしめ

久代〔同上〕　曩時〔同〕　往代〔同、又作往時〕　昔年〔同、又作昔日〕

〔倭訓栞前編十三〕そのかみ　昔時をよめり、禁河書に久代をよめり、石上(イソノ)の義、上世といふが如し、當時をよめるも、上に昔の事をいひて、其時と指の詞なりといへり、もと石上ふるてふ詞より、ふるき事はいひならはせり、

〔空穗物語俊蔭〕そのかみとしかげこの志ら木ごとを、この人々に一づゝたてまつる、

〔源氏物語四十五橋姫〕そのかみむつまじう思ひ給へし、おなじ程の人おほくうせ侍にける世の末に、

○下略

〔大和物語上〕土佐守にありけるさかゐのひとざねといひける人、やまひしてよはくなりて、とばなりける家にゆくとてよみける、

行人はそのかみこんといふものを心ぼそしやけふの別れは

〔冠注大和物語上〕そのかみ○中略　上の語をうけて、その時といへるやうの意也、行さきをもいふといへる說はよろしからず、

〔增補雅言集覽二十三〕廣足云、こゝは上の語は地の詞、そのかみは病者の歌にて、常いふとは異也、其時といふ意にて、こゝは行さきをさす也、

〔倭訓栞中編八〕こしかた　來しかたの義也、きしかたも同じ、

〔源氏物語四十七總角〕たゞつくぐ〳〵と聞給て、きしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけてなにたのむらん、とほのかにの給、

〔新古今和歌集十八雜〕題志らず　權中納言資實

こしかたをさながら夢になしつればさむるうつゝのなきぞ悲しき

〔日本釋名上時節〕前比(サイツコロ)　さきの比也、つはやすめ字也、

昔在同　昔時同　昔者同　曩ムカシ奴黨反　曩者ムカシ　昔ムカシ昨積反

〔日本釋名上時節〕昔ムカシ　むなしといふ詞、橫の通音にて、かとなと通ず、過去たるあとの事はむなしき也、

〔倭訓栞前編三十一〕むかし　昔をよめり、神代紀に曾をよみ、古語拾遺に久代とも書り、向ひしの義なり、向字をさきにともよめる意、過にしかたといふなり、昔在、在昔、昔者皆同じ、古今集、土左日記などに、むかしべともいへり、へはいにしへの如し、

〔竹取物語〕今は。。。むかし。。。竹とりの翁といふものありけり、○下略

〔今昔物語一〕釋迦如來人界宿給語第一

今。。昔、釋迦如來未ダ佛ニ不成給ケル時ハ、釋迦菩薩ト申テ、兜率天ノ內院ト云所ニ住給ケル、

〔古事記中應神〕昔有新羅國主之子、名謂天之日矛、是人參渡來也、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月壬午、皇太子使使奏請曰、昔ムカシ在天皇等、世混齊天下而治、○中略現爲明神御八島國天皇問於臣曰、其群臣連及伴造國造所有、昔在天皇日所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇祖大兄御名入部、彥人大兄也及其屯倉、猶如古代ムカシ而置以不、○下略

〔伊勢物語上〕昔ものいひける女に、年ごろありて、

古のしづのおだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな、といえりけれど、なにとも思はずや有けん、

〔古今和歌集十九雜體〕ふるうたにくはへて、たてまつれるながうた、　壬生忠岑

あはれむかし。。。へ。。。ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ、○下略

〔類聚名義抄二日〕當時ソノカミ　曩昔ソノカミ

〔書言字考節用集二時候〕𦣱昔ソノカミ毛詩　當時同史記　當年同事文前集　當初同　宿昔同白文集　徃前同盧全　上世同日本紀

立わかれいなばの山の嶺におふる松としきかば今かへりこん

〔大和物語上〕この男忠文藤原みちの國へくだりけるたよりにつけて、○中略道にてやまひしてなんしにけるとき、て、○中略をんな監命婦

ゑのづかのむまや〱と待わびし戀はむなしく成ぞしにける、とよみてなんなきける、

〔類聚名義抄口二〕古。イニシヘ　ムカシ

〔段注説文解字古三上〕古故也、○中略从十口、識前言者也、識前言者口也、至於十則展轉因襲、是爲自古在昔矣、

〔類聚名義抄イ一〕往羽罔反　イニシヘ　ムカシ　以往イニシヘ　既往イニシヘ　乃往同

〔書言字考節用集時候二〕往昔イニシヘ　上世同

〔神代卷直指抄一〕いにしへは、へはうつぼ字、いにしは去といふ義也、

〔日本釋名上時節〕古イニシヘ　今案、いにしはいぬる也、去の義なり、一説へは世也、へとよと通ず、いにし世也、此説も又よし、

〔東雅天文一〕古イニシヘ○中略　イニシとは往也、へとは語助也、春邊夕邊などいふが如し

〔倭訓栞前編伊三〕いにしへ　古をいふ、往し方なり、むかしをむかしべといふが如し、祝詞に去前をよめり、いにしへのむかしといへるは古昔の訓なるべし、

〔日本書紀神代一〕古天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、

〔萬葉集相聞四〕柿本朝臣人麻呂歌四首

今耳之、行事庭不有、古、人曾益而、哭左倍鳴四、

〔萬葉集雜歌七〕詠河

古毛、如此聞乍哉、偲兼、此古河之、清瀨之音矣、

〔類聚名義抄イ一〕往。昔。ムカシ　往者同　往日同　往古同　〔同日二〕昔音惜　イニシヘ　始　ムカシ　在昔ムカシ

たとへば、魚をイヲとも、ウヲともいふが如し、イマといひ、ウマといふ義の如きは幷に不ㇾ詳、イは發語の調なるべし、古語には、目をマといひぬれば、イマとは目前の時をさして云ひしにや、

〔倭訓栞前編三〕いま　今をいふ、是時也と注す、日本紀にうまとも見えたり、されば濃州のあたりに、馬と今とを互に謬りたる所あり、或は如今、而今、乃今、今者、在今、今也などをよめり、いは發語、まは目の義、目前の意成べしといへり、中庸に今夫天云々、今夫地云々の如きは、まのあたりをもていふ辭也といへり、我邦の口語も亦然り、又說文には今急也と見ゆ、是も口語に多し、俗にやがてといふに同じ、

〔古事記上〕菟答言、〇中略今將ㇾ下ㇾ地時、吾云、汝者我見ㇾ欺言竟、卽伏ニ最端一和邇捕ㇾ我、悉剝ニ我衣服一、

〔古事記傳十〕今將ㇾ下ㇾ地時、凡そ今と云に三意あり、一には字の如く常云今なり、二には今一など云て、有が上に猶添むとするを云、三には將ㇾ然ことの近きを云、俗にやがてとも、おつゝけとも云に同じ、卽今にともいふなり、今返來むなど云是なり、此に又一意あり、今早と催すにいふ是なり、又今者と云て、今は此ぞ限と云意に用ることあり、こゝは其意にて、地に下むとするほどの近きを云、

〔日本書紀三神武〕戊午年十月、我卒聞ㇾ歌、俱拔ニ其頭椎劒一、一時殺ㇾ虜、虜無ニ復噍類一者、皇軍大悅、仰ㇾ天而咲、因歌之曰、伊莽波豫、伊莽波豫、阿阿時夜塢、伊莽儾而毛、阿誤豫、伊莽儾而毛、阿誤豫、　十一月、皇軍攻必取、戰必勝、而介胄之士不ㇾ無ニ疲弊一、故聊爲ニ御謠一、以慰ニ將卒之心一焉、謠曰、〇中略之摩途等利、宇介譬餓等茂、伊莽輪開珥盧禰、

〔日本書紀九神功〕九年〇中略十月、新羅王遙望以爲、非常之兵、將ㇾ滅ニ己國一、讋焉失ㇾ志、乃今醒之曰、〇下略

〔伊勢物語上〕昔わかき男、けしうはあらぬ女を思ひけり、〇中略昔のわか人は、さるすける物思ひをなんしける、今のおきな、まさにしなんや、

〔古今和歌集八離別〕題しらず　在原行平朝臣

〔萬葉集相聞四〕吹黃刀自歌
河上乃、伊都藻之花乃、何時何時、來益我背子、時自異目八方、
〔古今和歌集秋四〕これさだのみこの家の歌合のうた　讀人しらず
いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふことの限成ける
〔書言字考節用集時候二〕何時　何比
〔古今和歌集雜十八〕貞觀御時、萬葉集は、いつばかりつくれるぞと、とはせたまひければ、讀てたてまつりける。歌略○
〔源氏物語桐壺一〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給けるなかに、○下略
〔伊呂波字類抄古疊字〕古今
〔書言字考節用集時候二〕古今増韻、古、遠代也、又久也、韻、今、是時也、又對古之稱、
〔古今和歌集序〕歌のさまをもしり、ことの心をえたらん人は、おほぞらの月をみるがごとくに、いにしへをあふぎて、いまをこひざらめかも、
〔源氏物語梅枝三十二〕からどもは、昔今のとりならべさせ給て、御かた〴〵にくばり奉らせ給、
〔類聚名義抄九〕今イマ　音金　コム　如今イマ　今者イマ　方今ニイマ
〔段注說文解字五下〕今是時也、今者對古之稱、古不一其時、今亦不一其時也、云是時者、如言目前、則目前爲今、目前已上皆古、如言趙宋、則趙宋爲今、趙宋已上爲古、如言魏晉、則魏晉爲今、魏晉已上爲古、班固作古今人表、漢人不與焉、而謂之古今人者、謂近乎漢者爲今人、遠乎漢者爲古人也、作古今人表者、所以補漢書之所無、存漢已前之匡略也、亦謂三皇至漢以前、迭爲古今人也、古今人用字不同、謂之古今字、張揖作古今字詁是也、自張揖已後、其爲古今字、又不知遞更也、古今音之不同、近世言之最詳、自商周至近世、不知凡幾古今也、故今者無定之書、約之以是時、則兼賅矣、召南傳曰、今急辭也、今急疊韻、从亼乁、會意、乁逮也、乁亦聲、居音切、七部、乁古文及見又部
〔書言字考節用集時候二〕如今白文集　且今且今萬葉　于今
〔東雅一天文〕今イマ○中略　今イマ、古語にはウマともいひけり、日本紀イといひ、ウといふは轉語なり、

任卿の説也、喜撰式にも、遊逅たまゆらと云と見え、八雲御抄には、しばしの義ともみえたり、

〔八雲御抄 四世俗言〕たまゆら しばし也、公任說、わくらは同事、不可然歟、

〔萬葉集 十一古今相聞往來歌類之正述心緒〕玉響、昨夕見物、今朝可戀物、

〔萬葉集抄 七〕わくらはにとは　たまさかにと云也

〔古今和歌集 十八雜〕田むらの御時に、事にあたりて、津の國のすまといふところに、こもり侍けるに、宮のうちに侍ける人につかはしける、　在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

〔伊呂波字類抄 比辭字〕久 ヒサシ 長久也

〔倭訓栞 前編二十五比〕ひさし　久をよめり、ひさにとも、ひさゝとも見ゆ、神代直指抄に日去の義といへり、靈異記に淹をよめり、出羽にては、ひやしといふ、華嚴經維摩經に久如と見ゆ、こは幾時といふに同じ、關西、關東に口語にいふは、やつとといひ、又ゑつとといふ、出羽によつぱるといふ、世遙の意なるべし、

〔古今和歌集 十七雜〕題しらず　よみ人しらず

我みてもひさしく成ぬ住の江の岸のひめ松いくよへぬらん

〔日本釋名 上時節〕何時　いづれの時を略せり、萬葉に何時をいつとよめり、

〔雅言集覽 以二〕いつ 俗に同、イツ何時のイツ也、過去にも、未來にもいふ、

〔萬葉集 十一古今相聞往來歌類之正述心緒〕夕卜爾毛、占爾毛告有、今夜谷、不來君乎、何時將待、

〔倭訓栞 中編二伊〕いつも　毎をよめり、何時もの義也、

と見えしに同意なり、又少選をよめり、

〔日本書紀神代一〕素戔嗚尊請曰、吾今奉敎、將就根國、故欲暫向高天原、與姉相見而後永退矣、

〔日本書紀神代二〕一書曰、(略)○(中)弟往海濱低佪愁吟、時有川鴈、嬰羂困厄、卽起憐心解而放去、須臾有鹽土老翁、

〔日本書紀歌行七〕二十七年十二月、川上梟帥叩頭曰、且待之、吾有所言、

〔萬葉集相聞十三〕反歌(○長歌略)

敷敷丹、不思人者、雖有暫文吾者、忘枝沼鴨、

〔書言字考節用集時候二〕暫時　節間(同、萬葉)　東間(同、事見萬葉)

〔倭訓栞前編都十六〕つかのま　喜撰式に、若詠時時つかのまといふと見ゆ、時の間也、つかは時と通ず、又萬葉集に東間とありて、一握の間にて暫時をいふともいへり、夏野行牡鹿の角のつかの間といへるは、角落てまた手一束ほどに生出たるをいふ也、

〔萬葉集相聞四〕柿本朝臣人麻呂歌三首

夏野去、小牡鹿之角乃、東間毛、妹之心乎、忘而念哉、

〔書言字考節用集時候二〕時計(俗字)　須臾(同)

〔倭訓栞前編登十八〕とばかり　詞にいふは、それとばかりの義也、とばかり見つる、とばかりやすむなどは、しばしの意なりといへり、細流に時ばかりの義とも見ゆ、

〔源氏物語帚木二〕この男いたくすゞろぎて、門ちかきらうのすのこだつものにしりかけて、と。ば。か。り。月をみる、

〔書言字考節用集時候二〕暫時(日本紀用玲瓏字)

〔倭訓栞前編多十四〕たまゆら　玉ゆらに昨日の夕べ見し物をなどいへるは、たまさかの意也と、公

〔倭訓栞前編十八〕とき　時辰をいふ、常の義也、一日の十二時も、一年の四時も、千萬世の時世も、歳月のうつり行まゝに、其常を失はざるをいふなるべし、日本紀に期をよみ、諱訓抄に代もよめり、又疾の義、文選に時來亮急絃と見えたり、

〔類聚名物考時令二〕時中　とき。なか。　半時の事なり、一時の半なればいふ、なかは、なかばの略にて、中といふも前後をのぞけるによりていふべし、

〔大鏡四右大臣師輔〕九條殿は（略）中時中ばかりありてぞ、御すだれあげさせ給ひて（略）下

〔運歩色葉集〕片時。　〔同〕片時。

〔倭訓栞中編四加〕かたとき　僧清珙が詩に、不放心身靜片時と見えたり、今片時を音にもいへり、半時ともいふ也、

〔空穗物語あて宮〕七條の家、四條の家え、はじめて、かたはらより火をつけて、かたときにやきほろぼして、山にこもりぬ、

〔類聚名義抄二〕暫。（正、暫今暫或、藏濫反、アカラサマ）シ。バ。ラ。ク。　〔同三〕斯須　何頃（同）　少頃（同）　假頃（同）

〔和爾雅二時〕時間（頃刻之間也）　斯須　倏忽　頃間　有頃　食頃　俄頃　須臾　俄間　少間　少焉
少選　欻吸　逍次　瞬息　霆頃　暫時　一伏時（一周時也、又一周日也、）

〔書言字考節用集二時候〕浹辰（日本紀）　須臾（文選注、少時也）　斯須（禮記注、斯須、一會之時也、）　聊且（文選）　俄傾（韻瑞）　頃刻（同上）
少選（韻會）　少時（同、頃間、食頃、少間、瞬息、霆頃、並同、）　暫（同、活法、不久也）　暫（同）　少焉（赤壁賦）

〔倭訓栞前編十一〕しばし　日本紀に且をよめり、苟且也、今瞬息の意にいへり、
しばらく　暫をよめり、らく反る也、しばしあるを略せる詞なるべし、姑をよめるは姑且の意也、神代紀に頃時をしばらくありてとよめり、聊をよむも苟且より轉せるなり、頃之、少之もよめり、頃はほどありての意、少は少時の略也、斯須、須臾、少間なども同じ、又居頃をよめり、居無幾、居無何

三首日

時

〔享保集成絲綸錄 五〕元文二巳年十月

朔望之外、廿八日御禮可ㇾ有之分、 正月 二月 四月 七月 十二月

廿八日御禮無ㇾ之分 三月 五月 六月 八月 九月 十月 十一月

右之通、向後可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、若右之內、廿八日御禮被ㇾ爲ㇾ請候はゞ、前以可ㇾ相ㇾ觸候、

一只今迄月次御禮無ㇾ之時は、四品以上江、從ㇾ老中ㇾ以ㇾ切紙ㇾ相達候得共、向後は大目付ゟ可ㇾ申ㇾ通ㇾ候間、可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候、

右之趣可ㇾ被ㇾ相ㇾ觸ㇾ候

十月

〔守國公御傳記 三〕公信、中略、○松平定 同年五年○天明 十二月朔日、將軍家家治○德川 ヨリ召サヒラレ、三日及ビ五節句等登城ノ時、溜ノ間ニ出座アルベシ、拜謁ハ、三日ハ御黑書院、五節句ハ御白書院ト特命ヲ蒙リ玉フ、

〔東都歲事記 一正月〕元日 每月產土神參に每月朔日、十五日、廿八日の三日は、貴賤生土神へ詣す、○中略 鐵炮洲稻荷社每月朔日、十五日、廿八日參詣多し、○中略 妙見參朔日、十五日緣日なり、廿八日にも參詣あり、○中略 十五日 每月產土參朔日に同じ 妙見參朔日に同じ○中略

廿八日 每月產土神參朔日十五日に同じ 妙見參○下略

〔日次記事 一正月〕凡每月朔日、十一日、廿一日、三首日、神明、二十一社詣、

〔類聚名義抄 二日〕時トキ是宍反 旹古

〔段注說文解字 七上日〕時四時也本春秋冬夏之稱、引ㇾ伸之ㇾ爲ㇾ凡歲月日刻之用、釋詁曰、時是也、此時之本義、言ㇾ時則ㇾ無ㇾ有ㇾ不ㇾ是者ㇾ也、○中略 从ㇾ日寺聲市之切、一 旹古文時从ㇾ日㞢ㇾ作、之聲也、小篆从ㇾ寺、寺亦之聲也、漢隸亦有ㇾ用ㇾ旹者ㇾ、

〔書言字考節用集 二時候〕旹トキ字彙、古時字、 時同 辰同說文、時也、又日也、 節同 刻同 于トキ文選註、謂ㇾ當時ㇾ也、

〔日本釋名 上時節〕時 ときは疾也、はやき意、時は、はやくすぐる物なれば也、

リト答申サル、然バ日月並ニ星ヲモ祝フ可キ義也ト有シニ、サレバコソ廿八日ヲ廿八宿ニ値テ星ノ終リトテ、漢土ニテハ祝ヒ申事ノ由申サレシカバ、以後我家ノ禮ヲモ定メラレル可ト仰ラレシ由、

〔安齋隨筆後編十四〕一御當家、朔日、十五日、廿八日の御禮出仕之事、朔日、十五日は昔より有し事也、御禮の事は、權現樣三河に御座の時、御家人皆々三河の內、我が在所々々に居てけり、御家人は皆門徒衆なれば、廿八日寺詣して、此上下ついでには御機嫌をうかゞひし也、君御待ありて御逢被遊しと也、此例にて今も廿八日御禮ある也、或說に朔日は日の禮、十五日は月の禮、廿八日は星の禮也と云て、廿八日も上古より御禮有る事のやうにいふは誤り也、朔朔日也望十五日也是ノ禮和漢ともに上古より有と、

〔倭訓栞前編十六〕ついたち　每月の朔望を祝ふは通例にて、內々行事に、每月朔日、廿八日、御昆布鮑と見えたり、されば廿八日は、神君の時に始るといふ說は心得がたし、

〔將軍德川家禮典錄一〕享保十乙巳年

西丸江出仕之覺

月次朔日

一御三家方、幷松平加賀守、溜詰、大廊下、御譜代、詰衆、御奏者番、嫡子、高家、御留守居、大御番頭、

十五日

一萬石以上、幷嫡子、　一交代寄合之內、表向々御禮罷出候分、　一表高家、金地院、護持院、

廿八日

一布衣以上之御役人　一交代寄合　一三千石以上之寄合　一布衣以上之寄合　一法印、法眼之醫師、　一中奧御小性　一中奧御番

三日

之、共起可憐之情、及月蘂以鹿鳴不聆、

〔枕草子 二〕すさまじきもの　しはすのつごもりのなが雨

〔濱松中納言物語 一〕もろこしのうむれいといふ處に、七月上の十日におはしましつきぬ、

〔源氏物語 三十五 若菜〕十月中の十日なれば、神のいがきにはふくずも色かはりて、(下略)

〔異本堤中納言家集〕藤

三月しもの十日、京ごくのふぢのはなのえ、しはべりけるとき、かれこれまうできて、さけたうべけるついでに、三條右大臣のうたのかへし、(歌略)

〔源平盛衰記 四十一〕盛綱渡藤戶兒嶋合戰附海佐介渡海事

佐々木三郎盛綱(中略)其邊ヲ走廻テ浦人ヲ一人語ヒ寄テ、白鞘卷ヲ取セテ、ヤ殿向ノ嶋ヘ渡ス瀬ハ無カ敎給ヘ、悦ハ猶モ申サント云ヘバ、浦人答テ云、瀬ハ二ツ候、月頭ニハ東ガ瀬ニナリ候、是ヲバ大根渡ト申、月尻ニハ西ガ瀬ニ成候、是ヲバ藤戶ノ渡ト申、(下略)

〔書言字考節用集 二時候〕白月(ハクゲツ 俗云、上十五日、西域記、月盈至滿謂之白分、月虧至晦謂之黑分、又出俱舍論、)黑月(コクゲツ 俗云、下十五日、西域記、白分黑分前後合爲一月、詳俱舍論、)

〔守貞漫稿 二十七〕朔日、十五日、二十八日、之ヲ三日ト云、サンジツト訓ジ、式日トモ云、大内ニモ儀式アル歟、未聞之、追書スベシ、幕府ニテハ諸大名、旗本、御家人ニ至ル迄總登城ニ、大名旗本ハ熨斗目麻上下ヲ着ス、譜代ノ供人、或ハ見附番及ビ辻番迄モ、此三日ニハ麻上下ヲ着ス、

〔將軍德川家禮典錄 一〕例月祝日之起根　朔望の禮に廿八日を加へ、三日と祝せしは、德川家に始れり、(下略)

〔書言字考節用集 二時候〕廿八日(近世準朔望、是日設禮爲祝、蓋据宿數之義者乎、)

〔明良洪範 一〕或時伏見ニテ神君、(德川家康、○中略、)先生(○藤原惺窩)ニ御尋有シハ、毎月朔望ノ禮ハ如何成故ト問給フ、先生、是ハ日月ノ明ヲ尊ブヨリ、朔日ハ日ノ始ヲ祝ヒ、十五日ハ月ノ滿ルヲ壽クヨリ起レ

〔佐喜草〕月日をかく事　すこしくはしくいひてよからんには、む月のついたち比又はついたちばかりみな月のもちばかり、玄はすのつごもり比又はつごもりかたなど。かくべし、（中略）ついたち頃は上旬の事、望ばかりは中旬のこと、つごもり比は下旬の事なり、今いふついたちつごもりとはことなり、ついたちの日、つごもりの日といふは、いまとおなじ、又む月かみの十日ばかり、みな月の中の十日ばかり、玄はすの玄もの十日ばかりともかくべし、又む月の十日あまり、みな月の廿日あまりなどともかくべきなり、さてついでにいはん、今の歌人の、む月のはじめの五日ほどやうにかくは、ひがごとなり、こはたゞいつかとかくべし、はじめといふまじき也、十五日廿五日を、中の五日、下の五日とかくなどもことわりはさる事なれど、そはいかゞなり、

〔古事記仲哀中〕亦到坐筑紫末羅縣之玉島里而、御食其河邊之時、當四月之上旬、

〔古事記傳三十〕上旬は波士米能許呂とも訓べし、都紀多知能許呂とも訓べし、かみのとをかと云ことは、備男集の歌にもあれど、なほ上代の言には非めれば、然訓はわろけむ、都紀多知は月立なり、後に朔字を當て、ついたちと云、つきなついと云は音便なり、〇中略此に四月上旬とあるは、當時然言しには非ず、後の名を以て語傳へたるなり、

〔源氏物語藤裏葉三十三〕四月のついたちごろおまへの藤の花、いとおもしろうさきみだれて、よのつねの色ならず、〇下略

〔源註拾遺藤裏葉〕四月のついたち頃

今案、これは七日也、然るをついたち頃といふは、朔日二日のついたちにはあらず、卯月のたちたる頃なればかくいへり、萬葉第六三日月の歌にも、月たちてたゞみか月と讀り、

〔枕草子四〕これ〇雪山いつまでありなんと、人々のたまはするに、〇中略む月の十五日までさぶらひなんと申を、御前にもえさはあらしとおぼすめり、女房などはすべて年の内つごもりまでもあらじとのみ申に、あまりとをくも申てけるかな、げにえしもさはあらざらん、ついたちなどぞ申べかりけると、下にはおもへど、さばれさまでななどいひそめてん事はとて、かたうあらがひつ、

〔日本書紀仁徳十一〕三十八年七月、天皇與皇后居高臺而避暑時、毎夜自菟餓野有聞鹿鳴、其聲寥亮而悲

十四五日にあたる日の夜の月は、望のきはみなり、

十四五日はとをかあまりよかいつか　望はもち　もちとは滿てふ意にて、月の滿たるをいふ名なり、中旬のあひだみながら、空の月まさしく圓にはあらざれども、缺たる所なく、やゝみちたれば然いふなり、さて今望の極みを十五六日といはずして、十四五日にあたる日といへるは、上つ代の朔は、暦の二日三日ごろなればなり、さて伊勢物語に、そのころみな月のもちばかりなりければとあるは、中旬をひろくいへり、六月へかけていへるは、後の詞なれど、中旬をもちばかりといへるは、古の言のこれりしなり、又萬葉集三の卷の歌に、富士の嶺の雪の事を、六月十五日に消ぬればとよめり、空の月の事ならで、十五日をもちといひしは、これも古言なり、

さて末十日ばかりがほどを、月隱といへり、月のやう〳〵に隱り行ほどなればなり、その中に三十日ごろにあたる夜は、月隱のきはみなり、

月隱はつごもり　此ほどは、月の出ることおそくなりて、やう〳〵に見ゆることすくなくなりゆく故に、月ごもりといふ、つごもりは月隱の意にて、月のかくれて見えぬをいふ名なり、さて暦法に依て見るに、天の月の一めぐりの來經は、廿九日六時あまりにて、廿九日にはあまり、卅日にはたらざる故に、卅日と定めて見れば、月の出入時の、先の月よりは遲くなりて、二月のほどには、おほかた一日たがふ故に、暦には大小の月を分て、二月に一月をば廿九日として、晦朔をとゝのふる事なれども、皇國の上代には、すべて日數にかゝはらざりし故に、たゞ空の月を見て、朔のはじめを、一人は今日ぞと思ひ、いまひとりは昨日ぞと思ひ、今一人は明日ぞとおもひて、心々に定めても、みな違ふことなかりしかば、大小を分ざれども、晦朔のみだれ行ことなかりき、

有日遂中澣之旬、致其日乃十月二十一日、又撰四月十八日丁亥本命道場朱表、亦云日近中休、然則毎月之二十日爲中澣日、上澣必月之十日矣、一旬之中止一澣日、今人以上澣、中澣、下澣、當上旬、中旬、下旬、既失其旨、又休澣惟有官人乃可用之、不當通於士庶也、○下略

〔眞暦考〕一月を三つにきざみて、ついたち、もち、つごもりといへり、そはまづ西の方の空に、日の入ぬるあとに、月のほのかに見えそむる比を始として、それより十日ばかりがほどかけて、月立(ツイタチ)といへり、月のやう〳〵に立ゆくほどなればなり、

月立はついたち　朔の始を定むること、日次にはかゝはらず、今の二日の日にまれ、三日の日にまれ、昏に月の見えそむる日を始とせり、暦に朔とする日は、いまだ月見えざれば、なほ晦の末なり、から國にては、合朔といひて、月と日とまさしく一方に會て、いさゝかも月の光の見えざる日を、朔とはすめれど、皇國の古は然らず、ついたちとは、月立の意にて、月のそらに立て見ゆるをいふなり、立とは空に見ゆるをいふ、霞霧などの立は、下より立のぼるをいふを、これは西の方へ下るころなれば、立といふ意たがへるに似たれども、昨日まで見えざりしが、初めてみゆるは、立のぼるに同じ、さてやう〳〵に昏に高く見えゆくころをかけて、ひろく月立とはいへり、倭健命の、美夜受比賣のおすひのすそに、月水のつきたるを見そなはして、月立にけりとよませ給へるも、天の月の立によせて、月とはのたまへるなり、月立といふ事、これにて心得べし、さて春の立秋のたつなどいふは、から國にいはゆる立春立秋より出たる言か、又はこの月の立よりうつれるか、わきまへがたし、萬葉集に、正月たつとよめるは、月のたつをいへるなり、又今の世の言に、月日のたつといふは、過行ことにて、こは今月の立を、先の月の過たる方へうつしていう言なり、

さて中ごろ十日ばかりがほどを、もちといへり、月の形の滿たればなり、その中に、月立の初より

ならはし也、延喜民部式、左右兵衞式並云、毎月晦日、令諸司仕丁掃除宮中、大内家壁書云、從築山社頭至松原同小川、掃除之事、可爲毎月晦日也など云り、もろこしにも似たる事あり、荊楚歳時記(廣秘笈本)云、正月晦日送窮、注云、金谷園記云、高陽氏子痩約、好衣敝食糜、人作新衣與之、卽裂破、以火燒穿著之、宮中號曰窮子、正月晦日巷死、今人作糜棄破衣、是日祀于巷、曰送窮鬼、猗覺寮雜記云、唐人以正月下旬送窮、韓退之有文、姚合有詩云、萬戸千門看、無人不送窮、海錄碎事云、池陽風俗、以正月二十九日爲窮九、掃除屋室、塵穢投之水中、謂之送窮、などあるを見て、唐土にても、正月晦日掃除する事をえるべし、

三旬

〔和漢名數(前序)〕三旬(ジユン)(十日曰旬、又曰三澣、三浣、)　上旬(又曰上澣、上浣、)　中旬(又曰中澣、中浣、)　下旬(又曰下澣、下浣、)

〔月令廣義(三每月)〕三旬(十日曰旬、三十日爲三旬、上旬、中旬、下旬、)　三浣(亦作澣、三旬也、)　三正(三旬之政、正曰三正、)　盈旬(滿十日也)　浹旬(禮、十日曰旬、十二日曰浹、)

〔和爾雅(二時)〕三旬(ジユン)(十日曰旬、三十日爲三旬、三旬成一月、)　三浣(タハン)(亦作澣、三旬也、○中略)　盈旬(エイジユン)(滿十日也)　浹旬(セフ)(十二日曰浹旬)　浹日　浹辰(セフシン)(十二日也)　周旬(シウ)(十日也)　周辰(十二日也)　信次(シンジ)(左傳云、一宿爲舍、二宿爲信、過信爲次、)　經旬(ケイ)　上浣(タハン)(又曰上旬、初一至十日爲上浣、十一日至二十日爲中浣、廿一日至廿九爲下浣、浣與澣同、沐浴也、古制朝臣十日一給假休沐、一月三給假、爲浣沐之期、)

〔下學集(時節上)〕上澣(カン)(ジユン)　中澣　下澣(上旬、中旬、下旬之義也、凡百官在朝廷而勤仕時、每月一度出私宅、澣衣服、謂之上澣也、澣浣也、浣同、又云上浣、中浣、下浣也、　來書狀之學所用之語也、)

〔干祿字書(上聲)〕浣澣(上通下正)

〔金石萃編(百三十三宋)〕承議郎新通守潸江郡事瑯琊王評漢卿奉使岐雍展先塋回登慈恩塔、元祐三年八月上澣題、

按、漢制、公卿以下皆五日一休沐、唐會要、永徽三年、上以天下無虞百司務簡、每至旬假許不視事、以便百僚休沐、則唐時十日一休沐矣、休沐亦謂之休澣、唐書劉晏傳、質明視事至夜分止、雖休澣不廢是也、宋時百官旬假、循唐故事、故有上澣、中澣、下澣、周益公撰光堯丁亥本命道場滿散朱表、

九月十八日をながつきのとをかやうかといへり、とをかあまりやうかといふべきを、はぶきていへるはいかゞなれども、上のかをはぶかざるは、さすがにいにしへなり、今の人、上のかをいはずして、とをあまりやうかとやうにかくは、古の例にたがへり、

〔源順集〕初の冬庚申の夜、伊勢のいつきの宮にさぶらひて、松の聲よるのことにいるといふ題にて、奉る歌の序、いせのいつきの宮、秋野の宮にわたり給ひて後、冬の山風さむくなりての初、は。つ。か。七。日。の。夜。庚申にあたれり、〇下略

〔新撰字鏡日〕晦。呼對反、晦也、豆支己毛利、

〔釋名一釋天〕晦灰也、火死爲レ灰、月光盡似レ之也

〔月令廣義三毎月〕三十日、晦日、月盡無レ光也

〔類聚名義抄二日〕晦音悔ツゴモリ

〔運歩色葉集津〕晦ツゴモリ日灰也、死也、

〔書言字考節用集二時候〕晦ツゴモリ日、提月、同文云二晦日一、公羊傳、月晦日也、三十日ミソカ、晦日、同

〔改正月令博物筌十二月〕大年おほとし大晦日、年のはてゆへ、大の字をそゆるなるべし、

〔東雅一天文〕日ヒ　晦日をツゴモリといふは月隱也、古語にコモルといひしは隱の義也、此夜月晦なればかくいひし也、

〔倭訓栞前編十六〕つごもり　晦をいふ、靈異記に見ゆ、月隱るの義、新撰字鏡につきごもりとよめり、日本紀に、月盡をよめり、つもごりといふはあし、阿波にてこもりといふは略せしなり、津輕にて十二月小なれば、翌朔日を大晦日とし、正月二日を元日とす、是を津輕の私大といへり、

〔物類稱呼一天地〕晦日つごもり、阿波の國にてこもりといふ、

〔梅園日記一〕晦。日。掃。　今の世に晦日掃とて、毎月の晦日に、家内を掃除するものあり、是は久しき

月之明、義亦全同、別作」朗、亦古之所」無焉、佗如斯類、漢以後字學家失」古者不」尠也、

〔倭訓栞 前編毛 三十三〕もちづき　倭名抄に望月をよめり、海望は十五日なれば滿の義、萬葉集に望月の滿はしけんといふ是也、釋名に望月滿之名也、

〔萬葉集 三雜歌〕詠」不盡山」歌一首幷短歌〇中略

不盡嶺爾、零置雪者、六月、十五日消者、其夜布里家利、

〔長明無名抄〕一五條三位入道〇藤原俊成談云、そのかみとし廿五なりし時、基俊の弟子にならむとて、和泉前司道經をなかだちにて、かの車にあひのりて、基俊のいへに行むかひたる事ありき、かの人その時八十五なり、その夜八月十五夜にてさへありしかば、亭主もことにけうに入て、歌の上句をいふ、

なかの秋とをかいつかの月を見て、と樣々しくながめいでられたりしかば、是をつぐ、

きみがやどにて君とあかさむ、とつけたるを、なにの珍らしげもなきを、いみじう感せられき、

〔古京遺文〕觀世音菩薩造像記

歲次丙寅年正月生十八日記、高屋大夫爲」分韓婦夫人名阿麻古願、南无頂禮作奏也、

右金銅二臂如意輪觀音像、藏在」大和國法隆寺綱封庫、記在」其座下、按、丙寅推古天皇十四年也、正月生十八日、謂正月月始見之後第十八日也、當時未」用」暦日、非」因」月之明晦、莫」知」每月之更改、故以」月初見」於西方」爲」朔、訓」朔爲」月立」者以」是故也、猶」尙書哉生明、其後雖」行」暦法、然邊部猶認」月見」數日、故天智天皇十年十一月記、對馬國司上言云、月生二日、是足」以見」古時素樸之風」也、

〔榮花物語 二十三駒競〕おほぎさきの宮〇一條后藤原彰子中略ながづきのとうかやうか〇萬壽元年にあからさまに、わたらせ給へるが故に、〇下略

〔玉勝間 十三〕十八日をとをかやうかといへる事　榮花物語こまくらべの卷、善滋爲政が文に、

給ぬ、○中略ついたち三四日の程に、そうりう院のにしの院といふ所に、おはしまさせ給、

〔日本霊異記下〕災與善表相先現而後其災善答被縁第卅八

同天皇○桓武御世、延暦六年丁卯秋九月朔四日甲寅酉時、僧景戒發慚愧心、憂愁嗟言、○下略

〔おちくぼ物語二〕おとゞ居たちいそぎたまふ、十二月のついたち五日と定めたるほどは、しも月のつごもりばかりよりいそぎ給ふ、

〔榮花物語二十一後悔大將〕かくて内大臣殿のうへ○藤原教通室、中略、しはすのつごもりばかりに、いとたひらかにて男君生れたまひぬ、○中略ついたち六日は、七日の夜なれば、めづらしげなき御事なれども、としのはじめ○萬壽元年正月とて、いみじきころなれば、いとゞめでたし、

〔日本霊異記下〕假官勢非理爲政得惡報縁第卅五

天皇○桓武悲以延暦十五年三月朔七日、始召經師四人、爲古麿奉寫法花經一部完、經六萬九千三百八十四文字、○下略

〔榮花物語二十四若ばえ〕はかなくついたち七日もすぎぬれば、關白どの○藤原頼通の大饗は廿日なれば、此みやのは廿三日とさだめさせ給て、われも／＼おとらじまけじと急ぎのゝしりたり、

〔蜻蛉日記下之中〕ついたち七八日○天延二年三月のほどのひるつかた、むまのかみおはしたりといふ、

〔榮花物語二十七衣珠〕左兵衞督○藤原公信のこのついたち八日○萬壽三年五月より、世中心ちわづらひ給し、おなじ月の十五日のあかつきがたに、うせ給にけり、

〔書言字考節用集二時候〕望モチ○十五日也。

〔釋名一釋天〕望月滿之名也、月大十六日、小十五日、日在東、月在西、遙相望也、

〔月令廣義三每月〕十五日、望日、月盈也、

〔隨意錄七〕朔望之望、以日月東西相望謂之、則與觀望之望同、說文別作朢、經傳所無焉、聰明之明、與日

〔書言字考節用集二時候〕朔日（ツイタチ）又云吉月、活法初一日爲朔、十五日爲望、三十日爲晦之晦、上日尙書、初吉毛詩

〔日本釋名上時節〕朔　月たつ也

〔東雅一天文〕日ヒ　朔をツイタチといふは月立也、我國の俗、凡事の始をタツといふ、立春、立秋を、春たつ、秋たつと云がごときこれ也、

〔倭訓栞前編十六〕ついたち　朔をよめり、月立也、月の立初るをいふ、春たつ秋たつといふがごとし、月吉とも見ゆ、○中略白虎通に、朔之言蘇也、明消更生故言蘇也と見ゆ、

〔東都歲事記四十二月〕朔日　乙子（オトゴ）朔日とて、諸人餅を製し祝ふ、（中略今日製する餅を、乙子のもちといふ、又川浸（カハビタリ）餅ともいふ、水土を祀るの義ともいへり、此日餅を食へば、水難なしといへる俗習によりて、武家にてもこの事あり、交代の砌、途上安全を祈るこゝろなるべし、給宿給頭の家にては、とりわき祝ふなり、）

〔年中行事故實考十二十二月〕朔日　俗に乙子のついたちといふ、人家の末子餅をつき祝をなす、いつ頃より始れるといふ義をしらず、一年の終にあたる朔日なるゆゑ、いはひたるにや、

〔日本書紀二十七天智〕十年十一月癸卯、對馬國司、遣使於筑紫大宰府言、月。生。二。日。沙門道久、筑紫君薩野馬、韓島勝娑々、布師首磐、四人從唐來曰、○下略

〔榮花物語二十四若ばえ〕はかなくて萬壽二年正月になりぬ、○中略枇杷殿○三條后藤原研子には、ことし大饗せさせ給はんとていそがせ給、○中略つ。い。た。ち。二。日。臨時客とて、其日女房かずをつくしていろ〳〵をきたり、

〔萬葉集六雜歌〕同○大伴坂上郎女初月歌一首
月。立。而。直。三。日。月。之（ツキタチテタヾミカヅキノ）、眉根掻（マユネカキ）、氣長戀之（ケナガクコヒシ）、君爾相有鴨（キミニアヘルカモ）、

〔蜻蛉日記下之中〕なほありのことやとまち見るまで、つ。い。た。ち。三。日。○天延元年二月の程に、むまの時ばかりに見へたり、

〔榮花物語二十五峯の月〕かくて皇后宮○三條后藤原娍子、中略、つねに三月二○萬壽二年つごもりに、花とともに別れさせ

〔倭訓栞前編二〕あさつて　明後日をいふ、あす去て後の日といふ義也といへり、されど西土には、翌日を明日といひ、其次を後日といふ也、大後日も同じ、此明後日を俗に明後々日といひ、さゝつてともいへり、もとしあさつてと呼べり、今日より第四日にあたる故也、しあ反さなるをもて、さつてともいふめり、全浙兵制には、後日をあさつて、大後日をしあさつてと譯す、

〔源氏物語十三明石〕京よりも御むかへに人々參り、中略あさてばかりになりて、れいのやうにいたうもふかさで、わたりたまへり、

〔榮花物語十六本の雫〕けふあすの程にとなんときこえさすれば、あさて佛にいとよき日なり、中略おいほうしのゐ所もはらはせ侍らん、わがおもとたちの物わらひ給ことはづかしとの給はせて、いそぎかへらせ給ぬ、

〔和爾雅二歳時〕兼日（兼日也）　併日　淹宿（經宿也）　間日（隔日也）　連日　累日　積日　盈旬　彌旬　剋日（刻定期日）　緩日（緩後日）　越宿　信宿　幾莫　多日　屢日　中略　前日　往昔（往時也、又前代也）　疇昔（左傳注、猶前日）也、　昨者　日昨　日前　向日　曩日　嚮時　嚮者　昨之昨　日之前　遙日　近日　往日　往者（已過之日）　曩者　平日　日者（往日）　曩昔　嚮日（曩日也）　乃者（師古云、猶言曩者）

〔書言字考節用集二時候〕累日（又云積日、論語全書）　他日（指前、已往日曰他日、孟子章句、異日也）　連日（累日、貫日、積日、多日、並同）　來日（又云後日）　毎日　兼日（兼辰、併日、淹宿、並同、前日之義）　後日　往日　先日（前日、遙日、向日、並同）　曩昔（增韻、嚮日也）　近日（又云幾莫）　先日　數日

〔伊呂波字類抄天部疊字〕朔。（月一日也、）

〔釋名一釋天〕朔蘇也、月死復蘇生也、

〔月令廣義三每月〕初一日、月朔、（日月會度爲朔、釋朔、月始蘇也、）

〔運歩色葉集津〕朔日（蘇也、生也、）

に、明旦をクルツアシタなど訓れど、此は然るべからず、

〔日本書紀 十一仁德〕十二年八月己酉、饗高麗客於朝、〇中略明日美盾人宿禰、而賜名曰的戶田宿禰、

〔倭訓栞 前編八久〕くるつひ　日本紀に明日をよめり、來るつ日といふ也、つは助語なり、

〔日本書紀 十五顯宗〕二年九月、置目老困乞還曰、〇中略天皇聞惻痛、賜物千段、逆傷岐路、重感難期、乃賜歌曰、於岐每慕與、阿甫彌能於岐每、阿須用利簸、彌野磨我倶利底、彌曳孺暮阿羅牟、

〔古今和歌集 一春〕題しらず　よみ人しらず

梓弓をして春雨けふふりぬあすさへふらばわかなつみてん

〔萬葉集 十五〕中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答歌〇中略

奴婆多麻乃、欲流見之君乎、安久流安之多、安波受麻爾之氐、伊麻曾久夜思吉、

右八首、娘子、

〔今昔物語 十三〕信濃國盲僧誦法花開兩眼語第十八

今昔、信濃ノ國ニ二ノ目盲タル僧有ケリ、〇中略盲僧一人寺ニ留テ住持ヲ待ツニ、明ル日不來ズ、

〔倭訓栞 前編二安〕あした　鄙俗にあすといふべきを、あしたともいふめり、

〔物類稱呼 五言語〕明日、明後日といふ事を、播州赤穗にてあすてり、あさつて照といふ、この所鹽濱なれば、日和よかれと祝していふなるべし、土佐にてきのふり、ゆふべりと云も、是に同じきか、

〔類聚名義抄 二日〕明朝後日アサテ

〔書言字考節用集 二時候〕明後日

〔日本釋名 上時節〕明後日　あさつてと云ことば、古書にも見えたり、あすさつての後の日なり、

〔東雅 一天文〕晝ヒル〇中略アスの明日をアサテといふは、アは明日なり、サとは去なり、テは語助なり、明日の去りての日をさしいふなり、

〔類聚名義抄二日〕明。日。アス

〔伊呂波字類抄安天象〕明日　翌日アクルヒ　〔同見疊字〕明日　〔同與疊字〕翌日

〔下學集上時節〕翌日次日也

〔和爾雅二歲時〕明日　翌日又作翼日　來日　來辰　詰日次日也　詷日　昱日明也、昱音育、

〔書言字考節用集二時候〕明日　翌日顯會、明日也、　明日來日、來辰、詰日、翌日、並同、

〔日本釋名上時節〕明日　あすとはあかす也、けふあかして後の日也、

〔東雅一天文〕晝ヒル〇中略　明日をアスといふは、アは開なり、スと云ふは、キツといふツと同じく語助なり、今夜の明けなむ日をいふなり、

〔倭訓栞前編二安〕あす　明日をいふ、あかすの義也、よて眞名伊勢物語に明とのみかけり、列子に日をよめり、來日也、書牘に明幾日といふも通鑑に見えたり、

〔古事記上〕爾其大神出見而、告此者謂之葦原色許男、卽喚入而、令寢其蛇室、〇中略　亦來日夜者、入呉公與蜂室、〇下略

〔古事記傳十〕來日は久流比と訓べし、書紀に明日、明旦、明年などある訓を見るに、明字なるを、阿久流とば訓まで、久流と訓るは、是古言なるべし、但助辭の阿は心得ず、此助辭を置べき言には非ず、そのかみ此ばかりのことは、誰もよく辨へたるべきを、いかなることにか、久流比は翌日をいふ、

〔日本書紀三神武〕戊午年六月、帥軍而進、至熊野荒坂津、〇中略　彼處有人、號曰熊野高倉下、〇中略　明旦依夢中敎、開庫視之、果有落劒倒立於庫底板、

〔古事記中仲哀〕爾坐其地伊奢沙和氣大神之命、見於夜夢云、〇中略　亦其神詔、明日之旦應幸於濱、獻易名之幣、

〔古事記傳三十一〕明日之旦は、阿須能阿斯多と、師〇賀茂眞淵の訓れたる宜し、萬葉十五に、安久流安之多ともあり、又書紀

〔倭訓栞前編七〕きのふ　きのふはけふのむかしといへるは、孟子に昔者をよめり、昨日の義、暱昔之夜は昨夜也、新後拾遺集に、

わかれにし月日やなにの隔にてきのふは人のむかしなるらん

〔日本書紀十一仁德〕元年正月己卯、初天皇生日、木菟入于產殿、〇中略大臣對言、吉祥也、復當昨日臣妻產時、鷦鷯入于產屋、

〔竹取物語〕きのふ今日、帝の宜はん事につかむ人聞やさしといへば、〇下略

〔伊勢物語下〕昔男わづらひて、心ちしぬべくおぼえければ、

つゐにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとは思はざりしを

〔書言字考節用集二時候〕一昨日(ヲトツイ)〇〇〇萬葉

〔日本釋名上時節〕一昨日(オトツヒ)〇中略　おとはあとなり、あとおと通ず、あとつ日なり、昨日のあと也、つはやすめ字也、俗にはおとゝひと云、つととと通ず、

〔東雅一天文〕晝ヒル〇中略　俗にキノフの前日を、ヲトツヒといひ、コゾの前年をヲトヽシといふが如き、ヲトといふはヲチ也、今を去る事の遠き也、古語に遠きをいひて、ヲチともヲテともいふ、チといひテといひトといふ、皆轉語にて、ヲトツヒといふ、ツは語助なり、俗にヲトヽヒといふは轉語なり、

〔萬葉集六雜歌〕九年〇天平丁丑春正月、橘少卿幷諸大夫等集彈正尹門部王家宴歌二首、

前日毛(ヲトツヒモ)、昨日毛今日毛(キノフモケフモ)、雖見(ミツレドモ)、明日左倍見卷(アスサヘミマク)、欲寸君香聞(ホシキキミカモ)、

右一首、橘宿禰文成、

〔萬葉集十七〕思放逸鷹夢見感悅作歌一首幷短歌

安之我母能(アシガモノ)、須太久舊江爾(スダクフルエニ)、乎等都日毛(ヲトツヒモ)、伎能敷母安里追(キノフモアリツ)、〇下略

〔倭訓栞前編九〕けふ　今日をいふ、此日の義也、ことけと、ひとふと通せり、萬葉集に見ゆ、又こふともよみ、昔萬に當日もよめり、

〔延喜式八祝詞〕出雲國造神賀詞
八十日日波在止毛、今日能生日能足日爾、出雲國國造姓名恐美恐毛申賜久、中略○

〔古今和歌集十八雑〕題しらず　　よみ人しらず
世中は何かつねなるあすかゞは昨日の淵ぞけふは瀨になる

〔古今和歌集六冬〕としのはてによめる　　はるみちのつらき
昨日といひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日成けり

〔源氏物語一桐壺〕けふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、

〔類聚名義抄二日〕昨○音鑿　ムカシ　キノフ　サタ

〔伊呂波字類抄天象〕昨キノフ

〔下學集上時節〕曩昔ナウセキ昨日也

〔書言字考節用集二時候〕昨日サクジツ一宵廣韻隔二一宵一也

〔和漢三才圖會四時候〕昨きのふ音𠯿、一名昔日、一名曩日、　明日あす
廣韻云、隔二一宵一曰レ昨、訓二木乃不一　昨之昨、訓二千止止比一　昨夕、訓二與乎部一、見二日本紀一、明日訓二阿須一　明之明、俗謂二明後日一、天左　翌日音亦　翌明也、　按、今呼二有事日之次一曰二其翌日一、則翌用二過去一、明用二未來一、

〔日本釋名上時節〕昨日キノフ　きのふは、さきの日也、さの字を略す、ふは日也、ふとひと通ず、

〔東雅一天文〕晝ヒル○中略　昨日をキノフといふ詞は、古語にはキソといひしなり、去年をコゾといひしに同じくして、古をコシカタといふが如く、コゾといひ、キソといふ、ソといふ詞は、共に語助なるべし、

と訓べし、中卷倭建命段歌に、迦賀那倍氐、用邇波許々能用、比邇波登袁加袁、これ夜に對へても、日は伊久加と云證なり、(さて八日は、古今集などに耶字加と見え、常にも然いへど、そは音便にて、耶を延たるものにて、古言の正しき例には非ず、六日を牟由加など云も同じ、されば耶加牟加と書て、耶字加牟由加と讀はさもあるべし、)

〔古今和歌集(四秋)〕やうかの日よめる　　みぶのたゞみね(歌略○)

〔和泉式部集(三)〕安藝守の婿、子うみたるこゝぬかの日、ちごのきぬやるとて、
なぬかゆくはまのまさごをかずにしてこゝぬかさへもかずへつる哉

〔日本書紀(景行七)〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、(○中略)自日高見國還之、西南歷常陸、至甲斐國、居于酒折宮、時擧燭而進食、是夜以歌之問侍者曰、珥比磨利、莬玖波塢須擬氐、異玖用加禰莬流、諸侍者不能答言、時有秉燭者、續王歌之末而歌曰、伽餓奈倍氐、用珥波虛々能用、比珥波苫塢伽塢、

〔古今和歌集(一春)〕題しらず　　よみ人しらず
かすがの〻とぶひののもり出て見よいまいくかありて若なつみてん

〔類聚名義抄(二日)〕今日(イマ)(ケフ)　此日(ケフ)　今明(アケフ)(アス)

〔伊呂波字類抄(計天象)〕今日(ケフ)　〔同(古疊字)〕今日

〔和爾雅(二歲時)〕今日　當日　是日　此日　卽日　不日(不終日也)　登日　登時　時下(卽時也)　卽辰　茲者(今日也)

〔日本釋名(上時節)〕今日(ケフ)　此日なり、ことけと通ず、

〔東雅(一天文)〕晝(ヒル)(○中略)　今朝をケサといひ、今日をケフといふは、今夜をコヨヒといひ、今年をコトシといふに同じ、ケといひ、コといふは轉語にて、共にコノといふ詞なり、ケサといふはコノアサなり、ケフといふはコノヒなり、ケフといひ、キノフといふ、フといふ詞は、日といふ語の轉せしなり、

〔日本書紀神代一〕一書曰、略中天照大神怒甚之曰、汝是惡神、不須相見、乃與月夜見尊一日一夜隔離而住、

〔伊勢物語下〕昔おとこ有けり、略中女がたにゐかく人成ければ、書にやれりけるを、今の男の物すとて、ひとひふつかをこせざりけり、略下

〔類聚名義抄日二〕二日フツカ

〔萬葉集十七〕思放逸鷹夢見感悦作歌一首幷短歌
知加久安良波、伊麻布都可太未、等保久安良婆、奈奴可乃宇知波、須疑米也母、伎奈牟和我勢故、略下

〔萬葉集略解十七下〕卷十三、〇萬葉集久にあらば今七日ばかり、遠くあらば今ふつかばかりあらんとぞと、いへるに同じ詞なれば、此だみは、ばかりといふ詞とはきこゆ、北國の人は、ばかりといふをだみといふよし或人いへり、春海は未は爾の誤かといへり、元曆本、未を米に作る、猶考べし、

〔源氏物語桐壺〕日々にをもり給て、たゞ五六日のほどに、いとよはうなれば、略下

〔源氏物語湖月抄桐壺一〕五六日　細流〇細いつかむゆかと日の字をいれて讀也、

〔釋日本紀述義九〕山城國風土記曰、略中玉依日賣略中孕生男子、至成人時、外祖父建角身命造八尋屋、堅八戶扉、釀八腹酒、而神集集而七日七夜樂遊、

〔萬葉集十春相聞〕寄雨
春雨爾、衣甚、將通哉、七日四零者、七夜不來哉、

〔古事記上〕於是在天天若日子之父天津國玉神、及其妻子聞而、降來哭悲、乃於其處作喪屋而、河鴈爲岐佐理持、自岐下三字以音鷺爲掃持、翠鳥爲御食人、雀爲碓女、雉爲哭女、如此行定而、日八日夜八夜以遊也、

〔古事記傳十三〕日八日夜八夜、八日は八夜に對ひたれば、耶比と訓べきが如くなれども、猶耶加

〔書言字考節用集 二時候〕幾日　一日〈一晝夜、一輻同、〉　半日

〔和爾雅 二歳時〕一輻〈稱二一日一爲二一輻一、按老子云、三十輻共二一轂一、此以爲二一輻一也、〉　一葉〈稱二一日一爲二一葉一、是據下于帝王世紀所レ謂蓂莢生二莢一之說上、〉

〔南留別志 三〕一ふつか、みか、よかなどのか文字は箇なり、ふつかのひ、みかの日などいふ事を、日を略しつれば、日の字の訓をかといふやうなり、

〔倭訓栞 前編加 六〕か　日をよむは二日三日の類也、日本紀、古今集にいくかの日と書しは、かさね辭也、かは明らかなるをいふ詞也、かすがを春日と書も亦同じ、

〔古事記傳 十三〕八日は〈略○中〉耶加と訓べし、〈略○中〉さて此二日三日八日十日などの加は、日數を云言にて、彼〈○倭建命〉御歌の迦賀那倍氐も、日々並而にて、日數を並べ計ふるを云なり、〈眞淵考へなど云說は、みな非なり、〉加とは、氣を通はし云る言にて、氣は、經日數の長きを、此記、又万葉の歌に、多く氣長と云、又毎日を、朝爾食爾と多くよめる〈食は借字なり〉氣是なり、さてその朝爾食爾を、或は朝爾日爾ともよめるを以て、氣は日數なることを思ひ定めよ、かくて氣は來經の切まりたるなり、來經と云ことは、倭建命段の歌に見えたり、なほ彼處〈傳廿七の九十丁〉に委く云べし、されば二日三日など云は、二來經三來經と云ことなり、〈師說に此加を、數の略にて、七日は七數、八日は八數と云ことなり、故に七日の日八日の日とも云りと云れしは、わろし、若數と云言ならば、日にのみはかぎらで、何の數にも云べきに、他には例なくて、只日數にのみ云るはいかに、且七數八數など、數てふ言を添て計むも類しく、さること有べくも所思ずなむ、又七日の日八日の日などいふも、七來經の日八來經の日と云むも、なでふことかあらむ、さて二日より以上はみなが久加と云を、一日のみは比止加とは云ぬは、いかなる故にか、未思得ず、凡てかゝる言は、神代のまゝの古言なれば、必所由ありなむ物ぞ、又二日七日は布多加那々加と云べきを、多くは、那々を奴と轉し云は、たゞ何となく通音にいひなれたるものなるべし、〉さて日數を計へて、幾日と云には、夜も其中にこもれるを、此の如く八日八夜などゝ分て云も、古語の文なり、〈此は八日の間、夜も晝もと云意ならむと思人も有ぬべけれども、左に引鎮火祭祝詞なるは、其意無き例を思ふべし、〉鎮火祭祝詞にも、夜七夜晝七日、〈下の夜字、今本には日と作れども誤なり、元々集に引るに夜とあるを用ふべし、〉山城風土記にも、神集々而、七日七夜樂遊とあり、さて此の八も、例の彌の意にて、たゞ幾日もと云意か、又正しく八日八夜にも有べし、

臣宋景業言、宜以仲夏受禪、或曰、五月不可入官、犯之終於其位、景業曰、王爲天子、無復下期、豈得不終於其位乎、乃知此忌相承、由來已久、竟不能曉其義及出何經典也、

〔月令廣義歲令二〕陰陽曆○中三長月、三長避忌巳見國家獻、今上官者多忌正五九月、或謂、宋火德、火生寅、旺午、墓戌、此三月爲災月、官員減祿料、無羊、謂之無羊月、宛委餘編、天帝釋此三月鏡照南贍州、故禁刑罰、云々、實籙、武德三年詔、正五九月十値日不得行刑屠殺、此三長月斷屠殺之始、

〔唐律疏議三十斷獄〕諸立春以後、秋分以前、決死刑者徒一年、其所犯雖不待時、若於斷。。屠月。。及禁殺日而決者、各杖六十、待時而違者加二等、

疏議曰、依獄官令、從立春至秋分、不得奏決死刑、違者徒一年、若犯惡逆以上、及奴婢部曲殺主者、不拘此令、其大祭祀、及致齋、朔望上下弦、二十四氣、雨未晴、夜未明、斷屠月日、及假日、並不得奏決死刑、其所犯雖不待時、若於斷。屠。月。謂。正。月。五。月。九。月。、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月廿九日壬午、於相州可被壞棄古御所事、五月憚否有其沙汰、陰陽師等依召參上、被尋所存之處、各申狀不一揆、所謂晴賢晴茂申可憚之由、以平申云、於被壞棄者更無憚、又禁忌方同之云云、爲親申云、壞家屋事、五。月。有。憚。勿論也、但是爲棄置之儀不可有憚云云、就面々申詞被凝評議、相州被仰云、古賢云、我居宅於壞者、大將軍王相凡不忌云云、況於前將軍幕下哉云云、仍雖五月可被破却之由被定云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿元年五月三日癸亥、二品御方、政子、蔀板中門、並織戸可被立之由有其沙汰、然夏季可有其憚哉否、武州泰時〇北條以御書令問陰陽師給、入六月而後、蔀板可被造云云、雖爲五。月。不可憚之由云云、

〇按ズルニ、正五九月ノ事ハ、神祇部第宅神篇竈神祭條ニ詳ナリ、

日

〔類聚名義抄二〕日ヒル、ヒ、人一反、和ニチ、　日者ヒゴロ、コノゴロ、　日來ヒゴロ、　連日

〔伊呂波字類抄伊疊字〕一時日、月、歲、年准之、　〔同比天象附歲時〕日ヒ

正五九月

勅令第九十號

神武天皇即位紀元年數ノ、四ヲ以テ整除シ得ベキ年ヲ閏年トス、但シ紀元年數ヨリ六百六十ヲ減ジテ百ヲ以テ整除シ得ベキモノヽ中、更ニ四ヲ以テ其ノ商ヲ整除シ得ザル年ハ平年トス、

〔日本歲時記 二 正月〕世俗、正五九月とて、此三月を拘忌事はなはだし、中華にもかくのごとくなると見えたり、五雜俎に正五九不上官、唐より以來此忌あり、清波雜志にいはく、佛法以此三月為齋素月、不宜宰殺、足破俗見、今京師官命下、則任初不忌此三月、而差跌更少、外官無不避之者、而禍敗更多、何不思之甚也とあり、又瑯琊代醉編にいはく、正五九月不上官、戴埴がいはく、釋氏の智論に、天帝釋寶鏡を以て四大神州をてらす、毎月一たび移して人の善惡を察す、此三月南贍部州をてらす、唐人これを以て死刑を行はず、曰三長月、節鎭因て屠宰をいましむ、不上官、後世因之となん、これを以てみれば、浮屠氏の說より出て、儒家の說にあらざれば、是非を論ずるに及ばず、世人かならず、此拘忌になづまずして可なり、

〔燕石雜志 一〕正五九月

正五九月を避るといふ事は、宋の時の俗忌なれば、本邦には諱でもあるべし、○中略 我俗この三箇月は要招(ヨメイリムコトリ)さへ禁るといふこと、いよ〳〵心得がたし、

〔容齋隨筆 十六〕三長月

釋氏、以正五九月為三長月、故奉佛者皆茹素、其說云、天帝釋以大寶鏡輪照四天下、寅午戌月正臨南贍部洲、故當食素以徼福、官司謂之斷月、故受驛劵、有所謂羊肉者則不支、俗謂之惡月、士大夫赴官者輙避之、或人以謂、唐日藩鎭蒞事、必大享軍、屠殺羊豕至多、故不欲以其月上事、今之他官不當爾也、然此說亦無所經見、予讀晉書禮志、穆帝納后、欲用九月、九月是忌月、北齊書云、高洋謀簒魏、其

治二二　嘉承二十　天永元七大　永久元三　同四年正　元永元九　保安二五　天治元二　大治元十大　同四年七　長承元四　同三十二大（已下係ニ他本篇加ニ）　保延三九　同六年五　康治二二大　久安元十大　同四年六　仁平元四　同三十二　保元元九大　平治元五　應保二二　長寬二十　仁安二七　嘉應二四　承安二十二　安元元九　治承二六　養和元二大　壽永二十　文治二七　同五年四大　建久二十二　同五年八大　同八年六　正治二二　建仁二十　元久二七　承元二四　（建曆元）同五年正大　（建保元）建曆三九　建保四六　（承久元）同七年二　承久三十　（元仁元）貞應三七　（安貞元）嘉祿三三　寬喜二正　貞永元九　嘉禎元六大　（嘉禎四）曆仁元二　仁治元十大　寬元元七　同四年四　（十日立春）寶治二十二　建長三九　同六年五　正嘉元三大　正元元十大（○恐衍）大　弘長二七　文永二四　文永五正　文永七九　文永十五大　建治二三　（建治四）弘安元十　弘安四七大（○恐衍）大　弘安七四　同九十（十五日立春）二　正應二十　正應五六　永仁三二　永仁五十　正安二七　嘉元元四　同三十二　延慶元八　應長元六　正和三三　正和五十　元應元七大　元亨二五　正中二正　嘉曆二九大　元德二六　（正慶二）元弘三二　建武二十　（曆應元）同五年七　曆應四四大　康永三二　貞和二九　同五年六大　觀應三二　文和三十　延文二七（○南朝正平十二年）　延文五四　貞治二正　同四年九大　應安元六　同四年三　同六年十　永和二七小　康曆元四小　永德二正大　至德元九小（○本書有ニ誤脫、以ニ三正綜覽ニ補正、）

〔三正綜覽上〕太陽曆閏年、必在ニ我子辰申歲、故不ニ別識ニ之、

〔官報四千四百五十六號勅令〕朕閏年ニ關スル件ヲ裁可シ、玆ニ之ヲ公布セシム、

御名　御璽

明治三十一年五月十一日

內閣總理大臣　侯爵伊藤博文

文部大臣　文學博士外山正一

〔日本書紀持統三十〕三年閏八月

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國郡稻帳天平五年潤三月六日史生大初位下阿刀造佐美麿

〔古今和歌集卷一〕やよひにうるふ月のありけるとしよみける　伊勢

さくらばな春くはゝれるとしだにも人の心にあかれやはせぬ

〔菅家文草詩五〕閏九月盡燈下卽事應製寛平二

年有三秋、秋有九月、九月之有此閏、閏亦盡於今宵矣、夫得而易失者時也、感而難堪者情也、〇下略

〔古今和歌六帖歳時一〕うるふ月

うるひさへ有て行べき年だにも春にかならず逢よしもがな　つらゆき

〔本朝文粹詩序八〕後三月陪都督大王華亭、同賦今年又有春、各分一字、應敎、　源順

〔後撰和歌集夏四〕五月ふたつ侍けるに、おもふ事侍て、　よみ人しらず

さみだれのつゞけるとしのながめには物思ひあへる我ぞ侘しき

〔續古事談臣節二〕大殿〇藤原師實ヤヨヒノツモゴリニ、齋院ニ參給テ、次官惟實シテ女房ニタマハセケリ、三月ニ閏月アリケルニ、

春ハマダノコレルモノヲ櫻花シメノ中ニハ散ニケルカナ　女房ノカヘシアリケリ

〔甲陽軍鑑品第三十三十下〕永祿九年丙寅初の八月廿六日辰刻に、法性院信玄公甲府を御立なされ、後の八月二日に、上野蓑輪へ御着あり、

〔二中歴閏月五〕萬壽三五大　長元二二大　同四年十　同七年六大　長暦元四　同三十二、　長久三九大　寛德二五　永承三正　同五年十　天喜元七　同四年三　康平元十二　同四年八　同七年五　治暦三正　延久元十　同四年七　承保二四　承暦元十二　同四年八大　永保三六　應德三二　寛治二十大　同五年七　嘉保元三　承德元正大　康和元九　同四年五　長

又三百五十四日、小歳之法也、日與月會、而月之不及日數六日、則成小月也、名朔虛、此氣朔合、一歳十二日餘、故一年三百五十四日也、三歳得三十六日、則有一閏、猶六日餘、又至于二年得二十四日、前餘六日與今二十四日合得一月之數、故五歳有再閏、但知何月者、以推歳之術決定矣、一歳之大數、自今年立春至來年立春前日三百六十六ヶ日、是大歳數也、

〔日知錄四〕閏月　左氏傳文公元年、於是閏三月、非禮也、襄公二十七年十一月乙亥朔、日有食之、辰在申、司歷過也、再失閏矣、哀公十二年冬十二月螽、仲尼曰、今火猶西流、司歷過也、並是魯歷、春秋時、各國之歷、亦自有不同者、經特據魯歷書之耳、（史記秦宣公享國十二年、初志閏月、此各國歷法不同之一證、）成公十八年春王正月、晉殺其大夫胥童、傳在上年閏月、（上有十二月）哀公十二年春王正月己卯、衞世子蒯聵自戚入于衞、衞侯輒來奔、傳在上年閏月、（上有冬）皆魯失閏之證、杜以爲從告、非也、　史記周襄王二十六年閏三月、而春秋非之、則以魯歷爲周歷非也、平王東遷以後、周朔之不頒久矣、故漢書律歷志、六歷有黃帝、顓頊、夏、殷、周、及魯歷、其於左氏之言失閏、皆謂魯歷、蓋本劉歆之說、（五行志、周衰、天子不班朔、魯歷不正、置閏不得其月、月大小不得其度、）

〔漢鹽草時節二〕潤月　月の數そふ　月のかさなる　春くはゝれる（夏、秋、冬も閏かるべし、但歌には未見、春過て衣ははやくかへてしな又その日にしなるぞあやしき、閏四月一日によめる、）秋より後の秋とも（これ閏九月盡をよめる、春夏冬も是をもつて心得おなじことなるべし、）おなじふ月のかずそふ（後のふ月共よめり、閏七月をよめる、いづれの月にも云べし、）日かずをそふ（これも閏月の心也、但只日數をそふと計にてはいかゝ、閏月のあつかい有べし、）

〔日本書紀仲哀八〕元年閏十一月

〔日本書紀通證仲哀十三〕閏十一月（閏謂之乃知、漢書作後某月、穀梁傳曰、閏月者附月之餘日也、積分而成於月者也、說文曰、餘分之月五歳再閏、告朔之禮、天子居宗廟、閏月居門中、从王在門中、）

○按ズルニ、コレ閏月ノ事ノ見エタル始ナリ、

〔日本書紀敏達二十〕十年潤二月

譜いへるは、尤よく閏をしるものなり、閏生應月、月生一節、閏輒益一と〈群芳譜〉いひ、蓂莢歳有閏則十三實と、〈群芳譜〉いひ、牡丹遇閏歳花瓣小と〈同上〉みえたり、又棲榴遇閏則生半片、歳長十二節、閏年增半節と、〈石室奇方〉雲南和山、花樹高六七丈、其質似桂、其花白、毎朶十二瓣、應十二月、遇閏輒多一瓣と、〈雲南志〉優曇花在安寧州西北十里曹溪寺右、狀如蓮、有十二瓣、閏月則多一瓣と、〈同上〉鳳尾十二節、遇閏歳生十三節と〈羽毛考異〉いへり、草木禽鳥よく閏をしれり、

〔曆林問答集上〕釋閏月第十九

或問、閏月何也、　答曰、堯典曰、三百有六旬有六日、定四時成歳云々、又朱子曰、天體至圓、三百六十五度四分度之一、繞地左旋、常一日一周、而過一度、日麗天而少遲、故日一日亦繞地一周、而在天爲不及一度、月麗天尤遲、一日常不及十三度十九分度之七、積二十九日九百四十分日之四百九十九、而月與日會、又日與天會、而多五日二百三十五分者、爲氣盈、月與日會、而少五日五百九十二分者、爲朔虛、合氣盈朔虛、一歳之內、餘十日九百四十分、名潤率、故三年有一潤、五歳有再閏、十九年有七閏、而氣朔分齊無差變之差、是爲一章之運、今按、失一潤則子之一月入于丑月、失三閏則春季入于夏、失十二潤、則子歳入于丑年、故聖人作曆、必歸餘潤、以補月行不及於日之數也、其日與天會成二十四氣、必有三百六十日、故自今年冬至至來年冬至前一日、必三百六十六日、上會而成一歳、雖遇閏年亦同、又一月三十日、十二月三百六十日、一歳之常數也、以朔虛言之、三百五十四日也、則成日月交會、謂之朔也、於是按乎漢儒之說、日日行一度尤遲、月日行十三度尤速、此法本朝曆家久所用也、但朱子曰、日速月遲、故日月會於晦朔之間、初一日之晚日西墜、微月亦隨之墜矣、初三生明以後、相去漸遠、是日行速進而至半天、月行遲退而不及、亦半天遠矣、自十六日至月晦、日行全遠盡一天、月行全不亦盡一天、即日進至本數、月退在本數、而晦朔之間、復相會也、又按、漢宋兩儒之說、可否不知之、古今曆家之法、日在進數、月有退數、是以日速月遲乎、凡閏月法雖多說、乃三百六十六日、名氣盈、日之不及天數六日、則成沒日、

とじと新撰六帖みえたり、又春の閏月を、春くはゝれる年と古今和歌集よみ、秋にはあまりある秋とよみ、冬は冬のあまりにと六帖古今よみ、三冬しそへばとも新撰六帖よめり、詳にあぐるにいとまあらず、扨西土の書初て閏の事をしるせるは、歸奇於扐以象閏と易繫辭みえたるを始とせり、年に閏を置事は、四時の氣候をさだめ、水旱風雨の憂を推量し、寒熱温凉其時に應せしめて、正時を以て元とせり、且民時農業にかゝはりて肝要の事也、故に朞三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲以授民事と尙書堯典みえたるにても、三代の時より閏を置て以て時を正し、順不順の時氣を補ふ事、聖人以定置給ひし事なり、故に閏は失ふべからず、もし閏を失ふ時は、則百姓何以てか其生を安んせんや、左氏曰、閏以正時、時以作事、事以厚生、生民之道、於是乎在矣と文公傳みえたるにても、閏を置ずして、かなはざる事しられたり、又置閏定め大數極まりあり、いはゆる十一歲四閏、十九歲七閏是也と、漢書律曆志純奏曰、三年一閏天氣小備、五年再閏天氣大備と後漢書みえ、三年一閏、五年再閏也、明陰不足陽有餘也、閏也者陽之餘也と白虎通みえ、凡閏六歲再閏、又五歲再閏、又三歲一閏、凡十九歲七閏爲一章と、玉燭寶典引王輔嗣注みえたるを以て、置閏の定め次第ある事しられたり、又閏と閏との間月を、隔事三十二月にして、一閏をうるなり、いはゆる大率三十二月則置閏と正字通引陳氏說みえ、古曆十九歲爲一章、章有七閏、三年閏九月、六年閏六月、九年閏三月、十一年閏十一月、十四年閏八月、十七年閏四月、十九年閏十二月と同上いへるは、其大率を月に配當せるなり、もし一度失閏ば、十二月螽出るに至れり、是時猶温なればなり、故に十有二年冬十有二月螽と春秋記せり、又康季子問於孔子曰、今周十二月、夏之十月、而猶有螽何也、孔子對曰、丘聞之火伏而後蟄者畢、今火猶西流、司曆過也と家語いへり、此閏を失へる事をいはれし也、草木鳥獸無心にして、自から時をしれり、いはゆる惟有黃楊厄閏年と東坡詩いひ、黃楊木歲長一寸、閏年倒長一寸と埤雅いひ、俗說歲長一寸過、閏則退、今試之、但閏年不長耳と本草綱目いへり、梧桐可知閏月、無閏生十二葉、云々、有閏則生十三葉、視葉小者則知閏何月也と通甲

〔古今要覽稿時令〕のちのつき閏月　閏月を以て、うるふづきとよめるは、皇國にては後世の事なり、ふるくはのちの幾月とよめり、日本書紀仲哀天皇紀に、元年冬閏十一月とみえたるをはじめとせり、此天皇の御時より以下皆閏月を以て、のちの幾月とよみ來りしを、三百九十年を經て、敏達天皇の十年にあたり、二月に閏あり、潤字を用ひて、のちとよみたり、西土にては秦漢よりして、閏を以て後のそれの月といへり、いはゆる秦二世二年後九月と(史記秦楚之際月表)みえ、後九月懷王幷呂臣項羽軍と(漢書高帝紀)みえたり、且閏を以て歲終に置事古例なり、左傳によるよし、師古が漢書注に辨せり、秦用顓帝曆、十月爲歲首と(天中記引左傳註釋)いへり、漢は秦の制を用て、以十月爲歲首、故秦漢以九月爲歲首、是によりて史記秦楚之際月表、漢書高帝紀等、閏月をばみな歲終に置ゆゑに、後九月と記せり、書紀に閏月を記せる所あまたあれども、潤字を以て換しは、敏達紀、持統紀のみなり、持統紀には閏月ある毎に、皆潤字を書たり、此頃より潤字にうるふの訓あれば、潤字をうるふとよみならひしなるべし、古今和歌集にうるふ月とみえたれば、その前よりいひし事志られたり、此をもつて考ふるに、持統天皇の紀に閏を志るすに、潤字のみを用ひたりしより、いつとなくのちの月といはずして、うるふとのみとなへし事なるべし、萬葉集には、閏をよめる歌見えずして、延喜の頃より閏月をよめる歌多くみえたり、又五月二つある年、みな月二つある年など、撰集歌集等にあまた出たり、閏をうるひとよみしも歌あり、又同じ歌の初句ばかり、あまりさへとかへて、以下は句上におなじきを、後撰集に入て、よみぬしも貫之なれば同歌也、あまりとよめるもいと面白きことなり、いはゆる先王之正時也、履端於始、擧正於中、歸餘於終と(左傳文公傳)みえ、閏月者附月之餘月也と(穀梁傳)みえ、黃帝起消息、正潤餘、則閏蓋餘分之月也と(史記)みえ、閏餘分之月と(說文)見えたるを以て見れば、是等の說に貫之もよられしなり、また月日のそふとよめるは、歌に、織女のまつに月日のそふよりはあまる七日のあらばあれかし、と(赤染衛門集)見え、月のかさなる、或は數くはゝれる

閏月

〔日本書紀通證辭入武〕十有二月歲極也、萬葉集四極山、俗稱極月、亦此意、

〔萬葉集冬雜入〕紀少鹿女郎 梅花歌
十二月爾者、沫雪零跡、不知可毛、梅花開、含不有而、

〔躬恒集〕しはすのつもごりの夜なのおにを略○歌

〔秘藏抄上〕十二月異名　十二月しはす略○中　年よつむ月

〔奧傳抄〕十二月異名　暮古月　親子月　十二月

〔藏玉和歌集〕十二月異名略○中　十二霞棲　春待月　梅初月　三冬月

〔伊呂波字類抄天字象〕閏月漢書云、以歲之餘爲閏、易曰、五歲再閏、俗云潤月誤也、然與俗說合、

〔尙書註疏二堯典〕帝曰、咨汝羲曁和、朞三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲、傳、咨嗟、曁與也、匝四時曰朞、一歲十二月、月三十日、正三百六十日、除小月六爲六日、是爲一歲有餘十二日、未盈三歲、是得一月、則置閏焉、以定四時之氣、成一歲之曆象、

〔和爾雅二歲時〕閏月　門玉杜預以門中玉爲閏　王門禮　陽餘白虎通　餘月　二終唐書曆志　閏餘史　贏餘　非常月公羊傳　叢殘穀梁傳註　贏閏　附餘穀梁傳、閏月者附月之餘日也、　章閏　歸餘　章月　備閏　蔀閏　門中王字彙

〔書言字考節用集二時候〕閏月書言大全、積歲之餘日爲閏月、三年一閏、五年再閏、

〔倭訓栞前編四〕うるふづき　閏月をいふ、閏は潤餘の義なれば、日本紀に潤月ともかけり、　うるふどしといふも、西土に潤年と見えたり、　天の運行、三百六十五度四分度の一にて、一年三百六十日と立て、月に大小あり、過る六日を氣盈とし、不足の六日を朔虛とす、此過不足を合せ、十二日三年積て、三十六日の餘りあるをもて、三年に一閏を立る、五歲に再閏、十九年にして七閏に及べば餘分なし、是を一章といふ、

有四極山、亦讀云四波都山、（都音須之轉）可以徵矣、　熙按、元日曰四始、言歲之始、時之始、日之始、月之始、也、四極卽四者之極也、極月猶言窮陰窮月也、（四始見爾雅類書、窮陰窮月見月令廣義、）

〔倭訓栞前編十一〕しはす　十二月をいふ、歲極るの義なるべし、萬葉集に、昨日社年者極之賀と見えたり、俗に此月を極月といふも、はつる月の義也、漢にも歲終といふなり、

〔古今要覽稿時令〕しはす　しはすは十二月の和名なり、師走又四極ともかけり、さて此月の名の始てみえしは、十有二月丙辰朔壬午、至安藝國と（日本書紀神武天皇紀）書記されたれど、是より前に月々の名目ありし事は、既に上にしるす如し、和歌に此月の名をよめるは、十二月爾者、沫雪零跡、不知可毛と（萬葉集）みえ、なにとなくしはすの空になりにけりと（秘藏抄）よめり、又物へまかりける人を待て、しはすのつごもりにと（古今集）詞書にしるせるをおもへば、あがれる世には今の世の十一月十二月と、音をもてよばずして、しはすと、となへし事明かなり、さて此月の名義を解はじめたるは、十二月僧をむかへて、經をよませ、東西にはせはしるが故に、師走月といふをあやまれりと（奥義抄）いへれど、いと覺束なし、下れる世の說なれども、シハスといふが如き、シとはトシといふ詞の、ひと度轉せし所也、ハスといふはハツなり、スといひツといふも、その語の轉せし也、我國の語に、凡事の終りをば、ハツともハテともいふなり、されば萬葉集に、極の字讀てハツともいへば、俗に極月の字を用ひて、シハスともいふなるべしと（東雅）辨じ　るこそ的當の說にして、はるかに勝れたれ、加茂眞淵、谷川士淸、楫取魚彥、藤原宇萬伎等の四人の說、自己の考の如く此月の名義を辨じたれども、皆前に辨じたる所の、東雅の說なれば、是によりしならん、さて此月の異名を、年はつむ月と（秘藏抄）いひ、暮古月、親子月と（其傳抄）いひ、春待月、梅初月、三冬月と（藻玉集）いひ、をとこ月と（年浪草）いへり、

〔日本書紀神武三〕戊午年十有二月

〔眞傳抄〕十二月異名　雪待月　神歸月十一月　霜降月　神無月　霜見月

〔藏玉和謌集〕十二月異名〇中略　十一千鳥りうたん　臘月十二月同

〔伊呂波字類抄〕志天象十。二。月。俗云師馳、律中大呂、

〔八雲御抄〕三上時節十二月　しはす

〔下學集〕上時節大呂月十二　臘月文字十二月之祭名、故云臘月也、臘與獵同字也、　師趨十二月一年終、諸人事繁而不暇居家、雖師匠亦趨走、故云師趨也、

〔書言字考節用集〕二時候師趨歲之終、庶人事多不暇居家、雖師匠亦趨走、故云、　臘月同　季冬同日本紀

〔二中歷〕五歲時月倭名　十二月俗說云、十二月俗競迎法師、或讀佛名經、或令讀諸經、東西馳走、故號此月爲師馳月、今所謂シハス者、是シハセグキノ略也、

〔奥義抄〕上末物異名十二月　僧をむかへて、佛名をおこなひ、あるひは經をよませ、東西にはせはしるゆゑに、師はせ月といふをあやまれり、

〔東雅〕一天文シハスとは、これも漢に十二月を歲終と云しごとく、歲の終を云也、古語に、年をトシともいひ、トセともいひ、またチともいひし事、前に注せし事のごとく、そのチといひしは、トシといふことば、一たび轉じてシとなり、シといふことば、ふたゝび轉じてチとなりし也、シハスといふがごとき、シとはトシといふことばのひとたび轉せし所也、ハスといふはハツ也、スといひツといふも、其語轉せし也、我國の語に、凡事の終りをハツといふも、その語の轉せし也、凡事の終をばハツとしハテと言也、されば萬葉集に、極の字讀てハツともいへば、俗に極月の字を用ひて、シハスともいふなるべし、

〔語意考〕十二月を志波須といふは、登志波都留月の上下を略き、波は本の如し、都と須を通はしいへり、

〔秋苑日渉〕十民間歲節下十二月謂之四極、又曰極月、　貝原損軒曰、是月也四時極盡、故曰四極、此讀云四波須、俗名極月亦此意、豊後

より見えしは、冬十有一月丙戌朔甲午と（日本書紀神武天皇紀）あるを始とす、夫より以下は、以天平五年冬十一月、供祭大伴氏神と（萬葉集）みえたり、歌に舊く此月の名をよめるは、見るまゝに雪げの空と成にけりさらぬにさゆる衣もつきの空、と（秘藏抄）みえたるを初とす、霜しきりにふるゆへ、霜降月といふを誤れりと（奥義抄）いひ、風寒み霜降月の空よりや雪げとみえてくもり初らん、と（藏玉集）みえたり、又霜月といふ事、漢にもふるくいひし事なれど、それは九月をこそいひけれ、我國にては十一月をいひし也、その月は異なれど、其義をとる事は相同じと（東雅）いへり、又しもつき、この月には霜のいたくふればいふ、舊説さもあるべしと（類聚名物考）いひ、十一月の和名を霜月といふ、霜しきりにふる故、霜降月といふと（日本歳時記）いひ、霜盛降故曰霜降月と（歳時語苑）いひ、しもつき、十一月をいふ、霜月の義なりと（和訓栞）いへるがごとく、もはら此月霜降故月の名とせるは、四月を卯月といふも、卯の花盛にひらくる故、卯月といふがごとし、源君美がいへるごとく、西土にては霜初てふれる義をとりて、月の名となし、皇國にては霜盛にふれる月を名付て、霜月といへり、藤原宇萬伎曰、志保美都伎也、保を母に通はせ、美を略ける也、此月にして、木草皆凋ば也と（十二月名の解）いへり、按に此月をしも月と云ふは、下の義にもとれり、いかにとなれば、十よりして一にかへりて、十一十二と數をとれば、十一は下にかへる義にて、しも月といふなり、左傳に十は盈數也と、みえたるにても義明かなり、此月の異名のごときは、なかの冬と（曾丹集）いひ、つゆこもりのは月と（秘藏抄）いひ、雪待月、神歸月と（眞傳抄）いひ、雪見月、神樂月と（藏玉集）いひ、子月と（壒囊抄）いへり、

〔日本書紀三神武〕是年也、太歳甲寅、其年冬、（○中略）十有一月、

〔日本書紀通證八神武〕十有一月（霜月也、言霜盛降之時也、詩註有又也、）

〔萬葉集三雜歌〕右歌者（○歌略）以天平五年冬十一月、供祭大伴氏神之時、聊作此謌、

〔秘藏抄上〕十二月異名　十一月霜月（○中略）露こもりのは月

〔徒然草下〕十月を神無月といひて、神事にはゞかるべきよしは、しるしたる物なし、本文も見えず、但當月諸社のまつりなき故に、此名あるか、此月よろづの神たち太神宮へあつまり給ふなどいふ說あれども、其本說なし、さる事ならば、伊勢にはことに祭月とすべきに其例もなし、十月諸社の行幸其例も多し、但おほくは不吉の例也、

〔藻玉和歌集〕十二月異名○中略　十霜月　時雨月　拾月　初霜月

〔伊呂波字類抄天象〕十。一。月。シモツキ

〔八雲御抄三上時節〕十一月　しもつき

〔下學集上時節〕黃鐘月十一　霜月此月霜初降也　暢月月令中冬曰二暢月一也　六呂月十一　陽復月十一

〔二中歷五歲時〕月倭名　十一月俗說云、十一月天氣霜降、故稱二此月一爲二霜降月一、今所レ謂シモツキハ、是シモフリツキノ略也、

〔奧義抄上末物異名〕十一月　霜しきりにふるゆゑに、しもふり月といふをあやまれり、

〔東雅一天文〕霜月といふ事、漢にもふるくいひし事なれども、それは九月をこそいひけれ、我國にては十一月をいひし也、その月は異なれど、其義をとる事は相同じ、

〔秇苑日涉七〕民間歲節下

十一月謂二之霜月一　月令廣義曰、集古錄韓明府修二孔子廟一碑曰、永壽二年歲在二涒灘一、霜月之靈、皇極之日、蓋九月五日也、又曰二霜辰一、皇極日九月五日也、　躋按、詩豳風、九月肅霜、此以二夏正一言、故九月謂二之霜月一、豳之土北鄙、戎狄所レ謂一之日觱發意、雪已降、故在二彼九月一爲二霜月一、在二此十一月一爲二霜月一、理宜レ然耳、

〔倭訓栞前編十一〕しもつき　十一月をいふ、霜月の義也、霜の盛にふるときなれば、名くる成べし、漢には九月を霜降とするは、其初めをいふ也、

〔古今要覽稿時令〕しもつき十一月　しもつきは十一月の和名なり、皇國にて此月の名のふるく

ろしからず、よりて神の字を書歟と遠水見聞私記いへり、又十は數の極也と同上いひ、左傳に以二十月一入、曰二良月一也、就二盈數一焉といへるによれば、十は盈數にて上なきの稱、故に上無月といひしにや、されば此三說のうちをとるべきなり、西土に陽月といふ、十月は坤の卦に當りて、純陰の月也、陽なきを嫌ふ故に、無陽の月なれども、却て陽月といへり、南朝時令、日本歳時記、天下の諸神出雲の國に行給ひて、こと國には神なきが故に、神無月といふ、奥義抄伊弉冊尊崩じ給ふ月なれば、神無月と申なり、世諺問答四方の木ずゑちりすさむ頃なりとて、葉みな月と申人ありと同上みえたり、陽月のごときは、漢にもふるくいひ傳へし所なり、其中陽月を讀て、神無月カミナヅキといひしは、カミノツキといひしことば也と東雅いひ、又神嘗月といふ說もあれど、いづれも信じがたし、西土にて國於是乎蒸嘗、家於是乎嘗祀と國語いへるなどにもとづきて、神嘗月といふ義にとりしとみえて、我邦の古へも、西土にも神嘗祭は十月なりし事、其證多しと和訓栞いひしなり、さて異名のごときは、かみなかり月と秘藏抄いひ、神去月と莫傳抄いひ、鎭祭月と八雲御抄いひ、時雨月、拾月、初霜月と藏玉集いへり、

〔日本書紀三神武〕甲寅其年冬十月（カミナヅキ）

〔日本書紀通證八神武〕十月（カムナヅキ）冬寒也、十月神嘗月也、下文曰、冬十月癸巳朔、天皇嘗二其嚴瓮之粮一、天武紀曰、十月祭二幣帛於相新嘗諸神祇一、神祇令、季秋神嘗祭、仲冬上卯相嘗祭、下卯大嘗祭、此不レ言二十月一、類書纂要、薦新民俗予二十月一吹二新秫一薦二之于先塋一、後漢書註、正祭外十月嘗レ稻等、謂二之間祀一、

〔萬葉集八秋相聞〕十月（カミナヅキ）鐘禮（シグレ）爾（ニ）相有（アヘル）黃葉乃（モミヂバノ）吹者（フカバ）將落（チリナム）風之隨（カゼノマニマニ）

右一首、大伴宿禰池主、

〔古今和歌集五秋〕題しらず　よみ人しらず

神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり

〔秘藏抄上〕十二月異名　十月神無月○中略　かみなかり月

〔莫傳抄〕十二月異名　神去月　神無月十月

ふがごときこれ也、

〔語意考〕六月をみな月といふは、加美那利月の上下を略けり、十月は陰月にて雷のならねば、かみ無月といひ、六月は專ら雷の鳴故にむかへて此名有、雷をかみとのみいへる事、古への常也、

〔秇苑日渉七〕民間歳節下

十月謂之上無月、〇中略 按、上無、本邦律名、（上無、此讀云加類模、）本名鳳音、樂家相傳爲應鐘、應鐘十月律也、故呼是月爲上無、（月名呼爲加類那時、義相通、俗或作神無、以國讀近誤耳、）

〔倭訓栞前編六加〕かみなづき　十月をいふ、十は數の極なれば、數皆月の義といへど、神嘗月の義なるべし、我邦の古へも西土にも、神嘗祭は十月なりし事其證多し、古說に神無月の義とし、出雲の故事をいひ傳へり、新續古今集に、

逢ふことを何にいのらん神無月をりわびしくもわかれぬる哉、大物主神の八十萬神を帥ひて天にのぼりたまふは此月也と、出雲國造家の說也、或は雷無月の義なりといへり、

〔古今要覽稿時令〕かみなづき十月　かみなづきは十月の和名なり、皇國にてかみな月の名目の始てみえしは、甲寅年冬十月丁巳朔辛酉と（日本書紀神武天皇紀）よまれたり、夫より以下は十月、鐘禮濟相有、黃葉乃と（萬葉集）いひ、十月、鐘禮乃雨丹とも、十月、雨之間毛不置とも（同上）みえたり、古今和歌集以下は、擧るにいとまあらず、拐十月を神無月といふは、雷のなき月ゆへ、かみな月と（義公御隨筆）仰られし、又神無月といふによりて、無陽などいふもあまりに事むづかし、月令に雷聲ををさむる時なれば、雷無月なるべしと（類聚名物考）いへり、又說に應鐘のなゝらべ、日本にては上無調といへり、應鐘は十月の律なれば、上無月といふ義也と（兩朝時令、遂木見聞私記、秋齋日渉、）いへり、十月の律、上無調といふ事は、はやく拾芥抄にみえたり、されば此月を上無月と書ても、さもあるべしと思ひしに、かみな月と云は、上無月なるべきか、元は上を書して、後に神の字にかへたるは、上無と書ては、名目あたる所ありてよ

こたふ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　みつね

秋ふかみ戀する人のあかしかね夜をなが月といふにやあるらん

〔秘藏抄上〕十二月異名　九月ながづき〇中略　いろどり月

〔莫傳抄〕十二月異名　菊開月　紅葉月九月

〔藏玉和謌集〕十二月異名〇中略　九藤鶴　紅葉月　小田刈月　ね覺月

〔妙法寺記下〕天文十八己酉此年菊月四日〇下略

〔伊呂波字類抄加天象〕十。月。カミナツキ律中二應鐘一

〔八雲御抄三上時節〕十月　かみなづき　出雲國には鎭祭月といふ

〔下學集上時節〕應鐘ヲウシヨウ十月　神無月カミナツキ十月諸神皆集二出雲大社一、故云二神無月一也、出雲國神有月云也、

〔書言字考節用集二時候〕陽月カミナヅキ十月之陽月、於レ卦爲レ坤、恐二人疑一レ其無一レ陽、故特謂二之陽月一、所三以見二陽氣已萌一、見二西京雜記一、神無月同見二本朝俗說、奧儀抄一、

〔二中歷五歲時〕月倭名　十月俗說云、十月天下衆神輻二湊出雲國一、而他國無レ神、仍郡部鎭無二祭之禮一、故稱二此月一爲二無レ神月一、今所レ謂カミナヅキハ、是カミナシヅキノ略也、

〔奧義抄上末物異名〕十月かみなづき　天下のもろ〳〵の神、出雲國にゆきて、こと國に神なきがゆゑに、かみなし月といふをあやまれり、

〔世諺問答〕問て云、十月を神無月と申は、何のゆへにて侍るにや、答、此月を神無月と申は、伊弉冊尊崩給月なれば申なり、また四方の木葉ちりすさむ頃なりとて、葉みな月と申人あり、いとおぼつかなし、また諸神、いづもの大やしろへ下給へば、申ともいへり、

〔東雅一天文〕長月陽月のごときは、漢にもふるくいひ傳へし所也、其中陽月を讀てカミナヅキといひしは、カミノツキといひしことば也、たとへば萬葉集の歌に、神邊山かむなびやまと訓せしを讀て、カミナビヤマといふがごとし、古語にはノといふは轉じてナとなりし事はいくらもあり、水上のごとき、ミノカミといふべきをミナカミといひ、田上のごとき、タノカミといふべきをタナカミとい

作歌に、角障、石村之道乎云々、九月能、四具禮能時者、黄葉乎、折插頭跡云々と（萬葉集卷第三雜歌）みえたり、猶同集に、ながつきとよめる歌數多あり、擧にいとまあらず、扨なが月の解をなせるは、みつね忠岑にとひ侍ける歌に、よるひるの數はみそぢにあまらぬをなど長月といひ初けん、とよめる答に、秋ふかみ戀する人のあかしかね夜をなが月といふにやあるらむ、（拾遺和歌集卷第九雜下）とみえたるを初にて、九月夜漸くながき故に、夜長月といふを誤れりと（奥義抄）いひ、長月夜の長き時分也と（下學集）いひ、九月、なが月、古說に夜の長きをいふとあり、さもあるべきと、（類聚名物考）いひ、ながつき九月をいふ、長月の義、夜長月ともいへりと（和訓栞）解るも、皆拾遺和歌集の歌の意とおなじく、此月分て夜の長ければ稱せるなり、然るを加茂眞淵は、九月をなが月と云は、伊奈我利月の上下を略きいへり、稻は九月に苅をさむる也と（語意）いへるを、本居宣長は是によりて、師の考に九月は稻苅月なりといひ、又九月は稻熟月にてもあらんか、但シ賀を濁るは、刈にても熟にてもいかゞなるは、音便にて濁るか、はた異意か決めがたしと（古事記傳志比宮卷訓）いへり、凡秋三月みながら稻の事もて、月の名を成事、既に七月八月の考にいひ置り、又此月の異名を、いろどり月と（部藏抄）いへるを始として、菊開月、紅葉月と（莫傳抄）いひ、小田刈月、寢覺月と（藏玉集）いへり、

〔日本書紀三神武〕戊午年九月

〔日本書紀通證八神武〕九月（月夜長也）

〔萬葉集八秋相聞〕遠江守櫻井王奉二天皇一歌一首

九月之、其始雁乃、使爾毛、念心者、可レ聞來奴鴨、

〔古今和歌集五秋〕ながつきのつごもりの日、大井にてよめる、　つらゆき

○歌略

〔拾遺和歌集九雜〕みつね、たゞみねにとひ侍ける、　參議伊衡

よるひるのかずはみそじにあまらぬをなど長月といひはじめけむ

秋の牢も過ぬべし、とよまれたる、定家卿の詠などにもとづきて、名付しならん、新撰六帖はつきの歌に、秋もはや牢になれやと、衣笠內大臣公家良もよまれたり、

〔日本書紀神武三〕戊午年秋八月ハツキ

〔日本書紀通證神武八〕八月ハツキ葉月也、訓ニ黃葉可レ愛、

〔後撰和歌集秋六〕あひしりて侍ける女の、あだ名たちて侍ければ、久しくとぶらはざりけり、八月ばかりに女のもとより、などかいとつれなきと、いひをこせて侍りければ、○歌略

〔秘藏抄上〕十二月異名　八月はつき○中略　さゝはなさ月

〔異傳抄〕十二月異名　木染月　草津月八月

〔藏玉和謌集〕十二月異名○中略　八月萩　秋風月　月見月　紅染月

〔伊呂波字類抄奈天象〕九月ナガツキ 律中ニ無射一

〔八雲御抄三上時節〕九月・　ながつき

〔下學集上時節〕無射ブエキ九月　長月秋長時分故云也

〔二中歷五歲時〕月倭名　九月俗說云、九月夜漸長、故此月爲二夜長月一、今所レ謂ナガツキハ、是ヨナガツキノ略也、

〔異義抄上末物名〕九月ナガツキ　夜やう〳〵ながきゆゑに、夜なが月といふをあやまれり、

〔語意考〕九月を奈我月と云は、伊奈我利月の上下を略きいへり、稻は九月に苅をさむる也、

〔倭訓栞前編十九〕ながつき　九月をいふ、長月の義、夜長月ともいへり、拾遺集に、夜を長月とよめり、漢にもふるくいひ傳へたり、

〔古今要覽稿時令〕ながつき九月　ながつきは九月の和名なり、さて皇國にてこの月の名始めてみえしは、戊午九月甲子朔戊辰と日本書紀神武紀にしるせるぞはじめなる、しかれども此前より、此月の名目のみにあらず、月々の和名は有しなるべし、歌にふるくよめるは、石田王卒之時、山前王哀傷

年歷へだたれり、又萬葉集の歌に、みなつき、ふ月、長月などの名目はよめれど、は月とよめる歌みえず、後撰和歌集に、は月ばかりに、又は月なかの十日計になどみえ、八月、はつきと（秘藏抄）いへれど、此月の名義を沙汰せるは、奥義抄に、八月木のはもみちておつる故に、葉落月といふを、よこなまれりといへるぞ初なる、漢武帝の秋風辭に、秋風起兮白雲飛、草木黃落兮鴈南歸、とあるによれるか、黃落の字、葉落月の義に合り、鴈南歸の字、久方の雲井のかりのこしちより初てくるやはつき成らん、とよめるに合り、下學集、日本歲時記、歲時語苑等、皆此說によれり、秘藏抄歌に、初鴈の聲きこゆなりはつき立朝の原のうす霧のまに、又新撰六帖爲家卿の歌に、久方の雲井のかりのこしちよりはじめてくるやはつき成らん、とあるに、類聚名物考、月令を引て、此月初めて鴈の來れば、初來月なるを、辭をはぶきて、はつきとはいふなるべしといへるは、秘藏抄の歌とあへり、亦一說は葉月、稻葉月也、稻葉茂ルヲ云フト（勝部光洋鄰說）いひ、八月を波月といふは、保波利月の上下をはぶきいへり、稻は皆八月穗を張也と（語意）いへり、本居宣長も語意の說にしたがへり、（委細に古事記傳訶志比宮の卷に、辨じ置けり、）さて以上三說を合せ考ふるに、古說新說ともに何れも理りなきにしもあらねど、秋三月は稻の成熟する次第もて解かたゑかるべし、所謂七月をふくみ月といふは、穗含むをいひ、八月は穗張りみのる義もて名付る也、いかにとなれば、秋といふ名は、百穀成熟の時をいふ、穀物のあき滿る義にとれるなれば、かた／＼秋三月は、稻の事もてとくかたゑがるべし、さて此月の異名を、さゝはなさ月と（秘藏抄）いひ、木染月、草津月と（莫傳抄）いひ、秋風月、月見月、紅染月と（藻玉集）いへるも、和歌よりいでし名目なり、橘春といふ名目は、漢名なるべけれど、出所詳ならず、たゞ日本歲時記にみえたれど、たしかなる書に未ㇾ見ㇾ當、鴈來月、燕去月などいふは、世俗の稱する名目にして、古書に載ざれども、仲秋之月、鴻鴈來賓と（禮記月令）いへるによりて名付し也、燕去月と云は、玄鳥歸と（同上）いへり、（玄鳥は燕を云）鴈來月に對して名付しなり、秋半ととなふるも、八月は秋三月の半なればなり、あけば又

きて用ゆべし、又此月の異名を、めであひ月と藻塩抄いひ、七夜月、秋初月と莫傳抄いひ、ふみひろげ月、
女郎花月、七夕月と藏玉集いへり、

〔日本書紀 四安寧〕神渟名川耳天皇○中略綏靖、三十三年○中略其年七月、

〔日本書紀通證 九安寧〕七月フミツキ 穗見月也、言此月方見二稻穗之說一也、

〔後撰和歌集 五秋〕女のもとより、文月ばかりにいひおこせて侍ける、○中略歌

〔秘藏抄 上〕十二月異名　七月ふみづき○中略　めであひ月

〔莫傳抄〕十二月異名　七夜月　秋初月七月

〔藏玉和謌集〕十二月異名○中略　七女郎花　文披月　七夕月　女郎花月

〔伊呂波字類抄 波天象〕八月。ハツキ

〔八雲御抄 三上時節〕八月　はつき

〔下學集 上時節〕南呂ナンロ 八月也、又云二葉月一、落葉時節故云也、

〔二中歷 五歲時〕月倭名　八月 俗說云、八月木葉漸以搖落、故稱二此月一爲二葉落月一、今所謂ハツキハ、是ハチヅキノ略也、

〔奥義抄 上末物異名〕八月　木のはもみぢておつるゆゑに、葉おちづきといふをあやまれり、

〔語意考〕八月を波月といふは、保波利月の上下を略きいへり、稻は皆八月に穗を張也、

〔倭訓栞 中編十九波〕はつき　八月をいふ、葉月の義、黄葉の時に及ぶをいふめり、西土にも葉月の名
あり、

〔古今要覽稿 時令〕はつき八月　はつきは八月の和名なり、葉月などもかけり、さて此月の名の始
てみえしは、戊午年秋八月甲午朔乙未、天皇使レ徵二兄猾及弟猾一と日本書紀書しるされたれど、五月蝿の
文字、既に神代の卷に出たれば、其時代に月々の名目ありしもしるべからず、朱鳥七年癸巳秋八
月、幸二藤原宮地一と萬葉集卷一記せるは、朱鳥の年號天武天皇の御宇なれば、神武天皇の御代より遙に

じめて書にみえしは、孝昭天皇元年七月、遷都於掖上と、（日本書紀）しるされしぞ始なる、されど此御時よりはるかに上つよに、ふづきの名ありし事明なり、神代に五月蠅（同上）といふ事みえたるも、いまいふ五月の事にて、神武天皇紀にむ月よりしはすまでの、和名みえたりしかど、ふづきのみしるされず、されど月々の名、此御時にみえたれば、孝昭天皇の御代より、はるかに上つ代の和名なる事著るし、萬葉集には、秋雜歌に、七月七日之夕者、吾毛悲烏などみえたり、既にこの集に、ふみ月とふづきを讀りしより、古今集、後撰集の時代には、七月を文月などいふ文字に書しるしたれば、ふみづきとよめる事とはなれり、扨七月織女にかすとて、書どもをひらく故に、文月といふを誤れりと（奥義抄）いへるは、其時代よりふるくいひ傳たる所なるべし、されどこの說にては、文月はふみひらく月と云義にとりしも、西土にて七月七日、曝書する事あるによりて、ふみひらく月といふ義に、とりなせしならんとおもはる、曝書の事は、早くは四民月令に、七月七日曝經書及衣裳不蠧とみえたり、崔國輔が詩、韓鄂が歲華記麗等にもいでたり、さて八雲御抄には、ふづき、本はふむ月なりとしるさせ給ひ、藏玉集などにも、ふみひろげ月としるせる曝書の意と、おなじくおもはるれど、下學集、壒囊鈔などにしるせるは、七月七日二星に、文書を手向祭る義にいへり、藻鹽草もこれにしたがひ、日本歲時記、歲時語苑、毫品通考等も、みな七月七日二星に、文書を備へてまつるよしみえて、此月を文月といふ、七日たなばたにかすとて、ふみどもをひらく故に、ふみづきといふを略せりと（日本歲時記）いへり、これらの說どもは、皆曝書よりこと起りて、後世終に二星に、文書、衣裳、其外種々の物共を備へて、二星を祭る事とはなれり、さてふみづきの名は、ふくみ月の義にとるかたしかるべし、此月稻穗を含めり、八月穗を張、九月かりとるなり、類聚名物考にも、此時に稻の穗の出んとして、妊む時なればいふか、加茂眞淵もしかいへり、跡部光海翁は、穗見月なりといひ、谷川士淸もしかいへり、此等の說えたりといふべし、扨また奥義抄の說は、文月といふかたにつ

夏月と〈藏玉集〉いへり、林鐘と〈年中行事秘抄〉みえたるは律名にして、禮記月令、史記律書、淮南子時則訓、春秋元命苞、白虎通等に見えたり、

〔日本書紀〈神武三〉〕戊午年六月（ミナツキ）

〔日本書紀通證〈神武八〉〕六月（ミナツキ）水月也、言田皆引苗代水也、

〔古今和歌集〈夏三〉〕みな月つごもりの日よめる　　　みつね〈〇歌略〉

〔秘藏抄〈上〉〕十二月異名　六月みな月〈〇中略〉　いすゝくれ月〈〇鳳書云、凉暮月、〉

〔莫傳抄〕十二月異名　凉暮月　松風月〈六月〉

〔藏玉和謌集〕十二月異名〈〇中略〉　六〈常夏鵜飼〉　風待月　鳴電月　常夏月

〔伊呂波字類抄〈不天象〉〕七〇月〇〈フツキ律中夷則〉

〔八雲御抄〈三上時節〉〕七月　ふづき〈本はふむ月なり〉

〔下學集〈上時節〉〕夷則（イソク）七月　文月（フミ）〈此月七夕諸人以詩歌之文獻於二星、或曬書籍以供星、故云文月也、〉　親月（シングワツ）〈此月諸人詣親墳墓、故云親月也、〉

〔二中歷〈五歲時〉〕月倭名　七月〈俗說云、七月七夕、俗人稱借與織女、令披書於庭戶、故稱此月爲披書月、今所謂フミヅキハ、是フミヒロゲヅキノ略也、〉

〔奧義抄〈上末物異名〉〕七月（ふづき）　七日たなばたにかすとて、ふみどもをひらくゆゑに、ふみつきといふをあやまれり、

〔語意考〕七月を布美月といふは、保布々美月（ホフフミ）の上下を略きいふ也、稻は七月に穗を含めり、萬葉にふくむをば布々萬里と云を、布々と略き、又ほとのみもいへり、かの春の二月三月は、草木の萌茂るもていひ、秋三月は、稻もていふ也、

〔倭訓栞〈前編不二十六〉〕ふみづき　七月をいふ、穗見月の義なるべし、小苗月、水月、穗見月と次第し、稻穗の出そむるをいふ也、物にふづきともいふは略語也、藏玉集にふみひろげ月と見えたり、

〔古今要覽稿〈時令〉〕ふづき七月　ふづきは七月の和名なり、ふみづきともいへり、さて此名目のは

〔語意考〕六月をみな月といふは、加美那利月の上下を略けり、

〔倭訓栞前編三十美〕みなつき　六月をいふ、水月の義なるべし、此月は田ごとに、水をたゝへたるをもて名とせり、さなへ月よりうつれる詞也、一に神鳴月の上下略也といへり、神は雷也、

〔古今要覽稿時令〕みなつき六月　みなつきは六月の和名にして、ふるくより物にみえたり、いはゆる戊午年六月と、日本書紀神武紀にしるせるぞはじめなる、夫より以下は、萬葉集に不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利とよみ、古今和歌集夏歌詞書に、みなつきつごもりの日ともいひ、みなつきの河邊のはらへに夜更てと秘藏抄いひ、和名類聚鈔には、此月の名季夏とのみしるして、みな月の和名を出さず、八雲御抄にも、六月みなつきとしるさせ給ひたるを、ひとり此月の名義を解るは、いはゆる農の事も、みなしつきたる故に、みなし月といふをあやまれり、一說に、此月まことにあつくして、ことに水泉かれつきたる故に、水なし月といふをあやまれりと奧義抄いへるぞはじめなる、しかれば清輔朝臣の比ほひ、既に二說なるを、後世おほく前說をとらず、後說にのみよれり、水無月といふは、水かれて盡るの義也と東雅いひ、六月和名水無月といふ、まことにあつくして、ことに水泉かれつきたるゆへに、みづなし月といふと日本歲時記いひ、水無月、六月之和名也、此月炎暑甚、水泉涸盡、故曰水無月と歲時語苑いひ、水無月水氣干發スルヲ云フと跡部光海雜說いひ、水なし月といふを略して、水無月といふと慕美須草いふたぐひ、奧義抄の後說によりしなり、又此月の名を、かみなし月と解く說あり、類聚名物考に、六月、みな月、或人の雷月なるべしといへる理にこそといひ、加茂眞淵も、六月を美奈月といふ、加美那利月の上下を略けり、十月は除月にて雷のならねば、かみ無月といひ、六月は專ら雷の鳴故にむかひて、此名ありと語意いへるは、癡玉集、此月を鳴雷月といへるにかなへば、亦此說もすてがたしといへども、農事によりて、とく方然るべし、扨異名のごときは、六月、すゞくれ月と秘藏抄いひ、すゞくれ月、松風月と奧傳抄いひ、風待月、鳴雷月、常

星火、以正仲夏と(尚書堯典)いへるにより、蕤賓と(拾芥抄)みえしは、ともに禮記月令によりし名目なり、

〔日本書紀 三神武〕戊午年五月(サツキ)

〔日本書紀通證 八神武〕五月(サツキ)(小苗月也、謂植苗也、)

〔萬葉集 八夏相聞〕大伴坂上郎女歌一首
五月之花橘乎(サツキノハナタチバナヲ)、爲君(キミガタメ)、珠爾社貫(タマニコソヌケ)、零巻惜美(チラマクヲシミ)、

〔古今和歌集 三夏〕題しらず　よみ人しらず
さつきまつ山時鳥うちはぶきいまもなかなんこぞのふるこゑ

〔秘藏抄 上〕十二月異名　五月さ月(○中略)　さくも月

〔奥傳抄〕十二月異名　狹雲月　五月　多草月

〔瓊玉和歌集〕十二月異名(○中略)　五(橘 水鶏)　賤男染月　月不見月　橘月　吹喜月

〔伊呂波字類抄 天象見〕六月(○○ミナツキ)

〔八雲御抄 三上時節〕六月　みなつき

〔下學集 上時節〕林鐘(リンシヤウ)六月

〔二中歷 五歳時〕月倭名　六月(俗說云、六月農事已畢、農穀皆盡、故稱此月爲皆盡月、今所謂ミナツキハ、是ミナツキ月ノ略也、一說云、無水月、是月天熱殊甚、水泉枯盡、故以無水爲名也、)

〔奥義抄 上末物異名〕六月(みなつき)　農のことども、みなしつきたるゆゑに、みなしつきといふをあやまれり、
一說には、此月まことにあつくして、ことに水泉かれつきたるゆゑに、みづなし月といふをあやまれり、

〔東雅 一天文〕水無月といふは、水かれて盡るの義也といふ也、水無瀨などいふ地名もあれば、さもあるべしや、されど此月は、疫やみする事ありとて、御祓する事なれば、これらの事にやよりぬらん、

すべて物小なるを、さゝやかといひ、小石をさゞれといへれば、さなへ月といふべきを中略して、さ月とはいふなるべし、猶卯花月をうづきといふが如し、さなへといふは、文字早苗とのみふるくより書たれども、小苗の義しかるべし、いかにとなれば、早苗ははや苗の義也、はや苗といふは、今いふ早稲の事なり、歌にかつしかわせなどよめる、わせといふべきを、早稲、晩稲をしなべて、苗を植るを、さなへとるといふは、わせおくての差別なきに似たり、早稲の苗を植るを、早苗とるといはゞあたれり、晩稲の苗を植るを、早苗とるとはいふべからず、さなへとはささなへといふ語の下略とおもはる、小苗と書せば、早稲晩稲をしなべて、さなへとるといひてもしかるべし、凡さなへ植る事は、土地により早晩の差別はあれど、大かたは五月にもはら植るなり、古人さ月の訓義をとくこと、まちまちなれども、多くさなへ植月といふ義に説をたてゝ、さなへの訓義に、心づかざりしなり、さて萬葉集より後の書に、さつきといふ名目のみえしは、古今集さつきまつ山ほとゝぎすと、よめる歌をはじめとして、後撰集、拾遺集以下代々の勅撰に出たり、五月といふ義を解るは、田うふる事、さかりなる故に、早苗月といふを誤れりと、奥義抄みえしぞはじめなる、八雲御抄には、五月さつきとのみしるし給ひ、又五月、さつき、さみだれ月なるよし古説にみゆ、されどもさみだれをさとのみ一言にいふ事、あまりの略言にや、此月を早苗の頭とすれば、さなへの略言かともみゆ、既に或説にしかいへりと類聚名物考いひ、五月をサツキといひ、又世の人今もなをつゝしむべき月也などもいふ也、此月の事は、舊事記にみえし所なれば、古の時の名也けむともしらるゝ也、サツキといふ事は、早苗とる月なれば、早苗月と云しを、サツキとはいふ也といふ説も、いかゞあるべきと東雅いへるはいぶかし、五月稲苗月也と勝部光撰新説いひ、五月の和名をさつきといふ、田うふる事、さかりなるゆへ、さなへ月といふと日本歳時記いひたり、此月の異名も授雲月、又たぐさ月と綺語抄いひ、賤男染月、又月不見月、又橘月、吹喜月と蔵玉集いへり、さて又仲夏と和名類聚鈔いひしは、

右一首、守〇中略大伴宿禰家持作之、

〔古今和歌集 夏三〕うづきにさけるさくらをみてよめる　紀としさだ　〇歌略

〔秘藏抄 上〕十二月異名　四月卯月〇中略　このはとり

〔莫傳抄〕十二月異名　卯花月　夏初月 四月

〔藏玉和謌集〕十二月異名〇中略　四卯花時鳥　卯花月　得鳥羽月　花殘月

〔伊呂波字類抄 左天象〕五。月。サツキ律中二蕤賓一

〔八雲御抄 三上時節〕五月　さつき

〔下學集 上時節〕蕤賓 五月　梅月 五月、又云送梅月、此月送二盡梅子一故云レ爾也、　星火 五月　東井 五月　皐月

〔二中歷 五歲時〕月倭名　五月 俗說云、五月農事有時、耕種尤盛、採二早苗一營二播植一、故此月爲二早苗月一、今所レ謂サツキハ、是サナヘヅキノ訛也、

〔奧義抄 上末物異名〕五月　田うふることさかりなるゆゑに、さなへ月といふをあやまれり、

〔東雅 一天文〕サツキといふ事は、早苗とる月なれば、早苗月といひしを、サツキとはいふ也といふ說もまたあるべき、舊事記に見えし所は前に志るせし事のごとし、サナヘといふも、サバヘといふがごとくに、此月の名によりてこそ、いひしことばなるべけれ、

〔倭訓栞 前編十〕さつき　五月をいふ、早苗月也といへれど、幸月なるべし、狩は五月を主とす、

〔古今要覽稿 時令〕さつき 五月　さつきは五月の和名なり、日本書紀、神武紀萬葉集夏雜歌等にみえたり、これよりいとふるく神代に、五月の文字みえたるは、いはゆる晝如五月蠅而沸騰之云々と、日本書紀神代卷みえしぞ始なる、さてさばへなすわきあがるとみえしは、此月にかぎりて蠅多く群がれる事をいへるならん、さて五月蠅、此云左魔陪同上と、みえたるをもて考ふるに、五月の二字を以て、サと訓ずるは、五十鈴姬命同上と見えたる、五十の二字、イといふにおなじく、二字一言なり、しかれば五月をサとのみもいふべけれど、月の名にとなふる故に、さつきと訓たり、さは小なる義なり、

ふ事のごとし、卯の花のさきぬる月なれば、卯月といふ也といふ說のごとき、然かるべしとも思はれず、ウツギといふ木は、其中のウツボなれば、ウツギと名づけしに、其花のたま〳〵卯月にさきぬれば、卯花などと云るせし也、

〔倭訓栞前編四字〕うづき　卯花月ともいふの義といへり、四月には此花盛り也、又周正の四月は卯月也と、詩の注に見えたりともいへり、

〔古今要覽稿時令四月〕うづきは四月の和名なり、ふるくより所見あり、時當四月之上旬と古事記訶志比宮記いひ、戊午年夏四月と日本書紀神武紀いひ、八重疊平群乃山爾、四月與と萬葉集いひ、宇能花能佐久都奇多知奴とも同上みえたり、今少し世くだりては、うづきにさける櫻をみてと古今和歌集詞書いひ、うつきとて、咲うの花にこつたひてと秘藏抄いひ、うの花月をなにといはましと莫傳抄いひ侍るは、萬葉集のうの花の咲月立ぬといふによりしなり、又卯の花月夜さかりすぎ行と藏玉集いひ、四月うづきと八雲御抄みえたり、さて四月を卯月と名付たる義を解きしは、奥義抄に、うのはなさかりにひらくる故に、うの花月といふをあやまれりとみえたり、下學集、萬葉考別記、類聚名物考、歳時事苑、日本歳時記、和訓栞等書、この說によれり、扨また四月の異名のごときにいたりては、秘藏抄などに出たるを、はじめとやいはん、いはゆる此月をこのはとり月と秘藏抄いひ、又夏初月と莫傳抄いひ、ゑとりばの月と藏玉集いひ、花殘月と同上いひ、又首夏と和名類聚鈔いひ、孟夏と年中行事秘抄いひつるも漢名なり、仲呂と拾芥抄いふは律名なり、是則禮記月令に、其音徵、律中中呂といふによりしなり、

〔日本書紀三神武〕戊午年夏四月

〔日本書紀通證八神武〕四月、種月也、播稲種之義、古說爲卯花月、詩註、周正四月卯月也、

〔萬葉集十八〕四月〇天平二十年一日、掾久米朝臣廣繩之館宴歌四首、
宇能花能、佐久都奇多知奴、保等登藝須、伎奈吉等與米余、敷布美多里登母、

其音角、律中姑洗と淮南子いひ、三月其名青章と史記いひ、三月を暮春、末春、晩春と元帝纂要いひ、三月季春、
暮春、載陽、華節、病月、末垂と事物別名みえたり、いづれも此月の別名なり、

〔日本書紀三神武〕乙卯年春三月(やよひ)

〔日本書紀通證八神武〕三月(やよひ)彌生也、月令、季春是月也、生氣方盛、

〔古今和歌集一春〕やよひにうるふ月のありける年(とし)よめる　伊勢

櫻花春くはゝれるとしだにも人の心にあかれやはせぬ

〔曾禰好忠集〕暮の春三月はじめ

はゝ子つむやよひの月になりぬればひらけぬらしなわがやどの桃

〔秘藏抄上〕十二月異名　三月やよひ　略○中　さはなさ月

〔莫傳抄〕十二月異名　花津月　夢見月三月

〔歳玉和歌集〕十二月異名略○中　三藤雲雀　花見月　櫻月　春惜月

〔伊呂波字類抄天象宇〕四。月。(ウヅキ)律中二仲呂一、俗云二卯月一、

〔八雲御抄三上時節〕四月　うづき

〔下學集上時節〕仲呂(チウリヨ)四月　麥秋(バクシユ)四月　卯(ウ)月此月卯華盛開、故云二卯月一也、　修景(シユケイ)四月

〔二中歴五歳時〕月倭名　四月俗説云、四月山家墻根之間、溲䟽花盛開、故稱二此月一爲二溲䟽花月一、今所レ謂ウヅキハ、是ウノハナヅキノ訛也、

〔奥義抄上末物異名〕四月(うづき)　うの花さかりにひらくるゆゑに、うの花づきといふをあやまれり、

〔東雅一天文〕卯月といふ事は、詩の豳風に四之日といふ事を、周正の四月は卯月也と、見えしものと
もある也、周正のごときはさもこそあらめ、夏時を行はれんに至ては、四月を卯月といふべき事
にあらず、などいふ事もあるべけれども、なを卯月といふ事は、たとへば上巳といふは、もとこれ
三月上旬の巳の日をいふ事なれど、魏晉より後には、巳の日にはあらねど、三日をもて上巳とい

〔奥義抄上末物異名〕三月　風雨あらたまりて、草木いよ〳〵おふるゆゑに、いやおひ月といふをあやまれり、

〔語意考〕三月を也與比と云は、草木伊也於比月也、二月に芽を張、三月に繁る故に彌生といふ、いのいやを略くは常多し、草木をいはぬは、上に二月にいひしかば、ゆづりて略けり、月の名は多くは他の月と相對へていふ也、

〔倭訓栞前編三十四〕やよひ　三月をいふ、彌生の義よとおと通ず、春三月を生月、氣更來、彌生と次第したる名なるべし、

〔古今要覽稿時令〕やよひ　三月　やよひとは三月をいふ、日本書紀神武紀の訓に、はじめてみえたり、中むかしよりして、やよひの文字彌生と奥義抄かけり、草木のいやおひしげれる比なればいふなるべし、やよひにうるふ月の有ける年と古今和歌集詞書いひ、草木いよ〳〵おふる故にいやおひ月といふを、あやまれりと奥義抄いひ、一切草木井至此月彌生、故云彌生也と下學集いひ、草木の彌生てふよし、古説のごとく成べしと類聚名物考いひ、萬物彌生するなりと跡部光海翁説みえたり、三月をやよひ月といふは、草木いやおい月也、二月に芽をはり、三月にしげる故に、彌生といふと語意考いひ、やよひ、三月をいふ、彌生の義、よとおと通ず、春三月を生月、氣更來、彌生と次第したる名成べしと和訓栞いへるぞ、げにもとおもはるゝ説なり、本居宣長いひけらく、凡て月々の名ども、昔より説共あれど皆わろし、其中にたゞ三月を彌生なりと云類のみは、よしと古事記傳志比宮卷みえたり、彌生は古今人々の説々同一致なれば、義論はいさゝかもなき也、扨異名は暮春と和名類聚抄いひ、律名を沽洗と拾芥抄みえしは、律中沽洗と禮記月令みえしによられしなり、さはなつきと秘藏抄いひ侍るも、此月の異名なり、又花津月と莫傳抄いひ、夢見月とも同上いひ、花見月、櫻月、春惜月とも藏玉集いへり、西土にては、季春と禮記月令いふも、此月なり、又寎と爾雅書るも別名にして、三月得丙、則曰修寎、と同上みえたり、

なかに、二月爲如と（爾雅）いひたるによりて、如月と月の字を入て書る樣になれり、又二月得乙曰橘如と（同上）みえたり、此月を仲春といふは、仲春之月日在奎と（禮記月令）いへるにはじまれり、又降入と（史記）いへり、又二月曰仲陽と（元帝纂要）いひ、又令月と（張子歸田賦）みえたり、異名は和漢ともにいづれも詩に詠じ、歌によめる句の、後世にいたりて、をのづから異名となれるなるべし、しかればますく月々の名目も、多くなれるならん、たとへば春を靑帝といへるを、靑皇ともいひ、又春の時氣を靑陽といへるを、後には孟陽、仲陽、載陽ともいへるがごとし、孟陽は正月、仲陽は二月也、陽字の上に孟仲の文字を加へて、月々に配當せる名なり、陽春などいへるは、たゞ春をいへるなり、月々にあてたる名目にはあらず、陽字の義、春といふ意と同じ、初春、仲春といふべきを、孟陽、仲陽といひ、又春風を陽風といひ、春の木を陽樹と（元帝纂要）みえたり、

〔日本書紀（三神武）〕戊午年春二月（キサラギ）

〔日本書紀通證（八神武）〕二月（キサラギ）（衣更著（イキサラギ）、氣更來（キサル）也、言生氣更發達也、）

〔曾禰好忠集〕中の春二月のはじめ

わぎもこが衣きさらぎ風寒みありしにまさる心地かもする

〔秘藏抄（上）〕十二月異名　二月きさらぎ　きぬさらき共云也〇中略　むめつさ月

〔莫傳抄〕十二月異名　雪消月　梅津月（二月）

〔藏玉和謌集〕十二月異名〇中略　二（櫻雉）　梅見月　小草生月　衣更著

〔伊呂波字類抄（也天象）〕三月〇〇（ヤヨヒ）（律中姑洗）

〔八雲御抄（三上時節）〕三月　やよひ

〔下學集（上時節）〕姑洗（コセン）也（三月）　彌生（ヤヨイ）（一切草葉芽至此月彌生、故云彌生也、）桃浪（トウラウ）（三月）

〔二中歷（五歲時）〕月倭名　三月（俗說云、風雨共暖、草木彌生、故稱此月爲彌生月、今所謂ヤヨヒハ、是イヤチヒヅキノ說也、）

〔伊呂波字類抄（天象 殘）〕二月。（キサラキ）

〔八雲御抄（三上 時節）〕二月　きさらぎ

〔下學集（上 時節）〕夾鐘（二月）　衣更著（二月也、此月餘寒猶嚴、故衣更著也、）　華朝（二月也、朝々待華、故云華朝、）　美景（二月也）　惠風（二月也）　星鳥（二月）

〔二中歷（五 歲時）〕月倭名　二月（俗說云、正月和暖、此月天氣還寒、更著衣、故稱此月爲衣更著也、今所謂キサラギハ、是キヌサラニキツキノ略也、）

〔奧義抄（上末 物異名）〕二月（きさらぎ）　さむくてさらにきぬをきれば、きぬさらぎといふをあやまれるなり、

〔東雅（一 天文）〕キサラギ、ヤヨヒなどいふごときも、ふるく釋せし所のごときは、其釋なからんには、空さへかへりぬる月也とも、草木のをひそふる月也とも、云かるべしとも覺えず、古語にキサとも、キサケとも、キサキとも、キサイともいひし事どもあれば、其釋せし所の義とは同じからず、

〔語意考〕二月は伎佐良藝月と云は、久佐伎波里月也、草木の芽を張出すは二月也、其久佐伎の三言の約めは伎なれば、伎とのみもいふべく、又は草は略くともすべし、佐良と波里は韻通へり、

〔倭訓栞（前編 十）〕きさらぎ　二月をいふ、氣更に來るの義、陽氣の發達する時也、

〔古今要覽稿（時令）〕きさらぎ　二月　きさらぎとは二月をいふ、いとふるき和訓なり、日本書紀に（神武）出たり、（○中略）二月を伎佐良藝月、言は久佐伎波里月也、草木の芽を張出すは二月也、其久佐伎ノ三言の約めは伎なれば、伎とのみ云べくも、又は草は略くともすべし、佐良と波里は韻通へりと（語意）云は、古人未發の考なれども、平田篤胤が、くみさら月にて、夫よりいや生とつゞくといへるかた然るべし、跡部光海翁は、衣更衣陽氣を更にむかふるを云といひ、きさらぎ二月をいふ、氣更に來るの義、陽氣の發達するときなりと（和訓栞）いひ、又此月玄鳥到と月令にみゆれば、去年の八月に雁來りしが、また更に來るの意歟と（類聚名物考）いへり、また二月の異名あまたあるが中に、むめつさ月と（紹恒秘藏抄）いひ、雪消月（後賴朝臣英傳抄）梅津月と（同上）みえたり、後世にいたりて、月々の名目もいとおほくなりたり、いはゆる梅見月、（藏玉集）小草生月と（同上）いふたぐひなり、西土にても、異名さまぐ\ある

ふは、正月の別名といふべし、郭璞曰、以日配月之名也といへり、又攝提貞於孟陬と（離騷經）いふも、正月の事也、正月を曰孟陬と（元帝纂要）いひ侍るも、離騷によりしなるべし、又曰、孟陽、上春、開春、發春、獻春、首歲、獻歲、發歲、初歲、肇歲、方歲、華歲と（同上）いひ、また正月律名あり、これを太簇と（拾芥抄）いひ侍るも、其音角、律中太簇と（禮記月令）いへるによられしなり、太簇の義解は、劉熙釋名、班固白虎通にくはしく辨あり、ゆへにこゝに略せり、又芳春、靑春、陽春、三春、九春と（元帝纂要）みえたれども、あながち正月の月にあつるにもあらずして、春の三月をすべていへる名目と、おしはからる、さてまた正月を一月と書る物、ふるくよりみえたり、附說曰、正月者、古文尙書云、一月也と（玉燭寶典）見え、また漢書表亦云、一月鷄鳴而起と（同上）みえたれども、是正月を一月といふべからざる證あり、杜預春秋傳注云、人君卽位欲其體元以居正、故不言一年一月とみえたるぞ、正しき據とすべし、故に和漢ともに、人君卽位の年をさして、元年とさだめ、年月のはじめをさして、正月といふ、

〔日本書紀（三神武）〕辛酉年春正月

〔日本書紀通證（八神武）〕正月（生月也、日本生之初、正歲之首月也、釜加藤曰、歲首不曰一月而曰正月、蓋取王者居其正也、）

〔萬葉集（五雜歌）〕梅花歌三十二首幷序（○中略）武都紀多知、波流能吉多良婆、可久斯許曾、烏梅乎乎利都々、多努之岐乎倍米、（大貳紀卿）

〔古今和歌集（一春）〕二條の后のとう宮の御息所ときこえける時、正月三日、おまへにめしておほせごとあるあひだに、（○中略）ふんやのやすひで（○歌略）

〔秘藏抄（上）〕十二月異名　正月むつき（○中略）　さみどり月

〔莫傳抄〕十二月異名　暮新月　正月（○歌略、下同、）　年初月　同

〔藏玉和謌集〕十二月異名（後鳥羽院御時、十二月異名にて、歌を被召時、歌付花鳥、難有歌無用之間略之、）　正（柳黛）　初空月　霞初月　初春月（○歌略、下同、）

によりしなるべし、正月はとしの始の祝事をして、しる人なるはたがひに行かよひ、いよ〳〵したしみむつぶるわざをしけるによりて、この月をむつび月となづけ侍り、その言葉を略して、む月といふとぞきゝ及びしと（世諺問答）みえ、正月むつき、睦の意にて、むつましく親族朋友も、相したしめばいふ事、舊說のごとく成べしと、（類集名物考）辨せり、然るに平田篤胤曰、ムツキはもゆ月なり、モユの約ムなり、これ草木の萌きざすをいふ、きさらぎはクミサラ月にて、それよりイヤ生といふ順なりといへり、この說古人未發なり、賀茂眞淵が一月を牟月といふは毛登都月てふ事なり、毛都の約は牟なれば、しかいふといへるはおぼつかなし、正月を初春と（和名類聚鈔）いひ、又異名をさみとり月と（躬恒秘藏抄）いひ、暮新月と（後賴朝臣莫傳抄）いひ、年初月と（同上）いひ、初空月と（藏玉集）いひ、霞初月と（同上）いひ、初春月と（同上）いふも、みな異名にして、後世にいできしところなり、もとの起りは、躬恒秘藏抄よりはじまれることならんを、後賴朝臣みづから歌をよみたまひて、月々の異名をいひ初しなり、それより中昔にいたりては、藏玉集などにのせたる異名も、おなじく歌によませ給ふが、そのまゝ異名となれるながら、またく藏玉集の月々の異名は、異名をもとめたまひて、歌によみたまふとおもはれぬる故は、定家卿、家隆卿なども、月々の異名の歌をよまれ、後鳥羽院御製も藏玉集に載られたれば、仰をかうむり奉りて、よまれしとみえたり、歌がらも、其月々の時候、又は景物などとりどりに讀こまれたれば、あたらしく、月々の異名をよみいだされし事としられたり、又西土にて、ものにみえしは、正月上日と（尙書舜典）いふ、是正月をいふ名目の物に見えし始なり、正月は月の初なり、又月正元日（同上）と書る也、元日もおなじく日のはじめなれば、もとつ日といへる義にて、元日と書る也、元年春王正月と（春秋）いふも、物正しきの義にとりていふなり、正月謂之端月と（史記）いひ侍るも、正月といふと義おなじ、端正の二字、いづれもたゞしき義なれば、文字をかへて端月とかけるなり、玉燭寶典も正月爲端月といへり、又孟春之月、日在營室（禮記月令）いひ、また正月を爲陬と（爾雅）い

〔書言字考節用集二時候〕太郎月(タロウヅキ)本朝俗、斥正月云爾、睦月(ムツキ)又作昵月、正月也、新春親族相依娯樂遊宴、故云爾、正月(シヤウグハツ)夏以寅、殷以丑、周以子、秦以亥、漢武太初元以來、改用夏正建寅月、

〔二中歴五歳時〕月倭名　正月俗說云、正月元三日、貴賤往來致拜禮、各結和親、故稱此月爲親月、今所謂ムツキハ、是ムツビヅキノ訛也、

〔奥義抄上末物異名〕正月(ムツキ)、たかきいやしきゆきゝたるがゆゑに、むつびづきといへるをあやまれる也、

〔世諺問答正月〕問て云、まづ正月をむ月と申侍るは、いかなるいはれぞや、　答、正月はとしの始の祝事をして、しる人なるはたがひに行がよひ、いよ〳〵ゑたしみむつぶるわざをし侍るによりて、この月をむつび月となづけ侍り、そのこと葉を略して、む月といふとぞきゝをよびし、

〔東雅一天文〕ムツキといふ事は、ムツビヅキと云也、上古の語に、スメムツ神などいふ事はあれど、ムとのみいひ、睦の義ありとも見えず、又ムツビといひ、ツキと云、ツといふことばのかさなれる故に、ひとつのツといふことばに、ふたつのツといふことばは、こもれりなどもいふべけれど、それもまたゑかるべしとも思はれず、

〔語意考〕一月を牟月(ムツキ)といふは、毛登都月(モトツ)てふ事也、其毛都の約は牟なればゑかいふ、

〔倭訓栞前編三十一〕むつき　正月をいふ、親(ムツ)ましてふ月なればいふ、又生月(ウム)の義、春陽發生の初なれば、かく名くる成べし、○中略蝦夷に此月をとひたんねといふ、日ながしといふ事也、

〔古今要覽稿時令〕むつき正月　むつきは正月の和名なり、日本書紀神武紀四十有二年壬寅春正月とみえたるぞ、正月をムツキとよみし初なる、武都紀多知(ムツキタチ)、波流能吉多良婆(ハルノキタラバ)と萬葉集みえ、二條の后のとう宮のみやすむ所ときこえける時、むつき三日おまへにめしてと古今和歌集春歌上見え、むつきたつしるしとてやはいつしかとよもの山邊にかすみ立らんと躬恒秘藏抄見え、正月むつき、高き賤きゆきゝたる故に、むつみ月といふと清輔奥義抄いひしは、はじめてむつきの義を解に似たり、正月むつきと八雲御抄みえ、正月、睦月、睦或作昵、新春親類相依娯樂遊宴、故云睦月也と下學集云へるも、奥義抄

月などいふがごとし、後代の歌詞に出たれど、遂に其月の名となりし事のごとく、古を去事久しき世の人のいひし所の、つゐに其名となりて、古にいひし所のごときは志る人もなくなるにいたれり、五月をサツキといひ、又世の人今もなを、つゝしむべき月也などもいふ也、此月の事は、舊事記に見へし所なれば、古の時の名也けむとも志らるゝ也、卯月、長月、陽月、歲終(シハス)などいふがごとき、漢にもふるくいひ傳へにし所なれば、此等のごときは、我國に漢字傳へ得し後の人のいひし所なるにや、またたま〳〵其名の相同じかりしにや、すべて其詳なる事を志らず、

〔古事記傳三十〕凡て月々の名ども、昔より說どもあれど皆わろし、其中にたゞ三月を彌生(イヤオヒ)なりと云るのみはよし、又師の考へに、七月は穗含月(ホフヽミヅキ)、八月は穗發月(ホハリヅキ)、九月は稻刈月(イナカリヅキ)なりと云れたるなどは、さもあるべし、其餘はいかゞあらむ、又九月は、稻熟月(イナアカリヅキ)にてもあらむか、但賀(ガ)を濁るは、刈にても、熟(アカリ)にても、いかゞなるは、音便にて濁るか、はた異意か決めがたし、此外にも己も考出て、さもあらむと思ふ彼此はあれど、十二月みながらは未考得ざれば、今云ず、なほよく考へて云べし、

〔伊呂波字類抄天文元〕正。月。(ムツキ)律中二太簇一

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲三年正月戊戌、授二無位牟。都。岐。王從五位下一、

〔續日本紀考證稱德九〕牟都岐王　寶龜二年十月紀、天應元年五月紀、延曆十年七月紀、並作二正。月。王一、

〔春秋左傳注疏二〕經、元年春王正月、注、隱公之始年、周王之正月也、凡人君卽位、欲二其體レ元以居レ正、故不レ言二一年一月一也、

〔八雲御抄三上時節〕正月　むつき

〔下學集上時節〕大簇(タイソウ)正月　履端(リタン)正月、履二一切之事端一、故曰二履端一也、　肇歲(テウサイ)正月也、肇始也、　甫年(ホネン)正月也、甫始也、　睦月(ムツキ)正月也、睦或作レ昵、新春親類相依娛樂遊宴、故云二睦月一也、　獻歲(ケンサイ)正月也、獻與レ献同、　陬月(スウゲツ)正月也　始和正月也　解凍(カイトウ)正月也

〔運步色葉集志〕正月

らもれたるにこそあらめ、皆いとふるければ、月次の定まりし世よりのなるべし、萬葉集にはおほく見えたり、

此名ども、もろこしのにならはゞ、やがて正月、二月、三月などとこそつけらるべきに、さはあらで、あらたにまうけて、むつき、きさらぎ、やよひなどともつけられたるは、上にいへるごとく、物の次第を一二三などいふことは、古はなかりし故なり、

さてかく月次のさだまりて、月々の名ども、出來つれども、かの天の月による月と、此月次とは、別事なりし、又いくかの日といふ日次、一月の日數の定まらざりしなど、これらはなほ本のまゝにてなむ有ける、

〔續和漢名數時候〕十二支配十二月　正月寅　二卯　三辰　四巳　五午　六未　七申　八酉　九戌　十亥　十一子　十二丑

〔東雅一天文〕月ツキ　正月ムツキ、二月キサラギ、三月ヤヨヒ、四月ウヅキ、五月サツキ、六月ミナヅキ、七月フヅキ、八月ハヅキ、九月ナガヅキ、十月カミナヅキ、十一月シモツキ、十二月シハス、義共に不詳、我國の月名、太古よりいひつぎしことばとも聞えず、舊事記に、邪神の音サバへなせしといふ事三たびみえたり、それが中二ツは狹蠅の字を用ひ、讀てサバへとし、一ツは五月蠅の字を用ひ、讀事狹蠅のごとし、さらば上宮太子の比ほひ、五月をよびてサツキといひし事、既にありしにや、其餘のごときいかにやありけむ、陰陽の二神、日神、月神を生給ひしに、其月神の御名、一ツには月讀とも申せしは、上古の語に讀といひしは、後世にカゾフルといふことば也などもいひ傳へたり、月の數をかぞへいはむには、かぞへいふ所の名なき事をも得べからず、天地より始て、凡物の名に至るまで、後世にいふ所のごとき、上古にいひし所のまゝ也とも見えず、古をさる事の久しくて、世のうつりかはりぬるに隨ひて、いふ所も又うつりかはりぬる故也、たとへば初空月、梅見

月數月

〔倭訓栞前編十六〕つき　月は盡るの義をもて名とす、西土の書に、以明一盡爲一月といへり、

〔眞暦考〕またかの空なる月による月と、年の來經とをしひてひとつに合すわざなどもなくて、ただ天地のあるがまゝにてなむ有ける、

此二方を、暦に一つに合せたるは、いと宜しきに似たれども、まことは天地のありかたにはあらず、もししか一つなるべきことわりなりせば、もとよりおのづからひとつなるべきに、さはあらで、おくれさきだち行たがふは、必別事にて有ぬべきことわりあることなるべし、○中略

これぞこの天地のはじめの時に、皇祖神の造らして、萬の國に授けおき給へる、天地のおのづからの暦にして、もろこしの國などのごと、人の巧みて作れるにあらざれば、八百萬千萬年を經ゆけども、いさゝかもたがふふしなく、あらたむるいたづきもなき、たふときめでたき眞の暦には有ける、○中略然有けるを、やゝくだりて、もろこしの國書わたりまうで來て後に、かの國のさだめにならひてぞ、一とせを十二月とはして、その月次を四時にくばりついで、

もろこしの十二月は、天の月による月をもて定めたるを、皇國にてそのかみさだまりしは、猶もとよりのまゝに、年のめぐりにしたがひて、暦の節氣と同じかりき、

むつききさらぎなどと、その月々の名をも定められたりける、

すべてこれを月と名づけられたるも、ともにかの國のにならへるか、又こゝにも、本よりかの天の月による月といふ事の有つれば、その名をとれるにも有べし、萬葉集にむ月たつとよめるなど、月に立といふも、こゝの詞なり、

此時よりぞ、春某月、秋某月などと、月の名をあげ、又それを季へかけていふことなどもはじまりける、さて此月々の名ども、古事記、書紀などの歌には、一つも見えたるはなけれど、そはおのづか

月

應按田事

右得美濃國解偁、惟令百姓口分田六年一班、略○中因茲人民易逃戸口難增、纔隨官符來乃始班田、文案未究還及紀年、昨日班田今日按田、吏民之煩無不由此、望請期年至者、國郡官司按定國內之田數、捴計當年之見口、且按班且言上、略○中

仁壽三年五月廿五日

〔居家必用十六〕五服略○中期年實一十二箇月、謂應天道之四時、知物有終始也、

〔和爾雅二時令〕十稔十年也　一紀十二年也　一終十二年也　積紀二十五年也　一章十九年也　三霜三年也

〔運歩色葉集伊〕一紀十二年也

〔尚書註疏十九畢命周書〕既歷三紀、世變風移、四方無虞、予一人以寧、傳言殷民遷周已經三紀、(中略)十二年曰紀、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年正月辛酉朔、詔曰、略○中朕以寡薄、恭承寶基、無善類聚國史改、萬民空歷一紀、略○下

〔類聚三代格十五〕太政官符

應勤行班田事

右田令云、六年一班、承和元年格云、畿內一紀一班、略○中左大臣宣、奉勅六年一班、期限短促、宜仰下諸國一紀一度按田言上、并進授口帳、待裁班給、略○中

延喜二年三月十三日

〔書言字考節用集十數量〕一月推南子、三十日爲一月、

〔書言字考節用集二時候〕幾月　同月　同月　翌月　當月今月又云　例月　月並　月毎　何月　來月　後月、明月同、　期月歳周、謂十有二月而周之期月、　毎月　今月又云當月　明月　去月推南、先一月曰去月、猶言去年、　明月又云來月　先

〔書言字考節用集 二時候〕去々歳。。。

〔日本釋名 上時節〕去々年 萬葉には前年とかけり、あと、しなり、去年のあとの年也、をとあと通ず、一昨日をおとつひと云が如し、此外にも説多し、不可用、

〔萬葉集 四相聞〕大伴宿禰家持贈娘子歌
前年之、先年從、至今年、戀跡奈何毛、妹爾相難、

〔拾遺和歌集 十六雜春〕題しらず　中納言安陪廣庭
いにし年ねこじてうへし我宿のわか木の梅は花さきにけり

〔源氏物語 十二須磨〕二月廿日あまり、いにし年京をわかれし時、心ぐるしかりし人々の御ありさまなど、いとこひしく、○下略

〔伊呂波字類抄 耳疊字〕來年。。

〔和爾雅 二歳時〕明年　翌歳　來茲

〔書言字考節用集 二時候〕翌年(爾雅、翌明也、)　來年(來歳、來茲、翌歳、明年、並同、)　明年(又云翌年)　明年

〔日本書紀 九神功〕伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、

〔古今和歌集 四秋〕やうか月○七のひよめる　みぶのたゞみね
けふよりはいまこん年の昨日をぞいつしかとのみ待わたるべき

〔和爾雅 二歳時〕周歳。。　期年　一稔(穀一熟曰稔、古人謂一年爲一稔、取穀一熟也、)　晬時(晬者周時也、又生子一周歳曰晬、)　終期(一歳終也)　卒歳
覺歳　周星(星辰一周一年也)　春秋(一年也)　星霜(同上)　發斂(説文春夏曰發、秋冬曰斂、)　旬歳(滿歳也)　一齡(一年也)　期月(期年也、出于論語、)　四運(四時也、文選詩、四運循代序、)

〔書言字考節用集 二時候〕期年(本字朞、文選註、一歳也、周伯温曰、日行三百六十日、則復其初度、謂之期年、)　周年(同、韵會、唐明皇諱基、故改朞爲周年、)

〔類聚三代格 十五〕太政官符

〔萬葉集 十六 有由緣幷雜歌〕筑前國志賀白水郎歌十首○中略
荒雄良者、妻子之產業乎波、不念呂、年之八歲乎、待騰來不座、

〔古事記 下 雄略〕故其赤猪子、仰待天皇之命、既經八十歲、於是赤猪子以爲、望命之間、已經多年、姿體瘦萎、更無所恃、

〔古事記傳 四十一〕多年は許々陀久能登志と訓べし、大祓詞に、許々太久乃罪乎と見え、萬葉四十四丁に、幾許雖待、○中略 十六十八丁に、許己太久爾など、其外幾許と云こと卷々に多し、

〔伊呂波字類抄 古 天象〕今年 コトシ 今玆 〔同 古 疊字〕今年

〔和爾雅 二 歲時〕今年 是歲 今玆 左傳

〔書言字考節用集 二 時候〕是歲 又作 此歲 今年 同 又作 今歲 今玆 呂氏春秋注、玆年也、公羊傳、玆新生草也、一年草生一番、以玆爲年、

〔萬葉集 七 雜歌〕臨時
今年去、新島守之、麻衣、肩乃間亂者、許誰取見、

〔伊呂波字類抄 古 天象〕去年 コソ 昔歲 已上 同

〔和爾雅 二 歲時〕去歲 客歲 去年也 徂歲 已去之歲也

〔書言字考節用集 二 時候〕往年 先年、義同、 去歲 文選 舊年 又云 舊歲 去歲 又云 去年 往年 白集文 先年 同 近年 去歲 客歲、徂歲、並同、 去年 上同 舊年 又云 舊歲 先年

〔日本釋名 上 時節〕去年 こその年也、さりて重ねてこざるとし也、ぞとすと通ず、

〔萬葉集 十 春雜歌〕詠花
去年咲之、久木今開、徒、土哉將墮、見人名四二、

〔後拾遺和歌集 一 春〕正月一日よみ侍りける　小大君
いかにねておくるあしたにいふことぞ昨日をこぞとけふを今年と

〔萬葉集十春雜歌〕詠花

毎年梅者開友、空蟬之、世人君羊蹄、春無有來、

〔萬葉集十九〕詠霍公鳥幷時花歌一首幷短歌（中略）

毎年爾、來喧毛能由惠、霍公鳥、聞婆之努波久、不相日乎於保美、（毎年謂之等乃波）

〔萬葉集十五〕中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答歌（中略）

安良多麻能、等之能乎奈我久、安波射禮杼、家之伎許己呂乎、安我毛波奈久爾、

〔新勅撰和歌集冬六〕五十首歌よませ侍ける時、年の暮をおしむといへる心を、　入道二品親王道助

とゞめばや流れて早き年波のよどまぬ水はしがらみもなし

〔古今和歌集春一〕ふるとしに春たちける日よめる　在原元方

年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはん

〔後撰和歌集雜十五〕小野よしふるの朝臣、にしのくにのうてのつかいにまかりて、二年といふとし、四位にはかならずまかりなるべかりけるを、さもあらずなりにければ、（中略）　源公忠朝臣

玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらんと思ひし

〔伊勢物語上〕昔男かたゐ中に住けり、（中略）此戸あけ給へとたゝきけれど、あけで歌をなんよみていだしたりける、

あら玉の年の三とせを待わびてたゞこよひこそ新枕すれ

〔躬恒集〕みのゝすけのくだるに送る

ひと日だにみねば戀しき君がいなば年のよとせをいかですぐさん

〔倭訓栞前編十八〕とし　年をよむも疾の義也、文選に年往迅二勁矢一といへり、左傳正義に、年歲載祀、異レ代殊レ名、而其實一也と見えたり、

〔古事記傳九〕年は田寄なり、多余を切て登となる、さて余を佐と云る例古に多し、然云故は、まづ登志とは穀のことなる、其は神の御靈以て、田に成して、天皇に寄奉賜ふゆゑに云り、田より寄すと云こゝろにて、穀を登志とはいふなり、祈年祭祝詞に、皇神等能依左志奉牟、奥津御年乎云々、八束穗能伊加志穗爾、皇神等能依左志奉者云々、とあるを以知べし、天下に成とし成る穀は、悉く天皇に神の依し奉給ふなるを云り、〇中略さて穀を一度取收るを、一年とは云なり、されば登志と云名は、穀を本にて、年月の登志は末なり、

〔八雲御抄三時節上〕年　とし　なみ　としのを　としのは　萬年はよろづよ　千年はちとせ　五百年はいほ　百年はもゝとせ　八十年はやそぢ　七十年はなゝそぢ　六む　五い　四よ　三み　廿はたとせ

〔書言字考節用集二時候〕幾年　年矢文選、長歌行、年往迅二勁矢一、千字文註、日月迅速、流年如レ箭、催レ人易レ老也、　年緒　年來　年次　毎年
萬葉　比年文選註、比近也、　累年又云累歲、遂年也、　多年積年、積歲、並同、　他年　連年比歲、多年、並同、　毎年累年義同　後年　數年

〔和爾雅二歲時〕嗣歲　比歲　洊歲再歲也　頻年比年也　積歲多年也　累歲連年也

〔倭訓栞前編十八〕としなみ　年次の義、月次日次といふがごとし、歌には多く波に寄たり、
としのを　萬葉集、續日本紀の宣命に年緒と書り、よて長く絶ぬ意、又むすぶなど屬けり、緒は年のつなぎをいふ成べし、俗に命の綱などいふめり、西土にも心緒愁緒などの語あり、又年の尾の義にもよめりといへり、

〔倭訓栞中編十六〕としのや　年次のはやく過行をいふ、光陰如レ矢の意也、千字文に年矢毎催と見えたり、
としのは　萬葉集に、毎年謂二等之乃波一と見えたり、
としごろ　異名伊勢物語に年來と塡られたり、今音にもいへり、

歲

月七日、十一月大嘗日ヲ謂ヒテ、宴會アリ、後ニ正月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日ヲ五節供ト稱シテ相祝ス、又三元アリ、正月十五日ヲ上元ト云ヒ、七月十五日ヲ中元ト云ヒ、十月十五日ヲ下元ト云フ、並ニ之ヲ祝セリ、

〔伊呂波字類抄 止天象〕年 トシ亦作季 歲 載 年也歲也

〔釋名 一釋天〕年進也、進而前也、　歲越也、越故限也、唐虞曰載、載生物也、殷曰祀、祀巳也、新氣升故氣巳也、

〔類聚名義抄 一〕年秊 上通、下正、トシ、𠦜 トシ、則天作此、

〔書言字考節用集 二時候〕白(トシ) 僧史音釋、印度以一年一白、 年 同、爾雅、稔也、 季 同、說文、年字、古 歲 同、爾雅、夏曰歲、商曰祀、周曰年、唐虞曰載、名不同而義一也、 稔 同、音枕、唐句年也、古人謂一年爲一稔、取穀一熟、 𠦜 同、年字也、代醉武后改爲新字千々萬々爲年、 一歲(ヒトトセ) 終期、終歲、卒歲、旬歲、四運、一齡、周星、春秋、並同、 〔同 十數量〕一年(イチネン) 又云、一歲、淮南子、三月爲一時、四時而爲一歲、 〔同 二時候〕半年(ハンネン)

〔和爾雅 二歲時〕年名、　唐虞曰載(サイ) 取物終亦始、　夏曰歲(サイ) 取歲星行一次、　商曰祀(シ) 取祭祀一終、亦作禩、　周曰年(ネン) 取禾穀一熟、

〔古今和歌集 二春〕はるのとくすぐるをよめる　みつね
あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆる哉

〔古今和歌集 十七雜〕とゞめあへずむべもとしとはいはれけりしかもつれなくすぐる齡か

〔日本釋名 上時節〕年　とし(トシ)は疾也、はやき意、光陰矢の如く、年月は早くすぐる物なる故にとしと云、古今集の歌に、とゞめやらずむべもとしとはいはれけりさてもつれなくすぐるよはひか、とよめるがごとし、

〔東雅 一天文〕歲トシ　義不詳、年の字を讀事亦同じ、トシ亦轉じてトセともいふ、一年をヒト。トセといひ、二年をフタトセといふが如き是也、三十年をミソヂといひ、四十年をヨソヂといふがごときは、トシといふことば、轉じてシといひ、シ亦轉じてチといひし也、

古事類苑

歲時部一

歲時總載上

歲ハ分チテ十二月ト爲シ、月ハ分チテ三十日ト爲ス、歲ニ閏年アリ、月ニ大盡小盡アリ、閏年ハ十二月ノ外ニ、更ニ一月ノ餘アルヲ謂フ、三年ニ一閏、五年ニ再閏ヲ立テ、十九年ニシテ七閏ニ及ベバ復タ餘分ナシ、之ヲ一章ト云ヘリ、大盡ハ月ノ三十箇日ニテ盡クルヲ謂ヒ、小盡ハ二十九箇日ニテ盡クルヲ謂フ、而シテ其第一日ヲ朔ト爲シ、十五日ヲ望ト爲シ、月盡ヲ晦ト爲ス、朔ト望トハ夙ニ之ヲ祝セシガ、德川氏ノ始メ、二十八日ヲ加ヘテ三日ト稱シ、汎ク之ヲ祝スルニ至レリ、

四時ハ又四季ト云フ、一年十二箇月ヲ四分シ、各三箇月ヲ以テ一季ト爲シ、溫暑冷寒ノ序ニ循ヒテ、之ヲ春夏秋冬ニ分ツナリ、又別ニ一歲三百六十五日有奇ヲ分チテ二十四氣ト爲ス、卽チ立春ヨリ大寒ニ至ルモノニシテ、立春ヲ以テ正月ノ節ト爲シ、雨水ヲ以テ正月ノ中ト爲シ、冬至ヲ以テ十一月ノ中ト爲シ、大寒ヲ以テ十二月ノ中トスルガ如シ、而シテ冬至若シ十一月朔日ニ當ルトキハ、朔旦冬至ト稱シテ、朝廷ニ於テ群臣之ヲ賀ス、又七十二候アリ、五日ニ一候、十五日ニ三候アリ、之ヲ一氣トス、卽チ一月三十日六候二氣ニシテ、一歲十二月二十四氣七十二候ナリ、又社日、八十八夜、梅雨等ノ雜節アリ、亦二十四氣ヨリ出ヅルモノナリ、二十四氣ニ關セザルモノニ、別ニ節日アリ、舊クハ正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七

も奮り、

よし、これによつて亀井侯御通行の時は、かならず日和崩れて、風雨をさそひ、玄づかならず、侯過行たまへば、たちまち快晴することなり、故に雨風をまじへ降とも、山はれ沖くもりなき時は、亀井日和といひならはせるよし、

照々法師

〔嬉遊笑覧方術八〕照々ほうし、不角が點の句に、てる〳〵法師月に目が明(顔のかなひぬれば、目睛を書なり、)曇紀逸が點の句に、八せんにてる〳〵法師はがきかず、漢土には是を掃晴娘といふ、蜻蛉日記、今日かゝる雨にもさはらで、をなじ所なる人、ものへまうでつ、さはることもなきにとおもひ出たれば、或もの女神にはきぬ縫てたてまつるこそよかンなれ、さしたまへと、よりきてさゝめけば、いで心みんとて、様のひゝな衣みつぬひたり、玄たかひどもにかうぞ書たりける、いかなる心ばへにかありけん、神ぞ玄りてんかし、玄ろたへの衣は神にゆづりてんへだてぬ中にかへしなすべく云云、此作者兼家公の妻、道綱卿の母公の寵衰へたるによりて、これらの歌あり、此ひゝな衣、雨を祈ることとも聞えず、雨ふる日なれば、似たることのやうなり、

晴雨計

〔武江年表八文政〇〕此年間記事 晴雨計といへる小き木偶を商ふ、手はかるかやのちくを以製す、雨降時は自然に持たる傘をさす、

〇

曇

〔新撰字鏡日〕曀(同、於計邑計二反、去、陰而風曰曀、翳也、言奄翳日光使不明也、日无光也、太奈久毛禮利、又久留、又久毛利天風吹、) 曇(太含反、久毛禮利、)

〔類聚名義抄日二〕曇(徒甘反、クモル、)〔同日六〕陰(音々、イン、オム、)

〔書言字考節用集乾坤一〕曇(クモル)(韵會、雲布。) 黔(シタ)(韵瑞、雲覆日也、通作陰) 曃(同)(文選註、陰貌、) 曀(同)(毛萇云、陰而風曰曀。) 陰霽(クモリハル)。

〔日本釈名天象一〕曇(クモル) こもる也、月日の雲中にこもる也、ことくと通す、一説くもるは雲より出たることば、るはことばのたすけ字也、

〔倭訓栞前編八久〕くもる 霊異記に曇をよみ、常に曇をよめり、雲を用にいふ也、萬葉集には雲入と

〔倭訓栞中編十五〕てんき　平生の口語にいふは、天氣にて字の如し、

〔倭訓栞前編十七〕てけ　土佐日記に見ゆ、天氣の急語なり、

〔土左日記〕九日〇正月、承平六年、中略夜更てにしひんがしも見えずして、て。け。のこと、梶取の心にまかせつ、〇中略廿六日、〇中略て。い。け。のことにつけて祈る、

〔倭訓栞前編二十五〕ひ。よ。り。　霽をいふ、日依の義、日方といふが如し、諺に天一太郎といふは、天一天上の朔日、八專次郎は八專の二日め、土用三郎は土用の三日め、寒四郎は寒に入四日め也、此日雨ふり出せば、天氣あしゝといへり、

〔物類稱呼五言語〕雨降らんとして日和になりたるを、畿内近國にても、日。な。を。る。といふ、東國にて俄。ひ。よ。り。と云、　日和の定らぬを、尾張にて一。雨。日。和。と云、筑紫にて一。石。日。和。と云、今按に、尾州にて鈍々したる日和と云を、金子の貳歩々々にとりなして一兩の天氣と云、又一こく日和といふは、雨ふらんや、ふるまいやといふを、筑紫にて降うごと、ふるまいごとゝ云、

〔常山紀談九〕同時〇小田原役九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船を乗廻し、南の海上を取巻けり、此所はあら海にて、東風吹時は、波浪山嶽を倒しかくるが如し、船をかけ並る事、思ひもよらぬ所なるに、秀吉城をかこまれし間、五十餘日風靜に波際かなり、是よりして小田原海邊風なき日を上。様。(ウヘサマ)日。和。(ビヨリ)といひならはしけり、

〔秋里隨筆上〕須磨龜井日和

敦盛の古墳を拜しありけるうち、早卒として天のけしき損、暴風雨をまじへ、且々(たゞく)しづかならず、聊茶店の軒に舍をもとめ、とても此けしきにては、ゆくこと能ふまじと、蓑の紐ときけるに、亭主の曰、旅客さはおどろき玉ふことなかれ、これは龜。井。日。和。なりといふ、〇中略亭主答へて物語りけるに、家目井(かめい)何某と申けるは、先祖九郎よしつね公に隨ひ、平家を誅せし、龜井六郎重治が末なる

〔甲子夜話七十七〕武藏野ノ逃水ハ、古ヨリ名高キコトナリ、然レドモ常ニアルニアラズ、其地ノ人モ見ルコト甚稀ナリ、固ヨリ水ニハアラザルナリ、時アリテ廣原ヲ遙ニ望メバ、波浪ノ起ルニ似テ色五彩ヲマジヘ、其中ニ人物舟船ノ行クガ如ク、彷彿トシテ影ノ如ク畫ノ如シ、漸其處マデイタリ視レバ、アルトコロナク、又向ニ見ユルコトハジメノ如ク、移時乃滅ス、水ノ流ルヽニ似テ定ル所ナク逸失スレバ、逃水ト名ヅケシナリ、淸暑筆談曰、廣野陽炎望之如波濤、奔馬及海中蜃氣爲樓臺人物之狀、此皆天地之氣、絪縕盪潏、回薄變幻、何往不有、周處風土記亦同此說、唐陸勳志怪水影ト云モ亦同、右二說已載經史摘語、コノ說ノ如ク氣ナリ、蜃氣樓ト云ニ同ジ、海上ニアルヲ海市ト云、山中ニアルヲ山市ト云、原野ニアルヲ地市ト云、池北偶談ニ見エタリ、武藏野ノ逃水ハ地市也、

霽 曇併入

霽ハ、ハレト云フ、開晴ノ義ニシテ、卽チ雨止ミ雲斂リテ、日月其光ヲ放ツヲ謂フナリ、又天氣ト云ヒ、日和ト云フハ、原ト晴雨ニ通ズル語ナレドモ、後ニハ專ラ晴ニノミ言フコトアリ、曇ハ、クモルト云フ、雲起リテ日月ヲ覆ヒ、天將ニ雨フラントスルヲ謂フナリ、

名稱

〔新撰字鏡雨〕霽 子計子禮二反、雨止也、日波禮奴、

〔類聚名義抄二日〕睲晴 音情 ハレタリ ハル 〔同七雨〕霽 子計反 ハレ ハル 晴ノハレタリ

〔書言字考節用集一乾坤〕晴 ハル、文選注、無雲日晴、 霽 說文、雨止曰霽、

〔倭訓栞前編二十四波〕はる、晴をいふ、開晴の義也、

〔運歩色葉集天〕天。氣。

〔書言字考節用集一乾坤〕天氣 テンキ

今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎、

〔續性靈集十〕詠陽燄喩

遲遲春日風光動、陽燄紛紛曠野飛、寧體空空無所有、狂兒迷渇遂忘歸、遠而似有近無物、走馬流川何處依、妄想談議假名起、丈夫美女滿城圍、謂男謂女是迷思、覺者賢人見則非、五蘊皆空眞實法、四魔與佛亦夷希、瑜伽境界特奇異、法界炎光自相暉、莫慢莫欺是假物、大空三昧是吾妃、

〔古今和歌六帖一天〕かげろふ

あるとみてたのむぞかたきかげろふのいつともしらぬ身とはしる〳〵　源忠房

〔永久四年百首春〕遊糸

しづけくて吹くる風もなき空にみだれてあそぶいとぞみえける

〔夫木和歌抄三遊絲〕六百番歌合遊絲　従二位家隆卿

のどかなる夕日の空をながむればうすくれなゐにそむるいとゆふ

〔倭訓栞前編二十〕にげみづ　武藏野の景色也、春より夏かけてうらゝかになぎたる空に、わかく生しげりたる草の原に、地氣のたち升るが、こなたより見れば、草の葉末をしろ〳〵と、水の流るが如く見ゆめり、まことの水には非ず、こと處にゆけば、又むかふに見ゆるをもて名けり、志怪錄に、深州東鹿縣中、有水影長七八尺、遙望見人馬往來如在水中、乃至前不見水と見えたり、

〔散木弃歌集九雜〕恨躬耻運雜歌百首　沙彌能貪上

東路に有といふなるにげ水のにげのがれてもよをすぐすかな

〔袖中抄十九〕にげみづ　顯昭云、にげ水とは、あづまぢにあり、人ののまんとすれども、おほかたくまれでにぐる水なりとぞいひつたへたる、是は俊頼朝臣詠也、是もさる事やはあるべきとおもへど、人のいひ置たる事なれば、しるしのする也、

しらずをかしげなる童の、さうぞくうるはしくしたる、かうばしき物ふとおりくるまゝに、いとゆふか何ぞと見ゆる、薄き衣を中將君に打かけて、袖を引たまふに、我もいみじくもの心ぼそくて、立とまるべきこゝちもせず云々と、見えにたるこそ、陽炎をしも絲ゆふとよべるはじめかとおぼゆればなり、さてさし次は彼仲正の歌なり、かゝればさきの絲木綿の說は、よろしげにして宜しからず、(木綿は楮木の皮を麻の如くさきたるをいへり、されば絲木綿とつゞけて、木綿にを絲といふ理り協はゞ、麻をも絲麻といはるべきに似たれど、しかよべる事ふつに見えれば、絲木綿とも亦いはれぬなるべし、)また遊絲の遊の音訛などいふめるは、いと揣くして云にたらねば、絲結の義と決めたらむこそよからめ、さてかくしるしをへたるを、大江章雄打見ていへらく、絲ゆふは白河の御世より、今すこし古く見えたり、さるは和漢朗詠集雜部、晴とある題の歌に、霞はれみどりの空ものどけくてあるかなきかにあそぶいといふ、とあり、但寬永の刊本には、あそぶいとゆふとありと云へり、かく云へるに驚きて、一とせ古筆了伴より柳營に奉れりし、公任大納言の眞蹟といふ本、幸ひさきに比校して置しを、取出て披き見るに、其眞本も亦あそぶいとゆふとありて、それを墨もてけちたるかたへに、同筆にてあそぶとり見ゆとあり、按ふに諸本に遊ぶいと見ゆとも、あそぶ絲ゆふとも見ゆる事は、あるかなきかにと云ふ四の句にひかれて、ふと書僻めしがひろまれるにはあらじか、されば彼古鈔本にあそぶとり見ゆとあるかたも、しかすがに捨がたく、流布本のみには據がたければ、さのみ的證ともいひがたかるべし、

〔萬葉集一雜歌〕輕皇子宿于安騎野時、柿本朝臣人麻呂作歌、
東野炎立所見而反見爲者月西渡、

〔萬葉集二挽歌〕柿本朝臣人麻呂妻死之後、泣血哀慟作歌二首幷短歌、○中略
蜻火之燎流荒野爾、白妙之天領巾隱、○下略

〔萬葉集十春雜歌〕詠鳥

後守爲忠造進也、爲忠叙二正四位下一とあると、外記日記、久安四年正月十三日の條に、故丹後守爲忠入道と見えたるに依てなりかし、さて又保延より六十年許後なる六百番歌合（按するに建久五年に偁れり）に、此題を出されたるには、大方は絲ゆふとのみ詠れて、遊ぶ絲とよめるは少なし、か丶れば遊ぶ絲の方よりも、絲ゆふはすこし後なるが故に、不審とは云へるにこそあれ、さて此もの丶名義を、賀茂翁の説（圓珠庵雜記首書）に、いとゆふは遊絲を後の世の人の、強てこ丶の語めきて云し俗語なるべし、もし又古へより云たらば、絲木綿（ユフ）の意にて、ゆふの絲に見なしたるか云々といはれたるは、まづはよろしげに聞えたる物から、猶よくおもふに然るべからず、春村（○黒川）つら／＼稽ふるに、空穗物語祭使の卷（二十二右）に、かくゆふぐれに（按するに六月つごもりがたなり）きむだちみすあげて、いとゆふのみき帳ども、たてわたし云々とあるは、陽炎をいふ絲ゆふにはあらねど、此名の物に見えたるなるべし、さて是を故細井貞雄が比校せし古鈔本には、いとゆひのみき帳とあり、是に依てはじめてしりぬ、絲ゆふは原絲ゆひなりしを、よこなまりたるものになむありける、凡て几帳は一幅一幅の上に、絹の平縫の細紐をたれたると、又絲を幾筋も結びたれたると二様ありて、其絲をゆひたれたる方を、絲ゆひの几帳とは云なるべし、但是を訛謬て、絲ゆふと呼なれたるも、既くよりのならひと見えて、祭使の流布本には去か見え、榮花物語音樂の卷（五右）にも、いとゆふなどのすそごの御几帳、むらごのひもぐして云々と見えたり（根合卷四十六左に、紅のうちたるふたへもんのうはぎ、いとゆふのもからぎぬ云々とも見えたり、猶考ふべし、）猶雅亮裝束鈔下に、絲ゆふむすびの狩衣とあるは、其露の絲を云へるなるべし、（○註略）借又陽炎を絲ゆふといふは、上件の絲ゆふによそへて、呼そめし物なるべし、さるは此陽炎の異名を、遊絲といへるに由あればなるべし、但しまことの和名は、萬葉にかぎろひと見ゆれど、中昔はかげろふと呼びしを、白河帝の御世などにても有べし、又絲ゆふとも名付そめたり、此ほどにやとおもはる丶、ゆゑは、狹衣卷一之上（二十右）に、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、びんづらゆひていひ

頭書 眞淵云、かげろひは本はかげろひ火なり、古事記に難波の宮に火つきたるを、かぎろひのもゆるいへむらとよませ給ひ、萬葉にかげろひのたゞ一目のみ見し人とも、かげろひの岩がきふちともよめるも、はしり火石の火なり、また萬葉に東の野に炎（カゲロヒ）の立ちみえてとよめるは、明くる天の光なり、かげろひの夕さりくれば、かげろひの日もくれ行かばとよめるは、夕日の光なり、かげろひのもゆる春とよめるは春の陽炎なり、俗にいとゆふと云ふ、又蜻蛉をもかげろひといへば、萬葉にかげろひてふ所にかりて書ける多し、然ればかく多きが中に、火と日と陽炎と蜻蛉と四つありといふべしや、蜉蝣をかげろふといへるはいと誤なれば、數には入れずて、誤のよしはいふべきなり、又古事記にかぎろひといひたれば、きとけとは通はしいふべけれど、下のひをふといふはよろしからず、

〔碩鼠漫筆六〕絲ゆふ考　清水濱臣の撰字造語鈔云、按ずるに、遊絲は古く絲ゆふとのみ歌によみ來れるを、此永久四年百首には、七人みな遊ぶ絲とよめり、是より先にありしや、大方見あたらぬやうなり、遊絲の字にすがりてよめれど理り協はず、近頃の歌には凡てよむことながら、心あらん人は庶幾すべからぬ事にこそ以上と、見えたるをおもふに、古く絲ゆふとのみ歌にもよみ來れりと云へるは、いともいとも不審き說なり、そもそも遊絲を歌の題とせしは、此永久の百首よりさきには、いまだ見もおよばぬ事にて、これぞ又絲ゆふとよめるは、今すこし後なるべし、さるは丹後守爲忠朝臣百首に、野外遊絲の題見えて、例の遊ぶ絲とよめる歌四首あり、按ふに、こは永久百首にならへるなるべし、さて其外に今一首兵庫頭源仲正うた野邊みれば春の日暮の大空に雲雀とともに遊ぶ絲ゆふ、とよめるありて、これ絲ゆふとよめる歌の根源とおぼしきなり此爲忠家百首は、一題八首の例なれど、遊絲の歌のみは以上五首ありて、三首缺たり、此百首詠ありし時代は、永久より二十年許後なる、保延の頃なるべし、さか思ひとらるゝ故は、長承三年十二月十九日、中右記に、今夕院渡御三條烏丸新御所云々、丹

〔倭訓栞前編六〕かげろひ　かぎろひとも見ゆ、陽燄をいふ、影る日の義也、野馬も遊絲も同じ、萬葉集に炎字をもよめり、火影也、かげろひてとはたらかしてもいへり、古事記にかぎろひのもゆる家むらとよみたまふは、人家の火炎をいふ也、萬葉集にかげろひのもゆる荒野といへるは、荒野によれば葬火也、

かげろふ　中比よりかげろひを轉じたる詞也、かげろふのもゆる春などいふは、楞伽經にいへる春時燄也、雲にかげろふなどいふは陰する意也、ろふ反る、かけると同じ、古事記の歌に、夕日のひかげる宮と見えたり、祝詞には夕日の日隱處とあり、菅家萬葉集に遊絲をよめり、かげろふのそれかあらぬかとよめる是也、詩にも天外遊絲或有無と見えたり、かげろふのあるかなきかなどいふは蜻蜓をいふ、倭名鈔、日本紀に見ゆ、童蒙抄に、黑きとうばうのちひさきやうなる物といへり、今も蜻蜓の一種極めて細小なる物をいへり、本草にも蜻蜓言其狀怜仃也とみえたり、水邊の木陰にすみて、その飛貌の欵々と水に點じ、閃々と電のごとくなれば、陽炎に比していへるなり、萬葉集に蜻火とも玉蜻とも書て、かげろひとよめる也、かげろひの磐垣淵とつゞけたるも此義なるべし、玉蜻は蜻蜓が目を土に埋おけば、青珠となるよし、博物志に見えたりとぞ、又熒火の一名蜻蜓眼といへる事、家瑞記に見えたり、蜉蝣をいふは、蜻蜓より轉じたる也、

〔倭訓栞前編三〕いとゆふ　遊絲をいふは、春の頃、長閑き空に亂れて、糸の如くちら〳〵と見えわたるものをいふ、又あそぶ草ともよめり、野馬も同じ、

〔圓珠庵雜記〕かげろふに三つあり、野馬と蜻蛉と今ひとつは、ゆふぐれに命かけたるなどよめるやう蜉蝣にやと覺し、されどそれをば和名にも、ひをむしとのみいへり、萬葉にかげろふの夕とつゞけたるは蜻蛉なるを、よくも見ずして、かげろふといふ名のはかなく聞ゆれば、ひをむしの別名かなど、思ひたがへてよみなしけるにや、

陽炎

〔千載和歌集雜十六〕室の八島をよめる　藤原顯方

たえずたつむろの八島の煙かないかにつきせぬおもひなるらん

〔閑田次筆一〕室のやしまに立煙は、よゝの歌にきこゆ、しかるに其所を貝原翁の日光の記の附錄に、金崎といふより一里半にして總社村あり、林のうちに總社明神のやしろあり、是下野國の總社なり、其前に室の八島あり、小島のごとくなるもの八ッありて、其廻りはひきく池のごとし、今は水なし、島の大きさいづれも方二間計、其島に杉少し生たり、此島の廻りの池より水氣烟のごとく立のぼるを賞しける也、其村の人あまたに問けるに、今は水なきゆゑ煙もたゝずといへりと記さる、しかるに此頃かの國の士の一說を得たり、これは一所にあらず、島と號る所八村倶に都賀郡にて、鯉が島、高島、萩島、大川島、卒島、曲の島、沖の島、仲の島等也とぞ、いづれか是なることをしらねど、見きくまゝに記す、さて煙ははたして水氣歟、又里の煙歟しらず、室といふは若一所ならば總社村の古名歟、都賀郡の所々をいふとならば、郡內にて室といふ總名ありしにや、辨ふべからず、室といふ名も煙によしあり、

〔書言字考節用集一乾坤〕絲遊（陽炎也）　陽炎（智度論疏、陽春之月、有日光風飄塵、之名爲陽炎、此名爲野馬、）　野馬（同、事見莊子）　遊絲（同、又云黑絲）

〔古事記下履中〕爾阿知直白、墨江中王、火著大殿、故率逃於倭、爾天皇歌曰、（略）○歌到於波邇賦坂、望見難波宮、其火猶炳、爾天皇亦歌曰、波邇布邪迦、和賀多知美禮婆、迦藝漏肥能、毛由流伊幣牟良、都麻賀伊幣能阿多理、

〔萬葉集抄十二〕かげろふとは、春に成ぬれば、日のうららかにてりたるに、ほのほのもゆるやうに見ゆる也、いとゆふなど云もおなじ事なり、虫のなかに蜻（かげろふ）のちいさきやうなるを、かげろふと云ことあれども、それは別のものなり、それはおぼろげにもみえず、ふかき山のこもりぬなどにぞ侍るなる、今の歌にも蜻火之（かげろふの）とかきたれども、これはことばのおなじければ、假字にかきたる也、

室八島烟

因不復往而還、既而比及子刻、村民皆歸其舍、後有復出望之者、山巳無有、有識者曰、此所謂蓬萊山者也、村民中或傳有望睹其山旁有龕者、然此事非衆所彰見、是以不敢言云、

記越中魚津浦蜃海市事

越中魚津浦孟夏之月、常現海市、晴日無風薄雲罩天之日則必見之、風生則雖見而忽復息、見之之初常必先起自滑川、滑川去魚津三里、而將見之時、其岸際林木皆化成其物、其間長可六丈、其餘一二里間、則樹色悉成至黑色、而海市之生、初先如數柱並植者、而其柱形亦數斷不全、既而稍當其東生如樓櫓者四五處、其高者可二三仞、又生城墻高可六尺、墻見如白壁、白壁之間特透明、舟帆來者映見于其中云、寛政九年夏四月十三日、生始未刻至於申下刻而息、是日午時金澤侯襲到此地、適見海市、因令扈從諸臣皆出觀之、蓋百年前侯始祖某公之時、嘗到此見海市、而某公年至八十、是以今公亦喜以爲吉徵、是日大坂和田隆侯幹僕稱成政者、適亦客寓在其地而親觀之云、成政前此凡三見之、並皆朦朧不明、獨此日所見爲鮮明、魚津之地當能登東十二三里、而海市唯在魚津、及其近邑巖瀬五里之間見之、能登海上之人不能見之云、海市又有時變幻不一、金澤士人加藤維明者、嘗見其成松樹驛道、前田采者嘗見其松樹中有一柳樹、而其上植竹竿、以曬一汗衫者、野村貞英乃嘗見其成一長橋、此三士皆嘗來爲魚津宰、是以見之云、又云、魚津工人乃皆云、魚津近國無有如此城墻樓櫓松樹長橋者、疑是空氣攝近江勢多城松樹長橋之景、以寫作此海市也、

〔詞花和歌集 七〕題しらず　藤原實方朝臣

いかでかはおもひありともしらすべきむろのやしまの煙ならでは

〔袖中抄 十八〕むろのやしま　顯昭云、○中略むろのやしまとは、下野國の野中に島あり、俗はむろのやしまとぞいふ、室は所名歟、その野中に淸水の出るけのたつが、けぶりに似たる也、是は能因が坤元儀に見えたる也、○下略

地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風の如くに見る、魚津の海は東よりの入海なり、海中より蒸登る陽氣、向ふの山に映じて、色々の形を見るなり、向ふに當なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣のぼるといへども、向ふの當無ければ映ずることなくして、人の目に見えがたしとぞ覺ゆ、伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内には、たま〳〵蜃樓を結ぶ事ありといふ、是も向ふに尾張三河の山を受てあるゆゑなるべし、又安藝國にてもたま〳〵は有りと云、是も向ふに山あり、其外の國にては蜃氣樓をむすぶ事はまだきかず、奇を好む人は、三四月の頃、越中に遊びて此樓臺を見るべき事なり、

〔嚴島圖會二〕蓬萊巖　聖崎をはなれて海水のうへにたてり、巖上に古松數株ありて海風にもまれ、容姿おのづから造りなせるがごとし、世に畫がくなる蓬萊山といふものに似たり、故に名とす、また別に蓬萊と稱するものあり、三四月の頃、風恬かに波穩かなる時、此處より浮出づ、その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし、其上松柏生茂り、或は宮殿樓閣の象ありて、其莊嚴たぐへん物なし、光明海上に彩きわたりて次第に消滅す、いまも往々是を見る人あり、多くは丑日に現ずといふ、その由緣を知らず、近世橘南谿が著せる西遊記に、安藝國に蜃樓ありといへるは、恐らくは是をいふなるべし

〔淇園文集記十一〕記伊豫嘉島浦夜海市事

伊豫嘉島浦去宇和島藩城西海岸可六里、寬政元年己酉十二月晦日夜亥刻、海上距岸三四百丈外有一小山浮出、浦民有龜松者初先見之、因呼其弟岩松出來指示見之、既而居民傳聞、遂盡出觀之、其山高可四丈、山頂有火三塊、其長可二尺橫一尺、其光如燃薪、其左右火著山而不動、中央一火離山而升降不定、山下水際又有數百火、相連成列、亦如篝燈、其火光照耀以映見、其山腹上下數處彷彿頗有樹木者、然亦不分明、村民中有膽勇者、棹舟往求之、離岸既三四百丈許、其所見與岸上所望遠近無異、

レドモ、樓閣ノ形象ヲナスハアヤシムベシ、

〔東遊記 三〕蜃氣樓 唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる、蜃樓といふことあり、又海市ともいふ、○中略 我國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此蜃氣樓は甚稀なり、只越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして風收り、海上霞渡りて、一面の鏡の打曇れるがごとき日に、此蜃氣樓をむすぶ、毎年一兩度、或は多き年は、三四度も結ぶ事あり、殊に唐土の人のいへる如く、海上に煙の如く雲の如く、次第にむすび來りて、遂には樓臺の如く、或は城廓の如く、人馬往來せるが如きも、歷々然として見ゆ、北地に我親しく交りし、宮島式部大夫と云社人は、折よく魚津にて是を見たり、初は幕を引るが如くなりしが、しばらく見る間に、城廓の如く、矢倉高塀やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫する間に、松原の如く、繪に書る天の橋立などのやうに見えし、夕暮に及び風少し出たれば、漸々に消失て跡かたもなくなりしなり、富山よりは纔に六里を隔てたる所なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶもしれがたく、又むすびたる時、急に人して告しらすにも、其間には消失て見るべからず、此ゆゑに魚津近所の海邊の人は、例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯つひに見ざる人多し、余○南谿橘が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して、蜃樓を見るべしと、人々にすゝめられ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし頃は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せん事、あまり永々しければ、殘念なりしかども、見ずして越後にこえたり、越後の糸魚川にて、松山茂叔に此事を語りしに、此人も糸魚川の海中遙に山の出來たるを見たり、漁人のいひしは、これは靈山といふものにて、折々見ることなりといひしと語られき、余初め唐人の作れる詩杯を見て思ひしは、蜃樓は大洋にある事にて、陸地近き入り海には、なきことのやうに心得しが、魚津の地理を見るに左にはあらず、魚津は北海に臨める

蜃氣樓

〔書言字考節用集 一乾坤〕蜃樓（カヰヤグラ カイロ）（蜃者介蟲蛟之屬、春夏間嘘氣成樓臺城郭之狀、又謂之海市、）

〔ねざめのすさび 二〕蜃氣樓　本草云、蜃蛟之屬、其狀亦似蛇而大、有角如龍狀、紅鬣、腰以下鱗盡逆、食燕子、能吐氣、成樓臺城郭之狀、將雨卽見、名蜃樓、亦曰海市、（史記天官書、海旁蜄氣象樓臺、）其脂和蠟作燭、香凡百步、烟中亦有樓臺之形、としるせり、しからば海中にて氣を吐ものは、蛟の如きかたちせる蜃といふものなり、大なる蛤をも（四川如見、怪異辨斷云、蜃は大蛤と訓ず、然れども今俗云、蛤蜊の義には非ず、兎角大なる貝と見えたり、其貝の息を吐出すに、日の光に映じて、樓臺の象現するものなりといへり、）蜃といへるより混じて、おぼえたる人の、蛤のうへに樓臺のかたをゑがきたるを見て、蜃氣樓なりといへるはあやまりなり、さてかの蛤に樓臺をとりあはせてゑがきたるは、繪師のあやまりならず、別に故事ある事なり、金藏經に云、佛在瞻波國迦羅池邊、爲衆說法、一蛤草下志心聽受、有人持杖悞中蛤頭、尋卽命終、生於天上、感其宮殿廣十二由旬、得宿命通、知曾爲蛤、乃乘宮殿禮佛報恩とあり、もと死したる蛤の魂氣天にのぼりて、宮殿を見るさまをゑがきたるを、蜃樓と見あやまりたるは、笑ふべきことぞかし、

〔閑散餘錄 上〕蜃氣ノ樓臺ヲナスコト、和名ヲナガフトイヘリ、長門ノ海中ニマヽアリト聞リ、吾州ノ伊勢ノ海モ、昔ヨリ其名アリ、二三月ノ頃、天氣暖和ニシテ、風浪ナキ日ニ多クアラハル、ナリ、コレ蛤蜊ノ氣ナリトイヒ傳ヘ、然レドモ蜃ト蛤蜊ト同ク介類ニシテ別アリ、コトニ桑名ハ蛤蜊ニ名ヲ得タル地ナレドモ、ナガフノ見ユルコトヲ聞ズ、但羽津楠邑等ノ海邊ニ多シ、吾友ニ楠邑ノ南川トイヘル里ニ、山本勘右衞門トイヘル老翁アリ、コノ人ハ弱年ノ時ヨリ兩度見タリ、後ニ見タルハ樓閣ノ中ニ、種々ノ飾リアリテ、甚奇巧ナリシト物語セリ、羽津楠ナドニモ蛤出レドモ、桑名ニクラブレバ寡シ、然レバ蛤ノ氣ニテナレルニハアラザルベシ、楠ノ南一里バカリニ鄕アリ、其名ヲ長太ト書テ、ナカフト訓ゼリ、蜃氣ニ因テ名ヅケタルナルベシ、天地ノ間ニハ理外ノ事多シ、虹ノ日ニ映ジテ青紫ノ色ヲナスガ如ク、海中ノ春和ノ氣日ニ映ジテ、色ヲ現ズルナルベケ

實否難存知者歟、賚俊國繼狀云、爲赤氣云云、廣賚狀載火柱之由、對馬前司倫重爲奉行、讀申彼狀等訖、前武州被整之、付爲佐、行義康持、進覽御所給、被待彼三人歸來之程、面々以詞及相論、晴賢難申云、可被處天變者、火柱之由載泰貞狀、頗不足言也、當道不定申者、上方爭可被知食天變實否哉云云、前武州被大甘心給、此間件三人自御所歸參、傳申仰云、可爲變異者、自京都可申歟、其時可有御沙汰之由云云、　卅日戊子、去四日赤氣事、於都鄙彗星出現之由風聞、自一條殿御書到來之間、以泰貞晴賢等注進狀、明曉爲被進京都、被經御沙汰云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年三月十四日甲戌、去比、信濃國諏方社頭湖大島并唐船等出現、片時之間、如消而失云云、此事無先規之由、社家驚申云云、

〔嶋嶺雜事記〕應安三年十月八日、戌刻ヨリ赤色ノ氣、北ニ當テ天ニ見テ、夜半ニ及ブマデ有之、其體燒亡ヲ見ガ如シ、諸人希異ノ思ヲ成了、先年嵯峨ニテ見エタリ、　十一月六日夜、子丑寅剋ニ、赤氣北ノ天ニ現ズ、深赤色先々超過、諸人目ヲ驚ス、白色黑色等ノ大小ノ筋、赤色ノ上ニ南北エ光明ノ如ク現ズ、希代ノ形色也、　四年九月、兩夜赤氣又天ニ見ユ、

〔一話一言十一〕赤氣　赤氣長凡九尺餘、幅五寸許、地ヨリ離ルヽコト五六丈、以上皆下ヨリ見計ラセテノ寸尺也、　酉ノ半刻頃ヨリ戌ノ刻ニ至テ消ル、遠近ハハカリガタシ、　關宿城中ヨリ見渡セバ、戌亥ノ方ヨリ、少シ子ノ方ヘフリテアラハル、其色眞ノ朱ニシテ、上下共ニボットクマドリタル・ヤウニ見ユ、是ハ赤氣ト云モノニテ、古來ヨリ異國ニテモ度々有事也ト、マタ赤キハ陰氣ノ壯ナル所ヘ出ルハ、全ク陰氣ノコリタルモノニテ、明日ハ大雨ナラント云シガ、少シ曇リタル由也、又古河關宿ヨリ三里ニテモ、同樣ニ見ヘシト云リ、右段々上下ヨリウスクナリテ消シ、　安永九庚子年十二月十二日夜也　關宿侯久世隱州臣、池田正樹權左衞門記ニアリ、

〔武江年表九〕安政二年七月、南の方月下に白氣現る、十一日夜四時殊に鮮なり、

〔百練抄高倉八〕嘉應二年十月廿七日、西方有赤氣、　十二月廿七日、四箇條仗議、〇中略諸道勘申赤氣事、承安元年正月廿二日、南方有赤光、其勢如車輪、
治承元年十一月廿三日、近日有赤氣、

〔吾妻鏡九〕文治五年三月卅日壬申、白氣經天、貫北斗鬼星、長五丈餘云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年七月十九日丙申、風雨雷鳴甚、亥剋聊屬晴、自西山赤氣立及半天、其色赤白、西晷雲隱、東映明月、而或明或隱、少時而消畢、至曉更又甚雨、　廿八日乙巳、後藤左衛門尉基綱爲奉行、陰陽輩召集御所、天變之事被尋下之處、泰貞、宣賢、非白虹之由申之、親職、晴賢、爲白虹之旨言上云云、　廿九日丙午、親職、晴賢等、白虹勘文捧之、後藤左衛門尉基綱付之畢、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年四月廿三日壬戌、天霽、戌剋乾方有妖氣、光芒異長八尺、廣一尺、色白赤、雖無本星、其光映天如野火、御所中上下見怪之、經一時消訖、　廿六日乙丑、光之妖氣出見、軸星有無及天相論云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年二月四日壬戌、戌剋白赤氣三條出現、件變消、其東傍赤氣又出現、長七尺、彼變滅、猶西傍赤氣一條出現四尺、觀之惟之、泰貞朝臣最前馳參御所申云、此變爲彗星形、異名火柱也、村上御宇康保年中出現、同變云云、次晴賢、廣資等參上、晴賢申云、今夜依陰雲諸星不分明之上者、非可窺得彗星之類、且又無軸星、旁有不審、以晴天之時可伺定云云、廣資同泰貞之說、仍各聊靡及相論、猶不一決云云、　十六日甲戌、去四日天變事、依仰前武州召聚天文道之輩、令尋問給、前武州祗候持佛堂廣庇、太宰少貳爲佐、出羽前司行義、加賀民部大夫康持等在其座、泰貞、晴賢、資俊、國繼、廣資等參入、被尋仰云、去四日赤氣事、可相尋實否之旨、所被仰下也、各可注進所存、就其可問答是非者、面々注進之、泰貞狀云、依陰雲分明不窺究之、但可被處天變者、火柱之形歟者、晴賢狀云、推古天皇廿八年、幷天慶二年、元永五年有赤氣、彼三箇度赤氣已同今度氣、但有野火疑等云云、此條不見伺彼所々之間、

雜載

〔後深心院關白記〕應安五年八月四日戊寅、盛深僧正送狀云、小童去月廿六日移住一乘院、目出之由示之、次同廿四日辰剋自金堂艮角虹吹上坤方、滿寺驚之、自廿五日三ヶ日間立市之由同示送也

〔兎園小說 四集〕虹霓○中略　虹霓の立ちて西に有るは明日必雨降り、東に見ゆるは必風吹く、切れ切れに光り散るは風起る、日暮に東南に見ゆるは天風なり、

氣

○

〔日本書紀 二十二推古〕二十八年十二月庚寅朔、天有赤氣、長一丈餘、形似雉尾、

〔日本書紀 二十九天武〕十一年八月壬申、是日、白氣起於東山、其大四圍、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲十月丙申、有白氣貫日、

〔日本紀略 桓武〕延暦十一年正月甲申、白氣貫日、

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年七月丁未、大極殿龍尾道上有雲氣、狀如烟、須臾竭滅、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年六月丁丑、是夜有赤氣、方卅丈、從坤方來至紫宸殿之上、去地廿許丈、光如炬火、須臾而滅、

〔續日本後紀 十七仁明〕承和十四年六月乙巳、此夜月暈之外、有白氣繞之、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年二月十一日丁酉、有赤黃白氣、形如車輪繞日、

〔三代實錄 九清和〕貞觀六年十月七日庚申、夜北山有光如電、又朱雀門前見赤光、長五尺許、

〔三代實錄 二十五清和〕貞觀十六年四月廿四日壬子、非霧○霧、一本作雲、非霞、黃赤色氣、延蔓蔽天、

〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年五月十六日丁酉、夜有雲氣竟天、形如幡、頭掛西山、尾掛東山、

〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年八月二日乙丑、夜有光、見紫宸仁壽兩殿之間、

〔永昌記〕天永元年三月十一日己酉、近日瘧煙竟發、仍今朝始大般若幷六字法、

〔本朝世紀〕久安六年九月十六日己丑、今日寅剋、天北方幷西方有赤氣、如野火、

虹見處立市

〔甲子夜話八十〕詩集傳蝃蝀ノ章、蝃蝀在東ノ註ニ、蝃蝀虹也、日與雨交、倏然成質、似有血氣之類、乃陰陽之氣、不當交而交者、蓋天地之淫氣也、在東者暮虹也、虹隨日所映、故朝西而暮東也ト見ユ、然ルニコノ六月廿日ノ夜亥刻納涼シテ端居セシニ、虧月東方ニ皎ラカルニ、西天ニ白虹空ヲ亘ル、予〇松浦清左右ヲシテ、其狀ヲ審ニセシム、報ジテ曰ク、白虹ノ中青虹交ルト、然ラバ夜ノ虹ハ月ニ映ジテ形ヲ爲スコト、晝ノ日ニ映ズルト同ジ、左右數人皆未ダ曾夜虹ヲ見ルコトナシ、一人ハ嘗テ見ルコトアリト云、詩註ハ晝虹ヲ云タルナリ、

〔日本紀略後一條十四〕長元三年七月六日丁巳、今日關白〇藤原賴通幷春宮大夫家〇藤原賴宗虹立、依世俗之說、有賣買事、

〔百練抄五堀河〕寛治三年五月卅日、上皇〇白河六條中院前池虹立、可立市之由、雖有議、公所依無先例、被止之、上皇渡御他所、

〔中右記〕寛治六年六月七日己未、雨下或得晴、申時禁中〇堀川院殿上小庭、幷南池東頭、有虹見事、則召外記被問先例、大外記定俊勘申前例、承平、康保、正曆、長元年中、度々禁中虹立、隨御卜趣、或奉幣、或讀經者、但不被行軒廊御卜也、仍同十日、召陰陽頭賀茂成平有御卜、占云、御藥事頗非輕者、候藏人所陰陽師道言朝臣近日有假不出仕也、仍次人召陰陽頭成平於便所、有御占也、抑世間之習、虹見之處立市云々、若是本文歟如何、件由內々被尋諸道紀傳〇文章博士敦基朝臣、同成季朝臣、此外正家、行家朝臣、依爲上﨟也、明經陰陽道〇道言朝臣已上六通、今日虹又賀陽院立也、而長元年中、宇治御時、此處有虹見事、被立市也、仍後被立市也、御占同大內、仍禁中殿下御物忌合也、　八日、諸道勘文、皆虹見之處、無立市之文、是只俗語歟、　廿二日甲戌、今日又賀陽院殿、有虹見氣、〇同廿五日重被立市

〔百練抄五堀河〕寛治六年六月廿五日、高陽院立市、依虹蜺立也、先令諸道勘申、

〔百練抄六崇德〕保延元年六月八日、中宮廳前立市、依虹見也、

久壽二年七月十四日己未、未剋虹見家南庭泉、大驚怪、余(○藤原頼長)曰、漢靈帝時、虹見御座玉堂後殿庭中、翌日大内記遠明進勘文、

〔愚昧記〕承安三年六月十日辛未、今夜有白虹之變、奏親大驚云々、予(○藤原實房)退出之間也、

〔玉海〕壽永二年十月十七日戊申、天晴、卯剋虹二筋(其色如常、俱雖分明、)自坤至艮、又東天赤光云々、

建久元年十二月十九日己亥、早旦業俊來云、去夜白虹有貫月事云々、　廿日庚子、召司天之輩問曰、白虹變事皆悉申白虹之由、資元一人申非白虹之由、不可說云々、各被申狀付宗頼畢、明旦可奏之由仰之、又御祈之間、事可奏之由示了、　廿一日辛丑、此日三合御祈廿二社奉幣也、上卿大臣行事辨親經、宣命辭別載白虹變事、及晚宗頼自院歸來仰御祈事等、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年六月八日戊申、晴、東方見白虹、但片雲競、衆星希、及夜半雨降、　十一日辛亥、卯剋西方見五色虹、上一重黃、次五尺餘隔赤色、次青、次紅梅也、其中間又赤色甚廣厚兮、其色映天地、小時銷、則雨降、

〔百練抄十四四條〕文曆元年十月十五日庚辰、卯時東方虹、司天輩申白虹之由、維範朝臣申不然之由、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年(○寬元元年)十二月廿九日辛丑、天霽、午一點白虹貫日、將軍家被御覽、諸人又見之、日脚昇半天、未四剋此變訖、召司天等、直被尋聞食、就上座先泰貞申云、董虹先々有相論、至今度無所変、但有雲於貫日之條者、眼精不及云云、晴賢申貫日之由、國繼、晴茂、廣資等、一同申白虹之旨、武州參給、其後於御所南庭、被行七座泰山府君祭、

〔百練抄十六後深草〕寶治二年閏十二月十六日己未、有天變、天文博士晴繼朝臣申、白虹貫日、權天文博士良光朝臣、主計助淸基朝臣等、有珥雲之由奏之、大膳權大夫維範朝臣不見及之、如聞者日蝕歟之由申之、

〔武江年表八〕天保十四年二月六日夜より、毎夜西南の方へ白虹顯る、

消亡、人亦見虹飲内兵庫安福殿、即是也、同時見之計一虹光彩、所映見兩所也、

〔日本紀略 一醍醐〕寛平九年八月七日庚戌、太政官正廳東廳、虹蜺見、

〔貞信公記〕承平二年八月十三日、未三剋、虹立日華門前官廳、

〔本朝世紀〕天慶二年六月十五日乙酉、今日未剋、内膳司供御辨備棚上虹立、同時左衞門陣櫻樹下、作物所政所前虹立、此間雷雨烈降、

〔扶桑略記 二十六村上〕天德五年〇應和元年五月卅日、酉時白虹經天、

〔日本紀略 四村上〕康保二年二月廿七日戊辰、出羽國言上、正月八日未時、日之左右有兩耀、即虹貫之、又有白虹、分立東西、仍下陰陽寮、令占之、

〔日本紀略 五冷泉〕安和元年八月十九日庚午、白虹亘天、

〔日本紀略 九一條〕正暦五年九月八日丁巳、今日外記廳前捴版位、虹立、有御卜、

〔左經記〕長元七年十一月十二日戊戌、大外記頼隆眞人相示云、昨日未剋、外記廳前立虹者、而六位外記等、乍見聞其由、不申事由、仍上卿著廳有政、　十三日己亥、早旦自大夫外記許相示云、廳虹恠、令卜三人、陰陽師助時親、孝秀等卜云、非恠、自然所致也者、允恒盛卜云、恠所寅申卯酉年人、就病事出家歟、若又有刀兵之厄歟、期恠日以後廿五日内、及明年二月八月九月節中、並壬癸日口至、期忌愼、兼又被祈禱、無其咎乎者、而昨日同時、關白殿又立虹、同孝秀時親等卜申云、病事可愼御者、仍殿仰同恠人々卜、其趣各異也如何、儻召問件人々、可令奉各勘文者、召問件者等、令進勘文、申殿下可一定之者、　十二月十五日辛未、今日於外記廳、以十口僧、一箇日轉讀仁王講、是依前日虹恠也、施供、(許家納絹卅三匹、各調布三端、二口年料米卅三石、是依先例、大外記頼隆眞人所申請云々、)

〔扶桑略記 三十堀河〕寛治六年八月廿八日己卯、未時虹遶日輪、

〔台記〕久安四年六月八日甲午、戌剋詣石山、密祈女御代事、路間蝃蝀在東、可謂吉祥、

見エ、ソラノ日ノ勢ヲ見レバ、ワヅカナル日輪トオモヘドモ、カゲニウツス時ハ、ヲビタヾシキ也、五十一由旬ノ輪ノ形ヲウツセバ、イカホド大ナリトモアヤシムベキニアラズ、日本紀ニハ虹ヲバヌジトヨメリ、ソレヲ今ハニジト云ヒナラハセリ、和語ノ古今ニオナジカラザル事、コレニカギラザル歟、又鎮星散ジテ爲虹ト云ヘルコトモアリ、オボツカナキ事也、

虹出現

〔日本書紀 十四雄略〕三年四月、阿閉臣國見更名磯特牛譖栲幡皇女、與湯人廬城部連武彥曰、武彥汙皇女而使任身、湯人此云臾衞武彥之父枳莒喩聞此流言、恐禍及身、誘率武彥於廬城河、僞使鸕鷀沒水捕魚、因其不意而打殺之、天皇聞遣使者案問皇女、皇女對言、妾不識也、俄而皇女齎持神鏡、詣於五十鈴河上、伺人不行、埋鏡經死、天皇疑皇女不在、恒使闇夜東西求覓、乃於河上虹見如蛇四五丈者、堀虹起處而獲神鏡、移行未遠得皇女屍、○下略

〔日本書紀 二十九天武〕十一年八月丙寅、殿內有大虹、　戊寅、是日平旦有虹、當于天中央以向日、

〔續日本紀 八元正〕養老四年正月甲子、白虹南北竟天、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年六月乙丑、有虹繞日、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜六年五月丙午、白虹竟天、

〔續日本紀 三十七桓武〕延曆元年三月辛卯、有虹繞日、

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁十年三月己卯朔、有虹貫之、

〔續日本後紀 七仁明〕承和五年十月戊戌、酉剋白虹竟西山南北、長卅許丈、廣四許丈、須臾而銷焉、

〔文德實錄 八〕齊衡三年八月丁丑、冷然院及八省院、大政官廳前、同時虹見、記異也、

〔三代實錄 十八清和〕貞觀十二年六月十日辛卯、是日夜白虹見東北、首尾著地、

〔三代實錄 二十五清和〕貞觀十六年四月七日乙未、時加未日有重暈、白虹貫日、卽日在胃、

〔扶桑略記 二十二宇多〕仁和五年○寛平元年十二月六日癸亥、作物所預宮興害大言、左近陣有大虹、見之、須臾

もさる事にや、西國にてゆふじといふは、夕虹の略にや、

〔物類稱呼一天地〕虹にじ　東國の小兒のじと云、尾張の土人鍋づるといふ、西國にていうじと云、萬葉ぬじ、又のすとも詠り、西國にていうじと云は、夕虹の略語か、

〔和漢三才圖會三天象〕虹蜺洪䗖　虹霓　蝃蝀　螮蝀　天弓和名之　月令云、季春月虹始見、孟冬月虹藏不見、蔡邕曰、常依陰雲而晝見於日衝、無雲不見、太陰亦不見、大率見朝西暮東、或云、赤白色者爲虹、青色者爲蜺、　釋名云、虹攻也、純陽攻陰氣也、　按、虹下于地、或飲井、或飲池、或垂首於筵吸飲食、雄曰虹、雌曰蜺之類、甚妄說也、天文書云、虹蜺日氣下垂、吸動地下之熱氣則旋湧而起、其處或値井或値池見之人以爲虹能吸水也、實非吸水、虹映日光之色爲紅綠也、紅者火、綠者水氣、而爲水火之交、故必向日方也、中天日光盛時無虹矣、試之日在東、使人西邊噴水、人從中間看之、其水珠皆成紅綠之象、其體穹然、外黃中綠而裏紅也、對日成虹、而他處復有一虹者、又虹影所自射也、有虹始見虹藏不見之期、見方必向于日、則非蟲屬明焉、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

伊香保呂能、夜左可能爲提爾、多都努自能、安良波路萬代母、佐禰乎佐禰氐婆、

右上野國歌

〔塵袋一〕一虹ト云フハ何レノ所變ゾ、蝤蜍ノイキ歟、

虹ハ日輪ノメグリノ半ヨリ上カヱ、クモニ映ジテミユル也、博聞錄ニ、虹霓ハ但是レ雨中ノ日影ナリト云フ、虹ハオニジ、霓ハメニジト云フコトアレドモ、イキ物ニアラヌバ、實ノ雌雄モアルベカラズ、サレドモ虫篇ヲシタガヘテ動物ニ思ヒナラハセルユヘニ、字對ニモ動物ニ用フ、實義ニハソムケリ、雲ノウスキ所ニ虹モウスクミユ、又影ウツロヒテ、別ニウスキ虹ノ見ユルコトモアリ、是レ等ヲアキラメニジ、オニジト云フ歟、日西ニアレバ虹ハ東ニアリ、カゲノウツリムカヒテ

郭璞爾雅注、如淳漢書注、皆同、蓋諸家析言之、趙岐統言之也、

〔段注説文解字十三上虫部〕虹螮蝀也、(釋天曰、螮蝀謂之雩、螮蝀虹也、毛傳同、)狀似虫、(虫各本作蟲、今正、虫者它也、虹似它、故字从虫、)从虫工聲、(戸工切、九部、)明堂月令曰、虹始見、(季春文)

〔段注説文解字十一下雨部〕霓屈虹青赤或白色、(或字陸德明作也、一曰三字非也、韵會白下無色字是也、屈當作詘、許書云、詰詘者、謂詘曲、屈非其義、許意詘曲之虹多青赤、或有白色者、皆謂之霓、釋天曰、螮蝀虹也、霓爲挈貳、郭云、雙出色鮮盛者爲雄、曰虹、闇者爲雌、曰霓、據此似青赤爲虹、白色爲霓、然析言有分、渾言不別、故趙注孟子曰、霓虹也、虹見則雨、楚辭有白霓、)霒气也、从雨(霓爲陰氣、將雨之光、故从雨、一从虫作蜺、猶虹从虫也、)兒聲、(五雞切、十六部、如淳五結切、郭璞五擊切、沈約郊居賦、雌蜺連蜷、深恐人讀爲平聲、)

〔干祿字書平聲〕蜺霓(上俗下正)

〔釋名一釋天〕虹攻也、純陽攻陰氣也、又曰蝃蝀、其見每於日在西而見於東、啜飲東方之水氣也、見於西方曰升朝、日始升而出見也、又曰美人、陰陽不和、婚姻錯亂、淫風流行、男美於女、女美於男、恒相奔隨之時、則此氣盛、故以盛時名之也、

霓齧也、其體斷絶、見於非時、此災氣也、傷害於物、如有所食齧也、

〔類聚名義抄十虫〕虹蜺(上音紅、又貢、又右巷反、ニジ、下音睨、虹蜺、メクル、)　蜆虹(ニジ)　螮蝀(正或)

〔下學集上天地〕虹(ニジ)霓(二字義同)

〔日本釋名上天象〕虹　には丹也、あかき也、しは白也、にじは紅白まじはれり、

〔東雅一天文〕虹ニジ　萬葉集歌には、ノズとよみけり、今も東國の俗にはノジともいふなり、倭名鈔にはニジと讀む、皆其語の轉なり、其義は不詳、(萬葉集に採讀てニといふ、ニといふは即採にて、シは助なりしに似たり、)

〔倭訓栞前編二十〕にじ　虹をいふ、丹の義、じはすぢの反也、又白虹も見ゆ、日本紀にぬじとよみ、万葉集にのじといふも皆通音也、今も東國の俗はのじといふとぞ、霊異記に電をよめり、埃嚢抄に、虹ををにじ、霓をめにじといふ事あり、博聞錄には、虹霓、但是雨中日影也と見えたり、又霏雪錄には、蟾蜍の吐し氣也といふ、備中の岡氏かゝりしを、まのあたり見しと話れり、虹蜺の字、虫に从ふ

るは雨晴れて風もなし、夏の風は稲光の方より來る、秋の風は光りの方へ向ひて吹くなり、

名稱

虹 氣　陽炎 併入

虹ハ、ニジ、又ハヌジト云フ、白虹天ニ亘リ、日ヲ貫キ、其他異常ナル事アル時ハ、祥災ヲト定セリ、又中世虹ノ見ユル所ニ市ヲ立ツルノ習俗アリ、

氣ハ、キト云フ、白氣アリ、赤氣アリ、光曜アルアリ、古ハ此ヲ占書ニ考ヘテ、災祥ノ應徵トス、氣ト云ヘル名ハ、甚ダ廣漠ニシテ、雲モ氣ナリ、霞モ氣ナリ、今此篇ニハ時アリテ空中ニ現ジ、別ニ其名ナキ者ノミヲ擧ゲタリ、而シテ方伎部天文道篇ニ望氣ノ事ヲ載ス、參看スベシ、又下野ノ室ノ八島ノ烟ノ如キモ、此ニ附載ス、

陽炎ハ、カゲロフト云フ、又アソブイト、イトユフノ名アリ、春晴ノ日、田野ノ間ニ見ユル所ノ氣ナリ、又武藏野ノ逃水モ陽炎ノ類ナルベケレバ、此ニ附載ス、

〔倭名類聚抄 一雲雨〕虹　毛詩註云、螮蝀虹也、帝董二音、螮又作蝃、和名爾之 兼名苑云、虹一名蜺、五稽反、與蜺同、又五結倪擊二反、今按、雄曰虹、雌曰蜺也、

〔箋注倭名類聚抄 一風雨〕按、天武紀虹字訓奴之、萬葉集上野國相聞往來歌、亦謂爲努自、一聲之轉耳、○中略 按、孟子趙岐注、霓虹也、兼名苑蓋本此、○中略 按、說文、霓屈虹、青赤或白色陰气也、又云、蜺寒蜩也、二字不同、後人虹霓之霓、連上虹字、變雨從虫、故干祿字書、倪霓上俗下正、遂與寒蜩字混無別、下總本擊作繫、按、五繫與廣韻合、五擊與龍龕手鑑合、伊勢廣本誤脫作五結擊二反、那波本作五結倪擊二反、蜺擊與古今韻會合、疑那波氏所見本亦誤脫、依韻會增蜺字也、曲直瀨本作五結反、無五擊二三字、亦恐後人所刪、雄曰虹、雌曰蜺、出蔡邕月令章句、見藝文類聚、又西京賦薛綜注、淮南子高誘注、

从申以申洩而爲電、月令云、仲春雷乃發聲始電、此月陽氣漸盛以擊於陰、故其光乃見、　萬寶全書云、正月朔日有電、主人有殃、夏秋之間、夜晴而見遠電、俗云熱閃、在南主晴、在北主雨、大暑前後有電、早稻薄收、晩稻必大熟、○中略　按、秋夜晴有電者常也、俗傳云、此時稻實故稻妻稻交名有之、天陰有電者、自其方必風有雨、凡將雷鳴時、必先電一々相添、電須臾有間則雷靜、無間者雷猛、

〔日本書紀三神武〕戊午年十有二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨氷、乃有金色靈鵄、飛來止于皇弓弭、其鵄光曄煜狀如流電、

〔日本書紀七景行〕四十年七月戊戌、天皇持斧鉞、以授日本武尊曰、○中略　今朕察汝爲人也、身體長大、容姿端正、力能扛鼎、猛如雷電、所向無前、所攻必勝、

〔日本書紀二十九天武〕九年六月丁巳、雷電之甚也、

〔古京遺文〕佛足石歌碑

伊加豆知乃、比加利乃期止岐、己禮乃微波、志爾乃於保岐美、都爾爾多具譽利、於豆閉可良受夜

〔古今和歌集十一戀一〕題しらず　よみ人しらず

秋の田のほのうへをてらす稻妻のひかりのまにも我や忘るゝ

〔古今和歌六帖一天〕いなづま

稻妻はかげろふばかり有し時秋のたのみは人しりにけり

〔萬寶鄙事記六占天氣〕電　秋晴天にいなづまあるはよし、陰りて電あるは其方よりかならず風來り雨そふ事あり、これを俗に火をうつと云、　夏秋の間夜はれて、とをくいなづま南に見ゆるは久しく晴、北にひかるはやがて雨ふる、　いなづま西南に見ゆるは明日晴、西北に見ゆるはやがて雨、　夏風は電の下より來る、秋の風は電にむかひておこる、

〔兎園小說四集〕虹霓○中略　稻光の坤の方に見ゆるは天氣はる、乾の方に見ゆるは雨降る、亂開す

電

〇

〔天文本倭名類聚抄二神靈〕雷公○中略 玉篇云、電音甸、和名伊奈比加利、一云伊奈豆流比、又云伊奈豆末、雷之光也、陰陽激燿也、

〔箋注倭名類聚抄一神靈〕按、以奈比加利、稻光也、以奈豆流比、稻交接也、以奈豆末、稻妻也、蓋謂初秋之際、陰陽激而發燿光、田家雜占云、夏秋之間、夜晴而見遠電、俗謂之熱閃、是也、稻穀以是時而實、故有是等之名、與電自別、雷電之電、宜訓伊加豆知乃比加利、見佛足石歌、後世混呼無別、○中略 玉篇三十卷、陳顧野王撰、所引文、今本無載、按、初學記引五經通義云、電謂之雷光也、即此義、

〔段注說文解字十一下雨〕電、霒昜激燿也、孔沖遠引河圖云、陰陽相薄爲雷、陰激陽爲電、電是雷光、按、易震爲雷、離爲電、月令雷乃發聲始電、詩十月之交、春秋隱九年、言震電、詩采芑常武、皆漢言雷霆、震雷一也、電霆一也、穀梁傳曰、電霆也、古義霆電不別、許意則統言之謂之雷、自其振物言之謂之震、自其餘聲言之謂之霆、自其光燿言之謂之電、分析較古爲愿心、雷電者一而二者也、从雨从申、雷自其回屈言、電自其引申言、申亦聲也、小徐本作雨申聲、堂練切、古音在十二部、讀如陳、

〔釋名一釋天〕電殄也、乍見則殄滅也、

〔類聚名義抄七雨〕電音甸、イナヒカリ、一云イナツルヒ、又云イナツマ、ヒカリ、ヒラメク、イナヽマ、和テム、 霆定亭挺三音イナヒカリ 霹靂

〔撮壤集上天像〕電 電母(ナンホ/イナツマ) 飛火(ヒクワ) 閃電光(センテンクワウ/イナツマ)

〔藻鹽草一天象〕稻妻 よひの稻妻 かよふ稻妻(いなづまかよふ) 稻妻のかげ 照す稻妻 稻妻の光(稻妻の光のまにもかはるこゝろなどよめり、はやくかはる心也、) 稻妻のわたる この間もひかる稻妻 雲のはつれに殘る稻妻 稻妻ほのかにめぐる 秋の稻妻 もゝかゞり(稻妻の事也と) ほのうへ照す稻妻 やどる稻妻 光みえさすよひの稻妻

〔東雅一天文〕電イナビカリ イナーとはイカの轉語にて、これも畏るべきの事なり、ヒカリは光なり、又イナツルヒともいふ、ツルヒとは出火(ツルヒ)なり、又イナヅマともいふは、もとこれ農家炎旱の日に、雷雨を得て、稻の胎まむ事を、おもひ望むより出し語なりといふ、稻妻としるせり、

〔和漢三才圖會三天象〕電(和名伊奈比加利、一云伊奈豆流比、又云伊奈豆萬、) 陸佃云、電陰陽激燿、與雷同氣、發而爲光者也、字

雨止之、

〔先哲叢談 六〕祇園瑜、又名正卿、亭名觀雷、自作之記、其意新語壯、足以想其非常之資矣、孰謂南海之才獨於詩也、記曰、予湘雲居丙方一亭、遠望得寸碧、螺黛煙鬟依稀雲際者、藤白也、藤白之山、西枕海磯、東連大嶺、迤邐數百里、夏月雷雨之過、大率從此方、其暑氣坱鬱、烈火鑠金、殷其之聲、杳起東偶、及景中狂颷捲沙、崩雲如影、暴雨翻河、襍以冰雹、乖龍恍惚反戰、金蛇萬道掣電劃壁、俄而霹靂破山、瞬息千里、香車轔轔、南走于海、於是開軒倚柱、坐以觀望、遠者八九里、近者二三里、我膽氣爲之鼓舞、飛輿揚揚、飄騰天外、其壯也雖觀戰於涿鹿之野、望潮於浙江之津、洞庭張樂、雲夢校獵、何能過焉、可謂宇宙第一奇觀矣、須臾雨止雲散、長霓飲海、凉蟾在天、爽籟吹鬢、洗盪灌魄、亦雷之賜也、因榜之曰觀雷、客有過覽而訝者、曰吁異哉、子之名亭、吾聞、雷天怒也、故聞之者、莫不怖而避也、聖人猶且爲之變、今子反以爲奇觀、無乃異於人情者耶、予笑而答曰、客亦所謂知一而不知其二者耳、雷本非天怒、古人既辨之、聖人戰兢之至、其戒愼豈惟雷耳哉、其既謂疾風迅雨亦必變、風雨豈是亦天怒也哉、夫雷也、天地間一物、與夫日月星辰、風雲雨雪、同是造化之使令、日月也、星辰也、風雲也、雨雪也、未聞有疑怪者也、獨至雷也、則疑以爲異物、怪以怖之、何其惑也、至後世腐譚之士、千言萬語以理說雷、亦是癡人語夢耳、吾觀古人文辭、有觀日之壇、有觀星之臺、有謂玩月者、有謂望雲者、有謂賞雪者、雷豈獨不可觀乎哉、抑亦謂月雲可愛、故以玩望、雷也徒可怖耳歟、天下可怖者亦甚多矣、外則功名利祿、內則智術忿爭、旁至酒色佚遊、鰐海舟船、羊腸車馬、一失其常、禍不旋踵、其疾過於震雷、子乃不顧其禍於必然、反而怖震雷於萬一、不亦盭乎、客不答而去、書以爲記云、

〔萬寶鄙事記 六占天氣〕雷　雨ふらずして雷なるは、あめなし、　雷の聲はげしく雨しきりにふる時は、はやく晴る、雷の音曲にひゞくははれがたし、　雷の中に雷なるは、雨久しくふりてやみがたし、　雷夜るおこるは三日雨つゞく、　卯の前の雷は、天氣あし、

悲ムデ、猶改メテ塔ヲ造ツ、此ノ度ビハ雷ノ爲ニ塔ヲ被壞ル事ヲ止メムト、心ヲ致テ泣々ク願祈ル間ニ、彼ノ神融聖人來テ願主ニ向テ云ク、汝ヂ歎ク事无カレ、我レ法花經ノ力ヲ以テ、此ノ度雷ノ爲ニ此ノ塔ヲ不令壞ズシテ、汝ガ願ヲ令遂ムト、願主此レヲ聞テ掌ヲ合セテ、聖人ニ向テ泣々ク恭敬禮拜シテ喜ブ事无限シ、聖人塔ノ下ニ來リ居テ、一心ニ法花經ヲ誦ス、暫許有テ空陰リ細ナル雨降テ雷電霹靂ス、願主此レヲ見テ恐ヂ怖レテ、此レ前々ノ如ク塔ヲ可壞キ前相也ト思テ歎キ悲ム、聖人ハ誓ヒヲ發シテ、音ヲ擧テ法華經ヲ讀奉ル、其時ニ年十五六許ナル童、空ヨリ聖人ノ前ニ墮タリ、其ノ形ヲ見レバ頭ノ髮蓬ノ如クニ亂レテ極テ恐シ氣也、其ノ身ヲ五所被縛タリ、童涙ヲ流シテ起キ臥シ、辛苦惱亂シテ音ヲ擧テ聖人ニ申サク、聖人慈悲ヲ以テ我レヲ免シ給へ、我レ此ヨリ後更ニ此ノ塔ヲ壞ル事不有ジト、聖人童ニ問テ云ク、汝ヂ何許ノ惡心ヲ以テ、此ノ塔ヲ度々ニ壞ルゾト、童ノ云ク、此ノ山ノ地主ノ神我レト深キ契リ有リ、地主ノ神ノ云ク、我ガ上ニ塔ヲ起ツ、我レ住ム所无カルベシ、此ノ塔ヲ可壞シト、我レ此ノ語ニ依テ度々塔ヲ壞レリ、而ルニ今法花經ノ力不思議ナルニ依テ、我レ吉ク被縛ヌ、然レバ速ニ地主ノ神ヲ他ノ所ニ令移去メテ、永ク逆心ヲ止ムト、聖人ノ云ク、汝ヂ此レヨリ後佛法ニ隨テ逆罪ヲ造ル事无カレ、亦此ノ寺ノ所ヲ見ルニ、更ニ水ノ便无シ、遙ニ谷ニ下テ水ヲ汲ムニ煩ヒ多シ、何デ汝ヂ此ノ所ニ水ヲ可出シ、其レヲ以テ住僧ノ便ト爲ム、若シ汝ヂ水ヲ出ス事无クバ、我レ汝ヲ縛テ、年月ヲ送ルト云フトモ不令去ジ、亦汝ヂ此ノ東西南北四十里ノ内ニ雷電ノ音ヲ不可成ズト、童跪テ聖人ノ言ヲ聞テ答テ申サク、我レ聖人ノ言ノ如ク水ヲ可出シ、亦此ノ山ノ外四十里ノ間ニ雷電ノ音ヲ不成ジ、何況ヤ向ヒ來ル事ヲヤト云フニ、聖人雷ヲ免シツ、其時ニ雷掌ノ中ニ瓶ノ水ヲ一滴受テ、指ヲ以テ巖ノ上ヲ彫穿テ、大キニ動シテ空ニ飛ビ昇ヌ、其ノ時彼ノ巖ノ穴ヨリ清キ水涌キ出ヅ、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月丁亥、此夜雷電雨甚、則天皇祈之曰、天神地祇扶朕者、雷雨息矣、言訖即雷

小子部栖輕者、泊瀨朝倉宮廿三年治天下雄略天皇(謂大泊瀨稚武天皇)之隨身、肺脯侍者矣、天皇盤余宮之時、天皇與后寐大安殿婚合之時、栖輕不知而參入也、天皇恥輟、當於時而空雷鳴、卽天皇勅栖輕而詔、汝鳴雷奉請之耶、答曰將請、天皇詔曰、爾汝奉請、栖輕奉勅從宮罷出、緋蘰著額、擎赤幡桙、乘馬從阿部山田之道與豐浦寺之路走往、至于輕諸越之衢、躡請言、天鳴雷神、天皇奉請呼云々、然而自此還馬走言、雖雷神而何所不聞天皇之請耶、走罷時、豐浦寺與飯岡間、鳴雷落在、栖輕見之、卽呼神司人、入舉籠而持向於大宮、奏天皇言、雷神奉請、時雷放光明炫、天皇見之恐偉、進幣帛令還落處、其落處今呼雷岡、(在古京小治田宮者)然後時栖輕卒也、天皇勅留七日七夜、詠彼忠信、雷落同處作彼墓、收立碑文柱言、取雷栖輕之墓也、此雷惡忿而鳴落、踊踐於碑文柱、彼之折間雷構所捕、天皇聞之放雷、不死慌七日七夜留在、天皇勅使樹碑文柱、標言、生之死之捕雷栖輕之墓、謂古京時名爲雷岡語本是也、

得雷之喜令生子强力子緣第三

昔敏達天皇(是磐余譯語田宮食國淳名倉太玉敷命也)御世、尾張國阿育知郡片蕝里有一農夫、作田引水之時、小細雨降、故隱木本、撩金杖而立時雷鳴、卽恐擎金杖而立、卽雷墮於彼人前、雷成小子而隨伏、(〇扶桑略記、有而雷墮其前、狀如小兒、)擧來持擊、雷語夫曰、汝莫害我、我必報汝、夫問雷云、汝何以報恩之、汝何報、雷答言也、寄於汝令胎子而報、爲我作楠船入水泛竹葉而賜、卽如雷言作備而與、時雷言莫近依令避、卽靉霧登天、然後所產兒之頭纏蛇二遍、首尾垂後而生、〇下略

〔今昔物語十二〕越後國神融聖人縛雷起塔語第一

今昔、越後國ニ聖人有ケリ、名ヲバ神融ト云フ、〇中略其國ニ一ノ山寺有リ、國上山ト云フ、而ルニ其ノ國ニ住ム人有ケリ、專ニ心ヲ發シテ此ノ山ニ塔ヲ起タリ、供養セムト爲ル間ニ、俄ニ雷電霹靂シテ、此ノ塔ヲ蹴壞テ雷空ニ昇ヌ、願主泣キ悲テ歎ク事无限シ、然ドモ此レ自然ラ有ル事也ト思テ、卽チ亦改メテ此ノ塔ヲ造ツ、亦供養セムト思フ程ニ、前ノ如ク雷下テ蹴壞テ遂ザル事ヲ歎キ

雷除

〔武江年表 七〕此年間〇文化記事　文化の始より、淺草寺七月十日の四萬六千日參に、赤き蜀黍を雷除とて商ふ事始る、

〔蜘蛛の糸巻追加〕雷除に赤もろこし虫の藥　青酸藥

淺草觀世音、每年七月十日を四萬六千日とて、參詣群集なす、此事昔はなかりしをと、古老いへり、さて又此日此山内にて、赤き唐もろこしを雷除とて商ふ、俗子買はざるはなし、そも〳〵赤き唐もろこしは、近き文化の始め何國に生せしにや、其以前はなかりし物なり、本草家栗本隨仙院に尋ねしかど、書物には見えず、近來變生の物なりといへり、されば文化年中よりの品物なるべし、雷除なりとは、何によるにや、

〔東都歳事記 二夏〕四月朔日、龜戸天滿宮雷神祭七日迄修行、本宮に別雷神、意富加牟豆美神を祭り、雷難除を祈る、今日より八月晦日迄雷難除の守札を出す、

五月廿八日　白金土筆原、雷電宮祭雷除の守札出す、三鈷坂北

〔夏山雜談 三〕桑原トイフ所ハ、ムカシ菅家ノシロシメシタル處ナリ、延長ノ霹靂、其後度々雷ノ墮タリシ時、此桑原ニハ一度モヲチズ、雷ノ災ノナカリシトカヤ、コレニヨツテ、京中ノ兒女子、イカヅチノナル時ハ、桑原々々トイヒテ、呪シタリトナリ、今ニイタリテ、カクイフコトナリ、

〔家屋雜考 五〕間雜　焚火之間(タキビノマ)圍爐裏之間　貴人の御座近く焚火の間を設くる事あり、〇中略　大道寺友山が雷鳴論といふものに、甚雷の時、火を多くたけば、雷火の災を免る丶故なりといへり、

捉雷

〔日本書紀 十四雄略〕七年七月丙子、天皇詔少子部連蜾蠃曰、朕欲見三諸岳神之形、或云、此山之神爲大物主神也、或云、菟田墨坂神也、汝膂力過人、自行捉來、蜾蠃答曰、試往捉之、乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇、天皇不齋戒、其雷虺虺、目精赫赫、天皇畏蔽目不見、却入殿中、使放於岳、仍改賜名爲雷、

〔日本靈異記 上〕捉雷緣第一

る時、御簾のもとに出させ給ひ、御歸座まし〱けるに、御神色かはらせられず、雷やみていらせ給ひけり、其後雷の御おそれなかりしとなん、

〔惇信院殿御實紀附錄〕延享のころにか有けむ、水無月の末つかた暴雨せしに神なりひらめき、四面晦冥したりしが、やがて本城近きあたり雷の落たりしに、そのひゞきおびたゞしかりしかば、御前ちかくさぶらふ小姓小納戸等も、みな色をうしなひてひれふし、人ごゝろもなくなりぬ、御側の衆はじめ直廬に侍らひし人々も、かねて雷地震忌せ玉ふまゝ、いかにおどろかせ玉ふらんと、いそぎ御前にはしり參りたれば、侍臣等はみな俯伏してあるなかに、公〇徳川家重のみ常の御さまにて御志とねの上に、端坐してまし〱ける、輕き時は忌せ玉ふものゝ、かくつよき時に至り、正しくましませしことの、いづれも驚歎し奉りしとぞ、

〔甲子夜話〕八世ニ雷ヲ畏ル丶者多キ中ニ、最甚シキヲ聞ケリ、葵章ノ貴族ナリトヨ、雷ヲ防グ爲ニ別ニ居室ヲ設ク、其制廣サ十席餘ヲ鋪ク、上ニ樓ヲ構ヘ、樓ト下室トノ間ノ梁下ニ布幔ヲ張テ天井トシ、其下ニ板ニテ天井ヲ造リ、其下ニ又綿布ノ幔ヲ張テ又天井トス、コレハ雷ハ陽剛ノモノナレバ、陰柔ノ物ニテ堪ルガ爲ニ、カク設クルトナリ、カクアラバモハヤ止ルベキヲ、樓屋ノ瓦下ト天井板トノ間ニモ、又綿ヲ多ク籠テ防トス、最可笑ハ、樓下ノ室ノ中央ニ屛風ヲ圍繞シ、其中ニ主人在テ、屛中ハ被衾ノ類ヲ以テ、主人ノ身ヲ透間ナク塡テ、屛外ニハ近習ノ諸士ドモ周圍シテ弁居ルコトナリトゾ、コレ妄說ニアラズ、或人目擊ノ語ヲ記ス、物ヲ懼ル丶モ限アルベキコトナリ、カヽル擧動ニテ不虞ノ時、矢石ノ中ヘ出ラルベキニヤ、武門ノ人ニハ餘リナルコトトゾ思ハル、

〔家屋雜考〕五間雜　雷之間　後世雷の間とて、二重天井などにして、甚雷の憂を避くる事あり、古くは聞き及ばざることなり、

ととぞ、

〔筆のすさび 一〕一雷臍を取るといふ事　雷の臍をとるといひて、小兒などを警むるは、雷震のときは、俯伏するものは死せず、仰仆する者は、かならず死するによりてなり、失火の烟たちこめて、息をつぎがたき時は、土を舐れといふも同じをしへなり、

〔甲子夜話 十一〕谷文晁ノ云シト又傳ニ聞ク、雷ノ落タルトキ、其氣ニ犯サレタル者ハ、廢忘シテ遂ニ痴トナリ、醫藥驗ナキモノ多シ、然ニ玉蜀黍ノ實ヲ服スレバ忽愈、或年高松侯ノ廐ニ震シテ馬ウタレ死ス、中間ハ乃廢忘シテ痴トナル、侯ノ畫工石腸ト云モノハ、文晁ノ門人ナリ、來テコレヲ晁ニ告グ、晁因テ玉蜀黍ヲ細剉シテ與ルニ、一服ニシテ立ドコロニ平愈ス、又後晁本郷ニ雷獸ヲ畜モノアリト聞キ、其貌ヲ眞寫セントシテ、彼シコニ抵リ就テ寫ス、時ニ畜主ニ問フ、此獸ヲ養フコト何年ゾ、答フ二三年ニ及ブ、又問フ何ヲカ食セシム、答フ好テ蜀黍ヲ喰フト、晁コノ言ヲ不思議トシテ人ニ傳フ、イカニモ理外ノコトナリ、

霹靂木

〔新撰字鏡 四〕靂霹(同、理撒力狄二反、雷乃不女留木、)

〔日本書紀 二十二推古〕二十六年、是年遣河邊臣(闕名)於安藝國、令造舶、至山覓舶材、便得好材、以名將伐、時有人曰、霹靂木也、不可伐、河邊臣曰、其雖雷神、豈逆皇命耶、多祭幣帛、遣人夫令伐、則大雨雷電之、爰河邊臣案劒曰、雷神無犯人夫、當傷我身、而仰待之、雖十餘霹靂、不得犯河邊臣、即化少魚、以挾樹枝、即取魚焚之、遂修理其舶、

畏雷

〔文德實錄 五〕仁壽三年四月甲戌、大内記從五位下和氣朝臣貞臣卒、○中略貞臣爲人聰敏、質朴少華、性甚畏雷、

〔承應遺事〕謝上蔡の語に、克己須從性偏難克處克將去とあるを稱し給ひ、常に御工夫を用させ給ひけり、御生質(○後光明)雷をおそれ給ふに、これも性偏なる處より、かくはあるとて、雷はげしかりけ

〔武江年表 九〕嘉永三年八月八日、夕七時頃夜五時頃より大雨大雷、曉に至て江戸並近邊百餘所へ墮ける由なり、諸人恐怖す、

〔前留別志 二〕一降眞香は雷をさくる物なり、雷にやかれて身のくろくふすぶりたるに、是をたきたる烟にてふすぶれば、やがて白くなるなり、是をも同じ比より、護眞香といひならはせり、くだるといふには、雷のおつる心あるを忌めるなりけり、

〔内安錄 二〕一吹上御庭の樹木を伐たる時、杣の居る所へ落雷せしに、その杣驚たる氣色もなく、何ぞ持居るかと問へば、雷除の解毒丸といふものを所持せしといふ、その藥何方の製法かととへば、古河醫師より出したるといふ、堀田筑州大病の時、御醫奈須玄竹に療治を被仰付、全快に付金十枚に此雷除解毒丸の法を被下しとぞ、

〔甕の須佐美 三〕秋の頃雷の落たりし時、營中宿直の人の行厨をはこぶとて、さし荷ゆく下部にあたりて、其所へ倒れしが、半かゝりて死もやらず、身はうち碎ける如くにて、手足もなへて、あつかふべき樣もなきを、板に乘せてよふ／＼と持歸り、人の敎たるに任せ、餅をすりつぶして、總身にぬる事二夜三日に及べり、初一日より後いつとなく濕ひ出、三日後はやう／＼しるしある樣にて、五七日ぬりければ、常のごとくになりぬ、

〔閑田次筆 四〕むかし彥根の士、父子居間を異にしてありしが、雷鳴甚しく、正しく其子の居れる室へ墮たる音を聞て、父やがて走り行て、いかに／＼といへば、こゝに侍ふと烟氣の中よりこたふ、立よりて見れば、半身焦れながら、氣はたしか也しかば、さま／＼療治して平復したりしとなり、めづらしき豪氣の人もあれば有ものなり、凡震死せる人、其身の焦るは稀にて、音におびへ肝を潰せるが多し、或は墮たる家は障なくて、其隣の人の震死せるもまゝ聞ゆ、是等は嚮の筋に觸たるものといふはさもあるべし、臍ひらくものは不救といへり、俗に雷が臍を摑むといふも此こ

なる用心也、子細は、親子、兄弟、夫婦に不限、其身運命盡て、神鳴に打殺さる當人計は是非に不及也、此用心なきものは、雷雨の烈しき時に限り、家內一所にこぞり寄て居る事、沙汰の限り也、人の多く集りいる處へ、雷が遠慮して落まじきや、若其中へ、おちたらんには、一家根絶しになる道理ならずや、先年京都の町人、神鳴のするに、せまき座敷に家內不殘取籠、戸障子を建廻し、火を燈し香を焚ているところへ雷落掛り、座中死人多く、生殘る人も大方片輪と也しを、天罪にも當りたる様に云し、是天罪にもあらず、前世の因果にもあらず、大なる啌氣ものといふべしと、御笑ひ被成けると也、

〔駿河土產 二〕權現様駿府に被遊御座候節、○中略御三人の御子様方へ御附置被遊たる面々を被召呼、向後雷の强く鳴り候節は、御三人の御子様方を、御一處に置不申候様に可致旨、被仰渡候となり、

〔玉露叢〕萬治三年六月十八日、酉ノ後刻ニ大坂御城青屋口ノ山里ノ鹽硝藏ニ雷落テ、御城內破損ヲビタヾシ、依テアヤマチ死人數輩アリ、

〔嚴有院殿御實紀附錄 下〕寛文五年正月二日、浪華城天守雷火にて燒しとき、大番士榊原源兵衛政信、竹內三郎兵衛信就、夜を日についではせ下り注進す、松平伊豆守信綱旅裝のまゝにて、御前に出よとてめし出されしに、やゝしばらく有て、何ばかりの事にてありしと御尋あり、伊豆守兩人に物に驚て申上よといふに心つき、臣等が小屋の床の上におきし茶碗を、雷後にとりてみ侍れば、悉く碎て有しよし聞え上しに、さはおびたゞしき響かなと仰られしなり、

〔大江俊矩記〕文化九年七月一日辛未、陰晴午後雷鳴暴雨、近年之大雷也、御築地內ニテ縦華洞良□烏丸家ニ落、近邊ニテ横町古本屋ノ裏高辻家ノ北邊ニ落由、其外市中方々落候由、○中略依雷鳴伺御機嫌參上御所々々之事、自同姓以尋越、仍返答、餘リ參タル事モ無之故、先不參覺悟之旨申歸ス、

ス、道雪ハ早業ノ達者ナレバ、側ニ置タリケル、千鳥ト云ル刀ヲ取テ飛カヽリ、雷ト覺シキ者ヲ拔打ニ、丁ト切テ飛去ケリ、形ハ何カハ不分明、手當シテ覺ケルガ、刀ノ雷ニ當リタル驗ノ有ケルニゾ、實ニ雷ヲ切タリトハ知ラレケル、ソレヨリシテ、此刀ヲ雷切ト改名ス、サレ共道雪モ雷ノ餘焔ニ中ラレテ、身體此彼所損ゼラレ、片輪者ニナラレニケリ、〇又見大友興廢記六

〔武邊咄聞書四〕一上杉謙信の太刀に、赤小豆粥〇註略竹股兼光、谷切來國俊ノ作也と云て三腰有り、竹股兼光は、元來越後老津之百姓是を持、山中を通りけるに、雷頻に鳴かゝりしかば、百姓は刀を拔、切先を頭上にさし上、目をふさぎ居たり、暫して天晴しかば彼刀を見るに、切先一尺計血に成り、百姓の頭も衣も血かゝりて有、雷落懸り此刃に當りて、又天へ上りしに無疑と云共、右之血如何成故にや、

〔鹿苑日錄〕慶長八年二月廿三日、自朝晴天、未刻ニ俄ニ雨降、疾雷動乾坤、三郎衛門來、向予曰、只今雷落地、西之京路ニテ取人ト云々、於途中傾笠耕田者也ト云々、頭上笠雷火ニテ燃ト云々、不堪驚愕、雨亦頃刻止、當年初而雷也、

〔岩淵夜話別集六〕一或時駿府にて夏の空俄に曇り、夕立おびたゞしく、雷の聲頻なる折節、家康公御伽衆へ被仰けるは、万事に用心のなきといふ事なし、地震抔は如形急なる物なれども、是以て家作りの仕樣もあり、或は家居の所々、能退場を兼て拵置ば、其難を遁るゝ道理也、此雷といふもの計は、何方へ落來るべきとも不計、其上眞直に計落ることなし、筋違にもおち下る事あり、何として防ぎ逃べき、然共此神鳴迚も、用心なきにあらず、各合點かと被仰、御伽衆承り、只今の上意の如く、雷計は用心の仕樣も無之奉存候と申上る、家康公仰けるは、用心の仕樣あり、各に敎ん、たとへば其身大身にて、居宅も廣く間數も有之て、住居する時は云に不及、たとへいか樣に淺間しき小家に住居する者なりとも、今日の如く強く雷のする時は、夫婦、兄弟、爰彼處に可居事、これ大ひ

仍可有入御武州亭之由、各定申被退出云云、

〔百練抄 十三 後堀河〕貞永元年二月二日、巳剋東大寺并元興寺塔春日社塔雷火出來、一時之間三所火匪直事也、各令撲滅云々、

〔吾妻鏡 五十二〕弘長三年九月十二日己丑、終夜甚雨、戌剋雷鳴、武藏大路霹靂、獄裂卒都婆、其上三尺餘爲雷火燒、獄裂之聲響人屋、聞者甚多云云、　十三日庚寅、今朝諸人擧登山、而見去夜雷火燒之卒都婆、非時雷鳴、不輕其愼之由、陰陽道等進勘文、　十月一日戊申、大藏權大輔泰房於御所南庭、行天地災變祭、是去月十二日大雷御祈禱也、

〔應仁記 三〕相國寺塔炎上之事

文明二庚寅年十月四日ノ初月、一天クモリナカリケルガ、月山ノ端ニ懸ホドナルニ、乾愛宕ノ方ヨリ掻曇、大雨車軸ノ如シ、雷電掩耳拉目モ甲斐ゾナキ、良有テ相國寺七重ノ塔一基、去々年燒殘テアリケルニ、雷落カヽリ燒上櫓、番衆見テ申ケルハ、猿ノ如ナル物、塔ノ重々ニ火ヲ付ケルニ、燒ケルトゾ申ケル、

〔看聞日記〕應永廿三年正月九日、雨降戌刻雷電暴風以外也、此時分赤氣耀蒼天、若燒亡歟之由不審之處、北山大塔七重爲雷火炎上云々、雷三度落懸、僧俗番匠等、捨身命雖打消、遂以燒失、併天魔所爲勿論也、去應永七年相國寺大塔七重爲雷火炎上、其後北山ニ被遷之、造營未終功之處又燒失、末代不相應歟、法滅之至可悲可歎、

〔陰德太平記 三十八〕戸次道雪斬雷事

道雪長夏炎熱ノ難堪マヽ、河朔ノ避暑ヲナスベシトテ、書院ノ大庭ナル木陰ニ席ヲ設ケ、荷葉ノ杯ヲ行ラシ、微醉シテ枕ニ倚居ラレケルニ、○中略俄ニ空掻曇リ、黒雲白雨ヲ帶テ、恰モ三千丈ノ瀑布ノ水ヲ卷テ來ルガ如ニ、當ル所ハ透リヌベク降テ、霆頻リニ轟キ、雷火忽落下シテ、庭中ヲ奔迸

隱岐入道行西、駿河前司義村、民部大夫入道行然、加賀守康俊、彈正忠季氏等候其砌、依去九日雷事、可令避御所給否、將又被行御占、就吉凶宜有御進退否事及評議、意見區分、季氏申云、於先規者不分明、如此事可依占吉凶歟、雖有于人口、醍醐御宇延長八年六月廿六日、清涼殿坤方柱上霹靂、大納言淸貫卿右中辨希世朝臣、忽爲雷火薨、是雖非常途之篇、猶無遷幸之儀、只入御常寧殿云云、行西申云、延長例不吉也、同八月廿三日、御脫屣、同九月廿九日、有御事、又入御常寧殿上者、猶可准遷幸歟云云、助敎申云、故右大將家被攻奥州之時、軍陣雷落、承久兵亂之時、右京兆釜殿雷落、皆是吉事也、然者不可爲恠異、可定吉事云云、義村、行然、康俊等申云、先規者不覺悟之、以現量所思、只可令去御所歟、但付是非可被行御占云云、仍一揆之間、助敎召陰陽師等七人各參候、將軍家〇藤原頼經御坐簾中、相州、武州、義村、行西等祗候御前、師員傳仰云、去十九日雷落事、若雖有可忌之事、於關東先例者還可謂古事歟、而可令去御所給之由、有申人々、可爲何樣哉、各可計申者、泰貞朝臣申云、大內以下所處雷落常事也、御占者雖被行之、無左右令去御所之先例不覺悟、然者可被決御占云云、晴賢申云、雷落所不可居住之由、先祖晴道會釋之上、金匱經幷初學記文等不快、可令去給云云、彼經等師員披見之、親職晴幸申云、驚與雷雨恠異重疊訖、尤可令避給云云、國經同泰貞之儀、重宗申云、京邊雷落所々不被去之上、限此御所不可有其儀云云、師員云、後京極殿將軍家御先祖也、御坐大炊殿之時、雖雷落不令避之給、定有御存知旨歟、爲彼御子孫當掭錄御繁榮日新、非佳例哉云云、晴賢答云、御子孫榮貴者不能左右、但大炊殿無程爲灰燼、於今者彼跡荒廢無一字御所、凡非無七八十壽算之人、僅三十八而御頓滅、非最上之例歟、義村聞晴賢返答、頗有甘心之氣云云、付是非可被行御占之旨被仰之間、泰貞、重宗、如去九日酉刻者、一切無別御事、粗宜之由占申、親職、晴賢、晴職、不快之由申之、晴親、國繼、半吉之由申、其後陰陽師等退座、爰有評議、不可去御之由議定訖、相州、武州、助敎被參御前、令披露事次第給、仰云、依先度驚事可去御哉云云、武州又被出廊、召陰陽師等、於本座被行御占、令去御之條、尤可然之由、一同占申之、

所損人、如此事及十餘箇所云々、皇居堀川院南山大樹折損、疑是雷所爲歟、凡未有如此事、誠以希有也、

〔醍醐雜事記〕保延六年五月十六日、戌時、法成寺西塔、爲雷火燒失了、同時彼堂塔同燒失了、凡此日京中京外、十二ケ所雷落云々、

〔玉海〕承安四年六月廿三日戊寅、或人云、一昨日雷落大膳權大夫泰親朝臣家、卽落懸泰親肩上、雖然無身損害、須臾雷還登了云々、泰親於内外有勤者也、故無其害、可謂奇異者也、彼時奉念熊野云々、

〔顯廣王記〕承安四年六月廿二日、園敎寺并法勝寺八講、今日雨不降雷鳴、其中一聲殊甚也、卽泰親落二重棧敷震破、靑侍被雷震、

安元二年六月廿四日丁酉、夜雨下、雷落三條萬里小路、入於大外記師尙三條面門通作合脇戸、振〇振一本作搋、侍二人昇了、奇異云々、

〔吾妻鏡七〕文治三年四月十四日乙酉、雨降雷鳴、霹靂落于政所因幡前司廣元厩之上、馬三疋斃、屋上幷柱多以燒訖、而一巻心經安棟上之處、聊雖焦字形鮮也、因州隨喜之餘、持參彼經於營中、申佛法之未落地事、拭感涙云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月八日辛酉、戌剋、鎌倉雷落于右京兆館之釜殿、疋夫一人爲之被侵畢、亭主頗怖畏、招大官令禪門〇大江廣元示合之、武州〇北條泰時等上洛者、奉傾朝廷者、而今有此怪、若是運命之可縮端歟者、禪門云、君臣運命皆天地之所掌也、倩案今度次第、其是非宜仰天道之決斷、全非怖畏之限、就中此事者關東爲佳例歟、文治五年、故幕下將軍〇源頼朝征藤泰衡之時、於奥州軍陣雷落訖、先規故可有卜筮者、親職、泰貞、宣賢等、最吉之由同心占之云云、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年六月九日、酉剋、雷落于御所御車宿東母屋上、柱破風等破損訖、後藤判官下部一人悶絶、則擧筵出自北土門畢、及戌剋死云云、　十四日、相州武州被參御所、着西廊給、助敎師員、

〔九條殿遺誡〕貞信公語云、延長八年六月二十六日、霹靂清涼殿之時、侍臣失色、吾心中歸依三寶、殊無所懼、大納言清貫、右中辨希世、尋常不尊佛法、此兩人已當其殃、以是謂之、歸眞之力、尤逃災殃、

〔日本紀略四村上〕天德四年二月十七日丁亥、列見、雷電霹靂於大膳職院、

應和二年六月十九日乙巳、雷烈鳴一聲、侍臣等申、霹靂右兵衞府邊、樗樹之下有醉臥男、後聞件男已存、

〔百練抄四一條〕正暦四年七月廿日、雷落美福門下、猛火付柱令燒、關白隨身右中將隆家朝臣雜色、避暑於此處、見付打滅了、〇又見日本紀略、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽四年五月廿四日癸亥、雷電風雨、京中洪水流入、舍屋顚倒、豐樂院西第二堂、爲雷火欲燒、卽以撲消了、雷形如白鷄云々、雷公墮於所々、

〔左經記〕長元元年八月四日丙寅、甚雨、不幾時晴之間、雷一聲、甚以高大也、風傳、大夫史貞行宿禰四條家雷落、打損女房二人云々、但一人則死去、一人被疵未死云々、

〔續世繼四小野の御幸〕きさき〇後冷泉后藤原歡子まだおはしましけるをり、ゆふだちのそら、物おそろしく、なる神おどろ〳〵しかりけるに、御經よみてゐさせ給へりけるを、かみおちて、御經なども、かみの所ばかりはやけて、もじはのこり、御身には露のこともおはしまさゞりける、いとたうとく、あさましきことゝぞきゝ侍し、〇又見古事談、十訓抄、共不記年月、

〔中右記〕嘉承二年六月廿一日、今日午後天俄陰雨脚甚、雷電數十度、其聲勝例、天下大驚、申時許、雷落京極殿堂北廊上、火炎高昇、堂舍燒亡、乍驚馳車參京極殿、煙滿東西不入門、只於法成寺西大門下、相待火滅、北政所御堂、幷南北廊、中門、西大門悉爲煨燼、但佛許奉被取出也、件堂前年泰仲朝臣伊與任間所造營也、莊嚴過差不可記盡、今爲雷火一日爲煙、哀哉、但餘炎不及他所也、火滅之後、參殿下、皆御枇杷殿也人々多參入、明日侍從雖可申慶給、依此事延引、入夜退出、後聞、雷落所々多以損人、或所折樹、或

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年六月十六日庚辰、雷電、雨下如倒井、京城之內、溝渠皆溢、霹靂於東寺幡竿、

〔三代實錄陽成三十四〕元慶二年七月甲午朔、大藏省奏、霹靂於倉前棟木、有黃雀、含口蒼虫而死、腹毛燋爛、

九月廿八日庚申、紀伊國司言、今月二十六日亥時、風雨晦暝、雷電激發、震於國府廳事、及學校并舍屋、被破官舍二十一宇、緣邊百姓三〇本作四、十三家、權掾口在宗姊一人、女子一人、掾紀利永妻一人、女子一人、從男女各一人、合六人壓死、掾利永男女各一人、國掌漢人貞魚合三人、震死支解、大木倒仆者十〇本作千、餘株、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年九月四日己卯、辰時雷雨、伊勢齋內親王、明日可修禊事、大藏省預於葛野河邊、裝束建幄、不風不雨、忽破劄、就而見之、爲雷所震裂也、

〔扶桑略記醍醐二十四〕延長六年五月廿九日、未時雷迅、會昌門樓巽角簷中火、其中煙炎々々樓屋、飛驒工等云、火勢未盛、以水沃滅、修理職匠預阿多千春、採八省中枯蕨、塞震破處、炎因之暫止、相次以水沃滅、

〔日本紀略醍醐一〕延長八年六月廿六日戊午、諸卿侍殿上、各議請雨之事、午三剋從愛宕山上黑雲起、急有陰澤、俄而雷聲大鳴、墮清涼殿坤第一柱上、有霹靂神火、侍殿上之者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫、衣燒胸裂夭亡、年六十四又從四位下行右中辨兼內藏頭平朝臣希世、顏燒而臥、又登紫宸殿者、右兵衞佐美努忠包、髮燒死亡、紀蔭連、腹燔悶亂、安曇宗仁、膝燒而臥、

〔扶桑略記醍醐二十四裏書〕延長八年六月廿六日戊午、是日申一剋、雲薄雷鳴、諸衞立陣、左大臣以下群卿等、起陣侍清涼殿、殿上近習十餘人連膝、但左丞相近御前、同三剋、旱天曀々、陰雨濛々、疾雷風烈、閃電照臨、卽大納言清貫卿、右中辨平希世朝臣震死、傍人不能仰瞻、眼眩魂迷、或呼或走云々、先是登殿之上舍人等、俱於清涼殿逢霹靂、右近衞忠兼死、形體如焦、二人衣服燒損、死活相半、良久遂無恙、又雷火著清涼殿南簷、右近衞茂景獨撲滅、申四剋雨晴雷止、臥故清貫卿於蔀上、數人肩舁、出式乾門、載車還家、又荷希世出修明門外、載車將去、上下之人、觀如堵墻、如此騷動、未嘗有矣、

達天皇之代、和泉國海中有樂器之音聲、如笛箏琴箜篌等聲、或如雷振動、晝鳴夜耀、指東而流、大部屋栖古連公聞奏、天皇嘿然不信、更奏皇后、聞之詔連公曰、汝往看之、奉詔往看、實如聞、有當霹靂之楠、矣、還上奏之、〈○中略〉〈霹靂二合、可美止支乃、〉

〔日本書紀〈二十七天智〉〕八年、是秋霹靂於藤原內大臣家、

〔續日本紀〈十聖武〉〕天平二年六月壬午、雷雨、神祇官屋災、往往人畜震死、　閏六月庚子、縁去月霹靂、勅新田部親王、率神祇官卜之、乃遣使奉幣於畿內七道諸社、以禮謝焉、

〔續日本紀〈三十七桓武〉〕延曆元年七月甲申、雷雨、大藏東長藏災、內廐寮馬二匹震死、

〔日本紀略〈桓武〉〕延曆十三年七月庚戌、震于宮中幷京畿官舍及人家、或有震死者、

〔日本後紀〈二十四嵯峨〉〕弘仁六年六月癸亥、是日、山城國乙訓郡物集國背兩鄉雷風、壞百姓廬舍、人或被震死、先是有大蛇、入人屋、即殺之、未幾其人被震、

〔類聚國史〈七十三歲時〉〕天長七年七月戊子、天皇幸神泉苑、覽相撲、申剋雷雨、酉剋霹靂內裏西北角曹司、左右近衛騎乘御馬、馳入內裏、撲滅神火、戌剋雷聲乃止、即帝還宮、見參諸司官人已下衛門門部已上、賜祿有差、不覽相撲、薦霹靂也、

〔日本紀略〈淳和〉〕天長七年七月癸巳、玄暉門外中重挍、令祓霹靂事、

〔續日本後紀〈七仁明〉〕承和五年八月己亥、霹靂於豎物前柳樹、往還人休于樹下、一男震死、一女傷胝、一童僅存、一女無恙、

〔文德實錄〈一〉〕嘉祥三年六月己酉、雷震西寺刹柱、剝取其竿、中央一許丈、去落於右馬頭藤原朝臣春津宅、

〔文德實錄〈十〉〕天安二年六月丙申、和泉國言、霹靂破官舍六十餘宇、民屋卅〈○卅、一本作四十、〉字、被震死者二人、傷支體者三人、拔折十圍木十九〈○九、一本作六、〉株、殘損田苗廿許町、

霹靂

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年六月廿九日辛未晦、太政大臣（基經○藤原）侍殿上、納言參議侍仗下、忽有雷大鳴、諸衞陣於殿前、賜太政大臣及諸公卿祿、諸府官人以下見參者賜祿各有差、

〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕昌泰四年（○延喜元年）七月二日辛亥、自午及申雷鳴雨下、勅令取公卿以下諸陣見參、

〔小右記〕天元五年四月廿九日庚寅、雨降雷大鳴、先帶弓箭、將軍及次將等近候晝御座邊、雷雨不止、仍奏事由陣立、大將次將出候孫廂、如恒、申時許解陣、

〔權記〕長德元年七月二日、參內、頭中將（齊信）云、雷鳴時陣立如例、但村上御時夾額間南北行居、左少將濟時右中將延光、此時主上出御、令問給陣居違例由於延光朝臣、朝臣申云、置于兵、延光從兵衞府罷渡、其程不幾難知舊例、從左府儀也者、仍又令問濟時、更無所申、此座猶向南北可居東西行也者、但此御座事、故中納言被申儀甚善、仍隨其說者、（少將以上南北相對、以西上也）藏人辨（爲任）云、去正曆四年又有雷鳴陣、故將軍被候其陣、又居南北行云々、此日御座可在大床子御座、或候晝御座南、又可候大床子南云々、

〔枕草子十〕ことばなめげなる物　かんなりのぢんの舍人

〔天本文倭名類聚抄二神靈〕雷公（霹靂電附○中略）釋名云、霹靂（辟歷二音和名加美度計）霹析也、靂歷也、所歷皆破析也、

〔箋注倭名類聚抄一神靈〕按、加美渡計、神解之義、謂雷神解墮也、（○中略）按、說文、靂字注作劈歷、劈破也、辟法也、二字不同、說文作劈歷、正義、原書（○釋名）作辟歷、假借、此引作霹靂、俗字也、

〔日本書紀九神功〕九年（○仲哀）四月甲辰、既而皇后（○神功）則識神教有驗、更祭祀神祇、躬欲西征、爰定神田而佃之、時引儺河水、欲潤神田、而掘溝、及于迹驚岡、大磐塞之、不得穿溝、皇后召武內宿禰、捧劒鏡、令禱祈神祇、而求通溝、則當時雷電霹靂、蹴裂其磐、令通水、故時人號其溝、曰裂田溝也、

〔日本靈異記上〕信敬三寶得現報緣第五

大花上大部屋栖野古連公者、紀伊國名草郡宇治大伴連等先祖也、天年澄情、尊重三寶、案本記曰、敏

出庭中西面跪、置笠於地、立而稱唯、（或曰稱唯趁進跪、置笠磬折立、或曰、趁出跪、脫笠置地、立稱唯云々、是雨不止時例歟、至于甚雨、燼不可脫歟、）次召右將監如初、稱唯雙立、上卿仰曰、陣解（介）、將監同音稱唯、左將監召御殿守二音、近衛等稱唯、仰曰、下（利）、又稱唯、右召仰如左、左右共下、將監取笠懸太刀立本所、次左右將監以下相分退出、次上卿退下、次將又退、（自下退出）次兵衛陣退出、於本陣解之、

〔侍中群要 七〕雷鳴事（中略）○御裝束事

大床子御座南方供御座、（或說云、疊御座南供之云々、其數物用小筵二枚半疊、神事也、）中少將夾御座間、孫廂左右候、（左南面西上額間、右北面西上南第一間、大將右少將前西面矣、但著後給圖座、解陣時於此座承仰行之、）主上或御夜殿塗籠中、（但解陣可奏事由、）又大臣帶大將、不卷纓著弓箭、是例也云々、又著給神事御服、近代無此事、

〔禁秘御抄 下〕雷鳴

上古上卿召近衛佐、令候御前、諸衛警固、次諸陣見參、令給祿、近代不及如然之儀、雷鳴又送年疎、近代如藏人持瀧口弓候御緣、若瀧口少々召御壺令鳴弦、御持僧參會之時令念誦、其外無殊事、

〔萬葉集 六雜歌〕四年丁卯（○神龜）春正月、勅諸王諸臣子等、散禁於授刀寮時作歌一首幷短歌、（長歌略）

梅柳、過良久惜、佐保乃內爾、遊事乎、宮動動爾、

右神龜四年正月、數王子及諸臣子等、集於春日野、而作打毬之樂、其日忽天陰雨雷電、此時宮中無侍從及侍衛、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路、于時悒憤、即作斯歌、　作者未詳

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁六年六月壬寅、是日大雷、內舍人幷四衛府舍人以上、賜祿有差、

〔日本紀略 淳和〕天長六年五月甲申、自寅時至于未時、雷動雨降、賜五位已上及諸衛祿、

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年七月十三日己巳、雷雨、震武德殿前松樹、諸衛陣於殿前、

〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年七月甲午朔、早旦雷聲隱隱、至未一剋忽發一聲、其勢非常、諸衛警陣殿前、詔錄仗下在坐親王已下、班賜有差、

廂、不必待闈司奏、

〔新儀式 五臨時〕雷鳴陣事

雷鳴之時、左右近衞將監已下、挾南階而陣、近衞四人昇于御殿之上、大將幷中少將帶弓箭候御簾前、非殿上者亦同之、左右兵衞不待闈司奏、陣列南殿前庭、大動之時、兵衞督佐幷殿上者、皆候殿上、兵衞各四人昇南殿仁壽殿之上、又中務丞率內舍人帶弓箭、陣于春興安福兩殿之東西廂、近代彼省不勤此事、又掃部寮鋪御座東廂南第三間、天晴雨止、大將仰解陣由、若大將不參、內侍召中將仰之、中將進而當御階前、喚將監名仰之、如常、又內侍不候、召御納言令仰解陣由、或令進諸陣見參給祿、延喜二年七月、右兵衞佐貞興依召候御前也、昌泰三年七月廿八日、左中將仲平朝臣仰解陣、四年閏六月廿九日、同仲平朝臣奉內侍宣奉之、昌泰三年七月二日、未一刻雷電初休、左大將行解陣之事、諸衞勅許未畢、迅雷暴雨復更怒至也、召返使等、陣立加前、至于申刻雷雨共休、又解陣、有勅許、昌泰三年七月四日夜子四刻雷鳴雨降、丑一刻陣立、右大將藤原朝臣參入、及于寅刻雷雨共休、至欲解陣、左無將監、乃頒令召將監佐伯進則、令座々中參入由、其身未來、諸陣佇立、時刻數遷、乃有別勅、使將曹笠文道解陣也、右大將藤原朝臣奉勅、令解却進則本職、自餘將監皆處勸事由也、延喜九年二月十三日、未刻大振、同三刻陣立、中宮御登華殿、有勅仰左右近衞陣相分遣立、

〔北山抄 九羽林要抄〕雷鳴陣 近代不見之

雷電日、若其聲盛、則藏人奉仰、仰可陣立之由、大鳴及三度者、不待宣旨、但入秋節之後、必待宣旨陣之、卽垂廂御簾、先大將參上、大臣之大將、此日帶弓箭、但卷纓不著緌、左候孫廂額南間、右候南第二間、參候後、藏人給菅圓座、往年不給云々、次中少將參上、左右相對候同廂額間、幷南第一間、皇西上、左入自北廊西戶、右入殿上戶、地下人可用右青鎖門、自左將監以下、入從北廊東戶、南御階北通砌而立、東面南上、右入從仙花門、御階南立、東面北上、或說、御座之間、當中央、相對立云々非也、各應聲打弦、若亞將少數者、有仰召兵衞佐、令候座末、或召兵衞陣、亦令候御前、御殿守近衞左右各四人、取桙不帶弓箭、左立艮乾角、右立巽坤角、鈴守近衞各一人、立長樂門橋西庭、兵衞官人以下、陣南殿前、兵衞三人不帶弓箭持長桙、往昔中務省率內舍人、陣春興殿西砌云々、但尉已上候殿上之者、帶弓箭候御後、衞門如此、近衞將監雖昇殿侍中之者、著緌笠立庭中、御座供日御座南、或說大床子南、著御神態御裝束、後宮若御別殿、分左右近陣遣之、雷收聲者解陣、大將若不候、他上卿奉仰參上、兼衞府者帶弓箭、候南廂第三間、敷菅圓座爲座、預可敷之、大將候者於本座解之、大將及他上卿不參者、內侍仰左中將令解之、不候者、進東廂南第一間御簾下、仰右中將、卽向御前、召左第一將監名、一音、將監乍懸笠於太刀越

爲雷火燒失、親王傍親源經光被震死畢、經光日來依風病寢臥、于時雷聲殷殷、經光驚執兵仗、（俗說之奈木奈）多、爰如流星物、穿屋上飛來、經光忽以顚臥、其腹二尺計割畢、于時經光妻在側被衣臥地、日來依讀誦觀音經、適免其殃畢云々、靈驗揭焉者也、經光者、前下野守源明國男也、雖累葉武士、雷公不怕之云々、今夜內親王避雷火、令移宮內大輔藤原定信宅云々、依近隣也、　十日己卯、今朝洛中民庶相集、見去夜雷火所、而經光尸骸在灰燼之中、不消沒、見者如堵、或云、經光執行坐近江國之武部社社務之間、每事行非法之徵云々、

〔百練抄 八高倉〕嘉應元年正月廿六日、戊時天陰風吹、大雷電、　十一月十二日戊時、雷落法勝寺九重塔第三層、欲燒損打消之、

〔顯廣王記〕安元二年三月一日丙午、日蝕可有巳午時、而巳時小雨雷鳴、雖其音不大、落法勝寺塔、振出納四人、其中一人死去了、自塔落也、仍本寺觸穢云々、巳午時天晴了、惟□□、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年正月十日乙未、終日風烈、及晚頭俄雷鳴雨降、　廿二日丁未、依去十日雷鳴變、始行祈禱等、〇中略　又於鶴岳宮令供僧等轉讀大般若經、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年　二月卅日辛酉、霽、午剋卒雨降雷電數反、及申之斜、

〔吾妻鏡 二十七〕寬喜二年十一月十八日、午時俄風雨、申剋雷鳴、入夜暴風雷雨甚、冬至雷殊變異也、可有御愼云云、

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜三年十二月卅日、今夜戌亥兩時甚雨雷鳴、及深更雨休、大晦夜雷鳴爲殊重變之由云云、

〔親長卿記〕文明十二年正月七日、入夜雷鳴大雨下、去年正月一日雷鳴、當年今日雷鳴、天地不相應之世也、

〔延喜式 四十五左右近衞〕凡大雷時、左右近衞陣御在所、又左右兵衞直參入陣紫宸殿前、內舍人立春興殿西

冬春雷鳴

ひける、

〔改正月令博物筌　二月〕初雷。　初電（仲春に初めて發す、此頃より虫動くゆへ、俗に虫出しといふ、）

〔梅園日記　一〕初雷　日次紀事云、凡一春之中、雷初發聲、是謂初雷、京俗節分之夜、貯置所撒家內之熬豆、聞初雷時、則三粒食之、寒夜筆談云、世ノ人初雷ノ鳴時ニ、節分ノ豆ヲクフハ、鵕冠子ニ、夫耳之主聽、兩豆塞耳不聞雷霆ト、此語ヲツタヘ誤タル也、按するに玉燭寶典（卷十二）に、荊楚記云、家々留宿歲飯、至新年十二日、則棄街衢、以爲去故納新、除貧取富、又留此飯、須發蟄雷鳴擲之屋扉、令雷聲遠也、（太平御覽八百五十に、時鏡新書を引て、とあり、これより出たる事なるべし、發蟄を驚蟄に作り、屋扉を屋上に作れり、）

〔日本書紀　二十四皇極〕元年十一月癸丑、大雨雷、　丙辰、夜半雷一鳴於西北角、　己未、雷五鳴於西北角、　甲子、雷一鳴於北方而風發、　十二月甲申、雷五鳴於晝、二鳴於夜、　辛丑、雷三鳴於東北角、　庚寅、雷二鳴於東而風雨、　甲辰、雷一鳴於夜、其聲若裂、

〔續日本紀　十九孝謙〕天平勝寶八歲十二月庚辰朔、自去月雷六日、

〔續日本紀　三十六光仁〕寶龜十一年正月庚辰、大雷、災於京中數寺、其新藥師寺西塔、葛城寺塔幷金堂等皆燒盡焉、

〔三代實錄　四十四陽成〕元慶八年正月四日丙寅、巳時天南雷八聲、降雨、始雷發聲於離、行鳴於坤、其後暴風雨雹、占云、正月有雷、春穀不平、雷起火門、夏旱蝗、

〔權記〕寬弘六年十二月五日乙酉、此夜雷鳴、頭中將來仰、依雷鳴事可令奉仕御卜之由、（仰時令和暖之上有雷鳴）

〔左經記〕長元四年十一月四日丁丑、及亥剋之間雷電數聲、雨脚頗降、仲冬雷電尤可怖畏云々、　五日戊寅、參內、風聞天文道奉去夕雷鳴勘文、（疾疫旱云々）

〔扶桑略記　三十堀河〕應德四年（○寬治元年）十二月廿八日丙午、申剋、雷大發聲數十箇度、電光赫奕勝於夏日、

〔本朝世紀〕久安二年三月九日戊寅、（○百練抄作八日）夜半大雨、雷鳴霹靂、前齋院官子內親王（鏡小路北、東洞院東、）居宅、

雷鳴

律幔壘之類也、此象類之矣、氣相校軫分裂、則隆隆之聲校軫之音也、魄然若敝裂者氣射之聲也、氣射中人、人則死矣、實說雷者太陽之激氣也、何以明之、正月陽動故正月始雷、五月陽盛故五月雷迅、秋冬陽衰故秋冬雷潜、盛夏之時、太陽用事陰氣乘之、陰陽分爭則相校軫、校軫則激射、激射爲毒、中人輙死、中木木折、中屋屋壞、人在木下屋間、偶中而死矣、〇下略

〔隨意錄一〕聞之雷必收於其日之方、子日之雷、收於子方、丑日之雷、收於丑方、若雷起於其日方、則不得大發而已、紅毛人渡海、亦以是占雷風云、

〔槐記續篇〕享保十六年三月八日、參候、〇山科道安仰ニ、〇近衛家熙三日ノ初雷ハ、サテシモツヨカルベシト思ヒシガ、夫程ニハナクテオサマリタリ、加茂ノ邊ハ近年ニナキ大雷ナリト、玄蕃ガ申シタリ、ワヅカノチガイニテ、ヒヾキノ多少アルモノナリ、ヨク世間ニテヨク人々云コト也、光ルト其マヽ鳴雷ハキビシキト云、ヒカルト其マヽナル雷ハ近キユヘナリ、遠キユヘニ光ルニアヒダノアルナリ、光ルハ鳴ノ勢ナレバ、別段ニアルベキヤウナシ、自體鳴ト電ハ同ジコトノ筈ナリ、遠近ノ差別マデナリ、〇中略御亭ニテ前ノ擣衣ヲ御覽アルニ、杵ノ下タル時ニ音ハセズ、杵ノアガル時ニ音ノヒヾキアルハ、アレボトノ遠サユヘナリト仰セラル、

〔文德實錄十〕天安二年五月丙戌、無雲而雷、戊子、無雲而雷、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年六月十五日辛丑、不雨而雷、

〔祇園執行日記〕天文二年四月十三日、八ノ前ヘ程ヨリ天氣ヨク候ニ雷ナリ候、又常ニ替リ、大キナル木樵子ノ樣ナル霰フリ候、其後雨ニ交リフリ候、雷シタヽカニナリ候、人ヲモ取候ツルゲニ候、

〔大海のはし〕この內府〇中院通茂は、雷のなりはためくを、ことに好みきかせ給ひけり、常に喘をやませ給ひけるが、いみじうおこりなやませ給ふときも、雷なり出でぬれば、卽おこたらせ給ひけり、有る時には、夕だちいみじうするに、寢殿のむねにのぼらせ給ひて、大笠などめしてぞ聞かせ給

過矣、向所見烟中突起者悉雷也、凡聲自下聞之則震、自上聞之則否、所謂山頭只作嬰兒啼者是已と見えたり、富士山をはじめ諸高山いづれも此趣に異なることなし、文章の妙よくその見聞のさまをうつし得たりといふべし、

〔論衡 六〕雷虛篇

盛夏之時雷電迅疾、擊折樹木、壞敗室屋、時犯殺人、世俗以爲擊折樹木、壞敗室屋者天取龍、其犯殺人也、謂之陰過、飮食人以不潔淨、天怒擊而殺之、隆隆之聲、天怒之音、若人之呴吁矣、世無愚智莫謂不然、推人道以論之、虛妄之言也、夫雷之發動、一氣一聲也、折木壞屋亦犯殺人、犯殺人時亦折木壞屋、獨謂折木壞屋者天取龍、犯殺人罰陰過、與取龍吉凶不同、並時共聲非道也、○中略 圖畫之工、圖雷之狀、纍纍如連鼓之形、又圖一人若力士之容、謂之雷公、使之左手引連鼓、右手推椎、若擊之狀、其意以爲、雷聲隆隆者、連鼓相扣擊之音也、其魄然若裂者、椎所擊之聲也、其殺人也引連鼓相椎、幷擊之矣、世又信之莫謂不然、如復原之、虛妄之象也、夫雷非聲則氣也、聲與氣安可推引而爲連鼓之形乎、如審可推引則是物也、相扣而音鳴者、非鼓卽鐘也、夫隆隆之聲、鼓與鐘邪、如審是也、鐘鼓而不空懸、須有簨簴、然後能安、然後能鳴、今鐘鼓無所懸著、雷公之足無所蹈履、安得而爲雷、或曰、如此固爲神、如必有所懸著、足有所履、然後而爲雷、是與人等也、何以爲神、曰神者恍惚無形、出入無門、上下無根、故謂之神、今雷公有形、雷聲有器、安得爲神、如無形不得爲之圖象、如有形不得謂之神、謂之神龍升天實事者、謂之不然、以人時或見龍之形也、以其形見故圖畫升龍之形也、以其可畫故有不神之實、難曰、人亦見鬼之形、鬼復神乎、曰人時見鬼、有見雷公者乎、鬼名曰神、其行蹈地與人相似、雷公頭不懸於天、足不蹈於地、安能爲雷公、飛者皆有翼、物無翼而飛謂仙人、畫仙人之形爲之作翼、如雷公與仙人同、宜復著翼、使雷公不飛、圖雷家言、其飛非也、使實飛不爲著翼又非也、夫如是、圖雷之家畫雷之狀皆虛妄也、○中略 禮曰、刻尊爲雷之形、一出一入、一屈一伸、爲相校軫則鳴、校軫之狀(校軫或作佼軫)鬱

天暦御製上○村

君をのみおもひやりつゝ神よりも心のそらになりしよひかな

〔枕草子八〕名おそろしき物 いかづちは名のみならずいみじうおそろし

〔枕草子十〕せめておそろしき物 よるなる神

雷神

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智、爲三段、其一段是爲雷神、

○按ズルニ、雷神ノ事ハ神祇部神祇總載篇ニ詳ナリ、

〔政事要略二十六年中行事〕寛平御遺誡云、○中略雷公祭、年來有驗、不闕之、

〔延喜式一四時祭〕二月祭 鳴雷神祭一座大和國添上郡十一月准此、坐

三月祭 霹靂神祭○下略

〔三養雜記四〕雷公連鼓を負の圖 雷公を畫けるに、連鼓をおふのかたを圖すること、王充論衡に見えたるは、世人のしるところなり、しかるに觀世音菩薩の眷屬に風伯雷公あり、金剛阿吒婆俱經に、雷の連鼓を負へること見えたり、圖像抄などにも亦連鼓をおふ圖あり、おもふに論衡に俗說といへるは、もと佛說に出たりといふことをしらざるか、さて連鼓を負へる圖は、法華經の普門品に、雲雷鼓掣電の文によりて、その聲の響を形容したるにやとおもはるゝは、いかゞあるべき、佛家には猶ふかき意もあるべくや、再おもふに、據古遺文の古篆に雷字を[illegible]かくの如くに作るは、何となく連鼓のかたちによしありとおもはる、その窮理說には、氣海觀瀾に、夫雷鳴卽越列吉的爾之迸炸、而與礮聲同其音、與雲反響斯聞殷々云もの、理に於て間然なし、因云、佩文齋詠物詩選に、山上に雷を聞の詩あり、宋蘇軾云、唐道人言、天目山上俯視雷、而每大雷電、但聞雲中如嬰兒聲、また願豊堂漫書に、夏日躋菴與客登、顧見山下、白霧彌漫、若大海然、而山頂赤日了無纖翳、俯視突烟暴起、或丈餘遞至尺許、亦無所聞、頗異之、從者以爲雨作也、及下山村麓人云、適有驟雨、挾震雷數百已

〔東雅天文一〕雷イカヅチ　イカヅチとは畏るべきの神といふが如し、上古の語に、イツといひ、イカシといひしは、嚴畏の義也、されば舊事紀には、嚴の字、讀てイツといひ、日本紀には亦讀てイカシといふ、〇中略雷の字、讀てツチといふ、山雷をして天香山之五百箇眞賢木を掘じといひ、火神の名を嚴香來雷とし、別の名を嚴山雷とすと云ふが如きこれ也、〇中略嚴雷といひし事、霹靂の神をのみいひしとも見えず、また山木水土の如き其神をいひて、イカヅチとせしのみにもあらず、雄略紀に、天皇三諸岳の大蛇を見畏給ひ、名を賜りて雷となされしと見えたれば、此時までも畏るべき者を、崇め尙びて雷といひし事、猶これ太古の俗の如くなりしとぞ見えたる、イカヅチ又はナルカミともいひ、ナルカミは鳴神なり、雷霆の聲あるを稱し謂へるなり、霹靂をカントキなどいふも、皆是神をもて稱する事、ツチといふの義に相同じ、カントキとは、疾雷といふが如し、或説にイカヅチとは、怒の義なり、雷は天の怒也といふ事あり、ツチとは鎚なり、人物を撃の義なりといへり、義合へりとも聞えず、されどイカルといふも、イカとは即嚴之義なり、ルといひ、リといふが如きは語助也、是又畏るべきの義によれり、

〔古事記傳六〕雷は万葉三十二丁に伊加土、薬師寺佛足石の御歌に伊加豆知、これら此名の正しく見えたるなり、名意は嚴なり豆は例の之に通ふ助辭、知は美稱なり、

〔萬葉集十九〕太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天皇歌一首

天雲乎、富呂爾布美安多之、鳴神毛、今日爾益而、可之古家米也母、

右一首、傳誦掾久米朝臣廣繩也、

悲傷死妻歌一首幷短歌作主未詳

天地之、神者無禮也、愛、吾妻離流、光神、鳴波多𡢳嬬、携手、共將有等、念之爾、情違奴、〇下略

〔古今和歌集十四戀〕題しらず

よみ人しらず

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふ中をばさくる物かは

〔拾遺和歌集十九雜戀〕かみいたくなり侍けるあした、宣陽殿の女御のもとにつかはしける、

雷 電併入

雷ハ、イカヅチ、或ハカミト云ヒ、又字音ニテライト云フ、奈良朝以來、雷鳴ノ時ニハ、侍衞ノ官人必ズ宮中ニ祗候セシガ、後ニハ大雷三度ニ及ベバ、左右近衞ハ御在所ニ、左右兵衞ハ紫宸殿前ニ陣シ、內舍人ハ春興殿ノ西廂ニ立ツ、之ヲ雷鳴陣ト云フ、後世ハ唯藏人及ビ瀧口御壺ニ候シテ鳴弦シ、御持僧念誦スルニ止マレリ、霹靂ハ、カミトケ、或ハカミトキト云フ、卽チ落雷ナリ、落雷ノ爲ニ火災ヲ起シ、屋舍ヲ破ラレ、人畜ノ害セラルヽコト屢〻ナリ、

電ハ、イナビカリ、イナヅルビ、或ハイナヅマト云フ、電光ナリ、

名稱

〔倭名類聚抄 神靈二〕雷公　兼名苑云、雷公一名雷師、(力回反、和名伊加豆知、一云奈流加美、)

〔箋注倭名類聚抄 一神靈〕按、雷公出淮南子假眞訓、論衡雷虛篇、及駁五經異義引見禮記正義、雷師見離騷經、

〔段注說文解字 十一下雨部〕靁、陰陽薄動生物者也、(各本作陰陽、今正、動下各本有靁雨二字、不辭、今依韵會本正、薄音博、迫也、陰陽迫動卽謂靁也、迫動下文所謂回轉也、所以回生萬物者也、)从雨畾、象回轉形、(許書有畾無畾、凡積三則爲眾、眾則盛、盛則必回轉、二月陽盛靁發聲、故以畾象其回轉之形、非三田也、韵書有畾字、訓田間誤矣、凡許書字有畾聲者、皆當云靁省聲也、昔回切、十五部、凡古器多以回爲靁、)𩇓籒文靁間有回、(當作畾、間有回者畾、)回靁聲也、(說畾間有回之意、)𩆷古文靁、𩇔古文靁、

〔釋名 一釋天〕雷硍也、如轉物有所硍、雷之聲也、

〔類聚名義抄 一辵〕遌(イカヅチ、ハタメク、)　遌(正)　〔同 七雨〕雷(音儡、イカヅチ、一云ナルカミ、)　靁(正)　雷公(イカヅチ)　雷師(同)

霹(怖狄反、イカツチ、ヒサク、)　霹靂(辟歷二音、カミオツ、一云カミトキ、)

〔八雲御抄 三上天象〕雷　なる　ちはやぶると後撰によめり　なべてはちはやぶるは神也　万十九、

あまぐもを、ふろにふみあたし、なる神とは、あまぐもを、はれにいたしといふ心と、範兼說なり、

〔日本釋名 上天象〕雷　いかりてつちにおつる也

〔假名暦註解〕二百十日　立春ヨリ二百十日メナリ、秋風烈キ時ナリ、

○按ズルニ、二百十日ノ事ハ、歳時部時節篇ニ載ス、

〔利根川圖志〕一天候　黑雲急に起るは、その方より暴風來る徴なり、曉に黑雲奇峯を爲すは、その方に風行くなり、東南風は晴にて、西北風は雨なり、然れども時節に因て差あり、　日光山よく晴れたるは北西風なり、(北西風、又ヤマデといふ、日光山より出づるの義なり、)曇りたるは雨徴なり、筑波山よく晴れたるは北東風なり、(筑波ナロシともいふ、)雨日は晴徴とす、富士山に黑雲あれば西南風なり、(これをフクカタといふ、南西風はフクミナミといふ、)曇天に富士山のみ晴れたるも西南風なり、　鳥飛下るに必風に向ふ、是を以て風の方向を知る、○中略　星光搖くは、大風の徴なり、

〔羅山文集〕五十六雜著　戲題風神井詩　寛永十六年作

佐久間親衛校尉謂余曰、室家嘗相告曰、良人貌似風神、人之所憚也、聞而笑之、後一夕候營中、有命曰、爾似風神、雖知爲其戲譴、然唯而平伏退、公之時、告室中曰、鈞旨如此、婦之言相協、不亦奇乎、相共又笑、因倩畫工探幽圖之、願乞一言以記之、答曰、夫風者大塊之噫氣也、其神曰飛廉、在星曰箕伯、在卦曰巽二、在營曰地籟、在獸曰貍母、隱其名曰封家十二姨、其發則觸物有聲而無色、然天地之間無所不有焉、若人爲風伯、則亦奇乎小詩一首以請故應之、

吹出土囊口、封姨爲配偶、于喁播俗塵、在斯阿誰某、

〔續近世畸人傳〕五建凌岱

俳諧を業とせる時、淺草門前に住、雷神のかた〴〵に風神の袋負へる形ををかしとて、自涼袋と名乘しが、俳諧を止てのち、文字を凌岱とあらたむ、

是ハ信濃國ハ極風早キ所也、仍ナスハノ明神ノ社ニ、風祝ト云物ヲ置テ、是ヲ春ノ始ニ、深物ニ籠居テ、祝シテ百日之間尊重スルナリ、然者其年凡風閑ニテ、爲農業吉也、自ラスキマモアリ、日光モ令見ツレバ、風不納云々、其意也、是ハ能登大夫資基ト云人、俊頼ニ語云、如此事承之、歌ニ讀ト思也云云、俊頼答云、無下ノ世俗事也、如此事更々不可詠不便云々、仍存其由之處、後日詠之、尤腹黑事歟、五品後悔云々、

〔萬寶鄙事記六占天氣〕風　七八月大風ふかんとては、必虹のごとくにしてきれたる雲たつ、これを颶母といふ、　冬日くれて風和かになる時は、明朝も又風はげし、　日の内に風おこるはよし夜るおこるはあしゝ、日のうちに風やむはよし、夜半にやむはあしゝ、これは寒天のときの事なり、

東風急なるは蓑笠をそなふべし、東北風も雨、南風はその日たちまちにふらず、明る日か其暮にか必あめふる、西風北風はおほくは晴、北風は西風よりいよ〳〵よし、但し春北風ふけば時雨多し、秋は西風にて雨ふる、南風は四時ともに雨ふる、南に海ある所は、南風にも雨ふらずといふ所有、東に海をうけたる所も同じ、　乾風はかならずはるゝ、故に、いぬゐ風を日吉と云、　冬南風ふけば、二三日の間にかならず雪ふる、　風西南より轉じて、西北風になれば彌大なり、　孫子曰、ひるの風はひさしく、よるのかせはやむ、　大風ふかんとては、衆鳥空に鳴てひるがへり飛て、群魚水面におどり、星うごき、日月に暈有て、雲きれ〳〵にしてとぶ、其色白く黃にして、あつまり散る事さだまらず、雲日をめぐり、雲のあし黃にして行事はやし、　正二月に北風吹ば、必雨そふ物也、　西風久しければ火災有、物をかはかす故なり、西北風もつとも火災のうれへあり、〇中略　知風草といふ草有、和名をちから草共、風ぐさとも云、かやに似たり、其ふしの有無を見て、そのとし大風の有無をしる、節一ッあれば其年一度大かせ吹、二ッあれば二度ふく、三ッあれば三度ふく、本にあれば春ふく、中にあれば夏秋ふく、末にあるときは冬大風有、

雜載

〔萬葉集抄一〕伊勢國風土記云、〇中略天日別命、神倭磐余彥天皇〇神武自彼西宮征此東州之時、隨天皇〇中略天日別命奉勅東入數百里、其邑有神、名伊勢津彥、天日別命問曰、汝國獻於天孫哉、答曰、吾覓此國、居住日久、不敢聞命矣、天日別命發兵欲戮其神、于時畏伏啓云、吾國悉獻於天孫、吾敢不居矣、天日別命令問云、汝之去時、何以爲驗、啓云吾以今夜起八風、吹海水、乘波浪、將東入、此則吾之却由也、天日別命、令整兵窺之、比及中夜、大風四起、扇擧波瀾、光耀如日、陸國海與朗、遂乘波而東焉、古語云、神風伊勢國、常世浪寄國者、蓋此謂之也、

〔日本書紀三神武〕戊午年十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之粮、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘破斬之、是役也、天皇志存必克、乃爲御謠曰、伽牟伽筮能伊齊能于瀰能、於費異之珥夜〇下略

〔萬葉集一雜歌〕和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌、
山邊乃、御井乎見我氐利、神風乃、伊勢處女等、相見鶴鴨、

〔古事談一王道后宮〕延喜聖主臨時奉幣之日、出御南殿、本自有風、把笏着靴欲拜之間、風彌猛、御屛風殆可顚倒、被仰云、穴見苦ノ風ヤ、奉拜神之時、何有此風哉云々、卽剋風氣俄止云々、

〔枕草子九〕風は　あらし、こがらし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹たる花かぜ、いとあはれなり、八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風、いとあはれ也、雨のあしよこざまにさはがしう吹たるに、夏とをしたるわたぎぬの、あせの香などかはき、すゞしのひとへにひきかさねてきたるもをかし、此すゞしだに、いとあつかはしうすてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんと思ふもをかし、あかつき、かうし、つま戸などおしあげたるに、嵐のさと吹わたりて、かほにしみたるこそ、いみじうをかしけれ、九月つごもり、十月一日の程の空うちくもりたるに、風のいたう吹に、黃なる木の葉どものほろ〳〵とこぼれおつる、いとあはれ也、

〔袋草紙三〕俊賴歌云　しなのなるきそ地のさくらさきにけり風のはふりにすきまあらすな

微風

歳在戊子、〇文政十一年維秋中、八日九日天大風、風來自西南海上、肥前筑後當其衝、怒浪大齧穴門破、防萩次第來擊撞、掌大雨點撲人腥、雨邪潮邪聲洶洶、大屋掀撼人盡走小屋併人飛入空、大木倔强姑抗拒、力竭戰敗斃老龍、烏鳥失其巣、斮死毙雌雄、陸已如此況在海、萬艑四散失所在、與船葉碎越船破、雖然可修又可改、歐邏巴船號浮城、吹之上陸陷地底、莫能引拔致於水、賞以互市利一載、愚民莫應涕滂沱、曰何必恤喎蘭陀、吾屋盡破、吾田無禾、無緣出常科、何況供倍多、金銀宮館成旋圯、奈此封姨降嫁何、君不聞貞觀中、海盜肥後沒郡六、大鳥來集宰府屋、朝廷惶懼問大卜、權帥少貳各陳策、水田課耕緩貢調、停止交易務儲蓄、嗚呼古人太過慮、何不坐食駭鯨肉、

〔和漢三才圖會三天象〕颶具音うみのおほかせ石尤風　海中大風也〇中略　按、勢州、尾州、濃州、驒州、有不時暴風至、俗稱之一目連、以爲神風、其吹也、拔樹仆巖壞屋、無不破裂者、惟一路而不傷他處焉、勢州桑名郡多度山有一目連祠、相州謂之鎌風、駿州謂之惡禪師風、相傳云、其神形如人着褐色袴云々、

〔閑田次筆一〕過し壬戌のとし〇享和二年七月晦日、上京今出川邊に一道の暴風、屋を壞り、天井床疊をさへ吹上、あるひは赤金もておほへる屋根などもまくり取離たり、纔に幅一間ばかりが間にて、筋に當らざれば、咫尺の間にて障なし、末は田中村より叡山の西麓にいたりて止りしとぞ、蛇の登るならば雨あるべきに、一雫も降らず、これ羊角風といふものかといへり、北國にては折々あることにて、一目連と號くとぞ、

〔倭名類聚抄一風雪〕微風　崔豹古今註云、微風大搖、此間云、古加世、

〔類聚名義抄十風〕微風コカセ　颸音遲、風、コカセ、

〔赤染衞門集〕まうでつきて見れば、〇熱田神宮いと神さびおもしろき所のさまなり、あそびしてたてまつるに、かせにたぐひて物のおともいとをかし、

笛のねに神の心やたよるらん森のこかせもふきまさるなり

中云々、或云善如龍王去此池云々、

〔吾妻鏡 二十七〕安貞二年十月七日、雨降、自戌刻至子時大風、御所侍、中門廊、竹御所侍等顛倒、其外諸亭破損不可勝計、抜其梁棟吹棄于路次、往反之類爲之少々被打殺云々、

寛喜二年九月八日、自申一刻至寅四點、大風殊甚、御所中已下人家、多以破損顛倒、

〔鳩巣小説 下〕一正德三年六月六日、午ノ下刻、高田郡〇安藝國保坂村ノ山大谷ト申處ニ、ノボリノヤウナル物二本出申候、夫ヨリ豊田郡久芳村ノ田方カニノ木山ト申所ニテハ、一本ノヤウニ見ヘ申候、右ノボリノ樣成白キモノ、カニノ木山ニテ消ヘ申候、然處ニ晴天俄ニ曇リ、黒雲ノ内白キ差ワタシ四間バカリノ丸キモノ出候テ、北内ヨリ色黒白ノ烟ノ樣ナルモノ吹出シ、同時豊田郡野善村ヒラキ坂ト申處ニモ、右ノ通ナルモノ出、烟ノヤウナルモノ吹出シ申候、右兩所ヨリ出申モノ、一ツニ成候ト存ジ候ヨリ、大風一筋吹出シ、野善村助貞山ニ吹ワタリ、カタチ六七間四方程ニナリ、烟リノ樣ニ連ナリ、高サ四五間十間バカリ上、クル〳〵ト舞ヒ、又ハ地ニテ舞通リ申候、然處鳩ノ少シ大キナルモノ、件ノ物ノ上ニ一廻居申候、夫ヨリ國光吉兵衛ト申モノヽ家吹ハギ、其外近所ノ百姓ノ家大分ニ損ジ申候、稻ノ中ナドヲ通リ申時ハ、水吹上川原ニ成申候、夫ヨリカシコ爰廻リ止リ、又ハ跡ヘ戻リ、兼貞ウタリノ山ヘ舞ノボリ、傘一本薪三束、其外ヒロゲ置候ユヘ、草ナド吹コト落著見ヘ不申候、右ノスサマジキコトニ付、百姓ドモ皆々肝ヲ消、ヲソレ居申候、サテ右ノモノヽ舞申節ハ、殊ノ外騒敷候テ、常ゝ雲トモニ廻リ候ヤウニ見ヘ申候、右廻リ候物ノ内、少シ赤キヤウニ見ヘ申モノモ有之、又黒キ人ノヤウナル物ト見候者モ有之、又人ニヨリテ人ノ首ノヤウニ見申者モ有之候、夫故婦人ナド見候テハ氣ヲ取失ヒ、行カヽリ戻申者モ多ク有之候、近キ村ハ大雨フリ申候、野善村ハ雨フリ不申候ヨシ、

〔山陽遺稿 三〕大風行

華門、可被宛木工歟、又美作、美乃、信乃宛所頗輕、播磨應天門其材木定有歟、仍所作輕、又伊與如此、越後材木難有國司劣、所役重歟、攝津所宛又過差、相量可平均歟者、余申云、右大臣被申云、大略所宛也、又々殿下御覽可被定仰也者、就中先年被宛八省豐樂院仰事時、大略於仗座宛之、又於御宿所改定、於大臣里第、後日書定文、覆奏已有先例、可然之樣可被量仰也者、此次他雜事等申請、及深更夜退出、

〔百練抄四後朱雀〕長久元年七月廿六日、大風、伊勢豐受大神宮正殿、幷東西寶殿瑞垣、悉以顚倒、八省含嘉堂同顚倒、

〔百練抄四後冷泉〕康平二年七月十二日、大風起、雲飛損、左近陣廊八間以下、諸司舍屋多顚倒、

〔中右記〕寬治五年正月十二日、今日大雨、入夜大風、小屋皆悉以破損、八省西廊顚倒云々、

〔扶桑略記三十堀河〕寬治六年八月三日甲寅、大風、諸國洪水高潮之間、民畑田畠多以成海、百姓死亡不可稱計、伊勢太神宮寶殿一宇幷四面廊等、皆爲大風顚倒、

〔百練抄六崇德〕大治三年八月二日、暴雨大風、陽明門顚倒、

長承三年九月十二日、大風殊甚、拔樹顚屋、諸司官舍、京中人屋、一宇不全、今年風水火三災並起、

〔百練抄七近衞〕久安六年八月四日、大風、大學寮廟堂前舍一宇顚倒、今日釋奠也、又大內仁壽殿顚倒、

〔本朝世紀〕仁平三年九月廿日丙午、終日暴風大雨、今日伊勢齋內親王嘉子可有群行御禊也、權大納言宗能卿、中納言重通卿、參議彙長卿、敎長卿、參野宮云々、暴風大雨、其勢猛烈、高野川葺屋、皆以顚倒、野宮舍屋、多以顚覆、勢多頓宮六十餘宇顚倒、仍延引、又土御門被造內裏南殿、大極殿後戶扉一枚顚倒、賀茂別雷社前大木顚倒、打損舍屋數間云々、

〔山槐記〕安元元年九月十二日庚寅、天陰、自亥終剋至丑終剋、大風、京中舍屋無一全、後聞橫川根本榻、爲大風被吹仆、○中略又聞天王寺西向鳥居懸額鳥居也顚倒云々、

〔百練抄八高倉〕治承元年四月十八日、未剋暴風、其聲如炎上、三條大宮人家門多顚倒、件風起於神泉苑

安福殿 進物所 木工寮 月華門 同寮巳上廿日改定

左近陣前軒廊 御輿宿巳上修理職

八省院 承光堂九間北五間尾張國、次四間丹後國、同廿五日改定丹波、 康樂堂伊與國、同日改讃岐、 宣政門以南廊廿二間 會

昌門以東廊廿二間 已上造八省行事所

應天門播磨國丹波國、同日改定伊與、 同門西二蓋廊十七間東十間伊與國、東八間但馬國、次三間能登國、同日東五間美作、次四間備前國、次七間越後國、次三間越中國、次三間加賀國、次四間備後國、次四間周防國

豐樂院 明儀堂十九間北五間備後國、同日改安藝、次五間備前國、次七間美乃國、次五間伯耆國、次四間紀伊國、次七間美作國、但馬、 豐樂殿西軒廊六間能登國、同日改信乃、 壽景樓南廊十一間上野國、同日改越後、 觀德堂以南廊六間越中國

儀鸞門以東廊十一間西七間安木國、次四間伊勢國 儀鸞門東廊三間巳上越後、同日改越中、 儀鸞門東廊八間同日改上野、同門西廊二間、巳上木工寮 同門以西廊六間東三間駿河國、次三間遠江國 同門西廊六間 豐樂殿西廊六間巳上信乃

儀鸞門丹波國播磨國 豐樂門美作國備前國同日改因幡後司 不老門美乃國伯耆國 郁芳門周防國、同日改尾張、 美福門讃岐國、同日改定備中、 皇嘉門近江國 安嘉門阿波國 達智門因幡國、同日改土佐、 宮城南門土佐國、同日改丹後、

中院 七間三面檜皮葺屋一字攝津國 神嘉殿東西廊廿間西十間和泉國、同日改備中、東十間加賀國、同日改伊與、 四間一面檜皮葺西屋一字和泉國、備中、 三間渡殿一字攝津國、同日改伊與、

神祇官 北廳屋信乃國紀伊國 南屋一字常陸國 西屋一字武藏國 倉一字若狹國

宮內省 廳屋七間東四間和泉國、同日改三河、次三間伊賀國、同日改甲斐、

治部省 廳屋七間東四間參河、同日改加賀、次三間能登

長元七年八月十九日

右府於仗座付頭辨、御被示辨云々、大略所量充也、重能御覽、若有被改定事、以後日可改書之由、申關白、又明年得替國難充、今年中不可仰舉、然者暫不賜官府、又當御忌方之國々、今年不可仰行事所、隨定御忌當否可強行也、如此之趣、聞可申者、被退出了、僕有召參殿御宿所、頭辨因緣証候被仰云、修理職宛所、進物所、月

如何、有禁中觸穢之中、如聞大學廟殿顚倒、廟器等皆以破損云々、如此之時、有用中丁之例乎、申云、天德年有大裏穢用中丁、依彼例可被行歟者、仰云、早參內令頭辨奏此由、可用中丁之由、可仰供奉諸司者、頃之出給、良久言談、風損事頗有歎念氣、尤可然云々、及曉歸家、傳聞左右辨參入、申定考饗不具之由、被承可延之由云々、　十一日戊辰、天晴、或者云々、中院東西舍、幷廊北舍、大學紀傳明法曹司舍、穀倉院廳、幷雜舍顚倒、又右馬寮厩町餘顚倒、御馬五匹被打襲、雖然翌日壞閉見之、一匹不損云々、又紀傳曹司學生等、同被打襲、雖被疵不死、明法厨女又雖打襲不死云々、　十二日己巳、天晴、人々云、大風夜洪水泛、山崎河尻長洲邊、人畜屋財多以損死、又諸國之船同流云々、午後參殿、相次前帥四條中納言被參入、被仰云、可令注內外諸司所々損色之由、昨日令仰下了、注進後可分宛八省豐樂院諸門等於諸國也、又諸司等隨損大少、仰長官隨申請量給爵、若其司官人等、欲令修造如何者、彼此申可注之由、頃之令參內給、相次人々被退出、一日後漸聞之、諸司所々、京畿人宅、諸山神社佛寺衆木、或落其材顚破、或拔其根折倒云々、風勢雖劣永祚、物損多勝彼年云々、　十九日丙子、天晴、午刻參內、右府侍從中納言被參入、相次宮內卿、右衞門督、左兵衞督參入、頭辨仰右府云、風損殿舍門廊堂等、可分宛諸國、但諸司可作事如何、令諸卿定申、彼此被申云、隨損破大少計給爵、若本司本府允屬等可令修造歟、仰依定申、又被仰云、備中國司修造應天門幷東西廊樓等、可重任之由蒙宣旨、修造之了、但東樓幷廊少少未葺了、仍不覆勘之間、爲大風門幷西廊顚倒之由、行事所有令申、重本國可造立歟、將可被宛他國歟、彼此被申云、造畢之由、行事等所申、敢不可被疑、未葺畢樓廊等、令本國可令終其功、顚倒門廊者、任秩已欲終、何重被宛哉、早可被仰他國也、仰依定申也、又被仰云、右近府廳、幷弓場屋、各一字造立、依有申爵者、先日被下宣旨、隨新造立、欲葺檜皮之間、爲風共顚倒、今令申云、重造立已無其力、作葺弓場一字、欲預榮爵者如何、共被申云、依請被免有何事乎者、仰依請、次國宛、先被下損色文二通、（諸司一通、八省豐樂院一通、）僕執筆、可修造風損所々事、

堂、左近衞府西門一宇、待賢門、藻壁門、殷富門、修理職西門、織部司、大炊舍一宇、幷倉一宇、大膳職倉一宇、兵庫倉一宇、其外不可勝計、

〔左經記〕長元元年九月三日甲午、從昨日未剋及申、大風、京中屋舍、多以破損云々、富小路以東如海、上東門院幷法成寺水入云々、○中略 頭辨被示云、被撿諸司京內風損之使、先例如何、報云、諸司官吏諸寺殿上人、京內諸衞官人云々、　四日乙未、從右府被示云、連月大風、京畿外國多風損之由云々、豐樂院門等、幷府廳顚倒、府廳可造立事、府力難及歟、申可加府力欲作云々、　七年八月九日丙寅、天陰、自昨日降雨之中、終夜終日殊甚、定有田舍愁歟、及晚景自艮風漸扇、入夜東風大吹、所々舍屋幷中門等、多以損破、及夜半之間、風成巽、其勢甚盛、樹木中門屛、所々雜舍、悉以顚破、成人之後、未見如此之風、及曉成南風、其勢漸休、　十日丁卯、天陰、人々云、京條大小屋舍顚破殊甚、又諸司所々如此、人畜之類多以被打死云々、頭中將御宅、西板屋顚倒、下人多被打覆之中雜仕女幷其兒童死去、自餘或早出、或未死云々、厨家別當史守輔來云、明日定考饗頭等申云、上客幷所々饗等、兼日營儲、而各住宅皆以顚破之間、同以損破、忽申无爲術之由、爲之如何者、仰云、天慶間依大風定考延引、是已同事也、早申左隨彼命可左右也者、又申云、今日釋奠廟供等物、依損穢可延引云々、及午剋、侍從中納言相共參內、立春花門下招頭辨、(今朝隔牛斃之人著座愚宅、又中納言御家有犬死云々、仍共立陣外、)辨被來向、各示雖有觸穢、去夜風依大事、乍立陣參入之由、辨云、禁中又有觸穢者、仍參入、(中納言日來有勞不被束帶、宿衣也、)徘徊南殿邊、禁中損壞不可勝計、此中陣前、軒廊、御子宿、春興殿、月華門、進物所等顚倒、辨云々、今曉關白殿令參入給、頭之內大殿中宮權大夫等被參入、殿下相共、巡撿八省豐樂院等、八省堂二字、巽角廊五十餘間、應天門幷東西廊顚倒、豐樂院清暑堂、幷豐樂殿東廊、儀鸞門東西廊顚倒、又美福門、皇嘉門、達智門、郁芳門、除左衞門之外、五衞府廳、幷雜舍、大膳掃部等舍屋、悉以顚倒云々、又應天門馬被打斃、其穢觸來禁中也、此外未聞顚破所々、余參中宮御方、頭之歸南殿、納言共參宮、次罷出參關白殿、召大外記賴隆眞人、史隆佐朝臣、被仰云、今日釋奠祭

門、內豎所廳、兵庫寮南門、典藥寮南門、式部省錄曹司、神祇官舍二字、大炊大膳雜舍等、悉以顚倒、

〔日本紀略 七圓融〕天元三年七月九日、午後大風暴雨、宮中樹木諸門、羅城門等顚倒、東西京人宅多以破損、

〔日本紀略 九一條〕永祚元年八月十三日辛酉、酉戌剋大風、宮城門舍多以顚倒、承明門東西廊、建禮門、弓場殿、左近陣、前軒廊、日華門、御輿宿、朝集堂、應天門東西廊卅間、會昌門、同東西廊卅七間、儀鸞門、同東西廊卅間、豐樂殿東西廊十四間、美福、朱雀、皇嘉、偉鑒、達智門、眞言院、幷諸司雜舍、左右京人家、顚倒破壞不可勝計、又鴨河堤所々流損、賀茂上下社御殿、幷雜舍、石淸水御殿東西廊顚倒、又祇園天神堂、同以顚倒、一條北邊堂舍、東西山寺皆以顚倒、又洪水高潮、畿內海濱河邊民烟人畜田畝爲之皆沒、死亡損害、天下大災古今無比、　十七日乙丑、於八省院奉遣伊勢以下諸社幣帛使、宣命云、去六月十九日夜、賀茂玉垣中數星散、去月中旬彗星連夜呈光、又近日霖雨、幷去十三日大風損等被載辭別、　九月七日乙酉、於八省院奉幣伊勢、石淸水、賀茂、松尾、平野、稻荷等、依大風損也、

〔今昔物語 十九〕比叡山大鐘爲風被吹轉語第卅八

今昔、比叡山ノ東搭ニ大鐘有ケリ、高サ八尺廻リ也、而ル間、永祚元年己丑八月ノ十三日、大風吹テ所所ノ堂舍寶搭門々戸々ヲ吹倒シケルニ、此ノ大鐘ヲ吹轉ハシテ、南ノ谷ニ吹落シテケリ、最初ノ房ノ棟板敷ヲ打切テ谷樣ニ轉テ、次々ノ房共同ジク打拔ツヽ、七ツノ房ヲ打倒シテ、南ノ谷底ニ落入ニケリ、夜半計ノ事ナレバ、此ノ房共ニ人皆寢入タル程ナレドモ、其レニ人一人不損リケリ、其ノ比ノ希有ノ事ニナム云喤ケル、

〔日本紀略 十一條〕長德四年八月廿日丙午、自卯至亥時、大風、宮中諸司多以顚倒、武德殿、御書所顚倒畢、

〔日本紀略 十三後一條〕寬仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹、壞內裏所々、左近陣前軒廊、朱器殿、左衛門陣北舍一字、春華門陣舍東一字、修明門陣舍東一字、右衛門陣舍、宜秋門一字、八省院東廊廿餘間、延祿

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年八月廿日辛酉、自卯及酉大風雨、拔樹發屋、東西京中居人廬舍顚倒甚多、被壓死者衆矣、內膳司檜皮葺屋顚仆、采女一人宿其中、避逅免害、時人奇之、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜十三年八月朔日、大風拔木發屋、　五日甲戌、依仁壽二年閏八月十二日例、計過害者、凡一千五百十七烟、賜物有差、

〔貞信公記〕延喜十三年八月一日、大風猛烈、公私屋舍多顚倒、　二日、今日有勅、遣使左右京、令撿被損風害、爲賑給、　九月九日、宿職依有風損停止節事、但侍從以上口菊酒如例、今日以前豫申損田廿國不堪佃田廿四國、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十三年十一月七日乙巳、大風猛烈、左馬寮顚倒人死、

〔日本紀略二朱雀〕天慶七年九月二日辛未、夜大風暴雨、諸司官舍京中廬舍顚倒不可勝計、信濃守從五位下紀朝臣文幹、爲舍被打壓卒去、

〔日本紀略三村上〕天曆元年七月四日丁亥、今夜大風猛烈、京中廬舍或顚倒或破壞、就中宮內省南門、大藏省後廳、掃部寮西屋、左馬寮、造酒司南門、典藥寮東檜皮葺屋等顚倒、又河水汎溢、

〔貞信公記〕天曆二年六月七日、二見云々、朱雀院南池中、見如龍頭物、大膳職院屋風吹倒、打殺居野中安世、　七月廿七日、夜大風雨、屋舍多顚倒、死人有數云々、　廿八日、分遣諸衛官人於諸司、令實撿風損官舍、

〔日本紀略四村上〕天德元年十二月廿日壬申、今夜疾風暴雨、發屋折木、古今未聞之事也、

應和二年八月卅日乙卯、今日大風雨、大和近江等國、官舍及神社佛寺損壞、東大寺屏三間、力士大門等、興福寺維摩堂一宇、幢一基、新藥師寺七佛藥師堂一宇、幷數宇雜舍、西大寺食堂一宇、彌寺講堂一宇、及自餘諸寺、幷人宅等多以顚倒、京中無殊愁、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年七月廿二日丁卯、今夜大風暴雨、發屋折木、　廿三日戊辰、風猶不止、居家南

〔續日本紀 桓武 三十八〕延曆四年十月壬申、遠江、下總、常陸、能登等國、去七八月大風、五穀損傷、百姓飢饉、並遣使賑給之、

〔日本後紀 嵯峨 二十一〕弘仁二年九月癸卯、大風、破京中廬舍、　甲辰、被風損者、給米有差、

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁七年八月己酉、夜大風、倒羅城門、京中諸國亦多被害、賜諸衞見侍者祿、

〔類聚國史 神祇 三〕弘仁七年九月戊辰、奉幣於伊勢大神宮、去八月十六日夜、爲停大風所禱也、

〔續日本後紀 仁明 三〕承和元年八月己亥、暴風大雨相幷、折拔樹木、壞民廬舍、由是走幣畿內名神、祈止風雨、　庚子、夜裏風雨猶切、達旦不靜、城中人家往往倒壞、

〔續日本後紀 仁明 十七〕承和十四年六月丙申、大風發屋折木、雨亦降、入夜彌猛、　丁酉、遣使奉幣於松尾大神、祈之、

〔文德實錄 一〕天安二年六月己酉、大宰府言、去五月一日大風暴雨、官舍悉破、青苗朽失、九國二島盡被傷、

〔三代實錄 清和 十六〕貞觀十一年七月十四日庚午、風雨、是日肥後國大風雨、飛瓦拔樹、官舍民居顚倒者多、人畜壓死不可勝計、潮水漲溢、漂沒六郡、水退之後搜摭官物、十失五六焉、自海至山、其間田園數百里陷而爲海、　十月廿三日丁未、是日勅曰、妖不自作、其來有由、靈譴不虛、必應粃政、如聞肥後國迅雨成暴、坎德爲災、田園以之淹傷、里落由其蕩盡、夫一物失所、思切納隍、千里分憂、寄飯牧宰、疑是皇猷猶鬱、吏化乖宜、方失訛心、致此變異歟、昔周郊偃苗、感罪己而弭患、漢朝壞室、據修德以攘災、前事不忘、取鑒在此、宜施以德政、救彼凋殘、令大宰府、其被災害尤甚者、以遠年稻穀四千斛、周給之、勉加存恤、勿令失職、又壞垣毀屋之下、所有殘屍亂骸、早加收埋、不令曝露、

〔三代實錄 清和 二十六〕貞觀十六年八月廿四日庚辰、大風雨、折樹發屋、紫宸殿前櫻、東宮紅梅、侍從局大梨等樹木、有名皆吹倒、內外官舍人民居廬、罕有全者、

者以税給之、　七年十月乙卯朔、美濃、武藏、下野、伯耆、播磨、伊豫六國、大風發屋、仍免當年租調、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年十月庚午、安房國言、大風拔木發屋、損破秋稼、○中略加賑恤、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年八月乙亥、上總國言、去七月大風雨數箇日、雜木長三四丈已下、二三尺已上一万五千許株、漂著部内海濱也、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年十月癸丑、日向國風雨共發、養蠶損傷、仍免調庸、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年九月壬寅、攝津國御津村、南風大吹、潮水暴溢、壞損廬舍一百十餘區、漂沒百姓五百六十餘人、並加賑恤、仍追海濱居民、遷置於京中空地、　十二月丁丑、免攝津國遭潮諸郡今年田租、　六年十二月乙卯、是年八月、風水、畿内及諸國一十、百姓産業損傷、並加賑恤、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年九月丙子、太宰府言、去八月廿九日南風大吹、壞官舍及百姓廬舍、十一月甲子、詔曰、如聞去十月中、大風百姓廬舍並被破壞、是以爲修其舍、免今年田租、　丙寅、詔、賜大保已下至于百官官人絁綿、各有差、以被風害屋舍毀壞也、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年六月丁亥、日向、大隅、薩摩三國大風、桑麻損盡、詔、勿收櫃戸調庸、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年正月甲申、大宰管内大風、壞官舍幷百姓廬舍一千卅餘口、賑給被損百姓、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年八月丙寅、是月自朔日雨、加以大風、河内國茨田堤六處、澁川堤十一處、志紀郡五處並決、　十一月丁亥、去八月大風、産業損壞、率土百姓被害者衆、詔免京畿七道田租、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年八月癸未、伊勢、尾張、美濃三國言、異常風雨漂沒百姓三百餘人、馬牛千餘、及壞國分幷諸寺塔十九、其官私廬舍不可勝數、遣使修理伊勢齋宮、又分頭案撿諸國被害百姓、　辛卯、大祓、以伊勢美濃等國風雨之災也、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月己酉、土佐國言、去年七月、風雨大切、四郡百姓産業損傷、加以人畜流亡、廬舍破壞、詔加賑給焉、

吹をられたるせんざいなどを、とりあつめおこしたてなどするを、うらやましげにおしはかりて、つきそひたるうしろもをかし、

〔枕草子八〕名おそろしき物　はやち

〔相模集〕野わきいみじうしたるひ、ゆるぎのもりはいかゞと、人のとひたりしに、

ありわぶる身のほどよりは野わきする淺ちが原の露はのどけし

同日

はやちふくしげみののらの草なれやおきてはみだるふせばかたよる

〔千載和歌集四秋〕百首歌奉ける時、秋歌とてよめる、　藤原季通朝臣

野分するのべのけしきを見渡せば心なき人あらじとぞ思ふ

〔夫木和歌抄十九風〕貞應三年百首風、湊のはやて、　爲家

波しらむ湊のはやてやつよからし生田が磯によするともぶね

〔倭名類聚抄一風雪〕大風　漢書云、大風吹兮雲飛揚、此間云、於保加世、

〔類聚名義抄十風〕大風オホカセ　颮雲物反、オホカセ、　颹音謂、オホカセ、

〔日本書紀二十三舒明〕十年七月乙丑、大風之、折木發屋、

〔日本書紀二十九天武〕九年八月丙辰、大風、折木破屋、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月甲寅、播磨、淡路、紀伊三國言、大風潮漲、田園損傷、遣使巡監農桑、存問百姓、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年七月己巳、太宰府言、所部九國三島、亢旱大風、拔樹損稼、遣使巡省、因免被災尤甚者調役、

〔續日本紀六元明〕和銅六年十一月辛酉、伊賀、伊勢、尾張、參河、出羽等國言、大風傷秋稼、調庸並免、但已輸

わかうなること、世にあるまじきことなれど、げにさのみこそあれなど哀がり聞え給て、かうさはがしげにはべめるを、このあそんさぶらへばと、思たまへゆづりてなど、御せうそこ聞え給、みちすがらいりもみするかせなれど、うるはしく物し給ふ君にて、三條の宮と、六條院とに參りて、御らんせられ給はぬ日なし、うちの御物いみなどに、えさらずこもり給べき日よりはかは、いそがしきおほやけごと、節會などのいとまいるべく、ことしげきにあはせても、まづこの院にまいり、みやよりぞいで給ければ、ましてけふかゝる空のけしきにより、風のさきにあくがれありき給もあはれに、みゆ、みやいとうれしくたのもしとまちうけ給て、こゝらのよはひに、まだかくさはがしき野分にこそあはざりつれと、たゞわなゝきにわなゝき給、おほきなる木のゑだなどのをるゝおともいとうたてあり、おとゞのかはらさへのこるまじう吹ちらすに、○下略

〔枕草子九〕野分の又の日こそいみじう哀におぼゆれ、たてじとみすいがいなどのふしなみたるに、せんざいども心ぐるしげ也、おほきなる木どもたふれ、枝など吹をられたるだにをしきに、萩女郎花などのうへによろぼひはひふせる、いとおもはず也、かうしのつぼなどに、さときはをことさらにしたらんやうに、こまぐ〳〵と吹入たるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえね、いとこききぬのうはぐもりたるに、くちばのおり物、うす物などのこうちきゝて、まことしくきよげなる人の、よるは風のさはぎに寢覺つれば、久しうねおきたるまゝに、鏡うち見て、もやよりすこしゐざり出たる、髮は風に吹まよはされてすこしうちふくだみたるが、かたにかゝりたるほど、まことにめでたし、物あはれなるけしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちいさふはあらねど、わざとおとなゝどは見えぬが、すゞしのひとへのいみじうほころびたる、花もかへりぬれなどしたる、うすいろのとのゐ物をきて、かみはをばなのやうなるそぎすゑも、たけばかりはきぬのすそにはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる、わらはべのわかき人のねごめに、

吾起瀛風邊風、以奔波溺惱、火折尊歸來、具遵神教、至乃兄鉤之日、弟居濱而嘯之時、迅風忽起、兄則溺苦、無由可生、

〔日本書紀三神武〕戊午年六月丁巳、越狭野、到熊野神邑、且登天磐盾、仍引軍漸進、海中卒遇暴風(アカラシマカゼ)、皇舟漂蕩、

〔竹取物語〕大友の御ゆきの大納言は、○中略遠くて筑紫のかたの海に漕出たまひぬ、いかゞしけむはやき風吹て、世界くらがりて、船を吹もてありく、いづれのかたともしらず、舟を海中にまかり入ぬべく吹まはして、波は船に打かけつゝ、まき入、神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに、○中略かぢ取答て申、神ならねば何わざをかつかふまつらむ、風吹波はげしけれども、神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは、辰を殺さんと求め給ひ候へばかくある也、はやても龍のふかするなり、はや神にいのり給へといふ、

〔源氏物語二十八野分〕野分例のとしよりもおどろ〳〵しく、空の色かはりてふきいづ、花どものしほるゝを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思さはがるゝを、まして草むらの露の玉のをみだるゝまゝに、御こゝろまどひもしぬべくおぼしたり、おほふばかりの袖は、あきの空にしもこそほしげなりけれ、くれ行まゝに物も見えず、吹まよはしていとむくつけゝれば、みかうしなど參りぬるに、うしろめたくいみじと、花の上を覺し歎く、○中略人々まいりて、いといかめしう吹ぬべき風には侍り、うしとらの方より吹侍れば、このおまへはのどけき也、むまばのおとゞみなみのつり殿などは、あやうげになんとて、とかくことをこなひのゝしる、中將はいづこより物しつるぞ、三條の宮に侍りつるを、風いたく吹ぬべしと、人々の申つれば、おぼつかなさになん參りて侍つる、かしこにはまして、心ぼそく、かぜの音をも今はかへりて、わかきこのやうにをぢ給めれば、こゝろぐるしきに、まかで侍なんと申給へば、げにはやまかで給ね、おいもていきて、また

〔箋注倭名類聚抄風雨一〕按、說文、㬥疾有所趣也、暴晞也、二字不同、㬥隷作暴、後借暴爲㬥疾之㬥、二字皆作暴、遂混同無別、故㬥晞之暴、俗從日作曝、以別㬥疾之暴、○中略 按、知之同韻、波夜知之知、與阿良之之同、謂風也、波夜知、速風之義、謂倏忽吹起之風、又能和岐、野別之義、謂秋冬之際、風吹排野草者、然則暴風可訓能和岐乃加世、不得訓波夜知、神代紀疾風迅風訓八也千、近是、又按、嶺表錄異云、南海秋夏間、或雲物慘然、則其暈如虹、長六七尺、比候則颶風必發、故呼爲颶母、舟人常以爲候、豫爲備之、又云、惡風謂之颶、壞屋折樹、不足喩也、甚則吹屋瓦如飛蝶、或二三年不一風、或一年兩三風、韓愈詩、颶起最可畏、訇哮簸陵丘、是亦波夜知之類也、

〔類聚名義抄風十〕暴風ハヤチ又ノワキノカセ　䬘音宏、飆、颶、ハヤチ、ノワキ

〔東雅天文一〕風カゼ○中略 疾風をハヤチといふは、疾速の義なりしかば、舊事紀に速飄疾風等の字を用ひて、ハヤチとは讀れし也、今俗にハヤテといふは、其語の轉ぜしなり、○中略 倭名鈔には、○中略 暴風の字をしるし、漢語抄を引て、ハヤチ又ノワキノカゼと註せり、ノワキといふは、ニハカの轉にて、即暴の義なり、後俗野分の字を用ひしは、暴風の山より下るをば、ヤマオロシといひ、野を分るをばノワキといふに似たり、

〔倭訓栞前編二十三乃〕のわきのかせ　和名抄に暴風をよめり、野を吹分るの義也、堀颶をも訓せり、野わきだつともいへり、八月比にある事也、山おろしにむかへて看べし、されば禮月令に、仲秋疾風至といひ、孟冬行夏令、則國多暴風と見えたれば、疾風を訓ずべしといへり、

〔日本書紀神代二〕天稚彥之妻、下照姬、哭泣悲哀、聲達于天、是時天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彥已死、乃遣疾風ハヤチテ、擧尸致天、便造喪屋而殯之、

〔日本書紀神代二〕一書曰、○中略 海神授鉤彥火火出見尊、因敎之曰、還兄鉤時、天孫則當言、汝生子八十連屬之裏貧鉤狹狹貧鉤、言訖三下唾與之、又兄入海鉤時、天孫宜在海濱、以作風招、風招即嘯也、如此則

〔圓珠庵雜記〕あらしと、おろしと同じ、萬葉集に下風と書きて、あらしとも、おろしともよめり、

頭書 眞淵云、嵐は和名に山下出風と書ける意にて、萬葉山下風と書きたれるを、又漸に略して、山下とも、下風とも書きしなり、然れば皆あらしとよむべきを、やまおろしなどよめるはいかにぞや、三吉のゝ山下風のさむけくにと有るも、山のあらしとよむべきなり、今山下風とよめるはわろし、

〔東雅一天文〕風カゼ○中略 暴風をアラシといふは、暴アラの義也、我國の俗、嵐の字を讀てアラシといふ、此字もと山氣の蒸潤をいひて、迅猛の風をいふ事、もとこれ梵語に出づ、

〔倭訓栞前編一阿〕あらし 嵐をよむは、しはちと韻通す、暴風アラチの義、山城のあらし山、越前のあらち山、もとは同語なるべしといへり、万葉集に下風をあらしとよめるは、おろしと義同じ、孫愐云、嵐山下出風也、よて山下ともかけり、また荒風冬風なども書たり、飄をもよめり、玉篇に大風也と注せる意也、うつぼ物語にあらしの風とも見えたり、

〔萬葉集一雜歌〕大行天皇幸于吉野宮時歌

見吉野乃、山下風之、寒久爾、爲當也今夜毛、我獨宿牟、

右一首、或云天皇御製歌、

〔空穗物語嵯峨院〕ゆふ暮にうちむれておはしたれば、山ごもりよろこびかしこまりきこえ給こ、とかぎりなし、○中略 大將も、

もゝしきのむかしのともをみにくればあらしの風もにしきをぞしく

〔古今和歌集五秋〕是貞のみこの家の歌合のうた　文屋やすひで

吹からに秋の草木のしほるればうべ山かぜをあらしといふらん

〔倭名類聚抄一風雪〕暴風 史記云、暴風雷雨、漢語鈔云、八夜知、又乃和木乃加世、

嵐

〔倭名類聚抄風雪一〕嵐　孫愐切韻云、嵐山下出風也、盧含反、和名阿良之

〔箋注倭名類聚抄風雨一〕萬葉集用荒風字、按、阿良、暴疾之義、之、風之古名、古事記、風神志那都比古神、神代紀、級長戸邊命、亦曰級長津彦命、是風神、又大祓詞、科戸之風、皆是、然則阿良之、猶言暴疾風也、〇中略　唐書云、孫愐唐韻五卷、今無傳本、按、宋景德四年牒云、以舊本偏旁差僞、傳寫漏落、注解未備、乃命刊正、大中祥符元年牒云、書成、改爲大宋重修廣韻、二牒並載在廣韻卷首、所謂舊本、卽孫愐切韻、則知廣韻重修孫氏切韻者、本書所引孫韻、多與廣韻合、故今皆取廣韻以校之、而廣韻嵐字注云、山氣、與此不同、按、玉篇、嵐大風也、又文選、謝靈運曉出西射堂詩注引埤蒼、慧琳一切經音義引古今正字並云、嵐山風也、與此所引義合、廣韻訓山氣、恐非孫氏之舊、又按、慧琳音義云、毗藍風、正言吠藍婆、吠者散也、藍婆者所至也、言此風所至之處、悉皆散壞也、又云、毘不也、藍婆遲也、謂此風行最極迅急、舊翻爲迅猛風是也、慧琳又云、吠嵐婆、力含反、案、舊經論中、或作毗藍婆、或言旋藍婆、又作鞞嵐婆、或作隨藍婆、皆梵音之楚夏耳、依此攷之、蓋漢人依梵言、謂迅猛風爲毗藍婆、又厭其冗長、省云毗藍、再省云藍、以漢無其字、會意從山風作嵐字、音力含反、爲迅猛風名也、猶漢人省梵語磨羅云磨、從從鬼諧聲作魔字、又省梵語窣都波云㑴婆、再省云㑴、遂從土諧聲作塔字、又省梵語跋陀羅云跋、從從金諧聲作鈸字之類也、故漢魏書無嵐字、說文亦不載是字也、淸孫星衍輩、以爲說文所載葻字省者、未攷之梵語也、

〔類聚名義抄風十〕嵐音婪アラシ

〔和爾雅一天文〕嵐アラシ今按、字書註皆曰山氣、倭名抄云、孫愐云、嵐山下出風也、今考字書、無爲山下出風之訓、按、選詩草斂雲嵐翠、杜詩煙嵐長似雨、坡詩翠嵐擁影孤、山谷詩松風起晩嵐、羅隱草詩山染嵐光帶日黃、皆是爲山氣、惟文選謝靈運詩云、夕曛嵐氣陰、註輪曰、山風也、

〔日本釋名天象上〕嵐　山風はあらき物也、又草木をふきあらす也、文屋康秀の歌に、吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらん、といへるがごとし、

ば、海中の潮水其雲に乘じ逆卷のぼり、黑雲を又くはしく見れば、龍の形見ゆることなり、尾頭などもたしかに見て、登潮は瀧の逆に懸るが如し、又岩瀬と云所、宮崎といふ所まで、十餘里の間に覺りて、黑龍登れるを見しと云、又鐵脚道人退冥の手代、越後の名立の沖を船にて通りし時、海底に大龍の蟠れるを見しといふ、蟠龍を見る事は、此手代に限らず、彼海底には折々ある事となり、是等は皆慥なる物語なりき、

〔塵塚談上〕不忍池より天明年間龍卷ありけり、佐渡越後越中の海中には、夏の日龍騰る事度々有と、其節は虛空より黑雲下り來れば、海中の潮水、瀧を逆に掛しごとく逆卷のぼり、黑雲中に入る、其雲の中に龍の形の如きもの見ゆると傳聞り、其如く不忍池より黑雲逆卷のぼり龍騰りしと見へ、近邊家屋を損し、火の見櫓など倒せしなり、その次第を聞に、北海にて龍騰るの形勢に、少しも替らず同樣なり、是をもて見れば、小しき池底にも龍蟄伏し、池水時氣に乘じて發達し、上よりは應じて雲下り、上下相感動し龍昇るものなるべし、

〔甲子夜話八〕先年龍マキトテ暴風雨アリシトキ、諸船コノ難ニ遭モノ多シ、或老侯家根舟ニテ大川ニ遊居シガ、白鬚祠ノ邊トカ此風ニ遭タリ、川水スサマジク卷カヘリ、其舟ヲ空中ニマキ揚グルコト一丈餘ニヤアリケント云、其時舟中ニ侯ノ妾モアリシガ、心カシコキ者ニテ、ワガ腰帶ヲ解キ、侯ヲ舟ノ柱ニ結ツケタリ、ヤガテ舟ハ一ト落シニ、川中ニ墜タルニ侯ハ何事モナカリシガ、髮ノ元結切レタリト云、同舟ノ人ニ溺者モアリト聞ケリ、

〔雲萍雜志二〕つむじといふ風は、春のころは風地を吹をもて、土埃を吹き卷きぬ、長閑なる日などに、ふと風いでゝ渦を卷あぐる也、辻風なるべし、また西國方に風鎌といふものありて、人の肌へをそがるゝなり、そぐ時に傷むことなく、しばらくして破血して、その傷堪がたし、このことをふせぐには、古き暦をふところにして居るときは、そのうれひなしと、ところの者は申侍りぬ、

ごとくふきたてたれば、すべて目も見えず、おびたゞしくなりとよむ音に、物いふ聲も聞えず、彼地獄の業風なりとも、かばかりにこそはとぞ覺ゆる、家の損亡するのみならず、是をとりつくろふ間に、身をそこなひて、かたわづけるもの數をしらず、此風ひつじさるの方に移り行て、多くの人の歎をなせり、辻風は常に吹ものなれど、かゝる事やはある、只事にあらず、さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし、

〔慶長見聞集五〕土風に江戸町さはぐ事

見しは昔、江戸に土風たえず吹たり、されば龍吟ずれば雲おこり、虎うそぶけば風さわぐ、かゝるためしの候ひしに、江戸に土風吹は、町さわがしかりけり、此風を他國にては旋風といふ、此字めぐる風と讀たり、又つむじの毛のごとく、土をまひて吹ければ、つむじ風共俗にいふ、〇中略扨又此風、土をうがつ故にや、關東にては土くじりといふ、萬葉に六月の土さへさけて照日と讀り、土さくる共あり、土くじりとはおかしき名なり、取分江戸近邊に吹風也、〇中略藻鹽草に、風の異名さまざま記せり、若此内に土くじりと云風や有とよみて見れば、つじといふ風の名あり、是は谷の河風なりと注せる、かなに書て正字しれず、〇中略嵐の異名また多し、此内にも土くじりといふ風はなし、然に江戸あたりに吹土くじりといふ風は、雪の氣色もなく音もせずして、俄に地より吹立、土をまきつゝんで空へ吹上れば、たゞくろけむりのごとし、皆人是を見て、すは火事こそ出來たれ、やけ立烟を見よとさはぎてんたうする、町の御掟の事なれば、家々より手桶に水を入、引さげ引さげ持行事は、先立てはたじるしを持、火本は爰やかしことはしりまはる内に、土けぶりはきえて、そらごとなりといへば、さげたる桶の手持もなく、はたをまひてかへりしは、見るもおかしかりき、

〔東遊記後編三〕登龍　越中越後の海中夏の日龍登るといふ甚多し、黒雲一村虚空より下り來れ

〔顯廣王記〕安元三年〇治承元年四月十八日丁亥、未剋辻風、人屋少々吹破、自神泉池如筵者出上、順風飄颻、其色墨々、無落墮所、遂差辰巳方飛去云々、即入雲了、聞巷云、龍王上天也、去長承之比有此事、天下異也云々、

〔源平盛衰記十一〕旋風事

六月〇治承三年十四日旋風夥吹テ、人屋多ク顛倒ス、風ハ中御門京極ノ邊ヨリ起テ、坤ノ方ヘ吹以テ行、平門棟門ナドヲ吹拂テ、四五町十町持行テ、抛ナドシケル、上ハ桁梁垂木コマイナドハ、虚空ニ散在シテ、此彼ニ落ケルニ、人馬六畜多ク被打殺ケリ、屋舍ノ破損ハイカヾセン、命ヲ失フ人是多シ、其外資財雜具、七珍萬寶ノ散失スルコト數ヲ知ズ、コレ徒事ニ非ズトテ御占アリ、百日ノ中ノ、大葬、白衣ノ怪異、又天子ノ御愼、殊ニ重祿大臣ノ愼、別シテハ天下大ニ亂逆シ、佛法王法共ニ傾、兵革打續、飢饉疫癘ノ兆也ト、神祇官、并陰陽寮共ニ占申ケリ、係ケレバ、去ニテハ我國今ハカウニコソト上下歎アヘリ、〇平家物語爲五月十二日事、

〔玉海〕治承四年四月廿九日辛亥、今日申剋上邊、三四條邊云々廻飄忽起、發屋折木、人家多以吹損云々、又同時雷鳴、七條高倉邊落云々、〇中略又白川邊雹降、又西山方同然云々、　五月四日乙卯、陰陽大允安倍泰茂來、行百性〇性恐怪誤祭、於南庭行之、此次去廿九日飄風事持占文、依爲希代事、續加之、兵有敗之占、尤可恐事歟、

〔方丈記〕治承四年卯月廿九日、中御門京極の程より、大なる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしくふきける事侍き、三四町をかけて吹まはるまゝに、其中にこもれる家ども、大なるも小さきも、一として破れざるはなし、さながらひらにたふれたるもあり、けたはしらばかり殘れるもあり、又門の上を吹はなちて、四五町が程にをき、又垣をふきはらひて、隣とひとつになせり、況や家のうちの實、數をつくして空にあがり、檜皮葺板の類ひ、冬の木のはの風に亂るゝが如し、塵を烟の

國意宇郡波夜都武自和氣神社見えたり、万葉に飄の字かくよむを正義とす、

〔空穗物語俊蔭〕天人のゝ給ふに從ひて、花園より西をさしてゆけば、おほいなる川あり、その河より孔雀いで來て、その川をわたしつ、琴をば例のつ。じ。風。おくる、

〔日本書紀九神功〕九年〇仲哀三月戊子、皇后〇神功欲撃熊鷲、而自橿日宮遷于松峡宮、時飄風（ツムジカゼ）忽起、御笠墮風、故時人號其處曰御笠也、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年五月辛卯、從楯波池飄風忽來、吹折南苑樹二株、即化成雉、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年三月庚午、於東大寺設百高座、講仁王經、是日飄風起、説經不竟、於是以四月九日講説、飄風亦發、

〔續日本後紀十八仁明〕嘉祥元年七月甲子、有飄風、起自春興殿庭、轉至紫宸殿東北頭、更經清涼殿東、便向右近衛陣、簸揚炬屋、離地數尺、到版位前、披靡悉摧、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年四月十一日辛卯、廻飄起外記候廳前、旋轉西行、小虫無萬數、飛散其中、

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年五月十二日戊子、飄風起紫宸殿前、轉出修明門、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰二年五月廿二日甲寅、未時飄風吹、傾大極殿高御座於巽方、又中務省正廳同傾、壞京中人屋不破稀焉、

〔扶桑略記二十五朱雀〕承平三年七月十三日丁亥、飄風吹、損右近陣火炬屋、幷春興校書殿檜皮、寮占乾坤方兵革之由、仍山陰山陽太宰府以官符、

〔古今著聞集十一畫圖〕鳥羽僧正は、近き世にはならびなき繪書也、法勝寺金堂の扉の繪書たる人也、いつの程の事にか、供米の不法の事有ける時、繪にかゝれける、辻。風。の吹たるに、米の俵をおほく吹上たるが、塵灰のごとくに空にあがるを、大童子法師原はしりより、取とゞめんとしたるを、さまざまにおもしろう筆をふるひてかゝれけるを、〇下略

旋風

我門のわさ田の稲もからなくにまだき吹ぬる木がらしの風

などいへるは、冬の嵐を秋の初風といへるにやあらん、

〔千載和歌集 五秋〕堀河院の御時、百首の歌奉りける時よめる、　藤原仲實朝臣

山ざとはさびしかりけり木枯の吹ゆふ暮のひぐらしのこゑ

〔新撰字鏡 風〕飈飆颹颻(四形作俾遙反、平、暴風、豆牟志加世、) 颾(余尙余章二反、比呂己留、又豆牟自加世、) 凤(昔陸反、且也、颯颹也、豆牟自加是、又阿志大、) 颸(重音、豆牟自加是、)

〔千祿字書 平聲〕飈飆(上俗下正)

〔倭名類聚抄 一風雪〕飆 文選詩云、回飆卷高樹、兼名苑注云、飆暴風從下而上也、音猋、(和名豆無之加世)

〔箋注倭名類聚抄 一風雨〕按、飆正作飆、說文、飆从風猋聲是也、俗作飈、見廣韻、飆猋並甫遙切、焱以瞻切、其音迥別、不得以焱音飆、作猋爲是、然段玉裁曰、古書猋焱二字多互譌、如曹植七啓、風厲焱擧、當作猋擧、班固東都賦、焱々炎々、當作猋々炎々、王逸曰、猋去疾貌也、李善幾不別二字、然則源君或以焱音飆、山田本作猋者、恐係後人校改、○中略 按、爾雅、扶搖謂之猋、郭璞注、猋暴風從下上、兼名苑注蓋本此、又按、說文、飆扶搖風也、莊子摶扶搖而上、釋文引司馬彪注云、上行風謂之扶搖、是知飆謂風從下吹至上也、又依牛馬體引爾雅注、回毛一名旋毛、訓都无之、則都无之加世之爲回旋風可知也、文選廻飆訓豆牟之加世者是也、又爾雅、廻風爲飄、說文、飄回風也、玉篇、飄旋風也、日本紀、萬葉集、飄訓川牟之加世、亦是也、單飆字不得訓都牟之加世、源君引兼名苑注者、以解釋文選廻飆之飆字耳、

〔類聚名義抄 十風〕䬀(香幽反、ツムシカセ、) 飄(西遙反、ツムシカセ、) 颺(音羊、ツムシカセ、) 颮(音雹、ツムシカセ、) 凤(今正、音宿、ツムシカセ、) 颰(ツシカセ)

颾(ツムシ風)

〔下學集 上天地〕颸(ツチカゼ) 颸 飄(三字義同)

〔倭訓栞 前編十六都〕つむじ　和名抄に廻毛をよめり、關東にてつじ風をいふ、古語也、神名式に出雲

夏の風をやませ風、又ながせ風、又せた風、播磨邊又四國にて、春南風にて雨を催す風をやうずと云、越後にて東風をだしといふ、西北の風をたもにしといふ、西南の風をひかたといふ、

〔書言字考節用集　一乾坤〕颪　コガラシ　風過ニ木上一曰颪、字彙、疾風、　木枯　同　本朝俗謂ニ冬時疾風一爲ニ木枯一、　凩　同　本朝俗字

〔圓珠庵雜記〕こがらしは令ニ木枯一の意なり、からすとは葉を吹きしをりて、枯木のごとくなすなり、六帖に、木がらしの音にて秋は過ぎにしを今も梢にたえずふくかな、とよめる歌は、秋の風をこがらしといふよしによめり、〇中略野宮歌合に、〇中略正通は木がらしとは冬の風をこそいへ、此頃の風をいかゞ、冬のあらしを秋の初風といへるにやあらんと難じけれど、猶負にさだめらる、されど冬の風をこそいへといへるをば、然らずともいへる事はなければ、そのころも大かたは今のごとく冬の物としけるにこそ、

〔倭訓栞　前編九〕こがらし　木嵐の義なるべし、木枯にはあらじ、嵐をからしとよむは音便也、五十嵐をいがらしとよむも同じ、字書に風過ニ木上一曰颪とみゆ、颪も同じ、凩は倭の俗字也、歌に冬によめり、又秋にもよめる事は、野宮歌合の順の判に、六帖の歌を引て證せり、

〔源順集〕むしのね　但馬

淺茅生の露吹むすぶ木枯にみだれてもなくむしの聲哉〇中略

此虫のねの歌、露吹むすぶ木枯のなどいへるわたり、いひなれたりなどさだむるほどに、正通が申やう、木枯とは冬のあらしをこそいへ、この比の風をいはゞ、雨をば時雨とやいふべからんといふを、きこしめして、みすのうちにこれかれかゝる事をいふことをこそは、ためしにひかめとて、

木枯の秋のはつ風ふかぬまになどか雲ゐにかりのおとせぬ

又

風以時節爲名

〔八幡愚童訓 下〕弘安四年夏比、蒙古、大唐、高麗以下國々兵共ヲ驅具テ、三千餘艘、大船數千萬乘列テ来ケル、〇中略去程十日餘比、西國早馬著テ申、去七月晦日夜半ヨリ、乾風オビタヾシク吹テ、閏七月一日、賊船悉漂蕩シテ海ニ沈ヌ、

〔撮壌集 上天象〕風雨類　韶風春風　東風同　黄雀同　薫風夏　南風同　凉風同　西風秋　金風同　野分同　朔風冬　北風同　木枯

〔物類稱呼 一天地〕風かせ　畿内及中國の船人のことばには、西北の風をあなせと稱す、二月の風ををに北といふ、三月の風をへばりごちと云、四月末の方より吹風をあぶらまぜと云、五月の南風をあらはへといふ、六月末の風をしらはへといふ、土用中の北風を土用あいといふ、七月末の風をおくりまぜと云、八月の風をあをぎたといふ、九月の風をはま西といふ、十月の風をほしの入こちといふ、十一月十二月の頃吹風を大西と云、〇中略　伊勢國鳥羽或は伊豆國の船詞に、二月十五日前後に一七日ほど、いかにもやはらかに吹く風をねはん西風といふ、但し年毎に吹にもあらず、三月土用少し前より南風吹あぶらまじといふ、四月よき日和にて南風吹おほせといふ、五月梅雨に入て吹南風をくろはへといふ、梅雨半に吹風をあらはへと云、梅雨晴る頃より吹南風をしらはへと云、六月土用半過より、北東の風一七日程吹年有、ごさいと云、六月十六七日伊勢の祭禮有、出家も參事也、故に御祭といふ也、六月中旬東風吹年あり、ばんごちと云、それ過てより南風吹をくれまじといふ、八月の風をあをぎたと云、はじめは雨にそひて吹、後はよくはれて北風吹なり、又雁わたしとも云、十月中旬に吹く北東の風を星の出入といふ、夜明にすはる星西に入時吹也、又大風には二月吹を貝よせと云、正月の節より四十八夜前後の西風也、三四月東南の風吹をなたねづゆと云、四五月吹東南の風をたけのこづゆといふ、八月に吹風を野分といふ、正月の節より二百十日め前後にふくなり、十月西風吹神わたしと云、霜月の荒といふは、廿三日より晦日までの間に荒るとしあり、　近江國湖水にて風の定らぬ事を論義といふ、日和風をといてと云、湖上の風を根わたしと云、秋冬の風を日あらしと云、春

〔萬葉集十秋雜歌〕詠花

春日野之、芽子落者、朝東、風爾副而、此間爾落來根、

〔萬葉集十七〕入京漸近、悲情難撥、述懐一首、幷一絶

伊美豆河波、吉欲伎可布知爾、伊泥多知底、和我多知彌禮婆、安由能加是、伊多久之布氣婆、美奈刀爾波、之良奈美多可彌、○中略

右大伴宿禰家持贈掾大伴宿禰池主、四月廿日

東風、越俗語、東風謂之安由乃可是也、伊多久布久良之、奈呉乃安麻能、都利須流乎夫禰、許藝可久流見由、○三首略

右四首、天平二十年春正月二十九日大伴宿禰家持、

〔萬葉集十八〕行英遠浦之日作歌一首

安乎能宇良爾、餘須流之良奈美、伊夜末之爾、多知之伎與世久、安由乎伊多美可聞、

右一首、大伴宿禰家持作之、

〔大鏡二左大臣時平〕すがはらのおとゞ右大臣の位にておはします、○中略昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりてながされ給ふ、○中略この御子どもをおなじかたにつかはさゞりけり、かた〴〵いとかなしくおぼして、御まへの梅を御らんじて、

こちふかばにほひおこせよむめのはなあるじなしとて春なわすれそ

〔後拾遺和歌集九羇旅〕つくしよりのぼりけるみちに、さやかた山といふ所をすぐとてよみ侍ける、

右大辨通俊

あなしふくせとの鹽あひに舟出してはやくぞ過るさやかた山を

〔拾玉集二〕一日百首　海路

兼てしりぬあなしの風を思ふより心つくしの波路なりとは

卯は山瀬辰だし巳うち午くだり未わかさに申ひかた風
西異西戌はしも西亥たば風北は異丑あひ寅は中の手

〔古事記仁徳下〕天皇上幸之時、黒日賣獻御歌曰、夜麻登幣邇、爾斯布岐阿宜氏、玖毛婆那禮、曾岐袁理登母、和禮和須禮米夜、

〔古事記傳三十五〕爾斯布岐阿宜氏は、西風吹令散而なり、西風を爾斯とのみ云は、風と云ことを省きたるにはあらず、此御代のころ、さまで省ける語はいまだあらじ、此歌に依て考るに、比牟加斯、爾斯と云は、もと其方より吹風の名にて、比牟加斯は東風、爾斯は西風のことなりしが、轉て其吹方の名とはなれるなるべし、故古は方をば多く、東西とのみはいはず、東方西方といへり、是西風の吹來る方、東風の吹來る方と云意より云なれたることなるべし、然るを後には、方の名を本として思ふ故に、西風を爾斯とのみ云るは、風を略ける如聞ゆるなれど然らず、斯は風にて、風神を志那都比古と申す志、又嵐飄などの志も同じ、風は神の御息にて、息を志と云こと、師(賀茂眞淵)の冠辭考、志長鳥條に云れたるが如し、又暴風東風などの知も通音にて同きなるべし、さて東風西風と云名の意は、比牟加斯は日向風なり、凡て東方を日向と云ること多し、爾斯は詳ならねど、試に云ば和風ならむか、那岐は爾と切る、又那伎を爾岐とも云、和とは天の霽たるを云、常には風の無きをのみ、和とは心得たれども、其のみならず、雨又雲霧などもなく晴たるをも云、古今集戀歌に、雲もなく和たる朝の我なれやいとはれてのみ云々とよめるは、蓋晴といはむ料に、和たる朝と云り、是晴を和と云故なり、風のなきことは此歌に用なし、凡ては那具とは、何にまれ靜まり收まるを云へば、雨雲霧などの晴るをも云べき理なり、西風は殊によく雲霧を吹晴らす物なれば和風と云るか、さては次の句の、雲ばなれにも殊に由あり、さて比牟加斯爾斯を、もと風名とするにつきて、美那美伎多も共にもとは風名か、又是は木より方名か、いまだ考得ず、万葉十八二十六丁に、南吹、雪消益而、射水河、これも南風を美那美とのみよめり、是は此の歌に、西風を爾斯とのみあるを、風を略きたるものと心得て、其にならひて、美那美とよめるか、はたそのかみ常に然云ることの有しか、さだかならず、若常に然云ことの有しならば、美那美と云も、もと風名にやありけむ、かにかくに定めがたし、伎多も此に准へて定むべし、

〔萬葉集七雜歌〕覊旅作

天霧相、日方吹羅之、水莖之、崗水門爾、波立渡、

む事は、いふ迄もなかめり、（こちはやちのこちも亦おなじ）但異名分類の説には、あなしは只あらき風にて、あらしの轉語、らとな同韻通ず、あらめでたなど云べきを、あなめでたといふがごとしとみゆれど、此説もいかゞなり、其故はいかにと云ふに、往し天保十二年の土佐國人漂流記といふものを見しに、其國吾川郡宇佐浦と、幡多郡中の濱との漁人等、あなせといふ風に吹ながされて、無人島に漂着したるよしかけり、こは去をせとこそは訛謬たれ、古き名を傳へたるもめでたく、かつ只あらしには非ずして、辰巳さまに吹める風の異名なる事も明らかなる事、土佐と無人島との地方にてよく去られたり、されど我戌の方の風かといへるは、いまだ宜しと決めたるにはあらねば、例の識者の是正を請ふべく、おろ〳〵こゝにはいひ出つるなり、（なほ東國の方言に、いなさといふ風の名あるも、いなさとあなしと音近ければ、いなさはあなしの訛言にやあらむと、はじめにはふとおもひたりしが、こは辰巳よりふく風な、いふといへば、去からざる事勿論なれど、辰巳と戌亥とは相對したれば、さはいへどよしなきにもあらじか、是はた猶よく考ふべし、又鹽尻卷二十一云、熱田浦人の俗諺に、暴風して雨ふるを、はへと云ひ、巽の風をイナサと呼び、坤の風をナラヒと云とあり、いなさは東國と同じければ、ならひは違へり、東國に云ならひは乾風なり、）

〔和漢三才圖會（三天象）〕船䞓風（あらはへ）　東坡集云、梅雨既過、颯然清風彌旬、歳々如此、湖人謂之船䞓風、此時海舶初廻、此風自海上與舶倶至爾、　按、舶者海中大船今市舶也、䞓者追也、日本海上亦然、梅雨天若中多有西風（俗云久呂波惠）梅雨既過、天晴多有東風（俗云志良波惠）船䞓風是乎、

〔萬寶鄙事記（六占天氣）〕三月には西風久しくふく、是を三（サ）にしといふ、　七月十五日の前後は、かならず北風久しく吹、是を俗に盆北（ぼんきた）と云、　夏秋の頃東風久しくふく、是をひかたこちといふ、數十日吹事有、

〔烹雜の記（前集上）〕多湊（サハト）ぶり　佐渡の方言に、風は東より吹を山瀬といふ、辰のかたより吹を出しといふ、巳より吹をうちといふ、南をくだり、未より吹をわかさ、申より吹をひかた、酉を異酉、戌より吹を下酉、亥より吹をたば、北は正、丑より吹をあひ、寅より吹を中の手といふ、これを去る歌、

ごちといふ、此はしはすばるをいふ、凡て九月の節より正月の節中は、すばる星の出入にひより變りやすし、江戸にては下總こちといふ、

〔袖中抄二十〕ひかた あなし しなとの風 こゝろあひの風 ゝの をふゝき

あまぎりあひひかた吹らしみづぐきのをかのみなみになみ立わたる

顯昭云、ひかたは坤風也、 無名抄云、ひかたは巽風也、ひるはふかで夜ふく風也、 私云、たつみの風をば、をしやなと云、又伊勢ごちといふ、又いぬゐのかせをばあなしといふ、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひかた 万葉集に日方吹といへるは、申酉の風をいふ、蝦夷にてもしかいへり、夕日の空に吹を、船人の語にも、ひかたのよひよわりといふ、晩に其方より吹は强きものながら、暮すぐるほどに、かならずよわる也といへり、

〔倭訓栞前編二十四波〕はえ 南風をいふは、翻譯名義集に、婆庾此云風神といへるに本けりといへり、凱風也、琉球にもはえといへり、京にてはやうづといへり、中國の船人、五月の南風を、あらはえといひ、六月の末の風を、しらはえといふ、西國にて東南の風をおしやばえといふ、

〔倭訓栞中編一阿〕あなぢ 西北風をいふ、西土にいふ不周風也、ちは風の訓、こちまぢのちに同じといふめり、一說に、此風吹ば雨なし、水氣までを吹拂ふをもて、あなしともいふといへるはいかゞ、畿内及中國の船人の詞に、西北の風を、あをせといふは、あなじの轉語也、

〔碩鼠漫筆二〕あなしと云ふ風 あなしの名義は、いまだおもひ得たる說もあらねど、袖中抄卷二十に、いぬゐの風をあなしといふ八雲御抄巻三、藻塩草巻一等にも同じく見ゆ、とあるを見れば、あなはもし戌の轉訛にて、其方よりふく風の名にはあらじか、和歌分類風部に、あなしは戌亥の風なり、又說辰巳の風なり、又和州穴師山の風を云といへり、穴師山の風よりいひそめて、いづこにもいふなり、戌亥といひ辰巳といふは、和州穴師山を乾に受たる里人のいひ、辰巳にうけたる里人のいへるなり、巳上貞德說とみえたり、顯昭法橋の東國に如何といはれたるも、もしかやうの思ひとりにはあらじか、そはかくまれ、この說はうけがたし、しはしぐれ、しまき、あらし、つむしのしにて、風の義なら

風以方位爲名

谷風ニ又多、

〔書言字考節用集乾坤一〕秦風又云西風　北風　東風　南風　谷風　東風同　〔同乾坤二〕不周風也乾風　廣莫風北方風、文選注、　涼風同爾雅　朔風同　北風同　凱風南方風也、爾雅、南　飄風同瑞韵　東風　谷風東風、爾雅、

〔物類稱呼天地一〕風かせ○略中　西國にても南風をはへと云、東南の風をそへやばへと云、北國には東風をあゆの風といふ、西北の風をよりけと云、北風をひとつあゆと云、東北の風をぢあゆと云、丑の方より吹風をまあゆと云、南風をぢくたりと云、江戸にては東南の風をいなさといふ、東北の風をならいと云、とつくいばふなあらりい　西北の風をはがちと云、東風を下總ごちといふ、未申の方より吹風を富士南と云、

〔壒嚢一〕一大風ト云フハ、家フキヤブリナドスル風歟、又別ノ心アル歟、毛詩ニ箋曰、西風謂ニ之大風一ト云々、ニシカゼヲモ大風ト云ベキニコソ、タニ風ト云ヘドモ、必ズ谷ニフク風ニモカギラズ、東風ヲバ谷風ト云フ、毛詩ニ習々谷風、注云、習々和舒之貌、東風謂ニ之谷風、陰陽和則谷風至、源順ガ鶯ノ詠ニ、コホリダニトマラヌ春ノ谷風ニト云ヘルコノ心也、春ハ東ヨリ来レバ、東風ハハルカゼ也、秋ハ西ヨリ来ル故ニ、西風ハ秋ニカタドル、

〔日本釋名上天象〕東風　こは氷也、ちはちらすなり、春のはじめにこほりを吹ちらす風也、とくるをちると云、又とくの反字はつ也、つとちと通ず、こほりとくなり、日方　東風の久しくふくを云、東の方より吹也、南風　南風はあたゝかにして蒸氣也、故によろづのさかな飯など、はやくすゑると云意、西北風　雨なし也、めを略す、あなしふけば、雨ふらざる物也、

〔倭訓栞前編九古〕こち　東風をいふ、ちは疾風をはやちとよめる類也、伊勢家集に、こちてふ風とよめり、琉球は東もこちといへり、中國の船人、三月の風を、へばりごちといふ、十月の風をほしの入

くるをいふ詞也、今も風便など音にいへり、河圖帝通記に、風天地使也と見えたり、

〔倭訓栞前編十一志〕しなどのかせ　中臣祓にみゆ、源氏にそのよのつみは、みなしなとのかせにたぐへてなどいへり、神代紀に級長津級長戸邊を風神といへり、口訣に[illegible][illegible]云二級長一と見えたり、[illegible]は野分の風也といへり、又乾風をいふといへり、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓

科戸之風乃、天之八重雲乎吹放事之如久、〇下略

〔源氏物語二十朝顔〕なべて世の哀ばかりをとふからにちかひしことゝ、神やいさめん、とあればあなⅿ心う、そのよのつみはみなしなどの風に、たぐへてきとの給あひぎやうもこよなし、

〔八雲御抄三上天象〕風　神風いせの國、經信卿の說、　春　秋　はつ　あまつ　夜　夕　朝万一　山　野　浦

濱　河　浪　しま　たに　松　しほ　をひ　うは　した　よこ　おき後拾、長能歌也、　は羽葉清輔抄

南雪ゆきといへり　あま　しなと　ありそ　ときつ万　うしほ万　みなと　いゐかせ家風也

山した　のせ清輔抄　北　冬同　こち東風也、あさこち、只こちともいへり、　あなし。いぬゐ也　ひかた日方ひつじさる、後頼抄巽風也、能兼はこち風のふきやまぬなり、　をきつ　はやち疾神のふかする風也　あゆ東の風とかけり、是家持が越中守時作歌也、是北陸道詞也、

いかほ　こからし秋冬　山おろし　河おろしさよふけてとよめり　山こし　うらこしあはれなるかぜなり

野分　しのゝをふき　まかせ　くすのうら　しなとの　しまなびく後頼抄　あらしまかせ

いたま万　あすかかせ　はつせ風　さほかせ已上三は所名也、万にあり、風ともいはで山おろし吹ともいへり、風まつりといふは、社などに風なふかせそと申也、又万葉になみおそろしと、かせまもりとよめる、これ舟事なり、　こがらしは秋冬風木枯なり、但こがらしの秋のはつ風ともよめり、野宮歌合に、正通冬物と雖て閉口畢、　こゝろあひのかせ　わいたやまし　きたこち、これらも風名也、　をしやな巽風、清輔抄、　谷風にとくる氷は、是毛詩心也、謂二東風一云々、尤氷可レ解風也、但作二春

無形而致者皆曰風、詩序曰、風風也、教也、風以動之、教以化之、劉熙曰、風氾也、放也、从虫凡聲、凡古音扶音切、風古音孚音切、在二七部一、今音方戎切、風動蟲生、故蟲八日而匕、依二韵會一、此十字在二从虫凡聲之下一、此說从虫之意也、大戴禮、淮南書皆曰、二九十八、八主風、風主蟲、故蟲八日化也、謂風之大數盡二於八一、故蟲八日而化、故風之字从虫、凡風之屬皆从風、𠙊古文風、

〔類聚名義抄 二口〕吹音衰、カセフク、アフク　〔同 十風〕風方隆反、カセ、カセフク、　颱カセコエ

〔下學集 上天地〕颸カセ　颸二字義同、風也、颸音弗、

〔和爾雅 一天文〕風カセ天地之氣噓而成風　凬カセ古文風字　颫スキカセ風自孔來曰颫　順風オヒカセ　逆風ムカフカセ石尤風同　颯颯サツサツ風聲

〔書言字考節用集 一乾坤〕順風オヒカセ　颶風ツキカセ五雜組、海風也、以其具二四方之風一、　沖津風同和俗所用

〔日本釋名 上天象〕風　ふかせなり、虛空よりふかする也、但上古のことば、其名づけし意はかりがたし、

〔東雅 一天文〕風カゼ　義不詳、古語にサといひ、又カザといひし、皆是其語の轉せしにて異なる義ありとも聞えず、舊事紀に、陽神朝霧を吹撥ふの氣、化して風神となれりなどいふ事は、見えけれど、カゼといふ義の如きは聞えず、古語にカセをサとのみ云ひしによれば、カといひしは、上の詞助なりしに似たり、萬葉集抄に、カは詞の上の助なり、輕きをカロクといひ、細きをカホソキといふが如しと見えたり、またセとは狹也とも見えたり、迫をセマルといふも、則迫狹の義なるなり、さらばカセといふは、其氣の物に迫りぬるをいふ事、たとへば雷風相薄るなど、いひし事の如くなりけんも知らず、サといひしはセの轉語なり、

〔倭訓栞 前編六加〕かせ　風をよめり、かせ反け、氣の義なるべし、又生すの義也、物風を得て生化す、よて風字虫に从へり、神代紀にも朝霧を吹撥ハラフの氣風神となるといへり、風に陰陽あるは神代紀に見えて、春夏の風は物を吹あげ、秋冬の風は物を吹おとすも、理の自然なるべし、蠡海集には、春の風は下より升り、夏の風は空中に横行すともいへり、倭名鈔に微風をこかせとよめり、風はやみは疾風をいふ也、風の姿は物によせていふ也、風ひやかは冷なる也、字書に颸を風涼と注せり、風ほめくは新撰字鏡に風劉をよめり、風をいたみは、つよく吹をいふ、風のたよりは、そことなく傳へ

古事類苑

天部四

風

名稱

風ハ、カゼト云フ、旋風、嵐、暴風、大風等ノ稱アリ、旋風ハツムジカゼ、又ハツジカゼト云フ、旋回シテ吹クナリ、嵐ハアラシト云フ、山上ヨリ吹キ下スヲ云フナリト、暴風ハハヤチ、後世ハノワキト云ヒ、大風ハオホカゼト云フ、風ハ又吹キ來ル方向、又ハ時節ニ依リ、東風(コチ)、南風(ハエ)、西北風(アナシ)、木枯(コガラシ)、をに北、へばりこち等ノ稱アリ、大風暴風等ノ殿舍ヲ倒シ、人畜ヲ壓傷シ、秋稼ヲ損ズル如キ災異屢ナリ、

〔倭名類聚抄一風雪〕風　春秋元命苞云、陰陽怒而爲風、

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕春秋元命苞、今無傳本、卷數撰人皆不詳、文選風賦注、太平御覽、廣韻所引、並與此同、說文、風八風也、風動蟲生、故蟲八日而化、釋名、風氾也、其氣博氾而動物也、又云、風放也、氣放散也、白虎通、風之爲言萌也、

〔段注說文解字十三下〕風八風也、東方曰明庶風、東南曰淸明風、南方曰景風、西南曰涼風、西方曰閶闔風、西北曰不周風、北方曰廣莫風、東北曰融風、樂記八風從律而不姦、鄭曰、八風從律、應節至也、左氏傳、夫舞所以節八音而行八風、服注、八卦之風也、乾音石、其風不周、坎音革、其風廣莫、艮音匏、其風融、震音竹、其風明庶、巽音木、其風淸明、離音絲、其風景、坤音土、其風涼、兌音金、其風閶闔、易通卦驗曰、立春調風至、春分明庶風至、立夏淸明風至、夏至景風至、立秋涼風至、秋分閶闔風至、立冬不周風至、冬至廣莫風至、白虎通、調風作條風、條者生也、明庶者迎衆也、淸明者芒也、景者大也、言陽氣長養也、涼寒也、陰氣行也、閶闔者戒收藏也、不周者不交也、言陰陽未合化矣、廣莫者大莫也、開陽氣也、按調風條風融風一也、八卦八節八方一也、通卦驗始於調風、許終於融風者、許依易八卦之次、終於艮也、艮者萬物之所以成終而成始也、風之用大矣、故凡

〔本朝世紀〕康治元年五月廿八日庚申、申剋雨雹、形如梅實、
久安五年六月廿一日辛未、申剋雷、大雹交降、如小梅子、數剋不消在地、甚爲奇、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年正月廿日庚寅、雷雨、電光耀天、降雹動地也、　三年三月五日戊戌、天晴、陰、小雨降、午剋雷鳴自南方亘北、降雹大如李、其後晴天、酉剋又雷鳴數聲凡無時、占文之趣甚不快云云、春雹下、大兵起、五穀不熟、人民餓死云云、但戊巳雷鳴有吉文之由、有宥申之輩、

〔當代記〕慶長十四年三月朔日、駿河氷降、此日關東下總國笠井氷降テ、家十七八間破損、雷夥啼、右家之中一屋之人悉取テ、其日ニ關宿之杉ノ木ニ掛ケル、　廿五日、下野國宇都宮領那須領氷降テ、雁、鴨、靑鷺、鵯、雲雀、巳下諸鳥多死、一鄕ニテ雁十二拾三所モアリ、他所ハ此氷一圓不降、

〔寬の須佐美三〕寬延三年四月の末、晴天なりし申剋ばかりにや、東北に黑雲深く雪も少々ふりて、白雨つよく氷のふる事、雪のごとく二尺ばかりつもりけり、氷重さ大なるは廿八匁ありしとぞ、御城廻りより、東地屋根の瓦を碎き堀をくづし、扆板など砲子の玉の打たる如く、ふかき踏附しとぞ、鳥燕雀など多く損じけるとぞ、本所邊猶强く家のくづれたるも多かりしとなり、芝靑山の邊は、一旦夕だち立たるばかりなり、氷のふることはときどきあれども、かゝる事は終に聞ず、是につきて四五日前、秩父山より初て、川越の城□□□三吉野の里といふあたり、大なる氷降て麥をことごとくに、打つぶしけるとぞ、

〔日本紀略 桓武〕延暦十九年四月辛卯、和泉國雨雹、大如桃李、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年七月癸未、震于大極殿東樓南角柱、雨雹、大如碁子、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月癸卯、雨雹、大如鴨卵、

〔三代實錄 二十清和三〕貞觀十五年五月三日丙寅、雷電雨雹、其大如雞子、或如梅實、　五日戊辰、神祇官陰陽寮言、雨雹之恠、賀茂松尾等神成祟、於是遣使社頭、奉幣幷走馬、以謝神怒、其走馬賀茂御祖別雷兩社各十匹、松尾五匹、並裝飾人馬、足悅神明、告文曰、云云、從五位下行伊勢介良岑朝臣晨茂乎差使天奉出須、　九日壬申、遣使於賀茂神社奉幣、申謝雨雹之咎徵、告文曰、始自今月二十日天、一萬卷乃金剛般若經令奉讀須、无止仍參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人乎差使天云々、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年四月五日乙未、自辰降雨、至申雷電雨雹、　九日己亥、申時雷電雨雹、摧傷草木之葉、占曰、凡雹者、冬之過陽、夏之伏陰也、過陽多溫、伏陰夏寒矣、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜六年四月某日、雷雨、午剋風雨暴起雹降、其大如梅實、

〔日本紀略 十三後一條〕長和二年三月廿九日庚申、今日未剋、雷鳴氷降、大如梅李、

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕康平七年四月十九日、未剋天陰、暴風雷雨、氷雹交降、大如梅李、牛馬駭走、數剋不銷、　八年〇治暦元年六月廿四日、大和國十市高市兩境、雨雹幷氷降、徑寸廿三日軒廊御卜、雨雹之異也、餘、

〔大神宮諸雜事記 二〕治暦二年五月十三日丙申、氷降天雷電振動天シ、四方如暗夜天シ、午時ヨリ迄于未時、大柑子許ノ氷降天、牛馬犬人中走迷、田夫殖女衣服笠被打破、大小鳥飛落天被打殺之事等、有宮司上奏畢、

〔百練抄 四後冷泉〕治暦二年五月十三日、大神宮雹雨、大如鷄卵、〇又見扶桑略記

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、日本紀、散字訓安良久、稷雪降即迸散、故名阿良禮、○中略按、説文、雹雨氷也、陸氏蓋依此、又按、釋名、雹跑也、其所中物皆摧折、如人所蹴跑也、陸佃埤雅、雹形似半珠、唐律釋文、春夏暴下、如雞子者名曰雹、合諸書攷之、雹夏月所降、今俗呼比也宇者是也、○中略阿良禮者以冬月降、不與雹之夏月降同、故萬葉集云、阿良禮布利板間吹風寒夜爾、又云、霜上爾安良禮多婆之里、又十二月雪阿良禮數降、見源氏物語、今時呼阿良禮者亦爾、釋名、霰星也、水雪相摶、如星而散也、説文、霰、稷雪也、埤雅、閩俗謂之米雪、言其霰粒如米、是當以霰充阿良禮也、

○按ズルニ、雹ヲ舊ク、ヒサメトモ、ヒフルトモ訓ゼシ説ハ、雨篇大雨條ニ在リ、參看スベシ、

〔類聚名義抄七〕雹歩角反、アラレ　靁或　雹霓霓霤俗　零音洛、アラレ、

〔改正月令博物筌十一月〕雹あられ凡雹は皆冬の陽をあやまり、夏の陰に伏するなり、

〔和漢三才圖會三天象〕雹ひやう音薄　俗云比也宇、如用氷字音平、　五雜組云、雹似霰之大者、但霰寒而雹不寒、霰雖晴而雹易晴、如驟雨、然雹下之地、禾麥經年不生、雹多降于夏日、雹中有砂土、雹中虚、以其激結之驟、包氣于中也、○中略　日本北地夏月雹降亦間有之、而大如蓮茨子等者、爲常焉、畿内中和之地、雹希而十年一無見之、然元祿十五年五月十六日申刻、驟雨有雷、黒雲迅速雨雹、始于攝陽經河州、終和州國分、自乾至巽斜也、其間六七里、横不過一里、其大者有稜、如瓦片、如鷄卵、小者如蓮茨、中之人創頭、屋破瓦、而一時而晴、蓋此起於不順之氣也、若北宋熙寧中河州雨雹、如人頭耳目口鼻皆具、無異鐫刻者、非常之怪雹不堪論、

〔日本書紀二十二推古〕三十六年四月辛卯、雹零、大如桃子、　壬辰、雹零、大如李子、

〔日本書紀二十四皇極〕二年二月乙巳、雹傷草木華葉、　四月己亥、西風而雹、天寒人著綿袍三領、　甲辰、近江國言、雹下、其大徑一寸、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年七月庚戌、雨雹、大者如碁石、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年四月丙戌、雨雹、

降雹

名称

右二首〇一首略　那賀郡〇常陸　上丁大舍人部千文

〔冠辭考一〕あられふり（かしまのさき　きしみがたけ　とほつあふみ　とほつおほうら）

あられふりて、音のかしましといひかけたり、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌類〕寄物陳思

霰零、遠津大浦爾緣浪、縱毛依十方、憎不有君、

〔萬葉集七雜歌〕旋頭歌

丸雪降、遠江、吾跡川楊、雖苅、亦生云、余跡川楊、

〔堀川院御時百首和歌冬〕霰　　右兵衞督師頼

道たえて人もたづねぬ槇の戸に冬の夜すがらあられをとなふ

〔新撰六帖一〕あられ　　行家

かりを田の鳴のうはげにふるあられたましで鳥をうつかとぞみる

〔金槐和歌集冬〕霰

もののふの矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

〔枕草子十〕ふるものは　あられは板屋

雹

雹ハ、舊クアラレト云ヒ、後ニヒヤウト云フ、霰ノ夏月ニ降ルモノナリ、

〔新撰字鏡雨〕雹雹（同、波角反、深也、志久禮、又阿禮、）

〔倭名類聚抄一風雪〕雹　陸詞云、雹雨冰也、補角反、和名安禮

名稱

〔八雲御抄 三上天象〕霰 万十六、これをみぞれとも云へり、 たまぎるは似玉也 たばしるは、とばしるといへり、故人說なり、

〔藻鹽草 一天象〕霰 万に、あられをみぞれとよめりと云々、 霰たばしる とばしると云儀也、但とばしるとはよまず、 霰みだれて 霰くだくる 霰ふる ふりくるふる共 霰のおと たまきる 似玉也 まる雪 あられの事也と云々 玉霰 霰ふりしく ひふり 氷降也、あられ也、

〔和漢三才圖會 三天象〕霰 あられ 音線 雪粒 霰 本字 阿良禮 霰 美曾禮 雹 阿良禮、和名抄之誤也、可改、 大戴禮曾子曰、陽之專氣爲霰、蓋盛陰之氣在雨水、則凝滯而爲雪、陽氣摶而脅之不相入、則消散而下、因水而爲霰、五雜組云、霰雪之未成花者、今俗謂之米粒雪、雨水初凍結成者也、

〔倭訓栞 前編 二〕あられ 新撰字鏡、和名鈔に雹をよめり、迸散の義をもて名くる也といへり、霰をもよめり、霓は和俗の造字也、万葉集には丸雪を義訓せり、今俗これをひやうといふは、氷雨の音なるべし、陸詞が說に雹氷雨也と見えたり、

降霰

〔古事記 下 允恭〕天皇崩之後、定木梨之輕太子所知日繼、未即位之間、姧其伊呂妹輕大郎女而歌曰、○中略 佐佐婆爾、宇都夜阿良禮能、多志陀志爾、○下略

〔萬葉集 十 冬相聞〕寄雪
霰落、板敢風吹、寒夜也、旗野爾今夜、吾獨寢牟、

〔萬葉集 二十〕六年○天平勝寶 正月四日、氏族人等賀集于少納言大伴宿禰家持之宅宴飮歌、
霜上爾、安良禮多婆之里、伊夜麻之爾、安禮波麻爲許牟、年緒奈我久、

〔萬葉集 七 雜歌〕羈旅作
霰零、鹿島之崎乎、浪高、過而夜將行、戀敷物乎、

〔萬葉集 二十〕阿良例布理、可志麻能可美乎、伊能利都々、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎、

〔東雅一天文〕雪ユキ〇中略　雪と雨と雜り下るを、ミゾレといふは、水降の轉語なるに似たり、

〔倭訓栞前編三十〕みぞれ　倭名抄に、霰また霙をもよめり、水あられの急語成べし、孫愐も霙は雨雪相雜也といへり、新撰字鏡には霂をよみ、日本紀には雨氷もよめり、

〔日本書紀二十四皇極〕二年三月、是月風雷雨氷、行冬令、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年四月戊午、雨霰、

〔萬葉集抄二〕霰打、安良禮松原、住吉之、弟日娘與、見禮常不飽香聞、

此歌、古點には、みぞれふり、あられまつばら、すみよしの、をとひむすめと、みれどあかぬかもと點せり、霰字はみぞれ、あられ、もとより兩訓あり、玉篇曰、霰思見切、暴雪、東宮切韻曰、霰、雨雪雜下也、又作霓霰、釋名曰、霰星也、水雪相搏如星而散也、ともに以て本說あり、事に云たがひて可和之歟、但し四條大納言公任卿の和漢朗詠集の中に、あられに用らる、

〔枕草子十〕ふるものは　みぞれはにくけれど、雪のましろにてまじりたるをかし、

〔源氏物語二若菜〕りんじの祭のでうがくに夜更て、いみじうみぞれふる夜、これかれまかりあがる所にて、思ひめぐらせば、猶いへぢとおもはんかたは又なかりけり、

〔千載和歌集二春〕後朱雀院の御時、うへのをのこども、ひんがし山の花見侍けるに、雨のふりにければ、白川殿にとまりて、をの〳〵歌よみ侍けるによみ侍ける、　大納言長家

春雨に散花みればかきくらしみぞれし空の心ちこそすれ

霙

霙ハ、アラレト云フ、雨水ノ凍結シタルモノナリ、

〔倭名類聚抄一 風雪〕霰　爾雅註云、霰冰雪雜下也、七見反、又作䨘、和名美曾禮、

〔箋注倭名類聚抄一 風雨〕按、皇極紀二年三月、風雷雨氷、雨氷訓美曾禮、然美曾禮非寒天不降、雷而降者蓋謂雹、當訓比佐女、上條○中略詳之、今本訓三曾禮非、又孝德紀白雉三年四月、連雨水至于九日、損壞宅屋、傷害田苗、人及牛馬溺死者多、持統紀五年六月、京師及郡國四十雨氷、戊子詔曰、此夏陰雨過節、惟必傷稼、兩雨水、今本並訓三曾禮、然四月六月非降美曾禮之時、又云、人及牛馬溺死者多、云陰雨過節則所謂雨水、蓋霖雨大水、非美曾禮、當訓比左米、今本所訓誤矣、○中略按、美曾禮者、阿良禮之脆弱、與雨俱下者、阿良禮之可充霰、詳前條、○中略美曾禮亦霰之類、然除霰之外、未見西土書可充美曾禮者、故萬葉集霰字訓阿良禮、或訓三曾禮也、或曰、萬葉集霰六見、其五訓安良禮、唯一訓美曾禮、則此一霰當依佗五霰訓阿良禮、然則後世呼美曾禮者、古統言阿良禮、不析言也、

〔倭名類聚抄一 風雪〕霙　孫愐云、霙雨雪相雜也、音於驚反、文選雪賦師說曰、三曾禮、

〔箋注倭名類聚抄一 風雨〕按、雪賦、霰淅瀝而先集、李善注、韓詩曰、先集惟霰、薛君曰、霰霙也、是霙字出李善所引薛君韓詩章句、非賦文、本書引文選師說、所訓皆文選正文、不及注文、此引師說訓注霙字、可疑、○中略按、玉篇、霙雨雪雜下、孫氏蓋本此、又按、霰之可充阿良禮、見雹條、孫愐以雨雪雜訓霙、則霙充美曾禮、似爲允、薛君以霙訓霰、統言之耳、○中略按、霰霙皆訓美曾禮、則不宜爲別條、師說亦可疑、蓋此多譌誤也、

〔類聚名義抄七〕霰（先見反 ミソレ）　霙（音英、又乙丈反、雪皃 ミソレ）　霙（ミソレ）

〔藻鹽草一 天象〕霙　みぞれの空　みぞる、空　霙ふる比　霙降くる　霙傳　木の葉こきませみぞれふる　霙空　つもるかとみえつる雪も霙

〔日本釋名上 天象〕霙　水あられ也、縱橫二重相通の反なり、此類も亦多し、らを略す、雨とあられとまじるを云、

名稱

山林幽谷の雪は、三伏の暑中にも消ざる所あり、

〔爲忠朝臣家百首〕葦間雪　　勘解由次官親隆

なには江のあしのあさはのしづれこそしたはふをしのうはきなりけれ

車中雪　　木工權頭爲忠朝臣

ふる雪にあふ坂山のたびぐるますぎのしづりに袖ぞぬれぬる

〔八雲御抄三天象〕雪〇中略 しづり、木の雪落るなり、

〔先哲叢談五〕源君美、字在中、新井氏、小字勘解由、初名璵、號白石、白石詩才亦爲天縱、其精工當世無敵、雖一時出遊戲、有足以見其敏警者、嘗過某許、主人書容奇二字索詩、輒援筆立就、曾下璉餅初試雪、紛紛五節舞容閑、一痕明月茅渟里、幾片落花滋賀山、提劒膳臣尋虎跡、捲簾清氏對龍顏、盆梅剪盡能留客、濟得隆多無限艱、蓋容奇雪字國譯也、故此作皆采故事於此邦、

〔萬寶鄙事記六占天氣〕雪　雪ふりてきえず、これを名づけて友を俟と云、必再雪ふる、雪ふりて久しくきえず、雪の後雨なきは、來年霖雨ふる、　多雪おほく降は豐年のしるしなり、多歛雪ふりて寒氣烈ければ、來年虫すくなし、　冬雪なければ、來年五穀實らずして民にわざはひ多し、　冬雪尺に滿るは、來年大きにゆたかなり、春雪は用なし、　冬雪なきは、麥實のらず、

霙

霙ハ、ミゾレト云フ、舊クハ雨氷及ビ霰、霂等ノ字ヲモ訓ゼリ、雨雪相雜リテ降ルモノナリ、

〔新撰字鏡雨〕霂亡各反、霂也、志久禮、又三曾禮、

ル山路ノ雪、甲冑ニ洒ギ、鎧ノ袖ヲ翻シテ、面ヲ撲コト烈シカリケレバ、士卒寒谷ニ道ヲ失ヒ、暮山ニ宿無シテ、木ノ下岩ノ陰ニシヾマリフス、適、火ヲ求得タル人ハ、弓矢ヲ折焼テ薪トシ、未友ヲ不離者ハ、互ニ抱付テ身ヲ暖ム、元ヨリ薄衣ナル人、飼事無リシ馬共、此ヤ彼ニ凍死テ、行人道ヲ不去敢、彼叫喚大叫喚ノ聲耳ニ満テ、紅蓮大紅蓮ノ苦ミ眼ニ遮ル、今ダニカヽリケリ、後ノ世ヲ思遣ルコソ悲シケレ、河野、土居、得能ハ三百騎ニテ、後陣ニ打ケルガ、天ノ曲ニテ、前陣ノ勢ニ追殿レ、行ベキ道ヲ失ニ、塩津ノ北ニヲリ居タリ、佐々木ノ一族ト熊谷ト、取籠テ討ントシケル間、相カヽリニ懸テ皆差違ヘントシケレドモ、馬ハ雪ニ凍ヘテハタラカズ、兵ハ指ヲ墜シテ弓ヲ不控得、太刀ノツカヲモ挙得ザリケル間、腰ノ刀ヲ土ニツカヘ、ウツフシニ貫カレテコソ死ニケレ、

〔北越雪譜二編上〕初夏の雪　我國〇越後の雪、里地は三月のころにいたれば、次第々々に消、朝々は凍こと鐵石の如くなれども、日中は上よりも下よりもきゆる、月末にいたれば目にも留るほどに、昨日今日と雪の丈け低くなり、もはや雪も降まじと、雪圍もこゝかしこ取のけ、家のほとり庭などの雪をも堀すつるに、雪凍りて堅きゆゑ、雪を大鋸にて大鋸里言に大切といふひきわりてすつる、その四角なる雪を脊負ひ、あるひは擔持にするなど、暖國の雪とは大に異り、雪に枝を折れじと、杉丸太をそへてえばりからげおきたる庭樹なども解ほどけば、さすがに梅は、雪の中に莟をふくみて、春待がほなり、これ春の末なり、此時にいたりて、去年十月以来暗かりし座敷も、やう〳〵明くなりて、盲人の眼のひらきたる心地せられて、雛はかざれども、桃の節供は名のみにて、花はまだつぼみなり、四月にいたれば、田圃の雪も斑にきえて、去年秋の彼岸に蒔たる野菜のるゐ、雪の下に萌いで、梅は盛をすぐし、桃櫻は夏を春とす、雪に埋りたる泉水を堀いだせば、去年初雪より以来二百日あまり黒闇の水のなかにありし、金魚緋鯉なんど、うれしげに浮泳も言やれ〳〵うれしやといふべし、五月にいたりても、人の手をつけざる日陰の雪は、依然として山をなせり、況や

作る、すべてみな雪にて作りたつる也、雪をくぼめぬかをしきて、火をたくにきゆる事なし、これを雪堂又城ともいふ、兒曹右の雪堂の内にあつまり、物など貢て神にもさゝげ、みなよりてうちくふ、又間にへだてを作りたるは、となりの家に准へ、さまぐ〵の事をなしてたはむれ遊ぶ、あそび倦ば、斯作りたるを打こぼつをもあそびとし、又他の童のこれにちかく、おなじさまに作りたるを、城をおとすなどいひて、うちくるふもあり、そのまゝにおくもあり、おのれ牧之も童のころは、かゝるあそびの大將をもせしが、むなしく犬馬の齢を歴て、今は夢のやう也けり、

〔嬉遊笑覽六下兒戲〕東京夢華錄、十二月の條に、此月雖無節序、而豪貴之家遇雪卽開筵、塑雪獅、裝雪燈、以會親舊、この灯籠はいかやうに作るにかあらむ、今わらんべの作るは、雪を丸くつくねて、石灯籠の火ぶくろの如く、横に穴をほり、灯心のふときを一筋油に漬し、中に入て火を點せば、よくともる、もし灯心多く火のつよければ、雪解て火ともらぬなり、

〔北邊隨筆四〕雪墮指　史記匈奴傳云、會冬大寒雨雪、卒之墮指者十二三、於是冒頓佯敗走誘漢兵云云、こゝにても北越の雪中に日を經たりしものゝ、足くび腐れおちたるをまのあたりみたりき、されどさる寒地になれたる人はさる事もなく、かつ其防もたくみなるべし、よそよりおもはんがごとくならば、ひと日もそこには住むものあるまじきなり、松前の人京にのぼりたりしが、しはすの比かの國にて三四月ばかりの肌もちなりといひし、されどかく暑寒順なる地にすめるをもよろこばぬ事、たゞわれひとりしかるにはあらじか、

〔太平記十七〕北國下向勢凍死事

同十一日〇延元元年十月ニ、義貞朝臣七千餘騎ニテ、鹽津海津ニ著給フ、七里半ノ山中ヲバ、越前ノ守護尾張守高經、大勢ニテ差塞タリト聞ヘシカバ、是ヨリ道ヲ替テ、木目峠ヲゾ越給ヒケル、北國ノ習ニ、十月ノ初ヨリ、高キ峯々ニ雪降テ、麓ノ時雨止時ナシ、今年ハ例ヨリモ陰寒早クシテ、風紛ニ降

明赫奕たる佛の國に生たるこゝち也、此外雪籠りの艱難さま〴〵あれど、くだ〴〵しければしるさず、鳥獸は雪中食无をしりて、雪淺き國へ去るもあれど一定ならず、雪中に籠り居て朝夕をなすものは、人と熊犬猫也、

雪道　冬の雪は脆なるゆゑ、人の蹈固たる跡をゆくはやすけれど、往來の旅人一宿の夜大雪降ば、ふみかためたる一條の雪道、雪に埋り途をうしなふゆゑ、郊原にいたりては方位をわかちがたし、此時は里人幾十人を傭ひ、檋縋(かんじきすがり)にて道を蹈開せ、跡に隨て行也、此費幾緡の錢を費すゆゑ、貧しき旅人は人の道をひらかすを待て、空く時を移もあり、健足の飛脚といへども、雪道を行は一日二三里に過ず、檋にて足自在ならず、雪膝を越すゆゑ也、これ多の雪中一ッの艱難也、春は雪凍て鐵石のごとくなれば、雪車(そり)(又雪舟の字をも用ふ)を以て重を乘す、里人は雪車に物をのせ、おのれものりて雪上を行事舟のごとくす、雪中は牛馬の足立ざるゆゑ、すべて雪車を用ふ、春の雪中重を負しむる事牛馬に勝る、(雪車の製作別に記す、形大小種々あり、大なるを修羅といふ、)雪國の便利第一の用具也、しかれども雪凍りたる時にあらざれば用ひがたし、ゆゑに里人雪舟途と唱ふ、

〔北越雪譜初編下〕童の雪遊び　我があたりはしば〴〵いへるごとく、およそ十月より翌年の三月するまでは、歳を越て半年は雪也、此なかに生れ、此なかに成長するゆゑ、わらべの雪遊びをなす事さま〴〵ありて、暖國にはなき事多し、その中に暖國の人にはおもひもよらざるあそびあり、まづ雪を高く堀揚おきたる上などを、童ども打よりて手あそびの木鋤にて平らになしてふみつけ、(わらべも雪中にはわらぐつをはくこと、雪國のつねなり、)さて雪をあつめて土塀を作るやうに、よほどの圍をつくりなし、その間ひにも雪にて壁めく所をつくり、こゝに入り口をひらきて、隣の家とし、すべての圍にも入り口をひらく、此内に宮めかす所を作り、まへに階をまうけ、宮の内に神の御體とも見ゆるやうにつくりすゑ、これを天神さまと稱し、(ゑびす大こくなどもつくる)筵などしきつめ、物を煑べき所をも

里七十里、或は百里にも餘る所を、纔に一日二日の間に行付なり、此外津輕の外が濱邊蟹田蓬田邊よりも、今別、三馬屋邊へ雪中には眞直に山を越えて、甚近くて行るゝ事なり、其餘一里二里五里七里の程ちかき所は、かくの如く雪の上を越て、近道となる所甚多し、常には皆雜樹或熊篠など生ひ茂りて、通ひがたき所なり、北地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪皆積るより氷て甚堅く、いかに蹈とも落入るといふ事なし、南國の雪の樣子とは、大に違ひたるものなり、寒中に彼地に遊ばざれば、信じがたき事なり、仙臺御先祖正宗の和歌に、中々につゝら下りなる道たえて雪に降の近き山里、といへるも、兼ては解しがたく覺えしが、是等の見聞て初て此歌を感せり、

〔北越雪譜 初編 上〕雪蟄(ゆきごもり)　凡雪九月末より降はじめて、雪中に春を迎、正二の月は雪尚深し、三四の月に至りて、次第に解、五月にいたりて雪全く消て夏道となる、(年の寒暖によりて遲速あり)四五月にいたれば、春の花ども一時にひらく、されば雪中に在る事凡八ヶ月、一年の間雪を看ざる事僅に四ヶ月なれども、全く雪中に蟄るは半年也、こゝを以て家居の造りはさら也、萬事雪を禦ぐを專とし、財を費、力を盡す事紙筆に記しがたし、農家はことさら夏の初より秋の末までに、五穀をも收るゆゑ、雪中に稻を刈事あり、其忙き事の千辛萬苦、暖國の農業に比すれば百倍也、さればとて雪國に生る者は、幼稚より雪中に成長するゆゑ、蓼中の蟲辛をしらざるがごとく、雪を雪ともおもはざるは、暖地の安居を味ざるゆゑ也、女はさら也男も十人に七人は是也、玄かれども住ば都とて、繁花の江戸に奉公する事年ありて後、雪國の故郷に歸る者、これも又十人にして七人也、胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巣くふ故郷の忘がたきは、世界の人情也、さて雪中は廊下に(江戸にいふ店下)雪埀(ゆきだれ)をかや(にてあみたるすだれをいふ)下し、(雪吹をふせぐため也)窓も又これを用ふ、雪ふらざる時は卷て明をとる、雪下事盛なる時は、積る雪家を埋て、雪と屋上と均く平になり、明のとるべき處なく、晝も暗夜のごとく燈火を照して、家の内は夜晝をわかたず、漸雪の止たる時、雪を掘て僅に小窓をひらき、明をひく時は、光

油斷して立山の方はかこまず、成政纔の近習計を召具し、忍びやかに城を出て、雪深く埋みたる立山の絶頂へ、雪の上を眞一文字にかけ登り、又絶頂より南をさし、谷嶺をいとはず雪の上をすべり落ければ、信州松本へ落付たり、それより濱松に越えて恙なく、救ひを得たりとなり、雪中に立山を眞直に越たる艱難、中々言葉につくすべからず、其越たる跡を成政がさら〳〵越といひて、只今にも勇氣の者は、越中富山より信州松本へ一二日が間に越る事なり、されど是は法度の事なりとて、其さら〳〵越の所は、彼地の人も秘するといへり、常の道を廻りて行ば、富山より松本へ六七十里にも餘れる所を、一日か二日の間に行道なり、此事只寒中より早春の間にすべき事にて、常の時はなりがたしとぞ、其子細は人跡絶たる極深山のことなれば、草木生ひ茂りて、行べき道をさへぎり、あるひは斷岸絶壁の所ありて、羽なければ飛がたく、あるひは猛獸出て人を食ふ、數十丈の雪積る時には、斷岸絶壁の所も皆一面の雪と成り、たとへころび落たるにも、雪の上なれば其身損ずる事なし、又大樹喬木といへども、皆雪に埋れて一面の平地の如し、猛獸又皆逃隱れて穴に住めば、人を害することなし、此ゆゑに寒氣に堪へ忍びて命全ければ、谷嶺池川の差別なく、眞直に越えらるゝことなり、此事を越中にてくはしく聞しかど、あまりけしからぬ事ゆゑ、只昔物語のやうに聞流して居たりしが、それよりだん〳〵出羽奥州に入て、見るに聞くに、立山のさら〳〵越の事、初て誠の事と思ひ悟りぬ、津輕領の青森といふ所の南に當りて、甲田山といへる高山あり、其峰參差として、指を立たるが如くなれば、土俗八ッ甲田といふ、叡山愛宕抔のごとき山を、三ッも五ッも重ね上たるが如き高山也、津輕領の人勇氣たくましき者、又は罪を得てすがたをかくす時抔、津輕の關所、南部の關所ともに拔んとするに、極月より二月三月の頃までは、此甲田山の絶頂をさして、雪の上を眞一文字に登り、礎石を立て南部地は東南の事と志し、其方角のあたる方をさして、眞直にすべり落る事なりとぞ、常なみの本道を廻り行時は、五十

寒甚ケレバ片愈美ナリ、凡ソ物方體ハ必八ヲ以テ一ヲ圍ミ、圓體ハ六ヲ以テ一ヲ圍ムコト、定理中ノ定數誣ベカラズ、雪花ノ六出ナルユヘンモ亦コレノミ、立春後ノ雪、ミナ五出ノ説アレドモ取リ難シ、水巳ニ雪ニ變ズレバ、重體忽チ二十四分ヲ減ジ、輕飄毳ノ如ク、花形万端都テ六出、星辰ノ芒角ノ如ク、其狀整正、其質潔瑩、實ニ賞スルニ堪タリ、其精白ニシテ他色ヲ雜ヘザルハ、光線ノ盡ク反射ヲ致スルニヨル、雪モシ黑色ナラバ四望幽暗、豈堪フベケンヤ、西土雪花ヲ驗視スルノ法、雪ナラントスルノ天、預メ先黑色ノ八絲緞ヲ氣中ニ曬シ、冷ナラシメ、雪片ノ降ルニ當テ之ヲ承ク、肉眼モ視ルベク、鏡ヲ把テ之ヲ照セバ更ニ燦タリ、看ルノ際氣息ヲ遮ケ、手温ヲ防ギ、纖鑷ヲ以テ之ヲ箝提スト、余文化年間ヨリ雪下ノ時毎ニ、黑色ノ漆器ニ承ケ之ヲ審視シ以テコノ圖ヲ作ル、雪其形質ヲ美ニスルノミナランヤ、功用マタ少カラズ、○中略

壬辰○天保三年夏六月　許鹿　源利位識

【伊勢物語 上】むかしみなせにかよひ給ひし、これたかのみこ、れいのかりしにおはします、ともにむまのかみなる翁○在原業平つかうまつれり、○中略かくしつゝまうでつかうまつりけるを、思ひの外に御ぐしおろさせ給うてけり、む月にをがみ奉らんとて、小野にまうでたるに、ひえの山のふもとなれば、雪いとたかし、しゐてみむろにまうでゝをがみ奉るに、つれ〲といと物かなしくておはしましければ、やゝ久しくさぶらひて、いにしへの事など思ひ出て聞えけり、さてもさぶらひてしがなとおもへど、おほやけ事ども有ければ、えさぶらはで、夕ぐれにかへるとて、

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは、とてなんなく〲きにける、

【東遊記 三】文武の餘風　佐々成政越中を領せし頃、敵に圍れ勢屈して、外に味方の助け無れば、我城をだに守り兼し折ふし、きつと思案をめぐらし、濱松ば兼てのちなみなれば、みづから行て救ひを求んと欲すれども、四方皆敵に圍れて出べき道なし、折節極月○天正十二年廿七日の事なれば、夏の日だにも雪消ぬ、越中立山麓より峰まで、數丈の雪封じて禽獸さへ通ひ得ざる時なれば、敵も

〔古今和歌集 冬六〕題しらず

この川にもみぢばながるおく山の雪げの水ぞいままさるらし　　よみ人しらず

〔甲子夜話 二十四〕又前人一〇市川學 信州ニモ居タリトテ語ル、信越ノ雪ハ世ニ云フ如クナリ、雪次第ニ降積ルユヱ、ソノ深サ凡六丈ニモ及ブベシ、サレドモ下ノカタヨリ、キツキ堅マルユヱ、春ニナリテモ一丈四五尺ガ程ナラデハナシ、ソノ雪ノ解ルトコロハ、江都ナドノ雪解ノサマトハ異ニシテ、雪ノ中ニ一筋ニ往來ノ道ツク、ソレハ土出テ細道ヲナセド、道ノ左右ハ猶四五尺ホド高ク積タル雪、ソノマヽ有リ、ソレガイツ解ルトモナク、漸々ニヒキク成ルハ、自然ニ土中ニシミ入テ消ユクナリ、ソガ間ハ江都ナドノ如ク、道塗ヌカルコトハナシトナリ、カノ深雪ノ消ルモノ、此地ノ如ク解ケ流ルヽホドナラバ、道路ノ泥濘行人絶ヌベキニ、造化ノ妙ニテ、道路ハ乾キタルマヽニテ、消盡キ行人ノ妨トナラズ、不思議ノ一ツトヤ云ハント、

雪水

〔宜禁本草 乾 玉石金土木〕臘雪水　臘中所積之雪　甘冷無冷、淹藏一切菓實良、解一切毒時氣溫疫小兒熱癇酒後熱疸、溫服可以滌熱、

春雪水　甘冷、立春後雪消爲水、食之令人牙蛀生虫、其水易敗不堪收、

〔見陽漫錄〕雪水　駿州富士山の下の村にては、糞しなしに水をかけひきして麥を作る、これ富士の雪水ゆゑなり、北國の蕨薇も大雪の年は肥えて宜しければ、誠に雪は豐年の瑞なり、

雜載

〔雪華圖說〕夫水ノ其形ヲ變換スル、雪ヲ以テ最奇ナリトス、海陸ノ氣、上騰シテ雲ヲナス、雲冷際ニ臻レバ、其溫ヲ失シ變ジテ雨トナル、氣中ニ在ルヲ以テ、一々皆圓ナリ、初圓ハ至微至細、漸ヲ以テ併合シ、終ニ重體點滴ノ質ヲ致ス、冬時氣升テ同雲ヲ成シ、冷ニ遭テ卽亦圓點ヲ成ス、冷侵ノ甚シキ、一々凝沍シ、下零スルモ其併合ヲ得ズ、聊相依附シテ大圓ヲ成サント欲シ、六ヲ以テ一ヲ圍ミ、紛々翩々頓ニ天地ノ觀ヲ異ニス、故ニ寒甚ケレバ、粒珠トナリ、寒淺ケレバ花粉ヲナス、花粉ノ中

雪消

掃除成兼可申候、如何可仕と、とり〳〵より〳〵申候、然處信綱公被爲聞、道幅に筵をしかせ置、降溜たる雪を筵儘運取、新敷筵を敷替候へと、御下知に而悉事調申由也、

〔北越雪譜初編上〕雪を掃ふ　雪を掃ふは落花をはらふに對して、風雅の一とし、和漢の吟咏あまた見えたれども、かゝる大雪をはらふは風雅の狀にあらず、初雪の積りたるを、そのまゝにおけば再び下る雪を添へて、一丈にあまる事もあれば、一度降ば一度拂ふ、雪淺ければ、のちふるをまつ、是を里言に雪掘といふ、土を掘がごとくするゆゑに斯いふ也、掘ざれば家の用路を塞ぎ、人家を埋て人の出べき處もなく、力强家も幾万斤の雪の重量に、推碎んをおそるゝゆゑ、家として雪を掘ざるはなし、掘るには木にて作りたる鋤を用ふ、里言にこすきといふ、則木鋤也、椈といふ木をもつて作る、木質輕强して折る事なく且輕し、形は鋤に似て刃廣し、雪中第一の用具なれば、山中の人これを作りて里に賣、家毎に貯ざるはなし、雪を掘る狀態は圖にあらはしたるが如し、〇中略掘たる雪は空地の人に妨なき處へ、山のごとく積上る、これを里言に掘揚といふ、大家は家夫を盡して、力たらざれば掘夫を傭ひ、幾十人の力を併て一時に掘盡す、事を急に爲すは、掘る内にも大雪下れば、立地に堆く、人力におよばざるゆゑ也、掘る處、圖には人數を略してあげけり、右は大家の事をいふ、小家の貧しきは掘夫をやとふべきも費あれば、男女をいはず一家雪をほる、吾里にかぎらず雪ふかき處は皆然なり、此雪いくばくの力をつひやし、いくばくの錢を費し、終日ほりたる跡へ、その夜大雪降り夜明て見れば元のごとし、かゝる時は主人はさら也、下人も頭を低て歎息をつくのみ也、大低雪ふるごとに掘ゆゑに、里言に一番掘二番掘といふ、

〔萬葉集三雜歌〕登筑波岳丹比眞人國人作歌一首幷短歌

鷄之鳴、東國爾、高山者、左波爾雖有、〇中略不見而往者、益而戀石見、雪消爲山道尙矣、名積敍吾來前二

〔萬葉集略解三下〕前二は並ニの誤り、四の義をもてかけり、

掃雪

〔古今著聞集和歌五〕平治元年二月廿五日、御方違の爲に、押小路殿に行幸有けり、透廊にて夜もすがら御遊ありけるに、女房の中より硯蓋に紅の薄樣をしきて、雪をもりて出されたるに、和歌をつけたりける、

月影のさえたるをりの雪なればこよひははるもわすれぬるかな、返し、

くまもなき月のひかりのなかりせばこよひのみゆきいかでかはみむ

〔古今著聞集飲食十八〕九條の前内大臣家〇藤原基家に、壬生の二位〇藤原家隆參て、和歌のさた有けるに、二月の事なりけるに、雪にあまづらをかけて、二品にすゝめられけり、くいはてゝ、此雪猶候はゞ給て、二條中納言定高のもとへつかはし候はん、かの卿は雪くいにて候也と申ければ、すなはち硯のふたにもりて、出されにけるをつかはしたりければ、かの卿の返しに、

心ざしかみのすぢともおぼしけりかしらの雪かいまのこのゆき、よまれにけりとて、二品しきりに興に入けり、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年六月五日甲午、有評定、此事毎度日來有盃酒椀飯等之儲、又當炎暑之節者、召寄富士山之雪、所爲備珍物也、彼是以無民庶之煩休被止之、善政隨一云云、

〔萬葉集十七〕天平十八年正月、白雪多零、積地數寸也、於時左大臣橘卿、率大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等、參入太上天皇御在所中宮西院、供奉掃雪、於是降詔、大臣參議幷諸王者、令侍于大殿上、諸卿大夫等者、令侍于南細殿、而則賜酒肆宴、勅曰、汝諸王卿等聊賦此雪、各奏其歌、

左大臣橘宿禰應詔歌一首

布流由吉乃、之路髪麻泥爾、大皇爾、都可倍麻都禮婆、貴久母安流香、

〔類聚國史百六十五祥瑞〕延暦十二年十一月丁亥、大雪、諸司掃雪、賜物有差、

〔信綱記〕一前御代〇徳川家光極月晦日雪降出、元日御出仕之前、鐵御門より内御玄關迄、道通之雪明爲

東西一丈五尺、南北一丈二尺七寸、高一丈八尺二寸、

〔玉海〕文治元年十二月廿六日乙亥、夜雪高積、殆及尺、近年之間、無少之甚雪也、大將○藤原良通方企雪山、

二年十二月十二日乙酉、雪降及六七寸、召隨身等企雪山、

〔明月記〕正治二年正月十九日、雪紛々朝天晴、○中略隨身共遲參、無云甲斐、雪朝更不可待催、拂曉著毛沓參入、必エフリヲ可待、而被尋求之後適出來、被召仰雪山事、エフリ可給之由申之、尾籠之中尾籠也、各非父祖子孫歟、無慙也、諸人不得心之故也、於今者只可沙汰雪山也、汝可爲奉行者、蒙此仰成恐祇候、

〔本朝續文粹八序〕七言歲暮侍宴同賦積雪爲小山應製詩一首以寒爲韻并序　正家朝臣

于時嚴冬欲暮、積雪正多、占此中庭之勝形、成彼小山之新構、岑巒非高、豈有昇降之喩、溪谷惟卑、更無烟雲之幽、至于如封任地勢、築依人力、嶺面之欠青、織羅之黛永隔、巖頭之帶白、紫蓋之形猶殊者也、既萃賓暮而景冷、蘭釭挑而興闌、在座識者僉然而曰、我后受文祖於堯年之昔、潤土德於舜日之朝、以詩書禮樂之道、應萬機、以壯皇猷、春夏秋冬之天送四序、以遂叡賞、好文之世不堪悅乎、正家昔聚竹窓之寒色、代夜燈兮遂業、今翫蘭殿之奇輝、近春風兮銷魂、慙非凌雲之才、謬獻賦雪之趣云爾、謹序、

〔古今著聞集十一蹴鞠〕後二條殿○藤原師通三月の比、白河の齋院へ參給て、御鞠の會有けるに、まばし有て、かさみのきたる童、扇をかざして、片手に蒔繪の手箱の蓋に薄樣敷て、雪をおほく盛て、日隱の間の御簾に置て歸入にけり、御あせなどたりげにて、日隱の間に沓はきながら御尻かけて、御手などにてはとらせ給はで、檜扇のさきにて、すこしすくひたまひけるが、こみたる雪にて、御直衣にかゝりたりけるがとけて、二重裏にうつりていでゝ、むら〳〵に見へける、

〔中右記〕嘉保二年四月廿日、午時許參一院、六條殿上皇并郁芳門院共有御見物、○賀茂祭、中略、此間從御前下給雪、炎天流汗之間、人々饗應、暑月給雪、誠以珍事也、

衆官人已下、兼又召諸陣吉上、又令召左右衛士等、各上御殿上、掻集宿雪、積置御庭上、終日不休、仰酒殿幷造酒司、令賜酒於役夫等、是例也、及晩景役夫等退下、積置殆及覆襟耳、

〔續今古和歌集二十賀〕雪のいとふりつもりて侍りけるを、山のかたにつくらせ給ひけるに、うへのをのこども、歌つかうまつり侍りければ、よませ給ひける、　後朱雀院御歌

天地もうけたる年のしるしにやふる白雪も山となるらむ

〔續拾遺和歌集六冬〕だいばん所の壺に、雪の山つくられて侍ける朝よみ侍ける、　周防内侍

あだにのみつもりし雪のいかにして雲井にかゝる山となりけん

〔新後拾遺和歌集八雜秋〕堀川院位におはしましける時、南殿の北面に、雪の山造らせ給ふよしを聞きて、内なる人に申し遣しける、　周防内侍

行きて見ぬ心のほどを思ひやれ都のうちのこしのしら山

返し　中宮上總

きても見よ關守すゑぬ道なれば大うち山に積るしらゆき

〔永昌記〕嘉承元年十二月三日庚申、今日自夜雪降、深及五六寸、早旦參内、主上〔堀河〕於紫宸殿覽深雪、朝餉壺幷藤壺前庭、被作雪山、〔雲客幷瀧口、所衆各競作之、予(藤原爲隆)候宮御方、同令營之、〕殿上人八九輩遊舟岡、爲覽初雪也、上皇〔白河〕於桂河胡賀邊歷覽之、近日御鳥羽也、

〔台記〕保延二年十二月四日丁酉、雪積地八九寸許、夜前雪の積也、今日ハ不降、予〔藤原賴長〕雪山ヲ作、申終程、雪山ヲ作了、此後予食物、自旦依作雪山、申了程、今日初食物也、凡今日食物只一度也、食申了後又不食、

久安二年十二月廿日、大雨雪、〔洛中殿上九寸〕辰剋向舟岳眺望、〔中略〕歸家築雪山、廿一日、戊剋終雪山之功、

見つるを、これにぞあやしくおもひしなど、おほせらるゝに、いとゞつらくうちもなきぬべき心ちぞする、いであはれいみじき世の中ぞかし、のちにふりつみたりし雪を、うれしとおもひしを、それはあいなしとて、かき捨よなどおほせごと侍しかと申せば、げにかたせじとおぼしけるならんと、うへもわらはせおはします、

〔公任卿集〕二月に雪のいとたかう降たる、ゆきよりがさうしの前に、雪の山をいとたかうつくりて、煙をたてたるに、雪のいとうふれば、からかさをおほひてたてたりければ、

東路のふじのたかねにあらねども三かさの山も煙立けり〇中略

雪の山をつくり給うて

音にきく越の白ねはしら山の雪つもりての名にこそ有けれ〇中略

ゆきよりがさうしに、雪の山をつくりたるに、物にかきてさゝせ給ひける、

音にきく越の白山しら雪の降つもりての事にぞ有ける

かへし、かねすみが女、

ふりつもる雪をのみみる白山のけふはかひある心ちこそすれ

ひさしう里なるころ、雪の山つくり給うたりときゝて奉りける、

おぼつかな今も昔もにたゞ名をのみぞきくこしの白山

かへし

白山をよそに思はゞ我宿を今はこしとやおもひなりぬる

〔春記〕長暦四年〇長久元年十一月十一日壬戌、従暁更雪降、深及一尺三寸、終日不休、〇中略殿下〇藤原頼通幷四五資近習上達部殿上人、立庭中翫雪也、積而摸山歟、予〇藤原資房同以追従也、十二日癸亥、天陰、雪深一尺四寸、〇中略仰〇藤原頼通云、御前之小庭〇朝干飯御前聚雪欲作山、宜仰其由者、予仰蔵人章行、令召主殿

つたへさせんと、うめきずんじつる歌も、いとあさましくかひなく、いかにしつるならん、きのふさばかりありけん物を、よのほどにきえぬらん事と、いひくんずれば、こもりが申つるは、きのふいとくらうなるまで侍き、ろくを給はらんと思ひつる物を、たまはらずなりぬる事と、手を打て申侍つると、いひさはぐに、内よりおほせ事ありて、扨雪はけふまで有つやと、のたまはせたれば、いとねたく口をしけれど、年のうちついたちまでだにあらじと、人々啓し給ひし、きのふの夕ぐれまで侍しを、いとかしこしとなんおもひ給ふる、けふまではあまりの事になん、夜のほどに、人のにくがりてとりすて侍にやとなんをしはかり侍ると、啓せさせ給へときこえさせつ、さて二十日にまいりたるにも、まづ此事を御　にてもいふ、皆きえつとて、ふたのかぎりひきさげてもてきたりつる、ぼうしのやうにて、すなはちまうできたりつるが、あさましかりし事、もの丶ふたにこ山うつくしうつくりて、白き紙にうたいみじくかきて、まいらせんとせし事などけいすれば、いみじくわらはせ給ふ、おまへなる人々もわらふに、かう心にいれておもひける事をたがへたればつみうらん、まことには四日の夕さり、さぶらひどもやりて、とりすてさせしぞ、かへり事にいひあてたりしこそをかしかりしか、そのおきないできて、いみじう手をすりていひけれど、おほせ事ぞ、かのよりきたらん人にかうきかすな、さらば屋うちこぼたせんといひて、左近のつかさ南のついぢのとにみなとりすてし、いとたかくておほくなんありつといふなりしかば、げに二十日までもまちつけて、ようせずば、ことしの初雪にもふりそひなまし、うへ〇一條にもきこしめして、いとおもひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにもおほせられけり、さてもかの歌をかたれ、いまはかくいひあらはしつれば、おなじごとかちたり、かたれなど、御まへにものたまはせ、人々ものたまへど、なにせんにか、さばかりの事をうけ給はりながら、けいし侍らんなど、まめやかにうく、心うがれは、うへもわたらせたまひて、まことに年ごろは、おほくの人なめりと

るものをなどいふ、御まへにもおほせらる、おなじくはいひあてゝ御らんせさせんと、おもへる
かひなければ、御物のぐはこび、いみじうさはがしきにあはせて、こもりといふものゝ、ついぢの
ほどにひさしさしてゐたるを、えんのもとちかくよびよせて、此雪の山いみじくまもりて、わら
はべなどに、ふみちらさせこぼたせで、十五日までさぶらはせ、よく〳〵まもりて、其日にあたら
ば、めでたきろく給はせんとす、わたくしにもいみじきよろこびいはんなどかたらひて、つねに
だいばん所の人、げすなどにこひて、ぐるゝくだ物やなにやと、いとおほくとらせたれば、うちゑ
みて、いとやすきこと、たしかにまもり侍らん、わらはべなどぞ登り侍らんといへば、それをせい
してきかざらんものは、ことのよしを申せなどいひきかせて、いらせ給ひぬれば、七日までさぶ
らひて出ぬ、其ほどもこれがうしろめたきまゝに、おほやけびと、すまし、おさめなどして、たえず
いましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、をがみつる事など、かへりてはわら
ひあへり、里にてもあくるすなはちこれを大事にして見せにやる、十日のほどには、五六尺ばか
りありといへば、うれしくおもふに、十三日の夜、雨いみじくふれば、これにぞきえぬらんと、いみ
じうくちをし、今一日もまちつけでと、よるもおきゐてなげけば、きく人も物ぐるをしとわらふ、
人のおきてゆくに、やがておきゐて、げすおこさするに、さらにおきねば、にくみはらだゝれて、お
きいでたるをやりて見すれば、わらうだばかりになりて侍る、こもりいとかしこう、わらはべも
よせでまもりて、あすあさてまでもさぶらひぬべし、ろく給はらんと申といへば、いみじくうれ
しく、いつしかあすにならば、いとう歌よみて、物に入てまいらせんと思ふも、いと心もとなう
わびしう、まだくらきに、おほきなるおりびつなどもたせて、是にしろからん所ひたものいれて
もてこ、きたなげならんはかきすてゝなど、いひくゝめてやりたれば、いとゝくもたせてやりつ
る物ひきさげて、はやううせ侍りにけりといふに、いとあさまし、をかしうよみ出て、人にも語り

りとをくも申てけるかな、げにえしもさはあらざらん、ついたちなどぞ申べかりけると、下にはおもへど、さばれさまでなくと、いひそめてん事はとて、かたうあらがひつ、二十日のほどに雨などふれど、きゆべくもなし、たけぞすこしをとりもてゆく、しら山の觀音これきやさせ給ふなと、いのるも物ぐるをし、さてその山つくりたる日、式部のぞうたゞたか、御使にてまいりたれば、しとねさし出し、物などいふに、けふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき、御前のつぼにもつくらせ給へり、春宮弘徽殿にもつくらせ給へり、京極殿にもつくらせ給へりなどいへば、

こゝにのみめづらしとみる雪の山ところ〳〵にふりにけるかな、とかたはらなる人していはすれば、たび〳〵かたぶきて、返しはえつかふまつりけがさじ、あざれたり、みすのまへにて人にをかたり侍らんとてたちにき、歌はいみじくこのむときゝしに、あやし、御前にきこしめして、いみじくよくとぞおもひつらんとぞのたまはする、つごもりがたに、すこしちいさくなるやうなれど、なほいとたかくてあるに、ひるつかた縁に人々出ゐなどしたるに、ひたちの介出きたり、○中略にくみわらひて人のめも見いれねば、雪の山にのぼりかゝづらひありきていぬるのちに、右近の内侍にかくなんといひやりたれば、などか人そへてこゝには給はせざりし、かれがはしたなくて、雪の山までかゝりつたひけんこそ、いとかなしけれとあるを又わらふ、ゆきやまは、つれなくてとしもかへりぬ、ついたちの日又雪おほくふりたるを、うれしくもふりつみたるかなとおもふに、これはあいなし、はじめのをばおきて、今のをばかきすてよと仰せらる、○中略雪の山は、まことにこしのにやあらんと見えてきえげもなし、くろくなりて見るかひもなきさまぞしたる、かちぬるこゝちして、いかで十五日まちつけさせんとねんずれど、七日をだにえすぐさじと猶いへば、いかでこれ見はてんと、みな人思ふ程に、俄に三日うちへいらせ給ふべし、いみじう口をしく、此山のはてをしらずなりなん事と、まめやかにおもふほどに、人もげにゆかしかりつ

〔倭名類聚抄十五　調度部〕杌　郭璞方言注云、江東杷之無齒者爲杌、〈音兀、漢語抄云江布利〉

〔空穗物語　樓の上上〕いかゞありしふりし雪のふるまでみたてまつらねば、いとわびしけれど、きのなきそとの給へば、宮は雪をぞ山につくらせ給て、まろと二宮とはならべてみ侍しかしとの給まゝに、なき給ぬべければ、こと〳〵にまぎらはし給へば、いとゞくろうつやゝかなる御ぞに、うすはうのからあやの御ほそながにはへて、きよらにいよ〳〵うつくしげになりまさり給、雪山つくらせ給て、ひゝなあそびなど、もろともにして、みせたてまつり給、

〔河海抄　九　椎〕應和三年十二月廿日、令右衞門志飛鳥部常則、堆雪作蓬萊山於女房小庭、今日功畢、賜常則及畫所雜色役夫三人祿有差、

〔枕草子　四〕さはすの十よ日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房どもなどして、ものゝふたにいれつゝ、いとおほく置くを、おなじくは庭に、まことの山をつくらせ侍らんとて、さぶらひめして、おほせ事にてといへば、あつまりてつくるに、殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなどもみなよりて、いとたかくつくりなす、宮づかさなどまいりあつまりて、ことくはへことにつくれば、所のおさう三四人まいりたる、殿守づかさの人も二十人ばかりになりにけり、里なるさぶらひめしにつかはしなどす、けふ此山つくる人には、ろく給はすべし、雪山にまいらざらん人には、おなじからずとゞめんなどいへば、聞付たるは、まどひまいるもあり、里とをきはえつげやらず、つくりはてつれば、みやづかさめして、きぬ二ゆひとらせて、えんになげ出るを、一づゝとりにより、て、をがみつゝ、こしにさしてみなまかでぬ、うへのきぬなどきたるは、かたえさらでかり衣にてぞある、これいつまでありなんと、人々のたまはするに、十餘日はありなん、たゞ此ごろのほどを、ある限申せば、いかにととはせ給へば、む月の十五日までさぶらひなんと申を、御前〈○藤原定子〉にもえさはあらじとおぼすめり、女房などはすべて年の內、つごもりまでもあらじとのみ申に、あま

雪山

わたつみも雪げの水はまさりけりをちの島々みえずなりゆく

〔新拾遺和歌集十七釋教〕雪にて丈六の佛をつくり奉りて、供養すとてよめる、　　　　瞻西上人

いにしへの鶴の林のみゆきかと思ひとくにぞあはれなりける

〔古今著聞集五和歌〕嘉保三年正月晦日、殿上人船岡にて花を見けるに、齋院選子より柳の枝を給はせけり、○中略其夜の事にや、殿上人齋院へ參たりける、御用意なからんことを、はかり奉りけるにや、さる程に寢殿より打衣きたる女房あゆみ出て、笙をもちて殿上人に給はせけり、雪にて管をつくりたるひにて竹を作たりけり、則內裏へもちて參て、御覽せさせければ、ことに叡感有て、大宮へ奉らせ給ける、

〔東都歲事記四十一月〕看雪○中略　雪をもつて市街へ達磨布袋、其餘色々の作り物をなす、又雪轉の戲等諸國に替らず、

〔續近世畸人傳五〕僧惠甯　惠甯名忍鎧、號空華子、平安の人也、聞香に長じ一時に鳴、連理燒合五味七圖をきゝしるのみならず、凡物の臭氣をきくこと常ならず、或雪の朝、雪もてさまぐ＼の物の象を作りて、童の持來りしを見て、此兎は某の家のあたりの雪かととふ、童どもしかりとこたふ、其作りたる人は某かととふ、又しかりといふ、傍の人おどろき、香のみならず、雪までも鑒定し給ふやとゝへば、微笑して、此雪魚臭にほひあれば、其家をさし、又其載たる板も臭氣あれば其人をしりぬ、其人は魚買なればといへり、

〔禁秘御抄下〕雪山　年內雪甚催所衆、瀧口等參、春雪、沓鼻隱必可參、大內藤壺、弘徽殿也、里內依便宜、藏人下知修理職、儲屋具、雪不足時、被召諸御願寺、執行奉之、瀧口相具衞士及取夫、上殿上舍、於棟拋雪、所衆作雪山、瀧口上臈三人、所衆上臈三人立庭奉行、持柄振、藏人頭候簀子奉行、多直衣藏人候便宜所、傳事、修理職作屋、凡如此事上古不見、自中古事也、事始大略一條院御時以後也、清少納言記在其子細、

以雪作種物形

にも越たり、ある冬の夜、雪いと白ふ降りければ、近邊の雅人來り、千翁をさそひ雪見に出んと有し時、不角も同じく同道し出んとする時、獨の小野郎を供につれて出んと、はやく支度いたせ、らちあかぬなど、千翁、野郎をまかりければ、其女房不角に向ひ、何れも風雅の面々は、さこそ雪の面白かるべき、此奴僕何の面白き事有ていさむべきや、一とせ安藤冠里公の、あれも人の子なりといふ初雪の句もあり、陶淵明が薪水の勞を助け、是も又人の子なりとの仁心の餅を思ひ賜へ、手前の子ならば供には連賜ふまじと云ければ、不角いかにも其方が仁心感じ入たり、則其一言發句になりたり、

我子なら供には連じ夜の雪、是は我が誤りたりとて閉口してけるとなり、今女房尼に成て、妙閑といふなり、

〔東都歲事記十一月五〕看雪　隅田川堤　三圍　長命寺の邊　眞崎　眞土山　上野山内都て雪景よし　不忍池　湯島臺　神田社地　御茶の水土手　日暮里諏訪社邊別當淨光寺を雪見でらといふ　道灌山　飛鳥山　王子邊　目白不動境内　牛天神社地　赤坂溜池　愛宕山上眺望尤よし　八景坂俗諺てやげん坂といふ、大井と荒藺の間なり、此地元ゟ八景あり、佳景の地也、　吉原

〔萬葉集十九〕于時〇天平勝寶三年正月三日、會集介内藏忌寸繩麻呂之館宴樂、積雪彫成重巖之起、奇巧綵發草樹之花、屬之掾久米朝臣廣繩作歌一首、

奈泥之故波、秋咲物乎、君宅之、雪巖爾、左家理家流可母、

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪島巖爾殖有、奈泥之故波、千世爾開奴可、君之插頭爾、

〔拾遺和歌集十七雜秋〕雪をしまくへのかたにつくりてみ侍けるに、やうやうきえ侍ければ、

中務のみこ具平親王

先是主上渡御釣殿、侍臣四五輩祗候之、件釣殿在中門南廊南、其路無板敷、仍地上敷筵道、經右近陣中陣（在中門南廊）渡御也、雪色皎然、風流之勢、彌以優美也、不異洞庭歟、良久之還殿、又令經覽所々御也、○中略人々云、京中之雪、謂其深、往古無此例也、及一尺餘之故也、巳時許、經家同乘、參高陽院、殿下早渡御云々、　十二日癸亥、天陰、雪深一尺四寸、早旦渡御釣殿、如昨日、予兩三侍臣等供奉之、風流之上雪積加其美也、宛如神仙之洞也、良久還御、

〔吾妻鏡十一〕建久二年二月十七日丙申、雪降積地五寸、幕下爲覽雪、渡御鶴岡別當坊、佐貫四郎候御笠役、前少將時家供奉、路次有御連歌、別當獻盃酒、此間仰盛綱親家等、取六邊香、納長櫃、被送遣堅者坊、彼属山陰、日脚相隔、仍構氷室、可消炎暑之由被仰、以此次、當參諸人運送白雪云云、

〔吾妻鏡二十七〕安貞二年十二月卅日、自晨至于夜半雪降、被催其興、將軍家（○藤原頼經）俄渡御竹御所、御騎馬也、駿河守、陸奥四郎、同五郎等爲御共、各歩行云云、自廊御歸、近邊山館令歷覽給云云、　三年（○寛喜元年）正月三日壬申、雪降盈尺、今日垸飯、○中略垸飯已後及晚、將軍家入御武州亭、是非御行始、依雪興爲楚忽之儀也、駿河前司所申行也、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年（○貞永元年）十一月廿九日、早旦雪聊降、庭上偏似霜色、將軍家（○藤原頼經）爲覽林頭、渡御永福寺、御水干御騎馬也、武州（○北條泰時）自去夜未退出給、即扈從、式部大夫、陸奥五郎、加賀守康俊、大夫判官基綱、左衞門尉定員、都筑九郎經景、中務丞胤行、波多野次郎朝定已下、殊召携和歌之輩、爲御共、於寺門邊、卿僧正快雅參會、入御釣殿、有和歌御會、但雪氣變雨脚之間、餘興未盡還御、而於路次基綱申云、雪爲雨無全云云、武州令聞之給、被仰云、

　アメノ下ニフレバゾ雪ノ色モミル三笠ノ山ヲタノムカゲトテ　基綱

〔當世武野俗談〕不角千翁妻妙閑

不角千翁と云しは俳諧の達人なり、○中略此千翁が女房は至て發明にして、風雅の道は閨女秋色

まいり給へりけるに、院いとおもしろき雪かなと、おほせられて、雪御覽せんとおもはしめしたりけるに、馬ぐしてまいりたる、いみじくかんせさせ給て、御隨身のまいりたりける、ひとり御ともにて、にはかに御幸有けるに、北山のかたざまに、わたらせ給ければ、その御隨身ふと思よりて、もしをののきさきの、山ずみし給などへや、わたらせ給はんずらんと思えて、かの宮にまうでつかうまつるものにやはべりけん、にはかにしのびて、みゆきのける侍、そなたざまにわたらせ給、もしその御わたりなどへや侍らんずらんと、つげきこえければ、かの入道のみや、その御ようい ありて、法華堂に三昧經しづやかによませさせ給て、庭のうへいさゝか人のあとふみなどもせず、うちいで十具ばかり有けるを、なかよりきりて、そで廿いださんよういありけるを、もしいりて御らんずることも侍らん、いと見ぐるしくやと、女房申ければ、きりていだし給けるに、すでにわたらせ給て、はしがくしのまに、御車たてさせ給てかくとやはべりけん、さやうに侍けるほどに、かざみきたるわらは二人、ひとりはしろがねのてうしに、みきいれてもてまいり、いま一人はしろがねのおしきに、こがねのさかづきすゑて、大かうじ御さかなにていだし給へりければ、御ともの殿上人、とりてまいりて、いとめづらしき御ようい にはべりけり、かへらせ給てのち、かしこくうちを御覽せで、かへらせ給ぬなど、ごたち申ければ、雪見にわたり給て、入給人やはあるとぞのたまはせける、月を雪ともきこえはべり、さて院より御つかひありて、いとこゝろぐるしく思やりたてまつるに、うちいでなどこそよういして、有がたくもたせ給へりけれとて、みののくにとかや御庄の劵奉らせ給へりければ、まいりつかうまつる、をとこをんな、これかれのぞみけれど、みゆきつげきこえける隨身に、あづけたまひけるとぞきゝ侍し、そのとねりの名はのぶさだとかや、殿上人はなにがしの辨とかや、たしかにもきゝ侍ざりき、○又見二古今著聞集一

〔春記〕長暦四年○長久元年十一月十一日壬戌、從レ曉更雪降、深及二一尺三寸一、終日不レ休、早旦參内、依二雪興一也、

うやうたけて、いかでか、御まうけなくてあらんといひければ、殿わらはせ給て、たゞせめよなどおほせられけるほどに、いへのつかさなるあきまさといひて、光俊、有重などいふ學生の親なりし男、けしききこえければ、修理のかみたちいで丶かへりまいりて、あるじして、きこしめさすべきやうはべらざる也、御だいなどのあたらしきも、かく御らんずる、山のあなたのくらにをきこめて侍れば、びんなくとりいづべきやうはべらず、あらはにはべるは、みな人のもちひたるよし申ければ、なにのはゞかりかあらん、たゞとりいだせとおほせられければ、さはとてたちいで丶、とりいだされけるに色々のかりさうぞくしたる伏みさぶらひ十人、いろ／＼のあこめに、いひしらぬそめませしたる、かたびらく丶りかけとぢなどしたるさうし十人ひきつれて、くらのかぎもちたるをのこ、さきにたちてわたるほどに、ゆきにはへて、わざとかねてしたるやうなりけり、さきにあとふみつけたるを、しりにつゞきたるをとこをんな、おなじあとをふみてゆきけり、かへさには御だい、たかつき、しろがねのてうしなど、ひとつゞゝさげてもちたるは、このたびはしりにたちてかへりぬ、か丶るほどに、かんだちめ殿上人藏人所の家司職事御隨身など、さまざまにまいりこみたりけるに、このさとかのさと、所々にいひしらぬそなへども、めもあやなりけり、もろのぶ、いかにかくはにはかにせられ侍ぞ、かねて夢などみ侍けるかなど、たはぶれ申ければ、俊綱の君は、いかでか丶る山ざとに、かやうのこと侍らん、よういなくては侍べきなどぞ申されける、

〔續世繼四小野の御幸〕三君〇藤原教通女歡子は、後冷泉院の女御にまいりて、きさきにたち給て、皇后宮と申き、のちに皇太后宮にあがりて、承保元年の秋、みぐしおろし給てき、猶きさきの位にて、ひえの山のふもと、をのといふさとにこもりゐさせ給て、みやこのほかに、をこなひすまし給へりき、雪おもしろくつもりたるあしたに、白河院にみゆきなどもやあらんと思て、ある殿上人、馬ひかせて

賞雪

高さを見るが如くにしてはかるを、雪の竿といふ、

〔北越雪譜初編上〕雪竿　高田御城大手先の廣場に、木を方に削り尺を記して建給ふ、是を雪竿といふ、長一丈也、雪の深淺公税に係るを以てなるべし、高田の俳友楓石子よりの書翰に、天保五年の仲冬雪竿を見れば、當地の雪、此節一丈に餘れりといひ來れり、雪竿といへば越後の事として、俳句にも見えたれど、此國に於て高田の外无用の雪竿を建る處、昔はしらず今はなし、風雅をもつて我國に遊ぶ人、雪中を避て三夏の頃此地を踏ゆゑ、越路の雪をしらず、然るに越路の雪を、言の葉に作意ゆゑたがふ事ありて、我國〇越後の心には笑ふべきが多し、

〔三代實録二十二清和〕貞觀十四年十一月八日甲戌、遍夕雪未止、右大臣已下參議已上、於侍從所賞雪會飲、詔以內藏寮綿賜之各有差、侍從五位以上亦預賞焉、

〔續世繼四伏見の雪のあした〕大殿〇藤原師實の伏見へおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおはしますまじきに、雪のふりたりけるつとめて、俊綱がいたく伏みふけらかすに、にはかにゆきてみんとて、はりまのかみもろのぶといふ人ばかり御ともにて、にはかにわたらせ給たりければ、おもひもよらぬことにて、かどをたゝきけれど、むごにあけざりければ、人々いかにとおもひけり、かばかりの雪のあしたに、さらぬ人の家ならんにてだに、かやうのをりふしなどは、そのよういあるべきに、いはんや殿のわたり給へるに、かた〴〵おもはずに思へるに、あけたるものに、をそくあけたるよし、かふづありければ、雪をふみ侍らじとて、山をゝぐり侍と申ければ、もとよりあけまうけ、又とりあへずいそぎあけたらんよりも、ねんにけふあるよし、人々いひけるとか、修理のかみ〇俊綱さはぎいで、雪御らんじて、御ものがたりなどせさせ給ほどに、もろのぶかくわたらせ給たるに、いでしかるべきあるじなど、つかまつれと、もよをしければ、俊綱いまにへどのまいり侍なんと申ければ、人にもしられで、わたらせ給たれば、にへ殿まいることあるまじ、日もや

雪棹

落下るゆゑ、不意をうたれて逃んとすれば、軟なる雪深く走りがたく、十人にして一人助るは稀也、幾十丈の雪、人力を以て掘ることならざれば、三四月にいたり、雪消てのち、死骸を見る事あり、ほふらを處によりて、をほて、わや、あわ、はたりともいふ、山家にてはなだれほふらを避んため、其災なき地理をはかりて家を作る、ほふらに村などつぶれたる奇談、としごろ聞たるがあまたあれど、うるさければしるさず、

〔閑田耕筆 一〕近江彥根の陪臣大菅中養父、其主の領地を撿する時、或山家にて不納を責るにつきて、其家の後山に林繁茂せるを見付、是を伐剪て代なさば、かく未納にも及ぶまじきをと答む、農夫いなこれなくては、あわのふせぎいかにともすべからずといふ、それは何の事ぞと問しに、雪はつもる物也、あわはつみて崩るゝものなれば、林をもて防がざれば、家をうちたふすなりと答へけるに、中養父は古義を好む人なれば、はじめてさとりぬ、萬葉集に、ふる雪はあわになふりそ吉張(ヨナバリ)のゐかひの岡の塞(セキ)ならまくに、とあるも、正しく是にて、あわはふりて崩るゝ故に、塞となりがたければ、あわにはふることなかれといふ也けりといへり、凝(コル)雪は水氣ある故によくつむ、あわは密雪に充べし、寒至て強き故に水氣盡て輕し、さればあわとはいふならんと、上田秋成は釋せり、つねにあわ雪はふるほどなく消る春の雪とのみおもへり、それにても萬葉の歌聞えざるにはあらねど切ならず、これらも夏に失て夷にもとむるといふべし、

〔夫木和歌抄 十八 雪〕承安二年十二月、東山歌合連日雪、　大炊御門右大臣家佐

こしの山たてをくさほのかひぞなき日をふる雪にしるし見えねば

深山雪を　同

はつ雪のしるしのさほはたてしかどそこともみえすこしのしら山

〔世事百談〕雪の竿　信州越後北陸など、雪の深さを知るに、棹に一丈までの寸を、竿に刻みて、水の

擲下る也、るをれといふは活用ことばなり、山にもいふ也、こゝには雪頽の字を借て用ふ、字書に頽は暴風ともあれば、よく叶へるにや、さて雪頽は雪吹に雙て、雪國の難義とす、高山の雪は里よりも深く凍るも、又里よりは甚し、我國東南の山々里にちかきも、雪一丈四五尺なるは淺しとす、此雪こほりて岩のごとくなるもの、二月のころにいたれば、陽氣地中より蒸て解んとする時、地氣と天氣との爲に破て響をなす、一片破て片々破る、其ひゞき大木を折がごとし、これ雪頽んとするの萌也、山の地勢と日の照すとによりて、なだるゝ處と、なだれざる處あり、なだるゝはかならず二月にあり、里人はその時をしり、處をしり、萌を知るゆゑに、なだれのために撃死するもの稀也、しかれども天の氣候不意にして一定ならざれば、雪頽の下に身を粉に砕もあり、雪頽の形勢いかんとなれば、なだれんとする雪の凍、その大なるは十間以上、小なるも九尺五尺にあまる、大小數百千悉く方をなして、削りたてたるごとく(かならず方なす事、下に辨ず、)なるもの、幾千丈の山の上より一度に崩頽る、その響百千の雷をなし、大木を折、大石を倒す、此時はかならず暴風力をそへて、粉に砕たる沙礫のごとき雪を飛せ、白日も暗夜の如く、その懍しき事、筆紙に盡しがたし、

〔北越雪譜 初編中〕ほふら　我鹽澤の方言に、ほふらといふは、雪頽に似て非なるもの也、十二月の前後にあるもの也、高山の雪深く積りて凍たる上へ、猶雪ふかく降り重り、時の氣運によりて、いまだこほらで沫々しきが、山の頂の大木につもりたる雪、風などの爲に一塊り枝よりおちしが、山の巔に隨ひて轉び下りまろびながら、雪を丸て次第に大をなし、幾萬斤の重きをなしたるもの、幾丈の大石を轉し走がごとく、これが爲に、あわ／＼しき雪おしせかれて、雪の洪波をなして、大木を根こぎになし、大石をもおしおとし、人家をもおし潰す事しば／＼あり、此時はかならず暴風雪を吹きちらし、凍雲空に布て、白晝も立地に暗夜となる事、雪頽におなじ、なだれは前にもいへるごとく、すこしはそのしるしもあれば、それとしるめれど、此ほふらはおとづれもなくて

赤雪　雪吹　雪頽ほふら

臥テ凍ヘ死ル者數ヲ不ㇾ知、

〔後法興院關白記〕延德二年九月廿六日、晴陰夜來雨下、風吹自₂曉更₁雪降、積ㇾ地一二寸、至₂巳刻₁雪降、終日時々雨下、九月雪、未₂曾有₁事也、　同廿七日、晴陰時々小雨下、石藏邊昨日大雪云々、六七寸積ㇾ地云云、

〔閑窻自語〕六月寒事　寛政五年六月二日、土用中北風ふきてひやゝかなる事、八九月のごとし、近來たえてきゝも及ばぬ事なり、三日ばかりにて風も吹きかはり、氣候もなほりぬ、のちにきく、北國には雪ふりて、うすくもつもれり、越後には三寸ばかりありけりとなん、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年正月己巳、陸奧國言、部下黑川郡以北十一郡、雨₂赤雪₁、平地二寸、

〔書言字考節用集一乾坤〕降吹(フヾキ)　吹雪(同)

〔北越雪譜初編上〕雪吹(ふゞき)　雪吹は樹などに積りたる雪の、風に散亂するをいふ、其狀優美ものゆゑ、花のちるを是に比して、花雪吹といひて、古歌にもあまた見えたり、是東南寸雪の國の事也、北方丈雪の國、我が越後の雪深ところの雪吹は、雪中の暴風、雪を卷騰也、雪中第一の難義、これがために死する人年々也、

〔千載和歌集六冬〕うへのをのこども百首の歌奉りける時、雪の歌とてよませ給うける、　二條院御製

雪つもるみねにふゞきや渡るらんこしのみ空にまよふしら雪

〔夫木和歌抄十八雪〕山家冬夜　後賴朝臣

ひとりぬる宿はふゞきにうづもれていはのかけみちあとたえにけり

〔運歩色葉集那〕雪頽(ナダレ)　雪女(同)

〔北越雪譜初編上〕雪頽　山より雪の崩頽を、里言になだれといふ、又なでともいふ、按に、なだれは

分寺三箇日、啒淨行僧、轉讀仁王般若經、令攘除災沴者、仍勘申、

應德二年九月十一日　右史生伴有貞　左史生紀公國　清原友信

〔永昌記〕天永元年三月四日壬寅、自曉雪降、積庭陸寸、邊山過尺、寒氣如冬、後漢之末、盛夏有寒、非時殺人、苛政之甚也、

〔古今著聞集　怪異十七〕治承四年四月廿九日、未時ばかりにつじ風吹たりけり、○中略或所にはいかづち鳴、九條の坊門東洞院邊には、雪ふりたりけり、

〔吾妻鏡　二十七〕寬喜二年六月十一日、武藏國在廳等注申云、去九日辰剋、當國金子鄉雪交雨降、又同時降雹云云、　十六日、美濃國飛脚參申云、去九日辰剋、當國蒔田庄白雪降云云、武州太令怖畏給、可被行德政之由、有沙汰云云、濃州與武州兩國中間既十餘日行程也、彼日同時有此怪異、尤可驚之、凡六月中雨脚頻降、是雖爲豐年之瑞、涼氣過法、又穀定不登歟、風雨不節則歲有飢荒云云、當時關東不廢政途、武州殊戰々兢々兮、彰善癉惡、忘身救世御之間、天下歸往之處、近日時節依違、陰陽不同之條、匪直也事哉、就中當月白雪降事少其例歟、孝元天皇三十九年六月雪降、其後歷二十六代、推古天皇御宇三十四年六月大雪降、亦歷二十六代、醍醐天皇御宇延長八年六月八日大雪降、皆不吉也、今亦經卅六代、今月九日雪下、上古猶以成奇、況於末代哉、

〔吾妻鏡　三十九〕寶治二年六月十五日辛卯、酉剋常陸國鬪郡仁木奈利鄉白雪降則休止云云、　十八日甲午、寅剋濫橋邊一許町以下南雪降、其如霜云云、

〔吾妻鏡　四十一〕建長三年八月三日辛卯、天霽、風少、今夕雪下、

〔太平記　三十六〕大地震并夏雪事

同○康安元年六月二十二日、俄ニ天掻曇雪降テ、氷寒ノ甚キ事、冬至ノ前後ノ如シ、酒ヲ飲テ身ヲ暖メ、火ヲ燒爐ヲ圍ム人ハ、自寒ヲ防グ便リモアリ、山路ノ樵夫野徑ノ旅人、牧馬林鹿悉氷ニ被閉、雪ニ

〔古事談一王道后宮〕長元二年七月八日、出雲國降雪事、彼國奏狀云、

雪降狀（但深二寸許）

右得管飯石郡司今日解狀偁、以去八日未時、當郡須佐鄉收田村忽雪降、殖田三町餘、幷野山草木、悉損亡之、至于他所、無損失者、言上如件、謹解、

長元二年七月十七日　從五位上行守橘朝臣俊孝　正六位上行掾物部宿禰信憲　從五位下行介平朝臣

依此事、被問外記、仍進勘文狀云、

推古天皇卅四年六月、雪降者、　貞觀十七年六月四日、未時黑雲蓋虛、官廳南門白雪花散者、

古件、國史日記等、雖注雪降之由、其後仔細旨無所見、仍勘申、

長元二年八月二日　大炊頭兼大外記主稅助助教清原眞人賴隆勘申

右大臣（實資）爲一上、奉行此事、被進勘文云、

推古天皇、幷貞觀雪怪、不見所被行之事云々、今令廻愚案、被雨度六月雪降云々、是宮中令散雪也、入秋節於山陰道有此異、仁王經七難中說夏雪、而入秋節有雪、強非大怪歟、給官符於本國、令轉讀仁王經、且於宮中被修攘災法宜歟、是內々所懷、彼時無御占、抑亦可隨處分、尙是爲彼在所之異歟、勅云給官符於出雲國、可令轉讀仁王經者、（○又見小右記）

〔扶桑略記（二十九後三條）〕治曆四年六月廿四日、肥後國阿蘇山雪降深五六寸、（○又見古事談、百練抄）

〔朝野群載（六太政官）〕文殿勘文

文殿　勘大宰府言上阿蘇宮雪降事

右宣勘申先例者、引勘文簿之處、去長元二年七月、出雲國言上云、管飯石郡須佐鄉收田村、今月八日赤（○赤、上文所引古事談作忽）雪降、殖田三町餘、幷野山草木悉損亡了者、同年八月七日、被下宣旨偁、仰彼國於國

不時降雪

〔隨意錄四〕江都氣候、三多雖不溫、然歲中雪希、而至春或應雪、年年多爾、然不經日而消釋、今茲文化六年十月廿五日初雪、寒亦甚、十一月十三日十四日、兩日雨、夜雪平地可周尺二三尺、爾後日日寒太甚、經三旬而雪不消、十二月十三日復雪、至十五日不歇、不掃雪處、積五六尺、廿六日暮至廿七日、又復雪、踰年乃正月二日夕至三日朝、又復雪、八日又終夜雪、十二日又雪、而去冬十月初旬以來、至春不雨、故十一月之大雪不消、而乃又驟尚之、積素殆埋檐、予東都之住、五十年來、未嘗之有也、且聞古來大雪國奧羽及信越、則去冬雪淺於例年、平地不盈尺、二總二毛、亦猶少於江都、筑荷山亦不深於平歲、此去冬以來大雪、不出乎武州界也、地氣之變化、實不可測也、

〔北越雪譜初編上〕雪の堆量　余○鈴木牧之が隣宿六日町の俳友天吉老人の話に、妻有庄にあそびし頃聞しに、千隈川の邊の雅人、初雪より天保五年をいふ十二月廿五日までの間、雪の下る每に用意したる所の雪を、尺をもつて量りしに、雪の高さ十八丈ありしといへりとぞ、此話雪國の人すら信じがたくおもへども、つら〳〵思量に、十月の初雪より十二月廿五日まで、およその日數八十日の間に、五尺づゝの雪ならば、廿四丈にいたるべし、隨て下ば隨て掃ふ處は、積て見る事なし、又地にあれば減もする也、かれをもつて是をおもへば、我國○越後の深山幽谷、雪の深事はかりしるべからず、天保五年は我國近年の大雪なりしゆゑ、右の話誣ふべからず、

〔武江年表九〕嘉永六年正月十六日、朝より大雪尺に滿つ、翌十七日より十八日まで三日の間、大雪降つもる、十八日申刻に止む、但し十七日より夜へかけて降りたり、七旬の老翁もかゝることは見ずと、

〔日本書紀二十二推古〕三十四年六月、雪也、

〔三代實錄二十七淸和〕貞觀十七年六月四日乙卯、太政官曹司廳南門、雪花散落、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年七月廿六日辛卯、朝雨雪如霜、

〔日本紀略三十二後一條〕長和二年三月廿四日乙卯、東西山雪降、京中大寒、去十四日立夏也、人以爲怪、

人なれば、かばかりのこともわすれがたし、

〔看聞日記〕應永廿七年三月二日、天明之間、雪降一寸許、積花之上、雪重積其興甚深、花時分雪降事未見及、希有事歟、一首詠之、

　おもひきや花こそ雪とちるうへにかさねて雪の積べしとは

廿八年十二月十八日、夜寒嵐吹、曉雪降四五寸積、十月初雪如霜降、其後于今不降、珍敷其興不少、廊御方三位一獻申沙汰如例、其後廊局へ行、推參之間盃持參、廊御方入興及酒盛、禪啓、行光、廣時、有善等候、彼等面々饋瓶申沙汰及亂舞、老尼醉狂、亂舞如例比興也、自他沈醉無極、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

一〈義澄公代〉永正三年十二月卅日に、觀世大夫於庭上被成御覽時、以外大雪にて、庭上ニ雪つもり申候間、祗候仕在所の雪かきのけさせられよと、大夫申次ニ懇望申之、當日貞遠なり、返答には、御庭ニ雪つもり申事大切之儀也、又自然御馬にもめされ候事可有之、何事にかきのけ申候哉と可被仰出時、如何可申候哉、然東山殿樣〈〇足利義政〉御代に、村門田御對面候時、如此大雪積候也、然どもはかせ候事は無之、以其例對大夫返答在之、尤之儀候由各被申、申次之輩可有分別事候也、

〔雲萍雜志〕三東野州佐川田喜六がもとへ、今日の御書翰に、雪のことなきは、近ごろ遺恨に候とある返事に、

　眺常ならず候へども、昌俊事は、月花をのみ格別にめで侍れど、雪はさほどにうかれ不申候、人も乏しきものは寒がり、雪のふかき國にては、吹雪にしまかれなどして、こゞえ死ぬるもの多しとあれば、悦びおどるほどにはなられず候、東路の旅に、由井といへるすくに宿りし夜、はじめて雪の降ければよめる、

　ながめにはあかぬ箱根のふたご山誰がこす嶺のみ雪なるらん

〔讃岐典侍日記下〕つとめておきてみれば、雪いみじく降たり、今もうちちる御まへを見れば、べちにたがひたる事なき心ちして、おはしますらん有樣、こと〳〵に思ひなされていたる程に、ふれふれこゆきと、いはけなき御けはひにて仰せらるゝ聞ゆる、〇鳥羽帝、時年五歲、こはたぞ、たが子にかと思ふほどに、誠にさぞかし、思ふに淺ましく、是をしうと、うちたのみ參らせてさぶらはんずるかと、たのもしげなきぞ哀なる、

〔徒然草下〕ふれ〳〵こゆき、たんばのこゆきといふ事、よねつきふるひたるに似たれば粉雪といふ、たまれこゆきといふべきを、あやまりてたんばのとはいふなり、かきや木のまたにと、うたふべしと、ある物しり申き、昔よりいひける事にや、鳥羽院おさなくおはしまして、雪のふるにかく仰られけるよし、讃岐のすけが日記に書たり、

〔百練抄十後鳥羽〕文治三年正月一日癸卯、自夜雪降、當新春之初、呈豐年之瑞乎、

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿二年正月十八日甲戌、晩頭雪降、終夜不休、　十九日乙亥、自昨日及今朝雪降積事二尺餘、近年無比類云云、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年十一月五日丁未、今朝深雪盈尺、豐年呈瑞、去承元五年以後無如此之雪云云、

〔辨內侍日記〕十一月〇寛元四年十四日の夜、雪いと面白く、みちたえて積りにけり、〇中略人々清涼殿へ立出てみれば、竹にさえたる風の音までも、身にしみて面白きに、月は猶雪げに曇りたりしも中中見所あり、

〔徒然草上〕雪のおもしろうふりたりし朝、人のがりいふべき事有て文をやるとて、雪の事何ともいはざりし返事に、此雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〳〵しからん人の仰らるる事聞いるべきかは、返々くちおしき御心なりといひたりしこそ、をかしかりしか、いまはなき

て、此世のほかのことまで思ひながされ、おもしろさも哀さも殘らぬをりなれ、すさまじきためしにいひおきけん、人の心あさゝよとて、みすまきあげさせ給、月はくまなくさし出て、ひとつ色にみえわたされたるに、しほれたる前栽のかげこゝろぐるしう、やり水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごきに、わらはべおろして、雪まろばしせさせ給、をかしげなるすがたかしらつきども、月にはへておほきやかになれたるが、さま〴〵のあこめみだれき、おびしどけなきとのゐすがたなまめいたるに、こよなうあまれるかみのすゑ、しろき庭には、ましてもてはやしたる、いとけざやかなり、ちいさきはわらはげて、よろこびはしるに、あふぎなどもおとして、うちとけがほをかしげなり、いとおほうまろばさむとふくつけがれど、えもおしうごかさでわぶめり、

〔狹衣二下〕源氏の宮の御方にも、つねよりはとく人々おきたるころして、よもすがらつもりたる雪見るなるべし、たゝずみ給ふまゝに、わた殿の戸より見とをし給へば、わかきさぶらひどものきたなげなき、色々の狩ぎぬさしぬきなど、きよげにて、五六人雪まろばしするを見るとて、とのゐすがたなるわらはべ、わかき人々など、出ゐたるすがた共、いづれとなくをかしげにて、ふまゝくをしきものをなどいへば、みすの內なる人、おなじくはふじの山にこそつくらめなどいへば、越の白やまにこそあめれといふ也、

〔榮花物語三十六根合〕うちは京極殿よりかたふたがりければ、宮のつかさに、しはす〇寬德二年にわたらせ給に、雪のふりたるつとめて、一品の宮の女房、南殿などを出てみれば、雪はまことに花とまがひ、池のこほりはかゞみとみゆ、いはほにもはなさきいみじうをかし、御堂のかたをみれば、からゑのこゝちしてみわたさる、庭のゆきはきえがたになりにけり、こずゑぞさかりとみゆる、

〔扶桑略記三十堀河〕寬治八年〇嘉保元年正月五日丁丑、終日大雪、深及二一尺一、家如二北山一、數日不レ銷、

こそをかしけれ、よひも過ぬらんと思ふほどに、くつのおとちかうきこゆれば、あやしと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり、けふの雪をいかにと思ひきこえながら、なんでふことにさはり、其所にくらしつるよしなどいふ、けふこん人をなどやうのすぢをぞいふらんかし、ひるよりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひわらひ、わらうださし出たれど、かたつかたのあしはしもながらあるに、かねのおとのきこゆるまでになりぬれど、うちにもとにもいふ事どもはあかずぞおぼゆる、あけぐれのほどにかへるとて、雪何の山にみてるとうちずんじたるは、いとをかしき物也、女のかぎりしてはさもえゐあかさざらましを、只なるよりは、いとをかしうすぎたるありさまなどをいひ合せたる、

〔和漢朗詠集上冬〕雪

曉入梁王之苑、雪滿群山、夜登庾公之樓、月明千里、謝観

〔枕草子十〕ふるものは

雪はひはだぶきいとめでたし、すこしきえがたになりたるほど、又いとおほうはふらぬが、かはらのめごとに入て、くろうましろに見えたるいとをかし、

〔枕草子十一〕雪いとたかく降たるを、例ならず御格子まいらせて、すびつに火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、少納言よ、香爐峯の雪はいかならんと、仰られければ、みかうしあげさせて、みす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ、人々も皆さる事はしり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、猶此宮の人には、さるべきなめりといふ、

〔和漢朗詠集下雜〕山家

遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看、白〇白居易

〔源氏物語朝顔二十〕冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、あやしう色なき物の身にしみ

此卷中不ㇾ併作者名字、徒錄年月所處緣起者、皆大伴宿禰家持裁作歌詞也、

〔空穗物語菊の宴〕ふる雪をみてきこえ給へり

數ならぬ身は水のうへの雪なれや淚のうへにふれとかひなき、御覽じこそおとらざらめと、きこえ給へり、あてみや、

水のうへに雪は山ともつもりなむうきてのみふる人のかひなさ、あなみぐるしやと、きこえ給へり、

〔日本紀略二本紀〕天慶元年十二月六日己卯、雪降一許丈、〈一許丈、本朝世紀作二一許尺一、宜ㇾ從、〉故老云、去寬平四年、京中雪降三尺、其後未ㇾ知ㇾ此、

〔枕草子八〕村上の御時、雪のいとたかう降たりけるを、やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして月いとあかきに、是に歌よめ、いかゞいふべきと、兵衛の藏人に給はせたりければ、雪月花の時とそうしたりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ、歌などよまんにはよのつね也、かうをりにあひたる事なん、いひがたきとこそおほせられけれ、

〔和漢朗詠集下〕交友

琴詩酒友皆拋ㇾ我、雪月花時獨憶ㇾ君、白〈〇白居易〉

〔枕草子五〕めでたきもの　ひろき庭に雪のふりしきたる

〔枕草子六〕あはれなる物　山里の雪

〔枕草子八〕雪のいとたかくはあらで、うすらかにふりたるなどはいとこそをかしけれ、又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれより、はしちかうおなじ心なる人二三人ばかり、火をけなかにすゑて、物がたりなどするほどに、くらうなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いとしろう見えたるに、火ばししてはひなどかきすさびて、あはれなるもをかしきもいひあはする

〔左經記〕寛仁元年十二月七日辛未、白雪積地不及寸、早旦參攝政殿御宿所、被仰云、可令取初雪見參、卽差遣殿上五位六位等於左右近、左右衞門、左右兵衞、帶刀等陣、幷內侍所、主殿、掃部等、女官、主殿、內豎所、御書所等、令取見參奏聞、御書所來等不候、仍不取見參、

〔春記〕長曆三年十一月十七日甲辰、有初雪、纔一寸許云々、未旦參御前、未上御格子、奏初雪之由、卽出御、仰云、早可令取見參者、卽仰藏人少納言經成、差分侍臣、令取所々見參了、以藏人義綱令內覽之、令威內藏寮請奏、各可分依之由仰了、　四年○長久元年十一月十一日壬戌、從曉更雪降、深及一尺三寸、終日不休、○中略藏人章行云、今朝取所々見參依仰也、先日有小雪、依不覆庭沙不取見參、今月依深雪有此事也、侍臣等員少所々見參尤懈怠也者、

〔夫木和歌抄十八雪〕洞院攝政家百首雪　　家長朝臣

初雪にかきあつめてぞきこえあぐるおほみや人のけさのありかず

〔新撰字鏡〕雰　敷非反、平、雪降貌、由支不留、

〔萬葉集二相聞〕天皇○天武賜藤原夫人御歌一首

吾里爾、大雪落有、大原乃、古爾之鄕爾、落卷者後、

藤原夫人奉和歌一首

吾岡之、於可美爾言而、令落、雪之摧之、彼所爾塵家武、

〔萬葉集十七〕天平十八年正月、白雪多零、積地數寸也、○中略勅曰、汝諸王卿等聊賦此雪、各奏其詞、○中略

紀朝臣清人應詔歌一首

天下、須泥爾於保比底、布流雪乃、比加里乎見禮婆、多敷刀久母安流香、

〔萬葉集十九〕十一日、○天平勝寶五年正月大雪落積尺有二寸、因述拙懷歌三首

大宮能、內爾毛外爾毛、米都良之久、布禮留大雪、莫踏禰乎之、○中略

〔公事根源十一月〕初雪見參　昔初雪のふる日、群臣參內し侍るを初雪見參と申也、桓武天皇延曆十一年十一月よりはじまる、初雪にかぎらず深雪の時は、必諸陣見參をとるといへり、此事絕て久し、

〔助無智秘抄〕初雪日　侍中アヲイロ、オリモノノサシヌキヲキテ、諸陣ヘムカヒテ見參ヲトルベシ、就中ニ帶刀ノ陣ニムカフ、藏人ヨウジンスベシ、アヲイロニアラズトモ、タヾビレイノ裝束ヲソクタイニテモキルベシ、

〔類聚國史百六十五祥瑞〕延曆十一年十一月乙亥、雨雪、近衞官人已下、賜物有差、　丙子、大雪、御輿丁已上、賜綿有差、

〔政事要略二十五年中行事〕初雪見參事
國史云、桓武天皇延曆十一年十一月乙亥雨雪、近衞官人以下賜物有差、初雪見參、是其濫觴歟、往代之間、雨雪之朝、或王卿侍臣亦賜物有差、不別冬春、皆有此事、仍或亦稱大雪之時歟、具國史曆注等、

〔類聚國史三十二帝王〕延曆廿年正月丁酉、曲宴、是日雨雪、上歌曰、宇米能波那、胡飛都都邸黎巨、敷留度岐乎、波那可毛知流屠、於毛飛都留何毛、賜五位已上物、各有差、

〔類聚國史百六十五祥瑞〕弘仁八年十一月庚戌、大雪、賜左右近衞綿有差、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十一月十八日壬戌、雨雪、　十九日癸亥、雪猶未止、勅賜六府少將佐已下見在陣座及五位已上在侍從所者綿、各有差、外記內記亦預之、慶新雪。

〔貞信公記〕延長九年○承平元年正月九日、白雪滿庭、雪見參取女官、先度只取男官、不取女官故也、　二月廿一日、九日雪見參祿、以太宰綿布可行事仰春隆、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年十一月四日丙寅、雪下及尺、有諸陣之祿、申剋諸陣之後、向閑院有饗膳、

降雪見參
降雪賜物

詠遊興のたのしみは夢にも知らず、今年も又此雪中に在る事かと、雪を悲は邊鄙の寒國に生たる不幸といふべし、雪を観て樂む人の、繁花の暖地に生たる、天幸を羨ざらんや、

〔骨董集上編上〕初雪の句　初雪や犬の足跡梅の花と云句は、何人のいひいだしたるにか、童もくちずさむ句也、五元集〈をのがれ鶏合の巻〉云、雞去畫竹葉、是は五山派の偈雪の聯句に、犬走生梅花といへる對なり云々、右の聯句にもとづく歟、或は暗合したる歟、

〔曠野集一〕雪二十句
大津にて
雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角
いざ行かん雪見にころぶ處まで　芭蕉

〔續俳諧奇人談上〕田氏捨女
捨子は丹波の國柏原田氏の女なり、少小より風流のきざし見ゆ、六歳の冬、雪の朝二の字〳〵の下駄の跡、

〔西宮記十一月〕初雪　初雪降者、依宣旨取諸陣見參給祿、
延長三年正月十四日、今朝雪七寸、令內藏助仲連以綿一千屯施給大內山御室道俗、以昨日寒今朝大雪也、
應和元年十一月七日、今朝初雪、分遣殿上侍臣於諸陣帶刀取見參、又男女房主殿掃部者同預例也、十日令給民部卿藤原朝臣去七日諸陣所々見參、仰以大藏綿令給祿、

〔禁秘御抄下〕雪山〈中略〉　初雪見參近代絕畢、初雪日仰六位藏人令取見參、藏人束帶〈或宿衣〉召朝餉仰之、內侍傳仰、藏人進見參給祿、內藏寮絹、大藏省布也、　女房藏人已上絹一匹、主殿掃部女官信濃布四段、下各二段、御厨子所得選各一匹、刀自各三段、此外御厠人、長女、內豎、主殿官人、史生、案主、下部、今良、諸陣府生、番長、舍人依差給之、

右兵部大丞大原眞人今城

〔菅家文草五詩〕十月二十一日、禁中初雪、應製、一扶

推歩四時令不違、初開六出報重聞、地因高賞看何易、天未全寒想更非、粧妓自疑顏粉落、宿醒偏誤獸花飛、今朝且指如雲瑞、先滅唯緣近日輝、

〔二水記〕永正十四年十一月廿一日、雪初降、參内御盃參、女中、伯等沙汰歟、例年之儀也、各沈醉了、　十七年十一月十九日、早旦參、當番、初雪御盃如例、伯三位依歡樂不候、各沈醉不可說也、

〔北越雪譜初編上〕初雪　江戸には雪の降ざる年もあれば、初雪はことさらに美賞し、雪見の船に歌妓を携へ、雪の茶の湯に賓客を招き、青樓は雪を居續の媒となし、酒亭は雪を來客の嘉瑞となす、雪の爲に種々の遊樂をなす事、枚擧がたし、雪を賞するの甚しきは、繁花のしからしむる所也、雪國の人これを見これを聞て羨ざるはなし、我國越後の初雪を以てこれに比れば、樂と苦と雲泥のちがひ也、そも／＼越後國は北方の陰地なれども、一國の內陰陽を前後す、いかんとなれば、天は西北にたらず、ゆゑに西北を陰とし、地は東南に足ず、ゆゑに東南を陽とす、越後の地勢は西北は大海に對して陽氣也、東南は高山連りて陰氣也、ゆゑに西北の郡村は雪淺く、東南の諸邑は雪深し、是陰陽の前後したるに似たり、我住魚沼郡東南の陰地にして、巻機山、苗場山、八海山、牛が嶽、金城山、駒が嶽、兎が嶽、淺草山等の高山、其餘他國に聞えざる山々、波濤のごとく東南に連り、大小の河々も縱横をなし、陰氣充滿して雪深き山間の村落なれば、雪の深をしるべし、冬は日南の力を闕ゆゑ、北國はます／＼寒し、家の內といへども、北は寒く南はあたゝかなると同じ道理也、我國初雪を視る事、遲と遠とは其年の氣運寒暖につれて均からずといへども、およそ初雪は九月の末、十月の首にあり、我國の雪は鵞毛をなさず、降時はかならず粉碎をなす、風又これを助く、故に一晝夜に積所六七尺より一丈に至る時もあり、往古より今年にいたるまで、此雪此國に降ざる事なし、されば暖國の人のごとく初雪を觀て、吟

〔續政鄕集 冬〕待初雪

またれつる雪げかと社思ひつれいまだ時雨の雲にぞ有ける

〔夫木和歌抄 十八雪〕百首御歌　後一條入道關白

はれくもりふりもつゞかぬ雪雲のあふさきるさに月ぞさえたる

〔北越雪譜 初編上〕雪意(ゆきもよひ)　我國〇越後の雪意は暖國に均しからず、およそ九月の半より霜を置て、寒氣次第に烈く、九月の末に至ば、殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し、天色霎(ゆきぐもり)として、日の光を看ざる事連日、是雪の意也、天氣朦朧たる事數日にして、遠近の高山に白を點じて雪を觀せしむ、これを里言に嶽廻といふ、又海ある所は海鳴り、山ふかき處は山なる、遠雷の如し、これを里言に胴鳴りといふ、これを見これを聞て、雪の遠からざるを志る、年の寒暖につれて、時日はさだかならねど、たけまはり、どうなりは、秋の彼岸前後にあり、毎年かくのごとし、

雪の用意　前にいへるがごとく、雪降んとするを量り、雪に損せられぬ爲に、屋上に修造を加へ、梁柱廂(ひさし)家の前の屋翼を里言にらうかといふ、すなはち郞架なり、其外すべて居室に係る所力弱はこれを補ふ、雪に潰れざる爲也、庭樹は大小に隨ひ、枝の曲べきはまげて縛束、椙丸太又は竹を添へ杖となして、枝を强からしむ、雪折をいとへば也、冬草の類は菰筵を以覆ひ包む、井戸は小屋を懸、厠は雪中其物を荷志むべき備をなす、雪中には一點の野菜もなければ、家内の人數に志たがひて、雪中の食料を貯ふ、あたゝかなるやうに土中にうづめ、又はわらにつゝみ、桶に入れてこほらざらしむ、其外雪の用意に種々の造作をなす事、筆に盡しがたし、

〔後水尾院當時年中行事 下〕一初雪つもれば御盃はじまる、べた〳〵のかちんにて一獻參る、女中男にもたぶ、院女院などへも參る、

〔萬葉集 二十〕二十三日〇天平勝寶八年十一月集於式部少丞大伴宿禰池主之宅飮宴歌

波都由伎波、知敝爾布里之家、故非之久能、於保加流和禮波、美都都之努波牟、

いひしによりて、又春の雪の消やすきをいふなりなどと、いふ事にはなりしなり、萬葉集に見えし歌どもは、其讀める人々、古を去る事も遠からず、また說文等に見えし所をも、併見しと見えたれば、おのづから古き義を失なはず、說文に霰稷雪也、言三雪初作未二成レ華、圓如二稷粒一也と見えたれば、雪いまだ華を成さざらんをば冬にもあれ春にもあれ、稷雪とこそいふべけれ、萬葉集の冬の歌共に、あまた見えし事、疑ふべくもあらず、それが中にも、梅の花さへつぼめらむしてとよめるは、彼雪のいまだ華をなさゞるをかたどり云ひしなるべし、

〔古事記傳七〕沫雪はたゞ雪のことなり、万葉に數しらず多くよめる皆然り、其さまの沫に似たる故に云なり、山川のたぎつせなどの沫は、まことに雪と似たるものにて、古歌にもさるよしよめり、後世に春の消易きを別て淡雪と云ならへるは、淡しき雪と心得たるより起れるにや、沫は阿和、淡は阿波にて、音も異に、又万葉に沫雪とよめる、皆常の雪にて、冬な主とよめるをや、又霰と云と云說もあれど、さらに古の歌どもに叶はず、甚誤なり、

〔日本書紀神代一〕始素戔鳴尊昇レ天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴呴、此則神性雄健使二之然一也、天照大神素知二其神暴惡一、至レ聞二來詣之狀一、乃勃然而驚曰、吾弟之來豈以二善意一乎、謂當レ有二奪レ國之志一歟、〇中略振二起弓彇一、急握二劒柄一、蹈二堅庭一而陷レ股、若二沫雪一以蹴散、〇又見二古事記一

〔萬葉集八冬雜歌〕太宰帥大伴卿、冬日見レ雪憶レ京歌一首、
沫雪(アワユキノ)保杼呂保杼呂爾(ホドロホドロニ)、零敷者(フリシケバ)、平城京師(ナラノミヤコシ)、所念可聞(オモホユルカモ)、

〔古今和歌集戀十一〕〔題しらず〕　よみ人しらず
あわ雪のたまればかてにくだけつゝ我物思ひのしげき比かな

〔北越雪譜初編上〕沫雪　春の雪は消やすきをもつて沫雪といふ、和漢の春雪消やすきを、詩歌の作意とす、是暖國の事也、寒國の雪は冬を沫雪ともいふべし、いかんとなれば、冬の雪はいかほどつもりても、凝凍ことなく、脆弱なる事淤泥のごとし、故に冬の雪中は橇、縋を穿て途を行、里言には雪を漕といふ、水を渉る狀に似たるゆゑにや、又深田を行すがたあり、初春にいたれば、雪悉く凍りて、雪途は石を布たるごとくなれば、往來冬よりは易し、すべらざるために、下駄の歯にくぎをうちて用ふ、暖國の沫雪とは、氣運の前後かくのごとし、

沫雪

〔物類稱呼一天地〕雪ゆき　東武にて綿帽子雪といふを、西國にて花びら雪と云、中國にてべたれ雪と云、越路にてぼた雪といふ、上總にてぼたん雪と云、雲州にてだんひら雪といふ、又ほろ〳〵降る雪を、越路にてはだれ雪と云、

〔倭名類聚抄一風雪〕沫雪　日本紀私記云、沫雪、阿和由岐、其弱如水沫、故云沫雪也、〇原書有脱字、據一本補、

〔類聚名義抄七雨〕沫雪アハユキ

〔袖中抄十六〕あは雪

しはすにはあは雪ふるとしらぬかも梅の花さくつゝみてあらで〇萬葉集八

顯昭云、あは雪とはきえやすき雪也、世人春雪とおもへり、しかれどもいまの歌もしはすにふるといへり、冬も春もよむべし、

〔東雅一天文〕雪ユキ〇中略アハユキといふ事、舊事紀に、日神素戔烏神の天に昇給ひしをむかへ給ひし時、蹈堅庭而陷股、若沫雪蹴散し給ふといふ事の見えしを、日本紀も其文によられ、古事記に見えし所もまた異ならず、倭名鈔に沫雪の字をしるし、讀てアハユキといひ、日本紀を引て、其弱如水沫と註せり、これ私記の説なり釋日本紀にも、師説を引て釋せしところ、亦これに同じ、世人これらの説によりて、沫雪とは春雪をいふなりともいひ、又冬のはじめ降れるをもいふなりなど、いひ傳へたれど、萬葉集の中には、冬の歌にあはゆきを讀しあまた見えて、特には、しはすにはあはゆきふると知らずかも梅の花さくつぼめらんして、とよめる歌あり、世の人の説しかるべしとも思はれず、沫雪といふものは、たとへば雪の初て作(スコ)りて、いまだ華をなさゞるが、つぶ〳〵として水沫の結びたるやうにあれば、沫雪といひしなり、古事記の歌に、多久夫須麻佐夜具賀斯多爾阿波(タクフスマサヤグガシタニアハ)由岐能(ユキノ)と見えしは、〇中略其降れる音の、さやげるを云ふなるべし、さらば即今アラレといふ物にてあるなれば、ゲハラ、カシともしるされたるなり、然を後の人、其義を誤解きて、其弱如沫など

三に、雪のくだけといへり、　ほどろ〳〵ふる　うちきらし　たなぎりあふ　あまぎり　いほへふる五百重也　つぎて續也　いやしきふる　とよくにのゆふ山ゆきといへり雪也　ふじの雪は六月のもちにきえて、其よふると在レ歌、　雪をほどろ〳〵にふりおけばといふ也　邊々云故人說也　かゝれる雪　後撰に二首也　ふゞきは雪をふくなり　ひかる万

〔藏玉和謌集冬〕六花　雪

多嵐にふかれてちるか六花の手折袖にも雪のかゝれば

六花の事、委和歌新論に有、俊房作、春に二梅櫻、冬に則三冬雪、秋に一菊、夏卯花、雪ありといへども、夏雪の事依レ爲二凶事一六花には不レ入、

〔萬葉集一雜歌〕輕皇子宿二于安騎野一時、柿本朝臣人麻呂作歌、

八隅知之、吾大王、○中略玉蜻、夕去來者、三雪落、阿騎乃大野爾、○下略

〔萬葉集八冬雜歌〕大伴坂上郎女雪歌一首

松影乃、淺茅之上乃、白雪乎、不レ令レ消將置、言者可聞奈吉、

〔源氏物語二十三初音〕ことしはをとこたうかあり、うちより朱雀院にまいりて、つぎに此院にまいる、道の程とをくて、夜の明がたに成にけり、月のくもりなくすみまさりて、うす雪少しふれる庭のえならぬに、殿上人なども、ものゝ上手多かるころはひにて、ふえの音もいとをもしろくふきたてゝ、このおまへはことに心づかひしたり、

〔圓珠庵雜記〕雪をはだれとよめり

萬葉十九、わがそのゝすもゝの花か庭にちるはだれのいまだのこりたるかも

〔夫木和歌抄十八雪〕十一月きえやすき雪をうらみし心　主殿

はだれ雪あだにもあらできえぬめり世にふることや物うかるらん

爲霜雪從地升也、按、大戴禮曾子天圓篇、陽氣勝則散爲雨露、陰氣勝則凝爲霜雪、太平御覽引大戴禮作天地積陰、温則爲雨、寒則爲雪、論衡說日篇、夏則爲露、冬則爲霜、温則爲雨、寒則爲雪、雨露凍凝者、皆由地發、不從天降也、皆卽此事、並以陽對陰、以温對寒、而此以陽對寒、必有一誤、依北堂書鈔、初學記、太平御覽所引作寒氣、知寒字非誤、然則陽温字形相似而譌也、雨水亦雨露之誤、

〔類聚名義抄七〕雪（音切。ユキ。）䨮（正）

〔撮壤集上天像〕雪　三白（ハク）　六花（リクカ）　六出（リクシユツ）　滕六（トウリク）

〔日本釋名上天象〕雪　やすくきゆる也、やすのかへしはゆ也、きゆるの下を略す、

〔東雅一天文〕雪ユキ　義不詳、舊說に上古の語に、ユキといひしは、潔齋の義なるなり、雪またユキといふ事も、皎潔の義なりといふ、（古語にイといひ、ユといふことは、相轉じていひけり、齋の字讀て、イともユともいひしが如き卽是なり、古語にユキといひしは、卽今キヨシといふ訓なり、ユの音を開きて呼ぶ時は、キヨといひ、キといふ音は轉じてシとなるが故なり、凡物の色白きは、潔きものなれば、古語に其色の白きもの、多くはユといひけり、雪、齋、又木綿、蘭などの如きこれなり、雪をユキといふ、ユとは白きなり、キとはケの轉にして消なり、其色白くして消ゆるなりといふ說の如きは、いかゞあるべき、）

〔和漢三才圖會三天象〕雪（ゆき　音スエツ切）䨮（古文）　左傳云、平地尺爲大雪、（和名由岐）

論衡云、夏爲露、冬則爲霜、温則爲雨、寒則爲雪、雨露凍凝者皆由地發、不從天降、韓詩外傳云、凡草木花多五出、雪花獨六出、（朱子云、地六水之成數、雪者水結爲花、故六出、○中略）　按、冬則日行天之南陸、故北地愈寒也、本朝如信越賀奧羽之北國雪多、而越州最爲勝、雪積蔽屋棟、出入無便、毎秋收貯衣食薪鹽以待春也、其雪中家却暖也、凡雪降之翌日必暖也、

〔八雲御抄三上天象〕雪　みゆき（行幸御幸をも）　はつ　あは（冬のはじめつかた、春の雪也、但万八に、十二月にあはゆきふるといへり、何も不可違、又小松原詞也、）　しら　友待　はだれ（うすきなり）　かたひら　おほ　くつ　けのこりの　色きえず（万）　しづり（木雪落也）　万に、そらより雪ながれくる也、（梅事）　雪けはまことの雪氣をいふ、又たゞ雪のふるをもいふ、　万、雪消とかけり、　万十七に、光といへり、　あはゆきなどをば、しき〱とよめる也、　万

氣よくなる事有、雨ふりて後なるは晴る、晴ておきなるは雨、

〔三養雜記 一〕雨の長短を知る歌　雨のながみじかを知る歌に

子はながし丑は一日寅は半卯は一時とかねてしるべし、この順に十二時ながら數ふればしる、なり、この歌のしらべよろしからずとて、後水尾上皇の御製に、よみ直させたまひしといひ傳ふるに、

曇りなば(長雨をいふ、子辰申、)ふりふらず(日を經ざる雨なり、丑巳酉、)ちら〳〵(半日ほど、寅午戌、)ちらと天氣なりけり、曇りなばふりふらずちら〳〵天氣(天氣はるゝなり、卯未亥、)とくるなり、あるひは云、風を占にもよくあたれりといへり、

雪

名稱

雪ハ、ユキト云フ、大雪ハ豐年ノ佳瑞ト稱シテ之ヲ賞ス、初雪ノ日ハ群臣參內ス、之ヲ初雪ノ見參ト云フ、此日王臣ニ物ヲ賜フ、又深雪ノ日ニハ、諸陣ノ見參ヲ取レリ、並ニ後世行ハレズ、又雪ヲ以テ嶽又ハ島、其他雜物ノ象ヲ作リ、中世ニハ雪山ヲ作ルノ戲アリ、

〔倭名類聚抄 一風雪〕雪　說文云、雪冬雨也、五經通義云、陽則散爲雨水、寒則凝爲霜雪、皆從地而昇者也、又作䨮、音切、(和名由木)

〔箋注倭名類聚抄 一風雨〕按、說文、䨮凝雨說物者、廣韻、雪凝雨也、玉篇同、皆不云冬雨、雪字非可訓冬雨、此冬字疑草書凝字壞存半體也、又此所引無說物者字、蓋陸氏本於說文而節說物者三字、唐韻、廣韻依此、故亦只云凝雨也、然則作說文恐非、釋名、雪綏也、水下遇寒氣而凝、綏々然也、○中略　隋書云、五經通義八卷、梁九卷、唐書云、九卷、漢劉向撰、今無傳本、北堂書鈔、初學記、太平御覽引、皆作寒氣凝以

〔萬寶鄙事記占天氣六〕雨　五更に雨ふれば明る日必晴、五更とは夜るの七ッ時、曉前なり、くれの雨ははれがたし、久雨の後くれがたに雨止みて、明らかに晴るはかならず又雨、雨と雪とまじるは晴がたし　快き雨快く晴、老子曰、俄雨は日をおえず、雨水に泡あるは、はれやすからず、久雨天一天上の甲午の日雨ふれば久しくはれず、天一神天より下、かのえいぬの日もおなじ、久雨くらくもりて晴ず、午時の前に至りて少やむは、午時の後大雨、午の正時に少やむはよし、久雨止て後、軒のあまだり未やまざるに日照るは、又雨となる、春甲子の日雨ふれば赤地千里、[illegible]心は日でり也、一説赤地は尺地也、雨へだてゝ尺地も千里のごとし、夏の甲子に雨ふれば舩[illegible]こゝへて市に入る、云意は大水出る、秋の甲子の雨は、いねのかしら耳を生ず、冬の甲子の雨は、牛羊こゞえ死す、又一説に、春甲子に雨ふれば、船に乘て市に入、夏甲子にふれば赤地千里、秋甲子にふれば、いねのかしら耳を生ず、冬甲子雨ふれば、雪とぶ事千里と、二說同じからず、いづれの說よきにやしらず、丁巳の日雨ふれば四十五日日を見ず、○中略　春あたゝかなるべきに、寒きは雨おほし、夏さむきは水出、夏にはかにあつきは雨ふる、○中略　甲午の旬中かはける土なし、いふ心は雨しげし、

朔日晴れば、その月のうちは晴おほし、朔日雨ふれば、月の內くもりがちに雨ふる、朔日の前より雨つゞきたるはかろし、毎月初三日晴れば、久しくはるゝ、十五日晴れば久しく雨ふらず、三日月の下に黑雲ありて、よこぎるれば明日雨ふる、晦日に雨なければ、來月のはじめかならず風雨あり、○中略　久雨ふれば、かならず其後ひさしく日てる、春甲子大雨ふれば夏大旱す、夏甲子に雨ふれば又秋旱す、久雨久晴は、きのえの日より變ず、久晴は戊の日に雨ふる、久雨はかのえの日はるゝ、久雨晴ざるは丙丁に晴る、久雨ふらざるは戊巳にふる、八專に入たる明日は多くは雨ふる、俗に八專の通ふりと云、○中略　海上のおきの方鳴るは必北風ふく、おき鳴て天

雨詩集〈二十八〉秋雨詩に、屋穿況值雨騎月、自注に、俗謂二十四、五雨爲騎月雨、主霖露不止、また毎年三月十五日、江戸は雨ふる事おほし、俗人梅若の涙雨とよぶ、唐土にては大風ふくといへり、明の鄭仲夔が耳新に、毎年三月十五六、俗相戒爲馬和尚渡江日、必有大風敗舟、中山傳信錄〈風暴日期〉に、三月十五日眞人颶などあり、又雷鳴あれば梅雨はるゝといふ、歲時廣記に、瑣碎錄云、芒種後遇壬入梅、遇雷電謂之斷梅、〈葛原詩話に、放翁が梅詩の自注を引たり、〉とあり、

〔梅園日記〈五〉〕甲子雨　天文九年の守武千句に、など大黑をかたらはざらん、甲子にふりつることよ雨のくれ、といへるは、今もいふ甲子の雨にて付たる句なり、また多聞院日記に、天正三年三月廿五日、天氣快然、春ノ甲子ニ雨下レバ大炎ト百姓申、先以雨不下珍重候とあり、按ずるに、朝野僉載に、諺云、春雨甲子、赤地千里、〈全唐詩徐寅詩に、豐年甲子春無雨、〉夏雨甲子、乘船入市、〈孔氏談苑に、乘船入市者雨多也、陳師道が后山集、和黃預久雨詩に、甲子稍逢夏、連朝雨脚垂、〉秋雨甲子、禾頭生耳、〈杜詩千家註、補遺に、此入字、齊民要術にありといへり、昌黎文集五百家注に、朝野僉載を引て、木頭生耳に作れり、〉冬雨甲子、鵲巢下地、其年大水〈また觀象玩占に、春雨甲子口日旱、夏雨甲子四十日旱、秋雨甲子四十日澇、冬雨甲子二十七日寒雪、〉とあり、かの百姓の申しは、これによれるなるべし、さて今は四時ともに甲子の雨は、長雨のしるしなりとするは、田家五行に、春雨甲子、乘船入市、言平地可通舟楫也、夏雨甲子、赤地千里、一云赤尺古字通用、言爲水阻、跬歩若千里之艱也、秋雨甲子、禾頭生耳、冬雨甲子、飛雪千里、牛羊凍死、また雨航雜錄に、徐光訓曰、子爲水位、雨於甲、則水徵など見えたる說によれるなるべし、されども赤地を尺地とするは非なり、〈下略〉○

〔和漢三才圖會〈三天象〉〕以風方角知雨晴　五雜組云、詩曰、習習谷風以陰以雨、谷風東風也、東風主發生、故陰陽和而雨澤降、大抵東風必雨、然關西西風則雨、東風則晴、　按、本邦亦每歲東風生雨、如梅雨及土用中以東風晴、秋歲北風生雨、秋夜則以北風晴、〈中略〉○　凡春東風、夏南、秋西、冬北、是時旺分爲常、從時氣所生方風必生雨、如春〈木〉南〈火〉秋〈金〉北〈水〉是也、從風方生時氣者必晴、東〈木〉夏〈火〉西〈金〉冬〈木〉是也、蓋五月西者非正西、謂坤乾之土氣也、夏〈火〉戌未〈土〉以可知、古人未言之、以理自然、載愚案而已、

もふるくよりいへり、台記に康治元年五月十二日、乗燭程降雨如車軸、宇治拾遺物語に、車軸の如くなる雨ふりて、承久軍物語に、大雨しやぢくをふらし、又平家物語、吾妻鏡、曾我物語、太平記等にも出たり、(宇都保物語俊蔭巻に、車のわの如くなる雨ふりとあるは、軸を輪と誤りたるにや、)湯王の時、車軸を流したる事なし、もと佛書より出たる語なり、王安石が夢中作に、燭(李壁箋注に、燭當是獨字、)龍注雨如車軸、(箋注に、華嚴經、龍王於大海中雨滴如車軸、)法苑珠林(大三災部の餘)に、依起世經云、注大洪雨、其滴甚麤、或如車軸、或復如杵とあり、また世話支那草に、篠をつく雨といふこと、篠を束たる如くにふる雨なり、むさし野のしのをたばねてふる雨に蛩ならではなく虫もなし、誹諧崑山集に、正知、しのをつきふりくるや饒梅の雨、吉野拾遺(一巻)に、またかきくもりしのをつくが如くふりいでければ云々、按ずるに、吉野拾遺一二の巻は僞書也とて、群書類従に除かれたるは卓見といふべし、しのをつくと云こと、無下に近き詞也、是も亦僞書の一證也、古くはしのにふるといへり、無名子永享三年道之記に、かしは原といふ所より、秋の雨しのにふる、また逍遥院殿の雪玉集に、むまや、袖もさぞふりくる雨はしのづかのむまやのすゞのさよふかきころ、とよませ給ひしもこれなり、又今さりがたきことのあるとき、鑓が降ともゆくべしといふ俗語あり、韻語陽秋に、詩人比雨如絲如膏之類甚多、至杜牧乃以羽林槍爲比、念昔游云、水門寺外逢猛雨、林黒山高雨脚長、曾奉郊官爲近詩、分明擻々羽林槍、大雨行云、萬里横牙羽林槍と見えたり、又卯の刻雨に笠をぬげといひて、明がたにふりいづる雨は必晴るといふ、重修臺灣府志に、稗海紀遊を引て、昧爽時雨、俗呼開門雨、是日主晴、昧爽是初明時也と、かしこにもいふことなり、又春は海はれ、秋は山はるれば日よりなりとて、春海秋山といふ、これも同書に、赤嵌筆談を引て、春日晩觀西、冬日晩觀東、有黒雲起主雨、諺云、冬山頭春海口といひて雨をしるなり、又朔日に雨ふれば、その月中雨おほしといふ、吳中田家志に、上旬交月雨、謂朔日之雨也、主月内多雨風吹、また江戸にて廿四五兩日はおほく雨ふるといふ、もろこしには、この日ふればなが雨なりといへり、陸游が[illegible]

〔和漢朗詠集下〕山家

蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、

〔枕草子十一〕雨は心もとなき物と思ひしみたればにや、かた時ふるもいとにくゝぞある、やんごとなき事、おもしろかるべき事、たふとくめでたかるべき事も、雨だにふればいふかひなく口をしきに、何か其ぬれてかこちたらんがめでたからん、げにかたのゝ少將もどきたる、おちくぼの少將などはをかし、それもよべをとゝひの夜も有しかばこそをかしけれ、足あらひたるぞにくきたなかりけん、さらでは何か、

〔梅園日記二〕夏。雨。金。　五六月ひでりの頃、たま〳〵雨ふれば、農民はかねのふる也とよろこぶ、諧玉海集に、宗珠が、雨乞とゆふだちはこがねかたな哉、とよめるは是なり、もろこしにも趙崇森が又旱喜雨詩に、五月炎歊化作霖、分明滴々是黄金、(後村千家詩)曾幾が六月十四日、大雨連朝詩に、黄金北斗高、何似六月雨(茶山集)など作りたるも、似たることなり、○中略

夏。雨。分。馬。脊。　學海餘滴卷十に、續博物志云、俗以五月雨為分龍雨、一曰隔轍雨、本邦諺曰、夏雨分馬脊、既隔車轍、則其理必應分馬脊也とあり、(按に南畝莠言亦此說あり)按するに、田家五行拾遺に、夏雨分牛脊(七修類藁に、自然一對、夏雨分牛脊、秋風貫驢耳、)とあり、牛を午と讀あやまれる人の、いひそめたるにはあらずや、

〔梅園日記四〕車。軸。雨。　三浦氏の世話支那草云、車軸、ある人のいはく、これは大粒にふりたる雨のたまりて、その水の上にまた落るあと、車の軸の如くに飛上り、自然に輻(ツノヤ)のかたちをなす故にしかいふと、又あるひとのかたりしは、大唐にて殷湯の時、旱魃甚しくしければ、湯王の德のたらざる事をなげき給ひ、薪をつみあげ、みづからその上に坐して、火を四方よりはなちたまへば、にはかに黒雲たなびき、大雨おびたゞしくそゝぎ來て、火程なくきえければ、湯王つゝがなくて、車に乗て歸り給ふ道すがら、雨水車軸を流せしより、この詞おこるとなん、按するに、車軸の雨こゝに

あづまやの、まやのあまりの雨そゝぎ、われ立ぬれぬ、そのとのとひらかせ、

〔源氏物語蓬生十五〕御さきの露を馬のむちしてはらひつゝいれたてまつる、あまそゝぎも、なを秋のしぐれめきてうちそゝげば、みかささぶらふ、

〔枕草子四〕二月つごもりがた、雨いみじうふりてつれ〴〵なるに、御物いみにこもりて、さすがにさう〴〵しくこそあれ、物やいひにやらましとなんの給ふと人々かたれど、よにあらじなどいらへてあるに、一日しもにくらしてまゐりたれば、よるのおとゞに入せ給ひにけり、○中略すびつのもとにゐたれば、又そこにあつまりゐて物などいふに、何がしさぶらふといとはなやかにいふ、あやしくいつのまになに事のあるぞととはすれば、殿守づかさなり、たゞこゝに人づてならで申べき事なんといへば、さし出てとふに、是頭中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりとくといふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんとおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえんとて、ふところにひきいれていりぬ、猶人の物いふきゝなどするに、すなはちたちかへりて、さらば其ありつる文を給はりてことなんおほせられつる、とく〴〵といふに、あやしくいせの物がたりなるやとて見れば、あをきうすやうにいときよげにかき給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり、らんじやうの花の時、きんちやうのもと、かきて、末はいかに〴〵とあるを、いかゞはすべからん、御まへのおはしまさば御らんせさすべきを、これがするしりがほに、たど〴〵しきまんなに書たらんも見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞ其おくに、すびつのきえたる炭のあるして、草のいほりを誰かたづねんとかきつけてとらせつれど、返事もいはで、みなねて、つとめていととくつぼねにおりたれば、源中將のこゑして、草のいほりやある〴〵とをどろ〴〵しふとへば、などてかさ人げなきものはあらん、玉のうてなもとめ給はましかば、いできこえてましといふ、○下略

〔日本紀略平城〕大同三年三月甲辰、黄雨、庚戌、黄雨、

〔源氏物語三十三藤裏葉〕こゝろあはたゝしきあまかせに、みなちり〳〵にきほひかへり給ぬ、

〔枕草子七〕つれ〳〵なるもの　雨うちふりたるは、ましてつれ〳〵なり、

〔殿暦〕永久五年五月廿八日乙卯、今月雨不降、五月不雨降、不可思議事歟、天災有之、

〔古事談一王道后宮〕白川院金泥一切經、於法勝寺可被供養、臨期依甚雨延引三箇度也、被遂供養日、猶降雨、因之有逆鱗、雨ヲ物ニ請入テ、被遣獄舍云々、〇又見源平盛衰記

〔夫木和歌抄十九雨〕六帖題　　爲家卿

こちふけば雨けにつどふ浮雲のかきあつめてぞ物はかなしき

〔古今和歌六帖一天〕あめ

こぬ人を雨のあしとは思はねどほどふることはくるしかりけり

〔枕草子九〕風は略〇中　八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風、いとあはれ也、雨のあしよこざまにさはがしう吹たるに、略〇下

〔世事百談〕雨手風手　雲海　風はよく物を動かすこと、手あるがごとく、雨は一むらふり過ぐること、足あるが如しとて、風の手、雨の足といふことあり、雨の足は唐山にてもふるく雨足とも、雨脚ともいへり、晉の長景陽が雜詩に、雲根臨八極、雨足灑四溟、又云、騰々結繁雲、森々散雨足と文選に見ゆ、蘇東坡の詩に、疎々雨脚長などもいへり、和歌にも平兼盛集に、

君をおもふかずにしとらばをやみなくふりしく雨のあしはものかは、蜻蛉日記に、けふは廿四日、雨のあしいとのどかにてあはれなり、

ふる雨のあしともおつるなみだ哉こまかに物をおもひくだけば、など見えたり、

〔催馬樂〕東屋

めりといへり、喜撰式に、若詠二不レ忌物一時うたかたといふと見え、又船うたかたといふとも見えたり、〇中略倭名抄に沫雨をよめり、淮南子注に、沫雨雨潦上沫起若二覆盆一と見えたり、方丈記に、逝川の流は絶ずして、しかももとの水にあらず、流にうかぶうたかたは、かつ消かつ結んで、久しくとゞまる事なし、世中に在人のすみかと住居と、またかくの如しといへり、樂普和尙浮漚の歌に、雲天雨落庭中水、水上漂漂見二漚起一、前後相續無二窮已一、本因二雨滴一水成レ漚、還緣二風激一漚歸レ水と見えたり、未必と義通へり、万葉集に、

うたかたもいひつゝもあるか吾あらば土には落じ空にけなまし

新後撰集に

水の面にうきてたゞよふうたかたのまた消ぬまにかはる世の中、未必と沫雨と兩義をかねてよめる歌、後撰集に、

おもひ川絶ず流るゝ水のあわのうたかた人にあはで消めや

〔後撰和歌集 十三戀〕をとこのつらうなりゆくころ、雨のふりければつかはしける、

よみ人しらず

ふりやめば跡だにみえぬうたかたのきえてはかなきよを賴むかな

〔古事記 上〕其神〇八千矛神之嫡后、須勢理毘賣命、甚爲二嫉妬一、故其日子遲神和備氐、三字以レ音自二出雲一將レ上二坐倭國一而束裝立時、片御手者繫二御馬之鞍一、片御足蹈二入其御鐙一而歌曰、〇中略阿佐阿米能佐疑理邇多多牟叙、〇下略

〔日本書紀 二十敏達〕十四年三月丙戌、物部弓削守屋大連、自詣二於寺一、踞二坐胡床一、斫二倒其塔一、縱レ火燔レ之、并燒二佛像與二佛殿一、旣而取二所レ燒餘佛像一、令レ棄二難波堀江一、是日無レ雲風雨、

〔日本書紀 二十四皇極〕元年十月、是月行二夏令一、無レ雲雨、

沫雨

也と見ゆ、万葉集に庭多泉と書り、流るゝの枕詞也、仙覺抄に、立水居水の事見えたり、立水は泉也といへり、喜撰式に庭水にはたつみと見え、呉竹集に庭のたつみともよめり、南伊勢の俗は潦をたづみといふ、

〔古事記(仁徳下)〕故是口子臣、白此御歌之時大雨、爾不避其雨、參伏前殿戸者、違出後戸、參伏後殿戸者、違出前戸、爾匍匐進赴、跪于庭中時、水潦至腰、其臣服著紅紐青摺衣、故水潦拂紅紐青皆變紅色、

〔古事記傳(三十六)〕水潦は(中略)雨降時に、地上にたまりて流るゝ水なり、師(賀茂眞淵)の俄泉の意なりと云れたるは、あたれりやあたらず、やゝいかゞあらむ、

〔日本書紀(皇極二十四)〕四年六月戊申、是日雨下、潦水溢庭、

〔萬葉集(挽歌二)〕皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首(中略)

御立爲之、島乎見時、庭多泉流、涙止曾金鶴、

〔萬葉集(譬喩歌七)〕寄雨

甚多毛、不零雨故、庭立水、大莫逝、人之應知、

〔古今和歌六帖(三水)〕にはたづみ

世の中はありてむなしきにはたづみおのがゆき〳〵別れぬる身を

〔藏玉和謌集(夏)〕庭塘草(これは五月雨の頃の庭にたまる泉なり)

五月雨やはれず降らん庭塘草行かたもなき花のゆふぐれ

〔倭名類聚抄(雲雨一)〕沫雨　淮南子註云、沫雨(和名宇太加太)雨潦上沫起若覆盆、

〔類聚名義抄(水五)〕沫雨(ウタカタ)

〔倭訓栞(前編四)〕うたかた　遊仙窟に未必をよめり、虚象の意にや、古來の説に、寧の意といひ、まばしの義、すこしの義などもいへり、又危くかりそめなる意、定めなくはかなき意などにも取てよ

御車さし出て、ごせんなどまいりあつまるほど、をりしりがほなるしぐれうちそゝぎて、木の葉さそふ風あはたゞしう吹はらひたるに、おまへにさぶらふ人々ものいとゞ心ぼそくて、すこしひまありつる袖どもうるほひわたりぬ、

〔源氏物語椎本十〕はつしぐれいつしかとけしきだつに、いかゞおぼしけん、かれよりも

木がらしのふくにつけつゝ待しまにおぼつかなさのころもへにけり、と聞え給へり、をりもあはれに、あながちに忍びかき給へらん、御心ばへもにくからねば、御つかひとゞめさせ給て、中略聞えさせてもかひなき物ごりにこそ、むげにくづをれにけれ、身のみものうきほどに、

あひみずてしのぶる比の涙をもなべての秋の時雨とやみるこゝろのかよふならば、いかにながめの空も、物わすれし侍らんなど、こまやかに成にけり、

〔見た京物語〕時雨のけしきは江戸に勝れり、月と時雨たちまちにかはる、山近ければなり、

〔新撰字鏡雨〕靁力救反、自屋水流下、阿米志太太留、

〔倭名類聚抄雲雨一〕靁　説文云、靁、屋簷前雨水流下也、音溜、和名阿万之太利、

〔類聚名義抄雨七〕靁音留　アマシタヽリ

〔拾玉集一〕百首和歌　述懐

かきくらしはれぬ思ひのひまなきにあめしづくともながれける哉

〔倭名類聚抄雲雨一〕潦　唐韻云、潦音老、和名爾八太豆美、雨水也、

〔類聚名義抄水五〕潦音老　アマミツ　又郎倒反　ニハタツミ

〔運歩色葉集伊〕卒尓水

〔書言字考節用集乾坤一〕潢潦ニハタツミ黄老二音、文選注、雨水流二於地一者、行潦同　朱子云、道上無レ源之水也、

〔倭訓栞前編二十〕にはたづみ　和名抄に潦字をよみ、文選に潢潦をよめり、朱説に道上无源之水

ずといへり、或は液雨を訓せり、十月雨也と注せり、古今集に秋のしぐれとよめり、万葉集に鐘禮と書るは、鐘をしくとよぶは、黄鐘のよみの如く古音なるべし、今の朝鮮音にもしくといへりとぞ、

〔物類稱呼天地一〕液雨しぐれ　美濃加納にて山めぐりと云、丹鉛錄曰、張野廬廬山記云、天將雨則有白雲、或冠峯岩、或亘中嶺、俗謂之山帶、不出三日必雨云々、又唐詩風吹山帶遙知雨なども作れり、又不時に村雨の降を、相州箱根山にてわたくし雨といふ、

〔萬葉集秋雜歌八〕市原王歌一首

待時而落鐘禮能雨令零收、朝香山之將黃變

〔借字例附錄〕鐘禮

萬葉集に鐘禮能雨云々、また鐘禮とも書り、鐘は韻鏡第三轉合音の字にて、漢音ショウ、呉音シュウにて、鐘も同音也、今シグと轉し用るは、黃鐘をワウシキと呼例なり、ウ韻をク韻に轉じ用る例は、香山をカグヤマ、勇禮をイクレといふ類あまたあり、悉曇に、カキクケコを喉音とするによれるなるべし、略○中太田氏云、鐘は漢轉音チョク、如今、小盃ヲチョクト喚做り、即鐘字也、コノ鐘ノ入聲燭ニ竹ノ呉ノ原音チョクアルノ轉ナリ、又呉轉音シュク、萬葉集ニ鐘禮ヲシグレトアツ、又此轉ノウ韻ハ唐音撥假字ノ音ニテ、朝鮮ナドハクト呼ヤウニ聞ユトイヘリ、漳州ヲチャクチウトイフ類ナリ云々、かゝればこの鐘字は呉音の入聲シュクを、直音になほしてシグと呼べるなり、竹の本音チュクを、チクと呼がごとし、

〔古今和歌集冬六〕題しらず　よみ人しらず

龍田川錦おりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

〔源氏物語葵九〕君はかくてのみもいかでかは、つくづくとながめすぐし給はんとて院へまいり給、

〔古今和歌六帖一天〕ゆふだち

夏の日のにはかにくもる夕立のおもひもかけぬ世にもあるかな

〔源氏物語七紅葉賀〕ゆふだちしてなごり涼しき宵のまぎれに、うんめいでんのわたりをたゝずみありきたまへば、此内侍びはをいとをかしうひきゐたり、○中略ひきやみていといたくおもひみだれたるけはひなり、君あづまやを忍びやかにうたひて、より居給へるに、おしひらいてきませとうちそへたるも、例にたがひたるこゝちぞする、

立ぬるゝ人しもあらじあづまやにうたてもかゝる雨そゝぎかな、とうちなげくを、我ひとりしもきゝおふまじけれど、うとましや何事をかくまではと覺ゆ、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年六月三日己巳、日中夕立、

〔新撰字鏡雨〕霂(亡各反、霖也、志久禮、又三曾禮、) 雹咎(同波角反、霂也、志久禮、又阿眞禮、)

〔倭名類聚抄一雲雨〕霎雨 孫愐曰、霎雨小雨也、(音與翣同、漢語抄云、之久禮、)

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、志水垂下之義、久禮謂或雨或陰、天氣晻晦也、○中略按、之久禮、謂暮秋初冬之際、且降且霽之雨、漢語抄以訓小雨之霎、爲之久禮、非是、李時珍曰、立冬後十日爲入液、至小雪爲出液、得雨謂之液雨、所謂之具禮近之、

〔類聚名義抄七雨〕霎(音歃、シクレ、)

〔下學集一天地〕時雨(シグレ) 霎(シグレ)

〔日本釋名上天象〕時雨 しばしくらき也、らとれと通ず、時雨ふる間はしばしくらし、

〔倭訓栞前編十一〕しぐれ 天陰りて小雨するをいふ、頻昏の義、歌にしぐれのあめといふは、本義なるべし、新撰字鏡に霂又雹をよみ、童蒙頌韻に霎をよみ、倭名抄に霎雨をよめり、常に時雨をよめれど、霎雨は小雨也といひ、時雨は漢晉春秋に、喜如時雨と見え、好雨如時節の意なれば、あたら

五月雨

〔萬葉集春相聞十〕寄花
春去者、宇乃花具多思、吾越之、妹我垣間者、荒來鴫、

〔堀川院御時百首和歌夏〕五月雨　　　　藤原基俊
いとゞしく賤が庵のいぶせきに卯花くたし五月雨ぞふる

〔類聚名義抄七〕五月雨サミダレ

〔書言字考節用集乾坤二〕送梅雨、五月雨也、續博物志、俗以五月雨為分龍雨、一日隔轍雨、　五月雨同

〔倭訓栞前編十一〕さみだれ　送梅雨をいふ、さはさ月也、みは雨也、たれは下るなり、よて五月雨と書りといへり、一説に万葉集にさみだれとよめる歌、一首も見えず、菅家万葉集に沙亂と書せたまへり、沙は音をかれり、五月の雲はよのつねならず、亂れちるをもていふにやともいへり、源氏にも風雨を空のみだれといふめり、

〔古今和歌集夏三〕寛平御時、きさいのみやの歌合のうた、　　　　きのとものり
さみだれに物思ひをれば時鳥夜ぶかく鳴ていづち行らん

夕立

〔撮壤集天象上〕雨　晩立夕立

〔書言字考節用集乾坤二〕涷雨爾雅注、江東呼夏月暴雨為涷雨、　白雨同　暴雨同　晩立俗字

〔倭訓栞前編三十五〕ゆふだち　夕に雲發て雨ふるをいふ、よて拾遺集に、夕だちやあめもふる野の末に見てとよめり、五色線に夏雨曰錦雨と見えたり、涷雨ともいへり、白雨をよめるは心得がたし、俗に馬の脊をわかつといふは、五雜俎に、龍於是時始分界而行雨、各有區域、不能相踰、故有咫尺之間而晴雨頓殊者、龍為之也と見えたり、

〔萬葉集秋雜歌十〕詠露
暮立之、雨落毎、春日野之、尾花之上乃、白露所念、

瀑疾雨也、詩曰、終風且瀑、是暴雨當作瀑雨、其作暴雨者假借也、

〔類聚名義抄 七雨〕暴雨ムラサメ　白雨ムラサメ　霢ムラサメ

〔下學集 天地一〕村雨ムラサメ

〔日本釋名 上天象〕暴雨ムラサメ　ゆふだち所々にむら〱ふりて、ふらぬ所もあるゆへなり、さめはあめ也、さとあとよこに通ず、春雨のさめも同、

〔古事記 中仁德〕天皇驚起、問其后曰、吾見異夢、從沙本方暴雨零來、急沾吾面、〇下略

〔萬葉集 十秋雜歌〕詠蟋蟀

庭草爾、村雨落而、蟋蟀之、鳴音聞者、秋付爾家里、

〔古今和歌六帖 天一〕むらさめ

人しれず物思ふ夏〇夏、夫木和歌抄作宿、のむら雨は身よりふりぬる物にぞ有ける

〔萬葉集 四相聞〕藤原朝臣久須麻呂來報歌二首〇中略

春雨乎、待常二師、有四、吾屋戸之、若木乃梅毛、未含有、

春雨

〔古今和歌集 一春〕題しらず　よみ人しらず

梓弓おしてはる雨けふ降ぬあすさへふらば若菜つみてん

〔後撰和歌集 一春〕ある人の許に、新參りの女の侍りけるが、月日久しく經て、正月の朔頃に、まへ許されたりけるに、雨のふるを見て、　讀人しらず

白雲の上しる今日ぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

卯花くたし

〔書言字考節用集 一乾坤〕迎梅雨ウノハナクダシ

〔倭訓栞 前編四字〕うのはなくたし　万葉集によめり、卯花腐の義なり、降しの義とするは非也、卯月の比、雨のふりつゞきて、花も腐る意なり、西土にいふ迎梅雨也といへり、

暴雨　白雨

いもがかど行すぎがてにひぢかさの雨もふらなんあまかくれせん

顯昭云、此歌にひぢかさ雨といへるはひが事也、これは万葉集の歌なり、彼集にはひさかた雨といへり、考、万葉集第十一云、

いもがかどゆき過かねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん〇中略

六帖曰、いもがかど行すぎかねつひぢかさのあめもふらなんあまかくれせん

此歌は万葉の歌をやはらげたる歌也、第三句のひさかたを、ひぢかさと書たる也、ひぢかさ雨と云物不可有也、

〔八雲御抄三上天象〕雨〇中略　ひぢかさ（さとふるに、ひぢをかさにするなり、）

〔催馬樂〕妹之門

いもがかどや、せながかど、行過かねてや、わがゆかば、ひぢかさの、ひぢかさの、雨もやふらなん、しでたをさ、雨やどり、かさやどり、やどりてまからん、しでたをさ、

〔空穗物語菊の宴〕ひぢかさあめふり、かみなりひらめきて、おちかゝりなんとする時に、〇下略

〔源氏物語十二須磨〕ひぢかさ雨とかふりきて、いとあはたゞしければ、みな返り給はんとするに、笠もとりあへず、さるこゝろもなきに、よろづ吹ちらし、又なき風なり、

〔枕草子八〕名おそろしき物　ひぢかさ雨

〔新撰字鏡木〕涷（多貢力見二反、去、暴雨、波也佐安女、）

〔倭名類聚抄一雲雨〕暴雨　楊氏漢語抄云、白雨、（和名無良佐女）

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、謂物之不平等為无良、與群村同語、故謂暴降急霽之雨為无良佐女、新撰字鏡云、涷暴雨、波也佐女、萬葉集暮立之雨、皆是類也、〇中略　白雨、見李白杜甫楊巨源詩、又南卓羯鼓録、頭如青山峯、手如白雨點、此即羯鼓之能事也、山峯取不動、雨點取碎急、爾雅暴雨謂之涷、按、説文、

〔日本書紀神武三〕戊午年十二月丙申、皇師遂撃長髄彦、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨氷(ヒサメフル)、乃有金色靈鵄、飛來止于皇弓弭、

〔古事記中景行〕於是詔、茲山神者、徒手直取而騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛、爾爲言擧而詔、是化白猪者、其神之使者、雖今不殺、還時將殺而騰坐、於是零大氷雨(ヒサメ)、打惑倭健命、

〔古事記傳二十八〕大冰雨(オホヒサメ)遠飛鳥宮段○允恭にも、零大氷雨とあり、○中略書紀に大雨、甚雨、淫雨など、みなひさめと訓り、推古紀、天智紀などに、火雨とあるは、もと大雨とありけむを、後人ヒサメとある訓を心得誤りて、大字をさかしらに火に改めつるなるべし、和名抄に引る私記なるも同じ、又今世俗に、火の雨と云ことのあるも、氷の雨なり、抑比佐米とは、もと氷(ヒ)の降るを云て、天武紀に氷零大如桃子とある是なり、今世に雨字と云物にて、雹字これなり、雨字と云は、此字音をヘウと呼しが、訛れるにやあらむ、さて和名抄にも、書紀の訓にも、雹はアラレとあり、阿良禮は霰なるを、古は雹をも共に阿良禮とも云しなるべし、雹字、又右の氷零なども、ヒサメとも、ヒフルとも訓べし、然るを其より轉りて、尋常の雨の甚く零るをも云りと見えて、彼遠飛鳥宮段なる氷雨は、歌には阿米とよめり、若雹ならむには、阿米とはよむまじきにや、但阿米と云は、此類の總名にて、此は雹ながら、歌には阿米とよめるにもあるべし、又和名抄に、霈をも比左女と注し、書紀に大雨甚雨などを、然訓るも是なり、かくて此なるは、打惑とあるを以て見れば雹(ヒヨウ)なり、書紀にも零氷とあり、

〔日本書紀垂仁六〕五年十月己卯朔、天皇幸來目、○中略天皇則寤之語皇后曰、朕今日夢矣、○中略大雨(ヒサメ)從狹穗發而來之濡面、是何祥也、

〔古事記下允恭〕於是穴穗御子興軍、圍大前小前宿禰之家、爾到其門時、零大冰雨、故歌曰、意富麻幣(オホマヘ)、袁麻幣(ヲマヘ)須久泥(スクチ)賀、加那斗加宜(カナトカゲ)、加久余理許泥(カクヨリコネ)、阿米多知夜米牟(アメタチヤメム)、

〔日本書紀武烈十六〕八年、好田獵、走狗試馬、出入不時、不避大風甚雨(ヒサメ)、衣濕而忘百姓之寒、

〔日本書紀推古二十二〕九年五月、天皇居于耳梨行宮、是時火雨(ヒサメフル)、○火雨、諸本作大雨、河水漂蕩、滿于宮庭、

〔類聚名義抄七雨〕霈普蓋切、ヒチ、カサアメ、

〔袖中抄一〕ひちかさ雨

〔枕草子 二〕すさまじき物　えはすのつごもりのなが雨

〔鈴かね艸子〕寶暦十四年七月十四日曇天、時々雨一頻(豆都)降、奈賀世、　十六日、晴天、時々雨曾々久、奈我世、　二十日雨晴不定、長瀨、

大雨

〔倭名類聚抄 一 雲雨〕霈　文字集略云、霈大雨也、音沛、日本紀私記云、火雨(和名比左女)　雨氷(同上、今按、俗云比布留、)

〔箋注倭名類聚抄 一 風雨〕按、古無霈字、說文、霶霈作滂沛、孟子梁惠王篇、沛然下雨、初學記、太平御覽引作霈、蕭心篇、沛然莫之能禦也、藝文類聚引作霈、文選思玄賦、凍雨沛其灑塗、注、沛雨貌、知霈即沛字、然說文、沛水出遼東番汗塞外、西南入海、非此義、說文又云、宋艸木盛宋宋然、象形、蓋轉艸木盛、爲雨盛、後從水作沛也、與沛水字自別、○(中略)　按、垂仁紀大雨訓比左女、又引私記訓比多女、比多女當是比多阿女之急呼、謂不暫止之雨也、然則訓大雨爲比左女者、比多女之一轉也、又雨氷訓比佐女者、氷雨之義、古事記允恭段景行段氷雨、即是、蓋謂天雨氷、說文、雹雨氷也、則知雨氷即雹、皇極紀二年三月、風雷雨氷、雨氷謂雨雹、當依神武紀訓比佐女、今本訓三曾禮、非是、然則大雨雨氷皆同訓比左女、而其語原自別、源君收在一條、非是、宜以雨氷在雹條、比布留見源氏物語明石卷、天武紀、氷零大如桃子、又長和二年三月、雷鳴氷降、大如梅李、見日本紀略、則知比布留、亦謂雨雹也、今俗謂雨雹爲比也字布留者、比布留之轉訛也、或以比也字爲雹字音轉、非是、那波本大雨作火雨、推古紀、天智紀、今本誤作火雨、按、畿內及中國、所在有廢壙、皆積石爲室、其制廣大、或可容數十人、與今時墓穴大不同、土俗或傳云、古天雨火、故造是石室以避之、當是庸妄人、見紀今本誤作火雨訓比左女、附會爲之說也、那波氏改大雨作火雨者、似依是說而誤、伊勢廣本雨氷作雨水、雨水見孝德白雉三年、持統五年紀、今本並訓三曾禮、然皆謂霖雨大水、則與云大雨同、宜訓比佐女、則此作雨水亦似通、然云今案比布留明、源君所引是雨氷非雨水也、

〔類聚名義抄 七 雨〕大雨(ヒザアメ)　雨氷(同、俗云ヒフル、)

〔日本紀私記神代上〕雖經霖旱(津以利、比天利、安布止以佐止母、)

〔塵袋一〕一霖雨トハイカホド久クフルアメヲイフベキゾ、張銑文選ノ注ニハ、三日雨ヲ爲霖ト云ヘリ、三日ヨリ久カラバ又勿論也、淫雨トモ云フ歟、

〔日本書紀神代一〕一書曰、(中略)既而諸神嘖素戔鳴尊曰、汝所行甚無頼、故不可住於天上、亦不可居於葦原中國、宜急適於底根之國、乃共逐降去、于時霖也、素戔鳴尊結束青草、以爲笠蓑、而乞宿於衆神、衆神曰、是躬行濁惡、而見逐讁者、如何乞宿於我、遂同距之、

〔常陸風土記行方郡〕郡家南門有一大槻、其北枝自垂觸地、還聳空中、其地昔有水之澤、今遇霖雨、廳庭湿潦、

〔萬葉集十秋相聞〕寄雨

秋芽子乎、令落長雨之、零比者、一起居而、戀夜曾大寸、

〔萬葉集十九〕霖雨晴日作歌一首

宇能花乎、令腐霖雨之、始水逝、縁木積成、將因兒毛我母、

〔小町集〕花をながめて

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、ならの京ははなれ、此京は人の家まださだまらざりけるときに、西の京に女ありけり、(中略)それをかのまめ男、うち物かたらひてかへりきて、いかゞ思ひけん、時はやよひのついたち、雨そぼふるにやりける、

おきもせずねもせで夜を明しては春のものとてながめくらしつ

〔源氏物語十二須磨〕なが雨に、ついぢ所々くづれてなどきゝ給へば、京の家司の許に仰つかはして、近き國々の御莊の物などもよほさせて、つかうまつるべきよしの給はす、

也、

〔和漢三才圖會 天象三〕雨 音禹 雨〇和名阿女 中略 按、天文書云、雨者雲上隔日氣下隔火氣、冷濕之氣在雲中、旋轉相盪爲雨、譬如蒸水因熱上升作氣者雲象也、上及于蓋、蓋部冷際也、就化爲水、便復下者雨象也、

小雨

〔新撰字鏡 雨〕霢 息麗私覽二反、平、微雨也、古佐女、

〔倭名類聚抄 一雲雨〕霢霂 兼名苑云、細雨、一名霢霂、小雨也、麥木二音、和名古左女

〔釋名 一釋天〕霢霂小雨也、言霂者霂歷霑漬如人沐頭、惟及其上枝而已根不濡也、霢者脊溜入土如人之脈、霢言上、霂言下、

〔日本靈異記 上〕得雷之喜令生子強力子緣第三

小細雨 三合コサメ

〔類聚名義抄 七雨〕霢 コサメ 霢霂 コサメ

〔萬葉集 二挽歌〕靈龜元年歲次乙卯秋九月、志貴親王薨時作歌一首幷短歌 〇中略

玉桙之道來人乃、泣涙霈霖爾落者、白妙之衣埿漬而、立留吾爾語久、〇下略

〔萬葉集 七雜歌〕詠雨

吾妹子之、赤裳裙之將染埿、今日之霢霂爾吾共所沾名、

〔古今和歌六帖 一天〕あめ　そせい

うくもあるか昨日のこさめわたるせに人の涙を淵となさねば

〔慶長日件錄〕慶長十二年五月十九日、雲沃、

霖

〔新撰字鏡 雨〕霪 序助如序二反、霖也、起也、霪也、奈加阿女強也、 霢 力函力禁二反、久雨、奈加阿女、 霪 以針反、平、雨无止也、猶降也、奈我阿女、

〔倭名類聚抄 一雲雨〕霖 兼名苑云、霖三日以上雨也、音林、和名奈加阿女 今按、又連雨、又名苦雨、爾雅註云、霖一名霪、音淫、久雨也、

〔類聚名義抄 七雨〕霖 音林、ナカメ、コサメ、アメ

古事類苑

天部三

雨

名稱

雨ハ、アメト云フ、小雨(コサメ)、霖(ナガアメ)、大雨(ヒサメ)、暴雨(ハヤサメ)等ノ稱アリ、又降雨ノ時節ニ依リ、春雨(ハルサメ)、卯花クタシ、五月雨(サミダレ)、時雨(シグレ)等ノ名アリ、而シテ神佛ニ祈雨、祈霽スル事ハ、神祇部、祈禱篇ニ載セタリ、

〔新撰字鏡 雨〕霣隕(同、王閔反、上、落雨也、阿女不利於豆、)〔同 水〕瀑(蒲報反、疾雨也、甚雨、又蒲木反、入、阿女佐加利留布留、又阿瓦支水、)

〔倭名類聚抄 一 雲雨〕雨 說文云、水從雲中而下也、音禹、(和名阿女)

〔段注說文解字 十一下〕雨 水從雲下也、(引申之、凡自上而下者偁雨、)一象天、冂象雲、水霝其間也、(卄者水字也、王矩切、五部、)凡雨之屬皆从雨、

〔釋名 一 釋天〕雨羽也、如鳥羽動則散也、

〔類聚名義抄 七 雨〕雨(音禹、アメ、アメフル、和ウ)[illegible](篆二正、音雨、アメフル)、

〔日本釋名 上 天象〕雨 天よりふる故に、天のことばをかり用ゆ、

〔八雲御抄 三上 天象〕雨 春さめ 小雨 むらさめ ながめ しはくり ゆふだち こし雨(○中略) よこさめ(源氏曰、野分時也、) さみだれ(五月) うの花くたし(四五月、万十に、はるされば、うのはなくたしとよめり、) みをしるあめ(涙也) しぐれ 夕 むら はつ あまのしぐれ、又かきくらしとよめり、古歌におつるしぐれとよめり、 たつみとは、雨のふりたるおりのみづなり、にはたづみなどもいふ、 頼政、よこ時雨とよみて俊成に被難、光忠があきさめなどいへるたぐひは、おかしき事なり、 しつくしくる(雨名)

苗代のころまでむすぶ春の霜民のこゝろをいかゞなげかぬ

夏霜

〔日本書紀(二十九天武)〕十一年七月戊午、是日信濃國吉備國並言、霜降、

〔三代實錄(四十五光孝)〕元慶八年四月十日庚子、天寒須霜、　十一日辛丑、霜降、　十六日丙午、霜降氣寒、十七日丁未、夜寒霜降、草木葉彫、

〔扶桑略記(二十六村上)〕天德四年五月八日丙午、霜降、尤可ㇾ為ㇾ異、

〔吾妻鏡(二十七)〕寛喜二年七月十六日、霜降殆如二冬天一、

雜載

〔萬寶部事記(六占天氣)〕霜　あさはやくきゆるは、かならず雨ふる、をそく消るは晴、　大霜はかならず雨　京畿内は霜あれば、かならず天氣よし、坂東も同じ、西州は霜をそく消ても明日は雨ふる、冬の霜物をからさゞるは來年虫多、五穀を害し飢饉す、

思ふより又もあはれはかさねけり霜にしもをく庭のよもぎふ　寂蓮法師

此歌、左方申云、つゆにしもをく如何、右陳云、つゆしもといふは、つゆに霜のおきくするなり、又難云、露霜は露と霜とのともにをくにこそ、露の上に霜をかむこと如何、判者俊成卿云、霜は露の結にこそ侍めれと云々、

冬霜

〔萬葉集一雜歌〕志貴皇子御作歌
葦邊行、鴨之羽我比爾、霜零而、寒暮、家之所念、

〔萬葉集十秋雜歌〕詠霜
天飛也、鴈之翅乃、覆羽之、何處漏香、霜之零異牟、

〔古今和歌六帖一天〕霜
木の葉みなからくれなゐにくゝるとて霜の跡にもおきまさるかな

〔枕草子三〕草の花は〇中略　りんだうは、枝ざしなどもむづかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出たる、いとをかし、

〔新撰六帖一〕しも　光俊
谷ふかき岩やにたてる霜ばしらたが冬こもる栖なるらん

春霜

〔八雲御抄三上天象〕霜〇中略　万八、霜雪もいまだすぎぬにむめのはなみつといへり、これは春霜也、後撰に、しもをかぬ春よりのちといへり、たゞし春も少々詠ず

〔日本書紀二十二推古〕三十四年三月、寒以霜降、

〔日本書紀二十四皇極〕二年三月乙亥、霜傷草木華葉、

〔夫木和歌抄五苗代〕正嘉二年毎日一首中　民部卿爲家

秋霜

〔和漢三才圖會天象三〕霜音爽　霰音店　早霜也和名八豆之毛　本綱、陰盛則露凝爲霜、霜能殺物、而露能滋物、性隨時異也、月令云、季秋霜始降、　五雜組云、百草不畏雪而畏霜、蓋雪生於雲、陽位也、霜生於露、陰位也、不畏北風而畏西風、亦蓋西轉而北陰未艾也、北轉而東陽已生也、○中略　按、霜雪將降日甚寒冷、既降後必暖也、自立春八十八日、則當立夏前五六日、俗稱八十八夜餘波霜、凡草木畏霜、如蘭番焦佛手柑以下柑橘之類、覆籠禦霜、過此日則脱蓋、

〔八雲御抄天象三上〕霜　はつ　朝　夕　はたれ滯垂　ゆふこり夕凝　○中略　つるのいましめ　かねのこゑ　かれはしもにひゞくなり　おくれしも初學抄　さはひこす　露結て霜とはなる也、非別物、依天氣かはるなり、　霜こほり　霜くもり月

〔改正月令博物筌三冬〕霜朝霜、夕霜といへど、多く曉がたよりおくものなり、

〔日本書紀景行七〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈、百寮踏其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰概能佐烏麼志、○下略

〔夫木和歌抄十四秋〕西園寺入道太政大臣家三十首　後九條内大臣

くれかゝるみねのこずゑやのゆふしもにたれこら雲の衣うつらん

〔改正月令博物筌九月〕秋霜あきのしも霜は冬也、暮秋に漸霜初るゆへ、秋の霜、秋の初霜など云、

〔古今和歌集五秋〕白菊の花をよめる　凡河内躬恒

心あてにをらばやをらんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

〔源氏物語三十藤袴〕九月にもなりぬ、はつ霜むすぼほれ、えんなる朝に、例のとりどりなる御うしろみどもの引そばみつゝもてまいる、

〔夫木和歌抄十四秋霜〕六百番歌合秋霜○中略　中宮權大夫家房卿

秋の野のちぐさの色もかれあへぬにつゆをきこむるよはのはつ霜

名稱

霜

霜ハ、シモト云フ、水氣ノ凝結シテ小片ト爲リタル者ニシテ、冬季ニアラズシテ降ルヲ變異トセリ、

〔倭名類聚抄 一風雪〕霜　陸詞切韻云、霜凝露也、音蒼、和名之毛

䨮　說文云、䨮早霜也、丁念反、和名八豆之毛

〔箋注倭名類聚抄 一風雨〕按、玉篇、霜露凝也、陸氏蓋本レ此、說文霜喪也、成レ物者、釋名霜喪也、其氣慘毒、物皆喪也、

〔段注說文解字 十一下雨〕霜喪也、以二疊韵一爲レ訓、成物者豳風九月肅霜、傳曰、肅縮也、霜降而收二縮萬物一、秦風白露爲レ霜、傳曰、白露凝戾爲レ霜、然後歲事成、按、霜雨露皆所二以生一レ物、雪亦所二以生一レ物、而非レ殺レ物者、故其用在レ霜、殺レ物之後、詩言雨雪雰雰、益レ之以二霢霂一、生二我百穀一、其殺也、惟霜爲レ能斂二萬物之用一、許列字皆靁爲レ動二萬物一者、莫レ病乎此也、次レ之以レ雪、乃次レ之以レ霝、霽二冬雪一、而後春雨也、次レ之以レ露、露春夏秋皆有レ之、秋深乃凝霜也、次レ之以レ霜、而歲功成矣、歲功以レ雪始、以レ霜終、从レ雨相聲、所莊切、十部、

〔類聚名義抄 七雨〕霜 音蒼　シモ、　霑 音店、又下啖反、ハツシモ

〔日本釋名 上天象〕霜 シモ　下にあるの義也、霜滿天などいへ共、かたちのみゆるは下にあり、又高山に霜なし、一說にしは白也、もはさむき也、むともと通ず、白してさむきなり

〔東雅 一天文〕霜シモ　義不詳、東北の地方にて、冬の空のきはめてさえぬる夜に、降れる霜の、木末垣ほなどに、悉皆花をなしぬるを、シラボといふものは、即是霜華なり、シラボとはシモといふ語の轉じたるなり、其語方言には出たれど、シモといひしは、其色の白きに因れりといふ事の、徵とするには足りぬべきなり、或說に、シモとはシムなり、寒き事の身にシムをいふなりなどいふは、いかゞあるべき、

〔倭訓栞 前編十一〕しも　霜は𛀁ぼむ義、草木霜にあふて凋零するをもて名くる成べし、又𛀁むの義肅殺の氣をもていへり、

云ヘル東海ノ瀛洲ノ上ニ、有神足玉石、味如酒、一名ハ玉醴亦酒、兼名苑ニ見タリ、仙藥ナリト云ヘドモ、甘露ニハコトナラザル歟、漢武帝ノ時、東方朔ガ玄黄青ノ露ヲ、瑠璃ノ盤ニイレテタテマツル、コレヲナムルモノ、ミナワカクシテ、病イユト云フ事アリ、又武帝承露盤ヲツクツテ、仙人掌ニ玉杯ヲサヽゲテ、雲表ノ露ヲウクト云ヘリ、此露モ甘露ノタグヒ歟、漢孝宣帝元康二年ニ、甘露クダルト云ヘリ、明帝ノ永平十七年ニモ頻リニ甘露ヲクダセリ、日本ニハ天武天皇七年十月ニ、綿ノ如キモノ難波ニフレリ、長サ五六尺、廣サ七寸、風ニ隨テ松林及ビ葦原ニ飄ル、時ノ人甘露ト曰ト云ヘリ、日本紀ニ見エタリ、コヽロエヌ物ノスガタニヤ、慈覺大師如法經書キ始給シニモ、喜見城ノ天甘露ヲ、夢ノ中ニナメテ、身モツヨク病イエ給ケルトカヤ、其甘露ノスガタハ□瓜ニゾ似タリケル、

〔日本書紀二十九天武〕七年十月甲申朔、有物如綿、零於難波、長五六尺、廣七八寸、則隨風以飄于松林及葦原、時人曰、甘露也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年五月庚申、長門國言甘露降、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月壬辰、伯耆國言、甘露降、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月戊戌、石見國言、甘露降、

〔文德實錄二〕嘉祥三年七月乙酉、石見國獻甘露、味如飴餹、

〔文德實錄四〕仁壽二年四月癸巳、大和國言、紫雲見、是月甘露降於京師樹上、及大和、越前、加賀、但馬、因幡、伯耆、隱岐、播磨、長門等九國並言、甘露降、

〔文德實錄七〕齊衡二年七月丁未朔、紀伊守從五位下紀朝臣眞高獻甘露、

〔文德實錄八〕齊衡三年四月庚辰、駿河國言、甘露降、

色付相、秋之露霜、莫零、妹之手本乎、不纏今夜者、　讀人しらず

〔古今和歌集秋四〕題しらず

萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

露時雨

〔改正月令博物筌九月〕露時雨 露がおきまさりて、葉すそも袖も濡れば、つゆも時雨のやうに思はるゝゆへ、露時雨といふ、和歌にはつゆとしぐれわかつこゝろもよみたり、(中略)侍、游墨のやつれや松の露時雨、北枝、蓮二、ぬれまさる森の小宮や露しぐれ、

雜載

〔續古今和歌集十九雜〕中務にかゝせられける御草子のおくに、玉ざゝのはわけにやどる露ばかり

とかきて侍ければ、　天暦贈太皇太后宮

みれどなを野べにかれせぬ玉ざゝの葉分の露はいつもきえせじ

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみ出て、いとくらきにきけり、○中略やう／＼夜も明ゆくにみれば、ゐてこし女もなし、あしずりをしてなけどもかひなし、

しら玉かなにぞと人のとひしとき露とこたへて消なまし物を

〔枕草子六〕あはれなる物、秋ふかき庭のあさちに、露のいろ／＼玉のやうにてひかりたる、

○

甘露

〔倭名類聚抄一風雪〕露○中略 白虎通云、甘露美露也、降則物無不美盛矣、

〔類聚名義抄七雨〕甘露アマキツユ

〔延喜式二十一治部〕祥瑞 甘露美露也、神靈之精也、凝如脂、其甘如飴、一名膏露、○中略 右上瑞

〔塵袋一〕甘露ト云フハ何ナル物ゾ、草ニヲク露ニシテアマキカ、

初學記ニ甘露ハ仁澤也、其凝コト如脂、其美コト如飴、一名ハ天酒ト云ヘリ、東方朔ガ神異經ニ、西北ノ海外ニ有人、長ケ二千里、兩脚中間相去千里、腰圍六百里、但日飲天酒五斗ト云ヘリ、又王褒ト

て、露のこりて霜となるほどの名なり、これをば霜をにごりていふべし、

〔冠辭考六〕つゆじもの（おきてしくれば）　万葉卷二に、（人麻呂の妻に別て石見より上る時）露霜乃、置而之來者云々、こは常あるつゞけ也、さて露じものしを濁るべし、此反歌にもみちばの散のまがひにとよみたれば、秋ふけてなかば霜を兼たる露をいふべき也、さらずば白露の、おく霜のなどもいひて、わづらはしく露霜と重ねじかし、古今集に萩が花散らんをのゝつゆじもにとよめるもしか也、

〔玉勝間十四〕萬葉集の露霜　萬葉集の歌に、露霜とよめる、卷々に多し、こは後の歌には、露と霜とのことによめども、萬葉なるは、みなたゞ露のこと也、されば七の卷、十の卷などには、詠露といへる歌によめり、多かる中には、露と霜と二つと見ても、聞ゆるやうなるもあれど、それもみな然にはあらず、たゞ露也、これにさま〳〵說あれども、皆あたらず、そも〳〵たゞ露を、露霜といはむことは、いかにぞや聞ゆめれども、此名によりて思ふに、志毛といふは、もとは露をもかねたる總名にて、其中に氷らであるを、都由志毛といひ、省きて都由とのみもいへる也、そは都由は粒忌のよしにて、忌とは淸潔なるを云、雪の由も同じ、さればつゆしもとは、粒だちて淸らなる志毛といふことにぞ有ける、

〔物類稱呼一天地〕霜しも　關西にて露霜（いまだ霜の形をなさゞるをいふ）といふを、關東にて水霜といふ、なを說有略す、

〔萬葉集七雜歌〕詠露

烏玉之、吾黑髮爾、落名積、天之露霜、取者消乍、

〔萬葉集八秋雜歌〕內舍人石川朝臣廣成歌二首

妻戀爾、鹿鳴山邊之、秋芽子者、露霜寒、盛須疑由君、

〔萬葉集十秋相聞〕寄露

ひかりありとみし夕がほのうは露はたそかれ時のそらめ成けり、とほのかにいふ、

〔夫木和歌抄雜十三〕正治二年百首　正三位季經卿

みやぎ野の小萩を分て行水や木の下露のながれなるらん

〔萬葉集相聞四〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首○中略

吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨、

〔夫木和歌抄枯野十六〕老若五十首歌合　前大納言忠良卿

うらがるゝ野べの草ばの霜とけてあさ日にかへる秋の白露

〔凌雲集〕令製五首　九月九日侍讌神泉苑各賦一物得秋露應製、

蓐收警節秋云老、百卉初腓露已凄、池際凝荷殘葉折、岸頭洗菊早花低、未央闕側承雙掌、長信宮中起雙啼、謬忝恩筵何所賦、晞陽湛々被群黎、

〔萬葉集秋雜歌八〕三原王歌一首

秋露者移爾有家里、水鳥乃青羽乃山能色付見者、

〔宜禁本草乾玉石金土木〕秋露水　甘平無毒、在百草頭者、愈百疾、止消渇、栢葉上露明目、

〔萬葉集抄十〕露霜と云事、先達の料簡まち〱也、或は露をつゆしもと云、霜は露のなる物なれば、露をつゆしもといふといへり、これは四中説果の義にあたれり、或は霜をつゆしもと云、露凝成霜故也、これは從本立名の心也、或は九月ばかりの寒露をいふ、露の霜に成ほどなれば、露霜と云、霜にもなりはてず、なを露にて、又露にもあらぬほど也、是は中間の位にあたれり、三の義の中には、此義甚深也、又今の歌のごとくならば、只露と霜とにかなへりといへる義也、

〔圓珠庵雜記〕露霜といふにふたつあり、ひとつには露と霜となり、常のごとし、ふたつには萬葉第七同第十に詠露といふ題に、露霜とよみ、その外露霜さむみなどあまたよめるは、秋の末に至り

〔類聚名義抄七雨〕露 音路 ツユ

〔東雅一天文〕露ツユ　義不詳、萬葉集抄には、ツといふは水なり、水の白きをツユといふと見えたり、(中略)ツユとは、そのツブ〳〵として、白ないひしも知るべからず、粒をツブといふも、ツといひしには、圓ツブラなる義ありしに似てけり、古訓に圓、讀てツブラといふなり、

〔倭訓栞前編十六都〕つゆ　露をいふ、つは粒也、ゆは齋也、粒々潔白なるをいへり、玉篇に、天之津液下潤萬物者也、露は置といひて降とはいはず、

〔八雲御抄三上天象〕露　朝　ゆふ　しら　うは　した　はのぼる(地よりあがるなり)　万には、ゆふべにをきて、つとめてきゆとよめり、後撰に、野べの秋はぎみがく月夜とよめるは露の心なり、　つゆのかごとは、かこつといふこゝろ也、　つゆけきはしげきなり　しげきたまともいふ　後撰に、をきつめはと云り、　露霜ふりなづむといへり、万歌也、　涙によするなり　春もよめど、夏秋の物なり、

〔夫木和歌抄十三露〕千五百番歌合　家長朝臣
みせはやなあかつき露のをき別篠分るあさの袖のけしきを(中略)

秋御歌中　花山院御製
萩の花さきみだれたる玉ぼこの朝の露は色ことにみゆ

〔夫木和歌抄十三露〕文治二年百首　定家卿
ふぢばかまあらぬ草葉もかほるまで夕露しめる野べの秋風

〔源氏物語四夕顔〕かほは猶かくし給へれど、女のいとつらしと思ふべければ、げにかばかりにてへだてあらんも、ことのさまたがひたりとおぼして、
ゆふ露にひもとく花は玉ぼこのたよりにみえしえにこそありけれ、露のひかりやいかにとの給へば、しりめにみをこせて、

物のいきばりあがるといふも、皆氣のおこり立事にて同じ古言也、さてこのほは、もと濁音なるを、後世は乎利の如く唱ふるは音便也、はの濁りを乎といふ類有ことぞ、また五百露を略きて、伊穗理といふにも有べく、何れにも理り聞ゆ、

○

もや

〔倭訓栞前編三十三〕もや　俗に霧をいへり、蝦夷の俗も亦同じといへり、又もよひともいへり、

〔改正月令博物筌三秋〕霧（中略）立は霧也、降は雺也、天氣下り地應ぜざるを雺と云、散して應ぜざるを霧といふ、皆露の變ずるものなり、

〔和漢三才圖會三天象〕雺音蒙　霧音務俗作霚、雺、和名岐利、霧俗云毛也、○中略　按、雺霧二種皆露之變者、秋月盛、而其降也、有朝與夕、○中略　雺凋落枝葉、霧凋枯根莖、故農人最畏霧、○中略　霧自地升、略似煙、近山麓處霧多也、凡秋冬不晴不陰、朦朧而稍温則爲雺霧兆、

露　甘露併入

露ハ、ツユト云フ、夏秋ノ夜間、水氣ノ凝リテ小圓ト爲リタル者ナリ、

甘露ハ、アマキツユト訓ズ、降レバ以テ祥瑞トセリ、

名稱

〔倭名類聚抄一風雨〕露　三禮義宗云、白露八月節、寒露九月節、音路、（中略）和名豆由

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕三禮義宗三十卷、梁崔靈恩撰、見隋書唐書、今無傳本、太平御覽引云、九月寒露爲節、不及白露、按、玉燭寶典引蔡邕月令章句云、今曆中秋白露節、即此事、說文、露潤澤也、釋名、露慮也、覆慮物也、詩蓼蕭箋、露者天所以潤萬物、

〔段注說文解字十一下雨〕露潤澤也、澤與露疊韵、五經通義曰、和氣津凝爲露、蔡邕月令曰、露者陰之液也、按露之言賂也、故凡陳列表見於外曰露、亦段路爲之、如孟子神農章露字作路是也、从雨路聲、洛故切、五部、

霧以處爲名

〔萬葉集十秋相聞〕寄雨
九月、四具禮乃雨之、山霧、烟寸吾告胸、誰乎見者將息、
〔千載和歌集冬六〕宇治にまかりて侍ける時讀る　中納言定賴
朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵に顯れ渡るせゞのあじろ木

霧以色爲名

〔日本書紀皇極二十四〕二年正月壬子朔、一色青霧周起於地、
〔日本紀略陽成一〕昌泰二年七月一日壬辰、巳剋黃霧四塞、赤日無光、〇赤日當作日赤

雜載

〔改正月令博物筌三秋〕霧(中略)きりの色は、物をへだてたるをいふ、霧の海、渺々たる海のごとくなるを云、きりの香は霧に香あり、きり立は、へだてたる人をいふ、霧の嘆は、きりの立たる跡に、物のぬるゝ事をいふ、霧の下道は、きりの立たる下の道を行る也、川ぎりは川に立たる霧なり、きり雨は、小雨のごとくふる霧をいふなり、
〔肥前風土記基肄郡〕昔者纒向日代宮御宇天皇、〇景行巡狩之時、御筑紫國御井郡高羅之行宮、遊覽國內、霧覆基肄之山、天皇勅曰、彼國可謂霧之國、後人改號基肄國、今以爲郡名、
〔播磨風土記賀毛郡〕小目野、右號小目野者、品太天皇、〇應神巡行之時、宿於此野、仍望覽四方、勅云、彼觀者海哉河哉、從臣對曰、此霧也、爾時宣云、大體雖見無小目哉、故號曰小目野、
〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年正月三日辛巳、日色變赤、西京三條降霧陰霾、往還之人、不辨其形、須臾開霽、日色復常、
〔松屋筆記八十五〕霧に酔るを治方〇中略　丹波わたりにては、霧にあたりて死すものおほし、それには藥燕脂とて、べにの下品なるを多くのめば解すといへり、平常のべににてもおなじ事也、
〔萬寳鄙事記六占天氣〕霧はれがたきは雨となる　きりの内は風なし、きりのはるゝ時かせふく、
〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之
國津神波、高山之末、短山之末爾上坐氏、高山之伊穗理、短山之伊穗理乎、撥別氏所聞食武、
〔祝詞考中〕伊穗理は、その山の氣騰と云言を略たるにて、卽雲霧の事也、常に烟にいぶりといひ、

霧以時爲名

むら雨の露もまだひぬ槇の葉に霧立のぼる秋の夕ぐれ

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、然後伊弉諾尊曰、我所生之國、唯有朝霧、而薫滿之哉、乃吹撥之氣、化爲神、號曰級長戸邊命、

〔源氏物語三十九夕霧〕きりのたゞ此軒のもとまでたちわたれば、まかでんかたもみえずなりゆくは、いかゞすべきとて、

山里の哀をそふる夕ぎりにたちいでん空もなきこゝちして

ときこえ給へば、

山がつのまがきをこめてたつ霧も心空なる人はとゞめず、ほのかにきこゆる御けはひになぐさめつゝ、まことにかへるさわすれはてぬ、

〔萬葉集九雜歌〕舍人皇子御歌一首

黑玉夜霧立、衣手、高屋於、霏霺麻天爾、

〔古今和歌六帖一天〕きり

しぐれにも雨にもあらぬ初霧のたつにも空はかきくもりけり　　みつね〇原闕作者、今依二一本一補、

〔夫木和歌抄十三霧〕程へて有ける人によみける　　謙德公

心みに我戀めやはをともせでふる秋ぎりにぬるゝ袖かな

〔古今和歌集四秋〕題しらず　　よみ人しらず

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧の上に

〔神皇正統記六後醍醐〕さても八月〇延元四年の十日あまり六日にや、秋霧におかされさせたまひて、かくれましく/\ぬとぞきこえし、

〔改正月令博物筌三冬〕冬霧　秋の霧ほどにふかくはあられど、冬のきりはとかく水ぎはに立也、

〔和漢三才圖會天象三〕雺(音蒙)　霿(音蒙)俗作霧(和名紀利、雺俗云毛也、)　陰陽亂爲霿氣、蒙冒覆地之物也、爾雅云、地氣發天不應曰霿、天氣下地不應曰雺、凡重霿三日內必大雨、其雨未降則霿不可冒行也、○中略　按、雺霿二種皆露之變者、秋月盛而其降也有朝與夕、甚多則菜蔬草木凋枯、烈於霜雪也、雺凋落枝葉、霿凋枯根莖、故農人最畏霿、　雺自天降下、略似雲、凡雺如登山則晴、如下里則雨、霿自地升、略似煙、近山麓處霿多也、凡秋冬不晴不陰、朦朦而稍溫則爲雺霿兆、

〔日本書紀神代一〕天照大神、乃索取素戔嗚尊十握劍、打折爲三段、濯於天眞名井、𪗾然咀嚼、(𪗾然咀嚼、此云佐我彌爾加武、)而吹棄氣噴之狹霧、(吹棄氣噴之狹霧、此云浮枳于都屢伊浮岐能佐擬理、)所生神、號曰田心姬、次湍津姬、次市杵島姬、凡三女矣、

〔古事記上〕故其日子遲神和備氐、(三字以音)自出雲將上坐倭國而束裝立時、片御手者、繫御馬之鞍、片御足踏入其御鐙而歌曰、○中略　那賀那加佐麻久、阿佐阿米能、佐疑理邇多多牟叙、和加久佐能、都麻能美許登、許登能、加多理基登母、許遠婆、

〔萬葉集七雜歌〕詠月
眞十鏡、可照月乎、白妙乃、雲香隱流、天津霧鴨、

〔千載和歌集四秋〕題志らず　　藤原伊家
秋山のふもとをこむるうす霧はすそ野の萩の籬なりけり

〔萬葉集十二相聞〕寄物陳思
思出、時者爲便無、佐保山爾、立雨霧乃、應消所念、

〔萬葉集略解十二〕霧の深きは、小雨の如くなるものなれば、雨霧ともいふべし、さて忽に晴るゝものなるを以て、消といはん料におけり、

〔新古今和歌集五秋〕五十首歌たてまつりし時　　寂蓮法師

〔東雅（天文一）〕霧キリ　キリといふも亦暗の義なり、舊説にキリとは、タロの轉語也と云へり、（キはタと同韻にして、リはラロ等の同韻なるをいふなり、）日向國風土記に、昔天孫の尊、此國高千穗二上之峯に天降給ひし時に、天暗冥にして晝夜を別たず、その土蜘蛛二人が敎のまゝに、稻千穗をぬきて、籾となして投散し給ひしかば、天開晴を得たり、これに因りて高千穗二上の峯といふよしを志るせり、其峯は即今霧島が嶽といふものにて、延喜式に見えし霧島神社、猶今も其峯の西にあるなり、さらば舊説の如き其義相合へりと見えたり、（俗讀てマギルといふも、またこれ日暮の義なり、（マギル、イキ））

〔倭訓栞（前編七）〕きり　霧はいきるの義也、欝蒸の氣をいふ、万葉集に白氣もよみ、春日の霧流と見えたり、朝ぎり、夕ぎり、八重ぎり、天津きり、夏ぎり、夜ぎり、天のさぎり、山ぎり、うき霧、はつぎり、薄ぎり、川ぎりなどよめり、秋をもとゝして四時にわたりて歌にもあり、霧の浮浪、霧の海、霧の籬などは、皆見たてたる詞也、七夕に霧の戸ばりとよめるも同じ、詩にも霧幕など作れり、

〔八雲御抄（三上天象）〕霧　あさ　夕　うす　秋　あま　川　山　あまつ　万に夜霧とよめり　ほのゆける（霞の名也〇一本不記細註）　万にゆふべにたちて、あしたにうすと讀り、　後撰に秋ぎりのあたると云　あまのさぎり（天きり日本紀）　万にはる山の霧にまどへるうぐひすと云、詩にも作也、万あしのはにゆふぎりたちて、　万にたなびくとよめり、霧は病名也、仍得心詠べし、　又なげきの霧ともいへり　いさらなみ（是は霧名也）　夏霧（在万葉）　秋ぎりにぬるとは、秋ぎりにぬれし衣をほさずしてと、古歌にあり、

〔塵袋（一）〕一蒙霧ト云フハ、キリヲカウブルクラキキリ歟、打任テハ、クラキ心、蒙昧ナド云フ同ジテイノ事歟、但シ甘泉賦ニ霧集（ノ細ニ）テ而蒙合（ノ細ニ）ト云ヘリ、注ニ霧ヲバ地氣ト釋シ、蒙ヲバ天氣ト云ヘリ、サレバ蒙ハ天ヨリフルキリ、霧は地ヨリタツキリナルベシ、是ハツチノ心ニハタガヒタルニヤ、

名稱

霧　もや　併入

霧ハ、キリト云フ、人目ヲ遮ギル所ノ水氣ニシテ、霞ニ比スレバ稍濃厚ナルモノナリ、

モヤハ、霧ノ類ナリ、

〔倭名類聚抄一雲雨〕霧　爾雅云、地氣上天曰霧、亡遇反、與務同、和名岐利　今按、水氣也、老子經云、在天爲霧露、在地爲泉源是也、兼名苑云、一名霿、音蒙、一名雺、音分、水氣著樹木爲雺也、

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕說文、霚地氣發天不應、釋名、霧冒也、氣蒙亂覆冒物也、按、與務同、謂其音與務字同、非曰霧務同字也、下皆效此、曲直瀨本亡遇反、與務同、作音務二字、按、岐利、遮隔之義、其原與切同語、爾雅又云、天氣下地不應曰霿、霧今本誤霚、今從說文正、霿釋名作蒙、云日光不明、蒙々然也、霿、今俗呼毛也、按、岐利曰發、訓多都、毛也曰下、俗訓於利留、是可以證毛也之爲霿也、古併云岐利、無有分別、廣本無又字、曲直瀨本老子經作老子注、按、老子注二卷、舊題漢河上公撰、此所引易性章注文、則作注爲是、然車具福條引河上公注、亦不云注、又本書引用他書注、多不云注者、此作注、恐係後人改竄、今不徑改、○中略按、說文、雺籒文霚省、五經文字、霚雺霧、上說文、中籒文、下經典相承隸變、則雺霧同字、兼名苑以雺爲霧一名者誤、又按、玉篇、雺霧氣也、釋名、氛粉也、潤氣著草木、因寒凍凝、色白若粉之形也、雺氛同字、見說文、依釋名所說、雺是霧凇、春秋成公十六年正月雨木氷之類、與霧不全同、故玉篇云、霧氣也、不直云霧也、以雺爲霧一名、亦非是、水氣以下八字、蓋兼名苑注文、其說本釋名也、

〔段注說文解字十一下〕霚地气發天不應曰霚、霚曰霚二字今補、霚今之霧字、釋天曰、地氣發天不應曰霧、霧者俗字、霧一本作霿非也、釋名曰、霧冒也、氣蒙冒覆地之物也、開元占經引元命包、陰陽亂爲霧、从雨、亦雨之類也、故从雨、地气發而天應之則雨矣、敄聲、亡遇切、古音在三部、敄从矛聲、故霚讀如矛、

〔類聚名義抄七雨〕霚音蒙キリ　霧音務キリ　霿正

〔下學集上天地〕雺キリ　霧　霚三字義同

〔日本釋名上天象〕霧　きはけ也、きとけと通す、氣降也、ふを略す、

遙望、願東而勅侍臣曰、海郎青波浩行、陸是丹霞空朦、國在其中、朕目所見者、時人由是謂之霞郷、

○

〔倭訓栞 前編也 三十四〕やけ　全浙兵制に霞を譯せり、今も日やけなどいへり、

〔日本風土記 四天文〕霞 下吉　やけ

〔改正月令博物筌 三春〕霞（あかね）是は詩につくるかすみなり、本朝俗にいふ朝やけ、夕やけの事也、日ので るとき、東の方赤くしてきへざるは旱也、早くきゆるは雨ふる也、そら一面にあかきは、二三日の内に雨ふるなり、日の入りて、西赤く南へまはるは晴るなり、

〔改正月令博物筌 三秋〕秋霞（あきのかすみ）朝毎に東のかた灼々とすこしくやければ、陽氣のさかんなるなり、つづいて日和よし、朝天雲のやけるを朝やけといふ、二三日のうちに雨になる、夕やけ、西あかくて北へまはれば、つきて日和よし、霞の事、春の十六丁めに委し、

〔梅園日記 一〕朝あけ　七玉集に、家良、山のはもかすむと見ゆる朝。あ。けにやがてふりぬる春雨の空、按ずるに、朝あけのあけはあかきをいふ、今いふ朝やけなり、あの聲のやのごとく聞ゆるは、歌合、根合などのたぐひ也、又新撰六帖に、衣笠内大臣、山のはにほてりせる夜はむろの浦にあすは日よりと出る船人、とよみ給へるは、夕。あ。けにや、されば朝あけは雨、夕あけは日よりと、ふるくよりいへる諺なるべし、唐國にても、范成大石湖居士詩集の題に、曉發飛鳥、晨霞滿天、少頃大雨、呉諺云、朝霞不出門、暮霞行千里、驗之信然、　升菴集に、素問云、按、素問六元正紀大論、倒此二句、霞擁朝陽、雲奔雨府、楚辭云、紅蜺紛其朝霞、夕淫淫而淋雨、唐詩云、朝霞晴作雨、俗諺云、朝霞不出市、　升菴外集に、儲光羲詩、落日燒霧明、農夫知雨止、耿緯詩、向月微月在、報雨早霞生、○中略　また朝やけ夕やけともいふべくや、○中略上に引る衣笠大臣の御歌、山のはにほてりせる夜、とよませ給ひしは、夕あけにはあらぬにや、さらば田家五行に、日沒返照主晴、俗名日返塢と、是なるべし、

こはかとなう、けふりわたれるほど、ゑにいとよくもにたるかな、かゝる所にすむ人、心に思ひのこすことはあらじかとのたまへば、○下略

〔萬葉集九相聞〕大神大夫任長門守時、集三輪河邊宴歌二首、○中略
於久禮居而、吾波也將戀、春霞、多奈妣久山乎、君之越去者、

〔萬葉集十春雜〕久方之、天芳山、此夕、霞霏微、春立下、
右柿本朝臣人麿歌集出

〔古今和歌集一春〕題しらず　在原行平朝臣
春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

〔玉葉和歌集二春〕暮春歌とて　式子內親王
くれてゆく春の殘りをながむれば霞のそこに有明の月

〔續千載和歌集一春〕弘徽殿女御の歌合に　相摸
春のこし朝の原の八重霞日をかさねてぞ立まさりける

秋霞

〔八雲御抄三上天象〕霞○中略　秋もよめり　万に、ほのうしきりあひといへり、夏もいつも風しづかなる朝によむべしと、俊成いへり、七夕にも、霞たつとよめり、

雜載

〔萬葉集二相聞〕磐姬皇后思天皇御作歌四首○中略
秋之田、穗上爾霧相、朝霞、何時邊乃方二、我戀將息、

〔肥前風土記松浦郡〕賀周里在郡西北　昔者此里有土蜘蛛、名曰海松橿媛、纏向日代宮御宇天皇○景行巡國之時、遣陪從大屋田子日下部君等祖也誅滅時、霞四合不見物色、因曰霞里、今謂賀周里訛之也、

〔常陸國風土記行方郡〕郡南二十里香澄里、古傳曰、大足日子天皇○景行登坐下總國印波鳥見丘、留連

日とも、豐旗雲に入日刺などもいひしもの是也、今俗にアサヤケ、ユフヤケなどもいふなり、カスミといひしは赤彩(カシ)なり、萬葉集抄にカといひしは、赤き義なりといひ、赤色をアカといふ、アは發語の詞なり、カはヤクといふが如し、其色の火の燒るが如くなるなり、ヤクといひ、ヤケといふ語を合て呼ぶときは、カといふ言葉になるなり、俗に霞をヤケといふも、また此義なり、日本紀には、彩、讀てシミといふは、卽染(シミ)也、シミといひ、スミといひ、ソミといふ、皆轉語なり、萬葉集の歌に、染、讀てシミといひけり、

〔倭訓栞前編加六〕かすみ　霞をよめり、赤染(アカソメ)の義也、唐韻に日邊赤雲也と見えたり、あかねさす日といへるも此義也といへり、烟も同じ、うすかすみを薄烟といふ、全浙兵制に、霞をやけと譯せしも亦此義也、俗に朝やけ夕やけなどいへり、秋に霞を詠ずる事萬葉集に見え、文選の詩に輕霞冠秋日とも見えたり、歌に多く春霞などいへるは霞にあらず、靄字を用べしといへり、靄しくといふ辭は、喜撰式に春をいふと見えぬれど、萬葉集にも見えず、中比より人の好みよむ言葉となれりとぞ、歌に霞の衣、霞の袖、霞の窓、霞の籬、霞の沖、霞の網、霞の波、霞の水尾などよめるは、皆見たてたる詞也、菅文姬が詩に、霞衣曾惹御爐香とも見えたり、

〔八雲御抄三上天象〕霞　あさ　ゆふ　うす　春　八へ(八重霞は只深也、必非二八重一、一切物重多限を號二八重一、霜八たびも物限也、算術にも以二九々八十一一爲二員限一云々、〇中略)霞のころもは本文也　詩にもあり　又万に　霞ゐる　霞ながる丶　ながる丶かすみといへり　玄まひね霞也　万にこのは玄のぎて霞たなびく　霞か丶るといふ事　高陽院歌合に、顯綱歌を經信不審する也、　もずのくさぐきは霞なりと、俊頼いへり、　それも一定け色なし、げにもそら事とおぼえたり、

〔古事記中應神〕於レ是有二二神一、兄號二秋山之下氷壯夫一、弟名二春山之霞壯夫一、

〔枕草子十一〕日はうら丶かなれど、そらはあさみどりにかすみわたるに、女房のさうぞくの匂ひあひて、いみじきおり物の色々のから衣などよりも、なまめかしうをかしき事かぎりなし、

〔源氏物語五若紫〕うしろの山にたち出て、京のかたをみ給ふ、はるかにかすみわたりて、四方の梢そ

名稱

梅雨の後、白雲たかくして峯のごとく綿のごとくにわき出るは、雨止みたるしるしなり、　雲やぶれ、車のかたちしたるは、やがて大風ふく、西より東に高く行雲、白くして綿の如くなるを、すがいといふ、四時ともに晴天に有、此雲は天氣のかんがへには加へざるがよし、秋西風にては雨ふるといへども、此雲にはかゝはらず、　日入て後赤雲四方にありて、天をてらすは大ひでり也、

霞　やけ　併入

霞ハ、カスミト云フ、水氣ニシテ秋季ニモアレド、古來專ラ春季ニノミ云ヘリ、

ヤケハ、アケノ轉語ニシテ、日出前、若シクハ日沒後、空ノ日ニ映ジテ、紅色ヲ呈スルヲ云フ、

〔倭名類聚抄一雲雨〕霞　唐韻云、霞赤氣雲也、胡加反、和名加須美

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、加須美、與訓幽爲加須加、訓掠爲加須牟同語、謂不明了也、今俗謂作字墨汁枯渴爲加須留、亦同、○中略　廣韻赤氣下有雲爲二字、太平御覽引釋名云、霞、白雲映日光而成赤色、假日之赤光而成也、故字从叚遐聲、按、說文無霞字、古謂之瑕、瑕、玉小赤也、上林賦、赤瑕駁犖、甘泉賦、吸清雲之流瑕兮、李善曰、霞與瑕古字通、顏師古曰、瑕謂日旁赤氣也、又按、霞日旁形雲、所謂朝霞暮霞、今俗呼阿佐也計、由不也計者是也、又加須美、謂春日靄氣、非赤氣雲、皇國古書、皆以霞爲加須美、其實非也、明皇十七事云、玄宗入斜谷也、早、烟霞甚晦、所謂烟霞、正斥加須美也、

〔類聚名義抄七雨〕霞　音遐　緅　赧　カスミ　霞俗

〔日本釋名上天象〕烟カスミ　春かすみたてば、野も山もあらはに見えず、かすかに見ゆる也、

〔東雅一天文〕霞カスミ　義未詳、倭名鈔には唐韻を引て、日邊赤雲也と註しぬ、說文に、雲日氣相薄とも見えて、則晨霞暮霞など云ひしものにて、此にしても朝かすみ夕かすみなどもいひ、又茜さす

夕暮は雲のはたてに物ぞ思あまつ空なる人をこふとて

〔夫木和歌抄雲十九〕百首歌、あた雲　慈鎮和尚

月のまへに時雨すぎたるあた雲をはらふならひは秋の山風

〔枕草子十〕雲は　しろき、むらさき、くろき雲哀也、風ふく折の天雲、明はなるゝほどの黒き雲の、やうやうしろふなりゆくもいとをかし、朝にさる色とかや、ふみにもつくりけり、月のいとあかき面に、薄き雲いとあはれ也、

〔萬寶鄙事記占天氣六〕雲ひがしへゆけば晴る、西へゆけば雨ふる、東南のかたへ行ばはるゝ、是西北風なる故也、京都にては雲濟水のかたへ行ば必はるゝ、　乾の方雲あかくしてやうやくきゆるは晴、赤くして又色變ずるときは風雨なり、　魚の鱗のごとくなる雲あるは雨、又は風ふく、又ところどころに虎ふのごとく、こまかに横にすぢある雲たつは、是を水まさと云、此雲見るゝかならず一兩日に雨ふる、　又かた雲といふ有、鹽のひかたのごとく、滿天に大なる横すぢ有、これも又やがて雨ふる、　雲氣みだれとぶは、大風ふかんとする也、雲の來る方より、烈風ふき來る、其方の防をすべし、　雲甚だあつくして濕ふは大雨　日の上下に雲氣有て、龍のごとく見ゆるは、かならず風雨、　朔日、十五日、七八日、廿三四日、晦日、雲氣四方にふさがるは雨、　久しく日てりて赤雲天を過て、山谷をかゞやかすは明る日雨、　秋の空に雲有て、縱くもりても風なければ雨なし、又東の方に雲を生ずるときは雨、　雨やみ雲晴るとも、山頭を雲おほひかくす時は又雨ふる、朝日の上に黒雲有て、霧の如く日をおほひ、日の光かたはらに射て、うすく黄白色なるは、其日風雨有、暮つかた日いる時にかくのごとくなれば、其夜風雨あり、　朝東南に雲有ても、西北に雲なければ雨なし、暮にも又西北を見て雲なければ雨なし、　上風吹て雲ひらくとも、下風雲あらば又雨、　朝夕ともに雲ありても、段々になりて分明なるは晴、　朝西にむらさきの雲たつは晴

雲戰

〔當代記〕慶長十四年四月四日乙卯、未剋ヨリ申剋まで、白雲一筋東西聳、長サ無計、从東ヨリ先消、去天正十一年癸未四月上旬、如此之有天變、其時ハ北ヨリ消、十二三日經テ、於江北秀吉公與柴田合戰、越前衆敗北、則柴田滅亡也、

〔武江年表七〕享和三年五月五日黃昏、西より東へ一筋の赤雲横たはる、

文化元年二月十七日、晝四時頃、西南より東北へ白き旗雲出る、

〔日本書紀一神代〕是時素戔嗚尊自天而降、到於出雲國簸之川上、〇中略時素戔嗚尊乃拔所帶十握劍、寸斬其蛇、至尾劍刃少缺、故割裂其尾視之、中有一劍、此所謂草薙劍也、(中略)一書曰、本名天叢雲劍、蓋大蛇所居之上、常有雲氣、故以名歟、

〔古事記上〕故是以其速須佐之男命、宮可造作之地求出雲國、〇中略茲大神初作須賀宮之時、自其地雲立騰、爾作御歌、其歌曰、夜久毛多都、伊豆毛夜幣賀岐、都麻碁微爾、夜幣賀岐都久流、曾能夜幣賀岐袁、

〔古事記傳九〕夜久毛多都は彌雲起にて、彼雲の立騰るを、打見給へる隨に詔へる御詞なり、夜は彌にて、幾重も立疊なる意ぞ、

〔出雲風土記〕所以號出雲者、八束水臣津野命詔、八雲立詔之、故云八雲立出雲、

〔古事記中神武〕故天皇崩後、其庶兄當藝志美美命、娶其嫡后伊須氣余理比賣之時、將殺其三弟而謀之間、其御祖伊須氣余理比賣患苦、而以歌令知其御子等、歌曰、佐韋賀波用、久毛多知和多理、宇泥備夜麻、許能波佐夜藝奴、加是布加牟登須、

〔萬葉集一雜歌〕額田王下近江國時作歌、井戸王卽和歌、

味酒、三輪乃山、〇中略數數毛、見放武八萬雄、情無雲乃、隱障倍之也、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄雲

石倉之、小野從秋津爾、發渡、雲西裳在哉、時乎思將待、

〔古今和歌集十一戀〕題しらず　　讀人しらず

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年七月卅日壬子、天有青雲、自東北竟西南、

〔日本紀略 四村上〕應和二年八月四日己丑、天文博士保憲上、七月廿日黑雲氣一縱廣三尺許、起坤亘艮竟天、出亢入胃畢、至戌刻漸々消滅事、

〔日本紀略 五冷泉〕康保四年九月九日甲午、酉時黑雲如布、亘南北見西方、　十日乙未、卯刻黃雲如布、亘南北、見東方、

〔權記〕長保二年十二月十五日、或云、月巳時許白雲亘東西山、二筋夾月、俗諺云、步障雲、又云、不祥雲云云、大陰者、后之象也云々、

〔枕草子 八〕名おそろしきもの　ふさうぐも

〔小右記〕治安四年(○萬壽元年)九月十一日丙申、午時許白雲如布、從坤指艮、雲有左右、如引二端布、見竟天文奏占文、不吉、

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕治曆二年七月十八日、酉剋白雲二道、廣三尺、亘東西天、

〔長秋記〕大治四年五月卅日丁未、臨晚南方有雲氣、上皇(○鳥羽)御覽、大略經天之體也、

〔中右記〕長承四年(○保延元年)九月四日、辰時敷細白雲、如帶引天、人々爲奇、天文博士不爲怪、强不引亘天歟、

〔本朝世紀〕久安三年五月二日甲子、戌剋白雲一條、東西亘天、弘三尺許也、

〔百練抄 八高倉〕安元元年三月五日、主上御疱瘡、近日流行天下、被行御祈等、此日有奇雲、天下可有驚事之由、泰親朝臣申上之、

〔玉海〕壽永二年五月廿二日乙酉、早朝艮方有赤雲、其體似紅旗云々、

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎三年十月九日丁亥、未剋白雲亘天、

〔百練抄 十五後嵯峨〕寬元二年七月五日癸卯、戌時黑雲起丑寅、長八丈許亘坤、兵革之徵云々、

異雲

時、赤。雲。八條、起自東方、直指西方、廣殆及竟天、祥瑞志曰、天氣峙時、山川出雲、占云、赤氣如大道、一條若至三四五條者大赦、人民安樂、

〔三代實録　三十六陽成〕元慶三年八月四日辛酉、大和國言、紫雲見城下郡、長十許丈、廣可三丈、起自地上、竟膈于天、食頃消散、　十一月九日甲子、丹波國言上、慶雲見管何鹿郡阿須須岐神社、

〔菅家文草　八詔勅〕答公卿賀薩摩國慶雲勅

勅、公卿去九月十一日表狀曰、大宰府奏、慶雲見管薩摩國、有司考之上志、以爲政致和平之應也、德至山陵之感也、朕省表以恐之、聞瑞以懼之、即位之後、九載于今、水旱疫癘、軍兵盗賊、豈是政和德至之言、可以倫措齒牙乎、君臣者一體之分也、朕可耻、卿等亦可耻、抑而上之、勿爲虚賀耳、

寛平八年十月日奉勅製

〔夫木和歌抄　十九雲〕千五百番歌合よろこぶ雲　　土御門内大臣

もろ人のあふぐのみかは君が代は空によろこぶ雲も有けり

〔菅家文草　七銘〕省試當時瑞物贊六首（中略）貞觀四年四月十四日試、五月十七日及第、

濃州上言紫雲第一

色濃是紫　功好惟雲　一時點著　仰德唯君

〔續日本後紀　五仁明〕承和三年十一月甲戌、有怪異雲、竟天、其端涯在艮坤兩角、經二刻程、稍以消滅、

〔文德實録　九〕天安元年十月己卯、是日有白雲、廣四尺〇尺、一本作丈、許、東西竟天、

〔三代實録　三清和〕貞觀元年十月十五日。丁酉、天東南有異雲、中有赤色、如電光激、

〔三代實録　二十清和二〕貞觀十四年七月十日戊寅、申時白雲氣起東北、亘西南、形如疋布、

〔三代實録　二十九清和〕貞觀十八年七月廿七日壬寅、是夜戌時、黒雲起自岡山嶺、〇嶺、一本作巔、亘西南、形如四幅幔、長十許丈、于時四方晴明、無有雲氣、　九月廿五日己亥、天南有白雲、亘東西、

於是下詔曰、朕云々、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年十二月辛未朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、先是右大臣清原眞人夏野、在楓里第、見五彩慶雲、是日以其圖畫幷相共見人姓名奏覽、且効慶賀之誠、左右近衛府遞奏音樂、既而賜見參親王以下五位已上祿、各有差、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十月己酉朔、越前國言、慶雲見焉、　十二月丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣〇中略等奏言、〇中略伏見參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏偁、去年十一月三日、五色雲見于參河國寶飯郡形原鄉、又越中國介外從五位下興世朝臣高世等奏偁、去六月廿八日慶雲見越中國新川郡若佐野村、並皆彩色奇麗、形象非常、〇下略

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年八月甲子、信濃國言、瑞雲見、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丙辰、播磨國言、紫雲見、　五月癸巳、大和國言、紫雲見、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿一日戊寅、美濃國言、紫雲見、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年五月五日甲寅、駿河國言、富士山上五色雲見、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年八月九日乙巳、但馬國言、慶雲見、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年閏六月二日癸亥、大和國言、石上神社南見五色雲、

〔三代實錄二十一清和〕貞觀十四年二月廿一日辛酉、佐渡國言、紫雲見、

〔三代實錄二十三清和〕貞觀十五年二月廿八日癸亥、飛驒國司言、大野郡愛寶、〇寶、一本作室、山、貞觀十三年十一月十八日、十四年十一月十二日、今月十五日三度紫雲見、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年七月廿七日壬寅、申一刻東山見五色雲、傍山根亘南北、形如虹而非虹、廣可一丈五尺、長可四五丈、比及二刻、橫而稍上、至嶺消散、天文要錄祥瑞圖曰、非氣非煙、五色紛緼、是謂慶雲、亦謂景雲也、占曰、王者之德、至山陵則景雲出、又曰、天子孝則景雲見、　八月六日庚戌、日人之

爲質閭珍府固不可辭也、伏望鴻慈曲垂、以納下臣之欵、且副上天之心、不任鳧藻之至、奉表陳乞以聞、
壬戌詔曰、朕以昧德、忝纂君臨、乘奔軫懷、納隍銷志、分宵廢寢、憂萬方之未安、與晨忘飡、懼八政之或殊、近有非雲、見諸内外、公卿表賀、辭不敢當、尙亦頻奏、推之不得、誠如來表、豈謂在己、此則七廟之靈、戚恩如在、二儀之感、徵祥自臻、今欲報德蒼天、寄彼祖宗、播惠黎蒸、共此嘉貺、可大赦天下、自天長三年十二月卅日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、未發露、已發露、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、其初見人、五位者進位一階、六位已下者二階、正六位上者、廻授一子二階、白丁免當戶今年調庸、又内外文武官主典已上、加位一級、但正六位上者、廻授一子、若無子者、宜量賜物、五位已上子孫、年廿已上者、亦叙當蔭之階、天下老人、百歲已上、賜穀三斛、九十已上二斛、八十已上一斛、鰥寡孤獨、不能自存者、量加賑恤、孝子、順孫、義夫、節婦、旌表門閭、終身勿事、普告遐邇、咸使知聞、　七年正月丁丑、御大極殿受賀、左衞門督淸原眞人長谷、奏治部卿從四位上源朝臣信等所奏、阿波國景雲、幷越前國木連理等瑞、奏畢還宮、御紫宸殿、宴侍臣、賜御被、

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年正月丁卯、先是太宰府上言、慶雲見於筑前國、至是太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣〇中略等上表言、臣聞、泰以應而爲象、咸以感而成卦、明聖人在上、鬼神不能違其感、至德傍通、天地有以從其應、伏惟皇帝陛下、承累聖之皇基、纂重光之寶祚、握鏡揚蕤、燭貞輝於就日、懷珠稱慶、褰景曜於望雲、道冠二儀、歸功先德、化孚四表、推美神宗、伏見太宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏等奏、偁慶雲見於筑前國那珂郡、〇中略謹詣闕奉表陳賀、勅報曰、禎符之應、不肯虛行、靈貺攸臻、必鍾實德、所以唐堯上聖、猶讓而不預、漢光中興、固拒而鮮記、朕丕承寶曆、司牧寰區、化謝豎蟲、感乖動物、而今景雲著見、公卿表賀、朕之菲薄、何以當之、論不云乎、百姓事輯、風雨調和、此亦瑞也、然則安危在乎人事、吉凶繫於政術、政術或差、休祥未能成其美、王道欽明、咎徵不能致其惡、以此談之、策勵爲可冀也、日愼一日、庶休勿休、賀瑞之言、閉而不聽、　四月壬午、公卿重上賀慶雲表、　十月己卯、佐渡國言、慶雲見焉、

者、所司量貸、又去年恩免神寺封租者、宜以正税塡償、天下老人、百歲已上賜穀三斛、九十已上二斛、八十已上一斛、鰥寡孤獨不能自存者、量加賑恤、孝子、順孫、義夫、節婦、旌表門閭、終身勿事、

(類聚國史百六十五祥瑞)延暦廿年六月癸巳、備中國言、慶雲見、　七月丙戌、參河國言、慶雲見、

大同五年八月戊寅、攝津國言、慶雲見、

天長三年七月辛巳、慶雲見西方、其狀五色、相雜如夾纈絹、　十二月己未詔曰、朕以菲薄嗣膺丕基、踐永虔虔、馭朽敬敬、膏澤不浹於黎庶、風化莫澄於寰區、尅己惕懷、未知攸濟、忽見公卿來表、有賀慶雲之瑞、朕德弃無聞、以斯感物、道化有缺、何用動神、但惟俊乂百工、存職匪懈、雖靈芝不効、慶有餘焉、萬民不贍、帝則未順、雖麟鳳在野、吾猶懼矣、自顧庸虛、何足慶賀、朕尚不敢當之、公等宜且停矣、右大臣從二位兼皇太子傅臣藤原朝臣緒嗣等言、臣聞天道無言、待哲后而呈祉、神功不宰、値仁君而降祥、故景雲入歎、有虞之化逾穆、伏氣叙彩、軒轅之業克宣、伏惟皇帝陛下、德等二儀、仁敦萬物、與天合德、尙憂寒暑之不均、將地伴貲、猶恐黎元之未洽、伏見少外記從六位下都宿禰廣田麿、左大史正六位上御野宿禰淸庭等奏偁、去七月十六日申時、有五色雲、見於豐樂殿之西、又紀伊國守從五位下占野王等奏偁、去八月廿八日、慶雲見於海部郡賀多村伴島上、又太宰大貳參議從四位上小野朝臣岑守等奏偁、去七月七日、慶雲見于筑前國那賀郡之上、並皆彩色紛郁、美麗非常、臣等謹按、孫子瑞應圖曰、慶雲太平之應也、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、孝經援神契曰、德至山陵則慶雲出、夫殿號豐樂、驗四海之歡娛、島名聖諱、表一人之有慶、斯實曠古之所希有、歷世之所難逢也、臣等幸値會昌之期、頻覩希世之瑞、其爲抃躍、寔百恒品、不勝悅豫之至、謹拜表陳賀以聞、　辛酉、右大臣從二位兼行皇太子傅臣藤原朝臣緒嗣等言、臣聞、惟天爲大、叶天道者聖人、惟皇體元、應皇德者靈貺、故丹羽止戶、周氏開七百之期、白狼入朝、殷家隆九五之祚、伏惟皇帝陛下、登樞踐曆、執象應機、解殷帝之羅、去三面而流惠、垂夏王之泣、傷萬姓之有辜、是以天瑞地符之祥、異名而影集、應圖合諜之貺、同時而星連、陛下謙讓而不當、長卿有云、且天

地乃神多知毛共爾示現賜弊流奇久貴伎大瑞乃雲爾在良之止奈毛念行須、故是以奇久喜之支大瑞乎頂爾受給天忍天默在去止不得之天奈毛、諸王多知臣多知乎召天共爾歡備嘉備、天地乃御恩乎奉報倍之奈毛之止念行止詔布、天皇我御命遠諸聞食止宣、然夫天方万物乎能覆養賜比、慈備愍美賜物仁坐須、又大神宮乃禰宜大物忌內人等爾波叙二級、但御巫以下人等叙一級、又伊勢國神郡二郡司、及諸國祝部、有位無位等賜一級、又六位以下及左右京男女年六十以上賜一級、但正六位上重三選以上者、賜上正六位上、又孝子、順孫、義夫、孝婦、節婦、力田者、賜二級、表旌其門、至于終身田租免給、又五位以上人等賜御手物、又天下諸國今年田租半免、又八十以上老人及鰥寡孤獨、不能自存者賜粄、又示顯賜弊流瑞乃未仁、爾年號波改賜布、是以改天平神護三年、爲神護景雲元年止詔布、天皇我御命遠諸聞食止宣、又天下有罪、大辟罪已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸赦除之、但犯八虐、故殺人、私鑄錢、強竊二盜常赦所不免者、不在赦限、普告天下、知朕意焉、　九月戊申朔、日上有五色雲、

〔續日本紀三十五光仁〕寳龜九年七月癸丑、飛驒國言、慶雲見、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年正月辛酉朔、詔曰、以天爲大、則之者聖人、以民爲心、育之者仁后、朕以寡薄忝承寳基、無善萬民、空歷一紀、然則惠澤壅而不流、憂懼交而彌積、日愼一日、念慈在玆、頃有司奏、伊勢齋宮所見美雲、正合大瑞、彼神宮者、國家所鎭、自天應之、古無不利、抑是朕之不德、非獨臻玆、方知凡百之寮、相諧攸感、今者元正告曆、吉日初開、宜對良辰共悅嘉貺、可大赦天下、改元曰天應、自天應元年正月一日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜常赦所不免者、不在赦例、其齋宮寮主典已上、及大神宮司幷禰宜大物忌內人、多氣度會二郡司、加位二級、自餘番上及內外文武官主典已上一級、但正六位上者、廻授一子、如無子者、宜量賜物、其五位已上子孫、年二十已上者、亦叙當蔭之階、又如有百姓爲呰麻呂等被詿誤、而能弃賊來者、給復三年、其從軍入陸奥出羽、諸國百姓、久疲兵役、多破家產、宜免當戶今年田租、如無種子

靈龜元年正月甲申朔、是日東方慶雲見、　癸巳詔曰、今年元日、皇太子始拜朝、瑞雲顯見、宜大赦天下、但犯八虐、私鑄錢、盜人、常赦所不原者、並不在赦限、內外文武官六位以下進位一階、

〔大神宮諸雜事記 一〕天平神護三年丁未七月七日、自午時迄于未二點仁、五色雲立天、天照坐皇太神宮乃鎭坐須、卽宇治五十鈴河上乃宇治山之峰頂仁懸進利、卽禰宜內人等、注具狀申於宮司、卽宮司水通錄子細言上神祇官、隨卽官奏、仍神祇官陰陽寮等勘申云、奉爲公家、又爲天下甚最嘉之瑞相也者、卽依彼嘉瑞之雲、可被改元之由被下宣旨、以同年八月廿日、改神護慶雲元年丁未、件嘉雲之由、被祈申於二所太神宮、勅使中納言從三位藤原卿令奉二宮種々神寶等給、具不記、又禰宜等敍正五位下畢、

〔續日本紀 二十八稱德〕神護景雲元年八月乙酉、參河國言、慶雲見、屈僧六百口、於西宮寢殿設齋、以慶雲見也、是日緇侶進退無復法門之趣、拍手歡喜一同俗人、　癸巳、改元神護景雲、詔曰、日本國爾坐天、大八洲國照給比治給布倭根子天皇我御命良麻止勅布御命乎、衆諸聞食止宣、今年乃六月十六日申時仁、東南之角爾當天、甚奇久異爾麗岐雲七色相交天立登天在、此乎朕自毛見行之、又侍諸人等毛共見天、怪備喜備都都在間仁、伊勢國守從五位下阿倍朝臣東人等我奏久、六月十七日爾、度會郡乃等由氣乃宮乃上仁當天、五色瑞雲起覆天在、依此天彼形乎畫寫以進止奏利、復陰陽寮毛七月十日爾、西北角仁美異雲立天在、同月二十三日仁、東南角仁有雲、本朱末黃、稍具五色止奏利、如是久奇異雲乃顯在流所由乎令勘爾、式部省等我奏久、瑞書爾細勘爾、是卽景雲爾在、實合大瑞止奏世利、然朕念行久、如是久大仁貴久奇異爾在大瑞波、聖皇之御世爾至德爾感天、天地乃示現之賜物止奈毛、常毛聞行須、是豈敢朕德伊、天地乃御心乎令感動末都流倍岐事波無止奈毛念行須、然此方大御神宮上爾示顯給故、尙是方大神乃慈備示給幣流物奈利、又掛毛畏岐御世御世乃先乃皇我御靈乃助給比慈給幣流物奈利、復去正月爾、二七日之間、諸大寺乃大法師等乎奉請良倍天、最勝王經乎令講讀末都利、又吉祥天乃悔過乎令仕奉流爾、諸大法師等我如理久勤天坐佐比、又諸臣等乃天下乃政事乎合理天奉仕爾依天之、三寶毛諸天毛天

慶雲
五色雲
紫雲
赤雲

播磨にて岩くもといふ、九州にて比古太郎と云、（比古ノ山は四國の大山なり）近江及越前にて信濃太郎と云、加賀にていたちぐもといふ、安房にて峯雲と云、今案に、これらの異名、夏雲のたつ方角をさしていひ、又其形によりてなづく、

〔令義解六儀制〕凡祥瑞應見、若麟鳳龜龍之類、依圖書合大瑞者、隨卽表奏、〇中略若有不可獲（謂雲氣之類、不可羈附者、）及木連理之類不須送者、所在官司、案驗非虛、具畫圖上、

〔延喜式二十一治部〕祥瑞〇中略　慶雲（狀若煙非煙、若雲非雲、）〇中略　右大瑞

〔晉書十二天文〕雲氣　瑞氣、一曰慶雲、若煙非煙、若雲非雲、郁々紛々、蕭索輪囷、是謂慶雲、亦曰景雲、此喜氣也、太平之應、

〔塵袋一〕一慶雲トイフハ何ナル雲ゾ、人ヲモ慶雲ト云歟如何、史記云、若煙非煙、若雲非雲、郁々紛々トシテ蕭索輪菌タリ、是ヲ謂慶雲ト云ヘリ、景雲トモカク、孝經ノ援神契ニ曰、王者德至山陵則景雲出、孫柔之曰、一名ハ慶雲ト云々、人ヲ慶雲ト云フコトハ、良處子曰、慶雲ヲバ父母ニタトフ、楚辭ノ注ニ云、慶雲ヲバ喩尊顯云々、チヽハヽニモコレヲタトヘテ、慶雲ト云フベキニヤ、尊顯ニタトフト云フハ、必ズ父母ニモカギラズ、師君等ニヨソフベキニコソ、夫雲ヲ桃李ニタトヘタル事モアリ、同體ノ事歟、

〔日本書紀二十四皇極〕二年正月壬子朔旦、五色大雲、滿覆於天、而闕於寅、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年五月甲午、備前國獻神馬、西樓上慶雲見、詔大赦天下、改元爲慶雲元年、高年老疾、並加賑恤、又免壬寅年以往大稅及出神馬郡當年調、又親王諸王百官使部已上賜祿有差、獻神馬國司守正五位下猪名眞人石前、進位一階、初見慶雲人、式部少丞從七位上小野朝臣馬養、三階並賜絁十疋、絲二十絇、布三十端、鍬四十口、

〔續日本紀六元明〕和銅六年十二月乙巳、近江國言、慶雲見、丹波國獻白雉、仍曲赦二國、

雨はれの　むらさきの　さわたる　あさたつ　ゆふゐる　あさゐる　ゆきけの　いざよふ　よこぎる　くものなみどいふは、にたるなり、万にみそら行くも、〻かひと人はいへど、とよめり、白雲のいほへなどは、五百重なり、やへ雲はもの丶かずのきはまりにて、重たるを云、一切の物、かならず八重なけれども、かさなるものをば、山、かすみ、さくら、菊などをもよめり、夕にたつと云雲名也　本文に朝にたちて、夕にゐるといへり、たゞしあさゐる雲とも云、とよはた雲は、大なるはたに似て、あかき夕の雲なり、　くものはたて（同物也、月明相也、）　あまとぶ雲　やくもさすいづものこら

〔日本書紀 神代二〕皇孫乃離天磐座、（天磐座、此云阿麻能以簸矩羅、）且排分天八重雲、稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣、

〔延喜式 祝詞八〕祈年祭

青雲能靄極、白雲能墜坐向伏限、

〔萬葉集 雑歌三〕幸志賀時、石上卿作歌一首、

此間爲而、家八方何處、白雲乃、棚引山乎、超而來二家里、

〔萬葉集 相聞二〕一書曰、天皇崩之時、太上天皇御製歌二首、

向南山、陣雲之、青雲之、星離去、月牟離而、

〔萬葉集 雑歌一〕中大兄　近江宮御宇天皇三山歌一首〇中略　反歌〇中略

渡津海乃、豐旗雲爾、伊理比沙之、今夜乃月夜、清明己曾、

〔文德實錄 十〕天安二年六月庚子、早旦有白雲、自艮亘坤、時人謂之旗雲、　八月丁未、是夜有雲竟天、自艮至坤、人謂之旗雲、

〔物類稱呼 天地一〕夏雲　なつくも　江戸にて坂東太郎と云、（坂東太郎といふ大河あり、）大坂にて丹波太郎と云、

説文又云、雲从雨、云象雲回轉形、釋名、雲猶云、云衆盛意也、又言運也、運行也、呂氏春秋圜道篇、雲氣西行云々然、冬夏不輟、高誘注云、運也、周旋運布、膚寸而合、西行則雨也、

〔段注説文解字十一下〕雲山川气也、天降時雨、山川出雲、从雨云象回轉之形、回上各本有雲字、今删、古文祇作云、小篆加雨於上、遂爲半體會意半體象形之字矣、云象回轉形、此釋下古文雲爲象形也、王分切、十三部、凡雲之屬皆从雲、云古文省雨、古文上無雨、非省也、二蓋上字、象自下回轉而上也、正月昏姻孔云、傳曰、云旋也、此其引伸之義也、古多假云爲曰、如詩云卽詩曰是也、亦假員爲云、如景員維河、箋云、員古文作云、昏姻孔云、本又作員、聊樂我員、本亦作云、尚書云來、衞包以前作員、宋小篆字、籀文作云、員是、云員古通用、皆假借風雲字耳、自小篆別爲雲、而二形遂判矣、〓亦古文雲、此最初古文象回轉之形者、其字引而上行、書之、所謂觸石而出、膚寸而合也、變之則爲云、

〔類聚名義抄七〕雲音云クモ

〔萬葉集抄十八〕雲は山川の氣なり、くもといふくは、内へまくりいる詞、もはむかふ義、

〔日本釋名上天象〕雲　仙覺が萬葉の註に、くは内へまくりいる詞、もはむかふ義、篤信云、此説うがてり、くもは上古の自語なるべし、或くもると云意なるか、但くもは母語にして、くもるは子語なるか、

〔東雅一天文〕雲クモ　古語にクといひし、黑しといふ詞なるあり、クロといひ、クリといふは黑色也、暮をクルといひ、クレといひ、暗をクラといふが如き皆是也、萬葉集抄に、日の暮るゝをクルとも、クレともいふは、黑くなる詞なりといふ、此義也、　雲蔽ひぬれば、天暗きによりてクモといふなり、クロといひ、クラといひ、クモといふ、卽轉語なり、又天陰をクモルといふは、雲生るの謂也、これは雲によりていひし所の語也、

〔倭訓栞前編久八〕くも　雲は隱るの義なり、雲は石より生ず、よて雲根の名あり、神代紀に、雲氣もよめり、くもおりかくるは雲下掛の義也、雲のまがき、雲のとざし、雲のしがらみ、雲のつゝみ、雲のみを、雲のうき波、雲のは袖、雲のあしなどは、皆見たてたる詞なり、

〔八雲御抄三上天象〕雲　しら　やへ　やくもいづも　むら　うす　うき　かさ　あま天清輔抄　あた　よこ暁山にたつ　あさ雲　とよはた万　あを万　にぬ万、冬の山にありにあり、　あまひく　あまのしら

わがゝへに露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか

〔伊勢物語下〕昔これたかのみこと申みこおはしましけり、山崎のあなたに、水無瀨といふ所に宮有けり、年每の櫻の花盛には、その宮へなんおはしましける、○中略みこにむまのかみおほみきまいる、みこのの給ひける、かたのをかりて、あまの川の邊にいたるを題にて歌よみて、盃させとの給ひければ、かのむまのかみよみて奉りける、

狩くらし七夕つめに宿からんあまのがはらに我はきにける、みこ歌をかへすがへすし給て、返しえし給はず、

〔萬寶鄙事記六占天氣〕天河　其内に星多きは雨、すくなきは日てり、　天河の内に黑雲あるは大雨夜半天河の内に黑氣あるは雨　黑雲とんで天河をふさぐは、三日の內に狂風、

名稱

雲

雲ハ、クモト云フ、雲ノ形狀、又ハ色彩ノ異ナルモノヲ以テ慶雲トシ、此雲見ハルヽ時ハ、大瑞トシテ或ハ改元シ、六位以下內外文武官主典以上、及ビ孝子、順孫、義夫、節婦ニ位ヲ賜ヒ、高年、鰥寡孤獨ノ者ヲ賑恤シ、田租ヲ免シ、罪人ヲ大赦スル等ノ事アリ、又群臣賀表ヲ上リ、詔勅ヲ下ス等ノ儀禮アリ、

〔倭名類聚抄一雲雨〕雲　說文云、雲山川出氣也、王分反、和名久毛

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、久毛與組同語、謂山川氣鬱結爲雲也、久之爲言、幽陰之義、暗、暮、黑、皆是也、與阿之爲開明之義爲反對、其訓疊爲久毛留者、活用久毛也、猶宿訓也土、謂宿之爲也土留也、○中略所引雲部文、原書無出字、北堂書鈔引作山川之氣、按、行書出字之字、其形相近、此出氣恐之氣之誤、

〔類聚名義抄 五水〕天河アマノカハ 漢河同 銀河同 銀漢アマノカハ

〔下學集 上天地〕銀河 天河也

〔倭訓栞 中編一〕あまのがは 天河の義也、俗にあまづがはともいふ、

〔和漢三才圖會 二天文〕天河 雲漢、銀漢、銀河、河漢、銀湾、銀浦、和名阿萬乃加八、 博物志云、天河與海通、浮槎木齎一年糧、至一處、見婦人織丈夫牽牛渚頭飲之、此人問何處、丈夫曰、可謂蜀嚴君平問之、君平曰、某年月客星犯牛斗、正是此人到天河時也、 正法念經云、帝釋與修羅戰時、帝釋所乘馬吐氣、其氣連天云、是天河也、 楊泉物理論云、漢水精也、氣發而升、精華浮上、宛轉隨流、名曰天河、 天經或問云、以望遠鏡窺之、天河實是小星之隱而不見者、然微而甚多攢聚一帶、蓋因天體通明映徹、受諸星之光、幷合爲一異白練焉、 按、天河、詩小雅、維天有漢、監亦有光、是也、蓋淡白色而如遠望川河、故雖稱河、而非水非氣、而本此天四象之一物體、日月星辰謂之四象、太陽爲日、太陰爲月、少陽爲星、少陰爲辰、辰則此天河、而斜絡天緯、微星所以係于此者也矣、天河去兩極凡三十度、斜經天緯、常隨天宛轉不止、如冬至黃昏則北傍見東西、夜半則乾巽斜、黎明則平于地面、故不見也、月甚照則光所掩難見、然每無有形象之異、可知非精氣也、古曰少陰爲辰、辰者無星之處也者、亦不然也、 博物志之言虛也、正法念經之說妄也、物理論之辨僅見也、或問之論是而亦未詳審、故以愚按許異說耳、

〔萬葉集 八秋雜歌〕山上臣憶良七夕歌十二首

天漢、相向立而、吾戀之、君來益奈利、紐解設奈、

右養老八年七月七日應令

久方之、漢瀨爾、船泛而、今夜可君之、我許來益武、

右神龜元年七月七日夜左大臣家

〔古今和歌集 十七雜〕題しらず 讀人しらず

〔夫木和歌抄 八夏〕家集時鳥　後頼朝臣
ほとゝぎすなくね雲井にとゞろきてほしのはやしやうづもれぬらん

古寺螢　大納言經信卿
今ぞしる雲の林のほしはらやそらにみだるゝほたるなりけり

〔永久四年百首 雜〕星　常陸
我ひとり鎌倉山を越ゆけば星月夜こそうれしかりけれ

〔頼政集 雜〕昇殿の後、四位して侍りし時、亮君顯昭よろこびいひつかはすとて、
ことわりや雲ゐにのぼる君なれば星の位もまさるなりけり

〔四方の硯 月〕星象を見ることは、農民よりくはしきはなし、大和の國は水のとぼしき處なれば、四月頃より夏中、農民夜もすがらいねずして、星象をはかり見て種おろし、あるひは夜陰の露おきたるに苗のしめりをしり、米穀の實のるとみのらざるとを、あらかじめはかりしる事なり、その星にからすきぼし、ひしぼし、すばるぼし、くどほしなどようの名をつけて、某の星は何時に何の位にあらはれ、何時に何の方にかくるなどいひて、その目つもりにてはかること露たがはず、

〔萬寶部事記 六占天氣〕星　雨後に天くもりても、只一星見ゆれば、その夜必ず晴て明日も天氣よし、又星多きはいふにをよばず、星の光きらきらとして定まらざるは風又は雨、

○

天河

〔倭名類聚抄 一景宿〕天河　兼名苑云、一名天漢、今按又名河漢、一名銀河也、和名阿萬乃加波

〔箋注倭名類聚抄 一景宿〕按、廣雅、天河謂之天漢、兼名苑蓋本此、夏小正傳云、漢也者天漢也、毛詩小雅大東傳云、漢天河也、那波本漢河作河漢、按、白氏六帖、有銀河河漢、無漢河、孔氏後六帖、亦引韓詩浩汗若河漢、杜甫詩、驚風飄河漢、則作河漢為是、

今昔、大織冠子孫ノ爲ニ山階寺ヲ造リ給フ、〇中略而ル間三百餘歲ニ成テ、永承元年ト云フ年ノ十二月廿四日ノ夜始テ燒ヌ、〇中略二年ノ間ニ造畢テ堂舍皆成ヌレバ、同三年ト云フ年三月二日供養有リ、長者公卿已下ヲ引將テ下テ、法ノ如ク供養セラル、其ノ導師ハ三井寺ノ明尊大僧正也、請僧五百人、幷ニ音樂ヲ調テ專ニ心ヲ至シ給フ事无限シ、而ルニ其ノ供養ノ日寅時ニ佛ヲ渡シ給フニ、雨氣有テ空陰テ暗クシテ星不見ネバ、時ヲ知ル事不能ズ、陰陽師安倍ノ時親ト云フ者有レドモ、空陰テ星不見ネバ、何ヲ注シニテカ時ヲ量ラム可爲キ方无シト云フ程ニ、風モ不吹ヌ空ニ、御堂ノ上ニ當テ、雲方四五丈許ノ程晴レテ、七星明カニ見エ給フ、此レヲ以テ時ヲ見ルニ、寅二ツニ成ケリ、乍喜ラ佛渡リ給ヌ、空ハ星ヲ見セテ後、即チ本ノ如ク陰ヌ、〇下略

〔扶桑略記 二十九後三條〕延久三年二月四日庚申、亥時奔星入紫微宮、其大如器、氣暫不消、似蛇色、又白、同夜有天變、奇異之星出現、其體似雲有光矣、

〔皇年代略記 堀河〕永長元七、乾方星數十、如貫珠、

〔殿暦〕嘉承元年正月十八日辛亥、今夜星光極長云々、自去四日所出星也、于今不散、奏云、極有恐云々、

〔玉海〕養和二年〇壽永元年二月廿三日甲子、午剋泰親朝臣來、去比火星犯歲星、近日又金星犯同星、其常事也、但火星之變、治承三年大亂之時變也云々、又云、此間、金星欲犯昴宿、若如存犯之者、殊勝大事之變也、仍衆所申也、占文不快云々、

〔枕草子 十〕星は

すばる、ひこぼし、みやうじやう、夕つゝ、よばひぼしをだになからましかば、まして、

〔萬葉集 七雜歌〕詠天

天海丹、雲之波立、月船、星之林丹、榜隱所見、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶八年正月廿四日丙戌、夜天東南有星見、長可一丈、

〔拾遺和歌集八雜上〕ながされ侍ける道にてよみ侍ける　贈太政大臣〇菅原道眞

あまつ星道もやどりもありながらそらにうきてもおもほゆるかな

〔扶桑略記二十四醍醐〕延長五年十月十三日、寅時大星頭四五尺、尾數十丈、指南西行、或云、起南殿西弓庭殿、或云、起小野栗栖野、

〔日本紀略三村上〕天曆元年正月廿七日癸丑、此夜恠星見西方、俗人號戈星、有三所、

〔貞信公記〕天曆二年正月十九日、中使頭朝臣來云、除目事何日可行乎、坤方見長七尺許物、審式云、戈星也、

〔日本紀略四村上〕天德元年二月二日庚申、今夜戌剋、如白雲者長一二丈、廣二三寸見天、世謂之棒星、

〔中右記〕寛治四年二月廿八日、戌剋許、牟星見天、北一所、未申一所、辰巳一所、司天臺奏之、不知何恠異也、

〔醍醐雜事記七〕長治二年、鉾星出現、其形如鬼、紅絹、長五尺許、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶四年三月、相當西方有星、其光如白虹、本細末漸廣、程十里許、經二箇月、其號曰穗垂星、其秋年登、天下頗豐、

〔百練抄四圓融〕貞元二年二月廿四日、拂星見、

〔貞信公記〕承平二年七月十六日、内裏屬星祭、維香〇維香、一本作惟香、奉仕、拜第二星間、星降來者、

〔江談抄三雜事〕忠輔卿號仰中納言事、大將事、

被命云、忠輔中納言者、世人號仰中納言也、小一條大將濟時遇之云、天ニ何事カ侍ト云ニ、忠輔云、大將ヲ犯セル星コソハ現ヌレト云々、不經幾程、濟時薨云々、

〔百練抄一四條〕寛弘三年四月、大星見巽方、

〔今昔物語十二〕山階寺燒更建立間語第廿一

〔日本靈異記下〕災與善表相先現而後其災善答被緣第卅八

山部天皇代、延曆三年歲次甲子冬十一月八日乙巳日、夜自戌時至于寅時、天星悉動、繽紛而飛遷、同月十一日戊申、天皇幷早良皇太子、自諾樂宮移坐于長岡宮也、天星飛遷者、是天皇躰〇躰恐移字誤宮表也、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年八月甲戌、是日二星乍合乍離、狀似相鬪、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十四年正月辛酉、有星孛于西南、三日而不見、

〔三代實錄一清和〕天安二年八月廿九日丁巳、陰陽寮奏言、夜有星入紫微宮、赤如炎火、長十餘丈、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年七月廿三日丁未、有星入羽林東、赤黃無光、　九月九日癸巳、是夜有星出紫微宮、入昴、長可三丈餘、　十四日戊戌、是夜有星出自奎婁間、入於外屛、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年正月三日乙酉、夜有星出庚入甲、推之出天苑、入常陳、　二月二日甲寅、是日夜有星出東井、入參、色白長二丈餘、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年九月九日丁亥、是夜有星出卷舌、入畢首、長可三尺、　十日戊子、夜有星出墳墓下、入貫須女、　十二月廿四日辛未、夜有星出奎婁北、入抵上司空、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年六月廿八日辛丑、夜有星出奎入大陵、　十一月五日丙午、夜有星出大畢、抵貫大角、入攝提、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年七月廿四日辛酉、星晝見、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年九月十四日丁亥、夜有星出文昌第二第三星與太陽守星中、歷紫微宮、指西南行、長可三丈、其色赤黃、有光照地也、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年五月十八日己亥、夜有星孛東北、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月廿一日己巳、夜有星出自房入天市、色青、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年七月七日癸丑、有星出自列肆星、入犯心中央星、色赤、長一丈餘、

古人曰、流星は小民流移の徴也と云ふ、是古人の格言、明年三月英人來り難題書翰出す、依之江戸表の動搖一方ならず、家を提て他方へ走る者多し、

星入月

〔日本書紀 二十三 舒明〕十二年二月甲戌、星入月、

〔文德實錄 十〕天安二年五月戊子、運明有星入月魄中、

〔中右記〕寛治八年(○嘉保元年)六月五日甲戌、今日申時許星見、漸入夜間、星入牛月之中、月已成細長、希有之天變也、　八日丁丑、天文博士親宗、直講師遠、共進密奏、是一日之星犯月事歟、

〔看聞日記〕應永廿八年十二月十三日、又去頃月中ニ星入、(月輪中ニ入云々)諸人見之、在明時分云々、在明ハ去月事歟不審、陰陽道不及勘進、以外凶事云々、

永享五年八月十五日、抑後聞、今夜月中へ星入、月破散光云々、予(○後崇光)不見、人々見云々、希代事也、

〔武江年表 六〕明和七年六月上旬、星、月を貫ぬく、

雜載

〔日本書紀 二 神代〕一云、二神、遂誅邪神、及草木石類、皆已平了、其所不服者、唯星神香香背男耳、故加遣倭文神、建葉槌命者則服、故二神登天也、

〔日本書紀 二十九 天武〕五年七月、有星出于東、七八尺、至九月竟天、　十一年八月甲子、是夕昏時、大星自東度西、　十三年十一月、是月有星孛于中央、與昴星雙而行之、及月盡失焉、

〔萬葉集 二 挽歌〕一書曰、天皇(○天武)崩之時、太上天皇(○持統)御製歌、

向南山(キタヤマニ)、陳雲之(タナビククモノ)、青雲之(アヲグモノ)、星離去(ホシワカレユキ)、月牟離而(ツキモワカレテ)、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年十二月戊戌、星晝見、

〔續日本紀 九 聖武〕神龜二年正月己卯、有星孛于華蓋、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平七年五月己未、夜天衆星交錯、亂行無常所、

〔續日本紀 十五 聖武〕天平十六年十二月庚寅、有星孛於將軍、

〔播磨風土記揖保郡〕阿笠村、〇中略一云、昔天有二星、落於地、化爲石、於此人衆集來談論、故名阿笠、

〇按ズルニ隕石ノ事ハ、天篇天降雜物條ニ在リ、參看スベシ、

〔水鏡上稱德〕その年〇十五年八月、ほしの雨のごとくにふりしをこそ見侍りしか、あさましかりし事に侍り、

〔日本書紀二十七天智〕三年三月、有星隕於京北、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十一月戊辰、昏時七星倶流東北、則隕之、　庚午、日沒時星隕東方、大如缶、逮于戌天文悉亂、以星隕如雨、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月壬子、軍士石村村主石楯、斬押勝傳首京師、押勝者近江朝內大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂第二子也、〇中略起兵反、〇中略是其夜有星落于押勝臥屋之上、其大如甕、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年十一月辛亥、有星隕西南、其聲如雷、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十二月己未、星隕如雨、　四年五月辛丑、有星隕南北、各一、其大如盆、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年正月壬辰、是日未時大星隕、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年八月四日壬辰、自戌至子、小星四方流散、墜如雨、

〔百練抄四後朱雀〕長曆元年九月三日、衆星亂落、四方飛散、人莫不驚、

〔山槐記〕治承二年六月十二日乙亥、後日聞、今日未剋坤方星墜、其體如水精、落地、其尾二許丈、中絕、又七八尺許有光云々、大膳權大夫泰親朝臣、後日追奏云々、

〔看聞日記〕應永廿八年十二月十三日、抑去夜星地ニ落、陰陽道國主御愼之由勘進云々、又去夜光物自北飛南、此邊人見之云々、若星地ニ落事歟、不審也、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年七月十五日、今夜戌刻星隕ル雨ノ如シ、

隕星

裂歟、

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎三年九月廿九日丁丑、卯刻有光物流星云云、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年九月九日辛巳、自亥刻迄丑時、流星或七八尺、或三四尺、不知其員、色白赤、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十月九日癸亥、子刻大流星亘天、其跡白雲氣也、暫不消、人怪之、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年〇康元元年六月十四日癸酉、巳刻光物見、長五尺餘、其體初者似白鷺、後者如赤火、其跡如引白布、白晝光物、尤可謂奇特、雖有本文所見、於本朝無其例云云、又近國同見云云、　七月十二日庚子、去六月十四日光物、見男山之由別當申之、自仙洞有御尋之處、司天等依申不伺見之由、同自石淸水令注進其圖云云、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年八月廿八日甲辰、戌刻〇中略同時大流星長四丈餘四尺自乾至巽、

〔吾妻鏡 五十一〕弘長三年正月十七日戊戌、紅霞顯白雲、天氣甚晴、戌刻乾巽有如火光色、一方光盛之時、一方光薄、亦相交厚薄、觀者怪之、　十八日己亥、乾巽亦光如去夜、

〔應仁記 一〕亂前御晴之事

大亂ノ可起ヲ天豫メ示サレケルカ、寬正六年九月十三日夜亥ノ刻ニ、坤方ヨリ艮方エ光物飛渡ケル、天地鳴動シテ、乾坤モ忽折レ、世界モ震裂スルカト覺エケル、〇中略又翌年文正改元ノ九月十三日、同刻ニ本ノ方ヘ飛歸ケルゾ不思儀也、天狗流星ト云物ニテ有ケルトカヤ、

〔和漢三才圖會 一天文〕星隕成石〇中略　按、星隕如雨者、本此非星、而人目以爲星耳、又有隕石、人以爲星隕成石者甚妄也、蓋少陽之精、在天爲星、在地爲石、以同氣附會謂乎、將隕石形勢似星故謂乎、和漢惑之者不少、陸奥出羽中夏月晴夜有隕星、如流星引白光走下、此夜凡五七處、屋棟以下不見、隕處有物、如蕎餅一鐙許、名星屎、餘月多有、雖不見、餘國未嘗有之、

尺〇尺、一本作丈、許、觀者奇怪謂之人魂、

〔扶桑略記二十四裏書醍醐〕延長八年七月十五日酉剋、流星差艮方渡、俗云人魂也、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月九日甲午、亥時流星如月、自艮亘坤、衆星西亂、終夜流散、　十三日戊戌、詔天下大赦、常赦所不免者赦除、依流星之變異也、

〔扶桑略記二十七一條〕長保四年七月五日、有大流星、

〔日本紀略十一條〕長保四年九月六日戊戌、今夜日月薄蝕、終夜流星、　七日己亥、今夜自子時至寅流星、

〔日本紀略十一一條〕寬弘四年六月四日戊戌、今夜有流星北行、連夜有此變、　十六日庚戌、詔大赦天下、大辟以下、常赦所不赦者赦除、又老人給穀、依流星之變也、　廿一日乙卯、奉幣廿一社、依流星之變也、　七月十四日戊寅、臨時仁王會、天皇出御南殿、被消流星之變也、參入僧綱、各給勅祿、

〔日本紀略十四後一條〕長元八年九月十一日辛卯、夜流星見、　廿日庚子、詔大赦天下、大辟以下罪、常赦所不免者咸赦除、依天變也、又老人僧尼給穀、又賑給、　廿三日癸卯、奉幣廿一社、依天變也、　廿六日丙午、仁王會、依流星也、

〔行親記〕長曆元年九月四日、去夜有流星天變、　七日、有陣定、太宰府推問使事、可被問師流星事、可有奉幣云々、流星事、可令諸道勘申由、有仰事云々、　十六日、今日依流星有恩赦、內記不候、左少辨書詔云々、免物不被仰、使後日成勘文可免者、但先例恩赦之時、或被仰云々、　十月廿二日、依流星變、於八省被行仁王會、於所々院宮被行　有行幸、其儀如常、

〔本朝世紀〕久安六年七月十二日丙戌、戌剋有大流星、大如甕、出自織女、入天市垣、

仁平二年九月一日壬辰、酉剋北方有大流星、

〔百練抄八高倉〕治承四年七月十九日、有大流星、其光如炬火、　十月七日、亥剋有流星變、出紀伊國山方、入福原東北山、大如大土器、渡北斗中宮、暉二許丈、入山之後、其光不消及一町、本朝無此變、若可謂天

之、出天津邊、入紫微宮中、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年五月九日甲辰、亥時有大流星、出自氐南、入軫翼間、其尾二許丈、色赤有光、衆星隨行、所過之處、木葉作聲、　六月廿一日乙酉、夜有流星、出自斗邊、入箕星下、色白尾短、　廿七日辛卯、夜有流星、出自螣蛇、入雷電星、色赤、長二丈餘、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年八月二日乙丑、曉有流星南行、大可一丈、京城皆見之、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十一月廿九日己卯、晦、寅時有大流星、出自角亢間、入梗河星、　十二月庚辰朔、夜有流星、自東方來、入弧星、其色赤、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十一月十五日癸未、夜有流星、向西北行、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月十日庚子、夜有流星、出自北斗、犯紫微宮西蕃第五星、色青白、大如柚子、　五月廿九日戊子、夜有流星、出自北極大星、入三公星、星大如李實、色白有光、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年八月五日癸巳、自日沒至人定、流星東西南北分散、行殞如雨、自人定至于夜分、(○東以下十七字原脫、今據一本補、)或出入紫微宮、犯衆星宮、官或出入北斗、貫索陵內外宿、其數不可勝計、　九月三日庚申、寅時有大流星、長一丈許、自東南行西北、遂殞於地、其響如雷、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年八月四日丙辰、夜有流星、自南方來、入五車中、其色黃白、　十月廿五日丙子、酉時有流星、自西南行東北、　十一月廿日庚子、是夜流星出自心前星、貫心大星、入天江、　廿六日丙午、夜有大流星、出自天中甲、指天中丙、行三丈沒、以晷度推之、出自紫微宮、入天市垣中、體如大埚、(○埚、一本作塊、)色赤白有光、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月廿三日辛丑、大雨夜有流星出自鈎陳、歷內階、入文昌第一二星間、色青有光、　七月廿四日辛丑、夜有流星、出從大陵、以抵傳舍、入華蓋、其色青、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰二年二月一日乙丑、未時流星出自空中、南東歷行、遂殞于地、其聲如雷、尾長五六

〔三代實錄清和一〕天安二年九月廿九日丁亥、夜有流星、自東南行西北、星落之處、有聲如雷、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年七月廿四日壬申、夜有流星、出自東北、入於西南、光照地、　八月廿七日甲辰、夜有流星、出自南方、入於西北、光照地、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年閏六月十九日庚辰、曉有流星西行、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年十月十七日壬午、晝有流星、東南行、光照地、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年八月廿三日丁酉、夜有大流星、出東方、入天市中、其色赤白、入後、其尾白而曲環、　閏八月廿九日壬申、夜有流星、出東南、入羽林、星大如柚子、青而有光、

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年七月九日丁丑、晝有大流星、

〔三代實錄清和二十三〕貞觀十五年二月十一日丙午、流星出、從七星邊入弧、其色白、　四月九日癸卯、夜有流星、入羽林、亦入天市、其色皆赤、　廿六日庚申、流星入翼、其色赤、

〔三代實錄清和二十四〕貞觀十五年十一月廿七日戊子、酉時流星入婁南邊、其色青白、體大尾短、欲入之時、分迸連入、　十二月二日癸巳、是夜有流星、出自婁與天倉間、入奎南邊、將入之時、爲三連沒、

〔三代實錄清和二十五〕貞觀十六年三月庚申朔、夜流星入犯大微左執法第二星、大如李實、色赤尾短、　六月十五日辛未、酉時日未入、流星出自織女西邊、入大陵卷舌間、色赤有光、　廿九日乙酉、酉時流星出自室、入癸地、長可一丈餘、其色黃白、

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年十二月五日己未、是夜有流星、出自七星、入張、一丈餘、其色赤、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年五月卅日辛亥、辰時有流星、落於東南、大可一尺、長可六尺、其色純白、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年九月廿三日丁酉、寅時大流星出自大微東番星邊、抵大陵星、入閣道典〇典恐曲誤附路星之間、

〔三代實錄陽成三十〕元慶元年正月廿四日丙申、晡時大流星出自天中庚、指天中艮而行、可三丈沒、以暑推

日本紀、舒明天皇九年二月十一日、大星從東流西、便有音似雷、僧旻曰、非流星、是天狗也、其歲有蝦夷兵、　万寶全書云、流星東向西移來日雨、東向南移來日火、東向北移七日内有人報寇盜、南向東移主旱、南向北移來日霧、西向東移二日内主風、西向南當年水旱災傷、西向北移來日風雨大作、北向東移霖雨、北向南移來日陰無雨、　按、流星太抵如星、白色其跡微白光引、故雖名星非星、其光一瞬之間無定形、皆天火之屬也、兒女見之則爲鼠鳴咒之、未知其據、和名與波比星、呼喚之義乎、其他如天狗、奔星、梁星等、非常者、俗曰光物、多爲凶變之表、

〔日本書紀舒明二十三〕九年二月戊寅、大星從東流西、便有音似雷、時人曰、流星之音、亦曰地雷、於是僧旻曰、非流星、是天狗也、其吠聲似雷耳、

〔史記天官書二十七〕天鼓有音、如雷非雷、音在地而下及地、其所往者兵發其下、天狗狀如大奔星、（孟康曰、星有尾、旁有短彗、下有狗形者、亦太白之精、）有聲、其下止地類狗、所墮及炎火、（宋均曰、炎香艶、）望之如火光、炎炎衝天、其下圜如數頃田處、上兌者則有黃色、千里破軍殺將、

〔續日本紀聖武十〕神龜五年九月壬戌、夜流星、長可二丈餘、光照赤、四斷散墮宮中、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年二月甲子、是夜有流星、其大如盆、

〔續日本後紀仁明十七〕承和十四年十一月壬午、人定之時、有如流星者、自西殞東、其光赤廣（○赤廣、一本作光芒、）二町餘、長十許丈、

〔續日本後紀仁明二十〕嘉祥三年正月己酉、有如流星者、經天落東、其大如月、光色赤青、

〔文德實錄一〕嘉祥三年六月丙寅、有流星、頭尾轉行、

〔文德實錄三〕仁壽元年正月癸卯、是夜有流星、大如斗、餘光久之乃滅、

〔文德實錄十〕天安二年五月丁亥、夜有流星入天、（○天、一本作亘、恐當作天垣二字、）長一丈許、　六月己亥、夜有如流星者、經天西落、大如月、光青赤、其後西方空中有聲、如雷二度、

姦事也、往疾者往而不反也、長者其事長久也、短者事疾也、奔星所墜其下有兵、無風雲有流星見良久、間乃入爲大風發屋折木、小流星百數四面行者、衆庶流移之象、流星之類有音如炬火下地野雉鳴天保也、所墜國安有喜、若小流星色青赤名曰地鴈、其所墜者起兵、流星有光青赤、長二三丈、名曰天鴈、軍中之精華也、其國起兵、將軍當從星所之、流星暉然有光、光白長竟天者人主之星也、主相將軍從星所之、飛星大如缶若甕、後皎然白、前卑後高、此謂頓頑、其所從者多死亡、飛星大如缶若甕、後皎然白、星滅後白者曲環如車輪、此謂解衔、其國人相斬爲爵祿、飛星大如缶若甕、其後皎然白長數丈、星滅後白者化爲雲流下、名曰大滑、所下有流血積骨、

枉矢類流星、色蒼黑蛇行、望之如有毛目、長數匹、著天主反萌、主射愚見則謀反之兵合射所誅、亦爲以亂伐亂、

天狗狀如大奔星、色黃有聲、其止地類狗、所墜望之如火光、炎炎衝天、其上銳其下員、如數頃田處、或曰、星有毛、旁有短彗、下有狗形者、或曰、星出其狀赤白有光、下即爲天狗、一曰、流星有光見人面、墜無音、若有足者名曰天狗、其色白其中黃、黃如遺火狀、主候兵討賊、見則四方相射千里、破軍殺將、或曰、五將鬪人相食、所往之鄉有流血、其君失地兵大起、國易政戒守禦、營頭有雲如壞山墮、所謂營頭之星所墮、其下覆軍流血千里、亦曰、流星晝隕名營頭、

〔類聚名義抄　二〕流星（ヨハヒホシ）　奔星（同）

〔和漢三才圖會　三天象〕流星　流星　飛星　奔星　天狗　狂夫　地鴈　天鴈　梁星（和名、與波比保之）

流星有數品、漢書音義云、絕迹而去曰飛星、光迹相連曰流星、（一名奔星）符瑞圖云、流星天使也、自上而降曰流、自下而上曰飛星、其大者曰奔星、　史記劉向傳云、流星有聲者爲天狗星、無聲者爲狂夫、　五雜俎云、流星色青赤者名地鴈、有光青赤者名天鴈、大如缶、光赤黑有喙者名梁星、其墜之地主兵、今閩中新婦不敢星行、云恐犯天狗星、則損子嗣、閩女間亦忌之、而見流星以爲不吉、亦古之遺禁也、

〔吾妻鏡 二十七〕寛喜二年十二月五日、客星出現云云、親職申之、　七日、以周防前司親實奉書、客星出現否、被尋天文道云云、　十一日、今曉客星猶出現、京都去月廿八日出現、天文博士維範朝臣最前奏聞云云、

〔百練抄 十四 十四條〕文暦元年十月七日壬申、客星出現云々、但司天輩不見之、維範朝臣子息家氏見之云々、

〔吾妻鏡 三十六〕寛元三年正月廿七日癸亥、丑刻客星出現于天帝垣巽斗度云云、　廿八日甲子、寅刻客星猶牛宿南出現、卯刻前陰陽大允晴茂朝臣進勘文、其後武州以下人々被參御所、被驚申天變事之由也、大殿(藤原頼經)○於廣御出居有御對面、　廿九日乙丑、天陰、客星不現云云、　二月一日丙寅、客星見牽牛度、行度二夜二丈也云云、今日有天變御祈沙汰、　二日丁卯、自去夜戌刻至今曉、召聚司天之輩、於御所可伺觀天之由、被仰下之間、泰貞、晴茂、晴賢等朝臣、候東侍南緣、終夜雖窺之、客星不出現、於巽方行之間、入南極訖歟之旨各申之、但馬前司定員奉行之、

〔倭名類聚抄 一 景宿〕流星　兼名苑云、流星一名奔星、(和名與八比保之)

〔箋注倭名類聚抄 一 景宿〕按、爾雅釋天、奔星爲彴約、郭璞注、流星、兼名苑蓋本此、○中略按、古事記云、八千矛神將婚高志國之沼河比賣幸行之時、到其沼河比賣之家、歌曰、佐用婆比爾、阿理多々斯、用婆比邇、阿理加用婆勢、是與波比、謂男子就女家而誘之、萬葉集、與波比用結婚字、靈異記訓釋、伉儷與波不、本居氏曰、與波比之言、蓋出於喚呼之義、今俗謂迎婦爲與女乎與夫、亦是語之遺也、流星之飛、有如蕩子之就女家、故名與波比保之也、

〔釋名 一 釋天〕流星、星轉行如流水也、

〔晉書 十二 天文〕流星　流星、天使也、自上而降曰流、自下而升曰飛、大者曰奔、奔亦流星也、星大者使大、星小者使小、聲隆隆者怒之象也、行疾者期速、行遲者期遲、大而無光者衆人之事、小而有光者貴人之事、大而光者其人貴且衆也、乍明乍滅者賊敗成也、前大後小者恐憂也、前小後大者喜事也、蛇行者

〔日本書紀皇極二十四〕元年七月壬戌、客星入月、

〔續日本紀元正九〕養老六年七月壬申、有客星、見閣道邊、凡五日、

〔三代實錄陽成三十〕元慶元年正月廿五日丁酉、酉時加戌、客星在壁見西方、可謂含譽瑞星也、

〔日本紀略村上四〕康保二年二月七日戊申、今夜南方自坤至艮客星出、

〔日本紀略圓融六〕天延三年六月廿三日甲子、客星如白虹、

〔日本紀略一條十一〕寛弘三年七月十三日癸丑、公卿定申諸道勘申客星事、　十九日己未、御卜、依客星事也、　八月十九日己丑、奉幣諸社、依客星事也、

〔玉海〕嘉應元年四月十日、晩頭、陰陽助安倍泰親來、〇中略言談之次語云、後三條院御時、有行泰親父師平有相論事、有行令申云、騎陣將軍之中、客星出來云々、師平申云、非客星、彼騎陣將軍見也云々、各論之間、天氣在于師平方、有行大怒、今三月之內可有天下大事云々、而間後三條院御惱、遂有事、是以師平僻事、爲正說、故云々、又云、二條院御時、師業爲御師事、發星云々、泰親聞此事大驚而云、於師業者不見星者也、鳥羽上皇仰云、上中下三星ハ我敎也、更不見星者也云々、此仰泰親與信西共奉之、爭爲帝者之師哉、定有其咎歟云々、則夜受病遂早世云々、　又云廣賢、二條院御時、奏慶雲立之由、蒙勸賞、泰親申云、慶雲立事、聖代之時也、又曰、孝相生之時事也、而今上於他者可謂賢主、孝之儀者已闕、爭慶雲立哉云々、而之間廣賢死云々、　又云、廣賢子信業申云、陳〇星〇土星〇土星一本作大星、下同、也、侵月是未曾聞事也、土星ハ每夜一寸行不動星也、爭侵月哉云々、而間信業自目鼻耳口星入之由有夢想、即夜病死云々、於天文道者、更非涉事、其答如此云々、又周易六十四卦ハ曆王六十有之、今四條之、口傳云、於四卦者相配四季、仍不入日次云々、而家榮不知、爲康士算博問之時不知之由云々、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年六月廿五日庚午、戌剋客星見艮方、鎭〇〇星色靑赤有芒角、是寛弘三年出見之後無例云云、

客星

〔嘉永明治年間錄十一〕文久元年五月廿日、彗星乾方ニ出ヅ、天文方建白書、

此頃每宵乾方彗星出現に付、天文方上書寫、　彗星は西説に寄候へば、一種の行道の違ひし星にて、限りも無き遠天より、太陽天へ環り來り並び、遠天へ還り候星に有之、太陽天へ近づき候節は、自然地へも近く相成候事故、人目に見え、遠天へ還り候得ば地に遠く相成候故、人目に及不申候、其行道皆長象形にして、各長短不同故、再出の年間遠きは八九年、其最近き者は三ヶ年餘にて、再出の年間一周仕候ものも有之候、右樣數年來測量仕り、豫め再出の時節を推步致候程に相成候上は、決て妖星と申には無之、一種の奇星と可申程の儀に御座候、漢土にては兎角吉凶の點候有之、多くは舊きを除き、新を布く抔申候へば、其形容等に似寄候を以て、支那人の文を巧みに認め候樣に存候、當今專ら西洋究理の說御採用の折柄に付、私共於御役筋にも、吉凶の有無の儀は差置、ひたすら測量にのみ必志を盡し罷在候、且又其色に隨ひ、其現るゝ場所より、兵革水火の災、或は國王大臣の患抔と漢說に相見候得共、明和六年七月の彗星は、其長サ七十度に餘り、光芒は兩脇へ相見候由、舊記に相見、至て異樣の形狀に候得共、別に奇異と申程の儀も無之由申傳候、殊に彗星の天際に現れ候は、日本計に相見候には無之、万國共に見受候事故、素より何れの國、誰の人事と、吉凶に拘り候儀は、毛頭有之間敷候事、

〔和爾雅一天文〕客星常不見星曰客星、怪星同、或犯月犯北斗星謂之犯星、

〔晉書十二天文〕客星　張衡曰、老子、四星、及周伯、王蓬絮、芮、各一錯乎五緯之間、其見無期、其行無度、荊州占云、老子星色淳白、然所見之國爲飢、爲凶、爲善、爲惡、爲喜、爲怒、周伯星黃色煌々、所至之國大昌、蓬絮星色青而熒々然、所至之國、氣雨不節、焦旱物不生、五穀不登、多蝗蟲、又云、東南有三星出、名曰盜星、出則天下有大盜、西南有三大星出、名曰種陵、出則天下穀貴十倍、西北三大星出而白、名曰天狗、出則人相食大凶、東北有三大星出、名曰女帛、見則有大喪、

有不盡謬者焉、○下略

〔嘉永明治年間錄二〕嘉永六年七月十七日、彗星出現、天文方建白幷巷說、
十七日酉上刻に現し戌刻に不至、是を彗星水火の星、兵亂の兆と、巷說紛々たり、廿四日後不見、
昨十七日初暮、西の方より北に寄、地平上凡八九度計相離れ、三尺計り光芒相發見留申候、尤追追連測の上、猶又實測記可奉入御覽候、依之此段申上候、以上、
七月十八日　山路彌左衛門　足立左內　山路金之丞
昨十八日初暮、戌亥の方大凡十度計、大微垣の地に當り彗星相見、其光芒長三尺計、北斗の內天璣の星の方を尾指申候、依之此段申上候、
七月十九日　澁川助左衛門　同勝司
京都土御門建白書　頃日毎夜、彗星暮後、西北の天に現、光芒、凡そ二三尺計、則大微垣の邊に有之、宿度は翼宿に候、尤戌刻頃は西の山頭に沒し候、今年春以來時候不順、五月來雨降季候全不調候故、上外の氣結句爲彗星と存候、此頃異國船の風聞等も有之候處、彼是人口種々候へ共、勿論爲差義は無之存候、今暫日數を歷候へば、大方西山に隱れ不相見成畢候哉に存候、猶篤と測量の上、若又異變の儀も候はゞ可申上候、
右等の趣、內々申上候間、自然御不審等被爲在候はゞ、宜御沙汰相願度存候、
七月十九日　土御門陰陽頭晴雄

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年八月、彗星乾方ニ出ヅ、
此月十日初夜の頃より戌亥の方に彗星出現、光芒至て小いさし、同十六夜に至り見えず、

〔武江年表十〕文久元年五月廿二日夜より亥の方に異星現る、光芒竪に延て長し、稲星といふ、其後曇りて見えず、又廿八日夜現る、

不見、扶桑略記 近頃明和六年七月中より相見候彗星、其長七尺餘と舊記に相見候、蘭書スイロイク之内、西洋千六百九十五年(我邦元祿八年乙亥に當る)十月廿八日朝フランシルレ(地名)於港ニ、日出一時前ニ、東方に於て彗星を見たり、其頭を見る事あたはず、十月三十日、此彗星を、シヲタア(地名)に於て見えずと申候得ば、漢土幷西洋之記錄に符合仕候付、此度相見候白氣は、彗星御座候得ば、右等之類と奉存候、尤古來より、凶年之由申傳候得共、西洋近來之說にては、彗星行道之天有之趣相見候、天變災害之儀にては御座有間鋪奉存候、依之申上候、

二月 足立左内

〔息軒遺稿 一〕星占說 天保癸卯(〇十四年)二月甲戌朔、越七日庚辰、初昏長嘯而仰、見孛氣於西南、狀如一匹練、色潔如雪、竊謂上冬過暖、愆陽冒歷、既而爲春寒所壓、鬱不得昇、求路而出、其勢盛、如呼吸之見氣於凝寒之時、遂鍾爲此象耳、法當地震若雷鳴而散、越三日壬午、地震、雷亦發聲者再、而氣猶不散、浮言如蚊、越九日庚寅、適晴仰觀半時、始得詳其狀矣、首越畢二度、終於參左右足間、後數日其色漸淡、其幅漸狹、光芒過參之左足、察其行、速於日三度許、古人謂之長星、蓋彗星一體也、據占、彗除舊布新之象、其兆爲亂、然海內熙熙、兆民方仰惟新之化、尙何叛亂之足慮哉、然則天變果不足懼耶、昔者孔子之修春秋也、天災必謹書之、地眚必謹書之、雖常度如日食、亦必謹書之、而雊雉桑穀之祥、商書既詳述之、蓋聖人施敎於視聽之所及、其獨知無徵者、置焉而不論、況天之高遠、雖聖人蓋亦有不得而知者、故敬之如君、畏之如師、以寓至敎於不知不言之中、下至戰國、猶有以天不降災異、恐其棄己者、其慮遠矣哉、至漢儒、誤會洪範、始以災祥取必於天、某爲其應某爲某孼、毫分縷析、如援律斷罪、甚焉至宰相有以天變自劾者、蓋論天之義密、而敬天之意荒、其失在人天無別矣、西洋則以天爲一大機關、月及五星皆地球、與是地運轉於大虛中、而日則中處不動、月之於我、猶我之於月、故我之日食、則月之月食、月之日食、則我之月食、雖異如彗孛、其出皆有常度、不足以爲變、天之與人、邈焉不相接、其說忽聞可驚、徐而察之、蓋亦

上升結體云々、因之則今年氣候不順、故上陽之氣凝結而成彗者也、但史籍擧其占者、或爲兵革喪亡、水火地震、流疫等之徵、然彗星出現之事、和漢每度而其應徵有無者、蓋因治亂之時世無定例者也、又從去六月、奎宿之上出現之星者、是亦氣候不順之所爲、殊微星而不足災異、抑彗星之所出、翼宿軫宿之分野者、當東南之國、其所若有水火地動之類歟、縱雖有其理、元來治世聖德遍四方、何有變異之應乎、去文化四年秋、彗星出現之時、無指徵、無程消散畢、然者於今度亦漸芒氣減少、尤可無異消散歟、仍謹所勘申也、

文化辛未年〇八年八月十日　晴親

〔百草露十〕天保十四年二月

昨七日初昏、西南之方ニ彗星之芒光にも可有之哉、白氣相見え申候、疑與彗星共難見留候得共、此段御屆申上候、

巾二尺許、長十間許、西より南へ凡十八度、地高凡十五度、

右之通見留申候、以上、

二月八日　足立左內

彗星考　去七日初昏、西南之方彗星光芒にも可有之哉、白氣相見申候處、篤と彗星とも難見定、其長地平上凡五十度許、猶地下之長は難計、尤一昨八日相窺候處、地際雲多候得ば、雲上光相顯、矢張七日之處と粗同樣ニ御座候間、全彗星可有御座奉存候、右ニ付考證之處、無差憚申上候樣ニ被仰渡候ニ付、則相調候處、圖書集成之內、按、宋史徽宗本紀五年春正月戊戌、彗星見東方、其長竟闕文カ、按、金史哀宗本紀天興元年閏九月己酉、彗星出東方、色白、其長丈餘、彎曲如象牙、出角軫南行、至十二日、長二丈、十三日月燭不見、二十七日五更又出東南、長四五丈、至十月朔日始滅、漢土にも、右等之類有之、本邦にも、醍醐天皇延喜五年四月、彗星見る、長サ三十餘丈、光芒巽方、或長竟天、至五月初旬始

陳也、誠國初以來所未聞、國家一大災、人民一大厄也、九月、縣官命有司、修築大水所壞堤防、乃命肥後侯、備前侯、長門侯、伊賀侯、福山侯、圓龜侯、出石侯、飯〇飯恐作飫肥侯、臼杵侯、鯖江侯、磐國子、助工役、役數十萬人、費數十萬金、半歲功成、亦國初以來一大事也、

〔紫芝園漫筆八〕寬保三年癸亥十一月、彗星見于東壁、光芒斜指奎、二旬稍衰、至十二月十八日復甚明、長大倍前、連夕不衰、至明年正月朔夕、又增光明、形益長大、過元宵乃佚而不見、初見時在東壁二星之中、後稍移、而西北向營室下星、最後切近營室下星、而光指東壁上星、凡見者前後五旬而伏、

〔春波樓筆記〕文化八年未七月立秋の頃より、彗星初昏西北の方北斗の上に、大尊と大陽守との間に麗りて、尾の光芒長からず、亦曉東西に現れて、尾の光芒長し、白露、秋分、寒露、霜降、立冬と漸々南東に昇りて尾も長く、天頂を過ぎて、小雪、大雪頃に至りて、河鼓の少し上に留まりて、尾も漸々短く、冬至の頃に天に昇りて、竟に肉眼に見えず、又巳の年に彗星現れし時は、天頂より少し西によりて、光芒も至りて薄し、初昏より戌の時頃まで見えて西に落ちて、二十餘日を經て天に昇る、彗星、孛星天上にある事、其の數を知らず、亦行環も悉く異なりて、黃道より斜絡して、其の環亦楕圓なり、西洋人といへども、いまだ推步窮理せざる者乎、

〔續視聽草二集二〕彗星考　土御門陰陽權助

從七月下旬、晨昏彗星出現於翼宿之度、去北斗一丈餘、在太微垣之屬星常陣星、紫微垣之屬星相星等之側、光芒東指、其長七尺餘、戌剋後沒乾隅、寅剋後出艮隅、是近入北極、故入地之淺、而周天之速也、到今月夜々陰晴不定、委難測得、二日之夜所見聊東進、五日之夜去翼宿移軫宿、初在北斗第二三星之下、戌剋已沒、今移第四五星之下、戌剋猶未沒、是依東進、昏遲沒晨亦出遲出而已、更無犯太微紫微之兩垣、天文大成曰、紫微垣者、天子之大內、太微垣者、天子之正朝云々、今雖近兩垣、無犯入者、强無其恐歟、天經或問云、彗久不散者隨天轉、又云、晨見東方芒則西指、夕見西方芒則東指、彗星者火氣挾土

〔看聞日記〕永享五年八月廿九日、抑自廿五日彗星出現云々、未見室町殿御鬮云々、 九月一日、彗星今夜初見之、西方(戌間)有尾、其色白、占文未見、 三日、抑彗星占文在方進之、

今月廿五日昏戌時、彗星見西與戌之間在尾度、近貫索、其色白、 天地瑞祥志云、彗星者惡氣所生、關亂不明貌也、故除舊布新象也、 天文要錄云、彗星出其國更政立王公、斑固云、彗星出、國暴兵起、移其國、京房易傳云、彗星出、四夷來、兵革起、死人如亂麻、哭聲遍野、 内經云、彗星其色白爲喪、 又云、秋彗星見西方爲兵、 又云、彗星見、其歳五穀盡傷、有飢疾、

永享五年八月廿七日　　正三位賀茂朝臣在方

條々凶事驚存

〔台德院殿御實紀附錄〕(五)いつの比にか、彗星北方に現れしかば、騒亂の兆なりとて、世にいひもてなやむを聞玉ひ、人々よく考へみよ、大空の中にかゝる一星が出て、その兆は何くの國にあたるなどいふは、兒童の見なれ、善惡とも天に現るほどならば、世人なにをもてのがるべきと仰られて、少しも御懸念の樣おはしまさゞれば、いづれも安意せしとぞ、むかし晉の孝武帝の時、長星の現れしをみて、長星汝に一盃の酒をすゝむ、いにしへより萬歳の天子なしといひしにくらべ奉れば、公の天命に安じ、御身に立反り玉ひて、御自修ありしは、いと及びがたき御事にぞ、

〔紫芝園漫筆〕(八)壬戌(寛保二年)正月、彗星見於河鼓南及河鼓、是歳八月一日、大雨大風、自東北拔木發屋、信上下毛、武下總五州大水、朝馬山崩、信之松城、小室、武之忍城、河越、磐築、下總古河、關宿諸城皆壞、松城、小室最甚、所在堤防無有完者、人民溺死者不可勝數、則東都之地、北接下毛、東連下總、平地水深丈餘、其淺者亦數尺、渺々如海者方二三百里、都下東北一二十里内、士民或遁於高地、或上屋以待援、有幸得船筏而濟者、有數日不得援而絶糧者、其他爲魚鼈者、亦不可勝數、不惟衆庶爲然、諸侯貴人亦有死者云、於是縣官命有司出舟、以濟溺者、爲粥飯以饋飢餓者、都下富人有力者、亦競赴援施惠、不可具

以平等奉仕之、大納言家御衣冠、令出向祭庭給、御都狀御位署被加御筆云云、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年十二月十四日戊寅、今曉彗星見東方、爰掃部助範元、最前令參御所、客星出見之由申之、次晴茂朝臣彗星之由參申、其後國繼、晴平、晴成獻彗星勘文、　十六日庚辰、將軍家出御于庇御所、召司天等數輩、被仰下變異事、土御門大納言、左近大夫將監公時、伊勢入道行願、信濃判官入道行一以下人々、多以候簀子、司天等任位次申之、十三日陰雲之由一同申之、晴隆十四日曉有近太白之至、數返雖窺見、客星彗星不見之由申之、範元申晴耀之由旨、而猶伺見、可申子細之趣被仰下、大宰權少貳入道心蓮奉行之、　十八日壬午、卯刻彗星出見、長二尺餘、　廿七日辛卯、今夕彗星見西方、有室宿、芒氣二尺餘色白、　三年正月一日乙未、昏黑彗星見西、辟八度、

〔鳩嶺雜事記〕應安元年四月上旬比、彗星乾角出現、凶云々、

永和二年六月廿二日、寅刻彗星丑ノ方ニ見、光三尺餘、又其色白云々、同廿七日、戌刻亥方現光一丈餘云々、其後又曉如本丑方ニ見、

〔後深心院關白記〕貞治七年〇應安元年三月廿二日壬辰、去夜戌刻乾方有星、光芒甚長、彗星歟之由、今朝相尋親宣朝臣之處、無子細云々、去月十九日戌刻出現、西方一夜之後、連陰降雨之間不見、去夜は猶光芒之由申之、可驚々々可恐々々、　廿三日癸巳、彗星猶出現、　四月二日壬寅、彗星猶見、光芒頗微、　三日癸卯、彗星見、　十二日壬子、彗星此間不見云々、

永和四年九月九日己卯、被下勅書、去夜彗星出現之由、有世朝臣申之、今日御會中殿以前之儀、雖爲密儀、停否可爲何樣哉、可計申之由被仰下、予〇藤原道嗣申云、彗星出現驚承候、御會停否事、先規只今雖不覺悟仕候、猶被停止之條、可然候哉之由令申入了、後聞、被問人々云々、今日御會被停止了、

永德元年十月廿五日丙子、自去廿二日曉、彗星出東方、光芒長一丈五六尺許云々、　廿七日戊寅、今曉見彗星、光芒誠長、曆應以來雖見及、不如今度之光芒長、驚目者也、可恐々々、

〔百練抄 十三 後堀河〕貞永元年閏九月八日、彗星見東方、長二丈餘、　十月四日、有讓位事、依彗星之變爲攘也、

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年(○仁治元年)正月二日丁卯、戌剋彗星出現申方、芒氣三尺指辰巳方、色白赤、前陰陽權助親職朝臣最前參申御所、定員申次云云、但此去年十二月晦夜出現、人々見之云云、　四日己巳、戌剋申方彗星出現、芒氣四尺指巽方、色白赤、赤色少、本大如鎭星云云、　六日辛未、入夜陰、彗星不現、　七日壬申、戌剋彗星現歳星傍、(相去三尺餘所)芒氣指艮方、光芒五尺、輔星大如大白、　八日癸酉、戌剋彗星近歳星、(相去二尺餘所)今日被始行天變御祈護摩、　九日甲戌、彗星透雲間、芒氣不明、　十日乙亥、雨降、辰剋雷鳴、今夜彗星不現、　十一日丙子、戌剋彗星犯辟一星、(相去二尺所)　十五日庚辰、評定始也、先々正月以後雖行之、依彗星事及此儀云云、　十七日壬午、於鶴岡宮寺、令百口僧被行仁王百講、將軍家有御參、是依彗星出現事也、此外御祈等、宮根本地護摩(幽親法印)伊豆山本地護摩(賢長法印)　十八日癸未、彗星近奎、自去夜於御所被行屬星祭、晴賢朝臣奉仕之、今夜將軍家出御祭庭、右馬權頭政村爲御使、　十九日甲申、彗星入奎中、今夕重被行變異御祈、　廿日乙酉、爲御祈等、重被修護摩、(○中略、以下據島津本補)戌剋彗星出現、自去十七日至今夜、光芒次第盛也、　廿六日辛卯、戌剋彗星出現、犯王良第五星、光芒微薄、　廿七日壬辰、今年將軍家可有御上洛之由、雖思召立、彗星連夜出現之間、被慰窮民之條、可爲攘災上計之由有御沙汰延引、　二月六日辛丑、入夜彗星出現、自正月四日至今日不消沒、　十四日己酉、天文道等終夜雖窺見、彗變既入內天云云、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年三月一日丙申、寅剋彗星見室壁之間、長二尺云云、連日客星彗星無出現之例云云、　八日癸卯、京都使者參着、今月一日二日兩日曉天彗星出現、晴繼朝臣最前申之云云、　十一日丙午、入夜被始行彗星御祈、　十六日辛亥、爲彗星御祈、於御所被行天地災變祭、宣賢朝臣奉仕之云云、　十九日甲寅、戌剋爲彗星御祈、於御所被行七座泰山府君祭、泰貞、晴賢、資俊、國繼、晴秀、廣資、

汰不決、雖雌雄、但其後災殃非一、卽大極殿已下火災其明年也、凡司天之事、其道之靈猶難窮知、況於不習學人哉、隨此後禍亂可定是非歟、泰茂又申云、公顯僧正病惱之間、修祭兩度、（天曹地府、泰山府君、）定每度有感夢、彼僧正自筆注進之云々、卽以其正文令見事體、實嚴重殊勝、末世之珍重、一道之名譽也、泰茂依爲信者有如此事、驗德歟、

文治五年三月十七日丁未、季弘自天王寺歸洛、爲召問彗星事所召寄也、持參天文奏、載彗氣之由、余問云、彗星なれば彗星とこそ奏すれ、又異氣なれば妖氣とも客氣ともこそ奏すれ、乍置彗字改星字載氣字、古來未見此奏如何、申云、本無星、仍載氣之由也云々、又問云、元曆本無星、然而獻彗星奏、今依無星非彗星之由申之如何、申云、然者返預可獻妖氣奏、仰旨尤有謂云々、申狀無所據歟、尤不審了也、定長朝臣參上、以件人問季弘也、

〔愚管抄 六〕さて過る程に、承元四年九月卅日、はゝき星とて、久しく絶たる天變の中に、第一の變と思ひたる彗星いでゝ、夜を重ねて久しく消ざりけり、世の人、いかなる事かとおそれたりけり、御祈どもあり、慈圓僧正など、熾盛光法行ひなどして、出ずなりたれど、御つゝしみはいかゞとて有程に、同十一月十日に、又出きにけり、そのたび司天のともがらも、大に驚き思ひける程に、上皇信を致して、御祈念など有けるに、御夢の告の有けるにやとぞ、人は申ける、怱に御讓位の事を行はれて、承元四年十一月廿五日に、受禪（○土御門天皇讓位於順德天皇）の事ありけり、

〔吾妻鏡 十九〕承元四年九月卅日乙卯、戌剋西方天市垣第三星傍見奇星、光指東方、三尺餘、芒氣殊盛、長一丈計、此星如本文者、爲彗星之由有申之輩云云、　十月十二日丁卯、京都飛脚參着、去卅日異星爲彗星之由、主計頭資元朝臣進勘文、依變公家被行內外御祈等之上、可有改元云云、

〔吾妻鏡 二十六〕貞應元年八月二日、彗星見戌方、軸星大如半月、色白光芒赤、長一丈七尺餘、　十三日、自二日至去夜（十二日）彗星連夜出見、仍今曉百日泰山府君御祭被始行之、

氣云々、天喜四年七月廿八日、彗星見于東方之由、主計頭師任朝臣奏聞、陰陽頭章親朝臣奏客氣之由、先例有相論事歟、抑依日數之長短、定咎徵之輕重、宗明說數日見爲輕、兩日見爲重云々、師遠依之勘申、漢書志云、彗星其出久者爲其事大也云々、同申云、以久見可爲重歟、以早沒可爲重之由、未習傳、天仁三年五月、彗星出見之時、匡房卿申說云、件星早沒之時災少、久見之時災多、此間若早沒者、可爲公家之御慶之由、令申云々、然者今度兩夜見、其災可少歟、但宗明說可尋事歟、凡彗星者希代之變、除舊布新之象也、本文所載兵喪、水旱、疾疫、謀反、飢饉等之類、隨行度有其徵、○下略

〔玉海〕治承二年正月十八日癸丑、泰茂來云、去七日彗星見、去年十二月廿四日又見云々、今夜公家有玄宮北極御祈、泰親朝臣奉仕之彗星者第一之變也、去年熒惑入大微、今年彗星見、亂代之至以之可察云々、但時晴、季弘、資元、廣元等、申非彗星之由云々、

元暦二年正月十二日丙申、大外記頼業來語云、只今自光雅之許示送云、彗星蚩尤旗等例可勘申云云、正朔東方有赤氣、而司天之輩各有執論、泰親子息等季弘、業俊、泰茂、申彗星由、廣元、資元等申蚩尤旗之由、時晴、晴光等申客氣由云々、此間大藏大輔泰茂來召、前回天變事、彗星之條、申無異議之由、余○藤原兼實問云、本無星云々、然者彗之條如何、申云、去治承元二年所現之彗、又以無本星、然而泰親申彗之由、季弘稱蚩尤旗、相論之間、泰親朝臣仰天而請天判、若泰親申非彗、申彗者可天罰、季弘祭文申非彗、若訛者又可蒙罰云々、而不經幾程受重病、及危命、于時泰親自書祭文修祭禮、申請天、即病愈、然則彼時事切々全不可依星有無、加之宋書天文志、以雲氣稱力星、以氣稱星之證、以之爲指南、何況彗體不似餘氣、口雲等更不可見誤事也云々、余問云、會釋可然、但以有星爲彗、以無星爲蚩尤旗、而謂彗無星者、以何可分別彗與蚩尤哉、申云、只同體異名也云々、此條頗不分明歟、然而不及執論、余案之、當時天下之爲體、彗孛之災猶可輕、而于今不見出星、成奇之處忽出現、誠可謂彗歟、但於無星者、猶難一定歟、天喜四年、安章親與中師平有此論、章親依無星申客氣、師平依五星淩沒之次第申彗、各雖進勘文、不盡沙

〔台記〕久安二年十二月三日、上皇〈崇徳〇〉侍中藤經憲來曰、朔夜彗星見于西方、今夜見之既實也、　六日、先日彗星在西方、光長二三許丈、今夜見未方、光十許丈、　廿二日、泰親曰、大外記師安曰、自今夜彗星消不見、異于臣之所見、〈泰親所見者、自十五日消、〉　三年正月十二日丙子、寅剋使家臣令見彗星在申方、其光三許丈、差庚方、

〔本朝世紀〕久安三年正月十二日丙子、今曉寅剋、彗星見東方、光長一丈、在女虛間、其光近匏攸、〈瓜〇攸字恐誤〉星也、　十三日丁丑、今曉彗星度分同昨日、但頗倚北、　廿二日丙戌、今日權中納言公敎卿參仗座、被免未斷輕犯者五十七人、上卿召撿非違使左衞門少尉源近康、仰云、彗星爲變、仍所免也、〈近康朝臣、爲義、季盛、國忠、向左獄、光康朝臣、宗弘、義仲、季兼、向右獄、〉　廿四日戊子、今日彗星不見、　廿六日庚寅、於東大寺被行千僧御讀經、左中辨藤資信朝臣、右少史中原知親等下向行之、〈去廿二日、內藏寮頭請送付職事、御讀經料麻布千段被下宣旨、〉依長星御祈也、　二月十日甲辰、今日權中納言公敎卿於仗座、召大內記藤長光、被仰可草進依長星事可有非常赦詔書之由、淸書後御畫如常、次召中務大輔平淸盛、被下詔書、

〔一代要記〕〈後白河〉保元元年七月十一日曉、彗星見寅方、長六尺計、色白、同十二三日間、東北行、至十五日曉、犯五諸侯三公星、相去三寸許、

〔保元物語〕〈一〉將軍塚鳴動幷彗星出事

去八日〈〇保元元年七月〉ヨリ彗星東方ニ出、將軍塚頻ニ鳴動ス、轉變地隔占文ノサス所、愼更ニ不輕、

〔百練抄〕〈高倉〉治承二年正月七日、寅剋彗星見巽方之由、泰親朝臣奏聞、又去年十二月廿四日出現云云、

〔山槐記〕治承二年正月七日壬寅、今曉〈彗星事〉巽方彗星出、天文參陣、付藏人勘解由次官基親奏之、去年二月廿四日出、其後不出、今曉又出也、頭權大夫〈光能〉曰、尋無事之時例、被行之時、御祈之後可有沙汰也、依此事爲御使參院、所歸參也、　後日聞、今夜以後又不出云々、泰親朝臣稱彗星子息等幷時晴非彗星客

余出見之、　廿四日己亥、彗星見、光長二丈許、　廿五日庚子、頭仰云、東方彗星沒、復自二十三日又見西方、而天文道未奏、雖然件由可載宣命者、召少内記守光仰之、依大内記長光重服也、有巧文章之聞、故令作宣命也、〇中略　藏人木工頭範家來仰云、依懼彗星之變、欲行善政、可令申其事者、余頓首對云、以弱冠居三吏之任、夙興夜寐、莫不危懼、至朝夕趨拜之勤者、暫無所怠矣、如此之朝議者、不能計申、所以者、何勘古今之例、皆訪於古老賢才、臣一無之、爲朝爲家爲身可恥者歟、不受詔冊無遁、願陛下宥之、余又問云、此事被問誰々乎、對云、左大臣(有仁)權大納言實行、同雅定(左大將)同伊通、權中納言宗能、(皇太后大夫)前中納言顯頼、參議顯業、(左大辨式部大輔)等也、〇中略　孔雀經法、今日可被結願歟、依彗星又見延引云々、件法於院御所、仁和寺法親王(覺法)自去十日被行、　五月三日戊申、參院、依孔雀經法結願也、其賞以阿闍梨寛臺叙法眼、所請消星變、而其星雖消、又見西方、因之被延引其法、其後星不消、爲法瑕、爲宗耻、時人皆以嘲哢、法皇爲休親王歎賜賞云々、俗人名之謂星出賞、　六日辛亥、爲消彗星災、公家於法勝寺被行千僧仁王經御讀經、(去三日、權大納言宗輔卿、定中將、)未剋參彼寺、先之法皇皇后渡御、余依足病不供奉、申剋還御、余自此退出、　七日壬子、彗星光漸微細、但若被消月光歟、　十二日丁巳、彗星猶見、但無光芒、(十三日又同)去八日其光纔細、九、十、十一三箇日天陰、今夕唯有星而已、無芒氣、師長云、先例芒氣盡時、星又不見、未知如此之例、十六日夜見之、光芒三許尺、以之思之、十二日依月近其光不見乎、十六日依與月遠其光見乎、十四五日天陰不見、　十六日辛酉、彗星又有光芒、　廿日乙丑、彗星猶不消、孔雀經法(仁和寺法親王)又无其驗、弘法慈覺兩門、既墮地之世乎、嗟哀哉、　六月七日辛巳、師安來云、去夜彗星不見、去月廿六日夜、天晴彗星見、其後毎夜陰不知有無、去夜雖屬晴不見、此間大僧都定信於禁中修仁王經法、可謂有驗者乎、先日大法等、全無其驗、至仁王經時始乎、孔雀經無驗而有賞、仁王經有驗而無賞、猶丁公見戮雍齒得封矣、

〔百練抄〕(七近衞)久安二年十二月一日、彗星見坤方、

〔帝王編年記(二十崇徳)〕天治元年七月以後、彗星出現、

〔百練抄(六崇徳)〕大治元年七月一日、彗星見北方、

〔中右記〕天承二年(○長承元年)八月廿八日、從去廿五日、天文博士兼時談云々、此四日彗星見、天氣頗亘天也、其後七八夜見之者、　九月六日、入夜助教師安入來云、去月廿五日壬子夜曉寅剋、彗星見于北方、長三尺、其色白、尾指西、在觜度、近入敷星、同廿六日夜天陰不見、廿七日夜亥剋見寅方、與婁第三星相近、長三丈餘、光芒殊盛、尾指戌亥、廿八日夜、南行、其光衰微、長一丈餘、芒氣相及奎宿、廿九日夜、在同座、猶南行、與下司空星相並、芒角減少、長二三尺所、卅日夜、今月一日夜、共天陰不見、二日夜以後、消不見、

〔百練抄(六崇徳)〕保延四年七月廿日、彗星見戌亥方、

〔百練抄(七近衛)〕久安六年(天養二七廿二改元、依彗星變也、)元年四月五日、彗星出東方、(此後數日見、至六月不消、)　廿五日、依彗星變、召德政意見於公卿八人、內大臣(○藤原賴長)辭而不進、

〔台記〕天養二年(○久安元年)四月十五日庚寅、光房來云、爲攘彗星災、可被立廿二社幣、依急思食、十八日可被立、早可定申者、對云、今夕參內可定申者、未剋參院、次參殿、(○藤原忠實)依賀茂詣定、宗能卿云、十八日復日、彗星奉幣可有憚歟、以此旨申殿、卽被問陰陽師憲榮、申云、先例不覺、仍奉幣延引、余(○藤原賴長)辭申上卿、爲明日修佛事也、　廿日乙未、師長來云、自四日夜始見彗星、閭巷說、去月晦頃始出云々、　廿一日丙申、光房來云、彗星奉幣、廿五日可被立、早可定者、令申今日定之由、未剋奉幣賀茂、晚陰、先向攝政(○藤原忠通)亭、權右中辨朝隆朝臣申云、曆博士憲榮申云々、定日猶可避復日歟、今日復日也如何、答云、未聞定日用吉日、卽以此旨申殿、仰云、舊例更不擇定日善惡、近例或忌之歟、且又任先例可被行事也、卽問師安、申云、天祿元年依彗星奉幣用復日、何覽定乎、夾算日記奉之殿下、仰云、早可定、(○中略)申剋許、師安來云、自今曉彗星沒不見、　廿三日戊戌、彗星見辛方、光長五許尺、指東、但其殘光雲掩不見、長短難定、

曰孛、皆本類星、末鋭也、甘氏曰、廼生本類星、末類彗、然則彗星者、猶本可見星歟、乙巳占云、凡候雲氣之法、初出若雲非雲、若霧非霧、凡遊兵之氣、无根本、或如疋布、或兩頭鋭見云々、如此之類不可勝計、今件氣色白、合此等說、若可謂客氣歟、彗孛雲各以體異、何爲彗星哉、

右件客氣、始自去朔日庚戌晩所見也、仍勘占文奏聞先了、而師任朝臣申彗星天變、惟星雲相違、重可辨申者、謹以勘申如件、

天喜四年八月廿六日　陰陽頭安倍朝臣章親

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜五年八月四日、寅剋彗星見東方、長丈餘、

治暦二年三月六日、曉彗星東方見、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕治暦二年四月一日、酉剋彗星西方見、司天之所奏、災孽可愼、

〔百錬抄 五 堀河〕承德元年九月一日以後、彗星見西、

〔諸道勘文 四十五〕謹奏　變異事

一今月四日丁酉昏酉剋、彗星出于坤方、芒指震方、觸天倉星及天苑星間、長十許丈色白、同六日夜光芒已微、長一許丈、同七日夜頗東行、長三四尺許、同八九十日夜天陰不見、同十一日夜又東行、同十二、三、四日夜天陰不見、同十五日夜東行長二許丈、〇中略

右變異旨條如件、抑瑞祥志云、彗星見、長大災深、其短小災淺云々、今見芒氣既及半天、譴告之至不可不愼、重撿天文書云、彗星何熒惑逆變也、不救則下謀上、救修政爲善、則國安社稷事、又云、君爲禍、則彗星出、又云、彗星多春見、爲小凶云々、以之謂之、彌理政修德、變凶爲吉歟、今皆見之至、謹以申聞、謹奏、

長治三年正月十七日　正五位下行大外記兼主計權助助教中原師遠

〔百錬抄 五 堀河〕嘉承元年正月四日、彗星見于坤方、長十許丈、卅餘日而滅、

〔百錬抄 五 鳥羽〕天永元年五月十三日、彗星見東方、長五尺、

被行之事、并前々有此變時如何者、尋見古勘文占文相同、然而奉爲主上無殊事、除舊布新之文、可有案歟、燒亡、大地震、執柄人等事其數也明、然而不注其事、依有所憚、只注可有案之由、又可被行之事等注送了、

〔左經記〕寛仁二年六月廿三日甲寅、始自去十八日戊亥角彗星出、(七星乃從上第四星乃下二當二坐長一丈許)傳聞、(吉昌覽之)如此異星、先例參勘文之後、不經幾滅癈云々、而奉勘文之後、及數日不滅癈者、

長元七年八月十六日癸酉、頭辨語云、十三日彗星見東方、仍奉密奏、或人被申云、件星大風以前出見、而天文道運見之、運奉奏云々、古傳云、此星出時、大風若地震云々、是改舊之徵也、又多有改元事云々、

〔百練抄〕(四後冷泉)天喜四年八月四日、彗星見東方、

〔諸道勘文〕(四十五)彗星客氣論事(天喜四年)

勘申彗星見東方形象事

天地瑞祥志云、晉志曰、彗星所謂掃星、本類星、末類彗、小者數寸、長或竟天、彗體無光、傅日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在南北皆隨日光而指也、漢志曰、歲星贏而東南見彗、甘氏曰、不出三月迺生彗、本類星、末類彗、長二丈也、孟康曰、歲星晨見而行疾則不見、不見變爲祆星也、

今件星晚見東方、待日光而西指、長二許丈、本廣五六寸、中小帆、末一尺餘、而芒角似箒、其色白、又歲星、去月以後在角度、順疾行不見、旁引勘本條、學見巳无謬、尤可謂彗星矣、

右彗星形象、依宣旨勘申如件、

天喜四年八月十七日　　　　從四位下行主計頭兼備中介中原朝臣

勘申東方所見客氣非彗星事

謹撿瑞祥志云、漢志曰、彗字者陰陽之精、本於地而發於天也、彗體无光、待日而爲光、晉志云、彗星所謂掃星也、本類星、末鋭云々、薄讃經云、荆州占彗星者所謂掃星也、五星逆錯、變氣之所生也、若芒氣四出

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丁巳、是夕彗星出于西方、長可五丈、
〔文德實錄七〕齊衡二年二月癸丑、有長星出東北、
〔三代實錄八清和〕貞觀六年三月十四日庚子、彗星見東、在營室宿、長四許尺、
〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十一月廿三日戊午、彗星見紫微宮西、貫內階、長可五尺、
〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年四月廿八日庚辰、卯時白彗見東北、其色赤、以成芒角、至五月二日、其體長可丈餘、始出五車、稍掃八穀星、其氣雖耗減而未滅芒、
〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕延喜五年四月十五日癸卯、乾方見彗星、　十六、十八、十九日同見彗星、　廿四日壬子、諸社臨時奉幣、乾方見彗星、長卅餘丈、光芒指巽方、　廿五日癸丑、乾方見彗星、長竟於天、廿六、七、八、九日同見、　五月一日己未、彗星今夜漸以細薄、　三日辛酉、乾方見彗星、自今夜不見、
〔日本紀略一醍醐〕延喜五年四月十五日、月蝕、彗星見乾方天、　廿四日、奉幣諸社、依彗星也、　五月二日、彗星見天、　六月十五日、詔行大赦令、依彗星之象也、
〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜七年二月廿五日辛未、彗星食太白、長三丈許、
〔日本紀略一醍醐〕延喜十二年六月三日己卯、戌亥角、彗星見、至九日見之、　十二日戊子、彗星見酉方、
〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕延喜十二年六月三日己卯、始自今夜、戌亥角、彗星見、五六日同、　八日甲申、見辰巳、　九日乙酉、見乾方、　十二日戊子、見酉方、
〔扶桑略記二十六村上〕天德五年〇應和元年二月廿七日辛卯、酉時坤方、彗星似野火氣、
〔日本紀略六圓融〕天延三年六月廿二日癸亥、曉彗星見艮方、其形如團扇、長五六尺、連夜久見、
貞元二年二月廿四日乙卯、戌剋艮。巽。兩。方。彗。星。見。
〔日本紀略九一條〕永祚元年六月一日庚戌、其日彗。星。見。東。西。天。　七月、中旬連夜、彗星見東西天、
〔小右記〕長和三年二月九日乙丑、頭辨付資平、寫送天文勘文、自去正月廿七日戌刻、彗星見天船、此卷舌南、長二尺、占文尤重可

災深、短小見不久、災狹、晉書志云、其芒或長或短、光芒所及則爲災、又云、孛彗所當之國是受其殃云々、
今按、隨光芒長短、依見現日數、定咎徵之輕重、指厄會之遠近歟、○中略
右管見依覃、甄錄如件、抑稱撿傍例、延喜五年四月彗星見乾、光芒指巽、長卅餘丈、見及二旬、然而彼時
聖上運文、群下樂余、百姓悅其惠、來世歌其治、易占所謂有道之君、雖遇變異、即免其災、得乘運數、是既
叶其議者也、然則擬彼延喜例者、何謂有其懼哉、仍勘申、

長治三年正月卅日　主稅助兼直講淸原眞人信俊勘申

〔日本書紀 二十三舒明〕六年八月、長星見南方、時人曰彗星、　七年正月、彗星廻見于東、　十一年正月己巳、
長星見西北、時旻師曰、彗星也、見則飢之、

〔日本書紀 二十九天武〕十年九月壬子、彗星見、　十三年七月壬申、彗星出于西北、長丈餘、

〔續日本紀 八元正〕養老二年十一月壬寅、彗星守月、

〔續日本紀 三十光仁〕寶龜三年十二月己巳、彗星見南方、屈僧一百口、設齋於楊梅宮、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年三月丁卯、彗星見于東南、其光芒東至天涯、　壬申、彗星猶見、但爲月光所
奪、其光芒微少耳、

〔續日本後紀 七仁明〕承和五年十月丙午、是夜彗星見東南、其氣赤白、竟天數許尺、須臾而不見、　十一月
辛未、彗星見東方、是星起十月廿二日、至今月十七日、每夜寅剋見東方、其長七尺許、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年正月丙子、彗星見癸方、長一丈許、　二月丁卯、令東西兩寺講讀般若心經、
以彗星頻見也、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年十一月壬寅、彗星見西方、　丁巳、彗星猶見、　十二月壬午、勅、請僧百口於
八省院、限三箇日讀大般若經、殊令內記作咒願文、同令五畿內七道諸國讀之、迄于事畢、禁斷殺生、爲
彗星屢見也、

彗星事（信俊 長治三年）

彗星昏見事

一彗孛之體幷字意等

漢書志云、歲星贏而東南（孟康曰、五星東行、天西轉、歲星晨見東方、行疾則不見、不見則變爲妖、星石氏□□）見彗星、甘氏曰、不出三月迺生彗、本類星、末類彗、又云、凡五星早出爲贏、贏爲客、晚出爲縮、縮爲主人、又云、超舍而前爲贏、退舍爲縮云々、又云、大白出晚爲彗星、將發于亡道之國、又云、辰星出晚爲彗星、天地瑞祥志云、彗星者天地之旗也、（守曰、五星精發爲妖星也、）晉書志、史臣案、彗體無光、傅日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在日南北、皆隨日光而指、又曰、偏指曰彗、芒氣四出曰孛、孛者孛々然、非常惡氣之所生也、內不有大亂、則外有大兵、天下合謀、闇蔽不明、有所傷害、晏子曰、君若不正、孛星將出、彗星何懼、由是言之災甚於彗、公羊傳曰、孛者何、彗星也、何休云、狀如彗也、又云、彗者邪亂之氣、掃故置新之象也、又云、孛者邪亂之氣也、後漢書志云、孛星者、惡氣所生爲兵亂、其所以孛德、孛德者亂之象、不明之表、或謂之彗星、又云、韓楊占云、其象若彗竹彗樹木條、東宮切韻云、孛者、郭知玄云、袄星氣孛々然、麻果云、星文也、祝尙丘云、星惟氣飛似彗、穀梁傳、孛者弟也、劉非云、弟々氣起貌、漢書志又云、彗孛者陰陽之精、其本在於地、而上發於天者也、董仲舒以爲、孛者惡氣之所出也、謂之孛者、言其孛々有所妨蔽、闇亂不明之貌也、劉向以爲、君臣亂於朝、政令虧於外、則上濁三光之精、五星贏縮、變色逆行、甚則爲孛、

今按、彗星者五星之變、非常惡氣之所生也、抑彗孛者邪亂之氣、掃故置新之象、又限錯失其次、又關亂不明之貌也、

光芒長短見現日數

天地瑞祥志云、甘氏曰、彗短爲飢亂、長爲兵、見三日爲一旬、見一旬爲一歲、京房曰、彗長一丈爲十月、二丈爲二年、五丈爲五年也、漢書志云、其出久者爲其事大也、後漢書志劉昭注云、長短无常、其長大見久

〔和漢三才圖會 天象三〕彗星(ハヽキボシ)　攙槍　孛星　長星(和名八八八木保之)　左傳云、天之有彗、以除穢也、有彗。孛。長。之。三。種。占有異同、彗星其光芒長、參參如拂帶、(多爲除舊布新、火災之表、)　孛星其光芒短、光四出、蓬蓬物物、(同占)背　長星其光芒有一直指、或竟天、或十丈、三丈、二丈、(多主兵革)　緯書云、彗星色蒼者王侯破、赤者賊起、　按、彗星凡晨見東方則芒西指、夕見西方則芒東指、而從于日也、日久則勢盡力衰、故彗孛無百日不滅者、凡彗見必主大風、大旱、地震、災疾矣、長星最爲凶、孛星特重、多兵起、蓋此非本星變者、又非新出來者、而近地處、人目止見光芒而已、其芒以附於何星占其變也、本星無事、故中華若彗見時、本朝不然、但示其土地不祥也、猶眼病人見燈、以爲有光芒也、

〔諸道勘文 四十五〕勘申坤方長星事 中略

乙巳占圖云、孛者彗之類、偏指曰彗、四指曰孛云々、

今案、孛彗之條、其體相異歟、

天官書曰、孟康曰、五星之精、散爲六十四變記不盡、

天地瑞祥志云、晉志曰、彗星所謂掃星也、本類星、末類彗云々、小者數寸、長或竟天云々、彗體无光、傅日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在南北皆隨日光而指也、

薄讃經云、荆州占云、彗星者所謂掃星也、五星逆錯變氣之所生也、若芒氣四出曰孛、皆本類星、末類彗也、

甘氏曰、廼出彗本類彗、末類彗云々、

今案、件星去四日昏見坤方、長十許丈色白、其本有星、芒氣指東、又五星之中、辰星已伏、孛見之處、既叶本條歟、愚意之所及、尤可謂彗星歟、

右彗星形象、大略勘申、如件、

長治三年正月　日　　大外記中原 中略

彗星

〔鎔造化育論上〕日輪外圍最近、第一郭曰鎭星圈、水星運動之行環也、諸曜中、此星最近于日之在位、故其進歩最速、恒以大地八十七日十一時半餘、一周日輪之外圍也、凡星之攝乎日輪與大地之間、曰上。之。合。伏。、日輪之攝乎星與大地之間、曰下。之。合。伏。、又大地之介乎日與星之正中、曰對。衝。、此星在大地行環之內、故有合伏而無對衝也、

〔倭名類聚抄一景宿〕彗星　兼名苑云、彗星、其形如箒篲也、音遂、又音歲、和名八木保之

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕按、釋名、彗星、光稍似彗也、爾雅郭璞注、其形孛々似掃彗、兼名苑注蓋本此、下總本篲作彗、按、說文、彗埽竹也、又載篲字云、彗或从竹、是彗篲同字、然廣韻篲埽帚、彗星名、分爲二字、兼名苑注應與之同、則從竹似是

〔晉書天文十二〕妖星、一曰彗星、所謂掃星、本類星末類彗、小者數寸、長或竟天、見則兵起、大水、主掃除、除舊布新、有五色、各依五行、本精所主、史臣按、彗體無光、傅日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在日南北、皆隨日光而指頓挫、其芒或長或短、光芒所及則爲災、二曰、孛星彗之屬也、偏指曰彗、芒氣四出曰孛、孛者孛孛然、非常惡氣之所生也、內不有大亂、則外有大兵、天下合謀、闇蔽不明、有所傷害、晏子曰、君若不改孛星將出、彗星何懼乎、由是言之、災甚於彗、

〔類聚名義抄十雜〕彗音遂妖星　彗星ハヽキホシ

〔伊呂波字類抄保天象〕彗星　攙星　納佝　已上同

〔和爾雅一天文〕孛星ホツセイ　彗星スイセイハヽキホシ並妖星、孛星光芒短、其光四出、彗星光芒長、如掃帚、

〔塵袋一〕孛星ホツセイト云フハ、孛ハ何ナル心ゾ、
文選ニ星辰不孛日月不蝕ト云ヘルヲ、李周翰釋云、孛ハ亂也云々、星ノ光ノミダレタル様ニヒロゴリタルカタチナルベシ、大戴禮ニ、聖人有國、日月不蝕、星辰不孛ト云ヘリ、文選ノ文モコノ心オナジ、

辰星

希代變異也、見于延喜天暦二代御記云云、

〔後深心院關白記〕文和五年（○延文元年）七月十一日己丑（裏）去夜亥時太白犯大微宮東蕃上相星（所七寸）延文四年十一月廿三日壬子、今夜太白犯哭星云々、五ケ大變一也、可愼々々、

〔康富記〕嘉吉四年（○文安元年）四月廿七日丙午、今夜太白與塡星相犯三尺所云々、而天文安倍有重卿、太白、塡星、辰星相合、爲三星合之由申之、暦道在貞朝臣者、太白、塡星二星合之由申之云々、

〔新蘆面命〕元祿甲申（○十七年、改元寶永、）三月八日、駿河臺（江）參ル、助左衞門殿御父子（江）懸御目、年來ノ御禮共申上候、（略○中）去冬以來ノ地震ノ事、物語ニ及ビ被仰候ハ、金星房心ヲ守リ、又ハナレ、又房心ヲ犯シ候ヨリ、イカサマ重キ御愼可有ト存候、火星ノ事ハ、守ニテモ犯ニテモ無之、タヾ過候計リニ候間、サシテ替ルコトハ有之マジキモノニ候ヘドモ、近年火星ノ房心ヲ過候ニ、火災等多ク候ヘバ、是亦穩ナラザルコト丶申上候、然レドモ火災等ノ敬（ツヽシミ）トバカリ存候、カクノ如ク大地震可有トハ、カツテ不得考候ト被仰候事、

〔和漢三才圖會（一天）〕辰星（しんせい）（水曜、生於申、壯於子、死於辰、）　登壇必究云、辰星宰相之祥也、常以二月春分見奎角、五月夏至見東井、八月秋分見角亢、十一月冬至見牽牛、出以辰戌、入以丑未、二旬而入、晨候之東方、夕候之西方、常隨太陽而行、然或前或後、不出三十度之外、亦一月一宮、一歲一周天、　按、所謂春分見奎角之角字當作婁、又授時暦云、辰星前於日後於日、不過二十三度、

〔晉書（十二天文）〕辰星曰、北方、冬、水、智也、聽也、智虧聽失、逆冬令傷水氣、罰見辰星、辰星見則主刑、主廷尉、主燕趙、又爲燕趙代以比宰相之象、亦爲殺伐之氣、戰鬪之象、又曰軍於野、辰星爲偏將之象、無軍爲刑、事和陰陽、應效不效、其時不和、出失其時、寒暑失其節、邦當大飢、當出不出、是謂擊卒、兵大起、在於房心間地動、亦曰辰星出入躁疾、常主夷狄、又曰蠻夷之星也、亦主刑法之得失、色黃而小、地大動、光明與月相逮、其國大水、

兵革不絶、大將軍去國境云々、

〔吉記〕壽永元年三月廿八日戊戌、漏剋博士時職入來、密語近日天變事、○中略

一去二月廿一日酉時、太白犯歲星、去一尺五寸、　太白西兌之位、主西武大將軍也、歲星東震之位也、合國失地不出二年有兵、天下大飢、盜賊起、天火下、女主病、五穀不收、南國以兵飢、王者誅、將軍疾疫、大將死、必有亡王、○中略

一今月四日戌時、太白犯熒惑、相去一尺三寸、　天下有憂、君臣不和、大將軍死、易位立太子、鬪其國弱、客有利、

〔玉海〕壽永三年○元曆元年六月廿四日辛丑、此日天文博士廣元持來奏案、太白犯井云々、文云、天子浮船失珍寶云々、爲西主不快之變歟、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十月三日甲寅、天文博士資元朝臣、去月十七日書狀參著、太白變事所副進一卷勘文也、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十八日辛丑、寅剋太白陵犯熒惑星、二尺計云云、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年○嘉祿元年三月廿一日壬午、此間稱熒惑星之告、於京都專此事之由、六波羅被申送云云、　廿四日乙酉、日來太白經天、爲變異之由、司天等依申之、今日被行御祈、民部大夫行盛爲奉行云云、　十月廿七日甲寅、國道朝臣參武州御亭申云、今曉太白入氐、御愼之文分明歟、隨而日來天變連々出現訖、御所營作事可被延引歟云云、仍被行御占、可有何年御沙汰哉之趣也、可爲今年之由各占申、○下略

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年○貞永元年七月八日丁亥、今曉寅剋太白犯東井、是安德天皇沒西海給、寶劒紛失時變也、天子浮船失珍寶文之由、天文道申之云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年○曆仁元年閏二月十五日辛酉、戌剋維範朝臣又參六波羅殿、太白犯昴、歲星犯鬼星由申之、仍爲將軍御祈被行屬星祭、在衡朝臣奉仕之、　五月五日己卯、戌剋太白犯軒轅大星、

〔日本後紀 十三桓武〕延暦廿四年八月癸亥、太白與鎮星見東方、
〔日本後紀 十七平城〕大同三年九月庚寅、太白晝見、
〔日本紀略 嵯峨〕弘仁十年八月丙午朔、太白晝見、
〔日本紀略 淳和〕天長六年五月丁未、太白晝見、連日不已、
〔三代實錄 十四清和〕貞觀九年九月廿七日癸亥、太白在軫經天、與日相去可十餘丈、
〔三代實錄 十九清和〕貞觀十三年正月十四日辛酉、自去十日太白經天、至今日不見、
〔三代實錄 二十清和〕貞觀十三年十二月三日甲辰、太白從西貫東、共在口宿、
〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年五月十四日乙未、太白晝見經天、卽歷軒轅、留宿少微、
〔三代實錄 三十二陽成〕元慶元年八月廿九日丁酉、晨太白與歲星同舍、相去八寸、後日晨相去尺餘、
〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年十一月十九日庚戌、晨太白見、箕度逆行未復、
〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年八月廿七日己卯、寅時太白順行、犯陵太微左執法、
〔扶桑略記 二十四裏書醍醐〕延喜廿三年(〇延長元年)五月十七日庚申、太白晝見、
〔日本紀略 二朱雀〕天慶二年六月四日甲戌、月與太白成變、星晝見、
〔日本紀略 四村上〕天德四年四月五日甲戌、太白晝見、
〔權記〕正曆三年正月四日己亥、晝午時太白經天見、又同日昏酉時歟、太白正在婁同宿、(相去一尺八寸所)同五日密奏、
〔本朝世紀〕久安五年六月十三日癸亥、曉更太白鎮星相犯、相去一寸、　七月廿八日丁未、太白歲星相犯、相去八寸許也、在張六度、占云、佩儲將軍可愼、自去廿七日信巽卦用事(〇此間有蝕字十數字)可愼、又云主亡云々、　六年七月十二日丙戌、今日午剋太白晝見、
〔帝王編年記 二十二安德〕壽永元年二月三日、夜、太白犯昴星、是重愼也、天文要錄云、太白犯昴星、四夷亂兢、

波里、〇下略

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕

夕星毛、往來天道及、何時鹿、仰而將待、月人壯、

〔神樂歌〕明星　吉々利々

きゝりゝ、せんざいいやう、びやくえゆとう、ちやうせつえんてう、えやう〳〵げや、あかぼしは、みやうえやうは、くはやこゝなりや、なにしかも、こよひの月の、たゞこゝに、ますや、たゞこゝに、たゞこゝにますや、

びやくえゆんと、ちやうせつ、えんてう、えやう〳〵げや、あかぼしは、みやうえやうは、くはやこゝなりや、何しかも、こよひの月の、たゞこゝに、たゞこゝにますや、たゞこゝに、たゞこゝにますや、

〔續日本紀九元正〕養老六年七月己卯、太白晝見、　丁酉、太白犯歲星、

神龜二年六月癸酉、太白晝見、　十月己卯、晝太白與歲星芒角相合、　三年十二月乙卯、太白犯塡星、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年五月乙卯、太白晝見、　八月丁卯、太白經天、

天平二年八月己丑、太白入大微中、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年六月甲辰、太白入東井、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年八月乙酉、太白與辰星相犯、　八年十月癸酉、夜太白入月、星有光、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年六月庚申、太白晝見、

〔續日本紀三十六桓武〕天應元年六月辛亥、太白晝見、　甲寅、太白晝見、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年九月乙未、太白晝見、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆六年七月己未、太白晝見、

〔日本紀略桓武〕延曆十四年九月壬戌、太白晝見、

〔晉書天文十二〕太白曰、西方、秋、金、義也、言也、義虧言失、逆秋令傷金氣罰見太白、太白進退以候兵高埤遲速靜躁見伏用兵皆象之吉、其出西方失行、夷狄敗、出東方失行中國敗、未盡期日過參天病、其對國若經天天下革、民更王、是謂亂紀、人衆流亡、晝見與日爭明、強國弱小國強女主昌、又曰、太白主大臣其號上公也、大司馬位謹候此、

〔類聚名義抄七〕長庚ユフツヽ、暮宿類

〔和爾雅一天文〕長庚ユフヅヽ金星後日而入 明星ミヤウジヤウ金星先日而出、則謂之啓明、亦謂之明星、東有啓明、西有長庚、

〔和漢三才圖會一天文〕太白たいはく金曜、啓明、曉明星、長庚、宵明星、和名由不豆々、生於巳、壯於酉、死於丑、 登壇必究云、太白天將之象也、常以正月甲寅與熒惑晨出東方、二百四十日而入、四十日又出西方、二百四十日而入、三十五日而復出東方也、出以寅戌入以丑未、其行也前於日後於日、不過四十八度、晨先日出東謂之啓明、夕後日入西謂之長庚、以辰申爲界、晨見巳位、夕見未位、 按太白俗云明星也、詩小雅曰、西有長庚者是也、 五雜組云、太白者兵星也、太白覺天則兵戈大起、

〔鎔造化育論上〕日輪第二郭曰太白圈、金星運回之行環也、此星亦距日不遠、而進步頗速也、恒以大地二百二十四日八時半餘一周焉、諸曜之爲物也、其質大地同類、而非有自己之光暉者也、而其所以作光暉者、皆是受日天之映照而發焉、故昊天曰、旦則至不可知其處也、唯此金星上合伏、或有晝見焉、因而可知其最近乎大地也、此星在大地行環之內側、而雖距日之最遠、不過四十八度也、故有合伏而無對衝、同于水星也、且別有自己之運動、而不斷自西旋東、轉輾恰如鳩車也、其自轉頗速、大地一晝夜間幾及三周回也、又有一箇附麗小星、卽此星之所分生也、故旋其本星而無休止矣、此亦產靈元運也、

〔萬葉集五雜歌〕戀男子名古日歌三首長一首短二首

世人之、貴慕、七種之、寶毛我波、何爲、和我中能、產禮出有、白玉之、吾子古日者、明星之、開朝者、敷多倍乃、登許能邊佐良受、立禮杼毛、居禮杼毛、登母爾戲禮、夕星乃、由布弊爾奈禮婆、伊射禰余登、手乎多豆佐

憂、居宿久國福厚、易則薄失次、而上二三宿曰盈、有主命不成不乃水火失次、而下曰縮、后戚其歲不復、不乃天裂若地動、一曰、塡爲黃帝之德、女主之象、主德厚安危存亡之機、司天下女主之過、又曰、天子之星也、天子失信則塡星大動、

〔鎔造化育論上〕日輪第六郭曰塡星圈、土星運動之行環也、此星一萬零七百五十九日三時半餘一周焉、土星有大環、而繞本星、且有五箇附庸小星、而旋回本星之外圍也、然土星距大地甚遠、而至其自轉之有無、則未得審焉、此星有如環者及五箇小星、古來人之所不知也、然後陽成天皇慶長十六年、西洋人瓦利凌斯者、始窺見焉、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年正月十二日戊辰、寅時塡星貫月、

〔日本紀略四村上〕天德四年四月七日丙子、鎭星犯牽牛、

應和二年八月四日己丑、天文博士保憲上、七月廿日○中略同日昏戌時鎭星召守○召守恐誤、犯、星異奏、

〔玉海〕文治元年十月六日乙卯、早旦主稅助安倍晴光參來、申天變事、從去月廿三日癸卯、塡星守犯太微東蕃上相星、又從同廿八日戊申、歲星守犯同右執法星、相去各八寸所是大臣大將等愼也、就中鎭星變、大將愼尤重云々、又文云、天下有悅喜、人主改政云々、又云有立王事云々、

〔後深心院關白記〕延文四年八月卅日庚寅、今曉塡星犯軒轅宮左民角星、相去三寸所

太白星

〔倭名類聚抄一景宿〕長庚　兼名苑云、太白星一名長庚、暮見於西方爲長庚、此間云由不豆々、

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕按、毛詩大東篇、西有長庚、傳、庚續也、正義云、日既入之後有明星、言其長能續日之明、故謂明星爲長庚也、是知由布都々、夕續之義、今俗呼宵明星、○中略按、廣雅、太白謂之長庚、毛詩、東有啓明、西有長庚、傳云、日旦出謂明星爲啓明、既入謂明星爲長庚、兼名苑蓋本此、暮見以下、當是兼名苑注文、然其注應即撰者自注、非佗人之解釋也、又按、大白暮見於西方爲長庚者、漢書天文志所謂、大白常以正月甲寅、與熒惑晨出東方、二百四十日而入、入四十日又出西方、二百四十日而入者是也、開元占經大白占篇引石氏曰、太白者、大而能白、故曰太白、

鎮星

五日己酉、昏戌時熒惑入輿鬼、犯西北星、(相去三寸許)其占文云、先例咎徵不輕、衆可禳災云々、就中漢書天文志云、誅成質、此文尤可恐云々、

安元三年(○治承元年)三月廿一日辛酉、此間熒惑守犯右執法星云々、件星猶在大微中、自去正月于今未出云々、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元二年十一月十二日己酉、今曉熒惑入犯氐庫門星之由、司天等申之、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年八月廿八日甲辰、戌剋熒惑犯南斗第五星、

〔後深心院關白記〕文和五年(○延文元年)正月六日丁亥、曉熒惑陵犯天江第三第四星云々、

〔甲子夜話 四十一〕過シ年、侍女等ノ云ケルハ、今年ハ異星東北ニ現ルト人申セリ、妾等モ見申タルガ、洪水ノ徵ナリト人々云ヘバ、唯々恐シク候ト言フ、予(○松浦淸)言ニハ、ソノ星何時ノ頃カ出ル、曰亥ノ前後ニ現ル、因テ其夜東北ヲ見ルニ、折フシ曇テ見ヘズ、翌夜又庭ニ出ヅレバ果シテ見ユ、婢ノ云ク、アレナリ、予見ルニ赤光ノ大星ナリ、思フニ定テ火星ナラン、然レドモ天文ヲ詳ニセザレバ、乃司天館ニ問ニ、果シテ火星ナリ、因テ婢輩ニ示テ曰、汝ノ妖星ト稱ル者ハ、火星トテ五星ノ一ニシテ、日月ニツギ且常星ナリ、變ニ非ズ、古ヨリ火ヲ掌ル星ナレバ、何ゾ水災アランヤト云バ、婢妾ミナ愕然トシテ喜ブ、世人ノ天ヲ論ズル、渾テコノ如キ事多シ、

〔和漢三才圖會 天文 一〕鎮(ちん)星(せい)(土曜、生於申、壯於戌、死於寅、)登壇必究云、鎮星女主之象也、常以甲辰元始見斗之歲、鎮星行一宿、二十八歲而周天、(天經或問、爲三十年一周天、)

〔廣韻 一 眞〕鎮(戍也、又陟刃切、)塡(壓也、又音田、)

〔康熙字典 丑集中 土〕塡(音田、(中略)又陟刃切、同鎮、定也、(中略)天文志、塡星曰中央季夏土、)

〔晉書 十二 天文〕塡星曰、中央、季夏、土、信也、思心也、仁義禮智以信爲主、貌言視聽以心爲正、故四星皆失塡乃爲之動、動而盈、侯主不寧、縮有軍不復、所居之宿國吉、得地及女子有福不可伐、去之失地、若有女

〔續日本紀 九元正〕養老七年九月辛未、熒惑入太微左執法中、

神龜元年七月丁丑、自六月朔至是日、熒惑逆行、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年三月丁酉、熒惑入東井西亭間、

天平元年六月乙酉、熒惑入大微中、　二年三月庚子、熒惑晝見、

〔續日本紀 十一聖武〕天平五年正月戊申、熒惑入軒轅、

〔三代實錄 九清和〕貞觀六年十一月十三日丙申、夜熒惑入守輿、

〔三代實錄 三十三陽成〕元慶二年六月十九日癸未、夜熒惑守天江、經二箇日、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年十月十二日　辰、熒惑逆行、自大微左掖門入犯守左執法、　十一月廿八

日癸未、夜熒惑入氐、

〔三代實錄 三十七陽成〕元慶四年四月十二日乙未、熒惑逆行、犯房上相、

〔三代實錄 四十四陽成〕元慶七年十一月十六日己卯、是夜熒惑失度、順行守房、經三日退去、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜十年七月十一日戊戌、熒惑犯房第二星、　八月十一日戊辰、熒惑犯天江星、

〔日本紀略 四村上〕康保三年二月廿八日癸亥、天文道申、今月廿七日熒惑犯東井獨臣星異奏、　三月一

日丙辰、天文道申、二月廿八日戊剋熒惑入犯東井北轅西頭第一星異奏、

〔日本紀略 六圓融〕天延三年十二月十六日癸丑、熒惑犯房星、

〔日本紀略 九一條〕永延二年九月六日庚寅、熒惑犯大微右上將星、

〔小右記〕長和三年十二月十三日乙丑、去十一日熒惑星犯三公星、近代不見、月之變、件勘文從頭辨許

所送廻、過〇過恐遇字誤　案丞相可被愼歟、

〔本朝世紀〕久安三年七月十一日癸酉、戌剋熒惑犯房第二星、其間害一指也

〔玉海〕嘉應三年〇承安元年　四月十日甲寅、泰茂來、〇中略　又天變之中、大臣可有愼事、注書密所持來也、今月

制而出行、列宿、司無道、出入無常、六十一日有餘過一宮、七百四十日而一周天、夏至夜半、中於箕斗之交、六月昏出於牛女之交、

〔晉書十二天文〕熒惑曰、南方、夏、火、禮也、視也、禮虧視失、逆夏令傷火氣、罰見熒惑、熒惑法使行無常、出則有兵、入則兵散、以舍命國、爲亂爲賊、爲疾爲喪、爲饑爲兵、所居國受殃、環繞鉤已芒角動搖變色、乍前乍後、乍左乍右、其爲殃愈甚、其南丈夫、北女子喪、周旋止息、乃爲死喪寇亂、其野亡地、其失行而速、兵聚其下、順之戰勝、又曰、熒惑主大鴻臚、主死喪、主司空、又爲司馬、主楚吳越以南、又司天下群臣之過、司驕奢亡亂妖孽、主歲成敗、又曰、熒惑不動、兵不戰有誅、將其出色赤、怒逆行成鉤已戰凶有圍軍、鉤已有芒角、如鋒刃、人主無出宮下有伏兵、芒大則人衆怒、又爲理外則理兵、內則理政、爲天子之理也、故曰、雖有明天子、必視熒惑所在、其入守犯太微軒轅營室房心、主命惡之、

〔鎔造化育論上〕日輪第四郭曰熒惑圈、卽火星運回之行環也、火星以大地六百八十六日六時半、一周日輪之外圍也、火星以下諸曜之行環、皆在大地行環之外、故有下合伏對衝、而無有上之合伏也、此星近于對衝、則赤色熌熌、其光輝太乎木星、又近于合伏、則其光暗矣、以望遠鏡觀之、則恒發蒸氣如霧、且有稀薄之橫紋、因而測其自轉、大約大地一日四十刻餘而一周焉、然則火星界一年、卽大地九百六十一日十四刻也、

〔扶桑略記三敏達〕九年六月、有人奏曰、有土師連八島、唱歌絕世、夜有人來、相和爭歌、音聲非常、八島異之、追尋至住吉濱、天曉入海者、耳聰王子奏曰、是熒惑星也、此星降化爲人、遊童子間、好作諸歌、歌未然事、蓋是星歟、天皇太善、

〔日本書紀二十九天武〕十年九月癸丑、熒惑入月、

〔日本書紀三十持統〕六年七月辛酉、是夜熒惑與歲星於一步內、乍光乍沒、相近相避四遍、

〔續日本紀八元正〕養老四年正月庚午、熒惑逆行、

熒惑星

刻餘ニ一周焉、諸曜中此星最大、其光暉亦明也、又有ニ横紋五條、其三條明而二條幽矣、因而測ニ其自轉、大約地上九時五刻餘而一周焉、且有ニ四箇附麗小星ー而旋ニ其木星、卽此星之所ニ分生、而從ニ產靈之元運ー者也、○略　註　木星運回日數、四千三百三十二日半餘、大約以ニ大地十二年不ㇾ及ニ一周ー其行環、大抵子年在ニ子宮、丑年在ニ丑宮、故漢土此曰ニ歲星ー、

〔文德實錄十〕天安二年八月壬子、是夜歲星守ニ牽牛ー、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年八月廿五日癸巳、歲星行犯ニ大微左執法ー、

〔日本紀略四村上〕應和二年四月十三日庚子、奏、十二日夕戌剋月與ニ歲星ー同宿文、　六月廿四日庚戌、天文道申、去廿一日歲星犯ニ亢星ー、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年正月廿五日辛巳、今曉歲星鎭星太白星犯ニ舍ー云云、有ニ御鎭文ー之由、司天申ㇾ之、及ニ勘文ー云云、　十一月四日乙卯、戌剋熒惑星歲星侵ㇾ之云云、　十四日乙丑、歲星侵ニ熒惑星ー云云、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年十一月廿二日己未、今曉歲星入ニ火微宮中ー之由、司天申ㇾ之、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月七日庚申、陰陽道奉ニ勘文、近日歲星增ニ光色、色潤澤明也、依ニ吉瑞ー勘申云云、和泉前司行方持ニ參御所、備ニ上覽ー云云、

〔甲子夜話四十二〕癸未○文化六年ノ十月十九日、宵間ノコトニテ、月ヲ望タルニ、ハヤ輪モ缺タレドモ、晴光ハ皎々タリ、側ラ一尺餘ニ星在テ又鮮明ナリ、予以爲ク常星ニ非ズ、若クハ五星ノ中ナラント、司天館ニ問遣リタレバ、答ニ木星ナリ、恒星トモ云フ、同度トテ此事度々アルコトナリ、月ニ迫リタルヲ通近ト稱シ、月ヲ貫クヲ凌犯ト稱スト、コレ等運行ノ常ナリ、然ルヲ世ノ人ハ近星トテ凶象トス、同度トハ、月ト星ト同度ト云コトナリ、木星ノ分野ヘ月カヽリ、南北線直線ニナレバ、何レノ所ニテモ同度ス、星行ハ遲ク、月行ハ速キチ以テ、食合ハ定ラザレドモ、時々アリ、月ハ順行ナレドモ、木星ハ太陽ノ遊輪チ廻リ、行度ニ順逆アレバ、同度ノ遠キトキ、運キトキアリ、五星共ニ然レドモ、ソノ中水星ハ太陽ニ近ク廻レバ、四星ノ如ク凌犯ハナシト云、

〔和漢三才圖會一天文〕熒惑（けいわく）火○曜、和名炎星、生ニ於寅ニ壯ニ於午ニ死ニ於戌ニ、　登壇必究云、熒惑方伯之象也、常以ニ十月ニ入ニ太微宮ニ受

郭璞注、太白星也、天文志又云、太白曰西方秋金、晉灼曰、太白常以正月甲寅、與熒惑晨出東方、二百四十日而入、入四十日、又出西方、二百四十日而入、入三十五日、而復出東方、出以寅戌、入以丑未也、是歳星卽木星、明星太白之一名、卽金星、並五星之一、則歳星明星、其不同可知也、而蔡邕獨斷、明星神一名靈星、論衡祭意篇、高皇帝四年、詔天下祭靈星、祭水旱也、於禮舊名曰雩、世儒案禮、不知靈星何祀、其難曉而不識、說縣官名明星、緣明星之名、說曰歳星、歳星東方也、東方主春、春主生物、故祭歳星求春之福也、是謂縣官名靈星爲明星、而歳星一名明星、故以祀靈星爲祀歳星也、則知歳星亦或名明星、故彙名苑以明星爲歳星一名、然則太白歳星並有明星之名、其阿加保之、今俗呼曉明星、所謂启明、卽太白之晨見於東方者、則此當引證爾雅明星、而引彙名苑明星者、其名同而誤也、曲直瀨本、此間云作和名、萬葉集同訓、阿加保之、又見神樂歌、及古今六帖、爲忠百首、按阿加保之、卽明星之義、是星光耀明於他星、故名、枕册子、明星音讀、

〔晉書十二天文〕歳星曰東方、春、木、於人五常仁也、五事貌也、仁虧貌失、逆春令傷木氣、則罰見歳星、歳星盈縮、以其舍命國、其所居久、其國有德厚、五穀豐昌、不可伐、其對爲衝、歳乃有殃、歳星安靜中度吉、盈縮失次、其國有變、不可擧事用兵、又曰、人主之象也、色欲明光、色潤澤德合同、又曰、進退如度、姦邪息、變色亂行主無福、又主福、主大司農、主齊吳、主司天下諸侯人君之過、主歳五穀、赤而角、其國昌、赤黃而沈、其野大穰、

〔類聚名義抄二日〕明星アカホシ　歳星アカホシ

〔和漢三才圖會一天文〕歳星（さいせい）木曜旁有二小星、而如附耳、生於亥、壯於卯、死於未、登壇必究云、歳星人主之象也、大歳在四仲、則歳星行三宿、大歳在四孟四季、則歳星行二宿、十二歳而行二十八宿、一周天、四孟者正四七十也、四仲者二五八十一也、四季者三六九十二也、

〔鎔造化育論上〕日輪第五郭曰大歳圈、卽木星運回之行環也、此星以大地四千三百三十二日六時二

常ニハソノ心也、但シ周公旦曰、日月星辰春夏秋冬歳也ト云々、又コレヲ九光ト云ヘリ、

七星

〔塵袋 一〕一七政トハ星ニツキタル事歟、然者七星トカクベキ歟如何、五星(木火土金水)ト日月トヲアハセテ七政ト云フ説アリ、北斗七星ヲ七政ト云ヘル事アリ、又廿八宿ノ四方ニ各七ヅヽアルヲ、一方ニ約シテ七政トスル説アレドモ、實ミナ星ヲハナレズ、七星ヲ七政ト云フ事ハ、蕭吉云、夫レ七政ト者、乃チ是レ玄象之端正天之度、王者仰以爲治政、故謂之政ト云ヘリ、サレバマツリゴトノスガタハ、ソラノ星ニアラハルレバ、コレヲミテマツリゴトヲオコナフベキコトハンベリ、コレハ星政ト云フ、政ハ正也ト釋セリ、

五星

〔和爾雅 一 天文〕五星(又云五緯)歳星(木)熒惑(火)太白(金)辰星(水)鎭星(土)

〔二中歷 一 乾象〕五星(一云五緯)
東木歳星、名青龍　南火熒惑、爲朱雀　中央土鎭、是勾陳　西金大白、謂白虎　北水辰星、此玄武
或抄云、木星十二年周天、火星行度可依算術、(二年周天云々)土星廿九年一周天、金星水星一年一周天、金星在日西曰啓明、在日東曰長庚、東以巳爲境、西以未方爲境、若在午謂太白晝見、過午至未方、大白經天也、木火土三星、曉見東方名前、夕西方名後也、木火土三星陽也、故以曉名前、金水二星陰也、故反之、金水二星夕見西方名前、曉見東方名後、行常度名平行、過度名疾、縮度名遲、退名逆行、又名退行、近日其光消不見名伏也、　今案、此加日月爲七曜、此加羅喉、計都爲九曜、

歳星

〔倭名類聚抄 一 景宿〕明星　兼名苑云、歳星一名明星、此間云(阿加保之)

〔箋注倭名類聚抄 一 景宿〕唐書云、兼名苑十卷、釋遠年撰、新唐書藝文志作二十卷、今無傳本、按説文、歳木星也、越歷二十八宿、宣徧陰陽、十二月一次、漢書天文志載五星云、歳星曰東方春木、晉灼曰、大歳在四仲、則歳行三宿、大歳在四孟四季、則歳行二宿、二八十六、三四十二、而行二十八宿、十、十二歳而周天、開元占經歳星占篇引石氏曰、歳星歳行一周天、與太歳相應、故曰歳星、又爾雅、明星謂之启明、

參星

九曜星

括之狀、故名須波流也、今俗或呼六連星、○中略 文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經二卷、劉宋不空譯、所引序月宿所主品文、原書六星下、有形如剃刀四字、此節文、說文、昴、白虎宿星、毛詩小星傳、昴留也、正義引元命苞云、昴六星、昴之爲言留、言物成就繫留、按、元命苞云、昴六星、與宿曜經所說同、晉書隋書天文志、開元占經西方七宿占引石氏、並云、昴七星、史記天官書正義、天文大象賦注、亦以爲七星、其說不同、蓋古觀窺未精、故爲六星、至淸儀象考成、乃云、昴宿七星外、增五星、都十二星、蓋明以後有望遠鏡、所以後人所見益精也、

〔段注說文解字七上日部〕昴白虎宿星、召南傳曰、昴留也、古謂之昴、漢人謂之留、故天官書、律書、直言留、毛以漢人語釋古語也、元命包云、昴六星、昴之言留、物成就、繫留、此昴亦訓留之義也、从日丣聲、丣古音讀如某、丣古文酉字、字別而音同、在三部、雖同在三部、而不同紐、是以丣聲之劉、留、聊、柳、珋、駵、鰡、茆、窌、爲一紐、卯聲之昴、爲一紐、古今音讀皆有分別、丣聲之不讀莫飽切、猶卯聲之不讀力九切也、惠氏棟因毛傳之語、謂昴必當从丣、其說似是、而非王氏鳴盛、尙書後案襲之非也、莫飽切、古音在三部、

〔類聚名義抄日二〕昴音卯 スハル

〔日本釋名天象上〕昴スバル 星の名也、すはつらぬく也、つとすと通ず、まるはまるき也、此星の形いとを以、玉をつらぬけるがごとく、つらなりてまるし、日本紀神代卷に、いをつのみすまるといへるも、五百顆のつらぬける玉のつらなりてまるきを云、

〔物類稱呼天地一〕昴ぼう すばる星と云、二十八宿の内也、 東國にて九ようの星と云、江戸にては、むつら星といふ、

〔物類稱呼天地一〕參しん からすきぼしと云、二十八宿の内也、 中星の横につらなりたる三の星を、江戸にて三光といひ、又三ッ星といふ、關西にて親になひ星と云、東國にて三ちやうの星と呼、武藏の國葛西にてさんかぼしといふ、

〔撮壤集天象上〕九曜　羅睺ラゴ星　土曜星　水曜星　計都ケイト星　金曜星　日曜星　月曜星　火曜星　木曜星

〔塵袋一〕一 九。星。トハ九曜歟

牽牛者、織女等、天地之、別時由、伊奈宇之呂、河向立、意空、不安久爾、嘆空、不安久爾、○下略

○按ズルニ、牽牛織女二星ノ事ハ、歲時部七月七日篇ヲ參看スベシ、

織女星

〔倭名類聚抄一景宿〕織女　兼名苑云、織女牽牛是也、和名太奈八太豆女

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕太奈波太豆女、用織女字、見萬葉集、按、太奈波太、棚機也、機具之狀似棚閣、故云棚機、豆、助語、女謂婦人也、或省云太奈波太、亦見萬葉集、○中略按、吳均續齊諧記云、織女嫁牽牛、玉燭寶典云、牽牛爲夫、織女爲婦、故云牽牛匹也、又按、思兼神令天棚機姬神織神衣、見古語拾遺、其在高天原織紝、與織女星在天相類、故古人諷詠比擬、謂織女爲棚機女耳、猶古人詠天河爲安河、然安河在高天原、即天照大神與素戔鳴尊誓約之處、非天河也、是不可不辨別、曲直瀨本、織女下、有一名婺女四字、按、史記天官書、婺女其北織女、則織女婺女二星不同、女宿在天河北、織女在天河南、相去頗遠、又按、天官書、牽牛爲犧牲、其北河鼓、丹玄子步天歌、牛宿六星、近在河岸頭牛上、直建三河鼓、李播天文大象賦注云、牽牛六星、北宮玄武之宿也、河鼓三星、在牽牛北、是牽牛河鼓二星不同、而爾雅云、河鼓謂之牽牛、史記索隱引孫炎云、河鼓之旗十二星、在牽牛北、故或名河鼓爲牽牛也、依此例之、織女亦在婺女北、故織女或云婺女歟、

〔和爾雅天文一〕織女（オリヒメ）天孫、織機、天機並同、

〔和漢三才圖會天文二〕織女　收陰、和名太奈八太豆女、　織女三星　在天河北、天紀東端天女也、主果蓏絲綿寶玉也、王者至孝、神祇咸喜、則織女星倶明、天下和平、大星怒角布帛貴、又曰三星倶明女功善、暗而微天下女功廢、不見兵起、其大星去極五十二度半、入斗宿五度、　廣博物志云、織女一名收陰、七月初昏正向東、

〔三代實錄十二淸和〕貞觀八年正月廿七日甲辰、有星出織女入羽林、

昴星

〔倭名類聚抄一景宿〕昴星　宿耀經云、昴星六星、火神也、音與卯同、和名須八流

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕按、須波流、與須萬流、須夫流、志婆流、志萬流同語、是星七星相聚、如爲物所統

卷、晉郭璞注三卷、見經典釋文、及隋書、唐書、鄭玄亦有注、見周禮疏、以上諸注、皆亡逸、今所存獨郭璞注耳、按爾雅釋天、何鼓謂之牽牛、郭璞注云、今荊楚人、呼牽牛星爲擔鼓、其文與此不同、則所引蓋舊注也、那波本、河作何、與今本爾雅及郭注合、按玉燭寶典、文選思玄賦注、引爾雅作河鼓、毛詩正義、引李巡孫炎同、又史記天官書、漢書天文志、白氏六帖、及古本毛詩大東篇傳、思玄賦、後漢張衡傳注、亦皆作河鼓、則舊注爾雅不作何、其作何始於郭璞也、那波氏不知舊注本作河、依郭本爾雅校改、非是、刻版本改作河、與諸古本及伊勢廣本同、類聚名義抄伊呂波字類抄亦作河鼓、二家所見本書亦不作何也、類聚名義抄、伊呂波字類抄二書、並取譯語諸書、分類成書、源君書亦在其中、故今多取證云、下總本一云作又云、廣本作又一字、比古保之用牽牛字、見萬葉集、按比古保之、彥星也、牽牛爲夫、織女爲婦、故謂牽牛爲彥星也、以奴加比保之名義未詳、

〔類聚名義抄 四牛〕牽牛 ヒコホシ 〔同 九度〕河鼓 ヒコホシ イヌカヒホシ 一云、

〔伊呂波字類抄 伊天象〕牽牛 イヌカヒホシ ケンキウ ヒコホシ 河鼓

〔和爾雅 一天文〕牽牛 ヒコボシ イヌカヒ 河鼓星同、歲時記謂之黃姑、

〔日本釋名 一天象〕牽牛　男子をほめて彥と云、牽牛を夫とし、織女を妻とする故、男星と云意なり、

〔和漢三才圖會 二天文〕河鼓 黃姑、三武、天關、和名比古星、又云以奴加比星、　河鼓 三星 在牽牛宿之北天河之東南、天鼓也、主軍鼓及鈇鉞、主天子三將軍、故名三武、中央大星爲大將軍、左星爲左將軍、右星爲右將軍、左星者南星也、所以備關梁設險阻而拒難也、明大光潤則吉、動搖差度亂兵起、直則將有功、曲則將失律、距中星去極八十三度大、○中略　織女、○中略　按、河鼓、織女在牛宿之度分、世俗所崇敬之星、故贅出于此、蓋倭名抄以河鼓爲牽牛、爲彥星、彥者男子之稱、對織女附會之號而已、牽牛者本牛星之異名也、此星以有牽牛之度分、終爲其名者謬也、加之據牽牛之訓、河鼓引牛在渚頭之說可笑、

〔萬葉集 八秋雜歌〕山上臣憶良七夕歌

文也、尤可然、末代之君有祥瑞、遂無由事也、

〔武江年表　三〕元祿二年正月十六日、頃日老人星現す、（老人星は吉事の瑞なり、治平を主どる星なりといふ、）

○按ズルニ、老人星ヲ祭ル事ハ、方技部陰陽道篇、陰陽道祭條ニアリ、

二十八宿

〔二中歷　五乾象〕廿八宿　角亢氐房心尾箕（東）　斗牛女虛危室壁（北）　奎婁胃昴畢觜參（西）　井鬼柳星張翼軫（南）

謂云、畢翼斗壁安重宿　觜角房奎和善宿　參柳心尾惡害宿　鬼軫胃婁急速宿　星張箕室猛惡宿　井亢女虛危輕躁　昴氐二宿剛柔宿

〔和漢三才圖會　一天文〕星（略）○中　星名如井箕牛畢弧矢杵臼天船華蓋之類者、以象形稱之、其外書雜解者多、而不知誰人始命其號耶、又如趙周楚魏晉、以中華國號、如造父奚仲王良傳說、以中華古人名、不知其據、抑星爲人乎、人爲星乎、萬國同一天、豈關中華一國事耶、

〔和爾雅　一天文〕二十八宿（宿音夙、俗呼二音秀一、）

角（スボシ）　亢（アミボシ）　氐（トモボシ）　房（ソヒボシ）　心（ナカゴボシ）　尾（アシタレボシ）　箕（ミボシ）（東南）　斗（ヒキツボシ）　牛（イナミボシ）
女（ウルキボシ）　虛（トミテボシ）　危（ウミヤメボシ）　室（ハツイボシ）　壁（ナマメボシ）（北東）　奎（トカキボシ）　婁（タタラボシ）　胃（エキヘボシ）　昴（スバルボシ）（昴星同）　畢（アメフリボシ）　觜（トロキボシ）　參（カラスキボシ）（西北）
井（チチリボシ）　鬼（タマヲノボシ）　柳（ヌリコボシ）　星（ホトヲリボシ）　張（チリコボシ）　翼（タスキボシ）　軫（ミツカケボシ）（西南）

〔書言字考節用集　一乾坤〕廿八宿（宿、廿八舍、廿八次、並同、皆有止之意也、鈞略、宿音秀非也、）

〔和漢三才圖會　二天文〕二十八宿　東　七宿　三十二星　南　七宿　六十四星　西　七宿　五十一星　北　七宿　三十五星　以上百八十二星　按、天圓形而二十八宿布列於天緯、故人謂所以配四方、予（寺島安）○造渾天儀諸星圖範、其器北高南低者乃常也、更試以北極爲上、以南極爲下、竪之而令北辰五星向星宿方、則南方備而二十八宿逆行、東西南北之象具焉、釋氏稱之須彌山、以北極紫微宮爲帝釋天也矣、

牽牛星

〔倭名類聚抄　一景宿〕牽牛　爾雅註云、牽牛、一名河鼓、（和名比古保之、又以奴加比保之、）

〔箋注倭名類聚抄　一景宿〕爾雅注、有漢舍人注三卷、劉歆注三卷、樊光注六卷、李巡注三卷、魏孫炎注三

老人星

云、今世文昌祠所祀梓潼帝君、〇中略葉石林云、蜀有二舉人、至劒門張惡子廟、夜宿夢神預作來歲狀元賦、甚靈異、然則張惡子之顯靈于科目、蓋自宋始、〇中略或又謂斗魁爲文昌六府、主賞功進爵ト、コノ外叢考ノ論說極テ長シ、此ニ略ス、コレ等ハ梓潼神ヲ文昌祠ト附會シ、遂ニ文昌祠トナセシナリ、〇中略想フニ古ハ梓潼神ヲ文昌祠トナシ、其後魁星ト相混ジ、文昌星ト云ナルベシ、諸說何レカ是ナルヲシラズ、暫ク錄シテ後考ヲマツ、

〔花徑樵話二帙六〕文昌星　坊間ノ賣本ノ帙標題ヲ題セシ右肩ナドニ、押印スル文昌星ト云物アリ、一鬼形ノ飛龍ノ如キ物ニ御シ、隻手ニ升ヲ挈ゲタル形ナリ、或ハ硯ヲ挈ゲタルモノアリトイヘリ或ハ頭上ニ三連星ヲ畫クアリ、或ハ文昌星ノ三字ノミ篆書刻セルアリ、各朱ヲ以テ押印シテ文飾トナス、或ハ云、此星ハ書籍ヲ守護スル職タリ、故ニ紙魚ヲ避ク、又此圖ハ、鬼形ノ左手ニ、斗升ヲ高ク挈ゲタルハ、魁ノ字ニカタドレルナリ、魁ハサキガケト訓ズル字ニテ、此書ノ疾速ニ賣レテ利ヲ得ン爲ノ祝賀ナリト、又勝田祐義正德頃ノ人要字集節用大成、魁星字ノ標註ニ云、魁星、斗魁トモ、北斗柄トモ云フ、北斗ノ七星ノ一ツナリ、サキガケヲ守ルノ星、又ハ文章ヲ守ルノ星ナリ、右ノ手ニ筆ヲ持、左ノ手ニ硯ヲ持、鰲トイフ魚ニ乘ル、魁ハサキガケトヨムト見ユ、

〔撮壤集天象上〕星　老人星ロウジン

〔類聚國史七十四歲時〕延曆廿二年十一月戊寅朔、百官詣闕上表曰、〇中略伏檢今年曆、十一月戊寅朔旦冬至、又有司奏稱、老人星見、臣等謹案、元命苞曰、老人星者瑞星也、見則治平主壽、〇下略

〔日本紀略一醍醐〕昌泰三年十二月十一日乙丑、老人星見
延喜九年十一月七日己亥、老人星見、

〔中右記〕嘉承二年閏十月廿四日　裏書云天文博士宗明、近日老人星見之由申云々、此事不心得、件星常在南方、而登天高見、以此爲祥瑞、近日只在本南極、仍不可爲瑞也、凡繼體守文之君、不如無祥瑞、此本書

南斗北斗

〔下學集一天地〕南斗北斗〈斗字從南北而音異也〉

〔運步色葉集保〕北斗

〔撮壤集上天象〕北斗七星　貪狼星　巨門星　祿存星　文曲星　廉貞星　破軍星　武曲星

〔和爾雅一天文〕北斗〈又云珠斗、北斗有七星、一二三四爲魁、五六七爲杓、〉

〔物類稱呼一天地〕北斗、ほくと、〈うごく星なり〉　東國にて七曜のほしと稱す、又四三の星ともいふ、

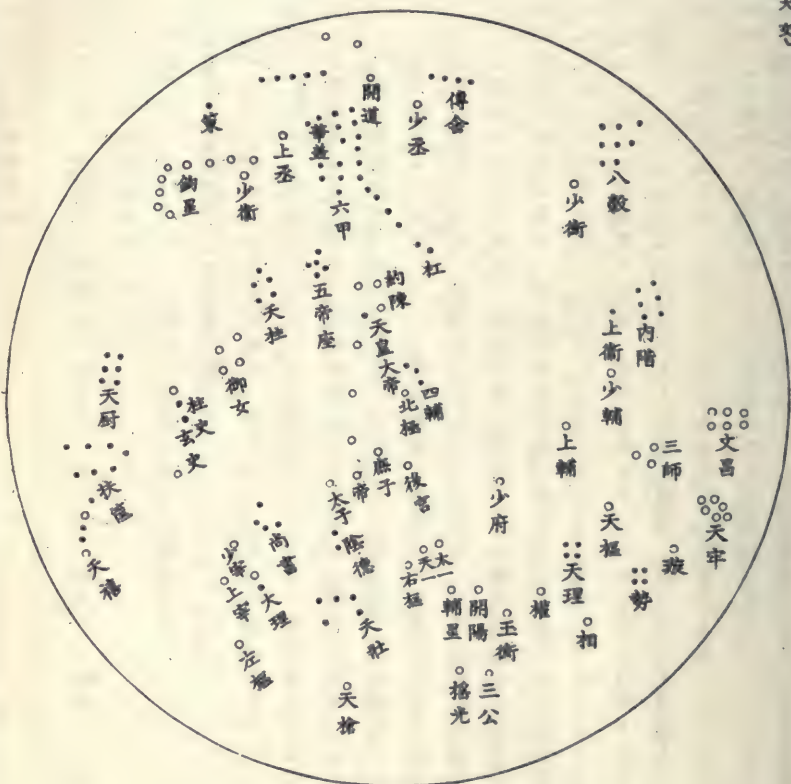
〔續日本紀三十光仁〕寶龜元年、是年六七月、慧星入於北斗、

〔台記〕天養二年〈○久安元年〉十月十六日戊子、齋戒、〈八月分〉自十四日至今日、〈三日〉奉拜北斗、〈七八九月分〉

〔萬寶部事記六占天氣〕北斗　雲北斗をおほふは大雨、黑雲さえぎりて北斗見えざるは、三日のうち雨、黑雲のあつく北斗をおほふはその夜雨、黃雲ほくとをおほふは明る日あめふる、白氣北斗をおほふは、三日の內に雨、靑氣北斗をおほふは、五日のうちに雨ふる、　天に雲なくして、北斗の上下に雲あるは、五日のうちに大雨、　日入て後白光有て地中より北斗につきのぼり、其間の星にひかりなきは、其夜かならず大風、　黑雲斗口をおほふは風雨　北斗の魁星の間、黑氣うるほひ有て、其ほとりに雲あればその夜雨、　北斗の前に黃氣あるは明日風ふく、もしうるほひおほふたる氣あるは、夜中か明日か大雨、　夜るは北斗を見て明日の天氣をみるべし、北斗の上下五色の雲氣あるは、その一日の內に雨ふる、一日にてはやみがたし、雲氣北斗をおほひて、黃白色なるは風ふく、赤色は旱、靑きは大雨、黑きは風、　北斗の間あかき雲氣おほふは、明る日大熱、白氣有て北斗の杓の間をさえぎりおほふは、三日のうちに大風惡雨、　北斗の上下黃氣ありて、うるほひ魚龍のかたちの如く、或はうろこのごとくあるは、其日かその夜か大雨、

文昌星

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年二月廿七日丁巳、是夜文昌星微而不明、

〔米庵墨談續篇二〕文昌星　文昌星ノコト諸書ニミユ、異同甚多、イマ其一二ヲ摘錄ス、陔餘叢考

渾象紫微垣星之圖

傳舍 開道 少丞 華蓋 上丞 鉤星 少衛 八穀 少衛 六甲 杠 五帝座 天柱 鉤陳 天皇大帝 內階 上衛 少輔 四輔 北極 御女 柱史 女史 天厨 文昌 三師 上輔 庶子 後宮 帝 太子 少府 天牢 天樞 扶筐 天棓 尚書 陰德 天理 璇 勢 太一 天一 右樞 少宰 上宰 大理 天牀 輔星 開陽 玉衡 權 相 左樞 天槍 搖光 三公

凡三百六十一座一千七百七十三星、以作二方圖一、名曰二天文成象圖一、〔此圖査參氏三宿改距星、與二郡今所一レ用全相同、〕今新法所レ用之恒星黄道經緯度、鈐依儀象考成表、及近歳新測數採用二十八宿距星黄道經緯度、更加二黄道歳差一求寛政九年丁巳之數、以爲二暦元宿鈐一云、

北辰星

〔運歩色葉集 保〕北辰(ホクシン)

〔和爾雅 一 天文〕北辰(ホクシン)〔北極也、又云二天樞一、〕

〔物類稱呼 一 天地〕北辰、ほくしん、〔北極と稱するもおなじ〕うごかぬ星なり、上總國にてひとつのほしと稱す、

〔塵袋 一〕北辰北極ト云フハ、別ノ星歟、同星歟、天文師ノシルベキコトニヤ、爾雅ニハ北極ハ北辰也ト云ヘリ、コノ説ニヨラバ同星也、北極ノ五星トテ五星ノツヾキタマヘル上ニ、左右ニ二ツヽ四ノ星アリ、コレヲ四輔星ト云フ歟、五星ノ中ニ北辰星アリ、コレソノイタレルベシ、北辰、北君、元鏡、元宿、北天、コレヲ北極ノ五星ト云フニヤ、同星ナレドモ、ツヾケテ北辰北極ト云コトツチノ事也、神分ノ詞ニ、四禪、八定、天王、天衆ト云フガ如シ、八定ノ中ニ四禪モコモリタレドモ、コトハカハリテ多少オナジカラネバ、云ツヾクルナラヒ也、就中(ナカンヅク)北辰ト云フハ、タヾソノ主ヲアグ、伴ヲバ云ハズ、北極ト云フニナレバ、伴ノ星モミナコモレバ、主ト伴トヲ云フ心地ニモヤアラム、北辰、妙見、尊星王、太一、天一、大帝、大雲星光、并水曜、吉祥天、コレラ一々ニクサリ合セテ異説繁多也、

〔中右記〕寛治八年三月一日壬申、早旦出二河原一謝二北辰一、

〔吾妻鏡 三十六〕寛元三年九月廿三日乙卯、寅剋辰星犯二恒星一、〔相去二寸〕

〔北窻瑣談 三〕一駿河國府中七間町挽物屋長左衛門は、天文の心得も有る人にて、北極星を測り見るに、府中の人、町にて測ると、富士山の八合目にて測るとは、凡三度半を差となり、富士山にては三十九度に及べりと語りけると、如意道人物語りき、

星之大小　上等大於地六十八倍　次等大於地二十八倍　三等大於地十一倍　四等大於地四倍半　五等同于地而稍大　六等得地體三分之一　六等之外、更有微渺難見者、則匪目所能測（見于天經或問）　大星圍七百里　中星四百八十里　小星廿里（法苑珠林）　大星徑百里　中星五十里　小星卅里（長曆）　按、三說莫大之異、而不知何乎是也、凡列宿天在於諸天之上、甚高遠、故所視于地至小也、雖常理而地之數十倍大亦不無疑、

〔寬政曆書（十五 恒星曆理）〕恒星總論

列星之名、散見於尙書、易、詩、左傳、國語、詳于晉書天文志、蓋古者敬天勤民、因時出政、皆以星爲紀、羲和舊術、今無可稽、其所傳者、惟史記天官書、而所載簡略、後漢張衡云、中外之官、常明者百有二十四、可名者三百二十、爲星二千五百、微星之數、蓋萬有一千五百二十、至三國時、太史令陳卓、始列巫咸、甘德、石申三家所著星圖、總二百八十三官、一千四百六十五星、劉宋祖冲之以當時中星、與堯典中星有遠差、始建歲差、而悟、極辰元無星、古來唱極星者、實距不動之處爲一度、餘隋丹元子作步天歌、敍三垣二十八宿、爲觀象之津梁、然尙未有各星經緯度數、自唐宋而後諸曆家、以儀象考測、始有各星入宿去極度數、視古加密矣、保井春海曰、舊例云、正朔奏七曜御曆、中星曆者八十二年一度造進、故迄元亨年中驗七政紀其躔度、而其術今亡矣、又春海寬文中、得朝鮮所刻明洪武二十八年乙亥之天象圖、改正之造天象列次之圖、列擧宋兩朝天文志所載之二十八宿度及去極度、至延寶中、春海又因實測、數更造天文分野之圖、然其二圖俱北辰爲天中、開南平布作圓圖、（此二圖距星猶古曆、唯取用參宿四南大星、即今第二星、參宿中星四、即今第三星、）故南方天度廣、星象大而觀者難之、春海仍新營渾天銅儀、依巫咸、甘德、石申三家所著星象、於貞享元祿年間、復實驗之、測定二十八宿度及去極度數、更增益六十一座三百八星、而石申所著者、以赤點記其星一百三十八座八百一十星、巫咸所著者、以黃點記其星四十四座一百四十四星、甘德所著者、以黑點記其星一百一十八座五百一十一星、三家合三百座一千四百六十五星、當時所測定者、以青點記之、

察妖孽禍亂、所行有兵亂疫喪飢旱災火也、但其君修德、則不爲咎而加福、出入無常、故名熒惑也、塡星、土之精、其位中央、主四季、黃帝之子、女主之象、主德、爲五星之王、一名地侯、其於五常信也、於人主脾、塡星順度、則國寧民富、五穀豐熟也、若塡星失度、則歲多風、穀無實、太白星、金之精、其位西方、主秋、白帝之子、大將之象、以司凶兵、凡有六名、一曰天相、二曰天政、三曰大臣、四曰大師、五曰明星、六曰天囂、詩云、東曰啓明、西曰長庚、其於五常義也、於人主肺、太白亂行、不居其度、兵數起、不熟而惡、太白出入順度、則天下昌豐也、西方金色白、故曰太白也、辰星、水之精、其位北方、主冬、黑帝之子也、凡有六名、一曰安調、二曰細極、三曰能星、四曰鉤星、五曰司農、六曰勉星、其於五常智也、於人主腎、凡辰星司災變殺伐、左氏曰、辰星四仲月（二月、五月、八月、十一月、）出、則天下太平、五穀豐熟也、天之執正、出入平時也、此五星在天者、主木火土金水之五行、在地者主五方五岳、居人者主五藏五根、於五常主仁義禮智信、於五事貌也、視也、言也、聽也、思也、此五者不闕、行之者終久、保之者德顯、故動於天地、令感鬼神、天文要抄云、五星盈縮失度、則其精降于地爲人、歲星降爲貴臣、熒惑降爲童兒、歌謠嬉戲、塡星降爲老人老婦女、太白降爲壯夫、處於林麓、辰星降爲婦人、凡諸星皆如此、尙書靈耀云、二十八宿天元氣、萬物之精也、故東方角亢氐房心尾箕七宿、其形如龍、曰左靑龍、南方井鬼柳星張翼軫七宿、其形如鶉鳥、曰前朱雀、西方奎婁胃昴畢觜參七宿、其形如虎、曰右白虎、北方斗牛女虛危室壁七宿、其形如龜蛇、曰後玄武、二十八宿皆有龍虎鳥龜之形、隨天左旋、亦五星從北行南爲順行、從南行北爲退行、爲逆行、又五星早出爲盈、晚出爲縮、又日月星辰謂之天文、日月與星謂之三光、日月五星謂之七曜、衆星並光謂之辰、各晨昏正、寒暑生、歲時成也、六合之間、無不照明、皆知天下之損益、定人倫之禍福耳、

〔和漢三才圖會 一天文〕星（音性中略）○按、星雖亞日月、本是少陽精、自有所司定位、而古今無變換明晦增減之理、偶見其變異者、其地之惟知也、若將風雨則閃爍動皆地氣感冒、然非星動也、氣躍也、故星搖之下當有濕露、百里之外則不動不躍矣、

〔倭訓栞前編二十八保〕ほし　星をいふ、火石なるべし、神代紀に、天安河所在五百箇磐石と見えたるは、天河の星象をいへり、神功紀に、河石昇爲星と見えしは、無事の譬へながら、石と星との子細見つべし、史記註に、星石也ともいへり、占星臺、天武紀に見ゆ、舶來の品に五星儀あり、又星をはかる器に、ぐわとろわんといふあり、星に形を造る事は、道家佛家の意なり、近き比、紅毛人も圖あり、竿のさきで星うつといふ喩は、无門關に押棒打月と見えたり、

〔八雲御抄三上天象〕星　ほしの林　ほしのやどり　ゆふぼし　たなばた　ひこ星　夜ばひ　あまつ　ゆふづゝ　あか(曉星也)　たかへる(是閑寶信歟也、非神妙、)

〔暦林問答集上〕釋星第五

或問、星何也、　答曰、張衡云、衆星萬物之精、列布躰生、於地各有攸屬、在野象物、在朝象官、在人象事、又居中央謂之北斗、天之樞也、合誠圖云、第一名樞、二名璇、三名璣、四名權、五名衡、六名開陽、七名招搖光、黄帝斗圖云、第一名貪狼主子、二名巨門主丑亥、三名祿存主寅戌、四名文曲主卯酉、五名廉貞主辰申、六名武曲主己未、七名破軍主午、孔子无辰經云、第一名陽明星、第二名陰精星、第三名眞人星、第四名玄冥星、第五名丹元星、第六名北極星、第七名天開星、又云第一水、二水土、三木土、四金木、五金土、六火土、七火、於是子午爲天地之經、故斗第一主子、第七主午、從第二至第六、各主兩辰、或主人之本命、以定吉凶、或主物之根元以生萬品、丑又有五星、則五行之精也、爲上帝五使、稟受神命、而各司下土、故配於五方、異于政、或有福德助、或禍罰威刑、順軌而常、錯亂以顯異、故歲星、木之精、其位在東方、主春、蒼帝之子、人君之象、五星之長、司農之官、主福慶、凡有六名、一曰攝提、二曰重華、三曰應星、四曰經星、五曰紀星、六曰修人星、其於五常仁也、於人主肝、凡歲星觀察三才、以進退順逆、決定天下之理也、歲星其明如常、則五穀滋盛、國家安寧、民間有福慶、主歲故名歲星、熒惑星、火之精、其位南方、主夏、赤帝之子、方伯之象、五星之伯、上象太一、下司人君、凡有二名、一曰執法、二曰罰星、其於五常禮也、於人主心、又主歲之成敗、

曐古文（所謂象形、从〇、）星、或省（春秋說題辭云、星之爲言精也、陽之榮也、陽精爲日、日分爲星、故其字日生爲星、依此則又當入日部、）（與晶相似矣、依此說則當入生部、解云、从生象形、）

〔事物紀原一天地生植〕星辰　馬總通曆曰、地皇氏定星辰、後漢天文志注曰、黃帝分星次、凡中外官常明者百二十四、可名者三百二十、微星萬一千五百二十、黃帝創制之大略也、禮記乃云、帝嚳能序星辰、蓋地皇氏始定爲星辰、黃帝又名之、至帝嚳而序也、

星官　後漢天文志曰、軒轅始受河圖、鬪苞授規、日月星辰之象、故星官之書、自黃帝始、至高陽氏、乃使南正重司天、

星次　帝王世紀曰、黃帝受命乃推分星次、以定律度、劉昭補漢志亦曰、黃帝定星次、卽今爾雅所記十二次、與二十八舍之度、皆自黃帝擬之也、

宿度　王子年拾遺記曰、庖犧視五星之文分野之度、史記曆書曰、黃帝名察度驗、臣瓚謂、題名宿度、候察進退三辰之度、吉凶之驗也、又曰、漢武招致方術士唐都分天部、漢書音義云、謂分部二十八宿爲距度、而晉書天文志亦曰、庖犧氏立周天曆度也、

〔類聚名義抄二〕星ホシ（桑經反）　曐（正、星今、）

〔伊呂波字類抄保天象〕躔ホシノヤドリ（日月行經也、星運行也、）

〔和爾雅天文〕星ホシ（氣之精英、羅聚也、又作曐、）　芒ホシノヒカリ（星光也）

〔日本釋名上天象〕星　ほは、ひと通ず、しは白き也、星は日の光をうけて白し、下を略す、

〔東雅一天文〕星ホシ　陰陽二神、日神月神を生給ひしなどいふ事は見えたれど、星神を生給ひしといふ事は聞えず、天に惡神あり、名を天津甕星（アマツミカボシ）といひ、又名は天香香背男（アマノカヽセヲ）といひしといふ事、舊事紀に見えしかど、其義も闕けぬ、古語に火を呼びてホといふ、ホシとは、其光の火の如くなるをいひしに似たり、（ホは火也、シは語助也、又火なホといひしも、日といふ語の轉ぜしと見えたり、）

渾象南極之圖

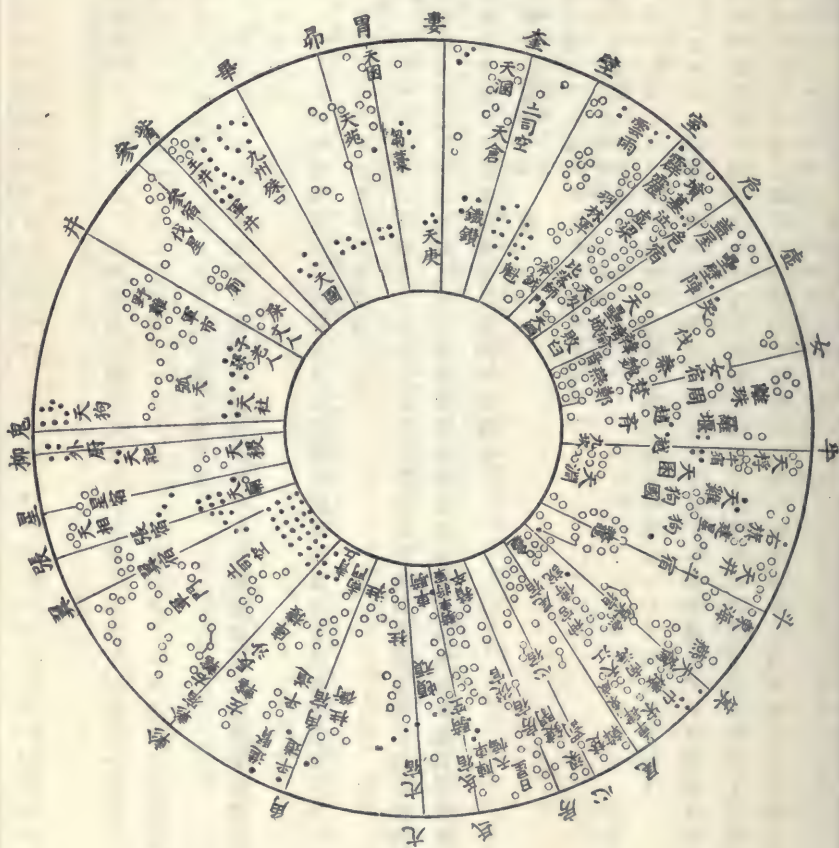
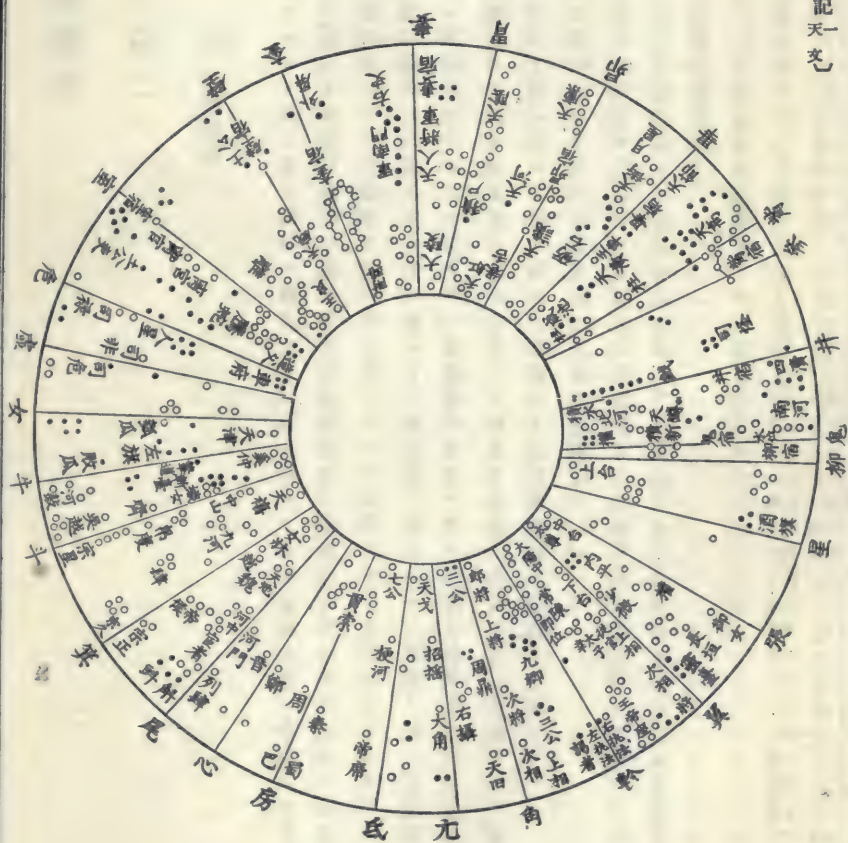
〔事林廣記一 天文〕

渾象北極之圖

角 亢 氐 房 心 尾 箕 斗 牛 女 虛 危 室 壁 奎 婁 胃 昴 畢 觜 參 井 鬼 柳 星 張 翼 軫

古事類苑

天部二

星 天河併入

星ハ、ホシト云フ星ノ位置ニ據テ二十八宿ニ分チ、牽牛星織女星ノ牛宿ノ度分ニアルガ如シ、而シテ各星皆所屬ノ星アリ、歲星木熒惑星火鎭星土太白星金辰星水ヲ五星トス、金星ノ旦ニ見ハルヽヲ明星アカボシト云ヒ、昏ニ見ハルヽヲ長庚ユフヅヽト云ヘリ、彗星ハハヽキボシト云フ、形狀帚ノ如クシテ濃氣アリ、常ニ見ハレズ、時ヲ以テ現出スレバ凶兆ト爲ス、又流星ハヨバヒボシ、又字音ニテ、リウセイト云フ、夜間空中ニ光ヲ放チテ奔リ、白キ餘光アリ、五星以下ノ諸星變異アル時ハ、天文博士之ヲ密奏ス、又彗星流星等ノ如キハ、時ニ大赦ヲ爲シ、祈禊等ヲ行フ事アリ、星ニ關スル事ハ、尙ホ方技部天文道、陰陽道等ノ諸篇ヲ參看スベシ、

名稱

〔倭名類聚抄 一景宿〕星　說文云、星、萬物精上所生也、桑經反、和名保之

〔箋注倭名類聚抄 一景宿〕按、保、火也、言星之光耀如火光也、神代紀云、星神香々背男、亦以光耀名之也、○中略按、管子內業篇云、凡物之精、此則爲生、下生五穀、上爲列星、許氏蓋本之、則此引作所生者、字形相近而誤且脫也、

〔釋名 一釋天〕星散也、列位布散也、　宿宿也、星各止宿其處也、

〔段注說文解字 七上晶〕曐、萬物之精、上爲列星、管子云、凡物之精、此則爲生、下生五穀、上爲列星、流於天地之間、謂之鬼神、藏於胷中、謂之聖人、星之言散也、引伸爲散之偁、从晶从生聲、桑經切、十一部、一曰、象形从○、从三○、故曰象形也、大徐○作口、誤、古○復注中故與日同、古文从三○、而或復｜其中、則

り、皆既におよびて、紫色に見えたり、余(〇菅茶山)姪萬年(名は公壽、字は萬年、俗稱は長作、)こゝろをつけて見しに、月中に一帯の黒氣起りて、また暗くなり、復する時、又黒氣見えしが、これはそのまゝ斜たり、其黒氣は月中のみにて、外には見えずといふ、乙亥(〇十二年)十一月の月蝕皆既の時は、西南よりかゝりて、はじめは盤の中に、墨汁をこぼし入れたるごとく、たゞ黒くして、そことも見えわかず、傍なる星は爛爛たり、

〔狗猧集秋五〕十五夜月蝕に

まん丸な月かきもちの夜食哉　慶友(〇中略)

十三夜月蝕に

ゑよくするや栗名月の虫くらひ　貞徳

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月乙酉、(〇二十一日)是夜月蝕之、丙戌、(〇二十二日)是夜月蝕之、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰二年二月九日癸酉、月蝕、在張既焉、

〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕昌泰四年(〇延喜元年)正月十五日戊戌、月食、十六日己亥、有月食、

〔順廣王記〕安元三年三月廿五日乙丑、月有皆虧蝕、其色如墨暗、古今希代天變云々、

之故、其許之心得ニ申置之間、尙又被申合可有心得旨被示也、委細畏入申恐惧之旨退來、差次藏人源藏人兩人ヘ右之趣申傳了、（新藏人ニ者、後日可申傳覺悟也、）

一退出掛戌刻過參洞、謁當番評定唐橋式部大輔、明夜月蝕御殿裏刻限等相伺旨申入處、（是非依一兩人相伺、依院司相伺也、）同卿承知、卽禁中刻限被尋、申刻之旨申入、同承知也、後刻被招被申渡曰、明夜月蝕御殿裏刻限、禁中御同樣申刻被仰出候趣、禁中此御所參勤同人ニ候者、先禁中相濟、其後參院不苦御沙汰之旨被示、答申曰、畏入了、併禁中差次藏人、此御所（俊矩）參仕覺悟之間、御刻限參仕可申旨申入、卽退出了、（此事亦御內儀ヘ被申入候樣子也、恐入候儀也、）

一明夕參勤之事、今日於宮中面陳兩侍中、仍更不出廻文、未半刻助功參內、撤却者常顯參勤之筈也、洞中ニ者予參勤覺悟、

一掃部頭出納等催事在要用

十五日庚午、月蝕也、（曆面云、皆既申八刻、乍皆既出、酉二刻甚、戌一刻上之右終、）御殿裏未半刻助功參內、出納所衆掃部寮等如例出仕、乘燭前事訖、助功退出、清涼殿筵道撤却、戌刻過常顯參勤也、

四年十月十五日癸未、就明夕月蝕、午後參內謁議奏卿、明日月蝕御殿裏之事刻限等相伺旨申入、當番中山前新大納言承知、後刻被招、明日月蝕御殿裏、申半刻可參勤旨被申渡、承之退出、次參院謁、評定卿明晚月蝕御殿裏刻限相伺旨申入、當番押小路前宰相承知、禁中刻限被尋、申半刻旨申入、又禁中洞中參勤人體被尋、仍雖未相催、禁中新藏人、洞中差次可參、何分兩御所同人ニ而者無之旨申入處承知、後刻被招、明晚月蝕禁中御同樣可爲申半刻被仰出旨被申渡也、承之卽時退出申半刻過也、

十六日甲申、月蝕也、御殿裏、申半刻俊常參內、但撤却ニは常顯參勤也、洞中御殿裏同刻、助功參院也、

〔筆のすさび　一〕一月蝕　文化壬申年〇九七月、既望の月蝕は、鏡に匣の蓋を覆ふごとく、東よりかゝ

甚、乃西方曙黑之後、此時狠星在牛西三十七度一十分、月在狠東九十七度八十八分、月赤道以南八度零九分、晝測太陽、赤北六度六十六分、自甚至復、七刻四十九分、是則定用分也、

右定用之數、不測初甚之間、則未必實測也、先生〇書太長由固有志於改曆、故與不肯攻往于野上于山、或正數、或改術、至于死不惜其書、以傳之不肯、於呼先生、實守敬之徒也、

元文五年庚申六月十六日、昏前月帶食、陰雲不見、海上高丈餘月見、此時乾方漸曙、蓋此食在黃昏之間乎、

明和二年七月十四日、夜月蝕皆既、〇中略

略術曰、列既內分、以既外分除之、得六分七六、加之十分、爲食分、乃此術月行地影正中、則可也、故爲略術也、寬保三年癸亥四月十五日月食、赤十七分九也、授時曆等之月食、定於十五分者甚誤也、

〔大江俊冬記〕明和九年〇安永元年三月十五日戊、今晚亥八刻月蝕皆既也、依之申半刻蝕構參內、議奏葉室前大納言賴要卿江申入置、酉半刻比被招、直議奏同道ニ而常御殿ヘ參、南東如例、筵道ヲ立合ニ掛候事、竹針ニ而打付也、都合筵道十七枚相濟直退出、于時戌刻、尤退出直被申渡也仙洞御所蝕構、常芳參仕之由承也、

〔大江俊矩記〕文化元年十二月十四日己巳、明十五夜就月蝕、御殿裏刻限等、謁議奏卿相伺處、當番山科右衞門督承知、後刻被招被申渡曰、明夜月蝕御殿裏之事、刻限可爲申刻被仰出候間、未半刻可有參勤候、且又當夏六月十六日月蝕之節、御殿裏刻限子刻と被仰出候處、差次藏人遲參、自御內儀度度催促有之、不都合之趣ニ有之氣毒候、明日之處無遲參樣、未半刻ニ急度可有參勤候、其上差次藏人隨分心得之人體ニ有之處、其節者少々樣子も有之候趣ニ候、勿論尋常之御座咫尺之處ニ候得者、其心得可有之儀也、同列中皆々覺悟之人、別而差次ニ者心得之人體ニ候處、如何之事哉、其夜者少々樣子も有之樣ニ相聞氣毒候以來以其心得隨分可被存靜謐、尤本人江可申程之儀ニ而者無

駒牽當月蝕例

天承元年八月十六日、駒牽也、今夜月蝕、
久安六年八月十六日、今夜月蝕、先御讀經、次内印、又有駒牽事、
仁安三年八月十六日、有駒牽、上卿以下參入、今夜可有月蝕之由、曆道申之、而不正現、
〔義演准后日記〕慶長十四年十二月十五日、晴、月蝕皆既、當時御祈ノ沙汰無之、
〔新蘆面命〕貞享二年乙丑五月甲戌望、丑ノ初刻ニ虧初ム、コレ改曆ヨリ初テノ食也、此時水戶殿ノ
天文者、川勝六右衛門ト云者、難ジテ曰、此食授時曆ニ初虧子ノ四刻ナリ、然ルニ新曆ニハ丑ノ一
刻初虧ト付タリ、扨々オカシキ事カナ、我等算哲ニ問候ヘバ、里差ヲ加ヘ申候ハヾ、此後十一月十
五日ノ食、授時ト刻限合候ハイカヾ、（十一月望ノ食、授時ノ刻ト貞享ト間ジ、故ニシカイヘリ、）其實ハ、算哲事、授時カラガ得ト
ユカヌト見エ候ナド、甚惡口申候、其夜中山大納言篤親卿ノ所ニテ、祈禱有之、出雲路玄仙ト彼川
勝其外大勢參リ候、川勝衆中ニ向ヒテ申候ハ、今夜ノ食ニテ、新曆ノ合候哉御覽候ヘ、授時ノ食ハ
子刻也ト申ス、サテ九ツノ鐘打候ヘバ、イヅレモ庭上ヘ御出ナサレ候ヘトテ、出デ、窺ヒ見候ヘ
ドモ不食、九ツ半マデハ子ノ刻ナレバ、御覽候ヘト申候ヘドモ、中々不食候故、アマリニ笑止ニナ
リテ、一人ハヅシ、二人ハヅシニゲ申候、其後漸々八ツ打申候時初虧申候、コレヲ無念ニ存ジ、六右
衛門ハ其後老病ト號シ、曆算ヲ止メ申候、
〔仙臺實測志上〕享保十八年癸丑四月十五日、夜七時、測月、赤南二十二度一十二分、至翌晨而月食不
見、日出而測日、亦赤道以北在二十二度一十二分、蓋他邦之食、
享保二十年乙卯三月十五日、清明之日、夜月食六分半、
昏前與青木長由先生往于伊勢山、而欲窺月出、然東海上有橫雲、不得見之、月昇及六七尺、而月始見、
而昇至於丈餘、初虧、此時大星既見、西方、未昏黑也、先生曰、知不帶食。。當歸家、於是不肯亦歸觀渾儀、食

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年十二月十五日壬辰、陰雨下、今夜月蝕不現、此蝕不可現之由、天文道日來申入之云云、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年〇延應元年四月十五日甲寅、月蝕不正現、御祈助僧正嚴海、宿曜道助法印珍譽也、蝕現否有相論、一方聊虧之由、有令申之人、又全無虧、他州蝕盡之旨有其說云云、

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年正月四日乙巳、及子剋將軍家〇藤原頼經内々以御使、被仰大納言法印隆辨云、今年御本命宿月曜也、而來十六日月蝕、殊可有御愼之由、天文宿曜兩道所勘申也、今度不出現之樣可祈請者、隆辨一旦雖申子細、重被仰之間領狀云云、　十六日丁巳、自朝至戌剋更無一雲、臨月蝕之期、自未申方片雲漸聳、忽覆普天、細雨頻降、復末以後、朗月早現、丑剋將軍家以御自筆御賀札、被遣御馬號直山、名馬也、置鞍、御劒皆白等於隆辨之壇所、肥後三郎左衞門尉爲重父前大宰少貳爲佐、當時爲内御厩別當、爲御使、彼法印自去八日、參籠明王院北斗堂祈請、

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年六月十五日甲申、月蝕正現皆虧也、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年五月十六日癸酉、月蝕不現、剩圓滿明、但夜半以後陰雲云云、

〔葉黄記〕寛元五年〇寶治元年五月十三日乙丑、參院、月蝕事有相論、先暦道之中猶不同、在尙、在直申十六日之由、在淸、在盛申十五日之由、爲成俊奉行召此輩、予〇藤原定嗣可尋決之由有仰、出北面問之、在淸十六日寅剋之由、以術道之意申之、在尙十七日寅剋之由、且就先例申之、在尙申狀頗無所據歟、算道申十六日之由、宿曜道又不同云々、　十六日戊辰、參院、此曉雖天陰、寅剋自雲間月蝕顯云々、司天維範朝臣忠俊申此由、自餘申不見之由、然而須臾顯現歟、頻申勸賞、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年正月十五日丙申、丑剋月蝕正見、八分、御祈加賀法印定淸、

〔國太暦〕康永四年〇貞和元年八月十六日、抑今日駒牽、當月蝕、可爲何樣哉、不審之旨相尋候處、師利師茂等、雖送先例、別不憚也、

〔百練抄五鳥羽〕永久三年二〇二、一本作正、月十四日、寅剋月蝕正現、宿曜與暦道所申相違、上皇〇白河又有勅難、
〔時信記〕天承元年八月十五日、今日有月蝕、其事可及寅剋、可爲明日蝕分歟否之由、有其論歟、但猶爲十五日分、　十六日、今夜可有小除目之處、月蝕猶可爲今日分之由、其疑出來、被問先例、隨信俊勘申、然而依院宣延引了、
〔中右記〕長承二年七月十五日、今夜月蝕十五分之七中略月在危宿、虧初亥三剋七十八分加時子剋十三分復末丑初剋廿二分時剋推移正現、但前蝕是五分也、先例式增減之由、家榮朝臣所申也、月蝕御祈、內仁王講御讀經十二口、
〔台記〕久壽元年十一月十五日甲子、依月食憚、鷄鳴出洛、申剋歸家、
〔百練抄七二條〕長寬二年五月十五日、寅剋月蝕、暦道宿曜道相論、暦道云、明曉寅剋蝕、宿曜道云、十六日望月蝕、十七日曉云々、
〔兵範記〕仁安四年二月十四日辛丑、晩頭參內、有月蝕御祈等、〇中略勘文云、今月十五日望朝月蝕事、
大陰蝕分十五分之八分　蝕初寅二剋九分加時寅七剋、復末卯三剋、
十五日壬寅、望月蝕復末了、御祈結願之後退出、
〔百練抄十二順德〕建暦元年四月十六日、月蝕皆虧、
〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年九月十五日甲戌、將軍家〇源實朝其夜白地入御相州御亭、卽欲有還御之處、亭主奉抑留給、今夜依爲月蝕、不意亦御逗留、亭主殊入興給、
建永二年〇承元元年七月十四日戊子、月蝕十分正見、
〔吾妻鏡二十二〕建保二年八月十五日丁未、子剋月蝕、今日鶴岡放生會也、蝕之間、拂曉將軍家〇源實朝御出、經會舞樂、早速被遂行也、
〔百練抄十三後堀河〕嘉祿二年七月十五日、今夜月蝕皆虧、如法如暗夜、
〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿二年七月十五日戊辰、月蝕正見皆虧云云、

長元四年七月十七日壬戌、中納言相共昇殿、關白太閤（賴通○藤原）於殿上待、數剋言談之間、曆博士道平參入之由、頭辨申、太閤仰云、奏事由、去十五日月蝕、仰不違勘申者之由、可賜祿者、辨奏事之由於腋陣下給祿、（召内藏寮黃衾）拜舞退出、　七年十月十五日辛未、及亥三剋月蝕、如曆道申者、酉剋蝕云々、而及亥了、是曆術盡歟云々、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承四年七月十五日、曆道注月蝕、而不蝕、

〔水左記〕承曆五年（○永保元年）十月十六日己巳、道言云、今日有月蝕、（皆既）虧初午二剋、加時未三剋、復末申四剋、件蝕依爲晝剋、不注奏御曆、而先例臨復末之終、帶蝕自正見者也、仍去八日奏聞子細了者、剋限正見云々、

〔扶桑略記三十白河〕應德二年八月十五日丙子、亥時月蝕皆既、月色似紅、无光天晴、

〔殿曆〕康和五年八月十四日辛酉、辰剋許退出、余（○藤原忠實）當蝕、仍以六口僧（尊勝念珠）又以六口僧轉讀大品經、今夜不蝕云々、不審無極、可被問諸道物（○物上恐脫勘字）歟、

〔爲房卿記〕康和六年二月十五日己未、今夜有月蝕、虧初亥剋、十五分之六分者、道家申狀曾無相違云云

〔中右記〕嘉承二年十一月十六日、今夜可有月蝕之由、曆道所奏也、仍院有大般若御讀經、（僧十口）是依可有御愼也、而天陰雨下、不正見、誠佛法之靈驗也、

〔長秋記〕天永四年（○永久元年）二月十五日、今日月蝕也、供膳之間、人々依廢務、不可警蹕、予稱（○稱一本作僤、恐彈、）之、其故者大陽虧、有司不奏事者、謂大陽圓者不同故也、人々皆同之、

〔中右記〕永久二年正月十四日、今夜依可有皆既月蝕、（○中略）入夜雨止、月蝕頗雖見、雲葉遮掩、強不正現也、臨亥剋天已晴、定知有皆既蝕、上皇（○白河）今年御年六十二、御當年星也、而雲膚重掩、月蝕不見、兼御祈之所致歟、

北極同高、而西方見食必先、東方見食必後也、凡東西差一度、則時差二十七分餘、今以京師爲主、各方偏京師之東者、以時差加、偏西者以時差減、皆加減京師、各限時刻爲各方、各限時刻也、是故欲定各方之時刻、必先定各方之子午線、欲定各方之子午線、非分測各方之月食、無由得矣、順推步之法、月食猶易而日食最難、以月在日下、人在地面、隨時隨處所見常不同也、自大衍以至授時、其法寖備、至清全用西法、推驗尤精、西人噶西尼等益復精求立成新表、其理不越乎昔人之範圍、而其用意細密、又有出於昔人所未及者、如求實朔實望、用前後二時、日月實行爲比例、昔之用平朔平望、實距弧者未之及也、求各限時刻、皆用兩經斜距爲比例、昔之用月距日實行者未之及也、雖其數所差無多、而其法實可取矣、

〔日本書紀二十四皇極〕二年五月乙丑、月有蝕之、

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年七月十五日癸未、酉初月有蝕之、至戌復本、輪下片黑如聚雲、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜九年正月十四日癸未、月蝕、其所殘僅如小星、例月蝕雖既、其輪猶存、今夜無具輪、此頗異常、春夏之間、疾疫盛發、

〔本朝世紀〕天慶元年十二月十五日戊子、今夜亥剋月蝕也、先是、權曆博士外從五位下葛木宿禰茂經進勘文云、今年十二月十五日戊子、夜、月可蝕五分之四、半弱虧初亥一分、蝕甚亥一剋三分、復末亥二剋四分、蝕所起月在陽曆、初起東北、甚於正北、復於西北、但十五分之四者、僅及三分之一、其蝕甚少、所謂天道雖玄遠、而經術之妙、不差毫釐者也云々、爰時之好事者、依件勘文、通夜効驗之、毫釐無差、悉叶勘文、當時以件茂經宿禰爲賢有識之者、

〔日本紀略二朱雀〕天慶八年二月十五日壬午、月蝕、驗天不食、

〔日本紀略六圓融〕天延三年十二月十六日癸丑、夜、月蝕皆既、終夜不見、

〔左經記〕萬壽三年四月十五日辛酉、月蝕、三分之一　廿七日癸酉、自今日請仁海僧都、於宮御在所、被行御修法、依去十五日夜月蝕可愼御座之由勘申也、又令吉平奉仕月曜御祭、

月蝕

く、夜る月の色白きは雨のきざし也、又日の色あをく、夜る月の色青きは寒の兆なり、

○

〔和爾雅一天文〕月蝕同月食

〔和漢三才圖會一天〕月蝕十四、十五、十六、此三箇日、月蝕雖有卯辰時、闇之前日、月蝕者至月望、則日月正對如一線、日在地下、地球障隔日光、不能照之、故月失其光、漸出地影之外、則日能照之復元、月蝕入陰曆、則初虧東南、甚於正南、復於西南、入陽曆、初虧東北、甚於正北、復於西北、

〔寬政曆書八月食曆理〕交食總論專論月食

或問、日月薄蝕、古以爲變異者是乎、抑亦否乎、若言是則躔離有常、上下千萬年、如視諸掌耳、若言否則古聖賢戒懼修省又復何、說曰、若其是否、則曆家姑置而不論焉、惟治曆之要、窮日月星辰運轉之理、期於合天、是古聖欽若之道也、夫日月躔度、相會爲朔、相對爲望、此皆爲東西同經、其入交也、正當黃道、而無緯度、是爲南北同緯、雖入交而非朔望、則同緯而不同經、當朔望而不入交、則同經而不同緯、皆無有食、必經緯同度而後有食也、蓋合朔時、月在日與地之間、人目仰觀、與日月一線參直、則月掩蔽日光、卽爲日食、望時地在日與月之間、亦一線參直、地蔽日光而生闇影、其影尖圓、是爲闇虛、月入其中、則爲月食也、蓋月食十分以上者有五限、一曰食甚、乃月入影最深之限也、一曰初虧、月將入影兩周初切也、一曰食既、月全入影、其光盡掩也、此二者在食甚前、一曰生光、月將出影、其光初吐也、一曰復圓、月全出影兩周方離也、此二者在食甚後、十分以下者止三限、無食既與生光矣、測家求精密、尤勤于交食、蓋太陰去人最近、僥有視差、凡人目所見、儀器所測、則視度而已、其實行度分非人可見、非器可測、故必以月食食甚時知爲定、望與日正相對、從是知其實度、從是知其實行、自餘行度漸可推算矣、月食淺深分數、天下皆同、而各限時刻不同者、非月入影有前後、乃人居地面有東西也、蓋認日之所行爲時、隨人所居各見日出入爲東西、日中爲南爲子午、而平分時刻、故其同子午之地、雖南北懸殊、北極出地高下不同、而時刻不異、若東西易地、雖

〔徒然草下〕花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは、雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行へしらぬも、猶あはれに情ふかし、〇中略望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて、待出たるがいと心ふかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢にみえたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれの程、またなく哀なり、椎柴しらがしなどの、ぬれたるやうなる葉のうへに、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ、すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは、春は家を立さらでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそいとたのもしうをかしけれ、〇下略

〔筆のすさび四〕一月を見る說　友人橋本吉兵衞、名は祥、來り語る、人の月見るに、人によりて大小あり、おのれは徑二三寸のまろき物と見しが、人によりて徑六七尺にも見ゆるあり、六寸許に見ゆるは、尋常の人の目なり、されば所謂ぬか星などは、おのれが目には見えざるべしといふ、人々皆試みし事にや、予〇菅茶山ははじめてきゝぬ、

〔雲錦隨筆四〕小兒に月を指しむることなかれ、雨耳の後に瘡を生ず、月食瘡と號と也、

〔萬寶鄙事記六占天氣〕月　月の出入の時、よく見て風雨を知るべし、　月にかさあるは風、かならずかさのかけたる方より來る、　前月大なれば二日に月みゆ、前月小なれば三日に月見ゆ、大二小三といふ、　二日三日まで月見えざれば、その月風雨しげし、新月下にそりてかけたる弓のごとくに上にたまりなきは、其月雨すくなく風多し、あをのきて上にたまりあるは、其月雨多し、新月の下に黑雲横るは明日雨、　月はじめて生じ、かたち小にしてはゞ大なるは、水のわざはひあり、かたち大にしてはゞ小なるは、三日のうちに雨ふる、　白氣月をつらぬくは、夏は大水、秋は風吹、黑氣月をつらぬくは、夏は大水出、春秋も水、又は陰、　月のそばに黑雲おこるは大水　月の上下黃雲くらく覆は大風　日の色しろく、夜る月の色あかきは旱せんとする兆しなり、日の色あか

〔竹取翁物語下〕かぐや姫、月のおもしろう出たるを見て、常よりも物おもひたる樣也、ある人の、月。の。顏。見。る。は。い。む。事。とせいしけれども、ともすれば人まにも月を見ては、いみじく泣給ふ、

〔後撰和歌集十一戀三〕月をあはれといふは、いむなりといふ人のありければ、　よみ人しらず

獨ねのわびしきまゝにおきゐつゝ月を哀と忌ぞかねつる

〔源氏物語十二須磨〕入道の宮の、きりやへだつるとの給はせし程、いはんかたなくこひしく、をり〳〵のこと思ひ出給に、よゝとなかれ給、夜ふけ侍ぬときこゆれど、猶いり給はず、

みるほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月。の。都。ははるかなれども

〔枕草子二〕すぎにしかたこひしきもの　月のあかき夜

〔枕草子六〕あはれなる物　二十六七日ばかりのあがつきに、物がたりしてゐあかして見れば、あるかなきかに心ぼそげなる月の、山のはちかく見えたるこそいとあはれなれ、○中略あれたる家にむぐらはひかゝり、よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき、

〔枕草子十一〕月のあかきにきたらん人はしも、十日、廿日、一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出たらんは、いみじうをかしとおぼえて、えあふまじうわりなき所、人めつゝむべきやうありとも、かならず立ながらも物いひてかへし、又とまるべからんをば、どゞめなどしつべし、月のあかきみるばかり、とほくもの思ひやられ、過にし事、うかりしも、うれしかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうにおぼゆるをりやはある、こまのゝ物がたりは、何ばかりをかしき事もなく詞もふるめき、見所おほからねど、月にむかしを思出て、むしばみたるかはほりとり出て、もと見しこまにといひてたてる、いとあはれ也、

〔新古今和歌集四秋〕題しらず　藤原家隆朝臣

ながめつゝ思ふもさびし久かたの月の都のあけがたの空

〔萬葉集十秋相聞〕問答
四具禮零、曉月夜、紐不解、戀君跡、居登物、
〔伊勢物語下〕昔これたかのみこと申みこおはしましけり、山崎のあなたに、水無瀨といふ所に宮有けり、略○中夜更るまで酒のみ物語して、あるじのみこ、ゑひて入給ひなんとす、十一日の月もかくれなんとすれば、かのむまのかみの○在原業平よめる、
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入ずもあらなん、みこにかはり奉りて、紀の有つね、
おしなべて嶺もたひらに成ななん山のはなくば月もいらじを
〔土左日記〕八日、さはることありてなを同じ所なり、こよひ月は海にぞいる、これを見て業平のきみの、山のはにげて入ずもあらなんといふうたなんおもほゆる、もし海べにてよまゝしかば、なみたちさへていれずもあらなんとよみてましや、今此歌をおもひいでゝ、或人のよめりける、
てる月の流るゝ見れば天の川出る湊は海にざりける、とや、
〔古今和歌集秋四〕題しらず　よみ人しらず
白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月
〔古今和歌集秋五〕題しらず　よみ人しらず
秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずをみよとか
〔古今和歌集雜十七〕題しらず　よみ人しらず
我心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て
〔後撰和歌集夏四〕夏の夜の月おもしろく侍りけるに　よみ人しらず
今宵かくながむる袖の露けきは月の霜をや秋とみつらん

有地震、月在胃十一度、又同剋月犯五車、

〔台記〕久壽二年七月廿六日辛未、深更月犯太白、卽使人問泰親、使者歸來云、泰親立地仰天、　廿七日壬申、泰親、月犯太白、天子惡、(先帝崩象歟)母主惡、(關白殿北政所、將亡象歟)立太子皇子歟、

〔吉記〕治承五年三月十日丙戌、今月七日亥時、月犯塡星、(相去一尺所)主司女主之過、

右申四月與塡星並出、中國兵起、女主惡之、不出一年、　廿氏曰、月犯塡星、國德臣死、　丁儀曰、月犯塡星、其國亡、貴人死、天下有大喪、荊州日月犯出、貴人兵死天下亂、

〔玉海〕治承五年(○養和元年)八月廿一日乙丑、泰親朝臣來、申天變之間事、去十八日戊時、月犯畢火星、(五寸所)天子愼、大將軍愼、內裏火事等也、又有天子誅邊將之文、當此時尤有其恐者歟、又君使於道路可死云云、是又似有追討使之厄歟、同廿日寅時、月犯天關、(七寸所)女主愼之、又天子將軍等愼云々、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十一月三日甲寅、戌剋月犯太白星、(相去二尺餘)　五日丙辰、戌剋月凌犯鎭星、月犯熒惑星、戌剋月歲星侵之、

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年十二月十八日甲申、子剋月犯歲星之由、司天等驚申、今夜大殿御方被始行御祈等云云、

〔萬葉集三雜歌〕長皇子遊獵路池之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌、○中略

久堅乃、天歸月乎、綱爾刺、我大王者、蓋爾爲有、

〔萬葉集四相聞〕湯原王贈娘子歌二首○中略

目二破見而、手二破不所取、月內之、楓如、妹乎奈何責、

〔萬葉集七雜歌〕詠天

天海丹、雲之波立、月船、星之林丹、榜隱所見、

右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出、

〔日本紀略朱雀二〕天慶二年六月四日甲戌、月與太白成變星晝見、

〔日本紀略村上四〕天德四年四月四日癸酉、今日月與太白合宿、　五日甲戌、戌剋月犯北河、　廿日己丑、主稅頭以忠奏、去十八日、月犯南斗第二星、

應和二年四月十三日庚子、奏、十二日夕戌剋、月與歲星同宿文、　七月十日乙丑、天文博士保憲、助教以忠等申、九日月犯心前星、　九月廿四日己卯、助敎以忠上、去廿三日曉月犯軒轅夫人奏、

康保三年正月九日乙亥、天文博士保憲上、去八日月犯昴星異狀、　十五日辛巳、天文道申、去十四日月奄食軒轅大星異狀、　廿三日己丑、天文（○文下恐脫道字）上言、去廿一日丑時、月犯心後星、　二月十日乙巳、天文道申、去八日、月奄蝕五車（○車、一本作東、今據史記天官書改）、司空異奏、　十二日丁未、天文道申、去十一日夜月犯輿（○輿、一本作興、今依漢書天文志改）鬼大將軍星異奏、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年七月廿七日戊申、月與太白同所、（五寸）

〔日本紀略圓融六〕天延三年六月廿三日甲子、曉月犯畢、

〔權記〕長保四年六月十五日己卯、權天文博士奉平宿禰來示云、去九日月犯心後星變、是庶子可愼、其後不幾前彈正親王薨去給、昨依右將軍召、詣將軍、命云、康保之間、又有此事云々、

〔小右記〕長和二年三月九日庚子、頭辨寫送云、六日夕戌時、月入東井中、犯第三星之密奏、是用意之深、大將可愼之變也、昨日大雨變異消歟、

寬仁三年六月四日己丑、午時月星共見、月在巳、星在月坤、相去七八尺所、三光一時變異、希有怪也、若太白星歟、

〔本朝世紀〕久安二年八月十八日乙卯、戌剋月犯鎭星、相去五寸許、　三年三月四日丁卯、戌時月犯歲星、相去一寸所也、　五年正月廿一日甲辰、今日丑剋月犯心大星、　五月十二日癸巳、今夜月犯心大星、　六年九月廿七日庚子、寅剋月犯太白、相去九寸、有太微端門內、　十一月十四日丙戌、今夜亥剋

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年四月丁未、月犯熒惑、　二年閏正月戊子夜、月犯塡星、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年正月乙未夜、月犯心大星、

天平元年七月癸丑、月入東井、

〔續日本紀 十五聖武〕天平十五年二月乙未夜、月掩熒惑、　丁酉夜、月掩太白、

〔三代實錄 十六淸和〕貞觀十一年七月六日壬戌夜、月犯心前星、　八日甲子夜、月犯入北斗魁中、

〔三代實錄 十九淸和〕貞觀十三年四月十五日辛卯、月行奎心前星、昏蝕其中大星、

〔三代實錄 二十二淸和〕貞觀十四年九月六日癸酉夜、月入箕、　十六日癸未、日赤無光、月宿亢氐、

〔三代實錄 二十六淸和〕貞觀十六年十二月十一日乙丑、是夜月犯昴星、　十六日庚午夜、月犯輿鬼、

〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年十一月廿六日丁巳、子時月入氐中、　廿七日戊午、卯時月犯房星幷鉤鈐星、　十二月十一日壬申、是夜月犯畢、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年十一月廿四日己卯、是夜月入氐中、　十二月廿二日丁未、入氐、

〔三代實錄 四十二陽成〕元慶六年九月七日丙子夜、月行奄犯牽牛第一二星、　十一月四日壬申、是夜月行奄陵歲星、入月中、從西貫東、

〔三代實錄 四十三陽成〕元慶七年三月十日丙子、昏時月暈行犯大微西蕃上將星、亥時白雲氣自北方來入暈中、其數五片、廣一尺許長一丈、四片乃滅、一片貫月、良久消却、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年四月十四日甲辰、月在房宿、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年八月廿七日己卯、月行入太微右掖門、出左掖門、

〔日本紀略 一醍醐〕昌泰元年七月七日乙亥、月犯土星、

延喜六年五月八日庚申、戌時月入紫微、犯謁者星、　十年五月廿一日己酉、月建犯鎭星及奎婁星、大陵天倉、　七月十一日戊戌、月入南斗魁中、犯第三離星、熒惑犯房第二星、

月暈
月珥

〔日本紀略圓融六〕天延三年八月廿四日癸亥、上總國申、夜月及申方之間、滿月始出東方、

〔本朝世紀〕正曆五年六月十五日乙未、此夕滿盈之月、出山際之間、已半月也、如三日之月、及丑剋之間、漸滿、明日有天文之奏、多有凶事、

〔小右記〕寬弘二年二月十八日丙申、去十六日日欲入之間、其色如火、月出間、其色相同、乍驚問遣奉平宿禰云、雲陰掩所見也者、昨日月又如一昨、今日又同、仍重問奉平宿禰、答云、連日連夜有此事、誠可爲變、明日可上奏者、

〔中右記〕保延二年三月十八日、今夜月甚赤、如何、可問天文博士也、

〔百錬抄高倉八〕嘉應元年三月十六日、月色大赤、

〔顯廣王記〕安元三年六月三日辛未、今夕月中切云々、天變最重歟、

〔三代實錄光孝五〕仁和三年三月十四日戊子、是夜始自戌剋、月有冠纓、左右爲珥、至于亥時爲白暈氣、及將消滅猶有兩珥、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十月十三日戊午、今夜戌剋、月在五色笠、將軍家覽之、被驚思召之處、非變異之由、司天等申之、

〔狗猧集秋五〕十七夜立待に

柄のなきをさすとはいかに月のかさ　久家

〔萬寶鄙事記占天氣六〕月の暈は雨、黑氣あるもあめ、去かれども青霞花暈などいふ事のあれば、たとひ月に暈有ても雨ふらざる事有、　月のかさは必ず中天にある時なり、十五日の前後七八より廿二三日の間に有て、月のはじめおはりにはなし、月のかさ一方かけたるは風なり、たちまちに暈消え去るは晴なり、をよそ暈は其所によりてこれ有、世上一時にはなし、

月犯星

〔續日本紀元正九〕養老七年十一月戊子夜、月犯房星、

もすがらあくがれて云々、又碧玉集に、花かすむゆふべをとへばおぼろよの月にもなりぬをちかたのさと、など後世には猶おほかるべし、

〔源氏物語三十五若菜〕春のおぼろ月よ、秋の哀はたかうやうなるもの、ねに、むしのこゑよりあはせたる、たゞならず、こよなくひゞきそふ心ちすかしとの給へば、○下略

〔平家物語四〕いづくしま御かうの事

この日ごろ聞えさせ給ひつる、いつくしま御かうをば、西八條のていより、すでにとげさせおはします、三月もなかばすぎぬれど、かすみにくもるあり明の月はなほおぼろ也、

〔新古今和歌集一春〕百首の歌奉りしとき　源具親

難波がたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくるも朧月夜に

月竝出

〔異本塔寺長帳六〕慶長十四年三月四日、東西南北ニ月四ツ現、南西北ノ月動、夜九ツ時消、

月光呈異狀

〔日本靈異記下〕災與善、表相先現而後其災善答被縁第卅八

山部天皇○桓武代、延暦三年歳次甲子、○中略次年乙丑年秋九月□□日之夜、竟夜月面黒光消失空闇也、同月廿三日亥時、式部卿正三位藤原朝臣種繼於長岡宮島町、而爲近衛舍人雄鹿宿禰木積波々岐將丸所射死也、彼月光失者、是種繼卿死亡之表相也、○下略

〔三代實錄一清和〕天安二年九月三日辛酉、夜月中有黒色、須臾月色赤如血、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月十九日壬子、自十六日至十八日、日初昇白無光、月初出赤如丹、今日並復舊、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年六月廿一日庚午、遲明、月色正黄、有赤雲覆之、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年四月十四日癸亥、是夜自子至丑、月黒无光、寅時自下端稍成光、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年六月五日、終日見月、

〔續本朝往生傳〕阿闍梨延慶者、武藏守業貞之舍弟也、○中略其年臘月、令₂弟子道圓上人問₁鄕音₁、有₂人答曰、狭夜深氏、何方賀月之、西倍行云々、道圓釋曰、西方往生之相也、十五日以後月稱₂晨月₁、若十四日可₂遷化₁歟、

〔八雲御抄三上天象〕月○中略　ありあけの月は、十五日い後をいふよし、在₂匡房往生傳₁、

〔續世繼七うたゝね〕土御門の右のおとゞ○源師房と申しは、はじめて源の姓えさせ給て、師房のおとゞときこえさせ給き、御身のざえもたかく、文つくらせたまふかたもすぐれ給て、野のみかりのうたの序など、人の口にはべるなり、又月のうたこそ、こゝろにしみてきこえ侍りしか、

有明の月まつほどのうたゝねは山のはのみぞ夢にみえける

〔源平盛衰記二十六〕忠盛婦人事

忠盛備前守ニテ、國ヨリ都ヘ上タリケルニ、院○白河ヨリ御使アリテ、攝津國ヤ難波潟、明石ノ浦ノ月ハ、イカニカ有ト御尋有ケレバ、御返事ニ、

有明ノ月モ明石ノ浦風ニ波計コソヨルト見エシカ、ト申タリ、御感有テ金葉集ニ被₂入ケリ、

〔新古今和歌集一春〕文集嘉陵春夜詩、不明不暗朧々月、といへることをよみ侍ける、

大江千里

てりもせずくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしく物ぞなき

〔碩鼠漫筆十〕朧夜の語例

或歌讀の先生いへらく、近人の歌を見るに、朧夜といふ語おほし、古人は常に朧月夜とつゞけて、おぼろ夜とはをさ〳〵いはざりきといへり、春村按ふに、こはよろしげなる心づきなれど、古今六帖第五帖に、墨染のたそがれ時のおぼろ夜にありてし君にさやにあひみつ、とまづは見ゆれば、ふつにかなしとはいひがたかるべし、但し李花集の詞がきに、朧夜の月のひかりによ

有明月

〔新撰六帖 一〕はつかの月

長月のはつかの月を待出て我ためみつと妹まるらめや　家良

〔運歩色葉集 同〕有明　在明

〔書言字考節用集 二 乾坤〕殘月(アリアケノツキ)又云 破鏡　頹魄(同)

〔倭訓栞 前編 二〕ありあけ　有明の義、十六夜以下は、夜は巳に明るに、月は猶入らで有る故にいふなり、

〔枕草子 十二〕ある所に中の君とかやいひける人のもとに、君達にはあらねども、其心いたくすきたるものにいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみじうてりておもしろきに、名殘おもひ出られんと、ことのはをつくしていへるに、今はいぬらんと遠く見おくるほどに、えもいはずえんなるほど也、出るやうに見せてたちかへり、たてじとみあいたる陰のかたにそひ立て、猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに、有明の月のありつゝもと、うちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月のひかり、もよほされて、おどろかさるゝ心ちしければ、やをらたちいでにけりとこそかたりしか、

〔拾遺和歌集 十三 戀三〕だいしらず　人まろ

長月のあり明の月のありつゝも君しきまさば我戀めやも

〔萬葉集 十 秋雜歌〕詠月

白露(シラツユ)乎(ヲ)、玉(タマ)作有(ニナシタル)、九月(ナガツキノ)、在明之(アリアケノ)月夜(ツクヨ)、雖見(ミレド)不飽可聞(アカヌカモ)、

〔源氏物語 二 帚木〕月はあり明にて、光をさまれるものから、影さやかにみえて、中々をかしきあけぼのなり、

更待月

〔古今和歌六帖 五雜思〕人をまつ

君をのみ起ふしまちの月かげはやちよもこゝに有明をせよ

〔源氏物語 三十五若菜〕夜ふけゆく風のけはひひやゝかなり、ふしまちの月はつかにさしいでたる心もとなしや、

〔後拾遺和歌集 十五雜〕入道攝政物語などして、寢待の月の出づるほどに、とまりぬべき事などいひたらば、とまらんといひ侍ければ、讀侍ける、　大納言道綱母

いかにせん山のはにだにとゞまらで心のそこにいでん月をば

〔平治物語 一〕院御所仁和寺御幸事

二十六日ノ夜更テ、〇中略上皇〇後白河驚カセ給テ、仁和寺ノ方ヘコソ思召立メトテ、殿上人ノ體ニ、御姿ヲヤツレサセ給テ、紛出サセ御座ス、〇中略未夜半ノ事ナレバ、臥待ノ月モサシ出ズ、

〔續古今和歌集 十七雜〕後鳥羽院くらゐにおはしましける時、御いのりにさぶらひて、廿日の夜の頃まかり出でけるを、猶とゞめ仰せられければ、　承仁法親王

さもこそは寢待の月の頃ならめ出でもやられぬ雲の上哉

〔風雅和歌集 十一戀〕伏見院の御時、六帖の題にて、人々歌よませさせ給ひけるに、一夜隔てたると云ふ事を、　前大納言爲兼

夜がれそむる寢待の月のつらさより廿日の影も又やへだてむ

〔和爾雅 一天文〕更待(フケマチ)月 廿日月也

〔藻鹽草 一天象〕月　ふけ待の月 廿日　廿日の月

〔源氏物語 十榊〕廿日の月やうやうさしいでゝ、をかしきほどなるに、あそびなどもせまほしき程かなどの給はす、

寢待月

我のみぞねられざりけるかるもかくゐまちの月の程はへぬれど

〔撮壤集天上 象〕月　臥待月

〔和爾雅天一 文〕臥待(フシマチ)月十九夜月也、又云寢待月、

〔八雲御抄三上 天象〕月略○中　ねまち　ふし待廿日月也、見源氏若菜下、

〔藻鹽草一 天象〕月　ね待の月十九日　ふし待の月同日

〔倭訓栞前編 二十二〕ねまちのつき　十七夜を立待、十八夜を居待、十九夜を臥待とも、寢待ともいひて、廿日は古來廿日の月とよめり、

〔空穗物語梅の花笠〕かくて二月廿日になんまで給ける、○春日社、中略、わかのだいにすべき事、すこしえりいで給へとのたまふ、なかよりつかうまつりにくきこと、かならずといひて、かきいだす、あはれけふは春のなかば、月ねまちを昨日といひて、はなのにほひをさそふうぐひすのこゑをむかへ、略○中冬をいなふる鳥とかきいだして、兵部卿のみこにたてまつる、御覽じてねまちの月を、

昨日こそねまちもせしか春のよのこよひの月をいかゞ見るらん、とかきて、中つかさのみこにたてまつり給、

〔古今和歌六帖一 天〕ざふの月

君まつとおきたるわれも有ものをねまちの月のかたぶきにけり

〔古今和歌六帖標注一〕能因歌枕云、十九日ねまち、　宇津保、梅の花笠の卷にいふ、二月廿日になんみちて云々、あはれけふは春のなかば、月もねまちをきのふといひて云々などみえて、ねまちは十九日なるを、八雲御抄に、ねまちふしまち廿日月なり云々、また續古今戀三に坂上是則、ねてまちしねまちの月のはつかにもあひみしことをいつかわすれん、とみゆ、されど此うたは前夜をうけて、廿日の月とよみたれば、ねまちは猶十九日なるべきにや、

十六日なりしかば、いざよふ月をおぼしめしわすれざりけるにやと、いとやさしくあはれにて、たゞ此返事ばかりをぞ又きこゆる、

立待月

〔運歩色葉集多〕立待月（十七夜）

〔撮壤集天上象〕月　立待月

〔和爾雅天文一〕既生魂（十七日也）　立待月（十七日也）

〔藻鹽草天象一〕月　立待（十七日、又立待の月とのゝ字ありても、）

〔倭訓栞中編多十三〕たちまちのつき　立待月也、十七日の月の山のは出るを、立やすらひての義なり、

〔新撰六帖一〕たちまち　家良

我門をさしわづらひてねるをのこさぞ立待の月もみるらん

〔狗猧集秋五〕十七夜立待に　正直

月は今たちまち出ん十七夜

居待月

〔撮壤集天象上〕月　居待月

〔八雲御抄天象三上〕月〇中略　ゐまち（万に、ゐまち月といふ、又ゐまちの月とも、）

〔藻鹽草天象一〕月　居待の月（十八日）

〔倭訓栞前編四十三〕ゐまちづき　万葉集に座待月とみゆ、十八夜をいふ、立待月に對したる名なり、

〔萬葉集雜歌三〕羇旅歌一首幷短歌

海若者、靈寸物香、淡路島、中爾立置而、白浪乎、伊與爾回之、座待月、開石門從者、〇下略

〔新撰六帖一〕ゐまち　家良

望月之、滿有面輪二、如花、咲而立有者、〇下略

〔萬葉集 十二古今相聞往來歌〕寄物陳思

十五日、出之月乃、高高爾、君乎座而、何物乎加將念、

〔萬葉集 十三挽歌〕往向年緖長、仕來、君之御門乎、如天仰而見乍、雖畏、思憑而、何時可聞、日足座而、十五月之、

多田波思家武登、〇下略

十六夜月

〔古今和歌六帖 一歲時〕十五夜　貫之

難波潟鹽みちくれば山のはに出る月さへみちにけるかな

〔運歩色葉集 伊〕十六夜月

〔撮壤集 上天象〕月　不知夜月

〔和爾雅 一天文〕十六夜月　既望 十六日也　哉生魂 十六日也

〔八雲御抄 三上天象〕月 〇中略　いざよひの月は十六日月也云々、是源氏歌故也、但万葉には不知夜歷月と書り、凡上旬月は不可謂、雖非十六日十七八日月詠有何難哉、但故人說皆十六日也、尤可然、〇中略いざよふ月はいざよひの月にあらざるか、万十七、山のはにいざよふ月をいでんかとまちつゝをるによぞふけにける、是非十六日の月なり、

〔日本釋名 一時節〕既望　十六夜の月也、いざよふは、やすらふ意也、日くれて少やすらひ出る也、

〔倭訓栞 中編 二伊〕いさよひ　十六夜をいふといへり、月の少しやすらひて出るをもて、よひを宵にかよはしいふ也、

〔十六夜日記〕身をえうなきものになしはてゝ、ゆくりもなくいざよふ月にさそはれいでなんとぞおもひなりぬる、〇中略

ゆくりなくあくがれ出しいざよひの月やおくれぬかたみなるべき、都を出しことは、神無月

望月

ほと、ぎす名をもくもゐにあぐるかな、とおほせられかけたりければ、よりまさ右のひざをつき、ひだりの袖をひろげて、月をすこしそばめにかけつ、

ゆみはり月のいるにまかせて、とつかうまつり、御けんを給はりてまかりいづ、

〔枕草子　十七〕人のなぞ〳〵あはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵しかりけるが、左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へなどたのむるに、(中略)其日になりて、(中略)天にはりゆみといひ出たり、(中略)右の人をこに思ひて、うちわらひて、や、さらにえらずと口引たれて、さるがふしかくるに、數させ〳〵とてさゝせつ、(下略)

〔倭名類聚抄　一景宿〕望月　釋名云、望月(和名毛知都岐)月大十六日、小十五日、日在東、月在西、遙相望也、

〔箋注倭名類聚抄　一景宿〕毛知豆岐、用望月字、見萬葉集、按、毛知豆岐、滿月之義、(中略)按、説文、朢、月滿與日相望、以朝君也、从月从臣从壬、壬朝廷也、又云、望、出亡在外、望其還也、从亡朢省聲、二字不同、徐鍇曰、朢作望、假借也、毛晃增韻亦云、朢經典通作望、

〔類聚名義抄　二肉〕朠(俗朠字、モチツキ、音精、)　〔同　六玉〕朢(音同、望月、モチツキ、)　望(俗)

〔下學集　上時節〕望月(モチツキ)　十五月(モチツキ)

〔和爾雅　一天文〕幾望(キバウ)(十三四日)也、出易經、望(モチツキ)(十五日也、周禮注、月大十六日、小十五日、望、)

〔日本釋名　一時節〕望(モチヅキ)　もちはみつ也、もとみと通ず、十五夜の月まどかにしてみつるゆへ也、或云、月まどかにして、もちいの形の如し、此説いかゞ、

〔八雲御抄　三上天象〕月(中略)もちづきは、十四五六日間也、(但万には、十五日とかきて、もちの日とよめり、)

〔萬葉集　二挽歌〕明日香皇女木瓱殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌、(中略)鏡成(カヾミナス)、雖見不猒(ミレドモアカズ)、三五月之(モチヅキノ)、益目頰染(イヤメヅラシミ)、所念之(オモホシシ)、君與時時(キミトヲリヲリ)、幸而(イデマシテ)、遊賜之(アソビタマヒシ)、(下略)

〔萬葉集　九挽歌〕詠勝鹿眞間娘子歌一首并短歌(中略)

〔和爾雅一天文〕弦（ユミハリ）（七八日爲上弦、廿二三日爲下弦、）　恒月（ユミハリ）（出詩經）

〔八雲御抄三上天象〕月（〇中略）　ゆみはりの月（非三日月、半月也、是故人説也、）

〔藻鹽草一天象〕月　月弓　弓はりの月（の字なくても云也、月の事也、三日月にあらず、）　かみの弓はりの月（七日八日の夕附夜）　之

もの弓はり（廿二日廿三日）

〔倭訓栞中編由二十七〕ゆみはりづき　弓張月なり、上弦下弦をすべていふ也、詩の注に、八九日月體半昏而似弓張、而弦直謂之上弦、釋名にも若張弓弦也と見えたり、日本紀には弦をゆはりとよめり、新撰古今集に、弓張の半はの月とも見えたり、

〔暦林問答集下〕釋弦望第二十六

或問、弦望者何也、　答曰、暦例云、上弦者陽光漸照、陰體未成而遲速交際也、又云、望者陰陽相對者、月正滿而交在望、下弦者陽明漸消、而陰體在半也、月獨無光、依日之照有明、其陽成於三日、故月初三生於小明、而見西天、因茲朔與望半、爲上弦、日光照月之半、其形似弓、故云弦、又弦之後、大陰之位登、而正相對於太陽之照、故月圓滿也、謂之望、又望之後、月漸近日、是故日月不相對、而月漸虧也、望與晦半、月又半也、下弦者至晦而月光死、而至朔而月蘇也、其朔者日月正交會之辰也、

〔大和物語上〕おなじみかど（〇醍醐）の御時、躬恒をめして、月のいとおもしろき夜、御遊びなどありて、月を弓はりといふは何の心ぞ、そのよしつかうまつれとおはせ給ひければ、みはしのもとに侍ひて、つかうまつりける、

てる月を弓はりとしもいふ事は山べをさしていればなりけり（〇又見大鏡）

〔平家物語四〕鵺の事

折ふしころは卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公二聲三こゑをとづれてとをりければ、左大臣殿、（〇藤原基實）

みか月のわれては物を思ふとも世にふたゝびは出るものかは

〔金葉和歌集三秋〕三日月のこゝろをよめる　大江公資朝臣

山のはにあかで入ぬるゆふ月夜いつありあけにならんとすらん

〔金葉和歌集七戀〕寄三日月戀をよめる　藤原爲忠

宵のまに仄かに人をみか月のあかで入りにし影ぞ戀しき

〔風雅和歌集五秋〕秋の歌とて　權大納言公宗

夕暮の雲にほのめく三日月のはつかなるより秋ぞ悲しき

〔看聞日記〕永享五年九月四日、抑三日月今夜出現、去月小之由、暦博士勘進、日數相違之間如此、今夜當三日也、天能知日數顯然也、暦道不覺比興也、

〔太閤記十九〕山中鹿助傳

十六歲の春、甲の立物に半月を立たりけるが、今日より三十日の內に、武勇之譽を取候やうにと、三日月に立願せり、かゝる處に伯州小高之城主山名を攻討んと、義久發向しければ、山名も打向ひ及合戰、互に火出る計苦戰し、勝負まち〳〵なりしに、山中甚次郎と名乘出つゝ、菊池音八と渡し合せ、暫し相戰ひしが、終に菊池を討て首をさし上たり、此菊池は因伯二州にをいて、隱れなき勇者なりき、是よりして三日月を、一世の間信仰せしとかや、

〔倭名類聚抄一景宿〕弦月　劉熙釋名云、弦月月之半名也、其形一旁曲、一旁直、若張弓弦也、弦(和名由美八利、有上弦下弦、)

〔類聚名義抄九弓〕弦(音絃、ツル、ユミハリ、ツルハリ)　景宿類　弦月　上弦(カムツユミハリ)　下弦

〔下學集上時節〕弓張月(ユミハリヅキ)

〔撮壤集上天像〕月　弦月(ゲン)(和名類聚、上弦下弦、)　弓張月(ユミハリヅキ)

〔和爾雅 天文一〕哉生明（哉始也、前月大則初二日明始生、前月小則三日明始生、）朏魄（出文選月賦、注曰、禮記注云、月三日而成魄、向日、朏盛明也、魄初出、地明生、按、万葉集用若月二字、）

〔書言字考節用集 乾坤二〕朏（音沛、韵會、月三日生明之名、）磨鎌（同、杜甫詩、新月似磨鎌、）玉鈎（同）彎月（同、又云纖月）初月（同、又作若月、並出万葉、）

〔和漢三才圖會 天文一〕朏（音斐）哉生明　若月（万葉集、美加豆岐、）　前月大則初二日明始生、前月小則三日明始生、謂之哉生明、哉始也、　候鯖錄云、月如懸弓、少雨多風、月如偃瓦、不求自下、　按、和漢同有此俗說、而甚非也、月者太陰水之精、其質如水精硝子様玲瓏、本自雖有光、而以陰光不能照曜、借陽光則生明、故當於日處限生明、然日月行道不同、凡三日月相去四十度計、斜向借日光、故如日入乾月在庚、則其月形如懸弓、或如鎌也、日與月同方則如偃瓦、或如船、此常理也、以為風雨之兆者不可、

〔萬葉集 雜歌三〕間人宿禰大浦初。月。歌二首○中略

椋橋乃、山乎高可、夜隱爾、出來月乃、光乏寸、

〔萬葉集 雜歌六〕大伴坂上郎女初月歌一首

月立而、直三日月之、眉根掻、氣長戀之、君爾相有鴨、

大伴宿禰家持初月歌一首

振仰而、若。月見者、一目見之、人之眉引、所念可聞、

〔菅家文草 詩三〕新。月。二十韻

百城秋至後、三諫月成初、碧落煙氛盡、黃昏晝漏餘、退衙西廟立、尋寺上方居、玉樓風頭畫、銀泥日脚書、跂將心緒急、忘却眼珠除、仰有纖纖著、行無皎皎舒、插雲驚度鴈、投水誤遊魚、鳳腦光相似、蛾眉細不如、竊應容掌握、勤欲任吹噓、少婦看珍重、詞人翫忽諸、推量寬影薄、想像桂枝疎、庾令登樓慨、王生命駕徐、浪花晴島噢、露葉映芙蕖、旅客愁而已、詩情樂只且、照勝冬雪讀、明助夜潮漁、還思江舟棹、宜瞻野草廬、平沙閑點檢、曲浦獨躊躇、觸事高乘興、馳神牢步虛、了知新蚌蛤、那見老蟾蜍、若使嫦娥易、催廻五馬車、

〔古今和歌六帖 天一〕三日月

〔萬葉集相聞四〕湯原王歌
月讀之、光二來益、足疾乃、山乎隔而、不遠國、

〔萬葉集雜歌六〕大伴坂上郎女月歌三首○中略
山葉、左佐良榎壯子、天原、門度光、見良久之好藻、
右一首歌、或云、月別名曰佐散良衣壯士也、緣此辭作此歌、
湯原王月歌二首
天爾座、月讀壯子、幣者將爲、今夜乃長者、五百夜繼許増、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄月
三空往、月讀壯士、夕不去、目庭雖見、因緣毛無、

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕
夕星毛、往來天道、及何時鹿、仰而將待、月人壯、
右柿本朝臣人麻呂歌集出
詠月
天海、月船浮、桂梶、懸而滂所見、月人壯子、

〔大鏡一花山〕つぎのみかど花山院天皇と申き、○中略ふぢつぼのうへの御つぼねの小どよりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかゝりければ、見證にこそありけれ、○中略さやけきかげをまばゆくおぼしめしつる程に、月のかほにむら雲のかゝりて、すこしくらかりゆきければ、わが出家は成就するなりけりとおほせられて、あゆみいでさせ給ふ程に、○下略

〔源氏物語十三明石〕みあげ給へれば、人もなくて月のかほのみきら〳〵として、夢の心ちもせず、御けはひとまれる心ちして、空の雲哀にたなびけり、

とくとも、あたらぬ事なるべし、

〔東雅一天文〕月ツキ　舊說に日に次の義也といふ、舊事、古事、日本紀等共に、先に生日神、次生月神と見えて、又其光彩亞日、可以配日なども見えたれば、舊說の如き其義に合へるなるべし、

〔倭訓栞前編十六〕つき　月は盡るの義をもて名とす、西土の書に、以明一盡為一月といへり、羽州の俗に月末をすどれといふ、夜入月にはひよりそこねやすし、夜出る月にはあらき空もなほる事あり、是を若月の入そこね、出月の出直りと、船の上にていふ也、

〔日本書紀一神代〕伊弉諾尊、伊弉冉尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是共生日神、〇中略次生月神、一書云、月弓尊、月夜見尊、月讀尊、其光彩亞日、可以配日而治、故亦送之于天、

〔曆林問答集上〕釋月第四

或問、月何也、　答曰、定象紀云、月大陰之宗、積而成也、中有獸象、兎陰之類、其兎善走、象陽動也、春秋元命苞云、月水之精、故內明而氣冷、為陰精、故體自無光、藉日照之乃明、猶以臣自無威、假君之勢、乃成其威、月初末對日、故無光缺、月半而與日相對、故光滿、十六日以後漸缺、亦漸不對日也、又云、月大陰之位、后妃之象、諸侯大臣之類、

〔八雲御抄三上天象〕月　ひさかたとつゝくるは、一切天物をつゝくるならひなり、　あまてる月　ますかゞみ　ますかゞみてるべき月と、人丸集にあり、　しらまゆみ　万、しらまゆみはりてかけたるといへり、　月人おとこ　かつらおとこ　さゝらえおとこ　月よみおとこ　たゞ月よみとも　これらみな月の名也　月ゆみ　かつらのはな〇中略　橘のたまぬく月万　よがくれにいでける月万〇中略　入きはの月源氏　月のかほ同　霜曇り万　三日月　ゆふつくよ　夕月　もち　かたわれ　ありあけ月よ　あかねさすてれる月よ　夜わたる　ゆふつくよ　あかつきやみといふは少月のころは、曉やみとなる也、　ひさかたの　夜わたる月と云事　基俊難之、夜字隔中云々、但古今に多也

〔壒嚢抄六〕恒娥ト云ハ何ナル事ゾ

恒娥ハ月ノ異名也、遊仙窟ニ恒娥月人女也ト讀メリ、實ニハ人名也、恒娥ハ羿ガ妻也、作仙藥以欲服之、然恒娥偸服之、成仙人奔テ入月中云々、仍爾云也、羿ハ有窮ノ君也、簒夏后相位ト云リ、昔精兵ノ射手也キ、サレバ論語曰、羿善射ト云々、加之月異名多侍リ、

銀鈎　玉鈎　銀光　玉鏡　金魄　金波　蒐輪　蒐影　兎魄　兎月　桂輪　桂影　仙娥

陰精　虛弓（繊月名也）　蛾眉（同上）　破鏡（半月也○中略）

御空行月讀壯子ユフサラス目ニハミエテドヨルヨシモナキト侍リ、月神ヲバ月弓ノ尊共、月夜見ノ尊共、月讀神共、尊共申也、ヤイユエヨハ相通ナレバ、同ジ御名ナルベシ、亦月人男共云リ、（○中略）壒嚢抄云、月夜見男トハ桂男也ト云々、然バ月人男モ桂男也ト云ベシ、世人ノ思ハク、月中ニ桂木有、其木ノ本ニ人有、是ヲ桂男ト云ト、サレバ月ノ桂ト云、月兎ト云桂男ナント云、皆是月ノ中ニ有ト云共、皆只月ノ名ニ出セリ、然ニ空ニ見ルハ月輪也、月天子ハ其ノ上ニ住給トナン、月天子ハ卽月神也、サレバ月輪ヲ月ノ船共云、月天子ヲ月神共云ハ、月讀男、月人男、佐散良衣男、桂男、皆同ク月名也共云ヘリ、

〔壒嚢抄九〕月ノ中ニ有兎云々、就之其義多ケレ共、只過去ノ靈兎ノ白骨ヲ取テ、帝釋月中置給故ヘト云々、玄賛要集第十云、問云、月中ノ兎ハ何ニ因テ有ルゾヤ、答云、未曾有經ニ說ク、波羅底斯國烈士池ノ西ニ、有獸卒都婆、狐猿兎彼是菩薩ノ行ヲ修之處、當時爲一兎燒身供養、帝釋將骸骨安在月中、以示天下人ト云々、又法苑珠林云、依西國傳云、過去有兎、行菩薩行、帝釋試云、索自欲食、捨身火中、天帝愍之、取其燒骨月中、令未來衆生知是過去菩薩行慈之身、

〔日本釋名上天象〕月　是亦自語なるべし、或說に盡也、かけて皆つくる也、劉熙が釋名に、月は缺也といへるに似たり、凡神代の言は、今よりはかりがたし、且又自語おほかるべし、今みだりに其義を

入、詔曰、大辟以下赦除、常赦所レ不レ免者不レ赦、依二三光之恠異一也、左大弁忠輔卿作二詔書一、依二内記遅參一也、左遷解官皆復二本官一、

〔當代記〕慶長八年二月十九日、酉刻日蝕アリ、其色赤キ事甚、亥刻之終時分月蝕アリ、両蝕同日ニ有事珍事カ、

月

月蝕併入

月ハ、ツキト云フ、卽チ大陰ナリ、月讀壯士、又ハ佐散良衣壯士等ノ異名アリ、三日ノ月ヲ三日月ト云ヒ、弦月ヲ弓張月ト云フ、上弦、下弦アリ、滿月ヲ望月ト云ヒ、十六日ノ月ヲ十六夜月ト云ヒ、十七日ノ月ヲ立待月ト云ヒ、十八日ノ月ヲ居待月ト云ヒ、十九日ノ月ヲ寢待月、又ハ臥待月ト云ヒ、二十日ノ月ヲふけ待月ト云ヒ、二十日以後、夜ノ明テ後、猶ホ殘レル月ヲ有明月ト云フ、

月蝕ノ事ハ、日篇日蝕條ヲ參看スベシ、

〔倭名類聚抄景宿一〕月　造天地經云、佛令二吉祥菩薩造一レ月、

〔段注説文解字七上月〕月闕也、大会之精、(月闕疊韵、釋名曰、月缺也、滿則缺也、)象形、(象不滿之形、魚厥切、十五部、)

〔類聚名義抄二月〕月(魚厥反ツキ)　〔同二日〕曈(月コモリ)　曨(月コモリ)

〔撮壌集上天像〕月　玉兎　金波　氷鏡　氷輪　金精　金盆　蟾蜍　嫦娥　陰魄　桂輪　姮娥　素娥

〔和爾雅天文一〕月(大陰之精也、日受二日之光一、日所レ不レ照謂二之魄一、)　夜光(月也、出二楚辭一、)　玉兎(月也)　朔(朔之爲レ言蘇也、月死亦蘇生也、)　死魄(朔日)　既朔(二日也、又云二傍死魂一、)　月桂　珠暉(月光也、又云暉素、)　盈(月滿也)　昃(月缺也、又云虧、)　月影　朦朧(月不明也)　朗(出二于萬葉集一)　亮　清(万葉)

御禮相濟候積、未明ヨリ御禮始リ候ト被存候、

〔筆のすさび一〕一月蝕○中略　丙午○天明六年元日の日蝕皆既は、日色茶色に見えて、薄暮のごとく、雀など棲宿せり、寛保二年壬戌五月日蝕は、白晝烏黒にして、星宿燦々たり、さながら夜のごとくなりしと云ひ傳ふ、天學家も、日行至りて高く、月行至りて低き時は、暗きことは甚だしかるべし、されど星の見えしは、いかゞありしにかといひし、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十二年六月一日乙卯、日食也、暦面云、一分うの七刻上の左よりかけはじめ、たつの初刻上と左の間に甚しく、たつの二刻左の方におはる、御殿裏寅半刻、但依短夜、強寅刻云々、俊常參勤、撤却常顯參勤、當日參賀、依蝕被停、如例、不及參賀、十四年四月一日甲戌、當日參賀、依日蝕被停之、仍不參中宮陽明等、日蝕也、暦面云、申八刻下ノ左ヨリ缺始、酉三刻左ノ下ニ甚、酉ノ六刻左ノ上ニ終、御殿裏未半刻、俊常參勤、

一洞中御殿裏申刻、常顯參勤、

一御殿裏撤却酉半刻過、予參勤、出納職寅以下酉半刻出仕、予參勤之上尋時刻處、酉半二刻過之由、故卽屆議奏卿、尋撤却之儀處、當番豐岡前宰相面會、酉半二刻過之間、最早勝手撤却可然由被示、且被示曰、先刻常御殿々々裏之節、東面不及其儀哉被尋、故相伺之處、御殿裏之事故、不因時刻之早晩、如例東南二面共奉仕可然旨御沙汰也、向後以此定各其覺悟可然、猶申合可置由被示也、此儀不審也、予未覺悟有差略、於清涼殿者、依時刻令差略事、每度有例、常御殿未知有差略、上臈之間不得其意、可憚事歟、令開平唐門後、仰出納令撤御殿西面筵道、此日依夕景之儀、東面不蓋之云々、事終由申屆議奏卿、戌刻計、令退出了、仰退出於出納、令開平唐門、於常御殿者、任例不及撤却、

〔拾遺和歌集十九雜戀〕日蝕の時、太皇太后宮より、一品のみこの許につかはしける、

あふことのかくてやつゐにやみの夜のおもひもいでぬ人のためには

〔日本紀略一十後〕長保四年九月六日戊戌、今夜日月薄蝕、終夜流星、　八日庚子、左大臣○藤原道長以下參

〔仙臺實測志　上〕同年〇享保二十年九月朔日、日食九分半、〇中略陽曆交前之食也、或曰、於江戶所見、此食甚於北、然則交後陰曆也、蓋依土地所見不同、或有皆既之國乎、食甚之時、太白星見、隨復而星光消、太陽在赤道南八度九十四分、

〔仙臺實測志　上〕同年〇元文五年十一月朔日、朝日帶食四分計、至明半時而復圓、

延享四年丁卯七月朔日、日帶食、

此日以渾天儀考日入、則大率戌初刻、以貞享曆法考之、則日入酉正三刻、於是仙臺與曆法凡差一刻計、予此日至於酉正二刻窺日入、未食而入黑雲、故與飯澤子往于伊勢山窺之、竟不見、棒按、交食近年午後卽後、午前卽先、

明和七年庚寅五月朔日、日食凡七分半、

此食、板行曆曰皆既、而不既、晝不晴、衆人以爲推步大違、此日雨不見、細雨內所測凡四分計、此時巳初四刻半始見食、又食七分半計、此時巳正一刻七十分計、甚於正南少東、以方角考之、則爲過食甚、自是所見漸復矣、

〔瀬田問答〕一來午年〇天明六年元日日蝕ナリト承候、公ニテ御禮御座候哉イカヾ

答、來午正月元日日蝕皆既、午ノ一刻西ノ方ヨリカケ初メ、午六刻甚シク、未ノ一刻南ノ方ニ終ル、

如斯ニ候ヘバ、御禮明七ツ時ヨリ初リ、蝕已前退散ノ事ト存候、

正月元日日蝕ノ例

元祿五壬申年、未申ノ時、食七分半、

同十四辛巳年、卯辰ノ時、食八分半、

享保四己亥年、酉ノ時、食二分、

明和四丁亥年、未ノ八刻ヨリ申ノ刻迄、

如斯ニ候、右ノ內、元祿十四年ノ蝕、御禮刻限ニ候、其節モ食終リテ辰ノ中刻ヨリ御表ヘ出御、右ノ外ハ皆御禮ノ刻限ノ外ナリ、右ノ趣ヲ以相考ヘ候ヘバ、食ノ內ハ迚モ出御ハ無之、來春モ食以前

蝕時分被造立受染金剛如法佛五指量主計頭奉行之、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年十二月廿四日乙酉、明年正朔日蝕事有其沙汰、今日被始行御祈等、但馬前司奉行之、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元四年正月一日辛卯、可有日蝕之由、陰陽等奏之、筭博士雅衡不可有日蝕之由申之、終日遂不正現、雅衡所申符合、尤珍重也、仍被行勸賞、日沒以後、被行小朝拜節會等如恒、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年正月一日辛卯、今日申酉間、可有蝕之由、諸道雖勘申之、竊多有其沙汰、任右大將家建久九年正朔日蝕時之例、不被裹御所、隨而又蝕不正現、若他州事歟云云、　廿八日戊午、主税頭雅衡算道自京都進狀申云、今年朔蝕事、不可令蝕之旨、兼申入候處、忽符合之間、爲其賞、所令叙正下四位候也、宿曜道珍覺法眼同如此、依奏聞轉權少僧都候畢、同十四日御齋會除目之次也云云、

〔園太暦〕康永三年九月一日、天晴、今日院評定、依日蝕幷御八講中不被行、及酉剋正現了、時剋雖相違、日蝕無其誤、尤無止事也、御八講又入夜被行云々、

〔看聞日記〕應永廿九年正月一日、午未時日蝕也、中略元日節會依日蝕延引、可爲明日云々、

〔言經卿記〕慶長八年四月一日丁亥、天晴、日蝕、巳午時、中略禁中へ極﨟早朝ニ參、日蝕ニ付テ、御殿ヲツヽミ了、如例了、

〔當代記〕慶長十三戊申年正月朔日己丑、朝少曇、未申刻日蝕也、暦ニハ辰巳剋ト出シケルガ、時ハ違也、昔年建久九年戊午正月朔日日蝕、是凶兆ト云々、其年賴朝姉聟二品能保父子、暫時薨ト吾妻鏡ニ有、

〔宗建卿記〕享保十五年五月廿八日、予申云、來月一日日蝕也、件日古來宣下之事有之哉、殿仰云、朔旦冬至日蝕有之、於平座被行之、於賀表者後日上之、又御暦奏依日蝕二日奏之、於然者於當時茂宣下之事、不可然之由也、

壽永二年閏十月一日、水島ニテ源氏ト平家ト合戰ヲ企ツ、〇中略城ノ中ヨリハ、勝鼓ヲ打テ訇懸ル程ニ、天俄ニ曇テ、日ノ光モ見エズ、闇ノ夜ノ如クニ成タレバ、源氏ノ軍兵共、日蝕トハ不知、イトヾ東西ヲ失テ、舟ヲ退テ、イヅチ共ナク、風ニ隨ツテ遁行、

〔玉海〕文治三年七月廿九日戊辰、明日日蝕、陰陽道申云、虧初酉一剋、日入同三剋、仍可正現、曆筭宿曜道等申云、虧初酉三剋、或戌一剋、仍不可正現云々、然而爲用意、公家可被行御讀經之由仰之、八月一日己巳、陰晴不定、午後雨降、

〔百練抄土御門十一〕正治元年正月一日、今日可有日蝕之由、曆道載御曆、而、筭道行衡、長衡等、申不可正現之由、兩道申狀、眞僞難決、隨蝕之現否、可節會之由、被仰下之處、終日雨降、入夜天晴、有節會、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年九月一日壬戌、巳午兩時日蝕、正見五分、

〔百練抄後堀河十三〕元仁元年八月一日、寅卯剋、可有日蝕之由曆注、天晴雲收、日輪出現、敢未兮蝕、及午上、可謂道之陵遲歟、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年二月一日壬辰、今日可有日蝕之由、宿曜道助法眼珍譽雖勘申之、日輪無虧云云、八月一日己丑、酉剋可有日蝕之由、宿曜師與曆道日來相論、雖然依雨降而現否難決云云、

嘉祿三年〇安貞元年六月一日戊申、日蝕正見、四分

〔百練抄後堀河十三〕安貞二年六月一日、今日未剋日蝕可出現之由、權少外記淸原敎隆以欽天曆之後兮勘申、以件狀被下間曆道、當日天晴、不決是非、雖然於曆道申狀不及沙汰云々、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〇貞永元年四月一日、今日可有日蝕之旨、宿曜備中法橋依申之、可被褰御所否、以周防前司親實被問曆道、各不可有日蝕之由申之、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年十二月一日戊寅、雨降日蝕不正現、昨日天晴、夜半以後陰雲、自丑寅剋雨降、

〔兵範記〕保元三年三月一日辛酉、朝間天陰、日蝕也、虧初寅、復末辰初云々、公家御祈、座主於中堂被行七佛藥師法、又今朝於食堂被行千僧御讀經、辨有障、仍少納言通能依勅定、昨日登山奉行云々、

〔百練抄 七二條〕應保二年正月一日、日蝕、曆道筭道相論、依召諸道勘文被問公卿、大略不可改正朔之由被申之、然而依正現二日行節會、

或記云、予問春禪之日、蝕前七日、必有變之、何事哉、答云、七星之中、有減光之星、此事秘事也、普通無知此事人、故對而所申云々、

正月朔蝕、延曆九、　昌泰四　延喜八　同十一　同十八　同十九　同廿　天慶三　長曆四
永承四　康平二　治曆四　承保三　康治二　仁平三

〔兵範記〕仁安二年四月一日戊辰、天晴、日蝕、公家御勘文云、虧初未初刻、加時未七刻、復末未七刻、而現御降誕天象圖、天年三歲、今度蝕在位帝王御愼也、宜令修日蝕攘災法者、保千秋萬歲御歟者、

〔愚昧記〕仁安二年四月一日、今日日蝕云々、仍終日閉戶、但不蝕云々、

〔玉海〕嘉應二年七月一日己卯、今日日蝕也、雖有現不現之論、尙付正見之例、有御祈等、公家被行七壇北斗法云々、女院御方幷余(〇藤原兼實)共修金輪念誦、雨降之間、現否不決、

〔百練抄 八高倉〕嘉應二年十二月廿七日、四箇條仗議、(〇中略)明年正朔蝕不正現者、可被行節會否事、曆道申可有蝕之由、宿曜筭道兩道申不可現之由事也、

〔玉海〕嘉應三年正月一日丙子、陰晴不定、微雨間灑、今日日蝕有現否之論、遂不正現、乖曆家之術、叶筭道之說、(宿曜道同之)

壽永二年閏十月一日壬戌、天晴、此日日蝕也、所載勘文、辰刻虧初、午刻復末云々、而午刻虧初、申刻復末、筭勘之相違歟、先々雖時刻相違、今日殊乖勘文了、可尋之、

〔源平盛衰記 三十三〕源平水島軍事

社、親伐鼓時云々、以之案之、我朝日食不當其光、无所怖歟、然則日食四方拜、无其憚乎、兩才士不勘此文、不及見乎、自今已後雖日食可有四方拜者也、

〔本朝世紀〕康治二年十二月一日癸未、卯剋日蝕十五分十四、所注御暦也、而天晴雲收、全無虧輪、今日蝕、公家幷法皇羽○鳥可愼御之由、宿曜道所勘申也、仍有種々祈禱、法皇於得長壽院屈天台淨侶住山不退輩百廿口、被轉讀大般若、限以三箇日受領之輩、營其供給齋飯、別給小袖等、又公家於延曆寺被行千僧御讀經、被付寺家、辨史不參、今日蝕不現、實三寶靈驗也、

久安二年五月一日己巳、今日宿曜道申可有日蝕之由、至御暦者不注申也、大法師珍也申云、十五分之二、虧初巳剋云々、然而不正現、　三年十月一日辛卯、日蝕也、

太政官謹奏

來月朔日辛卯、日蝕十五分之十半弱、虧初申四剋十一分、加時酉三剋五分、復末戌二剋十四分、

右中務省解偁、陰陽寮解偁、從四位下行權介兼權暦博士備前權守賀茂朝臣憲榮等狀偁、申送如件、仍注事狀謹奏、

久安三年九月廿九日

〔台記〕久安三年十月一日辛卯、有食、雖晴人不見食、後日、頭經宗朝臣語曰、依朔日日食、二日改殿上御裝束、但侍臣衣、朔日改之、今案此事、未辨是非、可尋先例、　四年四月一日戊子、依日食廢務、不正現、

〔本朝世紀〕久安五年三月一日癸未、日蝕也、

太政官謹奏

來月朔日癸未、大陽蝕十五分之十四半弱、　虧初寅二剋、加時卯一剋、復末辰一剋、○中略

久安五年二月廿七日

今日法皇羽○鳥御本命日也、而蝕不正現、尤可謂禎祥也、權現靈威尤顯然歟、此間一院御熊野本宮也、

〔百練抄七近衞〕康治二年正月一日、可有日蝕之由、暦道奏之、實不可有蝕由、算道申之、仍行節會、遂不蝕、

〔本朝世紀〕康治二年正月一日、抑今日太陽可虧蝕之由、暦道所注申也、而舊年算博士三善行康奏勘文云、不可有蝕、故如何者、去交分過八千四百之統法暦云々、去年除夜於攝政忠通(藤原)直廬、招諸卿被議定、左大將源雅定卿定申云、長久二年正月一日有日蝕論、相待蝕見否之後、依□□行宴會者、今度可依彼例歟、皇太后宮大夫藤宗能卿定申云、可依先例、又大納言藤實行卿定申云、可依暦道申、又隨現否可被行節會、又前中納言顯頼卿申云、可依暦道説、件兩卿不向攝政直廬、藏人勘解由次官藤光房依仰□□所尋問兩卿也、爰攝政以光房爲使被奏法皇(鳥羽)云、群議之趣如此、左右之間可依勅定、法皇仰云、蝕差不正現者、被行節會有何事哉、又撿先例、康平二年正月、暦道博士賀茂道平不從蝕由、而大法師昭證弟子藤長經、兼日申可有蝕之由、臨期既以正現、道平等總無所陳、先例如此、一向不可信暦道、然則不可被仰廢務由、隨形勢可被行宴會歟、光房承仰退出、今朝既無蝕、仍被行宴會、行康有壯雄之氣云々、

〔台記〕康治二年正月一日己丑、藏人光房示送云、日正現故、准无食、可有節會、院拜禮等者、早旦傳人日出申之、日出山後、只暫虛掩、其後晴日見處无蝕、余(藤原賴長)疑今日食、虧初寅刻、加時卯一刻、復末卯五刻、(暦道所申如此)而近代食、多一兩時移後食、然故卯辰之間、可食初歟、正當不食之因、及巳刻初、上格子、今日食事、自本算道暦道相論、暦道折名、但春秋之世、猶多暦失、何況末世乎、私四方拜事、先撿先例、治暦四年雖日食有此事、見御暦、猶依爲疑、去年仰大内記藤令明、文章得業生成佐、友業(無官六位)令勘申漢家之事、令明、友業申可有之由、成佐申可止之由、按之成佐以得理、因止之、但公家不被一定、隨當日蝕否、可有廢務云々、私四方拜如何由、問右將軍、報云、依日蝕可止、故未見蝕否之前、不可有四方拜歟、因停止之、於法成寺令讀藥師經、依日蝕也、(中略)後日、友業、成佐等云、見日出間、所少蝕也、通憲云、全不蝕、當世之才士、只此三人耳、因記所申備後鑒、人民或云有蝕、或云無蝕、昭十七年左傳正義曰、日食、王或取玉

沙汰也、予移著端座、敷膝突、召藏人辨令勘日時、而陰陽寮泰長申上云、日月蝕當日被行御讀經、或不被勘、或又勘之、頗不定也如何、予命云、先々皆如此、但猶以吉時可被始也、勘日時可宜歟、藏人辨持來日時、披見之處、今日午剋可被行者、可進例文硯之由、仰藏人辨了、史持來例文筥置座前、今日請定、僧名交名加入、又以硯筥置參議座前、只今參議不參、仍召上藏人辨令書僧名、書了持來、中略○予申上云、律師覺嚴也、皆所存也、然者早可仰覺嚴也、仍始事御經心閑可奉轉讀之由仰下了、大般若一部、各二帙也、堂童子著座、藏人辨實光、兵衛佐經親、藏人二人、散花了、頭中將宗輔依御願趣、是日蝕御愼之由也、導師啓白了、奉讀御經、漸及午後、中將師時、少將成通、重道、皆參上、著出居座、今日之蝕、十五分十三分半、虧初申剋者、而漢天掌來、大陽不蝕、日既入西山、略西明之蝕歟、臨酉剋御經轉讀、了奏事由、令結願御卷數綱所書儲授御導師權律師覺嚴啓白、關白結願同人之所役也、事了、依無人數無行香、中略○今日無日蝕、若是筭術之相違歟、將又依旁御祈不蝕歟、可尋事也、或人云、後日聞、居海濱下人望日沒時之處、入海上間輪頗虧云々、此事又有疑、雖西山雖海上、日入之時同事也、何於海上可現蝕哉、

保安元年十月朔日戊辰、今日有日蝕、及申剋正現、十五分之十一分蝕、曆道之所勘、如指掌、後聞、於中殿有卅口御讀經、上卿侍從中納言云々、又山座主行熾盛光法、

大治二年五月朔日庚寅、今朝可有日蝕由、司天臺所奏也、但丑寅卯復末、十五分之十二分、恐帶蝕欲出山歟、近日日出寅時也、而依昨日天陰、今朝雨下、不見日蝕之正否、且是御祈之驗也、

〔長秋記〕大治四年九月一日、日蝕、曆道辰時始波錦宿曜、未時始申時滿、巳一刻蝕、二日、頭辨召陰陽頭家業於殿上、口給祿出給之、依昨日蝕符合也、

〔中右記〕長承三年閏十二月一日乙巳、今日日蝕十一分、巳午未時之由、司天臺所奏也、內以山僧十二口、於御前藥師經御讀經、上卿源大納言、定海法印御修法、日蝕御祈者、臨未時日蝕正現、如天文奏也、刻限度分、如奏也、

所也、而或白雲既覆、紅輪不見、或大陽斜出、短晷欲暮、僧深算前日勘奏云、雖入蝕限、不可正見、今案、口傳幷秘說術意之不可叶算計之無謂也者、後日道言朝臣云、二分蝕、前々或不見、又中古以來蝕時必降、若及申終刻、已爲日沒之時、彌不可顯現之由、前日執申了、此事今日不可被決、仍垂御簾廢務如例、予爲御使參鳥羽御所、下格子、今卽入簾中、有御旨等、晚頭歸參朝餉、又下格子、入夜又參殿下、不下格子之由有仰、尤以可然、今日於尊勝寺、請六十口僧、被轉讀大般若經、依蝕御祈也、(自昨日被始)左右大辨藤宰相參上、納言不被參、右大辨爲上卿代行事、希代之例也、堂童子布施、取外記催諸大夫、布施供養從藏人所以別進物遣之、(僧綱一石、凡僧五斗、)

〔中右記〕嘉承元年十二月朔日戊午、殿下(○藤原忠實)依日蝕不令參給、公卿三四許參入、今日未刻可有少分日蝕之由、曆道所勘奏也、而宿耀家僧明算深算等、不可有之由進申文、彼是相論之間、已無日蝕、陰陽助家榮談云、近代日蝕必所勘申之刻限推遷事也、定及申酉時歟、日已申刻入之頃也、恐入西山之後蝕歟云々、此事一端雖有其理、頗通申詞歟、　二年十一月朔日壬子、今日冬至、又可有日蝕之由、司天臺所奏也、(其日蝕十五分之十三半强、虧初未一刻十九分、加時申十五分、復末酉一刻十一分、)未時許參內、御物忌也、仍候仗座、右宰相中將(顯)左大辨(重)上官等參會、相竊時刻之處、及晚景片雲橫漢、日光不現、就中天下不及暗計也、不蝕歟、誠可欣歟、代初之蝕、朔旦冬至之日也、加之主上(○堀河)御當年星也、今無正現、爲天下大慶歟、(○中略)今日公卿多不被參、大奇恠之事也、日蝕之時、人々可被皆參歟、　三年(○天仁元年)五月朔日、未刻日蝕正現、(片輪少許也、本六分蝕、)曆道不奏刻限、蝕分如指掌、但宿曜道不可有蝕由、棄日奏之處、兩道之相違可決勝負也、曆道已相叶也、及申刻結願、(先奏事由、)不賜度者也、則退出、明算來談云、此蝕正現者、上皇(○白河)御愼重云々、

〔中右記〕元永二年四月朔日丙子、天晴、今日可有日蝕之由、曆道所奏也、仍於中殿可被行御讀經也、上卿人々皆依愼被申障、早可參勤之由、依院宣頭辨送消息也、予(○藤原宗忠)雖重厄年、不可闕公事、仍巳時許參內、頭辨示藏人辨實光所沙汰也、陰陽寮總所催儲也、(兼日內々仰綱所、召請卅口僧侶也、)相尋之處、僧名日時未被

正六位上行少錄大江朝臣俊任

〔中右記〕寛治三年十一月一日、可有日蝕之由、道言能筭共勘申、而雖天晴無其蝕、但廢朝不警蹕、垂御簾、又晩更供忌火御飯、是依恐日蝕也、

寛治八年〇嘉保元年三月一日壬申、早旦出河原謝北辰、其後馳參內、是午時依可有日蝕也、右大將、新大納言、治部卿、頭辨以下殿上人濟々參集、主上御夜大殿、朝干飯方、下格子、依殿下仰下、晝御座御簾彖不下、藏人之失歟、午剋推遷漸及申二點、初蝕十一分者、烏輪巳虧、淸光頗欠、及酉三點、漸復本體、太陽所殘如初三月、抑司天臺所奏已如指掌、是雖末代曆數顯然也、但至剋限頗有相違、今日止警蹕音奏等、

嘉保二年二月一日、今日可有日蝕之由、曆道奏聞、仍兩殿下令參籠御物忌給、殿上人職事十人之外、又以濟々參籠、而從夜前天陰雨下、已不正見、司天臺所奏十二分半、蝕從寅剋可及辰剋者、纔及午剋、天頗晴、雖然圓光甚明、定知復末以後天晴歟、不正現條、人々皆感歎、仍有音奏、未時許兩殿下令退出御、人々或退出云々、今日大原野祭、幷釋奠、依可有日蝕、皆以延引、大僧正良眞爲日蝕不正現、從兼日於私房、七佛藥師法所修也、而已天陰雨下不正現、其實誠雖末代、佛力之靈驗、自以顯然者歟、

〔殿曆〕康和二年四月一日丁酉、依當日蝕、不參內云々、日蝕間不出行、復末後東面開戶、雖件日者不當日者也、雖八分二分許蝕也、新尊勝念誦僧六口、大品經讀經僧五人、

〔永昌記〕嘉承元年七月一日庚寅、今日御物忌、可有日蝕、仍於御殿可有六十口御讀經、〇中略予〇藤原爲房仰御願經、〇中略發願如例、未一剋大陽初虧、四點漸過、復末之間、浮雲時々覆、非只蝕正見、虧分已過、天之變異不可不愼、主計頭道言朝臣參藏人所、執奏此由、又賢暹法印申云、七月朔水曜蝕、本條所指草木傷損、百物不登云々、加以炎旱日久、民庶之憂、尤可有祈請者、及申剋有御結願、　十二月一日戊午、今日可有日蝕之由、陰陽寮執奏、中務省奏、史定政一昨日持參、新勘未二刻廿二分、加時未三刻廿六分、復末未四刻廿七分、蝕大分十五分之二半彊云々、覽大辨付內侍

勘見本條等、總不見其文、日月變光、星宿成變之時、雨降無災之由有其文、若見此文所申歟、變與蝕已可有輕重、何以輕事准重事哉、則有勘文、

〔春記〕長曆三年十二月廿九日乙酉、參御前、奏關白復命等、○中略明年正月一日日蝕事、古昔在此事、被問被行何等事哉、可令勘申其例歟等事也、仰云、四十口御讀經可吉、仰可然之、上卿可令行也、日蝕事可仰右大臣也、此由可仰關白者、酉時許參關白殿、依御物忌、以章信令申此旨、○中略復命云、日蝕事早可仰右大臣也、○中略又參右府、仰日蝕例可勘申之事、畢退出、

〔大神宮諸雜事記二〕治曆四年正月一日甲戌、時未二點ヨリ申刻マテ、日蝕如暗ナリ、同二日戌時大地振動、同三日終日大風吹、所々人家吹倒セリ、但至于日蝕者、兼日依卜申、以去年十二月十七日天、勅使神祇少祐大中臣輔長以令祈申給、宣命狀云、明年正月一日、日蝕可有之由、卽御體御愼可有之由、所被祈申也、

〔朝野群載八別奏〕日月蝕奏

中務省解　申請官裁事

二月朔乙丑、日蝕十五分之八、中略　虧初寅一刻三分　加時寅四刻九分　復末卯三刻十分

右得陰陽寮解偁、件日蝕勘申者、寮依牒狀申送如件者、省依解狀申送如件、

應德二年正月廿五日　正六位上行少錄紀朝臣時基

卿闕　正六位上行少丞源朝臣

從五位上行大輔藤原朝臣　正六位上行少丞橘朝臣未判

從五位上行少輔□□□□　正六位上行少丞藤原朝臣

從五位上行權少輔源朝臣廣綱　正六位上行□□□□

正六位上行少錄惟宗朝臣

去安和二年三月廿五日、流罪童被召返、給官符、依去月日蝕也、

貞元二年十二月廿五日辛巳、諸公卿上表、賀去月一日日蝕不見事、詔大赦天下、但犯八虐常赦所不免者不赦、

〔小右記〕天元五年三月一日癸巳、日蝕十五分之七虧、初長三刻一分、加時巳一刻二分、復末巳三刻三分、日蝕叶暦、

〔權記〕長保二年三月一日戊寅、日蝕、仍不參結政、詣左府、〇藤原道長右中辨以下自結政參會、余〇藤原行成云、日蝕之日廢務例也、而今日結政如何、左少辨云、寮雖申省、省未申官、官隨難知其案內、有結政也、予重云、此蝕諸人所知也、所司縱懈緩無所申、可尋問之事官也、寮申省之由若有云々、先令問省、隨申來可進止、而只以省違例懈怠申上、直行結政之儀如何、中辨以下無所答、丞相命云、此事可尋問歟、

〔小右記〕寛弘九年〇長和元年八月一日丙申、日蝕叶暦、但一時相違、未刻虧初、申刻復了、末、仍一時相違、

〔日本紀略〕後一條治安元年七月一日甲戌、日蝕符合、守道〇加茂給祿、

〔日本紀略〕後一條長元元年三月一日丙申、卯剋日蝕十五分之八也、暦家不注、仍中務省不申、不廢務、

〔左經記〕長元元年三月一日丙申、天晴、日蝕十五分八、虧初寅初□分、加時卯一刻卅七分、復末辰二刻六十一分、虧從西南、甚於正南、復東南、是大外記頼隆眞人所注送也、此蝕暦家不注申云々、仍所司不廢務、兼依不存歟云々、暦博士守道公理、爲夜蝕之中、蝕分不幾、仍不注申云々、入夜甚雨、日蝕各自滅歟、本條云、日蝕以後五箇日之中、天陰無災云々、況於甚雨哉云々、微雨時其災少滅、大雨時大滅云々、是證昭所陳之文也、

日蝕十五分三半弱　虧初寅七刻八十三分　加時卯一刻卅六分　復末卯三刻卅七分

日出卯三刻廿六分 入酉四刻五十四分　日天在奎宿十四度八十七分

此證昭所注送之分法也、兩說雖不同、共立其道之人等也、仍共記之、

二日丁酉、參關白殿、天文博士時親獻昨日蝕勘文、公家幷丞相可有御愼云々、　十日乙巳、大夫外記頼隆眞人來向云、日月蝕以後、三日若七日之中降雨、其災滅之由、前日宿曜師證昭稱申之由、依有命

〔日本紀略一醍醐〕延喜十三年五月一日壬寅、日蝕、但雨降、今日諸司廢務、　十一月一日己亥、日蝕廢務、　十四年四月一日丁卯、日蝕、百寮廢務、　十一月一日癸巳、日有食之、諸司廢務、　十七年十二月廿七日壬申、今日召暦博士葛木宗公、大春日弘範等於陣頭、對問來正月一日日蝕有無雨人異論、卽宗公定申可有之由、既了、

〔扶桑略記二十三醍醐裏書〕延喜十七年十二月廿六日辛未、右大臣〇忠平參入、暦博士宗公申、明年正月一日日食之由、因玆朝拜停止、權暦博士弘範申、不可有日食之由、　廿八日癸酉、右大臣參入、召暦博士等、對問日食事、依宗公申可有日食、

〔扶桑略記二十四醍醐裏書〕延喜十八年正月一日乙亥、日食廢務、仍无朝賀、　十二月廿二日、右大臣召暦博士等、令勘申明年正月一日日食可廢務否之由、　廿八日、博士等令勘申同日食可廢務否由、博士等申云、依宗公申、夜食不可廢務之由定申、又召外記、仰云止朝拜者、

〔日本紀略一醍醐〕延喜廿年正月一日甲子、日蝕廢務、　廿一年六月一日乙卯、日蝕、但大雨也、廢務、

〔日本紀略二朱雀〕承平七年正月二日乙卯、日蝕廢務、或記曰、元日日蝕、二日行宴會、

天慶二年七月一日庚子、日蝕廢務、自申剋可始、其時不見、或云不食、

〔朝野群載十五陰陽道〕陰陽寮解申大陽虧蝕事

七月一日辛未、日蝕十五分四、

虧初卯一剋三分　加時辰二剋一分　復末巳初剋二分

右依從五位下行暦博士賀茂朝臣光榮等正月一日解狀、大陽虧狀、申送如件、以解、

天延三年六月廿三日　　正六位上行大屬秦

〔日本紀略六圓融〕天延三年七月一日辛未、日有蝕、十五分之十一、或云皆既、卯辰剋皆虧、如墨色無光、群鳥飛亂、衆星盡見、詔書大赦天下、大辟以下常赦所不免者咸赦除、依日蝕之變也、　八月廿七日丙寅、

唐禮文、不論晝夜、有司豫奏、今豫知夜食、豈得以在夜不救之乎、既能救之、豈得准平日擧政事乎、然則不問晝夜、必當廢務、從五位下守大判事兼行明法博士櫻井田部連貞相、正六位上行左少史兼明法博士秦公直宗等議曰、儀制令曰、太陽虧、有司豫奏、皇帝不視事、百官各守本司、不理務、過時乃罷、義解云、帝不見事者、不聽政事、過時乃罷者、假令日蝕在申者、酉時得罷、是爲過時罷也、公式令曰、京官皆開門前上、閉門後下、外官日出上、午後下、案此等文、殊擧晝時、不遑言夜、爲其依夜食不可廢務故也、今太陽隱去、夜漏既致、雖晝夜異名、爲政有時、而依夜食廢晝政、其文未明焉、問曆博士、日夜食之時、有司豫可奏以否、陰陽頭從五位下兼行曆博士越前權大掾家原朝臣鄕好、外從五位下行陰陽權助弓削連是雄等言、天長八年四月一日夜、日有蝕之、有司豫不奏、朝廷問其由、曆博士外從五位下刀岐直淨濱言、陰陽寮壁書云、夜蝕不奏、故豫不奏、參議從三位行刑部卿兼下野守南淵朝臣弘貞仰陰陽寮云、國家急務、何待明朝、雖當夜食、不可不奏、謹案、凡日月蝕者、是陰陽虧敗之象也、故日蝕修德、月蝕修刑、經典所言、日食之可愼、不論晝夜之有別、又壁書所記、不見所據、寮式亦無此文、然則天長八年以往之例、事涉疎漏、理不可然、是以頃年、夜食豫申送中務省、行來漸久、如有成式、

〔扶桑略記二十三醍醐〕寬平九年九月一日癸酉、太政官奏、可有日蝕、而日不蝕、律師聖寶御修法終罷歸山、召給衾一條、已上御記

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年九月一日癸酉、日蝕、諸司廢務、

昌泰二年二月一日乙丑、日蝕廢務、　八月一日壬戌、日蝕廢務、

延喜元年正月一日甲申、日有蝕云々、仍天皇不御南殿、　十二月一日、當蝕不蝕、

〔扶桑略記二十三醍醐裏書〕延喜九年二月一日丁酉、日食廢務、仍釋奠延引、　二日戊戌、右大臣以下就政、又依上宣、外記召問曆博士等、依日食剋限謬也、　十一年五月廿七日庚戌、曆博士千門等、依日食誤、進過狀、

淵朝臣愛成、從五位下善淵朝臣廣岑、勘解由次官從五位下粂行直講小野朝臣當岑、外從五位下美努連清名等議曰、春秋莊公十八年穀梁傳曰、王三月日有蝕之、不言日、不言朔、夜食也、何以知其夜食、曰、王者朝日、范甯注曰、王制云、天子玄冕而朝日於東門之外、故日始出而有虧傷之處、是以知其夜食也、何休曰、春秋不言月食、月者以其無形故闕疑、夜食何緣書乎、鄭君釋之曰、一日一夜合爲一日、今朔日日始出、其食有虧傷之處未復、故知此日以夜食、夜食則亦屬前月之晦、故穀梁子不爲疑、疏曰、玉藻云、天子朝日於東門之外、服玄冕、其諸侯則皮弁、以聽朔於大廟、與天子禮異也、其禮雖異、皆早事、而昨夜有食、虧傷之處尙存、故知夜食也、徐邈云、夜食則星无光、張靖策癈疾云、立八尺之木、不見其影、並與范意異、據此文、夜食在前月晦、則今月朔、不可廢務、故有天子朝日之禮、又禮記曰、曾子問曰、諸侯旅見天子、入門不得終禮、而廢者幾、孔子曰大廟火、日食、后之喪、雨霑服失容則廢、如諸侯皆在而日食、則從天子救日、各以其方色與其丘、注曰、示奉時事有所討也、方色者、東方衣色青、南方衣色赤、西方衣色白、北方衣色黑、據此文、行禮之間、太陽有虧、不得卒事、中途廢止、但此間之法、有司豫奏、與古禮意頗不相同、夫薄蝕者、國家之大忌也、經典所記、不別晝夜、以此尋此、雖是夜蝕、猶令廢務、文章博士從五位下粂行大內記越前介都宿禰良香議曰、案經傳諸史、太陽虧損、君避殿移時、百官廢務、自有明文、不煩更載、此謂晝日之蝕也、至于夜食虧傷之理、不見避殿廢務之義、但春秋穀梁傳莊公十八年、春王三月日有蝕之、不言日言朔夜食也、鄭君釋曰、一日一夜合爲一日、今朔日日始出、其食有虧傷之處未復、故知此日以夜食、夜食則亦屬前月之晦、謹按、一日一夜合爲一日、其食有虧傷之處、然則若食及復在丑剋前、食者當屬前月、以爲晦食、晦日廢務、若食及復在子剋後者、當屬來月、以爲朔食、朔日廢務、且如雖食在丑剋、而虧傷之處、至寅若卯、未及全復、則晦朔兩日並須廢務、古之與今、其事各異、何者古之曆家、未知豫推日食之術、唯見虧傷、然後知食、設有夜食、不由得知、後代曆家、以術推理、豫知食否、毫毛不差、故唐開元禮云、太陽虧、有司豫奏其日、置五穀五兵於大社、皇帝不見事、百官各守本司、不理務、過時乃罷、如

務太政官、而經寮奏耳、(在穴)

〔延喜式十一太政官〕凡大陽虧者、陰陽寮預申中務省、省錄申官、卽少納言奏聞訖、官告知諸司、

〔延喜式十六陰陽〕凡太陽虧者、曆博士預正月一日申送寮、寮前蝕八日以前申送於省、

〔禁秘御抄下〕日月蝕　主上當日月蝕之時、御愼殊重、(日五、十四、廿三、不輕、卅二、四十一、五十、巳上、可愼、月八、十七、廿六、卅五、四十四、五十三、同上、)不然年非輕、天子殊不當其光、雖蝕以前以後、不當其夜光、日月惟同、以席裹廻御殿、如供御不當其光、日蝕未明前、月蝕未暮前、(月不出前)人々可參籠、御持僧或他僧ニテモ奉仕御修法、其上於御殿有御讀經、近代多藥師經也、不可說、凡僧等參、上古可然僧參、不限藥師經、或法花經、(永長此御讀經被行、兼日)大般若經常事也、上卿一人著弘廂行之、有出居堂童子、引廻席之上、內引軟障、外席所衆引之、內藏人引之、近代或有無何御遊、昔不然、嘉保或記、日蝕止音奏、雨下稱音奏、又曰、凡日月蝕月內、猶不聞食音樂、(在宇治左大臣記)又止行幸警蹕、近代無此儀可尋、雨下時結願御讀經、撤廻席、但不上御簾、殊可有御愼事也、

〔禁秘御抄下〕天文密奏

日月蝕、翌日奏、又同、

〔日本書紀二十二推古〕三十六年三月戊申〇(二日)日有蝕盡之(ハエツキタルコト)、

〔日本書紀二十九天武〕八年十一月壬申朔、日蝕之、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年二月壬子晦、日有蝕之、

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年正月甲辰朔、日有蝕之、

〔三代實錄二十四淸和〕貞觀十五年七月癸亥朔、日蝕無光、虧昃如月初生、自午至未乃復、

〔三代實錄三十一陽成〕元慶元年四月壬申朔、夜丑一刻日有蝕之、虧初子三刻三分、復至寅二刻一分、皇帝不視事、百官不理務、不擧常樂、先是中務省預奏陰陽寮所言、四月朔夜太陽虧之事、詔命明經紀傳明法等博士議日蝕在夜廢務以否、從五位上行大學博士兼越中守善淵朝臣永貞、從五位下行助敎善

二分四十四秒、得黃道之北平朔之限二十零度九十五分、黃道之南平朔之限得八度八十八分、（共止二分位）要之視差之故多端、食限不過、得其大概、欲定食之有無、必按法求得本地本時距緯度與太陽太陰兩視半徑相較、若兩視半徑相併之數、大於距緯者爲有食、小於距緯者爲不食也、

〔新考日食三法〕日食三法附言　日食法、支那ニ正法ナシ、其コレアルハ、歐羅巴ノ曆入テヨリシテ始ル、而シテ歐羅巴之法、亦古粗今密ニシテ、漸ヲ以テ精ヲ盡シ、曆象考成後編ニ至テ精巧極ル、其法、條理貫通シテ論ズベキモノナシ、然ドモ人其布算ノ繁雜ニ苦シム、是ニ於テ予（高橋至時〇子春）考索シテ、日食法數條ヲ設ケ得タリ、今其稿ヲ脫スルモノ、白道新法、及ビ赤道法ノ二條ヲ構寫シテ、予ニ求ムル二三子ニ授ク、二法ノ趣キ異ナリト雖ドモ、理ハ一ナリ、其東西南北ノ二視差ヲ求ムルニ、舊法ハ、黃道高弧交角及白道高弧交角太陰高弧ヲ求メ、（是曆象考成上下編之法）或ハ赤經高弧交角及白經高弧交角太陰距天頂ヲ求メテ（是曆象考成後編之法）以テ二視差ニ求メ至ル、今一切ニ削リ去テ、東西南北ノ原數法數ヲ立テ、以テ逕チニ二視差ヲ得ル、舊法ニ比スルニ、工カヲ省クコト數倍ナリ、簡捷トス、〇中略　支那往古ノ日月食ヲ推スガ爲ニ、消長法ト倶ニ簡法ヲ設ケ、前二法ヲ併セテ三法トス、歷史載ル所、多ク食甚ノ分、及時刻而已、且ツ其數亦未ダ必密ナラジ、故ニ易簡ヲ要シテ、初復ノ法ヲ略ス、二視差ヲ求ル法、又舊法ヲ取ル、コレ食甚一條ヲ求ムルニ至テハ、前ノ二法ヲ用ルモ、簡迂甚異ナラザルニヨル、但赤經高弧交角ヲ求ル別法ヲ設テ之ヲ記ス、若夫レ歷史中初復ノ測數備ハルモノハ、宜シク前法ヲ撰ミ用ユベシ、

〔令義解六儀制〕凡太陽虧、有司預奏、（謂太陽者日也、虧者、謂日蝕也、有司者、陰陽寮也、）皇帝不視事、百官各守本司、不理務、過時乃罷、（謂不視事者、不聞政事、過時乃罷者、假令日蝕在申者、酉時得罷、是爲過時罷也、）

〔令集解二十八儀制〕跡云、預奏、計日度數預知、可日蝕之日也、朱云、太陽虧、謂日蝕也、不云月虧也、有司預奏者、陰陽寮直奏也、不可經中務及太政官者何、穴云、有司預奏、官亦預須告諸司、或云、師云、不申中

日在地下、月在天、偶中同緯、時地所障而月失光、爲之月蝕、相離則月光見、謂之復、皆因暦筭考、知未來蝕分、而分毫不差、然浮屠氏以爲帝釋與修羅之戰、或爲日月之病惱者共可笑、

〔暦林問答集上〕釋日月蝕第二十

或問、日月蝕何也、　答曰、蝕者雖多說、今暦家法、周天之位三百六十五度二十五分半也、二十八宿行度亦同、故天以二十八宿爲體、則二曜五星、皆行二十八宿之度、晦朔之間、月及於日、與日相會、而正爲朔、凡日月一歲十二會也、於是君之政、急則日行疾、緩則日行遲、有疾遲失其常度、則日蝕、蝕者日月同道、而月掩日而相重之時、現虧蝕、故日蝕則陰侵陽、臣凌君之象也、王者修德行政、用賢去姧、則月當避不蝕也、張氏曰、春秋云、五星潛在日下、禦侮言之乎、又月與日相對、則月光正滿、而爲日月正對衝、而日光遙奪月光、則有月蝕、又云、月之側有壹氣、謂之闇虛、當月則月蝕、當星則星亡、月蝕者陽侵陰之象也、董仲舒云、月后妃大臣諸侯之象也、故月蝕修刑以攘災也、

〔寬政暦書十二日食暦理〕太陽食限。　日食之限、不同於月食、月食惟以太陰地影兩視半徑相併之數、當黃白二道之距緯、推距交之經度、即爲食限、日食因有高下差、其距緯度、隨地隨時不同、故太陽太陰兩視半徑、不能定食限也、太陽最大視半徑二十七分二十九秒一十一微、太陰最大視半徑二十七分九十九秒四十五微、相併得五十五分二十八秒五十六微、與最大高下差一度零二分四十零秒七十七微相加、得一度五十七分六十九秒三十三微、以此數當距緯、用最小黃白大距四度九十九分三十一秒、求得距交、白道經度一十八度四十三分、爲黃道之北實朔可食之限、又以太陽太陰最大視半徑相併數、當距緯、用最小黃白大距、求得距交、白道經度六度三十七分、爲黃道之南實朔可食之限、而在黃道之北者必食、在黃道之南者或食或不食、在黃道之北者亦非普天之下皆見食、但必有見食之地耳、蓋視差因居地之南北而殊、而距緯又因實緯之南北而異、故食限不可一概而論也、今依前法、求得黃道之北實朔可食之限、及黃道之南實朔可食之限、各加實朔距平朔之行（求實朔距平朔之行法、詳太陰食限篇、）二度五十

ものから、その光の翳るゝを見て忌々しげにおもはるゝも、なべての人の眞情なれば、おほかたの世のならひのまゝに、事によりてはその日其夜を避て、ものするもよかるべきなり、

〔南部神道口決抄 一〕日蝕月蝕、釋敎ニハ帝釋ト修羅ト鬪諍シ、修羅敗北ノ時逃隱ル處ロ見ザラシメンガタメ、日月ヲ晦クスト云云、五儒ニテハ、月ハ水ニシテ元來光リ無シ、日ノ光リヲ請テ以テ照ル、十五日ニ至テ日月相對スルノ時、地球隔テ日ノ光リ月ニ遷ラズ、月缺テ月蝕ト云フ、故ニ月蝕ハ十五日ニ限リ、日蝕ノ事、朔日ハ日月同時ニ出テ同時ニ入ル、日ハ遠ク月近ク、日ノ前ニ月重リ、月輪日ヲ隔テ日光缺、是ヲ日蝕ト號ス、故ニ日蝕ハ朔日ニ限レリ、修羅ノ敗軍ハ朔日十五日ニ窮ルヤ否ヤ、然モ吾儒ハ何時何刻何分ナン薹何毛缺ルコトヲ、百歳ノ前ヨリモ知ル、桑門ノ面々此事如何トスルヤ、釋敎ノ虛妄ヲ可知、

〔玉勝間 十四〕日食　月食　もろこしの聖人、日食月食のゆゑをだにえはかりえらで、わざはひとしたるもをかし、

〔塵袋 一〕一薄蝕ト云フハ何ナル蝕ゾ
京房ガ易ノ飛候曰、凡日蝕皆於晦朔、不於朔者、名曰薄ト云ヘリ、ウスキニハ非ル歟、

〔和漢三才圖會 天一〕陽曆、陰曆、　日蝕、南陽曆、北陰曆、　月蝕、北陽曆、南陰曆、
帶蝕（有日月出入時、謂之帶蝕、）　日帶蝕（將復在東、漸虧在西、）月帶蝕（將復在西、漸虧在東、）又有正交、中交、相交等數品、　凡月蝕分天下皆同、而日蝕分隨東西南北地在異、故有不全見蝕地、　如日蝕有陽曆、則日北月南、故南方人所睹直而蝕分多、北方人所睹路齟齬而蝕分少、或無之、故年中月蝕多有、而日蝕少、　按、日行不出二黃道外、其間四十七度太（中間爲赤道、春秋二分）、冬至行南黃道、漸北經十日、過二度六分餘（百八十日）、歟夏至行北黃道、　月行有九道（見于前圖）、有出於黃道外六度許、而有遲速、故與日常異道、（朔初二日、初三日）相會時偶中于同緯、時月在日正下蔽也、人在其下視之、故日光暫昏爲之日蝕、相離則隨日光見、謂之復、　月望前後（十四、十五、十六日也）、與日相對、

蝕之を、ハエツキタルコトアリと訓るは、ハエ・を蝕の名として、其ハエの殘りなく、かゝりたる由なり、但しこは字にすがりて訓る詞なれば、よくは當らず、字をはなれては、ノコリナクハエタリなど訓むべきなり、或人此說をきゝて因に問ふ、天地定位たる後は、今の定のごとく、かならず日月の蝕あるべきを、上世はいまださる理を窺測り知るべきに非ざれば、人皆のいかに怪み畏れたりけむ、そは既くより賢々しく物の理を測りごつ漢人すら、なほ古くは天の變異として畏れたりけげにきこえたり、然るに書紀のいと上御代の卷々に、一度も此事を記されずして、推古天皇の御世に及て、載始められたるはいかならむ、答けらく、後世のごとく天學推步の術明かになりたる上の意のみになりておもへば、いはれたるがごとし、然れど說れたるごとく、天地定位たる後は、かならず蝕ありぬべければ、世々の人皆おのづから見知りをりて、さらに怪しとも畏しともおもふべきにあらず、またことさらに蝕の事をいふ名もなくてぞあり經にけむ、上古の人はおほらかなりければ、後の世にあはせては、おのづから訓もすくなくなむ、また無用に物に名つくる事などは、なさ〳〵あるべからず、古意を得て悟るべし、今の世にても、いと邊土なるものなどには、然おもひとりてあるも多かめり、其はいづれの國にても、上ッ世にはなべてしかありけむを、漢國にては世を治る謀に天變なりとして、畏れがほに神祭などして、人をおもむけむともしたりけるが、漢籍に古く書に記せるは、春秋の始、隱公三年に、二月己巳日有食之と書たるを始にて度々に記せり、其中に文公十五年六月辛丑朔、日有食之、鼓用牲于社と、書せる下の左氏傳に、日有食之、天子不擧、伐鼓于社、諸侯用幣于社、伐鼓于朝、以昭事神、訓民事君、示有等威、古之道也、後に推步の術もて豫て窺測り知る世となりても、猶むかしの例に因准て、史にも書載る例となれりとぞきこえたる、漢國にては、後漢の世の末より、日月の蝕を推考る法始りて、漸に精密くなれりとぞ、皇國にても推古天皇の紀より始て、日蝕をり〳〵載られたるは、此御代より始て、漢國の暦を用ひ給ひけるによりて、かねて蝕をも推考て、かの國風をまねびて、書記め置つるふみの遺りたりけるを、彼國の史に例ひてものせられたるなるべし、○中略そもそも日月の蝕を忌む事は、もとより古傳にあらず、何の故實もなきいとはかなきならはしなる.

〔類聚名義抄 八食〕蝕〈時力切、音食、日月蝕也、クフ、ヤフル、ムシクフ、〉

〔爾雅 一天文〕日蝕〈ニツシヨク〉同日食

〔和漢三才圖會 一天〕日蝕〈ジツシヨク 和名波惠〉〈朔、二日、三日、限二此三箇日一、〉〈日月虧日レ蝕、稍小侵虧、如二蟲食一草木之葉一也、〉

日天高、月天低、而常異二其行道一、至二毎朔一則日月同二經緯一、而相値則月在レ下、而隔二掩日光一、故日失レ光、相離則復レ元、日蝕入二陰曆一則初虧二西北一、甚二於正北一、復二於東北一、入二陽曆一則初虧二西南一、甚二正南一、復二於東南一、〈如日蝕陰侵レ陽、臣掩レ君之象、或大水、如日蝕見レ星、有二弑レ君天下分裂一、〉

〔倭訓栞 前編二十四波〕はゑ　日本紀に蝕字を訓せり、日月の蝕は、虫の木葉を食ふごとくなれば、食餌(エ)の義なるべし、俗にゑばみといふがごとし、日蝕月蝕に禁裏御坐の間を包みまゐらする事、御湯殿の記に見えたり、舶來の品に兩蝕儀あり、

〔比古婆衣 二〕月日の蝕をはゑといふ由　近き頃となりて、古事しのぶともがら、日月の蝕といふことになれるを、古はハエといへりと心えて、文などにものすめり、されど和名抄にも蝕字の下に和名を載られず、其外古き書どもの訓にも、をさ〳〵見あたらず、たゞ書紀の古訓に、推古三十六年三月丁未朔戊申、日有二蝕盡一之とある蝕盡を、ハエツキタルコトと訓み、舒明八年正月壬辰朔、日蝕之とある蝕を、ハエタリと訓み、〈次に九年三月乙酉朔丙戌、日蝕之とあるところの訓も同じ、〉皇極二年五月乙丑、〈十六日〉月有レ蝕之とある蝕をも、ハエタルコトとよみ、又天武九年十一月壬申朔、日蝕之とみえたるところには、ハエタリと訓り、是ぞ其ハエといへる言の書に見えたる始なるべき、さて其蝕をハエと云へるは、日月の光映の翳るゝを忌て、反さまに映(ハエ)と云なしたるにて、死を奈保留、病を夜須美、葦を輿志など云ふと同じ例なるべし、但し映の意ならむには、假字ハエなるべきを、此に擧たる推古紀などにハエと作るかたは誤寫にて、天武紀にハエと書事ぞよろしかるべき、〈すべて書紀の假字は、古の私記どもに據れりとみえて、古書のめでたきがあれど、假字づかひの違ひたるも交れるは、後人の作ひがめたるものなり、其義を考へて訂し用るべきなり、〉さて推古紀なる日有蝕

雲のたなびきたる、いとあはれなり、

〔萬寶部事記 六占天氣〕日　雨と晴とをしるには、先曉の天氣と日の出る時をうかゞふべし、日の出るとき赤きは風、黒きは雨、青白きは風雨としるべし、又日の出るときはれて、やがて陰りて晴ざるは風雨となる、　連日の陰雨の後、日出て早く晴るはかへつて雨ふる、朝曇りてやう〳〵をそく晴るは晴、さて又明日の日和は、今晩の日の沒とき見るべし、日沒に照ば晴る、雲の中に日入ば、夜半の後にあめ、あるひは明日かならず雨ふる、日入て後、やうやく紅粉のごとくにして、やがて色かはるは風もしくは雨ふる、日の入とき雲あかけれ共、其色かはらず、漸うすくなりてきゆるはよし、黒雲日の入につゞくは明日天氣よからず、西に黒雲あれども、日のいる時雲なく日のかたち見えて、日雲外に入れば雲はれて明日も晴る、　日のいろ黃なるは風〇中略　赤き雲氣日の上下に有時は、大風いさごをあぐ、但し色變せずして、やうやくうすくなるときは、晴て又風もふかず、　白氣日月の上下にひろくしくは、三日の內に惡風雨有、

○

日蝕

〔倭名類聚抄 一景宿〕蝕　釋名云、日月虧曰蝕、音食、稍小侵虧、如虫食草木葉、故字從虫食也、

〔箋注倭名類聚抄 一景宿〕按、日本紀、蝕訓八江、當是古訓、蓋源君之時、人皆音讀、不以國訓呼、故此不載訓、羅古訓宇須毛乃、或訓宇須波多、榊古訓多利、本書並不載訓、皆此例也、〇中略　原書、今本蝕作食、玄應一切經音義再引、及廣韻引、並作蝕、與此合、按、說文、蝕敗創也、又云、食一米也、二字不同、此作蝕正字、作食假借也、原書今本稍小作稍稍、廣韻引作稍小、與此合、下總本、浸作侵、與原書合、按、說文、有侵無浸、史記孝武本紀、文選上林賦、風賦、浸淫字皆作侵淫、知侵卽俗浸字、連下字變人從水也、古書或借𣹟爲侵淫之侵、因謂浸淫之浸、卽說文𣹟字之省、非是、原書無故字從虫食五字、按、說文、蝕从虫人食、然則作蝕隷省耳、此云字從虫食者、非古義、是五字恐非劉熙原文、

雜載

有白虹、分立東西、仍下陰陽寮令占之、

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年〇延應元年十月廿日丙辰、午剋陰陽師廣經參御所、今日巳剋、日有兩珥之由申之、作進繪圖、兵庫頭爲申次持參御前云云、廿一日丁巳、昨日廣經注進變異事、被問司天輩、維範朝臣申云、暈虹若日月蝕之時、於令出現者、以其次可勘申也、以珥計及奏聞事、於京都未覺悟之云云、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十二月十六日丙寅、辰剋日南北西有珥、六尺去之皆在西、色靑赤白之由、司天等申之云云、

〔萬寶鄙事記 六 占天氣〕日〇中略日に耳あるに、南にあるは晴、北にあるは雨、兩方に耳ある時は雨なし、又耳ながくして下へたるゝは久しく晴なり、〇中略朝日に珥あるは狂風ふく、夕日に耳ある時は明る日雨、

〔古事記 上〕此八千矛神、將婚高志國之沼河比賣幸行之時、〇中略沼河日賣未開戶、自內歌曰、〇中略阿遠夜麻邇、比賀迦久良婆、奴婆多麻能、用波伊傳那牟、阿佐比能、惠美佐迦延岐氏、〇下略

〔日本書紀 三 神武〕戊午年四月甲辰、皇師勒兵、〇中略欲東踰膽駒山而入中洲、時長髓彥聞之曰、夫天神子等、所以來者、必將奪我國、則盡起屬兵、徼之於孔舍衞坂、與之會戰、有流矢中五瀨命肱脛、皇師不能進戰、天皇憂之、乃運神策於沖衿曰、今我是日神子孫、而向日征虜、此逆天道也、不若退還示弱、禮祭神祇、背負日神之威、隨影壓躡、如此則曾不血刃、虜必自敗矣、僉曰然、於是令軍中曰、且停勿復進、乃引軍還、

〔古事記 下 雄略〕初大后坐日下之時、自日下之直越道、幸行河內、〇中略於是若日下部王、令奏天皇、背日幸行之事甚恐、故己直參上而仕奉、

〔萬葉集 十 夏相聞〕寄日

六月之、地副割而、照日爾毛、吾袖將乾哉、於君不相四手、

〔枕草子 一〕日は　入日、いりはてぬる山際に、光りの猶とまりてあかう見ゆるに、うすきばみたる

暈ト云モノ、乃交暈歟ト、此コト予〇松浦清ハ知ヲザリシガ、予ガ邸内ニモ観シ者多シ、其始メハ五ツ半頃、天色朦朧タル中、日光コモリテ見ユ、其傍ニ餘程ヘダヽリテ、又日光ノ如ク小キ光ノコモリタル見ヘシガ、四ツ前頃、又朦朧ノ中光明ハナケレドモ、日象隠翳ヲ隔テヨク見ユ、其少シ傍ニ下リテ、月輪ノ如キモノ亦掩中ニ見ユ、夫ヨリ九ツ半頃、暈至大ニシテ二ツ、上下ニ輪違ノ如クアリケル、日輪ハ何クニ在ケン心ツカザリシト、八ツ半頃、日輪赫々ト耀キ、餘ホドワキニ白キ暈、殊ニ大キク見エシト、カヽレバ朝ヨリ晝ヲ過ルマデ、次第ニ其象ヲ變ゼシナルベシ、

〔萬寶部事記六占天氣〕暈かさ　日のかさは雨、夕日のかさも雨、又朝日にかさありて、やうやくきゆるときは晴、　日のかさ青赤は大風、赤きは旱、白は風雨、黒きは大水、紫は大旱、

〔續日本紀三十七桓武〕延暦元年十一月辛卯、有光挾日、其形圓而色似虹、日上復有光向日、長可二丈、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年閏十二月己亥、日抱翼、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十一月卅日乙丑、日上有冠、左右成珥、色黃白、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年二月十七日辛未、日有冠纓、宿奎、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年七月廿六日庚寅、申時日右有珥、上下有白雲、日即宿翼、　廿七日辛卯、申時日左右有珥、其下雲氣、形如龍馬、　八年正月廿三日乙酉、日有冠、右有珥、色黃、左有白虹向日、是名日抱、　廿四日丙戌、自辰至巳、日有冠、左右有珥、色白、即日宿危、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年正月廿八日戊申、申時日右有珥、　二月五日乙卯、是日辰時、日上有冠、左右成珥、　十四日甲子、辰時日有冠纓、其色黃白、日即宿奎、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年七月五日甲子、巳二剋日無暉、其形似月、時人無不奇怪、

〔扶桑略記二十四醍醐〕延長六年二月十一日、巳時白珥抱日、

〔日本紀略四村上〕康保二年二月廿七日•戊辰、出羽國言上、正月八日未時、日之左右有兩耀、即虹貫之、又

在望之前後上下弦內、晦朔則無暈矣、然欲風雨月方暈、其雲氣而光所射以爲暈也、故暈氣漸稠而黑者雨徵也、有忽然去一邊者、全去者晴徵也、然有見與不見之地、

〔續日本紀 八 元正〕養老五年二月癸巳、日暈如白虹貫、暈南北有珥、因召見左右大辨及八省卿等於殿前、詔曰、朕德菲薄、導民不明、夙興以求、夜寐以思、身居紫宮、心在黔首、無委卿等、何化天下、國家之事、有益萬機、必可奏聞、如有不納、重爲極諫、汝無面從退有後言、

〔三代實錄 二十四 清和〕貞觀十五年十月廿日辛亥、時加辰、日重暈、左右有珥、其下雲氣如龍、

〔三代實錄 二十五 清和〕貞觀十六年四月七日乙未、時加未、日有重暈、白虹貫日、卽日在胃、天文書曰、日月暈氣者、三日以內有陰雨、則其災消而不成、　八日丙申、暴雨、然則可謂災消、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年正月廿一日乙巳、是日巳時日暈、　廿三日丁未、酉時日暈而有珥、

〔三代實錄 三十九 陽成〕元慶五年五月十六日癸亥、午時日有二重暈、內黑外赤、

〔本朝世紀〕久安三年四月廿日癸丑、今日巳剋日有暈、其色黑體、甚厚密也、

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年〇延應元年三月五日乙亥、京都去月十一日巳剋、有日暈變、密奏之輩、申狀不同之間、兩度召勘文之上、皆大藏卿爲長、淸大外記賴尙等及勘狀、其狀等今日到來、於御前師員朝臣讀申之、天文道忠尙、良元、季尙等朝臣申重暈之由、家氏申交暈之旨、晴繼申白虹貫日之由云云、大藏卿引後漢書文、假郞顗之詞、暈卽虹也、大略白虹旨委細勘之、大外記者、暈虹先例、本文勘進許也、　十五日乙酉、司天輩依召皆參、二月十一日天變事、被下京都勘文、各可申存知旨之由被仰出、維範、泰貞、晴賢等一同申重暈之由、師員朝臣申云、晴繼朝臣勘文載白虹之旨尤甘心、本文分明也云云、

〔吾妻鏡 五十〕文應二年〇弘長元年四月廿八日己未、天晴、入夜雨降、今日午剋暈見、其色青黃赤白也、

〔甲子夜話 五〕或人書ヲ贈テ曰、コノ正月〇文政五年廿一日巳剋頃太陽ニ暈アリ、五彩ヲ成シ、ソノ暈ハ輪違ノ如キ形ナリシトゾ、ヤガテ白虹出テ日ヲ貫シト云コト、大分觀シ者アリ、〇中略輪違ノ如キ

アリテ忽黑暗、毎戸燭ヲ秉ル、蓋黑暗ノ景甚ダスサマジク、常ニ異ナリシニ、又春初ヨリ出沒ノ日色如丹、外ニモ種々ノ異アリケレバ、仙峯院了堅(奥州安積郡日和田驛ノ修驗、則今ノ了堅ノ祖父也、)預メ荒飢ノ徵ナルコトヲ知リテ、兼テ其備アリテ、院内人多カリシカド、其愁ヒヲ免カレタリシト、其子了天法印語リキ、又天保八酉四月十二日、士由發二本松縣城、行福島治下、到鄕目村、日既晡後、時見西山落日、赤如血、蓋光彩未失矣、又翌十三日在同治下、赤見落暉、則赤如丹、失光似銅矣、又同十四日、尙在同治下、夙起望東方、煙嵐頗深、群峯連岳皆沒、不見些子之日光、然東方天、煙嵐悉赭然如赤幔、而到日暮赤復然、雖親不見其日、其色赤果可知耳、(予客中日錄)

日暈

〔倭名類聚抄一景宿〕暈　郭知玄切韻云、暈氣繞日月也、音運、(此間云、日月加左、)辨色立成云、月院也、

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕新撰字鏡、暈訓比乃加佐者即是、按暈、毛詩傳訓日氣也、日氣者、謂日出有温氣也、昌住誤會日氣、爲日旁氣、故訓比乃加佐也、凡新撰字鏡所訓不允當、多此類、今引之者、以證源君所訓倭名耳、至其所訓當否、予別有書、故下條引之、不一々煩論、賀佐、又見夫木集、按、賀佐、笠也、言日月之有暈、猶人戴笠之狀也、月院之名未聞、(中略)○郭知玄拾遺緒正陸法言切韻、更以朱箋三百字、見廣韻卷首、見在書目錄云、切韻五卷、郭知玄撰、今無傳本、釋名暈捲也、氣在外捲結之也、日月俱然、卽此義、按說文無暈字、有暉字、又有煇字、並訓光也、轉注爲日旁氣、周禮眡祲掌十煇之法、鄭司農曰、煇謂日光氣也、漢書天文志注、如淳曰、暈讀曰運、呂氏春秋明理篇、有煇珥、注、煇讀爲君國子民之君、氣圍繞日、周匝有似軍營相圍守、故曰煇也、後人或變作暈、以別煇光字也、

〔類聚名義抄日二〕暈(音運、日月ノカサ、)

〔和漢三才圖會天象三〕暈(音運、かさ、和名加佐)　按、暈日月傍氣也、有輪光而如笠、將風雨時生暈、如月暈內無星則雨、有星不雨、万寶全書云、日生暈有雨、月生暈主風、更看何方缺、風從缺方來、　天文書云、暈乃空中之氣、直逼日月之光、圍抱成環、有缺者、圍者、抱者、背者、厚者、薄者、皆是氣所注射也、月暈者必在中天、必

又煩國領之由依聞食、宜令停止之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年四月廿二日癸卯、天晴、申剋日色赤如蝕、廿三日甲辰、今日自午剋二點至酉剋三點、如日色蝕、將軍家〇藤原頼經大被驚思食、召司天之輩、出御寢所車御壺、直有御尋、泰貞、晴賢、廣經、晴貞、資俊等朝臣申云、雖非普通、雲霞引掩去時、傾西山日之色赤如此、强不可處變異、但旱魃兆歟云云、宣賢申云、何年無春、何春無霞、若被映霞、霞者年々可有此變歟、則建久被定薄蝕之間、被栽仁王會咒願文云云、同夜丑剋月光黃色也云云、廿四日乙巳、昨日日光事、親職朝臣令奉薄蝕勘文、非天變之由申輩多之、五月十九日己巳、定員自京都歸參、去月廿二三四日間、日色事、洛中怪之、廿三日、日色赤、依有石淸水行幸、無其沙汰、翌日天文道季尙、其光、業經、天變之旨、令奏聞之由於御前申、廿九日己卯、去月廿三日、日月共赤黃事、陰陽頭惟範朝臣薄蝕之由、自京都申之、宣賢申狀符合之、仍爲主計頭師員朝臣奉行、可勤仕日曜祭之由被仰、此外無御祈、將又季尙朝臣申云、被映霞日色赤黃定習也、且建久資元晴光等雖申薄蝕之由、季弘朝臣更非變之旨申之、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元三年三月五日庚子、酉始許、日無光芒云々、或依紅霞引覆如此云々、或薄色歟云云、

〔花徑樵話二天〕日色如血

鈴木寄松通稱米屋平、大坂ノ人、□ガ征途隨筆卷之七ニ云、四月十二日天保四癸巳年此ヒト日二日空ノ氣色常ナラズ、曇ルニモアラズ霽ルヽニモアラズ、終日朦朧トシテ蝕スルゴトク、夜ハ月色光彩ナク、恰モ臙脂ヲソヽグニ似タリ、今朝トク麴町ニユク事アリテ、日比谷門外ヲ過グ、朝暉應ニ昇ントシテ赫々タリ、顧ルニ日輪朱ヲ施スガ如ク、シカモ光芒ノ目ヲ射ルナシ、其異ナル、人ミナアヤシム、或ハコレヲ天變トイフ、其然ルヤ否ヲ、シラズトアリ、士由〇大屋云、此レ東武ニテノコトナリ、果シテ此年奥羽米穀不登ニシテ、其荒關八州、甲、信、諸越ニ及ブ、嘗聞天明三癸卯年正月元日、皆既ノ日食

〔三代實錄 十二 清和〕貞觀八年閏三月十五日庚申、日出之時、營頭出、室入紫微宮、色赤黃、

〔三代實錄 二十二 清和〕貞觀十四年九月十六日癸未、日赤無光、月宿亢氐、

〔三代實錄 二十五 清和〕貞觀十六年四月十八日丙申、申時日赤無光、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年六月三日甲寅、日少光、星月並晝見、

〔三代實錄 二十八 清和〕貞觀十八年正月三日辛巳、日色變赤、西京三條、降霧陰蒙、往還之人、不辨其形、須臾開霽、日色復常、

〔三代實錄 四十七 光孝〕仁和元年正月十六日壬申、是日自未至申、日上有氣向外、其體如張弓、長二丈許、五月廿二日丙午、酉時日色變黑、光散如射、

〔日本紀略 一 醍醐〕昌泰元年四月十九日戊午、日色黃而無光、一剋之後、其色如血、只無光耀、遂沒西山、日在畢度、

〔扶桑略記 二十四 醍醐 裏書〕延喜十九年七月五日庚午、酉剋日色赤黑、其光不明、
延長八年五月廿四日丁亥、如虹色繞日、

〔扶桑略記 二十六 村上〕天德四年十一月十七日癸丑、日自辰初薄蝕、色赤而無光、至午四剋復、

〔日本紀略 六 圓融〕貞元元年六月四日己亥、辰剋日廻動、變色數度、

〔小右記〕寬弘二年二月十八日丙申、去十六日、日欲入之間、其色如火、月出間、其色相同、乍驚問遣奉平宿禰、云、雲陰掩所見也者、昨日、日又如一昨、今日又同、仍重問奉平宿禰、答云、連日連夜有此事、誠可爲變、明日可上奏者、

〔扶桑略記 三十 白河〕應德二年四月廿三日、申時薄蝕、日色如血、无光入山、　三年正月十三日戊申、申剋日色赤如朱、全以无光氣矣、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年三月十六日丁丑、巳剋自若宮令還給、而朝日無光、偏如蝕、是敢非煙霞之掩映、

共生日神、號大日孁貴、（大日孁貴、此云於保比屢咩能武智、孁音力丁反、一書云、天照大神、一書云、天照大日孁尊、）此子光華明彩、照徹於六合之内、故二神喜曰、吾息雖多、未有若此靈異之兒、不宜久留此國、自當早送于天、而授以天上之事、是時天地相去未遠、故以天柱擧於天上也、

日重出

〔扶桑略記　二十三醍醐裏書〕昌泰四年（○延喜元年）二月一日甲寅、辰剋日三出、虹各日纒廻三剋、微々散失、可謂奇異、

〔日本紀略　三村上〕天曆二年六月七日甲申、是日、日二見、

〔百練抄　四一條〕永祚元年八月三日、酉時日三面雙出、卽以混合、凡近日怪異多、

〔百練抄　八高倉〕承安二年六月十六日、或記云、今日申剋、兩日出現之由、有閭巷說、但司天之輩不見之由申之、

〔吾妻鏡　十七〕建仁二年正月廿八日甲戌、辰一點朝日見兩輪、

日光呈異狀

〔日本後紀　十三桓武〕大同元年三月丙戌、日赤無光、兵庫夜鳴、是夜月蝕之、　丁亥、是日日赤無光、

〔日本紀略　淳和〕天長元年二月丙戌、巳時日無光、輪暈、兩傍小有光、宛似虹薄雲承之、東西延曼、亦如引數、

〔續日本後紀　十仁明〕承和八年四月癸卯、日色赤如血、須臾復常、

〔續日本後紀　十三仁明〕承和十年五月己丑朔、日赤无光、終日不復、非雲非霧、黑氣亘天、至于午後、時々日見、其色黃赤、　辛卯、令神祇官陰陽寮解謝之、是日午剋、日色明潔也、　丙申、爲鎭内裏物怪幷日異、屈百法師、限三箇日、讀藥師經於淸涼殿、修藥師法於常寧殿、轉大般若經於大極殿、諸司酯食、兼禁殺生、

〔文德實錄　三〕仁壽元年十月甲戌、自旦日無精光、日中有黑點、大如李子、

〔三代實錄　七淸和〕貞觀五年二月十九日壬子、自十六日至十八日、日初昇、白無光、月初出、赤如丹、今日並復舊、　八月十一日辛未、晨日無光、　十二日壬申、晨日無光、小選復本、

は上古の自語なれば、日の訓をかりて、火をひといふなるべし、ひるといふことばは、日より出たり、日は母語也、ひるは子語也、子語を以母語をとくべからず、

〔東雅一天文〕日ヒ　ヒとは靈(ヒ)也、上古の時、凡そ物の靈なるを稱してヒといふ、されば後に漢字を借用ひられしにも、靈の字を讀て、ヒとは云ひしなり、舊事紀には產靈の字讀てムスビとせられしを、古事記には產巢日としるして、讀てムスビとせしが如き、卽是日といふは、靈の義なるが故也、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひ　日をいふは、明らかにましますを、自然にかくいひ初めし語なり、日出の大さ富士山の如く、寅時より深紅なるは、土佐南海の曉望、志州鳥羽の漂船の視し所も、同じ大きく見ゆるは、地水の陰氣を含める故なり、出る時は遠し、地より十七萬里、日中は近し、地より十五萬六千五百里なりといへり、

〔八雲御抄三上天象〕日　あまひこ異名也　あかねさす万葉には、わかれさす日とよめり、　うちひさすみやちとつづけたり　又あまつたふ　又わたる春日ともいへり万、度とかけり、　たかてらす是は帝御事也、但寄日可詠也、　但朝日かげにほへる山　あさつくひ　夕つくひ　あさ日　ゆう日　春日　なが　入

〔古事記上〕於是詔之、此地者向韓國、眞來通笠沙之御前而、朝日之直刺國、夕日之日照國也、〇下略

〔曆林問答集上〕釋日第三

或問、日何也、　答曰、定象紀云、日大陽之精也、又五經通義曰、陽以一起、故日行一度、陽成於三、故中有三足烏、又云、日火精陽炁也、外熱內陰、象烏之累也、白虎通云、日徑千里、周三千里、下於天七千里、日一南萬物死、日一北萬物生、故夏陽盛而陰衰、故晝長夜短、冬陰盛而陽衰、故晝短夜長、日行陽道長、出入卯酉之北、行陰道短、出入卯酉之南、春秋陰陽等、故行中道、晝夜等也、漢書天文志云、日君之象也、君行急則日行疾、君行緩則日行遲、是以觀乎天文、以察乎時變、

〔日本書紀神代一〕伊弉諾尊、伊弉冉尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是

具在首、亦與此同、又按、日月風人子顔目口毛身鳥皆不載倭名、蓋是諸名、衆人所明知、無可疑、故從略也、

〔段注説文解字 七上〕日 實也、以疊韵爲訓、月令正義引春秋元命包云、日之爲言實也、釋名曰、日實也、光明盛實也、大昜之精不虧、故曰實 从○一象形、○象其輪郭、一象其中不虧、人質切、十二部、凡日之屬、皆从日、㘥古文象形、蓋象中有烏、武后乃竟作囗、誤矣、

〔倭名類聚抄 一景宿〕陽烏 歴天記云、日中有三足烏、赤色、今按、文選謂之陽烏、日本紀謂之頭八咫烏、田氏私記云、夜太加良須、

〔箋注倭名類聚抄 一景宿〕歴天記無攷、按、徐堅初學記、及文選蜀都賦李善注、並引春秋元命苞曰、日中有三足烏、歐陽詢藝文類聚、引五經通義曰、日中有三足烏、王充論衡説日篇、儒者曰、日中有三足烏、淮南子精神訓、日中有踆烏、高誘注、謂三足烏、大荒東經、湯谷上有扶木、一日方至、一日方出、皆載于烏、郭璞注、中有三足烏、皆其事也、○中略 按、頭八咫烏者、天照大神爲神武帝遣以爲鄕導之神烏也、古事記所載同、源君以爲日中烏者誤矣、又按、夜太加良須、彌尺烏之義、謂大烏也、

〔類聚名義抄 二日〕日 人一反、ヒ、ヒル、 旭 許玉反、アサヒ、アシタ 晷 香軌、ヒカケ 〔同 七雨〕雫 アマツヒ

〔撮壤集 上天象〕日 陽烏(ヤウウ) 和名類聚 金鴉(キンア) 火精(クワセイ) 日尾(ジツビ)

〔和爾雅 一天文〕日(ヒ) 大陽之精 曜靈 日也、出楚辭、火精(クハセイ) 日也 旭(アサヒ) 朝日也、又日暾、昕竝同、旰(ユフヒ) 夕日也、又曛陽同、晛(ヒノケ) 日氣也、出詩經、日影(ヒカケ) 晷(ヒカゲ) 日陰(ヒカゲ) 與日影不同 景(ヒノヒカリ) 日光也 昐(ヒノヒカリ) 日光也、曨暁竝同、白駒(ハクク) 日影也、出莊子、日升(ヒイヅル) 日出也、出詩經、日遷(ウツル) 淮南子云、日至西南曰小遷、日西曰大遷、日傾(カタフク) 昃同 日曛(クル) 照(テラス) 明所燭也、俗作炤、日(シナ) 映(テル) 出蘇黄韻草 返照(カヘリテラス) 日將西落、光返照東也、反景(ハンケイ) 返照也 扶桑(フサウ) 日所出也、又云暘谷、咸池(カンチ) 日入處也

〔壒囊抄 九〕日中有烏ト云如何、同長短、 五經通義云、陽以一起、故日行一度、陽成於三、中有三足烏、又云、日火精陽氣也、外熱内陰、象烏黒也、

〔日本釋名 上天象〕日 天地はじめてひらけし時より、すでに日あり、是自然の語なるべし、或説日は火の精なるゆへに名づく、又ひるとと云説あり、日にあたりて物ひるなり、此等の説用ひがたし、日

名稱

月蝕ハ、十四、十五、十六ノ三日間ニ生ズルヲ以テ常トス、而ルニ史ニ、六日、十九日等ニ日蝕アリ、九日、二十一日、二十二日、二十五日等ニ月蝕アルガ如ク記セシハ誤ナルベシ、抑モ日蝕ノ事ヲ記セルハ、推古天皇三十六年ノ紀ヲ以テ始見トス、蝕ハ陰陽寮ニテ暦博士暦法ニ據リテ日時及ビ蝕ノ限度等ヲ推歩シ、中務省ニ申シ、省ハ太政官ニ申ス、官奏聞シ訖テ諸司ニ告知ス、當日天皇事ヲ視ズ、百官廢務ス、正月元日、十一月朔旦冬至等ニ日蝕アレバ、賀節ノ禮ヲ行ハザルコトアリ、中古以來、宿曜道ノ輩、亦勘文ヲ進ルニ及ビ、暦家ノ奏ト牴牾スルコトアリ、當時僧侶ニ命ジテ、修法讀經セシメ、若シ蝕正現セザレバ修法ノ驗トセリ、蝕ノ間ハ薦席ヲ以テ御所等ヲ覆ヒ、又臣庶モ他行等ヲ爲サズシテ戒愼セリ、而シテ月蝕ノ事ハ月篇ニ載ス、

〔新撰字鏡〕日　暑（泥滑反、日影也、日光顯於水陸也、加介、）　暉暈輝煇（四形同、虚歸、吁飛二反、平光也、猶光明也、氏比須、）　曜耀（同、弋羊反、去照也、光明也、曜也、豆久己毛利、又加久須、又氏比須、）　旭（許玉反、旦日欲出也、日乃氏留、又阿加止支、）

〔倭名類聚抄一景宿〕日　造天地經云、佛令寶應（○應下恐脱聲字）菩薩造日、

〔箋注倭名類聚抄一景宿〕造天地經一卷、見開元釋敎錄、不著譯人名、今無傳本、杜臺卿玉燭寶典引作寶應聲菩薩、吉祥菩薩、棟七寶造日月星辰、又瑜伽論倫法師記引天地經云、安養國寶應聲菩薩作日城、寶吉祥菩薩作月城、道綽安樂集引須彌四域經云、阿彌陀佛遣二菩薩、一名寶應聲、二名寶吉祥、此二菩薩共相籌議、向第七梵天上、取其七寶來至此界、造日月星辰廿八宿、以照天下、寶池房證眞文句私記引十一面經疏云、天地本起經云、阿彌陀佛遣應聲吉祥二菩薩爲日月、皆其事、並與此所引少異、各本脱聲字、今依上文所引諸書增、按言日月之起原、宜引古事記、日本書紀、證其字形音義、當引說文釋名、說文、日實也、大陽之精、不闕、从〇一、象形、月闕也、大陰之精、象形、釋名、日實也、光明盛實也、月闕也、滿則闕也、源君不引是等書、引梵典、可以見當時所好尚也、調度部以佛塔伽藍僧房

艮　巽　坤　乾

方角もとより各別也、されば或四方四角とも、或四方四維とも、或四方四隅とも云、方角すでに各別也何ぞ混亂して、やすみといはんや、是に依て其釋理に不叶なり、

〔伊呂波字類抄方角字〕艮(ウシトラ)

〔夫木和歌抄艮十九〕六帖題稜　光俊朝臣

百敷や大内山のうしとらに織部の司あやたてまつる

〔類聚名義抄四九〕巽(タツミ)

〔古今和歌集雜十八〕題しらず　きせん法し

わが庵は都のたつみ忘かぞすむよをうぢ山と人はいふなり

〔類聚名義抄十六土〕坤(口魂反、ヒツジサル、)〔同七西〕西南(ヒツジサルノスミ)

〔夫木和歌抄坤十九〕家集未申と云事を　惠慶法師

みちのくの白河こえて別にしひつじさる〳〵行どはるけし

〔伊呂波字類抄方角伊〕乾(イヌキ、亦作乾、)

〔夫木和歌抄乾十九〕六帖題　衣笠内大臣

はるかなる都のいぬゐわが宿は大内山のふもとなりけり

日

日蝕 併入

日ハ、ヒト云フ、卽チ太陽ナリ、上世ノ人ハ殊ニ日ヲ尊崇スルノ風アリ、又日重出シ、或ハ日光ノ異狀ヲ呈スル等ヲ以テ變異ノ事トセリ、

日月ノ蝕スルヲ、ハエト云フ、後世字音ヲ以テ稱ス、凡ソ日蝕ハ、月ノ朔、二、三ノ三日間ニ生ジ、

〔日本紀神代抄一〕第一三才開始事

南ハ午時ニハ日光高シテ、森羅万象皆ミユルト云義ニテ訓ズ、

〔日本書紀二十六齊明〕七年、伊吉連博得書云、辛酉年(齊明七年)正月二十五日還到越州、四月一日從越州上路東歸、七日到檉岸山明、

〔萬葉集十八〕敎喩史生尾張少咋歌一首井短歌〇中略
於保奈牟知、須久奈比古奈野、神代欲里、〇中略南吹、雪消益而、射水河、流水沫能、余留弊奈美、左夫流其兒爾、〇中略

右五月十五日、守大伴宿禰家持作之、〇天平感寶元年〇中略

〔夫木和歌抄南十九〕建久七年詣百廿八首　定家卿

たちのぼるみなみのはてに雲はあれどてる日くまなき北のおほ空

北

〔類聚名義抄五〕北補獸キタ

〔日本紀神代抄一〕第一三才開始事

北ハキタル心也、北ヨリ一陽生キタル故ニ、如此訓也、

〔萬葉集二挽歌〕天皇崩之時、太后御作歌一首、〇天武〇持統〇中略
向南山、陣雲之、靑雲之、星離去、月牟離而、

〔夫木和歌抄北十九〕朗詠百首窓梅北面雪封寒　爲家卿

日かげみぬかた枝は雪にとぢながらかつ〴〵にほふまどの梅がへ

四角

〔運歩色葉集末〕四角艮巽坤乾

〔書言字考節用集十數量〕四隅又云四維、艮巽坤乾、

〔和漢名數天文〕四維維角也、四角也、是所謂方隅也、　艮東北　巽東南　乾西北　坤西南

〔萬葉集抄一〕先達多以耶須彌志流は、帝は八方をしろしめす義たるの由釋之、其義しからず、〇中略

西

〔日本書紀〈三神武〉〕神日本磐余彥天皇、〈○中略〉謂諸兄及子等曰、〈○中略〉聞於鹽土老翁曰、東有美地、靑山四周、

〔古事記〈中崇神〉〕此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴〈自麻下五字以音〉人等、

〔古事記傳〈二十三〉〕東方は比牟加志能加多と訓べし、〈方を、師〈加茂眞淵〉の借と訓れたれど、かゝる處にては、借はわろし、〉古は凡東南西北、みな加多と云ことを多く添て云る例なり、

〔萬葉集〈一雜歌〉〕輕皇子宿于安騎野時、柿本朝臣人麻呂作歌、

東、野炎、立所見而、反見爲者、月西渡、

〔夫木和歌抄〈十九東〉〕五行歌中　後京極攝政

月も日もまづ出そむる方なればあさゆふ人のうちながめつゝ

〔類聚名義抄〈一〉〕西〈ニシ〉

〔日本紀神代抄〈一〉〕第一三才開始事

西ハイニシト云心也、日沈テ去ルホドニ、如此訓ズ、

〔萬葉集〈十三挽歌〉〕百小竹之、三野王、金廐、立而飼駒、角廐、立而飼駒、〈○下略〉

〔古今和歌集〈五秋〉〕貞觀の御時、綾綺殿のまへにむめの木ありけり、にしのかたにさせりける枝の、もみぢはじめたりけるを、うへにさぶらふ男どものよみけるついでによめる、　藤原かちおむ

おなじえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

〔夫木和歌抄〈十九西〉〕五行歌中　後京極攝政

秋風も入日の空もかねの音もあはれはにしにかぎる也けり

南

〔類聚名義抄〈一十七〉〕南〈音男ミナミ〉　〔同〈九隹〉〕離〈音籬ミナ〉

四方

東

山陰道（曾止毛乃道、舊說、加介止毛乃道、）　山陽道（加介止毛乃道、舊說、曾止毛乃道、）

〔萬葉集一雜歌〕藤原宮（○持統）御井歌

八隅知之、和期大王、（略○中）日本乃、青香具山者、日經乃、大御門爾、春山跡、之美佐備立有、畝火乃、此美豆山者、日緯能、大御門爾、彌豆山跡、山佐備伊座、耳爲之、青菅山者、背友乃大御門爾、宜名倍、神佐備立有、名細、吉野乃山者、影友乃、大御門從、雲居爾曾、遠久有家留、（略○下）

〔萬葉集二相聞〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌、

八隅知之、吾大王乃、所聞見爲、背友乃國之、眞木立、不破山越而、狛劔、和射見我原乃、行宮爾、安母理座而、天下、治賜（一云拂賜而）、食國乎、定賜等、（略○下）

〔加茂保憲女集〕かげともに見えたる月をうき雲のかくせどこ（○かくせど、原作せこ、據一本改、）ふくるみにぞありける

〔運歩色葉集（志）〕四方（東西南北）

〔書言字考節用集（十數量）〕四極（四方、四邊、四陲並同、東西南北、）

〔和漢名數（天文）〕四方　東（震左卯）　西（兌右酉）　南（離前午）　北（坎後子）

〔類聚名義抄（三木）〕東（都公反、ヒムカシ）

〔段注說文解字（六上東）〕東動也、（見漢律曆志）從木、官溥說、從日在木中、（木、榑木也、日在木中曰東、在木上曰杲、在木下曰杳、得紅切、九部、）凡東之屬、皆從東、

〔日本紀神代抄（一）〕第一三才開始事

東ハ日ノ出ルホドニ如此訓、或云、ヒガシ、日ガアカシト云和語ゾ、

〔古事記傳（三十五）〕比牟加斯、爾斯と云は、もと其方より吹風の名にて、比牟加斯は東風、爾斯は西風のことなりしが、轉て其吹方の名とはなれるなるべし、

コシとよむべし、（万葉集十八巻、大伴池主宿禰の歌に、多多佐にも與古佐も云々とみえ、雄略紀なる城方九尋の方字を、タヽサヨコサと訓み、類聚名義抄に、縦字タヽシ、またタヽサマ、横字をヨコサマ、またヨコシマなどよみたれば、ヒタヽシ、ヒヨコシとよまむもわろからじ、さてその多都志、與古之、また多々佐、與己佐などいへる、之また佐は、サマといふとも聞じほどの書づかひと聞ゆ、）和名抄（大路の條）に、唐韻云、道路南北曰阡、（日本紀私記云、多都之乃美知、通本多知之乃美知と作り、いま古本に據る、成務紀印本には、タヽサノミチ、またタタシノミチとよめり、）東西曰陌（日本紀私記云、與古之乃美知、成務紀印本には、ヨコサノミチとよめり、）と見えたるは、道路の縦横にて、四面の方位につきて云ふ多都志、與古志とは別なり、思ひ混ふべからず、然るに成務紀（五年九月の條）に、令諸國云々、則隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里、因以東西為日縦、南北為日横、山陽曰影面、山陰曰背面と記されたるは、此時始て、日縦日横などいふ四名を設けて、諸國の方位を定たまへるがごとくきこゆれど、それより前代の此詔詞に、日縦日横、陰面背面乃諸國とみえたれば、いと上古よりおほらかに稱び來れる四面の名なりけるを、その名によりて、更に國縣を分定給ひたりし趣なり、然るに其を東西南北、山陽山陰に當て、「曰云々」と記されたるは、漢文の潤飾にひかれて、かへりて當時の名稱の實に差いできて、きこえがたき文とはなれるなり、（山陽は、春秋穀梁傳に、山南爲陽、六書故に、山阜之南向日謂之陽、山陰は説文に、陰山北也、注に、水南山北、日所不及也など云へるごとき義の漢語なるべし、天武紀に、山陽道、山陰道、また東海、東山、山陽、山陰、南海、筑紫とみえたるは、天智天皇の御世に始給へる漢様の令制の名稱なるを、古にめぐらして、おほかたに當て、漢文にものせられたるなるべし、此ほかにも然る例多かり、）さてまた此詔詞に、日竪、日横、陰面、背面乃諸國人乎と詔へるは、天下の諸國の人をと詔へる義にて、いとめでたき古文なり、

〔日本書紀　成務七〕五年九月、令諸國以國郡立造長、縣邑置稻置、並賜楯矛以為表、則隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里、因以東西為日縦（ヒタヽシ）、南北為日横（ヒヨコシ）、山陽曰影面（カゲトモ）、山陰曰背面（ソトモ）、是以百姓安居、天下無事焉、

〔袖中抄　十九〕そとも　顯昭云、そともとはうしろと云事也、考日本紀公望注云、陽（ミナミ）南、影面、かげとも、陰（キタ）北、背面、そとも、案之、南は日の影のおもて、北はそむけるおもてといふ歟、

〔北山抄　三〕讀奏事

〔高橋氏文考註〕日竪、日横、陰面、背面は、東南西北の四面の名を、おほらかに稱へる古語なり、其は万葉集一卷、作者未詳、藤原宮御井歌に、〇中略云々みえたり、今その大和の國圖によりて、國人に質問し、その方位を尋考るに、おほかた香山は東ざまの日縱の御門に向ひ、畝火山は南ざまの日緯の御門に向ひ、耳梨山は北ざまの背友御門に向へる由にて、吉野山は大宮よりは南に當れゝど、名ぐはしき大山にて、西ざまの影友の御門より、斜に遙に見えたるべければ、宮所より、大凡五里ばかり隔たれり、四面の御門より見渡しのめでたき山々をよめる中に配りて、おほらかによみかなへたるものとぞきこえたる、西ざまの見わたしにめでたき山はあらずとぞ、さてまた此歌調に、香山は、大御門闕云々と繁みさび立りといひ、畝火の山は、大御門闕云々と山さびいましといひ、耳梨山は大御門闕云々神さび立りと同じ趣にいひて、吉野山をば大御門従雲井にぞ遠くありける、と、別ざまにいへるにも意をつけあぢはふべし、さて其四面の名を、然云ふ由は、まづ朝日の立昇りて、漸に南ざまにおよぶまでの間を、日縱と云ひ、南ざまより、西ざまに漸に降ち行く間を日横と云ひ、夕日の降ち陰ろふ西ざまより、北ざまにおよぶ間を陰面といふ、陰つ面の約れるなるべし、加茂保憲女集に、かげともに見えたる月をうきくもの、かくせどふくる身にぞありける、これ闇のかたを、陰面といへり、北ざまより東ざまの間を外面といふ、いはゆる日横の亘の南ざまに向ひて、背つ面といふが約れるなるべし、万葉集二卷人麿の歌に、八隅知之、吾大王乃、所聞見為、背友乃國之、眞木立、不破山越而、狛劔、和射見原乃、行宮爾とよめるは、美濃國にて、大和の方より北ざまに當れるをもて、背友乃國といへるなり、若狭は、北の極國なるが、その國の北海を受て、子丑の方に向ひたる高山を背面山と云ひ、海岸を後に外面と呼びきたれり、こは一所の名とはいへど、其名義同じ、さて謂ゆる日縱日横は、成務紀に見えたるを、此紀の全文は下に論ふべし養老私記この書いまだ本書を見ず、水戸家書紀校合御本の首書に注されたるに據る、に、日縱、比乃多都志、此は、谷川士清が書紀通證にも引り、さて縱字、尋常には、タテとよみ、口語にも然云へど、本語はタツにて、縱横など連れて、タテヨコと第四音に轉じても云ふなるべし、今時にも俗にはタツといふ人あり、和名抄に、釋名云、防壁以席縛著於壁也、漢語抄云、防壁、多豆古毛とあるし縱隔なるべし、日横、比乃與古志と見えたるは、古語なるべし、隨ふべし、但し書紀印本には、ヒタヽシ、ヒヨコシと體言によめり、今この万葉集なる歌詞は、かの私記の古語を體言に、ヒタツシ、ヒヨ

山是也、

〔釋日本紀(述義七)〕伊豫國風土記曰、伊豫郡自郡家以東北在天山、所名天山由者、倭在天加具山、自天天降時二分、而以片端者天降於倭國、以片端者天降於此土、因謂天山本也、

〔萬葉集(雜歌七)〕詠天
天海丹、雲之波立、月船、星之林丹、榜隠所見、

〔日本紀略(醍醐一)〕昌泰元年六月三日辛丑、無雲天晴、不知人面、時人見之、莫不奇怪、

〔萬寶部事記(占天氣六)〕天色黄なるは風、白くうすきは風雨、天氣卑く下りてくらきは、三日の内に雨ふる、西北赤くして氣きよきは明日大晴、朝白氣あるひは黒氣雲のごとくしてうるほひあるは雨、 天高く氣白きは、風雨すくなし、天低く氣くらきは、三日雨なり、

名稱

方角

方角トハ四方四角ノ稱ニシテ、四方ハ東、西、南、北ヲ云ヒ、四角ハ艮、巽、坤、乾ヲ云フ、

〔書言字考節用集(乾坤一)〕方角(四方四隅之謂)

〔拾芥抄(下末方角)〕五方 東木位 西金位 南火位 北水位 中央土位
八方 震(東) 巽(辰巳) 離(南) 坤(未申) 兌(西) 乾(戌亥) 坎(北) 艮(丑寅)

〔本朝月令(六月)〕朔日内膳司供忌火御飯事
高橋氏文云、挂畏卷向日代宮御宇大足彦忍代別天皇五十三年、○中略冬十月到于上總國安房浮島宮、爾時磐鹿六獦命從駕仕奉矣、○中略又此行事者、大伴立雙天應仕奉物止在止勅天、日竪、日横、陰面、背面乃諸國人乎割殺天、大伴部止號天、賜於磐鹿六獦命、

〔古事記傳十五〕天之八重多那雲、書紀に、且排分天八重雲とあり、出雲國造神賀詞に、天能八重雲乎押別氏、万葉二十七丁に、天雲之八重搔別而、一云、天雲之八重雲別而、十一二十八丁に、天雲之八重雲隱など見えたり、又二に、天雲之五百重之下、下とは裏な云、十に、白雲五百重などもあり、○中略伊都能知和岐知和岐氏、○中略書紀に、稜威之道別道別而、大祓詞に、天之八重雲乎、伊頭乃千別爾千別氏、天降依左志奉支、遷却祟神祝詞にもかくありまた天津神波、天磐門乎押披氏、天之八重雲乎、伊頭乃千別爾千別氏所聞食武ともあり、○中略天浮橋、○中略續後紀、興福寺僧等が長歌に、茜刺志天照國乃、日宮能聖之御子曾、瓠葛天能梯建、踐歩美、天降利坐志々とよめり、

〔神宮雜例集一〕始事
本記云、皇太神宮皇孫之命天降坐時爾、天牟羅雲命御前立天天降仕奉時爾、皇御孫命、天牟羅雲命乎召詔久、食國乃水波未熟、荒水爾在介利、故御祖命御許爾參上、此由申天來止詔、即天牟羅雲命參上天、○中略即受賜天持參下天獻時仁、皇御孫命詔天、從何道旨參上志止問給申久、大橋波須賣太神幷皇御孫命乃天降坐乎恐天、從小橋參上支止申時詔久、後仁毛恐仕奉事勇乎止志詔天、天牟羅雲命天二上命、後小橋命止三名賜也、

〔日本書紀神武三〕三十有一年四月乙酉朔、昔伊弉諾尊目此國曰、日本者浦安國、○中略及至饒速日命乘天磐船而翔行太虛也、睨是鄕而降之、故因目之曰虛空見日本國矣、

〔日本書紀神代二〕天稚彥之妻下照姬哭泣悲哀、聲達于天、是時天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彥已死、乃遣疾風舉尸致天、便造喪屋而殯之、○中略先是天稚彥在於葦原中國也、與味耜高彥根神友善、味耜此云婀膩須岐、故味耜高彥根神昇天弔喪時、此神容貌正類天稚彥平生之儀、故天稚彥親屬妻子皆謂、吾君猶在、則攀牽衣帶、且喜且慟、時味耜高彥根神忿然作色曰、朋友之道、理宜相弔、故不憚汙穢遠自起哀、何爲誤我於亡者、則拔其帶劍大葉刈、刈此云我里、亦名神戶劍、以斫仆喪屋、此即落而爲山、今在美濃國藍見川之上喪

弓、天之加久矢、射殺其雉、爾其矢自雉胸通而逆射上、逮坐天安河之河原天照大御神、高木神之御所、是高木神者、高御產巢日神之別名、故高木神、取其矢見者、血著其矢羽、於是高木神告之、此矢者、所賜天若日子之矢、卽示諸神等詔者、或天若日子不誤命、爲射惡神之矢之至者、不中天若日子、或有邪心者、天若日子、於是矢麻賀禮（此三字以音）云而、取其矢、自其矢穴衝返下者、中天若日子寢胡床（○胡床、一本作朝床）之高胸坂以死、

〔古事記傳十三〕矢穴は、下國より天上へ射徹たる孔なり、（古傳の趣をえしらず、かたくなゝる漢意におぼれて、なまさかしき人は、此矢穴を疑ひて、下國と天上との隔に、板などの如き物あるが如く聞えて、隔しとや思ふらむ、上の御誓段に、堅庭者於向股蹈那豆美と云ひ、又天之眞名井もあり、又畔離溝埋なども、皆天上のことなれば、矢の通り來たる穴も無くばあるべからず、若此穴を隔しとせば、かの堅庭も眞名井も畔も溝も、みな隔しからずや、されば延佳が當作天空と云る、天空こそなか〳〵に隔くこそなけれ、又師（阿部眞道）も此穴ないかゞとや思はれけむ、强て矢之美知と訓れき、道ならむには、いかでか穴とは書む、さばかり古の意をよく見明らめて、万世までの師と仰ぐべき人すらになほかゝれば、古へを知るはよく難きわざになむ、）

〔日本書紀神代一〕伊弉諾尊、伊弉冉尊、立於天浮橋之上、共計曰、（○下略）

〔釋日本紀五述義〕丹後國風土記曰、與謝郡郡家東北隅方、有速石里、此里之海有長大石、前長二千二百廿九丈、廣或所九丈以下、或所十丈以上廿丈以下、先名天梯立、後名久志濱、然云者、國生大神伊射奈藝命、天爲通行、而梯作立、故云天梯立、神御寢坐間仆伏、仍怪久志備坐、故云久志備濱、此中間云久志、自此東海云與謝海、西海云阿蘇海、是二面海雜魚貝等住、但蛤乏少、播磨國風土記曰、賀古郡益氣里有石橋、傳云、上古之時、此橋至天、八十人衆、上下往來、故曰八十橋、案之、天浮橋者、天橋立是也、

〔古事記上〕故爾詔天津日子番能邇邇藝命而、離天之石位、押分天之八重多那（此二字以音）雲而、伊都能知和岐知和岐氐、（自伊以下十字以音）於天浮橋、宇岐士摩理、蘇理多多斯氐、（自宇以下十一字亦以音）天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣、（自久以下六字以音）

空中有聲

雜載

豆ヲ雨ラス、寬文十年正月廿九日、大豆蕎麥ノ如キ者雨ル、大小五色アリ、享保十九年十二月五日、赤小豆ノ如キ者雨ル、皆空殼ナリ、其外保延三年草ヲ雨ラシ、慶長元年及慶安三年毛ヲ雨ラス、コレ等皆大風ニテ他國ヨリ吹キ來ル者ナリ、怪トナスニ足ラズ、事物紺珠書隱叢說ニ、古來天雨雜物ト云コトヲ詳ニ載ス、
增安永二年越後ノ高田ヘ小豆ノ雨リシコトアリ、今ソノ種ヲ傳ヘ栽ユル者アリ、小豆ニ似テ蔓生ナリ、○中略コレヘイハクアヅキニシテ、靖江縣志ノ蠶眼豆ナリ、又安永八年二月五日、丸藥ノ如キモノ降ル、天保五年ノコロ、京師ニハゼウルシノ實フル、

〔日本書紀二十九天武〕九年二月癸亥、如鼓音聞于東方、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十一月壬子、大隅國司言、從今月二十三日未時、至二十八日、空中有聲、如大鼓、野雉相驚、地大震動、　丙寅、遣使於大隅國、撿問、幷請問神命、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年五月丙午、西北空中有聲如雷、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年二月辛未、空中有聲如雷、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰元年十月十一日丁未、空中有聲、其鳴宛如地震、　十四日庚戌、空中有聲、一度如雷、　十一月十五日庚戌、空中有聲、　十二月十七日壬午、艮方有音如雷、

〔顯廣王記〕治承二年六月廿三日、卯時天有雷聲、如打大鼓、不分遠近、只同聲也、五音云々、

〔日本書紀一神代〕一書曰、○中略於是素戔嗚尊白日神曰、吾所以更昇來者、衆神處我以根國、今當就去、若不與姉相見、終不能忍離、故實以淸心復上來耳、今則奉覲已訖、當隨衆神之意、自此永歸根國矣、請姉照臨天國、

〔古事記上〕故爾鳴女自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命、爾天佐具賣、此三字以音聞此鳥言而、語天若日子言、此鳥者、其鳴音甚惡、故可射殺云進、卽天若日子、持天神所賜天之波士

得たるもの數根をみする、長サ五六寸より六七寸にて、白くして黃を帶たり、夫より歸り懸、牛込北おかち丁へ參り候間、みちすがら家來に爲拾候に、又數根を得たり、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年六月戊寅、夜、京中往々雨飯、

〔日本紀略七圓融〕天元二年四月廿一日己巳、備中國言上異物解文、去一日都宇郡撫河郷箕島村、形味如飯物降、人民食之、

〔日本紀略十一條〕長保元年三月七日庚申、太宰府進豐前國雨米一器、

〔百練抄六崇德〕保延四年三月十九日、雨穀、其形如胡麻、　六年三月十三日、自朝及夕大陽不現、非雲非霧、四方似烟、有如雨下者、其形似露、又如胡麻、

永治元年九月廿五日、京中不知名之物交風飛、其形如胡麻、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年二月一日乙丑、陰雨降、晚泥交雨降、希代怪異也、粗考舊記、垂仁天皇十五年丙午、星如雨降、聖武天皇御宇、天平十三年辛巳六月戊寅、日夜洛中飯下、同十四年壬午十一月、陸奥國丹雪降、光仁天皇御宇、寶龜七年丙辰九月廿日、石瓦如雨自天降、同八年、雨不降井水斷云云、此等變異、雖上古事時災也、而泥雨始降、於此時言語道斷不可說云云、

〔康富記〕嘉吉四年〇文安元年三月四日甲寅、時々雨下、是日洛中之男女皆申云、自虛空大豆小豆降云々、雨降時分交下云々、其體如大豆之形、但慥不大豆、非小豆歟、下女等拾取持來之間、見了所詮如木〇木一本作米之實也、何樣表豐年嘉瑞者哉、珍重、日本昔時代不知大麥自空中降下、又飯降事在之由、見類聚國史云々、漢家之例、周室王屋之上有火化烏、此烏牟麥銜來云々、后稷之時も、五穀之種自空降下歟云々、慥可引勘之、近江國飯降山と云名所在之、飯降之故歟、見類聚國史、本朝大麥降事、淸外史之所令語給也、聖武天皇天平十三年六月戊寅、日夜京中條々飯降之由、見水鏡了、

〔本草綱目啓蒙二十三香木〕月桂〇中略　凡ソ物ノ子ヲ雨ラスコト古今其例多シ、文安元年三月二日小

晝ノコトニテ、此度ノ如キ音シテ飛物シタルガ、八王子農家ノ畑ノ土ニ大ナル石ヲユリ込タリ、其質燒石ノ如シトテ、人々打碎テ玩ベリ、今度ノ碎片モ同ジ質ナリト見タリシ人云キ、昔星殞テ石トナリシ杯云コトハ、是等ノコトニモアルヤ、造化ノ所爲ハ意外ノコトナリ、前ニ云フ七八年前ノ飛物ハ、正シク予〇松浦清ガ中ノ者見タルガ、其大サ四尺ニモ過ギナン、赤キガ如ク、黑キガ如ク、雲ノ如ク、火焰ノ如ク、鳴動回轉シテ中天ヲ迅飛ス、疾行ノアト火光ノ如ク、且ツ餘響ヲ曳クコト二三丈ニ及ベリ、東北ヨリ西方ニ往タリ、見シ者始ハ驚キ見キタルガ、後ハ怖テ家ニ逃入リ、戶ヲ塞ギタレバ末ヲ知ラズト、林子ノ言ヲ得テ繼ギシルス、

〔兎園小說七集〕金靈幷鰹舟の事　今茲乙酉春三月、房州朝夷郡大井村五反目の丈助といふ百姓、朝五時比、苗代を見んとて立ち出で、こゝかしこ見遇し居たるをり、靑天に雷のごとくひゞきて、五六間後の方へ落ちたる樣なれば、丈助驚きながらも、はやくその處に至り見れば穴あり、手拭を出だしてその穴をふさぎ、おさへて廻りを堀りかゝり見れば、五寸程埋まりて、光明赫灼たる鷄卵の如き玉を得たり、これ所謂かね玉なるべしとて、いそぎ我家へ持ち歸り、けふはからずも、かゝる名玉を得たりとて、人々に見せければ、是やまさしくかね玉ならん、追々富貴になられんとて、見る人これを羨みける、〇中略　文政八乙酉初秋朔　文寶堂誌

〔義演准后日記〕慶長元年六月廿七日、霽、午半剋ヨリ、喩者、土器ノ粉ノ如クナル物、天ヨリ降リ、草木ノ葉ニ相積テ曾以不消、大地只霜ノ朝ノ如シ、不可思儀佐異非只事、四方曇テ雨ノ降ガ如シ、今日伏見ヘ唐人御禮云々、若左樣ノ故哉尤不審々々、　閏七月十四日、霽、天ヨリ毛降、似馬尾、或一二尺、或五六寸計也、色ハ白黑又赤色ナリ、京都醍醐同前ニ降、

〔遊藝園隨筆〕六月〇天保七年十九日夜、一頻雨ふりたりしは深夜如夢に覺たり、同廿日退出より、新家榮之助、飯田町もちの木坂へ轉宅の賀として參りしに、昨夜か曉かはしらず、毛ふりたりとて、拾

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年七月廿九日乙卯、太宰府言、去三月四日夜、雷霆發響、通霄震動、遲明天氣陰蒙、晝暗如夜、于時雨沙、色如聚墨、終日不止、積地之厚、或處五寸、或處可一寸餘、比及昏暮、沙變成雨、禾稼得之者、皆致枯損、河水和沙、更爲盧濁、魚鼈死者無數、人民有得食死魚者、或死或病、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年六月戊辰、往々隕石於京師、其大如柚子、數日乃止、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年九月、是月毎夜瓦石及塊、自落内竪曹司、及京中往々屋上、明而視之、其物見在、經二十餘日乃止、

〔日本紀略圓融六〕天延元年三月七日辛酉、亥時雹降、又大和國如水精玉碎之物降、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年十一月八日、大進僧都觀基參御所申云、去月十六日夜半、陸奥國芝田郡石如雨下云云、件石一進將軍家、大如柚細長也、有鹿石下事廿餘里云云、

〔當代記〕慶長十五年四月九日甲申、三川國ノ山中、日近ト云所ヘ石降、大サ四五寸計ナル石五ツ、其砌天震動シテ如雷、昔寛喜二年庚寅、奥州芝田郡廿四里中、柑子程ノ石降、十月十六日ノ事也、如雨降ト云々、

〔雲根志前編三〕落星石　江州野洲郡橘村杉田氏說に云、元文年中の比、當村の百姓、夏日我後園に出てすゞみ居る、天にくもりもなく、風もなくして、空中に聲あり、目前に一石をおとす、取上て是を見るに、掌の大さにして甚だかたく、重くして金色文理あり、夢溪筆談に、大星一震而墮地中得一圓石といふの類ならんか、

〔甲子夜話四十〕林子曰、今茲(癸未〇文政六年)十月八日夜、戌刻下リ西天ニ大砲ノ如キ響シテ、北ノ方ヘ行、林子急ニ北戸ヲ開テ見レバ、北天ニ餘響轟テ殘レリ、後ニ人言ヲ聞バ、行路ノ者ハ、ソノトキ大ナル光リ物飛行ヲ見タリト云、又數日ヲ隔テ聞ク、早稻田ニ(地名)輕キ御家人ノ、住居玄關ヤウノ所ヘ石落テ、屋根ヲ打破リ、碎片飛散シガ、ソノ夜ソノ時ノ事ナリトゾ、最早七八年ニモ成ケラシ、是ハ

北升降爲左右、此說且爲好、姚信昕天論曰、天體南低入地、北則高多至極低、日去人遠、北天氣至、故氷寒也、夏至極起、日去人近、南天氣至、故蒸熱也、天極高時、日行地中深、故夜長晝短、然則天行、多依於渾儀、夏依於蓋天也、天似蓋笠、地法覆盤、天地各中高外下、地極之下爲天地之中、三光隱映爲晝夜、天圓而動、地方而靜、天十二神勤移無窮、地之日辰靜而待之、夫星辰遲速、日月運行、雷發虹見、雲行雨施、是天之象也、二十八舍、內外諸官、七曜三光、星分歲次、是天之數也、山川水陸、高下平汗、嶽鎭河通、風廻露蒸、是地之象也、八極四海、三江五湖、九州百郡、千里萬頃、是地之數也、於是元氣始萌、陰陽始生、兆形立端、清濁分別、質形已具、此五者天地之運通也、天以剛健之德覆、地以柔順之德載也、

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名天之御中主神、訓高下天云阿麻

〔釋日本紀五述義〕高天原　私記曰、師說謂上天也、案可謂虛空也、

○按ズルニ、高天原ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニ載セタリ、

〔古事記上〕於是天照大御神以爲怪、細開天石屋戶而內告者、因吾隱坐而以爲天原自闇、亦葦原中國皆闇矣、何由以天宇受賣者爲樂、

〔萬葉集二挽歌〕天皇聖躬不豫之時、太后奉御歌一首、
天原振放見者、大王乃御壽者長久天足有、

天降穀物

〔日本書紀二十九天武〕九年六月辛亥、灰零、　十四年三月、是月灰零信濃國、草木皆枯焉、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年七月癸酉、有物如粉、從天散零、逢雨不銷、或降或止、　九月甲申、從去七月至今月、河內、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武藏、上總、美濃、飛驒、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六國、一一相續言、有物如灰、從天而雨、累日不止、但雖似恠異、無有損害、今茲畿內七道俱是豐稔、五穀價賤、老農名此物米花云、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁七年正月辛卯、雨沙、

〔曆林問答集 上〕釋天地第一

或問、天地何也、　答曰、渾天儀經云、天大而包地外、地少而居於天內、天表裏有水、天地各乘氣而立、載水而行、關令內傳云、天地之南午、北子、相去九千萬里、東卯西酉亦九千萬里、四隅空相去九千萬里、天去地四十千萬里、朱氏曰、黃帝書、天地者在太虛空裏、大氣擧之、是天地未相分也、兩儀已相分運轉、而天乘炁而浮、地載水而行不息、天大而雖包地外、炁無涯、水亦無涯、故天外有水、亦地表裏有水、浮天而載地也、天大而半覆地上、半繞地下、故二十八宿半隱、天轉如車轂、但天無體、以二十八宿為體、天從東繞西、故云左旋、日月五星同左轉、二十八宿諸星麗天常無動、只隨天轉耳、周天三百六十五度四分度之一也、故於天二十八宿各有領度、角十三度、亢九度、氐十六度、房五度、心五度、尾十七度、箕十度、合七十五度、三十二星、東方宿也、斗二十四度、牛七度半、女十一度、虛十度二十五分半、危十八度、室十七度、壁十度、合九十七度七十五分半、六十三星北方宿也、奎十七度半、婁十三度、胃十四度半、昴十一度、畢十六度、觜一度、參九度、合八十二度、五十一星西方宿也、井三十度、鬼三度、柳十四度、星七度、張十九度、翼十九度、軫十八度半、合一百十一度半、九十八星南方宿也、都三百六十五度四分度之一也、度一千九百三十二里也、於地有州國、有分野、但自東漢以降、曆家之法、日月星皆逆天而為右行、故日月會宿寅析木丑星紀子玄枵之次、謂之冬、會亥諏訾戌降婁酉大梁之次、謂之春、會申實沈未鶉首午鶉火之次、謂之夏、會巳鶉尾辰壽星卯大火之次、謂之秋、會則日月右行、交會而成一月之辰也、於是因橫渠之說、朱氏曰、古今曆家之法、以退數算之、故日遲而每日一度行、月速每日十三度行、此說如上未一定之法、如兩先生者、天最速進、日一度退、月最遲而十三度退、皆雖同道同行不及天、而所退行反似右行、而全日遲非月疾、日月逆天非右行矣、又云、牛宿十一月星紀之次、天北端之極也、天運降近南、故牛降南端、自冬至漸而升、井宿四月實沈之次、南端之極也、天運升近北、故井升北端、自夏至漸而降、亦南北升降之中為春秋、鎮成曰、日月隨天而下降、至南端之極、謂左旋、隨天而上升、至北端之極、謂右行、以為南

〔二中歷乾象五〕四天　春蒼天　夏昊天　秋旻天　冬上天

九天　中央鈞天　東倉天　東南陽天　南炎天　西南朱天　西旻天　西北幽天　北玄天

東北愍天

〔爾雅註疏釋天五〕穹蒼蒼天也、註、天形穹隆、其色蒼蒼、因名云、春爲蒼天、註、萬物蒼蒼然生、夏爲昊天、註、言氣皓旰、秋爲旻天、註、是猶愍也、愍萬物彫落、冬爲上天、註、時無事、在上而臨下而已、疏、此釋四時之天名也、云穹蒼蒼天也者、詩大雅桑柔云、靡有旅力、以念穹蒼、故此釋之也、詩人因天形穹隆、其色蒼蒼、故云穹蒼、其實則與下云春爲蒼天、是一、故云穹蒼蒼天也、〇下略

〔下學集天地上〕昊(カウ)天　天也　旻(ビン)天　秋天　彼(ヒ)蒼(サウ)　天也　蒼(サウ)旻(ビン)　天也　乾(ケン)坤(コン)　天地也　宇(ウ)宙(チウ)　太虛也　霄空　二字義同

〔撮壤集天象上〕天

宇(ウ)宙(チウ)　大圓　元(ゲン)氣(キ)　金(キン)闕(ケツ)　銀(ギン)闕(ケツ)　玉(ギヨク)京(ケイ)　雞(ケイ)子(シ)　碧(ヘキ)落(ラク)　虛(キヨ)碧(ヘキ)　虛(コ)空(クウ)

〔八雲御抄天象三上〕天　あま　ひさかた　と云ひさしくかたしといふなり　あまつそら　あまのはら　みそら　とりの道　そらの海　おほそら　なかとみ後類抄　みどりの空と云は　樓炭經說　南浮州は、須彌山碧瑠璃うつりてみどり也といへり、

〔日本書紀一神代〕古天地未剖、陰陽不分、渾沌如雞子、溟涬而含牙、及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合摶易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定、

〔事物紀原一天地生植〕天地　清輕者上爲天、濁重者下爲地、冲和氣者爲人、循之不得名曰易、一變而爲七、七變而爲九、九復爲一、一者形變之始也、清輕重濁、淸以陽發、故氣冲爲天、濁以陰凝、故氣沈爲地、天地形別謂之兩儀、列子曰、視之不見、聽之不聞、周易繫辭曰、易有太極、是生兩儀、高氏小史曰、兩儀分五運通二體分形、離爲淸濁、三五曆紀天地渾混如雞子、盤古生其中、萬八千歲、天地開闢陽淸爲天、陰濁爲地、盤古在其中、一日九變、神於天、聖於地、天日高一丈、地日深一丈、盤古日長一丈、如此萬八千歲、天極高地極深、盤古極長、後乃有三皇、此天地人之始也、

さればアメといひ、虚空をばソラといふ事の如き、そのまし云ふ所同じかられぱこそ、舊とより多し、彼是の方言を合せ聞たらんには、多かる中に相似たる事もなどか無からざらむや、事紀には天御虚空とも、又大虚空を翔行きて天降るともまるされ、古事記には、天津日高の御子空津日高とふるしたれ、上古の語には、アメといひ、ソラといふ事の、相わかれし其證の明かなる、舊事紀、古事記等の書に見えし處、既にかくの如し、天の字を讀てソラといふは、後世に出し所にて、阿修羅等の說、信ずるに足べからず、

〔倭訓栞前編十三〕そら。　神代紀に虚空の字をよめり、萬葉集に天もよめり、自然の辭なるべし、梵語雜名に、天を翻して素羅といふとも見えたり、神代紀に虚中といへるは未有方所也と釋せり、凡そ虚空といへる詞は、泛く天地の間を指といへり、後世唯天の事とのみ心得るは非じ、神代紀に坐於虚天而生兒と見えたるは、天上と中國の道中を指ていへるにや、古事記に天津日高の御子虚空津日高とみえたるは、天子と太子との分ち成べし、

〔萬葉集十冬雜歌〕詠雪
甚多毛、不零雪故、言多毛、天三空者、隱相管、

〔倭訓栞中編一〕あまつそら　天津空と書り、天も空も同じことを重ねていふ、わたつみの如し、つは助語也、

〔和漢三才圖會三天文〕○霄音宵　按、霄近天氣色也、一曰天無雲氣而青碧者爲霄、天色在五行之外、而青亦非其眞體、莊子所謂天之蒼蒼者、其正色耶、俗傳一天無雲而青則雨不過二日、是則霄也、

〔日本書紀二十二推古〕二十年正月丁亥、置酒宴群卿、是日大臣馬子○蘇我上壽歌曰、夜須彌志斯、和餓於朋者彌能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、異泥多多須、彌蘇羅烏彌禮磨、豫呂豆余珥、訶句志茂餓茂、○下略

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕
從蒼天、往來吾等須良、汝故、天漢道、名積而叙來、

〔伊呂波字類抄天天象〕天上天也、爾雅云、上天、冬天、旻天、秋天、　幽天同　圓清天名　蒼岸同　堀僥同　九根同
蒼天春天也　蒼穹同　昊天夏天也　炎天已上同、天異名也、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひさかた　天の枕詞にいへり、又空とも、日とも、月とも、星とも、雲とも、雨とも隔けたり、或は都ともつゞけよめるは、天都の意なるべし、鏡ともつゞけり、天鏡の義なるべし、又たゞひさかたとのみいひて、空の事、月の事としたる歌も見えたり、久かたの光りのどけき春の日に、とも見えたり、萬葉集に、久方又久堅に作れり、天先成とあれば、久方といふにや、漢書の注に、濛々天體、堅淸之狀とも見えたり、續日本後紀の長歌に、瓠葛と書るは、訓を假たるものなれど、禮記に、器用陶匏、以象天地之性也ともいへば、匏象の義も據ありともいへり、

〔萬葉集挽歌二〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌、〇中略　久堅之、天所知流、君故爾、日月毛不知、戀渡鴨、

〔萬葉集雜歌五〕神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上　令反惑情歌一首并序〇中略　反歌　比佐迦多能、阿麻遲波等保斯、奈保奈保爾、伊弊爾可弊利提、奈利乎斯麻佐爾、

〔續日本後紀仁明十九〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、〇中略　其長歌詞曰、〇中略　瓠葛天能、梯建、踐歩美、天降利坐志、大八洲、天津日闕能、高御座、萬世鎭布、五八能、春爾有氣利、〇下略

〔新撰字鏡天〕乾　天台於保曾良

〔類聚名義抄七宀〕宇音羽　オホソラ　宙音胄　オホソラ　〔同穴七〕空口公反　オホソラ　ソラ　〔同雨七〕霄音消　ソラ　霣于遇反　ソラ

〔同尸七〕扈虛　上通中下正　オホソラ　虛通

〔伊呂波字類抄天象波〕翠漢ハレルソラ　碧落同

〔東雅天文一〕天アメ〇中略　天又ソラといひし事は、太古の語なりとも見えず、アメといひ、ソラといふ斥言ふ所同じからず、古事記に、太古の初、陰陽の二神、大倭豐秋津島を生む、又名は天御虛空豐秋津根といふと見えて、又書紀には、饒速日尊、天磐船に乘りて、大虛空に翔行き、巡睨て天降り給ひき、虛空みつ日本國とは、即是をいふ歟としるされ、又古事記に彥火火出見尊の御名を、天津日高日子穗々手見命と申し、又天津日高の御子虛空津日高とも申せしと見えたり、これら上古の時の事に、ソラといふ語の見えし始なり、然るに我國の語に、天をさしてオホソラといふは、則阿修羅なり、すべて上古の語に、梵語多かりなどいふ說あり、天下の言も

○迦多能、阿米能迦具夜麻、斗迦麻邇、佐和多流久毘、〇下略
○○○○　此外天の物にはみな冠らす

〔冠辭考八〕ひさかたの　あめ　月　あま　みやこ　雨

先ひとのいふことをいひて後にわが意はいはん、そは万葉に此ことばを、久堅能、久方乃など書しと、神代紀に、清妙之合搏易、重濁之凝場難、故天先成而地後定とあるをおもひ合せて、天のかたまり成たるは、地より既に久しければ、久く堅き之天といふといひ、又天の成しは右のごとくなれば、地よりも久しき方てふ意ともいへり、眞淵今思ふに、上つ代にことばの下に之といふは、必體の語に有ことにて、用の語にいふことなし、然れば堅きとは用の語なれば、久しく堅き之といふ語は有べからず、(堅きをかたと略いひても猶同じ)又久しき方のてふは之の辭はいふべけれど、方てふ語のいひざま、古への人の言とも聞えず、且凡の語を神代の事にもとづきて意得るは常ながら、古への語のもとづき様は、みやびかにしてやすらか也、右の二つは意つたなくしておもくれたり、よく古意古語を思はで、ゆくりなくおもひよれるものなるべし、されば年月におもひて、漸おもほしき事あり、そは先久堅久方ともに例の借字とす、さて天の形はまろくて虚なるを、匏の内のまろくむなしきに譬て、匏形の天といふならんと覺ゆ、續日本後紀に、(興福寺の僧が奉る長歌)瓠葛の天と書しを、荷田宇志の比佐加多乃阿米と訓しぞ、即是也ける、(瓠は匏のことにて、匏もて譬ふ、葛は借字にて象の意、且ひさごのかたちのちを略けり、はぶくは例は前後に多し、)禮記てふからぶみに云云、大報天而主日也、(略)掃地而祭於其質也、器用陶匏、以象天地之性也、(鄭玄云、觀天下之物、無可以稱其德、)てふも、陶は土器なれば即地に象り、匏は空にみなりて内の虚なれば、天の形に象るといふ歟、此外に天地の形に象るべき物なければ、注にもしかいへりけん、唯天産の物もてする意のみならば、德とはいはじやと思へば、これをも思ひ合すべき也、且仁德紀に全匏を宇都比佐碁とよみ、和名抄に沫雨を宇太加太とよめるも、虚象の意なるをおもひむかへよかし、

な、陰也、あめつち、皆上古の時の語也、此類を自語と云、

〔東雅天文一〕天アメ　義不詳、我國太古の代に、アメといひし其語同じくして、其名義異なるあり、アメ又轉じてアマといひしは、其斥いふ所ありと見えたり、漢字採用ひて、天讀てアメとなし、アマとなすに至ては、古語の義隱れしもまたありと見えけり、天をアメといひ、アマといひし義、舊釋せし所も其説多かり、されど五方の言もとより同じからず、我國の語、我國のすがたあり、他方の言の如きも、またぞ然ありける(中略)アメといひアマといふが如きも、其義幷に詳ならねど、國史實錄にしるされし所を併見るに、天をさして、アメといひしあり、人の至て高くして上なきをも、天に配して、アメといひしと見えしあり、至尊のある所なるをもて、アメとも、アマとも云ひしと見えしあり、各其義當る所ありと見えけり、此等の事ども、能く我國の書を讀得たらん人の、自ら明かなるべき所なれば、此說を覈すべき事にもあらず、○下略

〔倭訓栞前編二〕あめ　天をいふ、神代紀に天上とも見ゆ、神名の首にある天字は多くあめとよめり、古事記にあめといふには註せず、あまと唱ふべきは註あり、されはあめは本語、あまは轉語なるべし、又訓天如天とあるは、天のとのをいふまじきため也といへり、神代口訣に開く聲といへり、自然の語なれば、強て義を求めがたし、

〔古事記傳三〕天(アメ)は虚空(ソラ)の上に在て、天神たちの坐ます御國なり、此外に理を以、こちたく說成し、或は其形などをも、さまぐ\おしはかりに云などは、皆外國のさたにて、古傳にかなはざれば、凡て取にたらず、(中略)阿米てふ名は、蕃(アレ)萠(キエ)の切まりたるにて、斯(シ)の言かりたるにやあらむ、蕃はたゞ豐(トヨ)に云る物なれども、成坐る神の御名にも負たまへればなり、又吾友横井千秋云く、阿米とは、青(アヲ)所見(ミエ)の言を書き、美延を約めたるならむか、其は此國土よりは、たゞ蒼々と見ゆる、其驗を以て名けたるなるべし、古より此國にも、他國にも、天をば蒼き物に云ること多し、又阿(ア)宜(ヲ)と云色の名も、本天(アメ)より出たるにやあらむと云り、此考も然ることなり、

〔鈴造化育論上〕皇國訓天曰亞(ア)滅(メ)、卽意(イ)耶(ヤ)莫(モ)拽(エ)之約也、言日輪赫赫爀燃燎也、近來伊勢人本居宣長者、著古事記傳、泥開闢段有如葦牙萠騰之文、誤以爲其萠騰者卽是天也、因以訓亞(ア)滅(メ)爲亞(ア)矢(シ)莫(モ)拽(エ)之約、非也、天若爲亞(ア)矢(シ)莫(モ)拽(エ)之約、則不稱亞滅、而當呼昇(イ)滅(メ)也、此翁頗精音義、而致此等謬妄者、未知天地之全體、而強鑿說天地之數理也、日天豈地球之所可分成哉、

〔古事記中卷景行〕倭建命、○中略 爾美夜受比賣、其於意須比之襴、意須比三字以音著月經、故見其月經、御歌曰、比(ヒ)佐(サ)

古事類苑

天部一

天

名稱

天ハアメ、又ソラト云ヒ、字音ニテテントイフ、又虚空ト稱ス、此篇ニハ天ニ關スル傳說、及ビ天上ヨリ異物ヲ降シ、空中ニ聲アルガ如キモノヲモ並載セリ、

〔類聚名義抄 大四〕天〈他堅反　ハルカナリ　アメ　メカシ〉

〔段注說文解字 一上〕天顚也、〈此以同部疊韵爲訓也、凡門聞也、戸護也、尾微也、髮拔也、皆此例、凡言元始也、天顚也、丕大也、吏治人者也、皆於六書爲轉注、而微有差別、元始可以互言之、天顚不可倒言之、蓋求義則轉移皆是、擧物則定名難假、然其爲訓詁則一也、顚者人之頂也、以爲凡高之偁、始者女之初也、以爲凡起之偁、然則天亦可爲凡顚之偁、臣於君、子於父、妻於夫、民於食、皆曰天是也、〉至高無上从一大、〈至高無上、是其大無有二也、故从一大、於六書爲會意、凡會意合二字以成語、如一大、人言、止戈皆是、他前切、十二部、〉

〔爾雅註疏 五〕釋天第八、疏〈河圖括地象云、易有太極、是生兩儀、兩儀未分、其氣混沌、淸濁旣分、伏者爲天、偃者爲地、釋名云、天顯也、在上高顯、又云、天坦也、坦然高遠、說文云、天顚也、至高無上、从一大也、春秋說題辭云、天之言顚也、居高理下、爲人經紀、故其字一大以鎭之、此天之名義也、〉

〔古事記 下仁德〕此時、其夫速總別王到來之時、其妻女鳥王歌曰、比婆理波、阿米邇加氣流、多迦由玖夜、波夜夫佐和氣、佐邪岐登良佐泥、

〔神代直指抄 一〕あめつちといふは、本朝最初言語音聲のはじめにあめといひて、たかき義、ひろき義、たふとき義、のぼる義、四義そなはりて、陽道の義をあらはす、あめをゑといふ、ゑは開聲にて、うゑの義也、〈中略〉○のちに、雨をあめといふは、天よりふるゆへに、天のことばを、そのまゝかりていふ、

〔日本釋名 上天象〕天地〈アメツチ〉　あめの反字はゑ也、ゑはひらくかな、陽也、つちの反字はち也、ちはとづるか

臨時客 院宮臨時客併入

歲時部八

攝關大臣正月大饗

附 淵醉

二宮大饗 二宮臨時客併入

歳時部六

元日節會上

歳時部七

元日節會下 淵醉附

小朝拜

朝賀

歳時部四

年號下 逸年號 併入

歳時部五

四方拜

歳時部三

年號上

古事類苑

歳時部一

歳時總載上

歳時部二

歳時總載下

雷 電併入

虹 氣 陽炎併入

霰

雹

天部四

風

雪

霙

天部三

雨

霧 もや 併入

露 甘露 併入

霜

天部二

星 天河併入

月 月蝕〔併入〕

古事類苑

天部一

天

方角

日 日蝕併入

古事類苑

歲時部目錄

古事類苑

天部目錄

神宮司廳藏版

天部
歲事部 一

古事類苑

古事類苑刊行會